

リボーンの世界に呼ばれてしまいました

ちびっこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生!? ってかりボーンの世界が私を呼んだ!? というお話です。元々はじファンで書いていました。思いつきり途中から恋愛入ります。苦手な方はUターンしてください。多分90%オリキャラ視点です。オリキャラの心の声とほぼ会話文です。ちなみにオリキャラ×雲雀さんです。当然キャラ崩壊してます。もちろん原作も崩壊してます。バトルはほぼとばしてます（バトル描写が書けないので・・・）メインは恋愛話です。

注意 原作は崩壊してますが・・・この話は原作に戻す力が多い設定（なかなか原作を壊せない設定⇨大筋はかわりにくい設定）で書いてます。それでも読む方は駄文ですがよろしく願います。

※アットノベルス様にも投稿しています

目次

神様に会う	1
神様に会う	2
キャラ設定	
リボーンの世界にきました	
原作前	
原作開始!	
神様とおしゃべり	
雲雀先輩の謎	
おにぎり実習	
リボーン登場	
雲雀先輩と原作	
体育祭♪	
ある日の休日	
わざと原作崩壊させる!	
デイーノさんに会いました	
お見舞いです	
嵐と話してみる	
授業参観	
バレンタイン	
10年バズーカ	
偶然という名の必然	
桜の涙	
いつの間にか夏になりました	
夏祭り	
	132
	128
	123
	120
	114
	105
	100
	97
	91
	84
	79
	72
	64
	58
	52
	44
	40
	35
	30
	26
	19
	16
	6
	1

救出 (黒曜編)

薬を手に入れる

手紙

理由

小言弾

弱点

鍵

許してもらいましょう

看病

思考停止

変化と運命?

拉致

苦手

反則

ケーキ屋

のんびりした日

怒ってます

遊びましょう

仲直り

嵐が来ました

早く来てください

リングをもらう

戦ってます

約束

なぜかばれています

(ヴァリアー編)

権利	256
試合の相談	261
しようがないよね	266
ヒミツ	271
嫌なもの	275
拉致 2	281
拉致 2	286
その後	
拉致 2	290
朝 1	
拉致 2	295
朝 2	
痩せ我慢	298
暴走	303
前虎後狼	308
恥ずかしいです	313
短慮軽率	318
約束 2	324
楽しみ♪	329
発言ミス	333
霧と話してみる	339
頑張ります	344
応援	350
ルール	357
風の守護者対決	360
1	
風の守護者対決	365
2	
風の守護者対決	372
その後	
正体	378
1	

拉致	3	505
5月5日	※本編に関係ありません	502
パーティー		496
大事な話	2	489
大事な話	1	484
大空戦	その後	478
大空戦	6	475
大空戦	5	471
???	1	466
大空戦	4	461
大空戦	3	456
大空戦	2	452
大空戦	1	448
大空戦を始めましょう	2	444
大空戦を始めましょう	1	440
夢と現実		434
雲の守護者対決	その後	429
雲の守護者対決	3	426
雲の守護者対決	2	418
雲の守護者対決	1	412
てれないでください		407
後悔		402
手		397
正体	3	391
正体	2	385

未来の並盛	6	634
未来の並盛	5	629
未来の並盛	4	624
未来の並盛	3	619
未来の並盛	2	615
未来の並盛	1	609
安心		605
教えてあげようよ		600
匣兵器		594
未来の世界	5	589
未来の世界	4	585
未来の世界	3	582
未来の世界	2	577
未来の世界	1	571
未来へ (未来編)		567
※ 必読 未来編の前に		563
お出かけ	3	559
お出かけ	2	553
お出かけ	1	547
帰宅		540
掴む		534
料理の傍ら		529
大事な話	4	523
大事な話	3	519
拉致	3	511
その後		

⌘	⌘	修行	修行	修行	修行	修行	試練	試練	試練	試練	試練	未来の私	未来の私	未来の私	未来の私	未来の私	未来の私	未来の私	未来の私	未来の私	未来の私	未来の並盛		
2	1	5	4	3	2	1	その後	4	3	2	1	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	7
762	758	752	747	741	736	731	723	718	712	706	701	696	690	684	679	674	669	664	661	657	653	647	643	638

白蘭		890
説明	3	886
説明	2	882
説明	1	877
演技の終わり		873
演技		869
迷子		865
失敗		861
再会		856
恐怖の日々		851
あの人は今		847
先にお別れです		843
夜襲		835
決戦前日？		828
決戦に向けて		823
休息	5	817
休息	4	811
休息	3	805
休息	2	799
休息	1	794
波乱	3	789
波乱	2	785
波乱	1	779
囿	4	773
囿	3	766

チヨイス	3		1016
チヨイス	2		1012
チヨイス	1		1008
チヨイスまで	2		1002
チヨイスまで	1		997
甘え			992
複雑	3		986
複雑	2		981
複雑	1		976
愛情表現			971
家事			967
大事な話	5		961
ボンゴレ匣			956
ボイコット	2		951
ボイコット	1		947
未来の私と神様			941
盗み聞き			936
10年後のデイリーノさん	2		931
10年後のデイリーノさん	1		926
独占	2		921
独占	1		915
地上探索			910
空腹	2		904
空腹	1		899
混乱			894

GH O S T	合流 3	合流 2	合流 1	束の間の休息 2	束の間の休息 1	寝てる間に…… 2	寝てる間に…… 1	デメリット 4	デメリット 3	デメリット 2	デメリット 1	逃亡 4	逃亡 3	逃亡 2	逃亡 1	ユニ 3	ユニ 2	ユニ 1	パラレルワールド 4	パラレルワールド 3	パラレルワールド 2	パラレルワールド 1	チョイス 5	チョイス 4
-------------------	---------	---------	---------	-------------	-------------	--------------	--------------	------------	------------	------------	------------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------------	---------------	---------------	---------------	-----------	-----------

1133112911251121111711121106110210961090108510791072106710621058105410501045104110371033102910261021

支障

邪魔

枷

わがまま

??? 2

鍵

敵を欺くにはまず味方から

特殊能力

バランス

はじめまして

握手

すり替え

隣

依然として

さよなら 未来

出会った日

大事な話 6

許可

未来の記憶 1

未来の記憶 2

未来の記憶 3

未来の記憶 4

未来の記憶 5

未来の記憶 6

未来の記憶 その後 1

1266125812531249124512391235123112251219121312091204119811931188118111751169116311581153114911421137

未来の記憶 その後 2

※ 必読 継承式編の前に

転校生 1 (継承式編)

転校生 2

転校生 3

転校生 4

転校生 5

転校生はマフィア 1

転校生はマフィア 2

早かったです

相談 1

相談 2

焦り 1

焦り 2

報告

9代目

友達

相性

風紀委員長の彼女

同盟ファミリィ

相談 3

工場跡地

事件勃発 1

事件勃発 2

継承式 1

信用	1635
呼び出し	1629
写真	1624
新任教師	1619
にらみ合い	1615
罰	1611
小さな変化	1606
代理人	1602
崩壊	1597
破壊	1591
選択 2	1586
選択 1	1581
亀裂	1577
夢 (虹のアルコバレーノ編)	1571
無防備	1565
フラン 3	1561
フラン 2	1556
フラン 1	1549
白紙	1543
訪問者 2	1538
訪問者 1	1533
見つける	1530
役立たず 3	1526
役立たず 2	1521
役立たず 1	1516

1635162916241619161516111606160215971591158615811577157115651561155615491543153815331530152615211516

規格外

治療

衝撃

新勢力

手加減？

闇討ち

最悪なパターン 1

最悪なパターン 2

最悪なパターン 3

小さな犠牲

優の代理人 1

優の代理人 2

目覚め

いやだ

わからない

作戦会議 1

作戦会議 2

笑いあい

伝えたいこと

激突 1

激突 2

激突 3

激突 4

激突 5

激突 6

1748174417401737173417311728172417191713170917051700169416891686168216761670166516601654165016461640

最後に……	1	
最後に……	2	
最後に……	3	
最後に……	4	
呪いが解けて	1	
呪いが解けて	2	
呪いが解けて	3	
呪いが解けて	4	
呪いが解けて	5	
記憶 1		
記憶 2		
優しくない優しさ		
それから……		
胸を張って		
くあとがきく		

183218281822181418071800179317861781177517701765176117571752

神様に会う 1

私の運命が変わった日は急に来た

今日もいい天気だなーとトボトボ歩いてる時だった
すると急に幻聴が聞こえてきた

「……………こつちにおいで」

ん？気のせい？

「……………こつちにおいで」

あれ？また？

「……………こつちだよ」

なんだろう？

振り返った瞬間

私に向かってトラックがきた

あーどうやら死神の声でも聞いたかな
と思いながら死ぬ覚悟をした

「起きろ」

人が気持よく寝てるのになんだよ……

威張って言うけど寝起き悪いぞ

とりあえず目を開けて見たけど

周りが白いつてか無駄に白い

声掛けたのだれだよ

……誰だこいつ

そうか夢か……つてか夢って思う時点で

寝てる気分じゃない

よし、夢の中で寝よう

目を閉じた

「風早 優！ おきろー……」

うるさい!!!

なんつー理不尽な夢だ

もうありえないー

「お！ 起きたか♪」

この人誰だよ……

「オレは神様だ」

あれ？しゃべってないのに？

ってか神様って……

あー……夢って自分の理想とか出るんだっけ……

うーん……私の理想の神様なのかな……

結構イケメンだ……

「いやいや、リアル神様だ！」

リアル神様ってなんだよ……

「とりあえず、話をきいてくれ」

んー……変な夢

「まず夢ではない」

「きやー！」

ちよつと人のほつぺたつまむな痛いだろ！

「あれ？ 痛い？」

「第一声が『きやー！』って女の子って感じだな」

「いやいや、女だよ」

「そりやそうか」

ここに来る前のこと覚えてるかー？」

「ここに来る前？」

えつと……なんか呼ばれて……

そのあと……」

私……ひかれた？

「おー覚えてるな

ぶつちやけ死んだんだ」

あらまー……

つてことは天国だよな

うん！こんな白いところで地獄ではないだろ

「天国でも地獄でもねえぞ」

へ？

「どつちかという天国に近いが

まあ、現実世界と天国の間だ」

へえー…

「つてことは今から天国に連れて行ってもらえるのか
どんなところだろー

「あー…期待を膨らませるところ悪いが

残念ながら天国には行かないぞ」

まさか…地獄!?

私なんかしたかな…

どつちかというところ…いい方だと思っただけど…

「ああ、いい方だな」

おお!んじゃ何で!?

「あー…今から転生するから」

転生?つて確か…

どこかに生まれ変わるでいいんだよね?

「そうだ」

「え! ちよつとどこどこ!!」

「お、神様つて認めてくれたか」

「声出してないのに会話が出来る時点で

ちよつとは認めてるよ」

「ちよつとかよ

まあ、しょうがない急に信じてくれ

つていつても無理だろ」

うん!うん!!

「転生してもらおうところは

漫画の世界なんだが…」

漫画!?やった!

そうだな…君〇届けとかだったら

男の主人公と同じ名字だし仲良くなったりして!

2人の中をキヤーキヤーって感じで見てみたい!!
やばいムネキュンだ!

「すごい妄想を膨らませるところ悪いんだが
行ってもらう世界は決まってる
というかそこしか無理」

えー…知ってる漫画だといいいけど……

「知ってるぞ」

「よかった……」

「あー……まあ漫画の世界といっても現実だし
異変が起きてかわっていつてるから
限りなく似てる世界と思ってくれ」

「はあい」

「で、行ってもらう世界は

家庭教師ヒットマンREBORN!だ」

「リポーン!」

「好きだろー」

「いや、無理」

「拒否られた……」

「そこまで詳しくストーリー覚えてないし…

それに日常編だったらいいけど

その後バトル漫画じゃんー死んじやうー

ああ…転生してすぐ死ぬのか……

でも……主人公達とかかわらなかつたらいいのか」

「思いつきりかかわるぞ」

いやいやいやなに言ってるの？

まじで死ぬじゃん……

「拒否はできないよ」

おおーなんか雲雀さんっぽいー

「ん？雲雀が好きなのか？」

「まあ、かつこいいし好きだよー

見てる分にはだけど

目の前にいてたら出来るだけ

関わりたくないね」

「そういうもんか？」

「理想と現実の違いもんだよ」

「そ、そうか」

「考えてみなよー」

いきなり咬み殺されたくはない！

っつかまらずリボーンの世界に関わりたくないよ……

私、人を殴ったこともないんだよ!!

絶対死ぬ……」

「まあ……多少は問題ないと思うぞ」

神様に会う 2

多少は問題ないってどういうことだろ……

「ちゃんと話すから聞いてくれ」

「うん。わかった」

「まず、リボーンに行く理由は

リボーンの世界がお前を呼んだ」

？

「あほの神がリボーンの世界に大量に転生させたんだよ
元々転生自体しちやいけないことだしな

そのせいでリボーンの世界に異変が起きてしまつて
その穴埋めとしてお前が呼ばれた

その声を聞いて転生するために死んだつてことだ」

ふむ？なんとなくわかつた

あほな神のせいだね

「まあそういうことだ

で、一番の異変がボンゴレリング

マーレリングとアルコバレーノのおしやぶりが

一個ずつ増えた」

はい？

「まあ、増えたのがいいが

誰も使いこなせなくてお前が呼ばれたつてわけだ」

「つまり、その増えたのが私にしか扱えないつてこと？」

「そういうことだ」

おお！なんかすごそう！

つてかりングはまだしもアルコバレーノのおしやぶりつて…

呪い!!まさか…転生して赤ん坊か…

「あ、それは大丈夫だぞ

呪いは一応もう受けたから」

？

「前の世界で普通に生きて幸せになつて死んだのに

こっちの世界に無理やりきたってというのが呪いだな
だからリボーン達はまだ呪われて続けてるけど

お前はもう呪いを受けた後ってことだな」

「なるほど……」

「あー……はつきりいつていいか？」

「いいよ」

「お前は呪いを受けた後だが……死んだら

多分また他の誰かが異変の穴埋めのために

よばれるために死んでこっちにくるかもな……

あくまで可能性だが……」

うおーまじか……

その可能性怖いな……

「ちなみに、私はその犠牲の一番最初？」

「ああ」

ふむ……

死なないように頑張るしかないか……

前の世界で幸せな人だったら悪いしね……

「あと……原作のアルコバレーノの呪いのことは

よくわかってないことになるだろう」

「どゆこと？」

「リボーンとかと全く違う理由で呪いを受けたから

リボーン達の呪いの意味を知らないし

逆に言うとお前の呪いはリボーン達が知らないってことだ」

ってことは……

私の呪いの意味は死んでこの世界に来るってことだから

リボーン達がそれは知らないってことか……

まあ、原作でも詳しくわからなかったし問題ないかなー

赤ん坊にされたっていうことぐらいしかわかってないしねー

成り行きとかもわかってないしね

「そうだな

まあ、おじやぶりは転生されたら

すぐお前にむかって飛んでくるから」

まじか！まさかのキャッチしないといけないの!?

「ボンゴレリングは多分リング戦のときまで
封印されてるぞ」

ここは原作通りなのね

でも多分か…

「マーレリングは多分10年後の時か…

流石に俺もわからん

そしてさらにわからないのが

対となる大地の炎の種類だな

もしかしたら無いのかもしれない

というかアルコバレーノだから

参加できないかもな」

そういえばリボーンは止められてたか…

「よくわからんがな」

神様にもわからないことがあるんだー

「ああ、異変が起きてわからなくなった

もしかしたら物語自体かわってしまってるかもしれない」

つまり継承式編とかもどうなるかわからないのか…

でも、マーレリングが出来たってことは

未来編はありそうだな…

「そういうこと

リボーンの世界だけでなく

こっちの神とかの世界でも問題になってる

できるだけ元に戻したいってことで

リボーンの世界が異変を止めるために

呼ばれたお前を俺がサポートするってことだな」

神様のサポートってすごくない!?

「そうだな

どっかのあほの神と違って俺は天才だからな

だから俺がサポートするんだよ

まあ、未来が変わりすぎたから俺も手探りだがな
原作知識もお前の記憶からしかわからんしな」

へー…そうなんだー…

じゃあ教えてって言っても無理だねー

「あー質問です！

あほの神が送った人って転生なんですよ？

んじゃ原作とか知ってるんだったら

私の存在ってすぐばれるんじやないんですか？」

「問題ない。あほの神だから。

転生なんてしちやいけないことなのに無理にしたから

力を与えたのはいいけど

失敗して原作の知識とか転生とか全く覚えてないらしい」

こりや、あほだね

「そうだな

まあ異変をなくそうとするために

呼ばれたってことだから

ツナの守護者っていう立場になるはずだ

そして転生した奴が敵だろうな

中にはただの一般人として

生きてる人もいると思うが…」

それもそっか。転生してることに覚えてないもんね。

まあ、良かった

暗殺部隊とかだったらどうしようかと思つた…

できれば誰も怪我してほしくないんだよねー

リング戦とかも怪我させないで勝てないかな…

「はいはい！ 質問です！

私にしかリングが扱えないなら

戦わなくても私の物じやないんですか？」

「俺にもわからん」

そうだよねー

元々なかつたもんねー

「ってか私はなんの力？」

「言ってなかったな」

「アルコバレーノの力は風だ」

「風？」

「ああ…まあ風を操る力だ」

「炎の色は水色で性質は加速」

「おー空飛べそう！」

「普通に飛べるだろうな」

「やった!!!」

「で、まず出来るだけサポートってことで」

「身体的能力アップだな」

「素早さとかかな？」

「そうだ。雲雀よりいいぞー」

「うーん…雲雀さんに強いつてばれたらやばそうだけど…」

「後々のことを考えるといるよねー…」

「あー…1個だけ下げたいのある…」

「お？いいぞー」

「え？下げてもいいの？」

「このタイミングでしか変更できないから」

「下げてもいいが苦勞するのはお前だぞ」

「うーん…そうだけど……」

「出来れば攻撃力？力？は」

「ちよつとだけ下げてほしいかな？」

「なんでだ？」

「んー下げたら当たっても致命傷にはならないでしょ」

「それに相手が力で来てもそれ以外の身体能力があったら」

「受け流したりよけたり出来るでしょー」

「それに女なのにくちや力が強いつて私はヤダ……」

「まあ…私はだけどね」

「わかった」

「ただ女性の一般よりは良くしとくぞー」

良かった……

「あー…後、金銭面や住むところとかはこつちで用意してるから問題ないぞ後、学力もあげておく」

「まじか!!これは嬉しすぎる……」

「まあ困ったことがあつたら念じてくれたら俺と話ができるぞ」

「あい」

「で、特殊能力はなににする?」

「特殊能力ー!!」

「出来るだけサポートするっていったらろ

まあ5つまでだけだな」

サポートのレベル高!」

「んー…例えば風を操る能力を使ったらすぐばれるかな?」

「思いつきり使わなかつたら大丈夫だと思う」

「じゃあ隠す能力はいらないか…」

「いつかばれるんだし」

「やっぱ治癒能力かなあ」

「あー…特殊能力っていつでも特殊能力によって

お前の体が特異体質にかわると思ってくれ」

体質が変わって治癒能力っていうのは無理なの?

「お前の体質をかえて相手に与えることはできるが与えた後は戻ってこないんだ

つまり回復力とかを相手にあげると

お前の回復力がどんどんなくなっていくと思ってくれ」
それはダメだね…

「そういうことだ」

「じゃあ自分の体力を分け与えるとかは?」

「それならいけるぞ」

体力は寝ると回復するからな」

「それにしよう」

戦いが終わった後に分けてあげたら楽でしょ
体力があつたら死ぬ確率は減るでしょ」

「そうだな」

まあ体力を分け与えるってことは

自分の体力も減るから気をつけろよ」

「わかったー」

後は幻覚封じだね」

「そうだな。確かにいるな」

目の色が薄い緑に変わるけどいいだろう」

「それで幻覚封じれるなら問題ないよ」

リボーンの中では普通だし」

「そうだな」

んー…後は思いつかない!!」

「後々にするか?」

「え? いいの?」

「ああ、俺も念のため一つは残しとけて」

言おうと思つたしな」

「そっか」

あー…お願いとか聞けるかなー」

「言ってみろ」

「出来ればアルコバレーノって」

すぐばれないようにしてほしいなー」

「それぐらいならいいぞ」

ただ、マーモンの鎖とっしょで

力は少しおさえることになるぞ」

勝手に弱めてくれる方がいいから問題無いね

「他にはないか?」

「武器とかほしいですー!」

「そうだな。希望は?」

「とりあえず40センチぐらいの刀かなー」

小太刀と短刀の間ぐらい長さで。

身長の問題であんまり長いとつらいし

でも、るろ〇に剣心に出てくる逆刃刀でお願いします」

「ん？逆刃刀でいいのか？」

「うん、流石に木だったら折れるし

できるだけ傷つけないしー」

「わかった

他には？」

「んー：私はできるだけ原作の流れにするためによべれたんだよね？」

「まあ、そうだろうな」

「だったら言ったらまずいこともあるから
気をつけないとみんな強くなれなくて

ツナが負けたらまずいよねー

あ…：そういえば……

「なんだ？」

「私ってどのタイミングでそっちに行くの？」

「その説明もあったか……」

「原作が始まる前にはお前はいないとまずいんだ
その前だったらいつでもいいぞ」

「それもそうか…」

「異変がないようにするためだから

原作にいなかったらまずいよね

「それにお前は前の世界では12歳まで生きたよな？」

「歳を増やすのは無理だが若返るのは出来るぞ

俺の力ではこれが限界だ

「ただ若返つてもツナと同じ歳に転生することになるぞ」
若返るって…：私まだ若いのに…

「えっと、つまり10歳にすればツナ君も10歳なんだね
でもあんまり幼くすると大変だよねー

それに私は小学校卒業したばかりだしー

「中学のとき普通に入学ってのは？」

赤ちゃんとかは勘弁してほしいしねー

「それは全く問題ないぞ

俺が力を使わなければそのタイミングだったしな」

へ？どういうことだろ……

「元々お前は何も知らずにリボーンの世界に行くところを

俺の力でここに呼んだんだ」

えー！神様がいなかったら

私ってわけもわからずリボーンの世界に行ってたの!?

「そういうことだ」

「……ありがとうございます」

本当にありがとう……

パニックになってたと思う……

おしゃぶりがいきなり飛んできて……はあ!?

って感じになってたと思う……

「元々はこつちの責任だ

気にするな」

まああほな神のせいだもんね

「戸籍とかは無理やり作ったけど

流石に親を作ることはできなかった」

「いいよ。前もいなかったから」

やっぱり幼すぎると大変だったね

「そうか。わりい。」

「元々無理やりこつちに来たのは

あほな神のせいだからしょうがないでしょ」

「まあそうだが……」

「んじや、悪いと思ってるなら

名前で呼んでーずっとお前ってヤダ」

「わかった。優でいいな」

「うん」

「もうないか？」

「あつたら念じるかな？」

「わかった。」

「ではリボーンの世界へ行ってらっしゃい。」

「死なないように頑張ってくださいませーす」

キャラ設定

風早 優（かぜはや ゆう）
リボーンの世界に呼ばれてしまった女の子
36巻の途中までしか読んでいない
ツナとエンマの誓いの炎を見たところまで
全部詳しく覚えてない

髪型： ショート

髪の色： 赤みがかった茶髪

顔の特徴： 目の色は薄い緑

結構可愛い

身長： 153センチ

体格： 39キロ

性格： 真面目

人を傷つけるのが嫌

戦闘嫌い

起きるまでは機嫌が悪い

目が覚めたら普通

波動： 風

特殊能力（特殊能力によって特異体質になる）

相手に体力を分け与える

（相手に触れること）

幻覚がきかない（有幻覚はきく）

後3つ増やせるが保留中

デメリットがあるが物語が進んでいくまで主人公は気付かない

身体能力： 力、攻撃力だけ一般人

争いごとが嫌いなため

相手にあわせてしまうため

最強ではない

(この癖はなおらない)

武器： 40センチの逆刃刀

戦い方

おしやぶりを制御している状態

一人分を浮かせるぐらいしか風を操れない

刀に風を集めて圧縮させ斬撃を飛ばす

風のバリアーをはる

(幻術と同じで集中力が結構いる)

封印を解いたとき

すべての風をあやつれる

物語が進んでいくうちに制御がかかる

神様

優についてる神様

神様は死の管理をしているため

リボーンの世界についてる神様ではない

天才(本人談)

イケメン(優談)

優しい

あほな神の尻拭いのため優をサポート

優に甘い

原作知識は優の記憶をよみとってるので詳しいことはわかっていない

優以外手助け禁止

手助けするにもいろいろ条件がある

例、他の人の様子を見る場合は

1度優が見た人でその場所がわかってること

そして優が100%そこにいると

確信していないと見ることはできない

リボーンの世界にきました

ん？ここはどこだ？

ベットかー

神様って結構優しいねー

急にどつかに落とされると思ってた

そういえばアルコバレーノのおしゃぶりが

飛んでくるんだったつけ？

窓をまず開けよう

「ふわっ」

おお！すごい飛んでくるっていつても

私の目の前でとまってくれたー

つてか飛んでくるのはやすぎ…

んーまずここはどこだ

見た感じ、ベット、窓、クローゼット、

勉強机、化粧台、ドアか…

まずはこの部屋を出てみるかー

ガチャ

「ひろっ!!」

うわー…1人なのに叫んでしまった…

とりあえず扉を開けまくろう

2LDKか…一人暮らしには十分すぎる…

さっきの部屋は洋室だったのに

もう一個は和室とかすごい…

つてか家具もほとんどあるし!!

それも一軒家っぽいし…

とりあえずリビングに座ろう

あれ？なんか紙がある

『優へ』

無事着いたみたいだなー

ここはお前の部屋だ

まず先にアルコバレーノのおしやぶりの袋を置いておくから入れてくれ
これではれないぞ』

おお！神様すること速い！

『入れたよな？』

まずおしやぶりは首からかけること
といっても身体から離れないぞ』

そういや原作でもみんなついてたか？

邪魔だけでしょうがない

呪いが無いだけましか

『次、この部屋は自由に使ってくれ

大体のものは揃ってるはずだ

服も勝手に用意したから

気に入らなかつたり足りない場合は買ってくれ

通帳やハンコもおいてるから使ってくれ

1億あるけど足りない場合は言ってくれ』

いやいやいや…そんなにもいらないよ…

『家賃とかは気にしなくていい

こつちでしてるから』

気前よすぎでしょ…

『武器なんだが短いと言っても

邪魔だと思っからネックレスにしたぞ

“発動”と“解除”で武器になるから

まあ未来では匣になると思うが…

これも横に置いている』

うわー…すごい…

ただの十字架のネックレスにしか見えない

チエーンが長いのは制服から見えないようにしてるのか…

『学校生活については

さつき寝ていたところのクローゼットの中に制服がある

勉強机に鞆や学校に必要なものを

置いてるから確認してくれ』
ふむふむ

『学校には歩いて5分もかからない
地図も一緒に置いておくから確認してくれ』
超親切!!

『後、明日から学校だから
登校時間は8時半まで
授業開始は8時45分
遅れると……まあわかるよな』
咬み殺されますよね…

『明日は入学式だから
もちろん1―Aになるはずだ
さつきも言ったが
わからなかったり何かあったら念じてくれ
神より』

すっごい親切!!
びつくりした……

明日のために一回学校の前まで歩いて道を確認しよう

トコトコトコ

ちかっ!!
漫画と一緒にだ!!

まあ門の外から見るだけだけどねー
「ねえ君なにしてるの?」

………この人ってあれだよね……
例の学校好きな人だよね……
一番好きなキャラだけ……

なんで一番最初に!?

「え? 私ですか?」

よし間違ってるはずだ

「そうだよ」

「明日ここに入学するんです

引越してきたばかりだったの

道を確認してきたんです!」

よし、これで問題ないだろ!

「ふうん」

よし! 興味なさそう!

まだ学校にも入ってないのに

咬み殺されたくはない!!

群れてないし大丈夫だよね……

「入ってみるかい?」

ええええ!?

ちよつとまって何でそんな方向になった!

「え? いいんですか?」

「僕がいいっていったらいいよ」

そうだよね……

雲雀さんだからね……

「はあ……?」

「行くよ」

「あ、はい」

えーどうなってるのー……

もしかして前の日から見に来た

|| 学校好き? って思われた?

雲雀さんって学校大好きだし……

でも、なんでだ!!

とりあえず、後ろについて歩いていたら

うわー! ……漫画と一緒に!

絶対、私は目がキラキラしてるよ!

ってか、後ろについて歩いて歩いてるだけなんだけど
説明とかなし!?

いや、話しかけられても困るんだけど……

「君は風早優だよね」

えええ！ちよつと待って

なんで私の名前知ってるの？

風紀委員怖っ!!

個人情報関係ない!!

ってかもう入学してくる人の名簿覚えたのー

「ええー！ 何で知ってるんですか？」

よし、これで完璧！

あれ？無視された!!

まあ……いいや……

「ここが君の教室だよ」

うお！そう来たか!!

ってかクラスまで覚えてるのー

「ええー！そうなんですか!？」

1ーAなんだあ……」

知ってたよ……知ってたけども

ってか私うそつくの上手だ！

雲雀さん気付いてないし結構完璧！

自分でもびっくりだ！

って油断したら咬み殺される!!

気をつけなければ……

なんていう緊張感なんだ……

いや、そんなことよりせっかく1ーAに入ったんだ

見まころう!!

きやー漫画と一緒だ！

うー……こんなことだったら

死ぬ前にもう一度読みなおせばよかった・

詳しく覚えてないよーー

「……そろそろ行くよ」

「あー、はい」

おー無事にミッションクリアっぽい
校門まで戻ってきた！

あー…いつかボロ出しそうだし名前聞いところかな
知らないのに雲雀さんっていいそう

いや、雲雀先輩のほうがいいのか？

「じゃあね」

「あー！ ちょっと待ってくださいー！」

いや、じゃあねって言ったんだから

ここは流しても良かったのでは・・

名前なんてどうせすぐ噂で流れてくるのにー

「あの……先輩のお名前は？」

「……………雲雀恭弥」

「ありがとうございます！ 雲雀先輩！

おかげで明日から学校がもつと楽しみです！」

自分でも言うのもなんだけど

学校好きアピールしてしまった！

「そう」

おー今度こそミッションクリアだ！

よし、学校に入るまで見ておこう

ってか…やっぱかっこいい……

咬み殺す恐怖がなければだけど

お！入ったね！

とりあえずもう一度頭を下げて帰ろう！

いやー原作に思いつきり関わるって聞いてたけど

まさか……原作始まる前にこんなことになるとは…

やっぱりここの世界に呼ばれてきたからかな？

まあ、いいかっ！

おなか減ったしご飯作って

明日のために寝よ！

くアリアく

ついに私の元から風のおしやぶりが飛んで行ったわ

この情報はみんなにも送ったけど…

風のアルコバレーノのことは全くわからなかったわ……

いつか会えるかしら………

原作前

おお！ついに入学！

校歌だ！

雲雀先輩の着うただね！！

あー：ツナと山本もいてる

京子ちゃんと黒川花もだねー

ぱつと見は原作と変わらないかー

日常編はしばらく傍観でいいか

そこまではつきり覚えてないしね……

大まかな流れは覚えてるけど……

おおー！席はツナの後ろだ

やっぱり関わるようになってるんだね

↓数日後↓

………すごい………

まさかのダメっぷり……

うーん……リボーンってすごいなー

改めて感心！

私は無口ってことで

あんまり話さないことにしてる

多分勝手に関わることになるし

巻き込まれるのは原作の人だけでいいと思う

それにしても雲雀先輩によく会う

目が会うたび一応頭をペコってさげるけど……

気のせいだよね……偶然だよね……？

狙われてないよね………？

・・・

なるほど……

ここで関わるのか

ゴミ捨てに来たら

まさかのツナのいじめに遭遇……

見捨てれないよねー

「あれえ？ なにしてるの〜？」

先生が沢田君呼んでるんだけど〜」

こういうとき自分の容姿がましで良かったって思う

なにもしてないよって言って

慌てて男子が去っていくしね

「大丈夫？ 沢田君」

うわ！ ツナって呼びたい！

あーでもツナ君だろうなー

現実では男の子呼び捨てって

あんまり好きじゃないし

「う、うん」

「先生が呼んでるっていうのは嘘だから

怪我してるし保健室行こう」

「あ、ありがとう……」

保健室着いたのはいいけど

誰もいないなー

Drシャマルが来るまでは

いないことになってるのかな？

「誰もいないし私がするけど」

痛かったらごめんね」

「う、うん」

とか言いながら

この世界来て一番最初に覚えたのは

治療の仕方なんだよねー

能力つかつても怪我は治らないし

体力あげたら回復力はあがると思うけど…

しばらく傍観しときたいしねー

やっぱり晴れの活性はうらやましい

「これで許してね」

「ありがとう!」

「どういたしまして」

「風早さんって無口だから

何考えてるかわからなかったけど

優しいんだね!」

「ふふ

ほめても何も出ないよ」

「笑った!」

「へ?」

「笑った方がいいよ!」

「あ、ありがと…／＼／＼」

ツナ君ってこんなキャラだったー!?

照れてしまった……

「風早さん! と、友達になれないかな?」

お! 珍しく積極的だ!

断る理由がないなー

「うん! いいよー!」

そのかわりツナ君って呼んでいい?」

「うん!」

「私のことは優でいいよ」

「ゆ、優……」

「あい。私と友達になれたんだから

「笹川さんとも仲良くなりなよー」

「ええええええ」

「おお！生のツナ君の叫びだ！」

「後ろの席から見てたらわかるよー」

「ツナ君よく見てるし♪」

「……………そっか／＼／＼」

「おー顔が真っ赤になって可愛いなー」

「ってか男の子に可愛いって失礼か……………」

「はい！ ケイタイの番号とアドレス！」

「登録しといてー」

「そろそろ教室戻らないと」

「怒られちゃうし、行こうよ」

「あ、うん！」

「ふむ…」

「これで完璧に関わりをもったねー」

「最初は正体を隠して友達として過ごそう」

「リボーンに目をつけられて」

「試験とか嫌だ…嫌すぎる……………」

「そろそろ原作開始かなー……………」

「と思いながら教室へ戻って行った」

原作開始！

どうやら知らない間に原作が始まったみたいだ
教室着いたらパンツ男とかで

ツナ君の噂が流れてるし……

声掛けてあげたかったけど

どんどん原作が進んでいく

つまり私は関わるなっでことか……

関わったら京子ちゃんと仲良くなれないしね

まあ見に行くけどね

おー原作通り全部本だ！

ちゃんと京子ちゃんと友達になったみたいだし

よかったよかった

とりあえずメールだけ送っておこう

ツナ君へ

カツコよかったよー！

京子ちゃんと仲良くなって良かったね！

優

これで完璧！

お、返事はやい

優へ

ほんとに!?

ありがとう！

ツナ

うお！わざわざお礼のためにメールしたのか
まめだねー

しばらくしたらツナ君の周りの態度が変わった
みんな調子よすぎだよねー

まあ、いいことだからいいけど

「ツナ君、おはよ」

「優！ おはよ」

これは毎朝してること

あんまり教室では話さない

一応無口？で通してるけど

ツナ君とはよく話すんだよね♪

あー：そろそろバレーの試合か……

確か獄寺君が見てたっけ？

おーいてた……

ザ・不良って感じ！

そんなことより試合試合ー

おー：あれがジャンプ弾かあ

高いなー……

うーん：私も空飛びたいー

結局試してないもんねー

あー獄寺君来た！

うーん：周りの女子から人気だねー

こんなにもてるのか……

あ！ツナ君の机蹴った……

原作通り！

ってか……ひどいね……

「ツナ君、大丈夫？」

「う、うん……」

大丈夫じゃなさそう……

まあ……これから仲良くなるしねー
頑張れ！

いつ始まるかわかんないから

休憩時間ずっと屋上行ってたよ

まあ……屋上好きなんだけどね

多分、風があるから好きなんだろうけど……

ついに来た！

遠いけどちゃんと初めてリボン見た！

ちいさ！可愛い！

ハルちゃんじゃないけど

ぎゅっとしたくなるのわかる……

おーツナ君頑張ってるー

消してる消してる!!

おー……お疲れ様だねー

出た！

土下座!!

フアミリーゲットだね！

あ、はやく授業戻ろうー

これ以上遅くなると怒られるよねー

やっぱり……

私が積極的に関わるのは黒曜編かなー

ただ……雲雀先輩だけは謎だ……

毎日一回は目があつてる気がする……

……しまった

前のテストが例の理科のテスト……
神様に学力あげてもらったから
ぶっちゃけ解けない問題なんてないんだけど
根津だよ！100点とるんじゃない……
仮定の話なんか聞きたくない……
あー…ツナ君言われてる…
席が後ろだから私だよね……
ってか原作だったら獄寺君出てくるよね…？
頼みます！

「風早！」

「はい」

「あくまで仮定の話だが……」

やばい始まった!!

獄寺君来ないし！

「エリートコースを「仮定の話はいいですよ」む。」

「人生いつどうなるかわからないんで」

やった！黙った！

ガラッ！

来た！

獄寺君！遅すぎー！

あーツナ君の名前出しちゃったよ

私の名前も呼ばれるかと思っただけど

セーフだった！

後はツナ君頑張れ！

ドカンドカカン聞こえるし

問題なさそうだ

「だいたい落ちこぼれどうしつるんでたら
京子ちゃんや優がひくだろ?」

「あっそーだ

このガツコのテストってちよろいつスね」

ガーン

「ツナも見習え

そーいや優って誰だ?」

「友達だよ!」

「ダメツナに友達いたのか」

「言っとくけど

優はオレが怪我したとき

保健室で治療してくれるぐらいいい子だよ!」

「ん? 女か?」

「ん? そうだよ

あ! 優に変なことするなよ!」

ニヤツ

「待てー!リボン!!」

こうして優の存在がリボンにばれたときだった

神様とおしやべり

あー…授業が暇だ…

正しく言うとうと簡単すぎる……

神様かまつてくれないかなー…

『呼んだか?』

うわー!ごめんなさい…

『どうした?』

いやあ…暇だから相手してほしいなって

ちよつと思つたら、まさか呼んでるとは……

『いいぞ』

今は暇だからな』

わーい♪ありがとう!

『おうー』

神様!

ツナ君とは友達になつたよ

『そしてみたいだなー』

ほとんど原作だよー

ただ……

『お? なんかかわつたことあつたか?』

雲雀先輩とよく目があう

『良かったじゃん』

雲雀好きなんだろう?』

いや…好きだけど…怖い…

なんかしちやつたのかも……

よく考えたらツナ君より先に雲雀先輩に会つてるし……

『あー…もしかしたら相性がいいのかもな』

相性?』

『ああ、原作には風がなかったけど

多分雲と風が相性いいんだよ

風があつたら雲は動くからな』

あー…なるほど……

そう考えると…大空はいいとして

晴れは普通か…雷も普通？雨も普通だね

嵐は相性良さそう？全然しゃべってないけど

まあ…原作でも相性が良かった雷と嵐は

仲が良くなかった？から宛てには出来ないか…

霧とは相性悪そう…凧かわいいから好きだけど…

『そうだなー』

霧は風が吹いたら無くなってしまおうしな』

………そうか

『それに、幻覚封じしてるから

向こうも相性悪いと思ってるかもな』

しまった！自分で相性悪くしてしまった!!

でも…しようがないや…

『そうだな

仲良くなる奴は結局なるしな』

ふむ…

なんか雲雀先輩と仲良く？なる姿は想像できないけど

目があうつてことは相性いいよね……

『おお！ 楽しみだな！』

咬み殺さなければ…ね……

そうそう、聞いてみたいことあったんだ

『なんだ？』

私って戦いのセンスあるの？

『当然だな

俺が入れ忘れるわけないだろ』

おお……

んじゃ練習しなくても勝てるかな？

『さあなー……

まあ風的能力使わなくても今の雲雀には勝てるな』

つよっ!?

『当然だろ。身体能力も高いんだから』

『そういえばそうか…』

『まあ、なにもしなかったらリング戦ぐらいには』

『同じぐらいになるかもしれないけどな』

『何もしないと宝の持ち腐れって感じだ』

『それに雲雀も天才だからな』

『ぶっちゃけ練習とかできる？』

『俺が相手になってやるぞ』

『ええ！いいの？』

『いいぞ』

『ただし一日一時間しか無理だぞ』

『俺も忙しいからな』

『おお！ありがとうございます！』

『ってかどこで？』

『精神世界で戦うんだ』

『イメトレみたいな感じと思ってくれ』

『なるほど』

『それだったら力つかってもばれないか…』

『それにしても戦い嫌いな優が珍しいな』

『いやあ強かったらその分相手を』

『一瞬で気絶できるかなって…』

『なるほどな』

『あ！そうだ…!!』

『神様の力でお願いがあるんだけど』

『なんだ？』

『フウ太の並盛中のケンカの強さランキング』

『ってみたい名前あるでしょ？』

『ああ』

『あれって私が一位になるの？』

『そうだな』

『できれば、一位の名前のところを』

消すこと出来ない？

『あー…一位の欄に秘密とか書くこと
だったらいけると思う……』

順位から抜けることはできないな』

それだけでも十分です！

『そうか』

まあこれは結構ギリギリの範囲だけだな』
そうなの？

『ああ』

本当はフウ太を優が見ないといけないんだが…
なんとかなる方法があるんだ』

へえーそうなんだー

神様ありがとう♪

『でも、なんで隠すんだ？』

うーん……わかんない……

まだばれない方がいいかなって

『そうか』

後はマーモンみたいな服装用意しとかないと…

『こつちでしようか？』

え!?!いいの？

『ああ、特別製で向こうから見たらは目が隠れてるけど
こつちからは見えるようにしとくからな

身長もこれを着ると少し誤魔化せるようにするぞ

フードの部分で数センチだけ変わるように出来るからな』
すごい……

『まあ、任せとけ』

この服もコンパクトにするか？』

ううん

どうせちよつとの間だけだから別にいいよ

『そうか』

そろそろ、仕事戻るから』

ごめんね！忙しいときにー

『またなんかあつたら呼んでくれ』
うん！ありがとう！

あれ？みんないない……

まさか……

「死ぬ気で山本を助ける!!!」

あ……ツナ君と山本君が見えた……

……知らない間に終わっちゃった……

まあ……いいか……

雲雀先輩の謎

うーん…

今日も普通に1日が終わった

全く原作が絡むことなく過ぎていく…

いや…：何日かりボンにつけられたけどね

どうやら大丈夫だったみたい

まだ絡まれてないしー

とりあえず家帰っても今日は暇だし

屋上でも行こうかな…

風が気持ちいいしね…

んー…いい気分♪

なんかうるさいけど…

あー…山本君ファミリー試験？

みたいなんだったっけ…

正式な名前忘れたよ

つてことはもうランボってしてるのか…

全然原作に絡んでないじゃん!!!

本当に私呼ばれた意味があるの!?

ぶっちゃけこのおしゃぶりぐらいだよ…

証明してるのは…

それにしても制服の中に入れて隠してるけど邪魔だし

体育とか上着着ないとばれるし…

隠すのってめんどくさい…

ガチャ

ん？誰か来た

………雲雀先輩じゃないですか………
そういえば屋上で寝てるシーンを
どっかで見たような………

「こゝ、こんにちは」

うお！自分でもびっくり！

焦って言葉詰まったよ！

お、無視か

「今から寝るから出てっつてくれない？」

はい！言われなくても

咬み殺される前に出ていきます!!!

「あ、はい」

さっさと行こう！

「………君」

「はい？」

ちよつと待つて!!?

もう絡み終わったんじゃないの？

「君だったらいいかな」

はい？

なにが?!

「そこ座って」

強制きたー！

いや……座るけどさ……

咬み殺されたくはないし………

………この状況って

膝枕っていうものだよね………

意味がわかんない………

なんでこうなったの……？

キャラ違うじゃん!!

私がこの世界にきてキャラがかわったのか？

つてか……なんだっけ？

なんか小さい音でも起きるんじゃないかな？

|| 咬み殺される

なに!?!この状況!?

あー…私死んだ……

つてか雲雀先輩普通に寝てるし…

うー…やっぱり咬み殺される恐怖が

無かつたら好きだしな……

……かわいいな…

膝枕なんてしなことなかったけど

かわいすぎる!

よしよし♪

……

しまった!!!?

あまりにも可愛さで忘れて触ってしまった…

咬み殺される……

あれ?起きないや?

もう一度しよう

よしよし…

？

なんだ良かったー！

全然起きないじゃん♪

ってか起きなかったらいつまでこの状態？

ガチャ

あ…誰か来た…

「委員長！すみません」

あ…草壁さんだ…

おお！流石に草壁さんも

この状況をみて固まった！

だよね！だよね！

やっぱりキヤラおかしいよね！

「……………なに」

うわー…機嫌悪そう…

「少々問題が…………」

「君もう行つていいよ」

…私はただの枕か…

「あ、はい」

「またね」

また？またつてなに!?

とりあえず草壁さんにも頭を下げたけど

草壁さんも不思議そうに見てた…

いやいやいや…………

私のほうがわかんないよーーー！！！！

おにぎり実習

『ヴーヴーヴー……』

うるさい……これはケイタイのマナー音だな！

まだ目覚ましがなっていないし無視しよ

『ヴーヴーヴー……』

うるさいってば

『ヴーヴーヴー……』

なんだよ！もう！うるさすぎる！

人の眠りを邪魔するなんていい度胸だな！

ってか知らない番号だし……!!

「もしもし……(怒)」

『やあ起きたね』

………?

この声って……

『僕を無視するなんていい度胸だね』

この口調……

なにー……!?

「うわ！ ごめんなさい！

雲雀先輩ですよね……?」

『そうだよ』

なんで番号知ってるのー!?

入学してからケイタイ買ったのに!?

風紀委員怖っ!!まじで怖っ!!

「あのー……なんでケイタイ番号知ってるんですか?」

なんか無駄な質問な気がするけど

知ってて当然っていうのもおかしいし聞いてみた

『僕だからね』

答えになってない!!

「はあ……っ」

『おにぎりは鮭でお願いね』

はい？

「えつと……」

『頼んだよ』

ブチッ

切られたー!!

意味分かんないよー

なんで今日の実習知ってるのー

聞いても「僕だからね」とか言われそう……

っつか……

おにぎり実習の日ってビアンキが来るから

全部終わってから

こっそりツナ君に渡そうと思ってたのにー

確か自分以外で3個あるんだけど……

1個だけしか雲雀先輩に渡さない……

……

はい……咬み殺されますね……

うう……なんでこんなことに……

こんなことだったら……

自分の弁当用意していたらよかった……

「優！ おはよ」

「……おはよう……ツナ君……」

「どうしたの？なんかあった？」

うー聞いてほしい！

でもまだ雲雀先輩の名前出すのまずかったかな……

あー原作の順番覚えてないー

っつか獄寺君睨んでるし!!

「ツナ君……ごめん!!」

「え!?! どうしたの？」

「あの……今日のおにぎり実習……」

ツナ君にあげるつもりだったのに
無理になっちゃった……」

「え!? 気にしなくて大丈夫だよ!!」
うう…優しい…

あーでもこの教室で私の友達ってツナ君だけなんだよねー
いや、女の子とは最低限は話すけど……

ごめんよー…

「うう…ごめん……」

ありがとう……」

あー…まじで落ち込んできた……
なんでこんなことに……

はあ……

溜息しながらおにぎり作っちゃおにぎりに悪いか…
こうなったら美味しいの作ってやる!

料理は自信あるんだぞ!

ってか私が鮭用意してなかったら

どうするつもりだったんだろう……

……みんなに頭を下げないといけなかったと思う…

鮭あつてよかったー (泣)

「風早さんは誰にあげるの?」

お! 京子ちゃんだ!

「ダメツナじゃないのー? 仲良いし」

おお! 黒川花だ!

「あ…笹川さんと黒川さん

ツナ君にあげたかったけど

強制的に違う人に渡すことになったんだ」

うん、間違つてない！

「え!? 彼氏?」

ぬおーなんていうことを聞くんだ!

「黒川さん、違いますよー」

「あやしいわねー」

「あやしくないですよー」

名前言ったら強制的の意味がわかってもらえるけど
言ったら騒ぎになる…話題かえよ……

「えつと……風早じゃなくて下の名前がいいですよ」

うん。特に京子ちゃんは原作に関わってくるしね

「ほんとう? 優ちゃんって呼んでいい?」

「私は優でいいかな?」

「どうぞどうぞー」

「私も下の名前がいいよー」

「私は花って呼んで」

「んじゃあ…花と……」

京子ちゃんでもいいです?」

「いいよ」

おおーまさかのおにぎり実習で仲良くなった!

「優、教室行くよ」

「えつと…ごめん……」

持つていけないといけないから……」

「あやしいなー……」

「……………あやしくない!!」

黒川花つてこういうタイプだったのー

大人の女性のイメージだったけど

ただの恋愛好き? かも……………

というか教室いったらツナ君に食べられて

渡すことできなくなつて

雲雀先輩に咬み殺される……
それは勘弁……

あれ？どこに持っていけばいいのかな？
応接室？

でも私は応接室が風紀委員の部屋って
知らないことになってるよね???

『ヴーヴーヴー……』

……エスパー？

「もしもし」

『応接室持ってきて』

ブチッ

……行きますよ

行けばいいんでしょ……

一応私の方が強いんだよね……？

なんで逆らえないのかな……

……応接室をノックするのが

果たし状をたたきつける道場破りの気分だ……

すう……はあ……

深呼吸……深呼吸……

コンコン

「どうぞ」

この声は草壁さんかな？

「失礼します……」

草壁さん私をみて固まらないでー！

そしてなんでこんなに離れてるの!?

いや……離れないと咬み殺されるもんね……

「やあ 来たね」

「はい…これどうぞ」

では私はこれで……」

早く逃げないと!!

「待ちなよ」

出た！強制!!

「はい？ なんですか？」

「ここで食べなよ」

………はぁー!?!?

私はそんなに凶太くないぞ!!!

処刑台の前で食べる気分だ……

確かに……教室いったらなくなるから

屋上で食べるつもりで全部持つてるけど……

うう……拒否できない……

草壁さんを見ると…ソファアアでどうぞ

って目線でいってる……

なんで1人でソファアアで食べないといけないのかな……

「………失礼します……」

こうなったらやけだ!

食べてやる!!

「いただきます」

もぐもぐ……

お茶飲もう……

なんか目線感じる……

………

お茶か……

「あのお……コップありますか？」

草壁さんの行動はやつ!?

「どうぞ」

「ありがとうございます」

コポコポコポ (お茶入れてます)

「雲雀先輩、お茶どうぞ」

さっさと食べて早く戻ろう……

……また目線が……

お茶のおかわりか……

「失礼しますね」

コポコポコポ

「どうぞ」

なんだ……この状況……!?

草壁さん助けてください!!

つて無理だよね……はあ……

自分で言うのもなんだけど……

おにぎりは美味しい……

……感想は求めません……

食べてる時点で問題ないってことだろう

「ごちそうさまでした」

食べたし早く帰ろう……

「では、失礼しますね?」

「待ちなよ」

まだあるの!?

「はい?」

「草壁、僕は屋上にいるからね」

「わかりました」

……もしや……

「行くよ」

ですよね……

……まずくて咬み殺される?

いや……美味しかったはず……

だよね……?」

ガチャ

…なるほど

そういうことか……

目で合図送るの止めてください……

枕になりますよ！枕に！

寝たし……

神様が相性がいいかもとか言ってたけど

そんな度合い超えてるような……

あー授業はじまったよ……

「あー！ 私産まれてはじめて授業さぼった」

独り言いってしまった！

……起きてないからいいか……

どうせ原作進んでいくととサボることになるしね

結局1時間以上このままだった……

教室戻っても怒られなかったのは

草壁さんが言ってくれたんだらうな……

リボーン登場

……原作に絡むことなく夏休み……

おかしい……おかしすぎる……

なんで……原作じゃなく

雲雀先輩と絡んでるの……

時々呼び出され……枕になる私……

途中で抜けても先生に怒られない状況……

そしてなぜか私の家に来て

時々ご飯を食べていく……

もう……なんで私の家の場所を知ってるとか

聞く気力がなくなつたよ……

……

意味分かんない!!!!

ツナ君も聞いてこないし……

あ……これは雲雀先輩とツナ君が

絡んでないからかな……

まあ夏休みはそこまで呼ばれないでしょ……

た……たぶん……

今日は何もなさそう!

平和だね……

『ヴーヴーヴー……』

……またですか?

それもこんな時間に……

もうすぐ夜だよ!!

あれ? ツナ君だ!

なんかツナ君ってわかって嬉しい!

「もしもし♪ どうしたの?」

『あ！　もしもし？　優？』

「そだよー」

『あ、あのさ優ってテストの点いいってほんと？』

「そうだねーってあれ？」

ツナ君にいったことあった？」

『いや、その…リボンが……』

あーなるほど

リボンが私が成績いいっていうのを調べたのね

調べたって…私の戸籍とか変なところないよね……？

まあ、神様が大丈夫っていったら大丈夫かー

「んーテスト系でなんかあった？」

『その…補習のプリントがわからなくて…』

全問解けないと落第なんだ……』

あー…なんだったっけ…

答え覚えてないや…

神様に学力あげてもらったけど

私にわかるかな…

「うーん…私でわかるならいいよ」

『ほ、ほんと!?!』

「うん。わからなかったらごめんね。

そっち行ったほうがいいのかな？」

『今、山本といっしょにオレの部屋でしてるんだ』

「わかったー」

そっち行くから道教えてー」

おお！ツナ君の家はじめていく！

ってか夏休みなってやっとか……

まあ…いいか…

おおー！ついに来た！

原作と一緒だ!!

ピンポーン

お！なんかドタドタ音が聞こえる

「優！…ごめん！…ありがとう!!」

あがつて!!」

「おじやましまーす」

おおー思わずキョロキョロしてしまう

「入って入って」

「お邪魔しまーす!」

んー…この状況は……

獄寺君ダウンしてるってことは

ビアンキが来たってことだよな

でもリボーンが起きてる

うー…記憶では寝てた気がするけど

気のせいか……

「ちやおツス」

「か…かわいい……」

ツナ君の弟?」

うん、間違ってるよな

かわいいのは本当だし

「いや…その……」

あ…困る質問しちゃったみたいだ

ごめんね……

「弟じゃねーぞ

オレはボンゴレファミリーの殺し屋リボーンだ」

「そっかあー

リボーン君っていうのかー

はじめましてこれからよろしくね!!」

ツナ君が気付いてないって感じでほっとしてるー

「あ、山本君こんばんは!」

獄寺君は……大丈夫なの……?」

後、その可愛い女の子もこんばんは!」

「ははっ！ わりいな来てもらって！」

うん。爽やかだね

獄寺君は…なんでこの女がとか

ぶつぶつ言いながら寝転んでる…まあいいや

「はひー。可愛いなんてー照れちゃいますうー！」

はっ！ もしかしてツナ君の彼女さんですか!?

そんなあ……………」

え!?!なんか一人で決めて一人で落ち込んでる!?

「違うよー友達だよ」

「はひー。そうでしたか

ハル勘違いしました！

三浦ハルっていいいます！

将来の夢はツナさんの妻になることです！」

「ハ、ハル何言ってるんだよ!?!」

おおー。持ちネタ?だ!!

「そつかあ！ ツナ君も隅におけないねー」

「じよ、冗談だから!!!」

「ごめんごめん。からかっただけ♪

私は風早優だよー

よろしくね！ ハルちゃん！」

「はひー。よろしくお願いします

優ちゃん！」

「あい

さて…補習のプリント見せて？」

「あ、これだよー！」

うお！ほんとに難しい問題だね…………

でもわかる…流石神様…………

「んー…この問題……………」

ツナ君が不安そうにみてる…………

「わかるけど…………

多分説明してもわからないと思うから

何かメモ用紙に式と答え書くから
まる写ししてくれる?」

「ほ、ほんとにー!」
た、助かった………」

「風早すげえな!」

カキカキカキ……

「はい、答えは4だよ

なんて名前か忘れたけど公式使ったら解けるけど
多分大学レベルじゃないかな?」

「あつてるぞ」

おお、リボーン君が言ったら間違いないね

「リボーン君がそういうならあつてるかなあゝ(笑)
でも、間違えてたらごめんね
わからない問題ってそれだけ?」

「う、うん」

「そっかー

んじゃ帰るねー

ご飯作らないといけないし」

「え? 優がご飯作ってるの?」

「あれ? 言ってなかった?」

私一人暮らしたよー」

「優! ここでご飯食べていけ」

「リボーン! おまえ何勝手に決めてんだよ!」

あれ?この流れ…どっかで…

まあいいや……

「え!?! いいのかなあー♪」

うわーツナ君のお母さんの手料理食べれる!!!

『ヴーヴーヴー…』

……これって…もしかして……

「…ツナ君、ちよつとごめんね………」

もしもし………」

『君、どこにいてるの？』

僕お腹すいたんだけど』

「……今どこにいてるんですか……？」

『君の家のリビング』

「……鍵は？」

『僕が鍵を持ってないけども？』

……いつの間に合いかぎ作ったんだ……

一応女性の家なんですけど……

『はやく帰って作ってね』

ブチッ

……

ツナ君のお母さんの手料理……（泣）

「ツナ君、リボン君……」

ものすつごい嬉しいお誘いだけど帰るね……」

「え!! なにかあったの？」

「あ……まあ……いろいろと……」

うー……ツナ君のお母さんの手料理……

リボン君が何も言っただけこないってことは

理由ばれてるのかな……

あれ? いつ雲雀先輩に興味もったっけ……

っつか早く帰らないと!!!

「ご、ごめんね! 急いでるんだ

みんなまたね!!」

ダダダダッ……

初めてのツナ君の家とリボン君の絡みが

こんな感じで終わるなんて……

雲雀先輩のバカー……!!!

雲雀先輩と原作

……夏休み終わった… (泣)

ほほ毎日思うけど…

私はなぜ原作に絡むことなく

雲雀先輩と絡んでるのだ………?

『ヴーヴーヴー……』

あー今日も雲雀先輩と絡むのね♪

もう開き直ったよ!!!

原作なんて知らないもん!!

「もしもし?」

『応接室来て』

ブチッ

だよねー

そうだよねー♪ …… (泣)

あれ? 応接室のドアあいてる?

いつも閉まってるのにー

「失礼しま………」

……何この状況……

えつと……

山本君と獄寺君が倒れてて

ツナ君がパンツ一丁

リボン君と雲雀先輩の武器が交えてる…

原作きたーーー!!!

まじっすか!?

ってかこのタイミングなの!?

この後って…爆弾やだー！ー！！

「ゆ、優?！」

「ツ、ツナ君これはどういう状況…?」

あ、原作変わった…

「…君の知り合いかい?」

「えっと、友達です」

いや、獄寺君とは全然友達になってないけど…

山本君とは普通かな…??

でも友達といったほうが安全な気がする…

ただの勘だけど…

「ふうん

今日はこれで見逃してあげるよ

次はないからね」

勘が当たったー！ー！！

爆弾回避ー！ー！！

「…ありがとうございます?」

あれ?私がお礼言うべきなのか?

よくわかんない…

とりあえず、2人を起こすか…

獄寺君は睨んできそうだし

ツナ君に任せよう…

「山本君、大丈夫?」

ユサユサしてみたけど起きるかな?

「…ここは…?」

「あ、起きた!!」

とりあえずこの部屋から出た方がいいと思う…」

山本君は状況把握したっぽいね

問題はあっちだ…

あー…なんかあの野郎とか聞こえる…

お!ツナ君が説得した!

部屋から出ていく!

これにのって私も帰ろう……………

「私もこれで……………」

「君はここにいなよ」

ですよー

「……………はい」

まあツナ君が逃げれたらいいか…

今日はなんの用事だろ……………

「さっきの赤ん坊知ってるかい?」

あーそういえばこの時興味持ったんだった…

「リボン君のことですよね?」

私も1度しか会ったことないんですけど

ツナ君の家で会いましたよ?」

こんなに言ったらまずいかな…

でも風紀委員だったらこれぐらいすぐ調べれるよね?

「ふうん」

あ、この「ふうん」は機嫌よさそうー

え?なんでわかるかって?

経験だよ経験。って何自分でツツコミしてるんだろ……………

「あのお…今日の用事はなんですか……………」

「なにが?」

えー

雲雀先輩が呼び出したんじゃないですかー!?

「電話で来てって……………」

「……………ああ」

君は頭がいいみたいだね」

え…いまさら?

住所とか知ってるのに今?

「まあ…いいほうだと思いますが……………」

「これやって」

……………書類ですか…

書類することになったら

さらに呼び出される気がするんだけど…

うー…なんで私が書類を…

「あのお…私は風紀委員じゃないのに

なぜ書類を…?」

「なにか問題でもあるのかい?」

……圧力かけないでください……

「さっきのお礼ってことで今日だけですよ」

私にしては強気発言だ!!

あ、なにも言ってこないってことは

わかってくれたっぽいね!多分……

「なあ

あいつとわざと会わせたあ!!?」

「キケンな賭けだったけどな

打撲とスリ傷ですんだのはラッキーだったぞ

今回は優に助けられたんだぞ

後で礼言つとけよ」

「そ、そうだよ!

優は大丈夫なの!」

「ヒバリが唯一気に入ってる人物だから

問題ないだろう」

「ええええええ!!?」

「優がよく教室から出て行くのは

ヒバリからの呼び出しだな

いつも怪我ひとつしてないし問題ないだろう

まあ今日はいい実践トレーニングになっただろ

鍛えるには実践が一番だからな」

「なっ何言ってるんだよー!!」

「っーかどーしてくれんだよ」

「ぜってーあの人の目にえつけられたよ!!」

「ヒバリは将来必ず役に立つ男だぞ」

と呟いてリボーンは帰って行った……

書類疲れた……

「優！ 大丈夫だった!?!」

「あーツナ君心配させちやったかな？」

「大丈夫♪ 大丈夫♪」

「もういろんな意味で慣れたしね！」

「ご、ごめん！」

「今日はありがと!!!」

「私は何もしてないよー」

「オレも助かったよ」

「あ、山本君」

「だから私は何もしてないってー（笑）」

「っけ」

「オレはてめえーに礼なんかいわねえぞ」

「うん。それでいいよー」

「なんで獄寺君ってケンカ腰なんだろうね」

「まあいいけどー」

「ゆ、優はヒバリさん怖くないの……?」

怖いっていえば怖いけど

あれ？でも殴られるっていう怖さじゃないよね

「んー…怖いような全く怖くないような……」

よくわからなくなってきた……

「うん！ よくわかんないや！ (笑)」

「そ、そっか……」

うーん…本当にわかんないや……

体育祭♪

「極限必勝!!」

うお！目の前で見るとすごい迫力……

あー…なんか苦手なタイプかも？

でも、晴れだし相性は普通だよね？

というか体育祭で

このみんなのテンションの高さすごすぎ…

なんで「オオオー!!」って叫んでるの……？

私にはわかんない世界だ……

京子ちゃん心配そうに見てるなー

「京子ちゃん、どうかしたの？」

「あ…優ちゃん……お兄ちゃんが……」

「お兄ちゃん？」

「あその前で話してるのは京子のお兄ちゃんだよ」

………似てないっていいののか？

「え!? そうなの!？」

「お兄ちゃんいてたんだー」

「うんー」

あー…心配してる京子ちゃんも可愛いよねー

そんなことしてたらツナ君呼ばれてる…

かわいそうだから私は手をあげないけど

はい………決定ー………

ツナ君ご愁傷様…

私はなににするかなー

足はやいし、リレーとかかな？

結局、100M走、借り物競走になった

全部午前中に終わる種目でラツキー

今日は体育祭！

ちよつとお弁当を奮発♪

からあげ、ハンバーグ・・・と・・・と・・・

・・・とリンゴ入れて完璧!!!

みんなと一緒に食べるの楽しみだ♪

あーでもみんなにジロジロ見られるんだっけ？

まあ、なんでもいいや♪

楽しみ♪楽しみ♪

「ツナ君！ おはよー！」

「優・・・おはよ・・・」

あれ？元気がない？

そういえば熱あつた？

あー・・・保健室連れて行った方がいいんだけど

確か私がつとも苦手とする人が

保健室の先生だ・・・

だってよく考えてみなよ！

確かあの人一番最初にハルちゃんの胸触ったんだよ!?

なんて危険な人物なんだ・・・

ただの変態じゃん!!!

いや・・・ツナ君のためだ!!

私と一緒にいったら休めるかもしれないし！

「ツナ君体調悪そうだけど保健室行く？」

「あ・・・もう行ったんだ・・・」

・・・行った後だったのね・・・

そして京子ちゃんに応援されたんだね・・・

ふあ・・・フアイト・・・

「ツナ君、凍らしたペットボトルあるから
頭冷やしときなよー」

「あ、ありがとう」

「私にはこれしか出来ないごめんよー！」

ふふん♪100M走は当然1位♪

もちろん目立たないようにギリギリ1位だけどね♪

え!?陸上部に勝ってるって?

そこは気のせい♪気のせい♪

次は借り物競走だ!

前の世界の学校ではなかったんだよねー

すっごい楽しみ♪

京子ちゃんのお兄ちゃんにも

極限だーとかいって応援されたし頑張ろうかな♪

・・・

わぁ：相性いいですねー：

「風紀委員長の武器（トンファー）」

なんだこれ：

誰かのイタズラ？

聞くだけ聞いてみよう：

ケイタイ：ケイタイ：

え?なんでケイタイ持つてるかって?

いつ雲雀先輩から呼び出されても気付けるように
常に持つてるんだー

もちろん先生の許可済み

プルルルル……

あ…どこかから校歌が聞こえる…
近くにいてるのかな？

「やあなんだい」

「あのお借り物競走の紙が雲雀先輩の…」

ブチッ

…切られた!!!

え!?なんで!?

そんな変なこと言ったかな…

これは棄権でいいやー

しようがない!

「で、何?」

はい?

この声って…

「雲雀先輩!」

「君が僕を呼んだでしょ」

そうですけど…

まさか来るとは…

借り物競走って借りに行くんじゃないの?

来ちゃったよ!?

ってかみんな固まってるし…

そんなつもりはなかったんです…

「あ、そうです

雲雀先輩の武器って書いてるんですけど…」

あ…なんか困った顔してる

武器を離すのが嫌なのかな?

「えっと…棄権するんでいいですよ?」

「行くよ」

ついていくのね…

「あ、はい」

借り物競走って借りたら走るんだよね?

普通に歩いてるんだけど…

・・・

歩いてても一位つてすごいね…

みんないつまで固まってるのかな…

「あ、あの…ありがとうございます」

そういえば何でわざわざ来てくれたのかな？

「君」

「はい？ なんですか？」

「君からの初めての電話が借り物競走ってやめてよね」

・・・

はい？

そういえば初めて私から電話したかも…

ってかこんなこというキャラだった??

「す、すみません…」

「別にいいけどね」

いやいやいや…絶対良くないでしょ

その反応…

あーしようがない!!!

「あの、お詫びに…」

お弁当いっぱい作ったんで一緒に食べますか？」

あれ？返事ない？

聞いたらダメだったかな…

よくご飯食べにくるってことは

私の料理はまずいと思っと思ってないと思うんだけど…

「…行くよ」

あ、食べるみたいだ

って今から？昼休憩まで

多分後2種目ぐらいあつた気が…

「今からですか？」

・・・

はい…今からですね

目で言わないでください

「取ってくるんでどこにいったらいいですか？」

「本部の風紀委員のテント」

「わかりました」

「すぐ行きます」

「なんでこんなことになったのかな？」

「自分でもわかんないやー」

「……風紀委員のテントの前怖いよ……」

「なんでこんな学ラン来た人がいっぱい並んでるの………？」

「ってかテントって外から見える簡単なものじゃないの？」

「なんかすごい本格的なんだけど……」

「普通に入ってるのか……」

「その君！ なにしてるんだ!!!」

「うわー怒られたー」

「あの……その……」

「彼女はいいんだ」

「あれ？この声は……」

「あ、草壁さん」

「こんにちは」

「こんにちは」

「委員長が中で待ってます」

「どうぞ」

「助かった……」

「ありがとうございます」

「失礼しまーす」

「やあ来たね」

「はい」

あれ？雲雀先輩以外誰もいないや
まあいいか。応接室でもよくあることだし
それにしてもなんか椅子とかも豪華……
これ外だよな？

「どうぞ食べてください♪」

おお、普通に食べてる♪

私も食べよ♪

「君、今日は機嫌がいいね」

「あ、ばれました？」

「何かあったのかい？」

あれ？普通に雲雀先輩と会話してる

「こうして一緒にご飯食べてるからかな？」

小学校の時と違って家族で食べるでしょ

運動会とかの時っていつも一人で食べてたから……」

「そう」

あ、私が親いないの知ってたかな？

まあ私が言ってるのは前の世界での話なんだけど……

………じー………

「雲雀先輩ってハンバーグ好きなんですね」

あれ？違うかったかな？

よく食べてるきがしたけど……

「よくわかったね」

「見てるとわかりますよー」

どうやらあつてたみたいだ

「また今度作りますねー」

あれ？返事ない？チラツ……

………

………

………

・・・
笑った……

／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
「君なんてそんなに顔赤いの？」

「え……あ……その……」

なんでもないです／／／／／

やばい……だめだ……／／／／／

これは危険だ……／／／／／

なんでかわからないけど……

危険な気がする……／／／／／

結局この後なにを話したか覚えてなく

いつの間にかツナ君が棒倒しから落ちて

体育祭は終わった

ある日の休日

.....

どういう状況？

今日は休みです

ゆっくり寝てました

起きました

リビングに雲雀先輩

はい????

「やあ」

「おはようございます?」

.....

「うわああああ!」

「なに」

「ちよつとごつち向かないでください!!」

着替えてきます!!!」

私パジャマじゃん!!!

いかにも女の子って感じのパジャマだよ!!!

.....寝起きとか恥ずかしいよー

というか：おしやぶり見えてたし!!

まあ袋入ってたけど：

つてかもう一回リビング通らないと

顔も洗えないじゃん!!!

和室で寝てたら問題なかったのにー.....

.....どうしよう.....

作戦1 電話して外で待ってもらう

作戦2 顔を何かで隠しながら洗面所にダッシュ

作戦3 このまま出ない

作戦4 このまま普通に出る

さて、どうしよう

3は絶対無理だよ

4は私が嫌だ

つまり1か2だよ

でも2はあやしいよね

電話しよ

プルルル

うん！リビングから校歌が聞こえる！（笑）

ガチャ（ドアが開きました）

「なに」

「きゃー！ー！」

とつさにベットにあつた人形で顔を隠したよ

「なにしてるの？」

「……その……顔洗ってないから……」

外で待ってもらおうかなと

なんでこういう展開を想像してなかったんだ

私は頭良くなつたはずなのに!!!

「はあ……」

うわー溜息つかれた

顔見えてないけど多分呆れてる顔してる！

いや女性だったら普通の反応じゃないの!?

「せめて……顔洗うまでぐらいい

見ないでほしいな……って……」

「わかったよ」

おお……あれ？

出ていかない？

恐る恐る見たら……目をつぶってる!?

うわー貴重なシーン……

って早くしないと!!!

「お……お騒がせしました……」

「そうだね」

　　「って私が悪いのかな？」

　　「いや、雲雀先輩だから」

　　「私が悪いことになるんだらう……」

結局、その後一緒にご飯食べたんだけど

　　「そういえば……体育祭から」

　　「一緒にご飯食べる回数増えたけど」

　　「もしかして体育祭で言ったこと」

　　「気をつかってくれてるのかな？」

　　「……」

　　「それはないね……」

　　「……」

　　「お茶を飲みながら」

　　「まったりしてるけど……変な感じだ」

　　「この世界来ての神様が」

　　「一番の異変がリングとおしやぶりっていったけど」

　　「私の中では雲雀先輩のキャラのほうが異変だよ」

　　「でも、今はこれが私の現実だしな」

　　「なんかイメージと違いすぎて」

　　「わけわかんないや……」

　　「私には1度も咬み殺すって言ってないしな……」

　　「でも、よく咬み殺された後とか見るけど……」

　　「うん……本当によく見る……」

　　「考えてもわかんない!!」

あ、雲雀先輩のケイタイなってるー
それにしてもすごいよねー

どうやって着うた作ったんだろ…

「行くよ」

「へ？」

どこに？

「赤ん坊に貸し作りに行くよ」

普通は赤ん坊が誰のことかわからないと思う

「リボン君のことかな？」

んじゃ、いつてらっしやーい」

「何言ってるの」

君も行くよ」

えええええええ

「え!? 私もですか？」

………

はい…行きます…

だから目で言わないでください……

「乗って」

うおー出た！バイク！

いやいや、だから法律おかしいって！

「あのお…法律……」

「僕がここの法律だよ」

いや、違うだろ

とりあえずツツコミしたくなった

「はあ……？」

「君のためにヘルメット用意したんだから」

えっと、つまり用意したんだから

さっさと乗れってこと？

ってか用意してくれたんだ…

優しい？のかな？

あれ？優しいの基準が変な気が……
まあいいやー

おー…怖いけど……

きもちいいー！！！！

風がいい感じ♪

あれ？止まった

って結構近いじゃん

………？

「ツナ君の家!？」

「君知ってるのかい？」

「友達だもん」

ってか前に友達って言ったよね？

それにしても…こんなの原作にあったかな……

あー…覚えてない……

でも、ツナ君との絡みだったら原作だよね…

えっと…えっと……

「待ってて」

「あ、はい」

あ、直接2階へ登って行った

危ないなー

あ！思い出した!!

そうそう原作はツナ君視点だ！

だからわからなかったのか……

技名覚えてないけど死んだふりだよね

うわー…ビミョーに原作絡んだ

すっごいビミョーだし……

あ、降りてきた

ツナ君が窓から顔出してるー

「ツナくーん」

「ゆ、優!?!」

「何してるのー?」

「え、えつと…」

「10代目!! どいてください!!」

あいつだけはやり返せねーと気が済まねえ!!

果てろ!!」

ダイナマイト!!!?

風よ吹け!!

.....

しまった!!!!

原作かえてしまった!!!!

ダイナマイトの火を全部消しちゃった…

……気付いてないよね…?

「くそー 風か!」

もう一度だ! 果てろ!!!」

「そう死に急ぐなよ」

………原作戻ったー!!!

何で戻ったのー!?

獄寺君が1度ダメでもあきらめない性格からか!?

あ、そういえば最初は風が吹けば

ダイナマイトはまつすぐ飛ばなかったなー

まあなんでもいいか……

「行くよ」

「あ…はい」

ツナ君は大丈夫だよね……?

後でメールしよう……

「もう帰るんですよね?」

「どこか行くかい?」

「へ?」

あれ?なんかおかしいな方向になった

「乗って」

「あ、はい」

結局、バイクで海まで行って

眺めて帰りました……

私が出て

やっぱり一番の異変は雲雀先輩だ……

わざと原作崩壊させる！

……ランボ登場だ…

あー…おもしろしちやった…

原作かわるけど

もういいや…ほっとけない…

「ツナ君の知り合い？」

「優!？」

「んー…おもしろしちやったんだねー

大丈夫だよ♪

泣かない♪ 泣かない♪」

よしよしー

「ぐすっ」

「いい子いい子♪」

さて…服どうしよう…

私の体操服でいいや

神様が予備もいっぱい用意してくれてるしね

「えっと、ランボ君だったかな？」

このままだったら気持ち悪いよね

トイレ行つて着替えよっか」

「ゆ、優！ オレがするからいいよー！」

「んー…でも授業さぼっても

私の方が怒られないと思うし大丈夫だよー

こういうのは女の子に任せなよー」

実際、私が授業抜けても怒られたことないし

雲雀先輩のおかげですね…

「ぐ、ぐめん!!」

「気にしない気にしない♪」

あー…絶対原作かわったなー

でも後悔はしないぞ!!!

結局その後ランボ君は寝てしまって

ツナ君に引き取られ帰って行った

「もーたままないよ!!」

母さんがランボをちゃんと見てないから

優に迷惑かけたじゃないか!」

「母さんに怒るのは

おかしいんじゃないのかしら……」

「優に迷惑かけたくなかったら

オレの知り合いの保育係を手配してやろーか?」

「え、まじで?」

「優に迷惑かけたくないんだろ?」

「リボーン……」

「あれ? ハルちゃんどうしたの?」

「はひ! 優ちゃんじゃないですかあ!」

「学校に用事?」

「新体操部の交流会ですー」

「そうなんだー」

あれ?泣き声?

「はひ! どうかしたんでしょうか?」

「んー行ってみよっか」

あれ？これって保育係決めるシーンだよ？

原作かえたのに戻ってるー

なんでだろ？まあいいか……

「なにやってるんですかー」

確かに、ぱっと見いじめにしか見えない……

あれ？なんか足元に……

「うわあああん」

ハルちゃんに行くんじゃない？

まあいいや

ほっとけないしー

「よしよしー」

ランボ君どうしたのー？」

あーでも原作通りハルちゃん怒ってる

とりあえず泣きやますほうがいいよね

見事な泣きっぷりだね……

泣きやまないや……

あ、なんか私とハルちゃんが保育係に向いてる

っていう流れになってる

あ……10年バズーカだ……

おお！大人ランボ登場！

あれ？大人ランボ私を見て固まった……

私なんかしたのかな？

「……………今……1人ですよ……？」

「へ？」

どういうこと？

「はひー誰ですかー！！」

「あ……お久しぶりです

親愛なる若きハルさん」

「キャアアアア

エロ！ヘンタイ！！」

うわ……ビンタいたそう……

あー…まだハルちゃんにいろいろ言われてる…
シヨック受けてるー

「ハル わかるぞー！」

おまえの言う事はもつともだ」

あー…獄寺君がいうと

いじめにしか見えない……

ダメだ……私にはほつとけない……

「ちよ、ちよつと!!」

待った!!!」

「なんだよ！ てめえ！」

「まあまあ落ち着いてー

いきなり知らない人に絡んだらダメだよー」
ん？あつてるよね？

私10年後のランボつて知らないことになつてるよね？

「ゆ…優さん……」

「はい？」

「うわあああー！」

え!?!なんで泣いたの!?!

………これつて…

抱きしめられながら泣いてますよね？

………

この場合どうしたらいいの!?!

「ランボー… 優になにしてるんだ!!」

おお…ツナ君が助けてくれた

とりあえず離れた……

「えつと…どういうこと？」

「優さん…あなたはいつも優しくして……

天使のような人だ!!!」

「はい？」

んー…どうやら10年後のランボ君に
慕われてみたいだ

「あの人がいなければ………」

あの人って何!?

「あの人って?」

あれ?聞いたら真っ青になった……

聞いちゃいけない質問だったのかな?

ボワン

あ、10年バズーカの効果も切れた

「? ツナ君どういうこと?」

「な、なんでもないよ!!」

すっごい気になる……

どういうことだろ………

考えてる間に

私に迷惑をかけたくなかったら

ツナ君が保育係になるっていうことになったみたい……

んー…あの人ってなんだろ………

ディーノさんに会いました

今日は久しぶりの買い物でいっぱい買った♪
ちよつと遅くなったなー
最近なんか忙しくて服買いに行きたくても
買えなかったんだよねー
まあ忙しい理由のほとんどは雲雀先輩だけどね！
私は家事もしてるから忙しいのに……
でも、明日の放課後に服買いに行きたいなあ
って小さな声で昨日いったから電話なかったなー
意外と優しいんだよねー
なんかキャラがおかしいとか
もう気にしなくなってきた
こつちが私の現実だしー

ん？家の前でなんかこけてる？

「大丈夫ですか？」

「つつつ……」

自分で自分の足ふんじまった……」

あれ？この人ってディーノさん？

こけてるってことは

…部下の人がいないのね

これはほつとけないな……

「怪我してませんか？」

「あ……ああ……」

「!？」

血が出てるじゃないですか!？」

「ほんとだ」

「ここ私の家なんですよー

治療しましよー」

「す、すまねえ」

普段なら家にあげないけど

デイーノさんだったら問題ないよねー

よし、完璧♪

「これで大丈夫ですか？」

「ああ 助かったよ」

うん

デイーノさんってやっぱイケメンですね。

「観光ですか？」

だって普通に日本人に見えないもん

「知り合いに会いに来たんだよ」

「へえ、そうなんですか？」

「部下と買い物しててその後別れたんだけど

それからどうしてもリボーンの家に着かなくて…

昨日泊ったんだけどなー……」

「ん？ リボーン君ですか？」

「知ってるのか？」

はい、知ってます！

というかりボーン君ともう会ってるのねー

また知らない間に原作が進んでるね

もういいけどー

「私の知ってるリボーン君だったらですが…

スーツ着た小さくてかわいい人ですけどねー」

男の子って言ったら悪い気がする…

呪いのせいなんだしー

「おしやぶりとかなかったか？」

「んーそういえば胸のあたりに大きいのが…

あつた気がします……

まあ、私はリボン君よりその家に住んでる
ツナ君の友達なんでリボン君のことは
そこまで詳しくないですけどねー」
私も持つてますよ

結構邪魔ですよ

「おおー ツナも知ってるのか!?
連れてってくれ!!」

「いいですよー」

そのかわり名前教えてもらってもいいですか?」

「ああ そういえばまだだったな

オレはキャバツローネファミリー

10代目ボス、ディーノだ」

いやいやいや…

マフィアの名前を言ったらまずいでしょ……

「キャバ……?」

「あー 気にしないでくれ

ディーノだ」

部下がいなかったら

ほんとに危ない人だね……

「えっと、ディーノさんですね

私は風早優といいますー

よろしくお願いします」

「おう、優

よろしくな!」

あれ? 初対面なのに下の名前?

獄寺君とか山本君のことなんていつてたかな?

雲雀先輩のことは恭弥っていつてたのは

覚えてるけど……まあいいかー

「んじゃ、行きますかー?」

「ああ!」

……目を離すたびにこけそうになる……

最初にあつたツナ君よりひどいような……

「そういえば、ツナの友達なんだよな？」

「そうですよー」

「こつちに引越して初めてできた友達です」

「そうか」

「これからもツナのことよろしくな！」

「おお！部下がいないのにちゃんと兄貴分だ！（笑）」

「もちろんですよー」

「大事な友達です！」

「ちゃんと守りますよー」

「そうか」

「こんな可愛い子と友達なんてツナやるなー」

「ふふ♪ ほめても何も出ませんよー」

「褒めるところは紳士だねー」

「リボン君の教育の賜物だね！」

「あー！ あそこですよー」

「悪かったなあ」

「今度お礼するぜ！」

「いいですよー」

「私はツナ君に会いに来たってことに」

「してくれたりいいですよ」

「だってマフィアのお礼って大げさな気がするもん」

ピンポーン

「優と……ディーノさん!?!」

「こんばんはー」

「よお」

「ど、どうしてー!?」

「んー私の家の前で困ってたからー」

こけてたのは黙つとこう

「ぶ…部下の人は？」

「それが買い物終わってから

別れたのはいいけど

どうしてもここに着かなくてな」

あ、ツナ君がガンって顔してるー

「それにしてもツナこんな可愛い子と

仲良いなんてやるなー!

彼女か!?!」

「なーー!!」

ナイスリアクション (笑)

「ディーノさん違いますよー

ツナ君の好きな子はもつと可愛い子ですよー」

「ゆ、優!

何言ってるんだよ!!!?」

「ごめんごめん♪」

もう言わないってー♪」

「なんだよー教えろよー」

「ダメです。ツナ君が困るから秘密です♪

じゃあ私はそろそろ帰るよー」

「優、一人で大丈夫?

もう遅いけど……」

「大丈夫だよー?

ツナ君は心配性だなー」

『ヴーヴーヴー……』

あれ?

「ツナ君ちよつと待ってねー」

雲雀先輩からだー

こんな時間にかかってくるのは初めてだなー

「もしもし？」

「こんな時間にどうしたんですか？」

『君いつまで出かけてるの』

「そろそろ帰りますよ？」

『今どこ』

「えっと、ツナ君の家の前ですよ？」

『はあ……むかえに行くからそこにいてて』

ブチッ

あ…断る前に切られた……

「優どうしたの？」

「んー雲雀先輩がむかえに行くからここにいろってー」

「ヒ、ヒバリさんが!？」

「うん、断る前に電話切られたし

多分すぐ来ると思うから

部屋に入ってた方が安全だと思うよ？」

「わわわわ！」

「ディーノさん急いで中に入りましょう！」

「お、おう？」

「優、ヒバリさんにお礼いってー！」

ふむ？・お礼？

「優、またなー」

「はあい。またー」

バイクで登場ですねー

「君、こんな時間まで何してたの？」

「へ？ 道に迷ってた人いてたから

「ここまで案内してただけですよー？」

「ふうん」

「なんかツナ君が雲雀先輩にお礼言つといてって頼まれたんですけど何でかわかります?」

あれ? 無視?

「早く乗って」

「あ、はい。」

あ! 雲雀先輩ご飯まだですか?」

「そうだよ」

「おー! ちようどよかった

今日はハンバーグですよ」

あ、ちよつと嬉しそう

わかりにくいけど………

この後、一緒にハンバーグを食べて

雲雀先輩はご機嫌で帰っていったー

そういえば私になんか用事じゃなかったのかな?

なんで電話したんだろ?

お見舞いです

『ブーブーブー……』

眠い………(怒)

今日休みなのに…

ゆっくり寝させてよ………

無視しよ

『ブーブーブー……』

あー!!うるさい!!

目が覚めてしまったじゃないか!?

「なんですか!!!」(怒)

『すいません』

草壁です』

えー

雲雀先輩じゃなかった!!!

「す、すみません…

雲雀先輩と思いました……」

『いえ、こちらこそ朝からすみません』

礼儀正しいなー

「どうかしたんですか?」

『委員長が今日入院しまして

お見舞いに来てほしいと伝言がありました』

「怪我でもしたんですか?」

『いいえ

風邪をこじらせたみたいで……』

あれ?そんな話あった?

ほんとに具合悪いのかも………

「どこの病院ですか?」

すぐ行きますよー」

『並盛中央病院です』

「わかりましたー

わざわざありがとうございます」

んー：風邪かー

ご飯の栄養バランス悪かったかなあ……

もうちよつとビタミン多いの作った方がいいかな？

結構大きな病院だなー

入院つてことは相当体調悪いのかな？

とりあえずお見舞いとして

フルーツもつてきたけど……

体調悪くて食べれないかも……

あ：部屋の番号知らないや

受付で聞かなきゃー

「すみません

今日入院した人のお見舞いなんです

が部屋番号聞くの忘れてしまつて……」

「お名前の方教えてもらえますか？」

「雲雀恭弥つていうんですけどー」

あれ？看護師さんが顔が真っ青になつた……

え……もしかしてそんなに具合悪いの!?

「そんなに……具合悪いんですか……?」

「い、いえ!!」

?…なんだろ?

「えつと、何号室ですか?」

「あ、案内させてもらいます!」

ん?…別にいいのにー

まあ迷子になるよりはいつかー

「こ、こちらになります

では…私は…これで……」

「あ、わざわざありがとうございます」

顔色悪そうだったけど

親切な人だったなー

コンコン

「失礼しまーす」

あれ？個室じゃないんだ

なんか雲雀先輩って個室とかのイメージなのに

それにしてもこの部屋の人

みんな真っ青な顔してるなー

体調悪そうな人ばかりだ

あ、入院してるんだから当たり前か…

「雲雀先輩、大丈夫ですか？」

あれ？寝てるー

んー…風邪っていったよねー

熱あるのかな？

んー…手で測ってみたけど熱はなさそう？

寝てる間に良くなったのかな？

確か…風邪ひいたりしたら

手を握ってあげたりしたら

安心するとかいうよねー

私は親がいなかったから知らないけど…

勝手に握ってもいいかな？

うーん…難しいところだ……

トントン

ん？肩叩かれた？

「なんですか？」

あ、同じ部屋の人みたいだ

なんで紙に書いてるのかな？

あー声が出ないのか

なにになにー？

『音をたてると咬み殺されますよ』

「大丈夫ですよー？」

あれ？なんかまた必死に書いてる

『他の人が何人も犠牲になってます』

「へ？そんなに簡単に起きないと思いますけど？」

…よしよし

「ほらね？」

あれ？なんか喜んでる？

まあいいかー

「あ、あのー！あなたはいつたい…」

あれ？

声出せるのになんで紙に？

「僕の眠りを邪魔するなんていい度胸だね」

あ、起き上った!!

風邪ひいてるのにダメでしょ!!

「雲雀先輩！」

「なに」

「風邪こじらせてるのに

無理しちやだめですよ！

寝てください!!」

「今、ゲームしてるんだよ」

「ゲーム？」

「僕が寝てる間に音をたてたら

咬み殺すつていうゲーム」

あれ？このセリフどつかで…

まあいいや……

「ゲームでもダメです！

風邪ひいてる人は

大人しく寝ててください!!」

「はぁ…わかったよ」

「全く!」

心配してる方の身にもなってください」

「ワオ、心配してるのかい?」

「当たり前です」

心配しない理由がないです!

雲雀先輩が風邪こじらせたって聞いた時

びっくりしたんですよー!!

料理の栄養悪かったかなとか…

いろいろ考えたんですよー!!」

あれ? 黙った?

「そのリンゴ食べたい」

「あ、はい」

あれ? 包丁……

「そこにあるよ」

「あ! ありがとうございます!!」

「はい。どうぞー」

「食べさせて」

意外だー

こういうこと言うんだー

やっぱり風邪ひいて弱ってるんだよね……

「はい

あーん……」

うわー…かわいい……

ん? まだいるみたい

「あーん……」

うわーすごいかわいい……
もう、いらないうつぽいかな？

「雲雀先輩」

「なに」

「あんまり無理しないでくださいね？」

「……わかった」

結局、次の日には退院するって聞いたため

今日は一日中看病しました

そういえば：帰る時に：

看護婦さんが困った患者さんがいるって話してたね

地下の部屋に案内したら静かになったとか……

まあ私には関係ないよねー

嵐と話してみる

うーん…気がつけば冬休み終わったなー

雲雀先輩とはほぼ毎日あってるんだけどね

まさか年越しまで一緒に過ごすとは思ってなかったけど

1人じゃなくて嬉しかったけどね

前の世界だったら考えれなかったなー

でも雲雀先輩の家族は良かったのかな？

まあ、雲雀先輩だからいいんだろう……

今日は食材買いに行つてご飯作らないとー

今日は食べにくるのかな？雲雀先輩

食べに来る時はいつてほしいんだけどねー

いつも2人分作つて来ない時余るんだよね…

まあちよつとアレンジして

次の日の弁当や朝ご飯にするんだけどね

つてあれ？

公園のブランコで獄寺君が一人つて変なのー

「獄寺君どうしたの？ ツナ君は？」

「なんだよ……」

あれ？いつもよりケンカ腰じゃない？

「なんかあったの？」

「暇な私が聞いてあげるよー」

無視されちゃった？

「……お前つてオレが来る前から

10代目と知り合いなんだよな」

「10代目？ ああツナ君のことねー
そうだねー

ほんのちよつとだけだけどね」

「オレって10代目の右腕にふさわしくないよな……」

「さあ？ どうだろう？」

「……そうだよな」

「私から見たらツナ君は右腕とか関係なく

獄寺君のこと大切な友達とは思ってる

っていうのはわかるよ？」

「……」

「ツナ君、獄寺君達が一緒にいるようになって

毎日楽しそうだしー

なんで落ち込んでるかはわからないけど

獄寺君がいなかったらツナ君寂しいと思うよ？」

「そ、そうだよな!!」

「そうだよー

ツナ君の友達歴の先輩が

言うんだから間違いない!! (笑)」

「なにを!？」

お前よりオレの方が10代目のこと

わかってるぞ!!」

「ふふ♪

元気になったみたいだねー」

「な……!？」

「なんで落ち込んだかは知らないけど

獄寺君が元気なかったら

ツナ君は心配すると思うよ？」

よしよしー

「な!? 何するんだよ!!」

「こういうときは素直になるべきだよー

それで、また明日から私にケンカ腰に

話しかけたらいいんだよー♪」

「お前変わってるな」

「そうかもねー」

「そこは違うっていうんじゃないのか？」

「みんな変わってるから面白いんだよー」

例えば、みんな山本君ばかりの性格だったら

どう思う？」

「……………」

「でしょ？」

だから変わってていいんだよ♪」

「そうか」

「うん！ 元気出たみたいだし」

私は買い物に行くよー」

「ああ

風早、サンキュ」

「ふふ♪ はじめて名前呼んだねー

これからもそれでよろしくー♪

じゃ、またねー」

その後、獄寺が

「ヒバリが気に入ってる理由少しはわかったかも……………」

と小さな声で呟いた

ってあれ？

獄寺君とさつき別れたばかりなのに

スーパ―で見かけたんだけど…

まあ話してないけどね

完璧に元気になってたみたいだね

良かった良かった♪

授業参観

今日は授業参観だなー

そういえば原作がなんかすごかったことしか覚えてない……どんな話だったかな？

まあ、いいやー

「ツナ君ー！」

「ん？ どうしたの？」

「今日授業参観だねー」

「そうだね……」

「どうかしたの？」

「いつも母さんに来るなって言ってるんだけど

結局来てオレの態度を見て帰ると怒られるんだよなあ……」

「んーでも来てくれるっていいことじゃないの？」

「そんなことないよ！

恥ずかしいし！」

「私は親がいないからうらやましいけどなー」

「!?」

「……ごめん!!」

「あ！ こつちこそごめんー

今から一緒に数学の予習する？」

「ほ、ほんとに!?!」

「うん！ お母さんにいいとこ見せようよー！」

「問4 沢田」

あー！ツナ君当たった！

頑張れ!!!

「えつと、3です……」

「正解だ!!」

おーやった!!

あ、ツナ君嬉しそうにこっち向いてくれた♪

「はーい!! 100万兆です」

「あれ? ランボ君だー」

「優! 遊んでー」

「んー今授業中だから一緒に受ける?」

お姉ちゃんのお膝においでー」

「うん!」

「優! いいよ!」

母さんに見てもらおうから!!」

「大丈夫♪」

「この方がランボ君大人しいと思うしー」

イーピンちゃんは大人しいんだけどね

ランボ君はそういう訳にはいかないからね

「でも……」

「隼人、見に来たわよ」

「うがつ! ふげーっ!!」

あ…獄寺君ご愁傷様……

んー全く話思い出せないや……

「はい注目ー」

オレが代理教師のリボ山だ」

あれ? リボーン君だ!

黒板にいつぱいなんか書いてるー

「まずはこれわかる奴」

普通の中学生は解けない問題だよね?

だって私でもどこかで見たから答えられるレベルだし…

「ちなみにこの問題を解いた奴は

いいマフィアの就職口を紹介するぞ」

ボンゴレのことだよねー

うわ! 怖っ!

チョコレート粉砕だ!!

「どーだ

答わかる奴いねーのか?」

あ、ランボ君そわそわしだした……

このままだったら暴れそうだなー

んーそうだ!

「ランボ君ー」

「?」

「お姉ちゃんいいこと教えてあげるー

手をあげて『るーと5』って元気よく

言えたらお姉ちゃんからご褒美あるよー」

「ごほうびー!?!」

お!目がキラキラしてる

「そうだよー

『るーと5』だよ」

ランボ君かわいいなー

『ヴーヴーヴー……』

ん?電話?

まあいいやー

「はいはいー! るーと5」

あれ?リボーン君舌打ちしてる?

「ランボ君すごいねー」

「風早優! 答えたな!

マフィアの就職口紹介するぞ!」

「先生何言ってるんです?」

答えたのはランボ君ですよ?」

あれ?リボーン君黙っちゃった

「ランボ君ご褒美あげるよー」

ガラッ

あ、先生帰ってきたかな?

「じゃじゃーん!! 飴だよ♪」

ポケットに飴あつてよかったー

「わーい」

ん？誰かこつちに来る？
なんだろう？

「君、僕を無視するなんていい度胸だね」

あれ？

顔をあげたら雲雀先輩だ

「へ？ 雲雀先輩？」

どうかしたんですか？」

「行くよ」

「んーでも今ランボ君みてるんでー」

ギロツ

「うわあああ！」

「あ、雲雀先輩！」

ランボ君泣かさないでくださいよー

ランボ君ごめんねー

よしよしー」

ぐい！

「うわわわわ！」

急に雲雀先輩引つ張らないでくださいよー

ランボ君大丈夫？」

「グスツ」

「優！ オレがみとくから!!!」

「え!?! でもツナ君に悪いよー」

「い、いいから!!!」

なんかツナ君必死だなー

「うん？ わかったー」

で、雲雀先輩どうかしたんですか？」

あれ？顔見たらなんか機嫌悪そう

「行くよ」

「あ、はい

ツナ君ランボ君のことお願いねー」

「う、うん！」

「雲雀先輩どうかしたんですか？」

「なんかあつたんですか？」

「あれ？返事ない？」

「私なんか雲雀先輩が怒るようなことしました？」

「はあ…なんでもないよ」

「ふむ？」

「あれ？なんか爆発音聞こえたけど…」

「多分ランボ君が暴れたんだろうなー」

「やっぱ私が見てた方が良かったと思うんだけど…」

「雲雀先輩には聞こえなかったみたいだね」

「まあ微かな音しか聞こえなかったしねー」

「学校が傷ついたら教室にいるみんなが」

「咬み殺されちゃうし良かったー♪」

「んー屋上つてことは膝枕つてことだねー」

「原作では雲雀先輩も暴れたのかな？」

バレンタイン

そういえば明後日ってバレンタインデーだ！

…すっかり忘れてた…

原作ってバレンタインとかしてたかな？

全く覚えてないや…

とりあえず誰にあげよう…

雲雀先輩は渡すよねー

ツナ君は当然だしー山本君もだよねー

最近ちよつと仲良く？なった獄寺君もだし

あーいろんな意味でお世話になってる

草壁さんにも渡さないと…

リボン君はどうしょ？

一応あげたほうがいいかー

ランボ君もあげよっかな？喜びそうだしね

イーピンちゃんにもあげるよねー

友チヨコとして

京子ちゃんと花とハルちゃんにも渡したいー

あ、大事なこと忘れてた

神様にもいるね…あれ？渡せるのかな？

まあ準備しとこう

って一体何人にあげるんだ!?

でも手作りであげたいしー

今日買い物いって準備しないと…

とりあえず15人分は用意しとこ…

さて…何作ろう…

15人分と考えるとケーキは大変だね…

生ものは学校に持って行けないしね

つてことは焼き菓子かあ

時間のことを考えるとー

オーブンの回転率がいい
クッキーやマドレーヌがいいか……

結局、マドレーヌ1個と

クッキー5枚をセットにして

1番お世話？ になつてる雲雀先輩には

プラスとしてチョコキャラメルも入れることにした

京子ちゃんに聞いたら

当日にハルちゃんと一緒に

ツナ君の家で作るっていつてたから

みんなの分は持っていけばいいよね

んーそういう原作あったかな……？

覚えてないや……

〜当日〜

えつと……まず……ここだよねー

なんか呼び出しじゃないのに

この部屋をノックするのはじめてかも……

コンコン……

「どうぞ」

「失礼しまーす」

あれ？ 雲雀先輩いない……

「おはようございます。草壁さん」

「おはようございます。風早さん

委員長は今見回りです」

あれ？ 私聞いてないのに答えてくれたー

まあいいや

「そうですか……すれ違いかぁー……」

「どうかしたのですか？」

「今日バレンタインだから

持ってきたんですけどねー」

「お預かりしましょうか？」

「んー…直接渡した方が

いいかなって思うんですねー」

「それもそうですね……」

「まあ雲雀先輩は後でいいやー

先に草壁さんどうぞー」

「え!? 私にですか？」

「はい！ いつもお世話になってるお礼です!!」

「ありがとうございます」

「いえいえー♪」

んーまた来ますねー？」

「はい。委員長に伝えておきます」

「大丈夫ですよー

用事がなくても偶然良く会うんでー」

「そうですねか

わかりました」

「では、失礼しました」

んー…なんか拍子抜け……

ちよつと気合い入れてきたのに

とりあえず他のみんなにも配ろうー

あれ？放課後になっちゃった…

学校で渡すつもりの人には渡したんだけど…

雲雀先輩にあつてないなー

いつも絶対会うのにー…でも、ハルちゃんとすれ違いになつたら嫌だから先にツナ君の家に行こう

ピンポーン

「ちやおツス」

「あれ？ 今日はりポーン君がお出迎え？」

「ああ 今はツナが頑張つて走ってるからな」

「？ よくわからないけど」

ツナ君頑張ってるんだねー

そうそうバレンタインのチョコだよー」

「サンキューな」

「他のみんなにもあげたいからあがっていいかな？」

「おう！ あがってけ！」

「ありがとー」

ハルちゃんと、イーピンちゃんに渡して

ランボ君はいなかったから

イーピンちゃんに頼んだんだけど

潤んだ目で見てる子が……

「えっと…はじめまして…」

ツナ君のお知り合い？」

この子ってランキングのフウ太君だよね？

「はじめまして！ フウ太っていうんだ」

可愛い子だねー

「私は風早優っていうんだよー

そうだ！ チョコ作りすぎたから良かったら

もらってくれない？」

「ほんとにー!!!」

うわー…すっごい嬉しそうな顔だ

「はい。どうぞー」

「わーい♪」

んー…ランキングの1位の名前を
わからなくしてごめんよ…

すごい罪悪感が出てきた…

「さてもう帰るねー」

「はひー！ もう帰っちゃうんですか？

食べていってくださいよー」

「そうだよー」

食べていってよー」

「そうしたいんだけど…」

一番渡さないといけない人に渡せてないから…」

「はひー！ それは大変ですー！

本命チョコはあげないといけないです!!」

あれ？本命じゃないけど…

まあいつか…

「まあ、今日は帰るねー

またねー♪」

んー…雲雀先輩ってどこにいるのかな？

やっぱりもう一度学校に行こう

応接室は閉まってたし屋上もないな…

今日は無理かなー…

結局、家に帰ってきてしまった…

晩御飯食べにくるかもしれないし…

先に神様に渡そうー

神様ー!!

『呼んだか?』

忙しいのにごめんなさい!

バレンタインのチョコ作ったんだけど

渡せるかな?

『おう、ありがとなー!』

そこの机のチョコでいいのか?』

そうですー

おお!消えた!

『ありがとなー

わりの忙しいからまたなー』

はあい

お仕事頑張つてー

神様も大変だな……………

来ない!!

なんで今日に限って来ないの!?

後数時間で今日が終わっちゃうな……………

せつかく作つたし…

電話してみようかな……………

……………あれ?

なんか緊張してるかも……………?

初めて電話するわけじゃないのに……………

すうーはあー……………

深呼吸……………深呼吸……………

あれ?なんかデジャヴ?

まあいいや

よし！かけよう

プルルル……

………出ない!?

今までそんなことなかったのに……

あー…渡せないのかなあ…

こんなことなら草壁さんに

預かってもらったらよかった……

はあ………

『ヴーヴ 「はい!! もしもし!!」

『ワオ! 出るの早いね』

「えっと、待ってたんです!」

『なにかようかい?』

「えっと、あの…会いたいです!!」

あれ? 私なんかすごいこと言ったような……

『待ってて』

プチッ

………

今…私なんて言った………?

………／／／／／／／／

うわ! どうしよう!

なんか今更恥ずかしいから

会いたくないとか言えないし……

ど…どうしょ………／／／／

ガチャ

あ…ドア開いた……

うわー…チャイムならしてよー

心の準備が……

「どうかしたのかい？」

「あ…あの……

たいした用事じゃないんですけど……」

うわー…雲雀先輩があやしい目で見てる……

「その…今日中に渡したくて……」

「何を」

「………チョコ……

……バレンタインの……／／／／

………

返事がない…

チョコ嫌いだったとか!?

うう…なんか泣きそう……

「………ちようだい」

「………へ?」

もらってくれるんですか……?」

「いいよ」

「…ありがとうございます……」

……／／／

よかった…

もらってくれた……

「今日は忙しいから帰るよ

また明日」

「あ…忙しいのにすみません……」

「君の頼みだったら別にいいよ」

「あ……はい……」

今日はありがとうございました」

「僕がいう言葉な気がするけどね」

「……もらってくれて嬉しかったから……」

あ！ なんでもないです!!

忙しいんですよ!!

ごめんなさい!! また明日!!」

なんで……こんなに嬉しかったんだろう……? ?

その日……顔が赤い雲雀先輩を

目撃した人がいたとかいないとか……

10年バズーカ

今日は珍しく暇だねー♪

呼び出しがないしね（笑）

まあ今のところだけだねー

ツナ君の家に行こうかなー

ツナ君の家近くでハルちゃん発見だー

「ハルちゃん

こんにちは」

「はひー！ 優ちゃんじゃないですかー

ツナさんに用事ですかー？」

「用事はないんだけどねー

ランボ君とイーピンちゃんと遊ぼうかな？

って思ってたねー

ハルちゃんはツナ君に用事？」

「イーピンちゃんに私のお古を

持ってきたんですよ」

「そうなんだー」

私はお古ないからなー…

役に立たないね

「優ちゃんその袋はもしかして…」

「あ、お土産にケーキ持ってきたんだー

いっぱい買ってきたから

ハルちゃんの分もあるよー」

だってツナ君の家って

いつもいっぱい人がいるんだもん（笑）

「本当ですか!？」

「うん♪

いろいろあるから後で食べようね」

「ハル感動ですー」

そこまで感動するとは思わなかったけどね（笑）

ハルちゃん…

普通にあがっていくんだね…

玄関で待たないんだね…

まあそういう私も勝手に

冷蔵庫にキーキ入れるんだけどね（笑）

「おじゃましまーす」

「ハル!! 優!!」

あれ？花がいるねー

珍しいね

「昨日話したとおリーピンちゃんに

私のお古持ってきたんですよ」

「私はただの暇つぶし♪」

「ほらっ

やーっぱつきあってんじやん」

これはハルちゃんにたいしてだねー

というか完全にからかつてるだけだけどね（笑）

「ちっちがうよ」

「よく来たね」

今日のリボン君はお父さんキャラなのね

「こんにちは♪」

「優!! 遊んでー」

「ランボ! ○△□」

「今日も2人とも元気だね」

「優、ハル」

「どうしたの?」

「どうしたんですか?」

「こいつしっしっって言うから

しっしっババアなんだよ!!」

「ランボちゃん……」

私はノーコメントで……

ゴンッ

「ぐぴゃっ」

「こーゆーガキはビシツとやらなきや

わからないの」

……それはひどいと思う……

「うわああああ」

「花……ランボ君は

ちゃんと話したらわかってくれるよ……?」

「私子どもすっごいダメなの」

そういう問題なの……?」

あ、10年後のランボ君になるみたい

ガンッ

なんか……嫌な予感が……1階に避難しよう……

2階がなんかすごいことになってそう（笑）

だって音が凄いんだもん

「ちやおツス」

あ、リボン君が普通に戻ってるね

「何してるんだ?」

途中で避難したのばれてたみたい（笑）

「ランボ君が泣いちゃったからね

お土産を持ってきてたからねー

見せると元気出るかなって?」

素晴らしいいいわけだね（笑）

「勝手にお茶の準備したんだけど……

ダメだったかな？」

「問題ねえぞ」

「そっか♪ 良かった♪」

あ、リボン君に聞きたいことあったんだけど…

わからなかったらいいんだけどねー」

絶対知ってるけどね

「なんだ？」

「この前さー」

男の人が私の名前知ってて

ツナ君がランボって呼んでたんだけど

あの人って誰か知らない？」

「どうして知りてえんだ」

う…簡単には教えてくれないね…

「あの人っていうのがずっと気になって…

会えたら聞きたいなって思ってたね」

「なるほどな

あれはあほ牛のランボだぞ」

あ、教えてくれたー

「へ？ ランボ君？」

「ああ

10年バズーカっていつてな

5分だけ10年後の自分と入れ替わるんだぞ」

「なんかすごいバズーカだねー

じゃあ…あれは10年後のランボ君？」

「そうだぞ」

「そっか…

じゃあ簡単には聞けないねー

諦めるよー」

これで10年後のランボ君に聞いても問題ないねー♪

「そうか」

「うん

リボン君ありがとうね♪」

「問題ねえぞ」

「あ、リボン君はここで食べる？」

「ああ

ランボがウゼーからな」

……………ここにもいてた…

「じゃあ先に好きなケーキ選んでー

残り持っていくね？」

「サンキューな」

……………

さて…どういう状況かな？

ランボ君らしき子が泣いてるね

どうやら花は帰ったみたいだね

せっかくお茶入れたんだけどねー

まあしようがないね

「えっと…ツナ君どういう状況？」

「あ…いや…………」

また困ることを聞いちやったみたいだね

とりあえず泣きやまずべきだよねー

よしよしー

「優さん…………」

うわああああ!!」

更に泣いちゃいました (笑)

ぎゅ

よしよしー

「なんかランボ君が大人っぽいね

10年バズーカの効果？」

「ゆ、優それをどこで…………」

「リボン君に聞いたよ?」

「そ、そっか」

「はひ! なんのことですかー!?」

「な、なんでもないよ!!」

ツナ君は黙っておきたいみたいだね

話を換えようー

「お土産もってきたから食べてほしいなー

せっかくお茶いれたからね

冷めないうちに食べて?」

「はひ! ありがとうございます!!」

「ゆ、優ありがと……」

これはお土産のことなのかな?

それとも話を変えたこと?

まあどっちでもいいか……

結局帰る時もまだ泣いていました……

聞けるタイミングなかったし……

ずっと抱いてて流石に疲れたよ……

偶然という名の必然

明日のご飯なにしようかなー

毎日のご飯って考えるの大変だよねー

ん？

なんか落ちた？

「すみませーん！ 落ちましたよー」

あれ？聞こえてない

とりあえず拾うかー

小さい箱??

あ、箱あいちやった……

「すみませーん!!」

「え？ 私ですか?」

「そうですよー」

「これ落ちましたよー」

「ありがとう」

「でも……拾ったときに箱が空いちやって……

ごめんなさい……」

あれ？返事がない？

「もしかして……壊れちゃいました?」

あれ？顔みたら見たことあるような……

「そう……あなたが……」

ん？

「これはあなたが持つておくものよ」

「え?」

「私にはあなたの未来は全くわからないけど

これを持つていると少しは力になるはずだわ」

「はい?」

「いい? 肌身離さず持つてるのよ」

「はあ……?」

「ボス、どうかしました?」

「急がないと間に合いませんよ」

「あれ?この人って……」

「若いけど……そうだよね……?」

「ごめんなさい。今行くわ」

「これから大変だと思っただけで頑張ってるね」

「え!? ちょっと!」

「あー……いつちやった……」

「これなんだろう?」

「……これって……」

「神様……」

『どうかしたのか?』

「んー……これどう思う?」

『おい……これって……』

「だよねー」

「本物だよねー」

『優! これどうしたんだ!?!』

「うーん……道を歩いてたらもらった」

『はあ?』

「私が持つべきものって言われてさー」

『そうか……』

「たまたま道に歩いてただけなんだけどねー」

「やっぱりこれも運命なのかな?」

『……そうかもな……』

「まあ、持つとくよー」

『おう！ その方がいいと思うぞ
うん。』

忙しいときにごめんねー

『いや、いや、ごぞ』

じゃあまたな』

またねー

桜の涙

一年って過ぎるのはやいよねー
もう春だよー

私こっちに来て一年たったなあ
ドタバタ過ぎて時間たつのはやいな……

『ヴーヴーヴー……』

ん？電話？

「もしもし？」

『今から行くから外で待ってて
ブチッ

外で待っててってことは
どこかでかけるのかな？

「やあ」

「おはようございます

どこか行くんですか？」

「乗って」

やっぱりどこか行くのかー

着いた！

あ…もしかして……

「花見ですか？」

「そうだよ」

あーもうそんな時期か……

「いくよ」

「あ、はい」

「きれい……」

あ、あまりにきれいで声が出ちゃった
でも、この花見って確か……

桜クラ病に雲雀先輩かかるんだっけ……

そのせいで黒曜編でボロボロになるんだよね……

でも、雲雀先輩が倒されないと

ツナ君が強くないし……

……

雲雀先輩が怪我するの……やだな……

「ねえ、なに泣いてるの？」

「へ？」

あれ？私泣いてる？

「あまりにもきれいで感動しちゃってー」

あ……この嘘ばれた……

雲雀先輩困った顔してる……

……

どうしよ……

何て言ったらいいかわかんない……

あ……なんか向こうから声が聞こえるな……

多分……ツナ君達か……

「雲雀先輩、むこうで何かあったんですかね？」

「……見てくるよ」

「私もすぐ行きますねー」

はあ……落ち着け……

とりあえず涙ふこう……

ゴシゴシ……

よし！行こう!!!

「弱虫は土にかえれよ」

「！ 仲間を」

「今、僕は邪魔されて機嫌が悪いんだ」

ふう追いついたー

やっぱりさっきのはツナ君かー

「あれ？ ツナ君？」

「優!?!」

「いやー！ 絶景！ 絶景！

花見つてのはいいねー♪」

あ、この人!?!忘れてた……………

超危険人物!!! Drシヤマル!!

逃げないと!!!!!!

「お♪ 君かわいいねー

ちゅーしてあげるくくく」

うわー！ー思ってたより動きはやい!!

「け、けっこうです!!!」

「そんなこと言わずに……………のへー！ー!」

た…助かった……………

「大丈夫かい？」

「あ…ありがと……………」

あ…今ので病気がかったんじやないのかな…

…なんか…泣きそう……………

結局原作通りにツナ君達と戦って
最後に雲雀先輩が膝をついた

…やっぱり桜クラ病にかかったんだ…
心配で一緒に帰っていったけど…

私が元気ないって
ずっと雲雀先輩が気にしてたな……

くその夜く

『大丈夫か?』

あ…神様……

未来知ってるって辛いね……

『そうだな…』

うん……

『あー……前に優に言ったんだが

その言葉取り消す』

……なに?

『前に優に原作の流れに戻した方がいい

って聞かれた時、そうだなって答えたけど

それを取り消す』

なんで?

『もう、優がこの世界に来てる時点で

原作なんて関係ないんだよ』

そうだけど…

神様も困るでしょ?

『ちやんとやっておけば良かったな……

俺は別にこの世界についてる神様ではない

優についてる神様だ』

?

『つまり、俺は原作はどうでもいい

優のすることに全力でサポートするだけだ』

でも……

『でもじゃない

もし原作が変わって問題が起きても
俺は優の味方だ』

……

『優が思ったことをしたらいいんだよ
って言っても優のことだから
いろいろ考えerと思うがな……』

……

『もう一度言う。優がしたいことをすればいい
優が原作を壊してもいいし、
そのまま傍観しても俺はお前の味方だ』

……神様……ありがとう……

『まあ、ゆっくり考えたらいいさ』
……うん……

『あ、それと遅くなったが頼まれた服
用意したから、ばれたくなさそうだったから
超直感でもわからないようにしたからな
クローゼットに入れてるから』
あ、ありがとう……

『今日はもう休め』

『明日も雲雀を心配させるぞ?』

そ、そうだね……

『ああ。ゆっくり寝ろよ』

おやすみ』

神様……ありがとう……

その後少し泣いてから

神様の言われた通りちゃんと寝た……

いつの間にか夏になりました

神様に言われてから

ずっと考えてるけど答えが出ない

どうしたらいいかわからないけど

みんなを心配させるのは嫌だと思って

毎日楽しく過ごしてる

2年になって

やっぱりツナ君と同じクラスになった

嘆き弾は……

あれは卑怯な気がする…（笑）

このクラスが大丈夫か心配になった

あれから雲雀先輩も

よくどこかへ連れてつてくれる

やっぱり心配させたからかな？

でも、なにも聞いてこなくて

正直ほっとしてる

雲雀先輩に聞かれたら

もう隠せる自信がちよつとないんだよね……

っていつても……

なにをどう言えばいいか自分でもわからないから

結局答えられないかもしれない

そんなことしてる間に

もう夏になってしまった……

……夏!?!どうしよう……

さて……困った……

プールなんて無理だよねー

おしやぶりあるしね

去年はすっかり忘れててどうしようと思ってたたら

偶然雲雀先輩の呼び出しが入って
ラッキーだったんだよねー

今年はそんな偶然ないだろうな……

うーん…外せとか言われても困るしねー
というか離れないよ

しょうがない…

体調不良とか言って休もう……

いやあ人生初めての経験だね

自分の意思で学校サボるなんてねー

そろそろ授業始まる時間だね

今日は1日中掃除でもしようかなー

「体調不良じゃないみたいだね」

………

えっと…聞きなれた声が……

チラッ

うん！やっぱりそうだった！

いつの間に私の家に入ったんだらうねー

カギ持ってるってずるいよねー

………

学校サボろうとしたのばれちゃったね♪

|| 咬み殺されるね！ (泣)

「何してるの」

怒ってるね……

「学校行かないといけないのは

わかってるんですよ……

でも…水泳の授業受けたくなくて……」

「泳げないんだ」

「あ、泳げますよ？」

どっちかというと得意です」

「？」

まあ矛盾してるよねー

「…水着…着たくないんです…」

うん！間違ってる！

「はあ…」

溜息つかれちゃったよ（笑）

「……そういえば肌を出すの嫌いだったね」

あ、そういえばずっと体育とかで上着きてて聞かれたことあってそう答えたね

「はい…水着が嫌なんです」

「学校行くよ」

う……（泣）

「嫌です…」

咬み殺されてもいいもん…（泣）

「今回サボったとしても次はどうするの」

「補習もサボります…」

上着着て泳いでいいんだったら…

出ますけど…」

「はあ…」

雲雀先輩にはわかってほしいけど…

無理なのかなあ…

「……雲雀先輩」

「なに」

「本当は…」

肌を出すのが嫌いじゃないんですよ…」

「……どういうこと」

「だって…」

半袖の制服とかは大丈夫ですもん…」

「……そういえばそうだね」

「見られたくないのがあるんです…」

制服は見えないんです…

体操服は…上着着ないと見えるんです…

水着も見えちゃうんです……」

「……………」

「……誰かに着替えるところを
見られるのも嫌なんです…」

「いつもこつそり着替えてます……」

「……………」

「……どうしても水泳の授業を

受けないといけませんか？」

「学校行くよ」

「…ダメだったみたい…」

「わかってほしかったなあ……」

「今日は風紀委員の書類してね

それで水泳の授業は免除するよ」

「……ひばりせんぱあい……」

「……なに泣いてるの」

「ゴシゴシ……」

「……すみません」

「わかってくれたのが…嬉しくて……」

「そう」

「はいー」

「準備してすぐ行きます!!」

「雲雀先輩は先に学校行っていいですよ？」

「待ってるよ」

「そうなんですか？」

「じゃあ急ぎます!!」

雲雀先輩…わかってくれたなあ……

話聞かずに咬み殺されると思ったんだけどねー
本当に嬉しかったなあ……

夏祭り

あ、また電話だー

「もしもし?」

『夏祭り行くから外で待ってて』

「あ、はい」

そういえば、いつの間にか

行く場所教えてもらえるようになったなー

「やあ」

「こんにちはー」

「行くよ」

「なにしてるんですか?」

「風紀委員の仕事でね

活動費集めてるのさ」

あーシャバ代ね……

「風紀委員の仕事あるんだったら

私1人でウロウロしときますよ?」

「行くよ」

あ、一緒に行くのね

あーそれにしても……

すごいね…みんな5万払うんだ……

まあ払わないと屋台潰されるからねー

それにしても雲雀先輩が通ろうとすると

みんな避けて行くのが面白いよねー

群れると咬み殺されるって知ってるんだらうね (笑)

あ、かき氷…おいしそう……

「食べるかい？」

あれ？私何も言っていないよね？

「へ？」

「なに味？」

「イチゴです」

「そう」

「あ、お金持ってますよー」

っってもう払ってるし……

「ありがとうございます」

それにしても……

なんでかき氷食べたいってわかったんだろ？

「食べたそうな顔してるから」

え？なににも言っていないんだけど？

「君、顔に出てるよ」

「えええ!？」

あ…笑った……／／

「雲雀先輩」

「なに」

「いやあ…さつきから

おごってもらってるんですけど

私お金持ってますよ？」

わたがしとか…たこ焼きとか…

いっぱい買ってくれたんだよね……

「僕が払いたいから払うの」

んー…こういう言い方したら

多分お金払わしてくれないだろうなー

「じゃあ、もっとご飯美味しくなるように

頑張りますね！」

「楽しみにしてるよ」

「5万」

「ヒバリさんー!!？」

「優も!？」

「こんばんはー」

「てめー何しに来やがった!」

「まさか」

「シャバ代って風紀委員にー!？」

「活動費だよ」

「払えないなら」

「屋台をつぶす」

「うん、脅迫だね!」

「ツナ君ちゃんと5万払ってるー」

「たしかに」

「ツナ君ー」

「ゆ、優どうしたの?」

「私にチョコバナナくださいーい♪」

「あ、うん」

「あ! 雲雀先輩ここは自分で払いますよー」

「なんで」

「友達の店ですからー」

「ヤダ」

「……………ダメだこりや…」

「優お待たせ!」

「ありがとうー」

「ん」

「ええええ!？」

「ヒバリさんが払うのー!？」

「だって払わせてくれないんだもん」

「行くよ」

「あ、はい！」

ツナ君お店頑張ってるねー!!」

それにしても浴衣いいなー

「なに」

「へ？」

「なに思ってたの」

「いやあ浴衣が似合う子が

いっぱいいていいなーって思いましたー」

「着ればいいよ」

「浴衣もダメなんですよね」

おしゃぶり隠せなくなっちゃうからねー

「……………そう」

「はい

それに自分で着れないですしねー」

「……………それ僕にも話せないの？」

あ……………どうしよう……………

「……………何でもないよ」

あ……………

「あのー！」

「なに」

「話す勇気を持てるようになった時は……………

1番最初は雲雀先輩に言いたいです！」

「わかった」

あ……………目を合わせて……………返事してくれた……………

あれ？雲雀先輩どうかしたのかな？

あ、向こうが騒がしいのかー

「君、その風紀委員と一緒にいてて」

私は留守番なのね

それもそうかー

強い知らないもんね

「君、頼んだよ」

「はい！ 委員長!!」

「えっと、よろしくお願いします」

あー…多分咬み殺しにいったんだよね

ツナ君もいてるみたいだ

みんな怪我しないでねー

「待たせたね」

「いえ、大丈夫ですよ?」

すごい…怪我ひとつもしてない…

「行くよ」

「あれ? もう全部回ったんじゃないんですか?」

んー…歩いていくし

着いていくしかないかー

あれ? 止まった?

雲雀先輩座ったし

これは横に座れってことかな?

「どうかしたんですか?」

あれ？答えてくれない

ヒュー……ドーン！

「あ……花火……」

そっかあ

花火がよく見えるところに

連れてつてくれたのか

「きれいですね」

「そうだね」

この日見た花火は忘れないだろう

救出 (黒曜編)

んー今週の土日は

1度も雲雀先輩から連絡なかったなー
こんなことすつごい久しぶりだ

ツナ君とりボーン君発見♪

「おはよ!!」

「優、おはよー」

「ちやおツス」

「登校中に会うの初めてだね!」

「そういえばそうだね!

あ、風紀委員だ!!

あそこにも……!」

「そりやあんな事件が多発してるんだ
ぴりぴりもするぞ」

「やっぱり不良同士のケンカかな……」

「え!?!」

「あ、優は知らないんだ

この土日で並盛中の風紀委員が
やられたんだって」

………黒曜編はじまった………

「優?」

「あ……」

「大丈夫だよ」

「ヒバリさん!!」

「……おはようございます

雲雀先輩」

「ちやおツス」

「身に覚えのないイタズラだよ……
もちろんふりかかる火の粉は

「元から絶つけどね」

「やっぱヒバリさんこえーっ」

「心配しなくていいよ」

「う……………うん……………」

あ…雲雀先輩の着うただ

やっぱり京子ちゃんのお兄ちゃんが

やられたって言った……………

「……………君」

「どうしたんですか?」

今、躊躇したよね?

「僕がいろいろ言うまで家にいててね」

「へ?」

なんでだろ?

「念のためだよ」

じゃあね」

「え……………」

……………どういう意味だろ……………

「なるほどな」

「へ? リボン君は今の意味わかったの?」

「ああ」

優は家で大人しくしとけよ」

あ、ツナ君を追いかけて行った……………

というか…教えてくれないの!?

……………家に戻ったけど……………

出るなって言われたけど……………行こう……………

これを着るか……………

『行くのか?』

うん……………

どうするか決めてないけど……

『そうか』

「発動」

『優のしたいことをすればいいさ』

うん……

行ってくるね……

『ああ、気をつけてな』

うん……

……ひどい……

そんなに遅くなったつもりなかったけど

もう雲雀先輩ボロボロだ……

「君はハズレですね」

……マフィアは関係ないっていう意味か

「骸！ ハズレなら俺の好きなようにしていいか？」

……誰？……銃を持つてる？

「クフフフ」

僕が反対しても君は聞かないじゃないですか」

「ああ、俺は俺のしたいようにする」

「クフフフ」

ハズレですし、殺してもいいですよ」

おかしい……

あんな人知らないし

雲雀先輩はボロボロだったけど無事だったはず……

『優、転生者だ！』

!?

雲雀先輩は手を出すと怒るけど

そんなこといつてる場合じゃない!!

「一撃っていうのもいいなー」

パンツ!!

キンツ!!

今の位置…心臓狙ってた……

私が防げなかったら……どうなってたの……?

想像するだけで怖い……

「誰だ!？」

「クフフフ」

どなたですか？」

……声と口調かえないとまずいよね

“………僕はケンカランキング1位の者だ”

「クフフフ」

君が秘密君ですか」

“彼はかえしてもらおう”

「クフフフ」

この状況で良く言えますね」

「おい！ 骸！ 今回は俺も楽しませてくれよ」

「いいでしょう」

ただし、僕も手を出しますけどね」

さて…どうしたものか……

雲雀先輩をかばいながら戦うのは危険だな…

勝てるけど…もし雲雀先輩を人質にされたら

手が出せなくなる…逃げたほうがいいね……

“僕は争いごとが嫌いなんだ

戦うつもりはないよ

彼を返してもらおうだけだ”

「ほう、ここから逃げれると思いですか？」

君は面白い人ですね」

「なあ骸、こいつ殺していいか?」

「クフフフ ダメですよ

アタリかもしれないです」

さて：なんか話してる間に

雲雀先輩を背負えたいし逃げるかな……

今も殺すか殺さないかでもめてるしねー

やっぱり男の人だから重いけど……

なんとかなるか……

骸の前では風の力は使いたくないしね

ただ……フウ太君は無理か……

マインドコントロールされてるし

救出しても一緒か……

「クフフフ

逃がしませんよ」

幻覚か……

“僕には幻覚はきかないよ”

「ほう　面白い人ですね」

「待て!!」

パンツ！パンツ！パンツ！

腕はいいね

いい位置を狙ってくるよ

まあ私のスピードは計算外だったみたいだけどね

“どこを狙ってるんだ？

じゃあな”

ふう……逃げれたか……

骸が幻覚使ってくれたからその分楽だった……

背負ってる分、避けるのも気をつかったからね

「君……なにしてるの……っ？」

よかった……

雲雀先輩が目覚めました

“……起きたか？”

とりあえず治療できる場所までこのままいくよ
痛くないように運んでるつもりだが……痛かったか？”

無理に運ぶと怪我に響くからねー

風で浮かせてるんだよねー

まあ他の人から見たら背負ってるようにしか

見えないけどねー

「……………何してるの？」

？

答えたよね？

というか質問したのにねー

答えてくれなかったね

「答えて……風早優……………」

……………

なんでばれた……………？

“……………なに言ってるんだ？”

「……………隠しても無駄だよ……」

僕には……わかる……………」

あー……まいった……

超直感も抑えるコートなんだけどな……………

「はあ……雲雀先輩には敵わないや……」

詳しいことは後で……………

とりあえず、治療してもいいですか？」

返事はないってことはいいってことか……………

もうばれたし……私の家でいいよね……………

薬を手に入れる

とりあえず治療だよね

「雲雀先輩痛いかもしれないですけど

我慢してくださいね？」

「わかった」

……………ひどい……………

かなり…悪い状態だ……………

「……………泣かないで」

「あ……………ごめんなさい……………」

「応急処置ですけど……………」

これ以上は……………私には無理です……………」

あれ？返事がない……………

そっか……………寝ちやったのか……………

この傷だもんね……………

とりあえず……………ベットまで運ぼう……………

風で運んだら痛くないと思う……………

多分起きたらまた無理して乗り込むだろうな……………

でも……………その前に桜クラ病の薬を手に入れないと……………

向こうも心配だし……………

『それ着て行くのか？』

もうばれたんだろ？』

だって……………1番最初に話すのは……………

『それもそうだな……………』

それに……………私はアルコバレーノだもん……………

『……………そうだな』

どう考えても怪しいから気をつけろよ』

うん

ありがとうー

『ああ』

「おまえは犬の獲物…

もめるのめんどい……」

スタツ

“……遅かったか……”

「うわあああ！

次はだれー！ー！」

“……あー……警戒しなくていい”

やっぱり怪しいもんね

「てめえは誰だ」

これはリボーン君か…

それにしても銃向けて

殺気丸出しているのはやめてよねー

レオン以外の武器もやっぱり持つてるんだね

レオンはまゆになってるしねー

というか…なんでリボーン君がここにいるんだろ？

私の記憶ではいなかったと思うんだけどねー

ただの勘かな？それとも私の勘違いかな？

「リボーン！

こっちが大変だったのに

お前何してたんだよー！！

……リボーン？」

「おい…聞いているのか！

お前は誰だ」

“はあ…今回の首謀者と同じこと言わないでくれ……”

あ、殺気が増えた：

それにしてもなんでこんなに警戒してるんだろ？
スキを見せてないからかな？

どう考えても素人じゃないしねー

「撃ちたかったら撃てばいいよ

僕は抵抗しないからな

それより：沢田綱吉と山本武

「へ？」

「なんだ」

あー山本君もまだ怒ってるねー

全くこっちに怒らないでほしいな…

まあ気持ちはすぐわかるけどね…

「彼このままだと死んじやうからどいてくれないか？

僕は応急処置ぐらいできるんだが…」

あ、殺気が少しだけおさまった

どいてくれたし勝手に治療しよう

それにしてもリボン君は私が変なことしたら

すぐ殺すつもりなのかなあー

ずっと銃むけてるし

「質問に答えろ」

「僕は…ケンカランキング1位のものだ」

「え!？」

確か秘密って書いてた…」

「ちよつと僕の名前をわからなくしたんだ

ケンカが強いついていっても

僕は争いごとが嫌いなんだ」

ほんとは神様の力だけどね

「あー…そうそう雲雀恭弥は僕が保護したからな

心配しないでいいぞ？」

「え!？」

ヒバリさん!？」

「ヒバリは無事なのか？」

「かなりやばい状態だったからな
応急処置して今は寝てるよ」

「そうか」

あ、リボーン君から殺気が消えた

「とりあえず、毒以外はなんとかしたが…
そつちで解毒してくれるか？」

「ああ」

「ところで、その赤ん坊…いや…リボーン
…なんだ？」

「あーまた殺気増やすの止めてくれないか？
名前呼んだだけなんだが…」

それともアルコバレーノと呼ばば良かったのか？」

「おい… お前は何者だ!!」

どうしてお前がそれを知っている!!」

さらに殺気が増えちゃったよ（笑）

まあ知ってるのは普通マフィアぐらいだしねー

「今はその話はいいだろ？」

この事件を解決するのが優先だ

君が1番わかってるはずだろ？」

「……わかったぞ」

「リボーン、桜クラ病の解毒薬くれないか？」

この病気をどうしても治したいんだ

彼多分起きたら怪我治ってない状態でも

どうせ乗り込むと思うからな

僕は彼を助けるしか出来なかったんだ

だから首謀者をまだ倒してないんだ」

「ああ。いいぞ」

「恩にきるよ」

あ、サービスだ」

獄寺君ちよつと触るねー

「なにしてるんだ？」

「僕の能力で僕の体力をわけてあげたよ
まあほんの少しだけど…」

「これで死ぬ確率はまた下がったはずだ
はやく解毒しないと意味はないが……」

「わかった」

「あと…すまない…」

「もう1人は助けられなかった……」

「もう1人？」

「沢田綱吉：君の良く知ってる人物だ
僕では助けられないんだ」

「君にしか出来ないんだよ」

「で、でも…オレは……」

「わかってるよ」

「僕は君が怖がりなことも知ってるし
争いごとが苦手なこともよく知っている」

「え!？」

「僕の手じゃ彼を救えないんだ
救ってほしいんだ…頼む……」

「う、うん……」

「わかった」

「あ、覚悟を決めてくれたみたいだね」

「じゃ、僕は行くよ」

「雲雀恭弥が起きてしまうからな」

「お前は味方でいいんだな」

「敵ではない」

「また後で会うかもな」

「じゃあな」

「え!?! いなくなった!?!」

「違うぞ、ツナ」

「かなりの速さで屋上へあがって」

走って行ったぞ」

「あいつは何者なんだ……」

リボーンが小さな声で呟いた……

手紙

良かった…

まだ寝てた…

これからどうしようかな…

雲雀先輩置いていくのも心配だけど

ツナ君達も心配だし…

なんか銃使う奴もいてたし…

雲雀先輩には悪いけど

手紙でも残して

ツナ君達を見に行くかな…

なんて書こう…

『雲雀先輩へ

最初に謝っておきます。ごめんなさい。

雲雀先輩を助けることしかしてないので

実は首謀者をまだ倒せてないんですよ

それで、ツナ君達がアジトに乗り込むみたいなので

心配で見に行きたいので簡単に書きました

全部終わったらゆっくり話しますね

まず、私は結構強いです。黙っててごめんなさい。

争いごとが嫌いで黙っていました

後、能力とか使えます。これも後でゆっくり話します

とりあえず、私の体力を渡すことができる力があるので

少し雲雀先輩に渡しました。

ちよつとは楽になつてると思います

後、お願いがあります

雲雀先輩に一番最初に話したいので

フードかぶって行動しています

なので…まだ正体ばらさないでほしいです

強いのを隠さず行動しちゃうと

ツナ君達に先にいろいろ聞かれると困るので：

それに：フードとって行動出来ないんですよねー

これも後で話します

では、ちよつとツナ君達を見てきます

P・S・

雲雀先輩のことだから怪我が治って無くても

起きると無理して乗り込むと思うので

寝てる間に桜クラ病の解毒薬をもらってきました

水も一緒に置いてます。

良かったら飲んでください

優』

これでいいかな：

結構時間かかった：

何書いていいかわかんなかったし：

もう乗り込んでるだろうな……

雲雀先輩：ごめんなさい……

『優、大丈夫か：？』

結構きついかも：

まさか雲雀先輩にすぐばれるとは思わなかったし……

『……確かに』

これで嫌われちゃったらどうしようかなー

『……………』

咬み殺される覚悟しておくよ（笑）

『……そうか』

ツナ君やリボン君にはばれなかったのね
雲雀先輩には敵わないってことかなー

『優を一番見てるからかもな』

そうだねー

1番一緒にいてたもんね

『ああ』

さて、私は行くよ

あ、神様

『なんだ？』

原作をできるだけ守るけど

私がしたいと思ったことを信じて行動するよ

『ああ。好きにしたらいいよ』

うん！

いってきます！

『気をつけてな』

理由

あー…

やっぱり手紙に時間かかりすぎたか…

ツナ君が影武者に勝って

ヨーヨーで狙われた後か…

でも…思ってたより時間がたつのがはやい…

!?殺気!?

「六道骸だけは何とかしないと!!」

「そうか」

ボコツ!!

「いってえ! 何するんだリボン!」

「伏せてろ!!」

「へ?」

「ふう…危ないところだったな

やっぱりまた会ったな”

「あ! あなたは1位の人!!」

1位の人ってなんて変な名前…

「てめえ、なにもんだ!!」

「あー今僕を倒そうとするの止めてくれ…

さつきから撃ってくる弾を落としてるのは僕だ”

それにしても撃ちすぎだよね…

ちよつとずれてるけどいい腕だな…

「獄寺、事実だ」

「な!?!」

「獄寺君! この人悪い人じゃないと思う…

ヒバリさん助けに来てくれたみたいだし

獄寺君の応急処置もしてくれたし……」

「!? このヤローに!？」

本当ですか!? 10代目!!」

「う、うん」

〃とりあえず…君たちじゃ……

今狙って撃ってる奴と相性悪いと思うから

僕が相手をするよ〃

「え!？」

〃沢田綱吉は接近戦タイプ

獄寺隼人はダイナマイトで中距離戦タイプだ

僕は接近戦タイプだが…刀があるからな

はじきながら近づけるから問題ないよ

それに僕の腕だったら倒れてる後ろの彼らを

守りながら近づくことが出来るからな〃

本当は私は接近戦タイプでもないけどね

「てめえ! なにもんだ!!」

どうしてオレ達のこと知っている!」

「こいつは並盛中出身だからな

お前らのことを知っててもおかしくねえぞ」

「そうなんツスカ!？」

「この人…」

フウ太の並盛中ケンカランキングで1位なんだ…

ヒバリさんより強いんだ…

名前はわからないようになってたけど……」

「な!？」

「それにこいつはヒバリを守りながら

ここから一度逃げてるからな

ヒバリよりはるかに強いはずだぞ」

〃そういうことだ

それに…君たちの用事がある建物から

離れたところから撃ってるみたいだしな”

「ですが10代目!!」

こんなわけわからねえヤロー信用できません!!」

”別に信用してもらわなくてもいい”

だつていくら言つても

絶対信用してくれないと思うしー

「な!? このヤロー!」

「獄寺君、この人に任せよう」

「!? 10代目!」

「この人がいつてるのは本当のことだし

オレはこの人が悪い人には見えない!!」

……ありがとう…ツナ君…

”じゃあ、行きなよ

君たちが行かないと

この人数を守りながらでは僕は動けない

僕もあいつを気絶させたらすぐそちに行くよ”

まあ能力使ったら楽勝なんだけどねー

今使ったら余計いろいろ聞かれるから

今回は使わないことにしようー

「ひとつ聞いてもいいか?」

”なんだ? リボーン”

「お前は正体隠してまで

争いが嫌いなのになんで手を貸す?」

”………君たちに死んでほしくないからつて

言えば信じるか……? ”

「そうか。ツナ、行くぞ」

少しは信用してくれたかな…

ふう…建物に入ったし…

あいつを気絶させて早く追いつかないと…

私ができることをしないとね

小言弾

優が家から出て数分後…

「……………手紙…？」

「はあ…困った子だね……………」

小さな声で呟いて薬を飲み

黒曜ランドに向かっていった

「おめー…なんでここに……………」

「僕は急いでこの事件を終わらせたいんだ

そのこの2匹僕にくれる？」

「……………好きにしやがれ」

「つええ…」

「口ほどにもないね

……………君に聞きたいことあるんだけど」

「……………条件がある」

「なに」

「オレを10代目のところまで連れて行け！」

「…はあ…わかったよ」

「聞きたいことってなんだ」

「深くフードをかぶった人

「どいかにするの？」

「けっ！ てめえもアノヤローに文句あるのかよ」

「はやく答えなよ」

「外で戦ってるはずだ

終わったらすぐこっちに来るみてえだ」

「そう」

あー：なんでこんなに遠いところから

狙うんだか：本人は弱いし：

銃の腕の才能だけをあげて転生したのかな？

まじで：びつくりしたもん：

鬱陶しいぐらいの数の弾を撃ってる相手もすごいけど

それを全部刀で弾きながら走って向かってる私も相当すごいよね

……とか思う余裕があることが自分で自分のこと引いた

まじで：テンション下がったよ：

私ってバトルマンガ出来るんだー：って感じで：

少女漫画で主人公の観察とかがしたかった：マジで：（泣）

で、風で弾を止めるのもありだけど

相手の位置を知りたかったから風で搜索したら木の上にいる：

方向は撃ってくる弾で相手もばれてると思うけど

まさか正確な位置がばれてるとは思ってたないだろうな：

：もうこの人死亡フラグ出てるね

いや：殺さないけど……とか考えてるうちに到着

とりあえずキョロキョロして：まあふりだけどね

背後を向いた瞬間予想通り撃ってきたよ

ぶつちやけ風で気配がよめるから後ろとか狙っても

刀を背後に移動させて弾いて終了。

「なっ!？」

声出すって位置がばれるのにバカだよねー…とか思いながら
木に駆け上る私…：うん…バトル漫画っぽい (泣)

そして地面に落とすつもりで一発胴に当てる

逆刃刀だから死なないし…

ドサツ

狙い通りだねー

…
…
…

「え？」

あ、地声出しちゃった…

いやいやいや…そんなことより…

なんで気絶してるのー！？

うん…回想終了。

はあ…

…
…
…

あー！ー！ー！しまった!!!

神様!!!!

『なんだ!!!』

小言弾って今の状況やばくないですか…？

たいして仲良くないのに…

フード被った奴がうつつたらおかしくない…？

『……確かに』

あー…しまったー!!!

ツナ君がハイパー化しなかったらどうしよー!!!

『優！…この近くで場所がわかりにくいところに

移動しろ！ タイミングは俺が言うぞ！

今回は問題ないぞ!!』

うわー！ー！すつごく助かります!!!

……ここでいいか……

『なかなかない場所見つけたな』

うん……ここからだ

急いだら1分もかからないと思うし……

先に神様に頼んどけばよかった……

『すまん……俺も忘れてた……』

ううん……私が悪いよ……

なんとか……誤魔化したかな……？

『多分……大丈夫……』

ツナは無事ハイパー化したよ』

そっか……

とりあえず……急ぐよ……

まだ……私にも出来ることあるかもしれないし……

弱点

……骸の奴……腹立ってきた……

途中から仲間になるけど……

まさか……雲雀先輩があやつられてるとは……

私が治療して体力あげた分か……

ここは私がするべきことだよね……

“……悪い……遅くなった……”

僕が雲雀恭弥を抑えるから残り頼めるか?…”

「……任せろ」

……これ以上傷口が開く前に……

はやく気絶させないと……

……

……

……

あれ……?」

「クフフ

やはり手も足もできませんか

いいサンドバックですね」

「ちげーぞ

これほどの攻撃力だ

ガードしてもよけても体に負担がかかっちゃう

ツナは今自分の体で攻撃をいなして

2人の体を守ってるんだ」

「ほお……向こうはどうでしょう……」

彼ほどの力があれば雲雀恭弥など

一瞬のはずですがね…

ずいぶん迷ってるみたいですね」

「黙れ」

「ク…体が…」

おかしい…

気絶させるのが雲雀先輩にとって

1番いいって頭ではわかってる…

攻撃をずっと受け流しても

はやく終わらせたほうがいいに決まってるのに…

なんで手が出せないの……?

私はみんなを守るために来たんじゃないの……?

どうしてこんなにも躊躇するの!?

ツナ君の方が…終わりそうだ…

……守る覚悟はしてたけど…

守るために攻撃する覚悟をしてなかった…

「クフフフ」

君の弱点がまさか仲間だとは…

それとも…雲雀恭弥か……」

私が手を出すことに悩んでることに気付かれた!

急いで気絶させないと雲雀先輩を人質として使っちゃう

「クフフフ」

一瞬の油断が命取りですよ」

!?

トンファアの仕掛けが発動した!

山本君の刀が捕まってるのをこの目で見たのに!!

この場所に刀を当てないようにするのを忘れるなんて…

とりあえず刀を離して今すぐ後ろに下がらないと…

え……うそ……待った……

いつの間にもう片方のトンファーがチェーン出してるの……？
うわ…左手にがチェーンに絡まったよ…

つまり武器はないし、左手は捕まつてる

あれ？これって結構やばくない？

だって蹴りが目の前に迫ってるもん

まあこれはなんとか避けれる…問題は次だよ！

捕まえてる方と逆のトンファーが次に来る…

あー私ってどれだけ集中力切らしてたんだろ……

自分がピンチにならないと状況がわからないなんて……

もう風の力をみんなの前で使わないとか言ってる場合じゃないね
自分で自分の首しめちゃったし……

とりあえず蹴りは避ける

うん。当たったら痛そうだね

あれ？なんで私……バトルマングしてるんだろ（泣）

で、避けた方向からしてトンファーが来る位置は想定済み

この場所に風のバリアーを張る

……あれ？ちよつと待った

雲雀先輩の体って…

このバリアーに当たっても大丈夫なのかな……？

だってもうボロボロだよ……？

これって私の体でいなすのが正解だよね……？

さっきの蹴りも体に響いてたよね？

……

衝撃に備えないと!!

あれ？

痛くない……？

ドサッ

どういうこと……？

“気配が…消えた…”

それに雲雀先輩…倒れちゃったし…

「出てこい骸

生きてるんだろ？」

“骸…雲雀恭弥に何をした…”

「クフフフ

まず…秘密君の質問に答えましょうか」

“はやく言え!”

「僕は何もしてませんよ

雲雀恭弥が君を殴ることを拒絶して

僕の憑依を自力で解いただけですよ

彼の精神力は素晴らしいですね

こんな経験は初めてですよ」

………雲雀先輩………

“…そうか

後は沢田綱吉に任せる…

問題ないだろ?”

「ああ」

「フツ

格闘センスが格段に向上していることは認めましょう

だがこの程度で凶に乗ってもらうっては困りますね」

これで…原作に戻ったか………

「怪我はねえか」

ん?リボン君こっちにきたけど

いいのかな?

“雲雀恭弥のおかげで助かったよ”

「そうか

お前はもう手を出さないのか?」

「言っただろ？」

僕は争いごとが嫌いなんだ

彼に任せても大丈夫みたいだから僕はもういい」

「なんで迷った」

直球で聞かないでよね……

「さあ……」

僕の覚悟が足りなかったただけだろうな……」

自分の甘さを痛感したよ

守る覚悟をした癖に結局本番で躊躇する

私は誰も傷つけたくないよ

でも今回の場合は私が躊躇すれば雲雀先輩は傷つくんだ

身体じゃない心が……

雲雀先輩は自分がしたくないことは絶対しないのに

全部私の覚悟が足らなかったせいだよ……

まあ今回はギリギリ雲雀先輩が自力で回避したけど……

「わかってるじゃねえか」

「やっぱり争いは僕に向いてないな……」

「オレがビシビシ鍛えてやるぞ」

「……得体のしれない奴に

言う言葉じゃないと思うが……」

「オレはお前を気に入ったからな」

「それは怖いな……」

「いつでもファミリーに歓迎するぞ」

「……考えとくよ」

「それより自分の生徒はいいのか？」

「オレが育てた生徒だぞ」

「それにお前も大丈夫と思ったんだろ？」

「そうだな……」

鍵

あー…良かった…

原作通りツナ君が勝った…

あれ？雲雀先輩が目を覚ました？

やっぱり私が治療したのと

体力あげたからかな？

〃目を覚ましたみたいだな

今終わったところだ〃

「そう

話してね」

あーそうか

終わったら全部話すって言ったもんねー

〃ああ〃

んー…どこからどこまで話すべきか…

全部ねー…

「あー」

「医療班がついたな」

「な!!」

「早えおでましたな」

「い…い…いたい誰!!」

「復讐者」

あー…そういえばそうだった…

あの人たち謎だよー

「マフィア会の掟の番人で

法で裁けない奴らを裁くんだ」

あー…骸達連れて行かれたな…

ツナ君が心配してるな…

また会えるっていつてあげたいな…

ってあれ？

こっちにくる？

“……僕に何の用？”

復讐者に目をつけられることしたことないんだが……”

〈異の者よ〉

異世界から来たものってことか……

“なんだ？”

〈お前に鍵を授けに来た〉

“鍵？”

……どうしてその鍵なんだ？

僕はそれを2度と見たくなかった

ある意味トラウマなんだが……”

まさか私をひいたトラックとかやめてよね

趣味が悪すぎるよって無視されたしー

おー光ったと思ったたらなんか流れてきたよ……

えっと……なににな……

アルコバレーノの力を解放できる時間は体調が万全で5分

なお、力を使った後の副作用として倒れる

力の制御は強制

袋を取らなければ副作用はない

うわ……なんだこれ……

呪いの内容は他言無用

えー呪いの内容ってことは

この世界に呼ばれたことを話すなっということか……

呪いの内容を話すと

異の者に関わった者が死ぬ

“ふざけるな……”

1つはいい僕に被害が来るからな

もう1つはなんだ……

僕の周りに被害が来るだろ!!”

〈我々は内容を知らない〉

それもそうか……

渡しに来た復讐者にも被害が来るしね

“……わかった

僕が話さなかったら済むだけだ

質問をかえる

誰が復讐者に鍵を渡したんだ？”

〈我々は知らない

声を聞いただけだ

鍵に心当たりあるお前の方が

知ってるのではないのか？〉

“……復讐者もわからないのか……”

心当たりあるけど

私も声しか知らないしねー

“あー……もう1個だけ悪い

鍵を渡した時に何か言われたか？”

〈これが異の者の運命と聞いた〉

さだめ……か……

“……わかった

もういいぞ

僕のせいで手間をかけさせて悪かったな”

〈問題ない〉

「待て！…… どういうことだ」

〈お前には関係ないことだ

アルコバレーノ〉

消えたか……

「おいー…… どういうことだ!!」

どういふことつて聞かれてもねー……

私にもわかんないし……

“……今はまだ話すつもりはない”

これでリボン君が引いてくれると

嬉しいんだけどな……

「……わかったぞ

だが1つだけ教えてくれ
周りに被害とはなんだ？」

「……聞きたいのか？」

「僕は聞かない方がいいと思うぞ」

「お前の様子からして

オレ達に被害があるんだろ？」

「……勘がいいな」

「オレ達に聞く権利はあるはずだぞ」

「僕に関わった者が死ぬみたいだよ」

「!?」

「どういふことだ!!」

ツナ君が顔真つ青になつちやつたな」

「僕に話されては困ることがあるみたいだよ

心配するな……死んでも話さない」

「……信用していいんだな」

「今……僕を殺すか？」

君達にはその権利があると思うからな

リボーンの時だと一瞬で僕を殺せるだろ？」

「リ……リボーン!!」

「……止めておくぞ」

「……そうか……」

「じゃあ僕は行くよ」

「待ちなよ」

「あー……雲雀先輩か……」

「……君はここで治療してもらいなよ」

「正体ばらすよ」

「な!?ここでそれを言うの!？」

「はあ……わかった……」

「沢田綱吉、リボーン……」

「彼は責任を持って安全な場所に」

運ぶから安心してくれ”

「う、うん」

「わかったぞ」

まだ頭が混乱してるのになあー…

雲雀先輩容赦ないや…

”あー沢田綱吉…”

「え?」

”僕の体力分けとくよ

少しは役に立つはずだ…”

「もう戦いは終わったのに?」

”すぐにわかるよ”

確か筋肉痛で大変な目にあつた気がするからね

まあ…こんなものか…

”じゃあな”

許してもらいましょう

「もう、普通にしゃべってもいいかな？」

雲雀先輩は無理しすぎです

治療したほうがいいのにー」

「君が逃げるからね」

「…私も混乱してるんです

ちよつとぐらい時間くださいよー」

「ヤダ」

……ダメだこりゃ……

「とりあえず私の家について治療しますよー？」

「わかった」

「応急処置はしました

でも、病院行くべきです」

「ヤダ」

……

なんか…雲雀先輩…わがままになってない？

「……わかりました

では私の体力を分けますね？

そのほうが回復力は多少はあがると思うし

でも残さないと説明出来ないの……

少ないですけどいいですか？」

「いいよ」

「ちよつと触りますよー」

んー…こんなものかな？

「これでちよつとは楽になったかな？」

「で、さっきのとか何」

直球ですねー

「んー…どこからどこまで話していいのか…」

話せる範囲が難しいんですよー」

「はやくいいなよ」

…考えさせてくださいよ…

「あーその前に」

さつきはありがとうございました

雲雀先輩のおかげで怪我がないです」

「……そらさないでよ」

うーん…そらしたつもりはないんだけどなー…

「えっと…まず能力は風をあやつれたりします

で、さつきその能力を制御させられました

……までいいですか？」

「いいよ」

「さつき帰ってる途中にどれぐらい制御されたか

試したんですが…どうやら1人分ぐらいしか

浮かせるぐらいの量しか風をあやつれなくなりました」

「へえ」

「制御をとくと全ての風を操れまして…

さつき体力が万全の状態です5分しか

使えないようにされました

で、その後倒れるみたいです

あー！…あと時間が過ぎても倒れるみたいです」

「……そう」

「この力を使えるようになった理由とかは

話せなくなりました」

「わかった」

「力を解放するには…

えっと…ちよつと待ってくださいね…」

……(そぞ)そ…

うわ…久しぶりに出した気がする

「この首飾りの袋をとると解放できます」

「この中身はリボン君と同じものです」

「あの赤ん坊のとかい？」

「はい。リボン君もつけてるおしやぶりで
身体から離れないで隠すのが大変です……」

「へえ」

「それでダメだったんだね」

「はい……」

「身体から離れないって言っても……
信じてもらえないと思って……」

「それに私がこれをつけてるのがばれると……
多分……争いごとに巻き込まれると思うので……
学校に行けなくなる可能性が高いです……」

「いろんなマフィアが寄ってきそうだもん……」

「私が知ってるアルコバレーノは……」

「全員マフィアに入ってるしね……」

「ボンゴレに入ってもアルコバレーノってばれると……」

「多分……学校に行けなくなると思う……」

「ただのマフィアじゃなくて……アルコバレーノだもん……」

「……そう」

「それはどうしても離れないの？」

「どうにかして離すことは出来るとは思いますが……」

「そのかわり……多分私が死んじゃいますね」

「おしやぶりが離れないのは……」

「そういう意味もあると思うんだよねー」

「転生した瞬間に飛んできたからね」

「……わかった」

「はい……」

「首から下げてるのを外せって言われても……」

「すつごく困るんです……」

「だから水泳の授業に出たくなかったんです……」

去年は偶然…雲雀先輩が呼び出してくれて…
実は助かってたんです……

雲雀先輩が呼び出してくれると
補習も受けなくて良かったんで……

2年連続はないと思つてずる休みしようと思いました」
「わかった」

「あ！リボン君がつけてる理由は
知らないの私に聞かないでくださいね？」

「興味ないよ」

「…そうですか……」

んー…幻覚がきかない体質とか
言うべきなのかな？

「私の体はちよつと特異体質なので

いろいろ他にも出来ることがあります
大したことではないです」

「そう」

「これぐらいで勘弁して下さい
今混乱してるんで

また何か言わないといけないことが
あつたらその時言います」

「いっよ」

やったー

許してくれた!!

「喜んでるところ悪いけど

僕は許さないよ」

……ですよねー

おしやぶりのことは前から言つてたけどー
強いことや特異体質のことも黙ってたしねー

「す、すみませんでした」

……

.....

……沈黙が怖い……

うー…怖いけど…顔見てみよう……

.....
.....
.....
.....
.....
.....

へ？

なにか唇に当たったような……

「これで許してあげる

じゃ、僕は寝るよ」

「あ、はい

どうぞぞ

.....
.....
.....

え———————!!!??

「……………今のもって……………
／／／
／／／
／／／

『キスだな』

え!? 神様!?

…見てたんですか……………
／／／
／／／
／／／

『おう！ ばっちりな!』

／／／
／／／
／／／
／／／

穴が……………

あつたら…／／／
はいりたい…／／／

「／／／そういえば…ファーストキスだ…／／／」

看病

ものすごい衝撃なことだったけど
どうやら体力をみんなにあげすぎたみたいで
すつごく眠たくなつた…まじで眠い…
まあ私のベットでは雲雀先輩が寝てるから
初めて和室で寝るんだけどねー

良く寝た…

んー…雲雀先輩まだ寝てるのかな…？

／／／／／／／／／／／／

だめだ!!昨日のことを考えると

恥ずかしい!!!!

あー…でも罰ゲームっていう意味なのかな…

あれは…そうだよねー

うん!そうに違いない!!

とりあえず診に行こう…

コンコン

私の家なのにノックするって変なのー

「失礼しますね」

あ…まだ寝てる…

やっぱりすごい怪我だもんねー

んー…とりあえずまた体力をあげようかな…

雲雀先輩触りますよー

んーこんなものかな?

「……やあ」

「あ……おはようございます」

今、体力あげたから起きたのかな?」

「そう」

「……なにか食べます?」

「食べる」

うん! やっぱり雲雀先輩も普通だね

罰ゲームってことでいいみたい!

さて、何食べれるかな?

やっぱり、おかゆかな?

「お待たせしましたー」

んーこれは食べさせてあげるべきだよね?

「はい、あーん……」

雲雀先輩も普通だしあつてたみたいだ

全部食べた……

流石:雲雀先輩:回復力?とかもすごい……

「雲雀先輩ー」

「なに」

「今からでも病院に行った方がいいですよ?」

「ヤダ」

んー……これは困ったな……

「看病してね」

いや……するけど……

病院行ったほうがいいのに……

「わかりました

でも、条件があります!」

「なに」

「雲雀先輩のことだから

すぐ無理するので

最低でも10日は休んでください！」

「……………わかった」

よし！よかったー

絶対ちよつとでも動けるようになったら

学校行くと思うからこれだけは譲れない!!

10日でも短いほうだし……

「んー……書類は……私がしますよ……

しようがないです……」

「ごこでしてね」

え!?!なんで？

学校でするんじゃないの!?

「看病してくれるんでしょ」

だから何も言っていないのに……

「君、わかりやすいよ」

「そうですかー……?」

「そうだね」

じゃ、風紀委員に持ってこさせるからね」

「え!?! 取りに行きますよ?」

「ヤダ」

ってもう電話してるし……

「じゃ、僕は寝るから」

「はあい

どうぞ」

結局、普通に風紀委員の人が

書類を持ってきてくれたんだけど

私って風紀委員の人からどう見られてるんだろ？

……？

もしかして…書類してる途中で寝てたかも…

まあほとんど終わってるけどねー

全部終わったら寝ようと思ったんだけどねー

まさか途中で寝るとは……

「起きたみたいだね」

「あ、すみません……」

「疲れてるの？」

「実は…体力あげたのは昨日が初めてで……」

「へえ」

「それであまりにも体力が減ると

回復しようとして眠くなるみたいで…」

「……僕にあげたからだね」

「雲雀先輩のせいじゃないですよ？」

「私がまだこの能力を使いこなせてないだけですよ」

「……わかった」

「はい」

明日からは…

書類終わってからあげますね」

途中で寝るなんて最悪だしね

「それしなくていいよ」

「雲雀先輩がいいって言っても勝手にしますからね

雲雀先輩には拒否権はないんで諦めてくださいよ」

「はあ…わかったよ」

「はい♪」

10日で完全に治して学校行きましょうね♪」

「わかった」

思考停止

なんでこうなったの……？

『いやあ、すごかったな』

見てたの……？

『ああ！ ばっちり！』

ぶっ！ あははは!!』

笑うなー!!

『いやあ、優の流され具合というか

雲雀がすごいというか……

ぶっ!!』

神様ー!!!!

しようがないじゃん！

急にびっくりして思考がとまったんだもん!!

『そうかそうか

わりいわりいー

まあ良かったじゃねえか』

……
／／／

く神様と話してる数時間前く

雲雀先輩を看病して約束の10日たったため

朝から学校へ行つたみたい起きたらいなかった……

うーん……手紙ぐらい残してほしいよねー

まあ書類がなくなってたから

運んでくれたみたいだけ……

私も久しぶりに学校行こうー

あれ？ツナ君いてるー

もうちよつと筋肉痛で大変だと思っただけけど…
体力あげたのがちよつとは役に立ったのかな？

「ツナ君！ おはよ」

「優!! オレもずっと休んでて今日来て知っただけど
優もずっと休んでたんだって!？」

なにかあったの!？」

んー…何て言おうかな……

「んー実はー

雲雀先輩が急に来たのはいいんだけど

怪我してたからずっと看病してたんだー」

正しくは私が家に連れて行ったんだけどね…

「あ、安全な場所って優のところだったんだ……」

そういえば…そんなこと言ったような…

「安全?」

「ううん! なんでもないよ!!」

そうだよねー

私には言えないよねー

いや、黙ってる私が悪いんだけど……

「まあ、私は元気だよー」

「よおツナ! 風早!」

「おはようございます! 10代目!

あと、風早も」

「おはよー」

獄寺君…私はついでのね…… (笑)

ってか2人とももう元気なの!？」

いや、獄寺君は10代目が学校に行くなら
とかいつて無理してきそうなタイプだよね

山本君は：手の怪我と気を失っただけだからかな？
でも、体力あげてないのに……………

2人ともすごい…

「なんかみんな怪我してそうだけど大丈夫なの？

雲雀先輩と同じ理由？」

「あ、うん」

「ははっ！ まあな」

「風早には関係ねえよ」

「うーん：わかった」

一応聞いとかないと：おかしいしねー

『ヴーヴーヴー……………』

あれ？なんか用事かな？

「ちよつとごめんねー」

なんだろう？

「もしもしー？」

『やあ、応接室にきて』

「あ、はーい」

ん？なんだろう？

「ちよつと応接室いつてくるねー」

「ヒバリさん？」

「そうだよー」

いつてきまーす」

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ来たね」

「はい

「朝起きたらいなくてびっくりしましたよー」

「用事があつてね」

「そりゃそうか」

「10日も休んでたらしたいこと

いっぱいあると思うしねー」

「それもそうですねー」

「で、君これにサインしてくれる？」

「へ？」

「んー：風紀委員の契約書？」

「そうだよ」

「今誰もいないよね…」

「えつと、強いつてこと黙つてくれる

つていう話じゃなかったですか……？」

「看病してるときに言ってくれたよね？」

「そうだよ」

「じゃ…なんで……？」

「君は僕の彼女だからね」

「はあ……？」

「さつさと書いて」

「あ、はい」

「書いたね」

「じゃあこれつけてね」

「もう戻っていいよ」

「はい」

「失礼しました」

.....

.....

.....

「優！ おかえり！

はやかっただね!!」

「……………」

「優？」

「……………」

「あれ？ これって風紀委員の……………」

「……………」

「優!!!」

「あ……………ごめん……………」

「どうかしたの？」

風紀委員の腕章持ってるし……………」

「……………」

……………うわああああ!!

どうしよー!! ツナ君!!」

「うわああああ!!」

「風早！ 10代目に何してるんだ!？」

「おい！ 風早落ち着けて!」

「へ?」

あ……………どうやら……………ツナ君を

思いっきり前後に揺らしてたみたいだ……………

「……………ごめん……………」

「う……………うん……………」

大丈夫だよ……………なにかあったの……………?」

「10代目にこんなことしたんだ

早く話しやがれ!!」

「話した方が楽だしな!」

「……………ボソツ」

「え? なんて?」

「はつきり言いやがれ!!」

「わりいもう一回頼む」

変化と運命？

噂というものは怖いというもので

すぐ私が雲雀先輩と付き合っていると広まった…

でも…：：：周りの態度が

あんまり変わらないのはなんでだろ？

もつとびつくりされると思ったんだけどなー

変なのー

今回のことで1番大変だったのが…

花からの質問攻め…

これは…正直困った…

途中で雲雀先輩からの呼び出しが

入ったりして質問攻めは終わるんだけど

「お熱いねー」とか言われるのは…

正直恥ずかしい…

まあ付き合ってるっていつても

今までとあんまり変わらないような気がするけど…

1番変わったのが…

書類をすることになった…：：：（笑）

風紀委員に入ったからしようがないって言えば

しようがないんだけどー

その分、雲雀先輩と一緒にいることが長くなったけどね

一応強いことを隠してるから

見回りはしなくていいことになってるのは

ラッキーだった…

そんなことしたくないし!!

そういえば…

知らない間にヒバートが応接室に…

見回りをしない分、私が世話係なんだけどね

私にもなついてくれてるのは

ちよつとびつくりしたけど…

いや…重要なこと忘れてた…：
付き合ってから1番の変化があつた…：

『ヴーヴーヴー……』

あ、いろいろ考えてたら雲雀先輩からの電話だ

「もしもし?」

『応接室来て』

「はい」

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ来たね」

「はい」

えっと…今日は書類ですか?」

机にいっぱい書類があるしね

「そうだよ」

「わかりましたー」

「優」

「なんですか?」

「僕は見回りにいくよ」

「あ、はい」

「いつてらっしゃーい」

「ん」

……………
／／／／

うん…まだ慣れないや…：
／／／／

んー…これはやっぱり運命なのかなー…
行くべきか行かないべきか…
一日悩んだけどわからないし
ちよつと朝早くに学校行つて雲雀先輩に相談しよう

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ

どうかしたのかい？」

「実はどうしようか悩んでて…」

「なに」

「昨日、商店街の福引きで

当たったんですけど…どうしようかなと…」

「へえ」

「イタリア行きの一入旅なんですけど

今月中までなので行くとしたら

何日かは学校休まないといけないし

どうしようかな…と思ひまして…」

「優は行きたいの？」

「んー…行ったほうがいいような気もするし

行かない方がいいような…

時間も短いですしねー…悩むところです」

「行ってきなよ」

「そうですねー

もったいないですよねー」

雲雀先輩だったら学校休むって言ったら

止めるかなって思ったけど

やっぱりこれは行く運命ってことか……

「じゃあ、週末から行つてきます」

早く行かないとリング戦はじまっちゃうし

「わかったよ

送り迎えするからね」

「え!？」

大丈夫ですよ?」

「ヤダ」

……やっぱり最近わがままになつてる気が…… (笑)

「わかりましたー

では、よろしくお願いします」

イタリアってボンゴレがあるところだよね?

なにかあるのかなあ……

つていつても……場所とか知らないし偶然なのかなあ?

まあ、初めての海外旅行だし

パンフレット買って楽しんでこよう♪

さて……なぜこうなった……

普通に観光してただけなんだけどな……

えーん! (泣)

雲雀先輩助けてくださーい!!!!

拉致

ついに来たー！

イタリアー！！

ちよつと遠かったけどね……

いや！せっかく雲雀先輩が行ってきなよ
って言ってくれたんだ

楽しんで来ないと!!!

やっぱり有名な観光地に行きたいよね!!!

うん：知らないところだから

ちよつと挙動不審になってるかも……

「うわー！」

ぶつかっちゃった……

「ごめんなさい」

「しっしっ」

問題ないよ

だってオレ王子だもん♪」

「……おうじ……っ？」

あれ？このセリフって…

まさか……

……

……

ベルきたー！

「す、すみませんでした!!」

では…失礼します!!」

ぎゃー!!早く逃げないと!!!

「しっしっ きーめた♪」

はい？

・・・

ん？なんか浮いてる？

「えええええ!!」

おろしてください!!!」

なにこの状況!?! 担がれてる??

「しししっ

やだね」

「な、なんでですかー!?!」

「だってオレ王子だもん♪」

意味分かんないー!?!

力使って逃げてもいいけど…

それはそれでヴァリアーに気に入られたら…

それは絶対嫌だ!!!!

30分後

どっかの建物？

なんか見たことあるような…

「あのお…おろしてくれませんか…?」

「しししっ

やだね♪」

うー…この繰り返しだ…

まあ素人と思ってるから

スピード出してないだけかもしれませんがよね…

やっと…おられた…

どこの部屋…?」

「あのお…すみません…

帰りたいたんですが……………」
ガチャ

「うゝお、おい!! 誰だそいつはあゝ!!」
あ、スクアールだ…

声大きいな……………」

「ししっ♪ オレの姫♪」

「はあ?」

あ、スクアールと声がかぶった

「んもお! なによお!

大声出してえ〜」

えつと…名前が出てこない……………」

おかまだ……………」(笑)

「あらあん♪

可愛いこねえ♪」

「ししっ♪ オレの姫♪」

「んまあ

ベルも大人になつてえ♪」

いやいや…おかしいだろ……………」

「す…すみません……………」

私…帰りたいんですけど……………」

「どおいうことか説明しろゝ お!!」

んー…ここは…私が説明するべきか…

「外で歩いてたら…

王子?…つていう人に拉致されました」

うん、間違つてない

「だつてオレの姫だもん♪」

「どおゝいうことだあゝあゝ!」

「あの…帰りたいんですけど……………」

「あらあゝ

ベルに振り回されたかわいそうな子なのねー」

そうです!

だから帰らしてください!!!

「帰っていいですか……?」

「うお、おおおい!! まで、ええええー!!」

雲雀先輩「助けてくださーい!! (泣)」

「なんですか……?」

「こいつが迷惑かけたみてえだ

悪かったなあ」

うわースクアア口ってこんない奴だったのー!?

「いえ…帰らしてもらえたらいいです……」

「ねえ♪ せっかくだからもうちよつといまししょうよー」

「しっ♪ さんせーい♪」

「うゝお、おい!!」

迷惑かけた分ゆつくりしていゝけえ!!」

………だから帰らしてよ……

「………いえ…結構です……」

「もお♪ 遠慮なんかいらないわよお

部屋に案内するわあー」

なんでこんなに話聞かないの!?

結局時間が遅いため1泊することになりました……

苦手

あー…なんでこんなことに…
さっさと起きて帰ろう……

「お腹すいた…」

そういえば…

昨日のドタバタで何も食べてないや…

とりあえず…昨日の部屋に向かおうかな…

んー…ここはノックするべきかな？

コンコン

「失礼します………」

「あらあゝ♪ 起きるの早いわねえ

今ご飯作つてるところよおー」

そういえば、この人が作つてたかな……？

いや…この人がノリでたまたま作つてるだけと思う…

だってヴァリアーだよ

一流シェフがいるはずだもん

「あ…手伝います………」

「いいわよお

あなたはお客さんよお」

「おなか減つたんで…

一緒に作つた方がはやくから………」

「そういうことならお願いねえ」

「はー」

「あ…おはようございます」

「しっ♪ おはよ♪」

「なにしてえんだあ」

「お腹すいて…」

「ご飯一緒に作ってました」

「この子すごいわよおー」

「すつごく料理が上手なお」

「雲雀先輩が食べにくるから」

「頑張ってるんだもん」

「とりあえず食べませんか？」

「おなか減って……」

「そうねえ」

「いただきますしよ♪」

もぐもぐ…

「!! うまい……」

へえ…スクアアロって普通に喋るんだ…

「オレの姫だもん♪」

違うから……

「あのお…とりあえず姫っていうの」

やめてもらえますか？

私………か………彼氏いるんで………／／／

うわ………恥ずかしい………

はじめていった………

「んまあ！ ベル残念ねえー」

「しっ♪ 関係ねーし♪」

いや………気にしてよ………

でも…まだこのメンバーだけでよかった

XANXUSとか変態親父は勘弁だ……

マーモンとは会いたかったけどね

おしゃぶり持つものとして会っておきたかった

いや…可愛いのもあるけど………

「えつと…今日は帰らしてくださいね？」

ってかあんまり時間ないし!!

せめて雲雀先輩にお土産買いたい……

「そうねえー」

送っていくわあー」

やったー!!

助かった………

「そういえば、てめえ名前はなんだあ」

「もう会うことないと思うんで……」

いや……思いつきり会うけど……

いろいろめんどくさい……

「オレの姫だつて♪」

それも違う……

「それもそうだなあ……

ベルしつかり送れえ!」

「ししっ♪ わかつてるよ♪」

えー……

すつごくベル苦手になったんですけど……

「いつでも来てくれていいわよお♪」

次は敵だつて………

「はあ……っ?」

「ししっ♪ 姫行くよ♪」

いやだから姫じゃないつて……

なんかいろいろ疲れた……

おーなんか高級車で送ってもらえるみたい
流石ヴァリアーだね

いや、ボンゴレがすごいのかな?

「あ、ありがとうございます」

いや…どつちかというと

迷惑掛けられたから…

お礼をいう必要ないと思うんだけど…

「姫♪」

「……………はい？」

いや姫で返事するのおかしくない？

「また会おうぜ♪」

「いえ…もう結構です」

「しっし♪ オレの勘は当たるんだぜ

オレ王子だし♪」

うわー…当たりますよ……………

「はあ…では……………」

「姫またな♪」

……………疲れた……………

はやく雲雀先輩に会いたいや……………

反則

すっごい疲れたイタリア旅行だった……
精神的にこれほど疲れる旅とは……
とりあえず着いたけど
むかえに来てくれるんだよね？

「やあ」

雲雀先輩だー（泣）

「ただいまですー！」

うー…こんなにも雲雀先輩のところが
安心するとは思わなかった……

「行くよ」

「はいー！」

おー……久しぶりの我が家！

「ただいまー」

とりあえず誰もいないけど
言ってしまうのはなぜだろう（笑）

「雲雀先輩むかえに来てくれて

ありがとうございます」

「問題ないよ」

なんか落ち着くー

「どうだった？」

「えつと……」

ものすごーく疲れまして……」

「なにかあったの？」

「んー…簡単にいうと

自称王子っていう人に拉致されて姫と呼ばれ

その後、声の大きい人とおかまの人に助けられました」
うん！間違っていない!! (笑)

「……なにしてんの」

「いやー……私にもさっぱり……」

だって話とか聞いてくれないんだもん

「はあ……もう1人旅は禁止ね」

「はい！ 今度は雲雀先輩と行きます！」

ん？雲雀先輩黙った？

まあいいやー

「あ、お土産ですー」

「ありがとう」

えへへ……／／／

ちよつと嬉しいな……／／／

「明日から学校楽しみですねー」

「そう

優」

「はい？」

「明日の放課後あけといてね」

「いいですけど？」

何か用事ですか？」

いつもいきなり電話かかってくるのに

事前に言うなんて変なのー

「用事はないよ」

「へ？」

「優と一緒にいたい」

「………わ……私も……です／／／／／

あ……笑った……／／／

「行きたい所ある？」

あれ？普段は雲雀先輩が決めるのにー

「どうかしたんですか？」

「なにが」

「いやあ…」

いつもは雲雀先輩が決めてるのに……」

「なんとなく」

……なにそれ……（笑）

「んー：行きたいところはあるんですけど…」

雲雀先輩とは難しいと思うんで……

雲雀先輩が決めてくださいー」

「どっ」

「今度友達と行くんでいいですよ？」

「はやくいいなよ」

えー……絶対無理だと思っただけど……

「並盛商店街にある……ラ・ナミモーヌ……」

うん！やっぱり返事がない!!（笑）

雲雀先輩とケーキ屋が想像つかない……（笑）

行きたいところって言われたら

今はここなんよねー……だって…

旅行中にもものすごく食べたくなっただもん……

「だから雲雀先輩とは難しいんですよー

なので友達と行くんで

雲雀先輩が決めてくださいねー」

「わかったよ」

うん！雲雀先輩が決めてください！

「行くよ」

「へ？」

「明日その店行くから」

「えええええー！！！！」

「なに」

「いや…びつくりして…」

「そう」

「あのお…いいんですか…?」

「優が喜ぶ顔見たいから」

……………

「……………反則です……………」

うー…笑ってる……………

「今日はもう帰るよ」

「疲れてると思うし」

「あ、ありがとうございます」

「また明日」

「はい！ また明日ー」

……………雲雀先輩と…ケーキ屋……………

本当に……………想像つかない……………

ケーキ屋

久しぶりの学校だ!!

今日の放課後…大丈夫かな……

「優！ おはよ!!」

「よお！ 風早！」

「ちっす」

「久しぶりー」

「おはよーー♪」

「優、旅行どうだった？」

「んー…いろいろ巻き込まれて

大変だった………（笑）」

「ははっ

その方が思い出に残るから良かったな！」

「うわー山本君ポジティブー!!」

「どうせ風早のことだから

あほなことしたんだろ」

「うーん…したつもりはないんだけどねー」

「何もしてないよね……？」

「と、とにかく！」

「優が無事帰ってきてよかったよ!!」

「たしかに…」

「拉致された時は帰れるか不安だった……」

「そうだねー」

「本当に良かったよー」

「あ、お土産あるから食べてねー」

「ありがとー！」

「サンキューな！」

「どうもな」

「うん！」

「優！ せっかく帰ってきたんだし

今日放課後一緒に遊ぼうよ!!」

「ツナいいこと言うじゃん!」

「ごめん!!」

今日の放課後は…先約が……」

「風早! 10代目の誘いを断るとは……」

おお…怒ってるね

ツナ君が必死に抑えてる (笑)

「ごめんね」

今日はダメなんだ」

「あ! もしかして…」

「そうなんだ」

雲雀先輩と出かけるんだ」

「ヒバリさんだったら…しょうがないよ」

「本当にごめんね!!」

また今度誘ってー!!」

「うん!」

出掛けるってどこ行くの?」

………言ってるいいのかな………?

「えへへ♪」

笑ってごまかそう!

「コラッ! 風早!」

10代目が聞いているんだ! 答えやがれ!!」

「い、いいよ!」

無理に聞くことじゃないし!!」

「ですが…10代目……」

「ごめんごめん……」

言ってもいいんだけど……

私でも想像がつかないところだから

言ったらびっくりするかな…って……」

「どういふこと?」

もう言った方がわかりやすいよね

「今日行くところはラ・ナミモリーヌだよ」

うわー…みんな固まった…

「みんな起きてー！ー！！」

「はっ！！」

「びつくりしたでしょー」

「……う…うん…」

「私が食べたいって言ったら

行くことになったんだけど…

私も想像つかなくて…」

「……そ…そうだよね……」

「あ！！」

「どうしたの？」

「休んでた分の書類しないといけないの忘れてた…

今から応接室行ってくるね！！」

「う、うん」

「いつてきます！」

改めて風早優がすごいと思った3人であった

「疲れた……」

今日はこれで勘弁してください……」

休んでた分がこんなにあるなんて…

「いいよ」

助かったー

「また明日しますー」

「わかった」

もう放課後だし…

今から行くんだよね？

「あのお……」

「なに」

「無理じゃなくていいですよ？」

「行くよ」

あ…行くんだ……

……なるほど……

雲雀先輩が改めて凄いと思った……

「……すごいですね」

「なにが」

「いやあ…まさか貸切とは……」

「僕だからね」

うーん…すごい…

確かに…これだったら雲雀先輩って感じかも…

「なにをするの」

「………いっぱい食べてもいいですか？」

「いいよ」

「やったー!!」

「どれ」

「えつと…」

ミルフィーユと

シュークリームと

ショートケーキと

ベイクドチーズケーキと……」

「……何個食べるの」

「えーだってもう貸切なんて

出来ないじゃないですかー」

「優が言えばいつでもするよ」

「んーでもそれはお店の人に悪いんで

今日だけでいいですよー」

「そう」

「はい！

とりあえず今いったの食べてから

残りは考えます!!」

「わかった」

「雲雀先輩は食べないんですか？」

「僕はいらないよ」

「そうですか……」

「なに」

「いやあ……私のわがままに付き合ってもらって

悪いなって思っ……」

「優の喜ぶ顔がみたいから問題ないよ」

……／／／

「……だから……それは反則です……／／／」

あ……また笑った……／／／

もぐもぐ……

んー……幸せーー♪

それにしても……

目の前で紅茶飲みながら

見られてるのも……恥ずかしいんだけど……

「あんまり見ないで下さいよー」

「なんで」

「恥ずかしいですー／＼／＼」

「ヤダ」

うー…これは…恥ずかしい…

でも一緒に来てくれただけで

ものすごく嬉しいからいいや♪

食べた♪食べた♪

「もう食べれませんー」

「そう」

「今日はありがとうございました!!」

「帰るよ」

「あ、はい」

っってお金はいいのかな？

もう先に払ってるのかな…

よくわかんない……

その後家まで送ってもらって

雲雀先輩はすぐ帰っていききました

のんびりした日

んー…休みの日の呼び出しってなんだろう…
それも学校だしー
書類かな？

いやあ…まさか…
このために呼ばれるとは…

……膝枕……（笑）

いや…確かに旅行とか行っていなかったし
その間の書類を毎日してたからしてなかったけど…
まあ、会いたいからいいけどねー
…自分で考えてて…
なんて乙女的発言なんだ……
あー…最近私のキャラも壊れたのかな？
旅行へ行つてからものすごく…
安心するんだよねー
そういう意味では旅行へ行つて良かったかな？
それにしてもよく寝てるねー

ガチャ

あ、草壁さんだ

「こんにちはー」

「風早さん こんにちは」

「委員長!!!」

本日は野球部秋の大会です!!」
なるほど

報告に来たのねー

「あれ？」

起きない？

前まで私以外の人の声だったら起きたのになー

「んー…草壁さん

どうやら熟睡してるみたいなので

後で私がいつときますよー」

「え…寝てるのですか…？」

「そうなんですよー

今までは私の声では起きなかったのは

知ってたんですけど…

他の人の声では初めてですネー

まあ、起きてつて声を掛けたら

すぐ起きるんですけどねー」

「そうですか…」

「急ぎじゃないですよネ？」

「はい

大丈夫です」

「じゃあ、ゆっくり寝かせてあげてください

たまにはこういう日もいいじゃないですかー」

「そうですね」

「はい」

「風早さん」

「はい？」

「ありがとうございます」

「？ なにがですか？」

「風早さんが来てから

委員長が毎日楽しそうなので」

んー…そう聞くと私に来て

キャラが変わったせいだと思うんだよねー

まあ…いいか…

どうしようもないし……

「それは私にも言えますよー？」

まあ…最初は怖かったただけでしたけど」

「…そうですか」

「そうですよー」

「咬み殺されたくないんでー（笑）」

「それもそうですね……」

「まあ、言われたことないんですけどね」

「え!?!」

「あれ？ 知りませんでした？」

私は一度も『咬み殺す』って

言われたことないんですよー」

そうなんだよねー

実は一度もないんだよねー

咬み殺される覚悟は何度かしたんだけどね（笑）

「そうでしたか……」

「そうですよー」

自分でも凄いなと思います！（笑）」

「確かに…すごいと思います」

「まあ…草壁さんもこれからも

雲雀先輩のことよろしくお願いしますね」

「はい 当然です」

「ふふ♪ 雲雀先輩は口には出さないですけど

かなり頼りにしていますんで頑張ってくださいねー」

「はい」

「そういえば……」

「こんなになちゃんと話したの初めてですね」

「そうですね…」

委員長は私と風早さんが話していると……

いえ…なんでもありません」

「へ?。」

「なんでもないですよ」

「はあ……?」

「今日もいい天気ですね」

「そうですね……」

「あ、起きました?」

「……やあ」

「おはようございます♪」

「さつき草壁さんが報告しにきてましたよ」

「へえ」

「今日は野球部の秋の大会ですってー」

「そう」

「見に行きます?」

「優は行きたいの?」

山本君が頑張ってるかもしれないけどー

もうちよつとこのまま2人でいたいかな?

「んー…もう少し2人でいたいかな…」

「そう」

「…はい…」

あ…笑った…

しばらく2人でゆっくり過ごしました

怒ってます

んー困ったなー……

いつもと違うパターンだし

数日続けてだし……

それにどう考えても素人だしなー……

明日聞いてみようかなー

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ」

「おはようございます」

「おはようございます 風早さん

「こんなに早くに珍しいですね」

「どうしたの」

「んー…今日は雲雀先輩より

「草壁さんに用事かな？」

「え!? 私にですか？」

「はいって言っても

「雲雀先輩に聞いてもいいんですけど

「草壁さんの方が詳しいかなって？」

「雲雀先輩が自ら動いたときは

「雲雀先輩の方が詳しいんですけどねー

「昨日の様子じゃ動いてなさそうだったんだよねー

「どうかしたのですか？」

「数日の間で並盛でかわったことありました？」

「……いえ…特に何もありませんが……」

「やっぱりそうですねー

「雲雀先輩が動いてないですもんねー」

「なにかあったの?」

「いつもと違うから気になって……」

「いつもと違うとはどういう意味ですか?」

「いつもは知らない人とかに絡まれそうに

なったりするんですけど

今回はパターンが違うんでー」

「え!? 絡まれるとは?」

「優どういうこと」

「えっと、私ってどう考えても

他の風紀委員より弱く見えるじゃないですかー」

本当は強いけどね

「……そうですね」

「だから風紀委員に恨み?とか持つ人に

絡まれそうになるんですよー

まあ、雲雀先輩の弱点になると思われてる

っていう意味もあるかも知れないですけどー」

「すみません……」

配慮が足りませんでした……」

「気にしなくていいですよー」

私は逃げ足が速いので全く問題ないですよ」

ぶっちゃけ風で人の気配がよめるから

絡まれる前に逃げるんだけどねー

「僕……聞いてないよ」

「言っただけですよ」

それに雲雀先輩がいない時に起こりますし

学校では全く問題ないですからね」

学校は雲雀先輩の権力が強すぎるからね(笑)

学校の生徒が私に何かすると学校生活終わりだしね

それに私に何かあったら連帯責任とかありそうだし……

だって重たいものとか持たせてくれなくなっただもん

体育とか付き合ってからまともにさせてくれない(笑)

まあ避けられてないだけかもしれませんがねー

「……………そう」

「はい」

でも今回はパターンが違うので

ちよつと気になって……………」

「今回はどういう感じですか?」

「ここ数日ずつとつけられてるんですよー」

「え!?!」

「あ、大丈夫ですよ?」

逃げ足はやいって言いましたでしょ?

家はばれてないですよー」

「……………そうですか」

「いつもと違うので」

並盛で事件でも起きてるかな?

って思ったんですけど…

やっぱり違うみたいですねー」

「……………そうですね」

最近は事件が起きてないですね……………」

「草壁」

「はい! 委員長!」

「調べといて」

「別に大丈夫ですよ?」

普通に逃げれるんでー」

つて…調べる気満々だね……………」

「んー…調べるんだったら

なんでつけてたか理由教えてもらえます?」

「わかったよ」

「気になるんでー」

「お願いします」

あれ？

もう調べたのかな？

今日は全くつけられてないやー

明日朝から聞きに行こう♪

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ」

「おはようございます♪」

「おはようございます」

風早さん

「1日で調べてくれたみたいですねー

昨日はなにもなかったです

ありがとうございます」

「いえ、問題ないですよ」

「それで理由はなんだったんですか？」

「それが「草壁」……すみません……

お教え出来ません」

「え!？」

「今どう考えても雲雀先輩が口止めしたよね？」

「雲雀先輩教えてくれるって

いったじゃないですかー」

うー…無視するー

「雲雀先輩!!」

無視ばかりー

「もういいです!!」

雲雀先輩なんて知らないです!」

もう怒ったぞー

教室戻ろう!!」

「失礼しました!!」

バタン

「……委員長良かったのですか?」

「……」

うー…ひどいー

教えてくれるって言ったのにー

「優! おはよ!!」

「おはよーツナ君!」

あ! 今日ってツナ君弁当?」

「違うけど?」

「ほんとにー!!」

だったら弁当食べてー」

「え!? でも…それって…」

ヒバリさんの……」

「今、雲雀先輩の話したくないー」

「…ケンカしたの……?」

「別にー!! (ムスツ)

ってツナ君にあたって悪いよね

弁当せつかく作ったのに余っちゃうから

「食べてよー!! お願いー!!」

「ヒバリさんは大丈夫なの……?」

「雲雀先輩は弁当なかつたら

勝手になにか食べるでしょー」

「………いいのかな……」

「作ってるのは私なんだから

誰にあげるか自由だもん!

ツナ君お願いー!!」

「……優がそこまで言うなら……」

「わーい!! ありがとー!!」

遊びましょう

もぐもぐ……

「美味しい…」

優って料理上手だね!!」

「ふふ♪ ありがとうー♪」

「……なあ」

「ん？ どうしたの獄寺君」

「風早なにしたんだ」

「なにしたって？」

「どうせお前あほなことしたんだろ」

「私は何もしてないよー」

雲雀先輩が教えてくれるって言ったのに
教えてくれないから怒ってるだけだもん」

「へー」

風早が怒るって珍しいよな」

「そういえばそうかもー」

可能性があるとしたら

寝起きが最悪な時ぐらいだもんねー

「んー…今日の放課後みんなでどっか行かね!？」

「え!?! 山本君野球部は？」

「この前、試合あったから

体を休めるってことで今日はないぜ」

「あ、なるほど…」

「優ー! 行こうよー!」

「そうだね!!」

この前せつかくツナ君が誘ってくれたのに
断っちゃったしねー」

「……気晴らしでいいんじゃないか……」

「獄寺君もありがとー」

じゃあお言葉に甘えて思いつきり遊ぼうかな?」

「そうだよ!!」

今日は思いつきり遊ぼう!」

「うん!!」

久しぶりにめっちゃ遊んでるー

ゲーセンなんて雲雀先輩とはいかないしねー
だって人が多いもん(笑)

「ツナ!」一緒にこれやろうぜ」

「え!」

オレがしたら山本の足引つ張っちゃうよ…」

「そんなことないっすよ 10代目!!」

「いや…オレはいいよ…」

んーこれは本当にしたくなさそうだなー

「ツナ君はしたくなさそうだしー

山本君と獄寺君ですれば?」

「そうだなっ!」

「つけ!」なんで野球バカとしなきゃいけないんだよ!」

「じゃあ…このゲームは個人の点数も出るし

勝った方が今日ツナ君の右腕っていうのは?」

「ゆ、優!」

「テメーには負けねえからな!」

「オレもツナの右腕を譲る気はないからな」

おー2人とも本気になった! (笑)

獄寺君って本当にツナ君好きだよね… (笑)

山本君はちよつと意外だったけどねー

はやっ!

もう始めちゃったし…

「優!!」

「ごめんごめん♪」

まあ今日1日って言ったしー」

「……あ……そういえば……」

「もうほとんど1日終わってるのねー」

2人とも気付かなかったね」

私って結構ひどいね（笑）

「そ、そうだね……」

「んー…喉乾いたなー」

適当にみんなのも買ってくるね」

「あ! オレも一緒に行くよ!」

「ツナ君は2人の対決見とかないとダメだよ!」

特に獄寺君はツナ君が見てなかったら

シヨック受けそうだし……

「そうだね……」

「ここで待っててー」

「うん!」

ガコン

4つって結構持つの大変だなー

熱いのと冷たいの両方買っちゃったしー

「すみません」

あ、邪魔だったかな?

「すみません

すぐ移動しますねー」

この人怪我してるねー

大丈夫かな?

「あの……」

「はい？」

「僕はあなたのことが好きです!!」

「へ？」

告白？

でも…この人だれ…

「君はあの人達に脅されて

あの人と付き合ってるんでしょ

昨日僕のところに来て

君には近づくなって言われたよ」

ん？昨日？ってことは…数日私をつけてた人？

あーなるほど…

だから雲雀先輩は私に言わなかったのかー

それもそうか…

付き合ってる彼女が他の男の人に

好意を示してつけてる言いくらいよね…

でも教えてくれる約束だったから

教えてほしかったな…

仲直り

「なんでこの野球バカと同点なんだよ!!」

「同点つてすげえよなっ!!」

「そ、そうだね!!」

「2人ともすごい点数だよ!」

「ははっ! そうだな!」

「あれ? 風早は?」

「飲み物買ってくるって言ってたけど…遅いね…」

「ちよっとオレ見てくるよ!!!」

「10代目!! オレも…っていねえ…」

「ツナ…行くのはやいな…」

んー…なんかどんどん勝手に話してるんだけど…

声かけるタイミングがない……

「あの人達は

君と僕の中を壊そうとするんだ!!」

………なにこの人

私…この人と何もありませんけど……

「優! どうしたの?」

あ、ツナ君!

助かった………

「よくわからないですけど…」

私には付き合ってる人がいるんで……

すみません!!

友達が来たんで…では!!」

はやく逃げよう!!

「彼も君と僕の中の邪魔をするんだね」

「え?」

今…何て言った？

ガシッ

「うわっ!!」

「ツナ君!？」

なんでツナ君が胸倉捕まえられてるの!?

ってか殴る体制に入ってる!?

「10代目!？」

「ツナ!!」

あ、獄寺君と山本君だ…

でも2人の位置からツナ君がちよつと遠い…

リボン君いないし…

もしかして…私のせいでツナ君が殴られるの!?

強い隠してる場合じゃない!!

助けないと!!!

「げっー!」

え？

獄寺君の反応が…変…

ん？私の後ろを見てる？

「君達…なに群れてるの」

あれ？

これって…

ドガッ

あ…ツナ君助かった…

「……雲雀先輩……」

「ひいひい!! ヒバリさん!？」

「ツナ!!」

「10代目!!」

てめえやる気か!？」

「………今回は特別だよ」

「「え!？」」

「優」

「あ、はい」

「外で待ってる」

「え……」

あ…行っちゃった……

「10代目大丈夫っスか!？」

「ツナ無事か!？」

「う、うん……」

「はっ！ そうだ!!」

ツナ君ごめん!! 私のせいで!!」

「だ、大丈夫だよ!!」

「本当にごめん!!」

「オレのことはいいから

優……早く行きなよ」

「え?」

「オレは大丈夫だから

はやくヒバリさんのところ行きなよ

待ってるって言われたんでしょ?」

「でも……」

「早く仲直りしなよ?」

うー…ツナ君って本当に優しい……

「ツナ君…ありがとう……」

「いいってば

また明日ね」

「うん!」

みんなありがとう!! また明日!!」

あ…本当に待ってた……

「お…お待たせしました……」

あ、お礼言わないと……

「優」

「あ、はい」

「優の作ったハンバーグ食べたい」

「……これは……お礼は言うなってことかな？」

「………わかりました」

「美味しいの作りますね!!」

「楽しみにしてるよ」

「はい!!」

嵐が来ました

(ヴァリアー編)

んー…これはリング戦が始まりそうだなー…
昨日の夜からあんまり良くない風が吹いてる…
台風っていう訳でもないみたいだしね
これは嫌な予感ってことだと思っうねー
確か…記憶では…
みんなと出かけてるときに事件が起きたよねー
私も呼ばれるのかな？

あれ？ケイタイが鳴ってるねー
雲雀先輩からかな？

あ…違う…山本君からだね
珍しいねー

「もしもし？」

『風早？』

「うん、そうだよー？」

『今からツナ達と遊ぶけど風早もこねえか？』

あー…噂をすればだね…

「うん！」

行く行く!!」

『商店街の入口近くで待ってるぜ！』

「はあい。今すぐ行くよー」

うん…これは嵐がくるね…

あ！服を持っていかないとダメじゃん
危ない危ない…

「こんにちはー」

うん！すごい人数！（笑）

団体さんだー

雲雀先輩に見つかつたら私もやばいかも…

いや…私は大丈夫と信じよう…（笑）

「ランボ君！ こんにちは！」

「あ！ 優!!」

「今日も元気だねー

抱っこしてあげるよー」

抱っこしないと危ないしね…

「わーい!!」

優！ ランボさんのどかわいた！」

「はいはい」

そういえば…このタイミングで…

なにかあつたような…

覚えてないね…

あ、京子ちゃんとイーピンちゃんがベンチで2人だ！

「ツナ君！ ツナ君！」

「ん？ 優どうしたの？」

「あっち、あっち」

「へ？」

「今チャンスだよー

しゃべってきなよー」

「う、うん！」

優ありがと!!」

「うん♪

こっちは任せなよー」

今から大変なことがあるから

ちよつとはいいことがないとねー♪

ドゴオツ！

あ、来た来たー

派手に暴れてるねー……

……

……

……

ダメじゃん!!

私この前スクアールと会ったよ!!!

やばいやばい……後ろ向こう……

「女、子どもは非難するぞ」

よし！急いで避難しよう!!

……危なかった……

とりあえず避難したし……

私は戻らないと……

「あの……京子ちゃんハルちゃん」

「どうかしたの？」

「はひ？　なんですか？」

「ちよつと呼び出しが入って……」

「あ、彼氏さん？」

違うけど……そうしよう……

「はひー！

優ちゃん付き合ってる人いたんですか!？」

そういえば……言ってなかったような……

「まあ……／＼／＼」

つて照れてる場合じゃない!!

「とりあえず急がないといけけないから

この子たちお願いできる?」

「うん! 大丈夫だよ」

「ハル達に任せてください!!」

うーん……2人ともいい子だ!!

「ごめんね」

今度なにかお礼するからー

じゃ、またー」

よし……なんとかいけたかな……

んー……どこかで見たいし屋上に行くかな?

早く来てください

とりあえず着替えて

良く見えるところに移動したけど…

えっと…今どこだろ？

あ、ツナ君がピンチなところかー

箱渡してるしー

あれ？あんな小さい箱あった？

っていうか2つ??

まあそれは後でいいかー

ってか…そろそろディーノさんが来るよね？

えー…全然見えないんですけど…

つまり…ツナ君のピンチですよー

ってやばいじゃん!!!

助けないと!!!

「発動！」

「うゝおゝおい

それ渡す前に何枚におろして欲しい？」

「渡してはいけません

沢田殿」

「え!?! ちょっとなんなの？

どーなってんのー!!!?」

“彼に手を出すのはやめてくれ”

「あ！ 1位の人！」

いや…だからその呼び名はビミョーだって…

すごいいいタイミングで登場したのに

ずつこけそうになったよ…

「てめーもか、めんどくせえ

死ねえ!!」

「そう簡単にはいかないよ」

キンツ！キンツ！

キンツ！キンツ！

・

・

・

「あの方は…いつたい…」

「いや…オレも知らないんだ…」

いつも助けてくれるしか…」

スクアールまじ剣士！

なんか日本語変だけでもういい!!

集中して刀で防がないと斬られるとか思っ

スクアールの剣に集中したら

容赦なくスクアールの足が目の前に

女性の顔を狙うなよ!?!というツツコミを

我慢しながらバックステップをして避ける

スクアールが追っかけてくると思っただけど来なかつた

なんでだろ？

自分の攻撃範囲はわかってるから私と離れないはずだよな？

私そのつもりで準備してたのに…

「うゝおゝおい!!」

なんだそのナメた武器はあゝ!!」

あー…そういえばスクアールには

ありえない武器だよー

わざわざ聞きたかつたんだね…

「僕は僕の信念でこれを持つてるんだ」

私は本当は誰にも怪我してほしくないんだよ

「ふざけたヤローだあ」！

なかなかの腕だが

テメーの弱点は腕力がないことだあ！！」

叫びながら突っ込んで来た

でも今回は防御じゃなく私も一緒に突っ込む

今まで私は前に出なかったから

スクアアロがビックリした。といつても

そんなことで油断できる相手ではないのは知ってるし

私が前に出たことで逆に喜んでそうだよ

そして刀を交えた瞬間気付いたみたい

さつきと重さが全然違うことに……

体をひねって勢いを出し更に交わる前にジャンプしたし。

スクアアロもビックリするはずだよ

体重移動が完璧じゃないとこの重さは出せないからね

ちなみに今の私が能力を使わず出せる1番重い攻撃だよ

「僕がその弱点に気付いてないとでも？」

もう証明出来るけどあえて言った

そして交えた腕を軽く曲げた瞬間

スクアアロの方の力が勝つ

悪いけどその勢いを利用して前方空中回転して

あ、名前間違ってるかもとか思いながら

スクアアロの後ろに着地して

向こうが反応する前に蹴りを一発入れる

ドゴオーン！！

………うん！

弱点のこと言われてちよつと腹立ったぞー！！

こっちは神様に毎日訓練つけてもらってるんだよ！！

腕力がなくても戦えるように教えてもらってるんだぞー！！

とりあえずぶつ飛ばしてしまった………

「す、すごい……」
「はやく行け！」
「す、すごい……」

「今のはこつちをなめてたから入っただけだ…
もう時間稼ぎしかできないぞ！」

「今のでスクアアロが絶対本気になっただし!!
私は剣士じゃないからこれ以上は正直きついぞ…
デイーノさん早く来てよー」

「助かります！ 沢田殿！ 急ぎましょう！」
「う、うん！」

「ありがとう！」

“ああ”

「とりあえずはなんとかあったか……？」

「スクアアロ先輩」

「はやく終わらせていいですかー？」

「…出た…このパターンって……」

『転生者だな』

「神様もそう思いますよねー」

「あー…もうめんどくさい……」

「ん？なにしてるんだ？刀を振ってる？
!？」

「風がかわった!!」

“沢田綱吉!!”

「へ？」

「キンツ!!!」

「う…重い…一撃が重い…
さつきと違って急いでたから
腕力勝負になっちゃったし!!」

「へえ…」

「俺の見えない攻撃を止めるとは驚いたな…」

「うゝおゝ おい!!」

てめえ見習いのくせに

何勝手に手をだしてんだあゝ あああ!!」

見習いか…

私はこの人と戦うことになりそう…

でもどう考えても…相性が悪い…

避けながら攻撃することになりそうだね

って考えてる場合じゃない!!

めっちゃピンチじゃん!!!

「だって先輩遅いんですもん

さっさと終わらせて帰りましょー」

「それもそうだなあゝ」

ゝおいおい…まじかよ…

2対1は勘弁してくれ…

あー…なんとかか1分は稼ぐよ…:…:ゝ

こりや…怪我決定だね…:…:ゝ

「拙者も戦いますー!」

ゝ…:…:目的を見失うなよ

今ここで戦うことが君の目的か?ゝ

「そ、それは…:…:」

ゝはやく行きなよゝ

あー…格好つけちやったよー…:…:ゝ

さてと…まじでやばいよね…:…:ゝ

「うゝおゝ おい!!」

誰が逃がすかあああ!!」

「先輩俺も手を出しますよー」

「好きにしろお!!」

あー…まじでやばい…:…:ゝ

「あいからわずだな

S・スクアール」

遅いよー…まじで…:…:ゝ

本気で重症かと思った……

えっと、ディーノさんにスクアーロを任せて

こっちは見習いを相手にしないかねー

「時間稼ぎさせてもらう」

「1度俺の攻撃を止めたからって調子に乗るなよ」

たしかに…避けたら後ろが危ないし…

あの重い一撃を何回も止めるのは辛いよねー…

「そんなつもりはないから

時間稼ぎなんだけどなー」

「……いきますよ」

あー…これは大変だ……

「うゝおゝ おい!!」

例の物は手に入れたぞお！」

「先輩がお呼びか……運がいいみたいだな」

去って行ったか…

深追いは禁物だね……

あー…疲れた……

とりあえず…ツナ君のところに行こう……

「そっちは無事か？」

「あー！ 1位の人！」

だから…その呼び名ビミョーだって……

あ、獄寺君と山本君無事だったみたい

ツナ君と普通に話してたしねー

よかった…原作通りで……

私に何も言ってこないのは

多分ツナ君が私の話をしたんだろうねー

「獄寺、山本

お前らの戦闘レベルじゃ

足手まといになるだけだ

とつとと帰っていいぞ」

「リポーン

何てことを！」

あれ？私は？

「おい！ お前は着いてこいよ」

あー…私のことね

“はあ…わかった…”

「行くぞ」

リングをもらう

んー…原作通りに進んでますねー
箱が1個だけだなー

さっきのはなんだったんだろ？

とりあえず空気を消して

端っこにもたれてるんだけど

私はここにいる意味があるのか……？

あ…ツナ君逃げた……

これから大変だなー

頑張れー

あ、他人事になっちゃった！（笑）

“それで僕に何の用？”

「お前は何者だ」

“また…それが……”

「お前の腕は相当だぞ」

“あー…ほめてもらっても嬉しくない…

何度も言うけど僕は争いごとが嫌いだからな”

「だからその武器か？」

“そうだよ

僕のせいで出来るだけ怪我してほしくないんだ

この武器は僕の考えにぴったりあってるだろ？”

「そうだな」

“リボン”

「なんだ？」

“僕の正体知ってどうしたいんだ？

1ヶ月間調べてたみたいだけど……”

リボン君の監視がすごかったよ

まじで……

本当に探しまくってたよ（笑）

「ファミリーに入れるためだぞ」

“なるほど……”

もう1つ質問いいか?”

「なんだ?’」

“デイナーだったか?’”

「ん? なんだ?’」

“もう1個小さい箱あるだろ?’”

「な!?! なんでそれを!?!」

“匣の彼が2つ持ってるのを見た”

「そ、そうか」

“なんで沢田綱吉に見せなかった?’”

「リボーン言ってるいいのか?’」

「ああ」

「こっちの箱に入ってるのは風のリングだが……

選ばれし者しかもてないといい伝えなんだ

初代の時からあったが……

ずっと封印していて数年前に封印が解けたらしい」

“へえ”

あー……私が来たから解けたのかな?

それとも解けたから私が来たのかな?

まあどっちでもいいや

“見せなかった理由はなんだ”

「このリングの情報が全然なくてな

これを誰かに渡すのかどうかも悩んでたからだ」

“ということはそのうちのリングも配るんだな”

「ああ そうだ」

“それもハーフなのか?’”

「ああ」

んー……やっぱり戦わないといけないのか……

“ボンゴレに入るから

それ僕に出来ないか?’”

「え!?!」

「いいのか？」

「お前は争いをしたくないんだろ？」

「『そうだけど…』」

彼らには死んでほしくないからな…：

それに僕はいつかどこかのマフィアに

入るつもりだったよ”

アルコバレーノになった時点で入るしかないもん

「『そうなのか？』」

「『ああ』」

「まだ平和な学校生活を楽しみたいんだ

だから正体を探るのは勘弁してくれ”

「『…：…わかったぞ』」

「『助かるよ』」

「それに入るとしたら…：…ボンゴレか…：

キャバツローネにしようと思ってたしな

「『丁度良かったよ』」

「『…！』」

「『そんなに驚くなよ』」

「『デイーノが良い人そうだったから』」

「『入りたいと思っただけだ』」

「『良いボスのところに入りたいと思うのが普通だろ？』」

「『どうしてオレのファミリーの名前を…：…』」

「『デイーノさんが自分で言ったんだよ（笑）』」

「『オレがアルコバレーノって知ってたからな』」

「『デイーノのところも知っててもおかしくねえぞ』」

「『それは私がアルコバレーノだからだよ（笑）』」

「『まあこれは原作知識もあるけどねー』」

「『『それでどうするんだ？』』」

「『『いいぞー！ 持って行けー！』』」

「『『リボーン!! 勝手に決めていいのかよ!?!』』」

「『『恩にきるよ』』」

あーその彼に体力を分けてもいいか？

「ああ 頼む」

「体力？」

ディーノさんは知らないのかー

あ、リボン君が説明してくれてる

“さて、僕は帰るよ

あー：用事があったら彼に連絡してくれ

彼と僕にはまだ君にばれてない連絡手段がある”

ウソだけどね

毎日会ってて電話をよくするから

違和感がないだけだし…

「わかったぞ」

あ：勝手に決めただけど雲雀先輩怒らないでね…

“じゃあな”

さて：おなか減ったし…

さっさと帰ろう…

あ、荷物取りに行かないと…

「リボンいいの？」

あいつ誰かわかってないんだろ？」

「ああ

だが敵ではない」

「そうか

そういえば彼って誰だ？」

「ちようどお前にそいつの

家庭教師頼もうとしたところだ」

戦ってます

コンコン

「失礼しまーす」

いやー慣れって怖いねー

ノックするのが普通だ（笑）

「やあ

どうかしたの？」

「いやあ…ちよつと面倒なことをお願いしようかと……」

「なに」

「もう1人の私してるじゃないですかー

その連絡先を雲雀先輩にしちやっただんですよねー」

「そう」

あれ？怒ってない？

「あのお…いいんですか？」

「優の頼みだったらいよいよ」

うー……優しい!!!

「雲雀先輩ありがとうございます!!!」

「優」

「はい？」

「これ何か知ってる？」

あ、リンクだねー

「んー…ちよつとだけ知ってるけど

雲雀先輩興味ないでしょ？」

「そうだね」

「多分、誰かが説明に来ますよー」

「そう」

ガラッ！

「おまえが雲雀恭弥だな」

「……………誰……………?」

「ディーノさん お久しぶりです♪」

「優!!」

「……………知り合い?」

「1度会ったことがあるんです

　　まあリボン君の知り合いですよ」

「ふーん 赤ん坊の…じゃあ強いんだ」

「その雲の刻印のついた指輪の話がしたい」

「僕は指輪の話なんてどーでもいいよ

　　あなたを咬み殺せれば……………」

「なるほど問題児だな

　　いいだろう その方が話がはやい」

「あのお……………雲雀先輩」

「なに?」

「ここで戦わないで下さいよー

　　危ないですよ?」

「それもそうだね

　　屋上行こうか」

「いつてらっしやーい」

「なにいつてるの?」

　　優も来るんだよ」

「え!?!」

　　確か……………ずっと戦ってたよね……………」

「うー……………じゃあ本読んでてもいいですか?」

「いいよ」

「じゃあ、行きますよ♪

　　つてことでディーノさん

　　屋上行きますよー」

「あ、ああ……………」

うわー…よくやるねー

本当に戦うの好きだねー

「2人とも私に当てないで下さいねー

では、本読んでるのでー」

うん、私って結構図太いかも！（笑）

いや…図太くなった……………

……………ツナ君のお父さん……………

すっごいあやしいな……………

まあ…いいか…

おなか減ったなあ…

「そろそろおなか減りませんか？

2人とも休憩しませんか？」

「それもそうだな

恭弥いいだろ」

「……………」

んー…これは嫌だつてオーラが出てるなー
しょうがない……………

「せっかく弁当作ったのになー

食べてほしいなー」

「……………わかった」

「じゃあ1時間休憩つてことでー」

もぐもぐ……………

「雲雀先輩ー

別に先輩の楽しみを取る気はないんですけど
休憩出来るときは素直にしたほうがいいですよ？
私だって心配するんですからねー」

「……………わかったよ……………」

結局、昼休憩後もずっと戦ってました

あの2人は言わないと……………休憩しないのね…

休憩したほうがどう考えても効率がいいのに……………

約束

最近…本ばかり読んでる…
もうちよつと時間つぶしを考えないと…
じゃなくて…私も本格的に修行しないと…

神様ー！

『おうー！』

なんだ？』

もう少しだけ修行の時間がほしいですー

『あー…そうだよなー…』

俺がもう少し時間があつたらな…』

だよねー

今まで一時間見てくれてるだけでも

ありがたいもんねー…

『よし！ なんとか明後日の朝に時間とるから!!』

大丈夫なの？

『ああー 任せとけ!!』

助かりますー

『頑張つて時間作るから

またな!!』

ありがとうございます!!

…:…:神様つて…忙しいのに…

人の恋愛ごとのときつて絶対見てるよねー…

あ！そっか！

修行つけるとなると直接相手してくれるから

他のことしながらって出来ないよね

ちよつと誤解してしまつた… (笑)

ごめんなさい…とりあえず謝つておこう…
ん？

明後日の朝って…学校だよね……………

雲雀先輩に言わないと

勝手に休んだら怒るっていうより心配するかなー

まあ…今日は寝よ…

明日の朝に言おう……

んー…今日も戦うのねー

ほんとに好きだね……

そういえばなんか雲雀先輩に用事があつた気が…

「よお 恭弥

今日は戦う前に指輪の話をしてえ

騙してるみてーでスツキリしねえからな」

あ、そうそうなんか話をしようと思ってたんだよ

なんだったかな……

「いいよ興味ないから

あなたをグチャグチャにすること以外」

うわー…雲雀先輩怖いこと言うねー

じゃなくて何の話だったかな……

「つたく困った奴だぜ」

「あ!!!」

思い出したー

「優!?! どうかしたのか!?!」

「あ、ディーノさん

びつくりさせちゃいましたね

ごめんなさい

今思い出したんだー!!

私も雲雀先輩に話あるんだった!!」

「ん？ なに」

「な!? オレのときと反応違いすぎだろ!!」

「明日の朝ちよつと用事が出来て

多分遅刻することになるんだけどー」

「わかった」

「あい

そのつもりでお願いしますー」

「優！ お前から恭弥にオレの話聞け

つて言ってくれよー」

「んー…雲雀先輩その話興味なさそうだしー

自力で頑張ってください♪」

「まじかよー……」

「ねえ話してないで

真剣にやってくれないとこの指輪を捨てるよ?」

ダメでしょ……

あ、ディーノさんが困ってるね！（笑）

ロマーリオさんも笑ってるしー

「わーったよ

じゃあ交換条件だ

真剣勝負でオレが勝ったらおまえには

ツナのファミリーの一角を担ってもらうぜ」

わー…すごいこと言ってるー

頑張れー…2人とも！

暇だ……

持ってきた本全部読んでしまった…

図書室でもいって借りてこようかな？

戻ってきたけど本当に好きだよねー

いつまで戦うのかな……

ピタッ

あれ？止まった？

「どうした？ 恭弥」

「……………」

ん？

「雲雀先輩

どうかしたんですか？」

「……はあ……」

あれ？溜息？

「優、ちよつと来て」

「えっ？」

あれ？どこかに行く？

「おい！ 恭弥!!」

「えっと…ディーノさん

ちよつと休憩ってことでお願いしますー」

「お、おうっ？」

んー……どうしたんだろ？

応接室？

なんか用事かな？

「どうかしたんですか？」

「優、どこいったの?」

あ、そういえば声掛けずにいったかもー

でも、1時間ぐらいしかたってないよね?

「図書室に本を借りにいつてましたよ?」

「ちゃんと声掛けてよね」

「へ?」

「僕だって心配するんだから」

「えっと、ごめんなさい?」

「なんで疑問形」

「さあ……?」

「はあ……」

雲雀先輩ってこんなに心配性だったんだー

はじめて知った!!

「そんなに心配してたらもう一人の私の時って

もっと危ないことしてますよ?」

この前は本気で重傷になるかと思ったしー

能力使えば良かったけど……

スクアールに興味もたれるのがいやだったからねー

ミスして連れ去られたりしたら最悪だしねー

「……怪我しないでね」

「んー努力します」

「約束ね」

「えー…雲雀先輩だって

よく怪我してるじゃないですかー」

「僕はいいの」

えー…そんなあー……

「理不尽ですー」

「もう決めたからね」

うー久しぶりの強制だー

「うー…無理ですー」

「優」

「うー……なんですかあー……?」

／／／／／／／／／／
……2回目……／／／

「約束ね」

「……はい……／／／」

「僕は戻るよ」

その顔戻してから戻っておいで」

「………あい／／／」

うー…雲雀先輩には敵わないです……／／／

なぜかばれてます

それにしても…本当に戦うねー……

明日の朝は私神様と修行だし

暗くなってきたしもう帰ろうかな？

「私はそろそろ帰りますよー？」

「そう」

「ああ またなー」

「はい

では家に着いたらメールしますねー」

「わかった」

「2人とも頑張ってくださいー

ではまたー」

ん？雲雀先輩からの電話？

まだ戦ってると思うんだけどー

「もしもし？」

どうかしたんですか？」

『赤ん坊から連絡きたよ』

あー……もう1人の私にね

「すみません

なにかあったんですか？」

『ランボを保護してほしいって連絡』

あー…そういうえばそういう話があったような……

「わかりましたー」

『行くの？』

「はい。心配ですしー

あ、でも雲雀先輩は別にいいですよ？

まだお楽しみの途中だと思っしー」

『わかった』

約束忘れないでね』

「はい」

頑張ってきますね」

『家帰ったら連絡してね』

「はい」

『じゃあね』

んー…それにしても…

難易度の高い約束した気がする…守れるかな…

って考えてる暇あったら急いでいかないと!!

んー…隠れて見てるけど原作のままかな？

1人多い以外は…

ん？ツナ君のお父さんの気配しないんだけど…

これってまたピンチのパターン？

あー…私が時間稼ぎしないとイケないのね…

「沢田綱吉…」

「!!」

「やべーぞー！

逃げろ！」

スタツ

「何度もいうけど彼に手を出すのを

やめてもらえないか」

うーん…すごい殺気だねー

自分でもびっくりよく動けるね…

まあ…私も止めるために

思いつきり殺気出してるけどー

「い、1位の人！」

だからその呼び名ビミョーだって……

“彼に手を出すなら僕が本気で相手にするよ”

この場合はしょうがないか……

制御解こうかな……

ん？どうやら数秒の誤差だけみたいだね

よかったー

「死ね」

ガッ！

おー…きたきたー

よし、原作通りに戻った!!

んー…このチエルベツロって謎だよねー……

「2人がふさわしいと考える8名が食い違い

それぞれ違う人物に一方だけ配ったのです」

あ、人数増えてるね

「すなわち

9代目が後継者と認めたXANXUS様率いる8名と

家光氏が後継者を認めた綱吉氏率いる8名です」

んー…増えたただけかな？

「そこで真にリングにふさわしいのは

どちらなのか命をかけて証明させてもらいます」

「ちよつと待て」

ん？原作と違う？

「8名の場合、引き分けの可能性があるだろ」

ツナ君のお父さんかー

「いえ、風のリングは特別なので勝敗にはいれません」
？特別？

「特別ってなんだ」

ツナ君のお父さんが聞いてくれたー

聞きたいことを全部聞いてくれるね（笑）

「それは風のリングの対決の時に

詳しく説明します」

んー…なぞだ

まあいいか……

「場所は深夜の並盛中学校

詳しくは追って説明いたします」

ここは変わらないか……

あーツナ君がXANXUSに睨まれちゃったねー…

大丈夫かな……？

この後って確かみんないなくなるんだったかな？

覚えてないなー

あ、帰っていくけど…

なぜかベルがこっちに……

「しっしっ♪ また会えたね♪」

うわー…目の前で言わないでよ……

無視できないじゃん……

ってか…なんでばれてるんだよ…

本当にベル苦手だ……

“……もう会わないと思ってたよ”

「え!? 1位の人

この人と知り合いなの!?”

うわー…ツナ君に誤解される……

「うゝおゝ おい!! いくぞお!!」

「しっしっ♪ またね♪」

姫って呼ばれなくてよかった…

性別ばれるところだった……

「あー誤解しないでくれ
ちよつと知ってるだけでお互い名前も知らないよ」
「ってあれ？」

「なんか足元に……ランボ君!？」

「ごらっ！ あほ牛!!」

「得体の知れないヤローに近づくんじゃねえ!!」

「んー…ぼつちり獄寺君に敵として扱われてますねー」

「君が無事でよかったよ」

「沢田綱吉のところに行きな？」

「僕に近づいたらみんな心配するから」

「ランボさん！…この人絶対知ってるー!」

「おー…小さい子の方がわかるのかな？」

「あほ牛！ いい加減離れやがれ!」

「ほら 呼んでるよ」

「はあーい」

「普通にいったなー」

「駄々をこねるかな？ っと思っただけど…」

「いつも遊んでる私が言ってるって本能で感じたのかな？」

「まあいいや」

「僕は行くよ」

「ベルのこと聞かれたらめんどくさいし」

「さっさと行こうー」

「じゃあな」

権利

……つけられてるねー

これはプロだねー

どうしようかなー

このまま撒くべきか……

それともつけた理由を聞くべきか……

とりあえず気配消してみようかなー

神様が風を操れるから

自然のように消すのは簡単だろって

教えてもらって良かった……

使うことになるとは思わなかったけど……

「親方様すみません 見失いました」

思いつきり背後にいるんだけどねー

親方様ってことはツナ君のお父さんかー

んー…どうしようかな……

「親方様っていう人が

僕に大事な用があるみたいだな」

「な!？」

びっくりしすぎでしょ……

「30分後並盛中学校のグラウンドで待ってる
と伝えといてくれ

じゃあな」

あれ？

ツナ君のお父さんしかいないや

1人とは思わなかったなー

周りを探って見たけど誰もいないしねー

「待ってたよ」

〃へえー

親方様って沢田家光のことか……

で、僕に何の用?」

知ってたけどねー

「リボーンがお前に風のリングを渡した

と聞いたからな」

あ、そっか

勝手にもらっちゃったもんねー

ツナ君のお父さんが選んだ後継者じゃないもんね

〃悪かったな

勝手にもらって〃

「……正体を教えれば

そのリングの後継者の権利を与えよう」

〃断ったら?」

「力づくでそのリングを返してもらおう」

うーん……困ったなー

どう考えてもツナ君のお父さん強いんだよねー

制御してる状態じゃ絶対勝てないや……

それに多分……大事な息子の守護者の1人が

わからないっていうのは嫌だろうなー……

ばらすしかないかな?

〃それで……1人でここで待ってたのか……〃

「ああ 正体ばれるの嫌みたいだからな」

〃……そうか〃

「どうするんだ」

〃誰にも言わないと約束してくれ〃

「ああ」

フード取りますかー
パサツ……

「これで権利下さいね？」

あれ？返事がない？

「ツナ君のお父さん？」

「君は…確か……」

「多分リボン君から私の情報も

届いてると思うんで知ってますよね？」

「……ああ

風早優さんだね」

「そうですよー」

「そうか…

だからツナを助けるのか……」

「友達ですから♪

もうフードかぶりますねー」

さっさとかぶらないと意味ないしねー

「ああ」

カポッ

「それにしても女の子とは思わなかったよ」

「意外とばれなくてびつくりですよー？」

「君は強いから特にな」

「あんまり強くても嬉しくないんですけどねー」

「そうか……

あ、約束通り権利を与えるよ」

「ありがとうございまーす」

「ああ

ツナのこと頼んだよ」

「当然ですよー

……どうして正体隠してるか聞かないんですね」

「そんな野暮なことはしないよ」

おおー大人って感じー（笑）

「助かります♪」

「では私は帰りますよ？」

「眠たいですしー」

「ああ」

「おやすみさない」

「おやすみ」

ツナ君のお父さんって本当に謎だよー
漫画で見た感想はギャップが激しすぎて
いまいちわかんないんだよね・・

あれ？電話？

「もしもし？」

『まだ帰ってないの？』

あ、そういえば家着いたら
連絡するって言ったもんねー

「えっと…ちよつといろいろありまして……」

「今から帰りますよー」

『………気をつけてね』

「大丈夫ですけど……」

んー…空飛んでいきましようか？」

『そうだね』

「じゃあそうしますね」

『着いたら連絡してね』

「はあい」

それにしても……

前によく絡まれそうになるっていつてから
家に着いたら連絡するようになったけど……

私が強いってわかってるよね……？

護身術レベルで倒すことぐらい普通にできるのに……

本当に心配性だ……

試合の相談

神様ー

今日は時間作ってくれてありがとう!!

『おうー』

優の頼みだしな!!』

助かります!

あ、その前にちよつと聞きたいことが……

『なんだ?』

私以外で風を操れる人っているの?

『いや、前にも言ったが優以外は無理だ

無理だから呼ばれたんだ』

ですよー

『ん? なんか気になることあるのか?』

いやあこの前……見習いの攻撃受けたんだけど

見えない攻撃って多分風なんだよねー

私の斬撃にもものすごく似てるんだよねー

『そんなわけないだろ』

んー…例えばさ

転生者に力を与えた方法って

本人以外でもいけるんじゃないの?

『どういう意味だ?』

えつと特殊な武器を渡したとか?

『なるほど』

それは可能性あるな』

んー…やっぱり…

あの武器を壊すべきか……

私の操れる風の量超えてるんだよねー

『それがいいかもな』

もし風の武器だったら壊したら

優の勝ちは決まりっていいだろ』

だよねー

問題は試合方法によつては結構きついんだよねー

『なんでだ?』

ものすつごく重いんだ

一撃が……

『あーここで力がないのが問題になったか……』

そうなんだよねー

避けても大丈夫な試合内容だったらいいんだけど……

例えば後ろに誰かを守りながらとかだったら

力を制御したままだったら正直きついよ

あの一撃が全力の可能性の方が低いし……

『そうだな……』

もし優の言うとおり風の武器だったら

今回の試合は制御解かないといけないかもな』

うーん……フードって簡単にとれる??

『俺を誰だと思ってる

簡単にとれるわけないだろ』

良かったー!!

『手で触って脱がないと脱げないようにしたからな

誰かに触られない限り問題ないぞ

だから学校行けると思うぞ』

ありがと♪

それにしても雲雀先輩との約束が結構きついなー

『ん? 約束?』

あれ? 神様見てなかったんだ

『この時間あけるのに必死だったからな』

ごめんなさい……

『謝らなくていい

で、なに約束したんだ』

絶対怪我しないこと

『はあ?』

なんでそんな無謀な約束を……』

流石の私も無理って言ったんだけど……

『じゃあなんで約束したんだ』

えつと……それは………

『あーなんとなくわかった』

ええええ!!?

『くっそー』

見逃したー』

………

『まあ、本題に戻るぞ』

あ、はい

『特殊な武器だった場合、怪我しないようにするなら

今回の試合はかなりの確率で制御をとることになるぞ』

だよねー……

『ぶっちゃけ制御を解いたら

相手の武器が風だったら

優はすべての風が扱えるんだから

相手は何もできないだろ』

そうだねー

風の攻撃自体出来ないから

ただの物理攻撃だけだね

物理攻撃も風のバリアーをはれば問題ないしねー

『そうだな

まあ集中力がかなりいるのが問題だけだな』

そうだね

風を圧縮してるからね

『ああ。誰も守らなくていい試合だったら

避けながら隙を作って

相手を気絶または武器を壊すっていう方法だったら

制御は解かなくていいだろ』

そうだね!

『まあ、制御を解くか解かないかは

優に任せるけど約束があるから解く覚悟はしとけ』

はい

『後……優』

はい？

『……あの癖……なんとかしろ……』

へ？

『……気付いてないのか……』

?? どういうこと？

『はあ……』

説明してよー 神様!!

『誰にも怪我してほしくなくて

手加減する癖なんとかしろ……』

??? そんなことないよ？

『俺との修行のときと動きが全然違うぞ』

イメトレみたいな感じだからじゃないの？

『それは関係ないぞ

優は相手に合わせて力を加減するから

苦戦するんだよ』

うそだー

『スクアールと戦ってる時……』

これ以上はきついつて思っただろ？』

うん

『あれがいい例だ……』

自分で手加減して苦戦するなよ……』

……そうなの……？

『俺が毎日見えてて戦いのセンスもあるんだぞ？』

ふむ……

どうしたら治るかな？

『あーちよつと待て』

なんか調べてそうだね

『無理だな……』

癖のレベルじゃないな……魂からだな』

え!?

『無理に治そうとすれば魂に傷がつく……』

それはダメだね……』

神様でもできないことがあるんだね

『当たり前だろ

優の場合は言う必要がなかったが……』

特殊能力は人の死に関わるレベルのは渡せないからな』

いやいや……いらないよ……』

まあそれもそうだねー

神様が渡した能力で直接誰かが死んじやったらまずいよね

『ああ

特殊能力はサポートレベルで考えろよ』

うん

わかったー

しようがないよね

ふう…疲れた……

精神世界で戦うっていつても疲れるんだよねー

あ！早く学校行かないと！

あれ？屋上にいない？

なんでだろ？

あー！思い出した…

試合会場が学校だったから並盛から離れたんだ…

どうしようかなー……

あ、噂をすればかな？

電話がかかってきたよ

「もしもし」

『用事終わった？』

「はい。今学校にいてるんですけど

いなくてどうしようかなって思ったところです」

『前に一緒にいった並盛山にいるよ』

「あ、あそこですねー

わかりましたー行きますねー」

『待ってるよ』

フードかぶって空飛んで行こうかな

その方が早く着くしね♪

うわー…凄い戦い……

ん？止まった？

「恭弥どうした？」

「そこにいるんでしょ

出てきなよ」

「恭弥何言ってるんだ？」

「完璧に気配消したんだけどな……」

「!？」

「僕にはわかるよ」

うーん……

デイナーさんにもわからなかったのに……

なんで雲雀先輩にはばれるのかな……

「なんでその格好なの」

この格好で出るつもりはなかったんだけどね……

「すぐ出ないと怒るだろ？」

意味分かってもらったかな？

「僕は帰るよ」

「わかったよ」

「ちよつと待て!!」

ん？デイナーさん何の用だろ？

「僕に何の用？」

「お前の正体教えてもらおう」

デイナーさんは聞かないと思ったのになー

「また……それか……」

「お前はヴァリアーとつながりがあるからな」

「リボーンに聞いたのか……」

その時も言ったけど

お互い名前も知らないような相手だよ」

「ヴァリアーとつながりがある以上

ツナの兄貴分としてお前の正体を

力づくでも教えてもらおうからな！」

あー……そうか

ツナ君が心配で正体を知りたいのね

いい兄貴だねー

やっぱりディーノさんは良い人だね♪

〃それは勘弁してくれ

僕はあなたとは戦いたくはない……〃

ディーノさん攻撃したくないしさつきと帰ろう…

「逃がすかよ!!!」

ロマーリオ!!」

「へいーボスー」

うわっ!

いきなり後ろから攻撃しないでよ

ガッ!!

あ…ロマーリオさんは囧だったのね……

うー…右手を拘束するとは…しまったなー

武器出しとけばよかった……

すぐ変装とくつもりだったから…出してないよー

しょうがない…

能力つかって拘束といってさつきと帰ろう…

ビクッ!!

………雲雀先輩からすごい殺気が……

「恭弥怒るなよ

こいつの正体わかったら

お前の相手するからちよつと待てよ」

「………はやく離しなよ」

あ…もしかして…

私が捕まってるから怒ってるのか……

「ダメだ

こいつの正体を見ないといけないからな」

………やばい…めっちゃ怒ってる……

えっと、今ディーノさんの武器は

私の右手を拘束するのに使ってるから

今、雲雀先輩がディーノさん攻撃したらやばいよね……?

「はやく離しなよ」

わあードンドン近づいていってない…？

「ちよ、ちよつと待て!! 恭弥!!」

今オレの武器はこいつに使ってるんだ」

……やばくないですか……？

あー間に合って!!

「知らないよ」

ビュツ!!

「!？」

ガツ!!

間に合った……

なんとか2人の間に入れたー……

「お前なんでオレをかばったんだ……？」

「僕のせいで君が怪我するのが嫌だったんだ」

あ……雲雀先輩が心配そうにしてる……

「安心しろ」

僕は君との約束はやぶってない」

「………帰る」

「な!？」

それはまずいよね……

でもなんで帰るんだろ？

……

「なるほど……」

「ディーノ、僕の正体教えるから黙っててくれないか？」

「は!？」

「ダメだよ」

「僕は君の楽しみの邪魔をしたくない」

多分ここからだったら心配したくても

出来ないから帰るって言ったんだよねー

私が怪我してないって言っても心配なんだよね

「………」

「雲雀先輩は心配しすぎなんですよ

私は約束やぶってないですよ？」

「この声……」

もうフード取ろうー

パサッ

「ディーノさん、ロマリーリオさん

黙っててすみませんでした」

「……優……」

「あ、勝手に拘束はしませんねー

これのせいで雲雀先輩が怒ってたんでね」

風を操ればこれぐらいすぐ外せるしねー

あ、炎を纏ってたら出来なくなるかもね

シユルル

「!？」

「これぐらい私には簡単なんですからね？」

「……………」

まだ怒ってるし心配してるね……

ヒミツ

「まさか…優だったとは……」

「すみません……」

「いや……こっちこそ

手荒なまねしてすまん!!!」

「しようがないですよー

あやしかったと思うしー

なので雲雀先輩もディーノさんを

許してくださいね？」

あー…どっかいつちやった……

「……怒つちやいましたね……」

私が勝手にフードとったのもあると思いますけど……」

「……そうかもな

でも、なんで優がヴァリアーと知り合いなんだ？」

「えっと…それはですねー

前に雲雀先輩にも言っただんですけど……

イタリア旅行にいったら

王子？っていう人に拉致されて姫と呼ばれ

その後その王子の知り合いの

声の大きい人とオカマの人に助けられて

日本に帰れたという事がありましたー…

今回の敵とは思いませんでしたー

もう会うこともないと思っただんで名前も言っていないです」

本当に言わなくて正解だったよ………

「そ、そうか……」

「私もフードかぶってたから

気付かないって思っただんですけどねー

まさか私って気付かれるとは……」

「確かに…オレも優だと気付かなかったのに……」

「ですよねー

びつくりしました」

「優はなんでオレのファミリーの名前知ってたんだ？」

「ディーノさんが自己紹介した時に

自分で言ったんですよ？」

「あー」

忘れてたのね……

「えっと……他にも聞きたいことあると思いますけど

このままだと雲雀先輩帰っちゃうんで

ちよつと行つてきますねー

今学校に戻っちゃまずいですよね？」

「……………ああ

…すまねえ……………」

「雲雀先輩ー」

まだ近くについて良かったー

「……………腕見せて」

「大丈夫ですよ？」

「……………見せて」

これは見せるまでいいそう…

ゴソゴソ…

「ほら？ 大丈夫でしょ？」

あ…ほつとした顔してる……

「拘束とるために右手に能力を集中してたんですよ

だから右手にトンファーが

当たつても大丈夫だったんです」

「……………他にも方法あったよね」

「ありましたけどー

声かけて止めると誰かわかるかなって

思いましてあの方法が一番いいかなって？」

「……………僕を浮かせる方法は？」

「そっちの方はギリギリだったんですよ
かなり右手に集中してたんで……………」

「……………」

「私がああ格好でいったのが悪かったんですよ」

「……………違うよ」

雲雀先輩が声かけたのが原因と思ったのかな？

んーそれは違うんだよねー

「んーはつきりいますね」

恥ずかしいけど……………」

「……………なに」

「あの格好で行ったのは空飛んで行った方が

少しでも雲雀先輩に早く会えるかな

って思ってたんですよねー…

だから……………ただ会いたくて

私が後先考えず行動してしまったのが原因ですよ」

「……………優」

「なんですか？」

ぎゅ…

……………

「雲雀先輩…？／／／／」

「少しこのままでいてね」

「……………はい……………／／／／」

……………はじめて…抱きしめられた……………／／／／

「顔赤いよ」

「……………それはしょうがないですよ……………／／／／」

あ…笑った……………／／／／

「そろそろ…戻りません？」

「そうだね」

「近くでいますね？」

「わかった」

後でディーノさんにどうやって

雲雀先輩の機嫌を戻したか聞かれたけど…
ヒミツですとしか言えなかった……／／／

嫌なもの

それにしても良く戦うよね…

それも移動しながら…… (笑)

んーそろそろ帰ろう…

今日は神様と修行して疲れてたからかな？

途中で昼寝しちやっただしねー

「私はそろそろ帰りますよー」

「わかったよ

帰ったら連絡ね」

「おうー・またな」

「はい 了解ですー

ではまた明日ー」

さて…試合見に行こうかな……

んーちよつと早く来たかな？

「しっしっ♪ 姫はやいね♪」

誰もいないか

「その呼び方前にもやめてって言ったんですが……」

「うゝお おい!!」

なに敵とはなしてんだあ!!」

わざわざこっちに来たよ

スクアー口も大変だなー

「だってオレの姫だもん♪」

だから違うって……

「な、!? お前この前の奴か!？」

「あ、ぶっ飛ばしてすみませんでしたー」

あ、スクアー口黙った（笑）

「とりあえず、一泊の恩があります」

私はツナ君の友達なので敵ってことで

よろしくお願いします

後、男のふりをして正体隠してるので

姫っていうのもやめてほしいです」

「しっしっ 姫の頼みだったらいいよ」

姫じゃないけど……やめてくれるならいいや……

「お前はなんのリングだあ、!!」

「風ですよー」

理由はわからないですけど勝敗は関係ないですよ」

「オレは姫を応援しようかな♪

勝敗関係ねーし」

「そっちにも風のリングの人いてるんですよ？」

「レビイが見つけてきた奴だしー

オレあいつ嫌いだしー」

「そういう問題でいいんですか？」

「だってオレ王子だもん」

……だめだこりゃ……

「………なんとかしてください」

「ボスの許可を得たらいいぞお!!」

「止めましょうよ……」

「勝敗関係ないから問題ねえだろ、お

それにあいつはまだヴァリアーの一員じゃねえ

今回の試合で勝ったらヴァリアーの幹部だ」

んーつまり変なところに原作補正でもかかっているのか？

まあどうでもいいや……

「へえーそうなんですかー

でも私は敵と思ってますよ?」

「関係ないよ♪」

ダメだこりや……

「じゃあ……そつちで勝手に決めてください

来たみたいなので……私はこれでー」

「しっ♪ またね♪」

なんでこんなに私の話を聞かないんだろう……

円陣は勘弁してほしいし

ちよつと気配消して離れて見とこう……

そうそう!! 名前ルツスーリアだ!!

なんかすつきり♪

あー……しまった……

サングラス用意してなかった……

まあ……いいか……

途中で割れるし……

気配は風でわかるしね……

んー……原作通りだしこのままほつといていいか……

最後だけ手を出すけどねー

よく考えたら……

ヴありアーの人の名前呼んだことないな……

○○さんって呼ぶんだよね……

すっごい……違和感……

でも現実では呼び捨てが嫌だしなー……

本人が呼び捨てでいいって言ったら別だけど……

「たった今ルッスーリアは戦闘不能とみなされましたよつて晴れのリング争奪戦は笹川良平の勝利です」

「チエルベツロ!!」

「あー！ 1位の人」

だからその呼び名ビミヨーだつて……

「勝利が決まったから僕の好きにさせてもらおうよ」

あんまりこの技使いたくないんだよねー

刀に風を圧縮すると集中力いるんだよ

それに斬れちゃうから危ないんだよねー

スパン

これぐらいの細い鉄はやっぱり問題なかったか……

「え!？」

「鉄を斬りやがった……」

「(あいつの刀は斬れない刀だったはずだぞ

どうなってるんだ?)」

スタツ

「笹川了平」

「ん？ 極限になんだ!」

「悪いが重傷者を先に診るよ」

「お……おう……」

………本当にひどいことするよね……

止血してちよつと体力あげたからいいか……

意外とヴアリアーが何もして来ないなー

スクアーロさんが私の正体を知ったからなのか

敵を治療する変な奴ということ様子見なのか

「鉄を斬った腕を警戒してるのか……」

まあ手を出さないから何でもいいやー

「悪い……待たせた……」

怪我より熱中症のほうで

体力が減つてると思うから僕の体力をあげるよ

勝手に触るぞ”

「おお！　なんか体が楽になったぞ!!」

うーん…そんなにわかるもんなのかな？

京子ちゃんのお兄ちゃんは感覚派だからかな？

”あんまり…妹に心配かけるなよ…”

「お、おう」

”チエルベツ口待たせたな！

進めていいぞ”

「はい

今宵の勝負はこれで終わりますが

今回より決戦後に次回の対戦カードを発表します」

「え…!!」

もっもうわかつちやうのー!!?」

「それでは発表します

明晩の対決は雷の守護者同士の対決です」

「雷つてランボじゃん!!」

「こいつ戦えんのー!!?」

「それでは明晩

お会いしましょう」

確か…この後つてリング壊れたかな？

”僕も帰るよ

じゃあな”

「おい！　待ちやがれ!!」

バシユ!!

やっぱり壊れたか…:

「わあ!!」

なんか声掛けられた気がしたけど

無視しちゃった…:

戦いつてやっぱり嫌なものだね…:

「極限にさっきのは誰だ!!」

「お兄さん、オレ達にもわからないんだ…」

「あいつ…怪我の治療して帰っていったな…」

「だが、わけわからねーヤローには違うない!!」

「やっぱり…悪い人には見えないよ」

「10代目……」

「ははっ! そうだな!!」

「極限にオレも助かったぞ!!」

拉致 2

うーん……また誰かにつけられてる……
でも隠れてつけてるわけじゃないんだよねー
私にわかるようにつけてる……
気配消してててかなりのスピードで走ってるんだけど……
それでもなかなか撒けないんだよねー
体力あげたから眠くなると困るんだよねー
しょうがない……

スタツ

この場所でいいか……

戦わないといけないのかなあ……

スタツ

「ひーめ♪」

……ベルさんだったのね……

「なにか私に用事ですか？」

「しっしっ

姫の料理食べたいな」

はい？

「あのお……私は敵ですよ？」

「関係ねーし♪」

いや……あるよね……

ふわっ

え……まさかこのパターン……

「えええ!？」

おろしてください!!!」

「しっしっ

やだね」

またこのパターンなの!？」

能力つかって戦って逃げる途中に

ベルさんが怪我しちゃったら
反則になっちゃったりするの!?
えーどうしよー

うわー敵陣に突っ込んでいく私はどうしたら……

「うゝおゝ おい!!
てめえなにしてる!？」

〃彼を止めてくれ!!〃

僕は家に帰りたいんだ!!〃

「ムム

ベルが敵をつれてきたね

「マーモンちゃん可愛い!!

ガチャ

「ボスみやげっ♪」

降りれた……けど……私死ぬかも (笑)
ギロツ

〃あー悪い……〃

今すぐ帰るから許してくれ……〃

言うだけいってみた

殺気は減らなかつたね♪ (泣)

「ボス

姫の料理は美味いんだぜっ♪」

〃……君一人が食べたいだけだろ

僕はものすごく居心地が悪い〃

まじで……

「おい」

〃なんだ……?〃

「腕がたつらしいな」

スクアーロさんに聞いたのかな？

“スクアーロとある程度は戦えるレベルだよ
まあ風の守護者の対決は僕が勝つさ”

「しっしっ」

姫強気じゃん♪」

“封印がとけた心当たりがあるんだ”

ピクツ

おー興味持ったみたいだね

「言え」

“言えば無傷で帰らせてくれよ”

「やっせと言え」

約束ぐらいしてよねー……

まあ向こうも下手に手は出せないと思うしね

“封印がとけたのは去年の春じゃないのか？”

睨んでますねー

“4月4日とか？”

まあこれは自信がないけどな”

「詳しく話せ」

“あつてたのか……”

僕はその日の夕方に心当たりがあるんだ

まあこれ以上話す気はないけどな

君達の仲間がこの日に心当たりあれば

聞けばいいだろ？”

「……………名はなんだ」

“あーこっちの顔の名前を決めていない”

「オレの姫♪」

“それは断つただろ……”

それに僕は男のフリしてるから

姫とは呼ばないでくれと頼んだだろ……”

「しっしっ」

全く反省してないし……

うーん…名前ねー…

〃……………XANXUSが決めるか？〃

ギロツ

イチイチ睨むのはやめてほしいんだけど……

〃深い意味はないよ

表の名前は親がつけて僕を捨てて

会ったこともないんだ

まあ唯一もらったものだから大事にしてるけど……

誰か知ってる人につけてほしいと思っただけだ〃

「……………なぜオレに言った」

〃裏の顔で行動してると僕の名前より

正体を聞くからな

君が初めて僕の名前を聞いたんだ〃

た、多分ね……

みんな何者が聞くだけだもん

雲雀先輩はすぐ私の正体わかっちゃったしね

「……………ヴェント」

〃ありがとう

大事にする〃

「……………好きにしろ」

「しっっ

良かったじゃん♪」

〃ああ

〃ご飯は今から食べるのか？〃

「明日の朝だぜ」

〃……………なぜ僕を今日拉致したんだ？〃

「泊まればいいじゃん♪」

〃僕は敵陣の中で寝るほど凶太くないぞ……

君の分だけ作って明日弁当持って来るよ

それでいいだろ？〃

「泊まっていけ」

XANXUSさんが言ったらダメでしょ……

というか…なんで言ったのー(泣)

「ボスの許可が出たぜ

部屋に案内するぜ」

いや……帰らせてよ……

“家に帰るよ”

「行こうぜ♪」

ぐいっ

だから私の話を聞いてよー

結局、眠かったため1泊することになりました……

拉致 2 その後

これは優が個室に案内されてから
しばらくたった後に起きたことである…

「敵が泊まってるとはどういうことだ!!」
「ししっ」

オレが連れてきたんだぜ♪」

「貴様!!」

「うゝおゝ おい!!」

てめえらうるせえぞお!!」

「ベル先輩どういうことですかー!!」

「うっせ」

「ひどいですー」

「スクアアローの話では

彼が1番の危険人物と聞いたけど本当なのかい？

ベルに簡単に拘束されてたところを見ると

そうは見えなかったけどね」

「かなり強いのは確かだあゝ」

オレと手を合わせた時は手を抜いてやがったあゝ」

「それ程の実力者をここに連れて来て

ボスを危険な目にあわすとはどういうことだ!!」

「問題ねーし♪」

ボスに泊まる許可はとったぜ」

「ぬおおう!？」

「それにあいつが泊まるのはこれで2度目だあゝ」

「どういうことだ!!」

「ムム

僕もそれは初めて聞くね」

「ししっ

オレがアジトに連れていった」

「な!？」

「アジトの場所を簡単に教えるとは!!」

「うゝおゝ おい!!」

「いちいち怒鳴るなあゝ!!」

「スクアールが一番うるさいけどね」

「うるせえゝ」

「あいつは無駄な争いはしねえタイプだあ」

「前に一度アジトに来た時は」

「素人にしか見えなかったあゝ」

「それは貴様の目が節穴じゃないのか!!」

「あゝあゝ!？」

「オレも見えなかったんだよねー」

「ベルはなんでアジトに連れて行ったのさ」

「気に入ったから」

「そんな理由でアジトの場所を!!」

「ベル先輩！」

「どうしてあいつが良くて俺はダメなんですか!？」

「うっせ」

「しゃべんな」

「死ね」

「う……」

「スクアールとベルの話によると」

「彼は自分のことに対しては」

「警戒心が低いタイプじゃないのかい?」

「あゝあゝ」

「あれほどの腕だあゝ」

「いつでもベルの拘束はとけたはずだあゝ」

「わざと捕まって」

「ボスになにかする気じゃないのか!？」

「それはないね」

「敵陣に突っ込むのはリスクが高すぎるよ」

「それに前にアジトに来た時も今回も

帰りがつてたからなあ。」

「演技の可能性もあるだろ!!」

「問題ねーって

明日のメシ作ってもらうだけだしー」

「敵が作ったのを食べるつもりなのか!？」

「だって美味しいんだもん」

「前に来た時に食べたのかい？」

「オレとルツスーリアも食べたあ。」

「特になにもなかったんだね」

「うまかったぐらいだ

それにルツスーリアにも気に入られてたぞあ。」

「その様子だとスクアーロも

そこまで嫌いじゃないみたいだね」

「警戒する相手ではないと思ったただけだあ。」

「ますます彼が謎だね

敵であるのにここまで好かれるなんてね

ボスまで泊まる許可を出したしね」

「問題ねーってオレは寝るぜ」

「貴様！ 話は終わってない!!」

「クソボスの決定だあ。」

「この話はやめだ!!」

「ぐっ……」

「それもそうだね

ボスが決めたことを言ってもしょうがないね」

「見習いもさっさと寝ろあ。」

「……わかりました」

ボスが決めたことだったので優の安全は確保された

「うゝおゝおい

「マーモンは寝ないのかあ」

「彼に興味が出たよ」

話を聞いた限りでは彼は朝早くに起きて

ベルのご飯だけ作って帰るはずさ

スクアアールも寝ないつもりだよね」

「当然だあ」

「見習いのことを信用してないのかい？」

「……あゝあゝ」

「敵の方を信用してるとは面白いね

部屋に戻ってまた後で来るさ」

こうして…夜は更けていった……

拉致 2 朝―1

……眠い……かなり早くに目覚ましかけたしね
さつさとベルさんの分だけ作って

雲雀先輩に会いに行こう……

昨日は私の対戦相手と変態親父には会わなかったしね
まあ部屋に入ってしばらくしたら

もめてたのは聞こえたけどねー(笑)

まあXANXUSさんが許可出しちやったから

誰も来なかったみたいだね

前も思ったけど意外とベルさんは紳士だよ

部屋とか普通に入ってくると思うけど大丈夫だもん

まあ度をこえると……

嫌いになるってわかってるのかな？(笑)

ガチャ

「起きたのかあ」

スクアールさんしかないね

「はい

ものすごく居心地が悪いんで……」

「それもそうだなあ」

「スクアールさんは私を見張ってたんですか？」

「たまたま起きてただけだよ」

「てめえが何かしようとしても起きるに決まってるだろ」

「暗殺部隊だから当然か……」

「それもそうですねー

……あれ？もしかして逆でした？

私を守ってくれてたとか？」

「んなわけあるかあ」

「んーでもたまたま起きてるにしては無理があるような……

まあいいか……

「そうですかー

まあ私はベルさんの分だけご飯作って帰りますね」

「うゝおゝおい!!」

「なんですか?」

「オレの分も作れえゝ」

「いいですけど…」

敵のご飯をよく好んで食べますね………」

「腹が減ったんだゝあゝ」

そういう問題なの……?」

まあいいや…」

「今回は日本なので日本食にしたんで

口に合わなかったらすみませんね?」

米があるのに炊飯器がないから鍋で初めて炊いたよ

まあ味見したら全く問題はなかったけどね

口に合わなくて怒っても私は知らない…」

「あゝあゝ」

「てめえも食うのか?」

「毒が入ってない証明になるかなって思いましたー」

まあ作ってたらお腹が減ったのもあるけどね

「てめえはそんなタイプじゃねえだろおゝ」

「あれ? よくわかりましたね?」

「てめえの腕だったら

ベルの拘束をとけただろおがあゝ」

無駄な争いはしねえタイプだろお」

なるほど……」

1度戦って私の腕がある程度わかってるから

昨日の拘束はなんとかなるって思ったのね

「まあそうですね

「前も悩みましたよ」

「オレと戦ってたときも手エ抜いてただろおが!!」
あーそっか

腕力ないってばれたのにぶっ飛ばせたからねー
実力を出してないのがばれてるよね

「抜いたわけじゃないですよ

治らない癖ですよ

相手の力量に合わせるだけです

スクアアロさんが本気じゃなかったから

こつちも本気じゃなかったただけですよ」

「今オレとやるかあ!!」

前哨戦だあ!!」

食事中に机の上に立たないでほしい……

そういえば雲雀先輩はこういうことしないよねー

まあ席を立ったスクアアロさんを無視して

普通にご飯食べるぐらい凶太くなったのは

雲雀先輩のせいだと思うけどね

ある意味感謝すべきなのかも……（笑）

「試合前に戦って怪我をして

試合に負けたらどうするつもりですか？」

あ、スクアアロさん黙ったね（笑）

ガチャ

「ムム

なにしてるんだい？」

今日もマーモンちゃん可愛い!!

〃一緒にご飯食べていると

彼が戦えって言うから断っただけだよ〃

「試合前に怪我するなんてバカだね」

「ぐっ」

スクアアロさんの戦闘スタイルを考えれば

普通そう思うよねー

〃僕も同じこと言ったよ

それにスクアアロの情報を貰うことになるぞ”

「それはてめえにも言えるだろお。」

”君は勘違いしてるよ

あれは僕の本当の戦闘スタイルじゃないぞ

まあ普段はあれを使ってるけどな”

「!? どういうことだあ”!!」

昨日斬ったのは剣の腕じゃないのか!？」

”あーあれは違うな

まあ僕の戦闘スタイルに近いかもな”

風を圧縮させて使うのも少し違うんだよねー

風で起こる自然現象の使い方が私の本当の戦闘スタイルだもん

まあなかなか使えないけどね

”それに僕の刀は峰をかえさないと

斬れないことは君が1番知ってるだろ?”

あ、スクアアロさんが黙った (笑)

「君もレヴィが連れてきた彼と同じ武器なのかい?」

あ、情報ゲットー♪

やっぱり特殊な武器だったんだー

風の武器の可能性が限りなく100%に近いね

”君達が思ったように感じればいいさ

僕は剣士ではないことがわかったただけいいだろ?」

こっちの情報は詳しく教えるわけないしね♪

「ムム

レヴィが連れてきた彼と

ベルが連れてきた君……それも2度……」

あー12度目って知ってるのね

「う”お”おい!!」

こいつのほうじゃねえのか!？」

……ベルさんの方が信頼されてるのね (笑)

”さあな?」

まあ昨日君達のボスに封印がとけた心当たりがある

って言っつて少し話をすれば僕に興味が出たみたいだよ
だから僕をここに泊めたんだらうな”

「!?」

「なにをいったあ”!!」

”封印がとけた日と

大雑把だけどその時間を言っただけだよ”

「!?」

いやー2人の反応が面白すぎだねー

”勝敗関係なくて良かったな

僕は洗い物をして帰るぞ

彼のご飯はおいてるからな

後で食べるように言っっておいてくれ

じゃあな”

これ以上話しているとヴァリアーに勧誘されそうだしね (笑)

ここまで言っつたから不戦勝にならないかなあ……

拉致 2 朝―2

「おはようございます―」

「よお優 早いな」

恭弥は今寝たところだぜ」

「はい」

さつき電話した時に少しは寝ないと心配する方の身になってくださいよ
って言いましたよ」

「なるほど……」

「それにディーノさんはまだ逃げないですよ
って言ったのを信用してくれたのもあると思いますよ
まだもうちよつと鍛えるつもりと思うしね―」

「そ、そうか……」

「まあ私も眠いので今からここで寝るので
あんまり動いてほしくないっていう意味も
あつたんですけどね―」

「そうなのか？」

「はい」

昨日はいろいろ最悪でしたからね」

「治療したんだってな……」

「当たり前です」

勝敗決まったから好きにさせてもらいましたよ
止血して体力もあげたので多分大丈夫ですよ」

「……そうか」

「はい」

それに昨日は私のほうが危なかったですよ」

「何かあつたのか？」

「また王子……ベルさん？でしたっけ？」

まあまたその人に拉致されて

昨日はヴァリアーのところで1泊したんですよ」

「!?!」

ロマーリオさんまでビックリしたね（笑）

「居心地が悪くて悪くて……」

「当たり前だろ……」

「ですよー」

ベルさんの朝ご飯作るために拉致されましたよ

さっさと作ってこっち来ましたよ

あそこにいると昼ご飯まで頼まれそうでしたしね」

「断れよ……」

「いくら言っても話を聞いてくれないんですよ

スクアアロさんまで私のご飯普通に食べますしねー」

「まじかよ……」

なぜかディーノさんが遠い目になってる（笑）

そういえば…ディーノさんとスクアアロさんは

知り合いだったっけ？

まあ私も作れって言ったのはビックリしたよ……

「さっきまでスクアアロさんと一緒にご飯食べてましたよ

ベルさんはまだ寝てましたけどね

まあ私と対戦相手っぽい人とは会わなかったみたいですが

殺気を向けられたのはXANXUSさんだけでしたしー」

「……よく無事だったな……」

「少し奥の手を出したんですよ

それで助かりました

泊まっても無傷で帰ってこれましたよ」

「奥の手ってなんだ？」

「ただ封印がとけたことに心当たりあるって言って

封印がとけた日と大雑把の時間を言ったただけですよ」

「!?!」

「まあ眠いんで寝ますね……」

まじで眠いし……

「優！ 待て！」

「ふわぁ……」

「なんですかぁ……う？」

「とけた日はいつなんだ!？」

「去年の4月4日じゃないんですかぁ……?？」

「……確認された日が4月7日なんだ……」

「発表されているのは7日の方だぜ……」

「へ……う? そうなんですか?」

「4月4日の夕方と思っただんですけど」

「違っかつたんですかねー」

「……その前に見たのは4月4日の朝で」

「その時はまだとけてなかったんだ……」

「だから4日の可能性もあるが……」

「じゃあ4日の夕方……」

「16時ごろにとけたんですよ……」

「私はその時しか心当たりないんで……」

「優 詳しく話せ!!」

「んー起きたら話します……」

「おやすみなさい……」

「起きた時にはオレは恭弥の相手……」

「寝てるな……」

「ボス……そのことを知ってるのは……」

「……ああ」

「一部の人だけだ……」

「ヴァリアー……XANXASは……」

「優に興味をもったと思うぜ……」

痩せ我慢

んー…よく寝た……………

キヨロキヨロ

あ、意外と移動してなかった

私が寝てたからかな？

「おはようございます」

「やあ」

「起きたのか？」

「はい」

雲雀先輩達は見たところ……

あんまり寝てないみたいですね」

「……………ああ」

雲雀先輩が起きちやっただね（笑）

「2時間ぐらい寝たのかな？」

「そうだよ」

「優…よくわかるよな……………」

「毎日見てるんでね」

2人のことはわかってるつもりですよ」

「そ、そうか……………」

「まあ頑張ってください」

私は見てるんでー」

うーん…本当はもうちよつと寝てほしいんだけどねー

寝てくれただけましと思っただほうがいいか……………

デイーノさんが逃げちやう可能性が高かったら

寝ることを頼むことさえ出来ないしねー

というか…それ以前に…

なんでこの2人は戦い続けることが出来るんだ？

根本的におかしいと思うんだよね

私にはありえない…まじで……………

今日はランボ君の試合かあ……

……かみさま……

『ん？どうした』

私がリングとられたらまずいよね……？

『……そうだな』

お願いがあるんだけど……

『なんだ』

近くでいるから終わったら声掛けてくれない……？

『いいぞ』

今回も問題ないぞ』

ごめんね……

『わかってるよ』

見てると手を出してしまうんだろ？』

うん……ありがと……

「雲雀先輩」

そのままでもいいんで聞いてくれますか？」

「なに」

「今から1度家に帰って

今日の夜中にまた来てもいいですか？」

「……………」

「あ！ 能力使ってここにきますよっ！」

「わかった」

「ありがとうございます」

『優…嵐の守護者って発表されたぞ』

あ…ありがと……

『いいから早く行け』

うん……

「ランボ!!」

「大丈夫か!？」

「アホ牛!!」

スタツ

『僕の体力を使ってくれ……』

「あ…お願いします……」

こんな小さな子に……ひどい……

「え……」

『僕ができることはしたよ』

後はそつちで頼むよ……』

「う、うん…ありがとう…」

『じゃあな』

「……………あの人……」

「どうかしたんですか？10代目？」

「……………泣いてた……」

「雨と勘違いしたんじゃないんスか？」

「あ…そうだよね」

「ツナ！ 急いで病院連れて行こう！」

「そうだ！ そうだね!!」

急ごう!!」

「こんばんは！」

「夜遅いのに元気だなー」

「そうですかー？」

デイナーさん達のほうがすごいですよー
あんまり寝てないですし

「こんな雨の中動くほうが元気ですよー」

「……優」

「なんですか？ 雲雀先輩」

「……はあ……今から休憩ね」

「は!? 恭弥どうしたんだ?」

「どうかしたんですか?」

雲雀先輩

あれ?なんかこっちに来るね

ぎゅ

「こ、こ、こ、こ、こ……これってあれだよね!?
「うわあああ!」

デイナーさんの前で何するんですかあ!!」

「いやいやいやいや!まじで何してるの!?

ひいひい!背中と頭に手があああ!!」

「こ、こ、こ、こ、こ……こういう場合どうやって抜け出すんだった!?
な、なんか教えてもらった気がするけど出てこないー!!」

「恭弥……オレがいないところまでしろよ……」

「やっぱり見られてるー!!」

「ど、どうしよう……!!」

「さっきから押し返してるのに全然動かない!!
こ、こ、こ、こ、こ……はつきり言わないと!!」

「離してください！」

「……泣いていいよ」

「雲雀先輩何言ってるんですかー」

「離してくださいよ……」

「無理しないでいい」

……

……

「……ありがとうございます……」

「寝たのか？」

「みたいだね」

「よくわかったな」

「無理してるって」

「僕だからね」

「そうか……」

「テントに運んでくるよ」

「ああ いいぜ」

暴走

……………(こごと)……………テント…？
外出てみよ……

「優 起きたのか？」

「…ディーノさん…？」

あ…思い出した…

昨日泣いて寝たんだ…

「あ…昨日はすみませんでした」

邪魔しちやっただよね…

「気にするなっつて

それにしても良く寝てたな」

そういえば…明るいな…

「あ…もう昼過ぎですか…？」

「ああ」

「……………ちよつと無理しすぎたみたいですよ」

「リボーンから昨日の試合聞いたよ

ランボに体力あげすぎたんだろ」

「そうかもしれない…」

あの…雲雀先輩は？」

「ちよつど休憩で寝てるどころだよ」

「そうですか……」

ディーノさん達も寝てくださいよ？

昨日も全然寝てないですよね？

私はもう逃げないのでいつでも話をきけますよ？」

「それもそうだな…優は逃げないしな……」

恭弥が起きたら起こしてくれ」

「はい」

とりあえず…顔洗おう…

川が近くで良かった…

やっぱりこの世界来たけど私にはむいてないなー

怪我してほしくもないって思ってる時点でだめだよ

雲雀先輩みたいに戦うことが好きだったら

もっと楽なのに……………

なんで私が呼ばれたのかなあ…

「起きたんだね」

「あ…雲雀先輩」

昨日は「謝らないで」でも……………」

「僕がしたかったんだから」

「…………じゃあ…ありがとうございます……………」

ちよつと相談しよう…

「…………雲雀先輩」

「なに」

「私ってダメですよー」

「なにが」

「どうも戦いとかにむいてない性格で…」

「そうだね」

「ですよー……………」

雲雀先輩もやっぱりそう思うよね…

「したくなかったらしくなくていいよ

僕はしたいからするけどね」

「…………なんですかそれ……………（笑）」

あ…笑った……………／／

「僕はもう少し寝るから」

「あ、はい」

あ…寝るってここでなのね…

でも人肌って安心するー

もしかして…ここで寝るために起きたのかな？

この世界に来て
1番キャラがかわったのは雲雀先輩だけど
雲雀先輩がいなかったら
私もつと辛かっただろうな…
雲雀先輩がいてくれて良かった…
感謝しきれないよ…
…よしよし
いつもありがとう…

「あ、起きたかな？」

おはようございまーす」

「よお恭弥 良く寝てたな」

「……………話……………」

「へ？」

「なんだ？」

「話……………聞くよ……………」

「あ、良かったですねー」

「ディーノさん聞いてくれるみたいですよー」

「やつとか……………」

「ディーノさんが疲れた顔したよ（笑）」

「確かに長かったもんねー」

「……………優」

「はい？」

「優も指輪もってたの？」

「そうですよー」

「僕 聞いてないよ」

「雲雀先輩は指輪の話は興味ない

って言ったでしょ？」

睨まないでよ…

自分で言ったのに……

私が少し関わってるのに気付いてるはずなんだしー

指輪を持つてるのも予想できる範囲だから

私じゃなくて雲雀先輩が悪いと思う

まあ雲雀先輩は指輪が何個もあるとは知らなかったけどね

でも興味ないって言ったのは雲雀先輩だもん

「大丈夫ですよ

ちゃんと約束は守ってますよ？」

「……………昨日のも関係してるの？」

「んー…そうですねー」

「優」

「はい？」

へ……………？

……………えつと…車の中……………？

「優！ 起きたか!?!」

「あ、デイナーノさん」

えつと…確か……………

雲雀先輩に呼ばれて…その後気を失った…？

「まさか……………

「デイーノさん試合会場の場所言っていないですよね!？」

「……すまん……」

「なんで言ったんですかー」

「気迫に押されて……」

「雲雀先輩乗り込んで暴れてるんじゃない……」

「いや、多分こっちの方がはやい」

ちよつと待つて……

えーと……確か原作では……

デイーノさんの方が遅かった気が……

「今、何時ですか?」

「11時」

………まずい……

「えつと……私は……」

雲雀先輩に気絶させられたんですよ?」

「………そうだ」

学校って聞く前に気絶させたってことは……

私がこの戦いで泣いたことに対して……怒って……

その後……学校って知ってさらに怒ってるんじゃない……

「私を気絶させたってことは……」

私だったら止めれる可能性がありますよね……?」

「そうだな……」

「んー……車で行くより私が空飛んでいく方が

ちよつとはやいで念のために先に向かいます」

「お、おう」

うわー……止めないと大変なことになる

やばいよー……

前虎後狼

「今すぐってわけじゃねーがここで我慢して
争奪戦で戦えば遠くない未来六道骸と
また戦えるかもしんねーぞ」

「……………僕は個人的にも怒ってるんだ」
〃もういいだろ

君は六道骸と戦いたいんだろ？”
ぎりぎり間に合ったー！！
やっぱり原作と違ってさらに怒ってたー
窓が割れてて助かった…
階段を使っていたら間に合わなかったかも……

「……………」
〃校舎の破損は直るんだろ？”

「はい」
我々チエルベツロが責任をもつて」
〃だつてさ

いつか骸と戦えるかもしれないんだぞ？
君の楽しみが出来たんだよ”
私は雲雀先輩の楽しみの邪魔はしたくない……
「……………わかった」

帰って行った…

あー…後で電話しよう……………
「あのヒバリさんを止めた……」

「おいー」
〃なんだ？

リボーン”
「オレが一度言っただけで止められなかったんだぞ
どうしてお前が止められたんだ！」

〃簡単なことだ
リボーンは彼が怒った理由を完全に理解してなくて

僕は完全に理解してたんだよ

僕が言ったあの言葉だけで彼には伝わったんだよ”

……私のために怒ったんだよね…

骸と戦いのを我慢してまで……

「……そうか」

「うゝおゝ おい 刀小僧!!」

貴様その動きどこで身につけたあ!?!」

これで…原作に戻ったかな……?」

「うゝおゝ おい!! 受け取れえゝ」

へ?

パシッ

普通の紙? んーなんだろう?

………はい?

”ヴァリアー入隊申請書……? ”

「ボスの命令だあゝ」

”何度もいうが僕は敵だぞ?”

君達はもう少し僕を警戒しろよ……

それにこれは嫌だ…返すぞ”

「てめえがボスに返しにいけえゝ!」

”僕が彼に返しに行けば

僕は殺される確率が高いだろ!?”

まじで!

この前だつて殺されると思つたし…

XANXUSさんが食いつくようなネタはもうないし!

もう1度行けばどうなることか…

考えただけで恐ろしい……

私はバトルマニアでも自殺願望者でもないんだぞ!

「知るかあゝ!」

「スクアール先輩どういうことですか!?!」

ボスは俺よりあいつを選んだんですか!?!

試合に勝てば僕は幹部じゃないんですか!？」

「知るかあ!!」

クソボスに聞けえ!!」

「簡単なことだね

ボスは彼のほうが強いと思ったのさ

新しい幹部は彼に決めたんだよ

それに彼は有力な情報を持っていたしね」

奥の手のことだね……

「あーそつちでもめてくれ……

僕を巻き込むな……」

頼むから巻き込まないでほしい……

もう勘弁して……

「明日は貴様らの最後!!」

てめえの顔はわかってるんだあ」

死にたくねえなら入隊しろ!」

「!?!」

あーそうだった……

ばれてるんだった……

「じゃあなあ」

「ゴラ! 待て!

入隊しないからこれを持って帰れ!」

帰って行ったよー (泣)

「おい! どういうことだ!」

「リボーンはわかかってるだろ

向こうが僕がほしいって思ったただけだろ

僕は入る気はないぞ」

「そつちじゃねえぞ

有力な情報の方だぞ」

「あー彼らの前で封印がとけた日を

正確に答えてしまったんだ」

「どういうことだ!」

「僕は心当たりがあるから
リボンにリングをくれって言ったんだよ」
「なるほど……」

「獄寺君 治療しなきゃ！」

「僕が診るよ」

「テメーには世話にならねえよ!!」

「あー困ったなー」

「Drシヤマルも帰ったしなー」

「しよーがねーなー」

「ロマーリオ診てやれ」

「……遅かったな」

「まさか……」

「僕が止めたよ」

「そ、そうか……」

「すまん……」

「謝る必要はないぞ」

「僕のせいでもあったからな」

「……」

「でも……まさか……恭弥が」

「こんなに早く帰ってくるとはな……」

「あー……デイナー」

「なんだ？」

「君の心配が当たったぞ」

ピラッ

「げっ……まじかよ……」

「お前も断れよ……」

「言っただろ？」

「彼らは僕の話聞く気がないんだよ
断ると言えばXANXUSに」

直接返しにいけとか言うんだぞ〃

「……………最悪だな」

〃全くだ〃

「デイーノさんは1位の人と仲がいいんですね」

「恭弥の修行を時々見に来てたんだよ」

〃そういうことだ

僕は帰るよ

獄寺隼人を頼むぞ〃

「ああ」

〃山本武〃

「なんだ？」

〃頼むから勝ってくれよ〃

「え……………」

〃じゃあな〃

後ろでツナ君が修行のこと聞いてるな―

多分原作に戻ったかなあ…

はつきり覚えてないや…

この紙破って捨ててもいいのかなあ…………

やっぱりダメだよね―

……………こういう時って真面目って損だ

恥ずかしいです

「ただいまあ」

だから誰もいないのになんで言うのかなあ…

……あれ？誰がいる……？

「雲雀先輩!」

……なんで……

「……どうして……?」

……さつきから全く…返事がない…

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

沈黙が長すぎる…

また話しかけてみよう……

「ご飯食べますか?」

よく考えたら何も食べてないし…

……やっぱり返事がない…

「あ、別に謝らなくていいですよ?」

気絶させた理由もわかってますしー」

私が望んでないのを知ってるからだもんね

「元々の原因は私がこの戦いのせいだ

泣いたのが悪いんですよ」

……返事ないと寂しいんだけど…

どうしようかな……

正直ちよつと嬉しかったしねー

私のために怒ってくれたことが……
んー……………

……
……

「雲雀先輩」

…自分からしたけど…恥ずかしいもんだね…
といつても…ほっぺただけど…
風みたいに挨拶って言えないや…
「…さて勝手に飯作りますよー」

台所に逃げよう…

グイッ

「うわ!!」

ストン

ん？膝の上って感じだね！

って…どこに座ってるのー!?

やばいやばいやばい

今すぐ動かないと私の心臓が持たない

「……………」

耳元で言わないでー!!

って…今なんて言ってた？

「こつちにして…」

……………こつちって……………

まさか……………

／／／／／／／／／／／／

無理無理無理ー!!!

恥ずかしくてそんなの死んじゃう……

「逃げないでね」

えー……

そんなあ……………
／／／／／／／／／／

「せ…せんぱい…」

勘弁してください…／＼／＼

「ヤダ」

うう…完全に腕が捕まってる…

最初から逃がす気がないじゃん!!

うー…女は度胸だ!!

あれ…?なんか違うかも…

まあ…いいや…

「し…しつれいします…」

「……………今日は僕がご飯作るよ」

「……………あい…………／＼／＼」

……………助かります

しばらくクツションから離れることは

出来そうにないみたいなんです…………／＼／＼

…次の日…

今日は普通に学校だね

っていつても休んでた間の

溜まってる書類をするんだけど…

しようがないよね

私はずっと雲雀先輩に着いて行って

休んでたことになってるしね

まあ半分あつてるんだけどね

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ」

……雲雀先輩いてたのね…

昨日ご飯食べてすぐ帰ったけど…

1日たつても恥ずかしいよー／＼／

うう…またクッションに埋もれたい…

「顔、真っ赤だよ」

「え!？」

本当ですか…?？」

「うそ」

「えーひどいですー」

「ちよつと赤いのは本当」

……／＼／

あ…笑った…／＼／

「うー…書類します!!!」

「そう」

疲れた…

今日は…まででいいや…

もう遅いし…

「今日は…まででいいですか?」

「いいよ」

「あ、雲雀先輩は今日見に行くんですか?」

「行くよ」

「そうなんですかー」

「優は？」

「行きますよー」

「そう」

「っていつても…」

「私はB校舎に侵入してるんだけどねー」

短慮軽率

なんとか気付かれず侵入したのはいいけど……
しまった……雨とは相性普通だけ……

水の中は相性が悪すぎる!!

いや……制御をといえていいなら問題ないけどね
でも倒れちゃうし……私の存在ばれちゃうし……

あーしまったなあ……

とりあえず……

まだ水がたまってないところにいるけど……

………どうしよう………

ギリギリまでもぐつちやダメだよね……

えっと整理しよう

風が使えないってことは……刀だけだよね

うーん……峰使ってもいいけど……

それは私の信念に反するからな……

まあしょうがないか……

気付かれないように風で探ってるんだけど……

風が当たったら人がいてるってわかるだけで

誰かなのかわからないのが問題だよね……

1人……動くかなくなった……

原作通りならスクアーロさんだよね？

とりあえずもぐろう!!

……来た!

でか!!鮫でかすぎだろ……

とりあえず……鮫の足止めしよう

!?

動きはやすぎ!!!

血の匂いのするところに行くな!!

やばい!!!

.....

.....

.....

原作通りになっちゃったよーー!!

やっぱりスクアアロさんか・

って早く助けないと本当に死んじゃう!!

あ……デイーノさんの部下と合流しちゃった……

まあいいや……足止めしてもらって

その間にスクアアロさんを助けよう……

………ひどい出血だ……急ごう……

「いほいほ………」

う……結構息がやばかった……

このフードすごいよねー

流石神様だよ

泳いでも脱げなかったよ

って今はどうでもいいや!!

問題はスクアアロさんだ!!!

〴〵おい!! スクアアロ!!〴〵

……意識ないか……

とりあえず……体力を……

ん?

デイーノさんの部下が追いついてきたみたい

「お前は……確か……風のリングの………」

“そんなことはどうでもいい!!
先に病院に連れていけ!!”
私が誰かわからないってことは
デイーノさんって……
ロマーリオさん以外の部下にも
黙っててくれてるんだ……

緊急手術か……

…頼むから…原作通り…助かってよ…
私がいるからずれたとか…やめてよ……

ポン

ん？肩に手が…

あれ？デイーノさん？なんだろう？

「……………頼むから……

その格好なんとかしろよ……」

“あ………悪い……”

水で濡れてたの忘れてた…

…身体のライン見えてなくてよかった……

「しっしっしっよ」

“ああ”

デイーノさんのおかげで

病院のシャワー借りれてよかった…

…服は風で無理矢理乾燥させたけどね…

………

…ちよつとやばいかな…

あ、ケイタイがなってる

切るの忘れてたな…外に出よう…

それにしても防水ケイタイで良かった……

「もしもしっ？」

『優どこにいらてるの』

あ、今回はばれなかったのね

まあ校舎の中だったしー

「ちよつと用事で出かけてます

明日学校に行くんで心配しなくて大丈夫ですよ？」

『……………わかった』

うーん……心配してそう……

「あの……」

『なに』

「ちよつとケイタイ通じにくいところにいるんで……

明日ちやんと行くんで……」

『はあ……………わかったよ』

う……………ごめんなさい……

「では……また明日……」

『またね』

さて……ケイタイきろう……

えつと……とりあえず……手術室だね……

……

やっぱりやばいな……

デーノさんに頼むしかないね……

〓どうだ？〓

「……………まだ終わってない」

それもそうだよね……

あの傷だもね……

〓……………そうか

あー……ちよつといいか？〓

意味通じるかな…

流石ディーノさんわかつてくれたみたい

ロマーリオさんもついてきてくれて良かった…

ディーノさんだけじゃ心配だ（笑）

会議室？まあ個室だし

普通にしゃべっていいかな？

「優……」

つて…先に話しかけられてた……

「はい？」

「無茶するなよ……」

心配かけたみたい…

「……すみません」

「部下から連絡もらって

優が助けたって聞いてびっくりしたぜ……」

「ディーノさんの部下がいるって

知ってたら行動しませんでしたよー」

いや…知ってたけど……

…本当は鮫の足止めしたかったんだよね

血で反応するってわかったとき

自分の血を出して注意をひきつける

つてことも考えたんだけど…

それは約束やぶることになるから出来なかったんだよね…

もうちよつと考えて行動すればよかった……

「そうか…」

「まあ私はこういうことには強いので

あれぐらい問題ないですよ」

「……そうか」

「ディーノさん」

「なんだ？」

「スクアーロさんのこと頼みましたよ？」

「任せろ」

「一応助けたときに私の体力のほとんどあげたんで…」

「…わかった」

「ということで…ちよつと今から迷惑かけます」

「は？」

「……つまり…私…水にも濡れたし…」

体力のほとんどあげたから眠いんですよ……」

「な!?!」

「明日学校行くなって約束したから…」

起こしてくださいね……」

そこで寝ますから……」

この椅子でいいや…」

座って寝よう…」

「ちよつと待て！ 優！

そこで寝るなよ！

ベット用意するから！」

「すみません……限界です……」

約束 2

「優起きろー」

……………眠い……………もう少し……………

「おーい……………」

うるさい……………(怒)

「学校行くんだろ?」

……………学校……………?

バツ

「今、何時ですか!?!」

「……………第一声がそれかよ……………」

「あ……………すみません……………」

とりあえず……………おはようございます」

「ああ」

あれ? ベットのう上だ……………

そういえばさつき布団に包まってたような……………

自分の部屋だと思つてて違和感なかつたな……………

「えっと……………移動してくれたんですね

……………迷惑かけてすみません」

「全くだぜ

待てって言ったのに寝るから困つたぜ」

一応帰る分は残してたんだけど……………

思つてたより体力あげたみたいだね

「眠かつたんですもん♪

えっと……………スクアーロさん大丈夫ですか?」

「……………とりあえず……………なんとか生きてる」

よかつた……………

原作通り進んでそう……………

「……………そうですか

良かつた……………

あ! 明日の試合って私ですか?」

「いや…霧だ」

あ…まだなのね……

「わかりましたー」

さて私は家に戻って学校に行きます

雲雀先輩に心配かけちゃうしー」

「ああ」

「頼みましたよー」

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ」

あ、ちよつとほつとした顔した…

私にしかわからないと思うけど……

「……今日も書類頑張りますかー」

「優」

「なんですか?」

「見回り行くよ」

「へ? 私の担当じゃないですよー」

あー行っちゃった…

つまりついていくのね

とりあえず…ついていってるけど…
なんでだろ?

それにも雲雀先輩すごい…

風紀悪い人…咬み殺しまくってる… (笑)

まあ…死んでないからいいでしょう…

私には先輩の楽しみ止めれないしねー

「行くよ」

「あ、はい」

あれ？骸の気配がする…

よく見ると…遠くに凧がいる!!

ってことは…骸が雲雀先輩を見に来たのかな？

雲雀先輩は人気者だねー

あれ？そういえば凧って言ったらダメなんだよね？

えっとクロームちゃんでもいいよね

骸は…六道君？骸君？

うわ…違和感が…まあ骸君でいいか

あとは…犬君と千種君でいいか…

「お久しぶりです

また強くなつたようですね」

おー…すごい…

雲雀先輩に気付かれずに

そんなこと言えるとは…流石ですねー

私はばれてないかな？

うーん…骸君は謎すぎる…

知らない間に調べられてそうだよねー

まあいつか♪

それにしても…

今日ずっと雲雀先輩と一緒に行動してるけど…

なんでだろ…うー…気になる…

「あのお…」

「なに」

「今日はどうかしたんですか？」

あれ？返事がない

「……………目を離すと…どこかにいくから…」

……なるほど

昨日行ってくつていったのに見当たらなかったからか…
連絡しなかったしね…

まあ見当たらなかつただけでいてただけだねー
でも今回は私が悪いか…

「…昨日はすみません

でも…雲雀先輩の前から

勝手にいなくなりませんか？

もしいなくなつたとしても

ちゃんと雲雀先輩の前に戻ってきますよ」

んー…返事がないな…

「約束します」

「……………わかつた」

「私は雲雀先輩を悲しませることはしませんよ」

「……………そう」

「ちよつとは信用してくださいよー」

「わかつたよ」

「はい!!」

あれ？私の家に着いたね

「どうしたんですか？」

「寝ていいよ」

「へ?」

「もう学校終わる時間だからね

約束守つたからね」

「えつと……………」

「疲れてるよね?」

あ、まだ寝てたいのがばれてたんだね

「少し……………」

「ゆっくり休みなよ

また明日」

あ…もしかして……

書類するのが辛いつていうのもばれてたかも…

でも学校行くつて約束したから休めなかつたし……

外で歩いていた方が精神的に楽だもんね

途中で寝ちやったら私は絶対シヨツクうけるもんね

うーん…敵わないなあ……

楽しみ♪

さて…体育館に行くけど…その前に用事だ…
良かった1人だ…

獄寺君がいたら大変だもんね

〃山本武〃

「ん?」

〃ちよつとついてこい〃

強制だねー

ここでいいかな?

とりあえず人気ないしー

〃昨日は悪かったな…体力あげれなくて〃

「ははっ気にするな」

爽やかだねー

〃……………目…大丈夫か?〃

重傷にしか見えない…

「ああ

ロマーリオのおっさんが心配ねーつてさ」

あ、ロマーリオさんが診てくれたんだー

〃そうか……それは良かった…〃

「なんか用事があるんじゃないかねえのか?」

〃あ…悪い…

大事なことがあったんだ…

…………スクアーロのことだが…………〃

あ…ちよつと暗くなつたな…………

〃…………大丈夫だ

なんとか生きてる〃

「え!?!」

〃僕の言葉を信じるかはそつちに任せる

ただ…みんなには黙ってる

山本武だから言っただんだ”

山本君だったら絶対黙っててくれるし

多分今回のことで

1番シヨック受けてるのは山本君だしね…

「……………わかった」

”ああ”

「…お前…スクアーロ助けるために

昨日いなかったのか…？」

”……………僕はたいしたことしてない

ただ体力をあげただけだ”

…本当はスクアーロさんのところに行く前に

鯨を倒したかったんだけどね…

まさかあんなにも血のにおいに反応するとは…

全く自分の力の無さを感じるよ…………

「…そっか

お前ってやっぱいい奴だよな？」

疑問形で聞かないでよねー

”…自分でいい奴って言えないだろ…”

自分でいい奴って言えたらすごいと思う（笑）

「ははっ

それもそうだなっ！」

”ああ”

「んー…黙ってる約束したしもう友達だよな？」

うわー…山本君って感じー

”そうかもな…

先に行ってるぞ”

今日は体育館だし普通に見てていいか…

確か円陣なかったし：

んー雲雀先輩いないなー

今日は来ないのかな？

なんか用事でもあるのかなー？

あれ？

そういえば原作では雲雀先輩って

霧の対決見に来なかったよね？

うん：いなかったと思う：

……危なかった……

今日約束しなかったら絶対きてたよね

まあ：これぐらいだったら

原作変わってもいいと思うけど：

でも：骸君にあつたら：また雲雀先輩暴れると思う……

約束してて良かったー！！

「おい」

“なんだ？”

「おまえはこつちだ」

まじか……

もうXANXUSさんの中では私は入隊してるのか？

頼むから勘弁してくれ：

“何度も言うが僕は敵だし入隊は断る”

殺気むけないでよねー

ここまで強気なことを言えるのは

チエロベツロがいるからなんだけどね

いなかったら私は向こうで見てたかも（笑）

だって戦いたくないし死にたくない……

「いいじゃん

こつちで見よーぜ♪」

“君の隣にそっちの風の守護者いるだろ……”

「そうですよー

ベル先輩ひどいです！」

「オレこいつ嫌いだしー」

この前オレがいねー間に帰ったじゃん」

“それは君が寝てただけだろ…”

それに君の願いは叶えただろ？”

「しっしっ♪」

「やっぱりこいつは敵だ！」

ダイナマイト出さないでよねー

「獄寺落ち着け」

ツナはこいつを仲間と思ってるし

家光が後継者の権利を与えたんだぞ」

「くっ」

“リボーンに話を通ってたのか……”

「ああ」

ってことは私の正体ばれてるのかな？

あれ？でもそんな態度を1度もとってないよねー

だって私の正体がわかっていたら

雲雀先輩が止めれる可能性あるのは納得するはずだもん

それに争奪戦の後に私の家に来たことないしね

リボーン君にも黙っててくれてるんだね

それにしても…なんでツナ君寝てたんだろ…

あ!!思い出した…

犬君と千種君を見て気を失ったんだ…

あ、犬君と千種君が来た

ってことは…クロームちゃん登場だよね♪

昼間もちよつと見たけど私が意識しすぎて

雲雀先輩に骸君がいてるってばれたらまずいから

あんまり見れなかったんだよねー

やっばいすっごい楽しみだ♪

発言ミス

うわー！ー！ー！！
かわいー！ー！ー！！
まじで可愛い……

あ…ほっぺにキスしてる…

なんで恥ずかしくないんだろ…

私ものすごく恥ずかしかったのに…：／／
って照れてる場合じゃない！！

それにしてもツナ君が顔赤いねー

よし！もうちよつと赤くしよう（笑）

あー笹川京子と三浦ハルには黙っててほしいか？”

「なっ…なっ…：／／」

多分なんで2人のこと知ってるのー!?

って言いたいんだらうねー

「なんで京子と三浦ハルが出てくるんだ？」

ツナ君の顔が真っ赤だ！

いやーかわいいなー

”彼にもいろいろあるんだよ

だから黙っててあげるよ”

あ、めっちやほつとした（笑）

ちよつとからかいすぎたか……

試合はじまった…

前にも思ってたけど神様ってすごいよねー

幻覚効かないけど

どういふ感じに見えるかわかるんだよねー

でもちゃんと本当の姿も見える…

うーん…2個景色が見えてるみたいだ

どうやってるんだろ…

やっぱり…神様は天才なのかな…

あ…おしやぶりだ…

んー袋とつたことないけど

やっぱり光ってるんだよね？

というかりボーン君にあってる時点で

光ってるはずか…

取ったことないからわかんないや…

……骸君…早く出て来いよ…

何もつたいぶってるんだよー

可愛い子を危ない目にあわせて放置って

どういうことなの!?

あ…気配が……やつと骸君が出てきた…

んー…すごい…

幻覚がきかないけど

すごいっていうのはわかる…

つて…私の頭の中にも…流れてくるのね…

…

…

…何も言えないや…

それにしても…みんな大変そうだね…

落ちそうになってるね（笑）

掴んで助けてあげるべきなのかなー？

本当に危なくなったら助けよう…

「これで……いいですか？」

「霧のリングはクローム髑髏のものとなりましたのでこの勝負の勝者はクローム髑髏とします」

あれ？なんかこっち見てる？

ヴヴ…ン……

「な!？」

「え!?! 1位の人が……」

「おい！ 大丈夫か!?!」

「あー…心配しなくていい

僕には幻覚はきかないからな」

「!?!?!」

「やはり全くききませんか」

「……やめてくれないか？」

いきなり攻撃するのは……

僕じやなかったら死んでるぞ?」

まさかいきなり火柱とは…

「僕がこれだけの力を込めても

無傷とは本当に腹が立ちますね」

「悪かったな…」

「そういう体質なんだよ」

「クフフ

ふざけた体質ですね」

「心配しなくても君は一流の術師だ

正直これからが怖いぞ……」

「クフフフ

「そうですか」

もうすぐ私にも攻撃当たるしねー

まあ有幻覚だけだけどね

攻撃の幅はかなり少ないから大変と思うけどね

“ああ

骸のせいですます向こうに興味もたれたな…”

XANXUSさんが見てるよ（笑）

まあ幻覚がきかないってすつごい便利だもんね

術士に強すぎるもんねー

本当に強い人しか興味ないんだねー

「良かったですね」

“どこがだよ……”

幻覚がきかない腹いせか？”

「クフフフ」

笑い事じゃないし！

「さ、さっきの人どうなったの？」

“問題ないよ

そうだろ？ 骸”

「そうですね

あの赤ん坊は逃げましたよ

彼は最初から逃走用のエネルギーは

使わないつもりだった…

抜け目のないアルコバレーノだ」

“そういうことだ

沢田綱吉安心しろ”

「よかった……」

「ゴーラ・モスカ

争奪戦後マーモンを消せ」

ん？ 原作に戻ったかな？

「え!?! ちよ

「この娘放置ですか!？」

「起きりや自分で歩けんだろ？」

「その女をちやほやする気はねーし」

「そいつは骸さんじゃねーからな」

「じゃあ僕が面倒みる」

「え!？」

「君達より僕の方が女性の扱いがうまいからな」

「「「な!？」／／「「」」」

あれ？ツナ君達の顔が赤くなった…

なんでだろ…？

あ!!男のフリしてたら…

ただのプレーボーイ発言だ！（笑）

女性は女性に任せろっていうことだったんだけどね…

「勝負はお互いに3勝ずつになりましたので

引き続き争奪戦を行います

ですが…その前に…

勝敗が無関係の風の守護者の対決を行います」

あー…ついに来た

やだな…戦い…

「1位の人の番だ…」

だから…その呼び方…

というか名前教えてない私が悪いのか…

「ついに俺の出番だ!」

オレがヴァリアーの幹部になるんだ!」

うわー向こうは凄い嬉しそう…

勝手にヴァリアーの幹部になっていいよ

私は興味ないしねー

「ではまた明晩に」

さてクロームちゃん連れて帰ろう

もちろんお姫様抱っこで（笑）

……軽っ!!ちゃんと食べてるの!?

「あ、あの」

“なんだ?”

「明日…大丈夫ですか…?」

ツナ君は心配性だなー

“頑張るよ

でも、僕が強いこと知ってるだろ?”

「そうですね!」

“ああ

気持ちだけでもらっくとくよ

彼女のことは任せてくれ”

「あ、お願いします

また明日!!」

“ああ

じゃあな”

霧と話してみる

とりあえず…ベットに寝かせたけど…

本当にクロームちゃん…ちゃんと食べてるのかな…

とりあえず…フードとるか…

別にばれてもいいしー

あー…そうだ！

体力あげないー

ん？なんか気配がする…

「クフフフ

秘密君の正体はあなたでしたか」

「えー可愛いクロームちゃんのために

私の体力あげたのに骸君にあげてたの!？」

「すみませんね」

「まあいいかな？」

私の正体を見に来ただけ？」

「そうですよ

あなたの弱点の理由がわかりましたよ」

あ、付き合ってること知ってるんだー

まあ今日一緒に歩いてたしね

「そうだねー

でも…もし次に雲雀先輩が

操られてもちゃんと攻撃するよ？」

「ほう」

「雲雀先輩が望んでないこととしてたら

私が止めたいしー好きだからこそかな？」

「クフフフ

のろけですか？」

「えー

そんなつもりないんだけどなー」

「十分のろけてますよ」

「んー…そうかな／＼／

あ！ 骸君にお願いがあるんだけど…」

「なんですか？」

「あれ？ 普通に聞いてくれるんだー

ちよつと意外!!」

「さっきの攻撃のお詫びでいいですよ」

「なるほどねー

んじや、お言葉に甘えてー

クロームちゃん達がちゃんと

ご飯食べてなさそうだから明日の朝に弁当作るから
みんなに食べるように言ってくれませんか？

骸君がいつたら食べてくれると思うしー」

「…もちろんですよ」

「ほんとにー！

ありがとうー！」

「せっかくのお願いをそれに使うなんて

あなたは変わってる人ですね」

「前にも誰かに同じようなこと言われたような…

まあいいやー」

「僕に正体を黙っててほしいと

言わなくていいのですか？」

あ、それをお願いすると思ってるんだね

「言う必要ないでしょ？

だってそれで私を何度も脅迫できるんだよ？

私が骸君の立場だったら絶対言わないもん」

「おや？

その可能性に気付いていたのに

この娘を保護したのですか？」

「そうだよ？」

「変わった人だ」

「2回も言われちゃったよ…」

あ、そろそろ戻った方がいいと思うよ？
無理したら体に悪いよ？」

「クフフフ

そうですね

「この娘のこと頼みますよ」

「当然でしょー」

「そうですね

ではまた会いましょう」

「ゆつくり休んでね

お疲れ様……」

あ、骸君の気配が消えた

相性悪いと思ったけど普通に話せたな…

まあいいことだからいいや♪

さて…せっかくあげた体力を

骸君が使っちゃったし…

明日に影響が出ない分だけまたあげようかなー

よし！

神様と最後の修行しよ!!

「また会いましたね」

「へ？」

「散歩しながら帰っていたのですが…

まさかまた会うとは思いませんでしたよ」

「骸君!？」

「どうやらあなたと少し相性がいいみたいですね」

「そうなの!？」

「でも少しなんだね」

『優はやく来いよー』

あ、神様が呼んでるね

「ええ

今、誰かに邪魔されてますからね」

神様だね（笑）

「私は今ある人と精神世界をつなげてるからね

骸君よりそつちを優先になるんじゃないかな？」

「そうですか」

『おーい

時間ないぞー』

ぎゃーそうだった！

「早く行かないとダメなんだ！

また会えたらいいね！ またね！」

「ええ」

でもなんで骸君と相性がいいんだろ……

うーん……わかんないや……

まあいいや

神様と修行して早く寝ようー

んー……良く寝た……

おっと弁当作らないと!!

よし！完成♪

ガチャ

「あ、起きた？」

「あなたが骸君が言ってた人……？」

「骸君することはやいねー

そうですよー風早優です

同じ女性の守護者だしこれからよろしくねー」

「……守護者……？」

「あれ？ それは聞いてないんだー

昨日フードかぶってたの私だよ？」

「男の人だと思ってた……」

「しょうがないよー」

男のフリしてるからねー

骸君も昨日やつと私の正体知ったしねー

あ！ さつき弁当できたんだー

犬君と千種君の分もあるからしつかり食べてね？」

「……………うん」

うわー…ちよつと照れてる姿が

本当に…かわいい…………

「もうちよつと話したいんだけど

学校行かないといけないんだー

ごめんね？」

「ううん」

うわーフルフル首振ってるのもかわいい…

ってなんか変態な発言ばかりかも…………

「優……………ありがとう……………」

うわー！やばい！！かわいすぎる!!!

「いえいえー」

「ここから帰れる？」

「大丈夫……」

「そっかー」

気をつけて帰ってね？」

「うん」

あー…ものすごく

学校サボりたくなつた……………（笑）

でも…今日は…………

雲雀先輩と少しでも一緒にいたいから

しょうがないよねー

頑張ります

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ」

「お願いがあるんですけどー」

「なに」

「出来ればなんですけどお…」

今日書類とかしないで…一緒にいたいなあ…」

「いいよ」

「……いいんですか？」

「僕もそのつもりだったからね」

うーっすっごく嬉しい!!

「ありがとうございます」

雲雀先輩!!」

あ…笑った…／／

雲雀先輩がいると屋上って誰も来ないよねー

いや、正しく言うと雲雀先輩を見たら

みんなが急いで去っていく(笑)

「…私…頑張りますね」

「約束守ってね」

「頑張ります!」

「………守ってよ」

「雲雀先輩…心配しすぎ……」

あ…黙っちゃった…

「んー…雲雀先輩のためにも

しっかり頑張りますよー」

「…そう」

「あ！ もしですけど…」

「なに」

「もし…私が怪我しても…」

「暴れないで下さいよ………?」

返事がない!?

「雲雀先輩、聞いてます?」

うわー！怪我したら暴れるの!?

暴れたら…確か…リング取られて…

ってダメじゃん!!!

向こうが勝っちゃう!!!

「……頑張って約束守ります…」

「わかった」

そこは返事するのね…

あ、大事なことを忘れてた…

「実は…今日の対戦相手の武器が

かわってると思うんですよ」

「へえ」

「普通の武器だったら

なんとかなるかもしれないんですけど…

だから…もしかしたら

制御解くかもしれないですよー」

「………わかった」

多分…雲雀先輩は…

倒れるのも…嫌だと思っただよね…

「……フードとれないよね?」

「大丈夫ですよ」

「このコートは特別製なので簡単にはとれないですよ」
「そう」

「それですね」

「その後なんですけど…」

「雲雀先輩に頼みたいんですけど……」

「問題ないよ」

「ありがとうございます」

「雲雀先輩にしか頼めないの……」

「僕以外に頼むと怒るよ」

「えー…そういうこと言うんだ!!」
「びっくりした…」

「ちゃんと頼んだので怒らないで下さいよ?」

「わかってるよ」

「良かったー」

「あー! でもディーノさんにも頼むつもりですよ?」

「う…機嫌が悪くなってる…」

「……どういふこと」

「ちよつと面倒なことになってまして…」

「敵チームにかなり興味もたれてるんですよ」

「なので誰かが私を保護してる間の時間稼ぎしないと……」

「僕が咬み殺す」

「……それを雲雀先輩に頼むと」

「向こうが勝っちゃいますもん」

「私はそれが嫌なんです」

「……………」

「うーん…わかりました…咬み殺していいですよ」

「そのかわりディーノさんに私を守ってもらいますね」

「1人で両方は無理ですからね」

「私は雲雀先輩にそっちを頼みたかったけど……」

「諦めますねー」

「……わかったよ」

「僕が優を守るよ」

／／／／／／／／／／／／

「ありがとうございます／／／／／／／／／／／／」

「優」

「はい？」

「好きだよ」

／／／／／／／／／／／／／／／／

「……初めていわれた……／／／／／／／／／／／／」

「わ……私もです……／／／／／／」

「そう」

あ……笑った……／／／／

今日の試合……雲雀先輩のためにも頑張ろう……

コンコン

「誰だ!？」

「ディーノさんとロマーリオさんしかいないね」

「私ですよ」

「優か……」

「どうです？」

「まだ意識は戻ってねえな……」

「そうですねか……」

「どうしたんだ？」

今日は試合だろ？

体力はあげると優が辛いだろ」

「実はディーノさん達に」

「面倒なお願いをしようと思ひまして……」

「なんだ？」

「もし力を使った場合…その後に問題が…」
「なるほど…」

「恭弥が手を出すのはまずいよな…」
「そうなんです」

「今までの経験上…拉致される可能性が…」
「自分で言ったけどなんて嫌な経験なんだ…」

「雲雀先輩にはなんとか説得して
戦わず私を守ってほしいって言ったんですけど…」

「いいぜ
任せろ」

「ありがとうございます!!
すつごく助かります!!」

「…力使うのか？」

「使わずに勝ちたいとは思ってます
でもなにか起こるかわからないですし…
ディーノさんが教えてくれたおかげで

私が並盛中出身とばれてるのは
まだツナ君達だけみたいです…」

「なんとかなる可能性が高いんで…」
「…そうだな」

「はい…」

「まあディーノさんのマフィアにも入って
イタリアで過ごすのも楽しいと思いますし…」
「……………」

「私の運命はあの日に決まったんですよ
ディーノさん達に会えただけ良かったです
会えなかったら最悪でしたよ」

「そうか…」

「そうですよー
じゃあ今日をお願いします
ではまたー」

「……ああ」

応援

あー…戦いやだなー…

どうも自分のために戦うっていうのが…向いてない…

ぶつちやけ…もう帰りたくなってきた…

勝敗関係ないんだつたら…私…いなくてもいいんじゃない…

ん？そうじゃん！別に問題ないじゃん！

よし、家に帰ろう！

『現実逃避するなよ…』

そう思いながら学校に向かってるのは

優らしいけどな』

…だって…あの転生者が勝ちやうと

みんなが危なくなる可能性があるんだもん…

『そうだろうな』

下手すればツナ達は死ぬだろうな』

それはダメー！！！！

『じゃあそろそろ諦めろ』

……はあい

あれ？場所は意外だね

屋上と思っただけ…校舎と校舎B棟の間だね

確かにここも校舎に挟まれてるから風通しいいよねー

「あ、来たー！」

ツナ君達早いなー

〓〓どうも〓〓

「頑張ってくださいね…」

うーん…本当に心配性だね…

〓〓昨日も言ったけど

僕が強いつて知ってるだろ？〓〓

「そうですよね！！」

「おい！ てめー！！」

お？今度は獄寺君かー

“なに”

「10代目が応援するからオレも応援してやる!!」

うん! いやいや応援してくれるみたい! (笑)

「よっ! オレも応援してっからな!!」

こっちは進んで応援だね! (笑)

「拙者も応援しています!」

親方殿からも応援していると

伝言を預かっております!」

こっちは真面目だ (笑)

ツナ君のお父さんは私の正体知ってるからな!

一応女の子だから気にしてるのか?

イマイチキャラがわからないから謎だね

まあ、素直に受け取っておこう:

「極限に応援してるぞ!!!」

おお! こっちは熱いね:

“ああ

ありがとうな”

んーちよつとやる気出たかなー♪

「君達…なに群れてるの?」

「げっ! 何しにきやがった!!」

あれ? 近くで見ると

群れるの嫌なのにね…って当たり前か…

私が頼んだのもあるしね…:

“あーここは僕の顔で許してくれ”

「はあ…わかったよ…」

“助かるよ”

「そ…:そういうえば…:ヒバリさんって…」

1位の人の正体を知ってるんだった!!」

「え!? 本当ですか!? 10代目!!!」

「う、うん」

「おい! こらっ! ヒバリ!

「こいつの正体教えやがれ!!」

「……………」

「てめえ無視すんじゃねえ!!」

「まーまー獄寺落ち着けてー

本人が隠したがってるんだし

無理に聞くものじゃないぜ!」

「この能天気ヤロー!」

あーまたケンカしちゃった…

「あ…クローム」

「ボス…」

おおーいいタイミングでクロームちゃん登場♪

「今日は来たんだね」

「…………お世話になったし…応援したいから…………」

うー…嬉しすぎる!!!

〃ありがとう〃

うわー顔が赤くなってかわいすぎー

「おい 大丈夫か?」

あれ?リボン君も心配なの?

〃リボンも僕の心配か?〃

「お前には家庭教師つけてないからな…」

あーそういえばそうだ!

〃そうか

だけど問題ないよ〃

神様が家庭教師だしね

「…………そうか」

〃ああ〃

バサツバサツ

ん?なんの音?

「コロネロ!!」

「師匠! 今日も見に来たんですか??」

「2日連続でおねむだぜ コラ!!」

「コロネロ、今日はなんで来たんだ」

ゴツ！

うわー…なんで2人って会うと…
頭突きするのかな…？

「ただの勘だ！ コラッ!!」

リボンお前もなにかあると思ってるんだろ」

「……………ああ」

うーん…アルコバレーノって恐ろしい…

やっぱり今日は制御を解くことになるのかなあ…
雲雀先輩とディーノさんに頼んで良かった…

「よお」

「ディーノさん!？」

今日は見に来たんですね」

「ああ 何度か会ってるからな

心配になっとな」

ディーノさん誤魔化してくれてありがとー!!

そしてロマーリオさん一緒に来てくれてありがとー(笑)

「しっっ 来たぜ♪」

何でこつちに来るの…

「ひいひい!!」

ツナ君そんなに怖がらなくても…

いや、これが正しい反応か…

「…今度はなんだ…?」

「応援だぜ」

「…何度も言うが僕は敵だぞ」

「関係ねーし♪」

「10代目!! やっぱりこいつ信用出来ません!!」

敵と交流してる奴ですよ!!」

「ご、獄寺君落ち着いて…」

「あのヤローを仲間にするには危険すぎます!」

「でもオレは1位の人が悪い人には見えないんだ…」

「君たちうるさい 咬み殺すよ」

私が悪く言われてるから

ちよつと機嫌が悪くなってるねー

「ヒ、ヒバリさん!？」

「あー全員とりあえず落ち着け……」

ベルせめて形だけでも向こうを応援しろよ

XANXUSでさえ僕に興味があるのにあっちにいるんだぞ”

「オレあいつ嫌いだしー」

オレの姫だしー応援するに決まってんじゃん♪」

……言っちゃったし……

あー…性別ばれたー!!!

「ええええ!?! この人女子なのー!?!」

それも姫ー!?!」

うーん…ツナ君ナイスリアクション…

もう否定することはできないかな…

チラツ

雲雀先輩怒ってるー!?!

みんな女子っていうことにびっくりして

気付いてないけど…すっごい不機嫌だ!!!

ど…どうしよう……

「何度も言うけど……その呼び方…止めてくれ…

それには僕には付き合ってる人がいる

って言って断ってるだろ”

これでちよつとは機嫌なおつてー!?!

「ええええ!?! それも彼氏いるのー!?!」

うーん…ツナ君…本当に…ナイスリアクション…

「しっしっ♪ 関係ねーし♪」

あー…どうにかしてー!?!

チラツ

良かった…ちよつと機嫌直ってる…

た…助かった……

「それにボスの許可はとってるしー」

うーん…終わった後に連れ去られそうだね

こつちにも誰かいた方が楽だしね

“あー……もしもの時は頼むぞ”

2人とも意味わかったねー

「へ？ もしもの時？」

あ、ツナ君が気にしちやったね

“君は何も心配しなくていいよ

安心して僕が勝つのを見ていてくれ”

「あ、あの……」

“なんだ？”

「いつもオレを助けてくれるけど……」

オレは1位の人の人の助けになつてないと思うんだ…

それにオレ…1位の人のこと全く知らないし…

仲間って助けあうものだと思う……」

“……僕は君に助けてもらった記憶の方が多いよ”

「え………？」

“僕は君と本当に出会えて良かったって思ってるよ

それだけ十分だ”

ツナ君と一緒にいると楽しかったんだよねー

雲雀先輩とはまた違った楽しさだしね

それに……

「どういう意味ですか………？」

“そのままの意味だよ

僕は君に救われたんだ”

「オ、オレ……！」

“僕は君に一生かけても返せない恩があるんだ

まあ雲雀恭弥にもあるけどな

きっかけは君だ ありがとうな”

この世界に来た時はよかったけど…

時間が経てば経つほど不安だったんだよねー

その時にツナ君に笑ったほうがいいって言われたんだよねー
すごく楽になったんだ：

ここで私はやっていけるって思えたんだよね
戦いとか嫌だけどあの時に関わるって決めたのかも：

「あ、あの…」

「時間になりましたので

勝負の説明をさせてもらいます」

あ、もう時間か…そういえば円陣なかったね

助かったね（笑）

まあ試合の前に…

神様ー！

『なんだ？』

なんとか出来ませんか？

『女子っていうのをなんとかしたいのか？』

そうです!!

『チェロベツロと対戦相手だけでいいか？』

うん！

『いいぞー』

これからもしあったとしても

なんとかするから気にしないでいいぞ』

わーい♪

ありがとー♪

ルール

「君に助けてもらった記憶の方が多い」

「僕は君に救われたんだ」

……どういう意味だろう

オレは1位の人に助けてもらった記憶しかないし

それにオレはダメツナで人を助けるようなことなんて…

でも…さつき1位の人が言った時…

ここにいるのに…いない気がした…

思ってることが無茶苦茶なのはわかってるけど…

昔…同じようなことを感じたことがある…

そ、そうだ!!

最初はただ無口だなんて思ってたけど…

一緒にいればなんかずっとモヨモヤしてて…

だから普段のオレには考えれない勇気を出て…話をして…

それがなくなっただんだ…そしてあつたかい気持ちになれたんだ

オレはそれが好きと思っただんだ

いつだった…? オレは誰と話した…?

……全然思いだせねえ…

頭を抱え込んでも意味ねえー!!

「10代目どうかしたんスか?」

「う、ううん!」

なんでもないよ!!」

「ツナ! ルール説明始まるぜ」

「あ、うん!」

「前にも言いましたが

風のリングは特別なので勝敗には関係ありません」

本当にどういう意味だろ…

「元々ボンゴレリングは風のリングを除く

7つのリングを受け継ぐのが掟です

風のリングは選ばれし者しか扱えなく

初代から選ばれし者が来るまで封印していました

しかし風のリングの封印が解けてしまったため

選ばれし者が現れたということになります」

解けてしまった原因は私が来たからだろうねー

まあ元々の原因はあほな神のせいだけだねー

「この勝負で勝ったものが選ばれし者になります

選ばれし者は争奪戦の結果に関係なく

風のリングの守護者になります」

ふむ…

変なところはないかな？

「そして今回の勝負にも制限時間をもうけます

試合開始から10分以内に決着がつかない場合は

どちらを選ばれし者では無かったということになり

争奪戦の結果に関係なくどちらも

風のリングの守護者にはなれません」

あーなるほど

「本当に選ばれし者を探す戦いなのかね

「10分?! 獄寺君よりも短い…」

うーん…チエルベツロって…

確か…未来のこと知ってるみたいなの

言い方をしたことがあつたよね？つてことは

私が制御解いたら5分しか戦えないって

知ってるからか…知ってるんだったら…

戦わずリングくれないかな…

「今回の戦闘フィールドも

特殊装置は用意されておりません」

「え？ 今回も？」

「はい

選ばれし者には必要ありませんから」

そうだよねー

風を操れるから必要ないもんね
外の方が戦いやすいぐらいだしー

「観覧席は指定のスペース内とします

今回も赤外線感知式レーザーが

設置されていますので気をつけてください」

…これで…私が怪我しても…

雲雀先輩が暴れないよね…？

大丈夫だよね…？

…：怪我しないようにしよう…

なんか…止めれる気がしない…（笑）

「すみません」

あ、聞いていないうちに話が進んでた

“なんだ”

「名前を…」

“ヴェントだ”

「…：…：…：そうですか

VSヴェント

勝負開始」

あれ？いつの間に…

向こうの名前言ったんだろ…

まあいいや…

風の守護者対決 1

とりあえず…言うだけ言おう……

“棄権する気はないか？”

「俺はヴァリアーの幹部になるんだ！」

“この試合に勝たなくてもなれるだろ？”

「俺のチャンスはこれだけなんだ！」

“……わかった”

やっぱりダメだったかー…

まあみんな私を期待してるしねー

名誉挽回するには私に勝つしかないんだろうね

さて…時間がないし…：さっさと終わらせよう

ということ…一瞬で相手につめる

相手がビツクリしてるけどそれは当然無視

ってか、よく考えたらわかるでしょ

私はこの人の技を見たんだ

中遠距離タイプって普通にわかるだろ

なんで相手のフィールドで戦わないといけないんだ？

まあ剣の腕も凄いついていう可能性もあるけど

それが出来ればXANXUSさんは私に興味が出るわけない

私が情報を持っていても向こうの守護者を選ぶはず

強くて情報を持っていたから私を選んだんだ

ということ…予想通り簡単に胴に入った

でも感触はよくなかった。何か仕込んでる

相手も自分の弱点は気付いていたんだー

まあどうでもいいや

だって相手の動きは違和感がなかったから

間接のところには仕込んでない

次はそこを狙えば問題ないしー

顔もあるけどーそこは私がしたくないんだよねー

って考えていたら……

相手が私の左肩に刀を振り下ろそうとしてるよ
というか型がまるでなってる：

スクアールさんが手を抜いてた時の方が強いよ
刀で受け流してる途中で風が変わった

つまり刀を交えていても使えるんだね

おっと、刀に風が集まるのが早いなー

んー私の後ろはみんながいるから

手首を蹴ってバランスを崩し標準をずらそう

流石に刀を離すほど蹴ると軌道が

どこに行くからわからないからしないけどね

まあ受け流してる途中でこんな高度なことを出来るのは

体のバランスを風でとってるからなんだけどね

それに気付かないようにさせるため

蹴ったから少し相手と離れようかなー

無理に蹴ったから体が浮いてるし……

風を使えば離れずいることも出来るけど

切り札は隠すもんだしー

スタツ

ズサアアア!!

よし、予想通り!

誰もいないところに軌道がずれたよ

い、今の一瞬で…何が起きた…?

1位の人がすごいスピードで前に出て当てれば

相手は何も感じてないみたいだし…

そしてその後すぐ刀と刀が交わって…

1位の人が体をひねって何かしたと思ったら

オレ達の横の地面が……

「割れてるー!?!」

どうなってるのー!?」

赤外線センサーがあるんじゃないのー!?

「……なぜ気付いた」

そ、そうだよ!

相手の言うとおりでだよ!!

オレは全然わからなかった……

でも1位の人は気付いて軌道をそらしたんだ!

〃……初めて会った時にも君の攻撃を止めただろ?〃

そ、そういえば……

「……今回のオレの動きはおかしくなかった!」

〃君は使ってる武器のことをわかっていないのか?

君の刀は周りの風を集めることができ、斬撃をはなつ〃

あ……風だったから通ったんだ……

〃そして維持できる時間は5秒もないんじゃないか?

つまり風がかわれば5秒間が危ないってことだ〃

「か、風がかわる!」

そんなことわかるのー!?」

〃風の守護者だからな〃

ガーン……

全然説明になってねえー……

オレには絶対わかんないし……

あ、でも……獄寺君の相手だった人は……

「うしっ!」

笑ってるー!

やっぱりわかるのー!?

〃……棄権する気はないか?

次の攻撃で決めるぞ〃

1位の人は……これ以上……戦いたくないんだ……

やっぱりオレは悪い人に見えない

何か理由があつてこの人達と知り合いなんだ……

「これ以上僕は群れたくない

早く終わらせてよね
……僕が皆殺しすれば早いのに」
……ヒバリさんがやっぱり群れて怒ってるー!?
皆殺しの中にオレ達も入ってるんじや……
……咬み殺されんのー!?

「これ以上僕は群れたくない

早く終わらせてよね

……僕が皆殺しすれば早いのに」

……そうだよね

相手が無傷で武器を持つてる状態で

情けをかけるなっってことだね……

そして皆殺しの中に私の対戦相手も入ってるんだよね

指輪を奪うだけでいいって言ってるんだ……

見てるだけのほうが辛いか……

心配してるんだろうなー……ごめんなさい……

「……………お……………ろ」

ん?なんか言った?

棄権する気になったとか?

「……………恩があるんだろ!!」

この方向は……ツナ君に当たるよ!!

キンッ

う……重い……

つて……また風が集まってる!?

連続攻撃か!!

私が動けないのを利用して至近距離で放つ気か!!

この状態で避ければツナ君に当たるし

避けないと私は当たるってか!

あーっっっ
ツナ君ごめんよ!!

風の守護者対決 2

オレの目の前で1位の人何かしてる…

もしかして見えない攻撃が…オレを狙ってる!?

あ…相手がまた1位の人に攻撃しようとしている…

オレを守ってるから1位の人が危ないんじゃない…

「悪い」

2度目の攻撃を1位の人が避けようとしてる!?

オレ…死んだ…??

みんながオレの名前を呼んでる…

死ねば魂が天国にでも行くのかな…

空へ登っていつてるし…

ピタッ

「……止まった?」

今…オレ…声でたよな?

「う、浮いてるー!?!」

それに地面が割れてるー!?!」

さつきオレがいたところだー!?!

やっぱりオレは狙われてたのー!?!

でもなんで浮いてるのー!?!

「……すまない」

僕が躊躇したばかりに君に迷惑をかけた」

……オレに向かって言ってる……?

「今おろすよ」

「へ? う、うん」

ストン

ほっ……良かった……足が地面についた……

「10代目! 大丈夫スか?」

「う、うん……」

「極限何があったのだ?」

「1位の人何かしたと思うんですけど……」

何したのかはわからなかった……

“手加減して迷惑をかけるほうが最悪か……”
い、今……手加減って言った……？

「はあ…ツナ君に迷惑かけちゃったよ……

このままだとまた誰かに迷惑かけちゃう可能性もあるし
やっぱり制御をとくか……

制御をといて迷惑かけるのも嫌だったんだけどね

でもみんなの安全の方が大事だしー

それにちようど相手は私が何したかわかってないから

警戒してるから今とるべきだね

あー風の武器じゃなかったら何とかなつたのになー

まあしようがないか……

ゴソゴソ

コオオオオオ

光ってるねー

思ってたより光ってるよ

「リボーンどういうことだ！ コラ！」

水色のおしゃぶり……

「アルコバレーノは

7人全員わかつてるはずだぞ！ コラ！」

争いごとをしたくないと言いながらツナ達を助ける

デイーノが自分のファミリーの名前を言って

覚えていた可能性が高いのも理解できたぞ

だが……オレはあいつの前で

アルコバレーノの話をした覚えがなかったんだ
なんで知っていたのか疑問に思っていたが……

「……………そういうことか」

コロネロ お前も情報は知っているだろう？」

いつだったか……アリアが……

もう1人アルコバレーノが現れると予知した

だが、あの山を調べたが何もなく

その後も情報は1つも入ってこなかった

コロネロも予知は外れたと思っていたはずだ

「……………まさか」

オレと会ってもおしやぶりが光らなかったのは

あの袋でおしやぶり機能を封印してたのか……

……まだ平和な生活を送りたい

ツナ達と出来るだけ過ごしたくて言ったんだな……

さつきから向こうが頑張って

風を集めようとしてるけど私の力の方が上だね

全く集まってるよ

それにしても……気分がいい……風が喜んてる

といっても、私の感覚がそう思ったただけで

喜んてるかは知らないけどー

ブン

あ、相手が使えなくてよくわかってない顔してるよ

刀を振ってる姿はマヌケにしか見えないなー

“今の僕の前ではそれはただの刀だ

もう君の勝ち目はない 諦めろ”

「クソー」

諦め悪いなー

私より剣の腕がないのに突っ込んできたよ

「あ、危ない!!」

あ、ツナ君が心配してくれてるよ
そりやそうか

私は何もかまえずのん気にいるしね
刀も鞘に戻しちやっつたしねー

だってヒビが入っっちゃったんだもん
キンツ

へえー

やっぱり圧縮した風って強度がすごいねー

金属音みたいな音がするとは思わなかったなー

「あー悪い

僕の周りにはバリアーをはっているんだ

欠点は集中力が結構いることだぞ”

私に集中力を切らせるぐらい攻撃すれば

なんとかなるかもねー

そんなことを出来る人がいるのかは知らないけどー

「バ、バリアー!?!」

やっぱりツナ君はナイスリアクションだね（笑）

「約束があるからバリアーは外す気はない

もうどつちが選ばれし者かわかっただろ?」

「うるやいー」

「君にはあのリングは使いこなせない

風の武器を持つてるだけでは無理だよ

風を操れる僕だから使いこなせるんだ”

「[「!」]」

みんな風を操るって聞いてビックリしたね（笑）

「もう実力差はわかっただろ?」

XANXUSは君には一切期待してなかった

そして君はまだヴァリアーに入ってないんだろ?

生きて帰れるはずだよ”

た、多分……

「黙れ！」

「君みたいな人が選ばれれば楽だったろうな……」

僕はマーモンと同じ意見で

この力は忌々しい力と思ってるよ”

悪いけど……気絶させてもらうよ

また突っ込んでみたけどーさっきより反応が悪いね

力の差がありすぎたから半分放心してるもんねー

ドサツ

さて……首の急所に当てて気絶させたしー

念のために刀を壊しとくか……

なんかすごいなー

私の手の中で小さな竜巻が出来ちゃったよ

あの刀に竜巻を突き出すか……

ブオオオオオ！

パキン

無事壊れたね

もういらないやー

思ってたけど……

圧縮させるのと竜巻起こすんだったら

竜巻のほうがものすごい楽だね

多分風の流れて操るほうが楽なんだろうねー

まあただの私の感覚の問題って感じな気もするけどね

……みんなビツクリしてるなー

ツナ君なんて腰抜けてるし……

”……僕が怖いかな？”

あ、ツナ君が困った顔しちゃったよ……

”悪い……怖いに決まってるよな”

「あ……あの……」

”気にしなくていい

僕も怖いんだ”

「え……？」

あ、指輪を忘れてた（笑）

勝手に探るよー

おっ！あつたあつた！

カチツ

〃これでいいだろ？〃

「……はい」

あー疲れたー

おっと……無双状態（笑）の間にかえそう……

〃XANXUS！これは返すぞ〃

パシツ

ちやんと紙をかえせて良かったー

〃僕はヴァリアーには入隊する気はない

たまにご飯を作れとかはいいいけどな〃

「んなー！？」

何いつてるのー！？」

〃……何か勘違いしてないか？

僕は彼らと仕事とかしたことないぞ

彼らにご飯を作ったことがあるぐらいだ〃

「ええええええ！？」

〃食べたことがあるのはルツスーリアと

スクアーロとベルだけだな〃

「しっしっ

ヴェントのメシはうまいんだぜ」

雲雀先輩の機嫌が悪くなった……

〃毎日食べてほしい人がいるから

努力してるんだよ〃

あ、機嫌直った（笑）

「お前はオレの守護者になるのは決定だ」

〃次の対戦は雲雀恭弥だ

彼は負けないよ〃

「言ってる

お前の能力はオレのために使わせてやる」

一体何に使う気だよ……

まあこの力を使えば町一つぐらい簡単になくなるだろうしね

〃断る

それに君が思ってるよりこの力は使えないんだ”

これ以上は言わなくていいかな？

どうせ今からわかるんだしー

〃あー……リボーン

今まで黙ってて悪かった”

「問題ねえぞ」

〃そうか

それは良かった……”

風の守護者対決 その後

ヨロツ…

そろそろ時間切れみたい…

足に力が入らなくなってきたし…

「チエルベツロ！」

勝敗は決まったぜ！

早く赤外線センサーを解除しろ！」

あー心配かけてるな…

「ディーノさん？ どうしたんですか？」

「勝負の結果、選ばれし者はヴェントに決まりましたので

風の守護者になってもらいます」

「いいから早く解除しろ！」

「跳ね馬うるせえぞ

何か用事でもあんのかよ」

「ヴェントの様子がおかしいぞ」

「「えっ！」」

もうダメみたい…袋にいれよう…

フラツ

あ…やばい…後ろに倒れる…

頭を守りたいけど力が出ないや…

ガシッ

あれ…？倒れない…

あ…雲雀先輩だ…支えてくれたんだ…

ズン

「しっしっ」

あ…モスカとベルさんも来た…

「悪いな

ヴェントは渡さないぜ」

「ヒバリさん!? デイリーノさん!?

何がどうなってるのー!?

なんか急いで1位の人のところに行っただと思えば

2人とも武器を出してるし……

「簡単なことだぞ

ヴァリアーがヴェントを狙ってるんだ

ツナ! お前も助けにいけ!

バキッ

「いってえ!」

またオレを蹴りやがって……

「何すんだよ! リボーン!

1位の人は強かったから大丈夫だろ」

「あの様子からしてもう動けねえんだ」

「え!?

で、でもヒバリさんとデイリーノさんがいるし……」

確かにさつき変だったけど

あの2人がいれば大丈夫だと思うし……

「あいつ正体はお前の大事な友達だぞ

ほつといていいのか?」

「え……?」

「助けに行かないと後悔するぞ」

……本気だ

本気で言ってる……

それにオレ……1位の人に言わないといけなことがある……

行かないと!!

「わ、わかった!!」

倒れるって言っても意識あるんだね……

それにしてもが変だ…まさか…
……

ディーノさんに…頼もう……

「ヴェントは渡さない」

あれ…？ツナ君も来てくれた……

なんでだろ…？

嬉しいからなんでもいいや……

「お待ちください」

ここで戦えばリング争奪戦の意味がありません」

……喜んでる場合じゃないか……

最後まで頑張らないと……

「チエルベツロ……」

「はい」

「まだ…決まってるんだ…」

「ここは…僕のことを…尊重させてくれ……」

「……わかりました」

「僕は…沢田綱吉の方にいる……」

「わかりました」

「ここで戦うことになれば」

「ヴァリアー側の失格になります」

「げっ」

「ふう…どうなるかと思っただぜ」

「僕らは帰るよ」

「ふわっ」

「あ…お姫様抱っこだ……」

「ああ」

「あーこれは結構恥ずかしいかも…」

「歩けないから我慢するけどね…」

「ヒバリさん！ 待ってくださいー！」

「なに」

「リボーンが1位の人がオレの友達って言ったんだ…」

リボン君にばれちゃったんだ……
みんなに正体を話しちやうのかな……

「本当ですか？」

……服を握れば……わかってくれるかな……

「……それで？」

「え……」

「フードとった姿が君の言う友達だった場合

君には何か問題あるの？」

「……ないです」

あ……機嫌が悪くなってる……

服を握るんじゃないかな……

「ちつ違うんです!!」

そういう意味じゃなくて……」

「なに」

「もうオレは1位の人を友達と思ってるから……

フードかぶつてもかぶつてなくても一緒だから……」

……ツナ君には敵わないな……

「そう」

「はい……」

ヴェントさん？ ……ヴェントでもいいのかな……

オレは全然怖くないよ

ヴェントだから怖くないんだ」

……返事をしないといけないのに……

ヴェントの声が出せないや……

「ありがとう」

「え？ ええええ!!」

「ヴェントが言ってる」

「あ、あ、はい!!」

(ヒバリさんがオレに礼を言ったかと思っただけ……

すっげーびびったー……)」

「じゃあね」

「は、はい!!」

「……少し走るから揺れるよ」

ボロボロに泣いてるのに

何も言わないでくれてんだ……すつごく助かる……

「心配しなくていいよ

何かあっても撒くからね」

……気にせず泣いてもいいってことかも…

頭を寄りかけてもいいかな……

ちよつと甘えたい……

「うん。そのほうが安定する」

……ありがとう

無事……家につけた…

これ以上は迷惑かけれない…

「……雲雀先輩……」

「なに」

「……もう私は大丈夫ですから……」

「どこが」

……やっぱりそうなるよね……

「これ以上はダメなんです……」

「どうして?」

「……ものすごい身体が熱いんですよ……

多分熱出てます……

倒れるの意味を勘違いしてました……」

熱が出て……倒れるっていう意味だった…

「そう」

「……明日の試合…雲雀先輩なので…
うつつちやダメです……」

「ヤダ」

「ディーノさんに頼みますから……」

「僕以外に頼むと怒るっていったよね」

「……怒っていいです……」

「はあ……」

「さつき十分甘えさせてもらいま……ん／＼／＼」

……冷たくて気持ちよかった……／＼／＼

まあ私が熱すぎるんだよね……

……

さつき……私……何を思った……？

は、恥ずかしい……／＼／

熱でおかしくなってるってことにしよう……

「大人しく言うこと聞かないともっとするよ」

はうう……／＼／＼／

これ以上はダメです……／＼／

うつつちやうかもしれないし……

「はやく寝なよ」

コクコク……／＼／／

あ……笑った……／＼／／

正体 1

「あのモスカって奴が

絶対勝つという確信があるからだ」

「……………それって……………ヒバリさんが……………」

……………負ける……………?」

カツ!

「……………消えた……………」

「心配するな ツナ」

「ディーノさん……………」

「恭弥は完璧に仕上がってるぜ

家庭教師として鼻屑目なしにも強えぜ あいつは」

「良かった……………」

そうだよな……………」

あのヒバリさんが負けるわけないよな

「リボーンさん!」

び、びっくりした……………」

獄寺君どうしたんだろ……………いきなり大きな声を出して……………」

「あいつの正体はわかったんスよね!」

誰なんスか!」

「あ、あの……………」

「なんででしょうか!!」

……………こえー……………」

「ほ、本人が隠したいんだし……………」

無理に聞かなくても……………」

「そうはいきません!」

あの力は危険すぎます!!

もし10代目に……………」

だから……………ヴェントは大丈夫だって……………」

「あいつはお前らを裏切ることはしない」

ディーノさんもやっぱりそう思うんだ!

「ディーノ」

「なんだ？ リボーン」

「正体を知っていてオレに黙ってたとはいい度胸だな」

「わ、悪かった！」

「だから銃をおろせ！」

「ディーノさんも正体知ってるのー!？」

「ああ」

「オレもこの前知ってたけどな」

「そ、そうだったんだ……」

「跳ね馬！ 正体教えやがれ！」

「ぜってえ文句言ってやる!!」

「ケンカ売る気まんまんだー!？」

「獄寺には無理だと思っぞ」

「リボーンさんどういふことスか!？」

「お前の友達だからだぞ」

「な!？」

「やっぱり……小僧……」

「山本！ 誰かわかっているの!？」

「さつきまで自信なかったけどよ……」

「でも……もうあいっしつかないだろ……」

「全然わかんねえー……」

「どこで山本はわかったのー!？」

「………はっ!？ ……リボーンさん……」

「そんなわけないスよね……?」

「獄寺君もわかったのー!？」

「なんでー!？」

「沢田！ オレは極限わからんぞ!!」

「ク、クロームは……?」

「ボス……ごめん……知ってる……骸様も……」

「んなー!？ 骸も知ってるのー!？」

「わかってないのは」

「オレとお兄さんだけなのー!?」

「沢田殿……拙者もわからないです……」

「よかったー……まだ仲間がいた……」

「バジルは会ったことがないからな」

「考えてもわからねーぞ」

「そ、そうでしたか……」

「ガーン……」

「じゃあやっぱりオレとお兄さんだけなんだ……」

「ツナ……よく考えろって……」

「オレ達と友達で……女子で……」

「ヒバリが守ったんだぜ?」

「そ、そうだった……ヴェントは女子だったんだ……」

「それでオレ達と友達でヒバリさんが守った」

「……あのヒバリさんが守った……?」

「……ま……まさか……」

「で、でもあんな動き今まで見たことないし……」

「そりゃ……足は速いけど……」

「極限わからん!!」

「芝生頭! てめえの妹の友達だ!」

「……や、やっぱり……?」

「京子の……?」

「極限わからんぞ!!」

「……」

「オ、オレが思ってる人だとしても……」

「……なんで……あんな危ないことを……」

「何度も言ってたじゃねえか」

「争いごとが嫌いだけど」

「ツナ達に死んでほしくねえって」

「……」

「……絶対そうだ」

「もう他の人は考えられないよ……」

「あのバカ!!」

「わかりにくいんだよ!!」

「獄寺君……」

「でもさ、なんで正体隠してんだ?」

「本当だ……」

「山本の言った通りフードかぶらなくてもいいんじゃない?」
「どうしてだろう……」

「デイーノさん何か知ってませんか?」

「デイーノさんはリボンより先に」

「正体知ってみたいだし……」

「……知っているが……」

「跳ね馬教えやがれ!!」

「デイーノさん! 頼む!」

「デイーノさんお願いします!」

「……わかった」

「その前に誰か極限教えろー!」

「風早だ!」

「あいつだったのか!」

「……」

〜嵐戦の日〜

「恭弥はまだ寝てるのか?」

「あ、おはようございます」

「デイーノさん、ロマーリオさん」

「そうですねー熟睡中ですー」

「よしよしー」

「うん。やっぱり起きないねー」

「それにしても……恭弥が……まで……」

「無防備に寝るとは……」

「そうですねー」

付き合ってからなのか

私が強いってわかってからなのか……

昔より熟睡してますよー」

「そうか……」

優、何があっただんだ？

ツナ達を助けるのはわかるが

優の性格だとマフィアに入るつもりだった

っていうのもおかしいだろ

それに封印が解けた心当たりっていうのはなんだ？」

「んーそうですねー」

その前にちよつと質問です」

「なんだ？」

「アルコバレーノって

みんなマフィアに入ってます？」

「ああ

それがどうかしたのか？」

やっぱり……」

「私もアルコバレーノなんですよ」

「!?」

2人ともビックリした（笑）

ゴソゴソ

「この袋におしやぶりが入ってますよ

アルコバレーノになった時点で

私はマフィアに入ることが決まってしまったんです」

「……どういうことだ？」

「去年の4月4日の夕方に

アルコバレーノになりました」

「封印がとけた心当たりってそれなのか……？」

「そうです

私が風のアルコバレーノで

風のリング……そして数年前に封印が解けた……
偶然には思えないでしょ？」

「なるほど……」

アルコバレーノになったってどういうことなんだ？」

デイーノさんはアルコバレーノのことを

どこまで知ってるんだろう……」

まあ話せる範囲でいいか

「うーん……私の場合の話をしますね

リボーン君は違いかもしれないし……

答えは私にはわからないので……」

それはリボーン君に聞いてくださいいね？」

「ああ」

「私の場合は急におしやぶりが身体から

離れなくなっただって思ってください

そして力を得たって思ってください」

多分リボーン君は最初から強かったと思うしー

やっぱりみんなと違うのかな？」

「わかった」

「それで、一般人だった私には

いきなりこんな力があっても困ってしまった……」

「どんな力なんだ？」

「風を操れるんです

台風を作ることだって出来ます」

「な!?!」

「困るでしょ?」

「……ああ」

「で、ある人にアルコバレーノが

わからなように袋をつくってもらって

力をおさえてもらったんです」

「なるほど……」

「私がこんな力があるってばれると

普通に学校いけると思います?」

「……………そうだな」

やっぱり学校行けないんだ……

私の心配しすぎかなって思ったけど……

この世界は甘くないよね……

正体 2

「それに私の場合は一般人だったんですよ？」

誰に保護を求めているのか…

マフィアの知り合いなんているわけないですしー」

まあツナ君と会えるのは知ってたけどね

でも継がない可能性もあるしねー

そう考えるとツナ君を頼るのはダメな気がするし…

「……………」

「ばれた時はボンゴレか…

デイーノさんの所に入りたかったんですよ

私は争いごとダメで…

誰か知ってる人がいて…安心したくて…

マフィアのことなんて私には全くわからなくて…

デイーノさんがマフィアの名前言った時に

念のために覚えてたんですよ」

ツナ君が継がなかったらデイーノさんに頼る気満々だったけど

私の原作知識でマフィアの名前なんて覚えてるわけないし…

デイーノさんが自分で言ってくれて実は助かったんだよね（笑）

「……………そうか」

「はい……………」

雲雀先輩には私がこれを持っているとばれると

争いごとに巻き込まれて学校行けなくなる

って言いましたよ

言って正解でしたねー」

「ああ……………」

「こんな力ほしくなかったけど……………」

みんなを守る力になれるから…少し複雑ですね」

何も力がなくてみんなに会いたかったよ…

まあそれは絶対無理だけどね……………」

「……………」

でも…なんでツナ達に黙ってるんだ？

学校行きたいからって頼めば

ツナ達は絶対黙ってくれるだろ？」

「聞きたいです？」

「ああ」

「…どうしてもですか？」

「ああ」

逃がしてくれないか…：…しょうがないか…：

「そうですねー」

私が危ないことしたら

ツナ君達心配するじゃないですかー

強い男の人って思ってたたら

心配しなくて済むかなって」

「そうか」

簡単に納得しちゃったよ

やっぱり私はウソが上手だよねー

「つていうのは建前でー」

「え!？」

「雲雀先輩にばれちゃった時

ちょうど事件があって終わったら

雲雀先輩に説明した後

自分の口でみんなに正体ばらそうかな

って思ってたんですよねー」

「そうなのか？」

「そうですねー…」

でもその時に復讐者が持ってきた鍵によって

いろいろ縛られたりして

話せないことも多くなっちゃって…：

私がいもし間違って話したら

私に関わった人…：…みんな死んじゃうんですよー」

「なっ!？」

「そんな人と普通一緒にいたくないでしょ？
っていつても……」

ツナ君達は一緒にいてくれるんだと思いますけどー」
特にツナ君は一緒にいてくれるんだろうなー

私が距離を置こうとしても

絶対そんなことさせないだろうなー

ほんとに包み込むような優しさだもん

やっぱりツナ君は大空だよねー

「ちよつと待て！

ツナ達のことをそこまでわかってるだったら……

なんで……」

「そうですねー

みんなのこと好きだから尻込みしちゃうだけなんです

ただの臆病者ってことです（笑）」

「……………」

あー…ちゃんと笑えてなかったかも……

「フードかぶってる時に私に関わった人が死ぬ

って言った時にツナ君が真っ青のなっちゃって……

すっごく怖くなったんですよ

つい……リボン君に……

私を殺す権利があるから今殺すか？

って言っちゃいましたよ」

「優!!」

「あ……すみません……」

ちよつどその時に雲雀先輩に事件が終わったら

1番最初に全部話すって約束したばかりだったんですよ

なんか望んでない方ばかりいっちゃって……」

「……………」

私なんかのために怒ってくれたなー……

デイーノさんは言い聞かせるタイプなのにね

本当にいい人だよ……

「雲雀先輩はその時大怪我してたんですけど」

リボン君あんなこと言っちゃったからか……

私を1人にさせるとロクなこと思わないと

思ったんでしょねー

1度も病院に行かずに私の家で怪我を治しましたよ」

最初の方は食材すら買いに行かせてくれなかったもんね

風紀委員に買ってきてもらったし……

いいって許可もらえたのは

逃げないってわかったからか……

自分が動けるようになったからか……どっちなのかなー

よしよし……

いつか教えてくださいね

「……そうか」

「まさかこんなに自分のこと話すのが

怖いとは思わなかったですよ

それだけみんなのこと大好きってことなのかなー」

「……すまん……」

「え!? どうしたんですか?」

「オレにも……」

話したくなかったんじゃないのか……?」

「そうですよー

デイーノさんはそんな人じゃない

ってわかってても

すつごい怖いんですからねー」

「……すまねえ……」

怒った感じでいってみただけど本気で気にしてるな……

デイーノさんはいい人すぎだよ……

「…………デイーノさん

もう少し黙っててもらえませんか?」

「……ああ」

「いつか優の口から話をしたかったと思う……
オレからは正体をばらすことは出来なかった……」
優……

「あいつってホントにバカだよな……
怖がることなんかないのにな……」

獄寺君……

「そうだな……」

風早とはずっと友達なのにな……」

山本……

……そ、そうだ!!

「この戦い終わったら……」

またみんなで遊びに行こうよ!」

「そうですね! 10代目!」

「ははっ! またゲーセンでも行くかつ」

「そうだね!」

「うおおおお!」

よくわからなかったが風早は京子の大事な友達だ!
学校に来れなくなると京子は悲しむぞ!!」

「そうですね」

京子ちゃんが悲しみますよ」

「極限黙ってるぞ!」

「私も……話さない……」

「クローム! ありがとう!!」

「それに骸様も話すなって言ってた……」

「そうなの!?!」

優が骸に頼んだのかな……

でもこの2人って仲がいいのかな……

この前…骸は優に攻撃してたし…

「10代目…」

骸の奴なにか企んでるのでは…」

だ、大丈夫…：…だよな…：…？

「まーまー

オレもよくわかんなかったけどよ

黙ってくれるんだろ？

問題ねえじゃねえか！」

「だからおめえは能天気過ぎだ!!」

「まあヴェントって呼ばねえと

優は学校に通えなくなるからな

おめえら気をつけろよ」

「う、うん」

本当に気をつけないと…：…間違ったら大変だ!!

正体 3

よかったぜ……

ツナ達は問題ないとは思っていたが……

オレが独断で話をしてもし何かあった場合……

優にしようがないと笑顔で言われるのが1番堪える……

そしてオレを守るために怒った恭弥を必死に止めるはずだ

それがまた堪えるからな……

「復讐者が持ってきた鍵はもう1個あったはずだぞ

知らねえのか？」

「そういえば……」

優に被害が来るって言ってた……」

「……ああ

アルコバレーノの力を制御されたみたいで

使うと副作用で倒れるみたいだぜ……」

「なるほど……」

それで様子がおかしかったのか……」

「ああ

体調が完全で5分らしい」

「かなり短いな」

「ああ

強制的に倒れるらしいから滅多に使えないんだ」

さっきの優の様子……

使った後に必ず誰かが優を守る状況じゃないと下手に使えない

当然、使った優が1番わかったと思うが……

「さっきはツナ達を守るために使ったんだな」

「あのバカ……」

「それでディーノさんは急いでたんですね」

「ああ

急がねえと恭弥が飛び出しそうっていうのもあったけどな」

「「確かに……」」

今までにもそういうことがあったのか……

それに恭弥のことだ

優が気付いていないところで何かしてそうだぜ……

「普段はどうなんだ？」

「人一人を浮かせる位の風を操れるみたいだ

そして天気とかに左右されるらしい」

風を生み出す場合は術士と同じで集中力などを鍛えればいいが……

自然の風を操る場合は少し違う

これは優にしか感覚がわからない……

今回の戦いに向けてオレはアドバイスが出来なかった……

「……わかったぞ

だが、優はなんでヴァリアーと知り合いなんだ？」

「そ、そういえば……」

「イタリア旅行行った時に

ベルフェゴールに拉致されたらしい」

「「「はあ!?!」」」

……気持ちはわかるぜ

オレだってそんな繋がりとは思わなかった……

「拉致されて姫って呼ばれて

スクアアロとルツスーリアのおかげで

無事日本に帰れたらしいぜ」

「そ、そういえば……イタリア旅行に行った時

いろいろ巻き込まれて大変だったって言ってたね……」

「ああ……」

「その時に1泊世話になったから朝ご飯作ったらしい」

「あのバカ！ 拉致された癖にご飯作るなよ!？」

獄寺からも言ってくれ……

オレも話を聞いた後で言ったが

さっきの様子だと全く反省してないんだ……

「極限律儀でいい奴じゃないか!!」

……頼むからそれは優には言わないでくれ

「ボス……犬と千種にも弁当作ってくれた……」

「……………」

……骸に黙ってもらうかわりに作ったと考えるよう
そうしなければ説得できる気がしない……

このことは後で優に聞くとして

優が自らヴァリアーにばらしたわけじゃないと伝えないとな

「フードかぶってたから気付かれると思わなかったし

街中でスクアールと会ったり戦った時は

どうしようかと思っただけで言っただけ

「それもそうですね……」

「ああ

まだ他にもあるぜ」

「まだ何かあるんですか？」

「晴戦の後にまたベルフェゴールに

拉致されてヴァリアーで1泊して

スクアールとベルフェゴールの朝ご飯作ったらしいぜ」

「何してんのー!?」

「XANXUSに殺気向けられたり

いくら敵って説明しても聞いてもらえないし

戦って逃げて怪我させると失格とかになるのか

いろいろ悩んだって言っただけ

「あいつ……本当にバカじゃねえのか……?」

お人好しにも程がある……」

「「確かに……………」」

会ったことがないバジルにまで言われてるぜ……

「優しいじゃねえか

今までの全ての行動は全部理解出来たぞ」

「う、うん……」

優だったらありえそうだね……」

「10代目……」

納得するオレもバカな気がしてきました……」

「ハハッ

やっぱ風早らいな」

……納得するのか……

今まで優は一体何をしたんだ……

「……優は……ディーノさんには正体バラしたんですね……」

ツナと優はかなり仲が良いらしいから……

優が怖かったと言っても自らオレに正体をばらしたなら

ツナにも話してほしかったと思っただろう

「違うぜ

優はオレにも隠すつもりだったんだ」

「そうなんですか？」

「ああ

オレと恭弥のためにバラしたんだよ」

「どういうことですか？」

「オレが無理にフード取ろうとして

右手にロープで拘束しちまったんだ」

「「「え!?!」」」

「じゃあ恭弥が怒っちまって……

武器がないオレをかばって恭弥の攻撃を受けたんだよ」

「ヒ、ヒバリさんの……?？」

「まあ風の盾を右手に集中してたから無傷だったんだけどな

恭弥がオレの前では心配出来なくて帰るって言っちまうし

試合会場は学校だし困ってしまっただけな」

「それでディーノさんに正体教えたんですか？」

「ああ

優のせいで恭弥の楽しみを奪いたくないから

っていうのも強かったんだろう」

「ディーノ、嵐戦でヒバリが暴れた理由の

1つは優が原因か？」

「そうなんですか？」

……全く勘が良すぎるぜ

「……ああ

雷戦終わった後にオレ達のところにきた時に

泣いちゃまってな………」

「なるほどな

だからヒバリを止めれたんだな」

「ああ

恭弥は優がそんなこと望んでないのを知ってるからな……

だから話を聞いた後に優を気絶させて

学校に向かったりしてこっちは困ったぜ」

「そんなことがあったんですね」

「ああ

恭弥は優のことだけは心配性だからなー

ツナ達も聞くと笑っちゃまうぜ?」

「なんですか?」

「絶対怪我するなって約束を無理矢理したらしい」

「「え!?!」」

「修行中に恭弥は怪我とかする癖に

優にはするなって言うんだぜ? 笑うだろ?」

「「「確かに (笑)」」」

まっこの約束はなくなると思うけどな

恭弥の約束を守るためにも制御をといたのもあるはずだからな

約束を守ることを1番に考えて

何度も優が倒れる姿は見たくないだろう……

「さて、オレは優の様子をみてくるよ

お前らはもう寝ろ」

「で、でも……」

「今、大人数で行けば恭弥に咬み殺されるぜ」

それに優も必ず無理をして元氣を出すと思うからな

「……そうですね

「ディーノさん伝言を頼めますか?」

「任せろ」

「この戦い終わったたらまたみんなで遊びに行こうって
伝えてくれますか？」

「もちろんだ

ちゃんと伝えるよ」

「お願いします」

手

……ここは……私の家か……

「まだ寝てなよ」

「……雲雀先輩……」

「熱あったよ」

「寝てる間に測ってくれたんだ……」

「やっぱり……そうでしたか……」

「どれぐらい……寝てました……?」

「まだ1時間ぐらいしかたってないよ」

「意外とたってないな……」

「……手……握ってくれたんですね……」

「ありがとうございます……」

「言わなくていい」

「何をだろ……?」

「僕がしたかったただだから言わなくていいよ」

「……今までしてもらったことなかったから……」

「嬉しくて……」

「わかった」

「……良かった」

「わかってくれた……」

「初めてが……雲雀先輩だから……すごく嬉しいです……」

「……優しい顔だ……」

「すごく……落ち着く……」

ピンポン

「……誰かな……?」

「見てくるよ」

「……ありがとうございます……」

かみさま……

『優、無理するな……』

ありがとう…

でも…相談したいことが…

『なんだ?』

モスカの中に…9代目が入ってる…
って言ったら…ダメかな…

『…難しいところだな』

そっか…

『ああ』

理由が呼ばれたから知ってるになるからな』
だよ…

『優もわかってるからこれからのことを』

今まで言わなかったし…知ってたけど
自分の目で見たり聞いたりするまで
知らないふりしてたんだろ?』

うん…

…範囲がわからないって難しいね…

『…そうだな』

ベラベラ話すなっていう意味も入ってると思う』
そうだよ…

『優』

…なに…?

『今は何も考えず寝ろ…』

話せないけど…明日…

雲雀に怪我させたくないから行くんだろ?』

うん…

『だったら…しっかり寝ないと…』

明日なにも出来ないだろ?

話せない分…優が行動するしかないんだ

オレは雲雀を助けることは出来ないからな』

そうだね…

神様にも…心配かけて…ごめんね…

『俺のことはいいから早く寝ろ』

うん……

雲雀先輩に帰ってもらったらすぐ寝るよ……

『ああ』

おやすみなさい……

『おやすみ……』

ガチャ

「何しに来たの」

……機嫌悪すぎだろ

まっ怒ってないところをみると優が起きていたのか

音に気付かず寝ているんだろうな

「倒れるって聞いてたから様子を見に来た」

「そう」

「大丈夫そうか?」

「熱出てる」

「え!?!」

「倒れるの意味は熱が出るってこと」

副作用はそういう意味なのか……

「……そうか」

「僕が診るから帰っていいよ」

その様子だとそこまで高くないのか……

医者に診せても熱が下がる可能性が少ないのは

恭弥は気付いていると思うが

熱が高すぎると設備がある病院に連れて行くと思うからな

これで少しは安心したぜ……

問題は……恭弥だな

「オレが診るぜ」

「恭弥は明日が試合だからな」

「関係ないよ」

「……そう来ると思った」

「優は喜ばないぜ？」

「……………ちゃんと寝るよ」

「これで絶対寝る」

「後は恭弥に任せるか……」

「赤ん坊も同じ理由？」

「ちやおツス」

「うわっ！ リボーンいつの間！？」

「この場所にはかなり慎重にロマーリオと来たんだぜ……」

「それなのに全くわからなかった……」

「まっオレに気付かれずにいたのはリボーンだけだな」

「オレが気付かず優の家に入ろうとすれば」

「ぜってー蹴られたりしただろう……」

「優と少し話したくてな」

「……………聞いてくるよ」

「恭弥もオレと一緒に詳しく知らないんだな……」

「優の話には肝心なところが抜けていた」

「おしやぶりが離れなくなった時のことを話そうとしなかった」

「話せないのか……それでもそこに何かあるのか……」

「優が体調が悪いのを知っていてリボーンが来たんだ」

「何かあったと考えていいだろう」

「ディーノ、ツナの伝言は」

「オレから伝えてもいいか？」

「着いてくるなってことか……」

「オレには話すつもりないんだな……」

「……………ああ 頼んだ」

………デイーノさんの叫び声が聞こえた………
倒れるって言ったから心配できてくれたのかな………

ガチャ

「デイーノさんでした………？」

「よくわかったね」

「声………聞こえた………」

「そう」

………赤ん坊が優に話したいって言ってるけど………

どうするっ？」

リボン君か………

「…………します」

「少しの時間だけだよ」

「………わかってますよ………」

後悔

「わりいな

無理させて」

「……大丈夫ですよ……」

こんな格好で……すみません……」

起き上がれないんだよね……」

「無理いつてるのはこっちだ

……ディーノから全部聞いた

ツナ達も一緒に聞いたぞ」

あ……やっぱり正体ばれたんだ……」

ディーノさん……わざわざ説明してくれたんだ……」

「……黙っててすみませんでした……」

「別にいいぞ

オレは女に優しいからな」

「……そうですか……」

いつ……わかったんですか……?」

「姫って言った時に

ヒバリの機嫌が悪くなったからな……」

あー……あの時ね……」

「……私もあれは困りました……」

「そうか

あと……フードかぶってた奴も

優もオレの読心術がきかないしな」

へえ……読心術つかえるんだ……」

「……そうなんですか……?」

「ああ

ツナの友達って聞いて初めて見たとき驚いたぞ」

「あ……それで私をつけて調べたんですね……」

「!? 気付いてたのか!?!」

「……風で気配がよめますから……」

「そうか……」

ただのツナの友達と思つて警戒は解いたけどな」

「……そうですか……」

そっか……読心術つかえたら……」

マンガを読んで知ってるつてわかつちやうもんね……」

「ツナ達から伝言を預かってきたぞ」

伝言……なんだろ……」

「この戦いが終わつたらまた遊びに行こう」

つて言つてたぞ」

……やっぱりツナ君達は優しいな……」

「……そうですか……」

やつと……すつきりできそうです……」

「……そうか」

あ……そういえば……」

「……話せない内容の中に……」

私の呪いも……あるんですよ……」

「……そうか」

一人で混乱したんじゃねえのか？」

「いきなりだったんで……混乱も出来なかつたです……」

「そうか……」

「いろいろ話せなくてすみません……」

「優のせいじゃないだろ」

「……すみません……」

リボン君達のは……聞かないので……」

「いいのか？」

もしかして……リボン君が来た理由は

呪いの話を聞くのか確認しに来たのかな……」

「……予想がついてるのか？」

赤ん坊であの身体能力だと……」

原作知識がなくても普通は想像できる範囲だよね……」

ツナ君達が鈍すぎるだけだし……

まあありえないから思いつくわけないかも知れないけど……
私はありえないことが起きたから想像つくのかもね……

「……不公平ですし予想の範囲でいいです……
だから……もし詳しく聞くときは……」

ツナ君と一緒に聞きますよ……」

「わかったぞ」

「……手がかりは？」

神様は知ってるけど教えてくれないと思うし……

教えてもいいなら最初に話してると思うんだよね……

どういう人か……教えてほしいんだけどな……

「……」

知っていれば……呪われたままじゃないか……

「……すみません」

「……優は探したのか？」

「それどころではありませんでした……」

隠すのに必死だったし……

「……そうだな」

「あ……」

「なんだ？」

「学校……もう行けませんか……？」

「大丈夫だぞ」

「私のわがままで……迷惑かけます……」

「問題ねえぞ」

優は1人で抱え混みすぎだぞ

オレと会った時に話せば良かっただろ？」

「言ったら……」

いろいろ巻き込まれそうと思ひまして……」

関わるって決めてたのに……正体はばれたくなかった……

私はずるいんだよね……

「……そうか」

「まあ結局……見れられなくて……」

自分から手を出してしまいましたけどね……
でも後悔はしていません」

手を出さなかったら後悔した……絶対……

「……わかった」

オレは帰るぞ」

「もう……いいんですか……う？」

他にも聞きたいことがあるはずだし……

「ああ」

そろそろ帰らねーとヒバリが怒りそうだしな」

「……それは怖いですね……」

「ああ」

「あ……リボン君……」

「なんだ」

「……ツナ君の修行……明日も続けてくださいね……」

私が言わなくてもすると思うけど……

「そのつもりだが……」

優はヒバリが負けれると思ってるのか？」

「……雲雀先輩は負けませんよ……」

「だったらなんでだ」

詳しく言えないけど……

「すぐく……嫌な予感がするんですよ……」

「……わかった」

「……お願いします……」

「しっかり寝ろよ」

「……はい……」

「わりいな

終わったぞ」

「そう」

「優のこと頼んだぞ」

「わかった」

ガチャ

あ……雲雀先輩だ……

「もう寝なよ」

「……雲雀先輩……」

もう……私は大丈夫なので……

明日のために帰ってください……」

「ヤダ」

「でも……」

「ちゃんと寝るから」

「……わかりました」

そのかわり……1つだけお願いを聞いてくれます……?」

「なに」

「もし……熱が下がらなくても……試合を見に行きたい……」

「……わかった」

「……ありがとうございます……」

「寝なよ」

「はい……」

……先輩も寝てくださいね……?」

「わかったよ……」

……これでちゃんと寝てくれよね……安心して寝よう……

てれないでください

……よく寝たけど……すごく頭が重いし力が出ない……
副作用がこんなにひどいとは思わなかった……
今何時だろ……え……

……

何度も目をパチパチさせただけど……
かわらない……つまり……

「うわあ!!」

う……大きい声出してしまった……
頭がいたい……

「やあ」

「……なんで隣で寝てるんですか……」
「問題ないよ」

……あるでしょ……
「あ……そっか……」

和室の布団……出しとけば良かったですね……」
「別にいらないよ」

……もうツツコミ入れる体力ない……
大きなベットでよかった……

あれ……? おでこが冷たい……
雲雀先輩の手か……

「まだ熱あるよ」
「……そうですか……」

喉乾いたな……取りに行こう……
「どこ行くの」

「……喉乾いて……」
「僕がいくから寝てなよ」

「……ありがとう」

ふう……少し楽になったかな……

もうお昼か……

「雲雀先輩……ちゃんと寝ました……?」

「寝たよ」

「……よかった……」

うつってないですよね……?」

「多分うつらないと思うけど」

「どういう意味だろ……」

「咳とかないし熱があがつて倒れる副作用だと思う」

「……なるほど」

「風邪じゃないのか……」

「……なにか食べれる?」

「冷蔵庫に……ゼリーあつたかな……」

「それぐらいなら食べれると思う……」

「見てくるよ」

「すみま「謝らないで」……迷惑かけてます……」

「僕がしたいんだから」

「前にも同じようなこと言われたな……」

「……ありがとうございます」

「寝といて返事も無理にしなくていいから」

「うなずくだけでいいってことか……」

コクコク

……今日も制御解いたらこの状態で何分もつんだろ……

というか……集中力足りないよね……

風のバリアーや斬撃が出せないと思う……

出せても数秒しかもたないか……

それにこの状態からの副作用ってやばい……

どうしよう……大空戦あつたら役に立たないかも……

でも私は決まってるから関係ないのかな……

あー……頭がまわらない……

「あつたよ」

考えてたら雲雀先輩が戻ってきた……

今度から制御ときそうな日に用意しとこう……

考えても頭がまわらないし食べてさっさと寝よう……

「……………」

ついに幻覚が見えたか……

……私って幻覚に気付くじゃん

つまり……これは現実……

「……なにしてるんですか？」

「食べるんだよね」

さらに頭が痛くなってきた……

「……貸してください」

「ヤダ」

まさか……食べさせてもらうのか……？

それは勘弁してくれ……

はつきり言えば見逃してもらえないはず……

「……恥ずかしく……もつと熱があがります」

「気のせいだよ」

気のせいですまない……絶対

「自分でたむぐつ!？」

お、鬼がいる……ここに鬼がいる……

話してる途中でスプーンを突っ込むなんて……

「今のは危ないから僕は嫌だ」

でも大人しく食べないならするよ

どうする？ 優が決めていいよ」

選択肢がないじゃん……

「も、もう……た、食べさせてください……」

い、いらなん言えなかつた……

スプーンが目の前にあつたもん……

もうダメだ……／＼／＼

恥ずかしくて死にそうだ……／＼／＼
布団に隠れなければ……！

「優、冷蔵庫の物勝手に使うよ」

あ……そうだね

雲雀先輩のご飯いるもんね……

「どうぞ……」

「優は寝ときなよ」

「……あ」

言っておかないと……

「起こすよ」

「……ありがとうございます……」

「起きなよ」

もう少し寝たい……

「起きないと置いていくよ」

……試合!!

バツ!!

フラツ……

ガシッ

……勢いよく起きて……

倒れかけて支えてもらうなんて……

「……すみません」

「……熱あるの忘れないでよ」

本当にやってしまった……

「本当に置いていくよ」

「それは嫌です……」

「はあ……」

さらに雲雀先輩に心配させてしまった……
ふわっ

……またお姫様だっづ」

「……あの……歩けますよ？」

ゆっくりだったら大丈夫だし……

「急がないと間に合わないよ」

う……

「お、おんぶで……」

「ヤダ」

おんぶでも問題ないじゃん……

男のフリしてるんだし止めてほしい……

「……なんですか……？」

「………僕の姫だから……」

………

………

ベルさんが言ったのをまだ気にしてたのか……

「……自分で言っててれないでくださいよ……／＼／＼」

耳が赤い……

「うるさいよ」

うるさいって……（笑）

「笑わないでよ」

「……はい」

ちよっと元気出たかも……

「このまま行くよ」

今回はしょうがないか……

雲の守護者対決 1

『ぎゃっ!?!』

誰が叫んでる……??

あ、あれはゴーラ・モスカ……?!

『優!?!』

優に何してるだよ!?

た、助けないと……!!

『わ、私は大丈夫だから!』

な、何言ってるの!?

『……さようなら……』

もう会えないからさようならなの……?!

そんなのだめだ!!

『やめろー!?!』

「うわっ」

ガバツ

オレの部屋だ……今のは夢……?!

「な……なんて夢だよ……」

優がヴァリアーに連れて行かれる夢見ちゃったよ……」

さっきの優……フードかぶってなかったな……」

「優……大丈夫かな……」

診に行きたいけど……」

朝早いしまだ寝てるかも……」

「ディーノさんのところ行こう!」

「どーだ ロマーリオ」

「変化はねーな……」

力を借りることはできねーし……」

熱が出るからな……

……だめだ

優の力を使う気で考えている

あれはもう使わないほうがいい

力を使えば正体がばれるリスクがあがるんだ

「その考えは止そう」

オレ達があいつの願いを潰すことになる」

「……そうだな」

「オレもわかってる

ここにいるのは危険なのは……

今日中に……昼までにはなんとかする」

トビラの音!？」

「誰だ!？」

「え……あの……さ……沢田です……」

ビツクリさせるなよ……

「なんだよ ツナか!

早えじゃねーか!」

「おはようございます

あの……優は……」

「熱が出てるみたいだ」

「大丈夫ですか……?」

「恭弥が看病するって」

「え!? でも今日はヒバリさん試合……」

ツナのイメージでも恭弥は寝ずに看病するのか……

やっぱり昨日は言って正解だったぜ……

「大丈夫だ

優が喜ばないから寝るって言ったよ」

「そうですか……」

「恭弥が負けたら全部終わっちゃうからな

負ければ優のことあるから体調万全で来ると思うぜ」

「そうですね!!」

ツナ達のためじゃねーことも納得するのかよ……
「ま こいつらも心配なのか同じこと聞きにきたぜ」
「みんな……」

「……よかった……」

「おまえは修行だぞ」

「今日中に死ぬ気の零地点突破を完成させるぞ」

いきなり現れるなよ……」

生徒の癖でオレもびびっちゃったぜ……」

「リボン!!」

「つか何いってんだよ!!」

「今日の勝負で決まるんだぞ!!」

「もうオレが修行する意味なんてないんじゃないか……」

「最終決戦だからこそだぞ」

「おまえもしもの時どーすんだ?」

「君達……何の群れ?」

「『そう言うなよ……』」

「せつかく応援するために来てくれるのに……」

「『ヴェントー!』」

「みんな名前気をつけてくれてるんだ……」

「『あー……いろいろ悪い……』」

「謝ることが多すぎだよね……」

「私と関われば死んじゃうかも知れないのに……」

「ははっ! 気にするなっ!」

「極限に問題ないぞ!」

「……少しは信用しろ バカ」

「みんな優しいな……」

「君達……何泣かせてるの」

フードかぶってるのに泣いたのばれちゃった……

昨日から泣き過ぎだもんね……

「げっ」

“……嬉しかったんだよ”

……機嫌悪くなっちゃった

ザツ

モスカが来た……

「そうか……」

あれを咬み殺せばいいんだね」

“僕はここで見てるよ

すぐ終わるんだろ？”

「当たり前だよ」

もしかして大丈夫かな……？

「……君達」

「なんだよ!!」

「まーまー落ち着けて

どうしたんだ ヒバリ」

「……ヴェントを頼むよ」

「「え!?!」」

ストン

あ、おろしてくれた……

「いってくるよ」

“……ああ”

「ヴェント大丈夫か？」

“まだ熱があるから座るな”

「ああ

無理するなよ」

「まさかあのヤローが……オレたちに頼むとは……」

「嫌だったと思うんだ……」

「……ここに連れてくるのが……」

「そうなのか!？」

「僕が無理に言ったんだ」

「……そうか」

「多分……嫌でも連れてきたのは」

「雲雀先輩が反対しても」

「絶対見にくるのをわかってたからだと思う……」

「ルールは一緒かな……?」

「今までの試合と同じで原作と変わりがないみたい」

「ヴェント! 円陣するぞ!」

「それは……勘弁」

「悪い……立つのが辛いんだ……」

「気持ち悪くしてるから許してくれ」

「しよーがねーな」

「……助かった」

「ぎりぎりまで体を休めたいのも本当だしね……」

「今の私の集中力でどこまで出来るか……」

「制御をとりて圧縮粒子砲をバリアーで防ぐ」

「でもこの人数……数秒もてばいい方だね」

「圧縮がづらいなら竜巻で壊すとすれば」

「解除の時間を考えなければこの町が竜巻で……」

「……危険すぎる」

「作っても小さな竜巻を作るべきだね」

「そして至近距離で壊すしかない」

「それでは始めます 雲のリング」

「ゴーラ・モスカVS雲雀恭弥 勝負開始!!!」

「……」

流石……雲雀先輩……

マンガ見て知ってたけど……

本当に一瞬でビツクリしたよ

風の力を使わなかったら勝てないかも……

まあ私は純粋な剣士じゃないからね

「さあ おりておいでよ

そこの座ってる君

サル山のボス猿を咬み殺さないと帰れないな」

声かけないと……

「すぐ終わるよ」

……声もかけさせてもらえなかった

さっきのはこの時間も入ってたんだね……

雲雀先輩を止めてモスを何とかしないと……!

自動砲台もあるし浮かせるのは危なすぎるか……

やっぱり私が向こうに行くのがベストだ

時間が短いしこのまま行こう!

雲の守護者対決 2

しっかりしろ！私！！

大丈夫！なんとか立てるし動くね！

「ヴェントどうしたんだ？」

「嫌な予感がするんだ

彼を止めてくるよ」

「バカ！ テメーは動くな！

体調悪いんだろ!？」

「そっぞ!!」

みんなが止めるとは思わなかったな……

獄寺君なんて私の腕を掴んでるし……

「僕がいけば止めれる可能性が高いだろ?」

「そっぞ!!」

「心配するな

僕はあるのフィールドと相性がいいんだ」

もしもの時は空に逃げれるしね

出来るだけ休みたいから最初は走っていくけどね

みんなは空に逃げることは出来ないから

危なすぎるから頼めない！

悪いけど腕を振って離すよ！

掴んでるのが獄寺君で助かった……

いろいろ言うけど女の子の子には手は出さないタイプだから

掴んでる力が弱いんだよね

「おい！ 待ちやがれ！」

間に合ってほしい……!!

よかった……

少しロスしたけど間に合う！

「この一部始終を忘れんな

オレは攻撃してねえとな」

「ごめんなさい！雲雀先輩！

死角からいきなり勝手に掴んで倒れるよ！

ガシツ！！

あつぶな！

後一瞬遅れたら完全にアウトだ！

私の後ろを圧縮粒子砲が通ったよ

背中だから直接は見てないのに光ってるのがわかるし！

ドサツ

……今思うとこの避け方は危なかったね

雲雀先輩と一緒に倒れたけど

重量感知式のトラップがなくてよかったよ……

まあ警報音が鳴ってからでも

避けれる可能性は高かったから問題ないか

自動砲台は風で軌道をずらしてるしね

「ヴェント……？」

雲雀先輩がビックリしてるけど無視するよ

圧縮粒子砲は想像以上にやばい

私の感覚だと風のバリアーでは防げない

制御とらずにもって1秒あるかな

私1人ならこの1秒は大きいけど……

……本当に無差別だ

躊躇してる時間ももつたいないね

コオオオ

みんなの安全を優先だ

砲弾、圧縮粒子砲の軌道をそらして

みんなを浮かべて避難だ！

くそ！手を振りほどきやがって！！

てめえに何かあると10代目にあわせる顔がねえんだよ！

初めて会った時から何考えてるかわかんねー女と思った
いつも10代目があいつを気にかけてるのにも気付かねえし
オレが何度あいつを睨んでもヘラヘラ笑ってる癖に
他の奴をオレが睨めばうるせーし

10代目が止めなかつたら何度しめよーと思ったか……
ここまで腹が立つのはあいつはオレと同じだったんだ
あいつは自分のことをどうでもいいと心の中で思ってる
10代目はそれに気付いていたんだ……

……くつそ！またゲーセン行くんだろうが！！

「あのバカを止めるぞー！」

「ああー！」

ドカン！！

「なっ!?!」

今のは何の光だ!?!

風早とヒバリは無事か……

!! 空から砲弾!?!

チツ！こつちに來るかと思つて焦つたじゃねえか……

「何が起きてるのだ?」

わかるかよ

煙が多すぎてよく見えねえんだ！

「……（あの女）……」

モスカの制御が出来なくなつちまつた」

「なに!?! 暴走だど!?!」

さっきの砲弾もそのせいだ!?!

……暴走つていう割にはこつちに弾がこねえ……

ふわっ

「なっ!?!」

いきなり浮きやがった!?!

「極限どうなってる!?!」

また幻覚なのか!?!」

……おい……まさか……

「違う！ ヴェントだ！

オレ達を浮かせてるも軌道をそらしてるのも!!」

「あのバカ!!」

普段のあいつにはオレ達全員を浮かすことは出来ねえ

いつだ……いつから力を使ってたんだ

煙で見えなくなった時には使ってたんじゃねえのか……？

犬のヤロー達も浮いてやがる……

1人で何とかする気かよ！

……ヒバリはいねえ……あいつに頼るしかねえーのかよ！

みんなの避難は出来たけど……

普通に話していいか

周りに誰もいないしね

「雲雀先輩、離して下さい」

ちよつと痛いぐらいの力で腕を掴まれてるんだよね……

「嫌だ」

無理に振りほどくようなマネを少しでもすれば

私を気絶させようとするかも……

まあ風が私を守ってるから気絶することはないけど

時間ももつたいないね

雲雀先輩は原作と違って怪我をしてないし

普通に避けれると思うしいいか

「力任せでこっちに誘導しますよ」

やっぱり大きい竜巻は怖すぎる

いつまで私が持つかわからないからね

手の平サイズの小さい竜巻で

もしもの時は校舎でぶつかって止まるように突き出そう

「わかった

後は僕がする」

気をつけてくださいっていう意味だったんだけど……
ってか、なんで誘導を選んだかわかってるんだね
うーん、あそこには9代目がいるんだよね

下手に攻撃しちゃいけない……でも言えないし……

「どうするつもりですか？」

「時間が少ない

先に機動力をなくす」

時間は……私を気にしてか……

でも私がいなくても雲雀先輩はそこを狙うか……

あのスピードに何度も追いつくのは難しいと思うしね

多分狙いは足だし、ちょうどいいね

「片足は私が壊します

もしかすると少し校舎が壊れるかも知れませんが

これ以上かかるともつと被害は大きくなります

私だってこれ以上校舎が壊れるのは嫌です」

これで許可をもらえるかな？

「……僕はあれの左足をする」

私が右なのはもうモスカの右腕が壊れてるからかな？

「わかりました」

モスカを風で無理矢理こっちに誘導

スピードが速いから集中力もいっぱいいるかと思ったけど

流れに身を任せて無差別に破壊って感じなのかな？

思ったより抵抗が少ない

その分、竜巻を作るのに集中力が使えるからラツキーだね

フラツ

「へ……？」

「!？」

うそ……このタイミングで……

モスカがほとんど目の前なのに……

あ……モスカが自由になる……！

それに私の竜巻も……

ブロロロ

良かった……

竜巻はモスカの左腕に当たって……

手をモスカの方に向けてて助かった……

ドサツ

もう立てないか……

まあ座るように倒れたからまだマシだね

ピツピツピツ……ピーツ

なんの音だろ……？

地面からじゃないよね？

ガシツ！

あれ……？雲雀先輩だ……

それにまたお姫様抱っこだ……

でもちよつと痛いぐらいの勢いだっただな……

ドドドドドン！！

……この砲撃

もしかしてさっきの攻撃で私が標的になった……？

絶対そうだ！！弱ってる場合じゃない！

私を抱っこしてまま雲雀先輩がずつと避けれるわけない！

それに私がいれば倒すことも出来ない……

私のせいで雲雀先輩が怪我するの……？

それもこのままだと原作よりひどい怪我になる

ああ……そつか……簡単だね

こうすればいいんだ

ドンツ！

突き飛ばしてごめんなさい

でもこれで雲雀先輩は自由に動けます

それに動けない私でも囀ぐらい出来ますよ？

後は風が守ってくれるように祈れば何とかあります

ほら？私を守るために勝手に浮かんでるんですよ？

少しは大丈夫ですよ
だからそんな目で見ないで……
ドウツ

……何の音だろ……？

あ……炎で守ってくれたんだ……
空を飛べるもんね……

ガシツ

温かいなー……

また助けられちゃったよ

「……遅くなった」

眉間に皺だ……

スタツ

「……優を頼む」

ん……？

あ、雲雀先輩に言ってるのか……

ダメだ……ツナ君を今行かせるのは……

袖を掴まないと……！

「大丈夫

みんなはオレが守る」

違う……そうじゃないの……！

手を離しちゃダメなのに！

力が入らない……

ドンツ

……行っちゃった

標的をかえるためにモスカに向かっちゃったよ……

「………優」

そんな悲しそうな顔しないで……

……させたのは私か……

「もうしないで……」

それは約束できない……

「優」

「……私がいなければ……」

雲雀先輩は……大丈夫でした……」

「……それはわからないよ」

優がいなければ僕は怪我をしていた」

怪我はしたけど死ぬことはなかった……」

「……すぐく……思った……」

あの時……私がいなければ……助かるって……」

思った時には……体が勝手に動きました……」

だから……約束はできません……」

「……もう思わないで」

返事は出来ない……」

ああ……だからそんな顔をさせたくないのにな……」

そつか……私がいるからそういう顔するんだろうな……」

原作の雲雀先輩はしないからね……」

「……これから僕が思わせないようにする」

もう十分思ってますよ……？」

だって……そんな顔させたくないのに……」

雲雀先輩の側にいたいんです……」

「何いってるんですか……戻ってきますよ……？」

先輩の前に戻ってくる……約束しましたから……」

「……そうだね」

雲雀先輩が私を必要とするまでは絶対戻ります……」

本当にごめんなさい……」

わかっているのに……私から離れないのは最低だね……」

あ……9代目が出てきちゃったよ……」

本当に私って……最低……」

ツナ君……ごめんね……」

雲の守護者対決 3

最後まで見たいけど体力がもつかな……

「早く寝なよ」

みんなが集まってきてるんだよね

小さい声で言えればいいか

「もう少し……」

「はあ……」

……その前に雲雀先輩……

この状況で私が寝るのは危ないでしょ……

あ、そっか

寝ても守る気にいるんだ……

「君はマフィアのボスとしては……」

あまりにも不釣り合いな心を持った子だ……

君が一度もだつて喜んで戦つてないことも知っているよ……

いつも眉間にシワを寄せ……祈るように拳をふるう……

だからこそ私は君を……ボンゴレ10代目に選んだ……」

「……!?!」

私はツナ君が無理をして

眉間にシワを寄せてほしくないんだけど……

まあだから守るって決めたんだけど

「……君が選ばれし者だね……」

あれ？私のことも話してる……？

「……選ばれし者の運命は……過酷という言葉い伝えだ……」

君達が力をかけてあげなさい……」

「ヴェントが……?」

過酷ね……話せないことが多いからかな？

聞こえればいいけど……

「僕は大丈夫だ……仲間がいるから」

優しい笑顔……聞こえたみたい

あ……やばい……炎が小さくなっていく……
「すまない……」

だが、君で……よかった……」
体力をあげるのは無理だよね……
はあ……本当に私って最低……

この流れ……やっぱり……

「おまえに9代目の跡は継がせない!!」
「防げなかったな……」

「支えなくていいです……」
「怒らないでよ……」

「……私は足手まといです……」

「……動かないでね」

「動けませんよ……」

もう起きてるのが精一杯だし……

「1人じゃないぜ」

「10代目の意思はオレ達の意味だ!」

「……個人的に」

うわ……すごく低い声で言ったよ

「くるかガキ共!!」

「いいねえ」

「反逆者どもを根絶やせ」

「お待ちください!」

念のために雲雀先輩にいったけど……

ここは原作通りで良かった……

「大空のリング戦と位置づけます」

もう限界に近い……

はやく全部言っしてほしい……

これ以上私はスキを作らないほうがいい
私の行動でこれ以上原作がずれては困るからね……
カツ

XANXUSさん達が消えて
ディーノさん達が見えた……もういいよね……
あ……倒れる……
バタツ

倒れた音……？

「優？」

寝たんだね……無茶しすぎだよ……

早く移動させよう

副作用で弱ってる時に風邪をひくと大変だからね

……

手が熱い……

「ヒバリ！ 風早は寝たのか？」

息も荒い……まさか……

「おい！聞ってるのか!!」

「恭弥どうしたんだ？」

「熱……」

「副作用か……」

「……高すぎる」

「「え!?!」」

「ヒバリ！ 副作用ってそんなにやべえのか!？」

「……昨日は……ここまで高くなかった……」

「恭弥!! 病院へ運ぶぞ!!」

雲の守護者対決 その後

あのバカ……無茶しやがって……!!

「おめーも知ってるだろ？」

わりいーけどオレは男は診ねーんだ」

くっそ!!ここで話せねえ!!

こんな場所で酒なんか飲みやがって!!

「黙って着いてきやがれ!!」

てめえだつたら治せるかも知れねーんだ!!」

「なんだ？フード被つてたヤローは

ぶっ飛ばすんじゃないのか？」

ぶっ飛ばせるわけねー……

「それはもういいんだ!!」

優の辛そうな声がカーテン越しにも聞こえるのに
オレ達はなんにも出来ねーのかよ……

この熱の高さは限界まで使ったからなのか？

いや、恭弥の話だと

昨日の熱はまだ下がっていないかつたと言っていた

これは2日連続で使ったからだな

何度も言ったのに無茶するなよ……

ガラッ

こんな時間にトビラが開く音!?

この場所は関係者以外には教えてないんだ

「誰だ!？」

「オレだ」

獄寺か……

「まだ起きてたのか……」

「医者を連れてきたんだ」

グイッ

無理矢理ひっぱてきたのか……

だが、医者と言っても……

「Dr. シヤマル!!」

この人なら治せる可能性はあるが……

「おいおい……オレは男は診ねーって言ってるだろ

せつかくうまい酒を飲んでたんだぞ」

「いいから黙って診やがれ!!」

フードかぶってた奴が

女だったら問題ねえんだろ!!」

シヤッ

「うるさい

咬み殺すよ」

やっとカーテンを開けたぜ……

「ヒバリ! てめーもいたのか!」

「少しは声を小さくしろよ

優の身体に響く……なっ?」

「う……」

やっぱりまだ辛そうだな……

「おい……この嬢ちゃんはどうしたんだ……」

「さっきから言ってるじゃねえか!!」

てめーだったら治せるかもしれねえって!!」

「どういう状態だ」

詳しく書いてる資料は……

ロマーリオが渡してくれたな

「42度近く熱が出るんだ……」

もうこの状態が3時間以上続いていて

解熱剤も全く効かねえ状態だ……」

オレが用意した医者の話では

これ以上解熱剤を投与出来ないと言った

それを聞いた恭弥がカーテンを閉めちまった

もう医者の方では治せないと判断したんだろう……

「ただの病気じゃねえのか？」

「……ああ

力を制御されたらしく

使えば副作用で倒れるとしかわかってないぜ……」

「それでこの熱なのか？」

恭弥は答える気はないみたいだな……

「2日連続で使ったんだ……」

昨日はここまで熱は高くなかったみたいだぜ……」

「……オレには無理だな」

やはり……

「な!? てめえ医者だろ!!」

「こういうのは治せねえんだ

その制御をかけた奴に

制御を解いてもらうしかねえぞ」

「跳ね馬! 誰か聞いてねえのか!？」

「………すまん」

「ツチ! ヒバリてめーも知らねえのか!？」

「……制御をかけられた時

見てたけど……わからない……」

「見たのにわかんねえとはどういうことだよ!!」

「……鍵は復讐者が持ってきたけど

復讐者はわからないみたいだよ

声を聞いて鍵を預かったと言っていた

優は……心当たりありそうだったけど

誰かはわかってなさそうだった……」

はつきりと恭弥が答えたな……

もつと詳しく聞かなかったことを後悔してるんだ

聞かなかった理由はオレと同じなんだろう……

鍵を持ってきた時に優は話せなくなった

無理に聞けば優が辛くなると思ったからな……

「……今まではどうしてたんだ？」

「昨日初めて制御を解いたんだ」

倒れるしかわかってなかったから

優も昨日、熱が出るのを知ったんだ」

「お嬢ちゃんもどうなるかわからねえのに

今日も制御を解いたのか……

そこまで無茶した理由はなんなんだ？」

「……………」

こいつらに答えさせるのは酷だな……

「みんなを守るためだ

優が制御を解いたから9代目以外は怪我人はゼロだ

ヴァリアーも怪我しなかった……」

「ヴァリアーも守ったのか!？」

「……………ああ」

後から聞いた話だけどな……

優は獄寺達だけじゃなく

あの場にいた恭弥以外全員を避難させた

「なんでこいつは敵まで守るんだ!!」

「優しすぎるんだ……」

それが優のいいところでもあるが欠点でもある

「最初にヴァリアーとは敵として

会わなかったっていうのもあると思うけどな……」

イタリア旅行の時に会わなければまた違ったはずだ

「クソッ!」

「……………お嬢ちゃんの生命力にかけるしかねえな……」

「……………お前らもう寝ろ

オレが優を診る」

「僕が診る」

ずっと起きてるつもりかよ……

「恭弥、お前はもう寝ろ」

「嫌だ」

「昨日も優の看病したんだろ？」

「関係ないよ」

優が無茶したのは恭弥のせいと思ってるのか……

恭弥が挑発しなくてもXANXUSは必ず時間稼ぎをした

……恭弥がこのことに気付かないはずがない

離れたくないだけだな……気持ちは分かるが……

「優は喜ばないぜ？」

恭弥が無理をすれば優は悲しむことを

忘れてるわけじゃないだろ？

「……それでも側にいる

邪魔するなら咬み殺す」

チャキ

「「……………」」

咬み殺す気がないのにトンファーを出すなよ……

シヤツ

だからカーテンを閉めるなよ……

優の容態がわから……違う……

恭弥が不安な姿を見られたくないから閉めるんだ……

夢と現実

ここはどこ？私の家のじやなさそう

青いカーテンなんか無いしねー

うーん……あ！病院なのかな？

……ん？なんか頭に感触があるよ

あれ？神様？

えええ？なんでここにいるの!?

つてか、喉がカラカラで声が出ない……

まあ神様は私の心を読めるしいいか

……

あれ？なんで何も話さないんだろう？

神様ー？

うわっ!?

ちよつと人のほつぺたつまむな痛いだろ！

うー……笑ってる……

そういえば初めて会ったときもつままれたなー

ん？口をパクパクさせてるね

えーつと……寝ろつて言ってる？

あ、うなずいたから当たったみたい

つてか、わかりにくいから声出してよね

……寝るから睨まないでよ

じゃあおやすみなさーい

「ん……」

……身体がだるい……

「……優？」

雲雀先輩……？

つて言ったつもりなのに声が出なかった

喉がカラカラだ

ん？視界のスミに見えるあれは水なのかな？

手を伸ばそうと思っただけど動かない

あ、雲雀先輩が気付いてくれた

すみません、迷惑かけます

ゴクツ……

ふう……生き返った……

と思っただけど身体が動かない

キョロキョロと顔を動かしたけど無理だね

「……あ」

でも声は出せるようになった

「どうしたんですか……？」

なんで心配そうな顔してるんだろう？

「42度近くまで熱が出たよ」

「……それは……無茶をしましたね……」

「……そうだね」

そっか……

ずっと看病してくれたんだ……

「今何時ですか……？」

「14時だよ」

もうそんな時間……

雲雀先輩は休んでないんじゃ……

「まだ40度近くあるから早く寝なよ」

「……雲雀先輩も休んでくれたら……」

大空戦は雲雀先輩に頑張ってもらわないと……

みんなが死んじゃう……私は動けなさそうだし……

「ヤダ」

「……だったら起きてます……」

「……」

「……どうします……？」

「はあ……わかったよ……」

「……ありがとうございます

大丈夫ですよ……動けないですけど……

意識はしっかりしてますよ……」

「そう……」

シャツ

ん？カーテンがあいた？

「優！起きたのか!？」

あ、デイーノさんだ……

「心配かけました……」

「まったくだぜ……」

「……すみません」

「僕は行くよ」

「恭弥!？」

うなずけばわかるか……

多分学校に向かったんだろうな……

「優……恭弥はどうしたんだ?」

「休みに……行きました……」

「どうやって!？」

オレが言っても全く聞かなかったんだぜ!」

やっぱりずっと看病してくれてたんだ……

「……休まなかったら……

私は寝ませんって言いました……」

「……なるほど」

「9代目は……?」

「まだ……わからねえ……」

「そうですか……デイーノさん……」

「なんだ?」

「9代目や……スクアーロさんのところへ……

デイーノさんはここにいたべき人じゃない……」

私より優先しないといけないことがたくさんある……

デイーノさんはボスなんだから……

「……優」

「頑張って元気に言わないと……」

「もう私は大丈夫です……」

「それに大事な教え子もちゃんと休みました……」

「安心してください……」

「……わかった」

「いろいろ悪いな」

「ディーノさんが謝ることじゃない……」

「……こちらこそすみません」

「部下を見張らせてるからな」

「なにかあつたらすぐ言えよ」

「まだ気を使ってくれるんだ……」

「でも動けないしこれは甘えさせてもらおう」

「ありがとうございます……」

「あ……あの……」

「なんだ？」

「私って……どこに運ばれたとか……」

「みんなは知ってるんですか……？」

「いや、知ってるのはツナ達と」

「オレの一部の部下だけだぜ」

「……そうですか」

「どうしたんだ？」

「みんなに……私のわがままに……」

「協力してもらつてると……思つて……」

「オレ達がしたいんだ」

「気にするな」

「……ありがとうございます」

「ゆっくり休めよ」

「……はい」

「ディーノさんも行ってもらえたし」

「私は心置きなくゆっくり休もう……」

あれ？神様はどうやってここに来たんだろう？
雲雀先輩が席を外してる時に来たのかな？
というか……ここに来れないよね
そつか……あれは夢で精神世界に行っちゃったのか……

カサツ

「誰？ 僕の眠りを妨げるとはいい度胸だね」

チャキ

「連絡事項です」

命ある守護者は大空戦に必ず来てください」

「そう」

「選ばれし者にも参加していただきます」

「……ヴェントは決まっているはずだよ」

「命ある守護者は全員です」

「……どうして僕に言ったの？」

「我々チエルベツロは」

ヴェントの正体がわからないため

探すことが出来ません

あなたは知っていると思ひまして……」

「……」

「ヴェントは沢田氏側を選択しましたので

参加しなければ沢田氏の失格になり

XANNXUS様の勝利になります」

「……ボス猿が勝つとヴェントはどうなるの」

「XANNXUS様の守護者になります」

「……わかった」

声が聞こえる……誰だろ？

「あ、起こしちゃった？」

「ツナ君……リボン君も……」

お見舞いに来てくれたんだ……

「わりいな……」

起こすつもりはなかったんだが……」

「……大丈夫……意識はしっかりしてるよ……

もうすぐ試合……？」

「うん……」

その前に……優を診に来たんだ」

「そっか……」

ツナ君ごめんね……」

「え!？」

9代目を守れなくて……

「ううん……こつちの話……」

「？」

「頑張ってね……」

「う、うん わかった」

ツナ君行っちゃった……私は参加するのかな？

あれ……？

チエルベツロってここに来れないよね？

場所わからないもんね……

でも、未来のこと知ってたよね……？

私の顔がわかるから……探せなくはないか……

大空戦を始めましょう 1

足音が聞こえるね……ついに来たか……

カーテンが開く……

シャツ

あれ……？雲雀先輩だ……

どうしたんだろ？

そろそろ大空戦だよね？

原作がずれてるのかな……

「……優」

「どうしたんですか……？」

辛そうな顔してるけど……

「チエルベツロが……優も大空戦に強制参加って……」

連れて行きたくないって思ってるんだ……

「……わかりました」

わざわざ雲雀先輩がチエルベツロに言って

むかえに来てくれたんですね……」

「……違うよ」

「チエルベツロが私も参加って言ったんですよね……？」

「そうだけど……」

ヴェントの正体がわからないから僕に言ったんだ」

……どういことだろ

知らないフリしてるのかな……

「……そうですか」

雲雀先輩が納得したってことは……

私が行かないと大変なことになるんですね……」

「……」

何も言わないし肯定ってことか……

「行きたいんですけど動けないんで……」

運んでもらえますか……？」

「……わかった」

「力が入らないから……重いと思うけど……」
「それは問題ないよ」

即答してくれたのは少し嬉しいかも……

「お待ちしておりました」

「これで沢田氏の守護者は嵐 晴 雨

……そして霧と雷の守護者が揃いました」

「クローム！ ランボも!？」

「寝ていましたのでそのまま連れてきました」

「退院したばかりなのに!？」

リボーンがランボの意識が戻ったのは

優が体力をあげた可能性が高いつて言ってたんだ

もし優が体力をあげなかったら……

なんでランボを連れてきたんだよ!!

「守護者は必ず来るようにチェルベツロから……」

「そうです」

命ある守護者全員に強制収集を発動しました」

「強制収集……?」

「奴もいるぞ」

奴って誰？

「ム」

「マーモン!!」

「超重傷なのよ!!」

「ルツスーリア!」

「ベツトごと……?」

ほんとだ……ベツトごと運んでる……

「沢田氏側の雲と選ばれし者も来たようですね」

「用件は何？」

はやく連れて帰りたいんだけど」

「ヒバリさん……優!？」

「ヒバリ!?ヴェント!？」

「なんでヴェントまで!？」

「ヴェントはもう決定してるんだよ!？」

「僕は……大丈夫だ……」

「全然大丈夫じゃないよ!」

「さつきも苦しそうに寝てたのに……!」

「ツナ君が心配してる……頑張って言わないと……」

「僕は……大丈夫だ……」

「……はあ……」

「あれ?雲雀先輩が溜息?」

「動けないのに……大丈夫って言わないでよ」

「すみません……重いですよー」

「……悪い」

「また失敗しちゃった……」

「強制収集をかけたのは他でもありません」

「大空戦では6つのリングと守護者の命……」

「それから……選ばれし者の命をかけていただくからです」

「あれ?私のリングは別?」

「でも命はかけるって言ったよね?……やっぱり毒?」

「6つのリングと守護者の命とヴェントの命をかける……?」

「そうです」

「どんなルールだろ……全く想像がつかないな……」

「スクアアローは……? いねーのか……?」

「雨戦の顛末は(づ)存じのほずです」

「スクアアローの生存は否定されました」

「あーそういえば(づ)ここではそう言ったような……」

山本君がこつちを見るけどどうしよう
口パクでわかってくれると言いけど……

大丈夫

良かった……

少しほっとした顔したし伝わったみたいだね

「……今何してたの」

あ……雲雀先輩にばれちゃった……

うーん、言わないと機嫌悪くなるよね

耳を貸してほしいけど……

ツンツン……

「何」

すごい……

服を引っ張っただけでわかってくれたよ

「スクアーロさんは生きてるんですよ……」

「そう」

雲雀先輩だったら黙っててくれるもんね

「では大空戦を始めましょう」

大空戦を始めましょう 2

「ではまず守護者のリングを回収します」

ポケットにあるんだけどねー……

ゴソゴソ

動けない私が悪いよ……でもさ……

何も言わずに勝手にポケットを探らないでほしい……

まあ私をおろした時点で想像は出来たけどさ……

あれ……？私のは回収しないの？

雲雀先輩が準備したのに取らなかったよ

「……ヴェントのリングはいいのかい？」

あ、助かります

「選ばれし者にはチェーンをお渡ししますので

首から下げててください」

……なんで？

あーよくわかんない……

「それでは大空戦のルールを説明させていただきます

大空戦も他の守護者同様

リングを完成させることが勝利条件の一つとなります

ただしフィールドは学校全体」

一緒だよね？

「広大なフィールドでの戦いを観戦できるよう

観覧席と各所に小型カメラと大型ディスプレイ

そして守護者の皆様、選ばれし者には

カメラ搭載型モニター付きリストバンドを用意しました」

選ばれし者が増えただけと思う

あれ？私のだけ色が違うよ

なんか意味があるの？

「では守護者の皆様と選ばれし者は

リストバンドを装着次第

各守護者戦が行われたフィールドに移動してください」

……何から何まですみません

首にチェーンをかけてもらってリストバンドも……

「……気をつけてね」

離れるからか……

「君の近くで良かったよ……」

「……そうだね」

あ、知らない間に円陣終わってるよ……

ツナ君頑張ってるね……

私達は一番早く移動を始めたけど……

まあ私は運んでもらったんだけどね

うーん……これは……

「……行かないと終わるのも遅くなるぞ？」

「……わかった」

……嫌そうに答えたよ

まあ行つたからいいか……

校舎にもたれるように座らせてもらったから少し楽だね

少し考えよう

みんなとは色が違うけど……どう考えても毒だよな？

でも私はリングを首から下げてるし

すぐ解毒出来るんじゃないの……？

「選ばれし者以外の各フィールドに設けられた

ボールの頂上にはフィールドと

同じ種類のリングが置いてあります」

ここも私以外は一緒だと思……

そういえばボールがないね

私は決まっているから必要ないんだろうね

また戦うのか獄寺君が聞いてるけど……

「どうぞ……自由に」

ただしできればの話ですが」

このセリフの後だった気が……
グサツ

「いっ!!」

いった……こんなにも熱くて痛いのか……

「デスヒーターと呼ばれるこの毒は

瞬時に神経をマヒさせ立つことすら困難にします

そして全身を貫くもえるような痛みは

徐々に増してゆき30分で……絶命します」

はやく……全部説明して……

この体調だと私は30分持つかわからない……

「大空であるボスの使命だからです

晴・雷・嵐・雨・霧・雲

そして……封印が解けた……風……

すべてを飲み込み包容することが大空の使命」

風が増えたただけだよね……?」

「守護者全員の命がボスの手に委ねられる戦い

それが大空戦なのです」

「ここも一緒と思う……」

「毒の進行を止める方法が1つだけあります

選ばれし者以外の守護者のしているリストバンドは

同種類のリングを差し込むことです

リストバンドの凹みにリンクを差し込めば

内蔵されたデスヒーターの解毒薬が

投与される仕組みになっています」

「ヴェ、ヴェントは!？」

ツナ君……聞いてくれてありがとう……

もう声を出す元気がない……

「選ばれし者は風のリング以外のリングを

差し込めば解毒薬が投与されます」

だから私はリングを持っていて

みんなとリストバンドの色が違うかったのか……

「大空の勝利条件は

ボンゴレリング全てと選ばれし者を手に入れることです」

……意味が分からない

「リングとヴェントを!」

「はい

このチェーンに選ばれし者以外の

すべてのリングをセットできます

そして大空のリングを指にはめてもらう時に

風のリングを選ばれし者と同時

指にはめてもらうのが勝利条件です」

つまり……私は最後に必要なのね……

ダメ……もう意識が……

大空戦 1

……あれ？ちよつと楽になった……

「ヴェント……う？」

雲雀先輩だ……解毒してくれたんだ……

“……ありがとう”

あ……ほつとした顔だ……

“自力で倒したのか……？”

倒れてるのが見えてるし……

「そうだよ」

“……流石だな”

でも……早くない？

正確なタイミングがわからないけど……

こんなにも早いとは思わなかった

「僕だからね」

納得してしまうのが不思議だ……まあいいか

えっと、この後って確か……

雲雀先輩とベルさんって戦ったよね？

確か……怪我したよ

ベルさんがワイヤー使いつて言わないと……

『優、言ったらダメだ』

……神様？

『優は嵐戦を見てないんだ

それを言うのはダメだ』

あーそういえば見てない

あの時は雲雀先輩に気絶されてたんだ

言いたいのに言えない……ものすごく辛い……

どうしよう……

起き上ることはできるけど歩く体力ない

2日連続の副作用がこんなに辛いとは……

“……僕に何かあっても後回しでいいぞ……”

「……………どういう意味」

「すごく……嫌な予感がするんだ……」

……これしか言えない

「私がベルさんの立場だったら絶対連れて行く……」

「もし……僕に何かあつて……僕を優先して……」

君の大事なものが……壊れるのは嫌だ……」

「……………」

「僕は君のことわかつてるつもりだぞ……？」

君の……彼女には負けるかもしれないけどな……」

まあ私だけどね

「心配するな……」

僕は生き残る確率が……もの凄く高い……」

最後に必要だから……」

「今回は……君の信念と……」

僕の信念は……一緒のはずだろ……？」

それにもし雲雀先輩が私を優先すれば

私は雲雀先輩の前に戻ってくる資格がないよ

ただのお荷物だ……」

だからお願い……信念を曲げないで……」

「僕は……動けなくて……」

君に全部頼むのが悪いけどな……」

「……………僕が誰も……ここで死なせはしないよ」

良かった……」

これで雲雀先輩が望むまで

私はまだ雲雀先輩の前に戻ってこれる……」

「……………そうだな

風紀乱れるからな……」

「そうだよ」

あ、光ってる

これはXANXUSさんが撃ってきたのかな？
ドコッ

……ってほとんど真上!?

まあ私が必要だから当たることはなかったね……

もし必要じゃなかったら……こわっ!?

絶対瓦礫の下敷きになっても気にしなかったと思う

“……悪い……頼んだ……”

ふわっ

“……どうしたんだ?”

頼みを聞いてくれたと思ったのに……

なんで私をお姫様だっこ?

「ちよつと離れるよ 危ないから」

それもそうですねー……

私も2人の戦闘の巻き添えで死にたくないよ

“助かる……”

「ひーめ♪」

ヒュッ

キン

視界がぼやけてて見えなかったけど

原作では確か今のトンファアの攻撃で

リングを獄寺君に弾いて助けたはず

あのタイミングでよく狙って打ち上げるよね

まあ私も元気だったら出来るけどさ……

「おまえは……」

「ふうん よくかわしたね

……誰が君の姫だって?」

……うん

聞こえたセリフが……おかしい
そこまで詳しく覚えてないけど……

絶対原作と違うのはわかる

ってか、雲雀先輩もムカついて姫って言った……

『心配するな』

こっちでフォローしてるからな』

ありがと……

『ああ』

私がワイヤーを見えるまで

ワイヤー使いつて言えないんだよね

あー本当にめんどくさい……

夜で2人と距離がある……視界がボヤけてる……

見えるわけがないね……

ベルさんと戦っておくべきだったか……

大空戦 2

やっぱり原作通りで見えてない……

どさっ

雲雀先輩が倒れた！

「雲雀恭弥！」

「ししし 王子の勝ちー バイバイ」

ビシッ

……よくナイフを受け止めるよね

いや……私も元気だったら出来るけど……

あ、原作を知ってたのにさっき叫んでしまった

まあいいか

雲雀先輩は原作通り見抜いてチェーンを出したけど……

「パス!!」

これだけダメージ与えれば時間かせげそうだしー」

キキン

あーやっぱりベルさんがこっちに来たよ

今の私は抵抗する力が無いんだよねー

覚悟はしてたのに雲雀先輩の名前を呼びたくなったよ

気をつけないと頼ることに慣れちゃうね

「姫ゲットー♪」

ふわっ

体調悪いの知ってるからか……お姫様抱っこだ

今担がれたら吐く気がしたから助かった……

「バイビ」

ってか、ベルさんが私を連れて行かなかつたら

気持ち悪くならないよねー

「あー降ろしてくれ……」

「ししっ やだね」

ですよねー

連れて行かないっていう選択肢は無いですよねー

「ふーいやーまいった……」

「サンキュ！ 助かったぜ」

「校内で死なれると風紀が乱れるんだ

死ぬなら外へ行ってもらおう」

「あはは

なんだそりゃ」

「やっぱヒバリはおもしろーなっ！

「……………」

「フラフラ……ドン

「おい 大丈夫か？」

「もうフラフラで倒れそうじゃねーか

「何のことだい？」

「……………」

「あれ？ 一緒じゃねーか？」

「あのよ ヴェントはどこだい？」

「…………連れて行かれたよ」

「え!? お前いいのか!？」

「オレを助けてくれたのは嬉しいけどよ

「風早が連れて行かれてるんだぜ……」

「…………ヴェントは誰にも死んでほしくないと思ってる」

「…………そうだよな

「オレ達より風早を優先したら悲しむよな

「…………交代だ

「こっからはオレが引き受けた

「ヒバリはヴェントのこと頼んだぜ」

「そう」

「まいったな……」

傷口から血がにじんできやがった」

でも引き受けたからにはがんばらねーとな！

「てめー誰だ!？」

「!? 獄寺!!」

「や……山本!! 無事だったのか」

「ああ

ヒバリが校内で死人だしたくねー

って助けてくれた」

「なっおまえもかよ

あいつオレ達に貸し作って

何……企んでるんだ……?」

ヒバリは獄寺も助けてくれたのか……

「だが相当やられて動けそうにねえが

ヴェントが連れて行かれたみたいで

無理矢理に身体を動かして向かって行っただぜ」

フラフラなのにオレより早く動いてたしな

「連れて行かれたのか!？」

「ああ

ヴェントは誰にも死んでほしくないことを

わかっているからヒバリは俺達を優先したんだ

だからオレがみんなを助けるから

ヒバリはヴェントを頼むって交代した

リングは預かってきた

あと助けてねーのは誰だ?」

「アホ牛と芝生頭は無事だぜ」

「つてことは残るは……」

「霧だ!!」

「あの娘か！」

「ああ……体育館だ!!」

大空戦 3

「はあ……はあ……助かったよ
選ばれし者を連れてきたんだね」

「当然だぜ♪」

私がいるからか……もうすぐ30分近い……
獄寺君と山本君が間に合わないかも……

「クロームの解毒……」

「してもいいけど交換条件があるね」

「やっぱりそう簡単にはいかないか……」

「なんだ……?」

「もし僕達がリングを全部集めた時に

抵抗せず指にはめてもらうよ」

「僕が今だけ返事して……」

「指にはめないかもしれないぞ」

「出来れば君には傷つけず仲間になってほしいけど

その場合は仕方がないね」

無理にでもはめるってことか……

別に私は五体満足じゃなくていいしね……

「わかった……約束する」

「しし♪ やったぜ♪」

カチッ

「クローム……?」

「……ヴェント……?」

良かった……

私のことがわかった……

血色が悪いつて言われても動くしかねーだろうが!!

まったく……てめーもへろへろな癖に……

「おいー やべえぞー 30分すぎるぞ!!」

このドアを開ければすぐだ!

ガラッ

「ポールが……!!」

どーなってやがる!!」

倒れやがる!

それにやべえ……見当たらねー!!

「ドクロはどこ行きやがった!」

「こつちこつちー」

ドクロが拘束されてる!?

だが、顔色は良さそうに見える……

「王子って優しいー解毒してあげたぜ♪」

「な!? なんでおめーらがドクロの解毒を……」

「ムム

こつちにも都合があるのさ」

こいつら何を考えてやがる……

ぜってえ何かわけがある……!?

「ヴェント!? 大丈夫か!!」

ヴェントは拘束されてねーがぐったりしてる……

あいつ相当やべーんじゃねーのか!?

「僕のことはいい……クロームが……」

だからなんでいつもてめえのことを後回しにするんだ!

「おまえ達の持つリングをわたしてもらおうか

さもなくばこの女の皮をはがされ

むごい死に方をするよ」

「ふざけんじゃねえ!!」

そんな安っぽい手にかかると思ってるのか!?

「誰だと思ってるの? オレらは暗殺部隊ヴァリアーだぜ

殺しにおいてはウソはナッシング」

こいつらは殺すことに躊躇はしねえ……

「きったねーぞ……」

リングをわたした所でドクロを解放する

つもりもねーんじゃねーのか?」

「信じるもしんじないのは自由だけど」

「くっ……そーー」

打つ手がねえ!

「しよーがねー……リングを渡すしかないみてーだな

オレ達もつ雨・雲・嵐のリングで交換だ」

山本……少しはやるじゃねーか

晴のリングさえこっちに残ってれば揃うことはねえ!

「しし♪ おまえの刀のリーチには入らないぜ

その距離からそつとリングをころがしな」

「同時にだ」

「てめえらはドクロをこっちに寄越せ!」

「うわー生意気 しよーがねえな

じゃーせーの」

よし!クロームを押ししたぜ!

これで反撃だ!

「わたっ」

なっ!?!山本こけるなよ!?

「時雨蒼燕流攻式三の型 遣らずの雨」

「足で……刀を!?!」

やるじゃねーか!

ベルフェゴールの肩に当たったぜ!

「動くな! 形勢逆転だな」

「……やはりタダモノではない連中だ

警戒しておいてよかつたよ」

……なにを言っつてやがる!?!

「体育館に踏み入れた時から君達は僕の世界にいたのさ」

「なに!?!」

「幻覚か!?!」

「マーモンしかないだろ!？」

風早、ドクロもベルフェゴールもいねえ!

おい……奴の目的はオレらの足止め……

風早はもう10代目のところに向かっているのか!？」

「君の手さつきから気になってたんだよね」

「なっ」

やっべー!

オレが晴のリングを持つてることに気付いていたのか!？」

「しまっ……!!」

「やっぱり全部持つてたみたいだね

さてここで死んでもらうよ

自分の想像力によってね」

「うわああ」

このままだと……殺られる!？」

「極限太陽!!!」

なっ!？」

「外から!？」

「ムギヤ」

なに起きたかわかれねーがああ術士を倒せそうだ!

……オレ達もやべーじゃねーか!

体育館の天井がつぶれるぞ!

……

死ぬかと思つたぜ……山本は!？」

「大丈夫か!!」

「一体何だ……?」

体育館ごとふつとんでる……」

「マーモンは!？」

消えたのは見えたが……幻覚かもしれない……

「お前は!!」

笹川兄!……ドグロ!?無事だったのか!

「ま……まさか今の一撃つて!」

「まどろっこしいのは嫌いでな

ドクロは体育館の外で縛れてたぞ」

外に縛られたのか……

やっぱりあいつらの狙いはオレ達の足止めだ！

いそがねーとやべえ！

大空戦 4

「しし♪ ボスのところまでもうすぐだぜ♪」

9代目が揺りかごの事件があつたつて言つたから
リングが拒むから私のはめても問題ないよね……？

私の記憶では揺りかご事件が起きたのは

血が繋がってないと継げないとわかつたからだつたはず

私はリングに拒まれることはないと思うし

このまま原作通り進んでも問題ないか……

「待ちなよ」

雲雀先輩だ……でも原作と違うよね？

もしかして私がいるせいでずれた……？

多分、獄寺君達は原作通りに進んでるはず

つまりヴァリアーは指輪が揃つてる状態のはずだよ

今、雲雀先輩が私を連れ戻したらどうなる？

ヴァリアーが全部揃わなくなるだけだし

また振り出しに戻るだけだよ

問題ないと言えば問題ないか……

「またエース君だね」

「ヴェントはかえしてもらおうよ」

「しし♪ やだよ」

「はやくかえしなよ」

雲雀先輩はベルさんが私を抱えているから

下手に手を出せないけど

ベルさんは両手がふさがつてナイフを投げれない

ここは私が力を振り絞つて

ベルさんと少しでも離れれば雲雀先輩が勝てる

「ムム

なにしてるの」

マーモンちゃん……思つたより来るのが早い

ベルさんがクロームちゃんを縛つてた分か……

「ちよつと邪魔が入ったところ」

2対1……それも1人は幻術使い……

このままだとダメだ

“ベル”

「なに？」

“足止めだけにしてくれ……”

彼になにかあれば……僕は舌をかんで死ぬ”

「げっ」

私は五体満足じゃなくてもいいけど

今、私が死んだら困るのは絶対ヴァリアーの方だ
勝利条件が満たされなくなって再試合になって

それまでに9代目が回復したら試合が無効になる

9代目が回復しなくてもツナ君は原作通り進んで

零地点突破改を使えるようになってるはず

再試合になればツナ君達の勝ちと言っている

それにこのタイミングで試合中止になれば

ヴァリアーの部下？は間に合わない可能性が出てくる

……私が死ねばツナ君が動揺すると思う

だけどそれによってリボン君はツナ君から離れないよ

ツナ君はリボン君と距離はとると思うけど

リボン君はツナ君を放置するわけない

絶対遠くから見守るようにする

だから奇襲でツナ君を殺すのは無理だ

「ムム」

“……無駄だ”

「!？」

幻覚で口を縛ろうとしてるけど

私にはきかないからスカスカとすりぬけてるよ

後出来るとすれば私の口に何か突っ込むだけだけど

私は風を操れるんだ

死のうとすればいつでも死ぬことが出来る

「僕には幻覚の攻撃は一切きかない

ベルは知ってるだろ……?」

「……ベル本当なのかい?」

「……ヴェントのいうとおりにするよ」

2人とも頭が悪くなくてよかった

ここは私が全てを握ってることをわかってる

まあ私が出した条件が悪くないのもあると思うけどね

「助かるよ……」

「何 勝手に決めてるの」

……雲雀先輩は怒るのも当然か……

でもこの交渉は成立するという確信があった

私だって簡単に死ぬつもりはないし……それに……

「……僕は彼等と交渉しただけだ

君は好きにすればいい

僕は君の行動を止めたつもりはない」

「……………」

幻覚だ……障害物か……

「これで問題ないよね」

「すまない」

「行こうぜ♪」

原作通りこっちは進んでるね

氷が溶けてXANXUSさんが……

「7つの完全なるボンゴレリングが

継承されし時リングは大いなる力を新たなる

ブラット・オブ・ボンゴレに授けると言われている」

「ボンゴレノ……血に……?」

「返してもらうぜ

これは正統後継者のリングだし」

“大丈夫か……?”

「……ヴェント……」

ほっとした顔した……

ごめんね……心配かけて……

「ボンゴレリング全部コンプ！」

姫もゲット！」

「リングを……よこせ……」

「もつちろん

これはあんな亜流のニセモノじゃなくて

9代目直系のボスにふさわしいからね」

「……ま……はあ……まて……」

「結局最初からこうなるって決まってたのさ

……約束は守ってもらうよ」

“……わかってる

僕は約束は破らない”

「……ヴェント……?」

ごめん……話せない私を許してね

私はツナ君が思ってるような意味ではめるつもりはないよ

またみんなで遊びに行くために指輪をはめるんだ

だから私を止めるために無茶して動かないで……

「10代目！」

「ツナ！」

あ、雲雀先輩もいるよ

もうあの障害物から抜け出したんだ

「なんでヴェントが!!」

指輪をはめようとしてるんだ!!」

「そこにいる女術師の解毒をするかわりに抵抗せず

指輪をはめる交換条件を出したのさ」

「……ヴェント……」

クロームちゃん気にしないでよ

大丈夫だからね

「どいつもこいつも新しいボス誕生のために
立会いごころーさん」

「受け継がれしボンゴレの司法よ

若きブラット・オブ・ボンゴレに大いなる力を！」

よし指輪をはめよう!!

カアアアア

うわ……すごい力が流れてくる……！

って、あれ？

???

1

まぶしい……全く見えない……

『やつと全部そろったね』

あれ？この声……

「こつちにおいでって言った人ですよね？」

『そうだよ』

私が君を呼んだんだ』

「やっぱり……」

『君の使命を言いに来た』

「えっと出来るだけ原作に戻すことですよね？」

『それもあるけど……もう君が来てる時点で』

ずれてしまってるからそこまで気にしなくてもいいよ』

「え!？」

『君も好き勝手にしてるじゃないか……』

「……それもそうですね」

雲雀先輩と付き合ってる時点でダメだし

まあ私から言ったわけじゃないんだけど……

『まあほとんど原作通りに進んでるし』

君の今までの行動ぐらいは全く問題ないよ』

「よかったー」

あーこれでひとまず安心だ……

『それに君には原作を壊しすぎないように』

制御をかけたしね』

「だから……9代目を助けられなかったのか……」

『そうだよ』

そっか……

私の行動は全部無意味だったのか……

まあ効果がないといわれても

これから手を出すのはやめなと思うけどね

『君の行動は全く問題ないから』

「これからも気にしなくていいよ」

「わかりましたー」

『まあ簡単には原作は壊せないけどね』

「え!?! そうなんですか?」

『そうだよ』

特に君は人を死なせたくないって思ってるからね
ん?..なんで?

「関係あるんですか?」

『あるよ』

もし、君が何も考えず人を殺してしまつて

その人物がこれからの物語に

必要な人物だったりすると問題だからね』

「あーなるほど」

そりやそうだ

私の知らない原作のところの重要人物を殺しちゃつて

ツナ君達が死んだりしたらやばいよ……

『君が何も考えず誰でも好き勝手に殺していれば』

また制御をかけてたよ』

うわ……こわつ……

あれ? でも考えて誰かを殺しちゃつた時は大丈夫なんだね

いや……しないけどね

私はそんな覚悟をもつつもりはない

『でも死ぬはずの人間を生かすのもいいよ』

「え? そうなの?」

『止めても君は誰も死なないように行動するよね』

「……………そうですね」

『ただし未来編の白蘭は助けてはダメだからね』

「……………そうですね」

助けたら元の世界に戻れないですもんね」

『そうだよ』

君が知ってる原作の中で助けてはいけないのは

その白蘭だけだからそこは守ってね』

「はい……」

『さて本題に戻るよ』

「あ、ごめんなさい」

そういえば話がずれてたよ

『君を呼んだ1番の理由は……』

ボンゴレリング、マーレリング

アルコバレーノのおしやぶりが

1つずつ増えたのは知ってるよね』

「はい。私にしか使えないんですよね？

だから呼ばれたんですよね？」

『そうだよ』

「それが関係してるんですか？」

『ああ』

君はこの3つを守るために呼ばれた』

「守るため？」

『異変が起きたことは知ってるね？』

あー全部あほな神のせいだよ

「知ってますよ？」

『そのせいで世界のバランスが崩れてしまっただね』

「え!？」

『崩れたバランスの分を』

この3つでまたバランスをとってるんだ』

「へえー」

そうなんですかー」

だから増えたのか……

『だけど1つでも壊れたら』

またバランスが崩れてしまう……』

「え!？」

『この3つを守るために君を呼んだんだ』

「なるほど……」

あ、そうだ！

「ちよつと聞いてもいいですか？」

『なに？』

「なんで私だったんですか？」

『君、気付いていないの？』

「え？」

『アルコバレーノの力を制御してても

自分を浮かせるってことは

君は元々風をあやつれる力を持つてるんだよ』

「……つまり前にいた世界でも

風を操れたってことですか……？」

『そうだよ』

「えええええ!!」

『だから君を呼んだんだ』

「なるほど……」

『考えてみれば心当たりあるはずだよ』

「……言われてみれば……」

うわー………ビミョーに心当たりがある

ってか、私が親戚とかに嫌われたのは

赤ん坊とかの時に何かした可能性が出てきた……

そりやそうだ

もししていれば気味が悪すぎよ

生活費をくれただけかもしれませんよ

『呼ばれたことを話さなければ

使命のことは言ってもいいよ』

「へ？」

『そうじゃないと君が後々困るよね？』

「んー………そうかも……」

ってことは選ばれし者の使命である理由で

崩れた分の世界のバランスを保つため

この3つを守らないといけないって

感じて言ったらいいのかな？」

『そうだね』

「了解です」

『では・・・頑張ってね』

「はい

頑張ります」

大空戦 5

あ、元に戻ったー

あれ？何でか知らないけど体調戻ってるしー
すっごいラッキー♪ 身体が軽いよ♪

力が流れてきたからかな？

それともあの人の力？

……あの人は誰だったんだろう……
まあ今まで通り過ごしたらいいやー

って、どこまでいったのかな？

あれ？全然進んでない？

「がはあ!!」

「……リングがXANXUSの……

血を……拒んだんだ……」

“……そうみたいだな”

「……ヴェント……？」

あ、いきなり元気よくたてばビックリするよねー

「僕は力が流れて体調が戻ったよ

拒まれてないってことだろ”

「さそがし……いい気味だろうな……」

オレと老いぼれは血なんて繋がってちやいねえ!!」

あー……XANXUSの過去の話を聞いてると……

いろいろ自分のことも思っちゃうんだよねー

出来れば聞きたくなかったなー

チエルツベツロがXANXUSさんに

リングに適正か協議すると判断するのは当然だよ

原作と違ってリングに拒まれなかったら

元気になるのを私が証明しちゃったし……

「どこまで腐ってやがるやらせるかよー！」

「どいつも死に損ないじゃん」

「ヴェント」

あ、雲雀先輩が呼んでるよ

そっちに行こうかな？

多分、原作より無茶して動いてそうだし……

〃大丈夫か？

あー僕はリングをはめるとなぜか体調が戻った〃

もう大丈夫っていう意味で

もう1回言っただけど伝わったかな？

「そう 僕は問題ないよ」

〃かなり辛そうに見えるのは気のせいかな？〃

んー返事がないなー

まあいいか……後で治療しよう……

あ、話が進んでる！

「総勢50名の生えぬぎのヴァリアー隊が

まもなくここに到着するのさ」

「！ 何を言っている！」

「ボスは勝利後に連中に関わりのある者

すべて片付ける要因を向かせておいたんだ

僕ら幹部クラスの次に戦闘力の高い先鋭をね」

「お、お待ちください！」

ん？なんかあやしい方向じゃない？

今、ベルさんに近づいたら危ないと思うんだけど……

「大戦中の外部からの干渉は認めるわけには……」

「知らねーよ」

ガシッ

……やっぱり

ベルさんの腕をおさえて正解だねー

ナイフでチエルベツ口を攻撃するところだったよ

まあ全て風で止めても良かったけどー

ベルさんの戦闘スタイルでは腕をおさえられると反撃しにくいと思うんだよねー

抜けられたら投げたナイフを全て軌道をそらそう

〃ベル悪いな

僕は元気になってしまったんだ

僕の腕はスクアードに聞いているだろ？

幹部より弱い50人を簡単に倒せる自信があるぞ〃

神様も私が本気を出せば強いって言ったしねー

50人もいてたら多分手加減しないとと思うし……

それに制御をとけば一瞬で終わる……

「やべっ……!!」

〃マーモンは僕が幻覚がきかないのを忘れるなよ

君の攻撃は一切きかないからな〃

「ムッ……」

〃あーでも出来ればしたくないんだけどな〃

正直、嫌いじゃないしねー

私は手を出したくないっていうのが本音だね

『クフフフ』

戦わなくていいですよ』

ん？これは骸君が私の頭の中に語りかけてる？

ふむふむ。これはすごいなー

〃あー頑張ってくれた人がいるみたいだ

僕は戦わなくていいかもな〃

本当にすごい

バタバタと動かなくなっていく気配がするよ

「「「え!?!」「」」」

「ヴェントー…どういう意味だ!」

〃すぐわかるよ〃

「え……誰か……来る……?」

やっどクロームちゃんに教えたねー

まあ私が手を出す前に言いたかったんだろうね
私がいいところをとるところだったし……

「報告します」

我々以外のヴァリアー隊全滅!!!

奴は強すぎます!!鬼神のごとき男がまもなく……
げげ!!」

あ、大量の人物と戦っていた人が来る

んーこの人の名前なんだったかなー

「爆蛇烈覇!!!」

大空戦 6

ズン

うわー重そうな鉄球？だよ

「あの人・・・ずっと骸様が話しかけてた・・・」

「取り違えるなよボンゴレ」

オレはおまえを助けにきたのではない

礼を言いに来た」

「ランチアさん!!」

そうそう!!ランチアさんだよ!!

あ、感心してる場合じゃないよねー

“どうするんだ?”

「ダメだこりゃ」

「ウム……ボス……」

ここまでのようだ……」

まあこのメンバーだときついよね

私が1番相性が悪いのはルツスーリアさんかな?

近寄らなければ問題ないけどね

「……役立たずのカス共が……」

くそ! ちくしょう!

てめーら全員!!! 呪い殺してやる!!!」

“僕と君は何が違うかったんだろー……”

「え……う」

“僕と君は誰もが恐怖する力をもってる

僕はこのリングに選ばれたくはなかった

そして君は選ばれたかったんだろ?”

また睨まれちゃったよ

“君は無償の愛はいらないうって言ったが

ずっと僕はそれが欲しかった

偽りでもいいから親の愛が欲しかった

僕と君が逆だったら良かったな……”

私からすれば羨ましすぎるよ
少し違えば私もXANXUSさんみたいに
力を使つて暴走していたのかなー…
ん？そういえば…

「あー君が僕の名付け親だったな」

「「な!？」」

私はXANXUSさんの子どもっていう意味じゃないよ？
…それは誰でもわかるか…

「そんなに驚くなよ」

彼に名前をつけてもらったただけだ」

「おめー…やっぱバカだろ…」

え？なんでそうなったの？

獄寺君がビミョーに疲れてる気がするし…

まあいいか…

「君には生きていてほしい」

僕の名付け親だからな

君だったら生きてさえいれば諦めずに

ボンゴレの10代目になろうとするだろ？」

「「な!？」」

だから驚きすぎだつて

XANXUSさんの性格だと生きていけば

絶対ボンゴレの10代目になろうとするでしょ…

「まあ沢田綱吉の守護者が阻止するけどな」

「「当たり前だ!!」」

あ、珍しい

きれいに声がそろったなー

まあ当たり前のことを言っただしねー

「また君たちのアジトに行くよ」

名付け親に会いに行つてもいいだろ？」

「しっつ メシ作つてもらおうぜ」

「わかった」

「…………おい」

“なんだ？”

「オレの分も作れ…………」

まじか…………まあいいけどね

“ああ

約束だ”

うーん…………

やっぱりチエルベツロは謎だよね

予言じゃない全ては決まってた事か…………

まあ私がリングに拒まれることはないのも決まったしー

私しか使いこなせないって最初から知ってたしね

「それではリング争奪戦を終了しすべての結果を発表します

XANXUS様の失格により

大空戦の勝者は沢田綱吉氏よって

ボンゴレの次期後継者となるのは

沢田綱吉氏とその守護者6名と

選ばれし者のヴェントです」

ふむ…………私が増えただけだね

「よくやったな

これで帰れるぞ」

「…………みんな…………」

ドサツ

あらーツナ君が疲れて倒れちゃったねー

…………お疲れ様

大空戦 その後

XANXUSさん達は病院に運ばれたから
ベルさんとマーモンちゃんも着いていったしー
チエルベツロもどこかに行つたね

んー私が慎重になりすぎてるだけなのかなー
本当にいなくなったのかを確認しちゃうんだよねー
まあいいや

いなくなつたんだし体力あげようかな？

「さて……みんなボロボロだけど

ツナ君に私の体力わけてもいい？」

「「ああ」」

つてか、みんなも病院に行こうよ

なんで大丈夫と答えるだ……

やっぱり根本的におかしいと思う

……念のためにみんなにも体力をあげよう

「ごめんねー

流石にこの人数だと

1人当たりの量は少ないと思うんだよねー」

えーと、ツナ君が終われば誰からしよう？

あれ？雲雀先輩はいないなー

終わったし群れるのが嫌で帰つたんだろうね

「オレはいらねーから10代目に渡してくれ!!」

「ダメだよ？」

それをツナ君が知ったら嫌がるよ？

獄寺君も顔色悪かったのにつて言つてね」

「ぐっ……」

「まあツナ君にはちよつと多めにするよ

後はみんな平等ね？」

「……わかった」

さしてみんなの体力渡したし帰るかなー

「私は帰りますよー」

流石に体力あげすぎてちよつと眠いからね

ではまたー」

みんなから返事もらったし帰ろうー

・・・

・・・

んー玄関からみればそこまでボロボロじゃないね
グランドから見れば凄いことになってるけど……

雲雀先輩が怒ってないからいいか……

「優」

「あれ？ 雲雀先輩どうしたんですか？」

先に帰ったんじゃないの？

「帰るよ」

あ……なるほど

人がいないところで私を待ってたのね

「はあい」

「病院に行かなくて良かったんですか？」

「問題ないよ」

……私はあると思うんだけど

まあ黒曜編の時より問題ないといえはないか……

「ただいまー」

だからなんで言うのかな……

ぐいっ

「うわっ！」

急に引っ張られた!?

ぎゅっ

だ、抱きしめられてるー!?

というか、まだ玄関なんだけど……

……場所の問題じゃないよ!?

「……どうかしたんですか……?」

「このままね」

「……はい……」

「……というか……動きたくても動けません」

うう……やっぱり恥ずかしい……

雲雀先輩の顔を直視できない

「僕は寝るよ」

って、私のベッドを使うのね

洋室に向かっているしー

「じゃあ私は和室で寝ますんでー」

「なにいつてるの」

「へ?」

「優もこっちだよ」

「えええええええ!!」

「なに うるさいよ」

……うるさいって……

確かに大声を出したけどさ……

「いや……びっくりするでしょ……」

うん、私は間違っていない

「2回目だよね」

確かに2回目だけど

1回目は完全に意識なかったし……

……

無理無理無理!!!

「別に何もしないよ」

／／／／／／／／

少女マンガレベルの知識の私でもなんとなくわかった
でも、何もしなくても無理なものは無理だ

「行くよ」

う……強制……返事すらさせてもらえない……

雲雀先輩は大丈夫かも知れないけど

私は隣にいるだけで恥ずかしくて寝れない

いや……ちよつと眠いから寝れるかもしれない……

体力みんなにあげてよかった……

あげてなかったら……多分一睡もできなかったかも……

はっ!? 諦め思考になってるよ!

………そ、そうだ!!

「お風呂入りたいです……」

私って一切怪我してないから普通にお風呂入れるもん

ずっと熱が出て入ってないしねー

今日も入らないなんて嫌だ!!

「………わかった」

助かったー!!

お風呂入ってる間に雲雀先輩は寝てるしー

私は和室で寝れるよね♪

……起きてました

寝るんじやなかったの………?

いや……パジャマに着替えてるから

寝るつもりみたいだけどね……

ってか、その前に私の家にパジャマがあるのがおかしい

どこに置いていたんだ……

「行くよ」

う……これは逃げれないのね……

……うん

雲雀先輩は私の要望通り距離を開けてくれたよ
でもこれは何？と目で言わないでほしい
和室に寝れば問題なかったのに……

「……なにしてるの」

ついに我慢が出来なかったのか聞かれた……

「……しようがないですもん」

「前にも見た気がする」

「あ、そういえばそうですねー」

これで顔を隠しましたもん

小さな牙が見えてかわいい顔した恐竜だから

インパクトがあつて記憶に残ったんだろうねー

「そうだったね」

「はい」

「……なにしてるの」

うー……話をそらせなかった……

言いたくないのにー……

「普段は……何か抱かないと寝れないんです!!!」

この恐竜はふかふかで気持ちいいし

大きさも40センチぐらいで抱き心地がいいんだもん

「へえ」

……なんか凄く恥ずかしい／／／／／

「子どもだね」

「そうですよー」

悪いですかー」

もう開き直すしかない!

うー笑った……／／／

「寝るよ」

「あ、はい」

・
・
・
・
・
・
・
・

なんで普通に寝れるかな……
意識してるのが私だけみたいで
ばからしくなってきた……寝よ……

ムクッ

「優、おかえり」

大事な話 1

んー良く寝た……

あれ？まだ雲雀先輩寝てるーってまだ朝の7時だ……
気持ちよく寝れたからいっぱい寝たと思ったのになー
まあいいや♪

とりあえずご飯の準備しようかなー

神様!!

『どうした?』

昨日の選ばれし者の使命って知ってます?

『ああ 聞いてたぞ』

そうなんだー

『どうしたんだ?』

んー神様に頼んでで本当に正解だったって思わなかった?

『あー女子つというところか?』

そうそうー

『そうだなー

俺も思ってた優が過去のこと話した時も

チエルベツロにはしたぞ』

神様ありがとー♪

『リスクは下げたほうがいいからな』

うんー! そうだよねー

でもどうしてるの?

『あれは~~~~~って感じだな』

へえ

そうなんだー

ランキングは?

『似たような感じだぞ

~~~~~だな』

あ、だからフウ太君に会わなくてもいけたの？

『ああ』

フウ太がノートに書いてしまったら

会わないといけなかったんだ』

なるほどねー

理解したよー

『そうか』

まあ優の過去を作ったのも同じような感じだけだな』

なるほどねー

だから私が向こうの世界の過去の話しても

そんなに違和感無いんだよね？

『ああ』

そうだったんだー

ありがとうね？

『優のためだからな』

じゃあ仕事戻るぞー』

うん！

頑張つてねー

『おう！』

ガチャ

あ、いいタイミングで雲雀先輩が起きた！

「おはようございます」

「やあ」

「ご飯の準備出来てますけど食べますか？」

「そうだね」

食べ終わったし話をしよう

「実は雲雀先輩に大事な話があるんですよー」

「なに」

「昨日指輪をはめたじゃないですかー」

「そうだね」

「実はそのときに選ばれし者の使命っていうのが  
頭に流れてきたんですよー」

「なに」

「あれ？ 信じてもらえた……」

「信じるよ」

うわーっすっごく嬉しい!!

信じてもらえないかなーって思ったのにー!!

「実はあるものをずっと守らないといけないんですよー」

「へえ」

「3つありまして……」

「言わない方が安全ですけど雲雀先輩には言いますね」

「当たり前だよ」

……当たり前なんだ

雲雀先輩に1番に話して正解だった気がする……

1番じゃなかったら……うん。深く考えないほうがいいね

「このおしやぶりと

風のボンゴレリングと……のリングなんですよー」

「それ見たことない」

「そうですねー」

見せたことないですもん」

「どうしたの」

「道を歩いてたら前に歩いてた人が落としちやって

拾ったらその人にあなたがもっておくもの

って言われまして……」

「そう」

道を歩けばもらったで信じるんだ……

ウソをついてるわけじゃないけど信じすぎな気が……

まあいいか……

「優しい笑顔が似合う」

きれいな女の人にもらいましたよー?」

「興味ないよ」

……そうですか

もう少し強い人以外に興味をもってほしいんだけど……

でも、私以外の女の人に優しくするのは嫌だな……

……今、私は何を考えてるのー!?!／／／

「優?」

「なんでもありません!」

あ! ウソです! あります!」

怪訝な顔をしないで……

自分でもおかしいと思ってる

まだ話す事があるのにないって言っちゃったし……

「えっと、詳しく言えませんが……

ある理由で世界のバランスが崩れてしまったんですよー」

「へえ」

「で、この3つでバランスを保ってるみたいです

それを守るのが私の役目みたいです」

「そう」

「この3のうち1つでも壊れたら

また世界のバランスが崩れるみたいで責任重大です」

「……そう」

「結構大変そうです……」

「僕がついてるよ」

「……ありがとうございます／／／」

やばい……今のは嬉しすぎる……／／／

「それで実は私ってある能力がつかえましてー

チエルベツロと対戦相手には私が女子ってことは

わかってないんですよねー」

「へえ」

「私も学校に通うために必死ですからね

あ、ちなみにこの能力は信頼出来ない人にしか



使えませんからね」

まあウソだけどね

私が会った人は誰でも大丈夫だもん  
使う気が一切ないだけだしー

「わかった」

「これからも気をつけないと

かなり大変なことになりそうと思いません？」

「どういう意味」

「例えば誰かがこの指輪とかを壊そうとしにきても

私が持つてるって知ってたらクラスの人達を

人質にされたりしたら私どうしたらいいか

わからないんですよー

多分精神的にダメになっちゃうかなって……」

「そうだね」

「ですよー……」

「雲雀先輩は私の性格を一番わかってるかも……」

「じゃあ行きなよ」

「へ？」

「今から赤ん坊達に説明してまた頼むんだよね？」

「うわー流石、雲雀先輩……」

「本当に私のことわかってる……」

「僕は学校にいるよ」

「わかりましたー」

「じゃあね」

「うーん……本当にすごい……」

## 大事な話 2

やっぱり私にはハルちゃんみたいに

勝手にあがることは出来ないから押そう……

ピンポーン

……お土産を持ってくるのを忘れた

流石にこのタイミングで帰るのはまずいから

次に持つてくるから許してもらおう

ランボ君が泣いちゃった時は一緒に買いに行けばいいか……

あ、考えていたらドアが開いたよ

「ちやおッス」

「あれ？ リポーン君がお出迎えなんだー」

普段はツナ君のお母さんが出るのにな

まあツナ君の場合もあるけどね

「今、ママンは忙しくてツナはまだ寝てるしな」

流石リポーン君……

私が思ってることをわかって答えてくれたよ

「なるほどー」

って、ツナ君は寝てたんだー

1番体力あげたけどまだ疲れてるんだねー」

これは出直すべきかなー

あ、今の間にお土産を買いに行こうかな？

「どうしたんだ？」

「大事な話あったけど出直すよ」

「あがってけ」

んー早く聞きたいんだね

リポーン君だけに先に話せばいいか……

「話す場所ないでしょ？」

私の家に行こうよ」

「ツナを起こすから問題ねーぞ」

「え……」

……起こしに行つたよ  
「お邪魔しまーす……」

ボコッ

……思いつきり殴つたよ  
スパルタ過ぎる……

「いつてえ！ なにするんだ リボーン!!」

「優が来てるぞ」

「え!? 優が!？」

「ごめん……」

私の家でいいって言つたんだけどね

リボーン君が起こしちゃつた……」

「ううん!! 大丈夫だよ!!」

「本当にごめんね……」

これは時間を考えなかつた私が悪いと思うし……

「大事な話ってなんだ？」

「大事な話!？」

……気にしてるのは私だけみたい

殴られることはいつものことになってるんだね

「……そうそう」

実は指輪をはめたときに選ばれし者の使命

つてというのが頭に流れてきちやつて……」

「ええええ!？」

「どんな内容だ」

「んー実はあるものを

ずっと守らないといけないみたいで……」

「??？」

「……………」

んーツナ君は意味がよくわかつてなくて

リボーン君は考え中かな？

「それが壊れたら大変なことになるから

私の性格を考えると……

今まで以上に気をつけてほしいってお願いしに来たんだ」

「??？」

「……なるほどな」

リボーン君はわかってくれたかな？

「ツナ君つまりね

風早優の時は今まで通り

マフィアのこととはあんまり知らない

弱い女の子のフリするよってことだよ」

「う、うん？」

ほとんど今まで通りってことなんだけどね

でも注意してほしいことがあるんだよ

「だからツナ君が信用している友達でも

私の正体を知らない人の場合は

よくわからないフリをするよ」

「う、うん……？」

「例えば、獄寺君がボンゴレファミリーは全員集合だ！

って言ったりしそうでしょ？

その時にみんなで遊びに行くの？とか言うの」

「え!？」

「今、反応したでしょ？」

そういうことに気を付けてってことだよ

私とヴェントは別人って考えてほしいんだ」

「わ、わかった」

本当に大丈夫かな？（笑）

「もちろんツナ君が危ない目にあったら

ヴェントになって助けに行くからね♪」

「あ、危ない目になんてあいたくないよ!!」

「それもそうだね！（笑）」

私だつて危険なことは嫌だし……

「わかつたぞー！」

「助かるよー」

ヴァリアーの人達にも言つてほしいんだー

まあ私の正体知つてるのはまだ3人だけだけどね

でも私が女子つて知つてるから

性別がばれるとすぐわかると思うしねー」

「それはいいが……チエルベツ口機関が……」

「あ、それは問題ないよ♪」

「!? どういうことだ!」

「前に私がランキング1位を秘密とか出来る

力があるつて覚えてる?」

神様の力だけどねー

「あ、そういえば……」

「その似たような感じで無かつたことには出来ないけど

すり替へつていうのが出来て……

チエルベツ口機関と今回私と戦つた相手には

記憶のすり替へさせてもらつて

女子つてしらないことになつてるからね

まあランキングの場合私の情報を交信したら

交信途中ですり替へるようにしてただけどね」

途中だから出来たんだよねー

結構、範囲が難しいよね

「ええええええ!」

優つてそんなことまで出来るのー!?!」

神様の力だよー

「……オレ達の記憶もすり替へ出来るのか?」

「え!?!」

リボーン君はそうでなくっちゃ!

雲雀先輩もこれぐらい私を信用しないほうがいいと思う

「出来るけどそれはしないよー」

友達にはしないって決めてるからね

フウ太君が交信しちやっただ後の場合はする気はなかったよ」

「……そうか」

「……まあ信じてもらえないよね」

「優」

「なに？ ツナ君」

「オレは優のことを信じてるよ」

また……まっすぐな目で……

ツナ君はこれが凄いに気付いていないんだろうな

簡単に言えないことをツナ君は言うんだ

嬉しくて泣きそうになっちやっただ……

「ふふ♪ ありがとう♪」

まあこの力を友達に使う気があつたら

雲雀先輩に正体ばれたときに使ってるし」

神様に頼む気にもならなかったな

「そ、それもそうだね……」

「でしょ？」

「優、もし壊れたらどうなるの？」

「んー……聞きたい？」

「や、やっぱいいよ!!」

オレちよつと顔洗ってくる!!」

おー……ツナ君いい勘してるー♪

すごい勢いで階段をおりて行ったよ

「リポーン君は何を守らないといけないか

想像ついでる？」

「おしやぶりか？」

やっぱりそれは想像つくよねー

「当たり前だけど……後2つあるよ」

「そんなにあるのか!？」

「そうだよー」

「1人で3つとか多すぎだよねー」

「……たしかに

壊れたら何が起こるんだ？」

「えっと3つの中で1つでも壊れると

世界のバランスが崩れるんだってー」

「!? 本当なのか!?!」

「そうじゃなかったらここまで私は念入りにしないよ」

「……選ばれし者の運命は過酷だな」

掟じゃなくて……こつちか……

確かに1人で3つを守って

1つでも壊れたら終わりって過酷だね

背負ってるものが多すぎるよねー

「そうかもねー」

「わかったぞ

風の守護者の正体はボンゴレの機密にするぞ」

「え!?! そこまでしてくれるの!?!」

「ああ」

「すつごい助かるよー

そういえば……

何を守らないといけないか黙っててもいいの?」

「リスクは減らした方がいいだろ」

「そっか♪」

「ああ」

まあリボン君のことだから想像ついてるかもね

はつきり言わなくていいなら私は言う気はないしねー

「リボン君」

「なんだ?」

「もし、普段の私の時にツナ君達がピンチになっても

すぐ助けられないのは……ごめんね……」

「ツナ達は問題ないだろ」

「……それもそうだね

まだまだ強くなると思うし……」

「ああ

オレがビシビシ鍛えるからな」

今、この瞬間にスパルタが再決定した……

ツナ君……ごめん……

「おしやぶり持つてる意味は

もう1個あるけどそれは言えないからごめんね？」

使えこなせないから呼ばれて持つてる

っていうのは言えないからねー

「わかったぞ」

「さて、私は帰るよー」

ランボ君たちに会わなかったし

お土産は今度にすればいいしねー

「今からパーティだぞ？」

「へ？ パーティ？」

「山本ん家に集合だぞ

メール送ったぞ？」

「あ……そういえば見てない……」

雲雀先輩とさつきまで一緒にいたからだ

ケイタイはほぼ呼び出し用になってるからね……

「今からでかけるぞ」

「はいはい」



## パーティー

「うわーお寿司が美味しいー♪  
んーまだ話してないと思うし

京子ちゃん達と一緒にいて何も知らないふりをしよう  
獄寺君に近づけば指輪の話で語りそうだし……

……隠す気がなくても近づかない気がしてきたよ  
だって指輪の話を語られるのは嫌だ

「優」

「ん？ ランボ君どうしたの？」

「この指輪ねえ ゴミ箱に落ちてたの」

……絶対ゴミ箱には落ちていない

知らないフリ……知らないフリ……

「わあー！ きれいな指輪だねー

いいものひろったね♪」

「風早てめえなにいつてんだ?！」

あ、やば……獄寺君に聞こえちゃった……

ボコッ

リボン君……強制的に黙らせるのはやめようよ

「う……」

「獄寺君……大丈夫？」

きれいに鳩尾に入っただからやばいと思う

「隼人！」

どさっ

……ビアンキが……とどめをさした……

「えつと……何度か見たことあるんですけど……」

「隼人の姉のビアンキよ」

「獄寺君のお姉さんだったんですかー

クラスメイトの風早優といいますー

「これからよろしくお願ひします」

「ええ 隼人しっかりして！」

さらにとどめをさしてる……

獄寺君から離すことは無理だったなー

「優」

「ん？ デイイーノさんどうかしたんですか？」

「ちよつと……」

あれ？もしかしてもう聞いたの？

端に移動したしあってるかも？

「大丈夫か……？」

「えつと、もう聞いたんですよね？」

「ああ」

先にデイイーノさんに話したんだね

まあ、マフィアのボスだから権力が使えるしねー

「大丈夫ですよー」

確かに責任は大きいですけどみんないますしー」

「………そうか」

「はい」

「何かあったときいつでも言えよな」

「ありがとうございますー」

すつごく助かります♪」

「恭弥には話したのか？」

「もちろんですよー」

1番最初に話しましたよー

………1番最初に話さなかったら後が怖いんです………」

「………確かに」

デイイーノさんも納得したよ………

やつぱり先に話して正解だったよ!!

「まあこれから迷惑かけますが………」

デイイーノさんよろしくお願いしますね」

あ、頭をなでられた！

「任せろ」

本当にいい兄貴分だよねー

まあ部下がいなかったらいろいろ怖いけど……  
そこは信じるしかないなー  
んー表向きはランボ君の退院祝いだから  
もう少しここにいるべきかもしれないけど……  
よし！ランボ君にはまた今度何かしよう  
ってことで……

「山本君のお父さん！」

「お嬢ちゃん、どうしたんだ？」

「お嬢ちゃんって言われるとは思わなかった……」

あ、若いお客さんにはお嬢ちゃんって言ってるのかな？

まあお嬢ちゃんらしくお願いしてみよう

かわいくは無理だけどね

「あのお……お持ち帰りってできます？」

「もちろんだぜ!!」

「ありがとうございます!!」

なんて気前がいいんだ!!

あ、山本君がこつちに来たよ

んーこの2人が親子って納得できる

気前のよさが一緒だ

「風早もう帰るのか？」

「その……雲雀先輩に持って行こうかなって……／／／」

食べることが出来ないのは

群れることが嫌いな雲雀先輩が悪いけど……

雲雀先輩だって頑張ったんだし……

「ははっ！ そっかそっか！」

親父！ しっかり頼むぜ！」

「おう！ 任せろ!!」

「ありがとうございます!!」

いっぱいいいれてくれた♪

喜んでくれるかなー？

「じゃあ私は帰るねー」

リボン君、頼みますよ」

「ああ

わかったぞ」

この後に話すんだろうなー

さて私は制服に着替えて学校に行こう♪

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ」

「風早さん、どうかしましたか？

また何か……」

……草壁さんに心配かけちゃった

それもそうか……

呼んでないのに休みの日に来たら何かあると思うよね

私は他の風紀委員と違って

呼び出しがない限りは全て休みだし……

「大丈夫ですよー

ちよつと差し入れです♪」

「そうですか……」

うわ……すぐくほつとされた……

なんか黙ってるのが悪い気がしてきたよ！

「……雲雀先輩」

「好きにすればいいよ」

……何もいってないのに……本当にすごい……

「あの……草壁さん……」

「どうかしましたか？」

「そんなに心配しなくていいですよっ……」

「ですが……」

「実は……私は結構強いんです」  
「え!？」

「多分、雲雀先輩よりつよ……」  
殺気が……

「ゴホンッ! 一緒ぐらいの強さと思います」

……これは大丈夫だったみたい

「本当ですか……?」

「そうだよ」

雲雀先輩が言えば草壁さんは信用するしかないよねー

「ということなので

そんな心配はしなくていいですよ?」

「……わかりました」

「あ!でも強いつていうのはみんなには黙っててくださいね?」

草壁さんを信用して言ったんですからー」

「わかりました」

「この前のはあまりにもつけてた人が

素人だったからどうしたらいいか困っただけなんでー」

「優」

あ!しまった……

「すみません……」

プロにもつけられたことがあります……」

リボン君とツナ君のお父さんの部下に……

あ、ベルさんもだね

「はあ……」

「えへへ♪」

笑って誤魔化すしかない……

「プロとは……」

「そこは気にしないで下さい♪」

「……わかりました」

流石……草壁さん……

無理に聞いてこないところが大人だ……

話をかえよう……

「今日山本君の家でパーティーあつて

お寿司のお土産持つてきたんで食べてください♪」

「ありがとうございます」

「いえいえー」

雲雀先輩の機嫌がまだ悪いや……

どうしようかな……

「……雲雀先輩に食べてほしいから……

もつてきたんだけどなあ……」

「……わかったよ」

5月5日 ※本編に関係ありません

「雲雀先輩」

「なに」

気付いてない♪ 気付いてない♪

この言葉を言うのが楽しみだ!!

「誕生日おめでとうございませす♪」

やったー!

ビックリした顔をしたよ!!

この顔を見れただけで私は満足だ♪

「……なんで知ってるの」

「えつと、ハルちゃんに教えてもらいましたー」

「……誰」

「んー前に緑中の制服の女の子が

インタビューしに来ませんでした?」

「……ああ

赤ん坊が連れてきた人ね」

やっぱり名前まで覚えてなさそうだね

制服を言ったのは正解だった気がする……

「多分それですよー

いろいろ聞いたけど覚えてないんですよ?

でも誕生日だけ教えてもらったって聞いたので

教えてもらったんです!」

「そう」

反応が良くないなー

あ、そっか……

「……勝手に聞いてすみませんでした」

私に教えたくなかったのかも……

「優だったらしいよ」

……／／／

私はいいんだ……／／／

「……よかったです♪」

でもプレゼントがなにがいいかわからなくて  
雲雀先輩キーキいらなと思うしー

だから直接ほしいもの

聞こうかなって思ったんですけど……

びっくりさせたかったので

今日聞いて今度用意しますので

なにかほしいものありますか？」

……

なんか……笑ったけど……

かなり危険な気がするのは気のせい……？

「優」

「……はい」

返事したくないと思ってしまった……

「ごっちにきて」

「……はい」

すごく嫌な予感が……

「えっと……どうしたんですか……？」

「優からして」

「……なにをですか……？」

「わかってるよね」

／／／／／／／／／／

「あ……あの……／／／／」

「僕は今日誕生日だよ」

う……

「ちよつとだけ待ってください……／／／」

「はやくしてね」

な、な、な、なんでこんなことに……／／／

深呼吸……深呼吸……

「……目……つぶってください……／／／」

うわ……素直に閉じたよ……



「顔、真っ赤だよ」  
「それは……しょうがないです……」  
／  
／  
／

## 拉致 3

みんな納得してくれてよかった……

ボンゴレの機密レベルまであがった

って教えただけだからねー

別に私は話してもいいって思ったんだけどね

リボン君が黙ってるって言ったんだよねー

まあボスであるツナ君が聞くのをやめちゃったもん（笑）

当然といえば当然かもね

んーそれにしてもいつ未来編はいるんだろ……

すぐ入るイメージなんだけどな……

でももうパーティーから4日たつよね？

「優！ おはよ！」

「ツナ君 おはよ!!」

「昨日さーバジル君とランチアさん

帰っちゃたんだよねー」

「え!？」

「オレもびっくりしたよー

急いで追いかけてお礼言ったよ」

「そ、そうだねー……

バジル君に私が女子って

黙ってもらってるお礼が言えなかったよー」

「また会えるといいよねー」

「そうだねー!」

絶対会えるよね!」

……私の記憶ではこの時リボン君いなくなったはず……

私がいるからずれてるの!？」

それともなくなったの!？」

でも……白蘭は助けたらダメって言ったし

つまり、あるってことだよね!？」

……ちよつと待った

未来の私って3つちゃんと守ってるのか？  
でも守ってるなら……ボンゴレリングあるよね？  
原作がかわって

未来のツナ君達も持つてる可能性もあるんじゃないの??  
でも原作はなかなか壊せないんだよね？

あれ？その前に私って……

アルコバレーノだから死んでるかも……

あー！わけわかんない!!

……成り行きに任せよう

「優!!」

「うわっ！」

「どうしたの？」

なにか悩みごと？」

もしかしてずっと声掛けてたのか……

「んーちよつと考えごととしてたけど」

大した内容じゃないよー」

「ほんとに？」

「うんー」

心配かけてしまった……

ごめんね……

「優は今日も風紀委員の仕事？」

「今日はないと思うー」

なんとか昨日……

今まで溜まっていた書類終わらせたよ……」

……本当に多かった

リング戦の分がいっぱいあったよ……

頭が良くなってスピードははやいけどあの量は多すぎ……

正直、後悔したもん……

お土産を持っていったら用事が終わったって事で

書類をずっとするはめになるとは思わなかったし……

「お疲れ様……」

「……うん」

ツナ君の優しさが心に沁みるよ!!

久しぶりの授業だけど簡単だから眠い……

うとうとしてきた……

私は寝ても怒られないと思うけど寝るのはまずい……

一応、私は風紀委員だし……

ガラッ

ん？誰か来た……

でもケイタイ鳴ってないから

雲雀先輩じゃないよね……

「な、なんで……!!」

「てめえ何しにきやがった!!」

「うそだろ……」

ん？みんなの反応がおかしい……なんだろう？

ん？……

ん？……

ん？……

「君！ 部外者は立ち入り禁止だ！」

「ししっ 関係ないよ♪」

だってオレ王子だもん♪」

……なぜ……

「さ、沢田！ お前らの知り合いか!!」

うわー……クラスの雰囲気

ツナ君がらみと思っただわついでるよ……

間違っではないけど

ものすごく視線を感じるんだよね……ってことは……

「先生すみません……私に用事みたいす……」

しようがないから手をあげて立ったよ……

「な!? 風早さんの!?!」

……クラスが静かになった

雲雀先輩効果ですねー

「風早さんは王子って言う人と

知り合いなんですか?」

ちよつと待つて

誰……そんなこと聞いたら……

「オレの姫♪」

……誰だよ……今聞いたのは……

「……それはお断りしました

それに姫と呼ばないでください……」

「ししっ やだね♪」

クラスの雰囲気がおかしくなってるよね……

そりやそうだ

ベルさんがみんなの前で堂々と雲雀先輩に

ケンカを売ってるようにしか見えない

……早く用件を済ませよう

「えつと……どうしたんですか?」

「むかえに来たよ」

ん? 約束ね……

「雲雀先輩の許可貰って今度の休みに行きますよ」

……貰えると思う

「やだね♪」

なんで人の話きかないのかな……

「……なぜ?」

「ボスが説明しに来いって」

……そっちか!!

それもそうか

機密レベルにあがったって聞いても説明しないと

XANXUSさんが納得するとは思えない!!

「なるほど……」

あれ？つてかももうXANXUSさん元気なの！？  
病院で大人しく寝ているイメージが全くできない……  
もう元気かも……だから根本的におかしい

つて……もう目の前にいてるし……

私はここで戦うことは出来ないよねー

ふわっ

「優!?!」

「風早!」

「てめー!! なにしてるんだ!!」

……お姫様抱っこだよ（笑）

「あの……その運び方は恥ずかしいです……」

「前もしたじゃん♪」

うわーさらにクラスの雰囲気がおかしくなりました……

そして花がキラキラした目で見てるよ

帰ったら質問攻めが待ってそう……

それよりまずはこの体勢をどうにかしないと……

「あの時は私の体調が悪かったからでしょ……」

だからせめて運び方を……」

……このまま行く気満々ですねー

とりあえず言っておかないと……

「ツナ君! 雲雀先輩にイタリアへ行ってきます!」

心配しないで下さい!

ちゃんと連絡しますつて伝えといて!!!

伝える時に咬み殺されないように気をつけてね!!」

「ええええ!!!」

「あと……みんな!!!」

私が帰るまで

雲雀先輩の機嫌が悪いと思うから気をつけてください!!」

つて、窓から行くの!?

「ここ2階です!!」

「しし♪ 関係ないね」

自分で飛び降りるのはいいけど

この状態で行くのは怖いー！！

「ちよ、ちよつと……きやー……！！」

スタツ

「こ……怖かった……」

あー……このまま連れて行かれるのねー

その後、教室にいた全員が

早く帰ってきてくれと思うのであった……

## 拉致 3 その後

どうしたのだろうか……

風早さんがいつもの時間になっても来ない

委員長と風早さんはいつもお昼を一緒に召し上がる

もちろん委員長が忙しい時は別だが……

私はこの時間に普段は応接室にいないが

風早さんが仕上げた書類で気になったことがあったのだ

委員長が先に済ませばいいと許可をくださったので

ここに残っていたのだが……

委員長の顔を伺ってみると少し不機嫌な顔をしている

わかりにくいのがこれは怒っている顔ではなく心配している顔だ

風早さんと出会ってからの委員長は

このような顔をするようになった

初めは驚いたが今では当たり前前のことである

……ただし委員長が心配する人物は風早さん限定だ

今まで風早さんの都合で来なかったのは

委員長とケンカをしたときのみである

朝からの委員長の様子ではその線はなさそうだ……

委員長はすれ違いを防ぐためにここにいる

しかしあまりにも遅すぎる

「委員長」

「………見てくるよ」

委員長は私の言いたいことがわかったのだろう

私がかここにいればすれ違うことはない

今日は私がいたのは運が良かった

風早さんに何もなければいいが……

昼休みになってクラスみんなは



三角関係と好き勝手に話してるけど……  
オレは……それどころじゃない……

「どうしょー……!!」

絶対ヒバリさんに咬み殺されるよ!!!」

「……10代目……」

「たしかに……やばいぜ……」

どうして優はオレに言ったのー!?」

あんな伝言……オレには無理だよ……

ガラッ

どうしたんだろ?

急にみんな静かになったりして……

ヒ、ヒバリさん!?ど、どうして……

そ、そうだ!

優はヒバリさんと一緒にご飯を食べているんだ

「君達、優を知らない?」

みんな……オレに押し付けようとしている……

どうして優はオレに頼んだのー!!」

「その君、知ってる?」

「え!?……ぼ、僕ですか……?」

「そうだよ」

た、助かったー!!

ドアの近くにいなくて良かったー

「……え、えつと……さっきの授業時間に……

王子が……連れ去っていききました……」

ヒバリさんの機嫌が……

王子がベルフェゴールってわかってる……

「……ふうん

ここにいる君達……止めなかったんだ」

ギクツとみんなの肩が動いたのが分かった……

ドカツ!ドカツ!」

す、すごい……

ヒバリさんがみんなをで咬み殺してる……

女子でも容赦ないよこの人……

きよ、京子ちゃんは!?

ほっ……ちようど教室にいないよ……

!?! オレ達以外みんな咬み殺し終わってるー!!

「君達もなにしてたの」

「ひいひい!!」

咬み殺さないでください!!

「まあいいや

咬み殺すのは変わらないし」

やっぱりー!!

そ、そうだ!!もしかすると……

「ヒ、ヒバリさん!!!

優から伝言が……」

「なに」

「……イタリアにいつてきます

心配しないでください

ちゃんと連絡します……って……」

「そう」

ドカツ

み、見えなかった……

気付いた時にはお腹に足が……

オレ……蹴られたんだ……

ドカツ

「10代目!?!」

「ツナ!!」

「てめえなにしやがる!!」

ドカツ!ドカツ!

「獄寺!!」

ドカツ!ドカツ!

この後、教室から応接室まで  
咬み殺された後が続いて行つた……

ガラツ

委員長がお帰りになつた

しかし風早さんの姿が見えない

「……風早さんは……」

……私は何をしてしまったんだろう

トンファーが私の目の前に……

『緑くたなびく〜』

委員長のケイタイがなつたため私は咬み殺されなかつた

しかし普段ならケイタイをなつていても

かまうことなく咬み殺すのだが……

この電話は恐らく風早さんからだろう

あ、よかつた!! 出た!!

『今どこ?』

やっぱりツナ君は優しいなー

もう雲雀先輩に伝えてくれたんだね

「もしもし? 雲雀先輩?」

もうイタリアにむかつてますよー」

『……そう?』

やっぱり電波が悪いのかなー?

雲雀先輩の返事が遅いねー

「そうですよー

いきなり教室来て行くことになるから

「ビックリしましたよー」

『……………ふうん』

「そういえば、なんで私も行く気になつたか説明してない

『なんで機密レベルにあがつたか説明しに来い

って言われちゃって……

「ついでに約束もあつたんでご飯作ってきます」

『……………そう』

「よかつたー

「雲雀先輩も納得してくれたみたい！」

「あー！ 雲雀先輩!!」

『……………なに』

「ベルさんが私のことを姫って呼んだから

変な噂とか立つかもしれないですけど……

あの……………その……………」

「やっぱり恥ずかしいかも……

「言うの止めようかな……

『なに』

「う……………もう戻れないかも……

「……………私は雲雀先輩の……………姫がいいなあ……………／／／／』

「は、恥ずかしすぎる……

「最後の方は声が小さくなつたし……………／／／／

『……………前も言ったけど僕のだよ』

「えへへ……………／／／／

「頑張つて言ったかいがあつた……………／／／／

『いつ帰ってくるの』

「ん……………わからないですけど

「出来るだけ早く帰りたいと思つてます

「雲雀先輩に……………会いたいし……………」

「また恥ずかしいこと言つたけど本当のことだし……………／／／／

『そう』

「あ、そういえば電波がよくなつてる？」

返事が早くなってるよねー

「待っててもらえますか……？」

『待ってるよ』

待っててくれるんだ……！

「すぐ帰ってきてますね！　また連絡します」

『ちゃんとしてね』

「わかってますよー

それに……雲雀先輩の……声ききたいし……」

顔が見えてないからかな……

こんな恥ずかしいこと何度も言えるのは……

『いつでもかけておいで』

う、嬉しすぎる／＼

……ずっと優しい返事をしてくれるから

恥ずかしいことを言えたのかも……

「あ!!　私の荷物!!」

すっかり忘れてたー!!

『僕が家に持っていくよ』

いつも助かります……

「すみません……

弁当も食べてくださいねー

もったいないですし……」

『わかったよ』

一緒に食べたかったな……

あ!あの量を雲雀先輩だけでは無理か……そうだ!

「草壁さんと食べてくださいねー」

『……わかった』

ん?返事が遅かったね

あ、そっか

草壁さんはもうご飯を食べてるかもしれないよねー

雲雀先輩に頼んじやったからもう決定だよね?

草壁さん頑張って食べてください……

つてか、雲雀先輩は絶対お腹減ってるよね!?

長々と電話しちやダメじゃん

「では必ず電話しますね？」

「じゃあまた……」

『……わかった　またね』

お電話は終わったようだ……

風早さんは一体委員長と何を話したのだろう……

委員長の機嫌が戻っているような気がする

「はぁ……草壁」

委員長が溜息を吐いて私を呼んだ

先ほど思ったのは私の勘違いだったのか……

「……はい　委員長」

「優の荷物を持ってきて」

風早さんの荷物……？

「……風早さんに何か……」

体調不良でも起こして病院に運ばれたのでは!?

「今、イタリアに向かつててしばらく帰って来ないから」

い、イタリアへ!?

「どういうことですか？」

さ、殺気が……

これは聞いてはいけないことだったのか……

「……失礼しました」

では……取りにいつてきます」

応接室を出ると人がたくさん倒れていた

……私が助かったのは運が良かった

風早さんの電話が後一秒でも遅れれば

私も同じ目にあっていただろう……

ちなみに……

自分の身の安全を守るため

王子が風早さんを連れ去ったことを

誰も話さなくなった……

## 大事な話 3

イタリア到着!! つか……はやいね……  
前に行った時よりちよつと早く着いたよ  
まあヴアリアー専用機だからかな？

んーボンゴレの力はすごいなー

「うわー… また高級車だ!!」

「しし♪ 行くよ」

「はあい」

やっぱりボンゴレはすごいね！

おー2度目の到着!!

「おじやましてす」

「ムムツ 女だったんだね」

「あ、マーモンちゃんだ！

うー……やっぱり可愛い……」

「……………」

あれ？嫌だったのかな……

「まあ本当は女子だったんですよ」

よく考えるとマーモンちゃんの前では

ベルさんは姫って呼ばなかったかも……

「オレの姫♪」

………思ってるそばから言いました

「だから違いますって……」

何回言えばわかってくれるんだろう……

「ボスが待ってるよ」

「あ、はーい」



おお！なんか豪華な扉！！

さすがボスって感じ♪

コンコン

「しつれいしま……」

ヒュッ

「きゃ!!」

ふわっ

「……XANXUSさん……」

私じゃなかったらこれ割れてますよ……」

高そうなワインなのに……投げたよ……

当たり前のように投げたよ……

風で止まってよかった……もったいないもん！

「……来たか」

「あ、はい」

一瞬、顔を見てビックリしたね

まあ女子って知ってたけど顔は知らなかったもんね

「説明しろ」

説明するけどさあ……

なんでこう命令口調なんだろう……

まあいいけど……

「つて、感じで思ったより責任が大きかったんですよー

なのでリボン君が機密レベルまで

あげてくれたんですよ」

「……そうか」

おお！普通に返事をしてくれた♪

それにしても話せないことがあって

間違っって話したら私に関わった人が死ぬって言ったら

鼻で笑われただけってどうなの……（笑）

全然気にしてないみたいだねー

「あ！ 大事なことを忘れてました」

「なんだ」

「風早優といます」

「これからよろしくお願いします」

……………無視？（笑）

「まあXANXUSさんと会う時は

ほとんどヴェントで会うことになると思いますけどねー

あ、そうだ！名前つけてもらったお礼してないですね

ってことで……ちよつと触ってもいいですか？」

「なんでだ」

「だから睨むのはやめてほしい

「んーまだ体調が完全じゃないですよね？」

私って実は自分の体力を

相手にあげることが出来るんですよー

怪我が治るってわけじゃないですけど

ちよつとは治るのはよくなりますよ？」

「……好きにしろ」

「はーい」

「って、どこに触れていいの？」

「素肌に触らないといけないんだけど……」

「XANXUSさんの服装は難しい……」

「顔に触れるのは無理だしねー」

「手を出してくれれば握るのに……」

「うーん……手の甲に少し触れよう」

「これでちよつとは良くなったと思います」

「さて、私は他のヴァリアーの人達に

説明してきますねー」

「何も言っていないってことは

いいってことかな？

「……おい」

あ、ダメだったみたい

「なんですか？」

「……なにかあつたら言え」

ん？これは助けてくれるってことだよ

あ、そっか

バランスが崩れてしまったら

ボンゴレを継ぐことが出来なくなると思うしー

「すっごく助かります!!」

返事がない！（笑）

「じゃ、いつてきますねー

説明終わったらご飯作るんで

また持つてきますよー」

もう少しすればちようどご飯の時間だしねー

ってか、なんで返事しないんだろ

まあ止めないってことはいってことかな？

## 大事な話 4

今、思ったけどみんなってどこにいるの？

1番初めにベルさんに連れて行かれた部屋でいいか……  
いなかったら風で探すことにしよー

あ、ここだ

「失礼しまーす」

ってあれ？全員いてるー

すっごいラッキーじゃん！

それにしてもすごい怪我なのにみんななぜ動けるの？

これがヴァリアークオリティー？（笑）

「今日はみんないてるんですねー」

「ムム 僕たちは今、謹慎中だからね」

あ……そっか……

怪しい動きをすればまずいのか……

「それもそうですね……」

って謹慎中にベルさんあんなことしたら

ダメじゃないですかー!!」

普通にまずいでしょ!!

処分とかされたらどうするの!?

「ししっ 関係ないね」

「……だめでしょ

後で……私から今回のことは

大目にみてもらうように頼んでみます……」

リボン君にいったらなんとかなるかな……

うん。なんとかなることを願おう

私が責任を感じるよ……

「んまあ♪ 助かるわ〜」

「まあ今回は私のせいですしー」

「うゝおゝ おい!!!」

「はやく説明しろゝ おゝ おおー!!!」

「スクアーロさん

あんまり大きな声出したら体に悪いですよ？」

あ、黙った（笑）

自分の怪我の状態を思い出したんだろうねー

「……可憐だ……」

う……

「うゝお、おい!!」

なんでオレの後ろにかくれるんだああ!」

「……いやあ……身の危険を感じて……」

つい隠れなくなってしまうんだよ

いい逃げ場所を発見したしねー

「姫 こっちにおいで♪」

「……遠慮しときます

スクアーロさんの後ろが安全ですもん♪」

どう考えても安全だ……

マーモンちゃんの後ろには隠れる気にならないし……

スクアーロさんが私に興味があるわけないし……

「んまあ

私の後ろが安全じゃないってことお!?

失礼しちゃうわ〜!!」

……ルツスーリアさんはいろいろ危ないでしょ……

まあ私は大丈夫な気がするけど……

だって筋肉は最低限しかないからね

うん……女の子に産まれてよかったと本気で思ったよ

……空気が変な感じだしなんとかしよう……

「と、とにかく!!」

まず自己紹介します……風早優といいます」

「そういえば知らなかったわねえ」

「えっと、ルツスーリアさんでしたよね?」

「ルツス姐って呼んでほしいわあ」

……まあいいか……

本人がそう言ってるんだし……

「ルツス姐さんですねー」

わかりましたー」

「レヴィ・ア・タンだ!!!」

う……スクアーロさんの後ろに隠れながら話そう……

「レヴィさんですな……」

「しし♪ 姫に嫌われてやんの」

「ぬおう!？」

「……すみません」

なぜか身の危険を感じてしまうんです……」

……やっぱり失礼だよなー

隠れるのをやめよう

「うゝおゝ おおおい!!」

いいから説明しろおおお!!!」

「もおー せっかく頑張つて助けたのに

大声出して倒れるとか止めてくださいよー

まだ治つてないの忘れちゃダメですよー」

うん! 大人しくなった! (笑)

やっぱりこれは言われたくないことだったんだね

「ムム 君が助けたのかい?」

「そうですよーっていつでも

デイーノさんの部下の人もいましたよ?

私はたいしたことしてないです

ただ引き上げただけですよー

病院の手配とかも全部デイーノさんだしー」

「んまあ 大きな借り作っちゃったみたいねえー」

「へ?」

私が勝手にしただけですから

別にお礼はいらないですよ?」

「恩を売ればいいものを……僕だったららお金だね」

本当にお金好きだね……

「興味ないですよー

で、話しますから聞いてくださいね」

いやーこっちはこっちで面白かったなー

話せないことがあって間違っつて話したら

関わったら人みんな死んじやうつていつたら

こっちはこっちでルツス姐さんが泣いたり

スクアードさんが大きな声で叫んだり

忙しい反応だよねー

でもやつぱり気にしてないみたい！（笑）

「しし♪ りよーかい♪」

「ベルさん……」

そう言っつて前に姫つて何度も読んだでしょ……」

「しし♪」

……信用できない

「あ、フードかぶつてるときは

ヴェントつて呼んでくださいねー

これも知らない人がいますよね？」

「そうねえ 知らなかったわあ」

「ですよね？」

まあXANXUSさんにつけてもらったんで

みんな間違えないで下さいよ？」

あれ？黙った？

「どうかしました？」

「優ちゃん……それ本当なの……？」

「はい」

ベルさんとスクアーロさんとマーモンちゃんは  
聞いてましたよね？

だから知ってるはずですけど……」

「……あゝあゝ」

「……ボスにどうやってつけてもらったのお？」

「普通にお願ひしただけですよ」

ベルさんはその時いましたよね？」

「しっしっ」

うーん……みんな黙ってるよねー

静かなヴァリアーってすごい変な感じがする

「みんな……どうしたんですか？」

「ボス!!」

オレにも名前をおおお……」

あれ？なんか叫びながらレイビさんがどこかに行った……

「あの……レイビさんはどうしたんですか？」

「いつものことだあゝ」

気にするなゝあ!!!」

ふむ？

レイビさんって思い立ったらすぐ行動するタイプなのかな？

ドコツオオ!!!

何の音!?

あれ？みんなあんまり驚いてない……

「今の音ってなんですか……？」

「これもいつものことだあゝ」

「そうなんですか？」

「そうねえ いつものことだわあ」

工事でもしてよく音がするのかな？

まあいつものことだったらいいか……



「そうですかー」

あ！ 説明が終われば

ご飯を持っていく約束したんで

また調理場借りますよ？」

「いいわよお

好きにつかってえ」

「ありがとうございまーす♪」

うし……！ 頑張って作るぞー！！

なぜかみんなの分を作ることになったし……

最近どんだん料理のレベルがあがっていく気がするなー

まあいいか……

## 料理の傍ら

前も思ったけど材料とかが凄過ぎだ

……私が作っていいのか？

一流シェフに作ってもらったほうがいいと思う

まあ高級料理はいつでも食べれると思うし

家庭的な味のほうがいいんだろうねー

この前にルツス姐さんと作った時はそうだったしー

あ、わかった！

高級料理に飽きたらルツス姐さんが作るのかもー

じゃあ私が作っても多少は大丈夫か……

うーん……家庭的ねー

……XANXUSさんとおにぎり……

笑ってしまうのはしょうがない！（笑）

まあ今のは想像した私が悪いね

家庭的と言っても種類が違うかつたし……

それに私のイメージではXANXUSさんは洋食だしね

……もうなんでもいいや

量とか考えるとあんまり凝った料理は出来ないし……

私が食べたいものを作ろう

まずいつて言われたらしようがない

あ、量が多いし風つかいながら作ろうー

これも一種の修行だよねー

あれ？なんか気配が……

「どうかしたんですか？」

「ムッ よく気付いたね」

「風で気配よめますからー」

「ベルから聞いたよ」

君は風のアルコバレーノなんだってね」

そういえばマーモンちゃんはいなかったもんねー

「そうですよーと言っても

マーモンちゃんがアルコバレーノになった時のことを聞いてないので知らないですけどね」

「ムム そうなのかい？」

「そうですよ」

まあ私は去年の4月4日の夕方に

アルコバレーノになりました

まあこの時のことはさっきの理由で

あんまり詳しく話せないんで聞かないで下さいね」

「……わかったよ」

君はなんで赤ん坊じゃないのさ」

……呪いの内容を聞いちゃったよ

まあいいか……

「それは呪いの内容が違うからですよー

これも話せないので聞かないで下さいねー」

んー……黙っちゃったね

もつと私に詳しく聞きたいんだろうなー

呪いを解くために研究してるぐらいだし……

「私が言える範囲で言いますね？」

呪いはどっちかというと解けてるんですよー」

「……どういふことなのさ」

でも私がここにるのが呪いだしなー……

「だから詳しく説明できないんですって……

呪われてないのか？って聞かれると

呪われてるって答えますよ？……でも……

呪われてるのか解けてるのかって聞かれると

解けてるっていう方が近いって感じですよ」

これがギリギリの範囲かな……

さつきから黙ったきりだよ  
考え込んでるんだろうなー

うーん……考え込まないほうがいいんだけどねー

「私の呪いのことを考えても

マーモンちゃんの呪いの解くヒントにならないので  
考えない方がいいと思いますよ？」

「……それは本当なのかい？」

「そうですねー」

「100%つて言えますね」

絶対意味のないことだと思おう……

「……わかったよ」

「はい

私のことを考えてもものすつごい時間の無駄ですよ」

「どうしておしゃぶりが光らなかつたのさ」

「質問が多いですね……」

それにまた答えにくいこといいいますね……」

神様っていったらまずいよねー

「とある人に作ってもらったんですよー

おしゃぶりが光らないようにするため

でも、その人のことを話したら

もう私のこと助けてくれなくなるんで

それはすつごく困るんで教えませんよ」

これで……いいかな……？

「ムム」

「その人はマーモンちゃんと同じで光らないようにして  
ちよつと力を抑えるぐらいだったんですけど」

今は多分完全にアルコバレーノの力を制御してます」

「どういふことなのさ」

なんで答えにくいことばかり聞くのかなあ……

まあこれは私が半分誘導したか……

「……これは私にもわからないんですよ

ある人に急に制御かけられて

アルコバレーノの力を5分しか使えないようになって……

こっちも困ってるんですよー

袋をとって力を使ったら副作用で熱が出て倒れちゃうし……」

「はあ……わかったよ」

「なんか……すみません……」

「守るものはおしゃぶりのことかい？」

おー！リボン君と同じ意見だね

「当たり前ですけど後2つありますよ」

「そうなのかい？」

「そうですよー」

話せば話すほど私のリスクが高くなるんで

これ以上はいいませんよー

あ、おしゃぶりっていうのも黙っててくださいね」

「しようがないね」

「助かります」

持つてる理由はもう1個あるんですけど

そっちは完全に言えないんですよー」

「わかったよ」

お金が絡んでくると思ってたけど普通に黙ってくれそう

まあいいか……

下手に言ってお金を払うようになれば嫌だ

言えば神様がくれるけどなんか悪い気がするし……

「さて、マーモンちゃん

ご飯が出来たので運びますよ？」

「!? いつの間にか!?」

「え……さつきから話しながら作ってましたよ……」

マーモンちゃん考えすぎて気付いてなかったんですね」

「……そうみたいだね」

「考えたらおなか減ったでしょー」

食べましようよー」

「それもそうだね」

## 掴む

いっぱいあるし

もてない分は風で浮かせて運ぼう

マーモンちゃんに頼む気にはならないしね……

「君の能力便利だね」

さっきの料理作ってる時も使ってたんだけど……

本当に気付いてなかったのね……

「そうですねー」

私は身体能力が高いですけど

腕力だけは一般ぐらいしかないので

重いものもが楽になるから嬉しいですよー」

買い物時に大活躍だよ

付き合った人に持つてもらおうことに憧れてたけどね……

……それは諦めた

「ムム

君はどちらかというと術師に近いのよね

どうして格闘能力が高いんだい？」

「んーそういえばそうですねー

イメージするのは一緒ですもんね

まあアルコバレーノの力が普段から使えないから

ある程度は必要なんですよー

だから刀も使ってるんですよー

「それもそうだね」

「そうなんですよー

制御していればちよつとしか風を操れないので

身体能力あげて風で自分を浮かべて

自由に動かすイメージを鍛えてますね」

斬撃は危ないから好きじゃないし

集中力いるのが欠点だしね

今も皿をふわふわと動かしてるしねー

「大変そうだね」

「マーモンちゃんもある程度は鍛えた方がいいですよー」  
「考えておくよ」

この前は邪道っていったのにねー

やっぱりこの前の試合で少し気持ちが変わったのかな？

あ、話してたら着いたね

ガチャ

「えっとお待たせしましたー」

「しし♪ 姫の料理♪」

「んまあ！」

この量を今の間で作ったのお？」

「？ そうですよ？」

あれ？ レヴィさん

なんか怪我増えてませんか？」

「……気のせいだ!!!」

ふむ？ みんなと暴れたのかな？

ヴァリアーってそういうイメージだしー

怪我してるのに元気すぎだよ

やっぱり根本的におかしいと思う

「まあみんな食べてくださいねー」

私はXANXUSさんと食べてくるんでー」

「……ボスと食べるのかい？」

「だって1人で食べても美味しくないでしょ？」

「優ちゃん……ずっとボスの機嫌が悪いから……」

やめといた方がいいと思うわよ？」

まあそうだろうねー

今は大人しくするしかないと思うしねー

「心配しなくても大丈夫ですよー」

もし嫌そうだったら戻ってくるんでー」

「……そう」

それに私は危なくなったらすぐ逃げるタイプだしー



生き残れば次があるって思う

スクアールさんと逆だなー

私は剣士の誇りなんて一切ないよ（笑）

まあ純粋な剣士じゃないからいいか……

「気をつけるよお!!」

「はあい

まあいつてきますねー」

コンコン

「失礼しまーす」

お！今度は投げてこなかった！（笑）

って、なんか暴れた形跡が……

「なにかあったんですか？

さつきと違いますけど……」

「メシ」

「あ、すみません

今すぐ並べますねー」

そんなにお腹が減ってたのか……

うーん……多めに持ってきたけど足りるかなー

足りなかったら私の分をあげよう

「……なにしてるんだ」

「一緒に食べたほうが美味しいかな

って思ってたんですけど……」

普通に入っても何も言わなかったから

いいかなーと思ったけどやっぱり嫌だったのか……

「……好きにしろ」

おーラツキー♪

「じゃ一緒に食べましょ♪」

もぐもぐ……

それにしても会話がないよねー

んーなんかおにぎり実習を思い出す…… (笑)

美味しいとか言わないけど

食べてる時点で問題ないってことだろう

って勝手に思ったもんねー

XANXUSさんもそういうタイプだと思う……

無事に食べ終わったし大丈夫かな？

「おい」

あれ？問題あったかも

「なんですか？」

「また作れ」

あ、どうやらこれは褒め言葉っぽい

XANXUSさんはそういうことを言ってくれるんだ

ちよつとビックリだ

「そうですねー」

また今度来た時必ず作りますよ」

「もう帰るのか」

あれ？普通に会話した

「今回はベルさんが急に来て行くことになったんで……

はやく帰らないと心配してる人がいるから……」

んー返事がないってことは

帰ってもいいってことかな？

ダメだったら命令しそう……

「今度はヴェントの格好できますね

こっちの顔できたら正体隠してる意味ないんで

まあここに来たらフード取りますけどね」

「ああ」

あれ？返事した……

うーん……いまいちわからない……

まあいいや

「もう少しイタリアと日本が近かったらな……  
すぐ来れるんですけど……」

「一応私はまだ学生ですし……」

「やめちまえ」

「ええええ!?!」

「文句あるのか」

「えー……」

「いやあ……それは流石に……嫌ですよ……」

ツナ君達と学校生活を楽しみたいよー

でもツナ君の名前は禁句だから言えない……

というか

学校とか普通に通いたいから一人二役してたのに……

「……そうか」

あ、納得したかな？

「あー！もしXANNXUSさんが日本に来たら教えてくださいね  
絶対会いに行きますからー」

後で連絡先の紙を誰かに渡しときますよー」

「オレに渡せ」

あれ？

スクアアロさんとかの方がいいのかなと思ったけど

まあいいか

「わかりましたー」

「じゃあ今、書きますよー」

「って紙どこだろ……」

「そこだ」

「そこってどこですか……」

あ、なるほど

XANNXUSさんの目線を迎えばいいのね

「あ、ありがとうございますーす」

カキカキカキ……

「これが連絡先です」

さて私はこの洗い物したら帰りますね？」

「ああ」

「ではまた会いに来ます」

「そのときは言え」

むかえをよこす」

それは嬉しいかもー

風早優でチケットをとってイタリアに行けば

すぐ正体がばれると思うしねー

あ、だから言ったのか……

「助かります」

では……またー」

それにしても……私が来て……

XANXUSさんのキャラもかわった気がしてきた……

うーん……でも命令口調の感じは変わらないし

よくわからない……

考えても意味ないか……

## 帰宅

こっちに來たけどみんなも食べ終わってるよ  
全部食べてくれるのはすごい嬉しいよねー

こうやって料理が好きになっていったんだろうね  
作らされてる感じがして昔は嫌いだったしー

だから雲雀先輩も初めに会った時は早く作ってね  
って言うから作らされてるのは一緒だけど……

きれいに食べてくれるから頑張る気になったのかもねー  
まあ作ったのに文句を言われれば誰でも嫌いになるか……

「優ちゃん……大丈夫だったのお……？」

「へ？ 普通に一緒に食べましたよ

あんまり会話はなかったですけどねー」

「しっしっ♪ 流石オレの姫♪」

ん？なんで流石？

まあいいか

というか姫じゃないし……

もうツツコミするのがめんどくさい……

「洗い物したら私は帰りますよー？

XANXUSさんもいって言いましたしー」

「ムム ボスが許可したのかい？」

「はい

今度また來た時にご飯作る約束しましたよー」

「いつでも来い!!」

う……ほんとに……身の危険をなぜか感じる……

「いや……そんなに來れませんって遠いですし……」

「それもそうだなあ」

「とりあえず洗い物しますねー」

そうだ！雲雀先輩に帰るって連絡しよう♪

今、1人だしー

……時差の問題があった……

いつでもって言われたけど流石に今の時間はまずいよね  
えーっと、思ったより早く帰れそうです

今から帰ろうにも飛行機の準備とかがあると思うので  
帰ってくるのは日本時間で早朝の可能性が高いです

着けばまた連絡しますね

……これでいいか

うわっ!? すぐ電話がかかってきたよ……

起こしちゃったのかも……

「もしもし?」

『やあ』

「すみません

起こしてしまいました……」

『問題ないよ』

あれ? じゃあなんで電話してくれたのかな?

「なにかありました?」

『なにが?』

「寝てる時間なのに……」

『優が聞きたいと思ったから』

うわー／＼／＼／＼

「嬉しいです……／＼／＼／＼

でも無理はしないでくださいね……?」

『わかったよ』

「むかえは……今回はやめておくよ

優は風邪で休みになってるから』

あれ? イタリアに行くってみんなの前で言ったのになー

みんなに口止めしたのかも……

雲雀先輩が言えば誰も話そうとしないと思うし……

「わかりました

空を飛んで1度家に帰って普通に登校しますね」

『待ってるよ』

「はい」

では、またー♪」

機嫌いいみたいで良かったー

悪かったら電話なんてかけてくれないしねー

機嫌悪くなることを心配したけど問題なかったね

だって私がいらないから機嫌悪くて

みんなが咬み殺されてたら悪いからね……

(電話する前に大量に咬み殺されてることは知りません)

コンコン

「失礼しまーす」

「姫♪ どうせ準備まで時間あるしー

どこか行こうぜ」

あ、観光案内でもしてくれるみたい

それは嬉しいかも……でも夜だけど開いてるの？

まあそこは地元の人に任せるべきか……

「お願いします」

「優ちゃんはそのまま帰ることになるのよねえ？

ベルちゃんはどうするつもりなのお？」

「ん？ 姫を日本まで送る」

え……まじで……

いや、別にいいんだけどしんどくないの？

私も大変だけど帰るだけだし……

ベルさんはイタリアに戻ることになるよね？

ってか、むかえにも来てくれたのに……

「飛行機さえ手配してくれば

私は1人で帰れますよ？」

「問題ねーって」

ふむ……

ベルさんがいいならいいか……

やっぱり根本的におかしいだね

「じゃあ、帰る前に……」

一応私の連絡先渡しときますねー

XANXUSさんにも渡したんですけど……

念のために」

「姫の連絡先ゲットー♪」

あ……しまった……

ベルさんに教えたことは

雲雀先輩にばれないようにしないと……

また機嫌悪くなるかも……

まあしょうがないか

「ではまたきますねー」

おお!!日本到着!!

やっぱりちよつと着くのがはやいよねー

どうなってるんだろ……ボンゴレ恐るべし

そして元気なベルさん恐るべし

私はかなり疲れたよ

まあここまで疲れた一番の原因はわかってるんだけどね

「ベルさんありがとうございましたー」

「姫またな♪」

「はい

また会いに行きますよー」

いやー本当に元気だったねー

体力をわけてほしいよ……



本当はいつもと同じ時間に登校するべきと思うけど  
少し早く登校したのは許してほしい……  
だって雲雀先輩に会いたいんだもん

あ！しまった！

いつもより早く登校すれば

雲雀先輩は見回りしてていないかも……

まあその場合はしょうがないか……

コンコン

「失礼しまーす」

「やあ」

良かったー！いてた!!

「ただいまです!!」

「……………優」

「はい?」

「行くよ」

あれ?どこに?

んーまた見回りについていくのかな?

あれ?私の家?

「雲雀先輩、どうかしたんですか?」

朝ご飯を食べたかったのかな?

いつもの時間に家に来なかったからいらないと

勝手に思ったけど気をつかってくれたのかな?

「優、無理しすぎ」

「へ?」

「あんまり寝てないよね」

うわー私が疲れてた理由をすぐ当てた……

「一応、移動中に寝たんですけどね……」

変に起きちゃって……寝れなかったんですよ

そんなにわかります?」

そんなに疲れてる顔してたか……

抱き枕の人形がほしかったんだけど

売ってる店が閉まってたんだよねー

「僕にはわかるよ」

なるほど……

わかった雲雀先輩が凄いのか……

「んー……やっぱり雲雀先輩には敵いませんねー」

「はやく寝なよ」

……お願い事していいかな

「あの……／＼／＼」

「なに」

「……寝るまででいいので……

手を握ってもらっても……いいですか?／＼／＼」

「いいよ」

「……ありがとうございます／＼／＼」

恥ずかしかつたけど……勇気を出してよかった……

……やっぱり寂しかったんだよね

それに久しぶりに雲雀先輩に会えたのに……

ってあれ?

「雲雀先輩……何してるんですか……?」

「僕も寝るから」

……またですか

「あの……」

「問題ないよ」

だからあるんだけど……

まあいいや

疲れてるし……

「優」

「なんですか?」

……

・  
・  
・

うう……／＼／

不意打ちだったよ……／＼／

「……いきなりどうしたんですか？／＼／」

「したかったから」

……／＼／／

「……寝れなくなりそうなんですけど／＼／」

すっごいドキドキしてるし……／＼／

今ので目が覚めた気がするよ……

「もう何もしないよ」

「……はい……／＼／」

結局雲雀先輩が先に寝てその後によっと寝れました

## お出かけ 1

……それにしてもいつ未来編が始まるんだろ  
ヴァリアーに行ってる時に始まって  
私が日本に帰ればみんながツナ君達がい  
ないって心配していると想像してたのに……

ツナ君が私のことを心配してたよ

うーん、神様に聞いてみよー

神様ー!!

『どうした?』

いつ未来編が始まるかわかります?

『……すまん

俺にもわからん』

そっだよー

ずれたからわからないって言ってたしねー

あ、聞きたいことあるんだけどー

『なんだ?』

神様って未来ではどうなるの?

『俺は今の優についてる神様だ

未来の優についてるのは未来の俺って感じだな』

へー

時間軸が一緒なんだー

『何度も言うが……優についてる神様だからな』

そっかー

んー……つまり私についてるってことは

私が未来に行くと神様も一緒に未来に行くんだね

『そういうことだ』

ってことは、成長した10年後の神様じゃないのか

いや、神様が成長っておかしいか……

んー……また質問!!

『なんだ』

私についてる神様ってことは

私以外の人には手助けは禁止なの？

『当然だな』

なるほど……

神様も結構縛られてるんだねー

『まあな』

あ、もう一個質問！

『なんだ？』

例えばさー白蘭さんと会ってアジトの場所が

わかったりしたら行動を見てほしいっていうのは出来る？

『無理だな』

そうなの？

『ああ』

優が絶対ここにいるって

100%疑ってなかったら見れるけどな』

あ、明確にわかってるってそういう意味なの？

『そうだぞ』

今までは原作知識や優が行動して

見たい人がここにいるってわかってるから見れるんだ』

なるほどー

『優がわかること以上の手助けになってしまうからな

まあ物とか作るのは結構出来る範囲は大きいぞ』

わかった

まあ未来にいつても神様がいてるって

わかっただけで心強いよー!!

いつもありがとうね!!

『……………バカ』

え!?

『もう仕事に戻るからな

じゃあな』

え!?!私、何か変なことを言ったのかな……

普段から思ってることを言っただけなんだけど……  
まあいいか……  
んー今日休みだしちよつと骸君に聞きたいことあるし  
弁当持って会いに行こうー  
クロームちゃんにも会いたいしねー  
ここはヴェントで行くかな？

〓どうも〓

「なにしにきたんだびよん！」

「……………」

「……ヴェント……」

うん！今日も可愛い！！

それにしてもパイナツポーな髪型だなー

でも可愛いからアリだ！！

〓君達しかいなから普通に話すぞ〓

フードもとつちやえー

パサツ

「犬君……何しに来たってひどくない？」

ご飯を持ってきたんだけどなー……」

「お前のメシうまいびよん！！

はやくよこすだびよん！！」

さつきと態度が違う（笑）

いや、弁当だけを置いていけって言うてるんだね

「優……ごめん

犬がひどいこと言って……」

「クロームちゃんが謝ることじゃないよー

あ、犬君、千種君はじめまして風早優といいます」

「どうでもいいびよん

「はやくよこすだびよん」

「……………」

「……2人とも反応ひどいよね（笑）」

「まあ食べよっか」

もぐもぐ……

犬君は食べていると大人しいねー

まあご飯粒とかはいっぱい飛んでるけどね

「優……今日はどうしたの？」

「んー実は骸君に聞きたいことがあるんだけど……」

「まだ疲れてるなら今度にするけどねー」

「骸様に聞いてみるね」

「後でいいよー」

先に食べないと犬君が全部食べちゃうよ」

ほんとに……食べるのはやい……」

「このままだとクロームちゃんの方がなくなるよ」

「……………」

うなずく姿もかわいい!!

それにしても千種君って無口だよねー

でも食べるってことはちよつとは信用してくれてるよね

まあ骸君が言ったからだと思うけどー

……それにしてもこの部屋は汚すぎる!!!

「……今度、掃除道具を持ってくるね……」

「風で掃除するっていう考えもあるけど……」

拭き掃除までしたい……」

「このままでもいいびよんー!」

……嫌だ……」

「この部屋が汚いのは犬君のせいな気がしてきたよ」

「私は骸君にクロームちゃんのことを頼まれたしー」

「この部屋が汚かったら衛生的に良くないから」

勝手に掃除するからねー」

あ、言い返さない（笑）

骸君の力は凄いなー

「それに掃除道具持ってくるときに

またご飯も持ってくるよ♪」

「はやくくるんだびよん」

私のご飯……そんなに好きなのか……

「優……ありがと……」

クロームちゃんはやっぱり可愛い!!

「ここまで嬉しそうに食べてくれたら

また持ってきたくなるよー」

「いつ来るんだびよん」

「冷凍したのもも持ってきたから数日分はあるよ

でも、数日後に来れるかはわからないよ

私は結構忙しいんだよねー……

風紀委員の仕事もしてるし……

雲雀先輩にばれないように

ここに来ないといけないしね……」

長期の休みがあつたら

ヴァリアーに行かないといけないし……

あれ？私って結構モテモテ？（笑）

「……優……ごめんね……」

「だからクロームちゃんが謝ることじゃないってー

骸君と雲雀先輩の相性が悪すぎるのが問題だよ……」

本当に悪すぎる……

まあ会った時が最悪だからね……

「並中のボスらっけ？」

骸様にボコボコにやられた奴」

「犬君♪ それは私の前でも禁句だからね♪」

「んあ!？」

「あ、ごめんごめん



ちよつと殺気出ちやつた♪

さて食べ終わったし

クロームちゃん悪いけど聞いてもらえろっ..」

「……………うん」

## お出かけ 2

あ、骸君の気配がする

あらーわざわざ実現化までしてくれたよ

クロームちゃん通じて話してくれるだけでよかったのにー

「なんですか?」

「ごめんねー

急によんだりして」

「いいですよ 用件は?」

「いやあ……1度だけ会ったんだけど

それから精神世界で会わないしー

でも私の頭に語りかけることはできたよね?」

「そうですね」

「お前! 骸様と話せるのか!」

「話せてはないかな?」

骸君の一方的って感じだよー」

「あなたと契約すれば憑依はできます

ですが、力は使える可能性は低いでしょう」

「へえー そうなんだー」

「波長が近いのでしょうか」

波長っていう表現なんだー

「お前 骸様と契約しろ!」

「んーそれはやめとくかな?」

雲雀先輩が怖いからね (笑)

「お前!!」

「犬 落ち着きなさい

僕は彼女と契約するつもりはありません」

すごいなー

本当に犬君が黙ったよ

「そうなの?」

骸君は使える駒は多い方がいいと思うタイプと

勝手に思ってたんだけどねー」

「クフフフ」

「契約してもあなたが元々契約している人に  
邪魔されそうですからね」

「そりやそうだ」

「肝心な時に邪魔されれば計画が全て狂うもんね  
そんな駒はいらないよねー」

「でも……そんなこと出来るの？」

『無理だな』

「あの時は俺がはやく来いって呼んでただろ？」

「それを骸が邪魔されてるって思っただけだろ』」

「あ、なるほどね」

「そうなんだね」

「出来ることにしよう（笑）」

「雲雀先輩のことを抜きにしても」

「私は骸君と契約してもいいことはなさそうだしね」

「勝手にのつとられてツナ君に近づきそうだもん」

「なんで波長？相性が少しいいのかな？」

「犬、千種席を少し外してください」

「あれ？なんでだろ……」

「まあいいか……」

「考えられるとすれば……」

「性格……」「それはないね」……「そうですね」

「絶対違うもん（笑）」

「……能力……」

「能力？」

「どっちかというと相性悪いよね？」

「クフフフ」

「悪すぎますね」

「だよねー(笑)」

「ですが……」

能力の根元が同じというのも考えられますね」

「根元？ まあ術士に近いっていえば近いね」

「違いますよ」

「あ、それもそうだね」

それぐらいで波長があったら骸君は憑依し放題だもんね」

うわ……それは想像しただけで怖いな……」

「そうです」

あなたは僕的能力を知ってますか？」

そういえばちゃんと聞いてないなー

原作で知ってるけどここは知らないフリだね

「んー……なんとなく知ってる感じっ？」

「わかりました」

僕の体には前世に六道すべての冥界を廻った

記憶がぎざまれていましてね

6つの冥界から6つの戦闘能力を授かりました」

「へえ……」

ん？

「心当たりありそうですね」

「……いや……少し……ね」

よく考えると私って前世の能力を使ってる……

それも前世の記憶も持ってるし……

骸君とめっちゃ近い……

「前世……わかりやすい人だ」

「う……」

はめられた……

少し肩が動いてしまったよ……

「そうです」

私は前世に使えた能力を今も使ってます

前世の記憶も持ってるよ」

「クフフフ」

「あなたと僕は近い存在だから相性がいいみたいですわね」  
「そっかー」

「あー！ それで私は骸君が出てくる時の  
気配がわかるのかも……」

「霧戦で骸君のことが頭に流れたのも

この理由か……」

「近い存在ですからね」

「僕からすれば最悪です」

「なんで？」

「あ、それもそうだねー」

「普段のツナ君に何かしようとして

誰かに憑依しても私に見破られるもんねー」

「うわー骸君が原作より不憫な気がする

私という存在のせいで骸君の計画の成功率が低すぎるよ

とりあえず応援だけはしておこう

「頑張ってるねー」

「あー！ 骸君ありがとう!!」

「なにがですか？」

「もしかしたら私が知られたくないことが

関係する可能性があるから

「犬君と千種君に席をはずしてもらったんでしょ？」

「だって性格は違うのはわかってるし

能力の相性が悪いのもわかってたもん

「つまり……前世……冥界……とかの

キーワードの可能性高いつて考えるよね

「骸君も絶対頭がいいはずだもん

「それはどうですかね」

「もおー」

「そこは『そうですね』でいいでしょー」

「クフフフ」

「ふふ♪ ありがとうね」

「僕はそろそろ戻りますよ」

「あ、ちよつと待って」

「なんですか?」

「無理させて呼んだし私の体力を渡すね」

「あなたは本当にかわってる人ですね」

「なんで!？」

「当たり前のことじゃないの?」

「雲雀恭弥と付き合ってるのに」

「僕にそういうことするのはかわつてると思いますが……」

「雲雀先輩は骸君が嫌いかもしれないけど」

「私は骸君を嫌いとは思ってないよ?」

「でも味方とは思ってない」

「そうですか」

「じゃ、勝手に触るよー」

「どうぞ」

「これぐらいかな?」

「これでちよつと楽になったかな?」

「また何かあつたら語りかけてー」

「内容にもよるけど助けてあげるよ」

「骸君に貸しを作ればいいことがありそうだしね」

「あらーなんか笑ってるよ」

「わかりました」

「ではまた会いましょう」

「はいぁーい またね」

「おお! クロームちゃんに戻った!

「クロームちゃんありがとうー」

「……ううん」

「犬君と千種君呼んでくるよ」

「さつきちよつと席を外してもらったんだー」

「……うん」

「犬君、千種君お待たせー

もういいよー」

「遅いだびよん」

「……骸様は……?」

「もう戻ったよー

それにしても骸君って優しいんだねー」

「当たり前だびよん」

「……………」

「そうだよね

そうじゃなかったら

犬君と千種君はついていかないよねー」

あれ? 2人とも黙っちゃった?

変なこと言ったかな……

「とりあえず話は終わったからー

クロームちゃん待たせてるから私は戻るよー」

## お出かけ 3

大人しく待ってる姿も可愛いなー

クロームちゃんに会うたびに

私は変態に近づいている気がする……（笑）

まあ元々可愛い子には弱いからかわってないか……

「お待たせー」

「……ううん……優……」

「ん？ なに？」

「骸様と何はなしてたの……？」

「え!? 聞いてなかったの!？」

骸君が実体化したら聞けないのかな？

それとも骸君が聞かせないようにしたとか？

まあいいや

聞いてなかったという事実だけわかれば十分だしね

「んー……私が隠したいことを骸君が知ってしまったね」

半分はめられたけどね（笑）

「骸君が気をつかってくれて

みんなに席を外してもらったんだー」

「……優……ごめん……」

「え!? なんで謝ったの??」

「優が隠したいこと聞いたから……」

あー本当に私ってクロームちゃんに弱いよね

「あのね、私って前世に使ってた能力を

今も使ってるんだー ちよつと骸君と似てない？」

「……うん」

「そうなんだよねー」

でね、前世の記憶も持ってるんだけどー

前世のこと聞かれてたくないんだー

それで隠したいんだー」



「ありがとう」

「え??」

「隠していたこと教えてくれたから……」

「クロームちゃんだったら」

「言ってもいいかなって思ってたねー」

「骸君とクロームちゃんと私のヒミツだね!!」

「うん!」

「うわ……かわいい……」

「もう私……死んでもいいかも……って感じで  
幸せに浸っているとケイタイがなるんだよねー」

「クロームちゃん　ちよつとごめんね」

「……雲雀先輩からだ」

「もしもし?」

『優　どこにいるの?』

「……この場所は言ったらまずいね」

「えつと……ちよつと出掛けてます」

『……ふうん』

「う……やばい……」

「場所を言わなかったから機嫌が悪くなった……」

「普段はそこまで気にしないのに」

「骸君リーダーでも持つてるのかもしれない……」

「今から帰りますよ?」

『早く帰ってきてね』

「僕、お腹すいた」

「今、私の家にいるんですか?」

『そうだよ』

「急いで帰って作りますよー」

「ちよつと待っていてくださいー」

『わかった』

「……大丈夫だったかな」

「お腹が減ってたから機嫌が悪かったと思っておこう」

そうじゃないと怖すぎるよ

早く帰らろう……本気で機嫌悪くなると困る

「……雲の人……？」

クロームちゃんは守護者の名前を覚えてないの……？

まあ雲雀先輩とは関わることはほぼないと思うしいいか……

「そっだよー」

今すぐ帰らないといけなくなったから……」

「……うん」

「またね？」

「うん!!」

うわーすっごい嬉しそうに言ってくれた!!

やっぱり可愛いー!!

そっうえばクロームちゃんって

骸君達に会うまで友達とかいなかったような……

今まで会う約束とかしたことなかったんだらうな……

「ただいまー」

「おかえり」

やばい……すごい嬉しい……

「どうしたの？」

あ、嬉しいのばれちゃったみたい

顔に凄く出ちやっただらうね

「実は……おかえりって言ってもらったの

産まれて初めてなんですよー

すっごく嬉しくて……」

「そう」

「はい!!」

あー！ 急いで作りますね♪」

「優」

「なんですか？」

ぐいっ

「うわ!!」

私ってよく雲雀先輩に引つ張られるね……

まあ雲雀先輩がこけないように支えてくれるからいいけどね

「おかえり」

……耳元で言わないで下さい／／

「……ただいまです……／／」

あ……嬉しそうな顔だ……

……

……

よし！決めた！

今まではつきり言ったことなかったけど……

……ちゃんと伝えよう……

「雲雀先輩……」

「なに」

「……大好きです

ご飯作ってきますね!!!」

きやー恥ずかしい!!!

台所にダツシュしなければ!!

あ……言い逃げしちゃった……／／

「はあ……僕の方が敵わないよ……」

## ※ 必読 未来編の前に

注意！小説ではありません

お詫びです

未来編に入る前に読んでください

えー未来編入る前に

私が原作の解釈があつてるか全く自信がないため……

間違つてたらすみませんということで先に謝っておきます……

未来のツナ君達は

原作のツナ君達と繋がつてると思つて書いてます

もちろんリング争奪戦の時までですけど……

未来の山本君がリング争奪戦の話をしたのであつてると思っています

……

で、リング争奪戦を経験した後

かなりの「もしも」で枝分かれした中の

1つが白蘭に攻略されてない未来と思つてます

つまり未来のツナ君達はバズーカを当たつてないですよ

もしくは当たつた記憶がないツナ君達になると思います

私は死んでいるので入れ替わる相手がいないため

当たつたけど入れ替わつてないパターンと予想しています

だつて当たつてることを覚えていたらおかしいですから

どこかのパラレルワールド（原作で装置を仕掛けてた世界）の

未来の入江君が過去の入江君を使つて

リング争奪戦後の10年前のツナ君達をバズーカをあてました

で、入江君目線で行くとリング争奪戦後のツナ君を指示通り当てる

指示通りの未来に進んでいったら白蘭さんと仲良くなつて

全部思いだしたら白蘭に攻略されてない未来だつた

つてことになりますよね

つまり最初に書いたバズーカに当たった記憶がない

未来のツナ君達と同じ場所の「もしも」になるってことですよね？

つまりバズーカを当てた記憶がある

未来編の入江君になるはずです……

原作で何も知らずに当てたって書いてましたので……

ちなみに……

パラレルワールドの未来の入江君は

自分の過去をつかってなので

リング争奪戦があつていろいろ枝分かれした

未来の中の1つだと私は思います

入江君が昔バズーカを当てたことを話して

未来のツナ君、雲雀さん、入江君が

白蘭を倒すために日本の基地を目指して

過去から来たツナ君達を強くなるように仕向けたと思います

入江君から聞いていたので

雲雀さんは入れ替わる時間を知っていました

説明がへたくそすぎて……わかってもらえるかな

まあこのように未来編を解釈して書いたので

原作を理解出来てない!!

って思われたら……すみません……

私の頭ではこのような理解になりました……

実はバズーカ当てた計画をたてたのは

原作に出てくる未来のツナ君達って思う気もするんですが……

うーん……どうなんだろう……どっちが正解なのかな……

とりあえず……

未来のツナ君が日本の計画をたてるときに

京子ちゃん達一般人を最後まで反対してたっていったのは

昔に当てたメンバーに入っていたけど

すぐ過去にかえすかかえさなかつたって意味かな?と思っ

どこかのパラレルワールドの入江君が計画したってことにしまし

た

うーん……

私の解釈はやっぱりおかしいのかもしれない……

でもこの解釈で書いてしまいましたー

おかしいのであんまりツツコミを入れないで下さい……（笑）

あと7・のパワーバランスが崩れて時空が歪んだため

10年ピッタリにタイムワープ出来なかったんですけどー

入江君が計算して時間を知ってるってことにしました……（笑）

まあ笹川了平が入れ替わる時に入江君時計を持っていたので

正確な時間を計算してたと思うんですけどね

それと白蘭を倒した後に過去に戻った瞬間から

未来の世界と原作の世界は完全に繋がらなくなるはずですが

未来の世界では地殻の影響は受けてないので……

だから未来の世界のツナ君の日記が一瞬だけ出て消えたんだと思います

過去の世界に戻ってそこから

また新しく「もしも」の世界が作られて

いろんな未来が出来たと思います

それを証明するのが継承式編で10年後のランボが最後の方で

VGの使い方を思い出したって言ってますのでー

地殻の影響を受けた未来からきたからだと思います

これは……多分あつてると思います……

で、これに主人公が入ってきます

少し原作とずれてる感じになります

まあ雲雀さんと付き合ってるのはずれまくりですけどね

あ、ちなみにリング争奪戦の前に付き合ってたので

もちろん10年後の雲雀さんと付き合ってる設定で書いてますの  
で……

10年後の雲雀さんはすごいですよ（笑）

10年たってますからものすごく主人公に甘いですが（笑）

ちなみに未来編より甘い話は小話で書いています

なので、これは糖度は最大レベルではありませんw  
後、未来編終了が1つのキリになっています

最初は未来編までの予定でした

でもリクエストがあったため続きを書きました

なので、未来編終了は少しキリがいいです

す  
しかしー！継承式編終了で読むのをやめるととてもキリが悪いで

す  
そこまで行くと虹の呪い編まで見たほうがいいかも？

判断は任せます

さい  
まあ駄文なので読む気がなくなればいつでもページを閉じてくだ

さい  
本当にすぐやめてくださいね

ストレスがたまるだけですよー

では次から未来編入りますので駄文を覚悟してください♪

解釈がおかしいのはツツコミいけないで下さい♪

未来へ (未来編)

おなか減ったなあ……

今日は書類してていつもより遅くなったしね……

まあまだ夜じゃないから

雲雀先輩に送ってもらうのは断ったけどね

早く家に帰ってご飯を作ろう……

ん？

私の家の近くであやしい気配がする……

でも素人だよなーこれは……すっごい挙動不審だし……

家がばれるようなへましてないと思うんだけどなー

んーどうしよう……

やっぱり雲雀先輩に送ってもらうべきだった？

でも毎日の送り迎えは悪い気がするんだよ

雲雀先輩に内緒で草壁さんに頼んでもいいけど……

また面倒なことになったら嫌だしなー

よし！この前と同じようなことだったら

ちゃんとお断りしようかなー

周りに誰もいなさそうだしー

力づくで来られたら護身術っていうレベルで倒しちやえ♪

とりあえず後ろにまわろう……

流石に正面から倒しちやまずいと思うしね

あれ？子ども……？

後ろ姿しか見えないけどどう考えても子どもだよね

まあ子どもっていつても私と同じぐらいの年かなー

でもどう考えても弱そう…… (笑)

身体が細いし……筋肉がないように見える

んー……直接聞いてみるか……

ツンツン

「うわっ!!」



わき腹をつついただけなんだけどなー

「どうしたの？」

「うわああああ!!」

バタツ

えええええ!!!

声掛けただけで……気絶したよ……

私なんか変なことした……?

って……この子……しまったー……!!!

とりあえず……部屋に運ぼう……

このままはまずいと思うし……

「あ、起きた？」

「ご、ごめんなさい!!!」

あ、頭にかけてたタオルが落ちちゃったよ

また謝ってるなー

「えっと……こっちこそごめんね……」

その紙を見ちゃった……」

あ、顔が真っ青になった

「んー……私にそれ当てないと

君のヒミツがばれちゃうんだよね？」

だったら当てていいよ？」

「え!?!」

「そのかわりなんだけど……」

ちよつとお願いがあるんだ……」

「う、うん」

「私が隣の部屋で1人で当たるから5分ほどしたら

そのバズーカを回収して部屋のカギをしめて

ポストの中に入れてもらってもいい？」

「それだけでいいんですか……?」

「いいよー」

あ、でもちよつと待つてね」

雲雀先輩に手紙を書かないと心配しそうだし……

「は、はいー」

この子つてあの子だよねー

絶対そうだよねー

とりあえず書いたし……これで大丈夫かな……

「あ、ケイタイ持つてる？」

「持つてますけど……」

「えっと、さっきの紙に載つてたー

この人いてるでしょ？」

「はい」

「この人がね……多分1番、当てるのが大変だと思うの」

あ、また顔が真っ青になった……

「だから私がちよつと協力してあげる」

「え!?!」

「でね、この書いてる時間より3分ぐらい前から準備して

もし見つかったら今からケイタイに録音する声を

急いで再生してくれるかな？」

「わ、わかりました」

「これでいいかな？」

君には意味がわからないかもしれないけど

多分これで大丈夫だよ」

「あ、ありがとう……」

「いいよー

その紙見てたらどう考えても被害者でしょ？」

「そうなんです……」

うわーかわいそうに泣きそうな顔をしてるよ

「でしよ？」

あ、バズーカ当たる前に自己紹介してから別れよつか？」

「は、はい

僕、入江正一と言います」

だよー

気絶された時に本気で失敗したと思ったもん

「入江君ねー

一応その紙にも書いてるけど……風早優っていいます」

「風早さん！」

「なあに？」

「あ、ありがとうございます！」

よしよしー

「入江君も頑張ってるねー」

「は、はい！」

さて、隣の部屋にいつてヴェントになつて行こうかなー

それにしても……さっきの紙みてたら……

私リポーン君の次みたいだね……

そういえばリポーン君が動けなる

装置のことも書いてあつたけど……

私にはなんで使わなかったんだろ？

まあいいか♪

未来に行きますかー♪

## 未来の世界 1

んーここはどこだ？

私の家じゃないのはわかる

でも普通の部屋っぽいなーまあ広いけど……

私はさっきまで何か飲んでたのかな？

ソファーに座ってるし机の上にコップがあるしねー

まあとりあえず……棺桶じゃなくて良かった！（笑）

未来に来て棺桶とか嫌過ぎる……ツナ君ガンバレ（笑）  
!?

後ろに誰かいる……

「優、殺気おさえなよ

僕だよ」

あ……ちよつと大人っぽい声になってるけど

私が間違うはずがない……

「雲雀恭弥か？」

「そうだよ」

1人しかいないみたいだしフードをとるか……

バサッ

「私を見ても全く驚かないってことは

黒幕は雲雀先輩だったんですね

説明してくださいよ？

入江君私にばれて顔真っ青にして倒れたんですからー」

「入江正一から聞いてたよ

昔、バズーカを当てた時に手助けしてくれたって」

「そうですかー

黒幕が敵だったらどうしようかと思いましたよ」

いや、知ってたけどね

「どうして敵じゃないと思ったの」

「それはですねー

~~~~~なので

味方の可能性がものすごく高いと思ひましてー
「なるほどね」

「はい♪」

協力したので説明してくださいね？」

「そのつもりだよ」

.....

やばい……後ろ向くのが……ドキドキしてきた……

マンガで知ってるけど……

現実では多分破壊力がすごい思う……

つてか、私はそんな気がするから振り向かなかったけど

雲雀先輩はなんで私に姿を見せないんだろう？

まあいいか……

深呼吸……深呼吸……

よし!!振りむこう!!!

／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／／

「優？」

「……あ……あの……／／／／」

「この時代の優が説明するのは

最低でも1日たってからにしてって言ってたよ」

「……………それで……お願いします……／／／／」

……やばい!!!

今、説明してもらっても全く頭に入らない!!

……未来の私はえらい!!!

その通りだよ!!

雲雀先輩は未来の私に言われて姿を見せなかったんだ!!

未来の私は本当にえらい!!!

姿を見せていれば絶対説明できなかつたよ!

……………／／／／／

カツコよすぎる……

そりや髪型とかの見た目は原作通りだけど……

なんというか……トゲトゲした感じがない

漂ってるオーラが優しいんだよ

それに大人の色気ってこんなにあるのか!?

……そうか

マンガでは……女の影が全くなかったけど……

私が入ってるから増えたのかも……

あ、その前に私って未来でも雲雀先輩と付き合ってるの？

「優」

うう……名前を言われるだけでドキドキする……

「……なんですか……？／／／」

「かわいい」

?!?!

!!よつと待つて……

こんなこというキャラじやなかった!!!

10年間に何があったの!?!?!

「……えつと……その……!?!?!」

どうしたんですか……？／／／」

「優の反応が面白いから」

……つまり……からかったのね……

そりや面白いだろうね

だってモジモジしてたもん

でもこれは流石に……

「……ひどいです……」

初めて言われたから凄く嬉しかったのに……

……笑った……／／／／

うわー私って単純だ……

すねてた気持ちが一瞬で吹き飛んでしまった……

ちよつと待った……

私、未来で生きて行く自信ない!!

違う意味で心臓止まるかも……

「嘘はついてないよ」

／／／／／／／／

／／／／／／／／

／／／／／／／／

やばい……死ぬかも……

「……雲雀先輩」

「なに」

「あんまり……いじめないでください……」

これ以上言われたら……

私、心臓が止まる自信あるよ……

あ……笑った……／／／／／

「そうだね」

「ありがとうございます……／／／／」

「その呼び方 懐かしいよ」

「へ……？／／／」

「優に雲雀先輩って呼ばれるの

久しぶり」

……未来の私は……

雲雀先輩のことなんて呼んでるの?!?!?

聞きたいけど……聞かない方がいい気がする……

「そうですか……／／／」

「そうだよ

……お腹すいてない？」

そういえば……結局食べてないけど……

「……なにも食べれないかもです……」

「どういうこと」

「……その……あの……／／／」

緊張しすぎて……喉が通りません

「なに」

「……緊張して……／／／」

あ……笑った……／／

やばい……本当に死ぬかも……

こんなにも未来の雲雀先輩が笑うとは思わなかった／／
きゃー！！隣に雲雀先輩が来たー！！！！

同じソファーに座ってるー！！！！

「僕が怖い？」

「へ？」

なんでそう思ったんだろう？

私は緊張してるだけなのに……

「僕は10年後だからね

過去から来た優からすれば知らない人と一緒だ」

「そ、そんなことないですよ！！

少しは戸惑うかもしれませんが……

ドキドキする感じが一緒なんです／／

「……そう

少しこのままでいようか」

「はい／／」

隣に座ってただけで特に何も話してないんだけど……

いや、何度かこっちを見て笑うけどさ

でもそれが良かったのか少し慣れてきた……

「……今日はもう寝なよ」

あ……雲雀先輩が行っちゃう……

何も話さなかったし面白くなかったよね……

私1人幸せだったしね……

あれ？ドアの前でたってる？

うわーまた笑った……／／

「そこで寝るのは身体に悪いよ

部屋に案内するよ」

ソファアで寝ると思っていたのは私だけだったみたい
寝る場所に案内するために席をたつたのね

「あ、はい」

ついキヨロキヨロしてしまうなー

なんか凄いところだなー

普通の部屋と思ってたのに違うかったよ

ドアが何個もあるしここはアジトなのかな？

でも私が知ってる雲雀先輩のアジトじゃないんだけどなー

まあいいや……

明日にいろいろ説明してもらおう

「優はそこの部屋で寝なよ

僕はその隣の部屋で寝てるから

何かあれば声をかけてよ」

あ、一緒じゃないのね

最近一緒のイメージがあったから違和感があるなー

「僕はもう子どもじゃないからね

何するかわからないよ」

何も言っていないのに……

……

ちよつと待って……それって……／／／／／／／

「おやすみ」

「……お、おやすみなさい……／／／」

……最後に爆弾発言された

未来の世界 2

さつきから名前を呼んでる気がする……
でももう少し寝たい……

「起きなよ」

だから眠いの……（怒）

「優」

「?!?!?!」

「……お、おはようございます……／＼／＼」

……耳元で呼ばないでください

心臓に悪すぎる……一瞬で眠気がとんだよ……

「やっぱりこの起こし方が1番はやいね」

／＼／＼／＼／＼／

「……雲雀先輩……」

朝から……いじめないでくださいよ……」

あ……笑った……／＼／＼／

「ご飯持ってきたよ」

「え!? すみません……」

最悪だ……寝てて何もしてないよ……

これは落ち込む……

「問題ないよ」

それにどこに何があるかわからないよね」

「……そうですね」

手伝おうとしても

何も分からないし邪魔になるだけだ……

それをわかってるから雲雀先輩は起こさなかつたんだ
じゃあ気にしなくていいか……

久しぶりに雲雀先輩の料理を食べたよ

何度食べても美味しいよねー

雲雀先輩って出来ないことってないのかな……
なんでもできるよねー

でも出来るのに私の料理を食べるよね？

うーん……それは嬉しいかも……

「優、今日は大丈夫？」

そうだった

話を聞かないといけないんだ……

「た、多分……大丈夫です……」

「そう」

よし！ドキドキするのはおしまい！

真面目に聞かなければ!!!

えーつと……とりあえず過去からきたツナ君達が

丸い装置を目指しながら強くなつて

白蘭を倒すつていう流れは一緒みたいだねー

7・を集めるためにアルコバレーノが死んだのも一緒だ

でもいろいろする前に私の情報をかなり集めてたみたい

私のおしゃぶりがほしいんだらうねー

もちろん風のボンゴリングも狙つてると思うけどね

それにしても気になることがいっぱいある

まあその前に……

「あのお私に全部話してもいいんですか？」

入江君が味方で白蘭の能力も教えてもらったんだけど……

いや、知ってたけどね

まあバズーカ当てる計画をたてたのは

この時代のツナ君達と思つてたから

原作を理解出来てなかったからびっくりしたけど……

「い、いよ

全部の情報を教えた方が安全だからね

それにこの時代の優が全部話した方がいって言った
僕もその意見に賛成だよ」

まあ未来の私は知っていけば話せるから
精神的負担を減らしてくれたんだと思うけどね

「そうですかー」

でも私は何も知らないふりしたほうがいいんですよ？」

「そうだよ」

「了解です」

あ、入江君は私の正体知ってるんですよ？」

「知ってるよ」

それもそうだよね

未来の私もこの計画に参加してるんだからね

「最近始まったボンゴレ狩りって

風早優も対象なんですか？」

「そうだよ」

まあそれは予想してたけどね

だってツナ君達と友達だし雲雀先輩と付き合ってるしね

「もしもの時を考えると……」

私はヴェントで行動した方が良いですよね」

「そうだね」

「そういえば……すっごくい疑問が……」

この計画には関係ないんですけど……」

「なに」

「私の使命って知ってますよね？」

「知ってるよ」

「風のボンゴレリングは

壊してないですよね……？」

「そうだよ

でも優のボンゴレリングは

表向きは壊れたことになってよ

知ってるのは僕と沢田綱吉だけだよ」

なるほど……

「未来の私は持つてるけど使つてなかった
つてことですねー」

「そうだよ」

「理解しましたー」

次は7・ポリシーの中には

風のリングとかは入つてないつてことですよね?」

数足りてないんだよねー

原作と一緒にだねー

「そうだね」

「私の指輪はずつと封印されてたしー

違う意味があるからかな?」

「そうかもね」

「次は……白蘭さんつていう人が私を狙つてる理由は

私が風のマーレリングを持つてることを

知つてるからですか?」

「……それはわからない」

「え!」

じゃ、なんで私を捕獲しようとしてるんですか?」

マーレリングを持つてるから

白蘭さんの守護者にしようとしてるんじゃないの?

そうじゃないと捕獲の意味はないと思うしー

「……いろいろ考えられるけど……」

いろいろ? まあいいやー

「風のリングはこの世界で発見されてるけど

使えるのは優だけだからね」

……はい?

今、雲雀先輩はなんて言った?

「もう一度……聞いてもいいですか……?」

「はあ……」

いや……溜息つかないで下さいよ

「優しか風の波動持つてる人いないから」

「私って……ものすごくレアな存在ですか……？」

「そうだよ」

他のマファイアもヴェントのこと探ってるよ」

「それは……面倒なことになってますね……」

「そうだね」

未来の世界 3

他のマフィアが私のことを探ってる……
そういう状況になったら私はどうする？

「……私は風早優として

行動してる時間の方が多かったみたいですね」

「そうだよ」

まあそうだよねー

私は面倒なことは嫌いだし

風早優で普通に行動したほうが楽だよ

「つまりー

風早優として雲雀先輩と行動してたんですかー？」

「そうだよ

僕たちは匣の研究と調査をしてたんだよ」

あーそういうええばそうだったね

「へえー

そうなんですかー」

「僕たちが調べた結果では

匣兵器ができたのはすべて偶然だよ」

全て偶然なんてありえるわけないよねー

「それは白蘭さんっていう人の能力が

関係してそうですねー」

「そうだね

でも風の匣兵器だけは作られなかった」

「はい？」

「他の匣兵器は偶然が頻繁に起きて開発されたのに

風の匣兵器だけは全く開発されなかった」

「えっと……つまり私は匣兵器ないんですか？」

……密かに楽しみにしてたのに!!

いや、そんなことより……

これからの戦って行くのが辛いじゃん!!

そりや戦いたくはないけど……

みんなを守る力は最低限ほしいんだよ

「あるよ」

「え!? でも開発されなかったって……」

「僕にも言えない人がいて

アルコバレーノがばれないようにする袋や

今までの武器とかもその人が作ってくれて

匣兵器も作ってくれたって僕は聞いたよ」

……神様だ!!

神様が作ってくれたのか!!

そんなこともできるの!?

というか、刀をコンパクトに出来る時点で

匣兵器ぐらい作れるか……やっぱり天才だ……

「心当たりあるみたいだね

優以外には作ってくれないって聞いたけど」

「そうですねー

あの人は天才ですけど

私以外には作ってくれないですね……」

私以外の人には手助け禁止だしねー

「僕はその人にもものすごく興味があるんだけど」

「……雲雀先輩でも

調べることは絶対出来ませんよ……」

「この時代の優も同じことを言ったよ」

……絶対無理だもん……

話をかえよ……

これ以上この話をして無意味だし……

「質問ばかりで悪いんですけど……

この時代ではアルコバレーノは

死んじゃったんですよね?

なんで私は生きてたんですか?」

「制御だよ」

「へ？」

「その袋のおかげで全く非7・線の影響を受けてないよ」

「へえー」

「だから非7・線っていうんですねー」

「そうだよ」

もしかしてこの世界に呼んだ人が

私がああ3つを守るため死なないようにしたのか……

あれ？なんかおかしい気が……

いや、絶対おかしい……!!

「ちよつと待つてください!!」

なんかおかしいです……」

「気付いたみたいだね」

雲雀先輩のこの反応って……やっぱり!?

「せ、整理する時間ください……」

「いよ」

神様と話をしないと……おかしすぎる……

「飲み物でも取りにいつてくるよ」

「あ、すみません……」

未来の世界 4

神様ー!!!

話を聞いてたー??

『聞いてたぞ』

なにがおかしいんだ?』

そうなんだ……

なにかがおかしいの……

……その前に私以外に風の波動の人がいないみたい

『だろうな』

え!?

神様は知ってたの!?

『最初に説明しただろ……』

増えた3つを扱えるのは優だけだつて』

あ……そっか……

風の波動が流れる人がいたら扱えるね……

そういう意味だったのか……

でもこれでおかしいのが確信に近づいたよ

『さつきから言ってる

おかしいつていうのはなんだ?』

あの……白蘭さんの能力つて

パラレルワールドを共有するでしょ?

『ああ』

でも……私の正体知らないんだよね

『そうだな』

風早優が最近ボンゴレ狩りにあったからな』

それっておかしくない?

『言われてみれば……』

つまり……私つて他のパラレルワールドでも

正体を隠して白蘭さんから逃げ切ってるんじゃないの?

『そんなことあるのか?!』

多分だけど……可能性あると思う……

私はこの世界に来た時点で
いろんなパラレルワールドに
存在することになったんでしょ？

『そうだな』

この世界ではリング戦の時に

あほの神のせいで世界のバランスが崩れて

その分をあの3つでバランスをとってるって聞いたけど

他のパラレルワールドでは

もっと早かったかもしれない……

『どういうことだ？』

例えばツナ君とリボン君が会わない世界だったら

原作のことは気にしなくていいよね

『そうだな』

でも私はあの3つを守らないといけないのは

かわらないと思わない？

『あーそうだな』

そして原作と違う世界を経験しても

原作を知ってるから白蘭さんの能力は知ってるよね

つまり私の正体がばれたら他のパラレルワールドでも

危険になるってわかってるでしょ？

『確かに……それはありえるが……』

そんなこと可能なのか？』

私も絶対っていうわけじゃないけど……

証明として言えるのは

私の正体を知らないっていうのがおかしいよ

『確かに変だな……』

うん……

それにね……もう1つおかしいことがあるんだ

『なんだ？』

私が非7・線の影響を受けてないのは

私をこの世界に呼んだ人のおかげでしょ？

『そうだな』

制御されたからな』

つまりこの世界に呼んだ人は白蘭さんに

私が捕まって死んだりしたらまずいと思ってるんだよ

だから他のパラレルワールドでは

もっと早く私を呼んだ理由を教えってる可能性があるんだよ

例えばこの世界は原作と違う世界ということを

先に教えてもらってー

原作の世界が白蘭さんを倒すまで

この3つを守り続けろって感じで……………

後、私には白蘭さんを助けるなって言っただってことは

他の世界では白蘭さんから逃げろって言ってるかなって……

でね、守るためには正体隠した方がいいって

普通に思わない？

『……………確かに』

この世界の優も同じこと考えたしな』

そうだよ

だから白蘭さんを倒すまで正体ばれないように

逃げることを考えてるはずだよ

他のパラレルワールドでは

私の特殊能力と神様の力で逃げ切ってるはずだよ

『なるほど……………』

俺の力で記憶のすり替えもできるしな』

そうそうー

すり替えがあれば大丈夫の可能性が高いんだよ

で、逃げ切ってるってことは

どの世界でも私しか風の波動を持ってないでしょ

つまり風の波動がどうなのか知らないから

匣兵器が出来なかったんだよ

今考えると…………チエルベツ口が私の顔を知らなかったのは

フリじゃなくて本当にわからなかったんだよ
だから白蘭さんに捕まってる証明になるかなって……

『確かにこれでつじつまがあう……』
だよね？

まあ他のパラレルワールドのこと考えても
私には正しい答えがわからないから
考えても意味ないから考えるの止めるよ
私は原作の流れの世界にいるしね……

『そうだな』

とりあえず……もう1度雲雀先輩と話すよ
『そうだな』

雲雀も知ってるみたいだな』

未来の世界 5

ガチャ

「ちようど帰ってきた!!」

「雲雀先輩!!」

「もう時間いららないの?」

「多分……整理できました」

「そう」

「私って……他のパラレルワールドで……」

白蘭さんっていう人から

正体隠して逃げ切ってるんですね……」

「みたいだね」

「ですよね!」

白蘭さんっていう人がヴェントを捕獲しようとしてて

最近まで風早優を探してないのがおかしいですよね!」

「そうだよ」

「白蘭さんっていう人が

ヴェントを狙ってる理由って……」

「入江正一も詳しくはわかってないみたいだよ」

そこは知っててほしかったけどしょうがないか……

だから雲雀先輩はそれはわからないって言ったのか……

私を殺さずに捕獲……ここがやっぱり重要だよね

うわー本当にいろいろ考えられる……

「そうですね……」

考えられるのは……さつき雲雀先輩が言った

レアな風の波動を持つからっていうのもありますよね」

私を殺せば風の波動がいなくなるからね

白蘭さんはどの世界にも私しかいないのはわかってるし……

「そうだね」

「後は私が言った……」

マーレリングを持つてるのを知っていて

守護者にしたいっていう可能性もありますよね」

これは普通に戦力としてだね

「そうだね」

あ、私の特殊能力を狙ってる可能性もあるよね

特殊能力のことを知ってる可能性は高いと思うし……

これはこの時代の雲雀先輩は知ってるのかな？

まあ黙っておこう……

知ってたら雲雀先輩から言うと思うし……

「私の仲間の天才の技術もありえますね……」

匣兵器を作ることが出来るのは絶対ばれてるし……

白蘭さんの能力を使ってやっと出来た匣兵器を作れるんだ

この技術はほしいと思う

まあ協力者がいるのを白蘭さんが知ってるかはわからないから

私を作ったと思ってるかもしれないけど

どっちにしても風の匣兵器を持つてる私は

何かを知っているってわかるし……

「それもあると思う」

「後は……私の使命の理由を完全に知ってて

白蘭さんが理想の世界を手に入れたら

バランスを崩して壊せる可能性が

あるからっていうのもありえますね……」

「でもそれはしなないと思うけど」

「当たり前です……」

バランスを壊したらどうなるか想像つかないですもん

……危険すぎます……

だから他のパラレルワールドでもしてないはずです……」

「僕もそう思うよ」

「後は……使命は知らないけど……」

私を持つてる3つになにか力があると思ってる……

私を捕まえようとしてるか……」

「僕は使命の内容は知らないと思ってるよ」

「なんでですか？」

「使命の内容を知っていたら

ヴェントをこの時代に呼ぼうとしないはずだよ」

「あ……言われてみれば……」

「あれ？ もう一度確認なんです……」

「未来の入江君と私が過去の入江君をつかって

白蘭さんを倒すためにみんなを当てたんですよね？」

「さつきそう聞いたもんね

まさかバズーカ当てる計画の実行犯に

私の名前があるとは思わなかったけど……（笑）

「そうだよ」

「それって白蘭さん知らないことで

あつてるんですよね？」

「知ってたからおかしいもんね

「あつてるよ

入江正一が10年バズーカを

研究して当てて呼んだことになってるよ」

「ということとは……」

「入江君が風早優で当てたんじゃなくて

ヴェントに当てたってことにしてるんですか？」

「そうだよ

「僕も詳しく聞いてないけど

呼び出して当てたっていう嘘の報告をしてるよ」

「納得しましたー」

「えっと……白蘭さんが私を狙ってる

1番可能性があるのは……」

「私が持つてる3つになにか力があると

思ってるからじゃないですか？」

「多分……特殊能力も興味あると思うけど……」

「そうだと思う」

「ですよね……」

私が風のアルコバレーノで

風のボンゴレリングを持つていたら

風のマーレリングを持つてる可能性が

あるって普通思いますよね……

7・と同じと思いますよね……」

「そうだと思う」

でも過去から来た優が持つてるって

知ってるかはわからないけどね」

「それもそうですよね……」

もらったのは本当に偶然でしたし……

白蘭さんが何考えてるかよくわからないです……」

「そうだね」

「私が捕まったら……どうなるんでしょう……」

さつき雲雀先輩から聞いた……

ユニちゃんっていう子と一緒に……劇薬かな」

「そんなことさせないよ」

「そうですよね！」

他の世界で私が逃げ切ってるし大丈夫ですよね!!

私は風で人の気配よめますし頑張ります!!」

「僕がついてるよ」

うわー凄く頼りになります！

「はい!!」

とりあえず白蘭さんが何を考えてるかわからないので……

私は何も考えず逃げることにしますね?」

「……優」

ん?どうしたんだろ?

反対だったのかな?

「何があってもだよ」

「へ?」

「危ないと思ったらすぐ逃げる」と」

なんか凄く真剣な顔で言ってる……

元々私は危ないと思えばすぐ逃げるタイプだから
心配しなくても大丈夫だと思っただけ……

「えっと……わかりました」

「ありがとう」

「ええ!？」

なんでお礼言ったの!？」

「……今のは僕のがままだからね」

ふむ?今のどこがわがままだらう?

「わっ／＼／＼」

考えていたらいつの間にか頭の手が……

雲雀先輩に頭をなでられてる……／＼／＼

き、緊張して動けないよーー!!!

匣兵器

緊張して固まった姿を見て笑ったよ……

……私の反応で遊んでる気がする

「優」

「なんですかー」

少しすねた言い方するのはしようがないと思う

「これを渡しておくよ」

あ、匣兵器だ!!

うわー何が入ってるんだろう!!

すつごく気になる!!

あれ?また雲雀先輩が笑ってるよ

「すねなくていいの?」

……そうだった

さつきまですねてたんだ

匣兵器を見た瞬間にそのことを忘れたよ

というか……私のツボを知りすぎだよ……

絶対、さつきのは私がすねるとわかっててやったもん

……これから雲雀先輩にからかわれ続けるのか……

「手を出して」

「あ、はい

あれ? 3つもあるんですか?」

私は戦うのが好きじゃないし

ボンゴレ匣もあるから作っても

1つか2つと思っただけど……

「これは使わなかったよ」

ん?なんで作っただんだけ?

「僕は少し用事してるから」

あ、すみません

忙しいのに説明ばかりさせて……

「わかりましたー

私はこれを開けてみますね」

「わかった」

神様ー

とりあえず何も考えず逃げることにしたよー

『そうだな

考えてもわからないしな』

うん

原作のことを考えると……

原作と違うのは風のマーレリングだけだけど

それは私が持つてるから

主力のメンバーって変わらないと思うんだよねー

『ああ

同じだと思う』

つまり私を捕まえようとしてる分

Aランク以下の人達の数が増えてると思うだよね……

『俺もその意見に賛成だ』

だよね……

凄く面倒な気がしてきた……

『匣は開けないのか?』

そうだねー

3つあるんだよねー

『まずメインの2つ開けてみるよ』

覚悟を炎にだよねー

『優の場合はわかりやすいよな』

そうだねー

ツナ君と一緒にだもんね!

うわー楽しみだ!!

ボオッ

おーすごいすごいー

『……炎が大きすぎるだろ』
そうだねー

神様が創ったから壊れないとは思うけど
出し続けなくていいし抑えるよ

『ああ』

では1つ目ー

えっと、この穴に炎を注入するんだよね？

カチッ

おー！逆刃刀だー！

『……それに喜ぶことなのか？』

加速の属性を考えると

銃とかのほうがいいことに気付いてるんだろ？』

それはそうだけどー嫌なの

『……それもそうだな

優の信念に反するしな』

うん！

『とりあえず炎をまとつてみるよ』

ボウッ

『流石だな

もう使いこなせてるな』

簡単だもん

風をまといながら今まで練習とかもしてるんだよ？

それが死ぬ気の炎になっただけだもん

『それもそうだな

元々才能あるしなー』

だね

では2つ目ー

カチッ

スケボーだ!!!

『これはいいアイデアだな』

ん？そうなの？

車輪の回転数を加速させて

スピードはかなり速くなると思うけど……

そんなにいいアイデア？

『そうだな』

まず見た目で地面から離れないという

イメージがもてるだろ』

そうだねー

『でも優は空を飛べるんだから

空を飛びながらスケボー使えるだろ』

あ、そうだねー

スケボーぐらいだったら

制御してても一緒に浮かべれるよねー

そして風の上を走るって感じかな？

『そうだな』

これで油断を誘うことも出来るしな』

なるほどー

『後、足から離れるようになってるのもいいな』

そうだよねー

別に足にふつつける必要ないもんね

スケボーだけを風で動かすこともできるから

フェイクとかにも使えるかもー

『そうだな』

今、考えたら……

私って元々追われてるし……

逃げることを考えてるからこのスケボーは重要だね

『そうだな』

捕まらないようにって考えたんだろ』

だよねー

それに私戦うの嫌いだから

戦わなくてよかったら逃げちやうし♪

『ぴったりだな』

ね♪ 今、思ったら加速でスピードを出しすぎても
風を操れるから空気抵抗がないしー

暴走したとしても風を操って操作したら問題ないしねー
『まします』

逃げるために作ったって感じだな』

だよねー

まあ一瞬で気絶させるっていうのもあると思うけどー

『優にぴったりだな』

うん！

さて、問題はこれだ……

使つてないならなんで作つたんだろうね

『とりあえず開けてみるよ』

カチツ

『……なんだこれ』

うわー殺傷能力ゼロだね!!

『……そうだな』

銃といえば銃だが……完全におもちやだろ』

あ!!

『どうした?』

未来の私ってさー

多分私と同じタイミングで使命を知って

原作じゃないって教えてもらったんだけどー

ボンゴレ匣が出来た時点で

原作に出てくる未来ってわかってるはずだよね?

『言われてみればそうだな』

ってことは

これから過去の私に来て

未来編が起るってわかってるんだよね?

『ああ、そうだな』

原作を知ってるからな』

これってさー

使い方によつたらあの人の匣に似てない？

あの時に雲雀先輩が怪我するのが嫌で作ったんじゃない？

『なるほど……』

これで練習でもしてたら……』

でしょ？

殺傷能力はないけど……

スピードはかなり早く出来ると思うよね

『ああ

まあこの匣を使ってスケボーを

使いこなす練習にもなるからちようどいいだろ』

あ、ほんとだー

未来の私は結構考えてるー♪

『みたいだな』

教えてあげようよ

あ、雲雀先輩に会いに行こう

大事な用事があったのを忘れちゃったんだよね
逆刃刀とスケボーも持っていていこうかな？

んー隣の部屋にはいないみたいだし……

最初に会った部屋に行こうかな？

それ以外の部屋に勝手に入る気はしないしね
ガチャ

あ、10年後の草壁さんだー

って……なんで固まってるんだろ……

草壁さんが固まってるのを久しぶりに見た！ (笑)

「えつと……草壁さん？」

「……風早さんですよね……？」

「そうですよー？」

あれ？また固まった…… (笑)

「……もしかして雲雀先輩から聞いてませんか？」

「………なにも」

……教えてあげようよ

「10年バズーカに当たったみたいでー

あ、10年バズーカっていうのは当たれば

10年後の世界と5分だけ入れ替わることが出来るんです
でも、昨日から入れ替わったままで

元の世界に帰れなくなって困ってる状態ですよー」

何も知らないふりして簡単に話せばこれであってるよね？

「………そうですか」

「そうなんですよー

だからここで調べるより

日本の研究施設に行った方が情報を得られるから

明日向かうって雲雀先輩から聞きましたよ？」

「………日本に行くとは昨日の夜に聞いていましたが……」

……教えてあげようよ

ガチャ

「あ、雲雀先輩いいところにー」

「どうしたの？」

「草壁さんに私のこと説明してなかったでしょー」

「そうだよ」

当たり前のように返事をした……

……教えてあげようよ

「もの凄くびっくりしてますよっ」

「知らないよ」

……ひどい

「……どうすれば元の世界に帰れるか

調べるために日本に行くので……

明日からよろしくお願いします」

「は、はい!!」

「まあ多分日本に行く理由は

もう1つあると思いますけどー」

計画をいれたら2つだけどね

「そうだよ」

だよねー

風紀が心配だよねー

「あ、確認したいんですけど……」

草壁さんって……」

「知ってるよ」

うわー質問する前に雲雀先輩が答えた！

やっぱりすごいね……

「そうですかー

じゃあ草壁さんの前では

普通に話しても大丈夫なんですわねー」

「はい

風早さんがヴェントと知っていますので……」

「そうですかー」

雲雀先輩に聞いたんですが……

ヴェントは狙われてるみたいなんですけど……

風早優も狙われてるので

もしもの時にヴェントで行動する方が動きやすいので

明日からヴェントでいきますのでよろしくお願いします」

「わかりました

では……日本に向かう手段を考え直しますね」

「え!？」

ヴェントってそんなに狙われてるんですか？」

「……………そうですね」

狙われてるのはわかってたけど……

ここまで大変なのか……

「哲、明後日の朝には着きたいから」

あ、下の名前で呼んでるんだー

少しは仲良く? なってる?

といっても……群れてないけどね……

だって草壁さんとの距離がすごいもん! (笑)

私は普通に雲雀先輩の近くににいるのになー

「へい」

「すみません……」

「いえ、大丈夫ですよ」

10年前も思ってたけど草壁さんって本当に大人だ……

だってヴェントで行動するって

早めに教えてもらわないと困る内容なのに

文句も言わずに準備するなんて……

……もう少し優しくしてあげようよ

せめて入れ替わったことぐらい……教えてあげようよ

「優、匣を開けたみたいだね」

「あ、はい

普通にあけましたよー」

「そう」

「……流石ですね」

「へ？ 流石って？」

「リングに炎をとすのは

簡単にできることではないので……」

「そうなんですか？

簡単でしたよー？ ほらっ」

ボオッ

あ、また炎が大きいなー

「ワオ！」

「……すごい炎ですね」

「んーどうしても炎が

大きくなってしまうんですよねー」

「問題ないよ」

「そうなんですかー？

まあ雲雀先輩もこれぐらい簡単ですよねー」

「強力なリングがあればね」

「あんまりいいリング持ってないんですか？」

「そうだよ」

そういえば……原作で使い捨てにしてた気が……

雲雀先輩の波動に耐えれないってことだよね

「とりあえず逆刃刀に

炎をまとつてみたんですけど……」

今、まどつたほうがわかりやすいか……

「これで使い方あってます？」

聞かなくてもあつてるけど聞いた方が自然だよねー

ディーノさんがリングの炎について

いろいろ話してたけど聞いてなかったしー（笑）

「あつてるよ」

「そうですかー」

「後……この時代の私って

~~~~~という使い方もしてました？」

「そうだよ」

滅多に使わなかったけどね」

「そうですねー」

危ないですし、スキも出来ませよねー

どこかで練習したいなー……」

力の調節したい……」

「沢田綱吉のほうのアジトで場所借りなよ」

「あ、そういう場所あるんですか？」

知ってるけどね

「あるよ」

「じゃ、そうしますー」

雲雀先輩の研究施設とツナ君のアジトって近いんですね」

知ってるけどね

「……そうだよ」

うわー……嫌そうに答えた……（笑）

## 安心

草壁さんが明日の準備のために出掛けたしー

雲雀先輩に相談しよ……

草壁さんの前では言えなかつたし……

「あの……買い物したいんですけど……」

「ダメだよ」

「……どうしてもですか？」

「風早優も狙われてるって言ったよね」

……雲雀先輩の前でもはつきり言えないのに！

「その……女性にはいろいろ必要な物が……」

この時代の下着はあわないの……

昨日、部屋でお風呂に入って困つたし

また風を使って乾かしたりしたよ

こつちに来る時に持ってきたら良かったな……

「あるよ」

「へ？」

「この時代の優が用意してたよ」

あ、なるほど

未来の私は偉いねー

「それは助かりました……」

まあ用意してたことを

雲雀先輩が知ってるのが少し抵抗があるけどね

でも伝えないと私が困る内容だったからしよがないか……

「ケイタイも一緒に置いてるって言ってたよ」

「そうなんですか？」

「寝た部屋に置いてるはずだよ」

「昨日は……そこまで頭がまわらなくて……」

衝撃がありすぎて……（笑）

「それに今日はいろいろ考えてたので……」

「そう」

「ちよつと見てきますねー」

あ、これかな？

……すごい……いろいろ用意してくれてるよ

おお！小さくなる抱き枕まである！（笑）

これは移動用なのかな？

だってこの部屋にも抱き枕があるんだもん

あれ？ケイタイが2個？なんでだろ……

それもほとんど違いがないんだよねー

んー雲雀先輩に聞いてみよー

助かった

まだいてたよ

「雲雀先輩ー」

「なに」

「ケイタイが2個あるんですが……」

「こつちが風早優でこつちがヴェント」

「え!?! わざわざかえてたんですか？」

「ヴェントの方は

盗聴や足取りが全くわからないようになってるからね」

「……なるほど」

確かにそれは必要か……

「それも作ってもらったって聞いたけど」

あー神様ってすごい……

このケイタイは絶対盗聴とか出来ないんだろうねー

「そうですかー」

後で作ってもらおう……

未来から帰ってきた時のために……

「……優」

「はい？」

「……………気をつけてね」

「なにがですか？」

「狙われてるのを忘れないでよ」

「10年たつても心配性はかわってないのか……」

「わかってますよー」

「ちゃんと逃げますよー」

「そう」

「心配しなくても大丈夫ですよー」

私の匣兵器のスケボーは

逃げるために作られてるんですからー」

「そうだね」

「はい」

それに戦うのが嫌いなんでちょうど良かったですよ」

「優がヴェントになるときは

知り合いに会いに行くときぐらいだったよ」

ん？ヴァリアーやクロームちゃんのことかな？

「へえーってことは……………」

私はボンゴレの仕事あんまりしてなかったのかな？」

「……………してたよ」

「そうなんですか？」

「……………そうだよ」

あれ？ちよつと機嫌悪くなった……

なんでだろ？

やめとこう……これは聞かないほうがいい

まあ未来の私はみんなの役に立ってるって

わかったただけ良かったしねー

……

「どうしたの？」

あ、顔をじーつと見てたのがばれたみたい

「やっぱり雲雀先輩は雲雀先輩ですね」



「？」

「少し安心しただけです」

よくわかってなさそうだけど教えないー

「そう」

聞かれなくて助かった（笑）

だって、草壁さんと話してた時の雲雀先輩は

10年前と変わってないんだもん

ひどいと思ったけどなんか凄く安心したんだよねー

「雲雀先輩」

「なに」

「……やっぱりいいです」

聞きたかったけど聞く勇気が出なかった……

あー失敗したかも

途中でやめると無理にでも聞くよね

「わかった」

あれ？聞いてこなかったよ

「優が言いたくなるまで待つよ」

「ありがとう……」

凄く優しくて安心する……

やっぱり10年後の雲雀先輩だったら聞けるかも……

でももう少し勇気が出てからにしよう……

## 未来の並盛 1

「優、着いたよ」

「ふあい……」

んー身体を伸ばしてみたけど

移動時間が長かったからやっぱり硬くなってるね

少しストレッチをしたいなー

「今日は目覚めいいね」

すみません……目覚めが悪い日ばかりで……

ってか、目覚めがほぼ毎日悪いのがばれてるよ

……未来の私はずっと雲雀先輩に起こしてもらってるの？

流星にそれはないと思いたい……

「恭さん」

「なに」

「黒川花から笹川京子に対する救援要請が……」

「頼んだよ」

「へい」

あれ？これってもしかして……

あ、草壁さんがどこかに行っちゃった

「あの……何かあったんですか？」

「SOSがあつたみたいだよ」

「えっと……花から京子ちゃんに……？」

「そうみたいだね」

「……行ってもいいですか？」

もし私のせいで京子ちゃんと花に

何かあつたら最悪だ……

「……はあ……僕が止めても行く気みたいだね」

「ばれました？」

反対されたら雲雀先輩が目を離れたスキに

行くつもりだったけどお見通しだったみたい

「………気をつけてよ」

おおー！許可がもらえるっぽい！

「大丈夫ですよー」

私はそんな簡単に捕まりませんよ」

「……そう」

「それにリングはこのチェーンを

巻いていたら大丈夫なんですよね？

私はリング使わず空飛べて移動出来ますしー

出来るだけ高く飛びますよ」

「当たり前だよ」

空を飛んで移動は当たり前のことだったみたい

あ、そっか

だから一緒に行くって言わなかったのか……

急がなくていいなら一緒に行けばいいもんねー

私の能力は便利だしね

うーん、やっぱり私の能力は便利だなー

スピードは車よりちよつと遅いけど

直線距離でいけるから速いんだよねー

ここらへんでいいかな？

とりあえず京子ちゃんの家近くの屋上にいるけど

うじゃうじゃ怪しいのがあるよ……

つて……あれ？京子ちゃんじゃん！！

あ、花が見えた

つまりー今から合流かな？

……

原作通りに行かなさそうだ……

そうか！

風早優も探してるから人数が増えてるのかも……

「はなーーーー!!」

「……何か顔も幼くなったような……」

やっぱりこれ夢かしら……ここ何日か夢かしら

まあ夢なら夢でいいわ!

にしてもあんた達なにしたの?」

「え……?」

「すみません

あの家のものしりま

ドサツ

危なかった……

怪しい奴が話しかけようとしてるのに

2人とも全く気付いてない……

慌ててこの人の背後に降りて首の急所に入れちゃったよ

それも風を手に纏ったからかなり痛いと思う

鋭く風を纏っていたらこの人はやばかっただろうね

「え!?!」

倒れた音でやっと気付いたんだろうねー

うわー花が大人っぽくて凄くきれいだ……!

〃感動の再会してるのはいいが……

ここは危ないっていうのを忘れるな〃

「京子、逃げるわよ!!」

あ!しまった……怪しい人と思ったみたい

そういえばフードかぶってたよ

〃黒川花 さつき連絡しただろ〃

あ、動きが止まった

雲雀先輩にこのことを聞いてて良かったー

〃沢田綱吉にも連絡が行ったと思うが……

君が連絡したのをある人物から聞いたんだ  
僕はたまたま近くにいたから念のために来たんだ”  
正しくは急いで飛んできたんだけどねー

「……ツナ君のこと知ってるの?」

”知ってるよ

笹川京子も僕と一緒に過去から来たみたいだな”

「え!？」

あ、今ちよつと遠いけど……γが通ったかも……  
微かに光ったのが見えたよ……

”……黒川花

しばらく君の家で笹川京子の保護を頼めるか? ”

「……ええ」

”僕が連れて帰ってもいいが……少し向こうが心配だ”  
こつちが原作かわってるから向こうもやばいかも……  
ツナ君はラルがいるから大丈夫と思うけど……

「向こう?」

”……気にするな

あー君の家までは責任をもって送るから安心しろ”

「……わかったわ」

「あの……この人は大丈夫ですか……?」

”心配するな

少し気絶させただけだ”

まあしばらくは起きないと思うけどねー

「よかった……」

”また来るかも知れないから移動するぞ

僕は君の家の場所を知らないから教えてくれ”

いや……知ってるけどね

10年後も花の家はかわってないやー

「あ、ありがとう……」

京子ちゃんにお礼を言われるのは嬉しいんだけどー  
でもこのいうお礼はもう言われない方がいいよ  
うーん……決めた！

コツン

「え……」

「さっき聞いた内容によると黙って出てきたんだろ？」

「僕は女性を殴る主義じゃないんだが……」

どうせ沢田綱吉のことだ

君のことは心配するけど絶対怒らないよ

だから僕が頭をこつるぐらいいいだろ？」

「……ごめんなさい」

「君にもし何かあったら

悲しむ人が大勢いることを忘れるな」

私もその中の1人なんだから……」

「黒川花 頼んだぞ

もし何か異変を感じればさっきのところ連絡してくれ  
僕にも連絡が入ることになってる」

「ええ」

多分だけど……

まあ私がここに向かっているって知ってるから  
情報が入れば絶対連絡があるよねー

ってか、今思った……

私がツナ君のアジトに電話して伝えたら良かった

雲雀先輩も言えばいいのに……

あーでもツナ君のアジトに誰かいるかわからないし

ヴェントがどこにいるか情報を漏らしたくないのかもね  
んーそこまでする必要があるのかなー

まあいいや……

「また後で」

「ちよつと待ちなよ」

あれ？まだ何かあったのかな？

“なんだ？”

「あなたの名前は？」

“ヴェントだ”

「そう ありがとう」

あ、花にもお礼を言われた♪

“また後で来るよ じゃあな”

## 未来の並盛 2

「京子ちゃん!!」

「ツナ君!!」

「無事でよかった!!」

怪我也なさそうだし……

本当によかったー!!

「ごめんなさい……私……」

「えっ 気にしないでっ」

「ヴェント君の言った通りだ……」

「ヴェ、ヴェントに会ったのー!!?」

なにしてんのー!?

でも良かった!!

優は並盛にいるんだ!!

未来の山本はアジトに離れてて知らなくて

ランボが知ってる可能性があるって言ってたけど

入れ替わっちゃって結局わからなかったし……

「うん。怪しい人に話しかけられた時に助けてもらったよ

何か用事があるみたいで

ここでしばらくいてほしいって言ってたよ?」

用事?

優が京子ちゃんより優先する用事か……

何もなければいいけど……ここは危ないし……

「そ、そうなんだ……」

あ! いいニュースがあるんだ!

ヒバードが現れたんだよ!!」

あ! 優が言ってた用事はヒバードに関係あるんじゃない?」

ヒバリさんに何かあったら優は無茶すると思うし……

「急ぐぞ 沢田!」

そ、そうだ!

行けば何かわかるかもしれない!



「あーごめん黒川……さん もう少しの間  
京子ちゃんをかくまってくれないかな？」  
「ヴェントにも頼まれたから……いいけど……」  
「ありがとう！ じゃ後で！」

「うわー急いできたけど……遅かったかも……  
今すぐ降りないと!!」

「そろそろ吐かねーと

とりかえしがつかねーぞ」

「だ……が……」

「何か言ったか？」

「ペッ」

「……なるほどそうかい」

「あー危ない！」

「獄寺君がγさんに突き飛ばされたよ!!」

「ガシッ!!」

「!?!」

「ふう……間に合った……」

「……彼らをこれ以上傷つけるのは

やめてもらえないか？」

「倒れる前に支えたのはいいけど

「獄寺君が思ったより重かった……」

「……に……げ……」

「更に重くなった……気を失ったか……」

「多分、獄寺君は逃げろって言ったんだらうね

「こんな状態で私の心配をしなくても……」

「……これは珍しいのが来たな」

「……僕のことを知ってるんだ」

「世にも珍しい風の波動を持つヴェントだ  
知らない方がおかしいぜ」

“……そうか”

うわー有名みたいだ……

「だが……」

オレが知ってる情報より……背が低いかな」  
だって過去から来たもん

「本物か確かめさせてもらうぞ」

“……僕は争いごとが嫌いなんだ

彼らをかえしてくれたりいいだけなんだが……”  
獄寺君達がボロボロにされたけど

原作を知ってるせいかな

どうも＼さんと戦う気にならないんだよね……

「……噂通り 戦わず逃げる腰ぬけヤローだな」

うわー確かにそうかも！（笑）

逃げれるなら私は即効逃げるよ

“そうだな”

「ほう

これでも挑発したつもりだが認めるとはな……」

“事実だからな”

「まあいいさ」

お前を逃がす気はないからな

偽物だったら死んでもらうだけだ」

“……今回は僕は逃げないよ”

「やる気になったか」

うわー雷の炎ってバチバチ言っただけで迫力が凄いなー  
でも私にその炎を向けないほうがいいよー

防御に使わないと大変な目にあうと思うよ

ドコオ

やっぱり凄い威力のものが飛んできた（笑）

あ、やっぱり雲雀先輩だー

γさんは防御に集中してるっぽいし  
この間にγさんと離れるべきだねー

「君の知りたいことのヒントをあげよう  
彼らは過去から来たのさ

そのヴェントも本物だよ

僕は愚かじやないから

入れ替わったりはしないけどね」

よく言うよねー

「自分も後で入れ替わるのに……

それも私は自分から当たって来たから

愚かじやないんだけど……

まあいいか……

「……何やらあんた詳しくそうだな……

だがドンバチに混ぜて欲しけりや

名乗るのがスジってもんだぜ」

「その必要はないよ

僕は今機嫌が悪いんだ……

君はここで咬み殺す」

うわー久しぶりに咬み殺すって聞いたかも……（笑）

あれ？なんか原作より機嫌が悪い気が……

あ……下がる時に獄寺君を抱きかかえたんだ

……うん 後ろから抱きしめてるように見えないね

それも現在進行形だしね

だってγさんがこつちに来た時に困るし……

風での移動はは身長が大きい山本君に使ってるしねー

獄寺君……後で咬み殺されないように気をつけて！

## 未来の並盛 3

「んん……思い出したぜ

おまえはボンゴレ雲の守護者 雲雀恭弥だ」

あ、雲雀先輩に注意がいつてるね

あの威力で攻撃されると当然か……

まあ私のことも少し警戒しているけどね

「だったら？」

「おまえにはうちの諜報部も手を焼いててね

ボンゴレの敵か味方か……

だがヴェントには必ず味方をするという

行動の真意がつかめないとき」

あ、私だけは味方なんだー

つまり今まで何度も迷惑かけてるんだらうね

いやーすみません

「だがもつとも有力な噂によれば

この世の七不思議にご執心だとか

匣のことを嗅ぎ回ってるらしいな」

「どうかな」

「得体のしれないものに命を預けたくない

ってのは同感だぜ

で こいつは本当には誰が何のために

どうやって創ったか真実はつかめたのか？」

「それにも答えるつもりはないな

僕は機嫌が悪いと言ったはずだ」

「やはり雲雀恭弥はボンゴレ側の人間だったというわけだな

いざ仲間が殺られるとならば黙ってみてはいられない

もしくは……ヴェントがピンチにだからか……」

「僕は別にピンチじゃないぞ

君は雲雀恭弥のことを何もわかってないな……」

「ヴェントは僕のことわかってるね」

「当然だろ」

彼が怒ってる理由は……並盛の風紀がみだ……汚されてるからと言った方が正しいか……」

後、私が獄寺君に抱きついたのも……（笑）

でももう離れたから機嫌は少し戻ってるはず……

「そっかよ」

ボウッ

うわー戦う気満々だねー

まあ雲雀先輩が戦わなかったら

私が戦うことになりそうだししようがないか……

「任せていいだろ？」

まあ任せないと機嫌が悪くなると思うしね

「いっよ」

「風紀……？ まあいいさ」

敵の守護者の撃墜記録を

更新するのはうれしい限りだ

オレも……男の子なんでね」

うわー戦いが始まったよ

……今の中に治療してもいいかな？

＼さんがこつちを標的にする可能性があるけど

雲雀先輩がそんなスキを作るわけないしねー

あ……救急箱がない

勝手に服ちぎって止血に使うけど許してねー

それにしても凄い音だなー

上ではバリバリ……下ではキンキン……

その近くで治療をしている私……本当に凶太いよ（笑）

ドンッ

何の音？

あ、＼さんがぶっ飛ばされたみたい

さつきより＼さんと離れたよ

多分狙って私と離れたんだろうねー

うーん、もう少し下がってほしかったのかも……  
あれ？誰か来るよ

「お手伝いします」

……なるほど

私の手伝いを草壁さんにさせる意味もあつたのか……

草壁さんが手伝ってくれば

私は戦つてる方にもう少し注意を向けれるもんね

〃助かるよ〃

γさんはビリヤードの匣を出したか……

大丈夫といいんだけど……

「あいにくこのショットの軌道には

人が生きられるだけの隙間はないんだ」

「それはどうかな」

大丈夫そうだね

ボールが当たれば軌道が変わることに

最初から気付いていたよ

「君と似た技を見たことがあるんだ

もう逃がさないよ」

やっぱりあの匣はここで雲雀先輩が

怪我しないようにするために作ったのか……

ん？誰かの気配がするよ

あ、ツナ君登場だー

ここは原作通りだねー

あーあ……γさんがやられちゃった……

「獄寺君!! 山本!!」

「大丈夫 命に別状はありません」

「あ、あなたは……」

「草壁哲也 雲雀の部下です

今、ヴェントが診てくれますよ」

〃応急処置はしたよ

僕の体力もわけたが……

はやくアジトへ運んだ方がいいだろう”

「ゆ……ヴェント!!!」

今、間違えそうになった（笑）

ハイパー化してないとツナ君は危ないね（笑）

”君も過去から来たみたいだな”

「もしかして……ヴェントも?!」

”そうだよ”

「……そっか

だ、大丈夫だった!?

未来の世界はすつごく危険で……」

”怪我はしてないよ

それに雲雀恭弥にこの世界のことは少し聞いたよ

だから彼らを急いで運ばないか?”

「う、うん!」

「待て 負傷者もいる

今 彼らを抱えあの距離を引き返し

ハッチに戻るのは危険だ」

”僕がいるから問題ないよ”

「ヴェントさん今回はいいですよ

急いだ方がいいと思います」

あー良かった

私がいるから使わせてもらえないかな?

って、思ったけど大丈夫だったみたい

”そうか”

「我々の出入り口を使います」

ゴゴゴ

まあ私には最初から見えてるんだけどねー

霧のカモフラージュは私にはきかないみたい

「ヴェント 行くよ」

あ、雲雀先輩に声かけられた

”あー悪い

笹川京子を黒川花のところへ預けてきて  
むかえに行く約束したんだ”

「そう」

あ、ちよつと心配したかもー

まあ納得したつぽいからいいやー

「きつ消えた!!」

「ただこのまま立ち去るには一つ問題が残ってます

雨と嵐のボンゴレリングだ

敵のレーダーに映っているでしょう

ここで反応を消すわけにはいかない」

「僕がついでに担当しようか?」

「そうですね」

「待て! オレも一緒に行く」

「構わないが……誰だ?」

「とりあえず僕の名前はヴェントだ」

「……………オレの名はラル・ミルチ」

「ラル・ミルチだな

行くぞ”

「ああ」

なんで一緒に行くんだろ?

あんまり外に出ない方がいいと思うけど……

でも私はラルがアルコバレーノって

知らないことになってるしな……



## 未来の並盛 4

さつきから無言なんだけど……

本当になんで一緒に来たんだろ？

話しかけてみるか……

〃リングはもう大丈夫か？〃

「ああ」

返事が短いな……

まあいいや

〃じゃ、黒川花のところに向かうぞ〃

「待てー！ 堂々と道を通るな！

こんなにも敵がいるんだぞ

遠回りするしかないだろ!!」

〃問題ないよ

ついてきなよ〃

何も言い返さないなー

まあいいか

広範囲にすれば集中力いるしー

流石、私だね 無事着いたよ♪

「どうやったんだ……」

なんか脱力してるよ

あーツナ君と一緒にいった時は

かなり苦労したのか……

〃僕は風を操れるんだ

風で人に当たるか当たらないかわかるんだ

誰にも会わずにルートを探るなんて簡単なことだ〃

こんなにも広範囲にしようとしたら

微妙な風の量を操るから

すっごい集中力がいるんだけどねー  
制御解いたら楽なんだけどねー  
まあそれはしようがないよね

「……………お前が捕まらないわけだ」

あ、もしかして心配で着いてきたのかな？

他のマフィアから狙われてるって

ラルは知ってると思うしね

「僕は逃げるのが得意なんだ」

「……………そうか」

ピンポーン

「ヴェントだ

むかえに来た」

そういえばツナ君のアジトの入り口知らない…………

雲雀先輩のところから帰ろうと思ったけど

ツナ君のアジトの方が近いよね？

玄関にいれてもらったし

集中力いらさない間に聞いておこう

「ラル・ミルチ」

「なんだ」

「沢田綱吉のアジトの入り口で

ここから近いところはどこか知ってるか？」

「ああ」

「悪いがだいたい場所を教えてください」

「……………知らないのか？」

なんで怪しい目で見えるんだ……………？

「聞いてなかったのか？」

沢田綱吉にも言ったが…………

僕は過去から来てまだアジトに入ったことがない」

「お前も過去から来たのか!？」

本当に聞いてなかったのね…………

そういえば雲雀先輩の方をずっと見てた気が…………

そして、こんな美人な人にジツと見られたのに  
雲雀先輩は全く興味なかったのが不思議だよ

“そうだよ”

へーそんなところに入口があるんだー

あ、京子ちゃんがおりにてきた

“ついでだ

何かいるものないか?”

「な!?! はやく帰るべきだろ!!」

“……君も女性だろ……”

女性にはいろいろ必要だろ?

沢田綱吉達が気付くとは思わない……”

絶対気付かないよねー

雲雀先輩は気付いてるけど言うわけないしね

「あの……その……// //」

ここは原作通りなんだねー

私がいるとずれてる可能性があるから

聞いたけど意味なかったね

うーん……京子ちゃんゴメンね

男のフリをしてる私から聞けば恥ずかしいよねー

でも恥ずかしかつてる京子ちゃんは凄く可愛い……

あ、また変態に近づいた気がする

“……大丈夫そうだな

いい友達をもったな”

この状況で京子ちゃんが買えるわけないしね

誰が買ったのかは原作を知らなくてもわかるよ

「うん!!」

うわー京子ちゃん可愛いー

“今から帰るけど

出来れば僕にあまり話しかけないでくれ

結構集中力があるんだ”

京子ちゃんは意味分かってなさそうだなー

ラルはうなずいたしきつさと帰ろう……  
長居すれば花にも危険があるしね

指紋認証システムに少しドキドキしたよ  
まあ雲雀先輩のアジトでも使ってたけどね  
ここはどうなってるかは知らないけどー  
でも雲雀先輩がいれば全部してくれたから  
実は初めてだったんだよねー  
本当は少しやってみたかったけど……  
言えば笑われるのはわかってたから言えなかった……  
あ、考えながらラルに着いて行ってたら  
このまま進めば誰かいる気配がする

「ちやおツス」

「リボーン……その格好はなんだ……」  
知ってるけど……怪しすぎる……

「これを着ねーと体調最悪なんだ  
ヴェントは問題ないのか？」  
お前もアルコバレーノだろ」

「な!？」  
あれ？ラルは知らなかったの？  
知ってると思ってたんだけどなー

「僕は制御をかけられてるから問題ないよ」  
「……………なるほどな」

「僕もまさかこんなところで  
役にたつとは思わなかったよ」

「どういうことだ!! 説明しろ!!」  
京子ちゃんの前で叫ばないでよねー  
少しビツクリしてるじゃん

「説明は後だ  
先に彼女を部屋まで送る」

「……わかった」

「京子ちゃん!!!」

あーハルちゃんが泣いちゃった……

「ごめんね……ハルちゃん……」

もう京子ちゃんは無茶なことはしないだろうなー

これでやっとなんか安心が出来たよ

〃無事送り届けたし

僕は沢田綱吉に会ってくるよ〃

「はひー！ この人誰ですかー」

怪しい人でゴメンねー

「ハルちゃん、あのね ツナ君の知り合いでね

外で危なかったところを助けてもらったの」

「はひー！ そうだったんですかー」

「ヴェント君ありがとう」

〃ああ

君が無事でよかったよ

じゃあな〃

いやー本当に良かった……

原作通りと思って行動してなかったら危なかった……

## 未来の並盛 5

「リボーン、あの2人は大丈夫か？」

「ああ」

「早く説明しろ!!」

「……説明するからちよつと待ってよねー」

「獄寺君達の状態を詳しく知りたいのに……」

「ラル待て」

今ビアンキとフウ太が情報収集から帰ってきて

会議を開くその時でいいだろ」

「……わかった」

ビアンキさんとフウ太君は帰ってきたんだー

「2人とも目を覚ましたぞ」

あの傷でもう目が覚めたんだ……

いや、いいことなんだけどね

でもやっぱり根本的におかしいと思う

「ヴェントはどこで応急処置を覚えたんだ？」

的確でビックリしたぞ」

「あー最初は軽く本を読んだ程度だったんだ

でもいつの間にか彼の怪我を診るのは

僕の役目になったから本格的に覚えたんだよ」

デイーノさんと修行してた時に怪我をしても

絶対ロマーリオさんに診せないから困ったんだよ

だから私は途中から小説じゃなくて

医学関係の本を読むことになったんだよね

「なるほどな」

「……納得しないでほしかった

リボーン君が言えば病院に行く可能性があったのに……」

んー雲雀先輩はいないね

群れることが嫌いな雲雀先輩が来る訳ないか

だから草壁さんがかわりに出席って感じかなー

ピアンキさんがかなり大人っぽくてきれいだなー

フウ太君なんて凄く大きくなつたし……

これはかなりもててるだろうねー

あれ？この人誰だった？

メカの人ってことしか覚えてない……

「悪い……」

名前を覚えてもらえないか？

「ヴェントさん、あなたも過去から来たんでしたね

私ボンゴレファミリー御用達武器チューナーにして

発明家のジャンニーニでございます」

「僕のことを知ってるんだ」

「はい

指紋認証プログラムを作ったのは私なので」

「つてことは……私の正体知ってるのか」

「あーリボン……」

「会議を始める前にいいか？」

「なんだ？」

「この中で僕の正体を知らないのは誰だ？」

「あれ？ラル以外みんな知ってるの？」

「まあこのメンバーだったら話してもおかしくないか……」

「リボン……」

「ラル・ミルチは信用できる人物か？」

「ああ

問題ないぞ」

「まあ聞かなくても信用できると思うけどー

「一応聞かないとおかしいからねー

「パサッ

「フードとつたら凄く楽だよー!!!

「疲れたー」

「こんなに長時間男のフリしたの久しぶりー」

「な!? 女だったのか!？」

「そうですよー」

「んーラル・ミルチ……ラルさんでいいや

「ラルさん風早優といいますー」

「これからよろしくお願いしまーす」

「ああ……」

「優、京子ちゃん達にはその姿で会わないの?」

「んー……そりや会って話したいけどー」

「このアジトの中で1人2役は辛いよー」

「そつか……」

「ツナ君が気にすることじゃないよー」

「うん……」

「ツナ君は本当に優しいよねー」

「えつと私は風のアルコバレーノです

でもリボン君達のこととは詳しく聞いてないですよー

あ、呪いの内容も違いますけど

こつちの内容は話せないことになってますので

聞かないで下さいねー」

「お前はなぜ普通に過ごせてるんだ!!」

「ある人にアルコバレーノの力を

完全に制御されちゃって影響を受けてないんですよー

私もこの時代に来て教えてもらったので

詳しくはわかっていません」

私に説明しろって言われても

じゃあなんで体調が悪いの? って言い返せるよ

それに未来の私も影響が受けると思ってたはずだよ

でも非7・線が流れるから気をつけるとか言えないし

非7・線がどういふものかわからないから対策もうてない

そしていつ非7・線が流れるかもわからないしね



「……わかった」

ラルさんが私を信用するかは後で決めてもらおう  
「さて、私の話はもういいですね？」

会議を始めていいですよー」

「では先に私から……まずヒバードですが」

黒川花からの要請で我々が飛ばしました」

「え？ く……黒川花!」

「そうです」

笹川京子に対する黒川の救援要請です

これは我々とボンゴレの取り決めでして

ある経路からSOSがあった場合

その現場にヒバードを飛ばすことになっているのです」

「で、私が雲雀先輩と一緒に行動しててね

心配になって様子を見に行けば

危ないところだったんだー」

「そうなんだ…… 優、ありがとう」

ツナ君にもお礼を言われたよ！

「でも話を聞いたのがヒバードを飛ばした後で

ツナ君達は混乱したよね ごめんね？」

「ううん！ 本当に助かったよ!!」

京子ちゃんが無事だったのは優のおかげだし！」

「えへへ♪」

やっぱりツナ君にほめられるのは嬉しいなー♪

「でも何でそんな変わった方法で……?」

「予備の救援伝達システムだな」

「その通り 通信が困難な場合などに使われる

10通り以上ある予備のSOSの手段の1つです」

「しかしなぜSOS信号が神社で消滅したのでしょうか?」

「恥ずかしながらバッテリーの接触不良です」

「やはり故障でしたか……」

「で、おまえらの組織は何なんだ?」

「はい。ひらたく言えば

並盛中学風紀委員を母体とした秘密地下財団です」

「まだ風紀委員関係してんのー!!?」

これって……私も関係してるんじゃないの……?

えー……全然聞いてないんですけどー

「ちよつと待って!」

今、私もそれを初めて聞いた……

草壁さん未来の私もそのメンバーなんですか?」

「はい

といつても風早優がですが……」

言われてみればそんな原作だった気がする……

まあいいか………本当にいいのか?

書類まみれになってる未来を想像してしまった……

よし!風の匣兵器が本当に作られてないか

調べるために一緒に行動してたと思うことにしよう!

## 未来の並盛 6

んー話を聞いてるけど原作通りかな？

入江君のアジトの場所はわかってるしね

「このヤバイ状況の中生き延びて

日本支部の入江正一を倒せるかどうかは

お前達が短時間にどれだけ

強くなれるかにかかっているんだぞ」

「守護者の情報収集は僕らがするよ

だからツナ兄は自分の修行だけに専念してよ！」

「私が来たからには家事と京子達のこととはまかせなさい

あの子達にみじめな思いはさせないわ」

「みんな……ありがとう そうする

そういえば……優はいつからこっちに来たの？」

あれ？私の話になった

「えつと3日前かなー？」

「え!? オレよりはやかっただの!?!」

「みたいだねー」

ヴェントは守護者の中で1番狙われてるみたいだけど

なんか風早優もボンゴレ狩りの対象になってるしー

しょうがないからヴェントで行動したほうが何かあった時に

すぐ対処できるからヴェントで過ごすからね」

「優姉は本当にすごく狙われるから気をつけてよ」

「フウ太君は情報収集担当なんだよね？」

「そんなにやばいの？」

「うん 奴ら血眼になって探してるよ

他のマフィアもね

優姉に関しては協定を結んだマフィアもあるぐらいだよ」

「うわー……嫌だな……」

「そんなに興味があるのか……」

雲雀先輩が心配するのわかるかも……」

「気をつけるよー」

「あ、あの……それってどういう……」

ツナ君が聞いているけど……なんか風の流れがかわった  
念のためにフードをかぶろう

「?? どうしたの?」

「まだだめ ランボ君!!」

おおー当たったー危ない危ないー

ドタドタ走ってたから風がかわったんだねー

みんな感動の再会してるよ

いいな……ちよつと羨ましい……

「……ヴェント」

「僕は大丈夫だ 気にするな」

「……うん」

ツナ君は本当に優しいねー

“……そういえば感動の再会をしてないな”

「え?」

「僕と君との感動の再会だよ

今からするか?」

「んなー!!!」

一体何を想像したんだろうねー

顔が赤くなってるよ (笑)

まあ目の前でビアンキさん達が抱き合ってるからね (笑)

「そうだな」

「ええええ!!」

「なんだ ツナ

オレとヴェントの感動の再会の邪魔するの?」

確かに『君』としか言っていないけどさ (笑)

あーあ、更にツナ君の顔が赤くなっちゃった

まああの流れだったらツナ君としろって思ったよね (笑)

「あの……ツナ君……」

「ど、どうしたの? 京子ちゃん」

凄い……京子ちゃんの力で一瞬で復活したよ!!

「花から聞いたけど……優ちゃん大丈夫かな……?」

「え!？」

あれ?私?

「優ちゃんも探してるって聞いて……」

花から聞いたけど……

今、世界中とびまわって

向こうからしか連絡とれないの……

優ちゃんは大丈夫だよね……?」

あーそっか……

雲雀先輩と行動してたから

多分すぐ連絡できないんだ……

「えっと……それは……」

〃大丈夫だ

彼女は無事保護されてる〃

「え!?! ヴェント君知ってるの?」

〃ああ

心配するな〃

「よかった……」

……やばい……

心配してくれてるのが凄く嬉しいかも……

さてみんな行っちゃったしー

普通にしゃべろうー

「じゃあ私は草壁さんと戻るよ?」

雲雀先輩のアジトで寝泊まりするからー」

「え!?! そうなの!?!」

「私は別にこっちでもいいんだけどね

でもあつちには私の部屋があるみたいなんだ」

「そ、そうなんだ……」

まあ正体がばれる確率があがるのもあるけどね

「それに私は男のフリしてるんだから

ここのアジトがどうなってるか知らないけど……

ベツトの関係でツナ君達と

同じ部屋になるかも知れないよ？」

あ、また顔が赤くなったー

「ツナ君と一緒に寝たいっていうなら

寝てもいいよー♪」

「ゆ、優!!／＼／＼」

「ごめんごめん♪

からかったただけだよ♪」

顔が真っ赤でツナ君は可愛いなー（笑）

「まあ私も修行したいしー

こつちで練習することになるからまた顔出すよー」

「うん わかった」

「じゃ、またねー

では草壁さん雲雀先輩のアジトまで案内お願いします」

「はい わかりました」

## 未来の並盛 7

「すごく綺麗な和室だ!!」

「前のアジトは洋室だったのにね」

「まあ海外だったからかな？」

「ただいまですー!」

「遅いよ」

「うわー機嫌が悪い……」

「ごめんなさい……」

「京子ちゃんむかえに行つてから」

「ちよつと会議にも出て……」

「ふうん」

「うわ……10年後の雲雀先輩の場合は」

「どうやって機嫌を戻せばいいんだろう……」

「哲」

「へい」

「なんではやく連れてこなかったの」

「うわー草壁さんがピンチだ!!」

「す、すみません」

「大変だ!!謝らせちゃったよー!!」

「草壁さんは悪くないです!!」

「私が勝手に会議に出たんです!!」

「だから怒るなら私にしてください……」

「怖いけどしょうがないし……」

「はあ……もう怒つてないよ」

「……ごめんなさい」

「優」

「何だろ……?」

「雲雀先輩の隣にある座布団を見てるね」

「んーここに座れつて事……?」

「いいんですか……?」

「いいよ」

うわー雲雀先輩の隣だ!!

ここに未来の私はいつも座ってるのかな？  
でも邪魔じゃないのかな？

10年前では隣に長時間は座らないし……どうなんだろう？  
あ、お茶セットがあるしお茶を入れるためにいるのかもね  
……そうだ！聞かないといけないことがあったんだ！

「雲雀先輩……怪我はなかったですか……？」

「ないよ」

「よかったー！ー！」

未来の私えらいー！ー！

「優の匣兵器に似てたからね」

「やっぱりそうですよねー」

「優の方がスピード速いよ」

「そうなんですか？」

「そうだね」

あれより倍はやいよ」

「そんなに!？」

「そうだよ」

優が本気で炎を注入すれば僕でも避けれないからね」

……まじっすか……

自分でも避けれない気がしてきた

「……………それはびっくりです

私の加速つてすごいですねー

雲雀先輩が避けれないってことは

他の人は絶対当たりますよねー」

雲雀先輩よりセンスがいい人は滅多にいないしね

「そうだね」

でも優は戦うより逃げることに専念してたよ」

「そうですねー」

戦うの嫌いですしねー



そんなにスピード出るんだったら

スケボーも速いんですよー

私は絶対捕まらないですよんねー」

まあ白蘭さんにはきついと思うけどね

「そうだね」

「そういうえば雲雀先輩と戦った人に

逃げ腰ヤローって言われました！（笑）」

「……そう」

うわ……殺気が出てる……

「事実なんで私は気にしてないですよ？」

「そう」

ちよつとおさまった……

話をかえよう……

「それにしても凄くきれいな和室ですね」

それにこんなに広いとは思わなかった……

「僕は和が好きだからね」

「そうですよねー」

「ご飯も和食の方が好きですよんねー」

微妙に和食の時の方が食べるのが早いんだよねー

「そうだよ

優は着替えないの？」

雲雀先輩は着物に着替えてるんだよねー

凄く大人の色気が出てて直視できないし……

でも着替えるってどういうことだろ？

「何かに着替えるんですか？」

「着物に着替えないのってこと」

「え!?! 私って着物をきれたんですか!?!」

「そうだよ」

10年間に覚えたんだねー

それに草壁さんが私の正体を知ってるから

おしやぶりが隠れなくても問題ないか

「んー……着方がわからないので無理ですよ」

「僕が着付けしてあげるよ」

／／／／／／／／

無理無理無理!!!

そりや着たいけどそれは無理!!

「いや……その……誰か来たら困るんで……」

「誰も来ないよ」

「……いや……」応……

ツナ君のアジトと繋がってるので……」

「……そう」

納得して助かったー!!

着せてもらうとか……

恥ずかしくて死んじゃうところだ……

「……沢田綱吉はヴェントの正体を

知ってるから問題ないよね」

……ピンチ!!!

どうやって回避すればいいのー!?

「……も、もし!!」

ランボ君とかが迷子になってきたら困ります!!」

「はあ……わかったよ……」

「すみません……」

でも未来の私が似合ってたかもしれませんが……

今の私には大人っぽいものはまだはやいですよー」

うん

大人になったほうが多分きれいに見えると思う

今の私にはあわないよねー

「今でも似合うよ」

……／／／／／／／

ちよつと着せてもらいたいと思ってしまった……／／／

「お世辞でも嬉しいです……／／／」

「嘘はついてないよ」

／／／／／  
やっぱり私は死ぬかもしれない……

## 未来の私 1

よく寝たなー

それにしても未来の私えらいなー

この部屋にもちゃんと抱くもの用意してるとは……

あ、そうか！

未来の私もまだ使って寝てるんだね

さて、今日から頑張つて修行だ

「おはようございます」

「やあ」

「今日はツナ君のアジトへ行つて

ちよつと修行してきますねー」

「そう」

「ちやんと夜には帰ってきますよ」

「わかった」

良かった……止められなくて……（笑）

なんか10年後の雲雀先輩は

凄くかまってくるんだよね

私の反応を楽しんでると言ったほうが正しいか……

わかっているのに緊張してしまうんだよねー

慣れるまでの道のりは長そうだ……

〝どうも〝

「ヴェント君おはよう！」

「おはようございます！」

今日も2人とも可愛いねー

「あ……ヴェント……」

ツナ君はまだ気にしてるのか……

私がヴェントでしか会わないって決めたことを……

〝全く僕のこと気にしすぎだ〝

「そうだぞ！ ツナ！

お前は人の心配してる場合じゃないぞ」

「僕もリボーンの見解に賛成だ」

「……わかった」

本当に優しいよねー

うーん……気にしない方法がないかなー

「あ、あの……」

ん？京子ちゃんどうしたんだろ？

「どうしたんだ？」

「フード……とらないの……？」

そりやそうか

変な人だよねー

「あー僕の正体を知ればさらに命を狙われるんだ  
だから知らない方が君達のためだ」

「え!？」

「昨日君を探してる変な人達もそうだが……

それ以外の人達も

僕をずっと探してる人が大量にいてるんだ」

「そうな……？」

「ああ

僕の正体を知った人は

危険にあう確率はかなり高くなる

だから気味が悪いかもしれないが許してくれ」

「……うん」

でも多分ツナ君が全部話すことになるから

後で正体ばらすことになるのかなー……

……これは後で考えよう

今は修行のことを考えるべきだしね

おー修行場所だー

マンガで見た場所だよ!!

ツナ君とラルさんとリボン君しかないしー  
もうフードとっていいかー  
パサッ

「ツナ君気にしすぎだよー」

私の正体を知ったら京子ちゃん達も危ないんだよ？」

「そうだけど……」

「それに私はいろんなマフィアに

狙われてるんだからしようがないってー」

「さつきも言ってたけど……」

ミルフィオーレ以外にもそんなに狙われてるの？」

「みたいだよー」

「未来の山本に優のこと聞いたけど……」

ある理由でヴェントは

数年姿を現さなかったって聞いたけど……

風早優の情報もわからなかったから心配だったんだ」

私の情報がなかったってことは……

リボン君は私が死んだと思ってたかもねー

私が普通に過ごしてることを聞いたのは

情報がなかったからか……

ツナ君は心配しかしてないってことは

多分リボン君は私が死んだと言えば

ツナ君が動揺するから言わなかったのかな？

でも私が無事なことは山本君にも教えてると思うけど……

まあいいか……

もしかすると全く情報を漏らさないようにして

本当に心配してた可能性もあるし……

「未来の私は雲雀先輩と行動してたみたいで

雲雀先輩は群れるの嫌だから

そういうの教えるのはダメだったのかも……」

全部、雲雀先輩のせいにした（笑）

「……そうだね」

でもなんでヴェントの姿を数年出さなかったの？」

「沢田……こいつは……かなりレアな存在だ」

「ラルはなにか知ってるの!？」

「当たり前だ」

こいつの正体を探っていない

マフィアなんていないぐらいだぞ」

「ラル……それは本当なのか？」

「リボーン達は知らないと思うが」

この時代でヴェントの情報を得るために

大量の金銭が動くぐらいだ……」

えーそんなに!？」

お金までかかっているのー!？」

「……ますます正体を隠さないといけないね……」

「……優はなんでそんなに狙われているの？」

他のマフィアに狙われている理由はこれだよー

「雲雀先輩に聞いたんだけどー

えっと……ツナ君は上空の波動だよね？」

「そうだよ？」

「で、私は風の波動なんだよー」

「うん」

「それ持ってるの私だけだから」

「え……」

「つまりー世界で唯一風の波動を

持ってるのは私だけってことー」

「ええええええええ!？」

うわー久しぶりー

ツナ君のナイスリアクション♪

## 未来の私 2

……リボン君はあんまり驚いてなかったね  
未来の山本君から聞いてたのかなー

ツナ君に話さなかったのはこの状況で  
死んでる人の情報を教えても意味ないからか……

「だからすっごい珍しい存在として  
興味があるみたいで……」

「ここに来るのも大変だったよー」

まあ大変だったのは草壁さんだったけどね  
全部準備してくれたからね

「そ、そうなんだ……」

「沢田！ そろそろ修行を始めるぞ

その前に風早！」

うわー凄い迫力で言われたなー

なんでツナ君の周りって

スパルタな雰囲気の人ばかりなんだろうねー

「ラルさん、どうしたんですか？」

「お前はリングに炎をともせるのか？」

「大丈夫ですよ？ ほら」

ボワッ

「な……」

あれ？ みんな固まった……

「どうしたんですか？」

「優……すごいね……」

「なにが？」

「オレ……そんなに炎出ないけど……」

「私もわからないけど

かなりの炎が出ちゃうんだよねー」

「……そっか……」

あ、ツナ君が落ち込んだじゃった……



「えつと……とりあえず……」

ラルさん問題ないですよ?」

「そうか」

「匣兵器は持ってるのか?」

「持ってますよー」

「3つあるんですけどー」

「未来の私はこの2つをメインに使っていたみたいで  
使いこなすために場所を借りたいんですけどー」

「優 オレが家庭教師するぞ」

「え!?! リボン君が!?!」

「そっだぞ」

「でもこっちは使いこなせると思うから」

「こっちの匣は1人でも出来るよ?」

「ツナ君を見てくれていいよ?」

「というか、ツナ君を見てほしい」

「私のせいでツナ君の修行が遅くなつて」

「後で困ることになったら大変だし……」

「……もう使いこなせてるのか?」

「多分大丈夫だよー」

「見てみる?」

「ああ」

「カチッ」

「いつ見てもいい刀だねー」

「あ……それって……」

「ツナ君当たりだよー」

「前に折れた逆刃刀だよー」

「炎を刀にまとおう」

「ボワッ」

「んーやっぱりこれは簡単だね」

「刀に風を圧縮させて維持するほうが集中力がある」

「これで使い方あつてるって」

「雲雀先輩に聞いたよー」

「そうか」

「ためしに実力はかってみていいか？」

「いいけどー」

「リボン君って銃だよね？」

「実弾は嫌だよ？」

「痛いのは嫌だ」

「なんてわがままなんだ（笑）」

「わかったぞ」

「ペイント弾でいいか？」

「それだったらいいよーって言うてもー」

「私は攻撃しないよ？」

「逃げるだけだよー」

「攻撃するの嫌いだしー」

「まあ攻撃してもリボン君には当たらないと思うけどね」

「わかったぞ」

「って、もう始めるの!？」

「ズガガガガガ……」

「いきなり撃たないでよ!!」

「痛くなくてもペイント弾が着くのは嫌だ!!」

「でもまだこれぐらいだったら」

「刀を使わなくても避けれるかな？」

「まあ走りまくってるけど（笑）」

「だって動き続けないと当たるんだもん」

「避けるだけでいいなら簡単だねー」

「って、ツナ君を狙わないでよ!!」

「キンキンキン……」

「あーもう!」

「わざとツナ君を狙ったなー!!」

「ってか、ツナ君ペイント弾なんだから」

「怖くなってしゃがみこまないでよ」

ここから動けなくなつたじゃん!!  
くそー!!これが狙いだつたなー!!  
こうなつたら意地でも全部叩き落としてやる!!

〜10分後〜

「もうわかつたからいいぞ」

あー疲れた

文句言つてやる!!

「リボン君

刀を使わずのためにツナ君を狙わないでよ!!」

あれ?なんかラルさんとツナ君が固まつてる?

つてか、いつの間にかツナ君がしゃがんでないよ

かなり集中してたんだなー

もうちよつと周りを見れる余裕があつたほうがいいね

「えつと……何か問題ありました?」

「……なんでもない」

「優つてそんなに凄かつたんだ……」

「オレもびつくりしたぞ

結局、優もツナも1回も当たらなかつたしな」

「それはリボン君が

本気じゃないからだよー」

まだまだ余裕がありそうだったし……

「それでもオレが思つてた実力よりかなり上だぞ

風を使つて軌道はずらしてなかつたみたいだしな

それに優はまだ本気じゃないだろ」

あ、風の力を使つて軌道をずらしてないのがばれた

流石リボン君だよねー

まあ風を使つて軌道はよんでたんだけけどねー

ずらさなかつたのはただの意地(笑)

「そうなんだよねー……」

んー実は私って誰にも怪我してほしくないんだから無意識に相手のレベルに合わせてしまう癖があるみたいなんだ」

「そうなのか?」

「そうなんだよねー」

今回はリボン君にあわせて

私の動きが良くなったと思うんだ」

「その癖は何とかできないのか?」

「んー前のリング争奪戦のときに

私の家庭教師してくれた人に

この癖は治らないって言われたよ」

「家庭教師がいたのか!?!」

「うん

私に戦い方教えてくれた人だよー

すっごい強いよー

今まで勝てたことないしねー」

「……そいつは誰だ」

あ、しまった……

リボン君が興味を持つちゃった……

「えっと……それは言えないかな……」

「なんでだ?」

「うーん……ちよつと話せない内容にかかわるし

それにその人のことを話したら

もう何も私に協力してくれなくなるから

それは困るんだよねー」

「……そうか」

「そうなんだよねー」

その人はすっごい天才でさー

このアルコバレーノってばれない袋や

今までの武器とかも

全部作ってくれたんだよねー」

「そうなのか？」

「そうだよー」

なんでも出来ちゃう天才だよー

だからリボン君が探そうとしても

絶対ばれないよ？」

「わかったぞ」

返事をしたけど絶対探しそう（笑）

## 未来の私 3

「あ！ ちょっと試したい技があるんだけど……」

「え!?!」

「この壁って頑丈かな？」

とりあえず壁をコンコン叩いてみたけどわからない

まあ原作で大暴れしてたから大丈夫と思うんだけどね

「多分大丈夫だと思うけど……」

「多分だけど……」

結構危ない技と思うんだよねー

1度で本気で出して威力の調節しようかなって……」

基準を知りたいから1度だけでいいんだよね

「いいぞ」

「リポーン！ 勝手に決めるなよ!?!」

んーもめちやったよ

あーいいこと考えたよ！

「ここってツナ君のアジトなんだよね？」

リポーン君が許可出しても

ツナ君がダメって言ったらしないよ?」

「ええええ!?! オレが決めるのー!?!」

「さつき……リポーン君に決めるなって言ったのに……」

これを言えば絶対使わせてくれるよねー（笑）

うん！私って結構ひどいね！

「え……じゃ、じゃあどうぞ……」

「ありがとー」

さて、どれぐらいの威力かな……

集中……集中……

ブン

ドガッ!!!!

「なー!?!」

「……ごめん……」

「これは謝るしかない……」

「優 何したんだ？」

「いや……私って……風を操れるでしょ？」

「ああ」

「刀に風を集めて圧縮させて

斬撃を飛ばすことが元々できて……」

「なるほど……それで晴戦の時に鉄を斬れたんだな」

「うわーその応用が今の技ってわかってるよ

「そうだよー」

「まあこの技は欠点があるから

あんまり使えないんだけどね」

「そうなのか？」

「うん」

「風を圧縮させるからね

集中力がいるから最初にスキが出来るんだよ」

「風のバリアーも同じ原理か？」

「そうそうー」

「あの時は制御といてたから全身にしたんだけどね

普段は出来ても範囲が小さいよ」

「そうか」

「で、その斬撃に私の風の性質を

合わせてとばしたんだけど……」

「まさか……壁がこんなにも斬れちゃうとは……」

「この技……怖すぎ……」

「この壁は頑丈だけど奥行き5メートル以上斬れてるよ

まあ圧縮させてだから範囲は狭いけどね

もし制御はずしてとばしたら……考えただけで怖い……

それにとばした後でも

すぐに刀に炎をまとって攻撃できるし……

私って怖っ!？」

「いやー制御しててよかったー」

「風の性質はなんだ？」

「加速だってー」

だからものすごいスピードでとんでいったから  
すごい威力になったんだと思う……」

「そうか」

「とって……」

操れる量が少ないからこれですんだんだけどね……

この技を思いついた後すぐに雲雀先輩に聞いたら

未来の私は滅多につかなかつたらしいよ」

「優の性格からしたらそうだろうな」

「……うん」

私も見て思った……これは危険すぎるよ……」

威力の調整しないと……使えない……

「もう一個の匣はなんだ？」

「スケボーだよー」

「スケボー？」

「ツナ君も知ってる普通のスケボーだよー」

車輪を加速させて使ってるみたいだよー」

「そうなんだ……」

「うん」

いろんな人から逃げることに前提に作った匣みたい  
だから一人で練習出来るかな？って思ってたね

場所さえあれば問題ないよー」

「わかったぞ

部屋に案内するぞ」

「うん」

お願いしまーす

じゃツナ君修行頑張ってるねー」

「う、うん……」

それにしても……加速は怖すぎだよ……

もしかしたらツナ君よりスピードが速いのかな……



雲雀先輩が避けれないって

言ったってことは……絶対速いじゃん!!!

私ってすごい……（笑）

いやー……これは恐ろしすぎる……

ますます戦うのが嫌になった

スケボーがあって良かったー！！

## 未来の私 4

……練習したよ

で、結果論を言う……ものすごく速い（笑）  
ツナ君より速いと思う……

雲雀先輩が避けられないって言った理由がわかったかも……  
でも1日でマスターしてしまった……

私ってこんなにも早く来る必要あったのかな？  
かなりのリスク高すぎだよな？

それにしても……思ってしまう……

あ……もしかしてこの理由もあるから  
はやくこつちに呼んだのかな……

神様と少し話をしよう……

神様ー

『なんだ？』

私って本当に異の者だよなー

『……………』

あ……ごめんなさい……

返事しにくいよね

『……ああ』

なんかさー

本当はここにいてはいけない存在

って改めて思うかもー

『……そうか』

でね、考えたんだけどー

私って元々強いし才能あるよね？

『そうだな』

修行の時間はそこまで要らないと思うんだよな  
なんで未来の私がこんなにもはやく

バズーカあてようと思ったのか考えたんだけどー

『原作とずれてる可能性があるからだろ？』

でもこの世界の未来の私がいるから問題ないよ？  
非7・線の影響を受けないことは知ってるでしょ

『そういえば……そうだな』

実はこのタイミングで来るのって  
ものすごくリスク高いんだよねー

『なんでだ？』

未来の入江君と私は入江君の過去を使って  
攻略されてない未来を作って

この時代にみんなを呼んだってことは……  
リング争奪戦まで一緒のはずだよ？

『だろうな』

そこから分岐した中の未来の1つだろ』  
ってことは……

雲雀先輩のキャラがかわってるって知ってるよね

『ああ』

じゃあ雲雀先輩が私と長時間離れたせいで殺気だつて  
バズーカに当たらない可能性が出てこない？

『……確かに』

だよ？

過去の私が当てるんだつたらまだわかるよ  
素人の入江君が当てるんだよ？

原作通りだったら私の記憶では

雲雀先輩は寝てたと思うけど……

寝てる可能性がかなり低いと思うんだー

『言われてみるとそうだな……』

でも、このタイミングにしたんだよね

『そうだな』

原作と違うのは優だけだから……

パラレルワールドの未来の優が決めたと思う』

で、考えたんだけどー

未来の私は入江君の存在に気付いて

自分から当たってくるって予想してたと思う

そして私だけ時間がずれるって想定してたと思う……

『そうなのか!?!』

多分だけど……

風紀委員に入ってから私が絡まれないように

風で気配をよみながら帰ってるって知ってるよね?

『……そうだな』

入江君が見つかっても私は原作を知ってるし

自分から未来に行くに決まってるよね?

『そうだな』

行かないという選択はないな』

でしょ?

だから自分から未来に行く時に

念のために入江君の手伝いをする事まで

読んでたと思うんだよ

『なるほど……』

そうすると雲雀先輩は当たると思うしー

他のみんなは普通に原作通りに当たると思うから

私以外は絶対時間ずれないよね?

『確かに……優が来るタイミングは

リボーンが未来に行った後だから

行かないという選択肢はない

ツナはリボーンを探してこの時代に来る

後は原作通りに連鎖が起きるだろうな』

でも過去の私が気付かず当たったら

この作戦失敗する可能性があるよね?

『そうだな……』

雲雀が入江正一を咬み殺しているいろいろ調べそうだ

攻撃しようとした対象だからな

それもバズーカだ……

それで未来に行く前に優が読んだ資料を見つけてみる

入江正一は終わるだろうな』

……だよね

なんでそんなリスクをおかしてまで  
私を先に呼んだのかなって考えたんだ

『わかったのか?』

多分だけど……

パラレルワールドの未来の私は

自分がここにはいては存在って

ずっと思ってたんだと思うんだよ

『……関係あるのか……?』

あるよー

原作にない風の波動を持つのは私だけって  
やっぱりものすごく異質だよ

『……』

だからね……

心の整理する時間のために

はやめにこっちに呼んだのかなって……

『……確かに』

## 未来の私 5

後、神様はもう私は呪われてない  
って言ったけどーある意味呪いだよ

ここにはいてはいけない存在って思わせる呪いだよ

『……………』

それにさ、多分どのパラレルワールドでも

未来の私は他のマフィアに狙われると思うよ？

私はどのパラレルワールドでもレアだからね

『……………』

将来的な話するよー

私が子ども産んでも

絶対風の波動を持つ子どもは産まれないよ

『……………なんでだ？』

風の波動を持つて産まれたら

選ばれし者ってことになってー

私が死んだらその子どもが

風のアルコバレーノになるよね？

3つ守らないといけないから

ユニちゃんと同じ感じになるよね？

『そうだな』

風のアルコバレーノの呪いはなんだった？

『死んでこの世界に来るか……………』

だよねー

私の子どもはそれ出来ないよね

『……………ああ』

風の波動を持つ子が産まれて

アルコバレーノにならない可能性もあるけどー

多分それはないよ

それだったらもうこの世界で弱くても

風の波動を持つてる人が普通にいると思う

『……そうだな』

リングが発見されてるのに使えないからな……』  
そうだよ

風のアルコバレーノになるために呼ばれたなら  
風の波動を持つてる人はいると思うよ？

でも違うんだよねー

つまりー風の波動を持つと風のアルコバレーノになる  
って決まってることだと思っただー

『……確かに』

ってことはー

異の者しか無理ってことだよ

『……ああ』

後でシモンリングが出てくるけどー

確かに波動もリングを持つてる人も少ないよ？

でも子どもが産まれたら

波動を持つてる子はいるよね？

炎真君達は初代の子孫だしねー

『……ああ』

つまり……私が死ぬまでは

絶対風の波動を持つものは現れないと思うよ？

私が死んでないのに誰かを呼べば

またバランスが崩れるからね

『……そうだな』

つまりもし私が白蘭さんに捕まって

死んじゃったら誰か呼ぶことになるよね？

『ああ』

白蘭さんが倒した後は

死んだ人は生きかえるよね？

『そうだな』

つまり私が生きかえって

呼んだ人が2人になったらどうなる？

『またバランスが崩れるか……』

そうだよ

だから私は白蘭さんに

捕まったらダメだったんだよ

『なるほど……』

選ばれし者は1人しかダメってことだよ

『確かに……』

うん

選ばれし者は過酷っていう意味を

ちゃんと理解したよ

『………』

絶対私は将来マフィアに狙われるよ

世界で唯一の風の波動を持つものだからね

『……そうだな』

本当にここにはいけない存在

って改めて思うよ

未来の私はいろいろ考えてたと思うよー

『………大丈夫か?』

ごめんね

心配ばかりかけて

『……ああ』

優、無理はするなよ?』

わかってるってー

話を聞いてくれてありがとー

『俺でいいならいつでも聞くから』

ありがとー

あ!!!

『どうしたんだ?』

今わかった……



## 未来の私 6

『なにがわかったんだ?』

未来編が遅くなった理由だよ

多分だけど……

『わかったのか!?!』

うん……

私ってこの世界来るまでの過去って一緒だよね

『そうだな』

この世界にきてから分岐してるはずだから

それまでは俺がつくった過去だからな』

つまりー私の性格ってほとんど一緒だと思う

『それもそうだな』

12歳までの過去はすべて一緒だからな』

でね、呼んだ人に逃げろって言われて

なにもせず素直に逃げてると思う?

『……それはないな』

だよねー

絶対白蘭さんの邪魔してるよね

『だな……』

その分、白蘭は時間がかかったはずだ』

うん

まあ逃げることに前提に考えてるとは思うよ

でも、出来るだけ邪魔をしてると思う

『そうだな』

その分、遅くなったんだな』

そうそうー

それで考えたんだけどー

邪魔の仕方が匣兵器とかを使わず

特殊能力で邪魔してるはずだよ

『どういうことだ?』

神様が匣兵器をつくれるってことは  
正直作り放題だよな？

『そうだな』

でも、他のパラレルワールドでは  
そんなに作ってないと思うよ

『なんでだ？』

白蘭の邪魔しようと思ったら  
武器は多い方がいいだろ』

白蘭さんの能力知ってるんだよ？

私が他のパラレルワールドにいるなら絶対しなよ

『どういうことだ？』

1番考えられる理由はボンゴレ匣だよ

『は？』

私って初代から封印されてた

ってことは初代の守護者はいないよね

『そうだな』

ってことは……

この時代の未来の私と神様が考えた  
完全なオリジナルだよ

『言われてみれば……そうだな』

確か他のボンゴレ匣は初代の武器を  
イメージしてたはずだからな』

ということは……

もしこの時代のボンゴレ匣と同じものを

他のパラレルワールドで作ったらどうなると思う？

『……攻略されてるな』

だよなー

多分他のパラレルワールドでは

初めからもつてた逆刃刀……もしくは刀だね

後は逃げる道具しか作ってないと思う

私だったら絶対作らないよ

『なるほど……』

うん

この時代の私もなんでこんな

匣兵器少ないのかなって思ったんだけど

ボンゴレ匣できるまで警戒してたと思うよ

まあ元々戦うのが好きじゃない性格もあるけどね

だから作ってないのは周りも不思議じゃなかったんだよ

そして白蘭さんが世界を崩壊させてしまったら

材料がないって言い訳が出来るしね

『なるほどな』

リング戦がないパラレルワールドで

初代から封印されていたっていうことを

聞いてないと考えてみたら……

といつても……選ばれし者しかもてないって

言い伝えは一緒だと思うから聞いてると思うけど……

まあ、聞いてない前提で話すよ

もし聞いてなくても匣兵器を作る時に気付くと思う

『確かに、全部考えるのは

パラレルワールドの優と俺だからな』

そうそうー

原作の世界にいてる私を

出来るだけ攻略されないようにすると思う

『ああ

原作を知ってるんだ

白蘭の能力は恐ろしいのはわかってるからな

この世界が攻略されれば終わりなのはわかるからな』

うん

匣兵器ができない未来では

匣兵器自体を作らないと思うしね

『そうだな

俺の作ったネックレスでいいだろ』

うん

でね、考えたんだけどー

特殊能力は残り3つストックあつて

白蘭さんの邪魔したり困った時に使ってるよね

『そうだな』

残しておいたからな』

つまり特殊能力は

どのパラレルワールドでもバラバラだよね？

『あー確かに』

つまり攻略されにくいはずだよ

まあかぶってるのもあると思うけど……

それでも原作の過去から来た私は

全部使っていない可能性が高いから

正直攻略されても問題ないよね

『言われるとそうだな……』

でしょ？

つまり神様の力と特殊能力で

戦って逃げてるはずだよ

『そうだな』

もしかしたらすごい匣兵器を作つて

白蘭さんを倒せる可能性があるかもしれないけど

私だったらそんなリスクは絶対しないね

『ああ』

危険すぎるからな

それに原作の世界が勝つことを知ってるしな』

そうそうー

だから邪魔して逃げてるはずだよ

その分遅くなつたって感じだよ

『だな……』

やっとわかったよ

なんで遅くなつたかすつごく気になつてたんだー

『これでわかったな』

うん

すつきりしたしー

さてそろそろ雲雀先輩のところに戻るよ

もう夜になっちゃうしー

『わかった』

……いつでも話きくからな』

……神様も私のことすぐわかるね……

『当たり前だろ』

雲雀に負けない自信はあるぞ』

なにそれ……（笑）

『まあ無理はするなよ』

全然すつきりしてない癖に

俺に嘘ついてどうするんだよ』

そうだね……ごめん……

『謝らなくていい』

ただ俺にまで嘘をつくな

無理して元気出すのはいいが……』

うん……わかった

『……ああ』

心配かけてばっかりでごめんね

『気にするな』

何度もいうが無理はするなよ』

うん！

ありがとう！

『ああ』

じゃ、ツナ君のところよって私は帰るねー

またねー

『ああ またな』

## 未来の私 7

おーまだやってるよ

頑張るねー

「ちやおツス」

「リボン君、部屋ありがとー」

「修行は終わったのか？」

「うん」

普通に使いこなせたから問題ないと思う

だからもう部屋を借りることないかもねー」

「完璧なのか？」

「スケボーは完璧だよ

外に出ても捕まらないぐらいは大丈夫だよ

でももう少し私の感覚を鍛えるつもり」

私の修行は感覚を鍛えるんだよねー

だから自分の部屋で集中したほうがはかどる

「そうか」

「うん」

ツナ君はまだまだ必要みたいだね」

「ああ」

「声掛けようかと思ったけどやめとくよー」

「いいのか？」

「うん」

邪魔したら悪いしー」

「そうか」

「もしかしたら……」

しばらくくこつちに顔をだなさいかもー」

「そうなのか？」

「うん」

気晴らしに顔出しに来るかもしれないけどね  
念のため来なくても心配しなくて大丈夫

「つてツナ君に伝えてくれる？」

「ああ いいぞ」

「お願いねー」

「じゃあ私はまた京子ちゃんとハルちゃんに  
ヴェントとして顔を出してから帰るよ」

「……大丈夫か？」

「あれ？」

「リボン君も私のこと気にしてるんだ」

「オレは女に優しいからな」

「そうだったね♪」

「んー……そうだねー」

「寂しくないって言ったらウソになるかなー」

「だからもし京子ちゃん達が正体を教えてほしい  
って言ったらわからないかな？」

「……そうか」

「まあ……ヴェントの正体を知ったら」

「命の危険が増えるからねー」

「教えてほしいって言われるかわかんないけど……  
まさかこんなにも狙われているとは思わなかったよ」

「たしかにオレもびっくりしたぞ」

「だよねー」

「もし平和な過去に戻っても遠くない未来に」

「私は他のマフィアに狙われるのは確定してるからねー  
いろいろ考えようと思う」

「……………」

「あれ？珍しくだんまりだね」

「本当に気にしてくれてるんだ」

「ボンゴレの機密にしたらって」

「良かったって本気で思ったよー」

「だからリボン君には感謝してるよ？」

「機密になつてなかったら……」

どうなつてたか……想像つかないよ……

「……そうか」

「あ、獄寺君と山本君にも

名前気をつけてって伝えといてくださいねー」

「……ああ」

「じゃ、私は帰るねー

またねー」

本気で機密にしてもらつて良かったよ……

でも女の子に優しいっていうだけで

ここまでリボン君が心配するとは思わなんだよねー

……まあいいか

〃どうも〃

んーいいにおいだなー

お腹が減つてきたよ

「はひー！ ヴェント君じゃないですかー!？」

「ツナ君はまだ戻つてないよ？」

〃さつき沢田綱吉に会いにいったよ〃

「そうですかー

なにか用事ですか？」

〃一応、顔をだしてから

向こうのアジトに戻ろうかと思つたんだ〃

ただ顔を見たかったのもあるけどね

「そうだったんですかー」

「ヴェント君も一緒に飯食べる？」

〃あー……僕はこっちでもいいんだが……

多分向こうで用意してくれてるんだ〃

私が修行をすると予想してたのか

雲雀先輩がお弁当を作ってくれてたしね……



だから絶対用意してくれてると思う

本当に10年後の雲雀先輩の行動はビックリする

夢かと思つて自分のほほをつねったら怒られたし……

まあ怒つたというより……

赤くなると注意されてほほを撫でられた

だから私は雲雀先輩の前でつねらないと決めたよ

恥ずかしくて死ぬかと思つたし……

……そう思わせるように仕向けてる気がしてきたよ

帰つたらまた遊ばれるんだらうねー

あ、今の私は絶対遠い目をしてる

まあフードかぶってるからいいか……

「……そっか

昨日のお礼出来ないね」

う……京子ちゃんが落ち込んだ……

ごめんよー!!

雲雀先輩の料理を食べないという選択を

出来ない私を許してー!!!

あー京子ちゃんを落ち込ませたまま帰れない!!

うーん……どうしよう……

「今度、食べに来るよ」

雲雀先輩の機嫌がいいときに……

「そうですよー

京子ちゃんの命の恩人なんですよー

美味しい料理を作りますよー」

「ああ 期待しておくよ

僕は帰るよ

じゃあな」

逃げるようにさつてしまった……

詳しい日にちを決めれない私を許してくれ……

機嫌がいい日じゃないと後が怖いんだ……

「ヴェント君ってミステリアスな人ですねー」

京子ちゃんも思いませんか？」

「うん……」

「京子ちゃんどうかしたんですか？」

「知ってる人な気がして……」

「はひ!？」

「そうなんですか!？」

「ううん ハルちゃんごめん」

「多分気のせいだよー」

「そうですかー」

「ミステリアスな人だけど」

「いい人みたいで良かったですー」

「そうだね」

「この前、私が外に出た時」

「本気で心配してたと思う……」

「そうなんですか!？」

「うん……」

「ツナ君が怒らないからって言って」

「かわりに怒ってくれたよ」

「はひ! 怒られたんですか!？」

「怖くなかったんですか!？」

「怒ったっていつでも……」

「怒鳴ったとかじゃないよ」

「心配して注意したって感じだったよ」

「そうなんですか……」

「うーん……ますます気になる人ですねー」

「そうだね……」

## 未来の私 8

「ただいまです！」

「おかえり」

あ……昨日は遅かったから言わなかったけど  
おかえりつてあれからずっと言ってくれてるのかも……

「どうしたの？」

「ふふ♪ なんでもありませんよ♪」

「そう」

「今、草壁さんいないんですよね」

「そうだよ」

「えっと……確認したいんですけど……」

「なに」

「入江君が記憶戻った時に……」

私の時間は少しずれてもいいっていうのを  
思い出しました？」

あれ？雲雀先輩が驚いた

「えっと……変なこといいました？」

「……優のいうとおりだよ」

入江正一が記憶戻った時に

それも思い出したって言ってたよ

優だけ指示通りの時間に当てられなくて  
ずっと気にしてたけど

記憶を戻った時に問題ないって知ったみたいだよ」

「そうですかー……」

「なに」

「うーん……（パラレルワールドの）未来の私って  
いろいろ考えてたんだなって思いましたー……」

やっぱり……そうだったんだ……

全部私の行動をよめてたんだ

出来るだけ私に時間をくれたんだ……

「……そう」

あれ？雲雀先輩が心配そうな顔した

「雲雀先輩どうしたんですか？」

「この時代の優がその話をきいた時と同じ顔してる」

「そうですか……」

やっぱりそうだよね……

この世界の未来の私も

自分がここにはいけないって思ってたんだ……

そうだよね……

やっぱり私がここにいるのはおかしいよね……

「……雲雀先輩

お願いしてもいいですか？」

「なに

「少しの間……手を握ってもらえませんか……？」

「はあ……」

ダメだったみたい……

少しでいいから雲雀先輩の体温を感じたかったな……

私はここにいてるってわかるから……

グイッ

「うわっ」

あれ？雲雀先輩に抱きしめられてない？

まあ体格が違いすぎるせいかな

半分抱きかかえられてる気がするけど……

……ええええ!!?//>//

「もつと素直になりなよ

泣きたいんだよね」

あー……もう全部お見通しみたい……

雲雀先輩があつたかいよ……

「……ありがとう……」

泣いてすつきりして……落ち着いたけど……  
どうしよう……この状態が……

すつごく恥ずかしくなってきた／＼／＼  
まあ散々泣いてしがみついたから  
今更な気もすつごいするけどさ!!

でも恥ずかしいのは恥ずかしいの!!!

「あ、あの……もう……大丈夫です……／＼／＼  
「そう」

……離してくれないんですけど

「……雲雀先輩?／＼／」

「優」

「なんですか?／＼／」

「僕に言えないことが多いから」

嘘ついてるみたいで

辛いと思ってるかもしれないけど

僕は気にしてないからね」

……やばい

今までずつと思ってたのを言われた……

「……先輩……」

もう1度私を泣かす気ですか……?」

「今、泣くかも知れないけど」

はつきり言った方がこれから楽になるからね」

「……」

「それに過去の僕が素直に言えるとは思わない  
だから今、僕が言った方がいいと思ったんだ  
……優 気にしなくて大丈夫だよ

過去の僕も言わないだけで思ってるよ」

「……雲雀先輩は……優しすぎです……」

「優にしかしないよ」

「……ありがとう……」

……1日でどれぐらい泣いたんだろ……

「……目が腫れそうです」

「……というか、もう腫れてるか……」

「そうだね」

「明日は1日中こっちでいます」

「フードかぶって過ごしてもいいけど……」

「正体を知ってる人の前でもかぶってたらおかしいし……」

「明日からだよね」

「へ？」

「僕が気付いてないとしても？」

「えっと……どういう意味ですか？」

「優の実力だったら」

「スケボーは1日で使いこなせるよ」

「……もしかして……」

「明日からこっちで過ごすために」

「今日は何も言わなかったの!？」

「凶星みたいだね」

「……そうですけど……」

「たまには向こう行きますよ……?」

「少しの時間だけね」

「……なんてわがままなんだ……」

「でもしばらく雲雀先輩に頭が上がらない……」

「それに修行は……でも出来るし……」

「……わかりました」

明日からこつちのこと覚えて料理とかしますね  
「楽しみにしてるよ」

……楽しみにしてくれるんだ

頑張ろう……!!

「はい！ 頑張ります!!」

あ……笑った……／／／

## 未来の私 9

遠くない未来に他のマフィアに狙われる  
つていうのも結構考えちゃうよねー

……善良なマフィア？だったらいいけど……  
もし、それ以外のマフィアに捕まったら……

……人体実験とかされそう……

……それは勘弁

骸君達つらかったんだらうな……

「優ー」

!?

「は、はい！」

どうしたんですか？

急に大きな声を出して……」

雲雀先輩にしては大きな声だったよねー

でも見た感じ何もなさそうだけ……

え……お茶のために大きな声を出したの？

「……何度も呼んだよ」

そうだったのか……

全然気付いてなかった……

「……すみません

ちよつと考えごととして……」

「……そう」

「どうかしたんですか？」

お茶はまだありそうだし……何の用事だろ？

「優がつらそうに見えたから……」

あー顔に出てたのか……

……ここは隠しても意味はないか……

「ちよつとマイナスな気分になってましたー

雲雀先輩が声をかけてくれて助かりました」

「……そう」



あーダメだ

情緒不安定だ……

この前、泣いたばかりなのにねー

修行もビミョーにはかどってないんだよ……

空でも飛んでボーっとしたいけど無理だしなー

うーん……あ！そうだ

「ちよつと気分転換ってことで

ツナ君のアジト行ってきますね」

「……わかった」

心配してるよねー……

んーどこに行こうかなー

あ、獄寺君と山本君の見舞いでもしようかな？

ツナ君は修行してるしねー

今の私が行っても邪魔になるしね

って、場所を知らない……誰かに聞くか……

お？このまま進めば誰かいるっぽい

「どうも」

京子ちゃんだ！

なんか重そうに籠を持つてるよ

あ、みんなの洗濯物か……

濡れてそうだし今から干すのかな？

「ヴェント君、どうしたの？」

「獄寺隼人と山本武がいる場所を知ってるか？」

「知ってるよー」

良かったー

これで迷子にならなくて済んだ

「悪いが……場所を教えてくださいませんか？」

「案内するよ？」

そのほうが嬉しいけど……洗濯があるし……

「気にしなくて大丈夫だよ」

「ちようど通り道だよ」

「あ、フードかぶってるのに」

洗濯物を見てたことに気付いたみたい

「そうか」

「じゃあ頼むよ」

「うん！」

「あー京子ちゃんは今日もかわいいな」

「貸しなよ」

「え？」

「これでも君より力はあるぞ？」

京子ちゃんよりは普通にあると思う

それに風で浮かせるから全く重くない（笑）

「ありがとう」

「案内してくれるお礼だよ」

「ずるしてるから感謝されると罪悪感が出るんだ……」

「だから気にしないでほしい……」

「うん」

「ヴェント君は獄寺君と山本君とも知り合いなの？」

「あ、案内しながら話しかけてくれた」

「ヴェントの場合はなんて話しかければいいのか」

「わからなくて困ってたんだよね」

「ああ」

「僕は沢田綱吉のことをよく知ってるからな」

「私のこともそれで知ってたの？」

「違うけど……そうしよう……」

「そうだよ」

「沢田綱吉の友達は把握してるつもりだよ」

「そうだったんだね」

ずっと疑問に思ってたの」

「あーそれもそうだな」

君は僕のこと知らないのに僕は君のこと知ってるのは  
確かにおかしいな……」

「うん」

最初に会った時ツナ君のことを  
知ってるって聞いて安心してたの」

「……悪い」

怖がらせたな……」

そこまで頭がまわってなかった……」

「ううん」

ヴェント君に会えてよかったよ！」

「そういつてもらえると嬉しいよ」

「そうだよー」

ヴェント君に会わなかったら

私、危ない目にあってたと思う……」

「……そうだな」

君が危ない目にあうかも知れないとわかってても  
外に出た理由はなんだ？」

兄ちゃんが心配だったと思うんだよねー

原作ははつきりと覚えてないけど

京子ちゃんが無理する理由は限られてるしあってると思う

「……お兄ちゃんが……心配で……」

やっぱりねー

「……心配するな」

1度、君のお兄さんに言ったことがあるんだ」

「え？」

「あんまり君に心配かけるなって」

「……そうなの？」

「ああ」

ちゃんと返事したよ」

「そうなんだ……」

「君のお兄さんは約束を破る人じゃないだろ？」

「うんー」

これで少しは安心すればいいけど……

京子ちゃんのお兄ちゃんはすぐ無茶するからなー

それに元々の戦闘スタイルが怪我しやすいんだよ

京子ちゃんが心配しちゃうのもしようがないよねー

「あ、この部屋に獄寺君がいて

あつちの部屋が山本君がいるよ」

「忙しいのにありがとう」

「ううん

ヴェント君と話が出来て良かった」

私も話せて嬉しかったよ……

「場所はわかったから最後まで運ぶよ」

「大丈夫だよー」

凄く気合が入った返事をしたなー

ここは任せようかなー

「重いから気をつけなよ

じゃあな」

「ありがとう またね」

うん……またね

……心の中でしか返せない私を許してね

未来の私 10

先に獄寺君からお見舞いしようかな？  
やっぱりここはノックするべきか

コンコン

「誰だ」

これは入っていいってことなのか？

それとも名前を言わないとダメなの？

名前を言ってダメだとか言われたらショックだ

もういいや……めんどくさい

ダメだったら獄寺君は誰なのかを聞かないと思うしね  
ガラッ

1人みたいだし普通に話そう

フードもとっちゃえ！

「私だよー♪」

「風早か……」

一瞬だけど勝手に入ったから睨まれた（笑）

「そだよー」

怪我はどう？」

「……まだ本調子じゃねえ」

良くないんだけど良かった（笑）

あの怪我で完治したとか言われたらビックリする

「それもそうだねー」

あの傷だもんねー」

でも動けそうなら回復してるよ

やっぱり根本的におかしい

普通は絶対動けないもん

「風早が応急処置してくれたんだってな」

誰かから聞いたのかな？

「そだよー」

もう少し早く着けば良かったけど……」

京子ちゃんともう少し早く会っていれば  
獄寺君達の怪我はましだったのに……

「お前は悪くねーよ」

「……そっか」

「ああ

……お前のほうこそ大丈夫なのか？」

「へ？」

「リボンさんから聞いた

この時代でヴェントは

いろんなマフィアに狙われてるって……」

「そうみたいだねー」

未来がこんなことになってるとは思わなかったよー」

本当に思わなかった……

白蘭さんのことは知ってたから

あんまり驚かなかったけど……

まさか私がこんなことになってるとは……

「……そうか」

「でも、この時代の私は風早優として

雲雀先輩と一緒に行動して過ごせてたってことは

獄寺君達が正体を黙っててくれてるってことだよ？

だからありがとうね」

「……オレに言っても意味ねーだろ」

「あるよ？

未来の獄寺君が黙っててくれてたってことは

今からずっと獄寺君は黙っててくれるってことでしょ？」

それに他のパラレルワールドでも

黙っててくれてるんだよね

自分の命の危険があるのに……

「……………そうだな」

「そうだよー

だからありがとうなの」

「そうか」

「思ってたより獄寺君が元気で良かったよー」

「次は山本君のところ行ってくるねー」

「……風早」

「ん？ どうしたの？」

「……オレでよかったらいつでも話を聞くからな」

「うわー……珍しい」

「獄寺君が私に気を使ってくれるなんて……」

「まあ凄い小声で言ったけど（笑）」

「ふふ♪ ありがとうー」

「みんながいてくれて良かったよ♪」

「……やっぱりお前はバカだ」

「ええええ!?!」

「どこで思ったのー!?!」

「事情を知ってるオレらの前でも」

「無理して元気出しても疲れるだけだろーが」

「……今はみんな自分のことで精一杯だからね」

「もちろん私も含めてね」

「10代目が後で知った時に嫌がるってオレに言っただろ」

「自分で言った癖にするからバカなんだ」

「……そうだね」

「それでもオレらを気にするならヒバリのところへ戻れ」

「あいつはこの時代に慣れてるんだ」

「無理に元気出す必要ねーだろ」

「……もうこの前……迷惑かけたよ」

「お前の迷惑はあいつにとっってはたいしたことねーよ」

「……そうかな」

「ああ」

「野球バカはほっといてさっさと戻れ」

「いや、戻るけど見舞いはするよ……」

「……ありがとう」

次に会うときはちゃんと笑うよ またね  
「ああ」

あー獄寺君の見舞いに来たのに  
私が元気をもらっちゃったよ

「……獄寺君」

部屋を出る前に聞こう……

「なんだよ」

「また迷惑かけるかもしれないけどいい？」

「オレらからしても」

おめーの迷惑はたいしたことねーよ」

「……ありがとう」

……あれ？今、普通に笑ったかも……

な、なんか恥ずかしい!!

さっさと部屋を出よう!!

あ、いい逃げだ……まあいいか

えつと……山本君はここだよね？

コンコン

「入っていいぜ」

こっちも1人みたいだし

フードはとっていいか……

「久しぶりー」

「風早じゃねえか 久しぶりだな!!」

こっちも元気そうだねー

やっぱり根本的におかしいよね

「そうだねー」

「小僧から聞いたけどヴェントで過ごすんだってな」

「そうだよー」

なんかいろんなマフィアに

狙われてるみたいだからねー」



「マファイアごっこも本格的だよな!!」

「……まだマファイアごっこと思ってるのね  
「そうだねー」

フードかぶってるときはヴェントって呼んでね?」

「ああ 任せろ!!」

これはこれで脱力できて安心する

ある意味すごい……(笑)

山本君にしか出来ないよねー

……私の迷惑はたいしたことないんだよね?

獄寺君、信じるよ!!

「ねえ、山本君」

「なんだ?」

「マファイアごっこ好き?」

「ああ 楽しーぜ!」

「私はそのメンバーに入ってる方がいいのかな?」

「なに当たり前のこと言ってるんだ?」

「そっかー」

「当たり前かー」

「風早、熱でもあるのか?」

「ないよー」

でも1人2役とかするから面倒かな? って思ったの」

「そんなことかよ」

「風早もいるから楽しーんだぜ!」

「……そっか」

「すっげー笑ってるけど何かいいことあったのか?」

「まあねー」

でもそれは秘密だよー」

「そっかそっか」

「じゃ、私は向こうのアジトに戻ろうかなー」

「ああ」

「またねー」

「またなー」

……当たり前か……

変なことを聞いても疑問に思わず

答えてくれそうなのは山本君だけだったんだよねー

聞けたのは獄寺君のおかげだね……

……たいしたことないって思ってもらえるかな

未来の私 11

「ただいまです」

「おかえり」

やっぱり嬉しいなー♪

あ……ちよつとほつとした顔したかも……

「みんなから元気をもらいました」

「……そう」

「……雲雀先輩」

「なに」

本当に大丈夫なのかなあ……

獄寺君……嫌われたら慰めてよ

「あの……もうお願いしちやダメですか……?」

あ……機嫌悪い……

やっぱり迷惑だよね……

「……ごめんなさい」

もう迷惑かけません」

部屋に戻ろう……ダメだ

迷惑がかかるよ

もうこのアジトにいないほうがいい

……どこに行こう

ツナ君のところに行けば修行の邪魔になるし……

……居場所がない

違う……私にはそんな場所はなかったんだ

「うわっ!？」

急に引つ張られた!？」

……抱きしめられてない……?？」

抱きかかえられてるの方が正しいか……

……それはどっちでもいいよ!

「あ、あの……」

「何度も呼んでるのに無視しないでよ」

「え!？」

「う、ごめんなさい……」

いつ呼んだんだろ……気付いてなかった

「僕が怒ったのは優が思ってるようなことじゃないよ」

「え……?」

「優の願いをいつ僕は迷惑と言った？」

「どうして『もう』なの？」

「いつでも言えればいいよ」

「……いいんですか……?」

「いいよ」

「それに……」

「うわああ!力が強くなった!!」

「凄く密着してる……」

「この役は誰にも譲らない」

……  
……  
……

「ひ、雲雀先輩……」

「なに」

「今のは……反則です……／＼／＼／＼」

「ど、どうしよう……」

「一瞬でいろいろ吹き飛んだ……」

「今、凄く恥ずかしいけど……」

「しばらくこのままがいいなあ……」

「凄くあったかいんだもん……」

「いいよ」

「で、でも泣きたいわけじゃないんですよ……?」

「それは関係ないよ」

「……ありがとう」

安心しすぎだ……

ちよつと眠くなったよ……

「雲雀先輩……もう大丈夫です」

「そう」

……時間が長ければ長いほど

この離れた瞬間が恥ずかしいかも……／／／

急いで自分の席に戻らなければ……！

顔が真っ赤な気がするし手で扇ごう

うう……笑ってる……／／

「優はわざわざ扇がなくていいよね？」

あ！そうだった……は、恥ずかしい！！

「そ、そこは気分です！！」

うー笑ってるー！！

「10年後の優もたまにするよ」

……10年たっても成長しないのか……

それは聞きたくなかった……

あれ……もしかして……

「あの、雲雀先輩」

「なに」

「未来の私は強いですか？」

うわ！頭を撫でられた

「……僕の前では弱いよ」

だから強がらなくていいんだよ」

つまり……10年たっても成長してないと……

「……よく泣いてるんですね」

10年後の私は大丈夫なのか……？

ちよつと不安になってきた……

「……それはある時を境に少なくなったよ」

「ある時？」

「そうだよ

これは言えないよ」

それもそうだよねー

今雲雀先輩に教えてもらっても意味がないと思う……

その時が来て意味があることだと思う

「その時を楽しみに待ってます」

少しでも強くなる日が来るんだ……

「必ずその時が来るよ」

「はい！

でもそれでも泣いちゃうんですね」

「優は泣き虫だからね」

「……そうですねー

雲雀先輩の前でよく泣きますね」

うん……

泣きすぎっていうぐらい泣いてる……（笑）

「僕の前以外では泣かないでね」

びつくりだ……そんなこと言うんだ……

でも……

「……もう雲雀先輩の前以外で

多分泣くことできないです」

「そう」

無理だと思う……

泣きそうと思うことは何度もあるし……

少しくずった時もあるけど……

泣き顔は見られてないし……見られたくないのかも……

「もし雲雀先輩がいない時は

誰にも見られないように泣いてますよ」

「……その時は僕にいいなよ」

「大丈夫ですよ

雲雀先輩と付き合ってから

まともに1人で泣いたことないですから」

結局我慢してても見破られてたもんね……

「そう」

本当に付き合ってから

まともに1人で泣いたことないや……

つまりそれだけ雲雀先輩を頼ってるんだ……

今、思うと……

ツナ君に雲雀先輩が怖くないか聞かれた時

殴られる怖さじゃないけど怖いつて思ったのは

嫌われたら怖いつていう意味だったのかも……

……私はある時にはもう頼ってたんだ

雲雀先輩はそんな私と付き合う気になったんだ

あーもう本当に今更だ

そう思うとなんで躊躇したんだろ……

なんか急にバカらしくなってきた

うん。獄寺君というとおり私はバカだねー

つてか、あの頃から好きになつてたんだ……

まったく気付いてなかったけど（笑）

「なに考えてるの」

あ、顔に出ってたのかもー

「んーちよつと昔を思い出しました」

「なに」

「そうですねー」

いつ雲雀先輩を好きになつたのかなと思ひまして

「そう」

あれ？聞いてこないってことは

未来の私が話したのかな？

いつか私も雲雀先輩に言おう……

あ、急にすつきりしたのかお腹が減ってきた

そういえばそろそろ時間だね

「ご飯、作ってきますね」

「楽しみにしてるよ」





## 未来の私 12

あ、聞くの忘れてたよ

未来の雲雀先輩の間に聞かないとダメだ

まあまだ時間はあるけど……

「あの……」

「なに」

「入江君の記憶が戻った時に

私が他のパラレルワールドでどうしてたか聞きました？

捕まっていなかったら……何か知ってる……」

最後まで言えなかった

なんか雲雀先輩の雰囲気が変わった気がして……

「えつと……また変なこと聞きました？」

「……僕達には教えてくれなかった」

「え……？」

「入江正一が教えてくれたのは

白蘭が世界征服を成し遂げた独裁者の演説の話だよ

僕達には優のことは教えなかった」

僕達ってことは……

「つまり未来の私だけ教えてくれたんですか？」

「……そうだよ」

……かなりひどいのかも知れない……

パラレルワールドの私の状況が……

多分独裁者の演説が起きてからも何かしてるんだ

「この計画を成功させて

白蘭さんと戦う前に入江君に聞きますね」

あ……なんか辛そうな顔をした……？

「……雲雀先輩……？」

「……僕と沢田綱吉が聞いていないのは

優が入江正一に口止めをしたからだよ

つまり……」

雲雀先輩も想像ついてるのか……

それもそうだよね

私だけ捕まってるじゃないっていうのでさえ  
かなりやばい状態だよねー

「大丈夫ですよ

その時には計画成功してますしー」

いや……ある意味失敗するけどね

でもこの計画を実行しないと

真6 弔花に勝てる可能性が低いだもん

出来るだけ安全に経験を積みたいし……

原作通りに進めたほうが予測が立てやすい

だから未来の私はこの計画を実行したんだろうね

「辛くなった時は

過去からきた雲雀先輩を頼ります」

「……わかった」

んー何とか信用してくれたって感じだね

「未来の私が聞いた時の反応が

そんなに辛そうでした？」

「……僕にもわからなかった」

雲雀先輩にもわからないってことは

本気で演技してるのかもしれない……

原作知ってるのからってというのは

無意識に本気で演技してしまう

そうじゃないとばれたとき大変だからね

「……わかりました

覚悟しておきます」

「……そう」

まあこの世界が勝てば元に戻るからね

それまで持ちこたえながら

頑張ってるはずだよねー……あれ？

「雲雀先輩？」

なんか凄く辛そうに見えるよ

「きゃっ！」

ど、どうしたんだ!?

凄い力で引っ張られて抱きしめられた!!

.....

本当にどうしたんだろ……

今回は私をからかっているわけじゃなさそう

「雲雀先輩……う？」

あ、離れたよ

「……少し痛かったよね」

「大丈夫ですけど……」

「……そう

お風呂に入ってくるよ」

「あ、はい」

夜じやないのに入るなんて珍しいねー

うーん、何かがあつたけど話す気はないってことか……

……私は頼りにならないしね

ツナ君の修行を見に行こうと思つたけど……

やめといたほうがいいのかな？

それとも1人にさせたほうがいいのかな？

うーん……雲雀先輩の機嫌が良さそうなら行こう

結局それが1番いいよね（笑）

あれ……？　そういえばいつ聞けばいいんだ？

私の記憶では入江君はずっとなにか作つてたような……

んーチョイスが始まるまでに聞けるかなあ……

ここは草壁さんに聞きに行くべきかなー

あ、草壁さんにお礼をしないと……

ずっと気をつかつてくれてたんだろうなー

だって私が思いつきり泣いた日から

まともに会ってないもん

多分、私が用事をしてる時を狙って  
雲雀先輩にいろいろ報告してるんだろぅねー  
もう大丈夫っていう意味で会いに行こう

あ、ここだね

うーん、障子だからノック出来ないし  
外から声をかければいいか……

そういえば……なんで私の部屋は和風のドアなんだろう？  
他にも私の部屋だけ違うのがあるんだよねー

あ！そっか

外から全く見えないようにしてるのか……

もし着替えてる時に少し開いてると困るもんね

「草壁さん 今、大丈夫ですか？」

「どうかしましたか？」

はやつ!?!出てくるのはやつ!?!

扉の近くでずっと待機してるのかな……

「今、ヴェントが日本にいる情報は

どれぐらい流れています？」

「いえ、流れていません

大丈夫ですよ」

「え？ 大丈夫なんですか？」

「はい。何かありましたか？」

「ミルフィオーレに見られたので……」

「恐らく情報を独占しているのでしょうか」

あ、なるほど

情報を流せば競争率が上がるもんね

場合によっては流す感じか……

これならチョイス前に入江君と話せるかもね

「わかりましたー

それと……もう大丈夫ですよ」

「……ですが」

「でも、たまに気をつかってもらいます

だから迷惑はかけますよ?」

「それは問題ありません

恭さんは風早さんに頼られることを望んでいます」

「……望んではいけないでしょ……」

ついツツコミをいれてしまった

いや、だって私の頼るはみんなと違うと思う……

絶対、めんどくさいタイプだよ

「望んでいます」

……草壁さんが譲らないよ

つまり本当に思ってるのか……

「……わかりました

もつと頼ることにします」

「は」

## 試練 1

ツナ君ごめんよ……

今日から修行を見に行くつもりだったんだ  
でも私には無理だった……

だって草壁さんと話している間に  
雲雀先輩がお風呂出てたみたいで

待ってなかったせいかな機嫌悪いんだもん!!

あんまり修行の時のことを覚えてないのにー!!

……やっぱり今日は変だよー

待ってなかったぐらいで機嫌が悪くなるなんて……

それで機嫌が悪くなるとトイレも行けなくなるよ

「雲雀先輩、どうかしました?」

わからないし直接聞いてみた

「なんでもないよ」

うわっ!また頭を撫でられた!!

ってか、最近よく頭を撫でられるよ

……ちようどいい位置にあるのか?

それともただの子ども扱い?

「未来の私にもよくするんですか?」

「しないよ」

え……じゃあなんですか?

「今の優は小さいからね」

……どっちにもとれる

まあいいか……嫌じゃないしね

あれ?

なんか珍しくツナ君のアジトに

つながってる道から誰かの気配がする

んー身長でいうと子どもみたいだ……

リボン君だったらいいけど念のためフードかぶろう

「なにしてるの」

「誰か来ます」

「そう」

……襖が開く

「ちやおツス」

“……リボーンだったのか”

「そうだぞ」

フードとつていいぞ」

「ありがとー」

リボーン君どうしたの?」

「ヒバリに頼みがあつてな」

あ……もしかして……

ツナ君の試練のタイミングか……

本物の殺意とか……凄い試練だなー

私だったら死ぬ自信があるよ

「赤ん坊その試練っていうのを

乗り越えたら僕の好きにしているんだろ」

「ああ」

うわー雲雀先輩がすつごい嬉しそうな顔してる……

なんでそんなに嬉しいのかわからない

あれ?リボーン君がこっち見た

「どうしたの?」

「……意外だなと思つてな」

「なにが?」

「優だつたら止めると思つたんだが……」

「んーそうだねー」

止めたいけど雲雀先輩の楽しみを

私には奪えないしー」

「……そうか」

「それにー」

私はツナ君のこと信じてるからね」

「なるほどな」

「リボン君もツナ君を信じてるから

雲雀先輩に頼んだんでしょ？」

「ああ」

「本当は雲雀先輩じゃなくて

私が担当出来ればもっとツナ君が安全なんだけど

私には無理そうだからねー」

別に試練乗り越えたら

私はツナ君には何もしないからねー

「そうだな

優には無理だぞ」

「だよねー

一応威嚇として殺気は出せるんだけどねー

殺意までは出せないと思うからね」

「そうだね

この前の僕に殺気出してたけど

殺意まで感じれなかったよ」

「ヒバリに殺気を出したのか!?!」

「あ、そっか

リボン君は知らないと思うけど

私がこっちの世界に来た時に背後に誰かいてて

雲雀先輩ってわからなかったからねー

なんか攻撃当たった後だったし

知らない場所だし……しようがないから

フードかぶってないけど警戒したんだよ

後、気配が1人しかないのもあったけどね」

いや……本当はフードかぶってたけどね

何も知らないふりしてたらこれであってるよね？

フードかぶってない場合は相手が1人の状況じゃないと

私は殺気を出さないと思うしねー



「なるほどな」

「リボーン君、それって明日するの？」

「そうだぞ」

「わかったー」

「優、見に来るの？」

「雲雀先輩の本気を見たいかなって思ってる」

自分の目で見てみたいんだよねー

この前はちゃんと見てなかったしー

「そう」

「そういえば雲雀先輩の匣兵器

ハリネズミでしたよね」

「そうだよ」

「可愛かったですねー」

ボオ

あ……出してくれた♪

つてか、炎を調節することが出来るんだ

出来るのにリングを使い捨てにしてるのね（笑）

クピッ♪

「かわいいー!!」

なんてかわいい声なんだ!!

おお！私にも懐いてる!?

手を出したら擦り寄ってくれたー♪

「なんて名前ですか？」

「ロールだよ」

「ロール♪」

クピッ♪

「きゃーかわいい!!!」

あ……雲雀先輩が笑った……／／／

あれ？リボーン君が固まった？

「リボーン君、どうしたの？」

「……ヒバリが笑ったのを初めて見た……」

「ええええ!?!」

よく笑ってるよ!?

「赤ん坊……僕でも笑うことあるけど」

「あ……2人の時以外は滅多に笑わないですね」

というか……あつたかな……

草壁さんの前でも笑うことがあつたっけ?

「そっか、ええ、そうだね」

「……そうか」

オレは帰るぞ」

あ、気をつかったのかもー

「明日、雲雀先輩と一緒に顔出しますね」

「ああ」

## 試練 2

リボーンはツナ君のアジトに行ったね  
もう話していいかな

「さつき私は変じゃなかったですか？」

「問題ないよ」

「それは良かったです♪」

ピイツ♪

「……かわいいー!!」

やばいかわいすぎる……!!

この子が戦うなんてビックリだよ

「ロール」

クピツ♪

おお!

雲雀先輩が呼べばすぐに振り向いて

大人しく指示を待ってるよ!!

「やっぱり雲雀先輩のいうこと

ちゃんとききますねー」

ヒバードも雲雀先輩のいうことをきくからねー

まあ私が呼んでも来るけどね

でもそれは雲雀先輩が言ったからだと思う

「当たり前だよ」

いや……確か……獄寺君の匣兵器は

全然いうことをきかなかったけど……

まあいいか……

「ロールは幸せだねー」

「どうして?」

「こんなにもかっこよくて強い人がご主人様でー」

クピツ♪

「ほら♪

ロールも思ってますよー」

あ……笑った……／／／／

あれ？なんか知らないけど機嫌が戻ってるよ  
まあいいか

機嫌がいいほうがいいしね

「優」

「なんですか？」

「もう1度言って」

もう1度？

あれ？さっき私は何て言った……？

／／／／／／／／／／

「いや……その……／／／／／／／／」

「はやくいいなよ」

やばい!!

無意識に爆弾発言をしてたよ!!

ど、どうしよう……

ドンドン雲雀先輩の顔が近づいてくる……／／／

これって目の前で言わないとダメなのー!?

ガラッ

あ……草壁さんが来た……

助かったー!!

もう大丈夫と言ったから顔を出したんだろうねー

「哲 なんのよう」

うわー！機嫌がまた悪くなった!!!

あ、ロールが私の後ろに隠れた(笑)

いつの間に雲雀先輩から離れたんだろう……

機嫌が悪くなると怖いつてわかってるんだね

「す、すみません……」

「あ、あの大丈夫ですよ

私はご飯の準備をしてくるんでー」

でもこのまま行ったら草壁さんピンチだよねー

「雲雀先輩」

「なに」

「後でちゃんと言いますね」

「そう」

……機嫌がなおった…… (笑)

「では、行ってきますね」

草壁さんどうぞ」

「は、はい」

草壁さんのためだ……

恥ずかしいけどちゃんと言おう……

今日は何のご飯にしようかなー

最近、和食が続いてるよねー

どうもアジトが和だからご飯も和になるんだよねー

あれ？ロールが私についてきたけどいいのかな？

「ロール？」

クピッ

おお！ちゃんと返事をするね！

「雲雀先輩のところにいなくていいの？」

クピッ

返事はしたけど全然わからない (笑)

まあいいかー

ロールが怒られそうだったら

私が連れて行ったっ言って私が怒られよう

「歩くの大変そうだねー」

おいで？」

ピイツ♪

肩に乗せてみたけど……やばいかわいすぎる!!!

ボンゴレ匣って……動物の可能性高いよね……

かわいすぎて男のフリ出来ないからかも (笑)

……ロールで慣れておこう

「お待たせしましたー」

「ありがとうございます」

「いえいえー」

お礼を言わただけ

草壁さんの口にはあつてるのかなー

今まで言われたことないんだけど……

まあ雲雀先輩の前で食べれないなんて言えないか……

「あ、雲雀先輩ー」

「なに」

「ロールに食べさせても大丈夫なんですか？」

「普通、匣兵器は食べないけどね」

「そうなんですか？」

「そうだよ」

ロールは普段何も食べないけど優の料理は食べるよ」

……なるほど

それで私についてきたのか……

「それは良かったです」

ものすごく食べたそうな顔して見られたけど

食べさせていいのか悩んだんですよー」

「そう」

そうとわかれば……ロール用のご飯を出そう

もちろんヒバード用もね

いやーこの子達は頭が良すぎるね

置いて私がいって言えば食べるからね

私は世話係になってるけど凄く楽だ（笑）

……ロールも戻ってしまっ  
たし  
草壁さんも気を利かせて部屋に戻ったし……  
つまり……

「……雲雀先輩」

「なに」

「お酒つぎますねー」

……逃げてしまった

くそーなんて恥ずかしいんだ!!

でも約束は守らないと……!!

「あの……雲雀先輩……」

「なに」

「雲雀先輩は……カッコよくて……

強くて……大好きです……／／／／／

あ……笑った……／／／／／

グイッ

「うわっ!？」

また引つ張られたよー

「んっ!？」

……

……

……

……

……

……

……抱きしめらると思っ  
たのに……!-

これは反則だ……／／／／

「これぐらいは過去の僕もして  
るよね」

……聞かないで下さい／／／／

「僕是我慢してるんだからこれ  
ぐらい許してよ」

雲雀先輩が我慢してるんだ……

それは凄い……

許してあげるべきだよね……？

「……あい……／＼／＼」

……未来で生きて行く自信がなくなりそう……



試練 3

んー今から行くんだよねー  
でもその前に……

「雲雀先輩ー」

「なに」

「先に行つててください」

「どうして?」

「ちよつと京子ちゃん達に顔を出したいなつて……」

ただ会いたいただけなんだけどねー

許してくれればいいけど……

「わかった」

おー許可がもらえたよ!

〃どうも〃

「あ、ヴェント君おはよう」

「おはようございます!」

うわー洗い物いっぱいだね

私と違って人数が多いからなー

これは大変そうだ……

〃手伝おうか?〃

「はひー 大丈夫ですよー」

今日はハルとイーピンちゃんが

担当なので頑張りますよ!!」

握りこぶし作つて言われちゃったなー

そこまで言われると手伝いにくいよねー

〃そうか

だけど家事も大変だろ?

何かあれば手伝うから言ってくれ〃

「修行はしてないんですか？」

「僕の修行は部屋で閉じこもるんだ

だから気晴らしに身体を動かしたくなるんだよ」

「そうなんですかー」

「ああ

これから顔を出す数が増えると思うんだ

僕は家事も出来るし君達より重いものを運べると思う

だから何かあればいつでも声をかけてくれ」

「ヴェント君ありがとう」

「ありがとうございますー！」

「じゃあ僕は沢田綱吉のところ行ってくるよ

あーそうだ」

「どうかしたの？」

「今日は多分沢田綱吉が疲れてると思うから

栄養があるもの頼むよ」

「ハルに任せてください!!」

「ヴェント君も体に気をつけてね」

「……僕は大丈夫だ

どちらかという君達の方が心配だ

辛いことがあったらいつでも言ってくれ」

「ありがとう」

「大丈夫ですよ

ハル達は元気ですよ！」

「……そうか

僕は行くよ じゃあな」

2人で無理して元気出してるんだろうな……

10年後の世界はあの2人にとって怖すぎるよね……

あれ？ランボ君とフウ太君だ

「どうも」

「久しぶりだもんね」

「今日も可愛いねー」

「頭を撫でてあげよう」

「……うん」

「いつも思うけどこの頭には何が入ってるんだろう（笑）」

「ランボ、元気だったか？」

「ランボさんは元気だもんねー」

「そうか」

「うーん……ランボ君は大丈夫かな？」

「大丈夫じゃなさそうになったら」

「何か甘いものでも作ろうかな？」

「プリンだったら今ある材料で作れると思うしー」

「僕達はツナ兄の修行を見に行こうかなって思ってたね」

「ヴェントも今から見に行くの？」

「そのつもりだよ」

「ランボ君いてるってことはフードかぶったままだねー」

「別にばれてもいいけど絶対間違っって優って呼ぶ……」

「おおーすごいことなってる……」

「扉を開けてすぐビツクリしたよ」

「悪いが僕は離れてみるよ」

「わかった」

「誰かと一緒に見てたら」

「雲雀先輩の機嫌が悪くなるかもしれないし……」

「あーこれは原作通りだなー」

「流石の私も覚えてる……」

「雲雀先輩のロールに攻撃されて」

「死ぬ気の零地点突破を出したねー」

あ、ボールになっちゃった……

「密閉され内部の酸素量は限られてる

早く脱出しないと死ぬよ」

「ふざけんな!!」

てめーら10日ぶりに現れたと思えば

10代目を殺す気か!! 出しやがれ!!」

「弱者が土に返るのは当然のことさ」

第一沢田綱吉を殺す理由があっても

生かしておく理由が僕にはない」

これ多分本音だよね……(笑)

作戦のことを忘れてないよね?

……わかった

これで死んじやったら1人でする気なのか……

「ヴェント!!」

てめえだっいたらこいつを止めれるだろ!!!」

え? 私に聞くの!?

つてか、この前と態度が違う……

まあ獄寺君はツナ君が第一だしねー

〃悪いな

今日はただの傍観者だ”

「てめえ!!!」

ふざけんな!!!」

うわー雲雀先輩の機嫌が悪くなった……

「んじやあオレ達も修行始めるか」

おお!!

リボン君が助けてくれた!

まあ獄寺君を助けたといってもいいけどね……

ツナ君……頑張れ……

「やめろおお!!!」

ツナ君が叫んでる……

多分あのひどいものを見てるんだよね……

少しでも近くにおいて応援しよう

「ヴェントなにしているの」

……私が斬ると思ったのかも……

〃別に近くにいっても問題ないだろ?〃

私はこの試練を見ないほうがよかつたかも……

原作を知っていても安心して見れない

ツナ君の叫び声を聞くと手を出したくなる

ラルさんが止めるように言うのもしようがないよ

本当に手を出したいもん……でも……

〃……僕は信じてるんだ

彼は誰よりもここが強いことを……〃

心臓を指しながら言っちゃったよ

「……へえ」

うわー雲雀先輩がやる気になっちゃったよ

……ツナ君ゴメン

原作より雲雀先輩がやる気を出しちやったかも……

「こんな力ならオレはいらない!!」

オレがボンゴレをぶっ壊してやる!!!」

……良かった

もう離れて大丈夫だね

やっぱりツナ君らしい良い答えだね

「離れるのかい?」

〃もう答えは出た〃

「そう」

おー無事壊れたねー

でもこれからが大変だよねー……

「これからは好きにしていいいんだろ? 赤ん坊」

「ああ……」

そういう約束だからな……」

「じゃあ始めようか」

うわー全くすごい殺気だよねー

でも涼しい顔でできるのは慣れてるからかな（笑）

雲雀先輩の嬉しそうな顔……

本当に好きだよね……戦うの……

やっぱり私には理解できないね

試練 4

やっぱり原作通り困った力だよね

コントロールが全然出来てない……

この力の使い方のヒントをあげても感覚の問題だし  
使って慣れていくしかないんだよねー

……私って無意味な存在だね

あ！いいことを思いついた！！

これはツナ君の修行の役に立つよねー

「ねえ君 僕が言ったこと覚えてる？」

「……勝つしかないんだろ」

勝負に出たみたいだ

ツナ君が雲雀先輩に真正面から突っ込んだしね

まあ当然カウンターの餌食になるよねー

「ぐあっ」

……見えちゃった

私ってすごい♪

流石神様……私の身体能力が高すぎ……（笑）

「君にはガツカリだな」

「雲雀恭弥」

「なに」

「口を出す気はなかったが……」

君は沢田綱吉をなめすぎだ」

私の最速よりは遅いんだよねー

だから原作と違って雲雀先輩も

見えてる可能性が高いんだよねー

つまり油断しすぎだよね

「この弱い草食動物に？」

「ああ 言っただろ？」

彼はここが強いんだ」

「ヴェントは彼をかってるかもしれないけど

僕はもう興味がない

直接手をくだす気にもならないよ」

あー全く気付いてないのね

本当になかなか原作壊せないね

「匣で……」

ドシユ

おーツナ君がロールを出したよ

あ、雲雀先輩が嬉しそうな顔してるよねー

これは合格ってことだよ

ドシユ

おおーロールが2匹になった

「気が変わったよ

もつと強い君と戦いたいな

それまで少し付き合おう」

やっぱり合格だよ

雲雀先輩が気付かないうちに匣をとつたからねー

……でもツナ君よくとつたよ

私が雲雀先輩と戦うなら絶対接近戦はしたくないね

だって肉を切らせて骨を断つ方法しかないもん

それぐらい10年後の雲雀先輩は強いと思つたよ

まあツナ君は接近戦しか出来ないからしょうがないけど

あ、考えてる間に

ツナ君が出したロールが負けちやつた

「悲観することはないよ

大空専用の匣も存在するらしい」

いや、私だったら絶対悲観する……

だって雲雀先輩はボンゴレリングじゃないんだよ

それなのにボンゴレリングで出したロールが負けた……

……雲雀先輩が根本的におかしい

そう思うしかやつてられないよ……

「ヴェント、哲」



「へい」

「悪い……もう少しここにいる」

「少しでも役に立たないとね」

「そう」

「うわーラルさんのスパルタだ……」

「パンパンパン」

「痛いビンタの音……痛そうだ……」

「はやくやめさせよう」

「ラル・ミルチ」

「悪いが彼をおろしてくれ」

「さっさと目を覚ますにはこれがはやい」

「……往復ビンタはひどいと思う」

「僕的能力使えば」

「今からの修行に役に立つと思うんだが……」

「能力？」

「そのためには彼をおろしてくれ」

「……ああ」

「……おろしてもらえたけどツナ君は大丈夫？」

「早く助けられなくてごめんよー!!」

「ヴェント」

「僕達はもう戻るから気にしなくていいよ」

「助かるよ」

「ランボ君がいなくなったら普通に話せるしね」

「よし！ツナ君、勝手に触るよ」

「うーん……どれぐらいするべきか……」

「あ、起きたー」

「ツナ君、お疲れ様ー」

「あ、ありがと……」

「やっぱりわかるのかな？」

流石にもうやめよう……

「いいよー」

少し楽になった?」

「うん」

「なにしたんだ?」

「私は自分の体力を触った人に

あげる事ができるんですよー」

「そんなことが出来るのか!?!」

「私は特異体質なんですよー」

幻覚とかもきかないですしー」

「……そうなのか」

「まあこれをすると思くなるんですけどね」

あ、あくびが出ちやったよ

部屋に戻って昼寝しよう

「優……づ……めん……」

「私はほとんど修行が終わってるから

別に気にしなくていいよ?」

「う、うん……」

それに役に立ってると分かったほうがやる気が出る

「雲雀先輩からは合格もらったみたいで良かったね」

「あれって合格なの!?!」

「合格じゃなかったら

多分ツナ君本気で殺されてたよー」

「ええええ!!」

ナイスリアクション (笑)

「雲雀先輩だからしょうがないよー

私以外の人はみんな敵だもん」

「……そうだね」

「なんで風早は敵じゃないんだ?」

「あれ? ラルさん知らなかったんですか?」

私は雲雀先輩の恋人ですよ?」

あ、ラルさんが固まった（笑）

それほど意外だったんだねー

「もちろん付き合ってるのは過去の雲雀先輩とですよ？」

「ああ・・・」

「今さっきの雲雀先輩とは未来の私が付き合ってますけどね」

まあ雲雀先輩には聞いてはいないけどね

でも絶対付き合ってるよ

「そうなのか……」

「そうですよー」

だから私には優しくして味方なんですよー

さて、そろそろ帰らないと

機嫌悪くなっちゃうから帰るよ？」

まあ本当は昼寝をするために帰るんだけどねー

でも言っちゃうと気にしちゃうから雲雀先輩のせいにした

私ってひどいね（笑）

「あ、ありがと」

「いいよ

私の能力がツナ君の役に立ってくれたら」

「うん」

「またねー」

「沢田……風早ってすごいんだな……」

「……オレもそう思います」

## 試練 その後

「ただいまです！」

「おかえり」

「やっぱり言ってくれてるんだ……」

「嬉しいなー♪」

「優」

「なんですか？」

「優は見えてたの」

「そうですよ？」

「そう」

「ちよつと楽しかったですか？」

「そうだね」

「んー……やっぱり私が悪いんだよねー……」

「……ごめんなさい……」

「どうして謝ったの？」

「私と戦えたらもつと楽しめるんじゃないのかな」

「って思ってた……」

「そうかもしれないけど……僕は嫌だよ」

「え!？」

「私が嫌だから止めてくれてるんじゃないんですか？」

「違うよ」

「そうだったんですか……」

「じゃあなんでしないんだろ？」

「雲雀先輩は強い人と戦うのが生きがいと思うのに……」

「僕は優を咬み殺したいとは思ったことは1度もないよ」

「今まで言ったことある？」

「だから今まで1度も言ったことないのか……」

「……それは嬉しいですね♪」

「そう」

「はい♪」

今日はハンバーグにしよう♪

あーそうだ!

昼寝する前に言っておこうー

「雲雀先輩」

「なに」

「明日、ちよつと朝からいないかも知れないですよ?」

「どうして?」

「京子ちゃんとハルちゃんの

精神状態がちよつと心配なんですよー」

「はあ……」

あれ?なんで溜息?

あ、そっか

「雲雀先輩は興味ないかもしれないですけど

私の大事な友達なんで心配するのは許してほしいです」

「……わかった」

「明日、朝ごはんでも作ってきますよー

家事が1つでも減れば楽になると思いますしね

あー! 作ったらすぐ戻ってご飯作りますからね」

「僕が作るよ」

えええ!?

私のわがままで行くんだから

ちゃんとすることはしたい!!

「大丈夫です!!」

朝は苦手ですけど頑張ります!!

それに今から昼寝しますし!!」

「……体力をあげたの?」

「はい

あ、雲雀先輩もいます?」

「僕のことはいいから休みなよ

体力が少ない時に風邪でもひいたらどうするの?」

「え? そういうことが今まであったんですか?」

「熱はなかったけど」

布団から出れない日があったよ」

へえー

私が体調を崩すなんて珍しいなー

「わかりました」

では、今から昼寝をしますね

起きてからご飯を作りますので

雲雀先輩は何もしなくていいですよ!!」

「……わかった」

その代わり少しでも体調が悪と思ったら

僕にすぐに言うんだよ」

「はい」

急いで寝よ

ちよつとでも体調が悪くなったら

全部雲雀先輩がしそうだし

ツナ君のアジトにいけなくなる気がする

ってか、なんか心配性がひどくなってない？

……気のせいと思いたい

「はひー誰かいませんか？」

ツナさん達お腹すいたんですかねー」

「そうだねー

急いで作った方がいいのかな？

………あれ？ ヴェント君？」

「どうも」

「なにしてるんですかー?」

「みんなの朝ごはん作ってるんだ」

「え!?!」

「たまにはゆっくりしなよ

ランボとイーピンの世話もあるんだし

自由な時間がないだろ?

まあいろいろ考えるところが

心の整理をする時間も必要だ」

「大丈夫ですよ!」

「そうだよー

私達は大丈夫だよ」

「君達にはこの環境が辛いのはわかかってるつもりだ  
ここにいる男子達は鈍すぎてびっくりしたぞ……」

あ……黙っちゃったな……

「……悪い」

「……ヴェント君が謝ることないですよー」

「そうだよ」

いや……私のせいだと思う……

「あーつまりあんまり溜め過ぎるなってことだ」

「おはよーってヴェントー!?!」

あ、ツナ君が起きちゃった

「悪い……結局時間なかったな……」

今度は作りに来る日を教えるよ

いろいろ考えるなら

ゆっくり寝るだけでも少しは楽になるはずだ」

「……ありがとう」

「ヴェントなんの話?」

「ってか、何してんのー!?!」

「あー朝ごはん作ってるんだ

もうすぐ出来るから食べてくれ」

「え!?!」

“多分まずくはないはずだ”

「オレはヴェントの料理が美味しいの知ってるよ」

“そういえば1度食べたか……”

「うん」

「ツナ君はヴェント君の料理を食べたことあるんだね」

「う、うん」

「1回だけだけどね」

「男の人で料理が出来るのは凄いですー」

「女だけどねー」

「あ、うん、うん！」

「そ、そうだね」

「……ツナ君、演技へたくそ」

「まあツナ君は元々人を騙せるタイプじゃないし」

「しょうがないか……」

“僕は料理が出来ないと困る環境で育ったんだ”

「そうなんですか？」

“ああ”

「さて僕の話はいいだろ」

「出来上がったし勝手に食べてくれ僕は戻るよ”

「ヴェントー！」

“なんだ？”

「こつちで食べていきなよ」

“悪い……今から向こうのご飯を作るんだ”

「そっか……」

「ツナ君は気にしすぎだよー」

“何度も言うが……僕より自分の心配をしろ”

「今日も彼と修行あるんだぞ」

「僕は彼を止めるつもりないから」

「君が頑張るしかないんだぞ？」

「まあ終わったらまた体力あげるけどね」

「そ、そうだね……」



雲雀先輩との修行を思い出してテンション下がった（笑）  
今のうちに帰ろうー

〃じゃあな〃

〃じゃあな〃

……あ！ 行っちゃった……

最近ちゃんと話してないんだよな……

オレ避けられてるのかな……

「ツナさんはヴェント君と

どこで知り合っただんですか？」

「え!？」

「昨日ハルちゃんと話してたんだ

ツナ君とヴェント君は仲がいいのに

私もハルちゃんも会ったことがないよねって」

会ってるんだけどなー……

「え、えーっと……

オレが困ってた時に助けてくれて……

それがきっかけで友達になったんだ」

「そうだったんですかー」

「うん

とつてもいい奴なんだ

でもすぐ無茶しそうな気がして……」

「無茶?」

「う、うん……

オレがすっかりしてないせいなんだ……

だからオレを頼ってくれないんだよな……」

優はオレに弱音をはかないし……

あ！オレが京子ちゃんの前で弱音はいちやった！

オレ、カッコわるー!!

「違うと思う」

「え?」

「いろいろ話せるのも友達だよ

でも友達だから話せないこともあるよ?」

え? どういうこと?

「そうですよー」

例えば、ハルはすっごーく嫌なことがあつて

誰にも話す気になりませんでした

でも、そんな時にハルはツナさんの顔を見るだけで

ハッピーな気分になります!

頑張ろうって思えるんですよ?」

「オ、オレの!?!」

「京子ちゃんもそういう時がありますよね?」

「うん」

きよ、京子ちゃんも!?!////

オ、オレの顔を見てー!?!

「お兄ちゃんを見てると凄く元気が出るんだ」

お、お兄さんだったんだ……でも……

「……そうだよな」

オレも優と話せば元気が出るし……」

優と話せば和むんだよなー

そりゃ京子ちゃんと話す時も和むけど……

緊張しちゃうし……

あ! つい優の名前を出しちゃったよ!!

「ほら ツナさんも経験があるじゃないですかー」

気付いてねえー! セーフ!

オレが気にするから優は避けてたんだ……

優と話せばオレが和むのと一緒で

オレと話せば優は和んでたのかも……

オレが優のことをずっと気にしていたら

「優はオレのことをもずっと気にするのかも……  
そうか！」

だからオレに話そうとせず気にするなって言うんだ!!

「……う、うん！」

ハル、京子ちゃんありがとう!!!」

修行が終わったら優と話しよう!!

……修行の後に会いに行く元気があるといいけど……

## 修行 1

くとある会議室で

「この計画の狙いは幼いボンゴレファミリーなんて  
カモではなく、むしろ奴らの背負ってる  
ネギの方でしょう」

「ネギ……!?!」

「リングリング ボンゴレリング」

「さすがグロ君 鋭いなあ」

「たしかに最高峰のリングとしての魅力はわかるが……

すでに我々には同等の力を持つ

マーレリングがあるのですし……」

「ま……まさか……」

「わかってくれたみたいだね

僕が欲しいのは究極権力の鍵

7・と……もうひとつ……」

「もうひとつ!?!」

僕があれだけ執着してるのに

みんなわからないんだあ

「ヴェント君だよ♪」

「たしかに世界で唯一風の波動を持つ人物だが……

7・には風のボンゴレリングは関係ないはずです」

「彼には何かがあるのは確かだよ」

そう……彼は何かを知っている

どの世界でも僕が力をつけるとすぐやってくるんだから♪

僕の能力を知っていたのかなあ？

誰よりも僕のことを警戒してるんだよねー

おかげで何度も計画がくるちやったよ

まっ ヴェント君がレアな存在で助かったよ

身動き出来なくするのは簡単だからね

でも肝心なところでいつも逃げられちゃうんだよねー

はやくその顔を見てみたいなあ

「どういうことですか ボス」

「それは教えてあげないよ」

でもどうしても欲しいんだ」

クシユン!!

なんかいきなりくしゃみが……

「風邪？」

んー体調は問題ないと思うんだけどなー

あ、早く返事をしないと寝ないといけなくなる

「多分違いますよー

誰かが噂でもしてたんじゃないですか？

私って有名人ですしー」

「そう」

「今日もツナ君と楽しむんですか？」

「そうだよ」

楽しむことは否定しないんだ……

ツナ君ガンバレ（笑）

「じゃあ雲雀先輩が終わった後に

私もツナ君に修行つけてあげようかなー」

少しずつ炎を使い分けてると思うんだよねー

まあツナ君は無意識だけどね

「なにをするの」

「あの匣兵器で避ける練習したら

少しはあのグローブ使いこなせるかなーと……」

「そう」

あ、雲雀先輩が反対しなかったよ

やっぱりコツをつかめるきつかけになるかもね

「……飽きた」

あー今日も凄かったねー

だって雲雀先輩が容赦ないもん……

まあ気絶するまでボコボコにしないから

作戦のことは覚えてると思う……

「僕は帰るよ」

「はい」

さて、ラルさん」

「なんだ」

「少し私もツナ君の修行の手伝いしていいですか?」

「構わんが……」

「え!?!」

優がオレにするの!?!」

おおーさつきまで倒れていたのに

ビックリして起き上がったよ(笑)

「私の匣兵器で逃げる練習したら

そのグローブ使いこなせるかも知れないよ?」

「匣兵器?」

「そうだよー」

3つある内の残り1つだよ」

「そういえば……」

「まあその前に私の体力あげるよー」

「あ、ありがと……」

まあいつもより少ないのは許してねー

だって私も一緒に修行するからね

さて、匣を開けようかな

ボウッ

カチッ

「優……なにこれ……」

「おもちゃ？」

「えええ!？」

ビックリしてるけど

絶対ツナ君もそう思ってたでしょ (笑)

「ゴムボール飛ばすおもちゃの銃なんだ」

ゴムボールっていつでも

ものすつごい柔らかいけどねー

スケボーで練習した時に当たっても

あんまり痛くなかったしー

雲雀先輩のためと練習用に作ったんだけど

練習した時に怪我したらダメだから

痛くないようにしたんだろうなー

多分神様に無理を言って作ってもらったと思う (笑)

こんな柔らかいボール見たことないし (笑)

流石神様だね

「撃つボールを避けるの？」

「そうだよー

といつても、10球あるよ」

「でも……すぐ避けれると思うけど……」

「珍しく自信満々だねー」

「え、あ、でも……」

「ふふ♪

とりあえずやってみるからハイパー化しなよー」

「う、うん」

あ、ツナ君の雰囲気がかわった

いつ見ても凄いやねー

「優 どうするんだ」

「頑張つて避ければいいだけだよ

まあそのグローブを使いこなせないと

避けれないと思うけどー」

「どういふことだ」

まあ説明するよりやってみるのが一番か……

「ラルさん私の近くににいててくださいいね」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行くよー」



## 修行 2

パンパンパン

とりあえず3球撃ってみただけど……

相変わらず凄い速さだね

でもツナ君は何とか避けたね

「速い……」

「ラルさんビックリするのははいですよ」

ツナ君は後ろから来るボールに気付いてなさそうだね

「な!？」

おーギリギリ避けたよ

ボンゴレの超直感は恐るべし!

まあ急いで避けたからか壁に突っ込んだじゃったけどね

「そのボールは跳ね返るんだ

だから避けたら終わりじゃないんだよ」

3球でも苦戦してるとつばいけどー

これだけ広いんだし当たる確率は低いよねー

パンパンパン……

残りのボールを違う方向に撃っちゃった(笑)

「!？」

ドンドン厳しくなるよー

私もそろそろ本気を出さないとやばいね

「ちなみにボールとボールが当たれば

方向が変わるのは当たり前だけどー

私の性質の加速でスピードもあがるんだ」

簡単と思つてなめてかかるとマジでやばい

……まあ私が1番なめてたけどね

だから痛い目にあつた(笑)

これが固いボールだったら致命傷になつたよねー

やわらかいボールだから助かつたよね……

「……風早

なぜお前とオレには当たらないんだ」

「ラルさん忘れちゃだめですよー」

私は風が操れるんですよ?」

「それが関係あるのか?」

「ありますよー」

軌道をよんで私たちに当たる前に

風のバリアーで跳ね返してるんですよ

だから私の修行にもなるんです」

「なるほど……」

「だから話かけると危ないですよ」

バリアーは集中力がいるからなー

それにしても私とツナ君が1度に鍛えられるし

未来の私はいろいろ考えてるねー

私はなんとかなってるけど

ツナ君は使いこなせないから

いっぱい当たってるなー

あ、私の方の炎がきれちやった

「ツナ君、お疲れ様ー」

あ、ツナ君も普通に戻ったよ

「ゆ、優……」

「なに?」

「はやすぎ……」

私の修行をなめてたんだろねー(笑)

まあ実際、優しいほうなんだけどね

「そんなことないよー」

まだ速く出来るもん」

もっと速くすれば私も当たってるしー

流石にバリアーで全部防ぐのは難しいからね

「え!？」

「ちなみに私の最速ボールを

避けれるようになったら

雲雀先輩に勝てるかもねー」

「えええええ!？」

「雲雀先輩も避けれないって言ったからね」

ちなみに……私は避けれたけどね……（笑）

まあ風で気配をよんでるから避けれるんだけどね

風で気配をよまなかったら無理だよ

それぐらい速すぎる……

スケボー使ったらよめなくても避けれるけどねー

でもその場合はスケボーのコントロールに必死になる

やっぱり私の加速は怖すぎる（笑）

使いこなすのが難しすぎるもん

ただまっすぐに避けるだけなら楽なんだけどなー

ツナ君の炎よりたちが悪いよ

ボンゴレ匣が銃とかだったらどうしよう……

使いこなせる自信がない……

「……それってオレも無理じゃん!!」

超直感を鍛えれば避けれるかもしれないけどなー

最初だってそれで避けたんだしー

「沢田……何を弱気な発言してるんだ!!」

これを避けれるようになれば

あの雲雀恭弥に勝てるかもしれないんだぞ!!」

あ、ラルさんのスパルタが始まった（笑）

「流石に最速は無理だと思っけど……」

これを使って練習したら

そのグローブの使い方のコツがわかるかな

って思っただけど……どうかな？」

「風早！

明日からこれも練習メニューに入れるぞ」

「だつてきー」

ツナ君、頑張つてね♪」

「……う、うん……」

かわいいそうに……

原作より私のせいでスパルタだね！（笑）

「まあ周りの視野も広げる訓練にもなるから

やらないよりは良いと思うよ？」

「そ、そうだね」

「じゃあ私は帰るねー」

また明日雲雀先輩の修行が終わったらしようね」

「うん」

「また明日ー」

ついでに他の人の修行も見に行こうー

おーここも和風なのねー

修行中だと思うし声をかけないほうがいいかな？

そつとあければいいかー

ガラッ

ズガガガガ……

うわーやってるやってるー

リボン君も容赦ないなー

両手撃ちしてるし……

つて、こつちに来ないでよ

いや……避けるけどさ……

だつて汚れるのが嫌だ（笑）

でもリボン君の腕だったら

私に当てないように出来ると思うんだよねー

そろそろ避けるのが面倒になってきた  
もう風でそらそうかなー

「休憩だぞ」

あ、私の考えが読んだのか終わったよ

「山本君、当たり前すぎだよー」

「風早が凄すぎだろ……」

お前、武器を持ってないだろ……」

私は風で軌道をよんでるからねー

山本君よりは避けるのが楽だからね

それに片手しか私を狙ってなかったしー

「そうだけどー」

私よりリボン君のほうがすごいよー

2人相手によくやるよー」

まじで……

その小さな身体で何発撃ったんだ……

「優の実力を山本に見せたくてな」

「なるほどねー」

んー……山本君の武器って刀だし

もしかして私も刀を持ってしたほうがよかった？

山本君はまだ死ぬ気の炎を完璧に

使いこなせてなさそうだしー」

刀がよく竹刀に戻るしねー

あ、本当にそんな気がしてきた

リボン君は私が刀を出してほしかったのかもね

「そうだな

山本、休憩しながら見とけ」

あ……今から私が見せるのね……

謝って終わりじゃないのか……

「お、おう」

## 修行 3

これは私が何を言ってもするんだろぅなー  
……山本君のためだ……頑張ろう

「あ、始める前に……リボン君」

「なんだ？」

「山本君のために

私も攻撃するから当たらないでねー」

この前は攻撃しようとしなかったからねー

ビックリしたら大変だしね

まあ急に攻撃してもリボン君は問題ないか……

「わかったぞ

優がオレに一太刀でも浴びせたら終わりな」

「え……当てないとダメなの!？」

「そうだぞ」

うー決定事項みたいだ……

どうしようかな……終われる気がしない（笑）

んーとりあえず威嚇で殺気はいるよねー

ブワツ

うわーリボン君も出してきたー

空気がピリピリする……

本当にこういうのは嫌いだね

んーどうするべきか……

何も考えずただ突っ込んでみようかなー

キンツ!!

ただ走って刀を振りぬいただけだから

防がれるのもわかるんだけど……私は足が速いのになー

全くどれぐらい強いんだか……

それも受け止めた後すぐに銃に変えて攻撃もしてくるし

まあ当たらないけどね

「優、真面目にしろよな」

「えー真面目にしてるよっ。」

「ウソつくな」

「当たらない前提で攻撃しただろ？」

「ばれてる（笑）」

「リボン君があれぐらいじゃ」

「当たらないってわかってるからねー」

「避ける前提で攻撃しただけだよー」

「すぐに離れるつもりだったしー」

「風でよんで避けることを考えると」

「距離を開けたほうが楽だからねー」

「本気出せ」

「出してよー」

「今も必死に走りながら逃げてるじゃん」

「かわしながら話してる余裕があるだろ？」

「もしもの時は風で軌道をそらせるから」

「心の余裕が出来るんだよねー」

「まあねー」

「なんか山本君のためにしてるけど」

「リボン君は私の実力をはかろうとしてない？（笑）」

「この前は私が攻撃しないって言ったから」

「はかろうとしなかったと思うんだけど……」

「まあいいか……」

「んー山本君のためにしてみようかなー」

「ってことで、もう1度突っ込むしかないか……」

「オレに同じ手を何度もすると痛い目にあうぞ」

「それぐらいわかってるって……」

「でもわかかって突っ込んでるからね」

「それに私もわざとさつきと同じように」

「リボン君に突っ込んでるしね」

「それはあいたくないなー」

「えっと……確か……」

このタイミングで離して  
すぐに手を持ち替えて一気に振りぬく……

「!?」

おー2人ともビックリしてるね♪  
だけど……

キンツ!!

防がれちゃったなー

「……なんで優が使えるんだ?」

あ、リボン君の動きが止まったよ  
簡単に離れることが出来たねー

いやーまた避けながら距離をとらないといけないかな  
って思ってたからラツキー♪

「さつき山本君がこの技を使ってた?」

名前は知らないけど……」

みようみまねだから使いこなせてるかは知らないけどね

「時雨蒼燕流 攻式 五の型 五月雨だぞ」

「へえーカツコイイ名前だねー」

うーん……今で当たると思ったんだけどねー

やっぱり見たことある型は防がれるかー

「でももう山本君の他の技を知らないから

あんまり参考にならないねー

ごめんねー」

「問題ねえぞ」

んーどうしようかなー

あれを試してみようかな?

山本君は参考に出来ないけどね

まあしようがないよねー

私は純粋な剣士じゃないんだもん

トンツトンツ……



優が山本のためにオレに攻撃すると言ったぞ  
ついに優の実力が見れるぞ

この前のはわからなかったからな

威嚇でこれほどの殺気を出すのか……

確かにヒバリの言うとおりに殺意までは感じれねえが……

問題ねえレベルだぞ

突っ込んで来た……速いが……

オレには当たらないと思って攻撃したな

オレがすぐ撃つても当たってねーしな

優がオレの実力をはかっているみてーだぞ

真面目にしてねえな

「真面目にしろよな」

「えー真面目にしてるよー」

してねえな

「ウソつくな

当たらない前提で攻撃しただろ？」

ばれてるって顔に出てるぞ

「リボン君があれぐらいじゃ当たらないって

わかっているからねー

避ける前提で攻撃しただけだよー」

オレが当たらないと思つてて

なんで突っ込んできたんだ？

まず優を本気にさせねえとな

「本気出せ」

「出してるよー」

「かわしながら話してる余裕があるだろ？」

「まあねー」

余裕ありすぎだぞ……

優の師匠よりオレは怖くねーのか……

またさつきと同じように突っ込んできたぞ  
世界最強ヒットマンをなめてるな

「オレに同じ手を何度もすると痛い目にあうぞ」  
「それはあいたくないなー」

わかってて突っ込んで来てるのか？

「!？」

これは……山本の……

だがオレはこの型を知ってるから当たらねえぞ  
キンツ!!

オレの記憶では……優は雨戦を見ていなかった  
「……なんで優が使えるんだ？」

「さつき山本君がこの技を使ってた？」

名前は知らないけど……」

確かに優が避けてる時に山本が出したが……  
一度見ただけで実践で完璧に使いこなせたのか  
恐ろしい才能だぞ

「時雨蒼燕流 攻式 五の型 五月雨だぞ」

「でももう山本君の他の技を知らないから

あんまり参考にならないねー

「ごめんねー」

山本のためにしたのか……

ますます優の本気を見てみてえぞ

「問題ねえぞ」

トンツトンツ……

なんだ？軽くジャンプしてるだけなのか？

これが優が普段から使ってる型なのか？

ダン!!

「!？」

スパン

さつきと比べもんにならねえぐらいの  
スピードで突っ込んで来て

峰をかえしてオレの服だけ斬つたな

## 修行 4

「……ダメだったなー」

「やっぱりリボン君はすごいなー」

「合格だぞ」

「オレに一太刀浴びせたじゃねえか」

「一応、当たったけどー」

「私もペイント弾がほつぺたにかすったからねー」

「やっぱり実践ではこれは使えないなー」

「問題ねえレベルだぞ」

「私は怪我しちやダメって約束してるから」

「ほつぺたにかすつたらダメだよ？」

「だからリボン君が合格って言っても」

「私からしたら不合格なの」

「(まだヒバリとの約束を守ってるのか……)」

「優の合格のレベル高くねえか？」

「そうなんだよねー……」

「大変なんだ……」

「今、絶対遠い目をしてるよ……」

「んー雲雀先輩に相談してみようかなー」

「流星にそろそろきつい気がする」

「まあ出来るだけ努力はするけどさ……」

「やっぱりスケボーの方がいいよねー」

「スケボーはさっきのより速いのか？」

「そうだね」

「最高速度はさっきの倍はあるよ」

「まあそれはコントロールが難しいけどね」

「!? そんなになのか!？」

「そうだよー」

「さっきのはただ風を足に圧縮させて」

「放って勢いつけただけだから」

そこまで速くなかったでしょ？

それにまっすぐにしか行かないから  
当たりやすいんだよねー

いくら私のはじいても一直線で来るって  
わかったら相手は反撃しやすいからね  
だから全部落とせずかすったんだよねー」

「なるほど……」

何度も突っ込んだのは

オレに最速スピードを勘違いさせるためか？」

「そこまで考えてなかったよー

ただ突っ込んだだけで一太刀浴びせたいな  
って思っただけだよ」

まあ途中で勘違いしてるかな？と思って

はやく終われるんだったら終わりたいって思っただけだね（笑）

私が長くなれば長くなるほど

山本君の修行時間が減っちゃうしー

まあ見るのも修行だけ……

獄寺君のところにも顔を出したいんだよねー

後……ちよつと疲れてるんだよねー

「そうか」

……今、ニヤって笑ったよ

ますますリボン君に目をつけられたかも（笑）

……それは怖い

「まあ私は剣士を目指してるわけじゃないから

怪我しないで倒す方法を教えてもらってるだけだよ」

「この前、言っただ奴にか？」

「そうそうー

私のお師匠さんはいろんな型や技を知ってるからね

腕力がない私でも戦えるように教えてくれるよー」

神様だからね

いろんな型知ってるよ

山本君のところのは特殊だったから  
教えてもらわなかったけどねー

だってどこで習ったか説明するのが大変だもん  
「そうか」

「うん」

特に人体の急所？っていうのかなー

どこに当てれば気絶できるとかも

教えてもらってるよー」

「なるほどな」

優は人を傷つけるのが嫌いって言ってたしな」

「そうそうー」

お師匠さんとの修行中は

一太刀浴びせるのが合格じゃなくて

気絶させることができるレベルで合格なんだよねー」

「優の強さの理由がわかったぞ」

「そう？」

まあお師匠さんには今まで一太刀も

浴びせれたことないけどね

私なんて子ども扱いだよー

ものすごく手加減してもらってるしー」

神様に一太刀浴びせれたら凄いやねー

「!？」

「それぐらい強くてなんでも作れる天才だよ」

話を換えよー

これ以上突っ込まれると困るしね

「まあ山本君少しは参考になった？」

「……ああ」

「私と違って山本君は剣士だねー」

「そうだな」

「風早、小僧どういう意味だ？」

「私を見てるときの視線が」

「剣士を見てる視線だったよってことー」

「？」

「……自覚がないんだ（笑）」

「リボン君の殺気も凄かったけど」

「私は山本君の視線の方が気になったのになー」

「んーすっごい集中力だったってことだよ」

「そっかそっか」

「さて、次は獄寺君を見てくるかなー」

「わかったぞ」

「風早またなー」

「うん」

「またねー」

「獄寺君はここでしてるんだっけ？」

「んーノックしてから入ろう」

「入ってすぐ狙われるのはもう嫌だ（笑）」

「コンコン」

「誰？」

「風早ですよー」

「ビアンキさん、獄寺君の修行はどうですか？」

「全然ダメよ」

「私の嵐サソリをまだ1分間に2匹しか」

「倒せるのがやっとよ」

「あー少し不満みたい」

「んー……そうですかー」

「でも獄寺君って……」

「少し獄寺君と話してもいいですか？」

「ええ いいわよ」

「休憩にするわ」

「助かりますー」

私が獄寺君のところ行きますんで  
気にしないで下さいー」

「そう

隼人少し休憩よ

今から風早さんがそつちに行くわ」

へえ……

音声は繋がるのが出来るのか……

それは困ったなー

「あ、できれば会話聞いてほしくないです」

「わかったわ

音声切っておくわ」

気が利くいいお姉さんだね！

「助かります♪」



## 修行 5

「獄寺君お疲れ様ー」

「……………なんだよ」

えー…………

笑えるようになったら顔をだすって約束したのに…………

まあこの前ヴェントとして会ったからいいか…………

「あんまり修行がうまくいってないって聞いたから  
気晴らしに話でもしようかなって思ったの」

「……………」

あらー黙っちゃった

はつきり言い過ぎたか…………

「あのさ、獄寺君って

今までツナ君に教える時は理論的に教えてたでしょ？」  
何度も見たことあるしー

「……………ああ」

あ、返事してくれた

やっぱりツナ君の名前を出すのは正解だね！

「でねー私思ってたんだけどー

獄寺君って体で覚えるより

頭を使うほうが向いてると思うんだよねー」

「……………どういう意味だ」

「ビアンキさんには悪いけどー

こういう修行の仕方は獄寺君には

むいてなさそうっていう話だよ」

「なんだよそれ」

「これ以上、ヒントはあげられないかなー

後は自分で考えなよー」

「ちよつと待て!!」

最後まで言いやがれ!!」

「言ってもいいけどー」

私が教えても素直に聞く？」

「……………」

ほらー黙った(笑)

「でしよ？」

それにもしこれから行き詰った時に

ずっと教えてもらうつもりはないでしよ？」

「…………そうだな」

「獄寺君だったら答えが絶対わかるよ」

「…………ああ」

よしよしー

獄寺君は身長がやっぱり高いよねー

背伸びをしないと届かない

前は座ってたから楽だったんだけどねー

「なっ!?! なにすんだよ!!」

「ふふ♪」

久しぶりにしちやった♪」

「なっ!?!」

「前も落ち込んだ時にしたよねー

今回も大丈夫だよ」

「…………サンキュ」

もう大丈夫かな？

少しは冷静になったと思うし…………

獄寺君は出来ない自分に腹が立つから

視野が狭まって気付かないと思うんだよねー

「じゃ、私は帰るよー」

「ああ」

「またねー」

「ビアンキさんありがとうございましたー」

「ええ」

「少しは気晴らしになつたら  
いいんですけどねー」

「……そうね」

2人つて似てるよねー

やっぱり兄弟だ

獄寺君がうまく行かないのは

自分のせいと思つて視野が狭くなつてるよ

「大丈夫ですよ

獄寺君はちゃんと強くなりますよ

ビアンキさんの弟なんですから♪」

「……そうね

ありがとう」

あらービアンキさんは大人だ

私の言つた意味を理解しちゃつたよ

「では私は帰りますねー

あ、京子ちゃんとハルちゃんのことを

お願いしますね」

「もちろんよ」

「ではまたー」

「ええ」

……よし！

機嫌が悪くなつてないか心配だったけど大丈夫っぽい！

「ただいまです

ちよつと遅くなりましたね」

「おかえり

なにしてたの」

今日も言つてくれた♪

「みんなの修行をちよつと見に行ったら

山本君のためにリボン君と手合わせして

なぜか一太刀浴びせるまで終わらせて

もらえそうじゃなかったので頑張りましたよ」

本当になんでするはめになったんだ……

……山本君のためじゃない気がするもん

まあいいや……

もう終わったことだし……

「それは見たかったよ」

「へ？ そうだったんですか？」

「そうだよ

赤ん坊の実力と優の実力が両方見れるからね」

「リボン君はわかりますけど

私の実力も見えたかったですか？」

「そうだね

優は滅多に本気にならないからね」

未来の私も逃げてばかりなんだね（笑）

「それもそうですね」

といつてもーお互い本気じゃなかったですよ

探り合ってしまったって感じでしたよー」

本当にそんな感じだったよねー

まあリボン君が本気で殺しの技？を使ったら

話は別だったと思う……

それとペイント弾は戦略がかなり減ると思うしねー

「そう」

「はい

それに今回リボン君に一太刀浴びせた技は

実践では無理ですしねー

ほっぺたにペイント弾がかすったので使えませんよ」

「……そう」

「そうですよー

修行が大変なんですよ?」

「……僕が守るから優はしなくていいよ」

「それは……反則ですよ……／＼／」

うう……恥ずかしくて顔があげれない……／＼／  
でも言いたいことは言わないと……

「雲雀先輩に守ってもらうのは嬉しいですけど……

私にも守りたいものがあるので頑張ります」

「……わかった」

うわっ!頭を撫でられた

なんかほめられてる気がして嬉しいなー

「……優」

「なんですか?」

「守りたいものに僕も入ってるの?」

え?入ってないと思ってたの?

思わず顔をあげてしまったよ

「当然です!」

雲雀先輩の守りたいものも入ってますよ」

「守りたいもの?」

「並盛の風紀とかですよ

普段は書類しかできませんけどね」

「そう」

あ……笑った……／＼／

「……だからかな……」

「なに」

「私のせいで風紀が乱れるから……

少し辛いですよ」

私がここにいてだけで風紀が乱れるんだよね……  
だから本当はいないほうがいいんだろうな……

「優のせいじゃないよ」

10年後の雲雀先輩は優しいなー……

「……そうですか」

あ……ダメだ……泣きそうだ……

「少し疲れたんで部屋に戻ってお昼寝します」

「優」

「なんですか？」

「言ったよね」

僕の前以外で泣かないでって」

……ばれちゃったみたい……

本当に敵わない……

ぐいっ

雲雀先輩はあつたかいな……

「……ありがとう……」

「問題ないよ」

「ん……？」

のどかわいた……寝すぎたみたい……

……あれ？私って寝てたっけ？

あ、思い出した……泣いて寝ちやつたんだ……

雲雀先輩がわざわざ運んでくれたのか……

はあ……

化 1

昨日のツナ君の修行……

私がしていることは効果あるかなあ……？

どうなんだろう……？

あんまりはつきり言ってもツナ君のためにならないしねー  
難しいところだよねー

あれ？ヴェント用のケイタイがなってる

んーどこからかけてるかわからないみたい

とりあえず出るか……

あ、白蘭さんとかは勘弁してよ（笑）

「誰だ」

『クフフフ 僕ですよ』

普通に話をして大丈夫ですよ』

これは電話からじゃなくて

骸君が私の頭に語りかけてるねー

「骸君どうしたの？」

語りかけてくれて骸君からの電話ってわかったけど

電話は必要だったの？」

『必要ですよ』

あなたと会話はできませんからね』

「あ、それもそうだね

どうしたの？」

用事がなかったら電話なんかしないと思うしー

『少々困ったことになりました』

「困ったこと？」

へえー

骸君が困るなんて珍しいねー

『今、クロームが黒曜ランドにいるのですが……』

あーしまった!!

クロームちゃんの保護するの忘れてたー

私のバカーーーー!!!

「むかえに行ったらいいんだね!」

大変だ!!今すぐ行かなければ!!

かわいいクローームちゃんに何かあったら大変だ!!

『……違います』

「へ?」

『それはもう頼みました』

あ、京子ちゃんのお兄ちゃんにかー

じゃあ安心だねー

ってか、なんか骸君のテンションが下がってない?

はっ!?私に変態と思ってるとか!?

……私の心を読むとはパイナツポー恐るべし

あのへたの部分は電波を受信してたのか……!!

『何か失礼なことを考えていませんか?』

やっぱり受信してたのか……!!

「そんなことないよー♪」

まあ冗談はこのぐらいにしよう

骸君は本当に困らないと私に連絡するとは思わないしね

「じゃあどうしたの?」

『あまりにも日本にミルファイオーレがいましたね

このままではむかえに行くことも出来ないと思うのです』

「あ……私を……ヴェントを

探してる人が多すぎるってこと?」

『そうですよ』

なるほど……

私がいる分かなりの人数が増えて

京子ちゃんのお兄ちゃんでも危険なのね……

ふざけてる場合じゃなかったか……

「つまり町に出て囿になればいいってこと?」

『そうです』

「わかったー



元々それは私のせいだしねー

でも、そのむかえに行く時間はいつ？」

『今すぐですよ』

「ええええ!!？」

『はやくしてください』

「……骸君……わざとギリギリに言ったでしょ」

『クフフフ』

「雲雀先輩に説明する時間ないじゃん!!」

絶対わざとギリギリに言ってるー!!

『そうですね』

早くしないとクロームが危険にあう確率が高くなりますね』

「それはダメ!!」

って、いつまで囿になればいいの？」

『また話しかけますよ』

「あ、なるほどー」

じゃあ急いで行くよ」

『頼みましたよ』

「あ、骸君ー」

『なんですか?』

「もう連絡出来ないのかな?」

『そうですね……』

少々難しいですね』

「そっかー」

骸君!!」

『なんですか?』

「なんかすっごい嫌な予感がするんだ……」

気をつけてね」

これしか言えない……」

無茶しないでって言っても

私の意見なんて聞くとは思えないし……」

『ええ』

「あなたも捕まらないで下さいね」

「わかってるよー」

「じゃ、急いで囿になりますー」

「またねー」

『ええ』

「うわー急がないとー」

「私って結局こっちのアジトから出たことない!!」

「ツナ君のアジトから出よう……」

「というか、囿になったら」

「私が日本にいたことがばれてー」

「マフィアがいつぱい来るよねー」

「あー風紀を乱しちゃう……」

「はあ……」

「溜息出してる場合じゃないか……」

「骸君からの頼みなんて」

「雲雀先輩に頼めないしね……」

「それに人数増えてるのは私のせいだしね」

「これは私がしないと……」

「あ、入江君に話を聞きにいけるかな？」

「って、いろいろ考えてる場合じゃない!!」

「急がないと!!!!」

化 2

あれ？草壁さんだ！

草壁さんがツナ君のアジトにいるなんて珍しいね

あー説明したいけど時間がない!!

「風早さんどちらに行かれるんですか？」

「ちよつと用事です!!」

話してる時間がないので!!

すみません!!

心配しないで下さい!!!

「はあ……っ。」

納得してなさそうだけど……まあいいや！

帰ったら説明します!!

草壁さんが話があるから集まったけど……

でも……それは変だよ！

「骸に動きがあったって

どういうことですか？」

骸はまだ復讐者の牢獄にいるんじゃない……

「おや？」

「ジャンニーニどうしたんだ？」

「今……出入口が開いたようで……」

「「「え!」「」」

「誰!？」

もしかして敵!?

「チェックしてみます……」

カチカチカチ……

どうしよー敵だったら!!

「ヴェントさんが……外に出たようです……」

「えええええ!?」

優、何してんのー!?

「ど、どうしよう……」

外はミルフィオーレばかりで危険なのに!!

「あのバカ!!」

「そういえば……先ほど……」

用事があると急いで走ってました……」

「草壁さんそれは本当ですか!?!」

「……ええ」

「ど、どうしよう……」

今すぐ助けに行かないと……!」

優に何かあつたら……オレ……」

「ツナ、落ち着け」

優の強さはお前も知ってるはずだ」

「そ、そうだけど……」

優はすぐ無茶するし……」

「ツナ落ち着けて」

風早はかなり強かったからなっ

問題ねえって」

「野球バカ!!」

てめえは能天気すぎだ!!」

やっぱり心配だー!!」

「優は最後に会った時

何か言っでなかつたのか?」

「確か……ちよつと用事です

話してる時間がないのですみません

心配しないで下さいと、言っでました……」

用事……?」

外が危ないのを知ってるのに……」

「そうか

だつたら問題ねーだろ」

「リボーン!! お前!!」

「優は風で人の気配が読めるんだ  
簡単に捕まるわけがないぞ」

「リボーン!!」

「今、外に出て探そうにも」

優はどこにいるかわからねーんだ

どっちにしろ しばらく様子を見るしかねーぞ」

そうだけど……

「骸の話に戻してくれ」

「は、はい……」

とりあえず街に出たけど……

チエーンとつたほうがいいのかなー?

そうだよねー

そのほうが囷になるよねー

うん! 決めた! とつちやえ♪

ヴーーーーッ

「何!?!」

優に何かあったんじゃ……!!

「一瞬ですがデータにない

強いリングの反応が……黒曜ランド周辺です」

「!! 黒曜ランド!?!」

ヴーーーーッ

「また!?!」

「……ヴェントさんのリングの反応です」

「まさか……」

優に何かあったんじゃ……

「落ち着け ツナ

とりあえず黒曜ランドの反応は

どうなってるんだ？」

「このあたりは電波障害がひどく

誤表示の可能性も高いです」

「もう一度黒曜ランド周辺のデータ分析するんだ」

「了解しました！」

あ……そうだ……

優はクロームと仲がいいんだ……

何度か一緒にご飯食べたって言ってたし……

優は外が危険って知ってて出てるんだ……

それに草壁さんが知らないってことは

多分ヒバリさんも……

やっぱり1人で無茶する理由はこれしかない！

「新たな敵かもな」

「……違う……きつと仲間だ……」

ボンゴレリングを持った……クロームだ

優が外に出た理由は……多分……」

「……可能性あるぞ

外にはかなりの数の敵がいるからな……

困になったのか……」

うわーうじやうじや来るねー♪

（気配が近づいてきたー）

さてー逃げますかー

ついにスケボーの出番が来たね!!

ボウツ

カチツ

とりあえず黒曜ランドからと

アジトからは離れた方が良いよね？

それにしても……多いな!!

そんなに私に興味があるのか……

んー多すぎるよねー

全く見たことないキャラがいたけど倒しちやった（笑）

多分私のせいで増えた人だねー

なんかわざわざ所属部隊とか言つてたけどー

言つてる途中で倒しちやった（笑）

本当はこういう時は待つんだらうね

でもわざわざ聞く必要がある？と聞かれると……ない！

絶対ない！だからすぐ倒してもいいと思う！

私は無駄なことは嫌いなんだよ

それに聞いている間に囲まれたら困る

あ、でも雲のリングかも知れないからリングはもらった

何のリングかわからないのは使う前に倒したから（笑）

スケボーで一瞬につめて鳩尾に一発

スピードが速かったから勢いがあつて痛いと思う

なんてかわいそう人なんだ

でも私が相手でよかつたよねー

雲雀先輩だったらボコボコだったと思うしね  
まあ逃げることも前提で戦ってるけどねー

こんな街中で戦うのは良くないし……

気配をよみたいから空を飛ぶのはやめたほうがいいしね  
それにしても……いつまでだろ？

逃げ道が減ってきたんだよねー

『クフフフ』

後5分だけお願いします』

お！終わったみたいだー

残り5分頑張りますかー

「ボンゴレ特殊暗殺部隊……」

「再生します」

「うゝおゝ おおい!!!」

うるせー!!

「首の皮はつながってるかあ!?

クソミソカスどもお!!」

10年後のスクアール……

「いいかあ？ クソガキどもお!!」

今はそこを動くんじゃないねえ!!

外にリングの反応があったとしてもだあ!!」

「！ 黒曜ランドとヴェントのことだな」

あ！そっだよ！

リボーンの言うとおりだ!!

ヴァリアーは優のことを何か知ってるの!?

「じっとしてたらわっかかりやすい指示があるから

それまでいい子にしろってことな！ お子様達♪

ん 小さい姫には会いたいわって伝えてよ♪」



小さい姫って……もしかして……

「うゝお、おい」

「てめー何しに来た！」

「王子ひまだし」

「ちやちやいれとオレの姫にメッセーヅ」

「やっぱり優のことだー!!」

「口出すとぶっ殺すぞお!!」

「やってみ」

「相変わらず荒れくれ集団だ……」

「それにベルフェゴールもかわってねえー……」

「どーやらあの方のことのようですよ」

「イタリア帰りの」

「え？」

「笹川了平 推参!!!」

「お兄さん！」

「それに！ クロームも！」

「沢田さん ムクロウですが」

「やはり匣兵器のようです」

「本当にこれ以上の調査はいいのですか？」

「うん」

「だってそれもクロームの持ち物だもん」

「勝手にいじられたら嫌だと思っし」

「……そうですか……」

「現在彼女はビアンキさんが手当てを……」

「私は1度雲雀に報告してきます」

「はっ」

「私見ですが」

クロームが黒曜ランドにいるという情報は  
六道骸からヴァリアーへもたらされたものかと  
報告するために戻ったが……

恭さんに報告をすれば恐らく風早さんは……  
しかし私はこれを報告しない訳にはいかない

「それと……風早さんが……」

「なに」

風早さんの話になると恭さんの反応が良くなる  
恐らくこれは気のせいではない……

「今……外へ出ていまして……」

「……どういふことだい？」

「こ、これはまずい」

一瞬にして機嫌が……

「こちらも私見ですが……」

クロームを保護する時間の囿になってると……

「こちらも……六道骸からの……」

「さ、最後まで言えなかつた……」

しかし恭さんに黙って風早さんが外に出るのは  
六道骸が関係するとは思えない……

それにこのタイミングだ……

「……笹川さんから」

まだ詳しく話を聞いていないため  
もう1度あちらに行きます……」

風早さん……すみません

恭さんの機嫌をよくしたかつたが

私が何を話してももう意味はなさそうだ……

あー疲れたー

骸君がもういいって言うってから結構時間がかかったよ  
人数が多すぎた……

リング消して移動しようと思っても動けなかったし……

クロームちゃんのためじゃなかったら

ただでしなかったよ……とか思いながら

他の人でもただでするけどねー（笑）

会議室にみんないるかなー

あ、いてたみたいだ……

「ただいまー」

「優!？」

「あ、クロームちゃんは無事に着いた?」

「や、やっぱり囿だったんだ!!」

「外にあまりにも人数多いから囿になったただけだよ

急に頼まれたから説明する時間もなくてさー」

「そ、そっか……」

ツナ君にいつぱい心配かけちゃったかも……

ごめんよー!!

「まあ私は無事だよ

怪我もないよー」

「う、うん……」

なんか……本当にごめん……

そこまで心配してるとは思わなかった……

「あれ……?」

京子ちゃんのお兄ちゃんだ」

あ、それもそうだね

クロームちゃんむかえに行ったの

京子ちゃんのお兄ちゃんだもんね

電話してた時には思ってたのに

囿になってる間にすっかり忘れてた……

「極限に久しぶりだ!!」

「こんにちはー」

身長が高いなー

雲雀先輩も高いけど……

久しぶりに10年後の人に会ったねー

京子ちゃんのお兄ちゃんも

大人っぽくなってかつこよくなったねー

「そろったな……話そうか……」

あ、すみません

お待たせしましたー

んー後5日で殴りこみかー

「話は終わったかな？」

あの……草壁さん……」

「はい なんですか？」

「雲雀先輩には……」

「……すみません……」

報告しました……」

ぎゃーー

絶対怒られるー!!

「……そうですか……」

今から怒られてきます……」

「……すみません……」

「草壁さんは悪くないですよ

報告しなかったら後で怒られますもんね

草壁さんが怒られるより

私が怒られる方が絶対ましですよ……」

あ、今の私は絶対遠い目してる

まあ少しぐらい現実逃避をさせてくれ……

「……すみません……」

「い、いってきます……」

ど、どうしよう……絶対怒ってる……

逃げたいけど逃げれば逃げるほど後が怖い気がする

化 4

こ、これは……

部屋の外まで重い空気が漂ってる……

私、この中に入るのー!? (泣)

「た、ただいま……戻りました……」

……はい

そうですねー

返事があるわけないですよー

あはは……もう苦笑いしか出来ないね……

「優」

低い……声が低いよ!!

「は、はい!!!」

「はあ……」

「……ごめんなさい……」

「ごつちに来なよ」

拒否権は発動できませよねー

はい……行きます

襖に半分隠れてるのをやめます

いつもの席ではなく雲雀先輩の前に来ました

もちろん正座をしています

少しでも反省しているという意味をこめて……

多分伝わってるとは思うけど

機嫌は良くなっていない

「優」

「はい……」

「優を狙ってる人が多いのわかってるよね」

「はい……」

知っています

ええ……知っています

「優が捕まると」

どうなるかもわかってるよね」

「はい……」

それも知っています……

「どうして僕に言わなかったの」

「……急に頼まれて……」

「ふうん」

僕よりあつちのほうが大事なんだ」

……私に頼んだ人が誰か絶対わかってる!!!

「いや……その……頼んだ人というより……

可愛い女の子のためというか……」

「ふうん」

……骸君のバカー……!!!

「あの、その、ごめんなさい……

風紀……さらに……乱しちゃったし……」

「はあ……」

怒らせて……この数分間に……

2回も溜息つかせてしまった……

……

……

……

「優」

「……はい……」

「ごっち見なよ」

今、目があうと困る……

「優」

「……ごめんなさい……」

頭を下げてるしかない……

今回は全部私が悪いし……

「優」

土下座をしよう……

グイッ

「きゃー」

……やばい……目があつた……

「泣きそうなくらい僕が怖いのか？」

声を出せばもう我慢出来ないかも……

首を横に振ろう

フルフル……

「どうしてそんなに目が潤んでるのか？」

「……私……最低です……」

「どうして？」

「……雲雀先輩に……

心配ばかりかけて……」

「……僕が勝手にしてるだけだよ」

「……それに……守りたいのに……私が……」

風紀を乱した……

「昨日も言ったけど

それは優のせいじゃないよ」

「……でも……」

私がいるから乱れるんだ……

「はあ……」

また……溜息……

やっぱり……ここにいない方がいい……

雲雀先輩もこれで私に愛想がついたよね……？

あ……でも未来の私には愛想がつかないでほしいな……

「優」

「……はい……」

「おいで」

………？

おいで………？



「こっちに来て」

「えっと……」

目の前にいるんだけど……

「僕を安心させるためにこっちに来て」

つまり……

ぎゅ……

「私は……ここにいますよ……?」

「……無事でよかった」

……珍しい

雲雀先輩がそんなことを言うなんて……

それだけ心配させたんだ……

本当にごめんなさい……

……いつまでこの状態なんだろう……?

どンドン恥ずかしくなってきた……

「あの……雲雀先輩……」

「まだダメだよ」

「もう……大丈夫ですよね……?」

もう私が無事ってわかったと思うし……

「そうだよ」

「だったら……」

「ダメだよ」

……

うう……今日は文句が言えない……!

やっと離してくれた／＼／

「顔 真っ赤だよ」

「……しようがないです」

普段の雲雀先輩でも……赤くなるのに……

10年後の雲雀先輩はもつと大変です……／＼／

なんかいろいろ違うもん……／＼／

「そう」

うわー嬉しそうな顔をした／＼／

10年後の雲雀先輩は優しすぎる……

聞いても大丈夫だよね……？

「あ、あの……」

「なに」

「変なことを聞いてもいいですか……？」

「いいよ」

「私と出会って後悔してませんか……？」

私と会わなかったら……

雲雀先輩はもつと自由だと思っうんですよ……」

……返事がない……

ずっと聞きたくてやっと聞けたのに……

でも返事がないなら聞くんじゃなかった……

「……前にも同じようなことを聞かれた」

「え……？」

「この時代の優が」

僕と優がもし出会わない世界があつたら

僕はもつと自由だと思う

だから僕と優が出会って後悔してないかって言ったんだ」

「……そうですか」

未来の私も聞いたんだ……

「この答えは過去の僕に聞きなよ」

「え……」

「答えてくれないの……？」

「僕が答えてもいいけど」

「僕は過去の僕に答えてほしいんだ」

「……わかりました」

「10年後の雲雀先輩だから聞けたのに……」

「返事はしたけど聞けないだろうな……」

「聞かって約束ね」

「それは……」

「これは僕を心配させた罰だよ」

「……はい」

「約束します……」

## 波乱 1

あ、草壁さんが外で待ってるー

また気をつかせちゃったよ

多分、報告なんだろうなー

んー私も知ってるんだけどなー

まあ仕事を取っちゃダメだよ

「少しツナ君のアジトに行きますねー」

「もう外には出ないですよ」

……いや、私が悪いよ

信用してもらえないのは……

でもさ……怒らせた後すぐに外は出ないよ……

「もし次に出る場合は必ず相談します

も、もしですよ!!!」

言ってる途中で少し機嫌が悪くなった……!

もしもの話なのに!!

「……わかった」

ふう……危ない危ない

もうツナ君のアジトにいけないかと思ったよ

何かしちゃう前にさっさとツナ君のアジトに行こう

「草壁さん すみません

もういいですよー」

「はい」

ほっとした顔をした……

すみません……心配かけて……

んー……どこに行こう？

特に何も考えずこっちに来たんだよねー

雲雀先輩より先にツナ君の修行した方がいいかな？

あれ？こんな部屋から物音が……  
んー資料室？

何かあるのかな？

ガラッ

「誰だ!？」

「あれ？ 獄寺君かー」

「なんだ……風早か……」

「何してるの？」

「……オレの修行の仕方だ」

「そっかー」

答え見つけたみたいだねー

「ああ」

「ちよつと見てもいい？」

「なんでだよ」

「なんとなく♪」

ただの気分（笑）

まあ何かヒントがいえるかもっていうのもあるけどね  
頭を使うなら私も結構得意だしー

「………しようがねえな」

「ありがとー」

ガリガリガリ

あれ？これって何の音？

………

「かわいいー……!!!」  
獄寺君の匣兵器?」!!!

なんてかわいいんだ!!

ツメを床にガリガリしてるだけなのに可愛すぎる!!

「……ああ

つかえねー仔猫だ」

使えないって言った……

「名前は？」

「まだ決めてねえ」

「そっかー♪」

これは絶対よしよししなければ!!

「風早ー、そいつに触ったら怪我するぞ!!」

「え?」

あ……そういえば……

獄寺君の匣兵器って懐いてなかった……

可愛すぎて忘れてしまった!!

ピンチ!!

今からじゃもう手を引つ込めるのは遅いよねー

だったら怪我してでも撫でてやる!!

よしよしー

あれ?普通に触れた…… (笑)

によおん♪

「な!? オレの時は……」

シャー!!

「だあ!!」

あ……ひっかいた……

思いつきりにひっかいたよ……

「……獄寺君……大丈夫……?」

「このくそ猫!!」

……そういうことを言うから懐かないんじや……

あー元々私って嵐と相性いいんだよね

ベルさんにはあんなに好かれるのに

なんで獄寺君とは普通なのかなって思ってたけど……

匣兵器と仲がいいのね…… (笑)

それにしてもかわいいいなー

抱いちゃおう♪

ぎゅ

おー逃げない♪

「なんで風早には……」

凄いショック受けてるよ

獄寺君ドンマイ(笑)

「やあ?」

「そういえば雲雀先輩の匣兵器にも好かれたよ」

「またロールに会いたいな……」

「後でお願いして出してもらおうかなー」

「それは……ヒバリの匣兵器だからだろ……」

「それもそうだねー」

「雲雀先輩が言えば絶対懐くと思うしねー」

「ひゃん!!」

「うー……首をなめられた……」

「な!?!/!/」

「あれ? 獄寺君の顔が赤くなつた?」

「どうしたの?」

「……なんでもない」

「ふむ?」

「まあいいか」

「ぎゃー!!」

「くすぐりたいー」

「またなめられたー!!」

「でもかわいいー!!!」

「………いい加減にしろ!!」

「シャー!!」

「だあ!!」

「……何回、同じことを繰り返すのかな?」

「無理矢理はがそうとすれば怒るに決まってるのに……」

「んー私がいると」

「獄寺君が気にしちゃうみたいだし」

「また違うところ行ってくるよー」

「………ああ」

「うーウルウルした目で見てくる……」

私がどこか行くと気付いてるよ

「また今度遊ぼうね？」

約束しよつか♪」

によおん♪

なんてかわいいんだ……

男のフリが出来る自信がなくなってきた……

獄寺君の修行が落ち着いたら

遊ばしてもらって慣れるようにしよう!!

「修行頑張つてねー

またねー」

……行く前にもう1度だけ撫でよう（笑）

だって可愛いんだもん♪

「なんて恐ろしい能力でしょう

さすがミルフィオーレの総大将……

というべきですかね

敵いませんよ」

「また心にもないこと言っちゃって喰えないなあ 骸君

君のこの戦いで最優先の目的は勝つことじゃない

謎に包まれていた僕の戦闘データを

外部の他の体に持ち帰れば

それでよしつてとこだろ？

なぜヴェント君を狙ってるかも

気にはなってるみたいだけどね」

骸君もヴェント君に興味があるのかな？

それとも本当に心配してるのかな♪

「ほう……面白い見解ですね

しかし……だとしたら？」



ヴェント君のことは無視されちゃったね♪  
ま いったか♪

「叶わないよ ソレ

この部屋には特殊な結界が張り巡らされてて  
光や電気なんかの波おろか思念のたぐいも  
通さないって言ったら信じてくれる？」

「クフフ

何を言ってるのやら

僕にはさっぱり理解できませんねえ

……………楽しかったですよ」

「実体化を解いてここから

ズラかろうとしたってダメだからね 骸君

この部屋はすべてを遮断されてるって言ったじゃん

ボンゴレリングをもたない君には興味ないのね

いつそ死をむかえちやおうか

でも……………僕の能力でもわからない

ヴェント君の正体を教えてくれたら

解放してあげてもいいけど？」

「……………」

本当にヴェント君には

いったいどれぐらいの価値があるのかな？

ここまでみんなが黙っちゃうと

僕はもつと興味が出ちゃうんだよねー

「そう バイバイ」

## 波乱 2

獄寺君はもう大丈夫だろうねー

ツナ君と山本君の方が問題かな？

あれ？ランボ君とハルちゃんが泣いてる？

“どうしたんだ？”

「なんでもないです……」

んー……なんで泣いてるんだろ……

あーー原作覚えてないー！！

本当に死ぬ前に読んでおけばよかった!!!

まさかこんな後悔をするとは思わなかったよ!!!

……ハルちゃんは聞いても教えてくれないだろうな……

無理矢理……涙を拭いたし……

とりあえずランボ君を泣きやまそうか……

ハルちゃんの負担が減るもんねー

“ランボおいで”

ぎゅ……

うーん……抱いたのはいいけど……

この後はどうするべき？

ランボ君は駄々をこねて泣く時はあるけど

今みたいに静かに泣くのは初めてだから

どうすればいいかわからないんだよねー

背中をさすってあげたほうがいいか……

“大丈夫……大丈夫……”

んーなんか怖い夢でもみたのかなー

抱いてわかったけどちよつと震えてるんだよねー

でもそれだとハルちゃんがなんで泣くんだろ？

ランボ君が泣き止まなくて泣いたとか？

いや、流石にそれはないと思う……

「グスツ」

あ、考えてる間に泣きやんだよ

〃えらいぞ

ランボ〃

「……ランボさんはえらいもんね」

〃そうだな〃

よしよしー

後でプリンを作っただけよ

ランボ君は寂しかったから

不安になったかも知れないしねー

ツナ君達は修行が大変で遊んでくれないしね

「ヴェント君とランボ君は仲いいんですねー」

〃あー……まあな〃

ランボ君はヴェントの名前すら覚えてないけどね

風早優とはものすごく仲いいんだけどねー

あれ？雲雀先輩と草壁さんがこっちのアジトに来たよ

どうしたんだろ？

まだツナ君の修行の時間じゃないよね？

〃悪い……急用だ……

ランボ、もう大丈夫か？〃

「ランボさんは元気だもんね」

うーん……大丈夫っぽいね

やっぱり男の子は強いねー

〃そうか

……三浦ハル〃

「はひー、なんですか？」

〃あんまり溜めすぎるとよ〃

「……………」

あー風早優として話を聞いてあげたい!!!

ヴェントとしてはこれ以上言えないー

〃……さて、僕は行くよ

ランボを頼むよ〃

「……………はいー」

ハルに任せてください!!」

“ああ

いつもありがとう

じゃあな”

追いついた……

んーなんの部屋だろ？

“どうしたんだ？”

うそ……こんなにはやかっただの……？

骸君、大丈夫だよね？

本当に話せないのがめんどくさい……

電話した時も言えないのがつらかった……

私は犬君と千種君の連絡先知らないし

だってヴェント用に入ってなかったもん……

……名前が出てこない……

まあいいや……

骸君の弟子がヴァリアーにいることは知ってるけど

私は知らないことになってるし……

それに骸君の弟子っぽい人の

個人の連絡先も入ってなかった……

まあヴァリアーとは別にXANXUSさんの連絡先が

入ってたのはビックリしたけどね

未来の私に聞きたいよ……一体何があったのか……

って考えてる場合じゃない!!

「死んでもらっては困る」

「クロームちゃん……」

「沢田さん、外で待ちましょう」

あ、あれは……

雲雀先輩が気付いてないうちに私が持つておこう  
ボンゴレリングでギリギリだね……

なんとか幻覚でたもってる……

「クロームちゃん……頑張つて……」

「優」

「なんですか？」

「もうやめときなよ」

「何がですか？」

「僕が気付いてないと思ってるの」

……ばれてたか……体力あげてたのが……

「……わかりました」

ちよつとやばいかな……あげすぎた……

「無茶しすぎだよ」

「まだ大丈夫ですよー」

「はあ……」

あらー呆れちゃった(笑)

「まだってことは危ないんだよね」

「そうですけどー」

多分……後30分以上はもちますよ

心配しなくても大丈夫ですよ」

「……わかった」

「はいー」

## 波乱 3

やっぱり少しあげすぎた  
ゆつくり歩かないと辛い……

「……すみません」

先に行ってください」

「いやだ」

いやだって言われたよ……

みんな心配してると思うし

早く教えてあげてほしいんだけど……

「……では、私が先に報告してきます」

あーまた草壁さんに気を使わせちゃったよ

本当にすみません……

「寝なよ」

「ダメです」

私が知ってる情報を話さないといけません

といっても……たいした内容ではありませんけど……」

「……わかった」

無理と思っただらすぐにいいなよ」

「はっ」

ボンゴレリングを使った幻覚で

なんとかかたもってることを説明したところか……

「あの……じゃあ……」

骸はどーなっちゃったの!？」

「骸の行動については」

我々よりもヴァリアーにいた笹川氏……

……それに風早氏のほうが詳しいのでは?」

草壁さんが私が話せるか確認したなー

何度も気を使わせてすみません

「骸からヴァリアーへの指示は

一方的なものだと聞いている

オレはその指示を信じ行動したが

骸がどこで何をしているのかはわからんのだ」

「私はヴェントのケイタイに急に電話があったんだ

クロームちゃんの保護は頼んだけど

敵が多すぎてむかえにいけるかも

わからない状態だから

町で囿になってほしいって言われて……」

「骸とは……連絡とれないの……？」

「ツナ君ごめん……」

私ももうとれないか聞いたんだ

難しいって言われたよ」

頼むから……原作通り助かってよ……」

「クロームへの力が一切途絶えたのよ

最悪の事態も考えるべきだわ」

「そんなあ!!」

「10代目！ あのしぶとい骸です

まだわかりませんって」

「気をつけてとは言ったんだけどね……」

「……え？」

「普段の骸君は頼むようなことはしないとと思うんだ

だって自分でなんとか出来るからね

でも私や京子ちゃんのお兄ちゃんに頼んだ

つまり力が残ってないのか……力を残していたい

どっちかだと思うんだ

骸君は電話で私に嫌がらせをして笑う余裕があったよ」

「……力を残したかった……？」

うなずけばいいか……」

「骸は何をしようとしてたの……？」

「……私にもわからない」

でも骸君は出来るだけ力を残そうとしたんだ  
そんな簡単にはやられるとは私は思えない」

「だが、どっちみち5日後に」

クロームは戦えそうにないな」

「……痛いな」

「心配するな」

クロームの不足分はオレが補う」

「そんなこと任せるわけねーだ」

お前今座ってるのもしんどそうじゃねーか」

「リポーンツ 何を言っている!!」

「無理すんな」

顔を見ればお前の体調ぐらいわかる

お前の体は非7・線を浴び過ぎてボロボロなんだろう？」

「黙れ! 過去からきたお前に何がわかる!」

「オレだって地上に充満している」

非7・線を肌で感じたんだ

お前のやろうとしてるこの無謀さぐらいわかるぞ」

「そんなに辛いのか?」

「一度、未来の風早さんも制御をはずして

浴びたことがあるのですが……それはもう……」

「草壁さん……本当ですか……?」

「……ええ」

その時から未来の風早さんは

ヴェントの活動をやめました」

なるほど……

非7・線でヴェントは消息不明にするのが正しい判断だよね

白蘭さんには私には非7・線がきかないってばれてるけど

私は白蘭さんの能力を知らないことになってるからね

入江君と会うまではその判断が正しいよ

まあ私は入江君が重要人物って知ってるけど……



逆に入江君は記憶を戻った時に

私のことを思い出したはずだから

出来るだけ会わないようにするはずだよ

計画も立てずに私に会いに行くことはしないね

まあ雲雀先輩が絶対許可しなかったっていうのもあると思う

雲雀先輩を説得出来るとは思えない

白蘭さんが知ってるから問題ないとかなんて言えないし

浴びた私を見たはずだし

狙いはアルコバレーノってわかると思うからね

「……そうですか

ラルさん、無理をしない方が良いと思います……」

「だが非7・線を放出してるのはミルフィオーレだ!!」

奴らを倒さなければこの世界は正常には戻らない!!」

「えーとそれについてなのですが……」

どうして非7・線が地上に漂ってるのか

まだ原因は特定できていません……

ミルフィオーレとの因果関係は

恐らくあると思われるのですが決定打がなく……」

「我々も同じく……」

「いや!! 奴らの仕業だ!!」

コロネロもバイパーもスカルも……

奴らに殺されたんだ!!」

ドサツ

大変だ!!ラルさんが倒れちゃった!!

「ラル・ミルチ!!」

「大丈夫ですか!」

「さわるな! 立てるっ」

これはもう意地だ……

反対しても絶対5日後に戦うよ

少しでも身体を楽にしないと……

「雲雀先輩」

「なに」

「すみません」

後……頼みます」

「はあ……」

「ラルさん 勝手にさわります」

「な!？」

「立たせるわけじゃないですよ」

「……」

「ごめんなさい……」

今はこれだけしか無理です……」

フラッ

……倒れる

ガシッ

誰かが支えてくれた……

多分……雲雀先輩かな……？

すみません……少し休みます……

「優!？」

「沢田さん大丈夫です」

眠っただけですよ」

「え……う？」

「……無茶しただけだよ」

さつきクローム髑髏にもあげたからね」

「……そうですか……」

## 休息 1

良かった……

優も倒れたからノン・トゥリニセツテだった？

そののせいかと思った……

リボンも体調がひどいみたいだし……

このままだと……

「沢田……5日後だが……」

これだけ戦力に悪条件がそろっては

おまえが何とつか見当がつく……

作戦中止はオレが上に伝えに行こう」

「いえ やりましょう」

敵のアジトに行けば過去に戻ることだけじゃなくって

骸の手がかりも何かつかめると思うんです

それにそのノン・トゥリニセツテのことも

わかるかもしれないし……

でもどっちもゆっくりしてると

手遅れになっちゃう気がして」

「うむ」

「それにやっぱりオレ……」

こんな状況に一秒でも長くいて欲しくないんだ

並盛の仲間はもちろんだし

クロームやラル・ミチルだって……

優だってヴェントじゃなく

優として過ごしてほしいんだ……

こんな状況全然似合わないよ!!」

あ! つい……叫んじゃった……

でも優は京子ちゃんとハルと一緒に

笑って過ごしてほしいんだ……

これ以上……寂しい思いをさせたくないんだ

「えと……あのっ……」

そんな感じですよ……けど……」

「よく言ったぞ！ 男だ沢田！」

「……ガキが」

「とにかく 5日しか時間がない

一刻も無駄にはできないぞ」

「はい!!」

「だな!!」

……なんか……うるさい…… (怒)

まだ……眠いんだけど…… (怒)

この声は京子ちゃんのお兄ちゃんだと思う (怒)

「極限にとめるもの何もなし!!」

「いいえ さつきから私が止めてます

くだらない理由で

守護者同士がバトルなどやめてください」

「どこがくだらぬ理由だ！

オレは屋敷に入れるのに

ちび達は出入り禁止とはどーいうことだ!!!」

なんか叫んでるな……

極限とか言ってるし

京子ちゃんのお兄ちゃんの間違いないだろうなー

あ、ランボ君とイーピンちゃんがいる

まあいいや

とりあえず……言いたいことを言おう……

「悪い……ランボとイーピン少しどいてくれ」

道を開けてくれたよ

いい子達だねー

頭を撫でてあげよう

よしよしー

よし、さっさと言おう

ガラッ

「起きたのかい？」

“……………頼むからもう少し静かにしてくれ  
まだ眠いんだ……………”

「……………やっぱり君を入れるべきじゃなかった」

「何を!! 極限にプンスカだぞ!!」

うるさい……………(怒)

なんでこんなにも叫ぶんだ(怒)

静かにしてくれて言っただけなのに!

“草壁哲也……………何がどうなってるんだ……………?”

さっさと言い争いをやめさせよう

私は眠いんだ

「話し合いをしてほしいんですが……………」

くだらない理由でバトルをしようとしてまして……………」

“くだらない理由とは?”

「笹川氏が屋敷に入れて

ランボさんとイーピンさんが

屋敷に入れてないことに怒ってまして……………」

“雲雀恭弥は本当は誰にもいれたくない

っていうことか?”

「……………そうです」

くだらない……………(怒)

私はこれのせいで起こされたのか……………(怒)

そんな原作があつた気がするけど

私に被害が来るとは思わなかった(怒)

“草壁哲也……………悪いが

子どもたちと向こうのアジトで過ごしてくれ”

私が元気だったら一緒に過ごしてあげるけど

流石に今はきつい……

「そうですね……」

〃これでいいだろ？〃

この子達に寂しい思いをさせないならいいでしょ  
後で私が元気になったら遊んであげるよ  
プリンを持って行くつもりだったしね

「しようがない

では1ラウンドだけだ」

「僕は構わないよ」

ふーん……

京子ちゃんのお兄ちゃんは

人の眠りの邪魔ばかりする気なのね

大人しく話し合いしないんだね

雲雀先輩にそんなこと言ったら

バトルするに決まってるのに……私は完全に怒ったよ

〃今からバトルするんだな

じゃあ僕は向こうのアジトで寝る〃

「ヴェント どういうこと」

〃今からバトルするんだろ？

うるさくなるだろ……

僕は君の楽しみを止めるつもりはないから

静かな場所に移動するだけだ〃

私はゆっくり寝れば

どっちのアジトでもいいしねー

「そう」

〃あー笹川京子に会ったら

僕が体調悪いのを知ってるのに

お兄さんが寝かせてくれなかった

って伝えるからな〃

京子ちゃんに怒られればいいんだよ

「なに!? それは極限困る!!」

「知らないよ」

「僕は事実を伝えるだけだ」

「私が静かにしてって頼んでも聞かなかつたじゃん  
それなのになんで聞いてあげないといけないの？」

「ヒ、ヒバリ!!」

「今から極限に話し合いするぞ!!」

「雲雀恭弥はバトルする気になってるぞ」

「あー……草壁哲也……」

「悪いが向こうのアジト行くついでに

「僕をどこかのベットまで運んでくれ」

「え!?!」

「悪い……」

「まだしんどいんだ……」

「……話し合いをするからこっちで寝なよ」

「いいのか？」

「せつかくバトルができるのに……」

「……話し合いするよ」

「……そうなのか？」

「じゃあ移動しなくていいか……」

「僕は寝るよ　じゃあな」

「雲雀先輩がバトルを止めるなんて珍しいねー」

「まあいいかー」

「静かだったら私は何でもいいしねー」

## 休息 2

バツ!!

今のは骸君からのメッセージか……  
つい飛び上がってしまったよ

……………寝させてくれないのね(泣)

うわーあれからちよつとしか寝てないじゃん  
でも変に目が覚めちやつたよ……

さつきよりは体が楽だけど

まだ寝た方がいいんだけどなー

完全に体調が戻ってないしね

んーしようがない……

無理矢理でもいいから寝ることにしよう

あ、まだ話し合いしてるみたいだね

声を掛けるのはやめておこうー

邪魔しちや悪いしねー

ガラッ

あれ？雲雀先輩だ

話し合いはいいのかな？

「優 どこ行くの」

「少し寝たんですけどねー

変に目が覚めて寝れなくなっちゃったんですよ

だから強制的に寝ようと思ひましてー」

「……………どういふこと」

説明したら呆れると思うんだけどねー

まあしようがないかー

「寝ないと体調が完全に戻らないんでね

だからラルさんに体力をあげて

眠気を出そうと思ひましてー」

「……………わかった」

あれ？呆れなかったねー



まあいいか……

「じゃあちよつと向こう行ってきます  
私のことは気にしないで下さい」

あれ？

ツナ君の修行見てると思ったけど誰もいないねー  
どこにいるんだろ？

適当に探すか……

「この子

手足が大きいからきつと大きくなるよ」

「いっぱい食べていいですからね」

「匣兵器は人間の食料食べるなんて

聞いたことないけど……」

「まじかよ!?!」

によおん♪

「はひ！ どうかしたんですかね？」

「猫ちゃんがすごく嬉しそうだね」

あれ？ 食堂にいっぱい人がいる気配がするよ

ここにみんないてたんだねー

ラルさんいるといいなー

≪どうも≫

ドン

ガシッ

入ってすぐに獄寺君の匣兵器に体当たりされた……

そしてナイスキャッチしちゃったよ（笑）

「ヴェント!?! 起きたんだ!!」

もう大丈夫なの？」

「まだ体調は完全じゃないけど  
寝れなくなっただんだ」

「そうなの!？」

「ああ」

「よおくん♪」

獄寺君の匣兵器は元気だねー

私にもわけてほしい……

「あーくすぐったいからやめてくれ……」

く、首はダメだ……地声が出ちゃう!!!

「おいー・コラー・やめろ!!」

ガシツ

あ……そんな無理にはがしたら……

シャー

「だああ!!」

だよね……

また思いつきりひつかいたよ……

フー

あー怒ってる怒ってる

それにしても……

「まだ懐いてないのか……」

ツナ君がものすごくガーンって顔になった(笑)

まあ獄寺君じゃなくて私に懐いてるからねー

獄寺君ドンマイ(笑)

「猫ちゃんはヴェント君が好きなんですネー」

「そうみたいだねー」

「なんでオレじゃなく……ヴェントに……」

「僕が知るわけないだろ……」

私もここまで懐かれるとは思わなかった……

んー助け舟出してあげようかなー

とりあえずまた抱くか……

“おいで”

ぎゅ

によおくらん♪

「はひー… すごい嬉しそうです!!」

“僕が抱いてるから触れば?”

「お……おおう」

え……指でつつくの……??

まあいいか……

ツンツン

おーひっつかかない!!

「ついに懐いたぜ!!」

ガシツ!!

あ……いきなり……抱くのは……

シャアツ!!

「だああ!!」

だよね……

今度は顔にひっかいたよ……

“そんなすぐ懐くわけないだろ……”

「おめでたいね ハヤト

修行をさぼってペットの世話とは」

あ、ビアンキさんが登場だ

んーラルさんはいないのか……

「余計なお世話だぜ

S I S T E M A C . A . I はもう理解した

何なら試してみるか?」

“そうか

あの修行がうまくいったのか……”

「ああ」

「え!? ヴェントは獄寺君が資料室で

修行してたの知ってたの?」

“ああ

たまたまその前を通ってな”

「そうだったんだ……」

あれ？もしかして獄寺君を探してたのかな？

「おお ここにおったのか!!」

じ……時期相撲大会について話し合うぞ!!!

作戦室に来てくれ!!」

……それは無理があると思う……

というか、話し合いが終わったんだねー

あ、作戦室にいけば絶対ラルさんに会えるよ

さっさと行こう

……

な、なんて可愛い眼差しなんだ……

……連れて行ってもいいよね？

うん。私が許可する（笑）

「あー ヴェント君!!」

ちよつと待って!!」

あれ？京子ちゃんどうしたんだろ……

あ、連れてつちやダメだったのかな？

”どうしたんだ？”

「あのね……これ……

ハルちゃんと一緒に作ったんだ……」

あ……お守りだ……

”ありがとう

すごく嬉しいよ”

「よかったですー」

「前にツナ君達に渡したんだ

でもヴェント君には渡してなかったから……」

あーそういうえば

原作ではリング戦の時に渡してたような……

”大事にするよ ありがとう

じゃあな”

大事にしよう……

## 休息 3

ラルさんに体力あげて寝ようと思ったけど  
作戦会議には参加するべきだよねー

うーん……早く終わればいいけど……

遅くなると雲雀先輩が怒りそうだしね……

つてか、雲雀先輩のアジトに流れた情報だったら

後で聞けたんじゃないや……もういいや……

気になって途中で起きそうだし聞こう……

あ、この装置……骸君からのメッセージの……

まあ計画のゴール地点だよねー

作戦会議に参加しといて良かったかもー

私があるせいで原作通り進まなかった場合は

この装置を指摘するように誘導しないとダメだしねー

「何!？」

この丸い装置見たことがあるのか!？」

「うん……これの前に……」

入江正一がいた……」

そういえば

雲雀先輩に全部説明されたときは

写真を見せてもらったけどー

これは知らないフリの方がいいかな？

実はこつちのアジトでは

未来の入江君の写真を見たことないんだよねー

「へー

あの人って入江正一だったんだー」

「な!?! 風早も見たのか!?!」

「ツナ兄、優姉どこで見たの!?!」

「資料室か何かスか!?!」

「いやっ それがああ……」

オレは……ゆ……夢なんだけど」

「私も夢でだよー」

あ、ツナ君がほっとした顔をした（笑）

「夢……………!!?」

ふざけているのか沢田!! 風早!!」

「ひいっ

すみません! そんなつもりは!!」

「そうですよー

ふざけてないですよー」

「だったらそれは何だ!!」

獄寺君の匣兵器と遊んでたら怒られた（笑）

しようがない

遊ぶのをやめて真面目に会議に参加しよう

まあ抱くのはやめないけどね（笑）

「獄寺君の匣兵器ですよー

えっと、ツナ君が見た人って

メガネかけた男の人だよね?」

「そ、そう……」

「この人であってますか?」

あ、ジャンニーニさんが写真を出してくれたよ

「そうそう

この人ですよー」

「で 他にはなにを見たんだ?」

「リボーン!」

あんまり怒りすぎると

体力使って疲れると思うんだけどなー

「どうなんだツナ、優」

「え……………」

かすかにしか覚えてないんだけど

入江正一以外の誰かもいてこれを見ていたんだ……」

「あ、それは私かな?」

多分、クロームちゃんもいたけどねー

まあ私もツナ君と一緒にでちゃんと覚えてないんだよねー  
やっぱりクロームちゃんより相性がよくないからだと思っ  
ても骸君からのメッセージっていうのは気付いたけどね  
「そ……そうかも……」

中にすごく大事なものが入ってるみたいで……」

「そうそうそんな感じー」

なんか守ってたって感じだったよね？」

「う、うん」

「大事なものか……」

案外この白くて丸い装置が入江正一とすべての謎を  
解く鍵を握っているのかもな」

誘導しなくても大丈夫みたいだねー

「正気か リボーン!!」

たかが夢だぞ!!」

「ツナと優が同じ夢を見たんだぞ」

「そうですよー」

何か意味があるんですよー」

「だが!!」

ラルさん真面目すぎだよ（笑）

まあ曖昧な情報は信用しないのが普通だもんね  
ヴァリアーだったら絶対ありえないと思うしー

「いいじゃねーか」

重要な装置である可能性は高いんだ

ターゲットにしたって損はないはずだぞ」

「ふむ」

それはそーだな」

「それに神経がとぎすませれてると

こういう不思議なことはあるもんだ

オレもこのおしやぶりをゲットする時に

似たようなことがあったからな」

「え!?!」



そういえば……私の場合は幻聴だよねー

向こうの世界ではありえないもんね

確かにあれも不思議なことだよねー

「それは私もわかるかもー

神経がとぎすまされてたかはわからないけど

私もこのおしゃぶりゲットする時に

不思議なことがあったもん」

神経はとぎすまれてはなかったと思う（笑）

あれは強制だった気がする……

振り返ったら目の前にトラックだったしねー

「え!？」

「よし 山本

オレ達は修行を再開すんぞ

今んとこお前が一番遅れてるみてーだからな」

「ん？ ああ！

オツケ！」

リボン君の不思議なことはなんだろう？

まあいいか……

「ねえラルル……優……

おしゃぶりゲットって……?？」

「本人から直接聞けばいいだろう

いちいちオレに甘えるな」

「は……はあ……」

「んーそうだねー

リボン君に聞いた方が良いと思うー

私の方は詳しく話せないしー」

「そ、そっか……」

「うん

あ、ラルさん」

「なんだ?？」

「さっきこの夢を見て

目が覚めちやったんですよねー

でも寝ないと体調が戻らないんですよー  
なので……協力してもらえませんか？」

「協力？」

「また体力あげると眠気が出てくるんですよ  
ということなので体力をあげていいですか？」

「……ああ」

「触りますよー」

んーこれぐらいがいいかな？

「協力ありがとうございますー」

じゃあ私は向こうのアジトで寝るねー

ツナ君の修行は多分明日になっちゃうけど……

ごめんね？」

「う、うん

優はゆっくり寝てよ」

「ありがと♪」

流石に獄寺君の匣兵器を

雲雀先輩のアジトに連れて行くのはまずいか……

ひっかいたりしたら大変だもんねー

「ほら、こっちに来い」

あ、獄寺君も思ったみたいだね

……無視してるね（笑）

「獄寺君と一緒に修行頑張つてね

私が元気になったらまた遊ぼうね？」

によおん♪

おー意味がわかったのか

私から離れて会議室から出て行ったよ

「コラー！勝手に行くくんじゃねえ!!」

獄寺君ドンマイ（笑）

「じゃあまたねー」

あ、眠気が出てきたねー

これだったら寝れそうだねー

## 休息 4

……大丈夫そう

見た感じでは機嫌が悪くなってるないよ

「おかえり」

大丈夫だった（笑）

「ただいま戻りましたー」

あ、スーツじゃなくなってるね

話し合い終わったからかな？

それともお風呂入ったのかな？

……私も入ろう

んーお風呂入ったら眠気がかなり来た……

まあおにぎりぐらい食べよう

このままだと餓死する

あ、ヒバードだ

ポフツ

私の頭の上に乗ったし何か食べたいのかな？

え……おにぎりはダメだよ

いや、ヒバードは頭がいいから

米は食べちゃダメって知ってるか……

「ヒバリ ヒバリ」

あー雲雀先輩が呼んでるのか……

お風呂に入ってると思つてヒバードに頼んだのかな？

んーおにぎりを持って会いに行こう

雲雀先輩もほしいかもしれないしねー

「どうかしました?」

「遅かったからね」

あー心配してたのかもー

風呂で寝てたら大変だもんね(笑)

「お腹が減っておにぎりを作っていました

これを食べたらすぐ寝ます

後30分ももたないと思いますしねー」

「わかった」

もぐもぐ

お!おにぎりがやばい

大根の浅漬けが美味すぎる

起きたらお茶漬けをして食べよう

あ、食べることにしか考えてない(笑)

何かいい話題ないかな?

「あ、雲雀先輩のところに

情報ファイル届いたんですねー

さつき聞きましたよ」

「そうだよ」

「ツナ君と話してたんですが

これ夢で見たんですよー

それで目が覚めちゃったんですよ」

「へえ」

「せっかく寝れたのに

骸君に起こされちゃいましたよ」

「……………どういうこと」

あー!しまったー!!!

よ、よし食べ終わった!!

「えっと……………寝ますね」

ガシッ

……………逃げれない

腕が捕まってしまったよ……

「優」

「……夢は……骸君からのメッセージです  
少しづつ力が弱まった気がして……」

向こうでは骸君からとは言いませんでした……」

「ふうん」

機嫌が……最悪だ……

無理に話題を出すんじゃない……

「……しようがないです」

私と骸君は近いんですから……

私の意思じゃないんですもん」

そうだよねー

よく考えたら私のせいじゃないんだもん

「……どういう意味」

「雲雀先輩でもこれ以上は言えません」

「優」

「ダメですよー」

これはクロームちゃんと骸君との秘密

って約束しましたからー」

うわー機嫌が悪いなー

「んー……骸君と近くても

私が好きなのは雲雀先輩ですよ？」

「……そう」

「骸君に近い私は嫌いですか？」

「はあ……わかったよ」

「よかったです」

「これで嫌われたらどうしようかと思いました」

「それはないよ」

「もし嫌われたら未来の私に悪いので

困りましたよー」

私は嫌われてもいいけどねー

「優」

「なんですか？」

ぐいっ

「きゃっ!!」

いつもより力が強い……

ぎゅ

うわー!!!

雲雀先輩のひざの上に乗っちゃったー

それも抱きしめられたー／／／

こ、これはまずい

私の心臓がもたない

今すぐ降ろしてもらわなければ!!

「あ、あの……ん／／／」

……

……

……

……

今のは……不意打ちだった……／／／

抱きしめらなからなんてしたことないよ／／／

雲雀先輩には悪いけどすぐに降りて

私の座布団に抱きついてしまった……／／／

「……今の優には少しはやかったかな」

「……そうです……／／／」

初めてでした……／／／

「過去の僕に悪いことしたね」

／／／／／／／／／

作戦前に……死にそう……／／／／

「耳が真っ赤だよ」

「……しようがないです／／／」

うう……もう顔が座布団から離れないよー

早く部屋に行って寝よう……

ふわっ

「へ？／＼／＼」

あれ？お姫様抱っこ？

ってか、凄く簡単にしたよ……

流れるような動作でお姫様抱っこされたよ……

「寝るんだよね」

「あ……はい……／＼／＼」

ぎ、座布団も一緒に持って行ってるけど……

まあいいか……

えっと……どうしたんだろ……

いや、なんとなくわかるけど違うと思いたい

「僕も寝るから」

「……一緒にですか？／＼／＼」

「そうだよ

おやすみ」

えー……！！！！

無理無理無理！！！！

「あ、あの……」

……寝てるし

まじっすか………？

雲雀先輩って……

なんでこんなにキャラかわったんだろ……

いや……まじで……

神様わかりますか………？

『それは俺でもわからん』

……やっぱり見てたんだ

『見ちゃったというほうが正しいけどな

オレはもう見る気はないぞ

雲雀に腹が立つからな！』



……なんで自信満々で言うかはわからないけど  
見ようとする気はなかったのはわかったよ

『そうか』

・  
・  
・  
・  
・  
・

誰か答えを教えてくださいー

なんで……こんなに……

雲雀先輩のキャラがかわったのーーー!!!

大声で叫びたいよーーー!!!

『俺に叫んでるだろ』

神様に叫んだつもりはないよ……

心の中で叫んでただけだもん

『そうか』

もう限界なんだろう？

寝ろよ』

あ、うん

そうだね

おやすみなさい

『おやすみ』

## 休息 5

「ん……」

よく寝たかも……

「おはよう」

あれ？雲雀先輩の声だねー

あーそうだった

一緒に寝たのを忘れてた……

「……おはようございます」

?!?!

ち、近い／／／／

「ひ、雲雀先輩どうしたんですか？／／／」

「なにが？」

え……近いつて思うのは……私だけなの……？

未来では普通なの……？

10年間に一体なにがあったんだろう……

……

……

深く考えるのは止めよう

考えれば考えるほど混乱しそうだしね

「優？」

「あ、何でもありません!!」

何か話題を出して少しずつ距離をとらないと……

このままでは私の心臓がもたない!!

「そ、そういうえば……会議で聞いたんですけど

5日後？ あれ？」

寝てて日にち変わってるね

「4日後に襲撃するみたいですわねー」

「そうだよ」

ツナ君が頑張って決めたんだらうねー

私って何も役に立ってないね（笑）

とりあえず……起きよう……

んーもう完全に体調が戻ったみたいだね  
普通に起きたしねー

……おなか減った

あ！お茶漬けを食べなければ！！

んー……意外と朝が早かったね

私って本当に単純だよねー

まあそれはいいとして……

雲雀先輩いつから起きてたんだろ……

私が起きた時は起きてたよね？

……／／／

なんか恥ずかしい／／／

「優」

うわっ?!びっくりした……

平常心平常心……

「なんですか？」

「昨日なに隠したの」

想像つくけどね」

……ばれてたみたい

ゴソゴソ……

「雲雀先輩の想像通りだと思います

発信機です」

「そう」

「私が囮になります」

「何 勝手に決めてるの」

「見つけたのは私ですよ？」

「1人ではさせないよ」

「……やっぱり駄目ですかー」

「当たり前だよ」

「そうですか……」

「どこかい場所があるんですか？」

「あるよ」

「わかりました」

敵が来そうなきときは言っってくださいよ？

絶対1人で行かないで下さいよ？」

なんか1人で勝手にやりそう（笑）

「わかってるよ」

「本当ですか？」

約束してくれなかったら

この発信機は渡しませんよ？」

「……わかった」

うわー絶対1人でする気だった……

危なかったー……

先に発信機を見つけた意味がなくなるよ

「雲雀先輩が私を心配するのと一緒に」

私も雲雀先輩が心配なんですからねー」

「わかったよ」

「約束ですよー」

もし破ったら未来の私に手紙を残して

いっぱい怒ってもらいますよ♪」

「……それは……困る」

未来の私に怒られるのは困るんだ（笑）

それは意外だったなー

もしかして10年後の私は雲雀先輩に強い？

……それは想像出来ない（笑）

「では渡しますねー」

それにしても変な発信機だね

「……良く考えると

僕の目が届くところにいる方が安全だよね」

「……そんなに私は弱くないですけど……」

「それとこれは別だよ」

えー……一緒と思うんだけど……  
まあいいか……

これで絶対言ってくれるしね

お昼になったらツナ君の修行しよう

寝てて結局出来てないからねー

私が寝てる間にX BURNER使ってるかもしれないし  
これぐらいのタイミングだったと思うんだよねー

私がツナ君の体を風で支えて調節したら

原作よりは多少使いこなせると思う……

私が操れる風の量は大したことないから

あんまり意味ないかも知れないけど……

やっぱりスパナさんの力が必要だよね

ジャンニーニさんに頼んで作ってもらってもいいけど

それはそれで……いろいろ問題が出てきそう……

うん……それは止めておこう

それに終わったら

またラルさんとクロームちゃんに

体力をあげてもいいしねー

まあその前に……相談しようー

神様ー!!

『なんだ?』

私の判断あつてると思う?

『そうだな』

俺も囀の方がかなり危険だと思う』

だよね……

『優が囀になった時も思ったが変な奴もいたぞ

優の原作知識にはあんな奴いなかっただろ』

そうなんだよねー

まあ雲雀先輩が原作で倒した人かも知れないから  
ちよつと自信なくて……

『問題ないだろ』

入江正一は雲雀と優が気付くと思つて  
こつちに奇襲をかけてるはずだろ

2人で相手すると思つてるから

かなりの人数送つてくるだろ』

やっぱりそう思うよねー

よかつた♪

神様もそう思つてるんだつたら安心したよ

『そうか』

そんなに私に興味あるのかなー？

絶対私のせいで増えてるんだよねー

『どのパラレルワールドでも捕まらないからな……』

今、白蘭を止めてるのは優だけだからだろ……

どんなことしても優の正体知りたいはずだ

人数増えてるのは当たり前だろ』

それもそうだね……

『ああ』

まあ考えてもしょうがないやー

『ああ』

囧、気をつけろよ』

わかつてるよー

雲雀先輩もいるから大丈夫だつてー

『それもそうだな』

雲雀が優を守らないわけがない』

……そうだね／＼／

『なに、照れてるんだよ』

ちよつと嬉しいのー／＼／

『どう考えてもちよつとじゃないだろ』

うるさいー／＼／

『ぶっ!!』

笑うなー!!

『わりいわりい (笑)』

オレは仕事に戻るから頑張れよー

じゃあな (笑)』

……お仕事頑張つて

……絶対、私をからかって楽しんでる  
素直に応援できない……

## 決戦に向けて

いやー3日間頑張ったね

といっても……ツナ君のX BURNERには  
全く役に立たなかったけどね……

だって支えても意味なかったもん（笑）

だから失敗した時にツナ君が

壁に激突しないようにすることに専念した

激突がしないとわかれば不安が減ると思うから

少し効果があったと思いたい

思わないという意味がない気がしてショックを受ける

後はツナ君とガチバトルをした

それも結構長い時間ね

ラルさんにそんなことさせるわけにはいかないからね

出来ればもうしたくないと思ったよ

こんなにも長時間戦うのはまじで勘弁だ……

私の性格では嫌で嫌でしょうがない（笑）

で、ツナ君と戦ってわかったことがある

ツナ君とのバトルはスピード対決だったんだよねー

まあ私の炎を死ぬ気の零地点突破 改で

奪ってから対決したけどねー

ツナ君はいいよって言ったんだけどね

白蘭さんとのバトル想定したいっていうのもあったから

ツナ君を言いくるめて無理矢理させた（笑）

うん。私ってひどいね（笑）

思ったのが……超直感まじ怖い……

スピードは私の方が速かったけど……

油断したらまじで怪我するよ

考えの予兆だった？あれはまじですごいね……

いやーボンゴレの血は怖いねー

斬撃とばそうと思ったらかなりの集中力いるから



スピード対決の時は使えないことがわかった  
つまり白蘭さんにもきついと思う

というか……

白蘭さんにはかなりの型がばれてると思うし

スピード対決になって……

今回ツナ君と戦った時のよりすごいきついと思う

全部動きがよまれるんだよね

逃げようとするのも読まれてるからねー

ボンゴレ匣なかったらまじでやばいと思う

パラレルワールドの私が特殊能力を使ってるのは確信した

つまり白蘭さんに特殊能力のことが絶対ばれてる

これでボンゴレ匣がなかったらどうしよう……

あると信じてるよ!! 未来の私!!

後はランボ君達のプリンを作った

生クリームがないから固めのプリンになったけどね

まあ私は固めのプリンの方が好きだけどね

10年後の雲雀先輩も食べれたしねー

多分、生クリームが入れば甘すぎるんだと思う

カラメルが焦がし加減をわけて作ったのも良かったかも

今度、雲雀先輩に作ってみようかな♪

もうすぐ会えるしねー

「ヴェントちよつといいか?」

あ、いろいろ考えながら

アジトに戻ってたら話しかけられた

“ああ”

んー人気のないところに来たよ

山本君がそんなことするのは珍しいよねー

「どうかしたの?」

「そのさ……オレ……」

小僧のヒミツ……教えてもらってさ」  
アルコバレーノのヒミツだね

「なるほどねー」

「あー！ 私には絶対教えないですよ？」

「え……オレも小僧から」

「作戦終わるまでは話すなって言われたけどよ」

「なんで絶対なんだ？」

「リボン君と約束したんだー」

「聞くときはツナ君と一緒に聞くてー」

「わかったぜ」

「んー……私がおしやぶりを持ってるから」

「気になったのかな？」

「人気のないところに来たのはそういう意味だよねー」

「……ああ」

「そうだねー」

「あんまり詳しく話せないけどー」

「呪われているのは一緒だと思うよ」

「……そっか」

「山本君が気にすることじゃないよ？」

「ああ……」

「気にしてそう……」

「んー……実はさー」

「1度だけ私の呪いのことで」

「山本君に救われてるんだよねー」

「当たり前って言われたのが」

「すっごい嬉しかったんだよねー」

「え!?! 風早どういうことだ?」

「それは言えないかなー」

「でも救われたから」

「山本君にはすっごく感謝してるんだよねー」

「……そっか」

「そうだよー」

だからありがとうね」

「ああ」

あ、いつもの笑顔になったよ」

「もうマファイアごっこじゃないってわかった？」

「ああ」

「そっかー」

「風早、お前大丈夫なのか？」

「へ？ なにが？」

「……いろんなマファイアに狙われてるんだろ……」

「そっだねー」

捕まったら人体実験とかされるのかなあ？」

あ……黙っちゃった……

「んー獄寺君にも言っただけど……」

ありがとうね」

「……どういう意味だ？」

「この時代の私は雲雀先輩と風早優として

普通に行動出来てたってことは

未来の山本君がずっと黙っててくれる

ってことだよね？」

「……そっだが

なんでオレに礼をいうんだ？」

「これも獄寺君に言ったけどー」

未来の山本君が黙っててくれるってことは

今からずっと山本君は黙っててくれるってことだよ？」

「そっかそっか」

「そっだよよ」

だからありがとうなの」

「ああ」

完全にいつもの笑顔に戻ったねー

「山本君は笑ってるのが1番だよー

そして元の世界に戻ったら野球だね♪」

「そうだな

楽しみだぜ」

「元の世界に戻るまでは

野球のこと忘れなよー」

「あ……ああ」

ヒントあげたけどわかってないねー

「じゃ、私は戻るね」

「ああ

またな」

「うん

またねー」

山本君に勝ってほしいから

かなりのヒント言っただけ……

多分これは1度負けないとわからないよねー

## 決戦前日？

明日殴りこみの予定の日だから今日は昼寝した  
原作知ってるから今日の夜ってわかってるもんねー  
あれ？ラルさんがこつちに来た……

……

すごい!!似合ってる!!!  
なんてきれいなんだ!!!

一体何を食べたらそんなにきれいになるんだ!!

うーん……気になる……

「風早……なんだ……」

あ、ジロジロ見てたもんねー

「あまりにも似合ってたから

大人の女性だなって思いました……」

「風早は着ないのか？」

「ここには和服で来いと言われたが……」

……誰が言ったんだ

雲雀先輩……？それはないか……

多分、リボン君だねー

「んー私は自分で着れないですしー

もしランボ君とかが間違っ来てたら困るんで……」

「今日は来ないぞ」

「え？ そうなんですか？」

「ああ

リボンが来ないようにしたと言ってたぞ」

あ、着物指定はやっぱりリボン君の気がしてきた

「でも、着れないですしー」

「オレが着付けしてやる」

「……本当ですか……？」

「ああ」

「ありがとうございます!!」  
うわー楽しみ♪

「……似合ってますか……?」

「部屋にいっぱい着物があつたから  
今の私に似合いそうな色合いを選んだけど  
やっぱり自信がない……  
着物なんて着たことないし……」

「さあな」

う……冷たい……

そこはお世辞で似合つてると言つてほしかった  
でも着せてくれたつてことはやっぱり優しいよねー

うー扉を開けるのが緊張する

ガラツ

……ラルさん

そんな簡単に開けないでくださいよ……

まだ心の準備が……

あ……雲雀先輩が固まつてるよ……

やっぱり似合つてないんだ

……脱ごう

少しでも似合うと思つたのが間違いだった

よし、今すぐ部屋に戻ろう

「優、こつちに来なよ」

「……はい!!」

良かったー!!

あ、雲雀先輩の隣に私の座布団がある  
つまりここに座つていいと……

でもラルさんにも座布団がいるよね？  
体調が悪いし……女の人だし！

あ、私のを貸せばいいや  
なくとも雲雀先輩の隣に座れるしねー

「ラルさん、どうぞー」

使ってください」

「……オレはいい」

「へ？」

座布団が嫌いだったのか……

じゃあ私が使おう（笑）

あ、お茶を出さないと……！！

「風早さんは大丈夫ですよ

私が入ります」

……草壁さんに仕事をとられた！！

まあいいか……

慣れない着物だから気を使ってくれたんだらうね

大人しく雲雀先輩の隣に座っておこう……

あーお茶が美味しい……

凄く和むよねー

「いよいよだな ヒバリ！

明日は我ら年長組

いいところ見せんとな！」

「いやだ」

ガチャン

危ないなー

京子ちゃんのお兄ちゃんは暴れないでほしい

草壁さんが入れてくれたお茶がこぼれたらどうするの

「落ち着いて 笹川さん！」

「放せ！！

中坊ん時から成長せん男め！！」

京子ちゃんのお兄ちゃんも成長してない気がする  
それに雲雀先輩は更に心配性になってるよ

ってか……その前に……

「京子ちゃんのお兄ちゃん

私は年長組じゃないですよー?」

「風早は強いから問題ない!!」

「なるほどー」

「僕の目的は君達と群れるところにはない」

「くっ」

「そうですよー」

雲雀先輩は群れないですよー」

私以外と群れたことないよ……

本当に原作と違うのは私だけだよ……

「ラル・ミルチ

あなたは明日どうするんですか?」

「無論出る

戦力は多いに越したことはないからな」

「その体調で無理するな!!」

風早の能力は治るわけじゃないんだぞ!

小僧だってアジトから出るのを

断念しているのだぞ!!」

そうだよねー

体力はあげたけど……

少し体調がましになるだけだもんねー

まあ反対しても意地でもいくよ

「死にたきや死ねばいいさ」

……それはひどい

ガオオオ!!

京子ちゃんのお兄ちゃんが暴れた(笑)

「ヒバリー!!」

お前には思いやりの心はないのか!!」



「笹川さん!!」

草壁さんも大変だなー

京子ちゃんのお兄ちゃんを頑張って止めてるよ

「ラルさんごめんなさい……」

私の袋を貸せたらいいんですけど……」

「それはダメだよ」

ガオオオオ!!

更に暴れた（笑）

「ヒバライ!!」

風早の分の思いやりの心を

なぜ他の人に使わないんだ!!」

「笹川さん!!」

草壁さんが本当に大変だ（笑）

助けてあげようー

「草壁さん離して下さい」

「は……はい」

ふわっ

「風早!! 勝手に浮かべるな!!」

おろせ!!」

「落ち着いたらおろしますよー♪」

ガオオオ!!

余計暴れてるねー（笑）

「もりあがってるな」

あ、リボン君登場だー

なるほどー

シユミレーション結果のためにみんな呼んだのね

これを聞いても意味ないしー

聞かないでいいやー

……その前に京子ちゃんのお兄ちゃんをおろそう

ちよつと忘れてたよ（笑）

話が終わったなー  
みんな帰っちゃったなー

「優」

「なんですか？」

「着ただね」

「はい」

リボン君が今日はこっちの

アジトに誰も来ないように言ったって

ラルさんから聞いて着せてもらいました」

「そう」

「似合ってますか……？」

「似合ってるよ」

……／／／

嬉しいなー……／／／

「ありがとう……／／／」

グイッ

「きやつ!!」

今、着物だよ!!

あれ？抱きしめられるか

キスされるかと思っただけど何もない……

つい雲雀先輩の顔をジツと見てしまった

まあ私から抱きついてる感じになってるけどね／／／

だって雲雀先輩が支えてくれなかったんだもん

「はあ……今日だけで良かったよ」

そんなに似合っていないってこと？

あれ？でも似合ってるって言ったよね

聞く前に体勢を戻そう……

「えっと、どういう意味ですか？」

「優が毎日着物を着てると」

僕はもっと大変だったってこと」

どういう意味だろ？ 大変？

「わからなくていいよ」

ふむ？

まあいいかー

## 夜襲

によおん♪

ドンッ

「うわあ!!!」

な、なんだ!?なんだ!?

……獄寺君の匣兵器だよ

あー流石に今のはビックリした……

寝てるところにダイブして来たもん

せっかく寝てたのになー

多分そろそろ時間だからいいか……

それにドアをちゃんと閉めなかった私が悪いよね

ガチャ

「どうしたの」

「あ……ごめんなさい……」

起こしちゃいましたね……」

雲雀先輩は隣の部屋だからねー

叫び声が聞こえちやっただらうねー

「なにがあつたの」

「実は獄寺君の匣兵器が来たみたいで……」

さつきから凄く擦り寄ってくるけど……

……なんか酔っ払ってない……?」

いや、流石にそれはないか……

「そう」

「ひゃん!!」

うー……また首を舐められた……

ガシッ

「雲雀先輩そんな無理にはがしたら

ひっかきますよー」

あれ?なんか機嫌が悪そう……

眠たいからかなー

起こしちゃったしねー

「問題ないよ」

「もう夜遅いですしー」

「こっそり獄寺君の部屋に戻してきますよ?」

「僕がする」

「でも雲雀先輩に懐いてなさそうですしー」

雲雀先輩は眠いでしょ?」

思いつきり暴れてるし……

あ……行つちやつた……

ガリガリガリ

「? 何の音だ……?」

さつきからガリガリ聞こえてくるような……

外だよな? 出てみよう

「ツナも聞こえたか?」

山本も聞こえたんだ

「うん」

「どーやらあれみたいだな」

「ヒバリさんと獄寺君の猫ー!」

「酔っぱらって優のところに来たよ」

「ああつ!!」

てつきり匣に戻ってたかと

また風早のところに行ったのか……瓜!!

……ンゲエ!!」

変な名前をつけてるー!!

それも優にはっきり懐いてるよ……

「君達……」

優に迷惑かけたらどうなるか知ってるの?」

「おっおい!!」

「てめっ」

「ごめんなさい!!」

なんで優が返しに来てくれなかったのー!!?

このままだと咬み殺されるー!!

「……眠い……今度ね」

た、助かった……

「ま……待て ヒバリ!!」

あ……あんがとな……

いずれ この借りは返す……ぜ」

獄寺君がヒバリさんにお礼を言った……!!

「期待せずに待つよ 獄寺隼人」

「なっ 期待せずだと!?!」

言っただけの意味ねー!!

「あ ヒバリさん!

明日一緒にがんばりましょうね」

「いやだ 僕は死んでも君達と群れたりし

一緒に戦ったりするつもりはない 強いからね

まあ優はいいけど……おやすみ」

ガーン!

オレ達はいやで優はいいんだ……

でもヒバリさんと優と一緒に戦うことってある?

優は戦わないでヒバリさんが任せるような……

ま、まあ優とは群れてもいいってことだよな?

「10代目どうかしましたか?」

「う、ううん! なんでもないよ

また明日」

明日は殴りこみだ!

早く寝よう……

帰ってきたー

「おかえりなさい」

「そろそろ行くよ」

「あ、やっぱり今日でしたー?」

「僕がもう入れ替わるからね」

「そうですよねー」

奇襲があるとしたら夜中だと思おうし

私もそのつもりで今日昼寝しましたー」

「そう」

さて!準備をしないと!!

まあいつもの服を着るぐらいしかないけどね(笑)

それにしても広いなー

もしかして私がいる分が敵の数が多いから

さらに広いところにしたのかも……

あ、違う……

未来の私が広く作るように誘導したのかも?

まあ何でもいいか……

「優……無茶はダメだよ」

心配性すぎるでしょ……

「大丈夫ですよ

雲雀先輩の考えに合わせて動きますから

足手まといにはなりませんよ?」

「……わかった」

「はい!!」

雲雀先輩こそあんまりリングを持ってないんです  
気をつけてくださいよ?」

「わかってるよ」

「頑張りましょうね！」

うわー頭を撫でられたー!!

彼らが気付いてくれたおかげで

計画の成功率がかなりあがったよ

この基地を手薄の間に仕掛けてくれよ

……お、お腹が痛くなってきた

「カウントを開始する 3 2 1

爆破!! 全体突入!!

ヴェント捕獲とボンゴレリングの回収を優先せよ

守護者は生け捕りだ」

「抵抗する場合はいかなさいますか？」

「……ヴェント以外は……殺せ」

「了解!!」

風早さん……捕まらないですよ……

うわーうじやうじや来たー（笑）

これはすごいな……

やっぱり原作より多い気がする……

おー屋上がしまった!!

「なっなんだ!？」

「弱いばかりに群れをなし

咬み殺される袋の鼠」

「確かに……僕でもこの人数は気持ち悪い

……群れすぎだ……」



まじで多すぎ…… (笑)

白い塊を見てるみたい……

「わ!! 罨だ!!」

だがヴェントがいるぞ!!」

あ、私にみんな興味をもっちゃったなー

〃僕は風だ

見えないものを捕まえることはできないよ〃

よく考えたら見えないものだから

本当にいてはいけない存在みたいー

まあいいや……

さっさと倒しますかー

「何なんだ?」

「出撃って……?」

予定より早くない?」

急に起こされたし……

「敵の急襲です!!」

5 k m離れた倉庫予定地に

大部隊が集合している模様」

「ヒバリと優がすでに向かってるぞ」

「!! ヒバリさんと優が!」

敵は大勢いるんでしょ?

2人じゃ無理だ!! オレ達も行かなきゃ!!」

「ならん!!」

それではヒバリと風早が

体をはる意味がなくなる!!」

「え!」

「集中した敵の兵力を

ヒバリと優が引き受けることで

地上と敵アジトの戦力は手薄になるんだ

ヒバリと優の行動に報いたければ

殴り込みを成功させろ」

そ、そんな……

「地上監視ポイントより信号確認!!」

コースクリア 10代目!!

今ならそのままFハッチよりルート312で

敵アジトへつつ切れます!!」

「ぐっ……」

オレなんでさつき気付かなかったんだろう……

変だなって思ったのに……!」

「おまえはヒバリと優の強さを知ってるだろ? ツナ」

「………わかった

開けてくれ ジャンニーニ!!」

ヒバリさん頼みます!!

優も気をつけて!!

「了解!! Fハッチ開口!!」

それにしても多いな……

斬撃を使えそうなら使おう

いっぱい着こんでるみたいだし死なないだろう……

少し力を抑えたらなんとかなるよね?

うん。なると思うことにしよう

「ヴェントを捕まえろ!!」

うわー標的は私だねー

“もう1人いるのを忘れてないか?”

うわーどんだん咬み殺してる…… (笑)

本当に気をつけないと邪魔しそうなぐらい凄い

……斬撃を飛ばすか……

このタイミングでは使いたくなくなかったけど……  
うわー何人か吹っ飛んだねー

やっぱり集中力があるから使いにくいよね

それにしばらくこの技は警戒されるし使えなくなったよ  
まあしようがないか……話す時間がほしかったしね

「あんまりとばしすぎるなよ」

「わかってるよ」

本当にわかってるのかな……

まあ雲雀先輩はわざと派手に動いていると思うけどね

だって私を標的にする人が多すぎるもん

でも雲雀先輩が派手に動くとリングが足りなくなるよねー

うーん……

「ヴェントをスピードにのらせるな!!」

スケボーを狙え!!」

おっと私のスケボーが狙われた

「飛んだ!」

空中では避けられないぞ!!」

うわーご丁寧に解説までしてくれてる(笑)

「今だ!!狙え!!」

「悪いな……空中戦も得意だ」

「な!? どうなってる!」

奴はスケボーの車輪を加速してるはずだ

地面から離れたら動けないはずだぞ!」

「言っただろ?」

僕は風だ」

それにしても……弱い!!!

このスピードについていけない人がいない

まあこの調子だったらなんとかかなりそうかなー

でも時間はかかりそうだけど……

先に雲のリングを持つてる人から倒すか……

気絶させた後に風を使って奪おう!!

先にお別れです

終わった終わった♪

それにしても数が多かった……

まあほとんど雲雀先輩が倒した気がするけどね

私はリング没収係だった（笑）

いや、私もいっぱい倒そうとしたけど

渡したリングをすぐ砕いちやうんだもん……

苦労してとったのに……って思ってたけど悲しかった

ってか、人数が減ったら私に任せてくれても良かったのに……

最後まで戦うからあんまりリングが残ってないと思う

「怪我不い？」

んー普通に話してもいいよねー

雲雀先輩も念のために場所移動してから

話しかけてくれたみたいだしー

私より用心深いかも……

まあ私の正体ばれたら大変なことになるのは

この時代の雲雀先輩の方がわかってるしね

「ないですよー

ちゃんと約束守ってますよ？

雲雀先輩は？」

「僕もないよ」

「良かったです♪」

うわっ！また頭を撫でられた!!

これはほめてくれてるのかなー？

えへへ……／／／

「やっぱり数が多くて

私と一緒に良かったと思いました」

「そうだね

優がいなければリングがなくなってたよ」

やっぱりこっちが私がいる分

原作とずれてたみたいだ  
判断あつてて良かった……

雲雀先輩に何かあるところだったよ  
「そうですね」

「まだ残ってます？」

「残ってるよ」

んー幻騎士と戦うの分は残ってそう  
でもやっぱり少ないよ

最後は私に任せてくれたら良かったのになー

「大丈夫だよ」

何も言っていないのに伝わったみたい

今から殴り込みだよねー……

「……もう10年後の雲雀先輩とは

ゆっくり話せないですね」

「そうですね」

でも僕より過去の僕に会いたいよね」

「……………」

「本当のことを言っているよ」

「会いたいです……………」

頭を撫でてもらうのも好きだけど……

いっぱい笑ってくれるのも好きだけど……

ふと思いつかべるのは違うもん……

「もうすぐ会えるよ」

「そうですね」

「でも……………私より……………」

「なに」

「少しは違うと思いますけど」

私は歳をとれば10年後の雲雀先輩に会えます

だから雲雀先輩の方が少し寂しくないですか？」

「そうですね」

僕は過去には戻れないからね」

「少し懐かしかったですか？」

「昔に戻ったみたいで楽しかったよ」

「それは良かったです♪」

未来の私をこれからもよろしくお願いしますね？」

「それは心配しなくていいよ」

うわー凄く優しい顔をした……／／／

こんなに優しい顔を見るのは初めてだ……

未来の私に見せてる顔だったのかも……

「……私は10年後の雲雀先輩が

かつこよかったのでこれから楽しみです」

「そう」

あ……笑った……／／／／

「優」

「はい？」

グイッ

「うわっ!!」

ぎゅっ

また力が強いな……

「雲雀先輩……？／／／／」

あ……離れた／／／

「最後にどうしても抱きしめたくなくなった」

／／／／／／／

うう……言葉にされると恥ずかしい……／／／／

「次は過去の僕にしてみらいなよ」

その言葉も恥ずかしい……／／／

「……あい……／／／」

うわーまた頭を撫でられた!!

やっぱりこれは子ども扱いなんだろうねー

「……これから気をつけてくださいよ？」

多分……怪我するし……

「優もね」

「わかってますよー

正直……雲雀先輩のほうが危険ですよ？」

「どうして？」

「リングの数が少ないから……」

「……そうだね」

「リングが無くなった時に

リングの力がないと困ります……」

「気をつけるよ」

でも……原作通りに進むんだろうな……

私が戦えるならいいけど……

「はい

では行きますか？」

「そうだね」

あの人は今

……潜入したのはいいよ

敵に会うたびに私を狙ってくる……

もう苦笑いしか出てこないよ

まあ雲雀先輩はボンゴレリング持ってないしねー  
私を狙う方が優先になるよねー

“そろそろ目的地が近いか？”

「このまままっすぐ後3部屋だよ」

“……そうか”

ここは僕が相手するから先に行きなよ”

睨まないでください……

でもどう考えても用事があるのは私だもん

もう殺気がビシビシ伝わってくるんだよ

雲雀先輩じゃなくて私にね

何かうらまれるようなことをしたのかなー？

だから私が相手したほうがいいと思うんだよね

“リングの数が少ないだろ？”

それにもう時間がない”

「……わかった」

“じゃあな”

これが最後だろうなー

やっぱり先にお別れしててよかった……

さて、さっさと終わらせようー

それにしてもこの人は雲雀先輩には興味ないんだね

先に行っても止めようとしなかったもん

「久しぶりだな」

……誰だよ

「その様子だと覚えてないのか」

“ああ 全く”

ってか、私の知ってる人？



未来の私知ってるとか言わないでよ

「10年前に骸と一緒に行動してた」

あー転生者ね

そういえば10年たったらこんな顔になるかも？

……うん。ごめん

モザイクがかかった感じにしか覚えてなかった

唯一覚えてるのは……

「僕に気絶された奴か……」

それしかわからない

そういえばこの人は今までどうしてたんだろ？

「思い出したか……」

俺はお前に負けてから……」

えーこれって聞かないといけないのー!?

聞かずにさっさと倒していいよね

うん。私が許可する（笑）

それに幻騎士との戦いに間に合うかもしれないしー

「おい！聞いてるのか!？」

「聞いてない」

あ、つい答えちゃった（笑）

しまったなー

相手が匣を出しちゃったよ

油断してる時に倒したかったなー

うわー何してるの……

武器が銃なのはいい

でもなんでもつたいないんだ!!

あんなに遠くから撃つのがうまかったのに普通の銃だ!!

前に使ってたライフルの方がいいよ

どう考えても近距離タイプではなかったし!!

本当にバカだよ……

パンパンパン……

撃ってきたし……避けるか……

あ……

「避けても無駄だ!! これは追尾型だ!!」

俺の属性は嵐……刀も分解する!!」  
なるほどねー

とりあえずスケボーで逃げるか……

「お前の性質は加速!!」

逃げることばかり考えてると聞いてな

逃げても無駄!! たたき落とせない!!

勝ち目がないだろ!!」

うーん……この人はバカ?

名前を知らないしバカ(仮)でいいね

バカ(仮)はバカみたい

あ、私もバカが移ったみたい

日本語が変だ(笑)

「僕的能力知らないのか?」

「なんのことだ!!」

うわー本当にバカだ……

「あー悪い……」

君には能力を見せずに勝ったからな……」

「さっさと死ね!!」

私を殺したら多分ダメだと思っただけ……

完全に捕まえること忘れてる(笑)

本当に今の時間が無駄な気がしてきた……

ビュッ!!

うん。斬撃とばすと問題ないよねー

圧縮された風で弾が木っ端微塵と……

つてか、風で止めても大丈夫だしー

軌道をずらして絶対当たらないようにしてもいいよね

正直、私は銃使いと負ける気がしないんだよね

リボン君とのバトルは

出来るだけ刀を使う条件だったしー

「な!?!」

「悪いな」

「また気絶してもらどうぞ」

「ま……まぐれだ……」

「どんなまぐれだよ……」

「もういいや」

「一気に加速で詰めて気絶させよう……」

「ドサッ」

「……本当に近距離タイプじゃないよね」

「もったいない……」

「この人はあほな神の被害者だね」

「私についてる神様が天才でよかった……」

「……まじで……」

## 恐怖の日々

〈10年前の世界〉

彼は校門であった友達に小声で話しかけると

その友達も小声で返事をした

「風早さんが……いなくなつて……」

どれぐらいたつた……？」

「もうわからん……頼むから……」

早く帰つてきてほしい……」

「……そうだよな」

彼らの願いは切実だった

この並盛を牛耳つてる雲雀恭弥が

日に日に機嫌が悪くなつていくからだ

普段は風紀さえ乱さなければ咬み殺されることはない

今の雲雀恭弥は目が合うだけで咬み殺されるのだ

このため雲雀恭弥の目撃情報メールが

生徒内でまわしていたりするほどである

「沢田とかもいなくなったのと

関係してるのか……？」

「あいつら仲いいもんな……」

風早さんだけでいいから……」

帰ってきてほしい……」

「本当だよな……」

風早さんだけ帰ってきてくれたら

もう沢田達は別にいい……」

彼らはひどいことを言っている自覚はない

なぜなら失踪した人物に関わったことがない生徒は

全員このように思っているからだ

ここまで追い詰められているのは逃げ道がないからだ

学校に通わなければ咬み殺される

通つても咬み殺される恐怖におびえなくてはいけない

なぜなら雲雀恭弥はこの学校で1番目撃されているからだ  
そう……彼らは学校にいることを忘れていた

「君達、今何か言った?」

「ひっ!? 雲雀さん!?!?」

な、何も言っていないません!!!」

「ふうん」

ドカツバキツ

彼らは雲雀恭弥と目を合わせたわけではない  
ただ話している内容が気に触った  
それだけのことだった……

く屋上く

「はぁ……」

深い溜息を吐いた

咬み殺したとしても気が晴れることはない

原因はわかっている……

ポケットにしまっていた手紙を取り出した

カサツ

『雲雀先輩へ

電話や会って説明したら離れがたくなるので  
手紙にしました。ごめんなさい。

しばらくヴェントで行動するため姿を消します

雲雀先輩の力を使っても

絶対見つからないので探しても無駄ですよー

心配しなくて大丈夫ですよ

ちゃんと約束は守りますよ?

もうひとつの約束も守る証明のため

家の鍵をポストにいられます

雲雀先輩に持ってほしいです

必ずまた雲雀先輩に会えるという意味で置いています

会わないと私は家に帰れないですからね  
では……いつてきますね

優  
』

「はあ……困った子だね……」

手紙に書いていたが探した……情報はなかった

雲雀恭弥も薄々気付いていた

優が見つからないといえれば見つからない

それでも見つけたかったのだ

カチャ

「誰だい？」

ここは立ち入り禁止だよ」

優は空を飛んで移動が出来る

屋上にいればフラツと降りてくる可能性がある

しかし誰かがいれば優が降りてくることはない

そのために立ち入り禁止にしたのに

誰かがいては意味がない

「ひっ!？」

「この学校の生徒じゃないね

校内の不法侵入で咬み殺す!!!」

雲雀恭弥の言葉は矛盾している

学校の生徒でも咬み殺しているのだ

しかしそれはどうでもよかった

咬み殺すことには変わらないのだから……

「うわあああ!!」

ケ、ケイタイ……」

優が近くにいれば

グチャグチャまで咬み殺すことはしない

それは優が血が苦手だからだ

しかし優はいない

彼の運命は決まっていた

トンファアを振りかざす……力を込めて……

『雲雀先輩ストップです!!』

優がいると思つて止まったが姿は見えない  
ふと彼が持つているケイタイに目が入る

ここから声がした気がしたのだ

電話ではない

直接かければいいのだから

つまりこれは録音と気付いた……

『とまつてくれたかな……』

えっと……彼は私の知り合いなので

攻撃しないでくれたら嬉しいです』

チラツと見れば

必死に縦に首を振っていた

『あんまり詳しく説明できないんですが……』

彼が持つてるバズーカに当たると

不思議なことに私と会えますよー

私と会えるように彼に私が頼んだので

咬み殺さないでほしいです』

「……本当なのかい？」

またも必死に縦に首を振っていた

優の言葉は信じる

これが本当に優が言ったのなら……

『といつても……もう一人の私として』

行動してるので名前は気をつけてくださいね？

あ！彼は何も事情を知らないのだ

聞いても意味ないですよー

さしてどうします？

当たりますか？ 当たりませんか？

彼を咬み殺すか咬み殺さないかも

雲雀先輩が決めてください ではー』

……ヴェントで行動している

だから名前を気をつけてほしい  
優がヴェントと知っている人物は少ない

……これは優が本当に言った  
ヴェントのことを抜きにしても

雲雀恭弥には判断できることがあった

「……君、本当に何も知らないの？」

「はい……」

この返事も予想が出来た

優が知らないといえば本当に知らない

それでも少しでも情報がほしかった

「はあ……わかった

それを当てなよ」

「は、はい!!」

ただのバズーカにしか見えなかった

それでも優の言葉を信じて雲雀恭弥は当たった



## 再会

「貴様……死を望んでいるのか?」

「どうして僕が?」

「咬み殺されることになるのは君なのに」

「!? この状況でなにを言ってる!!」

「優がこの場にいらなくて良かった」

「気をつけると言ったのに怪我をしたよ」

「強力なリングがあれば良かったのに……」

「……今から来る僕が……」

「うらやましいな」

「ええい!! 死ねい!!」

「まかせたよ」

「優を守ってよ」

「……ヴェント……?」

「さわがしいなあ……」

「それより優はどこ?」

「丸い眉毛の彼に聞いてみよう」

「ねえ君 ヴェント知らない?」

「白蘭様が捕獲しようとしてる男のことか……」

「……どういう意味」

「なぜあの男に興味があるのかわからないが」

「白蘭様の命令だ」

「貴様を倒しオレが今から捕獲する」

「……ふうん」

「君達のせいでヴェントは」

「僕の前からいなくなっただ」

「じゃあ話は早いね」

「僕が制裁を加えよう いくよ」

「ガッ」

速い!?

「雲雀恭弥と言えど小童では話にならん」

「刃ではなくつかで倒そうなんて

ずいぶんふざけてるね」

……そこに山本武が倒れている

ふざけたことを抜いても……この男は強い

「貴様この時代の戦い方を知ってるのか？」

この時代の戦い方？

「ではこれを見たことはあるか？」

「……………オルゴールかい？」

「ならば圧倒的に倒すのみ

これは貴様の置かれた状況を

わかりやすく視覚化したものだ……

貴様は何百という誘導弾に囲まれている

更に……我が匣兵器は姿を消し霧の中の幻となる」

消えた……………!

「成長したおまえは『経験』により

これを退けたが貴様にそれはない

俺と戦うには10年早い　さらばだ雲雀恭弥」

このままだと……

ドウツ

……………この丸いのはなに？

「へ……………借りは返したぜ……………」

つつてもてめーじゃわかんねーか……………」

「恭さん!!」

……………10年前の姿に……………!!」

……………今のは彼の仕業……………？

それに……………

「助っ人か……………」

死にぞこないと一般人では役に立たぬぞ」

「草壁哲也　どうしてここにいるんだい」

「!! 恭さん、ヴェントさんは……」

(恭さんと一緒に行動してたはずだが……)

彼女と恭さんが力を合わせればなんとかなる……)」

「どうして君がヴェントのこと知ってるの」

「(そばにいないのか……仕方がない……)」

恭さんリングの炎です!! 匣で応戦を!!」

「答えになってないよ」

もういい 咬み殺そう

僕が許可していないのに群れているしね

あーやつと追いついたー

転生者を倒した後もなんか来るから

微妙に時間がかかったよ

えーつと、どうなってるんだろう？

あれ？なんか原作と違う気がする……

草壁さんを咬み殺そうとしてない？

まあいいか……

気付いていないみたいだし声をかけよう

「すまない……遅くなった」

本当にみんな気付いていなかったのか……

凄くビックリされた(笑)

「やあ やつと会えたね」

「そうだな……」

「ついに姿を表したなヴェント

白蘭様の命により捕獲する」

んーここは原作通り雲雀先輩に経験させるべき？

ロールを暴走させれば

原作通りゴール地点に行くと思うしー

うん。雲雀先輩に頑張ってもらおう

「僕は捕まる気はない

それに彼がいるのを忘れてないか？」

「小童では話にはならない

貴様を捕獲する」

完全に雲雀先輩を無視だねー

だって幻騎士は雲雀先輩に背を向けてるもん

「確かに彼は今危険な状況だけど

彼を無視すれば足をすくわれるぞ」

「俺と戦うには10年早い」

雲雀先輩の機嫌が悪くなってきた（笑）

幻騎士に無視されてるもんねー

「あー雲雀恭弥

僕は彼に狙われてるみたいだけど

君の獲物をとるつもりはないよ」

「知ってるよ」

あれ？そっちの心配はしてなかったんだ

「彼と戦うにはリングに炎をともすことが条件だが

君だったらできるだろ？」

「僕に出来ないことはない」

ボオッ

おー流石すごい炎だねー

あ、幻騎士がビックリしたねー

「恭さん!! 匣です!!」

足元の匣に炎を注入してください!!」

あ……草壁さんが言ったら……

「いつから命令するようになったんだい？

草壁哲也 やはり君から咬み殺そう」

だよねー

機嫌がまた悪くなっちゃったよねー

「なっ お待ちください委員長!!」

あ……危ない!!

「後ろだ!!」

「雲の人……後ろ!!」

咄嗟に反応した雲雀先輩も凄いけど  
クロームちゃんも凄いや

幻覚の攻撃に気付いてるもんねー

あ……倒れちゃった……

無理しなくても私がいるのに……

体力あげに行きたいけど

どう考えても狙われてるのは私だからね

そばにいけば危ないよねー……

「2度も仲間になれようとはつきがあるな

だが もう次は……」

「仲間？ 誰それ？」

ヴェント以外いないよ」

あ、私は仲間なんだ……

ボワツ

おー私と同じぐらい出るようになったー

流石雲雀先輩♪

「さらに炎が大きく!!」

「跳ね馬が言ってた通りだ……」

リングの炎を大きくするのは……ムカツキ」

出た!!ムカツキ!! (笑)

あれ？こつち見た

「ヴェントは僕が守る」

……うわーすっごい原作変わったな……

## 失敗

んー……これはクロームちゃんに  
助けられたムカツキと……

あれ？でも幻騎士が2度って言ってなかった？  
他にも誰かいたのかな？まあいいや

草壁さんに命令されたムカツキと

私が狙われてるから守るという意味で

炎が大きくなったのかな……

原作が変わったけど……嬉しい……／／／

「副委員長……やはり先に剣士の彼を倒すよ

君の言うことを信じよう」

ここは原作通りだね？

炎を注入しようとしてるから多分あってる

「やり方はみてたからわかるさ」

カチッ

キュ……ウプ……

キュウウ……ゲプツ……

「炎の入れ過ぎか……」

でも……なんてロールが可愛いんだ!!

酔っ払ってる姿が可愛すぎる!!!

あ、雲雀先輩が手を差し伸べてるー

小動物は好きだもんねー

キュッ♪

ブシャ……

あーあ……手に刺しちやっただよ

暴走しちやっただねー

ロールは雲雀先輩が怖いことを知ってるからなー

でも無事に原作通りに進んだね

って、そんなこと言ってる場合じゃない!!

こっちに来たーー!!

スケボーに乗って逃げない!!

いやー死ぬかと思った……  
つて……あれ?

雲雀先輩と幻騎士の両方から離れちゃったよ!  
んーこれはこれで困った……

私は捕まる方と思ってたのになー  
でも……あのタイミングで

クロームちゃんの方に行くのはおかしかったよね?  
雲雀先輩の近くに行けば良かったのか……

失敗しちゃった♪(笑)

ヴーヴーヴー

これは警告音!?

「何だ!?!」

「ダメです!!」

雲雀恭弥の匣兵器が

研究所周辺のブロックの内壁に

くいこんでいるため

研究所区画……移動できません!!」

「何だって?!」

ヒバリ君なんてことを……

あの装置に何かあつたら大変なんだよ!!

お、お腹が痛い……

「……ボンゴレの守護者共と

ヴェントはどうなってる!!」

「ハッ

匣兵器により幻騎士と分断されB4区間で  
匣兵器から避難してるもよう

ただ……ヴェントの方も分断され

そちらは足取りがつかめてません！」

風早さんは計画通りに進んでるぞ！

よ、良かった……

「くそっ！ ヴェントは後回しだ！

避難ということは……匣の暴走か……？」

「いかなされますか？」

「研究所に指一本でも触れようとするものは

僕が始末する」

さてー多分今から雲雀先輩達は捕まるんだよねー

みんな私を恨まないでね（笑）

特に獄寺君……

10年後のツナ君から頼まれたって言って許してもらおう

まあ女の子を殴るタイプじゃないから……

入江君頑張ってるね♪（笑）

私は目的地に行けばいいんだよねー

とりあえず見つかったらめんどくさいから

防犯カメラも部屋に入る前に普通の斬撃で

壊しながら入ってるしー

スケボーで凄いスピードで走ってるしー

私は捕まることないと思う

でも……困ったことに……

今どこにいるかわからない！（笑）



入江君がこの建物を動かしてるから

地図を覚えてたけど意味ないしー

風の流れもすぐかわるから使えないんだよねー

とりあえずこのまま進んでみよっかなー

## 迷子

うわーまさかここにつくとは……  
勝手に応急処置しよう

あ、目が覚めたみたいー

“……起きたか”

「…………お前は……」

目を見開いてるよ

それほどビックリしたのか……

“良かったよ……”

君が生きてて……”

「…………お前は敵だろ」

なんで助けたのに怪しい目で見えるのかなあ

“あー確かにそうだが……”

1度だけ君のボスに会ったことがあるんだ”

「!? どういうことだ!!」

急に起き上がったら身体に悪いのに……

“10年前の話だぞ”

昔の君のボスはきれいな大人の女性だろ?”

「…………ああ」

“少しだけ話をしたんだ

優しい笑顔が似合ってたよ

そして若い君がボスって呼んでいたんだ”

「…………そうか」

“僕はあの人の部下だった君とは

戦いたくなかったし生きててほしかった

だから勝手に応急処置したぞ”

「フ……」

あの人は暖かい人だった……」

“僕も思ったよ

……過去形なのか？”

「ああ……亡くなった……」

”……それで今の君のボスは白蘭なのか？”

「違う

その人の子どもだ」

”……白蘭じゃなくて良かったよ”

「当然だ」

”そうか

僕の能力で僕の体力を君にあげるよ

その体力でこの基地から逃げた方が良い”

「どういふことだ」

”君は2度負けたんだ

処分で済んだらいいんだが……

どうなるか正直わからないからな……

あの人の子どもがボスなんだろう？

だから僕は君を味方と思って助けたいんだ”

こんな言い方しかできないな……

もうすぐ飛ばされるとは言えないしー

原作ではちゃんと逃げてたけど

私と会ったことでずれてる可能性が高いからねー

確実に逃げてもらわないと

後で大変なことになるんだよねー

「……わかった」

納得してくれてよかった……

勝手に触るよー

”これで少しはましになったはずだ

そういえばなんであの人の子どもがボスなのに

白蘭に手を貸すんだ？”

「白蘭を倒し……」

姫……あの人の子どもを助けるためだ」

”なるほど……

だったら君が信用してる仲間と一緒に逃げろ  
生きていけばチャンスは必ず来るからな  
僕もその人の子どもに会ったら白蘭から助けるよ

「フッ

かわったやつだな」

“よく言われるよ

君の名前は確か……”

「γだ」

“γ気をつけろよ

じゃあな”

まさかγさんと会うとは思わなかったなー

さて本当にここはどこだろう…… (笑)

……完全に迷子ですなー

困ったなー……

入江君、基地を動かすすぎだよ……

全くここがどこかわからない (笑)

ドカアアア!!

あ、もしかして迷子になつてる間に

ツナ君と幻騎士の戦い終わったかも…… (笑)

つまりーこの音がしたほうに行ったらいいよねー

さっさと向かおう♪

いやースケボーは速いねー

これから歩くのが嫌になっちゃうよ

んーこっちから聞こえたような……

めんどくさい……壁を斬ろう

ガンッ

凄くイラツときた

なんで斬れないんだよ!!

あーもう本当にめんどくさい……

これは耐炎性の壁なのか……

つまり斬撃を出せば斬れるよねー

そりや炎は通しにくいかもしれないけどー

斬撃の勢いは殺せないからねー

ドカツ

よし！斬れた♪斬れた♪

おーなんかツナ君と幻騎士が

戦ったっぽい場所に出たよ!!

このまま空を飛んで向かったらいいかー

## 演技

あー！ツナ君だー！！  
やっと会えたー！！！！

“追いついたか……”

「!? ヴェント!!」

ツナ君にビツクリされたなー

私がここにいるって知らなかったのかな？

まあいいか……

「ヴェント 無事だったのか？」

“ああ

リボーンは立体映像だな”

だって風が通るんだもん

「そうだぞ」

“悪い……迷子になったんだ……

大きな音が聞こえたから来てみたんだ

当たりで良かったよ”

うん！私って役にたってないね（笑）

「そうか

これが……オレ達の目的……」

“あーそうみたいだな”

「うん……正一の装置だ」

“……誰だ？”

「スパナだ」

あれ？ツナ君が答えてくれたなー

もしかして仲間だから大丈夫っていう意味で

ツナ君が教えてくれたのかな？

まあ知ってるけど一応警戒したからねー

“僕はヴェントだ”

「うん」

「まさかあの幻騎士を倒すとは計算外だった

沢田綱吉

そして自ら現れてくれるとは思わなかった  
ヴェント」

「入江……正一!!」

“逃げるもめんどうなんだ”

「お前達はチエルベツロ!」

「まずは拳をおろして刀を離してもらおう  
話はそれからだ」

「……話だと?」

“どういうことだ”

「聞こえなかったのか?」

へたに動けば彼らは死ぬぞ」

あーやっぱり捕まってるのねー

「!! みんな」

“なにしたんだ!!”

あ、思いつきり殺気出しちゃった♪

「ナノコンポジットの壁でとり囲み

逃げられなかった所を睡眠ガスで眠らせてある

少しでも抵抗するそぶりを見せれば毒ガスに変更する  
特にヴェント殺気を抑えろ 抵抗しているとみなす」

「くっ」

「………正一」

“………わかった

刀を離す”

適当に投げようー

カラカラ……

「……よし いいだろ」

あ、入江君のリモコンの操作で  
みんなが起きたねー

「……なんて悪夢だ……

10代目の首を締めるなんてよお……

10代目!! ヴェント!!

!? 捕まってる!?

あれは……チエルベツロ女!! 何で奴らが!?

「お前達の命は我々がにぎっている話をしたいんだ  
大人しくしてくれないか?」

あーみんな入江君を倒そうとしてるよ

本当に騙してゴメンねー

「抵抗しようとしてもムダさ」

お前達のリングと匣兵器は……すべて没収した」

「な!!何!!」

「なんてことだ……これでは……」

「……ぐっ……沢田! ヴェント!」

貴様達の手で装置を破壊しろ!!」

「僕はもう武器を離れた……」

……今のでわかってくれたかな?

あー伝わったみたい

もう心配してなさそうだもん

まあ私にしかわからないけどね

「くそっ 10代目!! 丸い装置を!!」

そいつをぶっ壊せば過去に帰るかもしれない!!」

「……ダメ……」

「てめー! この状況で命がおしくなったのか!」

「ちがう……でも……」

獄寺君に本気で恨まれそう……

だって凄く必死だもん……

「全くお前達の無知ぶりにはあきれるばかりだ

この装置を破壊すれば困るのはお前たちだぞ」

「何!」

「『どういう意味だ』」

知ってるけど……

いつまで演技するべきなのかなー



入江君も役者だよー

もう私は面倒になつてきたんだけどー

「この装置に入っているのは

10年バズーカでお前達と入れ替わりで消えた

……この時代のお前達だ」

あ、私はヴェントの姿だ（笑）

すっごい面白い!!

なんでヴェントなんだ（笑）

やばい……笑いを耐えなければ!!

「もつとも今見えているのは

照射された立体映像のイメージであり

実際には分解された分子状態で保存されているがな」

あーなるほど

イメージだからヴェントなのねー

## 演技の終わり

入江君の話が長い……

チエルベツ口をさっさと倒したい……

んーでも流石にきついよねー

「この世には力を秘めたリングが数多く存在するが

「マーレリング」「ボンゴレリング」

「アルコバレーノのおしやぶり」

風のボンゴレリングとヴェントがもつおしやぶりを除く

各7つ系21個のリングをという

そして7・の原石こそがこの世界を想像した礎だ」

「そんな……話……」

「僕のは関係ないんだ」

「君のは封印されていたからな

信じる信じないは自由だが

少なくとも7・を守ることを使命とし

人柱として7・と同化したアルコバレーノは

この話を否定しないはずだ

そして君の使命は知らないが……ヴェント……

君も人柱になりおしやぶりと同化したんだろ？」

あー私の場合は完全な人柱だよ

1回死んじやったよ

確かに守るために同化したしねー

今、思うとそうだねー

使いこなせないから呼ばれただけと思ってたしー

それにしても……雲雀先輩からの視線が……

多分人柱とまで思ってたなかつたと思うからね……

「な？ え？ 人柱って……何？」

り……リボーン達とヴェントが関係してるの？」

ツナ君には悪いけど

その問いには答える気がしないんだよねー

「僕の持つてるものは関係ないんだろ？  
なぜ僕を狙ってるんだ？」

「白蘭サンは君に興味を持ってて  
どうしても欲しいみたいだ」

「話は以上だ 後はまかせた」

「沢田綱吉」

大空のボンゴレリングを渡しなさい  
ヴェント

あなたはこちらに来て捕まりなさい  
さもなければ守護者を毒殺します」

「話はまだだ入江」

「お前の話には納得できねえ部分があるぞ」

「僕が捕まるから」

「彼らを今すぐ解放してくれ」

「これは交渉では無い 命令だ」

「3秒以内に従わなければ」

「全滅はまぬがれない」

「ちよっ待ってよー！」

「君達チエルベツロでしょ!?!」

「んーやつぱり人数が増えてる気がするんだよね」

「4人もいてたかなー？」

「まあ4人もいるから手を出せなかったんだけどね」

「何人かは私が担当するほうがいいよねー」

「3」

「チエルベツロに近づいた方が楽か……」

「よし、さっさと行こう」

「ヴェント行くな!!」

「10代目!! オレ達にかまわず」

「そいつらをやってください!!」

「2」

「やれ 沢田!!」

ドーせそいつらはヴェントを捕まえて  
大空のリングを奪った後

オレ達を全滅させる気だぞ!!」

「でも……」

「1」

ズガン!!

ドサツ!!ドサツ!!

入江君は2人しか無理みたいだねー

つまり残りの2人は私がするべきだね

「入江様……」

「悪く思わないくれ

少し眠ってもらうだけだ……」

「入江様!?! 何を!?!」

よし!今だね!!

1人は素手で意識を刈って……

もう1人は投げた刀を使って……

ドサツ!!ドサツ!!

ゴメンねー

私は刀を手から離しても

風で動かせるから全く意味がないんだよ

流星に4人は辛かったけどね

「ありがとう……助かったよ……」

「!?!?!」

いやーみんな驚いてるねー

「君がスキを作ってくれたからな」

「えっ? えっ? えっ?」

ツナ君の反応が……

交互に私と入江君を見てるよ(笑)

「はあー……暑い

もうクタクタだ……

一時はどうなるかと思ったよ……」

「僕も心配だったよ」

ツナ君達が原作通りに進んでなかったら  
どうしようかと思っただよ

「沢田綱吉君と仲間のみなさん

あ……キンチョーがとけて……

ヒザが笑ってる……ふう……」

「大丈夫か？」

「うん ありがとう

よくここまで来たね

君達を待ってたんだ……僕は君達の味方だよ」

「オレ達の味方だって!？」

「う……うん

そうなんだ……」

「それは僕も証明するよ」

「ヴェントトどういこと!？」

あーツナ君が完全にパニックだ

「あー入江正一が説明してくれ

僕より詳しいだろ？」

後、イーピンは大丈夫と思うが……

ランボが起きたらまずいから

僕の本名は言わないでくれよ」

確かこの後に白蘭さんの立体映像が

あつたと思うんだよねー

もしこつちの話聞いてたらまずいからね

「あ……うん」

入江君ありがとうー

説明をするのが面倒だったんだ

うん。私ってひどいね（笑）

# 説明 1

「この基地でのこの状況での出会い方こそが  
僕らの設定したゴールだったんだから」

「!? ゴール……?」

「な……何言つてやがる!!」

「僕も彼らと一緒に捕まえてれば良かったのに  
迷子になって大変だったぞ……」

「それはダメだよ」

ヴェント君は捕まったら困るんだ

最後にここに来てほしかったんだ」

あ、捕まったら顔ばれちゃうのか……

「それもそうだな」

「ミルファイオーレがボンゴレリングを奪うために

君達をこの時代に連れてきたのは事実だが

君達がこの時代に來てから僕を標的にして

ここに乗り込むようにさせたのは

僕がミルファイオーレに秘密で仕組んだ計画だったんだ

君達を鍛えて強くなつてもらうためにね」

「すまない 僕はそれを知っていたんだ」

「そ、そうだったの……?」

「ああ」

「たくさんひどいことをして……本当にごめん……

でもこれから来る戦いに備え

短時間に飛躍的に成長してもらうには

この方法しかなかったんだ!!」

「これから来る戦い……?」

「そうだ!! 君達の本当の敵は僕じゃない」

「ふざけんな!!」

作り話に決まってるぜ!!」

「これは作り話ではないんだ

彼の言っていることは本当だ」

「ヴェント！ お前は騙されてるんだ！」

あーそうきたか……

「ま……待って！ 考えてみてくれよ!!」

君達を殺そうと思えばもつと早く殺せたさ!!」

そうだよねー

それに私は弱い人しか戦わなかったしねー

みんなに強くなつてもらうために……

「いくらミルフィオーレが

油断していたとしても天と地ほどの戦力差だ

君達をいつぺんにじゃなく何人かずつ

この時代の君達と入れ替えたのも

この時代の君達に過去の君達を導いてもらうためだ

この基地に来てからも僕がもつと早く

基地を動かして君達を捕えることもできた

だがそれでは君達が経験を積むことが

できないからワザとモタついて遅らせたんだ!!

それだけじゃない守護者じゃない

イーピン・笹川京子・三浦ハルまで過去から

この時代に連れてきたのはなぜだがわかるかい？

人は守るものがあると強くなれる

そのために必要だと判断したんだ 現に……」

ガッ

あーツナ君が怒っちゃった……

京子ちゃん達の名前を出したら

ツナ君は怒っちゃうよねー

「そんな……いー そんな理由で!!」

もし京子ちゃん達に何かあったらどーすんだ!!

京子ちゃん達だけじゃない!!

鍛えられる前に山本や獄寺君やラル……

みんなこの戦闘で死んでたかもしれないんだぞ!!」

「……その場合は……それで仕方ないんだよ……」

「んだと!」

「……そんな」

「ヴェント!」

テメーもオレ達が死んでも仕方がねえ

って思ってたのかよ!!」

あー獄寺君にやっぱりうらまれそう

〃そんなわけないだろ……

僕が君達に体力をあげて

何時間寝たと思ってるんだ……」

「……つくそー!」

しばらく獄寺君に近づかないほうがいいかも……

このことを何度も言われそう……

「僕達だって一生懸命やってたんだ!!」

予想外のことが起きて大変だったんだぞ!!

ヴェント君が外に出た時なんてお腹が痛くて……」

そりやそうか……

1番捕まったらまずいのは私だもんね(笑)

〃あー悪い悪い……」

「リングの反応があったから

人数送らないといけなかったし……

捕まったらどうしようかと思つたよ……」

確かに多かった……

〃入江正一には悪かつたと思つてるよ〃

「うん……」

それにこれは君達が思つてるほど

小さな問題じゃないんだ!!

それにこの計画はこの時代の

君の意志でもあるんだ……綱吉君!!」

「!! オレの……!!?」



「この計画は絶対バレないように」

僕と10年後の君と10年後の雲雀恭弥  
と10年後のヴェント君と過去から来た  
ヴェント君だけの秘密だったんだ」

「10年後の雲雀恭弥に言われたから  
僕は彼を信用してるんだよ

そして知らないふりしてって頼まれると  
黙ってることしかできなくてな……」

「ヴェント君と10年後の雲雀君が

こちらの奇襲を予想できたのもそのためなんだ」

「ああ

発信機がつけられた時点で奇襲がくると思ったんだ  
それに大人数を送って基地を手薄にして  
計画を成功させたほうが君達は安全だろ？

だから僕と10年後の雲雀恭弥で  
大人数の相手をすることにしたんだ」

「なんと……」

それにしても人数が多かった!!

あーまだ納得してないよ

まあツナ君の性格だったら普通しないよねー  
でもそれぐらい大変な状況だもんねー

あー入江君が逆ギレしちったねー

「すべてを賭けてこの事態に対処しないと

君達も君達の仲間も全滅しちゃうんだって!!  
それどころかもっと多くの人々の……

へタすれば人類の危機なんだぞ!!

それにヴェント君が捕まったら……多分……」

「心配するな

僕は捕まらないよ」

まあ捕まったら絶対劇薬だけどねー

それに他のパラレルワールドでも

もつと大変なことが起きるよねー

まあ入江君はまだ白蘭さん1人を倒したら

全てのパラレルワールドの白蘭さんが

倒されるのを知らないから

ここまで私のことを心配してるんだよねー

「人類の危機……？」

ヴェントが捕まったら何が……」

「それとこれから来る戦いが

関係してるんだな？」

「え？ あ……うん……」

「オレは信じてやってもいいと思ってるぞ

オレが感じていた疑問の答えとしては

今んとこつじつまが合ってるからな」

〃流石リボンだな

よく考えれば疑問がいつぱいあるからな〃

「ああ」

「あ……ありがとう……」

そうだ……君達の敵となるのは……白蘭サンだ」

「やっぱり……」

〃沢田綱吉も疑問に感じてたんだ〃

「あ」

え……気付いてなかったの？

今、普通につぶやいてたのに……

まあいいか……

## 説明 2

んー原作通り進んでるかな？

イタリアの主力戦の話になったしー

待つてる間にみんなの治療になったしね

入江君は結局白蘭さんの能力話してないし……

私が話してもいいのかなー？

「ヴェ……ヴェント……」

あれ？ツナ君どうしたんだろ？

「なんだ？」

「ヴェントはこの時代に来てすぐこの計画を

教えてもらっていたんだね……」

あー凄くショックを受けてるよ……

「違うよね ヴェント」

「え!?! ヒバリさん

どういうことですか!?!」

「ヴェントはこの時代に来る前から

この計画知ってたよね」

「ちよ、ちよつと待って!!」

それはないよ 雲雀君

ヴェント君は過去の僕が脅されたことを知って

かわいそうと思って手伝ってくれただけだよ

だから10年後の君に教えてもらって

初めてこの計画を知ったんだよ」

「知ってるはずだよ

ヴェントは君がかわいそうなだけで

行動するとは思わない

僕が危険にあうかもしれないと思ってたのに

君の手伝いをするとは思えない

それに僕にしばらく会えないと書いた手紙を残したり

僕にバズーカを当たってほしいって

メッセージを残さないはずだよ」

やっぱり雲雀先輩はそう思うよねー

私が雲雀先輩が危険になるかもしれないのに  
手伝いするってあり得ないって思うよね

まあ何も知らなかったら

手伝いしなかったかも知れないしねー

「え!? ヒバリさんはヴェントが言ったから

この時代に来たんですか!?!」

「そうだよ」

本当は原作を知ってるから手伝ったんだけどー

まあ10年後の雲雀先輩も

これで納得したから問題ないかな♪

「あーそれはだな……」

計画は知らなかったが……

過去の入江正一が僕に見つかって倒れてる間に

彼が持ってた指示の紙を見たんだ

その紙に違和感を感じて

これは手伝いしないとまずいと思ったんだ」

「ヴェ……ヴェント……どういうことなの……?」

ツナ君がパニックになってる(笑)

「僕はリボーンに

10年バズーカの効果を聞いたことあるんだ

10年後と5分だけ入れ替わるであってるだろ?」

「う、うん

あってるよ」

「だから誰かが未来から来て……」

もしくは過去の僕らを未来へ呼んで

何か大事な話でもあるのか?

と一瞬思ったが……その場合は1人でいいだろ?」

「そ、そうだね」

「だが……紙を見たら複数で

時間がかなり空いていたんだ

ここでバズーカに当たって未来に行けば  
なかなか帰ってこれない可能性があるだろ？”

「え？　なんで？」

“すぐ帰って来れるなら

時間をバラバラにする必要ないだろ？

例えばだな……僕が先に行って帰ってきて

君達に急にバズーカ当てられて

未来に行って大変な目にあつたから気をつけろ

と、話す時間が出るだろ？”

「いわれてみれば……」

“それに帰って来れる時点で入江正一に

いつぱい指示を出す必要がないだろ……”

「え？　どういうこと？」

“ざつきは敵の話だったが……

味方の場合は……

1番最初に未来に呼んだ人に次はあの人だから

当たってくれて頼めばいいだろ？”

「あ……そうだね……」

“だから帰って来れない事態を想定しておくべきだ

それで帰って来れたら

それはそれで問題ないはずだ”

「そ……そうだね」

“僕は帰って来れた時のために

過去の入江正一に5分後にバズーカを

回収するように頼んだんだ”

「う、うん？」

なんか意味わかってなさそうだね（笑）

“僕が未来に行って帰って来れば

もし僕が危ない目にあつた時は

彼からバズーカを奪えばいいだろ？”

「あ……い！」

「僕はどっちでも大丈夫なように対策をたてたんだ  
僕は帰ってこれない場合の時のために

雲雀恭弥に手紙を残したんだ

手紙を書いた理由は君が探すと思ったんだ

10年後に行ってるから探しても意味ないだろ？

悪いと思ったから残したんだ

戻ってこれれば手紙は捨てればいいしな

これで納得したか？”

「……わかった」

## 説明 3

返事が遅かったから半分納得したって感じだねー  
まあまだ半分しか説明してないしね

〃問題は誰が入江正一に

こんな指示の紙を出したのか……”

「そ、そうだよ!!」

いきなりツナ君が元気になった(笑)

〃ここで僕が気になったのが……

リストの中にヴェントの名前がなかったんだ

他の守護者の名前は全員書いていたのにな

あーでも一般人の名前があったから

僕の本名があっても不思議でもないが……

その場合はヴェントの名前もあるはずだろ?”

「そ……そうだね」

〃ということは……この指示を出したのは

僕の正体を知ってる味方の可能性が

ものすごく高いことになるはずだ

僕の正体はボンゴレの機密になってるからな”

まさか指示の紙を出したのは

未来の私と入江君とは思わなかったけど(笑)

「あ……そういえば……」

〃だから手伝いをしたんだよ

この中で1番当たる可能性が低かったのは

雲雀恭弥だったからな……

殺気だつてる想像がついてしまったんだ……”

まあこの説明は白蘭さんの能力を知らない前提で

話すからできる説明なんだけどねー

白蘭さんの能力を使つてると

未来では私の正体が普通にばれてるはずだからね

まあ、まさか他のパラレルワールドで

正体がばれてないと思わなかったけどねー

「えつと……つまり……」

ツナ君はまだ理解できてないかな？

「計画や指示を出した人物は知らなかったが  
紙に載ってる指示通りに当てないと

まずいことが起きると思ったんだ

だから雲雀恭弥にバズーカに当たってほしい

と、メッセージを残して僕はヴェントになって

自分でバズーカに当たってこの時代に来たんだ」

「ええええ!!」

ヴェントって自分の意思で

この時代に来たのー!?」

さつきからそのつもりで話してたのに……

今気付いたんだ……（笑）

「当たり前だろ……」

僕が簡単にバズーカに当たるわけないだろ」

「そ……そうなんだ……」

「そうだよ

僕に当てようとすればプロでも大変だぞ」

「そ……そっか……」

「ああ

それで未来に来たら10年後の雲雀恭弥は

僕を見てもビックリしなかったからな……

その後に話を聞けば味方であってたんだ」

「でも……敵だったらどうするつもりだったの……?」

「その場合は雲雀恭弥が来る前に

僕が倒せば問題ないだろ？

倒せない場合や

なぜここに来たのかわからなかった場合は

僕は雲雀恭弥が来る時間をしてたから

それまでに10年後の雲雀恭弥に会えば



問題なかったはずだ

未来の僕は雲雀恭弥と行動してる可能性がある

もし行動してない場合でもよく連絡をとっていたはずだ  
その場合10年後の雲雀恭弥がおかしいと思うだろ？」

「そ、そうだね」

「それにどうしても会えない場合や

未来の僕が彼と連絡をとってない場合は

僕はヴァリアーのアジトの場所を知っているんだ

そこから沢田綱吉の連絡先がわかるはずだ

一応ヴァリアーの連絡先をメモしてきたが

変わってる可能性があるからな……」

まあその場合は面倒だったけどね

「そ、そっか……」

「ああ

沢田綱吉達も心配だったが……

僕のせいで危険な目にあうのは雲雀恭弥だった……

彼を優先して行動するつもりだったよ

それに僕が最初にこの時代に来た時

背後に誰かいて10年後の雲雀恭弥と思わなくて……

敵だったらまずかったから思いっきり殺気を出したよ

これで納得したか？」

「そうだね」

「なんとか誤魔化すことできた……（笑）

「ヴェ、ヴェント君って……」

僕が気を失ってる間にそこまで考えてたんだ……」

本当は誤魔化すことを考えてたんだけどー

「当然だろ？」

もし指示の紙を出したのが

黒幕の確率が高い場合は

それを潰して僕だけが未来にきて

リボーンを助けるだけで良かったんだ」

「何、勝手に1人で行く気になってるの」  
“危ないだろ……”

「その時は僕も行くから声掛けてよね」  
“そうか……”

「今度から気をつけるよ」

「約束だよ」

“ああ”

## 白蘭

〃次に……雲雀恭弥が

さつき入江正一が演技してる時に

何も知らないふりをしてくれるのか

という問題が起きたんだ

僕のメッセージでこの時代に来たなら

過去の入江正一と会うことになるからな”

「あ……そういえば……」

〃でも僕が演技してるのを

雲雀恭弥は気付いていただろ？”

雲雀先輩は私が言ったヒントに気付いたからねー

私は武器を離しても破壊することは出来るもん

まあこの装置を全部壊すのは無理だけどね

でも部品を壊すことは出来るからねー

「そうだね」

気付いてくれて助かったよねー

入江君が演技してる時に

雲雀先輩に何か言われたら

チエルベツロを倒せなかったよ

「ヴェ、ヴェント……すごいね……」

〃そうか？

考えたらわかることだぞ

何か問題が起きても

彼は僕の動きにあわせてくれると信じていたからな

正直、僕はこの計画が心配だった……”

「そ、そっか……」

〃ああ

僕がここに来た時点では

もうこの計画は止めれなかったからな……

誰も死ぬなよって願うことしか出来なかった”

本当に判断を間違っていたら……  
どうなつてたことか……怖かった……

「そっか……」  
“……ああ”

んーそろそろXANXUSさん達は勝つてくれないかなー

あつちは全然問題ないと思うんだよねー

私の影響うけてないはずだしー

あつてもベルさんと骸君の弟子の絡みの中に

私の話が増えるぐらいだと思ふんだけどー

実はちよつと眠くなつてきたんだよねー

あ、思つてる間に勝つたみたい

「いいや ただの小休止だよ

イタリアの主力戦も日本のメローネ基地も

すんごい楽しかった」

出たー

白蘭さん！

「ボンゴレの誇る最強部隊の

本気が見れちゃったりして

前哨戦としては相当有意義だったよね♪」

だよねー

チョイスがあるよねー

「メローネ基地で僕を欺こうと

必死に演技する正チャンも面白かったなあ」

「じゃあ僕が騙してたのを……」

「うん。バレバレだよ

確かにこの戦いを逆に利用して

敵に寝返る計画はよくできていたし

正直ボンゴレと手を組むなんて思つてなかったよ

それに正チャンがヴェント君の正体を

知つてるとは思わなかったよ

僕に嘘の報告をあげたりしてね」

あらー私の話題になっちゃった  
やっぱり聞いてたのかな？

どうだったんだろー

「でも正チャンがいつか敵になるのは

想定範囲内だったからね

だって昔からずーっと正チャン

僕のすることなすこといつも否定的な目で見てたもん」

「……………あなたは……………間違ってる！」

「ほーらきた

まあ好きにすればいいよ

どちらが正しいかは今にわかるし

しっかし正チャンもつくづくもの好きだよ

まだケツの青いボンゴレ10代目なんか

世界の命運をあずけちゃうなんてさ

まっ ヴェント君の命運もかかっているけどね♪」

だよー

チヨイスで勝って私の正体知って

全てのパラレルワールドで一気に捕まえる気だよ

「本当はこのまま息つう暇なく

戦力を投入してボンゴレを消すのは簡単なんだ

でもここまで楽しませてもらったのは確かだし

それに信頼してた副官に裏切られたと

あつちやリーダーとしてのプライドにかかわっちゃうだろ？

だからそろそろちやんとやろーと思って

沢田綱吉くん率いるボンゴレファミリーと

僕のミルファイオーレファミリーとの正式な力比べをね

もちろん7・とヴェント君をかけて

時期的にもぴったりなんだ

正チャンやこの古い世界とのお別れ会と

新世界を祝うセレモニーにさ♪」

うわー勝手に私を賭けごとにされた

あ、やっぱり原作通り指輪が割れたね

## 混乱

あれ？真6弔花って言ってるねー

私はいないみたい♪

原作通り進んでるねー

でも言いたいことがある……

「僕らを倒したら今度こそ君達の勝利だ

ミルファイオーレはボンゴレに全面降伏するよ」

“待て！”

「なに？ ヴェント君」

“人を勝手に賭けごとの対象にするな”

「もう隠す必要ないよね

君達に紹介するよ

「僕の7番目の守護者のヴェント君♪」

「[[[[[?]]]]」

うわーやっぱり気付いてたのね……

全く……最悪な言い方だよ……

あーみんなからの視線がきついなー

“……僕は君の守護者になった覚えはない”

「でもヴェント君は風のマーレリングを

肌身離さず持つてるよね

君はボンゴレに入る前から

ジツリヨネロファミリーに所属してるからね」

うわー……

肌身離さず持つてることまでばれてる……

それも時期までばれてるね……

日記でも書いてたのかなあ……

「君は過去から持ってきた来たリングを

この時代に破棄することはできないよね」

あーなるほど……

この言い方は未来の私は破棄してると思ってるのね

それで過去からきた私が持つてる  
風のマーレリングを狙ってるのか……  
確かに過去から持ってきたリングを  
この時代で勝手に破棄するのはまずいよね  
まあその前に壊せないけどね  
本当は捕まえてから過去から呼びたかったのかも  
だから必要以上に狙ってたのか……  
まあ他にもあるけど……

「もう両方の守護者も大変だろ？」

片方に絞った方がいいよね  
だからこの対決で勝った方の  
守護者になるでいいよね」

「え!? ちょっと待って!?!  
どういうことなの!?!」

あーツナ君がパニックになっちゃった……

「沢田綱吉くんは知らないだろうけど」

ヴェント君は君の守護者であり僕の守護者ってことだよ♪

この中で一番中立の立場なんだよね♪

ボンゴレの仕事を終えて

はやく僕の元に帰って来てくれるのを

楽しみに待ってるんだけどね」

〃……断る

僕は君の元に行くつもりはない”

「沢田綱吉くんの前だからって」

もうそんな言い方しなくてもいいよ

話を戻すよ

昔正チャンとよくやった

チヨイスって遊び覚えてるかい？」

あー話を戻されたー!!

なんて誤解のある言い方なんだ!!

「!!」



「あれを現実にやるつもりだよ。」

細かいことは10日後に発表するから

楽しみにしててね♪

それまで一切手を出さないからのんびり休むといい」

「無茶言うな

あんな怪物見せられて

のんびりできるわけねーだろ?」

あーもう完全に原作に戻っちゃった……

つまり私はもう賭けごとの対象決定なのね……

基地が消えちゃったーすごいよねー

γさん達に逃げるように言つててよかったー

あ、ボンゴレ匣ゲットー

やっぱり私のもあるんだー

それにしても……

みんなちよつとパニックになつてる……

さつきまで私はみんなを騙してたのが地味に効いてるよ

やっぱり話を聞いてたのかなー?

パニックになつてないのは

雲雀先輩と入江君と草壁さんと

クロームちゃんとりボン君ぐらいだよねー

普通に話進めてボンゴレ匣もらったもん(笑)

「うゝおゝおい!!」

……相変わらず大きい声だね(笑)

「てめーらあ

生きてんだろうな!!」

あ、音量を下げたから聞こえない

みんなに黙つて先に戦闘を始めたから私はないんだよ

盗聴される恐れあるからヴェントだよね

まだ白蘭さんに繋がつてる可能性も

あるからヴェントのままの方がいいよねー  
それにランボ君が起きちゃったしー

「沢田綱吉、逃げるなよ」

「え？」

ピタッ

「ええええ!?!?!」

そんなに驚かないでよねー

ツナ君のヘッドホンに耳をふっつけたただけなのにー

「僕も聞きたいんだ

嫌かもしれないが我慢してくれ」

「あ……うん……」

あ、雲雀先輩の機嫌が悪くなってない？

んーこれはダメだったのか……

ツナ君、後で気をつけてね（笑）

「いいかあ!!」

こうなった以上ボンゴレは一蓮托生だ

そしてヴェント!!

どういうことか説明……」

あれ？なんか凄い音が聞こえたけど……

またケンカでもしたの？

「てめっ」

「沢田綱吉」

あ、XANXUSさんだ

「乳臭さはぬけたか

10日後にボンゴレが

最強だと証明して見せろ」

「えっ……」

「ヴェント

なにかあれば言え」

説明しに来いじゃないってことは

私が裏切っていないことをわかってるみたい

それにこの言葉はあの時と一緒にだよ

これはあの時と同じ意味なんだろうな

「頼りにしてるよ」

ブチッ

あ、切れた♪

「聞いて良かった」

沢田綱吉ありがとう」

「う、うん……」

「ヴェント 説明しろ!!」

あー獄寺君が叫んでるよ

騙したせいで一番機嫌が悪かったからねー

「僕は沢田綱吉の守護者だ」

そして白蘭の言うとおりマーレリングを持つてる

でも白蘭の守護者になった覚えはない」

うーん……

今の獄寺君にこれ以上言っても意味がない気がする……

それに全部説明が出来ないと思うんだよねー

「……ヴェント」

「どうしたんだ?」

「オレはヴェントのことを信じてるよ」

……ツナ君も信じてくれたよ

「……ありがとう」

やっぱりツナ君は大空だよねー

空腹 1

そろそろやばいね……

やっぱり説明する時間ないか……

〃雲雀恭弥〃

「……なに」

うわーまだ機嫌が悪そう……

〃僕はこの時代

あんまり外でウロウロ出来ないんだ〃

「へえ」

〃悪いが……

草壁達也に案内してもらって

僕を未来の君のアジトへ連れてってほしい〃

「わかった」

「え!?! ヴェントどうしたの?」

「おい! 説明しろ!!」

あー獄寺君がまた叫んでるよ……

〃悪い……説明したいがもう限界なんだ……

あ……その前に……骸はどうなってるか……

入江正一は知ってるか?〃

「え」

〃クロームが聞くタイミングを

ずっと探してたんだけど

声をかけられなかったんだろ?〃

原作では自分で聞いてた気がするけど

私のことでみんなちよつとパニックになってるから

聞きにくいんだと思うんだよねー

「……うん……」

骸様はどうなってるいるんですか……?」

「白蘭サンの話では

骸はミルフィオーレの兵士に

「憑依していた所を白蘭サンの手で殺されたらしい  
だが僕はそう思っていない」

「なぜなら復讐者の牢獄の死亡者リストに  
彼の名前はあがってこなかったからね」

「……つてことは」

「生きてるよ」

「それは間違いない……」

「バタツ」

「あー！安心してクロームちゃんが倒れちゃったよ」

「……よかった……」

「まあこれでクロームちゃんの幻覚が安定するよね」

「私が体力あげても安定しなかったからね」

「これで僕も安心した……」

「あー……そうだ 雲雀恭弥」

「なに」

「僕を送った後は」

「僕のこと気にしなくていいぞ」

「君は行きたいところがいっぱいあるだろう？」

「そうだね」

「やっぱり未来の並盛が心配だよねー」

「悪いな……」

「迷惑ばかり掛けて」

「本当はすぐ行きたいと思うのに……」

「問題ないよ」

「それと僕のせいで風紀が少し乱れてると思う」

「君は大丈夫と思うが気をつけてくれ」

「本当に悪い……」

「……わかった」

「あ……もう限界だ……」

「雲雀先輩に寄りかかるけど……許してね……」

「ガシッ」

支えてくれてありがとう……

おやすみなさい……

「え!？」

「寝ただけだよ」

「あ……そっか……」

みんなに体力あげていたんだ

あの……ヒバリさん……ヴェントを頼みます」

「君に言われなくてもするよ」

「そ……そうですね……」

「草壁 場所を案内して」

「は、はい」

「ん……」

……よく寝た

え……まじで? 1日中寝てたよ

……お腹すいた……

何でもいいから食べよう……

……何もない!!

あーそっか……

草壁さんが雲雀先輩に着いていつてるから何もないのか……

いつも草壁さんが買ってきてくれるからなー

まあ裏ルートでだけどね

雲雀先輩はこの時代でも並盛での権力が凄いよねー

草壁さんはいつ帰ってくるんだろ……

……ツナ君のアジトに行こう

何か恵んでもらおう……

ここにある材料では絶対足りない……

あれ？

クロームちゃんが走って食堂から出て行ったなー  
何かあったのかな？

でも走れるほど元気になったんだね

それは良かった

“どうも”

「あ……ヴェント君……」

あれ？京子ちゃんが少し元気ないかも？

「はひー！ お久しぶりです」

え？お久しぶり？

あ、2日連続で顔を見せてなかったからか……

寝てて日付の感覚がおかしくなってるよ

“ああ 久しぶり

クロームはどうかしたのか？

急いで出て行ったが……”

……なんか言っちゃいけないことだった？

2人とも元気なくなっただかも……

「京子やハルがご飯を用意してくれたのよ

でも優しくされてどうしていいかわからなくなって

部屋に戻ってしまったのよ」

“そうなのか……”

でも私にご飯を持っていつでも大丈夫だけどなー

んーやっぱり骸君が言ったからかな？

「リボーンから聞いたのだけど

あの子……最近まですつと

自分が1人ぼっちだと思って生きてたの」

“そうなのか？”

一応、知らないふりしたほうがいいよね

「ええ

自分が無条件に受け入れられる

なんて考えたこともないとおもうわ

だから京子とハルが自然にしてあげること  
もあの子にとつてはカルチャーショックなのよ  
でも優しい子よ」

“ああ それは僕も保障するよ

あー……そうだ!”

「はひー… どうかしたんですか?」

“悪い

この前の約束を今頼んでいいか?”

「うん

大丈夫だよ?」

“僕と一緒にだと多分食べてくれると思う

何度か一緒に食べたことがあるんだ”

「はひー… そうなんですか?」

“ああ

呼びに行ってくるから

その間に用意してくれないか?”

「うん!!」

「ハル達に任せてください!!」

2人ともいい子達だ!!

さて、クロームちゃんは病室にいてるかなー



## 空腹 2

やっぱりノックするべきか……

女の子が使ってるしねー

コンコン

「……誰……?」

1人だね

フードかぶってるけど普通に話していいよねー

「私だよー」

「優……どうしたの……?」

「ご飯を食べないと体によくないよ?」

「……」

うーん……これは困ったなー

「さっきの子達ねー」

風早優の友達なんだー」

「え……」

「ものすごくいい子なの

それは私が保証するよ?」

「……うん……」

「クロームちゃんは優しくされて

びっくりしたと思うけど

仲良くしてほしいなって言ったら困る?」

首を横に振ってくれた♪

そしてやっぱりフルフル振ってる姿は可愛い

あ、また変態に近づいてるよ

「よかったー♪

じゃあご飯食べようよ♪」

「優……」

「どうしたの?」

「どうしてヴェントで過ごしてるの?」

「あれ? クロームちゃんは知らなかった?」

この時代の私はいろんなマフィアに狙われてて  
正体を知った人はかなり危険な目にあうんだー」

「え……」

「京子ちゃん達が正体を知ってマフィアに脅されて  
私の正体ばれたらそれはしょうがないけど

多分ひどいマフィアに捕まったら

私は人体実験とかされそうだからねー」

「……………」

「だから本当に知らないことが一番良いと思うんだ  
でもヴェントで会っちゃってるから

もう巻き込んでる気がするけどね

クロームちゃんもゴメンね?」

「……優は謝らなくていい……」

「ありがとう♪」

まあこの話はおいといでご飯を食べに行こうよー

私さー実は1日中寝てて何も食べてないんだー」

「え?」

「だからすっごくお腹減ってるんだー

何か恵んで貰おうと思つてこつちに来たんだよ

でね、京子ちゃんとハルちゃんとイーピンちゃんが

私の分も用意してくれてるんだ♪

ね? だから一緒に行こうよ♪」

「うんー!」

うわー可愛い♪

あ、みんな揃ってるよ

まだ説明してないから少し顔を合わせづらい

ってか、なんで私がこんな思いをしないといけないんだ

私は何も悪いことしてないしねー

まあ全部白蘭さんのせいだよ

これは私はひどくない

〴〵どうも〴〵

「ヴェントローラー!!」

極限お前は敵なのかー味方なのかー

どっちなのだーローラー!!」

うわー京子ちゃんのお兄ちゃん……

ここでその話をするの!?

「お、お兄さん……ここではちよつと……」

「お兄ちゃん何の話?」

「じ、時期相撲大会で

ヴェ……ヴェントが敵になるかもしれん」

なんとという誤魔化し方…… (笑)

やっぱりそれは無理があると思う

〴〵あーとりあえずご飯にしないか?

僕は1日中寝ててお腹すいているんだ……〴〵

「はひー そうだったんですか!?

しつかり食べてください!!」

「そうだよ!

クロームちゃんも食べてね」

「あ……ありがとうございます……」

……うん

みんな可愛いくて食欲が増すね

あ、また変態に近づいた (笑)

〴〵いただきます〴〵

あー美味しかった♪

2回もおかわりもしちやったしねー

獄寺君が警戒するだけ無駄と思ったのか

呆れて見ているのは気のせいと思いたい  
いや、良いことだけどね

でも凶太い私を見て警戒を緩めてほしくない

……よし、凶太くなつたのは全部雲雀先輩のせいにしてよう

“ありがとう”

美味しかったよ”

「よかったー」

「よかったですー」

2人とも可愛いなー

「あの……ヴェント……」

“なんだ？”

ツナ君どうしたんだろー？

「今からみんなと地上に散策行くんだ

一緒に行かない？」

え……これは私のせいで

無くなつたと思つただけどねー

“今から行くのか……？”

「うん

リーダーに怪しいのが映ってないんだって

京子ちゃん達が外に出たいみたいで

念のためオレ達が護衛することにしたんだ」

いや……映ってないだけで

私を探してる人が大勢潜んでると思う……

この前、囹になつたからねー

ツナ君も雲雀先輩に言つたのを聞いてたのに

意味がわかつてなかったのか……

……リボン君がここにいないのね

だから却下しなかったのか……

んーこのメンバーだとビアンキさんがいいか……

“あービアンキちよつと向こうで話が……”

あ、何も言わずついてきてくれたね

「すみません」

「どうしたの？」

「リボン君には地上探索のことを話しました？」

「いいえ」

「まだ話してないわ」

「やっぱり……」

「この前、私が外で囿になったので

レーダーに映ってないだけで

私を探してるマフィアが大勢いる可能性が……

一週間もたっていないですし……」

「……そうよね」

「気付かなくてごめんなさい……」

「大丈夫ですよ」

「それでみんな行く気満々みたいなので

また囿になりますので

地上探索が終わったら連絡してくれませんか？」

「……いいえ 止めましょう」

「いいですよー」

「こんなところにずっといてると

精神的にしんどいですよ？」

「みんなのリフレッシュが必要です」

「でも……」

「私は捕まりませんから大丈夫です」

「そのかわりお願いがあるんですけど……」

「……何かしら？」

「ツナ君達には私が外で囿になってることを

黙っててもらえますか？」

「……わかったわ」

「ありがとうございます。」

## 地上探索

ビアンキさんが気にしてそうだなー

「ヴェントどうしたの？」

ビアンキに何かあったの？」

あ、ツナ君が心配してくれたみたい

「大した話じゃないよ」

「……ええ」

まだ気にしてそう……

「あー僕は地上探索行かないから

みんな楽しんで来い」

「え!? 行かないの?」

「ああ

遠慮しとくよ」

「そっか……」

うーん……多分ツナ君は

私に気を使ってくれたんだろうねー

「はひー！ ヴェント君行かないんですかー!」

「そうだよー

一緒に行こうよー」

「悪いな

まだ少し疲れてるんだ

向こうのアジトで寝てるよ」

「ごめん……思いつきウソです……

「はひー！ そうだったんですかー!」

ゆっくり休んでください!!」

……ハルちゃんごめんよー

心配してくれてありがとー!!

さて、ツナ君に言っておかないと……

ずっと気にしそうだし……

「ゆっくり休んだら

「また顔を出してもいいか？」

「う、うん！」

「もちろんだよ!!」

「ありがとう」

「これで大丈夫かな？」

「あ、囧になる前に言っておかないと……」

「クローム」

「どうしたの……？」

「僕がいなくても」

「もうみんなのご飯を食べれるだろう？」

「あ、うなずいたねー」

「急ぐ必要はないよ」

「クロームのペースで仲良くなればいい」

「彼女達は待ってくれるよ」

「うん……！」

「かわいい……!!」

「なんて可愛いんだ……！」

「頭を撫でてあげたいけど」

「可愛い髪の毛が乱れてしまうからやめよう」

「じゃあ僕は戻るよ」

「じゃあな」

「さて……囧になるかなー」

雲雀先輩のアジトの出方を

この前に教えてもらって良かったよー

ツナ君のアジトから出たら

いろいろわかつちやうからねー

えっと……みんなの家と学校から



離れたらいいんだよね？

よく考えたら雲雀先輩が

学校にいる可能性が高いしねー

一石二鳥だね♪

あ……今思ったら……

簡単に外に出れないってことは……

京子ちゃんにツナ君が話すこと出来るのかな？

まあそこはビアンキさんが

うまく誘導してくれると思うんだよねー

ボイコットは避けれないと思うし

話さなくても結局チヨイスの会場に

行かないといけないしねー

んー……あきてきた…… (笑)

お昼だからかなー？

向こうが思ったより活発な行動をしないね

まあ思いつきり追っかけられてるけどね

多分、私は捕まえるのが目的だからかな？

あ、終わったのかな？

ケイタイがなってるよ

ある程度離れてるし普通に話していいかな？

『ちやおツス』

「あれ？」

リボン君からとは思わなかったよー」

『ビアンキに聞いて

オレがするって言ったからな』

「そうなんだー

そっちは無事に地上探索終わった？」

『ああ

悪かったな

オレが知っていれば止めていたんだが……』

「問題ないよー

京子ちゃんとハルちゃん達も

リフレッシュしたかったと思うしね」

『……わりいな』

「いいってばー

こつちも思ったより活発な行動ないよー

多分生け捕りだからと思う」

自分で生け捕りって言うの嫌だね……

凄くテンションが下がったよ

『……そうか』

「まあ私も外の空気がすえて良かったから

気にしないでほしいなー」

『わかったぞ』

「うん

じゃあそつちに戻るね

また着いたら顔を出すよ」

『ああ

気をつけろよ』

「ありがとー

じゃあまたねー」

やっぱりリボン君が知ってたら止めたのか……

今からのことを考えて並盛から離れていたけど

効果があるかなー？

うーん……多分無理かな……

1日じゃ効果がないと思う……

とりあえず帰るか……

帰るときに空から家と学校を見ようかなー

うん。私も少しは気分転換することにしよう

空を飛んでボーっとしたかったしねー

でもこの時代では匣兵器で空が飛べるよね  
んー雲の中に隠れてボーっとしよう！  
そうと決めたらさっさと撒こう！

## 独占 1

帰ってきたー♪

「おかえりなさい」

「ただいま」

あれ……？怪我してる……

「もしかして……私のせいで……」

「違うよ」

「本当ですか……？」

「僕は優にウソつかないよ」

「そうですか……」

「そうだよ」

じゃあなんで怪我してるんだろ？

あー思い出した!!

原作ではディーノさんと修行してたんだ!!

まあかすり傷しかしてないけど……

やっぱり雲雀先輩は才能あるよねー

「優」

「なんですか？」

「これ」

あ、カギだ

「持ってきてくれたんですねー」

ありがとうございます♪」

「問題ないよ」

書いたけど本当に持ってきてくれたんだ……

凄くうれしいなー

大事にポケットの中にしまっておこう

……

あれ？なんか変な感じがする

「どうしたの？」

「んー多分気のせいです」

「そう」

なんだろう？

あ……わかった

雲雀先輩との距離だ……

10年後の雲雀先輩はもつと近かったんだ

うん。この距離が本当の距離だよ

手を伸ばしたら届く感じだったよねー

慣れてって怖いなー

これから気をつけないといけないね

まあ……でも……今日はいいよね……？

「……雲雀先輩」

「なに」

「……会いたかったです……」

グイッ

「うわっ!？」

ぎゅっ

……雲雀先輩だ……

雲雀先輩の前に戻ってきたんだ……!

「……僕もだ」

／／／／／／／／

うう……それは反則です……／／／

あ、離れた……

もう少しそのままでいたかったな……

せつかく久しぶりに会えたのに……

「……10年後の僕は……」

優に何もしてないよね？」

……したといえは……したよね……

でも言ったらまずいよね……

ってか、なんでそんなことを聞くのー!？」

「……特になにも」

「その間はなに」

「気のせいですよ♪」

「ふうん」

あ、機嫌が悪くなったかも……  
せつかく会えたのに……

んーどうしようかなー

「10年後の雲雀先輩に言ったんですけどー」

「……なに」

「10年後の雲雀先輩が

かつこよかったのでこれから楽しみです♪」

「そう」

「はい♪」

ちよつと機嫌がよくなったかな？

「やっぱり私には今の雲雀先輩が1番ですよ」

「そう」

「はい

なんか大人過ぎてびつくりしましたもん」

「例えば」

「んー……考え方とか

身長とかも全然違いますしー」

「へえ」

本当にいろいろ違うかった……

私をいじめて楽しんでもん……

それに抱きしめられた時の肩幅とかも

全然違うかったもん……／／／

ぐいっ

「うわっ!?!」

ぎゅ

ま、また!?!

さつきもしたのに……／／／

「雲雀先輩……?／／／」

「今、未来の僕のこと思いだしてたよね」

「へ……？／＼／＼」

「ダメだよ」

「……えつと……10年後の雲雀先輩は

雲雀先輩の……成長した姿ですよ……？」

「それでもダメだよ」

「こ、これは……やきもち……？」

「えー！ー！？」

「そんなキャラじゃなかったはず!!!」

「……でも……嬉しい……／＼／＼」

「大丈夫ですよ？」

「なにが」

「10年後の雲雀先輩は

10年後の私がいるのでー

私には子ども扱いでしたよ？」

「……そう」

「はい」

「……いつまで抱きしめてるんだろ……／＼／＼」

泣いている時以外で

こんなに抱きしめられたことない……

そりゃ10年後の雲雀先輩とはしたけど……

「ひゃ……あ……」

「い、いいいま……くくくくくびに……」

「なななななんかしたー!!!」

「いや、落ち着け私……!」

「今のは偶然当たっただけだ!!」

「偶然にしては時間が長かったのは気のせいだ!!」

「ただの偶然……ただの偶然……」

「だから過剰に反応してはいけない」

「ほ、ほら……雲雀先輩も普通に離れたよ!!」

「……お風呂に入ってくる」

「……はっ」

ふう……お風呂に行つたね

……顔を見て返事が出来なかった……

あ……あれ……？

へなへなへな……

た、たてない……腰が抜けてる……！

……

ぎ、座布団……こっちに来てー！！

顔を隠させてくれ……／／／

もふっ

埋もれるのが1番だ……

うう……さっきのは何だったのー！？

ももももしかして……今は……

いや、それはない

やっぱり偶然だよね！！

『……見事につけられてるぞ』

／／／／／／

『雲雀のキャラがかわつたのはわかっていたが……

ここまで独占欲が強いとは……』

／／／／／／

わ……私の方が……びっくりしてるよ……／／／

『まあそうだろうな』

ど、どうしたらいいの!?

『別にこのままでもいいだろ

優は嬉しいんだろ?』

／／／／／／

神様……あんまりいじめないで……／／／

恥ずかしくて死にそうになる……

『優の反応が面白くてな』

私の周りにいじめる人多すぎない……?』

『反応が面白いからな』

……ひどい



『見えるところだから気をつけるよ』

ええええええ!!

そんなにわかりやすいところなの……??

『ああ』

ばっちり見えてるぞ』

ど、どうしよ……

……雲雀先輩……わざとこの場所にしたのかな……

『そうだろうな』

……雲雀に腹が立つから仕事に戻るぞ

じゃあな』

ええええええ!!!!

一緒に考えてよーーーー!!!!

ど、どうしよ……

## 独占 2

だ、誰かこっちに来る!?

ど、どうしよ……

とりあえず……フードをかぶろう……

「優?」

あ……ツナ君だ……

「ど、どうしたの……?」

「今から京子ちゃんのお兄さんと

優がこっちのアジトに戻ってから

10年前から来たバジル君がこのアジトに着いてね

2人の歓迎会するんだけど優も来ない?」

「えつと……」

雲雀先輩が帰ってきたからこっちで過ごすよ」

「え!」

ヒバリさん戻ってきたの!」

「う、うん

多分寝に帰って来たと思う」

「そうだったんだ……」

優、なんでフードかぶってるの?」

「あ……これには……」

いろいろありまして……」

というか、あんまりこっちを見ないで!!

フードかぶってても見えてそう……

「優?」

「ツナ君! 気にしないで!!」

お願いだから私の分まで楽しんで来て!!!」

あんまり見ないでー!!!

「う、うん?」

「わかった」

「う、うん!!」

それでお願いします!!!」

帰って行った……

た……助かった……

……あれ?

大事なことを忘れているような……

なんだったかな……

あ……雲雀先輩が戻ってきた

久しぶりに……雲雀先輩の風呂上りを見た／＼

いや、10年後の雲雀先輩は見てたけど……

やっぱりいろいろ違うよ!!

「優」

「なんですか?」

「お腹すいた」

「あ、そういえば……そうですねー」

私もお昼にいっぱい食べたけどお腹すいたよ

……あれ?

「……雲雀先輩……」

「なに」

「……草壁さんは?」

「知らないよ」

……ピンチ!!!!

「あ、あの……」

「なに」

「食材が少なくて……」

「へえ」

「私……外に出れないんで

買ってこれないんですよ」

「そう」

「あの……つまり……」

何も作れないんですよね」

「……向こうからもらってきてきなよ」

「……ですよね

雲雀先輩お風呂に入りましたもんね」

「そうだよ」

「雲雀先輩がもらいにいくのは……ないですね……」

……言ってる途中で睨まないでください

「当たり前だよ」

「そうだよねー」

雲雀先輩が群れているところに

好き好んで行くわけないよねー

「……フードをかぶってても……」

さっきのは見えてますか……?」

「そうだね」

「……雲雀先輩……（泣）」

あ……笑った……／／／

くそー!!私って単純だ!!

今ので許しちゃったよ!!

「……絆創膏しますね」

「そう」

このまま行くよりましだ……

多分意味がわかるのは

ビアンキさんとリボン君ぐらいだよ

フウ太君はあやしいけど……

ものすごく入るのに勇気がいる……

さっきより勇気があるよ

一体これはなんの試練だ……

「あら? ヴェントはどうしたの?」

ドアの前でたってないで入っていいわよ?」

なぜこのタイミングでビアンキさんの……

今は会いたくなかった……

〃……向こうのアジトの食材がなくて  
恵んでもらおうかと……〃

「クスツ そうだったの  
いいわよ」

〃……悪い〃

今の笑い……絶対ばれた!!!

「あれ？ ヴェント来たんだね」

〃……向こうのアジトの食材がないんだ  
少し恵んでくれ〃

「そうなんだ

持っていつていいよ

あれ？ 首怪我したの？」

……聞かないで……

「ツナはガキだな」

「な!? 赤ん坊に言われたくないよ!!」

リボン君にもばれたよー (泣)

はやく帰りたい……

「これで足りるかしら？」

〃……ああ

もうそれでいい……〃

投げやりな返事になるのはしょうがないと思う (泣)

「クスツ そうね

早く帰りたいはずよね」

「え!? ビアンキそれどういうこと!？」

ツナ君……心配しなくていいよ

みんなに顔を合わせずらいわけじゃないから……

だから深くツツコミはいれないで!!

「ツナにはまだ早いわ」

「どういう意味?」

〃……僕は帰る……

じゃあな……〃

……なんだこの羞恥プレイ……

「……ただいまです」

「おかえり」

「向こうがパーティイしてたので

それをもらってきました……」

「そう」

「明日は草壁さんに買ってきてもらって

ご飯を作りますね……」

「わかった」

今日は疲れた……

ご飯食べて……さっさと寝よう……

「えつと……雲雀先輩……?」

「なに」

「なんでここに……」

「問題ないよ」

だからあるって……

恥ずかしくて寝れないよー!!

## 10年後のデイーノさん 1

朝早くから雲雀先輩は出掛けたんだよねー

多分並盛をうろうろしてるか

学校に行ってるんだと思うんだよねー

私はみんなに説明しないとイケないかなー

あれ？誰かこっちのアジトに来るよ

フードをかぶらないと……

「久しぶりだな」

「デイーノさん達かー」

「なんだよ

その反応ー」

「あ、ごめんなさい

そういう意味じゃなくて

ヴェントのフリしないといけない人物かな？

とかいろいろ思いましたー」

「なるほどな」

「はい

10年後のデイーノさん達は

さらにかっこよくなってますねー」

「へへっ

優に言われると悪い気がしねーな」

「それは良かったです♪

んー私に話があるんですよね？」

検討はつくけどねー

「……ああ

なんで優がマーレリング持ってたんだ」

見せたほうがいいか……

ゴソゴソ

「これが風のマーレリングです

えっと……前に……といっても

デイーノさんは10年前ですけど……

事件があつてその時に

いろいろ縛られたつて言いましたよね？」

「ああ」

「それより半年ぐらい前にもりました」

「そんな前からなのか!？」

「そうなんですよー」

たまたま道を歩いたら落とし物を拾つてー

じゃあ蓋があいちやつて落とした人にいつたら

これは私が持つておくものつて言われて……」

「……なるほど」

ボンゴレリングと一緒に

封印されていたのか……」

「今、考えるとそうだと思います」

私が触つたことによつて

封印が解けたんだと思います」

「……そうか」

「過去から持つてきたものを

この時代で勝手に放棄することは出来ないんで……

私に渡した人は過去ではまだ生きてますし……

白蘭さんの言い方では多分未来の私は放棄してます

そして私が放棄しないように釘を刺したんですよ」

いや……未来の私も放棄せず持つてるけどね

使つてないだけだし……

「ああ

リボーンもそう思つたみたいだ」

やつぱりリボーン君も思つたんだよねー

私のこと全く気にしてなかったのは

私が白蘭さんの守護者になりたくないことを

わかつてるからだと思ふ

「ですよねっ？」



この時代ではその人がもう亡くなってるから  
未来の私は放棄することが出来たと思います  
で、私に渡した人が多分日記かなんかで  
肌身離さずもっておくように言ったのを書いてて  
白蘭さんが見つけたんでばれたんですよ  
この時代ではマーレリングの持ち主のボスが  
白蘭さんなので無理矢理中立の立場にされた  
って感じですよ……」

「……なるほど」

「そうなんですよねー」

まあ私に渡した人の名前を知らないんですけどね」  
未だにわかりません……」

優しい笑顔が似合うきれいな女性です

γさんに聞けばよかったなー

「そうなのか!？」

「はい

ただ指輪を渡されただけですよ

会った時間なんて1分もないですよー

だからこの時代に来て

ファミリーの名前をはじめて知りましたよ」

これも私の原作知識で覚えてるわけないじゃん

これを覚えてたらルツス姐さんの名前を覚えてるよ (笑)

「それ以前にマフィアというのも

この時代に来て知りましたよ」

まあこれは原作知識で知ってたけどね

でも知らないことになってるしー

「……それもそうだな

優が知っていたらボンゴレか

オレのところに入りたたって言わないよな……」

「そうですよー

でもあの人が無理矢理ほしって言ったたら

私は喜んで助けに行きたいと思うような人でした  
すごく暖かい人でしたよ」

「そうか」

「だから守護者って言われても

間違つてないと思います」

「わかった」

「多分未来の私を捕獲しようとした理由は

他にもいろいろ考えられますけどー

1つはこのマーレリングも狙つてたんですよ

で、捕まえて過去の私を呼びたかつたはずす

そして守護者にさせたかつたんですよ」

「確かに……」

「雲雀先輩には道歩いてたらもらったっていう話を

前にしていたので全然気にしてないですしー

クロームちゃんはそういうことは気にしてないみたいです

多分クロームちゃんも微妙な立場だからだと思えます

ツナ君は多分よくわかってないんですけど

私のこと信用してくれてるので

問題ないといえはないんですけど……」

「……そうか」

「まあ……他のみんなはちよつと混乱しましたね」

「……みたいだな」

「私も正直巻き込まれた形なので……」

ちよつと混乱してますよ」

まさかこんなことになるとは思わなかった……

白蘭さんにやられたよ……

少しでもいいから誤解させて

私達が混乱させるのも狙いだっただと思う

移動させた後にさらに捕まえやすくなるからねー

まあ助かつたけどね

「それもそうだろ

優は悪くないぜ」

「……ありがとうございます」

みんなにも話をしないとイケないですね……」

「ああ」

「最初がディーノさんで良かったです」

「そうなのか？」

「はい」

だって1ミリも私を疑ってないですよね？」

「当たり前だろ」

「みんなは少し混乱しちゃったので……」

「……気にするな」

話をすればわかってもらえる なっ？」

うわー頭をポンポンされた!!

「……はいー」

## 10年後のデイーノさん 2

「今回もし負けたら私は多分……操られたり……」

「人体実験とかも普通にありそうです……」

「……ああ」

「私はかなりレアなので……」

「しようがないと言えば……しようがないですね……」

「確かに……」

「この時代でヴェントは他のマフィアからも」

「かなり狙われてるからな……」

「はい……」

「10年後の雲雀先輩に聞きました……」

「……そうか」

「オレも昨日恭弥にその話をしたよ」

「そうだったんですか……?」

「何も言わなかったのは私に気を使ったのかな……」

「そういえば私に聞かなかったよね……」

「なんで私のせいで風紀が乱れてるか……」

「……そうかもな」

「恭弥は優には優しいからな……」

「……そうですね」

「いつも優しいもんね……」

「私がこの話をしたくないってわかったと思う……」

「遠くない未来にこのことが起きる」

「って確定してしまったからね……」

「それにしても……」

「本当に選ばれし者って感じですね」

「……ああ」

「まさか風の波動を持つてるのが」

「優だけとは思わなかった……」

「そうですねー……」

まあ負けたら大変なことになるのは  
みんなとかわらないので

一緒っていえば一緒ですよね」

「……それもそうだな」

「ただ……」

「なんだ？」

「私は……多分中立なので

そのチョイス？っていうのも

参加できないと思います……」

だから原作通りになるんだろうな……

「なので……私は何も出来ないんですよ……

みんなに任せるしか……」

あ、また頭をポンポンされたー

「心配するな

オレが今からあいつらの全体を仕切る

家庭教師をすることになったからな」

「……それは心強いです」

「そう言ってもらえると嬉しいな」

「そうですよー

昨日雲雀先輩がちよつと怪我してたのは

もしかして……」

「ああ

昨日から恭弥には修行をつけてるからな」

「そうですかー

昨日聞いたんですけど

教えてくれなかったんですよー」

「そうなのか？

オレを見るなりいきなり攻撃してきやがったぜ」

「雲雀先輩ですからね♪

昨日は学校か並盛をうろうろしてましたでしょ？」

「流石……優だな……」

学校の屋上にいたよ」

「そうですか♪」

「いいなー……」

「優も行けばいいじゃねーか」

「それはダメですよー」

入江君が過去から来てるリストは

ヴェントっていう嘘の報告を

白蘭さんにしてくれてるんですよ？

つまりー風早優は

ここには来てないことになってるんですよ？」

「関係あるのか？」

「ありますよー」

ヴェントの情報は高値で売れるんですよ？

もしそのリストがマフィアに流れて

風早優が過去から来てるってばれると

ヴェントの正体がわかってしまいますよ？」

「……そうだな」

「そうですよー」

だから風早優では外に出れないんですよ

ヴェントで外に出ると

これはこれで困ったことになって

昨日、函をしたんですけど

街中で長時間とどまるのは難しいですね

まあ帰りに空を飛んで見ましたけどね

雲に隠れるぐらい飛ぶからよく見えませんでした」

「だからか……」

「え？」

「恭弥が暗くなってきた時に

いきなり帰るって言いだしてな

もちろんオレも遅くなればやめるつもりだったんだが……

恭弥から言い出したから変だなって思ってたんだ」

雲雀先輩はそこまでよめてたんだ……

本当に……敵わないなあ……

「そうだったんですか……」

今日、朝早くから出掛けたのは

雲雀先輩が私に気を使つてここにいてたら

多分私が嫌だとわかつてるから出掛けたんですね」

それに……

私のせいで風紀乱れてても大丈夫だよ

つていう意味もあると思う……

私が気にしてたから……

「……ほんとに……優には優しいよな……」

「そうですねー」

すごく助かってます」

「……そうか」

今からあいつらに修行の話するが……

その前に話をするか？」

「はい」

ディーノさんと話ができて良かったです

雲雀先輩の優しさを再確認できました♪

これで頑張れそうです」

「ああ」

だが無理はするなよ？

この時代……今の優にはかなり辛いだろ？」

「大丈夫ですよ」

みんないますから」

「……そうだな」

「もちろんディーノさん達も

その中に入ってますからね♪」

「ああ」

また頭をポンポンされたなー

うーん……そんなに子どもっぽいのかな？

まあ嬉しいんですけどねー

「じゃあ行きますかー」

「そうだな」



## 盗み聞き

よし！頑張ろう！

みんな信じてくれるよね！！

「ヴェントで行くのか？」

「だって守護者全員に話すんだったら

ランボ君いてるじゃないですかー」

「なにか問題あるのか？」

「私はランボ君とかなり仲が良いんでー

優って呼んだら大変なことになりますよ？」

「それもそうだな

まだ小さいしな……」

「そうですよー

正直京子ちゃんのお兄ちゃんでも心配なんですよー？」

「……確かに」

「でしょ？」

「だからヴェントで話しますよ」

「わかった」

話が終わって

巻き込まれてる状況っていうのを

みんなが納得してくれたのはいいけど……

本当に……ヴェントで良かった……

あそこに誰かいるよ

なんでみんな気付かないんだろう……

普通に修行の話になってるんだけど……

いや……リボン君は気付いてるかもね

つてか、ディーノさん……

京子ちゃんのお兄ちゃんとランボ君は

獄寺君と相性が悪いと思う……

どっちも感覚派だと思うし……

まあ私は無理だと思うから任せよう

京子ちゃんのお兄ちゃんとは話が合わないんだよ

……それにあのテンションについていけない……

たまに乗り込んできた時に

雲雀先輩と一緒に溜息をつく時がある……

まあ雲雀先輩よりは私は少ないと思うけど……

そしてランボ君と一緒にいれば私は遊んでしまう

「次にヴェントだが……」

デイーノさんが困った顔してるよ

〃僕は1人で勝手にするよ

場所さえあれば問題ないよ〃

「……わかった

何かあれば言ってくれ」

〃ああ〃

デイーノさんも心配性だなー

私のボンゴレ匣は未来のツナ君から

何も聞いてないからしようがないか……

うーん……一体何が入っているんだろ？

すっごい楽しみだ♪

「次は山本武」

「うす！ 待ってたぜ!!」

デイーノさん 何やんだ？」

「お前はパスだ 待機」

「へっ？」

「つーか お前には手ーだせねーんだ

お前にヘタなこと教えれば

あいつにぶっ殺されるからな」

〃あー……なるほど……

僕でも教えれば怒られそうだ〃

刀を使ってるけど

私は剣士じゃないからねー

「…………… あいつ?」

「お前の才能の一番の理解者は本気だぜ

今回の修行で山本武

お前すげーことになるかもな」

スクアードさんは本当に才能の1番の理解者と思う

私がヴァリアーに顔を出すたびに

山本君が修行しているか聞くもん

私が剣士を目指していたらうるさそうだ……

……風使いとしてみてくれてて助かった(笑)

“そうだな……”

あー……山本武”

「なんだ?」

“多分僕のこと聞かれるから

さつき話したことそのまま伝えてくれ”

「? ああ……いいぜ?」

“頼んだぞ”

スクアードさんは

絶対私のことを聞いてくると思う

みんな帰って行ったなー

“もう僕以外はいないから

出てきても大丈夫だぞ?”

あれ?出てこないなー

“僕は怒らないよ”

どう考えても京子ちゃんと

ハルちゃん以外する人いないしねー

だって他の人は盗み聞きする必要がないもん

「ぷはーっ」

……その格好は私には無理だ  
多分ハルちゃんの趣味だね……

「ヴェント君、気付いてたんだね」

「声かけられてビックリしましたー」

怒られると思いましたがよー」

〃僕は人の気配に敏感なんだ

君達は彼らの力になりたくて

ばれたら怒られる覚悟で聞いたんだろ？

じゃあ僕は怒らないよ〃

「そうだったんですかー」

「ありがとう

ヴェント君」

〃ああ

後は君達が判断しなよ

っていつても決まってるか……〃

「そうだね」

「そうです！

いつまでものけ者にしようとしても

そうはいきませんよ！

ツナさん達ばかり今の状況を

わかかってハル達だけよくわからないのに

頑張るなんてできません！」

〃……そうか

僕はどっちの味方もしないぞ？

君達の気持ちもわかるし

彼らの気持ちもわかるからな〃

「ううん

黙っててくれただけで十分だよ」

「そうですよー

ヴェント君が教えたら

「ハル達はなにも聞けなかったんですからー」  
“……そうか

僕は修行するからな

じゃあな”

んー困ったなー……

私の正体を教えるべきか……教えないべきか……

……後で考えよう

とりあえずボンゴレ匣をあけよう♪

## 未来の私と神様

ボンゴレ匣はなに入ってるんだろー  
めっちゃ気になる♪

『はやく開けろよー』

あ、神様も興味あるんだね

『当然だろ』

そっかー

あけまーす♪

カチツ

.....

『ぶっ』

.....

『未来の優も本当に好きなんだな

確かに大事な思い出だな』

.....そうだね／＼／

ビツクリしすぎて思考が止まってしまったよ.....

ガルツ？

か、可愛すぎる.....!!

「こっちにおいでー」

ガルツ♪

おー来た♪

ぎゅ.....

「かわいすぎー.....!!」

これはまずい.....

男のフリをする自信が一瞬にしておなくなった！

ガルル♪

おおー抱きしめても喜んで.....!!

つまり.....

「めっちゃ私に懐いてる.....♪」

『当たり前だろ』

未来の俺が作ったんだ』

それもそうだねー

それにしても流石神様って感じだよ……

『俺は天才だからな』

そだね♪

でもあの人達と似てるのはしょうがないか……

『意味が全然違うだろ？』

別にいいだろ』

そだねー

それに思いつきりキャラクターだしね♪

『そうだな』

ガルルーガルルー

あれ？抱きしめすぎたかな？

「ごめんね

痛かったかな？」

違うみたい首を振ってるねー

というか、私が言ってることがわかるんだね

この子は頭がいいみたいだねー

ガルッ！

ん？なんだろー

『なんだそれ？』

手紙みたいだよー

ってか、匣兵器に手紙もたせるなんて……

流石神様だ

こんなことさせても問題ないとは……

『俺だからな』

うん……

全部その一言で片付けれる気がしてきた

『読んでみるよ』

あ、そうだねー

多分未来の私からの手紙だよ

『そうだな』

えーっと、なににー？

あれ？なんか小さな袋があるなー

まあ先に読もう♪

『また凄いことをしてるな』

未来の優は……』

それを言うなら未来の神様もだよ

『それもそうだな』

確かにこの匣兵器は

説明してくれないとわからない……

とくに形態変化は……

『そうだな』

優は一人で修行するって思ってるだろうだからな』

うん

それにこれもすごいよね

『ああ』

じゃあ神様相談ですー

『ああ』

うーん……これが一番いいかな？

それが最善だな』

だよねー

~~~~~と~~~~~の

特殊能力でお願いします!!

『わかった』

本当にいいのか?』

うん

まあ多分……怒られるか……呆れられる……
どっちかは確定してるけどね……

『……それもそうだな』

うん……

それよりこれを払うので問題ないの?

少なくとも?

『明確に決まってないしそれで大丈夫だ』

そっかー

後は……さつきも言ったけどー

~~~~~も作ってください

『ああ』

だが、本物は作るとまずいから偽物だぞ』

本物作れるんだ……流石神様……

まあぱつと見でわからない程度でいいよー

『わかった』

問題は……あれだな……』

だよねー

流石にこれだけはどうなるかわからないよ

たまたま見えなかったことにするしかないね……

『そうだな……』

でも用意するんだろ?』

流石神様♪

『当然だな』

それにしても原作知ってるから話せない  
っていうのをちゃんと考えて行動してるね

『そうだなー』

ここで手紙を残したことで

優は話しても大丈夫だからな』

そうそうー

知ってるけどわざわざ調べてたんだよね

調べたから話しても大丈夫って書いてるからね

風早優としてしか身動きが出来なかったと思っただけど

いろいろ頑張ってたみたい

『ああ』

どこまで対策してるんだか……』

そうだねー

でもどうやって調べたんだろうね

『……確かに』

まあ考えてもしようがないかー

『それもそうだな』

さつきも言ったがあれは2つ必要だが大丈夫なのか？』

そこはなんとか違和感ないように

演技でカバーするかなー

それより本当に作れるの？

特別製を頼んだけど……

『誰だと思ってたんだ』

それもそうだねー

神様だもんねー

本当にこの一言で片付けれるのが凄いよねー

『ああ』

ありがとー♪

神様……今から大変だね……

いっぱい頼んじやっただし……

『気にするな』

本当にありがと♪

『ああ』

あ……神様

『なんだ？』

白蘭さんには私には天才の仲間と

特殊能力があるって絶対ばれてるよね

『そうだな』

先に……雲雀先輩に話してもいい？

『いいぞ』

俺のことさえ話さなかったら

全部詳しく話してもいいぞ

隠そうにも話さないといけないことになるだろ』

ありがとー

『ああ』

今から作るからまたな』

うん

雲雀先輩は多分夜にしか帰って来ないと思うから

私はミントと修行しとくよー

『名前ミントなのか？』

うん

『あー……そうか』

そういえばそうだったな

色もそうだしな』

そうだよー

後で見せないと♪

『ああ』

びっくりするだろうな』

うん！

楽しみ♪楽しみ♪

## ボイコット 1

無事に形態変化も出来たね

みんなは出来ても終わりじゃないけど

私の形態変化は修行がないからなー

これで終わりと言えば終わりだけど……

いろいろ実験がしたいんだよねー

神様と話をしていたらから出来なかったし……

明日も修行をしようかなー

あれ？クロームちゃん以外は揃ってるけど……

ランボ君は起きてるのかな？

よくわかんないからヴェントで行こう……

〃……なにしたんだ？〃

獄寺君達の頭がボサボサだよ……

3人の修行は大丈夫なの……？

「今……オレも聞いたんだけど……

ランボがボンゴレ匣を開けちゃって

みんな気を失ってたんだって……」

〃……なるほど〃

失敗したのね……

によおん♪

あーまた獄寺君の匣兵器なのね

「瓜！ さっきまで動けなかったのに

ヴェント見たら元気になるのかよ!?!」

〃へえ

名前を瓜にしたんだ〃

「ああ」

〃瓜〃

によおん♪

よしよしー

かわいいいなー……

「あー僕はほとんど完璧だ」

「え!?!もう!?!」

「終わりといえば終わりだぞ」

でも僕の匣兵器は面白いんだ

いろいろ実験をすることにしたよ」

「そうなの?」

「ああ」

僕のボンゴレ匣は

大空の波動で開けても扱うのは難しい

本当に僕専用だよ」

「そうなんだ……」

……ヴェント……すごいね……

オレはまだ開けることもできないよ……」

「そうか……」

まあその時が来たら開けれるさ」

「う、うん」

かなり落ち込んでるかも……

私もうまくいかなかったって言えば良かったかなー

「おまえら匣兵器の修行できていいじゃねーか」

オレなんておあずけだぜ……」

「山本……」

「君の場合はしょうがないよ」

あの人に来るまで我慢だな」

「あの人って誰なんだ?」

んー言ってもいいけど……

言わないほうがいいよねー

ツナ君が聞いたたりしたら反対すると思うしね

「僕の口から言えないが……」

君の才能の一番の理解者って僕も思うよ」

「そっかそっか」

はやくこねーかなー」

“すぐ来るさ”

怒鳴り込んでくると思う（笑）

「あの……お話があるんですが」

京子ちゃんとハルちゃんだねー

あーここでボイコットか……

原作通りみんなわかれちゃったなー

「ヴェ、ヴェントは……」

オレ達と一緒にだね……」

“悪いな”

「えー……!?」

ヴェントも向こうなのー!?」

「ツナさん ヴェント君は違いますよー」

「そうだよー」

「え!? どういうこと!?」

“僕は彼女達の気持ちも

君達の気持ちもわかるからどっちの味方もしない”

「えー……!?」

ず……ずるい……」

ツナ君が本音を出しちやったよ（笑）

“悪いな

あーでも彼女達に1度協力したから

そっちにも1度協力するよ

何か困ったら言ってくれ”

「!? 協力ってなにをしたの!?」

“彼女達が盗み聞きしてるのを見逃してあげた”

「な……!?」

ナイスリアクション（笑）

「ヴェントてめえ!

気付いてたなら言いやがれ!!」

「ヴェント君は悪くないよ

私達が怒られると思っても聞きたいって  
わかっていたから黙っててくれたんだよ」

「そうです！

ヴェント君は悪くないです!!」

みんな女の子に弱いなー

2人が私をかばったら何も言えなくなった(笑)

まあ女の子に1番弱いのは私と思うけどね!

〃だってさ

まあ1度だけ協力するから家事で困ったらいいなよ  
考えて言わないと長期戦になったら困るぞ〃

「う……わかった……」

〃あーそれと……

もし話すことになった場合は

全部話した後に

僕のことを話すから正体とか言うなよ〃

「え……あ……うん……」

〃君達もそれでいいか?〃

「うん」

〃後はそつちで話すか話さないか相談しなよ  
じゃあな〃

さて、どうなるのかなー

長期戦になるかもしれない時を考えろって言ったから

原作通りのまま進むのかなー

それともすぐ言いに来るのかなー

まあいいか♪

## ボーイコツト 2

んー何の用事なのかな？

周りに誰もいないし聞いてみようー

「さて、リボー君は何の用事？」

「流石だな」

やっぱり気配を消しながらつけてたのか……

「いえいえー

で、どうしたの？」

このまま歩きながら話していいか……

周りに誰もいないしねー

「優の行動がわからなくてな……」

「へ？」

「優はツナ達の味方と思っていたが……

あの時に言わなかったから

京子とハルの味方になったと勝手に思ったからな」

「あ、やっぱりリボー君は気付いてたんだね」

「オレは一流の殺し屋だぞ」

「そうだったね♪

んー……言われると確かに変だね」

「ああ」

「……そうだねー

あのタイミングで教えたら

2人が怒られちゃうから言えなかった

って感じかな？」

「なるほどな」

「うん

聞きたい気持ちもわかるしねー」

「だったらなんで京子とハルの味方しねーんだ？」

「それは危ないから反対!!!

っていう気持ちもあるよ」



「だからどっちの味方もしないのか？」

「んー……正しく言うと……」

風早優としては2人の味方で

ヴェントとしてはツナ君達の味方ってことだよ」

「なるほどな

優は2役してるからな」

「そうそうー

だからどっちの気持ちもわかるから

どっちの味方をしないの

これって逃げてるのかな？」

「問題ないだろ

優の正直な気持ちなんだろ？」

「そうだよー」

これは原作とか関係なく私の正直な気持ちだもん

「もしツナ達が話したら優は全部話すのか？」

「んーそうだねー

とりあえず私の今、置かれてる現状や

話せないこととか全部話して

それでも正体知りたいなら教えるよ」

「わかったぞ」

「ツナ君達がもし話したら

マフィアのこと説明してるから

他のマフィアに狙われてるって言えるからねー」

「それもそうだな」

「そうそうー

私は正直いうと京子ちゃんとハルちゃんが

人質にされたら人体実験でもなんでもするよ」

「……そうか」

「マフィアってそれぐらいのことありえるよね？」

「……ああ」

「ボンゴレとディーノさんのところが

特殊なだけと思うんだよねー

他にも善良なマフィアがあると思うけどー

狙ってるのはどう考えてもそれ以外でしょ？」

「……そうだな……」

「未来にきて

先に考える時間がもらえてよかったよ」

「……………」

また珍しく黙ったなー

本当に私のことを気にしてるんだねー

「リボーン君が気にすることじゃないよ？」

私はこのおしゃぶりをゲットした時から

これは私の運命だったってことだよ」

「……わかったぞ」

「んーリボーン君って

私のこと怪しいと思ってたんだったら

私の過去も調べたよね？」

「ああ」

「私ってものすごく一般人だったでしょ？」

「そうだな

なぜオレ達が呪われたのかも

よくわかってねえが……優が一番わからねえぞ」

「まあそうだよねー

正直、親がいなくて親戚に嫌われてたぐらいで

他は普通の人生だったんだけどねー」

母親の親戚にあずけられてー

グチグチいわれながら育ったぐらいだよねー

「……そうみたいだな」

「そうそうー

私の過去を知ってるから

リボーン君は私のこと気にしてるんでしょ？」

「……ああ」

「本当にただの一般人だったからねー」

まさかおしやぶりゲットするとは思わなかったよー  
まあリボーン君も望んでなかったよね？」

好き好んで呪われないと思わないと思うし……

「……そうだな」

「でしょ？」

だからそんなに気にすることないよ

勝手に選ばれちゃったのは多分一緒だと思うしー」

「わかったぞ」

「うん」

それに私の場合おしやぶりゲットした時に

身体能力もあがったからラッキーだったもん」

「そうなのか？」

「そうだよー」

私の過去は普通だったでしょ？」

神様がリボーン君が興味もつちやうから

っていう理由で普通にしてくれたんだよねー

私が嫌そうだったからっていう理由だけでね

神様って本当に優しいよねー

ちよつと前にそれ聞いてびっくりしたもんねー

「そういうえば……そうだったな」

「うん」

他にもあるけどそれはまだ雲雀先輩に

言っつてないからヒミツだよ♪

今日言おうかなって思っつてるけどねー」

「……わかったぞ」

「うん」

リボーン君、ありがとうね」

「どういう意味だ？」

「気を使っつてくれたのが嬉しかったしー

多分私が本当にただの一般人だったから

ボンゴレの機密にしてくれたんじゃないの？」

「……ああ」

「だよー」

なんでそこまでしてくれたのか

実は気になってたんだよねー」

「……そうか」

「うん♪」

リボー君と話が出来たおかげで

私はまたこれで頑張れるよー

じゃあまたね？」

もう雲雀先輩のアジトの入り口だしー

多分こつちには来ないと思う

「ああ

またな」

「またねー」

やっぱりリボー君は

私の過去を知ってるから気にしてたんだねー

これはおしやぶりを持つてる人にしか

わからない運命だからねー

話ができて良かったよ

## ボンゴレ匣

あ、帰ってきた♪

「おかえりなさい」

「ただいま」

今日も言ってくれた♪

「あの……雲雀先輩に見てほしいんですけど……」

「なにを」

「私のボンゴレ匣……」

「いいよ」

「よかったー♪」

これは雲雀先輩の反応が楽しみだぞー!!

カチツ

ガルツ♪

おお!!雲雀先輩が驚いてる♪

その反応を見たかったんだよね!!

「びっくりしました?」

「そうだね」

「それは良かったです♪」

おお……小動物じゃないのに

雲雀先輩が手を差し伸べたよ!

大丈夫かな……

ガルルー♪

ツメを引っ込めて雲雀先輩の手を触ってるよ

あ、尻尾も振ってる

私が抱きしめた時も振ってたし嬉しいんだろうねー

「雲雀先輩にも懐いてますね」

「みたいだね」

「最初見た時に未来の私も

雲雀先輩が本当に好きなんだなって思いました」

「そう」

「はい♪」

「ミントー」

「ガルルル♪」

「きゃーかわいい♪」

「ぎゅっ」

「ガルッ♪」

「羽がついてるから飛べるみたいだね」

「恐竜ですもん♪」

「恐竜にしてはかなり弱そうだけどね」

「そうですねー」

「まああの人形をイメージして

作ったみたいなのでしょうがないですね」

「それもそうだね」

「はい♪」

「でもミントはすごいですよー」

「なにが出来るの」

「えつと……まず……」

「1人ぐらいはつかんで普通に飛べたりしますよ

「ミントだけだったらスケボーの

「最高速度と同じくらい速いですよー」

「掴みながらだとスケボーの方が速いですね

「性質の加速でミントが速いみたいです」

「へえ」

「後は……恐竜といっても風竜みたいでー

「口から竜巻を突き出したりしますよー」

「そうなんだ」

「そうなんですよー」

「で、すごいのが……ミントが出した竜巻は

「私がコントロールすることもできました♪」

「攻撃の幅が増えるね」

「そうですねー」

途中で曲げれるのは嬉しいですよー

これは私しか出来ないので私専用って思いました」

「そうだね

優以外無理だね」

「はい

それに制御してる量を関係なく操れました」

これは神様がものすごく頑張ってくれたんだと思う  
ビックリしたもん……

「へえ

空を飛びながらでも使えるんだ」

「そうなんですよ♪

ものすごい嬉しいですよ♪

明日はどれぐらい関係なく操れるか

いろいろ実験してみたいと思います」

「そう

「はい

まあこれは風の力と性質の加速の力ですねー

竜巻のスピードと回転数がすごかったです」

「へえ

「それで……性質の加速を極限まで

つかったのがありますよー」

「なに

「それが……これは……

私はものすごくびっくりしました……」

「はやくいいなよ」

「えっと……

~~~~~です」

あ、固まった♪

そうだよねー

私もビックリして「はあ!？」って思ったもん

「これってすごくないですか？」

「……そうだね」

「ですよー」

私って元々身体能力高いのに

この力でもっとすごいこと出来ますしー

絶対避けられないですよー」

「……でも優はしないよね」

「そうですねー」

その力を使って逃げますねー」

「だろうね」

「はい♪」

ガルルー

「あ、ミントごめんね

かまってほしかったよね」

ガルツ！

なんて可愛いんだ……！

ずっと抱いてたのに寂しがるなんて……！

かまってかまってって目がいつてるよ!!

もう……いっぱい頭を撫でてやる!!

よしよしー♪

「なんでミントなの」

「そういえば雲雀先輩には話してないですね」

「なに」

「たいした理由じゃないですよ？」

「はやくいいなよ」

「えっと人形をもらったのが

ミントチョコを食べて当たったから

ミントっていう名前です」

「……なにそれ」

「だからたいした理由じゃないって

言ったじゃないですかー」

「そうだね……ミント」

おお！雲雀先輩が呼んだ♪

ガルルー

おお！ミントが私から離れて

雲雀先輩の話を真面目に聞こうとしている!!

ここは離してあげよう

ガルツ!

なんて可愛いんだ……!

敬礼しそうな勢いで雲雀先輩を見てるよ!!

「優を守ってね」

ガルルルル!!!

／／／／／／／／

「今のは……不意打ちですよ……／／／／」

あ……笑った……／／／

大事な話 5

「ミントが戻ったし……話をしよう

「あ……あの」

「なに」

「すつごく大事な話があります」

「わかった」

「あ……私を真剣な目で見てる……

「凄く真剣だから緊張しないよ

「……白蘭さんが私をほしいと思ってる理由ですが

「私が考えられるのを全部雲雀先輩にいいますね」

「守護者にしたい……風の波動を持つてる……

「優が持つてる3つに何か力があると思ってる」

「流石雲雀先輩だ……」

「この時代に来てすぐなのに全部わかってるよ……

「それもあります」

「でも……他にもあります」

「……他にも？」

「雲雀先輩には黙っていましたが……」

「前に私は特異体質って言いましたよね？」

「そうだね」

「あれ……少しだけウソなんです……」

「……どういうこと」

「うう……少し機嫌が悪くなった……」

「やっぱり今まで黙ってたから怒られそうだ……」

「正しく言うと……特殊能力です

「特殊能力によって私の体が特異体質になるんです」

「へえ」

「なので……特異体質というのは

「ウソじゃないんですけどね」

「そうだね」

「えつと……まず

自分の体力をあげることができると
幻覚がきかないんですよ」

「知ってる」

あれ？幻覚がきかないって言ったわけ？

「あ……そっか

幻覚きかないって大空戦の時に言いましたねー」

「そうだよ」

あの時は怒られなかったんだ……

今回も助かることを願おう……

「まあその特殊能力ですが……」

実はストック制で……」

「どういうこと」

「後から決めれるってことです

そしてまだ何回か発動していません

だから私の体を後何回か特異体質にかえれます」

「へえ」

「それが多分白蘭さんにばれてます」

「そう」

「未来の私より過去の私のほうが

多分残りのストックの数が多いと思います

これも過去から来た私を狙ってる理由だと思えます」

「……わかった」

「……私を操って白蘭さんのために

特殊能力を使わすつもりです」

「……そう」

「後……私のお師匠さんも狙われてます」

「どういう意味」

「えつとですね……」

私に戦い方を教えてくれた人なんですけど……

その人がものすごく天才で……」

「へえ」

「あんまり詳しく言えないんですが……」

「私がおしゃぶりを持つてる理由を」

「全部知ってる唯一の人物です」

「……どういふこと」

「僕にも言えないはずだよね」

「実はお師匠さんの同僚のせいだ……」

「んー……簡単に言うとお師匠さんの同僚が」

「世界のバランスを崩してしまっただけですよ」

「それで私がおしゃぶり持つことになりました」

「だから知ってるんですよ」

「あほな神のせいだよ」

「……誰」

「咬み殺す気になってそう……」

「まあ人柱って聞いてしまったし……」

「否定しなかったから肯定ってことだからね……」

「私も知らないですよー」

「多分、お師匠さんが制裁を加えてますよ」

「本当に知らないよねー」

「まあ興味ないけどね」

「……」

「雲雀先輩がしたかったんだらうな……」

「最初はお師匠さんもこれで」

「世界のバランスをとってるって」

「知らなかったんですけどねー」

「……どうして?」

「私がおしゃぶりを持つてる理由は2つあります」

「片方を知っててそれしかないと思っただけですよ」

「知っていたら必ず教えてくれますよ」

「わかった」

「で、私があまりにもかわいそうと思っ」

自ら掟に縛られてくれたんですよ」

「そう」

「その掟が……私にしか会わないとか私にしか手助け出来ないとか……」

「ふうん」

「ちよつと機嫌が悪くなったかも……」

「えつと……それで……」

「実は私の匣兵器は」

「全部お師匠さんが作ってくれまし」

「そう」

「多分その技術も狙ってます」

「へえ」

「この時代に来て聞いたんですけど」

「匣は自然の中にあるカタチから兵器を作れないかっていうのが元になってるらしいです」

「でも……風竜なんて実在してないですよね」

「そうだね」

「お師匠さんの精神世界に入って聞いてみたら」

「恐竜のDNAと私のDNAを混ぜて作ったみたいですよ」

「正しくはミントに手紙を持たせてただけだね」

「優は風を操れるから作れたんだ」

「そうみたいです」

「ミントが出した竜巻が制限が関係なく」

「操れるのは私のDNAが入ってるからです」

「でもそんな技術ってすごくないですか？」

「そうだね」

「つまりそれぐらい天才なんです……」

「で、私の仲間に天才がいることが」

「多分白蘭さんにばれてます……」

「……わかった」

「まあお師匠さんが捕まることはありませんけどね」

「どういうこと」

「私が女じゃなくて男と

すり替えたことがあるの覚えてますか？」

「覚えてるよ」

「それはウソです

その能力は私の能力ではありません」

「……どういうこと」

「私は自分の体を特異体質にかえることしか出来ません

お師匠さんが私のために能力を使ってくれました」

「……わかった」

「ウソついてすみませんでした」

「……ここは謝るしかない……」

「……その人のことを話したくなかったんだね」

「……はい」

「わかった

今回は許してあげるよ」

「ありがとうございます!!」

助かったー!!!

「えっと……入江君がああの際に

白蘭さんが私に興味があつてどうしても欲しい

つて言った理由だと思えます」

「わかった」

「私のことを殺さず捕獲したいのは

私が考えられるのは以上です……」

「優」

「なんですか？」

「僕がついてるからね」

「はい／＼／＼」

今、考えたら……

チヨイスって雲雀先輩は参加出来ないよね？

……暴れそう

話さないほうが良かった……？

でもどうせばれちゃうと思うし……

……頑張って止めよう

家事

今日でボンゴレ匣の修行は終わりだねー

後は……ちよつと実験したいことがあるから

明日の朝からラルさんにまた協力してもらおうかなー

あれ？誰かこつちのアジトに来るよ

「……………優」

あ、ツナ君だった

こつちに来たつてことは困つたんだね

「なあに？ ツナ君」

わかっているのに聞いちやつたよ

いやー私つて性格が悪いよねー

「その……晩御飯作つて……」

「わかつたー」

今からでいいの？」

「……………うん」

料理が1番困つたみたいだねー

つてか、まだ1日しかたつてないのに……（笑）

ランボ君がいるしここはヴェントだよねー

“なにが食べたいんだ？”

「栄養があるものだったらなんでも……」

具体的なものを言つてほしかつただけ……

つてか、栄養がないものを食べてみたいに聞こえる

“……今までは何を食べていたんだ？”

「「「カップめん」」」

……ひどいね

“わかつた

栄養があつてお腹がいっぱいになるものを作るよ”

「『お願いします』」

うわー！めずらしー！

2回連続でみんなの意見がそろった！（笑）

「お兄ちゃん達昨日はカップめんみたいだったけど……」

今日は栄養あるもの食べてるかなあ……？」

「ツナさん達が本当のことさえ教えてくれたら

とんでいってごはん作るんですけど……」

「まああなた達はツナ達がすぐに

降参すると思っっていたみたいね

私はそう簡単にはいかないと思うけど……

理由は2つね

1つはあなた達が変わってほしくないのよ

秘密を知ればあなた達は

今までのあなた達とは違う人間になるわ

それを恐れているの気になる相手ならなおさらね

気になる人がいつまでも変わらないなんて

男の幻想にすぎないんだけどね

……まあヴェントは違うんだけどね」

「え？」

「正体を教えて

あなた達との関係をかえたいと思ってると思うわ」

「そうなんですか？」

「だったらなんでハル達に正体を教えないんですか？」

「それはあの子の周りがそうさせないのよ」

「？」

「私も……思う……」

本当は正体教えたいけど……

できないくらい……辛いと思う……」

「え？　もしかしてクロームちゃんは
ヴェント君が誰か知ってるの？」

「……うん」

ヴェントはずっと辛かったと思う……

でも未来に来てもつと辛くなつたと思う……」

「……そうね」

いつか心が壊れるんじゃないか心配だわ……」

「……うん」

「話を戻すわよ」

もう1つは意地ね」

……すごい

こんなにも必死に食べる姿を見るのは初めてだ（笑）
作りすぎたと思つたけど問題なかつたなー

〃彼女達のありがたさをわかつたみたいだな〃

「……ああ

こーなつてはじめて気付くよな……

オレ達だけじゃロクに修行できねーつて……」

「本当だよ……」

戦いはもう迫ってるつて言うのに……

ここはやつぱり話すべきなのかも……」

「いかん!!」

京子に何かあつたらどーするのだ!!」

〃でも彼女達は知りたいていう権利を

止める権利は本当は僕達にはないぞ〃

「……そうだね」

「ヴェントー!!」

実は京子の味方で

オレ達に揺さぶりをかけるつもりだなー!!」

えー……なんでそうなるのー……

“僕は事実を言ったただけだぞ

もう僕はどっちの味方もしないから

後は君達で決めてくれ”

だから食器はツナ君達が片付けてねー

まあ使った器具は洗ったから楽と思うけどね

「う……うん……」

ありがとう……美味しかった……」

“それは良かった

じゃあな”

んー……多分そろそろ……

ツナ君が話しちやうんだよねー

私の正体もばれちやうかな？どうなんだろう？

京子ちゃんとハルちゃんは

私に関わった人が死ぬ可能性あるって聞いて

正体知りたいって思うのかな？

それに私はマフィアに狙われるって確定してるし……

うーん……わかんないなー

愛情表現

ラルさんに協力してもらって試したけど……

体力が減ると死ぬ気の炎の量が減るよ

やっぱり思ってた通りだったねー

原作で炎が吸われるとスタミナ切れって言ってたからね

いろいろ実験したけど……多分大丈夫と思う……

流石に炎を調節するのは難しかったけど……

まあ終わった後に昼寝するはめになったけどねー

さてと……リボン君に話出来るかなー？

作戦室に来たけどみんな集まってるっぽい

ランボ君はいないか……

まあ急に来たら困るからフードは脱がないけどね

「あれ？」

デイーノさんどうしたんですか？」

雲雀先輩の修行はいいの？」

「よお優

ツナ達の修行の進み具合をチェックしに来た」

「なるほどー」

……よく雲雀先輩から逃げれたね

やっぱりデイーノさんは部下がいれば強いよね

「優はほとんど完璧ってツナに聞いたぜ」

「はい

もう大丈夫ですよー

みんなはどうですか？」

「ツナがついに匣あけれるみたいだぜ」

えっと……つまり

京子ちゃんとハルちゃんに話したんだね

ビアンキさんがうまくやってくれたみたいだ♪

「良かったね ツナ君♪」

「でもまだやってみないとわからないけど……」

「ラン♪ラン♪ラン♪……」

「あー白蘭さん登場だねー
本当にふざけてるよねー」

「6日後お昼の12時に並盛神社に集合」

「並盛で戦うの……!?!」

「んーどーだろーね」

「とりあえず必要な準備して仲間は全員つれてきてね
少なくとも過去からきたお友達は全員だよ」

「あーやつぱりそうなるよね」

「そこに意味があるんじゃないか」

「みんなで来ないと君達は失格だからね」

「もちろんヴェント君も来てね♪」

「僕の守護者だからね」

「僕は沢田綱吉の守護者だ」

「じゃあ修行頑張ってるねー♪」

「……無視された」

「回線に入り込んだってことは」

「私の情報は大丈夫だったのかなあ？」

「……全部神様がやってくれてそう……」

「私の情報を盗もうとすればデータが消えるとかね（笑）」

「うん。やつぱり神様は凄いね」

「セキリユティがザルなんだあ」

「アマチュア共があ」

「あ、10年後のスクアアール口さんだー」

「さらにかっこよくなってますねー」

「それにしても会う人みんなかっこよくなってるー」

「すごいよねー」

「まあマグロを持つてるのは謎だけど（笑）」

「少しもらってお寿司にしようかなー」

雲雀先輩お寿司も好きだしね

まあ好きなネタはマグロじゃないけどね
というか……誰がさばくの？（笑）

うん……後で私がさばいてあげよう……
風の斬撃を使えば全く問題ないしね

「説明しろお!!」

あ、食べることにしか考えてなかった（笑）

「スクアアロさんの生徒に」

全部話したので聞いてください♪」

「え……生徒……?」

「もしかしてよ……」

オレの修行の家庭教師って……」

ガツ……

あーボコボコにしちゃったよ……

「スクアアロさん」

腹が立ったのはわかりますけどー

やりすぎはダメですよー?」

「まったく殺してやりてえぜ」

このカスはずかかっていくぞお」

うわー行動はやいねー

山本君を拉致する気だよ（笑）

ってか、ベルさんに拉致を教えたのは

スクアアロさんじゃないよね……?」

「ええ!? そんなこと!」

「ここはスクアアロにまかせるんだ

山本のことはオレ達よりわかっている」

「そうそうー

「これでも愛情表現だよー」

「あゝあゝ!?!」

凄く殺気がとんできたよ

今回は誰の後ろに隠れるべき?」

やっぱりデイーノさんかなー

「ぶっ!!」

あれ？デイーノさんがツボに入ってた（笑）

「チッー」

舌打ちして出て行ったなー

いやー助かった

「これは愛情表現なのか？」

デイーノさんに笑いながら質問されたよ

「いいますよー

自分のことじゃないのに

負けたって聞いて腹が立ってー

殴ったりして殺したいって思っても

鍛えたくて遠いのにわざわざ来たんですから♪

わかりにくい愛情表現ですよ」

「それもそうだな」

「でも……メチャクチャだ……

あんな暴力的なやり方……」

やっぱりツナ君には話さなくて正解だったねー

「沢田」

バキ

京子ちゃんのお兄ちゃんがツナ君を殴っちゃったよ

次は獄寺君が暴れてる……（笑）

まあそうだよ

ツナ君が殴られたら獄寺君は怒るよねー

「さて、私が行ってくるよ

京子ちゃんのお兄ちゃんは私を殴りますかー？」

「……やめておく」

殴ったら後が怖いよねー

もし正体知ったら京子ちゃんから

ものすごく嫌われそうだしー（笑）

「そうですかー

「じゃあ……いつてきますねー」

「ゆ……優!!」

「どうしたの？ ツナ君」

「殴られて痛いのに話しかけるなんて珍しいよね？」

「1人で……大丈夫……？」

「……ツナ君は優しいなー」

「そうだねー」

「怖いけどみんながいるから私は大丈夫だよ？」

「……わかった」

「うん」

「いつてきますー!」

「いつてらっしゃい」

「……何があっても私が帰ってきたら」

「おかえりって言うってくれるんだらうなー」

「やっぱりツナ君は大空だよねー」

複雑 1

あ、ちょうど良かったー

2人一緒にいるねー

んーハルちゃんは泣いたっぽいね

だって目が赤いもん

〓どうも〓

「あ……ヴェント君……」

〓今、いけるか？〓

「うん」

〓場所をかえるぞ〓

ここは誰でも入って来れるからねー

ランボ君がきたらまずいもん

〓あーこの前君達が盗み聞きした時に言ってた

僕が無理矢理に白蘭の守護者にされて

巻き込まれてる状況の意味はわかったか？〓

「うん」

〓そうか〓

これはチョイスに関わることだから説明したんだね

つまり私が言いにくい内容だけが残ってるのか……

まあ私が言わないでって言ったんだけどね

「ヴェント君 フードとらないの？」

「そうですよー

ハル達はもう全部知ったんですよ？」

〓悪い……〓

僕のはもつと複雑だ〓

「え……」

あーやばい

話す覚悟をしてきたつもりなのに

2人の反応を見ると逃げたくなってきたよ……

……気丈に振舞わないと2人が困るんだ

頑張らないと……

〃……僕のことを話すから

それでフードをとってほしいか決めてくれ

君達が決めたことに僕は反対しないよ〃

「うん」

〃あー……ただし……

2人の意見を一致させてくれ〃

「うん」

〃まず僕はかなり縛られている状況だ〃

「どういう意味ですか？」

〃話せないことがあるんだ……

もし間違つて話をすれば僕に関わった人が全員死ぬ〃

2人とも固まったな……

……そうだよね……怖いよね

〃……心配するな

僕はそんなへまはしない 絶対に〃

大丈夫……

言いそうになったら神様が止めてくれる

それにもうすぐ私の知ってる範囲が終わるし

もうほとんど覚えてないから問題ない……

「……うん」

〃つまり……どうして？と

質問されても話せないことがあるから

そのことは話せないとしか言えないんだ

それは勘弁してくれ〃

2人ともうなずいたね……

〃僕がへましないって言っても

僕とこれ以上関わりたくないし
話したくもないなら言ってくれ

これは君達に選ぶ権利がある

あー全部僕が悪いから気に病む必要はないからな

あ……2人とも悲しそうな顔した……

〃……話を続けるか……?〃

……うなずいた

〃あー先に僕の能力話すの忘れてた

「能力?」

んーそこにある本を浮かべよう

フワツ

「はひー！ 超能力です!!」

〃違うぞ

僕は風を操れるんだ

風で本を浮かせたただけだよ

「すごいねー!」

「ヴェント君すごいですー!」

2人とも無理に話しかけてくれてるのかなあ……

それとも普通に話してくれてるのかなあ……

もうわからなくなってきた……

私の願望が強すぎる……

〃……前に笹川京子を送り迎えた時に

誰にも会わなかっただろ?〃

「そういえば……」

〃僕が風を操って人の気配を探って

誰にも会わないように道を探したんだ

「はひー！ そんなこともできるんですかー」

〃ああ

君達が盗み聞きしてたのがわかったのもそれだ

「そうだったんだね」

〃なんでこの能力が使えるようになったのも

話せないから聞かないでくれ”

「うん」

“次は僕を探してる人が多いって言っただろ？”

「そうだね」

何度か聞いたよ」

“僕を探してるのはマファイアだ”

「え」

“この時代ではリングの力で戦ってるんだが……”

ボワツ

「はひー！ 炎が出ました!!」

“この炎で戦ってていて

いろいろ種類があるんだが……”

僕は世界で唯一この色の炎を出せる”

「ヴェント君ってすごいんだね」

“みたいだよ

だが……そのせいでマファイアが僕を探している”

「どういうことですか？」

“つまりかなりレアなんだ

どういう体の構造になつてるとか

知りたい奴がいっぱいいるってことだ”

「それって……」

“……そう

僕を捕まえて人体実験でもしたいんだらうな”

あ、2人とも顔が真っ青になった……”

“心配するな

僕の正体を知ってるのは

信用している人にしか話してない

それに僕の正体は過去の世界でも

ボンゴレの機密になつていてるぐらいだ”

「ツナさんのところですよね」

“そうだよ

多分この時代では

かなりのトップシークレットだよ”

「よかった……」

あ……2人ともほっとした……

”まあ機密になった理由は僕のがままだが……

それは正体をばらした場合に話すよ”

「うん……?」

複雑 2

「あー話を戻すぞ

僕の正体を知るとかなり危険な目にあう

というのはそういう理由だったんだ

君達がもし知っているとわかったら

君達を脅して正体を聞いたり人質にして

僕を捕まえようとするだろうからな……”

2人とも黙ったな……”

「僕の正体を知ってる人は

自分の身は自分の身で守れるぐらい強い人で

覚悟が出来てる人ばかりだよ

正直君達が人質にされたら

僕は喜んで人体実験でもするよ”

「そ……そんな……”

「悪い……

怖がらせたいわけじゃなかったんだが……

それぐらい君達を大事に思ってると思ってくれ”

「うん……”

「この時代でこのことが起きてるってことは……

平和な過去に戻っても必ず僕は遠くない未来に

マフィアに狙われるのは確定したんだ”

「なんか2人とも泣きそう……

目に涙がたまってるよ……

「後……僕の体は特異体質なんだ

多分それも狙われてる理由だと思う”

「……特異体質……?」

「ああ

僕は自分の体力を人にあげれるんだ

他にも幻覚を使う人もいるんだが……

僕には全くきかないんだ”

「そうなんだ……」

「まあマフィアに狙われてると言っても僕の場合は生け捕りだからな

この時代に来てヴェントで外に出たけどなんとかなったから心配するな」

あ……また悲しそうな顔した……

生け捕りって言ったのはまずかった……

「悪い……」

もう少し言葉を選べば良かったな……」

「ううん……」

ふう……落ち着こう……

他に何かあったかな……

「あの……」

「なんだ？」

「ヴェント君は……」

フード取った姿で私達と会ったことがあるの……？」

「……ある」

「はひ!? そうなんですか!？」

「そうだぞ」

フード取った姿ではこの時代でも

普通の一般人として生きてるよ」

いや……普通ではないか……

雲雀先輩の部下だもんね

他の人達よりはかなり優遇されてると思うけど……

「そっか……」

「だけど今

僕はフードをとって外に出れないんだ」

「どうしてですか？」

「入江正一という仲間が白蘭に嘘の報告をしてくれて

この時代に来ていないことになっている

僕の情報は高値で売れるんだ

もし過去から来たりリストが流れた時に
フードをとって表の顔で外を歩いたら
誰がヴェントってわかり正体がばれるからな……
外にミルフィオーレがいなくても
僕はフードをとって外には出れないんだ”

「うん……」

”つまり……僕の正体を知れば
必ずフードをぶつてるときはヴェントって呼ばないと
間違つて本名で呼んでしまつたら僕は終わりだ”

2人とも本当に泣きそうだ……

”守護者の中にランボもいるが彼はまだ小さいから……
間違つて本名を呼ばれたらまずいから
僕は彼の前でフードかぶつてるときは
必ずヴェントとして接している”

「うん……」

”正直笹川了平も心配だけどな……
ヴェントとして行動している時に
本名で呼びそうだからな……”

「お兄ちゃん苦手だもんね……」

”そうだな

でも僕は彼を信用したよ”

「そっか……」

”まあ間違う可能性が低いと思うよ”

「え？」

”彼は約束をやぶらないだろ？”

「うん」

それに過去の時代の時でもヴェントって呼ばないと
学校通えなくなるってわかつてるし

京子ちゃんが悲しむから絶対気をつけると思うもん

”……僕は君達には謝ることばかりだ

僕に会ったせいで君達を危険にさらしている”

「……ヴェント君に会わなかったら

私は危ない目にあつてたよ……?」

「そうです……」

京子ちゃんの命の恩人にはかわりません……」

〃……あの時は特殊な状況だった

それに僕は君達に話すべき内容なのにずっと話さなかった
君達のことを本当に考えていれば話をするべきだし

会わないように心がけるべきだ

……僕は最低な奴だよ

彼らが許してくれるから僕はここにいる

だけど周りは僕を許さないと思う

それを知っていて知らないフリをしているんだ

……謝って許されることじゃないよな……

でも僕は謝るしか出来ないんだ

……黙っていてすまなかつた〃

頭をさげよう……

だって本当に最低だもん……

〃……多分……もうないか……

もしフードをとって正体を知りたいなら

必ず約束してほしいことがある〃

……2人ともうなずいたね

〃フードかぶってるときは

必ずヴェントって呼ぶことと

もし君達に怪しい奴が僕のことを

聞いてきたら必ず僕の正体を話すこと〃

「でも……話をしたら……」

「そうですー!」

〃話をしてもまだなんとかなる可能性が残ってる

だが……もし君達が知ってるのに

嘘をついてるのを見破られた時の方が僕は怖いんだ

これを約束できて正体を知りたいんだつたら僕は教えるよ

あー僕が縛られてるってことも忘れないでくれよ
僕に関わったら人が死ぬってことを……

正直逆の立場だったら

僕はその人と関わりたいと思わないからな

それに正体知らずにそのまま生活したい

という気持ちもわかるからな……

今、決めれなかったらまた今度でもいいよ”

「……………」

んー……2人とも黙ったなー……

私ってやつぱり複雑だ……

複雑 3

私がいれば相談しにくいか……

出て行くべきかも……

「京子ちゃん……」

「ハルちゃん……」

あ、決めたかも……

「……知りたいです」

知りたいんだ……

“……そうか

知りたい理由を聞いてもいいか？”

「私と会ったことあるんだよね……」

これから何も知らずに……

ヴェント君だけ辛い思いさせたくないよ……」

「ハルも……」一緒に苦しみたいです……」

2人とも優しいなあ……

“……わかった

あーあんまり驚かないでくれよ？”

「うん」

フードを取ろうと思っただけど……手が震えてる……

……大丈夫……大丈夫……

よし……取ろう！

パサッ

「え……」

「ごめんね……」

京子ちゃん、ハルちゃん今まで黙ってて……」

あ……2人とも泣いちゃった……

「泣かせるつもりはなかったんだけどねー

困ったなー……」

「なんで……優ちゃんが……」

「なんでだろうねー

まあ心当たりあるけどそれは言えないよ」
本当にどうしよう……

泣かせるつもりじゃなかったんだけど……

「最近やっとな君達に縛られてるって

わかってもらったばっかりなのにねー

この時代に来たらもつと大変な環境でさー

私もさすがにびっくりしたよー（笑）」

2人とも泣いてて返事がない……

「んーそんなに心配しなくても

私は簡単には捕まらないよー

未来の私は普通に過ごせてたしー」

困ったなー……

「優ちゃんは……なんで……

笑っていられるの……?」

「え? わかんない?」

「うん……」

「みんながいるからだよ

私はみんなに支えられてるから笑っていられるの

正直しばらくされた時に姿を消そうとしたけど

許さない人がいたんだよねー

しばらく書類の山を渡されて監禁状態だったよ（笑）」

まあ私が書類するって言ったのもあるけど……

あの量はおかしかったもん……

でも雲雀先輩は本当に凄いやねー

あの時に私を逃がしたら多分何も話さず

どこかへ消えると思っただんだと思う……

原作を知らない雲雀先輩からしたら

私が姿を消してもおかしくない状況だった……

雲雀先輩が止めなかったら

もしかしたらみんなが危ない時しか

現れなかったかも知れないし……

「その後にはツナ君達に

受け入れられたのもおおきいかな？

縛られてることをツナ君達が知って……

避けられたらどうしようかな

って思ったらすすごく怖かったしねー」

ツナ君達には感謝しきれないよねー

「あ、そうそうさっき言ってたわがままはね

私はこういう一般生徒？と

一緒に学校通うのは本当はダメなんだ」

「え……？」

ゴソゴソ

「この袋におしやぶりが入ってるね

これをもってる人はマフィアって決まってるんだ

でも学校を通いたいっていう私のわがままでもう1人の自分を作ったんだ

みんなに協力してもらって学校に通えているんだ」

「……そうなんだ……」

「京子ちゃんのお兄ちゃんが

私の名前を間違えたら可能性が低いのは

名前を間違えたら学校通えなくなるでしょ？」

「うん……」

「私が学校通えなくと

京子ちゃんが悲しむから苦手だけど

頑張つてヴェントって呼んでくれてるんだ

今まで1度も間違ったことがないんだよ？」

「……お兄ちゃん……」

「あ……また泣いちゃった……」

「ハ……ハル達が……この時代に来て……」

辛い環境って言って心配してくれてたけど……

優ちゃんの方が……

もつと……辛いじゃないですかー!!」

「……」

「んー……私も最初この時代に来た時に
考える時間をたくさんもらったよ？」

しばらく顔を出さなかったでしょ？

あれは考える時間をもらってたんだよ」

あの時リボン君が雲雀先輩に頼むまで

こつちに来なかつたのはツナ君のこともあるけど……

多分私にも時間を与えてたと思う……

いろいろ気を使ってくれたんだと思うんだよね

いやー本当に感謝しきれないよねー

「それに泣きたい時は

受け止めてくれる人がいるからねー

だから大丈夫だよ？」

うーん……本当に困ったな……

泣いて返事がない……

女の子を泣いた時はどうしたらいいかわからない

「京子ちゃんとハルちゃんにも何度も救われたよ？」

ただ話がしたくて用もないのに帰りによつたりして……

ダメってわかってたんだけどねー……

本当にゴメン……」

……泣いてて返事が出来ないからか……

必死に首に振ってくれてる……

「……2人とも私を許さなくてもいい

でもまた一緒に遊びに行きたいと

思うことだけは許してほしい」

「何言ってるんですかー!!」

また遊びに行きます!!」

「そうだよ!!」

「……………ありがとう」

あ……………さらに泣いちゃったよ……………

このままちよつと待とうかな……………

2人が泣いて困ったけど……………

泣いてくれたことも嬉しいんだ……

「落ち着いた？」

「……………うん」

「んー……………無事に過去に戻って

また一緒に遊びに行こうね？」

「約束ですよー!!」

「そうだね!!」

「うん♪」

「じゃあツナ君達のサポートをお願いするね？」

「ハル達に任せてください!!」

「お願いするねー

あー！ そうそうー」

「どうしたの？」

「私の匣兵器を紹介しとくよー」

「はひー！ なんですかー？」

カチッ

ガルッ♪

「かわいいね！」

「キュートです！」

「でしょ♪」

「ミントって言うんだー」

よしよしー

ガルルル♪

「恐竜ですか？」

「一応そうだよー」

「一応？」

「えつと……正しく言うと風竜だよ」

「風の竜なの？」

「そうだよー」

「口から竜巻つきだしたりするよー」

「はひー！ それはすごいです……」

「でしょー」

「この子もこれからよろしくね♪」

ガルツ♪

「うん」

甘え

んー……近くに座ろうかな……

「どうしたの？」

……やっぱり気になるみたい……

いつもの距離に戻ろう

ガシッ

あれ？腕を掴まれたよ

「嫌じゃない

何かあったと思ったただけだよ」

そっか……

全部気付かれちゃってるんだ……

「今日……頑張りました」

「？」

「すつごく大事な友達に……」

あ、女の子の友達なんですけどね

私が縛られてるとか私の未来の話をして

正体聞きたいかって聞いたなら教えてほしい

って……なので正体をばらしました」

「そう」

「少し怖かったですけどね」

ぐいっ

「うわっ!？」

掴んだままだった腕を引っ張られたよ!?

ぎゅ

落ち着く……

雲雀先輩はいつもあつたかいなー……

「私が関わった人が死ぬっていう内容は

正体をばらせば全然気にしなくなったみたいです」

「そう」

「でもいっぱい泣かれちゃいました

なんで優ちやんなのって感じで……」

「……そう」

「はじめて女の子を泣かして少し困りました
でも……凄く嬉しかった……」

「どうして？」

「私のために泣いてくれたことが……」

「……そう」

「この時代に来て

10年後の雲雀先輩に説明された時

よくわかってなかったんですよ

外に出てミルフィオーレと会った時……」

ぎゅ

……さらに密着した……

「雲雀先輩これ以上力を入れると痛いですよー」

「…………」

弱めてくれないや……

「知らないほうがおかしいって言われました」

「……そう」

「私に興味があったと思うんですけど……

10年後の雲雀先輩がすぐ来て

あんまりいいリング持ってないのを

知ってるのに任せてしまいました」

本当に雲雀先輩のことを思えば

私が相手をするべきだったのにねー

甘えちゃったんだよねー

「それは問題ないよ」

「ふふ そうですね」

「そうだよ」

「まあその時の雲雀先輩の機嫌が悪かったのは

風紀が乱れてて怒ってるのもあったんですけど

私に余計なことを聞かせたくなかったのかな

「って今は思います」

「……そう」

「はい 私に説明した時は

かなり優しい言葉で言ってくれましたよー

他のマフィアもヴェントを探ってるって

言い方をしてくれましたしね

狙ってるって言ったほうが正しいのに……」

「……」

「雲雀先輩らしくないと後で気付きましたよ

普段は正確な情報を伝えるのに……」

「……そうだね」

「私が風早優のままです外に出ようとした時も

さりげなく出ないように誘導しましたよ

来たときは本当にわかってなかったんですよ

私ってバカですよねー

雲雀先輩はディーノさんに教えてもらって

すぐわかったでしょ？」

「……」

「私が全部気付いたのは4日後ですよー

能天気すぎですよねー」

「……優」

「ごめんなさい……」

もう少し……甘えさせてくださいあい……」

「わかった」

ふう……泣いて落ち着いた……

「もう大丈夫です

「……」

謝ったらダメかも……

「ありがとうございます」

「問題ないよ」

あ……離れた……

「雲雀先輩」

「なに」

「いつも守ってくれてありがとうございます」

すっごく助かってます」

「僕がしたいんだ」

い、今のは嬉しすぎる……／＼／

もう少し甘えてもいいかな……？

「あの……／＼／」

「なに」

「今日……手をつないで……」

一緒に寝てもいいですか……？／＼／

あ……笑った／＼／

「いいよ」

良かった……

ふわっ

「へ？／＼／」

これってお姫様抱っこじゃない？

「寝るよ」

「あ、はい／＼／」

ござっ

私のベットまで運んでくれたなー

いつも思うけど重くないのかなー？

まあいいか……

あれ……？なんか変……？

「雲雀先輩？」

……なんか体勢が変だよ
私の上に雲雀先輩がまたがつてる？

それにもものすごく真剣に私の顔を見てるし……
……私……何かした!?

んー特に何もしてないよね？

あーもしかして……

「私の顔に何かついてます？」

「……はあ……」

え!?溜息!?

「あーそっか!」

目がはれてて変な顔になってますよねー

ごめんなさい」

そうだよねー

気になるに決まってるよねー

「……………寝るよ」

あれ?違うかったのかな?

返事をしなかったけど……

まあいつも通りの位置に寝転んだし寝るんだね

「あ、はい」

「手……貸しなよ」

えへへ／／／

嬉しいなー♪

「おやすみ」

「おやすみなさい」

チヨイスまで 1

『優』

ん？神様どうしたの？

『頼まれたのが出来たぞ』

え!?!はいね!!

『念のためだ』

チヨイスの後どうなるかわからないからな……』

それもそうだね……

頼んだ中でもあれだけは先にほしいかも……

『ああ』

それに今日からするんだろ?』

あ、ばれちやつたー

『俺を誰だと思ってる』

まあ優は使わないと思うけどな』

それもばれちやつたねー

だって切り札は隠しておくものだもん

『そうだな』

まあ言われたのは全部作ったからな』

ありがとうー♪

あ……

『なんだ?』

……いや……今度でいいよ

『俺のことは気にするな』

……ごめんなさい

『また作ってほしいものがあるのか?』

そうなんだよね……

未来から帰ってきた時のために……

『わかった』

えつと……まず……

これと同じチエーンを……

『あー確かに』

優の時にリングの反応されると困るよな』

そうなんだよねー

『まずって言ったから他にもあるんだろ?』

うん

これと同じケイタイと……

出来れば家自体をリングの炎に

反応出来ないようにしてほしいかな……

『ケイタイはわかるが……

チエーンがあれば家でも問題ないだろ?』

その……ミント……

『なるほどな』

ミントを出したいのか』

えへへ

『確かにその気持ちわかるもんな』

いいぞー準備しておくぞ』

ほんとにありがとうー

やったー

ミントと家で遊ぼうー♪

『ああ』

じゃあ気をつけろよ』

大丈夫だってー

ついでに入江君のところにも寄るかなあ

『そうだな』

気になるしな』

うん

まあ行ってくるねー

『ああ』

ツナ君も頑張ってるねー

ディーノさんが見てくるてるみたいだし

こっそりリボン君に言おうかな？

「リボン君ー」

「ちやおツス

どうしたんだ？」

「今から外に出るね」

「どこに行くんだ？」

「ちよつと入江君にどうしても

聞きたいことがあってー」

「無線を使えばいいだろ」

「んー……出来れば

会って聞きたいって感じ？」

「だが……」

「あら……かなり心配してそうだね

「まあ入江君はついでなんだー」

「どういうことだ？」

「白蘭さんが集合場所を

並盛神社にしちやっただからさー……」

「……なるほど」

流石リボン君だ

「これだけでわかるのが凄いよねー

「私の修行は昨日で終わったし

今日から毎日並盛から離れた場所での出役したら

なんとかなると思うんだよね」

「……わかったぞ」

「暗くなったらやめるつもりだよ

遅くなればなるほど危険が高そうだからね」

「ああ」

「帰ってきたらちゃんと顔を出すよ

心配しないでね

「じゃあねー」

「気をつけるよ」

おー入江君を発見！

「どうしたの？ 風早さん」

「えっと……盗聴の心配は……」

「大丈夫だよ」

「そっかー」

入江君に聞きたいことがあつて……

忙しいところ悪いんだけど……」

「スパナちよつと離れるよ」

「ん」

「どうしたの？」

「あ……出来れば2人で……」

「わかった」

なるほど……

これはみんなに言わなくていいね

変に勘違いしそう……

片方は絶対わざとだしね

まあもう片方は白蘭さんのせいだけだね

「風早さん……大丈夫……？」

「うん」

大丈夫だよ？」

納得できてスッキリしたぐらいだよ

「……そう」

んー……入江君に気にすることないよ
って言っても……余計気にしそうだしー

まあしようがないといえましょうがないけど……

「未来の私は頑張って戦ってる

ってわかって良かったよ」

「……うん」

「邪魔してごめんね

そろそろ戻るよー」

「……わかった」

「あ、白蘭さんの能力は私が説明していいの？」

「……いや、僕がする

これは僕が話さないといけない……」

……私が話せば白蘭さんを倒した後

入江君が進めなくなるのかもしれない……

「わかったー

話すのが大変だったから助かるよー♪」

「……うん」

「じゃあねー」

ささてー頑張って動きまわることにするかー

チヨイスまで 2

はぁ……疲れた……

リボン君に会いに行かないと……

「大丈夫か？」

「あれ？ デイノさん？」

大丈夫って何かあったんですか？」

「……リボンに聞いてるよ」

みんなには黙っててほしいと頼んだけど

デイノさんには言ってたのか……

「……そうですか」

毎日出没してるんで日に日に数が増えて大変です」

「……そうか」

もう終わりだからな」

「はい！」

雲雀先輩の修行はどうなってます？」

「もう大丈夫だ」

でもまだ学校にいると思うぜ」

あれ？

原作では雲雀先輩はギリギリまで来なかったよね？

だからずつと修行してたと思っただけ……

違っただけかなあ……

「流石雲雀先輩ですねー」

ギリギリまでかかると思っただけ……」

「オレもそう思っただけだな」

まあ優の影響だろ」

「へ？ 私ですか？」

「ああ」

優の修行はもう完璧だし

今回の戦いは優が関わってるしな」

「片方は……嬉しいですけど……／／／

私の修行が完璧って関係あるんですか？」

「……わかつてやれよ」

「へ？」

「優を守りたいのに」

優より弱かったら意味がないだろ？」

あ……なるほど……／＼／＼

こっちも嬉しい／＼／

って、ますますチョイスの時に止めにくい!!

本当にどうしよう……

「オレからリボーンに言っておくから

優は恭弥のアジトに戻るか？」

「へ？」

「疲れてる顔してるぜ？」

「え!? 顔に出ています!？」

「ああ」

うそー

見破られても雲雀先輩だけと思っただけ……

あ……そっか……

デイーノさんは10年後だもんね

多分レアってばれてからヴェントの活動停止まで

時々心配で顔を見に来てそう……

うん……デイーノさんだったらありえそうだね

付き合いが長いからわかるんだらうねー

「それに今から恭弥のご飯も作るんだろ？」

明日のために出来るだけ休め な？」

うー……デイーノさんは優しすぎる!!

「はい

じゃあお言葉に甘えます

リボーン君に伝言をお願いします」

「ああ」

あ、帰ってきたー

「おかえりなさい」

「ただいま」

なんか……最近……

これはこれで恥ずかしい気がしてきた……（笑）

「雲雀先輩……」

「なに」

「……少しだけ甘えてもいいですか……？」

グイッ

ぎゅ

だからなんで何も言っていないのにわかるのかなあ……

「ありがとうございます……／＼／＼／＼」

泣きたいわけじゃないんですけど……

安心したかったんです……／＼／＼」

追いかけてられると不安になってくるんだよね……

思ってたより疲れてたのかも……

「問題ないよ」

……ありがとう

離してもらおう……

「もう……大丈夫です／＼／＼」

すっごく落ち着いた……

落ち着きすぎて眠くなっちゃたしね……

あれ？離してもらったけど真剣に私の顔を見てない？

「優」

「なんですか？」

「……僕の前以外で泣かないでね」

……

「僕を無視するなんていい度胸だね」

「え!？」

あ！ 違います!!!!

無視したわけじゃなくて……」

「なに」

「……未来の雲雀先輩にも

同じこと言われたのでびっくりしました……」

「……そう」

「その時にも言ったんですけど……」

私は雲雀先輩の前以外で

多分もう泣くことができませんよ」

「わかった」

「はい♪ あ……」

しまった!!

また声を出しちやっただ!!

「なに」

「……なんでもないですよ」

「はやくいいなよ」

「ちよつと……恥ずかしくて……」

勘弁してほしい……

「優」

……逃がしてくれない

10年後の雲雀先輩は無理に聞かなかったのになー

うー!しょうがない!

「未来の雲雀先輩とその話した時にですね……」

ちよつと昔のことを思い出して……」

「昔?」

「えつとですね……ツナ君に昔……」

雲雀先輩が怖くないかって聞かれたんですよ」

「ふうん」

少し機嫌が悪くなってる……?」

気のせいと思いたい……」

「その時に思ったのが……」

殴られる怖さじゃないけど怖いと思いました」

「……どういふこと」

「えっと……その……／＼／＼」

「はやくいいなよ」

「嫌われたら怖いっていう意味です……／＼／＼」

「そう」

うーこうなったらやけだ!!

全部言っつてやるー!!

「……つまり……その時から好きだった……

っつて思いました……／＼／＼」

うわー笑った……／＼／＼

「その時は自分の気持ちに

全然気付いてなかったんですけどね／＼／＼」

付き合おうと決まるまで……

全く気付いてなかったもんね……

「いつ聞かれたの」

「雲雀先輩がリボン君に初めて会った日です」

「そう」

「はい……／＼／＼」

……聞いてもいいのかな

ずっと聞いてみたかったんだよねー

「あの……」

「なに」

「雲雀先輩はいつ……」

「教えてあげないよ」

「えー教えるほしいですー」

「ヤダ」

うー……不公平だ……

でも雲雀先輩が言ったから付き合うことになったから

自覚したのは私より早かったんだよね？

好きになったのは私の方が早いと思うけど……

「……いつか教えてくれますか？」

「さあね」

教えてほしいよー

「雲雀先輩がいじわるです……」

あ……笑った……／／／

チヨイス 1

あーついに来てしまった……

今日はチヨイスの日だよ……

どうやって雲雀先輩をとめよう（笑）

いい案が全く浮かばなかった……

雲雀先輩は朝から出かけたから

多分直接来るんだけどー

私はどうしようかなー

みんなと一緒にウロウロしないほうがいいのは

当たり前だけど……

今日もしたほうがいいかな？

ちようどツナ君発見♪

「ツナ君ー」

「優？ どうしたの？」

「あ、スーツ似合ってるねー」

うん。すごくカッコイイね！

「そ……そう……？」

でも……ネクタイの結び方が……

わからないんだ……」

あ、それでしてなかったのか……

堅苦しいからしてないと思ってたよ

「貸して？」

「え？ あ……うん？」

シユルルル

よしー！完璧♪

さらにカッコイイね！

「優ってネクタイ結べるんだ……」

「この時代に来て覚えたんだよー」

「え!？」

「10年後の雲雀先輩がスーツきる時に

つけてって言われて……」

「そ、そっか……」

「うん……／＼／＼」

……自分で結構恥ずかしいこと言ったかも……

「あ……そうそう」

ツナ君に用事あつて来たんだ」

「どうしたの？」

「私は別ルートで向かうから後で合流するね」

「え!？」

「他のマフィアが来たら困るからねー」

もしつけられても撒いてから

ちゃんと合流するよ?」

まあ正しくは朝から違う場所に出発すれば

並盛は大丈夫だと思うっていう意味だけどね

「……大丈夫……?」

オレも一緒に……」

「大丈夫だよー」

心配しないで?

それにツナ君がいなかったら

京子ちゃん達が不安になっちゃうよ?」

「……わ……わかった」

「お願いねー」

まあ念のためにするだけだから心配しないでね?」

「……うん」

「じゃあまた後でねー」

「……うん」

心配してそう…… (笑)

「今日もするの?」

あ、リボン君だ

「そうだよー」

念には念をだからね」

「かなり増えてるんだろ？」

「そうだねー」

ニセ情報も流してくれてるみたいだけど

やっぱり私が出没したほうが効果あるからね」

「……そうだな」

「うん」

まあ今まで大丈夫だったから

今日も大丈夫だよ

心配しないでね」

「ああ

待ってるぞ」

「うん

じゃ、行つてきますー」

んーそろそろ終わった方がいいかな？

戻る時間を考えないといけないしねー

この人たちを撒いてさっさと向かおう！

思ったより時間かかつちやったなー

あらー白蘭さんの顔が見える……（笑）

あれってなかなかの趣味だよね（笑）

「あれれ？」

全員連れて来いって言ったのに揃ってないね

まっいいか

本番で困るのは君自身だからね

……僕の守護者のヴェント君は？」

噂をすればっていうタイミングだよ

まあ白蘭さんの守護者じゃないけどね
スタツ

空から登場してみた（笑）

「ヴェント!!」

「ヴェントおせーぞー!」

“あー悪い

少ししつこくて撒くのに

思ったより時間がかかったんだ”

あ……みんな黙った……（笑）

「ヴェント君が来てくれたならいいよ」

……本当に興味あるんだねー

んー……原作通り進んでるのかな？

山が吹っ飛んだしー

あれは幻覚じゃないね

ひどいよねー

つてか、チケットの炎出すのにも

私は参加しちやいけないのか……

まあいいか……

原作通りになると思うし普通に足りるからね

あ、山本君と雲雀先輩来た♪

うわー本当に普通に足りたなー

「てめーら

おせーぞー!」

「わりーわりー」

「僕は個人とヴェントのために来てるんだ

君達は関係ないよ」

“僕のためもあるのか……

ありがとう”

「問題ないよ」

やっぱり原作変わってる気がする……（笑）

チヨイス 2

スタツ

無事着地♪

「大丈夫かい？」

……こんなことまで心配しなくても……

あーそっか

ここは敵陣だからかな？

「僕は大丈夫だよ」

「そう」

……やばい

本気で止めれるかわからない……

「やっ♪」

ようこそチヨイス会場へ」

やっぱりここだよねー

高層ビル群だよね

「何度も会ってるような気がするけど

僕と会うのははじめてかい？ 綱吉君」

でたー

白蘭さんと真6吊花！

「ヴェント君はやくこっちに来なよ」

「断る」

「ヴェント君の分の

おそろいの戦闘服用意してるんだよ♪」

まじか……いらないよ……

「必要ない」

「しようがないね

チヨイスに勝つまで待つよ

話を戻そうか

ここで戦闘するからね

いいロケーションだと思わないかい？」

あーここで原作戻るのねー

それにしても白蘭さんとの絡みがめんどくさい(笑)
それにしてもー

どんどん雲雀先輩の機嫌が悪くなっていくー
早く戦いたくて機嫌が悪いのと……

白蘭さんが私に絡むことにイライラしてるっぽい
あーリングに炎ともしちゃったよ

「すぐにはじめようよ」

「だーから ダメなんだってひっぱーりチャン♪
次のチョイスをはじめなきゃ」

これが問題だよね……

「チョイス」

……だよねー

原作通りだよねー

「あああれは無属性

つまりリングを持たぬものを示しているんだ
君達 “2” だから二名選出しなくちゃならない」

「それで全員連れて来いってわけだったんだな」

“これ以上近づくな!”

京子ちゃんとハルちゃんに近づくとは
どういうこと!?

急いで間に入らなければ!!

「え!?

ヴェントどうしたの!?”

“僕の後ろにいる”

「う……うん」

「あ!! いつのまにー!」

ツナ君達は気付くのが遅すぎー

まあ私は気配を読むのが得意だからしょうがないか……
“お前はなんだ”

「僕チン……デイジー……後ろの子たちに……」

これ……あげる……」

枯れた花とか悪趣味すぎる……」

“……本気で言ってるのか？”

「ん デイジー」

ヴェント君は怒っちゃうと怖いんだ

余計なことをしないでくれるかなあ？」

「びゃ、白蘭様……僕チンはそんなつもりじゃ……」

「いいから……ね」

おおーさがったよ

でもまさか白蘭さんが止めるとは思わなかったな

まあその分……空気が悪くなったけどね

“大丈夫か……？”

「うん……」

……やっぱり怖いよねー

始まるまで2人の側にしよう……

さてと……ここからが問題だよねー

「大空に綱吉君 嵐は獄寺君

雨は山本君 無属性は僕とスパナが適任だ」

だよねー

やっぱり原作通りそうなるよねー

「そんな理由で納得すると思ってるの？

僕が出るよ」

……だよねー

「ひっぴバリさん」

「ちよっそんなこと言われても」

んーどうしよう……

私が止めに行つたほうがいいよねー

でも2人から離れるのは……

「待って 恭弥

ったくしよーがねー奴だなあ」

デイーノさん止めれるかな……

「考えてみるよ」

ツナ達がミルフィオーレに勝てば

その後はどいつでも好きなのだ

戦える少しの辛抱じゃねーか

それにヴェントだって

自分のことなのに仲間になんて

出たいの我慢してるんだぜ？ なっ

おー私の名前を出した！

〴〵そうだぞ

僕が1番出たいんだ〴〵

「……………急いでよ」

デイーノさんすごい♪

チヨイス 3

「それじゃあ今度は僕らの

ミルフィオーレの参加戦士を紹介するよ

雲は最も頼りになる真6弔花の

優しいリーダー 桔梗

晴は殺したいほど生ける屍 デイジー

霧は真実を語る幻影の巨人 トリカブト♪」

「……………！」

それじゃ足りてない！

お前達の霧の数は2だぞ!!」

「まあ！ 困った」

「どこが困ってるんだ……

そこにさつきからいるくせに……」

「流石ヴェント君だね♪」

「え!？」

「前に言ったように真6弔花には

Aランクの部下が1人につき100人ついてるんだ

ヴェント君が言った通り

霧のプレイヤーはここにすでにいるよ

トリカブトの部下 猿ね♪」

うーん……チヨイス参加できないと……

幻騎士を助けようにも助けられない……

あー……最悪……

やっぱり入江君がなったか……

「もう一度言うけど

どんな理由があれば標的の炎が消えたら負けだからね」

「なっなんてことを……」

「いいんだ

はじめよう……」

「で……でも入江君！ ムリしないで!!」

「へたすりや炎出してるだけで死んじゃうぞ」

“あんまり無理をするな”

「……それは敵も同じこと……」

それに僕は犠牲心でやるんじゃない！

白蘭サンをこんなにしちやったのは僕なんだ!!

僕が逃げるわけにはいかない!!」

“気持ちわかるが自分を責めすぎるな

僕にも少し責任があるだろ?”

私が白蘭さんを倒せてたら問題なかったもん

「ヴェント君が責任を感じることは一切ない！

全ては僕のせいだ……!」

うーん……逆効果だったみたい……

「それにこれ以上ヴェント君に

負担をかけるわけにはいかない!」

「え? え? え?」

……うん

ツナ君がまた私と入江君を交互にみてる (笑)

「へえー」

正チャンそんな風に考えてたんだあ

まあいいや

前にも言っただけど

この盛大なチヨイスの勝利の報酬は

全てのマーレリング……全てのボンゴレリング……

そして全てのアルコバレーノのおしやぶり7・……

すなわち新世界を創造する礎となるだよ♪

そしてヴェント君がもつ

3つの風シリーズとヴェント君自身だよ♪」

いつの間にか私のボンゴレリングも対象になってる (笑)

風シリーズねー

確かにそうだねー

「僕は物じゃないんだが……」

「僕の守護者だよね♪」

あーもうめんどくさい!!

とりあえずこの場所で待機だよねー

絶対原作通りだよねー

「ヴェント」

あれ？雲雀先輩どうしたんだろ？

「どうしたんだ？」

「僕を守るからね」

なるほど……

あの時に大人しく下がったのは

負けても関係ないっていうのもあったのか……

まあ雲雀先輩はルールに縛られるの

大っきらいだもんねー

「僕は君の前に戻ってくると

約束しただろ？」

「そだよ」

やばい……心配してくれるのが嬉しい……

……

ランボ君って大物だよね……

この状況で寝てるよ……

ツナ君がトリカブトっていう人と戦ってるけど……

私がいれば楽なのよねー

「幻術なのか……!？」

しかし幻術ならばモニターには映らないはず！」

「匣兵器をつかうと私にも当たるんだ
知らなかったなー」

「というか……モニターでもわかるのか……
特集能力って凄いやねー」

「まあその分デメリットもあるけどね」

「あ、ツナ君が捕まっちゃったよ」

「やっぱリスピード対決にはなりたくないよねー」

「私も気をつけないといけないね」

「うわー!! ナッツがかわいい!!」

「落ち着いたら頭を撫でさせてもらおう」

「まあまだまだ落ち着かないけどねー」

「……まじめに見よう」

「ナッツのことを考えていたら」

「戦闘が進んでいたらよ」

「このまま空中から敵の標的に向かう」

「それはダメだ」

「敵が二人以上残ってる限り」

「はさみうちにされる危険性がある」

「炎を消してバイクで向かうんだ!」

「……わかった」

「いや……トリカブトを倒せてない」

「幻術だ……」

「常に最悪の事態を考えて手をうつ」

「やるな 正一」

「リボン!」

「なんだ?」

「ここから沢田綱吉に連絡は出来るのか?」

「無理だぞ」

「……そうか」

「やっぱ無理だよなー」

「あー本当になんで参加出来ないんだろう……」

「どうしたんだ？」

リボン君にだけ言うかな……

今の段階で言えば不安になると思うし……

“リボン 耳を貸してくれ”

「いいぞ」

うわーリボン君が私の肩にきた!!

すっごいかわいい!!

じゃなくて……まじめに話をしよう

“トリカブトを倒せていない幻術だ”

!?

本当なのか!?

“ああ”

チヨイス 4

山本君も原作通り強いねー
スクアアロさんが嬉しそうだねー

自分のことじゃないのにねー
やっぱりわかりにくい愛情表現だよねー（笑）
あぶなっ!!

もう少しでスクアアロさんと目があうところだった
ニヤニヤ見てたことがばれれば殺される！

「匣兵器にも驚くがそれを使いこなす

山本の成長がハンパねえぜ」

「ああ

今までにねえ気迫が奴の剣をこれまでとは
別次元の強さにしてんな

一体何があつたんだ？」

「ヴェントはわかつてるだろお!!」

あれ？スクアアロさんが答えを言わないの？
〃ああ

剣の覚悟が足りなかった……だろ？」

「ああ

あのカスは超一流の必要な素質を

十二分に備えているが一つだけ弱点があつた

剣士になりきれねえ甘さだあ」

「スクアアロ

なんでヴェントはわかつてると思つたんだ？」

「あのカスにヴェントが一度ヒントやつてるのに
気付いてなかったんだあ!!!」

あ、ヒント言つてたのがばれてた（笑）

「ま さみしいさもあんだけどな

期間限定とはいえ野球をスツパリ忘れるのは」

「!? 期間限定!？」

「ああ

過去に帰るまでだぜ」

「うゝおゝ おい!!」

何か納得できねえぞ!!」

「風早も言ってたしな」

「!?」

「どういうことだ!？」

「メローネ基地に行く前に風早に言われたんだ

過去に戻るまでは野球を忘れろって

オレのために言ったのに気付かなかったんだ・・

「うゝおゝ おい!!」

そこまで言われてなんで気付かねえんだああ!!」

「動機と期間が気に入わねえ

ヴェントてめーのせいだあ!!」

えー私のせいなのー？

「スクアールもわかってるだろ？」

僕が言わなくても彼はその答えを選んだはずだ」

「……気に入わねえが

全てを剣にささげるとその覚悟が奴を本物の剣士にした」

あ、言い返さなかったね

やっぱりわかってたんだ（笑）

ヘルリングはやっぱり怖いなー

私だったら絶対手を出さないね

理性がなくなると状況判断が出来ないもん

このリングは私と相性が悪すぎるよ
幻剣舞っていう技は怖いなー

うわー更に究極幻剣舞っていう技になった
私だったらどうするかなー？

全て避ける……しかないか……

それか剣撃に全ての炎をぶつけて

形を保てないぐらい暴走させるかな？

まあ形態変化を使えば楽勝だけどね

山本君が幻騎士に勝ったけど……

やっぱり原作通りか……草が生え始めた……

早めに声をかけよう

“ビアンキ”

「どうしたの？」

“僕……喉が渴いたんだ

何か飲み物が用意してほしいけど頼めるか？

ついでにみんなの分を用意してほしいんだが……”

“ビアンキさんだったら

これだけでわかってくれると思うんだよね

「……わかったわ

京子、ハル向こうに冷蔵庫があったわ

行きましょう」

わかってくれたみたいだ

「「え？」」

「私ー人じゃもてないの

手伝ってほしいわ」

「「はい」」

これでなんとかなったか……

“……悪い

最悪の事態を想像してしまった……

一般人の彼女たちには辛すぎるんだ

頼む……飲まなくてもいいから

彼女達から飲み物を受け取ってくれ〃

あ……うなずいてくれた……

はじめてかも……

目の前で誰か死ぬところ見るのは……

あーもう最悪だ……

「ヴェント」

あれ？雲雀先輩どうしたんだろ？

〃どうした？〃

「手」

て？

「握りすぎだよ」

あ……

〃……悪い〃

もう少しで血が出るところだった

なにも出来ない自分が悔しい……

あー空中から行くことになったかー

あーやっぱりそうなるよね

〃……まずい状況だな〃

「なにを言ってるんだ!!」

極限有利ではないか!!」

「ツナがやべえのか？」

「「!?」「」」

〃……ああ〃

「ヴェント、リボンどういうことだ!？」

「トリカブトを倒せてねえんだ」

〃そういうことだ

沢田綱吉はトリカブトの幻術にかかっている〃

「なんでヴェントはわかるんだ？」

あれ？ディーノさんは詳しく知らないの？

10年たっても私はディーノさんの前で

まともに戦ってないのかもねー

全部デイナーさんに任せてそう（笑）

“大空戦の時にマーモンに幻覚がきかないって

僕が言ったのを覚えてないか？”

「そういえば……」

あ、そういえばあの時デイナーさんはいなかったね

“幻覚にもものすごい強い体質なんだ

骸に幻覚の火柱で攻撃されることがあるが無傷だぞ

ふざけた体質って言われたな……”

「……聞いてない」

あ、しまった……

雲雀先輩もいなかったね……

機嫌が悪くなったよー

“あー不意打ちで攻撃したお詫びに

1つ頼みごと聞いてもらったから

そのことでは怒らないでくれ”

……さらに機嫌が悪くなったかも……

“まあ僕もまさかモニターでも

幻覚を見破れるとは思わなかったけどな”

あ、スパナさんが気付いたけど

コンタクトの故障と思ったね

「コンタクトの故障ではないぞ!!」

入江達は気付いてないのか!!

極限まずいではないか!!」

“幻覚を見破るのは入江達には難しいだろ

沢田綱吉を信じるしかない”

「……通りで白蘭はヴェントを試合に

出したくないわけだぜ」

“……そうだな”

桔梗って強いねー

ものすごく速いよー

まあ私とツナ君の方が速いけどね

要注意なのは変わりないね

「よそ見すんなあ!!」

あ、スクアールさんが叫んでる

聞こえないのにねー

でも言いたくなる気持ちはわかる

「ハハン」

あらー私ってすごいー

また見えちゃったよ（笑）

「スクアールの言うとおりで……」

よそ見したのはまずかった」

「うゝおゝ おい!!」

何を見たあ!!」

「獄寺隼人の匣兵器に

なにか仕掛けたのが見えた」

「本当か!？」

獄寺のボンゴレ匣は

S I S T E R A C · A · I の延長線上にあるんだぞ」

「それはまずいな……」

あー獄寺君が今気付いたよ……

「何かが匣をふさいでいる!!」

あれでは開匣出来ない!!」

「ヴェントが見えたのはそれだな

あれじゃボンゴレ匣を封じたのと同じだ」

本当に原作通りだねー

こつちが私がいるからいろいろ先に気付くだけだよ

でも何も出来ないんだよねー

あ、ツナ君が幻覚って気付いたみたい

「まだ奴を倒せてなかったんだ……」

恐らくオレは今

トリカブトの幻覚空間の中にいる!!」

「沢田が気付いたぞ!!」

極限やるときはやる男だ!!」

気付いたのはいいけど……

それからが問題なんだよ……?」

京子ちゃんのお兄ちゃんは気付いてないのかな……

おっと、次は山本君だね

それにしてもあっち見こっち見で忙しいよ

今度はバリアーが

流石にこれは私にもわからないね

まああそこにいればわかったけどね

だって風が通らないと思うから気付くと思う

うーん……レーザートラップって

普通に炎で防げると思うんだけど……

まあ狙いは時間稼ぎだからないよりはいいけどね

やつぱりチョイスの話を入江君とすればよかったか……

でも下手に原作を変えれば入江君が死ぬかもしれないんだよ

このタイミングで入江君が死んじゃったら

ツナ君達の精神状態がやばくなると思うんだよね……

だから原作通りになることを選んだけど……

あーなんで参加出来ないのかな……

……白蘭さんのせいだ

これは絶対間違ってる

あー本当に原作通り進んでるー

入江君がピンチだよ……

「走る気!」

「入江正一は負けるわけにはいかない」と

わかってるからな……

これぐらいの無茶はするよ”

「……ヴェントは

どこまで知ってたんだ？」

”入江正一が白蘭を倒すことに

執念を燃やしてる内容は全部知ってるぞ

そして僕が白蘭に捕まってはいけないと

この中で1番思ってるだろうな……”

雲雀先輩より思ってると思う

「[6:]」

多分パラレルワールドでは

表の顔は死んでるように偽装して

休んでる間は普通に表の顔でいるからね

表の顔がばれた時点でかなりきつくなるんだよね

ズオオオ!!

ツナ君のX BURNERってすごい威力だ……

私に聞こうとしたけど

一瞬にしてそっちに注意がいったよ

ツナ君が入江君を助けに行っちゃよ

まあ助けに行かなかったらツナ君じゃないよね

……入江君……大丈夫だよね……？

頼むから原作通り助かってよ……

私が説明できるから

ここだけずれたとかは勘弁してよ……

パラレルワールド 1

やっぱりそうなるよね……

「これによりチョイスバトルの

勝者が決まりました

勝者はーミルフィオーレファミリーです!!」

……決まった……行こう

ガシツ

これは……雲雀先輩か……

腕をつかまれちゃったよ

「行かせないよ」

「僕も行くつもりないよ

入江正一を助けに行くだけだ」

「僕も行く」

「無理するな

人が多いぞ?」

群れることになっちゃうからねー

「……………それでも行く」

“……………わかった”

「パラレルワールドだな」

「みんな!! 早く正一君の処置を!!

あ………スパナは!？」

「もう向こうで毒サソリ達が処置をしている!

正一はオレが診てやる」

「僕も手伝うよ」

これはひどい……

応急処置で済む範囲を超えている……

「了平 晴れゴテを開匣しろ」

「おう!!」

“僕の体力も使ってくれ”

「すまない

リボンさん……ヴェント君……

それより……パラレルワールドの説明を……」

途中までは多分原作と一緒にだと思う

細かいところまで覚えてないけど

これから絶対違うところがあるんだよね

「この時は僕も何がなんだがわからなかったさ……

白蘭サンがこの時手に入れた能力は

この後のタイムトラベルでわかることになる……」

「後って……また行ったの?」

「ミュージシャンになった

あの未来を許せなくてね……

夢をあきらめて再び大学を目指したんだ……

そして一年後にどうしても未来を確認しなくなったんだ……

……ところが……

3回目のタイムトラベルで見た未来は僕の想像をまた裏切った

世界が荒廃しかけていたんだ」

「え!?!」

「みんなパニックになってる中で……

ヴェント君に会ったんだ」

まさかここで入江君と会うとは

私も思わなかったけどねー

「え!?! どういうこと!?!」

「彼がみんなを守りながら逃がしていたんだ

最初は何かの撮影かと思ったんだ……

動かなかった僕はもう少しで死ぬところだった

それで現実と気付いたのはいいけど……

今度は腰を抜かして動けなくなつたところを

ヴェント君に助けてもらつたんだ……」

本当によく助けたよね……

これを聞いた時は少し焦つた……

私がおもひ助けてなかつたらやばかつたと思う

「しばらく……僕はこの未来を受け入れなかつた……

でも……ヴェント君が気になつて……

助けてもらつたのにお礼も言つてなかつたし……

だから3週間後にもう一度行つたんだ」

そう私がいるから少しずれたんだよね

未来編はじまるのがほんの少し遅くなつた理由だよ

「次に行つたときには完全に世界は荒廃し……

戦争で焼け野原となつていた……

携帯端末から流れてくるのはこの戦争を起こし

世界征服を成し遂げた独裁者の演説だけだつた……

白蘭という男のね」

「そんな!!」

「なぜ奴が!?!」

「僕も何かの間違いだと思つたよ……

悪い夢だとね……

だからその後できる限りの変化を起こして

何度もタイムトラベルを試みた……

だが 何度試してもわずかな違いこそあれ

すべての未来が白蘭サンに支配されてしまつていたんだ……」

「白蘭の奴 何をしたんだ」

「僕が目覚めさせてしまつた能力を……

己の欲のために悪用したんだ……

彼は……どのパラレルワールドでも誰よりも知識を有し

先端技術を獲得し強力な軍隊を作つた……」

「そ……そんなこと……」

「パラレルワールドとは現実と

並行して存在している独立した別の世界だ……

どんな人間も他のパラレルワールドにいる

自分のことは知る術もないし交わったり

関わったりしたりすることはない

だが白蘭サンは同時刻のパラレルワールドにいる

すべての自分の知識と思惟を共有できるんだ」

本当に恐ろしい能力だよ……

この能力のせいで私の行動もかなり縛られてる……

パラレルワールドの私はかなり大変だったと思うよ……

パラレルワールド 2

「すべてのもしもを体験できるんだぞ

その知識と体験を他のパラレルワールドで使ってみろ

この世の中情報に勝る武器はねえ

だが……それだと……」

「リボーンはもう気付いたのか……」

「……ああ」

リボーン君は頭の回転が速すぎるよ

「え!? なになに!?!」

まあ……ツナ君はわからないよねー

雲雀先輩は今わかったかな?

「疑問が出来るんだ」

「へ?」

「……なんで白蘭は

ヴェントの正体がわからねえんだ?」

「「?!」」

やっとみんな疑問に気付いたね

「リボーンさんの疑問の答えは……」

ヴェント君は全てのパラレルワールドで

正体を隠したまま白蘭サンから逃げ切っている」

「そ、そんなことあるの!?!」

「僕が見た未来の景色では独裁者の演説の映像の中で

ヴェント君の写真が出され搜索がされていたよ」

「僕も驚いたよ

でも白蘭の能力を聞いて

僕の正体がわからないのはそれしか考えられない

でも……白蘭の能力には勝てない

逃げるのが精一杯だと思う

彼は誰よりも有利に生きられるからな」

「……誰よりも……有利に……」

「ありえねえことも起こせるってわけだ」

「その通りだ・・・」

白蘭サンは他のパラレルワールドで得た知識を使い
まだその世界で発見されていなかった

ワクチンの知識を知っていたり

日陰の身でかくしていた王族を発見したり

何百という偶然の発明なくしては

生まれぬ兵器の開発に技術を提供し

猛スピードで完成させたんだ……」

「そう」

白蘭の能力で匣兵器が生まれたんだ

ここでまた僕が捕まってる証明が出来るんだ」

「どうしようもない!?!」

「僕はどのパラレルワールドでもレアだ

どのパターンも未来になっても

僕しか風の波動を持つものはいないぞ」

「う……うん」

関係あるの……?」

「あるぞ」

この世界で匣兵器は作られたのに

風属性の匣兵器だけは開発されなかった」

「え!?!」

「10年後の雲雀恭弥は

匣兵器の調査をしたのは覚えてるだろ?

彼が風属性の匣兵器だけは

全く開発されなかったって言ったよ」

「でもヴェントは持つてるよね!?!」

「これは僕の仲間が作ったんだ

前に言っただろ? 僕の師匠は天才だよ」

「……そんなこと可能なのか?」

「リボーンの疑問もわかるが……」

師匠は天才だぞ

匣兵器ぐらい簡単に作れるよ

僕は匣兵器より凄いのをみたことがあるよ

ただ……掟でしぼられていて

僕以外に会えないし僕以外に手助けが禁止だ”

「どういふことだ!」

”僕の唯一のおしやぶりを持つてる理由や

呪いを全て知ってる人物だよ

師匠は僕のために自ら掟に縛られた

あまりにかわいそうってことだな

まあ信じるも信じないのかはそっちに任せる”

これは信じろって言っても難しいと思う

信じた雲雀先輩が凄いやねー

「……わかったぞ」

”話を戻す

僕が捕まっていけないから風の波動がわからなく

風の匣兵器は全く開発されなかった

恐らくこれは徹底的に調べてくれたと思うよ”

まあ私も手伝ったと思うけどねー

白蘭さんの能力を知ってる私はわかってたけど……

その時は雲雀先輩は知らなかったと思うしね

白蘭さんの能力で作られたとわかった時の雲雀先輩は

どんな気持ちだったのかなー?

私が捕まってる証明にもなるけど

私以外に風の波動がない証明にもなるんだよねー

「……だが白蘭が能力に気付いたのは

ほんの少し前ということになるぞ

わずかな時間でこれだけのことをするのは不可能だぞ」

「……それは……」

タイムトラベルで行き来するうちに

僕が過去の白蘭サンにまで

能力を気付かせてしまったからなんだ……」

「過去の!？」

「え？」

「ど……どーいうこと？」

「僕が過去に戻るときに白蘭サンの手のものに

発信装置を仕掛けられて

過去の白蘭サンにメッセージを伝えてしまったんだ……」

「つてことは白蘭は10年前から

その能力を使えたの？」

「そういうことだ

そしてこの時に僕の情報も伝えただろうな」

つまり……10年前から私は……

レアとばれてる可能性が高い

白蘭さんが少しでも力をつけた瞬間に

ヴェントの行動は難しくなったんだろうな……

「入江!!」

その間お前はなにをしておったのだ!!

白蘭の悪事を知りながらほっておいたのか？」

「お兄さん!!」

「あまり責めないでやってくれ……

彼は記憶を失ってたんだ」

「え!？」

「9度目のタイムトラベルで

未来へ行った時10年後の世界で

未来の僕と未来のヴェント君が

仕掛けた装置によってタイムトラベルと

白蘭サンについての記憶を

抹消されたんだ……5年間ね……」

パラレルワールド 3

「いつ5年も!？」

未来の正一君とヴェントがなんでそんなこと？」

「もちろん白蘭サンを倒すためさ」

未来の世界では白蘭サンが

倒せないと考えた未来の僕とヴェント君は

過去にさかのぼって白蘭サンを消そうとしたんだ……

過去の僕を使っただね」

「僕の過去は使えなかったからな……」

だって10年バズーカを使っただけでもないもん

それに表の顔でも白蘭さんに近づくとのは危険だしね

「未来の僕とヴェント君は過去の僕が

白蘭サンに余計な敵意などをもって怪しまれないように

記憶を消してから白蘭サンに近づけようとした……

過去に戻った僕には未来の自分とヴェント君が残した

手紙が置いてあってね……

やるべき指示が書いてあるんだ……

バラされたくないことも書いてあるので従うしかない……

君達に10年バズーカを当てたのも

その手紙の指示に従っただ……」

「そして未来の僕は僕が当たらないことも

予想をされていてヒントを残していたんだ

そして未来に行けば僕にも指示があった

恐らく入江正一の手助けをしてほしいとかだろうな

未来の僕が黒幕なら手伝うに決まっている」

「うん……」

そして僕は手紙のススメ通りの

海外の大学へ進み白蘭サンと友達になる

皮肉なことに人生で一番楽しい時だったよ……

チヨイスもこの頃つくったんだ……

だが5年がたち僕は全てを思い出す
あの恐ろしいタイムトラベルと荒れ果てた
いくつもの未来をね……

さらにその元凶が白蘭サンで自分の使命が
彼を阻止することだとわかりパニツクにおちいったよ……」

「僕の未来を見たのもあるだろ……」

入江君を助けた私がひどい状況だったら

原作よりパニツクになったと思う

「え!？」

なにを見たの!? 入江君!？」

「言うなよ」

「早くいいなよ」

変に勘違いするから聞かない方がいいのに……

あー失敗したなー……

「僕に装置を仕掛けたときの

未来のヴェント君は……

片腕が義手で片目を失ってたよ……」

あ……雲雀先輩が辛そうな顔した……

「そ……そんな……」

「それは未来の僕が悪い

その記憶は消しておくべきだった……」

「いや……元々は僕の責任だよ……」

それに僕に装置を仕掛ける時に最後まで謝っていたよ
自分にもっと力があれば……」

やっぱり……

パラレルワールドの私は

そうするしかなかったんだらうなー

原作の世界のために……

「……そうか

でも未来の僕が悪いよ

僕と会って手伝う可能性を考えていたなら

入江正一には辛かっただろ……”

「いや……それを見たからこそ

すぐスパイになる覚悟ができたよ

そして自分の記憶とこの世界で起きている出来事を整理して
今いる自分の世界の状況を把握して再び愕然としたんだ……

なぜなら考えられるすべてのパラレルワールドの中で

今いるこの世界だけが白蘭サンに

滅ぼされていない世界だったからだ」

「え!? なんだった!?」

だってパラレルワールドって

たくさんあるんでしょ?」

「ここ以外のすべてのものもしもの世界が

白蘭のものになっていてということになるぞ!!」

「その通りだ……」

5年前の段階で白蘭サンの能力による

世界征服を阻止できる確率は

少なくとも見積もって8兆分の1……」

「はっちよう!?!」

「言い換えれば世界征服されていない

パラレルワールドの存在する確率でもある……

そしてその奇跡的条件が満たす世界が……

8兆分の1の世界がここだったんだよ

つまり無数のパラレルワールドの中でも

この世界だけが唯一白蘭サンを倒す

チャンスのある未来なんだ!!」

「そんなことって……」

「それは未来のお前とヴェントが

過去のお前に指示して作った

未来だからなんだな」

いや……私は多分指示してないと思う

入江君に任せてたと思う……

私は多分戦闘の方を担当してたと思う

「それだけじゃない……」

「僕と綱吉君が唯」

偶然出会えた世界でもあるんだ」

「オ……オレと!?!」

「中3になった君の自転車のパンクを僕が直すんだ……」

だからこそこの世界はこの後……

奇跡的にボンゴレ匣がつけられる未来になるんだ……」

そうなんだよねー

偶然ツナ君と入江君が会ったからボンゴレ匣が出来たんだよね
多分他のパラレルワールドでも作ろうとしたと思うんだよねー

争いごとが嫌いな私があると違和感ないように

いろいろ誘導して作ろうとしたんだけど

ツナ君と入江君が偶然会ってないから出来なかったと思う……

私がツナ君と入江君を会わせたんじゃ出来ないんだよ

偶然会ったから出来たんだよね

パラレルワールド 4

「それでお前は白蘭を倒すには

この時代しかねえって言ったんだだな」

「ああ

他のどのパラレルワールドでも7・は奪われ
ボンゴレファミリーも壊滅して……

ヴェント君が1人で戦ってるよ……」

「予想だが……

僕の風シリーズがなにか力が可能性があるから

他のパラレルワールドではマーレリングは放棄して
ボンゴレリングだけで戦ってると思うよ

それにマーレリングを持つと

白蘭の守護者になってしまうからな”

いや、持つてるけどね

雲雀先輩だけわかればいいしー

あ、そういえば

私20年後のランボ君と会ってないやー

懐かしい面々に入らないよ

私が出たのに白蘭が世界征服できた理由は簡単だよ

みんなを鍛えようにも

下手に手を出して私が鍛えると

原作の世界が攻略されてしまうんだよね

過去から来たツナ君達の修行の時間は少ないし

私が1人でみんなにアドバイスしたとしても

そんなに成果が出るとは思わないよ

実際山本君にかなりのヒントをあげたけど負けちゃったしね

正直この未来は過去から来た私には

結構考えられることも多かつたしねー

だからパラレルワールドのみんなは

自力で鍛えてもらおうしかなかったんだよ

つまり特殊能力で私が1人で頑張るしかなかったんだよ

唯一出来るのはボンゴレ匣が出来たこの未来だけど

ボンゴレ匣が出来るまでは下手に鍛えれなかったはずだよ
だから原作より未来のツナ君達は強い可能性があるけど……

それでもヴェントとして活動は

なかなか出来なかったからどこで鍛えるんだよって話だよ

ツナ君のアジトはまだ完全に完成してないしねー

多分あれは出来てそんなに立ってないと思う

雲雀先輩が怪我しないようにするのが精一杯だったと思う

ずっと一緒に行動してたから出来たんだよ

そしてボンゴレリングを破棄する流れは止めれなかったと思う

ツナ君は1度決めたら譲らないからね

あ、いろいろ考えてたら話が進んでた……

まあ原作通りだったと思うけど

この後どうなるんだろ……

「……難しくてよくわからない所もあったけど……」

それだけはしっかりわかった

なのに……負けちゃった……

そんな大きな意味や思いがあるなんて知らずに……」

「そ 君達の負け♪」

僕のことをこんなによくわかってるのに

残念だったね 正チャン」

「白蘭!!」

「結局どの世界でも僕には勝てないのさ」

まっ ヴェント君の特殊能力には困ったけどね」

「「!?」「」」

やっぱりばれてたか……

〃……僕は君が嫌いだからな

何度も邪魔してるはずだろ?」

「そうなんだよね♪」

それも君の特殊能力は

どの世界もバラバラだからね」

「どういうこと!？」

「綱吉君は知らないかも知れないけど

彼は特殊能力があつてね

僕の予想では自分の体力をわけたり

幻覚がきかないのも特殊能力の一部だよね」

隠しても無駄だね……

“そうだ”

「でも他はどのパラレルワールドでも

バラバラなんだよねー

つまりまだ君は発動してないだけで

後から考えれるんだよね♪

僕の予想ではさっきの2つを入れて

全部で5つが限度かなあ?」

そこまでよまれてるんだ……

全部使わないと逃げれないぐらいやばいのか……

「当たり前みたいだね♪」

“僕は君のためにこの能力を使う気はないぞ”

「残念♪」

僕の守護者だから僕のために使ってもらおうよ♪」

「何 勝手に決めてるの」

「やっぱりここでもヒバリチャンが邪魔するんだね」

“………どういう意味だ”

「ヴェント君を捕まえようとする」と

どの世界でも必ず雲雀ちゃんが助けようとして

僕にやられちゃうんだよねー」

……それは聞きたくなかった

あーそうか……

やっと意味がわかった……

私の中で雲雀先輩が死ぬことは想像が出来なかった

でも10年後の雲雀先輩はわかっていたんだ……

そして私を守れなかった自分にムカついていたんだ
様子がおかしかったのはそのせいだったかもしれない

あー何があっても逃げるはそういう意味だったんだ……

はあ……私って本当に能天気だったね……

「その時が一番ヴェント君にスキが出来てね

何度か捕まえようとするんだけど

いつも特殊能力で逃げられちゃうんだよね」

もしかしてその時に……

「まっ 今回は正式な勝負の結果だからね

約束は守ってもらうよ

ボンゴレリングは全ていただいて

ヴェント君は僕の守護者♪

君達はどうしよーかなー」

「待ってくださいー!」

あ……ここで原作に戻った……

ユニ 1

「ミルファイオーレのボスとして正式にお断り♪」

「くっ……」

「私は反対です」

あ……ユニちゃんだ！

「白蘭 ミルファイオーレのブラックスペルの

ボスである私にも決定権の半分はあるはずですよ」

「ユニ……貴様……！」

「ユニが……自ら口をきいた……」

「えー!？」

あの娘がミルファイオーレのもう一人のボスー!？」

「やはりお前のことだったんだな

でかくなつたな ユニ」

「はい

リボーンおじさま」

“……そつくりだな”

本当に似てるなー

「お久しぶりです

でも過去から来た

ヴェントさんははじめましてですね」

あれ？未来の私は会ったことあるのかな？

おかしいなー

ユニちゃんを助けれてなかったから

会えなかったと思っただけ……

「リボーンとヴェントの知り合い!？」

ってかりボーンのことをおじさまー!!？」

この赤ん坊のことをおじさまー!？」

ツナ君の声大きい……

そんなに反応されると話にくいよ

「うるせーぞ」

うわ……ツナ君の指を変な方向に曲げたよ……
「いっでー!!」

だ……誰だよ あの子!？」

「オレの知り合いの孫だ」

「ま……孫ー!？」

「僕のもう1人のボスの子どもであってるか？」

「はい」

「えー!? ヴェントが言ってたボスの娘ー!？」

あ……首におしやぶりさげてる……

赤ん坊でもないのに?？」

「僕もかけてるだろ……」

赤ん坊じゃないのに……」

「あ……そうだね」

私がアルコバレーノって忘れてたのね (笑)

まあ隠してるから忘れるのも無理はないか……

「はじめてボンゴレのみなさん」

あ、みんなの顔が赤くなった♪

うん! 可愛いよね!!

でも雲雀先輩はなんで何も思わないんだろう……?」

まあいいか……

「ハハハッ これは一本とられたよ

いやあ びっくりしたなー

すっかり顔色もよくなつて

元氣を取り戻したみたいだね ユニちゃん♪」

「……病気でもしていたのか?」

「ちがうよ……」

白蘭サンの手によって……魂を壊されていたんだ」

「たっ魂って!!」

「白蘭サンはブラックスペルの指揮権を

手に入れるために彼女を口利けぬ体にしたんだ……」

「人聞きの悪いこと言うなよ 正チャン

ユニちゃんが怖がりだから
精神安定剤をあげてただけだよ」

「いいや

あなたはブラックスペルの前身である
ジツリヨネロファミリーのボスだった
ユニとの会談で無理矢理劇薬を投与して
彼女を操り人形にしたんだ
そうだろ？ ユニさん……」

“そして僕にもその劇薬を飲ますつもりだったんだろ？”
うわー……白蘭さんに嫌な笑いされた……
「そ……そんな……」

「でもその間の私の魂はずっと遠くに
避難していたので無事でした」

「遠く……？」

「白蘭 あなたと同じように
私も他の世界へ翔べるようです
そしてこの世界の未来のヴェントさんもね」
“なるほど……”

この世界の未来の僕は君の魂を
助けるために特殊能力を使ったのか……”
それで会ったことがあるのね
特殊能力を使ったから会えたんだ……

あー……なるほど……その時に聞いたのか……
「はい 助けていただきました」

つまり原作よりも早くユニちゃんは
元気になってる可能性があるよね？
でもタイミングがなかったのかも……
また劇薬を飲まされちゃ意味がないからねー
“だが……”

「ヴェントどしたの？」

“僕には他の世界に翔べることは出来ないはずだ”

特異体質にかわるだけだから無理だよね？

『ああ 無理だ』

やっぱりねー

「え!?! そうなの?」

“出来るなら僕が白蘭に勝てる世界が

あつてもおかしくないだろ?”

「……そういえば」

でもどうしたんだろ?

『ユニの精神世界に繋がるように

無理矢理体質を変えたんだろ

元々優は俺と精神世界が繋がってるから

精神世界に普段から行くことが出来るからな

ユニが他の世界に翔んでいたから優が翔んだわけだ』

あ、そっかー

そんな抜け道があつたのねー

流石神様だねー

“あーわかつた”

「え!?! なに!?!」

“白蘭の前では言いたくない”

この能力はかなり危険だよ

相性関係なく精神世界に好きに行けるのはまずいよ

それに相手の許可とかなしだと思うから

一歩間違えれば精神破壊しちゃうよ

ユニちゃんの魂が壊されてたから使えたんだ

「あ、うん」

“まあ僕的能力が役に立ってよかったよ

話を戻していいぞ”

「はい

私はミルファイオーレファミリー

ブラックスベルのボスとして

ボンゴレとの再戦に賛成です

あの約束は……白蘭と入江さんとの
再戦の約束は本当にあつたからです」

「なんでそんなことわかんのだよ！」

「元氣一杯になつてくれたのは嬉しいんだけど」

ユニちゃん 僕の決断に口出しをする権利はないな

僕が迷つた時は相談するけど君はあくまでナンバー2だ
全ての最終決定権は僕にあるんだ

……この話は終わりだよ」

「……そうですね……わかりました……」

では私はミルフィオーレを脱会します

沢田綱吉さん……お願いがあります」

「え!?! お……お願い!?!」

「私を守ってください」

「ええ……!!?!」

“あー沢田綱吉が反対しても僕は守るよ

僕のボスの子どもだ 守らないわけがない”

「ありがとうございます」

ヴェントさん」

“ああ”

私が守るって言ったから

今度は私とユニちゃんの顔を交互に見てる（笑）

「で……でも……守るって……」

ブラックスペルのボスなんじゃ……!？」

「私だけじゃありません」

この——仲間のおしやぶりと共に」

あ、おしやぶりだ

「それって……アルコバレーノの!？」

「勝手に持ち出しちやだめじゃない ユニちゃん

それは僕の7・コレクションだ」

「ちがいます……」

これは私が預かったものです……」

それにあなたが持っていてのもそれは7・とは言いません

なぜなら」

パアアアツ

「おしやぶりは魂なくしては

存在意義を示さないのです」

あれ？隠しているけど出そう

うわーすごい

〴〵僕のも袋に入ってるが……

少し光ってるな……」

本当にすごいなー

今まで袋に入っていたら光ったことないのにね

多分ユニちゃんの力に共鳴してるのかな？

みんなとは違うけどちよつとは関係してるのかな？

「……なるほど……そういうわけか!!」

すごいよユニちゃん！ やればできるじゃない!!

やはり僕には君が必要だ

さあ仲直りしよう ユニちゃん」

うわー白蘭さんの目の色が変わったよ
「こないで！」

もうあなたには私達の魂を預けるわけにはいきません」
「なーに勝手なこと言ってるの？」

それ持って逃げるんなら

世界の果てまで追いかけて奪うだけだよ」

本当に追いかけてきそうだよ……

いや、現在進行形でパラレルワールドでは

私は追いかけてられるよね……

「さあ帰ろう

僕のところへ戻っておいで ほら♪」

2人の間に入るべきだね

「僕がそれを許すと思ってるのか？」

「ヴェント君は僕の守護者だよ

ユニちゃんの守護者じゃないよ」

これを出すか……

うわーまた白蘭さんの目の色が変わったよ

「僕は君のためにマーレリングをつけるよ」

「ありがとうございます」

念のためにリングに炎をともしよう

ボウツ

「2人とも僕のところへ戻っておいで」

「断る！」

「え!? え!? ヴェント!?!」

あらーツナ君がパニックだ……

ズカンッ

「リボン!!」

「おじさまー！」

「凶にのんなよ 白蘭

てめーが誰でどんな状況だろうと

アルコバレーノのボスに手を出すんなら

オレが黙っちゃいねーぞ」

“これで仲間が増えたな”

「はいー!」

って、あれ？

アルコバレーノのボスってことは

私もアルコバレーノだからボスってこと？

いや……私は特殊だから違うのかな？

みんなと同じタイミングで

アルコバレーノになってないしね

まあどっちでもいいやー

「えー!？」

あの娘アルコバレーノのボスなのー!？」

「ナイト気取りかい？

最強の赤ん坊 リボーン」

「白蘭様 ぐご安心ください

ユニ様とヴェントは我々がすぐにお連れします」

私とかよ……

あちやー攻撃してきたよ

さして本気を出すかなー

……

スクアアロさんにいいところをとられた……

「うゝおゝ おいっ!!」

てめーの相手はオレだあ!

暴れたくてウズウズしてんだあ!!」

「じゃまだよ」

「スクアアロに…… ヒバリさん!!」

「んだ てめーは!？」

やっばい!!

つついてるのが面白い!!

今度私もつついてみようかな (笑)

私もいいところをとられてショックだったし!!

「僕の獲物だ」

そしてヴェントには手を出させないよ」

“あーすまない”

「問題ないよ」

「ハハン 懲りない連中だ」

「ちよつ……みんなどうする気……!?」

ツナ君が完全にパニックだ！（笑）

“あーちよつと待て”

……ツナ君がほつとした顔したね

でもごめんね！

今回はツナ君のフォローじゃないんだ！

“僕の分も残してくれよ？”

「んな……!!」

ナイスリアクション（笑）

「さあね」

あ、珍しいね

いやだとは言わなかったね

「きなよ」

「ハハン いいでしょう」

「なにげにみんな鬨う気になってる……!?」

本当にパニックになってる……（笑）

まあ珍しく私が率先してるしね

ユニ 3

「じゃあこうしよう

チヨイスに勝利して僕がもらえるはずの7・は
手に入れるまでにとても苦労したしすごく大事な物だよ
でもユニちゃんがミルフィオーレに

帰って来てくれるならボンゴレリングは
ボンゴレファミリーに返してあげてもいいよ
ヴェント君はダメだけどね」

どうしても私の特殊能力と

3つの力がそんなに気になるのか……

もしユニちゃんに何かあっても

私の特殊能力を研究したら

どうなるかわからないって思ってるんだらうね

白蘭さんには私の特殊能力が

ものすごい物に思ってると思うしねー

「白蘭

なぜあなたが私を欲しているかはわかっています

わかっているからこそ

あなたの元へ帰るわけにはいきません」

「僕も同じ意見だ」

「ふうん

じゃあやつぱりボンゴレリングは僕のものだ

ユニちゃんが逃げ込もうとしてる

連中にミスミス武器を渡すつもりはない」

「白蘭 ボンゴレリングはあなたのものじゃないです」

「ん？」

「おしゃぶりはアルコバレーノのもの

ボンゴレリングはボンゴレファミリーのもの

そして風シリーズはヴェントさんのもの

それは真理です

なのにあなたは7・とヴェントさんを手つ取り早く安全に手に入れるために無理矢理チヨイスを開催し7・とヴェントさんを賞品にしました私の魂があるかぎり7・の一角をになう大空のアルコバレーノとしてそれは許しませんそしてヴェントさんの魂があるかぎり風シリーズもヴェントさんのものですすなわち7・とヴェントさん争奪戦は認めませんチヨイスは無効とします!!」

「当然だな 風シリーズに選ばれたのは僕だこれをどうするかは僕の勝手だ

僕は目的のために白蘭の話に乗っただけだから結果がどうであれ渡す気はなかった」

「ユニちゃんがちよつとこつちを見たな」

「目的が何かわからなかったのかな？」

「え? も、目的!？」

「それに無効!!」

「……………」

「そうです

「ボンゴレリングも渡さなくていいです」

「プ ハハハ!!」

「大空のアルコバレーノには7・の運用について

特典が与えられているらしいけど

僕を怒らせるのはどうかと思うな

「ボスのユニちゃんが裏切ったとして……

「残されたブラックスペルがどうなってもいいのかい?」

「私には弱点が今ないからね」

「ユニちゃんにいったね」

「そしてそれは叶わないの知ってるくせによく嘘をつくね

「まあ奴らはユニちゃんにゾツコンみたいだから

「煮られようが焼かれようが大喜びかもしれないけどね」

「な それって……人質ってこと!？」

「……みんなわかつてくれます」

〃ユニ心配するな〃

「え?」

〃僕はメローネ基地で戦ってる途中でγと手を組んだ〃

「ヴェントどういふこと!？」

〃γは知らなかったが

僕は表の顔で彼と過去の世界で

会ったことがあるんだ〃

「え……?」

γさんから私と会ったって聞いてないから

ユニちゃんがビツクリしてるよ

〃まあ会ったというよりリングを渡された後に

君のお母さんと歩いてた姿を

見かけたといったほうが正しいけどな……

彼は2度負けたから

正直どうなるかわからなかったから助けてたんだ

その時に今の彼のボスがユニって聞いたから

γに必ずユニを助けるチャンスは来るから

信用してる仲間と逃げろって言ったよ〃

「本当ですか……?」

ヴェントさん……」

〃大丈夫

彼らは必ず逃げてるよ〃

「ありがとうございます」

あ、いい笑顔だ♪

「あとはお前だけだぞ ツナ

ユニに守ってほしいと頼まれたのはお前だ

どうするんだ?」

ガッ

おお! ツナ君がカツコイイね!!

王子様って感じだね!!

「くるんだ!! オレ達と一緒に!!」

みんな!! この子を守ろう!!」

うん♪みんないい返事だ♪

「ありがとうございます」

あ、またツナ君の顔が赤くなった♪

「もちろんヴェントも守るよ!!」

「僕は大丈夫だから

ユニを優先して守ってくれ」

「う、うん……」

逃亡 1

おーついにバトル開始だー

あ、スクアードさんのサメ登場♪

なんで食べられかけたのに

サメの匣兵器なんだろう……（笑）

まあいいか……

やっぱりここはいったん退くべきだよねー

この場所は敵陣だしねー

私もこのタイミングで長時間戦うのはかなりまずいし

デイーノさんの案に大賛成だね

でも……やっぱり原作通りいかないか……

白蘭……どこが人っこ1人いないんだよ

「え!？」

「まずいな……」

あれは幻覚じゃないと思うし……

殺気もない……捕まるためだからか……

スクアードさんでも気付かないかも……

「ヴェントどういいうこと!？」

「先に行け！」

奴ら以外にも敵がいる僕が足止めするよ

「え!？」

「心配するな

僕はこちらから逃げる手段がある」

「で……でも……」

「僕が逃げる手段は大人数は無理だ

僕はどの世界でも捕まってるんだぞ？

信用して先に行ってくれ

それにさつき言った僕の目的はユニの保護だったんだ

「え!？」

ユニちゃんがビツクリしたねー

驚いてる姿もかわいいね！

“だから頼む ユニを守ってくれ”

「……わかった」

「10代目！今のうちに転送システムへ」

「わ、わかった!!」

“ごめん 獄寺君!!”

ヴェント 必ずまた後で！」

“ああ”

「いこう みんな!!」

さて、行く前に……

“雲雀恭弥!”

「なに」

みんなに獲物取られて機嫌が悪そう……

“これを持っててくれ”

ビュッ

パシッ

流石雲雀先輩だね

急に投げても当たり前のようにキャッチしたよ

「……ケイタイ?」

“僕はもう1つ持っている”

もし居場所が特定されるのは嫌だから

実は無線は持ってないんだよねー

「わかった」

“君は真6 弔花の足止めして先に戻っててくれ

彼ら以外にも敵がいる”

「どういふこと」

“僕にしかわからないと思う……”

だから僕が足止めするよ

僕は逃げる手段があるから大丈夫だ”

「僕も一緒に行く」

“心配するな

僕は約束は破らない
信じてくれ”

「……わかった」

”ああ”

スケボーと逆刃刀を出そう……

よし！急がないと……！

……やっぱり私専用だったね……

型がよまれてる……

まあ戦闘センスとリングの力で勝ってるから

ボンゴレ匣は出さずにすんでるけどね

型をコロコロかえれば着いていけないしねー

白蘭と真6弔花にはやっぱりきついなあ……

あーそういえば……

この服どこかで見たような……

なんだったかな……

確か原作では獄寺君が小さくなって

ツナ君が暗殺されそうになった時の服……？

まあいいや……

「よし！！ 出せえ！！」

よ、よかった！！

みんなが来た！！

「やったんだね！ 獄寺君！！」

「オレじゃねえーツス

ヒバリのハリネズミのトゲが
増殖して足止めしてるんす」

ヒバリさんが……！

「ボスー」

「あっ」

「白蘭!!」

「ひいっ あいつ!!」

「こつちに来るー!!」

「どーしよー!!」

「お前達は先に行け!!」

「今度はオレが時間をかせぐ」

「僕がする」

「恭弥お前は先に行け!」

「ヴェントが残ってるんだ」

「僕はヴェントと帰る」

「!? どういうことだぁ!!」

「説明しろお!!」

「この状況でもめてるー!?!」

「お前ら今そんなこといつてる場合じゃないぜ」

「真6 弔花がすぐ来るぜ!」

「シューアアア」

「あれ……?」

「誰が相手だろうと」

「僕を止めることはできないよ!」

「あっ」

「この感じ!!」

「クフフフ……」

「それはどうでしょうねえ 僕に限って」

「骸様」

逃亡 2

「今この場で足止めさえできれば僕の勝ちですよ

ヴェントは逃げる手段があるみたいですしね

さあ 大空のアルコバレーノを

並盛町へ連れて行くのです沢田綱吉」

「骸……！」

骸がオレ達を助けるために足止めをするなんて……

「ツナ

ここは骸にまかせたほうがよさそうだ！」

「でも……骸様！」

クローム……

「……………骸！」

また会えるのか!？」

「当然です

僕以外の人間に世界を取られるのは

面白くありませんからね

いいですか？ 沢田綱吉

絶対に大空のアルコバレーノユニと

ヴェントを白蘭に渡してはいけない

まっ ヴェントの方はほっといてもいいでしょう」

やっぱり優とはあんまり仲良くないのかな……

「黙って……」

ズバツ

「ぐっ!!」

「あ

骸の有幻覚が……

「……………さあ早く転送システムに炎を」

「わ………わかった

クローム！ み………みんな！」

んー結構時間がかかった……

ツナ君達が転送された光を見た後に

すぐ逃げてもよかったんだけどー

この人達に後を追われたら

めんどくさいから全員倒しちゃったー

それにしても型がばれてるの本当に辛いなー

今さっきの人達もつと強かったらきつかったよ

まあいいや

さつきと逃げよう……疲れてるし……

あれ？誰か来る？

まだいてたのか……

ガッ!!!

うわー！！

今のは危なかったよー！！

「ヴェント君、どこにいくのかな？」

白蘭さん登場だね……

いきなり攻撃するの止めてほしいよー

さっきの人たちと同じ反応速度だったら

今のはやばかった……

〃僕を捕まるために

彼らを準備してたんだな〃

「ヴェント君が素直に捕まるとは思わなかったからね

光学迷彩を着て殺気を出さなかったら

ヴェント君以外わからないからね」

そんな名前だったんだ……

まあいいか

やっぱり私の行動を読んだのか……

しょうがないか

私が大人しく捕まるわけがないのを

白蘭さんが1番知ってるもんね(笑)

「ヴェント君が彼らを倒してる間に

スキを見て捕まえようとしたけど

ユニちゃんにしてやられたよ」

あーなるほど

この人達は私にしか倒せないからね

そこに白蘭さんとか一斉に来たら

特殊能力を使ってもきついね

〴〵そうか

ユニに助けられたな……”

助けたつもりが助けてもらってたよ

「まだ助かってないけどね♪

僕はまだヴェント君を逃がすつもりないしね♪」

”……白蘭が自ら

僕の相手をしてくれるとは思わなかった!!”

それにしても話しながら戦ってるのがしんどい!!

「他のみんなにはユニちゃんを頼んだからね」

なるほどねー

原作と違って白蘭さんだけがここに残ったんだね

……やっぱりこれを開けないとダメだ

いろんな型を知ってるけど

結局使う型はほとんど一緒と思うしね

人間そう変わらないよ

だって白蘭さんの反応レベルがまじできついもん!!

残り3つ使ってしまうのは当然だね……

開けるためには何とかスキを作らないと……

いや、私の能力をなめるなよ!!

白蘭さんと戦いながらも何とかできる!

風でボンゴレ匣を動かしてリングに無理矢理はめる!

カチツ

〃ミント頼むぞ!〃

ガルツ!!

うわーなんかまた目の色が変わったよ

「かわいい恐竜だね

やっぱり君は僕の仲間だよ」

〃なぜ?〃

「僕の仲間は

恐竜の匣兵器を使ってる人もいるからね」

〃へえ

でもこれは僕の大事な思い出だ

君の仲間と証明するためじゃない!」

本当に特殊能力の逃げ方をよく研究してるね

ずっと触ろうとしてくる

手数が多すぎるよ!

原作のイメージでは細かい技を出さないと思ってたのに!

……あ

もしかして……うわーそんな気がしてきた!!

「君は僕の仲間になってもらうよ」

〃断る〃

ガルツ!!!

〃ミント!!〃

ブオオオオオ!!

おー白蘭さんビックリしてるねー

スピードが速いから

この距離だったら逃げるのが精一杯だしね

白蘭さんが手数が多くした狙いは

特殊能力のことももちろんあるけど

ミントが手を出さないようにしてたんだろうねー

まあ恐竜の匣兵器は戦闘能力があがる分

凶暴性になって理性が少ないんだろうね

でも私のミントはえらいんだ

ギリギリ私が当たらない所を狙ってるよ

それも私と白蘭さんを離して視線をはずしてるしね

よし！さっさと逃げよう♪

“じゃあな”

「ヴェント君の特殊能力はやっぱりすばらしいね

後2つか……

はやく捕まえないと全部使ってしまう……

でも……今のうちにユニを……」

逃亡 3

「四方に何か散ったぜ！」

「来たー！ー！！！」

「そんなすぐ来んのー！？」

「転送システムは壊れる寸前だったんだ！」

「だから着地に失敗して四方に散ったのかも」

「どっちみち奴らは来たぞ」

「ヤバイよ！！」

「どーしよー！！？」

「恭さん！！」

「どちらへ！！！」

「ほ、ほんとだよ！」

「ヒバリさんはどこに……」

「一つ並中の方に落ちた見てくる

ヴェントは僕の元に

帰ってくるって約束したしね」

「ガーン！！」

「この人あくまで学校と優が一番なのねー！！」

「私も行きます！」

「恭弥っオレも行くぜ！！」

「デイーノさんの部下がいたし

ヒバリさんはもう大丈夫かな……？」

「ヴェントが残ってるってどういうことだあ！！」

「こ、こえー！？」

「え……えつと……」

「真6弔花以外にも敵がいてたみたいで……」

「足止めするから先に帰ってて……言われて……」

「クソガキイイ！！」

「あいつが捕まったらまずいのに」

なんであいつが足止めして残ってるんだあ!!」
やっぱりこえー!!

「いや……その……」

逃げる手段があるって言ったし……」

「ツチ 通信機を貸せ!!」

クソボスに報告して救援を頼む」

た、助かった……」

よし！無事到着♪

多分白蘭さんは特殊能力で逃げたって思ったんだろぅね
というか……勘違いしてもらわないと困る

森の中で誰もいないしー普通に話していいかな？

「ミントありがと♪

すつごく助かったよー」

ガルツ♪

あ、戻っちゃった

あんまり炎を注入しなかったのと

ミントの炎も吸っちゃったんだろぅねー

お礼がギリギリ言えてよかったよ

まあリングにチェーン巻いておこう……

この場所ばれたらまずいしからねー

さて雲雀先輩に連絡しようー

多分かなり心配してると思うしねー

それにしても形態変化のことを話しててよかったよ

話しててなかったら絶対ついてきたからね

『やあ』

あ、出た出た

「無事逃げてきましたよー」

そっちは大丈夫ですか？」

『一つ並中の方に落ちたから今向かってるよ』

「そうですかー」

それは心配ですわねー

あー！ 私を捕まえるために白蘭さんが

残っていたので真6弔花の誰かですよー」

『……怪我不い？』

「ないですよー」

ちよつとだけ戦いましたけどー

ミントが偉かったです

白蘭さんのスキ作ってくれましたよ

竜巻でびっくりしたのもあると思いますけどね」

『そう』

「はい♪」

私もそっち向かいますわね」

『待ってるよ』

「じゃ、また後でー」

んー原作通り進んでるかな？

隊長ったら急に連絡してきたと思えば無茶を言うわく

『そおだ!!』

腕の立つ奴すぐに日本へ送れ!!』

「そんなこと急に言われてもーーん」

『敵の主力がこの並盛に集まって来てるんだぞお!!』

「それはソソる話だけどー

ヴァリアーは今各地で行われた

ミルフィオーレとの戦いの後始末やら

残党狩りでてんてこまいなのよ」

隊長がいらないのも原因なのよお？

『んなの後回しにしろ!!』

クソボスにヴェントが捕まった可能性があるかと伝える!!』

「んまあ！ それは大変ね！」

それだったらボスが動くかもね」

ボスの本気を今度こそこの目で見れるかもしれないわ」

『ああ フランはどーした!!』

奴の幻術が必要だあ!!』

「フラン……………」

えーつとあの子たしか

女の所へ行くつていつてたわねえ』

『女だあ!』

本当にみんな自由行動しすぎよお！

優ちゃんが怒ってくれないかしら……

「あら？」

いつの間にか隊長との通信が切れてるわ」

何かあったのかしら……

まっ隊長だから大丈夫よね」

それより優ちゃんだわあ

「ちよつとおみんな大変よお」

あれ？電話がなってるねー

雲雀先輩からかな？

何かあったのかも……

……

えええええ!!!

かかってきたよ……かかってきたよ……

あ、2回も言っちゃったよ!!

え……出ないとまずいよね……？

絶対出ないとまずいと思う

無視されたとかでカツ消されたくないしね

うわー緊張するよー

『おい』

いきなり「おい」って……（笑）

緊張した私がバカみたいです……

「もしもし？」

どうかしたんですか？」

『……捕まっつてねえみたいだな』

「大丈夫ですよー

私はそんなに簡単に捕まりませんよ♪」

ブチッ

……切れた……（笑）

心配してくれたのかな？

逃亡 4

うわー遠くから見てもすぐわかるよ……

かなりの炎だもん

なんて名前だったっけ……

しゅらかいこう……？

うん。そんな感じの名前だった

……急がないとディーノさんがやばいじゃん!!

うわー間に合わなかった……

ドコッ

デイジーだったっけ？

その人を雲雀先輩がぶっ飛ばしたところみたい

「並中で暴れるのやめてくれる？」

君達には制裁を与えなきゃね」

ドガッ

あーあ……

今度はディーノさんをぶっ飛ばしたよ……

「ぐあっ」

「恭さん!! 何てことを!」

フワッ

「浮いた……」

本当にもう少し優しいやり方がないのかなー？

”どうも”

「!?!」

”これ以上衝撃与えるのが体によくないと思って

勝手に浮かべさせてもらったよ”

「ヴェント助かったぜ……」

あいつに借りできちまったな」

”……そうだな”

「どういうことですか?」

「助けたのさ……」

あいつなりのやり方でな……」

“ああ”

わかりにくいけどな”

「やっぱあいつにも初代守護者に似てるトコあるな……」

いや……私のせいで原作より似てないよ

「初代ボンゴレ雲の守護者にですか!？」

「ああ……初代雲の守護者は

ある国の秘密諜報部のトップだったが

誰にも迎合することはなく1人でいることを好み

フアミリーと足並みを揃えることはなかった……

だがひとたびボンゴレ一世の正義と

己の正義が重なった時には

誰よりも多くの敵を倒し誰よりも優しかったという

まっ恭弥の場合はヴェントだけは最初から仲間だからな

そばにいてもよくていつでも誰よりも優しいってことか……」

あーなるほどね

私だけ仲間だもんね

私がない時はいつも1人でいるもんね

確かにそう考えるとありえないかな……？

でもやっぱり違うよねー

まあ考えてもしようがないか……

“本当に僕と他の人の態度が違いすぎるよ”

「ぶっ！ そうだな」

“ああ”

「いくよ ロール

形態変化」

クピイイイイ!!

「ぼば!!」

「あれが恭さんの……!!」

「そうあれが恭弥のボンゴレ匣

なにもものにも囚われず

我が道を行く浮雲と謳われたアラウデイの手錠!!!

やっぱりここは原作通りなんだねー

ずれてたらどうしようかと思った

〃へえ 手錠かー

カツコイイな〃

「あー」

〃どうしたんだ？ デイーノ〃

「いや……今わかった……」

何を？

「恭弥がなんでヴェントが仲間か……」

〃は？〃

「雲を動かせるのは風だからな

雲を捕まえられるのは風だけってことだ」

〃あーなるほど〃

確かに風だったら雲を捕まえられるかもー

大空は包容だしねー

ちよつと違うもんね

「まっ

あいつの心まで捕まえちまったみたいだけどな」

……………／／／／

〃……それは反則だ……〃

「ぶっ」

デイーノさんも私をからかって遊んでる気がする……

「!? ヴェントがどうしてここにいるの!？」

白蘭様は!？」

あ、話をしてたら気付かれちゃったよ

草壁さん達の後ろに隠れてたんだけどねー

〃彼を倒せば答えてあげるよ〃

「早く吐きなよ!!」

あー私の方に来ちゃったよ

原作がかわって私が戦うことになるのかな？
ドカツ

あ、また雲雀先輩にぶっ飛ばされたねー
いやー助かります

出来れば今は戦いたくなかったんだよねー

「僕を無視するとはいい度胸だね」

「君 邪魔だよ!!」

「覚悟はいいかい？」

おーすごい……原作に戻ったと思う！ (笑)

ドオツ

ありやー腕がきれた……

みんなトカゲの自切とかいってるけど

そんなのどうでもいいや……

〃雲雀恭弥を怒らせてしまったな……〃

「え!？」

「君のボンゴレ匣は僕チンと相性最悪さ」

もうあきらめてユニ様の居場所と

白蘭様のことをはいちやいなよ」

「いらないな

その程度なら武器はいらない」

「あれ!? 手錠が……」

「いつの間にか2つに……」

「校舎を壊した罪で君を逮捕する」

〃だろぅな……〃

学校を壊せば雲雀先輩は怒っちゃうよねー

デイジーを2回ぶっ飛ばしたときに

自分で校舎を壊してるのにねー (笑)

〃さて……デイーノ治療するぞ〃

多分もう原作通り大丈夫だと思うしねー

「おい！ 見なくていいのか？」

“彼は負けないよ”

あー勝手にしてるから君は見ててもいいぞ？”

「お、おう……」

んー……叫び声が聞こえる……

やっぱりこの状況で治療する私って凶太いよね

「思ったより情けないね

君が死にたくても死ねないのは

晴の活性の炎が体内を巡っているからだろ？

これは風紀委員が没収する」

「リングをとつちまえば

真6弔花といえど……ただの人間も同然だ」

“ん？ 終わったのか？”

「ああ」

「やりましたね 恭さん!!

さすが委員長!!」

草壁さんが言ってるのに完全無視だ（笑）

“お疲れ様”

「ヴェント」

“どうした？”

「おかえり」

あ……そっか……

雲雀先輩の前に戻ってきたもんね

“……ああ たいま”

『ツナ聞こえるか？』

「あっ この声!!」

「跳ね馬っスね！」

よかったー!!

ディーノさん達は大丈夫だったみたい……

「え……はい……はい……はい……」

はい……はい……本当ですか!!」

やっぱりヒバリさんは凄い!!

それに……

「ヒバリさんが真6弔花の

デイジーをやっつけたって!!」

「わーっすごい!!」

「やったな!!」

「それでヴェントも無事逃げれたって

ヒバリさんに連絡あったって」

「よかったー」

本当によかったー

京子ちゃん達は優が残ったって

聞いてからずつと不安そうだったし……

これで安心できるよね……

「うん！」

白蘭がヴェントを捕まえるために

残ってたみたいだから

多分白蘭はすぐ攻めてこないと思うって……

でも多分だから期待はしないでって……」

「……よく逃げれたな」

「う、うん

少し戦ったみたいだけど逃げることを

優先してみたんだから大丈夫だったみたい

それでヴェントはすぐこっちに来れないし

見つからないと思うから

ユニのほうを狙われやすいから気をつけて

って伝言をもらったよ」

「そうか」

あと……なんだったかな……

あ！そうだ！

「……真6 弔花の中に恐竜の匣兵器を

つかう人もいるみたいだから気をつけて……」

恐竜の匣兵器……すごいのかな……

でも優がオレ達に伝えたんだ……すごいよね……

「……わかったぞ

まー当面の危機は去ったな」

「もう敵も打つ手がないっすからね」

そ、そうだ！

優も逃げれたみたいしー安心だよ！

デメリツト 1

んー……白蘭さんは

特殊能力で逃げたって思ってるってことは
私はしばらく大丈夫だよー

「優 さっきのはどういう意味だ？」

オレ達と合流してるっていえばいいだろ
なんでウソの情報をツナに教えただ？」

やっぱり疑問に思うよねー

ウソってわかってるのに

伝えてくれたディーノさんには感謝だね！

「んー……敵を欺くにはまず味方から？」

「どういうことだ？」

「白蘭さんは多分私が特殊能力で逃げた

って思ってるんですよー」

「え!?! 違うのか!?!」

「優 どういうこと」

雲雀先輩も気になったみたい……

ちゃんと話そうかなー

まだ大丈夫と思うしね

「えつと……今から話すことは

この戦いが終わるまでみんなには

黙っててもらえますか？」

今いるのは雲雀先輩と

ディーノさんとロマーリオさんだけなんだよねー

草壁さんはアジトを見に行つたからいないけど……

まあちゃんと私のことは黙っててください

ってお願いしたけどねー

それにしてもビミョーな距離感があつて

話すのが大変なんだけど……

まあ群れない雲雀先輩らしいけどね

「なんでだ?」

「結構ややこしい話なんですよねー

混乱させてもしょうがないので……」

「わかった」

「私の特殊能力ですが……

実はデメリットがあるんですよ」

「僕、聞いてないよ」

「だって言っていないもん

「今はじめて言いましたしー

本当はデメリットがあるとは思わなかったんです

私も気付いたのは最近です」

「……わかった」

「これは雲雀先輩に言いましたけど

特殊能力によって私は特異体質になってるんです」

「そうなのか?」

「はい

よく考えてください

私の体が特異体質に変わるだけなので

一瞬でここまで移動は普通無理ですよ?」

「……そうだね」

「なるほど……」

「まあ特殊能力について詳しく話しますね」

「ああ」

「順序良く話していきますねー

まずパラレルワールドで特殊能力が

どの世界でも2つだけ一緒っておかしくないですか?」

「なんでだ?」

「……確かに変だね」

「流石雲雀先輩ですねー

「これだけでわかるんですねー」

雲雀先輩も頭の回転が早いんだよねー

「当たり前だよ」

「ちよ、待て!! 詳しく教えろよ!」

あ、ディーノさんが焦っちゃったね

ディーノさんには言ってるから

わからないのは当たり前なんだけどね……

「簡単に言うとうー」

過去がバラバラのはずなのに

特殊能力が2つだけはどの世界でも

絶対一緒っていうこと自体がおかしいんですよ」

「ん? 産まれた時から使えてた

っていうわけじゃないのか?」

「それは違うよ

優は発動してないって言ったってことは

2つは自分で決めたってことだよね」

雲雀先輩は本当にすごいなー

あの少ない情報の中でわかるんだもんね

「そうです

まあ詳しくは言えないんですが……

どのパラレルワールドでも同じタイミングで

私はアルコバレーノになったって思ってください

そしてその時にお師匠さんに必ず会ってます」

「天才って言った奴とか?」

それが関係あるのか?」

「ものすごく関係がありますよ

だって特殊能力はお師匠さんが私にくれたんですもん」

「!?!」

みんなビックリしたねー

見守ってるロマーリオさんまでビックリしたよ (笑)

「今から話すことは少し矛盾してると思いますが

あまり突っ込まないで下さいね

これは話せない内容なので……」

「わかった」

「全てのパラレルワールドで

アルコバレーノになった瞬間

お師匠さんと私が2つだけ特殊能力を決めたんですよ
残り3つを保留にしたんです

だから残り3つはバラバラなんですよ

まあかぶってるのもあると思いますけどね

それは白蘭さんしかわからないです」

「なるほど……」

でも優はなんでその2つにしたんだ？

1つは自分のためじゃないだろ？

最初に決める時は普通自分のために

特殊能力を決めないか？」

おー！ディーノさんもこの矛盾に気付いた！

やっぱり部下がいれば違うね!!

「それはですねー

自分のことは他にももらったんですよ」

「どういうことだ？」

「リボン君は私の過去を知ってるから

納得すると思いますが……

私ってアルコバレーノになる前は

運動神経とか全部一般人より低かったんですよねー」

「……おい……まさか……」

「そうです

身体能力を全部あげてもらいました

もちろん戦いの才能ももらいましたよ

ただ攻撃力、力だけは一般人ぐらいにして

って頼みましたけどねー

元々一般人だったんで致命傷の与える攻撃を

したくなかったっていうのが理由ですよ」

「そいつは何者なんだ……」

神様です

「それは言えません

ただお師匠さんは私以外手助け禁止なので
表立って出来ないんですよ

例えば白蘭さんと戦うとか……」

「優の師匠が手を出すと

優以外の人も助けることになるからだね」

「雲雀先輩、当たり前です

私にしか手助けできないので

私の身体能力をあげたり武器を作ってくれたり
特殊能力を私にくれたり

お師匠さんが私のために能力を使ってくれたり
私に戦い方を教えて鍛えてくれるんですよ

全て間接的に助けてる形になってるんですよ」

「なるほど……」

「でもせっかく身体能力とかあげてもらったのに
私の性格のせいで使いこなせてません」

「どういうことだ？」

「私って誰にも怪我してほしくないって思ってるので
無意識に相手の力に合わせてしまうんですよ」

「そうなのか？」

「はい

お師匠さんに治せないか相談したら

無理に治せば魂が傷つくって断られました」

「……魂が傷つくとかわかるのか……？」

だって神様だもん

本当にこの一言ですむよねー

「そうですよー

それに身体能力をあげたって言っても

あげすぎて私の体に負担がかかると問題なので
負担がかからないギリギリまでしかあがってません」

「……優のこと考えてるだな」

「みたいですねー」

私も後から聞いてビックリしましたよ」

「……あげる時に知っとけよ」

初対面の奴を信用しすぎだろ……」

あ、デイーノさんが呆れちゃった（笑）

神様だと思ったから信用したんだけどねー

「んーでも私がアルコバレーノになるって

知ってたみたいですよしー」

「……そいつは本当に何者なんだ」

「んーカッコイイですね」

あ、さらに呆れたよ（笑）

だって私の理想って思ったぐらいだもん

……あれ？雲雀先輩が機嫌が悪くなってない……？

な、なんで!?

「と、とりあえず……話を戻します！

特殊能力ですが……

私が使ったらデメリットがあるんですよ

お師匠さんにはないんですよけどね

2つもらった時にお師匠さんに普通にいいよ

って返事したんですよ

よく考えたら対価を払ってたんですよねー」

「優 どういうこと

対価って何」

あ、雲雀先輩が怒ってる……

「大丈夫ですよ

私が普通にいいよって思える内容ですから」

「はやくいいなよ」

「話しますからちよっと待ってください

順番に話さないとややこしいので……」

「……わかった」

デメリット 2

「えっと特殊能力の1つは

自分でコントロールできるんですけど

もう1つは常に発動してます

ここで結構違いがあります」

「コントロールできる方が体力を渡すほうだね」

この2人と話そうとすれば

頭の回転が早いからすぐ進むよねー

「そうです

まずそっちから話しますね

実は体力が減ってるから眠くなるのかな

と思ってたんですけどー……違うんです」

「どういうことだ？」

「人間って誰でも無意識に力を抑えてるもんですよ？

体力を全部あげるって本当は出来ないんですよ」

「優が眠くなるのは

特殊能力の反動ってことだね」

「なるほど……」

「その通りです。それがデメリットですよ

コントロールできる方は発動してる時間が

長ければ長いほど疲れて寝ちやうんですよ

起きておこうと思っても無理なんですよねー

そして限界までいくと寝てる間はかなり無防備になります」

神様になんでここまで眠くなるんだ？

って聞かれたのが気付いたきっかけなんだよねー

「なるほど……」

昔……限界って言って寝たのはそれか……」

あースクアールさん助けた時の話かな？

確かにあの時は迷惑かけました……

「そうです

多分ですけどー精神状態によって

回復にかかる時間が変わるみたいですよ

起こされたり起きようとしたら起きますけどねー

その場合は体調は万全じゃないですね」

「そうなのか？」

「はい

これは今までの使った経験での予想ですけどね」

この前が1日中寝てたのは白蘭さんのせいであんまりいい精神状態じゃなかったんだよねー

元々嫌いなバトルを何度もして精神的に疲れてたし

起きようとしなかったっていうのもあるけどね

そして実は雲雀先輩がそばにいます

回復がはやいことがわかった……（笑）

私って本当に単純だよね♪

「ちなみに発動条件は相手に触れることです

自分の分をあげるので……」

「それもそうだな」

「はい

「はい

本当は回復力とかをあげたかったんですけどね

それは諦めましたよ」

「なんでだ？」

「1度あげたものはかえってこないんだね」

「そうです

流石に私の回復力が無くなっていくのは

まずいので……」

「……なるほど」

何度も使えるようにするために

体力にしたってわけか……

体力は寝れば回復するしな……」

「そういうことです

次は……幻覚がきかない方は少し複雑ですが……

実は幻覚がきかないのは

私の目がかわつてるんですよ」

「どういうことだ？」

「えっと幻覚って脳の錯覚ですよね？」

そして想像力がかかつたりするんですよ？」

「ああ」

「私は2つの景色が見えてるんですよ

幻覚じゃない景色と幻覚の景色が両方見えて

幻覚じゃない景色が見えてるから

錯覚が起きないんですよ

モニターでもわかつたんですよ

それぐらい凄い目と思つてください」

「わかつた

でもそれのどこにデメリットがあるんだ？」

「一番わかりやすい例はクロームちゃんですよ

クロームちゃんは骸君の強力な幻覚によつて

内蔵をつくつて生きてるのは知ってますよね？」

「ああ」

「……優には出来ないんだ」

雲雀先輩は本当にすごいよねー

「そういうことです

常に発動してるので出来ないんですよ

もし私がクロームちゃんと同じことになったとしても

私にしようとしても無理なんですよ

目を隠して生活して行くか……

有幻覚ぐらい強力だったら大丈夫と思うんですが……」

「有幻覚作れるレベルの術師なんて

ほとんどいないぜ……

強力なリングが必要だし長時間は無理だ……」

やっぱり骸君ぐらいの術師でもきついんだよねー

「そうなんですよー

リング戦の時なんか大変でしたよー」

「なんでだ？」

「1日で校舎が直るわけじゃないので

直ってない部分は幻覚でコーティングしてたことを
覚えてます？」

「まさか……」

あ、今回はディーノさんも気付いたー

「そうですよー

私にはきかないのでー

もし穴があいてる所に歩いたりしたら

私の場合落ちちゃいますよ（笑）

風で浮いて歩くふりしてましたよ」

「……優にしかできないな」

「そうですねー

ちなみにこの特殊能力に決めた時

目の色が変わりましたよ」

「そうなのか!？」

「はい

私の本当の目の色は「水色」……へ？」

「水色だよね」

「どうして知ってるんですか!？」

雲雀先輩に会ったときは私はもう薄い緑色だったよ!？」

「優の入学書類の写真は水色だった

写真だから違う色にうつったと思ってた」

あ……なるほど……

偶然ギリギリ誤魔化せる目の色だったね（笑）

というか……よく覚えてるね……

あ、だから私の名前を確認したのかな？

目の色が違うから言ったのかも……

「そうですよー

元々は水色でした

対価を払ったというのは目の色が変わったことです」

「わかった」

あ、怒らなかつたね

「お師匠さんの場合は幻覚ってわかつてても

幻覚にわざとかわかることができるとはいいですよ

私には無理だったんですよ

お師匠さんに話したらビックリされましたもん」

多分私にそういう能力はないから

こんなことが起きたんだと思うんだよねー

「なるほど……」

「幻覚がきかないのは目のおかげって

絶対言わないで下さいよ

これが漏れて私が捕まるとどうなるか想像つきますよね？」

……うん

本当に嫌な想像しちゃったよ

「……ああ

幻覚がきかない特殊能力はデメリットもかなりあるな」

「そうですねー」

結構大きいほうですね」

デメリット 3

「常に発動する方は対価を払うことになります
量はその特殊能力の大きさにかかります」

「……そう」

「多分ですけど」

入江君が見た私が未来で片目を失った
ってというのは対価を支払った結果ですね」

「……どうということ」

「例えば予知目とかにしたんですよ

出来ても2、3秒前ですけどね

それ以上は私が見えることによつて

私の行動の選択肢が増えてちやんと見えません

多分また目の色とかがかわつてますね

眠くなるのが嫌で片目を常に発動状態にしてるんですよ」

「なるほど」

普段は眼帯してるってわけか……」

「そういうことです」

普段から予知を見ても生活しにくいですし

多分3つ見えることになるんで

頭の情報処理が大変で疲れると思います

多分それがデメリットですよ

今2つ見えて疲れてないのは情報処理が

ギリギリセーフだと思えます」

学力あげたのがここに来て役に立ってるんだよね

実は学力があがっても全てわかつてるわけじゃないんだよ
勉強しないとわからないんだよねー

頭の回転が早いってことだと思う

「特殊能力のせいで片目が普段使えなかったんですよ

目が見えてた人が眼帯することになっていたら

失ったって思いますからね」

「ああ

そうだろうな」

「片目はわざとですよ

だから入江君に言わなくていいって言ったんですよ」

「……そう」

片腕のこと気にしてそうだね……

「それに片腕は自分で斬った可能性もありますしー」

「!?!」

「可能性ですけどね

まあ心配しなくても大丈夫ですよ

対価を払うっていつでも

少しだけ何かが変わるだけですよー

目をかえるというのはいじやないとダメですけど

どこをかえるって明確に決まってるものだったら

私が決めてもいいみたいですしー」

「……わかった」

「ちなみに未来の私が使った特殊能力は

私の精神世界をかえたんです

元々私は精神世界がお師匠さんと

つながってるので出来ました

そしてユニちゃんの精神世界と

つなげるようにしたんですよ」

「ユニが翔んでたから未来の優が翔べたんだな

特異体質にかえるだけじゃ優は翔べないからな」

「そうです

で、これはコントロールする方ですね」

「そうだな」

だから10年後の雲雀先輩が言ってたのは

多分ユニちゃんに会いに行つて

疲れて寝てたんだろうねー

特殊能力のことを黙ってたから

体調が悪いとウソをついたんだろうねー

「ただ……相性関係なく繋げれると思うので

私が大丈夫でも相手が危ないと思うんですよね

相手の精神が壊れる危険があると思います

ユニちゃんが魂が壊れてるって入江君から聞いたから

未来の私は使ったと思います

それぐらいこの能力の使い方は危険なので

白蘭さんの前では言いたくなかったんですよ」

「確かに……言わない方がいいな」

「はい

それで特殊能力で逃げようと思ったら

どう考えてもコントロールする方になると思うんですよ

例えば私の体質を変えて透明人間？とかしようと思うと……」

「常に発動するのは無理だな……」

「そうです

透明人間？とかにした場合は多分攻撃できないですし

私が誰にも見えなくなっちゃいますよ」

「確かに……」

「もしかしたら攻撃が当たると

強制解除される可能性もあるかもしれません

これは試してみないとわかりません」

「……そうか」

「はい

お師匠さんにもこれはわからないって言われたんでね

最悪の予想が攻撃されると強制解除という結論でした」

「そうだな……」

特殊能力はその天才っていう奴と

会わないとももらえないのか？」

「精神世界で会うとももらえますよー

私だってお師匠さんには

1度しか会ったことないですしー」

「そうなのか!？」

「そうですよー」

あ、ちなみに特殊能力によって

死んじやうレベルのものももらえないですよー

サポートレベルと思つてくださいね」

「優以外は手助け禁止だからか……」

「そうです

あ、話を戻しますね

さつき言つた透明人間？みたいな能力は

体力をあげるのに比べて反動が多分大きいですよ」

「なんでだ?」

「優の力の範囲を超えてるからだね

体力は元々優が持つてるものをあげるから

少なくて済むんだよね」

「雲雀先輩もそう思いますか?」

「そうだね

「反動がなければ優が勝てる世界があるよ」

「そうですよねー」

つまり能力を解除すると多分すぐ寝ちやうので

奇襲しようにも結構リスクが高いんですよ」

「なるほど……」

白蘭が1人で行動してない限りきついな……

それにどこにいるかわかつてないと無理だしな……」

「そうですよ

「白蘭さんはどの世界でも

強力な軍隊とかも作ってますからねー

予知目を使ったとしても私の場合は

必ず1人对複数なので結構きついと思います」

どの世界でも真6弔花がいるからねー

「ああ

それに優はどの世界でも狙われてるからな

元々奇襲かけようにもきついだろ」

「そう思います」

多分白蘭さんが侵略してる途中とかにも
行動したかったと思うんですけど

その時はその時で私は他のマフィアに狙われますし

どの世界でも白蘭さんには要注意人物と思われてるので
なかなか行動出来なかったと思いますよ」

この世界の私もなかなか行動出来なかったと思う……

だからほとんど原作通り進んでるんだと思う

「そうだろうな……」

「ちなみにさつき白蘭さんとちよつと戦った時に

かなり攻撃の手法が多かったんです

多分逃げる方法の発動条件が

誰にも触ってはいけないのが多いんですよ

そして私の力の範囲が超えてるため

発動出来るまで少しかかると思います

私のことを本当に研究してると思いました」

「……………」

あーこれを言うことやっぱり気付いちやったね

「……自分で斬った可能性出てきたな」

「そうですねー」

私もさつき白蘭さんとちよつと戦った時まで

その可能性には全く気付きませんでしたよ

答えは私にはわかりません」

「……そうだな」

「まあ話を戻しますね

私が特殊能力で逃げると

理由は詳しくわかってないと思いますが

しばらく私は何も出来ないって思ってるはずですよ」

「ああ

パラレルワールドの知識として入ってるはずだ」

「そうなんですよねー」

「1人学校の方に落ちたって聞いたけど」

「雲雀先輩は負けないって思ったから姿を見せました」

「そうか」

「そして私の特殊能力を使ったら」

「捕まえにくいって知ってますし」

「私は何も出来ないの今の中に」

「ユニちゃんを狙ってくると思うんですよー」

「それをわかってるんだったら」

「すぐオレ達も向かわないとまずいだろ？」

「そうなんですけどー」

「できれば特殊能力を1個使ったって」

「勘違いしてもらってるほうがいいかなって……」

「切り札は隠しておきたいんですよねー」

「なるほど……」

「それに雲雀先輩はしばらくここにから」

「動かないですよね？」

「そうだね」

「な!?! そうなのか!?!」

「当然ですよー」

「なんでだ……」

「あれ? ディーノさんが凄く疲れた顔をしてるよ」

「んー多分だけど真6弔花が」

「どう攻めてくるかわからないから」

「もし学校に来た時のためですよね?」

「そうだよ」

「優……よくわかるな……」

「雲雀先輩だったらそう思うかな? ってー」

「それにさっきまでここで戦ってたから」

「しばらく様子見た方がいいのはわかりますしね」

「そ……そうか……」

デメリツト 4

「まあ別に特殊能力使ってないのは
ばれてもいいんですけどー」

入江君とディーノさんに特殊能力を使ったんで
このままずっと戦い続けると私が起きておこう
と思っても寝ちやうんですよねー」

「な!？」

「それはすつごいまずいですよね」

「……そうだな」

「まあもう少し大丈夫なんですけどね」

でも雲雀先輩が移動しない間に

私は1度回復したほうが

どう考えてもいいと思うんですよねー」

「……それもそうだな」

白蘭が優を狙うことをやめてる

このタイミングが一番いいな……」

「ですよねー」

まあ入江君とディーノさんに

特殊能力を使った私が悪いんですけどね」

「……すまん」

「ディーノさんが謝ることはありません」

後先考えず行動する私がバカなんですよ

それにディーノさんには勝手に体力あげたんで

気付かなかったでしょ?」

「ああ……」

良く考えると本当にバカだよねー

まあ私らしいけどね(笑)

「優」

「なんですか?」

「どうやって移動したの」

なんて説明しようかなー

「未来の私が過去から来る私のために

お師匠さんに作ってもらってたみたいで

この前精神世界で会った時にもらったんですよねー」

「そうなのか？」

「はい 超炎リング転送システムを

作ってもらってたみたいです」

「な!？」

「白蘭さんが作ったのよりかなり小型ですよー

まあ私以外手助け禁止なので

私の炎にしか反応しないので

移動できる人数が2人ぐらいが限度ですけどね」

「それを作れるほどの天才だったら

なんで未来の優は普段から使ってたんですかね？」

「それはですねー

使いたいと思っても炎の量が足りないんですよ」

2つのリングの炎の威力を

調節するのに1日半使っちゃったよ

さつき白蘭さんと2個つけて戦ったけど

ある程度抑えないと体力切れになりそうだったもんね

念のために原作通りいかない可能性あるから

ある程度は残してたのは正解だったよねー

違和感なくつけられるタイミングはあの時しかなかったしねー

白蘭さんと戦ってる途中につけるとか無理だ(笑)

本当に威力の練習して良かったよ

必要な時に足りなくなったら終わりだったね

「なるほど……」

ボンゴリングとマーレリングでなんとか使えるのか

「そうですね

過去から来た私は両方持ってるよ

わかってたので頼んでみたいですよ」

まさか頼んで2日で作ったとは言えない(笑)

他にも頼んだのに……(笑)

「そうか」

「結構移動するのにも炎をもっていられるんですよ

この方法で逃げようと思うと起動するのに

私がいっきりに炎を注入しないとダメなので

体力が減つてると炎の量が減ってしまうでしょ?

今の私は同じ方法で逃げようとすれば次は逃げれないので

まだ眠たくなくても回復した方がいいと思いませんか?」

「そうだな……」

「それに今私がユニちゃんを助けに行っても

足手まといになる可能性が出てきたんで……

だったら私はここにいないって思ってもらって

特殊能力を使ったと思わせるのがベストかなって……」

「それもそうだな

優がここにいるってばれたら

白蘭は優も狙ってくるからな」

「私もそう思います

だからツナ君達には私のことを気にせず

ユニちゃんを守ってほしいっていう意味で

ウソの報告をしたんですよ

こっちに戦力をわけると私がここにいる

ってわかってしまう可能性がありますしねー」

「なるほど……」

ツナは優のことを心配するからなあ……」

「そうですよー」

よく考えたら……私ってリボン君が来る前から

ツナ君と友達だったから余計そうなのかも……

「それに私がいなくても

雲雀先輩が移動しないってわかったら

ディーノさんもここに残りますよね?」

「そうだな……」

「つてことは……」

ツナ君に雲雀先輩が学校にいるみたいだから
デイーノさんはもう少しここでいるつて

また報告しても違和感がないですよね？

私は今、狙われる確立がかなり低いので

最低限の人数でいいと思うんですよー」

「優……すげえな……」

「へ？」

「こんな短い時間に

そんなことまで考えてたのか？」

「だって雲雀先輩が学校むかっつてるつて聞いた時に

デイーノさんは絶対着いていくつてわかりますもん」

大事な教え子を1人にするわけないもん♪

まあ雲雀先輩は嫌がるけどね（笑）

「そ、そうか……」

「雲雀先輩はツナ君と連絡はとらないですけど

デイーノさんは連絡とるので

「ここまで考えてたんですよー」

「別に僕は優以外いなくてもいいんだけど」

「……恭弥……お前つて……ほんとに……」

デイーノさんが言いたいことわかるかも……（笑）

私とそれ以外の人の反応が違いすぎ……（笑）

そして怪我人のデイーノさんを

咬み殺す気になつてるし（笑）

まあすぐ咬み殺さないのは

デイーノさんが怪我してるのからだけどね

わかりにくい優しさだよー

「まあほめないほうがいいですよ

さつき私はミスしちやつたんでね」

「ミスつてなんだ!？」

「白蘭さんを倒せるタイミングだったのに
逃げるほうを選んでしまったんですね」

「その判断が正しいだろ……」

「そんなことないですよー」

「私のボンゴレ匣を使えば倒せる可能性あったんでね」

「そうなのか!？」

「使わなかったのは

最悪の事態を避けたかっただよね?」

「私がいなかったのは理由があつたつて

雲雀先輩は気付いてたんだねー

「よくわかりましたね」

「当たり前だよ」

「どういうことだ?」

「私のボンゴレ匣は一撃必殺なのでね

もし倒せなかった場合は私は捕まっていました」

「そうなのか!？」

「はい

ボンゴレ匣の形態変化が出来るほどの炎を注入したら

逃げる時の炎が足りなくなつたんでね

悩んだ結果、逃げるほうを選びましたよ

体力が減ると炎の量が減る欠点を痛感させられましたね」

「……そこまで危なかったのに残つたのかよ……」

「だから入江君に体力をあげた私が悪いって

さつきから言ってるじゃないですかー」

「「……………」」

みんな言い返さなかったね（笑）

「あそこにいた敵だけだったなら全く問題なく

すぐ逃げれると思つたから言つたんですね?」

でもあそこにいた敵が風で気配よまないと

どこにいるかわからないし型がばれてるので

倒すのに思つたより時間がかかると思わなかつたですし

それにまさか白蘭さんと1対1で
戦うことになるとは思わなかったです！」

ここで原作知識が邪魔したんだよね

白蘭さんとあのタイミングで戦うなんて

本当に想定外だったもん！

「……オレは優には何も言えないな……

優のほうが危なかったのに

オレが怪我しちまったしな……」

あ、そっか

デイナーさんは型ばれて怪我しちやったもんね

……聞かなかったことにして寝よう!!

「えっと……とりあえず……

私は寝ますので……

なにかあったらたたき起してください」

γさんを助けてるし……恐竜のことも話したし……

原作より情報が多いからね……

多分大丈夫と思う……

みんな頑張つてよーー!!!

「ああ

わかったぜ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

寝てる間に…… 1

「ふうん

デイジーにトリカブトまでやられちゃったかー

ヴェント君がいない間に

ユニちゃんを狙ったんだけどねー」

「申し訳ありません

ブラックスペルのγ兄弟を想定しておりませんでした」

ヴェント君は本当に僕の邪魔ばかりするよ

「ヴェント君に一杯くわされちゃったね

ボンゴレ匣は脅威になりそうかい？」

「いいえ たしかに少々驚きましたが

戦力としてはたいしたことはありません

やられたデイジーとトリカブトも

我々の中では弱い部類ですし」

「ハハハッ そうだね

君達と彼らは出来がちがう

まっヴェント君のボンゴレ匣にはびっくりしたけどね」

本当にどうやって作ったのかなあ

すごく興味深い……」

「白蘭様が驚かれるとは……」

「恐竜の匣兵器だったよ

かなりかわいかったけどね」

「「!」」」

「それも風竜ね」

「なっ……」

「口から竜巻つきだしたりしたりしてさ

さすがの僕もびっくりして逃がしちゃったよ

やっぱりヴェント君の仲間もすばらしいね

ミルフィオーレの科学力と同等かそれ以上だね」

僕が能力を使っても何年もかかったものを

ヴェント君の仲間は作っちゃったからね
一体どれぐいの科学力があるのかなあ？

「そんな……ことが……可能でしょうか……？」

「ヴェント君の仲間は匣兵器ぐらい

簡単に作れるほどの天才みたいだからね

作り放題だけど作らないのは

ヴェント君の性格が問題かな？」

「というと……」

「ヴェント君は人を傷つけるのが嫌いみたいだね

どの世界でも特殊能力を逃げるためか守るために使ってるんだ

だから僕が正しい使い方をするよ」

そう……正しい使い方をね……

「次は僕もいくつもりだよ

その時にはヴェント君は

こっちに戻ってると思うからね

まっ今回の戦闘でユニちゃんと

ヴェント君を手に入れるために

最後の手段が必要だってはつきりしたしね」

彼がいればヴェント君は終わったも同然だ

ヴェント君にもう逃げ道はない……

「なんでミー文句ばかり言われてるんですー？

師匠を脱獄させたのミーなんですけどー」

カバンを逆さにするあんたが悪いのよ！

「キャツホホー!! ウツホー！

やったびよーーん!!」

「うかれた動物もいるし……

で 容態はどうなのよ？」

「んあ？」

「普通の人間なら……」

「10年も水槽の中に動かずに浸かっていたら……」

「元の運動神経を取り戻すまで相当時間がかかる……」

「10年だから当然ね……」

「でもすぐに飛行機乗せて日本へ向かえって言ってたびよん
ボンゴレを倒しに」

「目的ちがうよ……犬……」

「相変わらず犬並の優れた知能ですねー」

犬ニーサン

ミー達はボンゴレを倒すんじゃない

ユニって子とヴェントを守りにいくんですよ」

ユニって子はまだわかるわ

ま、まだね！でも……」

「ヴェントってボンゴレなんでしょー」

「なんで骸ちゃんを守るのよ」

「ボンゴレを守るなんて骸ちゃんらしくない

「師匠はヴェントのことを

「敵と思ってるからねー」

「はあー!？」

「ボンゴレは敵でしょ!？」

「ヴァリアーのボスでさえ

「ヴェントのこと気にいってますからね」

「……世話好き……」

「あいつのメシうまいびよん」

「な、なんなの……!？」

「なんで当たり前のように受け入れてるの!？」

「ヴェントって何者なの!？」

「ミー達はヴェントの正体知ってますけどー

「変わった人ですよー」

「フラン!!」

ヴェントの正体教えなさいよ!!」

「そんなことしたらミーはボスに殺されますー

ベルセンパイにも殺されそうですねー

もしかしたらヴァリアー幹部全員に殺されそうですねー」

「本当に何者なの!?!」

「だから変わった人ですよー

師匠も変わった人っていつてますー

ボンゴレにいますけどー

ボンゴレじゃない人みたいです」

「はあ!?!」

意味がわかんない!!」

「つまりーいろんなところに気がのったら顔出してー

好きなように動いてるんですよー

本当に風みたいですよー」

「ますます意味分かんない!!」

「約束はやぶらない人ですよー

仲間が裏切らないのでー

師匠のところにも顔出してるのでー

敵とは思ってないってことですー

仲間同士が対立したときは

どっちの味方もしないですしねー」

「本当にわけわかんない!!」

いいから正体を教えなさいよ!!」

寝てる間に…… 2

生きてやがったとは……それに……

「何かいいたそうだな」

「まさかヴェントと手を組んでたとはな」

「利害が一致しただけだ」

「ツチ」

こいつと繋がってるのを黙ってやがって……

あのバカ……

オレ達に黙って行動するなよな！

それにいつも敵と繋がりすぎなんだよ!!

「どうぞ ラルさん……お水です」

ラルは大丈夫かなあ……

優が10日間の間にあげてたみたいだけど……

「……すまん」

……しかし似ているな

お前の祖母ルーチェに……」

「だろ？」

「リボーンおじさまにも言われました」

ヴェントさんには母に似ていると言われました」

「ラルもユニのおばあちゃんの知り合いなんだ……」

優はユニのお母さんと知り合いなんだよな？

どんな人だったんだろう？

「ユニ……」

お前はアルコバレーノの誕生の時のことは

知っているのか？」

アルコバレーノの誕生？

「……はい……」

記憶の断片に存在してます」

「ルーチェには先を見通す不思議な力をもっていた
お前にもあるのか？」

「さ……先を見通す力って……!?!」

それって凄いいことなんじゃ……

「かつてはありました……」

といつてもヴェントさんの未来は

昔から見えませんがね」

「え!?!」

優の未来がみえない……?!

「ヴェントさんの未来を見ようとしても見えないんです
たまたま見えた未来にヴェントさんがいた
というのはあるのですが……」

「……なんでだ?」

そ、そうだよ!

なんで優の未来だけが……

「わかりません」

母がヴェントさんにマーレリングを渡した時も
全く見えなかったみたいです

少しでも守る力になれるようにという意味で

風のマーレリングを渡したみたいです」

そうだったんだ……

ユニのお母さんは守護者として渡したんじゃないかと
優のために渡したんだ……

「姫! それは……本当なのか……?」

風のマーレリングなんて聞いたことないが……」

「Yは知らなかったですが……」

風のマーレリングが昔からありました

でも時がくるまでずっと封印していました」

「あ……そういえばヴェントが触ったから

多分封印が解けたと思うって言ってたよ」

「そうみたいです」

母の日記に書いてました

そして風のマーレリングに選ばれた者は

過酷な運命があると伝わってましたので……」

「ボンゴレリングと同じだ……」

「はい」

未来のヴェントさんに聞いたんですが……

これからも風の波動を持つのは

ヴェントさん以外は現れないと言っていました……」

「それって……」

優はずつとマフィアに狙われるんじゃない……

「はい……」

白蘭に正体がわからなかった理由は

どのパラレルワールドでも

ヴェントさんはマフィアに追われてるため

正体をずつと隠して行動していたからだと思います」

そ、そんな……

「日記にはどこまで詳しく書いていたんだ？」

白蘭は読んでるはずだ

出来るだけ情報が知りてえんだ」

「母の日記には偶然出会った小さい子どもに渡した

としか書いていませんでした」

「そうか」

子どもとしか書いてなかったから

白蘭はわからなかったんだ……

「はい」

母が渡した時はヴェントさんが

風のアルコバレーノと思わなかったというのもあると思います

わかっていれば詳しく書いていたと思います」

「え？ ユニのお母さんは知らなかったの？」

「ヴェントは袋をつけてたからな

おしやぶりが反応しなかったからわからないだろう
オレも全くわからなかったしな」

あ……そういえば……

おしやぶりが近くにあれば反応するのに

優は袋をつけていたから反応しなかったんだ

「はい

それに……」

「な、なに!？」

他にも優のことで何かあるの!？」

「風のアルコバレーノについては

また別に日記が残っていました」

「そうなのか?」

「はい

リボンおじさまは母から風のアルコバレーノが

現れる予知が見えたと教えてもらったんですよね?」

「ああ

違うのか?」

「はい

予知ではありません

風のアルコバレーノのおしやぶりは

ずっと母が持っていました」

ユニのお母さんが!？」

でも優は急に離れなくなつたって言ったような……

「渡された夢を見て起きると持っていたと書いていました

そしてある日いきなり浮いて飛んでいった……と……」

その時に優のところへ飛んでいったんだ……

「オレ達とは状況が違いすぎるな……

本人に聞きてえところだが……

恐らく詳しく話せないだろう」

ん? どういうことだろ?

「……はい

ヴェントさんの力になればいいのですが……

私の力は近頃は弱まっています

でもそれは白蘭も同じです

彼も自分の能力が弱っていくのを感じています」

白蘭の能力が弱まってる!？」

「白蘭サンの能力!？」

パラレルワールドにいる

自分の知識を共有できる能力のことかい？」

「はい

今は相当体力を消費する上に

一度に一つぐらいのことしか

知ることはできないはずですよ……」

「恐らく白蘭の能力で川平不動産は

みつかったはずだぞ」

「だとすればしばらく使えないはずですよ」

「……でもなんでできたことができなくなるの？」

「私は……力の枯渇と衰えだと思っています」

「んな!! 衰えて……!？」

「ユニちゃんまだピチピチじゃないですか!」

そ、そうだよ!!

オレより小さいし!!

「人は生まれたときから死に向かって生きて行く

……遅かれ早かれ自然なことですよ」

「……たしかに……」

代々大空のアルコバレーノは短命だしな」

「えー!」

短命って!？」

「白蘭が私が必死に欲する理由はそこにあります

一刻も早く7・の真の力を引き出し自分のものにしたたい

そして私に何かあった時にヴェントさんの特殊能力を

つかってなんとかしようと思っ
ているんでしよう
ヴェントさんの特殊能力の残り
ストックのこともあります
だからこそ白蘭は焦っている
んです」

束の間の休息 1

「ん……」

……よく寝た

キヨロキヨロと周りをみたけど何もなかったみたい
なんか雲雀先輩とディーノさんって

私が起こす前に全部処理しそうなんだよねー

まあ何もなくてよかつたよ

おー！私ってすごい！！

ちゃんとフードかぶったまま寝てたみたい！（笑）

「よお 起きたか」

「あ、おはようございます」

あれ……これって……

「恭弥が風邪ひくからってかけてたぜ」

「……本当ですか？」

「ああ

本当に恭弥は優だけ優しいよな」

うわ……どうしよう……嬉しい……／／／

って、喜んでる場合じゃない！

「かえさないと……」

雲雀先輩が風邪ひいちゃいます……」

「あっちにいるぜ」

「ありがとうございますー！」

んー抱きしめて寝てたみたい……

少し皺になってる……

帰ったら絶対クリーニングしよう！

本当は今したいけど無理だし……

それに本当に風邪ひいちゃ大変だもん

「雲雀先輩ー」

「おはよう」

あ、そうだ！

先に挨拶だよね！！

「おはようございますー」

あ、あの……上着ありがとうございます」

「もういらないの？」

「はい

寒くなかったですか……？」

「問題ないよ」

「そうですか……」

無理してないといいけど……

雲雀先輩は絶対言わないし……

「優

「なんですか？」

「無茶しないでね」

……いろいろばれてそう……（笑）

「んー……そうですねー

無茶はするかもしれないですけどー

雲雀先輩の元に必ず帰ってきますよ」

「……そう」

「はい♪

あ……でも怪我しないようにしたんですけどねー

正直……今回は辛そうです……」

「……わかった」

あ……わかってくれた……

未来の私が特殊能力使っても

白蘭さんを倒せないって知ったからかな……

「雲雀先輩もあんまり無茶しないでくださいね？」

「さあね」

うわー無茶する気満々だよ（笑）

「……じゃあ1つだけお願いしてもいいですか？」
「なに」

「過去に帰ったら」

「1番最初に私に会いに来てほしいです」

「いいよ」

「え!?! いいんですか!?!」

「いいよ」

「学校じゃなくていいんですか……?」

「優と一緒に行く」

なるほど…… (笑)

「そうですねー」

「私も学校に行きたいです」

「そう」

「はい♪」

最近ヴェントとしての行動が長かったですしー

この時代は私には結構つらかったですしー

ゆっくり風早優として過ごしたいです」

「……そうだね」

あ……ちよつと失敗したかな……

つらかったって言ったから……

「んー白蘭さんに私の正体ばれてないってことは

他のパラレルワールドでもマフィアから

逃げれてたってことですからー

「私は大丈夫ですよ?」

「……そう」

「それに私には雲雀先輩がいますもん♪」

「そうだね」

あ……笑った……//

「優」

「なんですか?」

「ここから見えるところに誰もいないか調べて」

あれ？雲雀先輩がこんなこと言うなんて珍しいね
敵の気配を調べてつてことじやないよね

だってそれはわかると思うしー

本当に誰もいないか調べてほしいつてことだよね？

「ちよつと待つて下さいねー」

うーん……

「……そうですねー」

壁を挟んでとかだったらいますけどー

ここから見えるところには誰もいませんね」

それに怪しい動きの人はいないよ

やっぱり毎日してたのは効果あったみたいだね

「そう」

「どうしたんですか？」

パサッ

あれ？フードとつちやつた……

「あの……どうし……ん／＼／＼」

……

うう……／＼／＼／＼

こんなところですから……！

思わず睨んでしまうのはしょうがないと思う

「したくなった」

そういわれると文句も言えない！！／＼／＼

「……そうですか……／＼／＼」

パフッ

あ……フードかぶつた……

「僕は寝るから何かあったらいつて」

「了解です！」

それまで学校は私が見張ってますよ！

任せてください！！」

「わかった」

「はーん」

……寝るのはや……もう寝ちやったよ……
んーデーノさん達にも寝ていいつて言おうかなー
私が起きていれば大丈夫だしねー

束の間の休息 2

あれ？なんか無線つかってるなー

今話しかけたらまずいよねー

あ、終わったみたい

「どうかしたんですか？」

「ツナから連絡だ

ユニが夜明けとともに始まる戦いで

すべてが終わるっていつたらしい」

んー原作通りかな？

「そうですかー

じゃあ私もそのつもりでツナ君達と合流しますね」

「優は前線に出るなよ」

「えー嫌ですよー

私はツナ君の守護者でもありますけどー

今はユニちゃんの守護者なんですよ？」

「優……自分が狙われてるのわかってるのか……？」

「わかってますってー

大丈夫ですよー

雲雀先輩と一緒にいますよー

それに10年後の雲雀先輩と約束しちゃったんです

何があっても逃げるように……」

「……わかった」

「はい……」

では、今の状況を教えてもらっていいですか？」

多分、原作通りだったね

γさんを助けてて正解だったー！！

「わかりました」

「ディーノさんは山本君達と合流のほうがいいですね」

「優を恭弥だけに任せるのはまずいだろ……」

「んー……私は急いで移動しますよ？」

「一箇所でとどまるほど危険なんでね」

「その怪我じゃ多分ついて来れないと思います」

「……わりい」

「いいですよー」

「それにこれ以上一緒に行動すれば」

「雲雀先輩がディーノさんを咬み殺しそうですしー」

「……それもそうだな」

「これで納得するディーノさんは」

「本当に雲雀先輩のことをよくわかってるよねー」

「はい」

「スクアールロさんのこと頼みますね」

「ああ」

「任せろ」

「本当は体力あげに行った方がいいんですけどね」

「今回はやめときますね」

「そうだな……優」

「はい？」

「はつきり言っておく」

「ん？何を？」

「私なにか怒られるようなことした？」

「過去に戻ったとしても必ずオレは優の味方だ」

「何かあれば絶対言えよ？」

「マフィアの情報はオレにだって探れるんだからな」

「私の未来がわかってるから言ってくれたんだ……」

「戦いの前に私の負担を減らせてくれようとしたんだ……」

「ありがとう……ごいいます……」

「うう……泣きそうだ……」

「つたく……泣いたっていいんだぜ？」

我慢するのは良くないぜ」

「……じゃあディーノさんに泣かされたって

雲雀先輩にいいですよ？」

「なっ!? それは困る!!」

「でしょ? (笑)」

あ……優しい笑顔だ……

ディーノさん……本当にいい人……

「ディーノさんにいっぱい元気もらったので

今度は私が見張りをします

ディーノさん達も少しは寝て回復してください」

「優もう大丈夫なのか?」

「ばっちりです!」

私は隠れて風で気配をよんで見張るので

心配しなくてもいいですよ?」

「そうか」

「はい

じゃあはやく寝てくださいよー

ディーノさんは重傷なんですからー」

「ああ」

うわー頭をポンポンされた!!

本当にいいお兄さんだなー

さて、見張ろうー

んーどうなるんだろうなー

主力メンバーが本当にかわってないんだよねー

狙われているのがユニちゃんなのが

ユニちゃんと私になつてただけなんだよねー

正直今からの戦いでわざわざAランクの人を

使って戦わないと思うんだよねー

だってボンゴレ匣出さなくても倒せちゃったしね

炎を吸い取る人？だけ注意して

リングを早めに外せば

前線に出てもなんとかなると思うんだよねー

んーどうなんだろう？

私を捕まえるためになにかあるのかな……

正直わかんないんだよねー

でも今までの感じだったらほとんど原作通りだよねー

つまり白蘭さんはツナ君を倒して

ユニちゃんを奪ってその後にも私もゲット？

多分私よりユニちゃんのほうが優先だと思ってるんだよね

それに私はあの結界には入らないと思うしー

白蘭さんはツナ君に勝ったら

みんなは体力切れしてるから勝ったも同然だよね？

うん！やっぱりは後回しだと思う

ということは……あのタイミングか……

合流 1

手応えあつたぜ

「ぐあああ ハッ

オレはデイジーやトリカブトとは

格が違うぜバーロー!!」

ズオ

なんて炎だ……!

「あいつ……胸の匣に炎を!!」

これが跳ね馬が言つてた

「修羅開匣だ!!」

「さあて

どんな虫人間やら動物人間が出てくるんだ？」

「バーロー

虫や動物だあ？

デイジーやトリカブトと同じにするな」

「なっ!!」

んだありや!」

「体が一回りでかくなつたぞ!!」

「トカゲってレベルの迫力じゃねーな……」

こいつの特徴……

「まさか……ヴェントが言つてた……恐竜!!」

「そうだ

ミルファイオーレの科学力によって

DNAさえ存在すれば現存しない生物をも

匣化することに成功したんだ!!」

「聞いていたが……

まさか本当だったとは……」

一体どれぐれーの科学力があるんだ……

これも全部白蘭の能力かよ!

「……なんだ

知らないのか？

ヴェントも恐竜の匣兵器だぜ」

「なっ!？」

あのバカ!!また黙ってやがって!!

「ヴェントはオレ達の仲間ってことだ」

あのバカはいつもいつも大事なことを……!

わざとオレ達を混乱させてるんじゃないのか!?

「うるせー!!」

ヴェントはオレ達の仲間だ!!」

「バーロー」

匣兵器が証明しているぜ

さあT R E Xの圧倒的なパワーを

味わいな」

クシユン!

なんか寒気が急に……

「……風邪?」

「多分……大丈夫です……」

体調が悪いときに外で寝たからね……

風邪を引いてもおかしくないよねー

「……僕が言っても聞かないよね」

「そうですねー」

「はあ……」

前線に出てほしくないんだらうねー

「それより……すみません」

「なにが」

「私のせいで遅くなって……」

もう始まつてるみたいですし……」

さつきから炎が凄いいし……」

うーん、かなり早めに出たんだけどねー

目立たないように移動してるから遅くなってるんだよね

「いいよ」

「でも戦いたいですよね？」

「まあそうだけど……」

優と一緒にいれば敵が来るからね」

……そうですね

私はエサですもんねー

ぶら下げるだけで敵がよってくるよねー

「なに」

「少しテンションが下がっただけです

気にしないでください」

「そう」

「あ、恐竜の匣兵器は動物タイプより

戦闘力が高いんで気をつけてくださいね」

「へえ」

うわー嬉しそうな顔してるよ……」

「ミントもっ……」

「そうですねー」

ミントはT—REXのDNAで作ったみたいですが

まあ他にも混ぜたから羽が生えたみたいですけどねー

それに私のDNAも入っているの

他の恐竜より頭が良いと思いますよ？」

ってか、どうして恐竜のDNAを持つてるんだろ？

まあ神様だしー

本当にこの一言で済むよねー

「優のDNAのせいで弱そうなんだ」

「……まあ否定できないですね

肉食っぽくないのは私のせいですね」

……というか怖かったら嫌だし……

あの愛くるしい感じのがいいの!!

「そう」

ザッ!

やっと合流できたー

あ、京子ちゃんのお兄ちゃんが戦い始めたところだ

んー早めに出たのに結局このタイミングになるんだね

“加勢しないのか?”

「ヴェントもわかってるよね」

“そうだな……”

京子ちゃんのお兄ちゃんも

手を出すと怒るタイプなんだよねー

だからピンチになるまで助けないほうがいいよねー

ってか、なんでみんなで倒さないの?

みんなで倒したほうが楽なのに……

……やっぱリツナ君は凄いな

このメンバーをまとめれると思うしー

まあ苦労はすると思うけどね(笑)

合流 2

原作通り幻覚かけるから待ってって言われてたんだけどー
雲雀先輩がやられる姿みたくない……

骸君って本当に悪趣味だよねー

それも私が恐竜に食べられて捕まえられるとかー

そんなマヌケじゃないしー

例えスキが出来てもそのままずっと捕まってるわけないしー
それにしても雲雀先輩イライラしてる!! (笑)

あ、終わりそうだね

「あれー？」

師匠今なにげに一步前にでましたねー

すぐ真ん中に立とうとするんですからー

「クフフフ……」

何を言っているのです おチビさん

お前の頭が邪魔だからですよ」

「そーやって

おいしいところもってくんですよねー」

うーん……顔はわかるけど

やっぱり名前が出てこないなー

「もういいかい？」

何勝手に殺してるの？」

「幻覚とやらは終わったのか？」

「僕はそんなマヌケじゃないんだが……」

流石に言いたくなった (笑)

「10秒かせつーから待ってやったが」

「30秒もオーバーしてんじゃないの!!」

「クソガエル」

うわーみんな言いたい放題だねー

「ち あっ舌打ちしちゃいましたー」

「奴らを倒してヴェントを捕まえたのは

全部幻覚!!？」

「クフフフ……」

ウォーミングアップは済みました」

あ！今ベルさんが言ったよね!？」

フランっていう名前だったのか……

それにしても

あのかぶり物は私だったら絶対嫌だね

まあランボ君がかぶってほしいといわれたら

のってあげるかもしれないけどね

でもあれは幻覚だから好きでしてるのかな？

って、骸君突き刺しちやったしー

まあ問題ないしーいいかー

「今回の幻覚の目的は2つ

僕のウォーミングアップと……

真6弔花の能力を引き出しデータをとることです

実際 幻覚で彼らに程よい優越感を抱かせることにより

ブルーベルの絶対防御領域と

桔梗の地中からの攻撃のデータを引き出すことに成功しました」

「なーーる」

「なーるじゃねーよー！」

「ってかいつまで六道骸の幻覚出してんだ？

あいつは復讐者の牢獄に沈んでるんだろが」

ベルさん……沈んでるって言い方はやめようよ……

〃ベル〃

「なに♪ ヴェント♪」

……ものすごく反応された(笑)

ベルさんって10年たってもかわってないのか……

10年後でも雲雀先輩と付き合ってたから

流石に諦めたと思ってたのに……

まあいいか

〃幻覚じゃない

本物の六道骸だ”

「!!」

「ヴェントのいうとおりー

あのパイナツポー頭は幻覚ではなく

正真正銘の1分の1スケールの六道骸本人ですー

ミーの師匠復讐者の牢獄から出所しちゃいましたー」

おーみんなビックリしてるよ

「へへーん♪ どーら!!」

骸さんスゲーらろ!!」

「犬ニーサンがしゃべると

話がややこしくなるので黙っててくださいー」

「ムツキー!! 何らとフラン!!」

「……落ち着いて……犬……」

うん。この2人も変わってなさそうだね

「クフフフ

さて……なぜヴェントがここにいるのですか?」

あれ?私の話になったよ

ってか、なんで骸君がしきってるんだ?

〃別にいいだろ

どこにいても狙われるのは一緒だろ?」

「本当にあなたは変わった人だ

我々に任せて避難してればいいものを……」

〃悪いな

僕はユニの守護者でもあるんだ”

それにしても骸君もかっこいいよねー

というか……みんなかっこいいよねー

まあレヴィさんとルツス姐さんは除くけど…… (笑)

「クフフフ

本当に変わった人だ」

〃僕と話すたびに

それを言うのやめてくれないか?」

絶対、未来の私にもいつてるよ（笑）

「ふうん

僕が知らないところでそんなに話してるんだ」

あ……しまった……

「クフフフ

僕と彼は近いですからね」

ここでややこしいことを言うのやめてよね……

「……どういう意味」

“……気にするな”

「クフフフ

僕とヴェントのヒミツですよ」

だからややこしいこと言わないで!!

あー機嫌が悪くなった……

「骸……

わざとこのタイミングでいうのは止めてくれ……

彼と違って君はわざとややこしいこと言うから

余計たちが悪いぞ”

この前の囮のときも

わざとあのタイミングで言ったでしょ……

「クフフフ」

笑い事じゃないし!!

「ハハン なるほど……」

って、ここで原作に戻ったみたいだ……

悪いけどもう話を聞く気にならない……

後で絶対聞かれるね？

10年後の雲雀先輩の機嫌とるのも大変だったのに（泣）

パイナツポーのバカヤロー!!

合流 3

みんな戦うの好きだよねー

雲雀先輩とXANXUSさんもやる気満々だよ

まあ私はみんなのためにやる気を出すけどさ

「ここがミルフィオーレとボンゴレ

総力決戦の場となりそうですね」

「ここで制した側が勝つでしょう」

うわー始まる!!

私も頑張ろうー

でも私がいる分どう考えても

原作よりこっちが有利だよねー

まあミントだそうかな？

ガルツ!!

やっぱりミントはえらいなー

今から戦うって分かってるよ

「ハハン

あれが噂の匣兵器ですね」

んーこの反応は白蘭さんに聞いたのか……

「僕の匣兵器は君達より強いぞ

格が違うからな」

ただの恐竜じゃないもんねー

「ミルフィオーレの科学力を同等もしくはそれ以上の

匣兵器にも白蘭様は興味を持ってますからね

それもいただきましょう」

あらーミントも狙われちゃったよ

ガルルル!!

ものすごく首を振ってる(笑)

「ミント、嫌だったら行動で示せば？」

ガルツ!

ブオオオオオオ

あ、雲雀先輩と真6弔花以外みんなびっくりしてるよ！
普通に言葉がわかるのは楽だなー

私のDNA恐るべし！って言いたいけどー
神様がすごすぎなんだろうね（笑）

「ハハッ

確かに速いですがそれだけですわね」

まあこんなに距離が離れてたら

避けられのは当たり前前だけど残念でしたー

曲げましょう

「なっ!？」

ドガッ!!

「ぐっ……」

やっぱり強いね

あの距離でよく避けたよ

まあ肩に直撃したけどねー

しばらくは片腕は使えないかな？

「大事なことを忘れてないか？

白蘭をどの世界でも1番苦しめてるのは風使いの僕だぞ

ユニには手を出させない”

ちよつとかつこつけすぎたかも……

でも事実だからいいやー

「1人で先走るのがやめてよね」

んーこの言い方は獲物をとったっていうより

私が先走ったから危ないから心配してるのかな？

「あー……悪い

でも僕は彼との相性がいいんだよ

僕は地中からの攻撃は当たらないからな

僕1人で彼を抑えることができると思うんだ”

空を飛べるしねー

普通に問題ないと思うしー

「ダメだよ」

そんなに心配なの!?

“………だったら……”

今回は………僕と共闘で彼を倒すでいいか?!”

「こよよ」

うそお!?!いいの!?

絶対嫌だと思っただのに……

他のメンバーと戦う可能性があるんだったら

私と一緒に倒すのほうがいいですか?!

まあいいか……

んー雲雀先輩が戦うのか……

じゃあ私はサポートって感じで戦おうかな?

雲雀先輩の邪魔したくないし……

まあサポートだから周りのフォローも入れられるかな?

絶対、桔梗の恐竜が増殖して邪魔だと思っしねー

「え!?!」

本物の骸が………戦場に現れた!?!」

『ああ真正銘復讐者の牢獄から出た骸だ!!』

奴の弟子がそう言っていた!!

ヴェントも本物と言ったぞ!!』

「え!?! ヴェントもそっちにいるの!?!」

『ああ戦ってるぞ!!』

ヴェントの匣兵器は強いぞ!!

真6弔花の恐竜より上だ!!』

「え!?!」

真6弔花より!?!

それに恐竜!?!

『同じ恐竜でも風竜だ!!』

ヴェントが全体のフォローにまわってるしな!

戦況はこっちの方がかなり有利だ!!

ぬ……戦いの爆発で雑音がひどい……!!!

一度切るぞ!!』

「はい………骸………」

やっぱりあの感じ………骸だったんだ!!

「骸の奴言つた通りに脱獄しやがったな」

「う………うん………」

やっぱりすごいよ………あいつ………

あ、あと………

ヴェントの匣兵器がすごいみたいで

戦況はこっちが有利だって………」

「ヴェントはこっちに来るべきだぞ」

「そ………そうだけど………」

ヴェントはユニを守るって決めたから

オレが言っても多分聞かないよ………」

優は意外と頑固だし………」

「………それもそうだな」

「………うん」

やっぱりヴェントもすごいよ」

すごく強いし………」

でもよく無茶するから心配だけど

ヒバリさんがいれば大丈夫だと思うし………」

「すごいのは沢田さんです」

「へ?」

「山本さん達もこっちに向かっています」

「え!?! 山本も!?!」

「ボンゴレの守護者全員がボスである

あなたの元を集まってるんです!

ヴェントさんもあなたの守護者ですからね!」

GHOST

やっぱり原作よりどう考えても有利な状況だねー
だって桔梗の恐竜は私がほとんど抑えてるから
あんまり混戦になってないんだよ

このままジワジワと勝てそう
ジジツ

なんか変な音が聞こえる……

ドン

うわ……きた……

ってあれ……？

うそー！ー！ー！！

「あの巨人はなんだ!?」

「発光してんのか？」

!? おい！ ヴェントがやべえぞ!!」

「「!?」」

ぎゃあああああ!!

悲鳴をあげたいけどあげちゃダメだー!!

死ぬー！ー！ー!!!

ガシツ

バサツバサツ

あー死ぬかと思った……

〃ミント……

すまない……助かった……

ガルツ!!

後でほめないと!!

ミントは風竜だから

私と一緒に人の気配に敏感なのかな……

反応が早かったおかげで助かったよ……

「ヴェント！ 何があった!!」

〃僕にもわからない!!

急に風を操れなくなった!!”

「だから急に空から落ちたのか……」

”ああ

あれはなんだ!!”

いや……まじでビツクリした……

あの高さから落ちたら流石の私でもやばかった・

落下したスケボーみたいになってたよ……

粉碎って感じだね……

ミントが私を掴んでくれてよかったー!!

あれはGHOSTという名前だったのか……

あ、ベルさんがナイフを投げた

スカッ

やっぱりすり抜けるか……原作通りだよね？

じゃあいったい何があったの……？

まだ風を操れないし……

「彼をどうみますか？

おチビさん」

「ミーの勘では幻覚ではありませんねー」

「正解です

実際している」

”ああ

僕にもそう思うぞ！

幻覚とは思えない!!”

普通に見えるもん！

「ならば撃つべし!!」

レヴィさんが攻撃したけど

やっぱりすり抜けるよねー

「ヴェントあなたはとりあえず

この場から離れなさい」

みんなもそうしろって顔だ……

私だけが影響受けてるもんね

それにちようどいいかもしれない……

「悪い……まかせた……」

「ミント頼めるか？」

「ガルツ!!」

「バサツバサツ」

「無事に到着ー」

「ここにいるメンバーだったら」

「普通に話していいよねー？」

「ミントありがと……」

「死ぬかと思ったよ」

「本当に助かった……」

「よしよしー」

「ガルツ♪」

「優!! どうしたの!？」

「なんか急に变なのが現れて風が操れなくなって……」

「え!？」

「いきなり空から落ちるからびっくりしたよ……」

「優さん大丈夫ですか？」

「あ、ユニちゃんって」

「私のこと優さんって呼んでるんだー」

「うん」

「とりあえずみんながここから離れろって言うから」

「それだったらユニちゃんの近くで」

「守った方がいいかなって思ってたこつちに来たんだ」

「そ、そっか……」

「うん」

「ちゃんとミントはこの場所がわからないように」

「移動してくれたから安心していいよ」

「わかった」

「ミント1度休んでて

また困ったら助けてね」

ガルツ！

えつと……なんだったかな……

そうだ!! 思い出した!!

現象だった気がする……

でもなんで風が操れなくなったんだろ？

ここが原作と違うところなのかな？

うーん……つまり……

白蘭さんには風の攻撃がきかなくなるってこと？

でも結界に入ると攻撃しても意味ないしねー

あ、そっか

ツナ君達が倒された後に困るのか……

支障

やっぱり原作通りだ……

みんなの炎を吸い取ってるみたいだし……

「沢田さん 行ってください」

私にはリボンおじさまと

ヴェントさんがついてます」

「そうそうー」

私もいるから大丈夫だよー

最悪の場合は私がユニちゃんを連れて逃げるよ」

いや……いっても全くの無意味だし……

逃げてても無意味だけどね……

「ユニー… 優ー」

……ありがとう」

「でもそんなの無謀だよ!!」

命を捨てに行くようなもんじゃないか!!」

反対してもツナ君はみんなを優先するよねー

だってツナ君だもん♪

「自分で決めろ」

「まってる みんなー」

いってくる」

「用心しろよ

GHOSTは炎も匣も通用しねえ

相当やべえ敵だ」

「沢田さん……おねがいします」

「ツナ君、みんなをお願いね」

「ああ」

あれを止めるにはツナ君にしか無理だし……

「ツナ君ー」

「ツナさんー」

2人とも我慢してるなー

そりゃ心配だよねー

「いってらっしゃい!!」

「ユニを頼む」

「まかせとけ」

「うん」

こっちは気にしないでー」

あー行っちゃったねー

さて、私は2人のフォローだね

「京子ちゃん、ハルちゃん大丈夫だよ

ツナ君は強いよー」

「……うん」

「ツナ君は私と一緒に守るための力だしね」

「そうですね」

「優さんも守るための力ですもんね」

「そうそうー」

みんなを守るためだったら強くなるよ

だから信じて待とうね?」

「はい」

「うん!」

「やっぱりいい子達だ!!」

うわー遠くから見てもわかるけどすごい炎だ……

あ、なくなつた

つまり白蘭さんが力をすいとつたんだねー

あ!白蘭さん見えたよ

私って視力いいなー

今からバトルしてユニちゃんが

連れて行かれるんだろうなー

どうかかしてあげたいけど……

今の段階では意味がないから何もしない私を許して……

カーアーン

「あっ!!」

……まじっすか……

「ユニちゃん 優ちゃん

どうしたの!？」

なんで私もなんだ……

もうこの後の展開がわかってしまった……

やばい……テンションが下がってきた……

「この音は何?」

「おしやぶりが鳴ってる!!」

「私にもわかりません」

「私もわかんないよー」

ってか、私の場合おしやぶりの袋は壊れてないけど

すごいことにはなってるしー

それにおしやぶりだけじゃなくて

ボンゴレリングとマーレリングが全部鳴り響いてるよ……

「大空のおしやぶりが……」

沢田さんと白蘭の大空のリングに……

共鳴してる……?」

「じゃあなんで私もなの!？」

私は大空じゃないよ?」

いや、まじで……

「わかりません

風シリーズも一緒に共鳴しているみたいです」

そんなー……

泣きたくなってきた……

『あー頑張れ』

ちよっとそれはないよ!!

神様!!

『俺だつてこんなことになるとは思わなかつた』
それもそうだね!!

なんとか頑張るよ!!

『ああ

まああれは大丈夫だぞ』

流石神様!!!

ありがとうー!!!

もうあれがダメだつたら終わったも同然だし……

ドウツ

「あらー浮いちゃつたねー

これは私の風じゃないよー」

もう他人事だよ…… (笑)

「勝手に体が……!!

リボーンおじさま!!」

そうそう

本当はこういう反応をするべきなんだろうね

……する気がおきないね

だつて無理だもん……

「困つたねー

まあユニちゃんと合流してよかつたかな……」

「……そうですね」

浮く段階で一緒になるとは思わなかつたなー

「ユニちゃん!! 優ちゃん!!」

「どんだん行つちやう!!」

「まちやがれ!!」

やつぱりすごい結界だよねー

リボーン君が跳ね返されたよ

というか……私がいるからさらに結界が強いと思う

「結界だ!!

大空と風の炎が強力な結界をつくつてる!!」

あーあ……

このまま連れて行かれるのねー

「ユニちゃん

この結界はやばいみたいだから

とりあえず私のそばから離れないでね？」

「は、はいー」

さて……どうしようかな……

私が白蘭さんと戦ってもいいのかな……？

……あれ？結界が強いつてことはまずいよね？

このままだと私の計画に支障がーーー!!!

邪魔

あーあ……合流しそうだよ……

ちよつと色が違うねー

あ！そうか

私の結界の炎の色が混ざってるからか……

「みっ見ろ!!」

「向こうから少し色が違うが

同じ炎の玉が!!」

「なに!？」

「炎の玉の中にいんのって!!」

「ユニとヴェント!!?」

「自ら白蘭に接近するとは

あの娘とヴェントは何を考えたんだ」

……どうもすみません

フードをかぶってなかったら土下座してたかも（笑）

「僕と綱吉クンに呼ばれてきたんだよ」

「ボンゴレリングにマーレリングに

アルコバレーノのおしやぶり……

7・のそれぞれの大空……

そして風のボンゴレリング風のマーレリング

風のおしやぶりすべてを持つてる

ヴェントが集結しようとしている

リングへの波動の過負荷により引力が発生しているのか?」

だからなんで私もだよ……

あーすっごい鳴り響いてるねー

さてどうしようかなー

「まずい!!」

ユニとヴェントの炎の結界が

ツナと白蘭の結界に合流するぞ!!」

「止めるんだ!!」

ユニとヴェントを

白蘭に近づけてはならない!!」

……ごめん……無理だよ

絶対原作より結界が強いと思うし……

うわー白蘭さんが見えた

このタイミングで会いたくなかったなー

「沢田さん!!」

「ようこそ

ユニちゃん♪ ヴェント君♪」

「ユニ……ヴェント……」

来ちゃ……ダメだ……」

「僕だつて来る気はなかったんだが……」

いや……まじで……

「あちゃー完全に合流しちゃったよ……」

「どうだい 驚いただろ?」

7・の上空はとてつもない炎を放出し合うと

こんな特別な状態になるんだ

そして風シリーズをすべてそろってる

ヴェント君も一緒に特別な状態になるんだ」

他の世界でもしたよね?

なんで他の世界では大丈夫だったんだろ……

全部そろってるはずなのに……

あ、もしかしたら……

神様にかなり強力な炎を抑える

チエーンを作ってくれたのかも……

マーレリング持つってるってばれちやまずいしね

私は堂々と使ってるから問題ないし……

それか私を呼んだ人が対策をしたのかな?

ちよつとそれだったら私にもしてよ!!

「他の世界のヴェント君は鳴り響くんだけど

全部そろってないから結界が出来なくてね」

やっぱり呼んだ人が対策たててたのか!?
ひどいよー！

「これで誰にも邪魔されない

4人だけの舞台ができたね

7・の上空と風が存在できるスペシャルステージだ
といっても綱吉くんにはもう用がないから

すぐ僕とユニちゃんとヴェント君だけの

3人の舞台になるけどね」

「ぐあ……」

ツナ君がやばい!!

うわーやっぱり風が操れない……

スケボーないけど……リングを2つつけて戦おう!!!

逆刃刀を使えばいいしね!

でもユニちゃんから離れるのはまずい?

あ、そうだ

ガルツ!!

〃ミント!!

僕になにかあってもユニを頼むよ〃

ガルルル!!

白蘭さんの顔面にめがけて

刀を振るったけど簡単に掴まれた

でもこれはしようがない

ツナ君の首を絞めていた腕を外すことが優先だよ

「んー?」

ヴェント君はやっぱり大人しく見てくれないかー」

「ゴホッゴホッ!!」

なんとかなつたけど……おかしい……

私の行動を読まれるのはわかる

でも私はSランクのリングを2つつけているんだよ

白蘭さんは初めての経験のはずだよ

他の世界では使っていないと思うし……

なんで避けなかった……？

そりや自信があつたかも知れないけど……

それでも私の特殊能力に1番警戒してるのは白蘭さんだよ！

「でもさつき君が力を失つたのは忘れてないよね？」

やばい！すぐく嫌な予感がする

刀を放してでも白蘭さんから離れるべきだ!!

「いい判断だね♪」

まっ 意味はないけどね」

何かダーツみたいなのを投げてきた……

よく分からないから避けたほうがいいけど……

私が避ければツナ君に当たる位置だ

いやなどころに投げてくる

刀はないし炎のバリアーで防ぐしかないか……

ボワツ

防御している間に白蘭さんが何か仕掛けくるよね

普段から風で気配を読むことに慣れてると困る

白蘭さんから目を離さないべきだね

「え……う？」

地声だしちやつた……

いや、そんなことより……

なんで炎のバリアーをすりぬけてるの……？

力負けしたわけじゃないよ

だって私の炎にあつた感覚がなかった!!

まさか……風じゃなくて……私の炎も通じないの!?

もうダメだ！この至近距離では避けれない

私の体で食い止めて被害を最小限にするしかない

!?! ダーツに気をとられてたら視界の片隅に何か……

ガルツ

ミント!?

なんでここに!?

ドスツ

命令を無視して私を守りにきたんだ……
私をかばって血が……

ブオオオオオ

「やっぱり恐竜にしては知能がいい

ヴェント君のピンチにすぐ気付いた

でも僕にはきかないんだ♪」

消えた……

白蘭さんに当たる前にミントの竜巻が消えた……

「GHOSTは炎を吸収する特異体質だけど

風シリーズの力は全部無効化しちゃうんだ

GHOSTの力を手に入れた僕は

ヴェント君の攻撃は一切聞かないよ」

最悪だ……

こんな状況どうすればいいの……？

「この世界の君は何も出来なかったよ

特殊能力は全部逃げることに使ってた

新しく特殊能力を発動するかい？

まっそんなことすれば君は無防備になるよね」

こっちの手の内がばれすぎだ……

……炎をまともでも無効化される……

アルコバレーノの力を使ってもダメだ

形態変化を使っても私の炎がきかなかったら

倒せる確立が低すぎる……どうしたらいいの!?

あれはこのタイミングでは意味がない……

「ん さっきから邪魔だよ」

ガルル……

“ミント!?”

白蘭さんが近づいただけで匣に戻ってしまった……

ミントの炎も無効化された……？

また出しても一緒だ

そういえば……刀もいつの間にか戻ってる……

私の手から離れた瞬間に戻ってたのか……

「ヴェント!!」

これは雲雀先輩の声……?!

うそ?! いつの間にかこっちに来たの!?

「こんな最悪な状況は初めてなのかな?

注意力が散漫になってるね」

ガッ……

……痛い

お腹に一発入ってしまった……

殺さないように手加減してるとしても

炎がないからヤバイ……

一瞬、意識が飛びそうになったし息が少ししにくい……

それでもなんとかするしかない!

「こんな状況になってもやっぱり諦めないんだね

でも力の差がありすぎるよ」

「僕は諦めが悪いんだよ!!」

肉弾戦は1番苦手だけど……やるしかない!!

このまま何もしないよりはましだ!

やっぱり動きを読まれてる……

こっちはフェイントを何度もいれたのに……

全て分かっているように避けられる

「ヴェント君は本当に肉弾戦苦手だね

もう遊びは終わりだよ」

やばっ!

ガッ

首がしまった……

まずい……力が入らない……

「ヴェント!!」

「ん 綱吉クンかー

邪魔だよ」

ドカッ!!

……今の音はツナ君が吹っ飛ばされた……？
もう視界がにじんでよく見えない……

「やっと思えるね♪」

パサッ

「へー」

こんな可愛い女の子だったとは思わなかったね

このまま君には少し気絶してもらおうかな

これ以上邪魔されると困るからね」

ガッ!!

「う……」

「優さん!!」

枷

『優!! 優!!』

起きろ!! しっかりしろ!!』

……神様……?』

もう少し寝させてほしい……

『しっかりしろ!!』

目を覚ませ!!』

……何かあったのー?』

『白蘭に気絶させられただろ!』

しっかりしろ!!』

……はっ!? そうだった!!』

ありがとう!! 神様!!』

『ああ』

私ってどれぐらい気を失ってた!』

『大丈夫だ』

1分もたってないぞ』

ありがとう!』

ドサツ

あれ? 何の音……?』

「……ツナ君……?」

「いいタイミングで起きたね

もう綱吉クンは終わったよ

誰が復活しようかと負けっこないけど

時間ももつたないだろ?』

この頑丈な結界の中にはもう誰も来やしないよ

これで君達は僕のもの♪」

う……起きたけど最悪の状況は変わらないのね……

それもなんか力が入らない……

私に気絶してる間に何かした……?』

「泣いて叫んでも無駄だよ

もうアルコバレーノも僕を倒してくれないし
優ちやんだったかな？

君の力は僕には通じないから倒せないよ」

「その通りだ

お前を倒すのはアルコバレーノや優じやねえ

オレの生徒 ツナだ」

あ……原作っぽい……

今の間に回復しないと……

多分、平衡感覚がおかしくなってるだけかな？

ユニちゃんのことがあったから葉じやないと思うし……

よし……もう大丈夫かな……

しつかり足が地面につく

フードはかぶってたほうがいいかな？

この顔が他のマフィアに見られるとまずいしね……

「みんなと未来にいた時間はオレの宝だ……

オレの炎はお前が支配する

この時代だからこそ生まれたみんなの炎だ!!

むやみに人を傷つけるために

倒されることを後悔しろ!!」

「私も思う

だから一緒に戦うよ」

「優!!」

「ハハハ!!

いい気分のところ悪いけど

何も解決してないよ 綱吉クン!!

結局僕と君の力の差は

君が倒された時からなにも変わってない!!
優ちゃんの力は僕にはきかないしね!」

〈どうだろうな〉

あ……熱い……

みんな浮かび上がってるねー

やっぱり私には誰もいないみたい

〈X世よ……お前の考えにオレも賛成だ

オレの真の後継者に力を貸してやりたいが

あいにくそれは出来ない

そのかわり——枷をはずしてやろう〈

んー私の場合はどうなるんだろ……

全くわからないなー

〈今のボンゴレリングは仮の姿だ

ボンゴレリングはある時より

厳格な継承をするために2つのに分割して

ボスと門外顧問の2人が保管することとなった

だが分割できる構造を保つために

同じ7・のマーレリングやアルコバレーノおしやぶりに比べ

炎の最高出力を抑える必要があった……

しかしもうその必要がない

おまえにならこのリングの本当の意味と

オレの意志をわかってもらえそうだからな〈

うーん……原作と同じこと言ってる気がする

〈選ばれし者よ〉

「へ?」

私にもきたー!ー!

あ、無駄にテンションあがった(笑)

〈風のボンゴレリングはある人から夢で頼まれ預かった

その時選ばれし者が現れるまで

封印してほしいと言われた〉

へー

ボンゴレリングは私を呼んだ人から預かったんだ
ん？でもなんか変だね

まあいいか

それより……

「あの人の顔を見たんですか？」

「いや……声を聞いただけだ」

「んー私と一緒にすねー」

ツナ君達が意味分かんないって顔してる……（笑）

「そうか」

選ばれし者がこの力を正しく使うか

わからなかったため最高出力を抑えた」

だから2つにわけたのか……

それもそうだね

選ばれし者が最低な人だったら大変だもんねー

「そうですかー」

「ああ

その心配も必要なかったみたいだ

君の枷もはずしてやろう」

ボアアアア

おお……

I世自ら外してくれるのか……

どうもありがとうございます

ピキユン

変わった!!

おおー!!なんかすごそう!!

「X世

マーレの小僧に一泡吹かせてこい」

消えちゃったー

それにしても普通にI世と会話した（笑）

わがまま

うわーツナ君が原作通り強いよ

白蘭さんを圧勝しそうだね

これだつたら心配ないねー

みんなユニちゃんの方に意識いつてるし

今のうちだよねー

ガルツ!!

「ごめんね？」

無理ばかりさせて」

ガルルルー

あ、首ふつてくれてる

「ミントありがとう」

ガルツ♪

「形態変化」

さて……どうしようかな……

ユニちゃんの炎が小さくなってるし

時間がもう無いと思う

「ヴェント殿!!」

あ、なるほど

内と外から両方攻撃したいのね

「わかった!」

あ、ミントは形態変化させちやったよ

刀を出すかなー

「そっちにあわせるよー!」

「助かります!」

スーパァー・ノヴァ・オーシャン!!」

ドカツ!!

ピキピキ……

私の分で結界が強くなったけど

私も一緒に攻撃したからやっぱり少し傷が出来そうだね

「くそつダメだ!!」

一時的な小さなキズしか与えられない!!」

あ、γさんがこつちに来ちや困るんだよ

カチツ

ビュツ!

「!？」

攻撃してごめんねー

でもやわらかいから許してね♪

こんなところで銃が役に立つとは思わなかったなー

あ、あれも投げないと……

ビュツ!

うん……ギリギリ間に合ったね

「それを雲雀先輩に渡してほしいです

私に借りがあるでしょ？」

あ、大丈夫ですよ

γさんの覚悟は私が引き継ぎます」

「!? 待て!!」

ささて……行きますか……

ぎゅっ

ユニちゃんは小さいなー

「え……」

「1人でそんな悲しいことはさせないよ?」

「優!？」

ツナ君が1番最初に反応したねー

「優さん……」

「泣かないで?」

私はユニちゃんのお母さんみたいな

笑顔にひかれて守護者になったんだからね?」

「でも……」

「笑ってほしいって言ったらダメかな?」

あ、首を振ってくれた

「よかった♪」

あーみんな叫んでるね……

「ゴメンね」

ユニちゃんは私じゃなくて

＼さんのほうが良かったかな？」

「え……」

「＼さんは覚悟してたよ？」

でも私が邪魔しちやっただ

悪いけど私で我慢してね？」

「本当にいいのですか……う？」

「ユニちゃんを守るって言ったでしょ？」

だから最後まで私はユニちゃんを

守ったってことにしたいんだ

私のわがままと思ってー」

「……わかりました」

「優!!」

あ……また雲雀先輩が叫んだ……

普段は叫ばないのにね……

つらそうな顔だ……ごめんなさい

「私のわがままを許してほしい……」

「ごめんなさい」

……神様、頼みます！

『本当にいいのか?』

許してもらえないかもしれないけどいいよ

『わかった』

ヒバリさんが言っても

優は止まらないなんて……

「優!! 待て!!」

そんなのダメだ！

みんな一緒に過去に帰るんだ!!
ユニだって他にも方法が……!!

「ツナ君……勝ってね？」

頼んだよ？」

間に合え!!

「優!! ユニ!! 待て!!」

フワッ

消えた……

「優……ユニ……」

優とユニの服……

それにおしやぶりも……

「アルコバレーノが復活しないよ!!」

「いいや 炎はちゃんと注入されたぞ

ただまだ時間がかかる」

「ねえちよつと……何してくれてんのさ

やっとみつけたパズルの2ピースが死んじやったよ……

すべておじやんじやないか……

7・を覚醒させ時空を超えた覇者になり

優ちゃんの特殊能力を僕のために

いろいろ使おうと思ってたのに

もうどこの世界でも優ちゃんは使いきってるんだよ

風シリーズもそろってないんだよ

僕の夢は……君達のくだらない

お友達ごっこのせいで散ったんだ……

この意味が……わかっていいのか!!」

意味……?

「ぬっぐあつ」

「誰が優とユニを殺したと思ってんだ

お前がこんな世界にしたから……

優とユニは……死んだんだ!!

オレはお前を許さない!!!

白蘭!!」

???

2

あれ？死んじゃった？

いや、それはないね

失敗したとしても私が死ぬことはないもん

ってことは……ここはどこ？

あ！またここに来ちゃったんだ

これってもしかして……リングに刻まれし時間とか？

私は全部当てはまるからわかりにくいんだよね

横の時間軸（マール）は

転生した瞬間は全て同じだし考え方がほとんど一緒だもん

過去は完全に一緒だしね

だから平行世界が同じっていう意味で考えられるよね？

縦の時間軸（ボンゴレ）は

I世の時代から風のリングがあって枷をはずしてもらったし

過去から未来の伝統の伝承っていう意味も考えられる……

点と存在するもの（アルコバーノ）は

私しか風の波動を持ってないっていう意味かな？

それとも全く関係なくあの人の能力？

どっちだろ……まあいいか

『全く君は無茶しすぎだよ』

あ、やっぱり来たね

「おひさしぶりですー

どうしたんですか？」

といっても……また顔は見えないけどー

なんで隠すんだろうね

『私は君にはやく死なれては困るんだけどね

少ないから良かったものの……』

「あ、すみません……」

『まあ君らしいね』

「えへへ♪」

『君のかわりはいないんだからね』

「え!? そうなんですか?」

『風を操れる人がいないからね』

「……以後気をつけます」

『頼むよ』

「はい……」

あ、なにか用事ですか?」

怒るためにここに来たとは思えないんだよねー

『そうだよ』

過去に戻る前に君に力を使ってほしいんだ』

「へ?」

どうやって?」

『後で情報が流れるよ』

「わかりましたー」

なんで力を使うんですか?」

『原作だと白蘭のやった悪事は』

白蘭を倒した時に全て戻ったけど異変が起きたせいで

まだ完全に世界のバランスが戻っていないんだ

それは君にしか戻せないからね』

あほの神のせいだね

元々この世界にいない人のせいで

バランスがおかしくなって

白蘭さんのせいでさらにおかしくなって

倒して戻るはずだけどー……

原作よりあほの神のせいで

まだバランスが崩れておかしくなってるのね

というか、私に戻す力あるんだ……

まああほな神のせいの分しか無理みたいだけど……

「わかりました」

『頼むよ』

君が戻さないと時空が安定しなくて

安全に過去の世界に戻れないんだ』

「それは責任重大ですねー

了解です！

あー！ 副作用は……」

『それはないよ』

「よかったー♪」

いやーそれは助かった

副作用は結構しんどいんだよねー

『それと風のマーレリングは封印できないからね』

「そうなんですか？」

『そうだよ

君がこれからも守ってね』

「わかりましたー」

『君が過去に戻るときに力を使って

封印したことにしてもいいけどね』

「それもそうですねー

その方が良いかもしれないですねー」

雲雀先輩だけ封印してないって

後で言えばいいやー

『そこは君に任せるよ

後……継承編を覚えてる？』

「んーなんとなく？」

最後の方はみてないですけどね」

というか……

炎真君とD・スペードの名前ぐらいしか覚えてない（笑）

後は流れだけだよ……

『そう

バージョンアップできないからね』

「私は弱いままこれから頑張るしかないんですね？」

しょうがない……

特殊能力とかを使って何とかするしかないね

『それは違うよ』

「へ？」

『君のボンゴレ匣は』

最初から君に合わせて作ってるから

バージョンアップしても形は同じだよ』

「あ、そういえばそうですねー

確か初代から自分の形に変えたんですよ」

『そうだよ』

それに元々君のリングは君に馴染んでるからね』

「へえー

そうなんですか？」

『そうだよ』

特に風のボンゴレリングは

ボンゴレI世の血“罰”を浴びてるからね』

「へ？」

なんで浴びてるんだろ？

まあいいか

そういえば……私のボンゴレリングって

ターコイズ（トルコ石）みたいな感じにかわったよね

まあ水色なのはわかるけど……

多分みんなのリングと違うんだろうね

『枷を外したことによって』

炎の出方が違うかったはずだよ』

「あ……そういえばさつき凄かったような……

つまり私のリングは壊れにくいんですか？」

確かツナ君達はリングが壊れたような……

『そうだね』

枷を外したことによって

バージョンアップしたのと同じだから

簡単には壊れないよ』

「わかりましたー」

ということとは

マーレリングは壊れるから

継承式の時は持つていったらまずいかな？

おしやぶりは大丈夫だと思うけど……

そこは臨機応変だねー

どうなるかわからないしね

『枷を外したことによって

君のボンゴレ匣もバージョンアップしてるはずだよ』

「そうなんですか？

後で確認しときます」

わーい♪

みんなより先にパワーアップだね♪

ミントの見た目は変わってなかったよね？

威力とかがあがってるのかなあ？

『気をつけてね』

「どうしたんですか？」

『君のリングはヒビが入るだけでも終わりだからね』

「……わかりました」

『じゃあ

これからも頑張つてね』

「はあい

頑張りますー」

やっぱり私の予想通り

白蘭さんに捕まって死んだりしたら困ったんだねー

まさか私のがわりがないとは思わなかったけど

まあこれからも頑張ろうー

鍵

あ、また元に戻ったー

おお！なんか頭に流れてきた……

それにしても良かったよ

また共鳴の影響うけたらどうしよう

って思ったけど問題なさそうだね

やっぱり放出し合わないと出来ないんだね

それに影響受けてもすぐ合流しないように遠くに移動したしね

まあもし共鳴したらこのアジトは壊れただろうね……

壊れたら10年後の雲雀先輩に謝るしかないよねー

あ、起きたー

「お疲れ様ー」

「……あの……ここって……」

天国じゃないですよねっていう意味だよねー

どう考えても違うからね

だって私の部屋だしー（笑）

「んー混乱してると思うけどー

2回説明するの大変だから後でもいい？」

「は、はい」

「良かった♪」

「もしかして……私が生きてるのは……」

優さんの特殊能力のおかげですか……？」

「おかげって言われたらなんか嫌だけど……」

まああってるよー」

「ありがとうございます」

「いえいえー」

さて、後は連絡待ちだねー

神様に聞いたらわかるけど……

連絡来てないのに戻ったらおかしいからねー

変な行動すればリボン君に怪しまれるんだよね……

ちゃんと理由をないといけないのが大変だよ……
頭が良すぎだよねー
まあYさんが渡してくれればわかってくれるよね？
これは雲雀先輩を信じるしかないか……

カラン

勝った……？

みんなが言ってるしそうだよな……？

もう立つ力が残ってない……

「う……」

獄寺君と山本……？

オレをさせえてくれたんだ……

「10代目!!」

「おい 大丈夫かよツナ!!」

「よくやったな ツナ」

「で……でも……」

ユニと……優が……」

「……」

この戦いで失ったものが多すぎるよ……

優がないのにどうやって許せばいいの？
許すことも出来ないよ……

「……雲雀恭弥だな」

誰……？うるさい……

「最期にお前に渡せって」

……優が僕に？

チャラ……

「……はあ……」

もう呆れて溜息しか出ないよ……

「……なんだ？」

「ユニって子は生きてるかもね」

優のことだからね

生きてる可能性は高いと思う

「おい！ どういうことだ!？」

「さあね」

僕だって知らないんだ

「……あのバカ……」

みんなで帰るんじやねえのかよ……」

獄寺君……

「そっだよ……」

私、優ちゃんと約束したのに……

過去に戻ったら一緒に遊びに行こうって……」

「そうです……」

ハルも約束しました……」

京子ちゃん……ハル……

「君達うるさいよ」

ヒバリさん……？

「な!? ヒバリてめー!!!」

「ヒ……ヒバリさん……」

優が……死んじやったんですよ……？」

なんでそんな平然としてるの……？

優のこと大事に思ってたんじゃないの……？

「優は生きてるよ」

「「え!?!」」

い……生きてる……!?!

オレ達の目の前で消えたのに……？

「どういうことだ!!! ヒバリ!!!」

「僕だって詳しく知らない

でも必ず生きてる

優が最後に僕にこれを渡したからね」

チャラ……

なんだろう……

オレにはただの鍵にしか見えないけど……

「……鍵ですか……?」

「そうだよ」

あつてたんだ……

「……なんの鍵ですか……?」

「優の家の鍵」

「……お前に片付けてほしいって意味だろうが……!」

そうだよ……

優はヒバリさんに後のことを頼んだんだよ……

「優が僕に家の鍵を預けることは

僕達しかわからない意味があるんだ」

意味……?

「ヒバリさん……どういう意味ですか……?」

「必ずもう1度僕と会える意味だよ

優は僕に鍵をかえしてもらわないと家に帰れないからね」

「おめー! それだけで生きてるって言うのか!?!」

「そうだよ」

「で、でも……さつき獄寺君が言った意味じゃ……」

そっちの意味の方が高いよ……

だって優は消えちやっただ……

「僕は優の家の合い鍵を持つてるのに？」

「「え……」」

ヒバリさんは普段から優の家に入れる……？

それじゃあ……どうして鍵を……？

もしかして本当に……！

んーどこにあったかなー？

このアジトのことはそこまで見てないんだよねー
試しにここに来た時に探しとけば良かったな

お！あつたあつた！

予備のヴェントの服を発見♪

ちよつと大きいかも……まあいいかー

あ！電話がきたー！！

『やあ』

「よかったー

わかってもらえなかったら

どうしようかと思いましたがよ

『わかるに決まってるよ』

流石雲雀先輩だね♪

「ありがとうございます♪

あ、無事終わりました？」

『終わったよ』

「そうですかー

ツナ君が勝ったんですねー

じゃあそっちに行きますねー」

『詳しく説明してね』

「しますけどー

あんまり怒らないで下さいね?」

『……なにをしたの』

「んー雲雀先輩が怒るか呆れると思うようなことをしました
だからわがままを許してほしいって言ったんですよー」

『はあ……わかった……』

うわ……思いつきり溜息つかれた……

「すみません……」

では、そっち行きますね」

『待ってるよ』

「はあい」

さて、戻るかなー

「ユニちゃん」

「はい?」

「ツナ君が勝ったってー」

「本当ですか?」

「うん」

だからみんなの元に戻るよ?」

「はい!」

あ、いい笑顔♪

敵を欺くにはまず味方から

ふう……戻ってきたね

あ、ヴァリアーが真6 弔花を抑えてるよ

まあそうじゃなかったら雲雀先輩は連絡しないよね

んーみんなビツクリしてるねー

きやつ！ユニちゃんとγさんが……／／／

うん！いい抱きしめっぷりだね！

「おかえり」

「ただいまですー！」

ジー……

んー誰かこつちに来る

動きが素人じゃないから私を探してる人かな？

戦闘があつたから念のために見に来たって感じかな？

だって1人だもん

ズガン！

うわー容赦なく撃つたよ……

「……さつさと話せ」

「えつと……ありがとうございました？」

つい疑問系になってしまったよ……

もう少し優しいやり方ないのかなあ……

まあ無いだろうね

それにしてもあの距離で当たるのがすごいよね

どれだけ威力が強いんだよ……

京子ちゃんとハルちゃんが

何が起きたかわかってない距離だもんねー

つてか……獄寺君がひどい……

人を幽霊扱いしてるよ……

なんかブツブツ唱えてるよ……

悪霊退散とか聞こえてくるし……

「えつと、説明しますけどー」

先にツナ君に体力あげるね」

「オレのことはいいから……なんで……」

あら……後回しでいいのね

「私にも教えてください」

「オレも知りてえぞ」

そこにあるおしゃぶりは偽物であつてるよな?」

「流石リボン君♪ すぐ調べたの?」

「ヒバリが生きてるって言った時に

一番気になったのはこれだからな」

「そっかー」

「ボンゴレリングだけなかったから

ヒバリのいうとおり生きてると思つたしな」

「そうそうー」

まさかリングの形が変わると思わなくてさー

用意してたけど意味なかったよー」

ゴソゴソ

えーつとどこかな?

あつたあつた

「ほらね?」

いや、変わるのは知つてたけどね

でもこれを準備するのは当然だよねー

「何したの」

「んー順序よく説明するとー

まず私はユニちゃんか

アルコバレーノを復活するために命をかけることを

先に知っていたのでいろいろ対策してました」

「なんで優は知つてたんだ?」

「それはユニちゃん心当たりない?」

「そういえば……未来の優さんに話をしました……」

「未来の私がお師匠さんに話してたんだよ

私はそれを聞いたから知つてたの

だからお師匠さんに偽物を作ってもらっていたんだよ
そして移動する前に落として

フードとかを外してそれも落としたんだー」

「だがそれだと……」

あの一瞬ではどう考えても無理だろ」

「リボン君の疑問もわかるけどー」

それは雲雀先輩はわかりますよね？」

「ミントの形態変化だよね」

「当たり前ですよー」

「ミント……って……優の……匣兵器……」

ツナ君は本当に大丈夫なのかな……？

かなり途切れ途切れに話してるけど……

さっさと話を終わらせよう

「私の形態変化はすごいからね」

ガルッ♪

「何度もごめんね？」

ガルルー♪

「ありがとう♪ ミント形態変化」

「とけい……？」

時計って言っても形は懐中時計だけどね

「そうだよー」

私の場合は初代の守護者いないから

完全にオリジナルでしょ？

で、未来の私も攻撃するのが嫌いだから

武器じゃなくある効果が使えるって感じなんだー」

「そうなのか？」

「そうだよー」

『選ばれし時間』を使えるんだー」

「どんな効果なんだ？」

「時間感覚を加速させるんだ」

あ、これだけじゃみんなわからないよね

「簡単に言う」と

「1秒って本当に1秒しかないでしょ？」

「そうだな」

「その感覚を加速させて増やすの

つまりーみんなが1秒って思ってるけど

私はその1秒がみんなと感覚が違うくて10秒あるの」

「「え!?!」」

「みんなは一瞬でも私には10秒あったの

武器じゃないけどー

実は絶対避けられない攻撃ができるんだよねー」

うわーみんなびっくりして固まってる（笑）

まあ雲雀先輩もこれ言った時は固まったからねー

「でも1時間に1回しかできないから

白蘭さんには使えなかったの

私の炎がきかなかったっていうのもあるけどね」

「なるほどな

あの結界の中に入った時点で

ユニがアルコバレーノを復活させるって

わかったから使うことはできなかつたのか」

「そうそうー

今、形態変化してるけど使えないんだー

後どれぐらいでまた使えるかわかるけどね

まあユニちゃんかどのタイミングで

アルコバレーノを復活させるかわからなかつたけどー

もし白蘭さんの目の前で復活させた場合のために

偽物を用意してみたんだよ」

あ、次に発動できる時間が短くなってる♪

30分に1回になってるよー♪

「なるほど

ユニと優が生きてるって思わせなかったためか」

「そうだよー

生きてるとばれたら意味ないからね

偽物ってぱつと見わからなかったら問題ないかなって

アルコバレーノが復活したらなんとかなると思ってね」

「確かに

オレでもわからなかったからな」

「……数日は騙せると言うって言ってたからね

でもリボン君にも騙せるとは思わなかったよ……」

流石神様だよ……

「カモフラージュのために服を落としたのか」

原作で落ちてたからっていうのもあるけどね

「そうそうー」

一緒に移動したらどうしようかと一瞬思ったけどね

私が触れてなかったら移動が出来ない制約で助かった……

「えっと、それで……

敵を欺くには味方からってことで

誰にもこの計画を言わなかったの

みんなのリアルな反応が必要だったんでね」

「僕には教えてよね」

だって説明すれば反対するのわかってたもん

「雲雀先輩には実行する前に鍵を預けるつもりでしたよ

先に渡してもわかってもらえないと思いましたがしね

まさか結界に閉じ込められるとは思わなかったですし……

でも雲雀先輩の反応が1番効果あったかもですねー」

ある意味良かったかもねー

「僕は心臓が止まると思ったんだけど」

「ええええ!?!」

「なに」

「すみませんでした……」

「はあ……」

そんなにショックを受けるとは思わなかった……

後でもう1度謝ることにしよう……

「えつと……話を戻しますね」

指輪の形が変わった時点でツナ君が勝つだろうな
って思ったからボンゴレリングないけど
見えなかったら問題ないかなって思ったの」

「……オレ……気付かなかったよ……」

「それはよかったー」

ツナ君は騙せるタイプじゃないから

気付いていたら白蘭さんにばれてたよー」

「そ……そっか……」

特殊能力

「次は私とユニちゃんが生きてる理由はー」

「特殊能力だな」

リボン君、私の見せ場をとらないでよ（笑）

「そうそうー」

「1つ目はユニちゃんの命の炎に

私が影響を受けないようにしたの」

「それは必要だったのか？」

「んー次の特殊能力の発動条件が

ユニちゃんに触らないといけなかったから

どうしても必要だったの」

「もう1つの方でユニを助けたってことか……」

「当たり前だよー」

ユニちゃんが命の炎をそそぎ終わった瞬間に

発動するようにコントロールしたんだけどねー

触ってないと意味がないんだよねー」

「っていうのは嘘でー」

神様にタイミング教えてもらいましたー

そんな勝手に発動できません

そしてやっぱリミントの形態変化は素晴らしいね

あの一瞬がゆっくりに感じれたから出来たんだよ

「……なににしたの

それが僕に怒られるか呆れられることだよね」

まだ言っていないのになぜばれるんだ……

「そうです……すみません……」

「はやくいいなよ」

「えっと……その……」

私の寿命を……ユニちゃんに……」

「え!?!」

「はぁ……」

呆れた方だった……

「優さん……私のために……」

「私が勝手にしただけだから気にしないでね

それに少なくて1人に与えられる量が限られてるんだ……
たくさんあげれてたら良かったんだけどごめんね……」

「あ、悲しそうに首を振ってるね

うーん……もうしちゃったことだしねー

気をつかわないでほしいんだけど……

少しまじめに言おうかな？

「本当にこれは私の自己満足なんだよ

1度あげると何をしても絶対返ってこない

だから気にせず生きてほしい」

「はい」

「あ、受け止めてくれたかな？」

「まっすぐ私の顔を見て返事したからね

「確認だけど……白蘭さんを倒しても

ユニちゃんには効果なかったよね？」

「……そうです」

「やっぱりねー

過去の世界ではユニちゃんは生きてると思うけど

この世界の未来のユニちゃんは死んだままだよねー

だって白蘭さんの悪事がなくなるだけだもん

他の世界のユニちゃんは白蘭さんの悪事で

亡くなったりしてると思うから元に戻ると思うけど……

「それはよかったー

効果があつたら私がしたこと意味なかったもんねー

どれぐらいか数字を言った方が良い？」

「はい」

「……5年」

「わかりました」

「ごめんね……」

5年たつと今日起こるはずだったことが
5年後に起こるんだ……

だから……あんまり意味ないんだ……」

だから5年後にユニちゃんが消えちゃうんだよね……

「いいえ

感謝しきれません

ありがとうございます」

この笑顔を見ただけで充分だよー♪

「優

「はいー。すみませんでした!!」

うわー私って凄い!!

条件反射ですぐ頭を90度に下げた!!

「はあ……もうそれしないでね」

おお……許してもらえたっぽい

もう顔をあげてもいいか……

「大丈夫ですよー

したくてももう出来ないですからー」

「出来るとするつもりだったの」

……まずい……怒った……

一歩下がってしまったのはしょうがないと思う

「……出来てももう出来ないと思います……」

雲雀先輩が怖すぎて……

「対価はなに払ったの」

「「「?」」」

あーもうみんながビックリしちゃったじゃん……

「僕が気付いてないと思ってるの?」

命の炎を影響を受けない方は対価を払ったよね

そうじゃないと優は特殊能力の反動を受けて

ここに戻ってく来れないはずだよ

寿命を与えた方で少し疲れてるからね」

なんかすごい物を払ってるみたいなのだよ……

「優さんどういふことですか……？」

「ユニちゃん大丈夫だよ」

「そんなたいしたもののは払ってないよ」

「はやくいいなよ」

「さつき言いましたよ？」

「……1度しか使えないようにしたんだね」

「当たり前です」

寿命は違う人だったらあげることが出来ましたけど

1度きりにするという対価を払いました

これを使うと悲しむ人がいるかなって思い

使えないようにするのが一番と思いこれを払いました」

「そう」

「……やっぱり正解だったね」

怒ってなさそうだ……

「つまり優は残り3つ全部使ったのか？」

「……なんで……優は……2つしか言っていないよ……」

本当にツナ君は大丈夫かな……

「あの場から消える特殊能力が必要だろ」

前にもそれで白蘭から逃げてるからな」

「あ……そういえば……」

「あれは違うよー」

ゴソゴソ

えーと、これはこっちのポケットだね

あつたあつた♪

「なにそれ」

「前に雲雀先輩に説明しましたよ？」

「……超炎リング転送システムだね」

「当たり前ですー」

「小さすぎだぞ……」

「おおーリボン君もびつくりした（笑）」

「私もびつくりしたよ……」

お師匠さんに渡された時使えるのか聞けば
俺を誰だと思ってるんだって言われよ……」

それもどんな結界でも出れるように

作ってもらった特別製なのに手のひらサイズ（笑）

まじで……すごすぎ……

「私以外手助け禁止だから私の炎にしか

反応しないので移動できても2人分が限度ですよ

そして私の許可がいるってことで

私が触れてる人や物しか移動出来ませんしねー

炎の量はボンゴレリングとマーレリングが必要です」

「どうやって使うんだ？」

優は2つつけた時には移動しなかつただろ」

流石リボン君だね

「イヤリングでオンとオフが設定できるんだー

フードかぶってるから気付きにくいでしょ？」

「なるほどな」

「それにまだストックは2つありますしー」

「残り3つじゃなかったのか？」

「そうですよー

でも未来の私から1つもらいました」

「どういうことだ？」

「力を薬に変換してお師匠さんに預けていたみたいで……

ユニちゃんを助けたって思ったのは

未来の私と過去から来た私だったのでー

公平に1個ずつってことで遠慮なく使いました」

正しくはミントに渡してたんだけどねー

それに未来の私は寿命減らないけど

過去から来た私は寿命が減るっていう意味もあるけどね

それにしてもみんなびっくりして

話についてこれなくなってるよねー（笑）

普通に会話してるのはリボン君と雲雀先輩だけだしね

XANXUSさんは頭がいいからわかっていると思うけど
会話に参加するわけないしねー

バランス

「あの結界から出れる方法が実はあったんだけど

逃げてでも結局また呼ばれることになるでしょ？

それに私をいれて2人だから

ツナ君とユニちゃん両方は無理だったしさ……

あのタイミングしかなかったんだよ

だからみんなごめんね？」

あ、みんなが首を振ってくれた♪

「さて……ツナ君体力あげるよー

ちよつと疲れてるから少ないけど許してね」

「う、うん……」

「少しはましになったと思うよー」

「あ、ありがと……」

「いえいえー」

ピカアアア

「よくやったな

沢田!!! コラ!!」

おーアルコバレーノが復活だ!!

でもちよつと遅くない？

あ、原作と違ってγさんの分がないからね……

「みなさん!!」

「「「ユニ!?!」」」

あーそうか

こつちにも説明しないと

いけなかったのか……しまった……

「優さんのおかげで私はまだ生きてます」

「どういうことだ！ コラッ！」

「もう1度説明するのが面倒だよー

ってことで、ユニちゃんお願い……

簡単に説明してほしい……」

「はい」

ユニちゃんはいいい子だね!!

嫌な顔をしないなんて……

つまり私はひどい(笑)

「風早!! 礼をいうぜ! コラッ!!」

「いいってー」

勝手に私がしたかったことだからー」

「ムム 君は変わり者だね

自分の寿命を人にあげるなんて

僕は絶対しないね」

「よく言われるよー」

本当にかわってるってよく言わてる(笑)

「とりあえず白蘭さん倒したらどうなるか

みんなに教えてあげてー

まだツナ君達に説明してないよね?」

「そうだったぜ コラッ!」

「え!?! なにかあるの!?!」

これで原作戻ったかなー?

まあみんなが話してる間にー

私はちよつと離れてバランスを戻そう……

んーここでいいかなー

後は周囲の気配を徹底的に探るかな?

集中力いりそうだから誰か来ちゃ困る

ん? ツナ君達がいたほうから誰か来るよ

「どっ行くの」

「あれ？ 雲雀先輩

話をきかなくてよかったですか？」

「優は知ってるんだよね？」

「僕は優から聞くよ」

「そうですねー」

説明するの大変なので

簡単に言っていていいですか？」

もう説明ばかりでしんどいもん……

「いいよ」

「白蘭さん倒されると

全てのパラレルワールドのあらゆる過去に

遡って抹消されてー

白蘭さんの悪事が全部なくなるみたいですよ」

「へえ」

「だから死んだ人達も死んだことが

なかったことになるみたいですよ

でもこの世界のユニちゃんだけは無理だったので

私は力をつかってユニちゃんを助けました」

「……わかった」

「で、アルコバレーノの人達が

マーレリングを永遠に封印してくれるんですよー

だから平和の過去に戻るってことです

でも風のマーレリングは封印できません

まあ私の力で過去に戻るときに

封印するっていうウソつきますけどねー」

「わかった

欠点は？」

「寿命の方は……」

さつき言ったのが全部と思います」

「触れないといけない、寿命は戻らないし

1人に5年……この3つ？」

流石雲雀先輩だ……

私がグダグダ話したのをもう整理してるよ

「はい

それだけと思います」

「もうひとつの方は？」

「お師匠さんと相談したんですけど

多分1つだけですねー

私のおしやぶりに命の炎を吹き込んでも

私は復活しないだけです」

「……わかった」

「それにこのデメリットはかなりラッキーと思います」

「……どういうこと」

「私は多分リボン君達とは違うんですよー

だからユニちゃんが命の炎を吹き込んでも

元々復活できるかわからないんですよ

私は7・の1部じゃないですからねー」

「……そう」

ぐいっ

「きゃー」

また……力が強い……

ぎゅ

外で抱きしめられてる……／／／

「雲雀先輩……？／／／」

「……少しこのままね」

心配させすぎたかな……

あ……離れた……／／／

「優はどうしてここに来たの」

「あ！ そうだった！」

すっかり忘れてた（笑）

絶対忘れちゃいけない内容なのにねー

雲雀先輩のせいで忘れてたということにしよう
うん。私ってひどいね！

「雲雀先輩、少し離れてくださいねー」

多分大丈夫と思うけど念のためだよ

「なにをするの」

「んー白蘭さんが倒したら

すべてのバランスが戻るはずなんですけど

完全に戻ってなさそうなので私が今から戻します」

「どういうこと」

「詳しく説明は出来ないんですけどー

ある理由で世界のバランスが崩れたって

言いましたよね？」

「そうだね」

「そのある理由のせいで戻ってないんですよー

その分のバランスは私の力で戻すことも

出来るみたいで今から戻します」

「わかった」

特に周りには誰もいないなー

「ちよっと集中するので

周りに何かあればお願い出来ませんか？

今は問題はないんですけど……」

「いいよ」

えっとまず袋をとらないといけなんだよねー

「それとるの？」

「あ、大丈夫ですよー

今回使う力は副作用ないのでー」

「わかった」

ピカアアアア

これでいいよね……？

うん。間違っただけじゃないと思う

早く袋に入れよう……

よし、なんとか入った……

フラッ

あ……やばっ……！

ガシッ

あれ？雲雀先輩だ……

また支えてくれたんだ……

「すみません……」

少し……疲れました……」

まさかここまで疲れるとは……

まあ熱が出てないだけかもしれませんが……

「僕が近くにいて良かったよ」

「そうですね……助かりました……」

これで完全にバランスが戻ったので

時空が安定して無事に過去に戻れますよ」

「わかった」

「もう大丈夫です

ちよつとめまいがしただけみたいです」

息が少しあがってたけど

それもなくなつたみたいだしー

「無理はダメだよ

優は特殊能力もかなり使ったんだからね」

「大丈夫ですよ

ツナ君にはそんなにあげてないですし

寿命も体力も元々私が持つてるものなので

そんなに疲れてないですよ

私の感覚ではまだまだ起きれます」

「……わかった」

……うん！

やっぱり大丈夫だったね

雲雀先輩に離してもらったけど問題ないね

「ありがとうございました」

それにしても……

「ここまでおしゃぶりが光るとは思いませんでしたー」

「そうだね」

ユニちゃんが前に光らせたのと同じぐらい光ったよ

離れたけどリボン君達にはばれてるかもねー

聞かれると面倒だから移動したのになー

意味がなかったよ

「今の光でリボン君達にも

多分ばれちゃって聞かれると思うので戻りますよ？

雲雀先輩は先に帰ってます？」

人が多いしねー

それに私が説明してた時は我慢してたと思うしね

「そうだね」

「私も終わったら帰りますね」

「待ってるよ」

「はい♪」

はじめまして

うわーみんなが待ち構えてた……

それにしてもこんなにも

小さい赤ん坊が並んでるってすごいよね（笑）

まあツナ君達は喜んでて気付いてないみたいだけどね

「なにしたんだ！ コラッ！」

「こんなにも光ったのは優が何かしたんだろ」

「やっぱりばれちやっってたねー」

「優さんどうかしたんですか？」

「んーあんまり詳しく説明できないんだけど

白蘭さんを倒したら全て元に戻るはずなのに

完全に戻らなかったから私が今戻したの」

「どういうことだ！ コラ！」

「話せる範囲だけで言うよ？」

「確か7・はこの世界を創造した礎って入江君が言ったよね？」

「そうだぞ」

「その創造より大きな力が働いちやってさー

世界のバランスが崩れちやって

私は人柱になったんだよねー

だから7・だけでは無理で私が力を使わないと

世界のバランスが完全に戻らなかったんだ」

「7・の起こす現象は人知を遥かに超えているんだ

それ以上の力を起こすなど可能なのか？」

まあ一応神様だしねー

『あほの』だけど……

「というか……このアルコバレーノは誰？（笑）」

「博士みただけど……」

「ってか、初めて会うのに普通に話しかけてきたよ

さつきまで話したことある人だけだったのに……」

「まあいいや」

先に返事をかえそう

「聞かれても私が人柱になったのが
証明って言うしかないよー」

「…………ふむ」

「おおー考えてる姿が博士っぽい！

「あの…………名前を教えてほしいなあ…………

あー！ 私は風早優です。

未来のみんなは知ってると思うけど…………
マフィアに狙われてますの活動する時は
ヴェントと名乗ってフードをかぶってます
風を操る力をもってます」

「私はヴェルデだ」

……………すっごい短いね

もう少しいろいろ教えてほしい…………

「スカルだ！

オレはこの中で一番強いんだ！

だからオレの命令を聞くんだぞ！」

えー何それ……………

「それは嫌♪」

「なあ!？」

「誰が一番つえーんだ？」

あれ？ 珍しいなー

リボーン君がツツコミを入れてきたね

「…………り、リボーン…………先輩…………」

バキッ

「えつと…………殴らなくてもいいんじゃない…………」

スカル君が吹っ飛んでいったよ…………

「オレのパシリはオレが締めるんだ」

「そ、そっか……………」

これは深く考えちゃいけないんだね…………

「最後は私ですね

イーピンの師匠の風です

あなたのことはイーピンの手紙に書いていました
いつもイーピンがお世話になっていきます」

.....

「? どうかしました?」

「イーピンと逆だな」

「リボンおじさまはわかるんですか?」

「ああ」

「風早!」

目を覚ませ! コラ!

「へ? 起きてるよー」

ただ……フォンさんが……」

「「?」」」

ぎゅっ♪

「かわいすぎー!!」

もうダメだー!ー!ー!!

小さくお辞儀した姿といい

なんともいえない感じが凄くいい!!!

「……風早優さん……離してください……」

無理!!だつてかわいすぎだもん!!

それに小さい雲雀先輩に見えるんだもん!!

……連れて帰っていい?

え……いいよね?

よし!私が許可する! (笑)

「優それぐらいにしろ」

リボン君が止めたなら本当にダメなんだね……

「はあい……」

ちえ……せめてもうちよつと抱きしめたかった……

「……君は僕にも同じ事言わなかったかい?」

「うん」

だつてマーモンちゃんもかわいいもん♪」

「……………」

事実なのに……

ってか、アルコバレーノはみんな可愛い♪

「この娘は単細胞並のバカなのか？」

ヴェルデ君ひどい……単細胞って……

「逆だぞ

常に最悪の事態を考えて行動するぞ

頭の回転はかなりはえーぞ」

へえー

リボーン君って私をそういう風に思ってたんだー

「……バカにしか見えん」

「オツパイ！ オレもー……!!」

いやー……!!なんか来たー……!!

ふわっ

ふう……危なかった

もう少しでじんましんが出るところだった……

「な、なんだコレは?」

「ご、ごめんね……」

なんか身の危険を感じて……

あ！ ユ、ユニちゃん!!」

どこかにいっちゃんいそうだよ!!

急がないと!!

「はい?」

「ちよつとヴァリアーのところ行ってくるね

みんな帰っちゃんいそうだよ!!」

「はい

わかりました」

「僕も行くよ」

マーモンちゃんもみんなに会いたいよねー

「私もこれで……」

ちえ……フォンさんもきてくれていいのに……

まあイーピンちゃんに会いに行くんだろうねー
「私も研究がある」

ボンゴレ匣をリングにしてくれるんだろうなー

「オレも大事な用事だ！ コラー」

あ、ラルさんのところかな？♪

「おろせ!!」

あー浮かべたまますっかり忘れた……

「そのままでもいいぞ」

「リボーン先輩!?!」

「わかったー」

「1分後におろすねー」

「おろせー！ー！！」

「冗談だって……」

ストン

あ、すごい怖かったのかな？

めっちゃ安心してるよ（笑）

「じゃあ行ってくるねー」

「はい」

握手

私とマーモンちゃんがこっちに来るのを見て
どこかに行くのをやめてくれたみたい

「こんにちはー」

「しし♪ 小さい姫じゃん♪」

「ほんとねえ」

10年前はこんなにも小さかったのね」

「みたいですねー」

少し大きいとは思ったけど

着るとここまでブカブカだとは思わなかった……

「さつき顔を見たとき懐かしかったわあ」

「やっぱり少し違います?」

「当たり前よお!」

全然違うわ!」

おお……!少しは大人になってるんだね!

「少し気になります……」

まあそれより……XANXUSさんは?」

「ボスはもう帰ったわよお」

「えー……そんなあ……」

うー少しは話をしたかった……

まあ何を話せばいいかわからないけどね(笑)

あれ?ベルさんがあんまり絡んでこないと思ったら

マーモンちゃんとベルさんが遊んでるよ

2人って結構仲良いよねー

「うゝお おい!」

てめえの匣兵器はどうなってる!!」

「へ? どうって?」

「風竜をどうやってつくったんだあ!!」

「つて……怪我は大丈夫なんですか!」

重症じゃなかったっけ!?

「いいから答えろお!!」

まあいいか……元氣そうだしねー

っていうか、白蘭さんの龍もどうやって作ったんだろ？
でももう聞けないしねー

「えつとですすねー

恐竜のDNAと私のDNAを混ぜて作ったみたいですよー
だから風竜が出来たみたいです」

「な?!?」

スクアールさんもいいリアクションしてくれるよねー
「すごいですよねー

私もびっくりしましたよー」

「だが！ そんなこと可能なのか!!」

「レヴィさーん 可能だからあるんですよー

変態雷親父だけじゃなくてバカみたいですわねー」

「ぬおおう!？」

貴様 今何と言った!？」

あ、完全無視だ（笑）

「えつと……はじめまして?」

「そうですねー

過去から来た優さんとははじめましてですわねー

フランといますー」

「フラン君ねー

未来の私とは会ったことあるみたいだね

これからも未来の私をよろしくね?」

「わかりましたー

優さん聞いてくださいー」

「どうしたの?」

「ベルセンパイが

ミーにひどいことばっかりするんですよー」

「てんめっ」

うわーベルさんからかなりの殺気が（笑）

さつきまでマーモンちゃんと何かしてたのに……
こういう話はすぐ聞こえるんだ……

あ、フラン君が私の後ろに隠れた（笑）

「んーよくわかんないですけどー」

「10年たつてもベルさんだねって思いました」

「気に入らない人は気に入らない」

「気に入る人は気に入る」

「ヴァリアーとか敵とか関係ない感じが……」

「王子だからねー（笑）」

「っっっ♪」

「……XANXUSさんにもう会えないのかあ……」

「挨拶ぐらいはしたかった」

「さつきは助けてくれたし……」

「まあ早く話を聞きたいから助けてくれたと思うけどね」

「今だったら追いかけたら会えると思うわよお？」

「本当ですか!？」

「今すぐ行きます!!」

「あっちにいったわよお」

「ありがとうございます♪」

「きやー急がないと!!」

「会えたー!!!!」

「頑張つて走ったかいがあったよ!!」

「XANXASUさん 待ってくださいーい」

「なんだ」

「10年前に帰る前に会いたかっただけですよー」

「用事はないですよ？」

「あれ？無視された……」

でも止まってくれたね

まあ止まってくれても特に話題はないんだけどね……

あーそうだ!!

「あの……」

「なんだ」

「最後に握手してもいいですか？」

う……睨まれた……

あ、でも手出してくれた♪

「ありがとうございます♪」

うわーXANNXUSさんの手が大きいなー

「ありがとうございます♪」

未来に来ていい思い出ができました♪

「……もう帰るのか」

「そうですねー」

今度は未来の私がXANNXUSさんに会いにいけますよ

「……そうか」

「はい♪」

では……さようなら」

あー行っちゃったー……

返事ぐらいしてほしいよねー

まあいいか……

あ、まだいてたみたいー

「ボスに会えたのかあ？」

「はいー」

いい思い出になりましたー♪」

「それはよかったわあ」

「はい♪」

では私はまたユニちゃんのところ
顔を出して帰りますね？

そろそろ帰らない集まってきちやうんでね」

「そうねえ……」

でも寂しくなるわ〜」

「そうですねー」

でも未来の私が必ず会いに行きますよー」

「それもそうねえ」

「はい♪」

「小さい姫♪」

さつきからなんでベルさんは

私のことを小さい姫って呼ぶんだろ……（笑）

「なんですか？」

ポンポン

うわー頭をポフポフされたー

「小さいぜ」

「なんですか……それは……」

「しし♪」

うん……やっぱりベルさんはよくわからない……

まあ王子の行動は理解するのは私には無理と思うしねー

気にしないのが正解と思う（笑）

「じゃあみなさん

さようならー」

すり替え

「＼さんといいい雰囲気かも？」

あ、リボン君も一緒にいるから問題ないかな？
でも話しかけにくいね……

そのまま帰ろうかなー

「優さん お話は終わったのですか？」

気をつかわせたかも……

「うん 終わったよー

あ、＼さん先程はすみませんでした」

痛くなかったとしても銃で撃ったからね

かなり失礼だと思う

「……こっちが礼をいうほうじゃないのか？」

「へ？ なんですか？」

「……こいつはいつもそうなのか？」

「ああ 優はいつもだぞ」

え!?何?!

すつごく気になるんだけど……

「優さん……すみません……」

「へ？」

「実は未来の優さんに間違っ

て伝えたことが1つあります……」

あ、すごい……

＼さんがユニちゃんと目が合っただけで離れていった
聞かないでほしいってわかったんだらうねー

「んーどれなの？」

いっぱいあって流石にわからないよー」

「マーレリングが封印出来るのは知ってますよね」

「うん」

「実は風のマーレリングだけは封印できないです……」

やっぱりねー

だって未来の私の手紙には書いてなかったもん
「そうなのか？」

「へ？ そうなの？」

「はい」

やっぱりあってたねー

「んー私の力で封印するから気にしなくていいよー

多分大丈夫だよ」

「ありがとうございます」

「いえいえー」

……ウソついてゴメンよー

ユニちゃんはこれ以上気にしなくていいと思うんだ……

「他のリングはアルコバレーノのみんなが

封印してくれるんだよね？」

「はい」

「良かったー

実は私はみんなと違うからよくわからないんだよねー」

「そうですか……」

では……未来の記憶を過去の人達に伝えることが

出来るのも知りませんか？」

「え？ そうなの？」

うわー聞きたかったこと言ってくれた!!

ユニちゃんありがとうー!!これで対策ができるよ!!

「はい」

「それを今回するの？」

「はい おしやぶりに炎をこめました」

「そっかー……」

「どうかしたのですか？」

「んーあんまりしたくないけどー

すり替えさせてもらおうかなって……」

「なにするつもりなんだ」

「出来れば未来の記憶なんだけどー

風早優のところもあるけど

全部ヴェントにかえようかなって……」

「優さん大丈夫ですよ？」

一緒に戦った人達にしかこの記憶は渡しませんよ」
「んー念には念をって感じかな？」

私の未来は怖いからねー

過去の時代で元々正体を知ってる人だけ
わかってもらえたら別にいいしー」

「でも……」

「知らない人でも知りたかったら

ボンゴレに連絡出来たりするでしょ？

ユニちゃんのお母さんはマフィアだしねー

私はボンゴレの連絡先なんて知らないけど

リボーン君は問題ないよね？

判断は私とリボーン君するのがベストと思うんだー」

「そうだな」

「……そうですね

後1つしか残らないですね……」

「ちげえぞ 優は元々この能力つかえたぞ

だから本当は特殊能力の数は全部で6個だろ？」

「んー本当のことというね

あれは私の能力じゃないよ」

「どういうことだ!?!」

「あれはお師匠さんの能力だよー

お師匠さんは私より能力がかなり上だからねー」

「……どういうことだ」

「簡単にいうねー

デイーノさんには話せる範囲は全部話したから

詳しくはデイーノさんに聞いてね？」

デイーノさんに説明させる私ってひどいね（笑）

まあ詳しく説明するならアジトでしたいしー

でもそうすると説明してる途中で寝ると思う……

だからディーノさんに丸投げ（笑）

雲雀先輩がみんなに説明するわけないしねー

「……ああ」

「私の特殊能力は全部お師匠さんがくれたんだ

つまりお師匠さんが使える能力の一部を

もらったって思ってたほしいの」

「!？」

「それで私が使える特殊能力は

自分の体の特異体質に変えるっていうレベルだよ

白蘭さんはものすごい物って思ってたみたいだけどね

まあ私の体をユニちゃんみたいにかえたら

なんとかなかったかもしれないけどね

でもそれをするると多分私は死んじゃうと思うけどね」

大空の波動に無理矢理変えた瞬間

おしやぶりが外れて死んじゃうんだろうね

私の呪いはある意味生きてることだしー

あ、リボン君が考え込んだ（笑）

「ちなみにさつき見せた

超炎リング転送システムは特別製だからね

普通の超炎リング転送システムでは移動できないよ」

「!？」

「捕まった時のことを考えて

どんな結界でも抜けれるようにして作ってたみたい

ミルフィオーレの科学力を考えると予想出来る範囲だからね

まさか自分達で結界を作るとは思わなかったよ」

本当に自分が結界を作るとは思わなかったよ（笑）

大空の結界しか考えてなかったしー

「そうだったんですか？」

「そうだよー

お師匠さんはミルフィオーレの科学力より上だからね

それぐらい考えるのは当たり前だよ」

「……なるほど」

「ちなみにお師匠さんの掟は

私以外に会えないし私以外手助け禁止って言ったよね」

「ああ」

「でも誰にも会わずに生活なんて出来る？」

「だから私以外に会った人は

全部記憶のすり替えすることになってるの」

「うわーすごいウソだねー（笑）」

「……なるほど」

「リボン君に探しても見つからないよ

って言ったのは本当はそういう意味だよ」

「……わかったぞ」

「優さんのお師匠さんは寂しくないのですか……？」

「ユニちゃんは本当に優しい子だなー

知らない人でも心配してくれてるよ

「んー私はお師匠さんの精神世界にいつて

よく話とかするけどいつも忙しそうだよ」

「そうですか・・・」

「うん

忙しいからまたなとか言われたりするもん

後、雲雀先輩の話をすれば腹が立つんだよねー

「すぐまたなって言われるよー」

「神様は雲雀先輩のことが嫌いなのかな？」

「でも私が付き合うって話になった時は応援してくれたよね？」

「よくわかんないなー……」

「まあいいか……」

「それにお師匠さんは私と会う前からもすり替えをして

誰とも関わりをもとうとしなかったみたいだから

「さびしいとか思っていないと思うよー」

「うわーまたすごいウソついた！（笑）」

でもしようがないよねー
神様なんて言えないもん

「わかりました」

「うん」

ユニちゃんが気にすることじゃないよ?」

「はい」

「まあ詳しくはディーノさんに聞いてね

ツナ君達も聞くんだったら聞いてもいいよー

じゃあ私は戻るよ

私がここにいるとみんなが危ないと思うしー」

それに後1時間ちよつとで寝ちやうと思うしー

寝る前に軽くお風呂入りたいんだよねー

「ああ」

「気をつけてくださいね……」

「大丈夫だよ」

これで移動するから」

超炎リング転送システムは便利だね

まあ1人だけ楽するのは許してね（笑）

……ユニちゃんの安心した顔を見れば

なぜか凄く罪悪感が出るのが不思議だ……

「……ユニちゃん、また後で会えるのかな?」

「はい」

沢田さんのアジトにお邪魔させていただきます」

「わかったー」

「じゃあみんなまたねー」

隣

明日帰ることになったみたいだねー

まあ多分明日になったのは私のせいだね

絶対原作より遅くなったと思う

昨日帰ってから疲れてずっと寝てたからね（笑）

特殊能力を使ったのとバランスを戻したからねー

雲雀先輩が近くにいるだけでも長い時間寝てしまった……

だからもう1日開けようという話になった

まあ流石に寝てる間に帰るのは嫌だしね

帰っていたら誰かを恨んでたよ（笑）

それにしても未来に来てドタバタ日にちが過ぎていったなー

結構長い間いてたのにあつという間だったよ

あ………そういえば………

「………雲雀先輩」

「なに」

すごく聞くのに勇気がいる………

でも約束だし………

「どうしたの？」

「あの………変なこと聞いてもいいですか………？」

「いいよ」

「雲雀先輩は………私と出会って後悔してませんか………？」

心臓の音がうるさい………

「私と会わなかったら………」

雲雀先輩はもっと自由だと思っうんですよ………」

返事がないな………

「………ごめんなさい」

気にしないで下さい

「ちょっと変なこと言いましたよね」
聞くんじゃなかった……

「ちよつとご飯を作ってきましたね」

「このままここにいと泣きそうだ……」

雲雀先輩に心配かけちゃう……

「……僕は優に束縛されたと思ったことないよ」

い、今……雲雀先輩が言ったよね……？

幻聴じゃないよね……？

「……本当ですか……？」

「僕は嫌だと思ったことは優がいつでも絶対しないよ」
そうかも……

私が頼んでも嫌な時は嫌って言うし……

「僕はやりたいようにやってるだけだよ」

……いてもいいのかな……

あ……でもやっぱりダメだ……

「私が……ヴェントがレアってばれると……」

並盛の風紀が乱れますよ？

私は並盛にいないほうがいいですよ？」

「優は乱してない」

乱すようなこと今までのしたことないよ」

「でも……」

「乱してるのはヴェントを探してる人だよ」

だから僕が咬み殺す」

「……じゃあ……私は……」

これからも……雲雀先輩と……

一緒に……いてもいいんですか……？」

「問題ないよ」

ああ……もうダメだ……

我慢できない……

「ひばりせんぱあ……」

「……どうして泣いてるの」

「……わたし……ずっと……ここに……
いちやいけない……きがして……」

「優」

「……なんですかあ……？」

「約束したよね」

約束……？」

「僕の元に必ず戻ってくるって」

「……しましたあ……」

ひばり……せんぱいが……

ひつようと……するまでは……もどります……」

「……優 覚えておいて

僕の隣が優の居場所だよ」

「……わたしの……いばしょ……？」

「そっだよ」

「……わたしなんか……」

そんな……ばしょは……ないですよ……？」

「なに言ってるの」

「……だって……」

私は……本当は……ここにいけないもん……

そんなところ……ないもん……

「決めたからね」

「……へ……？」

「僕の隣は優の居場所だよ」

僕の隣は優のためにあけておく」

雲雀先輩の隣が……？」

私の居場所……そんなのあつていいの……？」

「……ほんとうに……いいんですかあ……？」

「問題ないよ」

「……ひばりせんぱあい……」

わたしの……せいで……しばらくられませんか……？」

「僕がやりたいことをしてるだけだよ」

僕の隣は優以外は嫌だからね

それに僕は優が嫌だと思うことは絶対言わないよ

優が本当に嫌だと思ったことを僕が無理矢理させると

もう僕のところに戻ってこないとわかってるつもりだよ

僕はそんなことしない

僕は優にいてほしいからね

だからいつでも安心して僕の隣にいればいいよ

こんな幸せなことがあっていいの……？

私に居場所があるの……？

「……ひばりせんぱあい……」

「泣きすぎだよ」

「……これは……うれしなみだですう……」

「そう」

ぐいっ

ぎゅ……

あつたかい……

雲雀先輩はいつもあつたかい……

「……ひばりせんぱあい……」

「なに」

「……だいきですう……」

「知ってるよ」

「……もう大丈夫です」

「わかった」

うう……ボロボロに泣いてしまった……

雲雀先輩の制服が……

後でクリーニングをしないと……

それにこんなにも泣いたら……

「目がはれそうですね……」

「もうはれてるよ」

もうはれてるんだ……

「でもはれるのも嬉しいです……」

「そう」

「はい♪」

あ……そっか……

10年後の雲雀先輩が過去の雲雀先輩に答えてほしい
っていったのは……もしかして……

……そっか……そうだよね

10年後の雲雀先輩の隣が

居場所って教えてもらっても意味がなかったもんね

私のために答えてくれなかったんだ……

10年後の雲雀先輩も最後まで私に優しかったね

本当に感謝しきれないや……

本当に雲雀先輩と出会えてよかった……

依然として

明日は雲雀先輩と一緒に行くろう♪
だからツナ君に言わないとー
うーん……ヴェントで行こうかな？
ランボ君に顔を見られたから普通に話してたけど
ヴェントが誰かよくわかってないみたいなんだよねー
私からすればラツキーだった……
ランボ君は不安だけどすり替えはしたくないんだよ
まあ目が腫れてるしヴェントがいいよねー

「ちよつとヴェント！ 待ちなさい!!」

んー……誰だっけ……？

まあいいか……

“なんだ？”

「あんたは何者よ!!」

つてことは……見てなかったのね

“なんで僕の正体を知りたいんだ？”

「骸ちゃんがボンゴレにいる

あんたを敵と思ってないって聞いたのよ」

“そうなのか？”

びっくりだ……

「そうよ

この時代の骸ちゃんは私のものよ!!

だから私が正体知ってもいいはずよ!!」

なにそれ……(笑)

“あーだったら骸に正体聞いてくれ

骸は僕の正体知ってるからな”

もういいや……

ツナ君はどこかなー？

「話は終わってないわよ！

待ちなさい!!」

……めんどくさい

「骸は君のものなんだろう？

だったら教えてくれるはずだろ？」

あ……黙った……（笑）

「骸は僕をつかって遊んでるだけだよ

別に君の恋愛の邪魔はする気はないよ”

だって私をつかって

「雲雀先輩の機嫌を悪くするのが大好きみたいだし」

「な……!!」

怒らせちゃったなー

んー困った

って、いいタイミングでくるねー

やっぱりヘタの部分で電波を受信してたのか……!

恐るべしパイナツポー

「骸、どうしたんだ？」

流石私だね

思ってることと話してるのが全然違う（笑）

「骸ちゃん!」

「クフフフ

ヴェントに会っておこうと思いましたがね」

「僕に何の用？」

「いいえ なにもありませんよ」

「骸ちゃん！

ヴェントの正体を教えてよ!!」

「僕の口からは言えません」

あ……黙った……

「……意外だな……

教えると思っただが……」

「クフフフ」

もしかしたら私が捕まったら
人体実験とかされるってわかってるから
言わないようにしてるのかもねー

あの辛さは骸君達が1番知ってるもんね
〃毎回思うが……

骸の優しさはわかりにくいな……〃
「なに骸ちゃんのことを

1番知ってるつもりでいてるの!?!」
〃それは絶対ないぞ

僕は骸のことは全然知らないよ
ただ彼と近いだけだよ〃

「そうですね」
うわーすごいこの子……

むかっているのが顔に出てる…… (笑)
〃せつかくの可愛い顔が台無しだぞ

女性は笑ってる顔が1番だ〃
まじで……

可愛いのもつたいない!!
「クフフフ」

ヴェントがいうと面白いですね」
そうだねー

なんか口説いてるみたい (笑)
私……女子なのに……

〃もういいだろ?
骸、元気でいろよ〃

「ええ
あなたも」

〃ああ
じゃあな〃

ってか、何でここにいるんだろ？

このアジトにいたくないと思うんだけど……
ボンゴレと一緒になっちゃうのに……

あ、そっか クロームちゃんのためだね

まあ……沢田綱吉の肉体を乗っ取るには

アジトの中を知っておく必要がありますからね

とか、言ってるんだろうねー

10年たってもわかりにくい優しさだよねー

それにしても骸君が私を見に来るとは思わなかったなー

それに敵とは思ってないってなんでだろ？

よくわかんない……

まあいいか……

さっさとツナ君に言っつて雲雀先輩のアジトに戻ろう

だつてまた巻き込まれたらめんどくさいもん……

さよなら 未来

未来の私に手紙残したしーといつてもー

匣兵器にいられて草壁さんに預けたんだけどね

神様に頼んで作った特別製の手紙だから

過去に戻った時に字が消えるとかは無いと思うしー

特殊能力やお師匠さんの話とかを書いておかないと

私の話とずれたらまずいからねー

流石私だね！準備万端だ！！

「よしー みんな揃ったね！！

そろそろ出発だがボンゴレ匣は

未来に置いていつてもらう取り外してくれ！！」

ガルルー……

よしよしー

んー……過去に持って行ける

って知ってるからミントに教えてあげたいよ

すごい寂しそうな顔してる……

それに尻尾が垂れ下がってるし……

クピッ……

あれ？ロールがこつちにきた？

「ロールどうしたんだ？」

「ヴェントにも別れを言いたいんだ」

「そうか」

よしよしー

うん……

そんな寂しそうな顔されると罪悪感が出ちゃうね

によおん……

今度は獄寺君の匣兵器ね……

「瓜もか……」

よしよしー

どんどん罪悪感が出てテンションが下がってくる……

「ヴェントはオレ達より寂しくなるね」

ツナ君が心配してくれたよ

私のテンションが下がったのを勘違いしたんだろうね

「あーそうだな

僕はなぜかロールと瓜にも好かれたからな」

「そうだね」

「ミント」

ガル……

凄く寂しそうだなー……

多分、未来の私はミントをあんまり出してなかったと思う
別れが辛くなるからねー

だからミントは初めて出した日は凄く私に甘えたんだろうね
次の日からは甘えようとはしなかったもん

まあその代わりに私がミントに甘えたと思う（笑）

だって可愛いんだもん♪

ガルル……

うーん……また会えるよ

大丈夫だよ？だから元気を出して？

ガルッ♪

あ、言っていないのに通じたみたい（笑）

「じゃあ

タイムワープをはじめよう!!

別れを惜しんでたらキリが無いからね!!

アルコバレーノは過去のマーレリングを

封印してすぐにここへ戻ってくる予定だ」

「ヴェントさん頼みますね」

「ああ」

「ユニ、ヴェント頼みますって何？」

「あー風のマーレリングは

僕力で封印するからな

コロネ口達力では無理なんだよ」

「そ、そうなの!？」

“ああ”

まあ思いつきりウソだけどねー

ツナ君が10代目継ぐって決めたら話すと思う

「では……本当に……ありがとう……!」

……さようなら」

あー本当に未来にいてたのが長かった……

神様ー頼みますよー

『ああ 任せろ!!』

本当に助かります♪

「タイムワープ スタート!!」

到着!!

あ、私の家だね

それにしても私の場合は半日しか

こつちにいなかったことになってるんだよねー

すごいよねー

「ただいまー」

あ、やっぱり指輪がある♪

「おかえり」

「へ? 雲雀先輩!？」

「僕もここに着いたよ」

「もう約束守りましたね♪」

「そうだね」

ヴェルデ君が気を使ってくれたのかな?

もし今度会えたらお礼を言わないとねー

「雲雀先輩、気付きました?」

「気付いたよ」

「またミントとロールに会えますね」

「そうだね」

ガルツ♪

クピツ♪

おお……出していないのに返事をしたよ

「学校に行きます?」

「そうだね」

「ちよつと待つててくださいねー

制服に着替えますので……

あ!雲雀先輩も着替えてくださいねー

それはクリーニングに出しますね」

泊まる時のためにクローゼットに服があるしね

「わかった」

あれ?こんなにもあったつけ?

……いつの間が増やしたんだ?

まあいいか……

さっさと渡して着替えよう……

私のほうが遅かったみたいだね

「お待たせしましたー」

「問題ないよ」

「学校楽しみです♪」

「そう」

「はい♪」

「おかえり!!」

「少し地殻に影響与えたが

すべてうまくいったぞ!」

「よかった!!」

「お疲れ様!!」

「お 子どものあいつらが過去へ帰ったかわりに
この時代のこいつらが装置から目覚めたんだな」

んーみんなツナ君のところに行ったから

普通に話してもいいかな？

「恭弥さん」

「なに」

「怪我……大丈夫ですか？」

腕と顔から血が出る……

「問題ないよ」

後で治療しよう

「……わかりました

昔の私はどうでしたか？」

「懐かしかったよ」

「それは良かったですよ♪」

「僕に僕と会って後悔してないか聞かれたよ」

あ……聞いたんだ

「恭弥さん 答えたんですか？」

「答えてないよ」

僕が答えても意味がないから

過去の僕に聞いてって約束したよ」

「そうですか

じゃあ大丈夫ですね」

「そうだね」

「良かった……」

「なにが」

「私がそれを聞ける勇気を持ったのは

まだまだ後でしたから

過去から来た私ははやく聞けてよかった

って思いまして……」

「……そう」

「はい……」

私はここにいてもいいんだって

思えたのは恭弥さんのおかげですよ

感謝しきれません」

「いないと困るよ」

「そうですかあ♪」

それはいいこと聞きました♪」

本当にいいことを聞いちゃった♪

「もう一度いうよ」

僕の隣は優のためにあけてるからね」

「はい♪」

ありがとうございます♪」

「優」

「なんですか？」

「覚悟しといてね」

「へ？」

「僕はいろいろ大変だったんだから」

過去の私は何をしたんだ……

無自覚に誘惑してたのかも……

「……お、お手柔らかに……」

「さあね」

えー……そんなー……

出会った日

久しぶりにゆつくり学校に行った！

まあ休みだったけど……

でも書類があつたから頑張つたけどねー

んーお風呂も入ったから

今日はここに泊るんだろうね

「……………優」

「なんですか？」

「……………」

珍しく雲雀先輩が躊躇してるね

どうしたんだろ？

「おしゃぶりを持つてる理由は話せないんだよね」

ん？確認？

「そうですよー？」

「……………呪いてなに」

優の師匠は呪いを知ってるって言ったよね」

あ……………そういえば……

持つてる理由は話せないって言ったけど

呪いのことは全く話してなかったね

未来の時に雲雀先輩の前で呪いのこと

ちよつと言っちゃったもんね

「それも話せないのー」

言っても意味がないから言わなかったただけです

呪われてますって言っても

結局内容は話せないんですもん

雲雀先輩は気にしなくていいですよ？」

気にしてますねー

それに返事がないしねー

「んー……………そうですねー……………」

呪いで苦しんでるんですけどー

「苦しいだけじゃないんですよー」

「……………どういうこと」

「呪われなかったら私は雲雀先輩には
会うことはなかったです」

「呪われたから会えたんですよ」

「……………それは違うよ」

「呪われなくても会えたはずだよ」

「優は学校に通ってるからね」

「雲雀先輩はそう思うよね……………」

「私の名前知ってたしねー」

「うーん……………どうしよう……………」

「呪われたから会えたことを伝えたいんだけど……………」

「でも……………呪われてなかったら……………」

「私は雲雀先輩とは」

「関わるつもりはなかったと思いますよ?」

「……………どういうこと」

「ツナ君達と初めて話した日は覚えていませんけど」

「雲雀先輩と初めて話した日は」

「すっごい印象に残って覚えています」

「だから関わってると思いますよ?」

「ツナ君と初めて話した内容は覚えてるのにねー」

「あれは私の中で特別だったし……………」

「でも日にちまでは覚えてなかった……………」

「他のみんなは全く覚えてないけど (笑)」

「入学式の前の日だからだよね」

「あ……………覚えてたんだ……………」

「少し嬉しいな……………」

「そうですねけどそれは関係ないですよ」

「もっと特別です」

「特別?」

「その日は私が呪われた日ですからね」

「…………どういふこと」

「おしやぶりを持つことになるよ」

呪われるんですよー

それが人柱といわれる所以だと思いますよ

で、その呪われた日にお師匠さんと会いました」

まあ正確にいうと……

呪われて神様に会っておしやぶり持ったけどね

「それでお師匠さんと会って別れた後に

まあしようがないか……って思ってた……

私の力ではどうしようも無かったですしね

それで夕方に学校に行っただんですよ

引越したばかりで道がわからなかったんでねー

じゃあカツコイイ人が声かけてくれてー

学校を案内してくれてー

私の名前を知ってたんですよ

わざわざ呼びとめてまで名前を聞いたのは……

その日だったからかも知れないです

お師匠さんも私の名前を知ってたし……

同じ日に2回連続で同じことがあったんですよー」

そうだよねー

2回連続だからビックリしたよねー

「だから雲雀先輩は……」

呪われてからお師匠さんの次に初めて話した人です

だからすごく私の中で特別な人だったんです」

「……わかった」

よかったー

私とは意味が違うけどわかってくれたみたいだ……

「はい

まあ少し複雑ですけどねー」

あの時は呪いの意味を

ちやんとわかってなかったからね……

ぐいっ

引つ張られるのも慣れてきたなー……
ぎゅ

私が不安になってると思っただから
抱きしめてくれたんだろうなー……

雲雀先輩は優しすぎるよ……

うん……安心した……

「雲雀先輩もう大丈夫です」

あれ？離してくれない……

「雲雀先輩？」

「……もう少しこのままね」

「あ……はい」

あ……離れた……／＼／

「……そろそろ寝るよ」

「……はい／＼／」

はいつて返事をしたのはいいけど

私はお風呂に入ってないのを忘れてた（笑）

「すみません……お風呂に入りたいです……」

「……わかった」

「先に寝てくださいいねー」

「おやすみなさい」

よし、早く入ろうー

ふう……さっぱりしたー

あれ？また雲雀先輩が待っていてくれたよ

一緒に寝るんだったらもう少し早く入ればよかったね

「すみません」

「問題ないよ」

「寝るよ」

「あ、はい」

えつと……どうしたんだろ……

「雲雀先輩……？」

「なに」

「あの……どうしたんですか？」

「問題ないよね」

「ないですけど……」

どうしてこっち向いて寝てるんだろ……

普段は上を向いて寝てるのにねー

私はいつも横向きだから目があうんだけど……／＼／＼

まあ距離が少し離れてるからいいけどね

……

ちゃんと伝えようかな……

まだ気にしてそうだしね……

「雲雀先輩」

「なに」

「私の呪いは話せないんですけどー

雲雀先輩のおかげで私はすつごく救われています」

「……どういふこと」

「雲雀先輩に会えなかったら

私は多分生きていく自信がなかったです

お師匠さんではダメなんですよ

いつも無理に元気だして話をするんですよー

私が素直になれるのは雲雀先輩の前だけです

そして私に居場所をくれました

だから本当に感謝してます」

「……わかった」

「はい♪」

じゃあ……おやすみなさい」

「おやすみ」

もう気にしなくなったかな？

さて……寝よ……

「ん!?／＼／＼」

ええええ!!

いきなり何ー何ー!!!

お、終わった……／＼／＼／＼

「……ど、どうしたんですか?／＼／＼」

「優が目をつぶるからね」

「……寝るんじゃ……／＼／＼」

「そうだよ」

な、なんか矛盾してる気がする……／＼／＼

大事な話 6

やっぱりチャイムは鳴らすべきだよねー

「あらあく優ちゃんじゃないー

あがつてーあがつてー」

ツナ君のお母さんは

いつきても嫌な顔せずあげてくれるなー

「おじやましーす」

「ツナは部屋にいるからちよつと待ってね」

「あー！ 今日のリボーン君に用事ですよー」

「そうなの？」

珍しいわねえ」

「そうですねー」

普段はツナ君かランボ君かイーピンちゃんだもんねー

リボーン君とは遊ばないしね

……リボーン君との遊びは怖いな……

嫌な想像になっちゃったよ……

「ちやおツス」

「あ、噂をすればって感じだー」

「ほんとね」

「どうしたんだ？」

「リボーン君に話があつてねー」

「わかつたぞ

ツナの部屋に行くぞ」

「え……いいの……？」

「いいぞ」

あらー……

またツナ君が可哀そうなことになるような……

ドガッ

いきなり殴ったよ……

「いつてえ！」

なにすんだ!! リボン!!」

「優と話があるから部屋を借りるぞ」

「何勝手に決めてんだよ!!」

「……ごめんね……ツナ君……」

「ゆ、優は悪くないよ!!」

いや……私が来たから私が悪いと思う……

私のために来てもらうのは悪いと思っっていうのも行くけど
ツナ君のことを考えると来てもらうほうが正解かも……

「話ってなんだ?」

「ん……ツナ君も聞く?」

結構まじめな話だけどー」

「へ?」

えーっつと……」

「聞くぞ」

「何勝手に決めてんだよ!!」

「ファミリーだからな」

「ファミリーじゃないって!! 友達だよ!!」

これってもうコントだよ(笑)

「えっと……どうする……?」

「友達として聞くよ!!」

「わかったー」

将来的な話だけどいい?」

「へ? 将来的?」

「そうだよー」

「いいぞ」

「話せる範囲でいうけどー」

未来に行って風の波動持ってるのは

私しかないってわかったよね」

「う……うん」

「私がもし子ども産んでも

風の波動を持つ子どもは産まれないからね」

「!? どういうことだ!？」

「こ……こどもー！ー!？」

ナイスリアクション（笑）

「だから将来的な話だつて……」

「え……あ……うん……」

「話せないことに関わつて来るから

あんまり詳しく言えないけどー

ユニちゃんのところみたいに私が死んだら

普通は子どもにこのおしゃぶりの権利？

つていうのかな？それが行くはずなんだけどー

私の場合は違うから先に言つておこうかな？と思つてー」

あらーツナ君はもう意味がわかつてないね

呼んだ人はかわりはいないつて言つたけどー

多分私が生きてる間に……

かわりが出てくる可能性があると思うんだよねー

あんまり早く死んでもらったら困るは

そういう意味と思うんだよねー

「……どういふことだ」

「んーこのおしゃぶりを持つてる人が

風の波動を持つてる人つていう意味だよ

つまりー風の波動を持つのは

私が例え子どもを産んでも

私が生きてる間は私しかないんだ」

「……わかつたぞ」

「リボン君は未来で私がどのパラレルワールドでも

レアでどのパターンの未来になつても

私しか風の波動を持つものはいないつて

みんなの前で私が言つたけど

断言できるのはおかしいつて思つてたと思うからさ

報告しとこうと思ったんだよ」

「……そうか」

「……えっと……」

ツナ君はまだ理解出来てないな」

「簡単に言う……」

もし新しい波動とかが発見されたとしても」

その人達の子孫でどんどん増えて行くんだけど

私の場合が増えないの」

「う……うん」

「つまり私しか風の波動を持つ人がいないから

遠くない未来に私は絶対マフィアに狙われるんだ

未来に行つてそれに気付いたんだ

だから話さないとまずいと思ったの」

「……うん」

気にしちやつたみたいだね」

うーん……」

「あー ツナ君がもし10代目にならなくても

私はこのおしゃぶりを持つてるから

狙われるのはかわらないよ？」

だから私がツナ君の守護者になると狙われるから

10代目にならないっていう答えはダメだよ」

「まずならないよ!!」

ちよつと紛らわせたかな？」

「そっか」

まあ話はそれだけだよ」

「……それは呪いに関係してるのか？」

「んー関係してると思うよ

私の呪いは特殊だからね」

まあ私の子どもが呪われないのは

ある意味良かったのかも知れないけど……」

「の……のろいって……?」

「ツナ君は気にしなくていいよー」

「う……うん……」

「呪いと選ばれし者は過酷の意味を
ちやんとわかってなかったみたい」

「……わかったぞ」

「これを誰かに話すかはリボン君に任せるよ
伝えたほうがいい人がいると思うしね」

9代目とかには伝えるべきだと思うしねー

「ああ」

「んーツナ君少しまじめに言うね」

「う、うん？」

「ツナ君が10代目を継がなくても

私はマフィアになるのはかわらないんだ」

「う、うん……」

「でも私のためにツナ君がマフィアになる

って決める必要はないからね」

「??」

「9代目が生きてる間は

多分私のことを保護してくれると思うし

ツナ君が断るとボンゴレはどうなるかわからないけど……

もしもの時ははディーノさんに

キャバツローネに入れてって頼むよ

だから私のことは心配しなくていいよ

ツナ君が感じたまま決めてほしいの

それが私の望みだからね」

「……うん」

まあボンゴレに何かあると

ディーノさんのところも危ないんだけどね

だけど私が入れば戦力的な問題はなくなるからねー

他のところにお金かけることが出来るから

なんとかかなると思うしねー

まあ私にはマフィアのご事は詳しくわからないけどね

「リボーン君の邪魔しちやったかな？」

「ごめんね？」

「問題ねえぞ」

「そっか♪」

「じゃあ私は帰るよー」

「優!!」

「どうしたの？」

「あ……あのさ……今から遊ぼうよ」

「ツナ君は優しいなー」

「そうだね♪」

「ケーキ食べに行きたいなー」

「うん！ 行こう行こう！」

「うん♪」

許可

そういえばリボン君に話したし

雲雀先輩に言ったほうが良いのかなあ……

ちようどご飯食べに来てるから言ってもいいけど……

「雲雀先輩ー」

「なに」

「んー……やっぱいいかな……」

「どうしたの？」

「言ってもいいんですけどー」

多分雲雀先輩には興味ないって

言われそうだなーって思いましたー」

「そう」

「一応私のことなんですけどね

あまりにも将来的な話ですしー

おしやぶりの話も関係してますしー

それにあんまり詳しく話せないの……

どうしようかなって……聞きます？」

「はやく言いなよ」

……返事はやつ!?

まあいいか……

リボン君に話した内容をそのまま話したけど……

「……わかった」

「未来のことがわかったのでヴェントの正体は

かなりのトップシークレットになると思いますしー

リボン君にこの話をしたのであれば時は

多分、私はボンゴレに保護されると思います」

多分ばれたらもうどこにも出れなくなるのかなあ……

「……そう」

「あ……雲雀先輩には言っていなかったですけどー」
「なに」

「私のお師匠さんの能力をつかってー」

今回の未来の戦いの記憶を過去の人達に送った時に
風早優のところを全部ヴェントにすり替えてもらいました
だから元々私の正体を知ってる人にしか

ヴェントの正体はばれていません」

「わかった」

これで少しは安心してもらえたかな？

「……優」

「なんですか？」

「優の師匠……強いのか？」

「私は一太刀も浴びせれたことないですね
強すぎですよ」

うわー咬み殺す対象としてみる！（笑）

「でも私以外は会えませんよ？」

私以外にあつたら記憶のすり替えをする
決まりになってますのでー」

「……わかった」

咬み殺したかったんだろうなー……

『返り討ちだな』

ええええ!!

神様……雲雀先輩に容赦ないね……

『なんで俺が雲雀に手加減しないといけないんだ』
……そうですか

「それでお師匠さんにも未来の記憶が届いたみたいでー
天才だったのがさらに天才になってしまっ……」

「ふうん」

興味なさそうな返事だ……（笑）

強さの話しか興味ないんだろうなー

「これを作ってくれましたー」

「……匣兵器だね」

「そうなんですよー」

逆刃刀とスケボーが入ってますよー

さらにリングを抑えるチェーンと

前から頼んでたヴェント用のケイタイと

あと……この装置でこの家ぐらいだったら

私の炎だけは反応できないようにしてくれたので

ミントを出したらいいって……」

まさか匣兵器にしてくれると思わなかったけどねー

ヴェント用のケイタイは未来のことを

関係なく話をして違和感無いと思うし……

ヴェントの服をコンパクトにしようか聞かれたけど

小さくしても結局すぐに着れないから……

それだったらいっぱい作ってほしいって頼んだんだよねー

「そう」

「はい……まだ未来から帰って……」

2日しかたってないんですけどね……」

「そうだね」

もっと後で言っても良かったんだけどねー

何があるかわからないしねー

だから早く許可ももらったほうがいいと思うし……

「私の未来が危険ってことがわかって

急いで作ってくれたみたいです」

「そう」

「それで……」

雲雀先輩に許可をもらおうかと……」

「なに」

「学校で武器をもつのは雲雀先輩しかダメですけど

私も匣兵器を持っててもいいですか？

ミントもチェーンでおさえ

学校に持っていきたいんですけどダメですか……？」

「いいよ」

「よかったー!!」

「優は持ってても大丈夫だからね」

「そうですねー」

私は学校を傷つけることは絶対しませんよ」

「そうだね」

「はい♪」

あ……ヴェントの服も学校のいろんな場所に

置いといてもいいですか……？」

「いいよ」

僕が側でいない時に何かあったら困るしね」

「ありがとうございます♪」

わーい♪

こんなにも簡単に許可してくれるとは思わなかったなー♪

未来の記憶 1

ピンポーン

ん？誰だろ？

今日は誰とも約束してなかったと思うけど……

あ……そっか……

「ご、こんにちは!!」

「こんにちは♪」

あがっていいよー」

「は、はいー!」

やっぱりこの内容は話しかけにくいよねー

私から話をするべきか……

「バズーカ当てた入江君には

ヴェントの正体わかつちやうよね」

「……はい」

「未来からの記憶もらった時に

私がレアってわかった?」

「……はい」

あらーやっぱり……

対策してて良かったねー

「もし怖い人がヴェントの正体を

教えろって言われたら答えていいからね?」

「……でも……」

「大丈夫だよ

なんとかなるよー」

「……はい……」

「んー……入江君」

「なんですか?」

「敬語じゃなくていいよ?」

未来の入江君とは普通に話してたから
すっごい違和感なんだー」

「わかりました」

……言ってるそばから敬語だけどね（笑）

それに足も崩さないしねー

「あ、風早優とヴェントの両方の

連絡先を渡しておくね？」

「ありがと……」

あ、敬語なくなつたかな？

「入江君ー」

「どうしたの？」

「未来の記憶もらつて混乱してると思うしー

私のことまで心配しなくていいよ？」

「……うん」

「あの白蘭さんからずっと逃げれたんだよ？

大丈夫だよ」

「うん」

ちよつとは気にしなくなつたかなあ？

「あ!! もしかして……」

何度も私の家に来た？」

「ううん」

「良かったー

私って結構忙しくてタイミングがあわないと

なかなか会えないんだ」

「そうなんだ……」

昨日と一昨日はほとんど出かけてたしねー

「そっだよー

何日か前から連絡してくれてたら会えると思う……」

本当に忙しすぎる……

なんでこんなに忙しいんだろ？

風紀委員の仕事もしてるしー

クロームちゃんの所にご飯持っていつてるしー
雲雀先輩は急に電話かかってくるしー

ヴアリーアーなんて私の話を全く聞かないからね

私の用事なんて全部無視だもん

雲雀先輩は先に言っていればわかってくれるのに……

「わかった」

「ありがとー!!!」

入江君がすごくいい人に見える!!! (笑)

「緊急時や困ったときは

ヴェントの方に連絡してくれたら何とかするからね

私がすぐ行けなくてもみんなに頼むからね」

「うん」

「あ、ツナ君に会った？」

「まだ会ってないんだ」

「そうなの？」

「うん

スパナとは連絡とったんだけど……」

「え!? ほんとに!？」

「良かったね♪」

「うん

日本に来たら会う約束してるんだ」

「それは楽しみだね♪」

スパナさんとはあんまり話す時間なかったから

いつかゆつくり話したいよ」

「わかった

日本に来たら風早さんにも連絡するよ」

「ありがとー♪」

あ……入江君……

学校の帰りに寄ったみたいだけど……大丈夫？」

「そうだった!」

母さんに遅くなるって伝えるの忘れてた……」

「早く帰った方がいいよー

お母さんが心配するよ?」

「でも……」

「また連絡してくれたらちゃんと予定あけとくよー

た……多分大丈夫と思う……」

た……多分ね…… (笑)

「ありがとう」

「うん

またね?」

「うん

またね」

うーん……

未来の記憶って誰から誰にまで届いたんだろ……

レアって本当にめんどくさいね……

「……ベル」

「なに? ボス」

「日本に行け」

「ん?」

「連れて来い」

「しっしっ♪ りょーかい♪」

未来の記憶 2

継承式編ってどれぐらいから始まるんだろ？

うーん……わかんない!! (笑)

結構時間がかかると思うんだよねー

だってツナ君に継承するって決めたとしても
準備するのに時間がかかるしねー

まあ風紀委員だから転校生が来るんだったら

先に情報が入るよね？

あれ？電話がなってるよ

うーん……ヴェント用……

それもヴァリアーからだね

ベルさんからはかかってくる場合は朝だしねー

ってか、昨日の朝にかかって来たし……

まあだからヴェント用の電話番号を知ってるんだけどね

つまり緊急の用事？

……どうしよう

雲雀先輩と草壁さんがいるんだよねー

まあいいか……

放課後だし出ても怒らないよね？

「雲雀先輩」

「なに」

「電話に出てもいいですか?」

「いいよ」

さてーどうしたんだろ？

『おい』

……まさかの「おい」でした…… (笑)

誰かがわかるのがすごいね (笑)

「遅くなっすみません」

「どうしたんですか?」

『来い』

あ、レアってわかったから心配してるのかな？
それはないね……

特殊能力に興味があると思う
ってか、さつきから言葉が短すぎる（笑）

「そうしたいんですけどー」

私は学生なので学校がありますよ？」

『知るか』

えー……私の意見を少しは聞いてほしい

「……わかりました」

週末に行きますよ」

『今すぐ来い』

「それはちよつと……」

学校を休むことになりますし……」

せつかく久しぶりに学校に行けたのに……

『ベルが行った』

「ええええ!!」

それってもう決定事項じゃないですかあー!!」

『うるせえ』

ブチッ

……切られた

そ……そんな……（泣）

私の話は一体いつ聞いてくれるの……？

というかー

いつベルさんが来るのー!?

「優」

……雲雀先輩の機嫌が……悪い気が……

「学校休むってなに」

「……いや……その……」

ちよつと……イタリアに……」

はつきり言えないのはしょうがないと思う

「ふうん」

……機嫌が最悪だ!!

「く、草壁さん……」

「……はい」

「……私がない間……頑張ってください」

丸投げしました……

私には無理と諦めた……

「しっつ みっけ♪」

ワオ！雲雀先輩の口癖が出てしまったよ（笑）

はい……窓から登場ですね……

もう来たのね……

XANXUSさん……もう少し早めに連絡ほしいです……

いや……連絡してくれただけましかも……

「咬み殺す!!」

「やってみ!!」

うわー……戦闘態勢ですね……（笑）

「あのお……危ないんで止めてほしいです」

「優には当てないよ」

「姫には攻撃しないに決まってるじゃん♪」

……私は大丈夫だけど草壁さんは当たるのね……

……というか……

「そういう問題じゃないです!!」

とりあえず2人の間に入ろう……

だってトンファーとナイフ出してるんだもん……

「ベルさんはどうして私がここにいと

わかったんですか？」

前は教室だったのにな

窓から来たってことは直接来たと思うしー

「わかるに決まってるじゃん

だってオレの姫だもん♪」

はい……答えになってません……

そして……雲雀先輩の機嫌が悪くなりました……

「……もう……何でもいいです……」

行きますので……戦わないでください……」

この2人が戦えば両方とも大怪我するし……

「うしっ」

「優」

……怒ってますねー……

「雲雀先輩 許してください」

「いやだ」

……どうすれば……？

まだ戦闘してないだけましなんだけどね……

2人ともちよつとでも戦闘したら

私が当たりにいくってわかってるからだと思うけどね

「草壁さん

少し席を外してもらっていいですか？」

「……わかりました」

草壁さん……本当に大人だ……

聞かないでくれてありがとう……

……あれ？草壁さんって未来の記憶があるのかな？

あるかもしれない……

聞かないほうがいいと思ってくれてるのかも……

「ベルさん下で5分だけ待ってください」

必ず行きますね」

「りょーかい♪」

よし……窓から飛び降りたね

「優」

「……その……わざわざイタリアから

むかえに来てくれてるので……行きますね……」

「いやだ」

じー………(泣)

「……はあ………わかったよ……」

やったー!!

ウルウル作戦成功（笑）

まあただ目で訴えたただけだけどねー

でも行く前に……いつもと逆だけど……
ぐいっ

うう……勢いでしてしまった……／／／／

短い時間だとしても恥ずかしい……!!

「……いつてきますね／／／」

「……帰ってきた時もしてね」

「は……はい……／／／」

「まあだけど……」

へ？

うわああ／／／／／

こんなに短い時間に2回もした……！／／／／

「……その顔見せたくない」

／／／／／／／

ヴェ、ヴェントの服を出そう……

カポッ

「こ、これでいいですか……？／／／／／」

「いいよ」

「じゃあ……いつてきます」

「待ってる」

「はい!!」

私も飛び降りようー

スタツ

やっぱり自分で飛び降りると怖くないよね

あ、ベルさんが大人しく待ってた（笑）

「ヴェントだぜ」

「こっちの方がいいと思いましたがー」

ベルさんの前では普通に話しますけどね」

「ししっ りよーかい

行こうぜ」

未来の記憶 3

いやあ……ボンゴレってすごいよね

私1人のために飛行機出せるんだもんね

そしてイタリア到着ですよ（笑）

当然その後は高級車だったしー

「姫」

「どうしたんですか？」

……普通に返事してしまったよ!!（笑）

慣れって怖いねー

「前も思ってたけどあんま寝てないじゃん」

あら……ばれてたみたい……

モゾモゾ動いてたのが気になってたのかも……

「普段は寝るときに何か抱かないと

寝れないんですよねー」

あれ？ベルさんには普通に言えたね

雲雀先輩に話すのは恥ずかしかったけど……

「しっっ 買いに行こうぜ♪」

「え……いいんですか？」

早く説明したほうがいいんじゃないの？

「しばらく姫は帰れないぜ？」

「そうなんですか!？」

「知らねえけど」

……適当ですか……

まあ服もほしいし寄ってもらおう……

「XANXUSさんはそんなに特殊能力に

興味ありそうでした？」

「知らねえ

オレはデメリットが気になってぜ」

「え……デメリットも流れたんですか？」

「そーゆー感じだったじゃん

対価を払ったとかは流れたぜ？」

「私の特殊能力は誰からもらったとかは？」

「??」

……首をひねったしそれは知らないのか……

つまりみんなに話した内容が流れたんだね

他は流れなかったんだねー

ユニちゃんももしかして流さないようにしたとか？

いや……よくわかんないけど……

まあいいや

流れてなくて良かったからね

「なんとなくわかりましたー」

「話せる範囲で全部話しますよ」

「しっっ りよーかい♪」

服は諦めたよ……

だってこの格好でウロウロするのは怪しくねえ？

って思ってしまったからねー

風早優は今日日本にいることになってるからね

誰かに借りたら問題ないと思うしー

まあブカブカとは思うけどね

ベルさんが1番体格が近いけどそれでも大きいもん

下着は……諦めたよ…… (泣)

すぐ帰らしてもらおう……

帰らしてもらえないんだったら

マーモンちゃんに頼んで幻術かけもらって買いに行く

お金がいりそうだけどね (笑)

だから人形はベルさんに買ってきてもらったんだよねー

王子におつかい頼んじやった (笑)

まあ普通に買ってきてくれたからいいでしょう……

それにしても……

「かわいい♪

ありがとうございます!!」

うさぎさんだ♪

「しっつ 問題ねーよ」

これから泊るときはこれを抱こう♪

行き帰りの飛行機もこれで大丈夫だね!!

というか……置いといてもいいのかな?

ベルさんが置いてくれそう……

無事到着!!

「よく来たわねえ」

「ルツス姐さん!

お久しぶりです♪」

「ボスが待つてるわよお」

「みたいですねー

急に電話かかってきて

『来い』だったからビックリしましたよ」

「んまあ!?! ボスが電話したの!?!」

え……知らなかったの……?」

「そうですよ?」

まあベルさんが着くほんの少し前でしたけどね」

「しっつ 流石オレの姫♪」

うん……意味がわかんない……

まあいいや……

「ベルさんがこっちに向かっってるって

聞いた瞬間に決定事項じゃないですかー

って叫べば「うるせえ」って言われて

切られましたけどね(笑)」

「ボス素敵だわあ♪」

え……今のどこが良かったの……？
まあいいか……

「ではXANXUSさんの所に顔を出してきますねー」

コンコン

「失礼しまーす」

ビュッ

今回も投げてきたね

そして驚かない自分がすごい（笑）

「来たか」

割れた音がしなくてこつちを見るのはやっぱり変だね

「はい

来ましたよー」

「……それはなんだ」

あ……人形ね

「普段は何か抱かないと寝れないんで

途中でベルさんに買ってきてもらったんですよ

この前もここに来た時の移動中に寝ようとしても

あんまり寝れなかったので……」

「はっ」

……いいですよ

どうせ子どもですよ

バカにされた笑い方されてもいいですよ……

ちえ……少しすねただけだもん

「おい

さつさと話せ」

……わかりましたよー

話しますよーだ!!

未来の記憶 4

XANXUSさんはやっぱり頭の回転がいいよね
簡単に説明しても質問とかしないしね

んー言いたいこと言おうかな？

死ぬかもしれないけどね（笑）

「XANXUSさん」

「なんだ」

「怒ってもいいので聞いてください」

まだ10代目になるのは諦めてないですよね？」

否定はしないってことは肯定だよねー

「もしツナ君が10代目を

継いだとするじゃないですかー」

あらーものすごく睨んでますね

「未来でツナ君が10代目になってたんでね」

「……カッ消す」

「カッ消していいですよ

怒ってもいい内容を言ってますもん

まあ出来れば全部聞いてから

カッ消してほしいですけどね」

お……一応止まったね

銃はつきつけられてるけどねー

「正直私は10代目が誰とか興味ないんですよね

私のは封印されてたんで

守護者の使命？とか無いですからね

なので……好きにさせてもらいます」

「……どういふことだ」

「私は守りたい人を守ります

例えツナ君が10代目を継いだとしても

私はXANXUSさんのことも好きですから

勝手に守りますよってことですよ」

睨んでますよねー

「だからもしまたツナ君とXANXUSさんが戦ったとしても

私は……ヴェントはどっちの味方もしません

両方とも守りたい人になっちゃうんでね

流石に一般人の友達に手を出すのは変わりますけどね

マフィア同士だったらいいかなって思いましたよー

それを言いたかっただけですよ

まあツナ君の守護者には怒られるとは思いますがね

あ、でも風早優の立場から見るとちよつと変わります

でも風早優の場合は弱いフリしてるので

意味がないですけどねー」

「……なぜオレに言った」

「心境の変化があつたんでねー

流石に無理矢理に人殺しの手伝いをしろと

言われたら嫌ですけどー

みんなを守るためだったらその覚悟がいます

まあ出来るだけしたくはないですけどね」

これは未来に行つて思ったことだよ

「私は今のXANXUSさんが継いでもいいと思います

で、もしXANXUSさんが10代目になったら

今まで通り私は好きなようにしますよー」

「ぶははは!!」

あらー笑われたよ（笑）

「オレが沢田綱吉をカツ消しても

てめえは手を出さねえんだな」

まあそういう宣言になるよねー

でもXANXUSさんがそういうことをいうとは思わなかった

私の力は警戒するレベルなんだろうねー

「本当は嫌ですけどね

私に止めることは出来ません

まあ私のせいで対立した場合は話は別ですけどね」

「雲雀先輩とベルさんののは

私のせいだったから止めたんだよね

「誰か10代目になるとか関係なく

私は守りたい人を守りますよってことです

まあ私を失望させることになれば

守らないかも知れませんがね

その可能性は低いと思いますけどねー

話はそれだけなのでカツ消していいですよ？」

「気が変わった」

「それは助かりました……」

「いやー本当に助かったねー

銃が離れたよー

私ってなかなか運が強いねー

「おい」

「なんですか？」

「オレが全部聞かずに撃つと思わなかったのか？」

「思いましたよ？」

でも言いたいことを伝えるには必要だったので

撃たれた時はしようがなかっただけですよ」

「ぶははは!!」

また笑われたねー

「助かったことですしー

他のみんなにも話してきますねー」

「ああ」

あれ？返事してくれたね

まあいいか♪

「おい」

あれ？まだ何かあったのかな？

「なんですか？」

「ばれた時は言え

カツ消す」

うわー……XANXUSさんが
私のために動く気になった……
キャラかわったなー……

「大丈夫ですよ

XANXUSさんに迷惑かけませんよ」

これには返事がなかったね（笑）

「失礼しましたー」

いやー本当に助かったねー

生きてるって素晴らしい♪（笑）

「ミントごめんね

ありがとうね？」

ガルッ♪

出ようとしたけど私が止めちゃったからねー

やっぱり私のDNAが入ってるからかな？

感情が伝わりやすいんだろうなー

未来の記憶 5

みんなはここで待ってるかなー？

コンコン

やっぱりノックは必要だよねー

「失礼しまーす」

あれ？スクアアローさんしかいないなー

「うゝおゝ おい!!」

てめえなんでここにいる!?!」

え……おかしいな……

「XANXUSさんが来いって言ったから来ました
でもベルさんがむかえに来てくれたし

ルツス姐さんは知ってそうでしたよ?」

「あのクソボス!!」

スクアアローさんは知らなかったのか……

「スクアアローさん」

優雅に飲み物を飲んでるけど聞いてもらおうー

「なんだ?」

「さつき死ぬかと思いましたよ」

「ああ!!? どういうことだあ!!」

「XANXUSさんに銃つきつけられたんですけど
気が変わったみたいで助かりました」

「うゝおゝ おい!!」

てめえ何言っただあ!!」

「んー少々ツナ君の名前を出しました」

「!? ……よく生きてたなあゝ」

「ですよねー

どうしても必要だったので出したんですけどね

まあなぜか2回も笑われましたよ」

「……そうか」

ガチャ

ん？誰だろ？

あ、マーモンちゃんだ！

今日も可愛いね！！

「ムム ボスと話は終わったのかい？」

「終わりましたよー

マーモンちゃんは私が来るのを知ってたんですね」

「ボスが言ってたからね」

「あのクソボス！！」

スクアアロさんだけ知らなかったみたい（笑）

「その人形はなんだい？」

みんな聞くねー

まあすつごい違和感だもんね

「普段は何か抱かないと寝れないんで

ベルさんに頼んで買ってきてもらいました♪」

「……………」

「ガキがあ」

どうせ子どもですよーだ

意地悪してやる！！

「確かに…………ガキですけど…………」

私はスクアアロさんの命の恩人なのに…………」

「ぐっ…………」

ふっ…………勝った（笑）

「まあ冗談は置いといてー」

「うゝおゝおい！！

冗談なのかあ!？」

「私が勝手にしたことですからねー

それよりみんなは私の特殊能力に興味ないんですか？

話をしようかなって思ったんですけどー」

「そっだあ!!

てめえ黙ってただろお!!!」

「当然だね

奥の手は隠しておくものさ」

マーモンちゃんは秘密主義っぽいよねー

私もかなりの秘密主義だからねー

話せないことが多すぎるしね

まあ話せることも黙ってるけどね（笑）

「そうですよー

それに私は前から幻覚がきかないって言っていました」

「体力は黙ってただろお!!」

「黙ってたつもりはないですよ？

晴戦の時に京子ちゃんのお兄ちゃんに

私の体力あげるって言いましたけど

聞こえてなかったんですか？」

「知るかあ!!」

聞こえてなかったみたいだねー

京子ちゃんのお兄ちゃんが叫んでたのにね（笑）

まあ叫んだ内容だけじゃわからなかったかな？

「でも……前に来た時に

XANXUSさんに言いましたよ？」

「な!?! あのクソボス!!」

「ムム そうなのかい？」

「はい

名前をもらったお礼に体力あげましたもん」

「だがテメエの能力を使うと不公平になるだろうがあ！

テメエは勝敗関係なかったはずだろお！」

あーリング戦の時かな？

「1泊の恩があります私はずな君の友達なので

敵ってことでよろしくお願いしますすって

スクアーロさんに言いましたよ？」

スクアーロさんが黙っちゃった（笑）

「心当たりあるみたいだね

それに彼女は元々向こうが選んだ後継者だ

僕達に味方するわけないね」

「あ！ 本当ですな！」

まあ体力をあげるだけで

怪我が治るわけじゃないですしー」

「それもそうだね」

「そうですよ」

ちゃんと先にルツス姐さんにあげてましたし

京子ちゃんのお兄ちゃんには応急処置はしてません

それにあの時に1番あげたのはスクアードさんです」

「!?」

2人ともびっくりしたね（笑）

「どういうことだあ!!」

「助けた時にあげたのかい？」

「そうですよー」

体力があれば死ぬ確率が下がりますからねー

特殊能力を結構限界まで使ったので

ディーノさんがいなかったら

私はどこかで倒れてたかも知れないですねー」

あれはやばかったよねー

まだ完璧に使いこなせてないのはわかってたから

ある程度は抑えてたんだけどねー

かなり疲れてたと思う……

「ムム 恩を仇で返してるね」

「ぐっ……」

「ランボ君とクロームちゃんにもあげましたけど

ほとんど公平だと思えますよ？」

クロームちゃんはたいしてあげてないからね

というか……

クロームちゃんにあげてたつもりが骸君にあげてて

すぐ使ったから一緒ぐらいになったと思う（笑）

「……悪かったなあ」

「いえいえー♪」

私ってスクアアーロさんに強いね（笑）

未来の記憶 6

「ご飯食べる時にみんな揃ったから
食べ終わってから話したけど……」

「やっぱり神様のところが一番びつくりしたね（笑）
まあ私の身体能力をあげた人だからね」

「良かったのかい？」

「何がですか？」

「姫の弱点 教えちまったぜ？」

「まあそうだね」

「特殊能力を使った後が狙い目だもんね」

「大丈夫ですよ」

「さっきXANXUSさんに言ったんですけど
私とヴァリアーが敵対することは
多分ほとんどないですね」

「ボスに何を言った!!」

「なんでそんなに怒ってるんだろう？」

「まあいいか……」

「XANXUSさんが10代目を継いでも賛成
って言っただけですよ」

「[[[[[?!]]]]」

「おおーみんなビックリした（笑）」

「優ちゃん言ってる意味わかってるのお……?」
「わかっていますよ?」

「XANXUSさんが10代目になったら」

「私は私で好きにしますよーって」

「言ったら笑われましたよ」

「うゝお おい!!」

「てめえはあのカスの守護者だろがぁ!!」

「カスって……」

「ひどい言い方だね……」

「守護者ですけど私には守護者の使命はありません
だから私は2人とも好きなので

戦う時はどっちにも味方になりませんよ」

「しっしっ」

流石オレの姫だぜ♪」

いつも思うけど……

流石の意味がわかんない……

「まあ一応いろいろ条件はいいましたけどね」

「ムム

条件ってなんだい？」

「そうですねー

出来れば人殺しはしたくないですけど

みんなを守るためだったらしますと……

一般人とXANXUSさんが敵対した時は

一般人の味方につきますと……

私のせいで対立した時は止めますと……

たとえツナ君が10代目を継いだとしても

XANXUSさんを守りたいのはかわらないです

ぐらいかな？

あ、後！ 私を失望させるようなことがあれば

守らないかも知れないですって言いました」

「優ちゃん……またすごいこと言ったわねえ……」

「そうですねー

もしツナ君が10代目継いだ時の話をしたら

銃を突き付けられましたよ？」

「……本当によく生きてたなあ」

「さっき言ったでしょ？」

死ぬかと思いましたがってー」

「すげえじゃん

ボスが止めたんだぜ？」

「はい 気が変わったって言って

カツ消すのは止めてくれましたよー」

「ボスは心の広いお方だ!!!」

「そうですね」

本当に助かりましたよー

まあ私は誰が10代目とか興味ないんでね

守りたい人を守るだけですよ

ただ守りたい人の中にツナ君達と

ヴァリアーがあるだけですよ」

「ムム 風だね」

「へ?」

「自由気儘だね」

「あ……本当ですよー」

そういえば私がレアって漏れたら

XANXUSさんがカツ消してくれるみたいですよ

まあ漏れないように気をつけますけどね」

あれ? 黙った?

「ボスが言ったのお……?」

「そうですね?」

まあ現実的に結構厳しいと思いますけどね

私の情報は高値で取引されるんでね

情報を独占する気がない場合は

一瞬で広がると思いますからねー」

「しっしっ」

ボスはするっていったらするぜ?」

……まじっすか

「じゃあ……後で取り消してもらいます……」

私のせいで一体何人の被害者が出るんだ……

そこまではしなくていい……

「ボスは一度決めると貫き通すお方だ!!」

まじか……

「じゃあ広がる前に……」

「お師匠さんになんとかしてもらいます……」

「うゝおゝ おい!!」

「どういうことだあ!!」

「私が1度見た人だったら」

「お師匠さんの能力が使えて」

「記憶のすり替えが出来るんですよー」

「転生した時点で私が1度見た人のみになったからねー」

「私が見てない人まですり替えちゃうと」

「私を手助けしてるって言えないから難しいよねー」

「まあ私が見られたと気付かなかつたら終わりだけどね」

「そんなことも出来るのか!!」

「さっき言いましたよね?」

「お師匠さんは私の能力よりかなり上ですよ」

「うゝおゝ おい!!」

「そいつは本当に何者なんだあ!!」

「それは言えないですよ」

「私についてる神様なんて言えないよねー」

「言えるとしたら……カッコイイですね」

「んまあ♪ ぜひ会いたいわあ」

「反応が早すぎだ……」

「私以外会えませんか……」

「それにルツス姐さんが好きな筋肉?は」

「あんまりありませんよー」

「それは残念だわねえ……」

「まあお師匠さんはものすごく強いですよ」

「ムム」

「どれぐらい強いんだい?」

「そうですねー」

「私を鍛えるときは片手で相手してくれますねー」

「「「「「!?」」」」」」

「いい反応だよねー」

「でも、いろんな武器を使ってくれるんで

例えば両手剣とかの場合は話は別ですよ

ちなみに1度も攻撃を当てたことないです
全部防げられますねー」

「「「!?!?」「」「」」

みんなの反応面白すぎだね（笑）

まあ未来で戦った時の夢も届いてると思うから

私のレベルは結構ばれてると思うんだよねー

肉弾戦が苦手って言っても白蘭さんじゃなかったら
少しは当たると思うしねー

型を読まれるって本当に最悪だよ……

出来ればもう戦いたくはないね

「だが そんな奴は本当にいるのか!?!」

「まあ信じるかはみんなに任せますよ

だって強くて天才ですけどー

表舞台には立つことはないですもん」

「てめえが死んでも出てこないのかあ?」

「そうですねー

私が死にかけてても出てこないですよ

死んだ時は悲しんではくれるとは思いますがけどね」

多分悲しんでくれると思う

だってかなり優しいもん

神様がここまで1人の人間に優しくしていいのかな?

まあいいか……

「ムム 矛盾してないかい?」

「んーそうですねー

出来る範囲が限られてるみたいです

お師匠さんの力は人知を超える力だと思いますからね

いろいろ難しいみたいです

私が死なないように協力してくれるだけで充分ですよ」

「それもそうだね

君はかなり助けてもらってるみたいだしね」
「そうですよ」

まあいじめるのはやめてほしいですけどね」
『優の反応が面白いからそれは無理だな』

う……ひどい……

ってか、なんですぐ返事するの……

「しっっ

いじめられてるんだ」

「そうですよ」

私の反応が面白いみたいです」

「んまあ

優ちゃんもててるわねえ♪」

はい？

「なんでもてることになるんですか？」

「好きだからいじめるのよお」

あ……なるほどね

そういう風にもとれるのね

「まあ嫌われてはないと思いますよ

いつも優しいですからね」

「うゝおゝ おい!!」

そんな話はどうでもいい!!

そいつの強さを教えろお!!」

「えーさつき言っただじやないですかー

私を子ども扱いに出来るぐらい凄い人ってー」

「もつと詳しく言ええ!!」

「んーそうですねー

ヴァリアー全員を一気に相手にしても

片手で問題ないと思いますよ

もちろんXANXUSさんもいれてですよ」

ズズッ

私がお茶をすすいでる音だけ響いてるねー

「この沈黙はプライドの問題かもねー（笑）」

「優ちゃん冗談じゃないわよねえ……?」

「冗談じゃないですよ?」

「まあ私が思ってるお師匠さんの強さですけどね」

「我らを相手に片手とはふざけるな!!」

「だから信じるも信じないもそっちに任せますよ」

「私は最初の3か月なんて攻撃してもらえませんでした」

「あれは……結構シヨックだった……」

「全部避けられるんだもん……（泣）」

「落ち込んでるじゃん」

「何をやっても当たらない時を」

「少々思い出してしましまして……（泣）」

「3か月たつてやつと……」

「攻撃してくれるようになったんだよね……」

「……といつても……片手だけど……（泣）」

「……うそじゃねえみたいだなあ」

「そうですねー」

「私が強くなってるんだなーって思ったのは」

「スクアードさんをぶつ飛ばした時ですね」

「ああ!!」

「あの時は油断してたからだあ!!」

「ものすっごい睨んでますねー」

「レイヴィさんにはナイスって感じの表情された（笑）」

「ドスッ」

「う……」

「……うん」

「私は何も見てない……」

「レイヴィさんの鳩尾に」

「スクアードさんが一発入れたなんて私は見てない」

「見ていたら私もされる気がするからね!!（泣）」

「それぐらいわかってますよ……」

腕力がないってばれたのにとばせたのは
体の使い方があってたつてことでしょ？

お師匠さんにしてもびくともしないんでね
変に力が入ってるときは注意されるんですけど
結構自信がなかったんですよねー」

「スクアールと戦った時が

初めての戦闘だったのお？」

「んー正確には違いますよ

1番最初はものすつごく弱い銃の使い手で

2番目は雲雀先輩でしたよ」

「姫に手を出してんじゃない」

「雲雀先輩の意思じゃないですよ

骸君に憑依されてましたもん」

「しっしっ

だっせえ」

雲雀先輩が聞いたら咬み殺されるねー

「そんなことないですよ？」

私が躊躇して一撃もらいそうになった時に

自力で解きましたよ」

雲雀先輩は縛られるのが嫌いだもんね

「まあそんな感じで強い人とまともに

戦ったことなかったんですよねー」

あ……違う……

「間違っていました……

骸君に幻覚で攻撃されたのが1番初めでしたね」

銃を防いだのは雲雀先輩に対しての攻撃だからね

私と初めての戦闘は骸君だねー

「君には効果ないね」

「そうですね

相手にする気なかったので逃げましたけどね」

それにしても懐かしすぎるね（笑）

未来の記憶　その後　1

ベルさんってやっぱり王子だから凄いのかな？
予想通りすぐ帰れなかった……

5日ぶりの日本だね

まあビックリしたのは服とかは

ルツス姐さんが用意してくれたことだけだね

それに下着のサイズを言っても

問題なさそうって思ってしまったしね（笑）

「ベルさんありがとうございました」

「ししっ」

問題ねえって　またな♪」

「はい♪」

またねー」

まあ次は継承式で会うけどねー

いや……会えないか……

こっそりどこかで見ることになると思う

一応、今日帰るって電話してたけどー

着くのは夜だから明日会いにくって言ったし

直接家に帰っていいよねー

あ！途中で変装とかないと！！

ふう……やっと帰ってきた！！

「ただいまー」

「おかえり」

んっ…この声……

「雲雀先輩!？」

「なに」

「いや……いるとは思わなくて……」

「そう」

待っててくれたんだ……

嬉しいなー♪

あ、でも……

「せっかく来てくれたんですけど

私ちよつとすることあるんですよー」

「なにをするの」

「5日も家をあけてしまったので

冷蔵庫の物がダメになつてると思うんですよ」

「問題ないよ」

「へ？」

「僕が使った」

「え!?! そうなんですか？」

「そうだよ

すぐ帰ってこれないって聞いたからね」

「ありがとうございます♪」

捨てるのかもつたいなかったし

雲雀先輩に感謝だね!

「優」

「なんですか？」

「約束忘れてないよね？」

なんだった？

えーつと……／／／／

そうでした／／／

「雲雀先輩……」

「なに」

「……目を……」

うわー……貴重なシーン……

あ、はやくしないと……!!

……

あれ?なんか……

頭を手でおさえられてるよね……？
い、いつ……終わるの……？

／／／／／

……死ぬかと思った……／／／

「顔 真っ赤だよ」

それはしようがないと思う／／／

「優」

「な、なんですか……？」

「よく寝れてたみたいだね」

「あ、はい」

ベルさんに気付かれちゃって……

人形を買ってきてもらいましたー

かわいいウサギさんでしたよ♪」

「……ふうん」

あれ？なんか機嫌が悪い気が……

「雲雀先輩……？」

「なに」

怒ってる気がする……

声が低いし……

「私なにかしちやいました……？」

「……はあ……問題ないよ」

「本当ですか……？」

「そうだよ」

ふむ？まあいいか……

「人形もってアジトに着いたら

子ども扱いされましたよ」

「そうだろうね」

……ちえ……

どうせ子どもだもん……

「なにいじけてるの」

あ、ばれた(笑)

「あ！　そういえばー」

「なに」

「よくわかんないんですけど」

普段は何か抱かないと寝れないって

普通に話せたんですよねー」

「？」

あ、伝わらなかったみたい

「雲雀先輩に話した時は

ものすごく恥ずかしかったんですよ

でもみんなに話すときは何も思わなかったんです」

「へえ」

「やっぱり雲雀先輩は

好きな人だから特別なのかなあー……」

……

ん？　今なんて言ったっけ……？

「うわあああ!!」

い、今のは聞かなかったことに!!／／／

あ……笑った……／／／／

ぐいっ

ぎゅ……

うわああ!!

どうしよー／／／／

無意識に爆弾発言した後これダメだ／／／

「優」

「な、なんですか……ん／／／／」

さ、さつきもしたのにー!!／／／／

「……はあ……」

うう……ごめんなさい

しばらく顔をあげません
だからクツションにうもれさせてください／／／

未来の記憶 その後 2

久しぶりの学校楽しみだよ……

結局2日しか行けなかったしね……

「優！ 久しぶり!!」

「おはよー」

久しぶりだねー」

「風紀委員の仕事そんなに大変だったの？」

あ、そうか……

学校にいることになってくれてるもんね

「ちげえぞ」

「リボン!?!」

え!?!気付いてなかったんだ……

「ちやおツス」

「さつきも言ったけど おはよー」

「優は気付いてたんだ……」

「そうだぞ」

さつきツナの名前を言わなかったじゃねえか

オレにも言ってたんだぞ」

「そうだよー」

「そうだったんだ……」

それよりリボン何が違うんだよ!!」

「ヴェントはイタリアに行ってるからな

ヒバリが優が学校にいることになってただけだろ」

「そ、そうなのー!?!」

「そうだよー」

リボン君は知ってたんだね」

「ああ

ヴァリアーの専用機が日本に来た情報が入ったからな
優に用事と思っただぞ」

あ、ヴァリアーの行動はリボン君が把握してるのか

まあ当然か……

やったことがやったことだしね

「そうなんだー」

XANXUSさんが来いって急に言ってきてさー」

「ザ……XANXUSー!!」

「うるせえー!」

ボコッ

「いってえー!!」

今のは私も思った…… (笑)

せっかくコソコソ話してるのにね

XANXUSさんの名前を叫んだら意味ないもん……

「5日ほど行つてたみてえだな

なにかあつたのか?」

「5日も!」

「特に何も無いよー

ルツス姐さんが言うには

私がXANXUSさんにいつた宣言で

ちよつと気にいられたみたいだよ」

「き……気にいられたー!」

「なに言つたんだ?」

「私はXANXUSさんが10代目になつてもいい

つて言つただけだよ」

「(なにいつてるのー!!?)」

「優、言ってる意味わかつてるのか?」

「それはヴァリアーのみんなにも言われたよー

私は守護者の使命がないからね

守りたい人を守るだけだよ

ただ守りたい人同士が戦つたら

私は手を出さないって宣言しただけだよ」

「そうか」

「うん

条件もちゃんと出したしねー」

「そうなのか？」

「当たり前だよ」

一般人に手を出すと敵対するとかー

私のせいで戦うことになったら止めるとかー

まあいろいろ言ったよ」

「なるほどな（ニヤツ）」

「リボーン！ 何笑ってんだよ!?!」

「まあツナ君がもし10代目を継いだ話をした時は
殺されると思ったけどね」

「なに言ってるのー!?!」

「未来で継いでたからね」

一応それも言っただけだよ

ツナ君が継いだとしてもXANXUSさんは

私の中で守りたい人というのは変わらないです

っって言っただけだしー」

「継がないから!!」

「一応言っただけだよ」

そこはツナ君の意見を尊重するからね」

「う、うん……」

「まあわかったぞ」

「やっぱりリボーン君は怒らなかつたね」

「? なんでそう思ったの？」

「んー私はリボーン君のことがわかってるからね」

「そうだな」

「（全然わかんないんだけど……）」

「まあリボーン君の邪魔をすることはないよ」

リボーン君はツナ君を

10代目にすることが目的だからねー

手を出さないってことは邪魔はしないからね

「ああ

「そうだろうな」

「2人だけで……何……わかってるのー!?!」

「私からすると……」

「わからないツナ君が凄いと思うけど……」

「なんのためにリボン君は」

「ツナ君の家庭教師をしてるんだろう……」

「やっぱリツナ君って鈍いよねー」

「まあツナ君とXANXUSさんがまた戦う時は頑張ってね♪」

「私は手を出さないからねー」

「な……っ!!!」

「うん♪ナイスリアクション（笑）」

「じゃあ書類してくるねー」

「またねー」

「ああ」

「ちよつと……優……!?!」

※ 必読 継承式編の前に

継承式編を読む前に……

お久しぶりです

小話に一応？区切りがついたので

明日から継承式編をすと思います

本当はリクエストは残ってるんですけど考え中なので……

そしてまた注意事項です↑えw

毎回すみません（汗）

継承式編のことを考えると

あれ？この設定（存在否定の呪い）だと

対となる属性のオリキャラを作っちゃダメじゃねえ？

っていうことに気付いちやったんですよね……

シモンファミリーにオリキャラを入れると

そのキャラがずっと存在してしまうことになります

優が自分だけじゃないって思うことが出来るんです

つまり呪いの効果がなくなります

だから必ず優以外のオリキャラは

優の前にはずっと現れることは出来ません

今まで必ず消えていくように書いています

いやー本当に嫌な呪いですね。ネチネチと精神攻撃しますからね。

そして継承式編でオリキャラを出せずに困るってことは……

たいして考えず設定を作っただけじゃないってことですね。はい。

ということ……オリキャラが出ません

なので……ほぼ原作通りです

つまり主人公が空気感たっぷりです（笑）

工夫はしてるつもりです……

いつも通り駄文なのはかわりませんけど。

後、1話の進みが遅いのもいつも通りでかわりません

まあ頑張つてイチヤついた感じで書いてますww↑えw
そして小話に書いた内容もちよつと出しています
それは後書きを書く予定なので
甘すぎて見れなかった人にも大丈夫です。多分……
ということ……長々書きました……
簡単に言うとは駄文ですので温かい目で見てください
結局いつもとかわからないっていうことですね
では明日から継承式編はじめます
読む方はよろしく願います

そしてここで本文を終わろうと思えば文字数が足りないww
ということ……今後の予定を書きます
310話まで継承式編があります
前書きや後書きにに何度か書きましたが
そこでやつとアットノベルス様に追いつきます
追いつけばゆつくり更新になります
にじファンで知っている人もいます
毎日1話を更新するように心がけています
たまに出来ないときがありますがそこは勘弁してくださいww
もしかすると継承式編が終われば
一週間だけお休みをもらうかもしれません
理由は虹のアルコバレーノ編がまだ2話しか出来ていないww
出来れば止めずに頑張りたいと思いますけどね
そしてこれもどこかで書いたと思います
虹のアルコバレーノ編が終わればこの話は終わります
まあ後日談は数話ほど書く予定ですが……
後は小話でリクエストか私の気が乗れば書くぐらいです
というのが今後の予定です
文字数が超えたのでグダグダ話は終わりにしますww
では、もう読めないと思ったらすぐ閉じてくださいねー
ストレスが溜まるだけですよー

駄文ですが読む人はよろしく願います

転校生 1 (継承式編)

今日も書類ばっかりだなー

「あ……」

これって……

「なに」

「明後日、集団転校生が来るんですね」

「そうだよ」

「へえー」

なんか個性的な人みたいですね」

名前を覚えておこうー

あー……そういえば

そんな名前だったような……

んーほとんど覚えてないんだよねー

「興味ないよ」

「そうですかー」

風紀が乱れないといいですね」

思いつきり乱れるけどね

「咬み殺すだけだよ」

「それもそうですねー」

私は学校の風紀を守ってる

雲雀先輩も好きなので応援してますよ♪」

「優」

「はい？」

「もう1度いって」

……？

また……無意識に爆弾発言したかも……／／／

「えっと……その……／／／」

「はやくいいなよ」

「……学校の風紀……守ってる……」

雲雀先輩……好きです……／／／

あ……笑った……／＼／

んー……私は今回どうなるのかな……

止められるのかなあ……

書類しながら念のためいろいろ言おう

「雲雀先輩」

「なに」

「んー……私は裏切りませんよ」

「どういう意味」

「なんかリング戦も未来に行った時も

私って結構中立的な立場

ばっかりじゃなかったですか？」

勝った方の守護者になるとかばっかりだったような……

「そうだね」

「またそんなことになっても

私は絶対雲雀先輩を裏切りませんよ」

「知ってる」

「あ……もし雲雀先輩と私が敵同士になったら

雲雀先輩はどうします？」

「優以外を咬み殺すだけだよ」

「私は咬み殺さなくていいんですか？」

「優は意味もなく僕と敵同士にならないよね」

「それもそうですよねー」

理由があるか操られてるかぐらいですよねー」

「そうだよ」

「でもそんなに私を信用していいんですか？」

「問題ないよ

優は僕の隣に帰ってくるからね」

「そうですね♪」

私の居場所ですもん♪」

「そうだよ」

雲雀先輩の機嫌が悪くなるかもしれないけど……

言おうかな……

「あの……」

「なに」

「今から話しますけど……」

「あんまり機嫌が悪くならないで下さいね……?」

「………わかった」

「骸君と前に話したんですけどー」

「ふうん」

「うわ……機嫌が悪くなった……」

「えっと……前に骸君に雲雀先輩が操られた時に……」

「攻撃をすることができなかったけど」

「もし……今度操られた時は絶対攻撃するよって言いました」

「どうしてかわかります?」

「内容を聞いたら機嫌戻った(笑)」

「わかるよ」

「僕も優に攻撃するよ」

「良かった♪」

「遠慮なくしてくださいねー」

「わかった」

「ただ……操られたら……」

「多分私は……本気モードになるから……」

「雲雀先輩を倒しちゃう可能性あるよね?」

「だって風の力を防ぐのは難しいもん……」

『そうだろうな』

「うわ!ビックリした!!」

『あーすまん』

「ううん」

「大丈夫だよ」

『風の力を使えば雲雀を倒すだろうな』

「まあ接近戦になればわからなくなるが……」

「だよね……」

『マインドコントロールをされなければいいんだ
目を合わせるな』

あ、そうだね

『じゃあ仕事戻るからな』

うん

頑張ってねー

『おう』

転校生 2

今日から継承式編はじまるよねー
んーどうなるんだろ……

ピンポーン

あれ？こんな朝早くに……誰だろ？

雲雀先輩は鳴らさないしー

あ、珍しいなー

「ちやおツス」

「どうしたの？」

「こんな朝早くにー」

ほんとに早いよねー

ツナ君だったらまだ寝てるだろうな……

「9代目からこいつが届いてな」

「んー……手紙？」

「ああ

ボンゴレファミリー継承式開催通知だ」

「へえ

ってことは……ツナ君が10代目になるの？」

「そうだぞ」

「そっかー

まあツナ君になるっていったら

私は応援するだけだよー」

「そうか」

「んーそれをいいに来たわけじゃないよね？」

「ああ

世界中のマフィアが盛大に日本に集うことになるぞ
なるほど……

危ないから言ってくれたのね

「わかったー

気をつけるよ

もう私がレアってばれてるの?」

「ただぞ」

「じゃあ狙われるとしたら」

ツナ君の確率の方が高いんじゃないの?」

10代目になるのが反対って感じでー

「風のボンゴレリングの封印が解けたときに

マフィアの中でも話題になったからな」

あーそれもそうだね

I世の時から封印されてるのが解ければ普通噂になるよねー

「なるほどねー」

「標的はツナになると思うが正体がばればまずいからな

念のためだぞ」

「わかったー」

変装する時きをつけるよー

それにお師匠さんにも未来のこと話したら

急いでいろいろ作ってくれから安心していいよ?」

「そうか」

「うん」

ツナ君にはまだいってないの?」

「いってねえぞ」

「言った時の慌てる姿が目浮かぶよ……」

うわー……

リボン君がニヤって笑った…… (笑)

「あ、9代目も日本に来るんだよね?」

「来るぞ」

優に会いたがってるぞ」

「わかったー」

この前ヴェント用の連絡先を教えたよね?

それに連絡してくれたら行くよー」

「わかったぞ」

「9代目は私のこと心配してそう?」

「ああ

家光も心配してるぞ」

「みんなに心配かけちゃってるね……」

「本当はもう学校とかいかない方がいいよね……」

「私のわがままなんだよね……」

「問題ねえぞ

優はツナの守護者だから

学校にいたほうが都合がいいからな」

「気を使つて言ってくれてるんだらうな……」

「……ありがとう

「まあツナ君が10代目にならないって決めても

私はもうマフィアになるのは決定してるし」

「今のうちに学校生活を楽しんでおくよ」

「ツナは10代目になるぞ」

「ふふ♪ そうだね」

「こんなすごい家庭教師からは普通逃げれないよね」

「当たり前だぞ」

ツナ君頑張れ（笑）

「あ、また他人事になっちゃったね

「まあ私はツナ君が決めたことに反対はしないよ」

「わかったぞ

そろそろ帰るぞ

「ママのご飯が待ってるからな」

「そうだね」

ツナ君のお母さんの料理美味しいもんね

「次は学校で会うかな？」

「またね」

「ああ」

「リボン君も私のことを心配してそうだね

「それもそうか……」

「マフィアから狙われるってかなりやばいよね」

コンコン

「しつれいしまーす」

「やあ」

「今日は書類ありますか?」

「あるよ」

「今日もあるんだ……」

「頑張ろう……」

「んー……クラスに転校生来るので

HRに出てからこっちに来てもいいですか?」

「いいよ」

「ありがとうございます♪」

「終わったらすぐ来ますね」

「待ってるよ」

「はい♪」

「許可を貰えてよかったー」

「とりあえず……炎真君とは絡んでおきたいよねー」

「さて……本当にどうなるんだろ……」

「転校生の数が7人なんだよねー」

「つまりー原作と変わってないんだよねー」

「今回も成り行きに任せるしかないか……」

転校生 3

「まかせてください!!」

もし転校生の中に

10代目になめた口をきくよーな奴がいたら

10代目の右腕 この獄寺隼人がシメてやります!!

腕が鳴るぜ!!」

「いやいや 獄寺君!!」

そんなことしないでいいから!!」

教室に着いたらツナ君が叫んでるねー

獄寺君がまた何かしちやいそうなのかな?

「みんな おはよー」

「優!?(助かったー……)」

おはよー!」

「うん

なんか今日も獄寺君が元気だねー」

「う、うん

今日は転校生が来るから……)」

なるほどね

ツナ君に変なことしたら獄寺君がケンカ売る気満々のね

「獄寺君が元気な理由がなんとなくわかったよ」

「そ、そっか……)」

「ツナ君、朝からお疲れ様ー」

「う、うん」

獄寺君が本当にやる気満々だ…… (笑)

「オレは転校生すんげー楽しみだけどなっ」

「ああ?」

獄寺君は山本君にまでケンカ売ってない?

まあいいか

「おはよ 山本!!」

「山本君 おはよー」

山本君も朝から元気だなー

「野球好きで野球部入る奴が

いるかもしれないねーだろ?」

「野球のことしか考えられねーのか

この野球バカ!!」

「山本君はしようがないよー」

自分で言ったけど……

しようがないで済まされるのが凄いやね (笑)

「ははっ」

本人も笑ってるし……

「私も楽しみだな♪

友達になれるといいよね」

「京子ちゃん おはよー」

「優ちゃん おはよっ」

ツナ君がデレデレしまくりだ…… (笑)

「鼻の下のびきって今に筋肉切れるわよ?」

「私も思うよー」

まじで…… (笑)

本当にツナ君はわかりやすいよねー

「黒川花!!」

「優 おはよ」

「花 おはよー」

「私はこんなガキじゃなくて

大人っぽい転校生希望ね」

「ちえっ」

「んー……花の希望は通らないと思うよー」

「え!?! 優の知ってる人なの!?!」

キーンコーン

「席につけえ」

あ……タイミングを逃した……

知らないんだけど……まあいいか……

「ええ 知ってるのとおり

今日から我が校に7人の

至門中学の生徒が授業を受けにくるが

我がクラスには2人編入することになった

仲良くするように

では自己紹介してもらおうか入りたまえ

古里くんと……シツ……シツと……んくく？」

私もあれは読みにくいと思ったよ……

「マイ・ネーム・イズ

SHITT・P!

しとぴっちゃんと呼んでクダサーイ！」

あーみんなびつくりしてるよ……

確かに資料の写真の時からおかしかった…… (笑)

よく通ったよね……

まあ、通したのは私なんだけどね (笑)

うーん……特技はハッコーってなんだよ……

変なのー

「シット君……(ぎゅ)……(ぎゅ)苦労さん……」

えくでは 次 君の自己紹介だ……」

「……」

古里……炎真……」

「ん？ 聞こえないよ

もう一度」

「……(ぎゅ)ぎと……えんま……」

「声が小さい!! もう一度!!」

「……」

あらー……黙っちゃった……

私にはちゃんと聞こえてたんだけどなー

んーみんないじめられるタイプとか言ってるね……

助け舟を出そう……

「先生ー」

「風早さんどうかしました?」

「そんな強くいったら」

余計言いにくいですよー?」

「……すみませんでした」

いや……私に謝られても……

そして先生なんだから頭下げないでほしい……

私は雲雀先輩じゃないんだから……

「古里炎真君だよね?」

あ、うなずいたー

「さつき言ってた……優の知り合い!」

「違っよー」

さつき否定する時間がなかったから

言えなかっただけだよー

私は風紀委員だから誰か来るか知ってたの

というか私が転校手続きの最終許可のハンコ押したしー

だから資料を見て名前を覚えてただけだよー

「そ、そうなんだ……」

(優ってそんなことまでしてるんだ……)

私がそういうことしてるって知らなかったっけ?

というか……なんかテンション下がってない?

まあ気のせいかな?

「うん」

じゃあ先生、私は向こう行きますね?

今日は転校生が来るからHRに出たのでー」

「……どうぞ」

とりあえず……最悪な印象は抜けれたかな……

でも……多分……いじめられるかな……

見回りの量を増やせないかなー

うーん……なんてみんなに頼もうかなー

転校生がいっぱい来たから浮かれて

風紀が乱れる可能性が高くなるって言うてみよう

草壁さんとかだつたら助けてくれるよね？
雲雀先輩はいじめられた方も咬み殺しちゃうけどね……

転校生 4

終わったー

今日は量が多かったー

転校生が来たから手続きの資料とかが
いっぱいあったからしょうがないよねー

「雲雀先輩ー終わりましたー」

「わかった」

ガラッ

あれ？誰か来た？

ノックしてないし草壁さん達じゃないよね？

「失礼！」

あなたが並盛中風紀委員長 雲雀恭弥

「誰？ 君？」

「わーきれいな人ですねー」

まじで……うらやましい……

「至門中学3年

鈴木アーデルハイト」

うわー私がいるときに絡みが入るのね

「これよりこの応接室は

肅清委員会に明け渡してもらいます」

「肅清……委員会？」

「断るならそれなりに」

うわー……空気がピリピリしてきた……

「雲雀先輩ー

私は帰りますね？」

「………わかった」

「頑張ってください♪」

さっさと帰ろうー

あ、私には絡んで来なかったね

まあいいか

んーきれいな人だったねー
大人っぽくていいなー……
チラッ

……

自分の体を見てなぜか目から汗が出そうになった……
はあ……

身体能力あげるついでに体系とかも変えてほしかったな……
……ないもの強請りしてもしょうがないか……
よし！甘いものでも買って気分転換しようかなー
ん？あれって……

「ツナ君？」

どうしたの？ 大丈夫？」

なんかボロボロだし……

んーリボーン君はいないね

じゃあ誰の仕業だろう……

とりあえず風紀が乱れてたつて報告しよう

もちろんツナ君の名前を伏せてだけどね

誰か知らないけど私を怒らせたんだ

大人しく咬み殺されてもらおう♪

あ、でも雲雀先輩は取り込み中だし草壁さんに頼もうー

「う、うん……」

今日はなんて1日だよ……」

「なんかついてなさそうだね……」

「そうだよー！ リボーンのせいだ

古里って転校生のケンカに巻き込まれたよ」

あ、そういうことね

うーん……報告するのは止めとくべきかなー

風紀が乱れてたことだけ報告しよう

「しかもリボーンのやつ……」

古里炎真が落とした教科書を

届けてやれよっていうんだよ!!

冗談じゃないよ!!

転校生の家なんて知らないっての!!」

「でもツナ君は届けてあげるんでしょ?」

だってツナ君は優しいもん♪

「う、うん……」

「ふふ♪」

流石に住所は覚えてないしー

今雲雀先輩は忙しいから私も一緒に探して届けるよ」

「え!? でも……」

「いいってー」

今日はヒマなんだ

それに1人より2人で探した方が

一緒に探せる分楽しいでしょ?」

それに1人で甘いものを食べに行くより

ツナ君と一緒にいた方が元気でそうだしねー

「優……」

めっちゃ感動してる目でみられた(笑)

私がない時に一体リボーン君に

どんなひどいことされてるんだろ……(笑)

「え!? どこ? どこ?」

「え!? どこ? どこ?」

「え!? どこ? どこ?」

「え!? どこ? どこ?」

「え!? どこ? どこ?」

「ツナ君、あっちにいるのは古里炎真君じゃない?」

「え!? どこ? どこ?」

「あ、私は視力いいから見えるだけかもー」

「その川沿いにいてる人だよー」

「優……よく見えるね……」

「私は身体能力高いからね」

「視力もみんなよりはいいと思うよ？」

「そ、そっか」

「うん」

ん？裁縫してるねー

今、話しかけたら危ないかな？

「自分で縫えるんだ!!」

「あ……今、話しかけたら……」

あ……エンマ君が肩がビクつてなったよ……

「え!？」

「わ」

あーあ……手からかなりの血が出てるよ……

「なっ 大丈夫!？」

「裁縫中に後ろから話しかけられたら

普通ビククリするよ？」

「ゴツゴメン!!」

そんなつもりはなかったんだ!!

落としてった教科書を届けよう」と

「はひはほ（ありがとう）」

ほこにおいほいへ（そこにおいといて）」

「いや……でもっ」

ツナ君がオロオロしてる……

鞆に絆創膏あるはずだよねー

どこにいれたかなー

ゴソゴソ……

「らいほうふ（だいじょうぶ）」

「あ」

「不器用なんだ

笑えばいいよ」

「えっ」

「わ」

「あつあぶない!!」

ん?なんか大丈夫?

2人が叫んでる気がするけど……

ザッパン!!

「ええええ!!」

2人とも何してるの!?!」

……まじで……

なんで川の中に入ってるの……?」

「あーあ」

って溺れてる!?!

「あ……浅いよ……」

ツナ君のこういうタイプのツツコミは珍しいよねー

まあそんなことはどうでもいいか……

「タ……タオル……1枚だけあるから……」

とりあえず使って……」

「……ありがとう」

転校生 5

私の家よりツナ君の家のほうが近いから
ツナ君の家に行ったら

ランボ君とイーピンちゃんと遊ぶことになっちゃった……
まあいいかー

多分今日は雲雀先輩は家に来ないと思うしー
適当に作ってご飯を食べることにしよー

1人とわかると手抜きしてしまうのが悪い癖だね
「優ちゃん

ごはん食べていってね」

「え!?! いいんですか?」

「いいわよー

大人数のほうが楽しいわよ」

「ありがとうございます♪」

わーい♪

久しぶりのツナ君のお母さんのご飯だ♪

あ、手抜き料理を回避した(笑)

「あ、ツナ君のお母さんー」

「どうしたの?」

「ズボンは私が縫っておきますよー」

「あら? 大丈夫?」

「大丈夫ですよー

私は1人暮らしが長いので慣れてますよー」

「え!?! 1人で住んでるの!?!

はやく教えてくれればもっとご飯に誘ったのに……」

ツナ君のお母さんも本当に優しいよねー

「大丈夫ですよー

私が1人って知って

よくご飯を食べに来てくれる人がいるのでー」

「よかったわ……」

寂しいときはいつでもいってね？
うちは優ちやんだつたら大歓迎よ」
「ありがとうございます♪」

よし完璧だね♪

さて、届けてこようかな？

炎真君は今ツナ君の部屋にいると思うしー
ドカン!!

……この音って……

ランボ君がなんかしたと思う……

そういえば裁縫してる間いなかったね……
しつかり見とけばよかった……

んー大丈夫かなー？

あれ？2人とも笑ってる？

「心配で見に来たけど

仲良くなったみたいだねー」

「え、あ、うん」

「炎真君、ズボン縫ったよー」

「……ありがとうございます」

「いえいえー♪」

「優って……なんでもできるよね……」

「私は1人暮らしが長いからねー」

「家事全般はほとんど出来るんだ」

「あ……そっか……」

「親がいないのを気にしちゃったかな？

「もおツナ君ー」

せつかく楽しい雰囲気壊しちゃダメだよ?」

「う、うん」

「あ! 炎真君!」

「……なに?」

「自己紹介してなかったね」

風早優です」

「あ……うん」

「それにしても2人ともそっくりだよね」

ダメダメな感じが…… (笑)

まああつたかい雰囲気もそっくりだけどね

「……そうなんだ」

「優も思うんだ……」

「そうだね」

だって私がツナ君と初めて話して

自己紹介した時って怪我してたよね?」

「そ、そうだね……」

オレ……ダメダメで……

優に保健室で治療してもらったね……」

「そうそうー出会って自己紹介した

タイミングがほとんど一緒だよ」

狙ったように一緒だよね」

「……そうなんだ」

「そうだよ」

炎真君これからもよろしくね?」

「……でも……」

どんくさい僕のそばにいたいじめられるよ……」

「私は大丈夫だよ」

外ではさつき説明した通り危ないことがあるから

カツラとかかぶって過ごしてるけど」

学校でいじめられることは絶対ないんだ」

後ろに怖い人がいてるからね (笑)

「オレも思うよ……」

「だよー（笑）」

だから私のことは心配しなくていいからねー

はい！ ケイタイの番号とアドレスー

登録しといてね!!」

「……うん」

「本当にオレと会った時と同じだね」

「そうだね♪」

うわー本当に懐かしいや……

転校生はマファイア 1

あれ？ヴェントの方でリボーン君から電話？
すごい珍しいねー

『ちやおツス』

「もしもし？」

リボーン君どうしたの？」

『わりいがヴェントで学校に来てくれねえか？』

「ん？ なんかわかんないけどわかったよー」

『待ってるぞ』

……切れたけど……どこに行けばいいんだろ……

まあ言わなかったってことは

すぐわかる場所ってことかな？

とりあえずー気配を消しながら来たけどー

うん！すぐわかったよ

屋上だ……（笑）

だって雲雀先輩と鈴木さんがバトルを始めそうだもん
んーはやく行きたいけどー

他の生徒に見つからないように行ったほうがいいかな？

また変な噂がたつからね……

まあ私とヴェントが同一人物っていう噂が出なかったから
放置したのも悪化した原因の1つだと思う……

でも、同一人物じゃないイメージをつけたかったし……

やっぱりレアは面倒なことだよねー

始まつちやったよ!!

アーデルハイトっていう転校生が

変な武器を持つてるし……

い、今ヒバリさんが言ったのって……

優のことなんじゃ……

1人だけ例外に武器の携帯を認めてるって言ったし……

あ！考えてる場合じゃないよ！

ヒバリさんがトンファーを出しちやっただし……！

「ひいひい!! ヤバイよ!!」

咬み殺しちゃう!!

ゆ、優だったら……止めれるかも……

なんでいないのー！？」

いつもヒバリさんと一緒にいるのにー!!

「だったらお前が止めてこい

ファミリーの暴走を止めるのはボスの役目だぞ」

「ゲツ リボーン!!」

「せいっ」

こ、これって……ピンチー!?

うわーナイスタイミングで着いちやっただよ（笑）

ツナ君がピンチだねー

このままだと2人の攻撃に挟まっちゃうよ

さて……頑張るか……

ひゅうううう

ピタッ

うし、止まったね!

後はこつちだ!

パシッ!!

「!？」

……ここって学校だよな?

私の片手にトンファー、もう片手に金属製の扇子……

いろいろおかしいと思うのは私だけなのか……？
「止まった……」

んな!? 浮いてるー!?」

まあ私が風で止めたからね

浮いてるのは許してよねー

「怪我不いか?」

「ヴェ……ヴェントローー!!」

うん……ナイスリアクション (笑)

「今おろすよ」

「あ……うん」

ストーン

ふう……なんとかなったかなー

そういえば原作ではツナ君がこれで怪我してたかな?

「ヴェントなにしているの」

「今の攻撃を平然と止めたのか!」

それも素手でだと!?

なんだこの怪しい奴は!!」

平然に見せてるけど平然じゃない!!!

2人とも威力強いよ……だって手が痛い!!

うー武器を出せばよかったよー

私は腕力ないんだからね!!

まあ怪しい奴は否定しないけどー

「わけあってフードかぶって行動してるんだ

僕の名前はヴェントだ」

「やっきこの男に何をした!」

ツナ君のことだよね?

「僕は風を操れるんだ

彼を風で止めたただだよ」

「!」

あ、雲雀先輩を後回しにしたから
少し機嫌が悪くなった…… (笑)

〃雲雀恭弥……悪い……

止めるつもりはなかったんだが……

あまりにも沢田綱吉が可哀そうなことになりそうだったからな……”

「あ、ありがと……」

〃ああ

沢田綱吉だったなら平気だが痛いのは痛いからな”

「そ、そうだよ！

リ……リボーン!! 何すんだよ!!」

「無意味な抗争を防ぐのはボスとして当然だぞ
優秀なファミリイがいてよかったな」

「んなー!!」

あ、リボーン君に優秀ってほめられた♪

ん……?これは喜んでいいのか……?

まあいいか……

「な!? ヴェント!!」

10代目の右腕はオレだぞ!!」

えー……そこでそれなの……

〃僕は右腕には興味ないよ

だから君が右腕をすれば?

僕は反対はしない”

「へへっ

わかってるじゃねえか!!」

獄寺君……単純すぎ……

だって反対はしてないけど

推薦してないことに気付いてない…… (笑)

うん!私ってひどいね! (笑)

「リボーン! 何言ってるんだよ!

学校のケンカだぞ!!

抗争やボスやファミリイは関係ないだろ!」

ツナ君……私がヴェントで来た時点で

マフィア関係ってわかるうよ……

「関係大ありだぞ

奴らはお客だからな」

「……お客？」

“あーなるほど

あれか……”

「ああ

こいつらはシモンファミリーっていつてな

ボンゴレのボス継承式に

招待されたマフィアなんだ」

転校生はマファイア 2

「んなっ 転校生がマファイアー!!?」

ナイスリアクション (笑)

「それって……転校生……全員!?!」

「ああ

7人ともそうらしいぞ」

「じゃ……じゃあ……エンマ君も!?!」

「聞いてこないから」

……普通は聞かないって……

私が聞いても良かったかも知れないけど

ヴェントじゃない私が聞けば違和感あつたからねー

うーん……なんかもう行動が制限されてる感じ……

「マジで……!?!?」

“それで僕を呼んだのか……”

「ああ

残された文献によるとシモンファミリーは

ボンゴレファミリーと付き合いが古くてな

その交流はI世より先祖にさかのぼるらしい

つつても今やオレも知らないぐらい

小さくて目立たない超弱小ファミリーなんだけどな」

“……あんまりはつきり言うなよ……”

「つくー 結局はつきりと言ってくれたな

赤ん坊!!

貴様オブラートに包んで話すということを知らんでか!?!」

「ああ

知らね」

リボン君はそうだよね……

女の子には優しいんだけどねー

こういうのには容赦ないんだよ……

「結局!?!」

継承式に招待されたから来てやったんだぞー!!」

「勘違いして欲しくないのは我々が転校した理由は

あくまで地震の危険を回避するためであり

並盛中を選んだのはちょうど同じ時期に

ボンゴレ継承式の招待状をもらったからだ

ゆえに我々はこれからも干渉されることなく

自由に学校生活を送るつもりだ」

うわー鈴木さんって

私と一緒にで平然とウソをつくタイプだね（笑）

「なあちよつとまってくれよ

さつきから1つ気になってんだが」

「継承式って

どーいうことスか10代目!!」

「いゝゝゝゝゝ!!」

〃なんだ？

君達はまだ知らなかったのか？」

「!？」

ヴェントはなんか知ってるのか!？」

〃ああ

僕は教えてもらったぞ？」

「な……なんで……ヴェントが……

知ってるのゝゝゝゝ!？」

〃リボーンに聞いたぞ」

「ヴェ……ヴェント……違うよ……

ほらっあれだよ……

リボーン……たわごと？」

「ふざけんな」

ドガッ

「んぎゃっ」

〃……せつかく……

僕が怪我をさせなかったのにな……」

ドテツ

「あだー！ー！！」

いい蹴りだったからね……
痛いと思うよ……

「7日後にここ日本で開催される

ボンゴレ継承式はツナが正式な10代目
ボンゴレボスになる空前絶後の式典だ」

「「おおー！ー！！！！」

うわーみんなテンションあがったねー

なんか話を聞いてたけど……

本当にすごいことだよねー

ボンゴレってやつぱりすごいよねー

「なんか怖いことになってんじゃん！！」

じよつ冗談じゃないよー！！」

あ、誰かきそうだね

それに時間がやばいかも……

「あー悪い 僕は帰るぞ

じゃあな」

ツナ君達がなんで？つて顔してる（笑）

まあいいや……

「オイコラー！！」

お前達何をやっとするか！！」

「んじゃあとでな」

やつぱり誰か来たねー

雲雀先輩が私の姿をみたから

応接室でいることにしてくれてると思うしー

まあ急いで学校から離れて早く戻らないと……

早かったです

1、2・・・5人か……確實プロだし……

あー思ったよりはやかかったな……

スケボーがいるね……

カチツ

さて、どうするべきか……

今回はこのまま逃げるのが正解か……

ふう……無事に逃げれたねー

神様にスケボー作ってもらってよかったー

流石に私の最高速度を使って逃げたら

直線距離の場合は誰も追いつけないからねー

まあまだ匣兵器が作られてないのもあるけどね

でも後々のことを考えると……性質が加速で良かったよ……

いや……まじで……

無事に風早優に戻ったけど……

今日は精神的に疲れたね……

さて……これからどうしようかなー

あ、雲雀先輩から電話だ

ちようどかけようと思ってたらかかってきたよ

『早く学校に来なよ』

「ひばりせんぱーい……」

ちよつと泣きそうな声を出してしまったのは

しようがないと思う……

『……どうしたの』

「いろいろあって……」

この場所からではまだかかると……

だから下手に動けなくなつて……」

私がこの時間に外をウロウロしてるのはおかしいし……

また違った意味で私は有名人だからね……

『むかえに行くよ』

「本当ですかー!!」

「すぐ助かります!!」

雲雀先輩と一緒にいたら

私が外に出てても違和感がないよ!!

『どこにいるの』

「今は並盛中央病院近くですよー」

『待ってて』

「ありがとうございますー」

んー待ってる間に電話しようー

出るかなー？

『ちやおツス』

「あ、リボーン君?」

『どうしたんだ?』

「もう狙われたよ」

『!? 本当なのか!?!』

「うん」

複数につけられたから多分レアってばれてるよ」

『……………そうか』

「まあ戦わずに逃げたけどねー」

『わかったぞ』

しばらくヴェントにならないほうがいいみたいだな』

「そうだねー」

まさかこんなにも早いとは思わなかったよ」

『……………そうだな』

「うん」

まあ9代目には会いに行くから教えてね?」

『わかったぞ』

「あ、何かあった時は遠慮なく言ってよ?」

その時はヴェントになるからね」

『ああ』

「うん

じゃ、またねー」

リボン君もびっくりしてたねー

私もこんなにも早いとは思わなかった……

おーバイクできてくれたー

「わざわざありがとうございませす」

「なにがあつたの」

「んーなんか変な人達につけられましたー

多分もう私がレアってばれましたよ」

「……………僕も一緒にいればよかったね」

「大丈夫ですよー

スケボーつかって最高速度で逃げましたよー

時間のこともありましたし……」

倒してる間にHRが始まるのはまずいんだよね

多分雲雀先輩が暴れてた？から

出席を取るのが遅れてると予想したとしても

10分が限度と考えると……

最低でも5分以内に風早優に戻らないとまずかつたし……

だからその時間をすぎると空を飛ぶのもダメだし……

まあ私が警戒しすぎかもしれないけど

このタイミングだと私を見失った後は空を見ると思うし……

でもさっきの電話の様子だと雲雀先輩が

私の予想より引き伸ばしてくれてたかも……

「……………そう

しばらくヴェントにならないでね」

「そうですねー

1度だけなる約束したので

それ以外は出来るだけならないようにします……」

「……わかった」

「……はい」

リボン君にも念のため

先に教えてもらったんですけど

まさかこんなにも早いとは思わなかったです……」

「……そうだね」

「はい……」

待つてる間にリボン君に電話していいましたよー」

「そう」

「まあ何かあった時はヴェントになりますけどね」

「……わかった」

「あ……さつきはすみませんでした……」

無理矢理止めちゃったし……

「手……大丈夫？」

「はい」

やっぱり男の人の腕力には敵いませんねー

武器を出した方が良かったですね」

「僕もびっくりしたよ」

「すみません……」

あまりにもツナ君が可哀そうだったので……」

「僕はどうなってもいいんだけど」

……

まあ雲雀先輩らしいね……

「えっと……とりあえず

学校に行った方がいいですよね？」

「大丈夫だよ

今は僕と一緒に見回りしてることにしたから」

「わーすっごい助かります♪」

もう手を回してくれてたんだ！

「問題ないよ」

「雲雀先輩が助けてくれるから

まだ学校に通えるんですねー……」

雲雀先輩が助けてくれなかったら

ヴェントが私ってすぐばれそうだしね

まあリボン君もだけどね

今、情報操作してくれてると思う……

だから今度からはここまで警戒しなくていいかなー

今日は急だったから動けなくなったただけだし……

「優」

「なんですか?」

「僕がついてるから学校に通えるからね」

「はい!!」

ありがとうございます!!」

相談 1

午後から授業を受けたけどツナ君が死にかけてたよ……
心ここに在らずって感じで（笑）

「ツナ君一緒に帰ろっか？」

何かあったんでしょ？ 相談に乗るよ？」

知ってるけどー

誰が聞いているかわからないから知らないふりだね

「優……」

また感動的な目で見られた（笑）

「ツナ君はどうしたいの？」

話ぐらい聞くよ？」

獄寺君とかには話せないと思うしねー

「オ……オレ……」

マフィアのボスになるなんて冗談じゃないよ!!」

「ツナ君の性格したらそうだよねー」

「そうだよ!!」

オレは……普通に就職してほどほどに稼いで……」

「京子ちゃんと結婚？」

「んなー……!!／／／」

ツナ君ってわかりやすいよねー（笑）

「ツナ君と私は似てるからねー」

大きな権力とかお金もいらないんでしょ？」

私もおしゃぶりを持ってたかったら

平凡な人生を歩みたかったしねー

「そうなんだ……」

自分が楽しいと思える小さな幸せさえあればいいよ……」

「そっかー」

「あー！ーマフィアのボスなんて絶対ヤダ!!」
叫んじゃったよ…… (笑)

「逃げちゃえば」

「!? あっ……あれ？」

「エ……エンマ君!?!」

「ほんとだー」

私はいるのに気付いてたんだけどねー
ヴェントじゃない私が言えば変かな？

と思っって言わなかったんだよね

いやー私ってウソが上手だね!!

「僕も逃げたすことしよっちゆう考えるよ」

「エンマ君その顔のキズ!!」

「またイジメられたの!?!」

昨日の事件から救急箱を持参してるんだよねー

もちろんきれいな水もね

だって炎真君はツナ君と一緒によく怪我しそうだもん
ゴソゴソ……

「炎真君ちよつと勝手に治療するね？」

「痛かったらゴメンね……?」

「……………ありがとう」

「うわー本当にひどいことするね」

「人はちよつと力を持つとむやみに使いたがる

マフィアも学校のバカ連中もみんなそうさ」

「んー……そういう人もいるけどー」

「みんながみんなそうじゃないよ?」

「雲雀先輩だって力を使っていろいろしてるけど」

「風紀さえ守っていれば一般人には暴力は振るわない思うしね」

「君はどうなの?」

「これはツナ君にむけていつてるよねー」

「え……?」

「あ、起き上がっちゃった……」

「もう少し寝てた方がいいよ……？」

私の治療は応急処置レベルだし……

身体によくないよ……？」

「……大丈夫だよ……ありがとう……」

「あ、ちよつと待って！」

「？」

「このままお風呂に入ってもいいような

絆創膏を使ってるから気にしなくていいからね？」

「……ありがとう……じゃあね」

さて……ここはツナ君に任せるしかないよねー

かなり時間を稼いであげたしー頼むよ！

「あつ……あの……エンマ君……」

頑張れ！ツナ君!!

「嫌なら逃げよう……」

ガクツ……

ダメじゃん!!!

コントみたいに転びそうになったよ!! (笑)

「……ツナ君……」

「許さないわよ」

あ、リボーン君が登場だ (笑)

バツココーン

あ、テニスボールが……

「ぶっ」

「あつ」

うわー2人の頭にきれいに当たったよ

ん？私には狙わなかったねー

やっぱり紳士だからかな？

「逃げたすあなたにスマッシュユース」

うわーすごい服だねー

まあ似合ってるからいいけどね (笑)

「リボーン!!」

「つたく

ダメな2人揃うとロクなこと考えねーな
優の前で格好いいところみせろよな」

「あはは……私も思ったよ……」

まさか逃げちやうつて答えとは思わなかったよ……」

苦笑いだよ……（笑）

「後、9代目の気持も知らずに」

「9代目？」

「9代目は今回の継承式にボンゴレに

ゆかりのあるファミリーには

どんな弱小であっても感謝の意を込めて招待状を送ったんだ

その中のファミリーがわざわざ転校までして

継承式に来たことに感銘をうけてな

ちやうど年も同じでいい友達になればと喜んでいたぞ」

「いい……友達に……？」

「そうだよ!!」

友達になればいいんだよー」

「ああ

それにシモンファミリーは

実践の経験のない子ども達ばかりだろうから

危険に巻き込まれないよう

面倒見てやって欲しいとも言ってたぞ」

「その言い方だと……」

危険なことがあるみたいだぞ!!」

もうあったよ……」

「そりゃあ巨大ボンゴレともなると

よく思っていない連中もたくさんいる継承式を妨害しようと

暴力に訴えてくる奴もでてくるだろう

現に9代目の手紙には継承式を妨害しようという

ボンゴレ反対勢力が日本へ向かったという

情報をキャッチしたと書いてあったしな」

「んなー！！」

「そんなの初耳だよ!!」

「そしてこの機会にヴェントも狙ってくるだろうな」

「え!?!」

「ヴェントはもうマファイアにつけられたからな」

「そ……そんな……」

あ、ツナ君がこっち見ちゃったよ…… (笑)

とりあえずヴェントって誰? って感じの反応をしよう……

いやー本当に私ってウソ上手だね!!

「さつき確認すればヴェントの情報が

裏の世界で出回り始めたみてえだぞ」

あーもう出回ったのねー

マファイアって恐ろしいねー

「……………」

んーツナ君が黙っちゃったねー

追い討ちかけすぎだよ……

この状況だとフォロー出来ないしなー

ギイイイイ

うわーなんかきたよー

ドシユ

「よけろ ツナ」

バキッ

「ぶ」

もうちよつと優しいやり方ないのかな……

またきれいにリボン君の蹴りが入った……

まあリボン君が何とかしないとツナ君が危なかったけどね

「へ?」

おお……!

急に腕が引っ張られたと思ったら

リボン君は私も助けてくれたのか……

「うわー大変だー」

逃げた方がいいのかな？」

「ああ

女は避難しろ」

「うん

私は逃げ足はやいから気にしないでね」

ダツシユだね!!

とりあえず隠れて見とこうー

相談 2

凄いなー……でかいねー

まあこれだったらツナ君だけで大丈夫か……

やばそうならヴェントになろうと思ったけどね

あ、もう終わったよ

「ふーびっくりした」

「ツナ君お疲れ様ー」

なんかすごかったね」

「このイレズミはベスカファアミリーの殺し屋だな

粗悪な改造死ぬ気弾らしきもので

死ぬ気化してたみてーだが

とるにたらないチンピラファミリーだ」

「マフィアっていろいろあるんだねー」

「そうだぞ」

流石リボーン君だねー

私がボケてることに当たり前のようにつき合ってくれる（笑）

「改造死ぬ気弾って……」

そんなもの出回ってんのかよ!!」

「最近な

これで継承式までなにかと物騒だっってわかつただろ？」

「すごいねー

ツナ君これから大変だねー」

めっちゃ他人事のフリだねー

「わかつただろじゃないよ!!」

ますます継承式なんてごめんだよ!!

（優も他人事じゃないのにー!!）

「本当は強いんだね

優さんも知ってたんだね」

優さんって呼んでくれた♪

「そうだよー

知ってたよー」

「エンマ君!!」

「飛んでだ」

「いっ……今のはまぐれっていうか!」

偶然木にはね返って飛んじやって!!」

いや……無理があるともう……

京子ちゃんのお兄ちゃんも思うけど

いいわけの仕方が本当に苦手だよね（笑）

「別に気にしてないよ

これツナ君ちのネコ?」

あ、ナッツもネコにされた……

瓜もクラスのみんなにネコにされてるのに……

「あ……まあ……」

そのまま通しちゃったよ……

炎真君はマフィアなんだから

ライオンって教えても問題ないのにねー

「ナッツっていう名前だよー

かわいいよねー」

「そうだね」

ガルガル

本当にかわいいよねー

「ナッツの奴なついてら……」

「そうだねー

あれ? 私にもなついてるね」

私の足元にも擦り寄ってるし……

「そういえば……優は近くでみたの初めてだね」

そういえばそうかもー

戦闘中ばかりだったような……

後はお別れのタイミングの時ぐらいだよねー

あの時はナッツはツナ君にべったりだったしー

「いわれてみればそうだね」

ってか、ボンゴレ匣によく好かれてるね（笑）

まあナツツにはツナ君と私が仲いいから好かれたと思う

瓜はわからないけど……（笑）

「私は帰るかなー」

ツナ君の話は聞いてあげることができるけどー

私にはよくわからないしー

エンマ君のほうがわかってもらえるよー」

今ちようどツナ君は私のこと忘れてるしね

一緒にいると思ひ出して気にするかも知れないしー

「え!？」

（ここでも他人事なのー!?!）」

「じゃあねー」

神様ー

『どうした?』

「1つ思っただけどー」

『なんだ?』

私の対になる属性無いと思うよ

『そうなのか?』

うん

多分だけど私がレアってばれた理由は

継承式に近寄せないためだよ

『なるほど……』

継承式に出る気はなかったけどどこか近くで見ようかな?

って思っただよねー

でもばれたからそれも難しいかもしれない

『……確かに』

私とだつたら多分いい勝負するんだよねー
つまりー罪だつたかな？

それを奪える可能性が低くなるんだよ

『それもそうだな』

対がないからな……

優を止めることができないのか……』

そうだよ

それに向こうは知らないけど

私の場合はもうバージョンアップと同じ力だしね

『なるほどな……』

優を継承式に近寄せないために

レアの情報を流したのか……』

絶対そうだよ

確か見回りたいなのもあつたけどー

それも私は参加することが出来なくなったよね？

『ああ』

そうだな……』

だよねー

ヴェントがウロウロすればするほど

危険がさらに高まるからね

『そうだろうな……』

やられたーって感じだよ……

『ああ……』

鈴木アーデルハイト達も知っていたのに

知らないふりがうまかつたな』

そうだねー

まあ情報しか知らなかつたと思う

初めて見たからみんなリアルな反応だつたんだよ

『それもそうだな』

そしてこの事件終わつたら

対がない風つてもものすごくマフィアがほしいよね

『……そうだな』

だよー

まあ……頑張るよ……

『……ああ……』

焦り 1

はあ……テンション下がってるね……

なんで夜になるとテンション下がるのかな……

憂鬱だ……ミント慰めてー……

ぎゅ

いつもいい抱き心地だなー

ガルル……

ミントが心配してくれてそうだなー……

大丈夫っていいたいけど……

もう少しこのままにさせて……

「大丈夫？」

「うわ!? 雲雀先輩いつの間に!？」

「不用心だよ

カギしめてなかった」

「え!? すみません……」

思ってたより動揺してたのかも……

ガルル……

あ……更に心配しちゃったね

大丈夫っていう意味を込めて

離して頭を撫でてあげよう

よしよしー

「優」

「なんですか？」

「僕がいるからね」

「……でも……」

「なに」

「……なんでもないです」

なんか言ったら現実になりそうだし……

「はやくいいなよ」

フルフルフル

いいたくないから首を振るしかない……

「優」

「……もし私がヴェントつてばれると
会えなくなるのかな……」

「……………」

「ちよつと弱気になりましたね
すみません」

「……僕がそばにいるよ」

「いいですよー」

私がばれたらその時は

ボンゴレの本部？に保護されると思うんでー

イタリアだと思っうんですよー

だからいいですよー

「……………」

「前にも言いましたけどー」

私は雲雀先輩の彼女ですよ？

雲雀先輩のことを一番わかってるつもりですよー？」

「……そうだね」

「雲雀先輩の大事な物はわかってますよー」

私を優先して大事な物壊れたら嫌ですよ」

「わかった」

「はい♪」

それに私は学校の風紀を守ってる

雲雀先輩も好きですからね♪」

ぐいっ

ぎゅ

あーもうダメだ……

抱きしめられたら我慢が出来なくなる……

「ひばりせんぱあい……………」

「弱音いいなよ」

聞いてあげるよ」

「……怖いです……すっごく怖いんです……
私の幸せ……全部なくなりそうで……
こんなにも……毎日が幸せだったのに……
いつか……壊れてしまうんじゃないかって……
このまま……時間がとまってほしいです……
明日が……すっごく怖いです……
みんなと……雲雀先輩と……会えなくなるの……嫌です
なんで私だけ……なのかな……」

「……」
「……ごめんなさい
こんなこと雲雀先輩にいつても
返事なんて出来るわけではないのに……
あ……力が強くなった……
……それだけで十分です……ありがとう

うう……泣きすぎた……
「……もう大丈夫です」

明日……学校だよね……
目……冷やしたらなんとかなるかなあ……
「優」

「はい？」
「いつでも聞くからね」
「……ありがとうございます」
「問題ないよ」
「……聞いてもらえる間は大丈夫ですもんね」
「……そうだね」
「また聞いてもらいます」
「……約束だよ」
「……はい」

「優は僕との約束破らないよね」

「……はい」

「破らないように頑張ります」

「優は大丈夫だよ」

「僕もついでだからね」

「はい」

「すつごく頼りにしてます」

「あ……優しい顔だ……」

「今日……もう少し……」

「そばにいてくれませんか……?」

「僕は今日ここで泊るつもりだけどね」

「へ? そうなんですか?」

「そうだよ」

「気をつかってくれてるんだろうな……」

「お礼言わなきや……」

「言わなくていいよ」

「へ?」

「僕がここにいたいんだ」

「優が言ったからじゃないからね」

「あ……お礼言おうとしたのばれちゃったんだ」

「雲雀先輩……」

「なに」

「……大好きです……／＼／＼」

「知ってるよ」

雲雀先輩が隣で寝てるだけですつごい安心するよねー
最近1人の方が寂しいって思うようになった……
結構重症かも…… (笑)

「優」

「なんですか？」

「優がもしばれたとしても……必ずむかえに行く」

「へ？」

「約束したからね」

「でも……」

「僕はやりたいようにしてるだけだよ」

僕の隣に優がいないと嫌だからね」

「……ありがとう……」

なんか凄く楽になったからかな……？

眠くなってきた……

「ゆっくり寝なよ」

「おやすみ」

「はい」

「おやすみなさい」

ムクツ……

ガルルル

優の頭を撫でようと思っただけに……

僕を信用してないように思うけど

今日はしようがないかな……

ミントは優のDNAが入ってる分

優が不安定なのを誰よりも感じているんだろうね

それと僕が焦ってるように見えてるかもね

「……わかってるよ」

僕は怖がらせたくない

それにこれ以上泣かせたくないからね」

ガルル……

「優が気をつかわないように手を回して

出来るだけそばにいるから安心していいよ」

「明日から過去の書類をまとめてもらおうかな
優がまとめるとわかりやすいしね

朝から草壁に手配させよう

ガルッ!

「だから……」

ガルル!?

ガルルルル……

……不満な声を出さないでよね

目元に少しいたずらをしただけなのに……

もし優が起きれば僕が起こしたと伝えそうだよ

「ん……」

はにかみながら寝てるし大丈夫だね

いい夢を見てよ……

「……おやすみ」

焦り 2

うう……ちよつとまだ目がはれてるかも……

ツナ君達にはばれないと思うけど……

京子ちゃんと花にはばれそうだなー

こういうのって女の子のほうが気付くんだよね

今日は書類あるって言ってたよね？

ちよつと記憶が曖昧なんだよねー

雲雀先輩は朝はやくから学校に行くみたいで

寝てる私に声かけてくれたのはいいんだけど……

耳元で言うのは勘弁してほしい……／／

朝から死ぬかと思つたよ……まじで……

おかげでその後のことをちゃんと覚えてない……

って、考えてる場合じゃない！

さつさと応接室行こうー

「優 おはよ」

「優ちゃん おはよっ」

うわーいつてるそばからだよー

「おはよー」

「どうしたの!？」

目がはてれるわよ!？」

やっぱり女の子ってすごいよねー

「ちよつと昨日小説よんで泣いちゃってー」

「そう」

「だったらいいけど……」

「うん」

「優ちゃん……ほんとに……っ」

あーそっか……

京子ちゃんはいろいろ知ってるんだった……

ウソつくのも悪いしー

京子ちゃんに通じる感じで言おうかな？

「私は大丈夫だよ

心配かけてごめんね？」

「うん……」

通じたかなー？

気にしてそうだから多分通じたと思う……

「ケンカでもしたかと思ったわよ」

あー花は雲雀先輩とケンカして泣いた

って思ったのかな？

「してないよー

私には優しいからねー」

「それがよくわかんないんだけど……」

まあそりゃそうだろうね……

咬み殺してばっかりだからね……（笑）

それに優しいのは2人の時が多いしね

「花の言いたいこともわかるけどね……」

いや……まじで……

「でも私には優しいからねー

雲雀先輩に泣かされたことないよー」

「そうなの？」

「うん♪」

というか……

私が泣いてるのをいつも慰めてくれます……

「今日も風紀委員の仕事あるから直接応接室いくねー

書類があるみたいなんだー」

「そう 頑張って」

「ありがとー」

「待って！ 優ちゃん！」

あれ？ 走って来てまでなにか用事あるのかな？

「京子ちゃんどうしたの？」

急ぎの用事でもあった?」

「またみんなと遊びに行こうね?」

気をつかってくれてるみたいー

「うん♪」

約束だね♪」

うーん……京子ちゃんの笑顔も天使だね!!

癒されるねー……

「あ、京子ちゃんー」

「なに?」

「ツナ君達には内緒ね?」

多分気付かないと思うから

余計な心配かけたくないんだー」

「……うん」

「約束だよ?」

「うん」

「じゃ行ってくるねー」

「頑張ってるね」

「ありがとう♪」

……うん

約束は守らないとね

頑張ろう!!

コンコン

「しつれいしまーす」

「やあ」

うわーいっぱいあるねー

まあ並盛の書類がほとんどここにあるからね (笑)

雲雀先輩が僕がここの法律って言ったのがわかるもん

「優」

「うわっ!?

ど、どうしたんですか? / / / /
思いつきり近かった…… / / / /

「まだ少しはれてるね」

昨日冷やしてたの見てたから気にしてたのかな?

「そうですねー」

まだちよつとはれてるみたいです」

「そう」

「はい」

つて……本当に近いよ…… / / / /

離れようとすれば雲雀先輩もこっちに来ちゃうし……

だからどんどん壁際に寄って逃げ道が……

「あ……あの……」

どうしたんですか……? / / / /

あ……笑った…… / / / /

……これつて……もしかして…… / / / /

や、やっぱり…… / / / /

「……んっ!?! / / / /」

ちよつと待ってー / / / /

し、しししし……ええええ!!?!?

ど……どうしたらいいのー / / / /

うわあああ!!!

息が苦しかったから吸おうとしたら変な声が出たー / / / /

雲雀先輩はさっきのは聞いてないよね!?!?

……聞いてないことと思うことにしよう!!

そ、その前にいつ終わるのー / / / /

へなへな……

こ……腰……抜けた…… / / / /

「顔 赤すぎだよ」

／／／／／／／／／／

雲雀先輩は恥ずかしくないの!!
だってあれって多分……大人の……
きやーームリムリムリ!!!

「たてないの?」

コクコク……／／／／／／

うなずくしか出来ない……

「そう

もう1度しようかな」

な、なにー!?

「た、たちます!!

頑張つてたちますので……」

これ以上は勘弁してください……

恥ずかしくて死にます……／／／／／／

あ……笑った……／／／／／

報告

……書類が多いよー！
行事と転校生の書類とか全部終わったと思つたら
なんか過去の書類を整理することになつてる……！
まさか……無駄に頑張りすぎたせいか!!
学園祭とかの書類をきれいにまとめるんじやなかった!!
でもこんなにも雲雀先輩が喜ぶとは思わなかつたんだもん!
自業自得な気がするけどちよつと違う気がする!! (泣)
つてか……これが終わったら……
来年の並盛の経費とかを組まないといけなくなりそう……
だって……これ……学校の書類じゃないんだもん……
もういいや……
深く考えるのはやめよう……泣きたくなるし……
あれ?また電話だよ
それも獄寺君から?でもヴェント用だよね?
「おいー」
獄寺君も「おい」なのね…… (笑)
「どうしたの?」
「10代目が他のマフィアに襲われたんだ!!」
「そうだねー」
「な!? 知つてたのか!?!」
「その時、私もいたもん」
「だったら話がはええ」
守護者はファミレスに全員集合だ!!」
ブチッ
「ええええ!!」
切られた……つていうか……
ファミレスって私には無理だよね…… (笑)
ツナ君にメールを送つておこう……

「たるんでんぞー！」

ボンゴレもシモンも全員

揃っちゃいねえじゃねーか!!」

こ、こえー!?!

「ま……まーまーしかたないよ 獄寺君

ヒバリさんはヴェント以外と

群れて行動するの絶対ダメだし

ランボは遊びいっちゃってつかまんないし

黒曜ランドのクロームに電話したら

一緒に住んでる城島犬に電話切られたんでしょ?」

「そうですが……」

ヴェントは来るはずしよう!」

「あ……ヴェントからはメールがきて……」

ファミレスには無理って……」

ヴェントの服では絶対入れないからって……」

それにシモンファミリイもいるし……」

「……………そういえばそうスね」

「それと……これ……」

「なんスか?」

「みんなにメールまわして読んでって……」

獄寺君に渡そう……」

みんなへ

私ともうレアってばれたみたいで

マフィアにつけられましたー

今度からは会議?する時は場所を考えてほしいです

あ!こっちは心配しなくていいからね

後でいろいろ教えてね?

みんなを守りたいのは変わらないからねー
ただ風早優の時にすぐ行動出来ないのは許してください
本当にごめんね・
後、このメールを読んだら絶対消してね
足取りは残らないように送ってるけど
そのケイタイに残ってたらまずいからねー
ちゃんと1度消したら復元不可能にしてるからね
じゃあよろしくねー

優

獄寺君も知らなかったんだ……

だってさつきまで機嫌悪そうだったのに……
心配そうにしてる……

「……本当ですか……？」

10代目……」

「……う、うん

この前の時からみたい……」

「どうしたんだ？ ツナ、獄寺」

山本にも見せないと……

「……まじかよ……」

はやすぎじゃねえか……？」

「極限にどうしたんだ？」

今度はお兄さんにも……

「………沢田！ どうなってるんだ!!

極限にはやすぎるぞ!!」

「お兄さん……」

オレだってはやすぎると思う……

優はオレの相談とか聞いてる場合じゃないのに……

オレのために聞いてくれたんだ……

「何か問題でも？」

「つち シモンには関係ねえよ

そつちはどうなってるんだ!」

「こちらも招集をかけたが

加藤ジェリーという男は

外出しておりSHITT・Pは瞑想中だ」

いやー私ってひどいよね

書類から逃れるために買出しって言って帰ったもん(笑)

少しぐらい気分転換をさせてほしい……

まあ本当に食材がなかったけどね

「……優……?」

「あれ? クロームちゃんだー

こんなところで会うなんて珍しいね」

「うん」

うん! 今日もかわいい!!

それにクロームちゃんから話しかけてくれたし!!

つてか……会議は……?」

まあいいか……

後で連絡があると思うしねー

「あ! ちょうどよかったー」

「どうしたの?」

「私がレアってもうばれたみたいだよー」

「え……」

「この前ヴェントでちよつと活動しただけで

つけられたから間違いないよ」

「……わかった」

「うん

んー今から私の家でご飯食べない?」

ちゃんと食べてなさそうだし……

だってスーパーの袋にムギチョコって……

お願いだから栄養があるものを食べてほしい……

「え？」

「いいの……？」

「うん♪」

でも帰りに犬君と千種君の分も作るから

持って行ってくれる？」

「ありがとう」

うん!!かわいい!!

9代目

最近ヴェント用のケイタイがよく鳴るねー

あれ？リボン君からだ

『ちやおツス』

『どうしたの？ リボン君』

『9代目が日本についてな

優に会いたがってるぞ』

「わかったー

着いてすぐでもいいの？」

イタリアから来たたら疲れてるんじゃないの？

『ああ』

んーわざとこのタイミングにしたのかな？

ヴェントと9代目の接触を避けたいマフィアがいそうだしねー

うん……ありえそう……

ツナ君が継いだとしてもまだ若いからね

絶対9代目の力がまだ必要になるし……

意表をつけて着いてすぐにしたのかもねー

『オレもいきてえが

シモンの連中を観察してえんだ』

「……わかった

まあ私は一人で大丈夫だよ」

『そうか

場所はメールで地図送るぞ

時間も一緒に送るからな』

「わかったー

リボン君も頑張ってるねー」

『気をつけろよ』

「大丈夫だよー

そんなに簡単に捕まらないよー

じゃあメールよろしくー」

『ああ』

リボン君……絶対気をつかってくれたね……
ヴェントがレアってばれて危ないのに
無茶してでも9代目に会う理由をわかってるんだらうね
リボン君がいれば話しにくい内容だしね……
あ、メールきたー

流石……ボンゴレ……高級ホテルだ……（笑）

最初から警戒して屋根とかを走っていれば
意外とばれないなー

まあ風で探れるから大丈夫なんだろうけどね

おおー

なんか凄そうな人達がホテルの前で待ってるよ！
多分9代目の守護者だよねー

「ヴェントだ」

リボン君にもらったメール見せたら
問題ないって書いてから見せたけどー

見せる前まですっごい警戒されたよ……

まあ怪しいからねー

「お待ちしました

こちらです ヴェント様

9代目は最上階にありますので」

……様はいらないよ……気持ち悪い……（笑）

おーやっぱりボンゴレはすごいなー

広すぎだよー

「よく来てくれたね

待っていたよ ヴェント君」

とうか…もう個室だし普通でいいかな？
パスッ

って…あれ？

守護者の人達がビックリしてる…

「こんにちは 9代目

もうヴェントじゃなくていいですよ？」

「そうかそうか

優ちやんだったかのう」

「はい♪

9代目の守護者？の方達は

私の正体を話してなかったんですね」

私の顔を見てビックリしたから

女子って知らなかったんだと思う

「そうじゃのう

君が信用できない人には

話さない方がいいと思つてのう」

「すみません……」

「君が謝ることではないよ」

……それもそうか……

それにしても優しいおじいちゃんつて感じの人だよー

XANXUSさんとは今はどうなんだろう……

聞きたいけど……私が聞いちやいけない内容だよー

聞いたのがもしばれるとカッ消されそうだし（笑）

「助かります」

今、思つたよ……

もう少しマナーを知っておくべきだった！

とりあえず9代目に席を座るように言われるまで

待つてたりしたら……硬くならなくていいとか言われた……

それほど怪しい行動してたかも……

XANXUSさん……今度教えてくれないかな……

だつて1番詳しそう……

まあ知ってるけど使ってないとは思うけどね（笑）

でもやっぱりこういうのは知ってる人に教えてもらいたいしー

あ！もしかしてリボン君が知ってるかも！

うん！XANXUSさんより教えてもらえそうだ（笑）

スパルタな気がするけど……って大事な話をしないと！

「……9代目」

「なんじゃ？」

「もし私の正体がばれたときはお願いします」

頭を下げれば顔をあげてほしいって言わたから

顔をあげれば少し悲しそうな顔してたね……

9代目とツナ君ってやっぱり似てるよねー

「……もう覚悟してるんだね……」

「……はい」

正直……明日が怖いですよ」

「綱吉君がボンゴレを継いでくれたら

問題ないんじゃないのう」

そうだよー

みんなに絶対会えるからねー

「それは難しいですよー

ツナ君は友達思いですしー

あ！ ツナ君には私をつかって

脅迫とかしないでくださいよ？（笑）」

本当に優しい笑顔だよー

「君がそんなこと望んでないのは

わかってるつもりじゃよ」

「そうですねー良かったです♪

実はそれが1番心配だったんですよー

ツナ君には私がおしやぶりをゲットした時から

こうなる運命だったって言ったんですけど

私を巻き込んだことを1番気にしてそうで……」

「綱吉君は優しいからのう」

「そうなんですよねー」

でも、そこがいいんですけどね♪」

「そうじゃのう」

やっぱりツナ君のことわかってるねー

「あ、9代目」

私はこのリングに選ばれちゃったみたいなので

これは私が持つてもいいですか？」

「好きにきなさい」

優ちゃん以外が持つても意味がないからのう

それに君には守る力が必要だ」

それもそうだねー

私以外に風の波動の人はいないもんねー

「ありがとうございます！」

すごく助かります！」

よかったー！

お願いしたいことが全部通ったー！

「優ちゃんを見てると

1世が枷を外した理由もうなずけるのう」

「へ？」

あ、思いつきり目上の人にマヌケな声出しちゃった……

思わず手で口を押さえてしまったよ……

まあ9代目は優しい顔してるからいいでしょう……

「仲間思いで優しすぎる」

んーそうかなー……

「リボーンは優ちゃんがウソを平気でつくから

わからないと言っていたのう」

「……すみません」

私はウソつきなんです……

「責めてるわけじゃないんじゃないよ

全て仲間を思ってることじゃろ？」

少し自分のことを後回しにしてるみたいじゃが……

限度はわきまえてるみたいだしのう」

買いかぶりすぎだと思う……

よく雲雀先輩の機嫌を悪くしちゃうもん……

「だから枷を外したんじゃろう」

「はあ……？」

うん。全く納得出来なかった（笑）

買いかぶりすぎにしか思えない！

「ここからは老いぼれの意見として聞いてくれたらいい」

おお！なんか真面目な話っぽい！

「はい」

「もう少し甘えなさい」

「へ？」

あ、またマヌケな声を出しちゃった……

「大切な人のためにつくウソもいいんじやよ

でも本音をいうのも大事じやよ

綱吉君と優ちゃんは似ている

それを知ってるから言えないんじやろ？

本音を言えば彼は一層悩むだろう

でも彼は君が黙ってるほうが悲しむはずじや」

「……はい」

「急ぐ必要はない

君のスピードでいいんじや」

「……わかりました」

「偉そうなことを言ったが

ただの老いぼれの意見じやがのう」

いやいやいや……偉い人の意見だと思……

だってボンゴレのボスだし……それに……

「すごく気が楽になりました

ありがとうございます」

本当に優しい顔をする人だな……

……ん？

しまった……ケイタイの振動が――！
うー！切るのを忘れてたー！

「出ていいよ」

「……すみません」

うう……本当に申し訳ないです……

「……もしもし？」

『優 どこにいてるの』

「えーつと……ちよつと活動中です」

この電話は盗聴できるからねー

ヴェントつていえないやー

『……どういうこと』

「この前いつてた約束ですよー

心配しなくても大丈夫ですよ？」

『……わかった』

「もしかして私の家ですか？」

『そうだよ』

「すみません……」

出掛けるって声かけていけばよかったですね……」

「優ちゃん 私と話してる時間より

今を過ごせる時間を大事にしなさい

頼みごとがあればリボンに伝えればいい」

「え……でも……」

「いいんじゃないよ

わしは会えただけで十分じゃからのう」

「……ありがとうございます」

『優？』

「あ、すみません

今から帰るので少し待っててもらえますか？」

『わかった

気をつけてよ』

「はいー」

「じゃあまた後でー」

『待つてるよ』

ふう……急いで帰らないと……

「すみません……9代目……」

「大丈夫じゃよ」

さあもう帰りなさい

待つてくれる人がいるんじや」

「はい！」

失礼しますね」

「気をつけて帰るんだよ」

「大丈夫ですよー」

私にはお師匠さんという天才の味方がいますし

スケボー作ってくれたので

もしもの時はとばして撒きます」

「そうか」

それはよかったよ」

「はい♪」

では失礼しました♪」

それにしても本当に優しい人だったねー

話せてよかったー♪

友達

今日はスーパーの特売日だから買い物に行つてたら
帰りに炎真君が公園に1人でいるところを発見!

……今日はケガしてないかな……?

炎真君つてツナ君より心配になつちやうんだよね……

「あれ? 炎真君だー」

「優さん こんにちは」

「こんにちは♪」

私には普通に話しかけてくれるようになったなー

すごくいいことだよねー♪

「あの……」

「どうしたの?」

「優さんはツナ君がマフィアって

知つてて怖くないの?」

「怖くないよー」

「どうして?」

「んーツナ君は自分がマフィアの関係者

つてことを最近まで知らなかったんだ

それでツナ君がそのことを知る前から

私はツナ君と友達だったからねー

ツナ君はツナ君と思つてるよ」

まあほんのちよつとだけどね

「そうなんだ」

んー……もういいやー

レアつてばれたの炎真君達のせいだけど

黙つてるの嫌になつちやつたー

「それに私もマフィアだからね」

「え……」

「ヴェントは私だよー

びっくりした?」

「……………うん」

「炎真君だから話したんだ

だからシモンファミリーのみんなには

黙っててほしいかな？」

「……………どうして僕に教えたの？」

「んー友達になりたかったから？」

「……………友達……………？」

「そうだよー

私の場合はね、友達になつてほしいって思つてもね

避けられちゃう可能性あるんだー」

「……………どういうこと？」

「一般人の人には話さないけどー

マフィア関係の人の私の友達には

全部話してるから炎真君には話すね」

「……………あ」

……………今のは少し恥ずかしいよね（笑）

ちよつと真剣な感じの時に炎真君のお腹がなった（笑）

おーちよつどいいところに屋台があるね

「一緒にたこ焼き食べよつか？」

「……………うん」

うーん……………全部話したよね？

「だから私の関わった人死んじやう可能性もあるしー

マフィアに狙われてる人と

普通は友達とかなりたくないよね？」

「……………」

黙つちやつたねー

「友達になりたいって思つても

「私の場合には簡単にはいかないんだよね」

「……なんで全部話したの？」

「話さなかったら友達になれるんじゃないの？」

「そうかも知れないけどー」

「私が嫌だからかな？」

「私のわがままだと思っつてー」

「……うん」

「あ！ 大事なことを忘れてた!!」

「どうしたの？」

「もし炎真君が他のマフィアに脅されて

ヴェントの正体を聞かれたら答えていいからね」

「……どうして？」

「私のせいで炎真君が危険な目にあうなんて嫌だもん」

「僕がもし教えたなら優さんは……」

「そうだねー」

もうどこにも行けなくなると思うしー

ひどいマフィアに捕まったら人体実験かもね

でも私が自分で話した人から

私の正体がばれても恨まないよ」

「どうして？」

「友達だからだよ

私の正体知ってる人はみんな友達だからね

しようがないって思うしかないかなー」

「……優さんは怖くないの？」

「怖いに決まってるよー」

正直いうと明日が怖いよ？

今日の幸せが全部壊れるかもしれないからね」

「……」

「ごめんね

ちよつと暗い話になっちゃったね」

「……なんで逃げないの？」

「僕だったら逃げるよ」

「さつき話したよね？」

「私はこのおしゃぶりゲットした時から
こうなる運命だったんだよ」

「このおしゃぶりは私の体から離れないしね
無理にはがせば多分死んじゃうしー」

「逃げようにも逃げれないよー」

「正直どうにかして隠そうとしてる時点で」

「逃げちやつてるかも知れないけどね……」

「……………」

「うーん……言葉を間違ったかも……」

「気にしちゃったね……」

「少し話題をそらすべきかな？」

「あー… そういえば……ツナ君に聞いてたけど」

「私はマフィアだけど怖い？」

「……………」

「優さんがマフィアって聞いてびっくりしたよ」

「良かったー♪」

「まあ私は炎真君と友達になりたいって思ってるからね」

「後は炎真君が決めてね」

「……………」

「僕が……」

「優さんがヴェントってばらしたらどうするの……？」

「もしかしてヴェントがレアって流したこと気にしてる？」

「さつきも言ったよ？」

「私は恨まないよ？」

「……………」

「わかった」

「うん♪
長話をしてごめんね？」

「ううん」

「私は帰るねー」

「優さん」

「なあに？」

「また明日……」

「うん♪」

また明日♪」

これで少しは気にしなくなっただけねー

もう流れちゃったのはしょうがないしね

後は炎真君に任せるしかないか……

相性

あー今日も頑張ろう……

買い物が終わったら書類って……（笑）

せつかくの休みなんだけどねー

まあ他の風紀委員は普段から休みなんてないから

私はものすごく優遇してもらってるよね……

あれ？あの人って……

うん。カツラをとってから話しかけよう（笑）

「こんにちはー

えつと鈴木さんでした？」

「あなたは確か……

応接室にいた雲雀恭弥の恋人でしょうか？」

あ、私と雲雀先輩が付き合ってるの知ってるんだね

まあそれもそうかー

風紀委員長が雲雀先輩ってわかった時点で

私のことも知ってると思うしー

んー私を狙われなかったのは

必要最低限のことしかしないからかな？

雲雀先輩にケンカ？うったけど

他の風紀委員には何もしてないしね

全委員会の許可をとるために

力づくでなんとかしたただけだしー

私と同じで無駄なことほしないタイプかもね

「そうですねー

風早優といいます」

「そうですか」

うわー私に全く興味なさそうだ……（笑）

確かこの人って……

継承式を成功させることしか考えて無かった気がする……

守護者じゃない私には興味ないのかもねー

まあ守護者だけだね

「あれ？ 炎真君だー」

というか……みんななんで……

野菜の格好してるんだろ……私は絶対いやだ……

「あなた……炎真のことを知ってるの？」

「同じクラスですよー」

さっきまで一緒にたこ焼き食べてたので

学校に来てるとは思わなかったから

びっくりしたんです」

「……そう」

「はい♪」

本当に大人っぽくてきれいな人だねー

一体何を食べたらそうなるの？

教えてほしいよ……

「あなたは炎真と仲がいいの？」

「んーどうなんだろ？」

炎真君が私のことをどう思ってるかは

知らないですけどー

私は炎真君のこと好きですよー

友達になりたいって言いましたもん♪」

「……そう

あなたと話が出来てよかったわ」

？なんでだろ？

「よくわかんないですけど

私もこんなきれいな人と話できて良かったです♪

あ、私……急いでるんだった……

また時間があるときに話しできたら嬉しいですー

ではまたー」

今度ゆっくり話が出来たら

普段何をしてるか聞くことにしよう……

はあ……うらやましいな……

じー……

「なに」

あ……書類せずじつと見ていたら気付かれた!!
まあ怒ってなさそうだからいいか……

「いやあ……雲雀先輩は」

なんで私だったんだろうって思いました……」

「どういう意味」

「さつき鈴木さんと会ったんですけどー」

きれいで大人っぽい女性だなーって思いました

雲雀先輩だったら私じゃなくても

別にいいと思うんですよねー」

カツコイイからねー

正直……選び放題と思う……（笑）

「嫌だよ」

「へ？」

「前にも言ったけど僕の隣は優以外は嫌だよ」

……うう……何度聞いても恥ずかしい……／／／／

「そうですか……／／／」

「そうだよ」

……また反則だよ……／／／

あ、よく考えたら雲雀先輩ってヒバードとロールが

近くにいてもなにも思わないよねー

私も一緒なのかな？

ってことは……

「ちよっと聞いてもいいですか？」

「なに」

「雲雀先輩は1人で戦うの好きだと思っんですけど

私と一緒に戦うのはいいんですか?」

「そうだね

優は僕の邪魔しないからね」

……なるほど

そういう意味では私と雲雀先輩は相性いいのかも
獲物を取り合いはしなれないと思うしねー

「それに優は僕と一緒に戦うこと望んでないよね」

「そうですねー」

私は雲雀先輩にはのびのびと戦ってほしいですしー

私は戦うのが嫌いですしね」

「そうだよ

だから問題ないよ」

性格が違いすぎるからうまくいくってことか……

「……わからないなら教えてあげてもいいけど?」

「へ?」

「僕は優がいいってことが理解できないなら

わからせてあげようか」

や、やばい!!

なんか地雷踏んだ気がする!!

すぐ返事をしなかったせいか!!

「だ、大丈夫です!!」

理解しました!!

雲雀先輩の隣は私です! 譲りません!!」

きやーまた爆弾発言しちゃったよ!!

うわ……笑った……// //

風紀委員長の彼女

これは鈴木アーデルハイトが学校の治安を守るために
現時点で学校の風紀を守ってる

風紀委員について情報を集めていた時のことである……

「……風紀委員を恐れているのに」

なぜあなた方は雲雀恭弥の彼女に手を出さないのですか？

あなた方の話によるとただの弱い女性と聞きましたが……」

鈴木アーデルハイトの言い分はもつともである

現に並中の生徒以外から優は狙われている

実際のところ優はただの弱い女性ではないので

素人に捕まる可能性はゼロなので無駄な努力である

「はははっ！」

この学校にいる奴は出すわけないぜ

出す奴はよっほどのバカだよな？」

「ああ

風早さんには世話になった奴が多いよな」

しかし鈴木アーデルハイトの意見を彼らは笑い飛ばした

「世話とは……？」

「風早さんが風紀委員に入ってから

すげー学校がよくなったよな？」

「そうそうー」

委員会やクラブの意見を聞くために

話を聞きに来てくれたりてさー

オレ達はサッカー部でボールが悪くなってたけど

部費が足りなくて我慢してたけど

風早さんが新品を用意くれたんだよなー」

「あつたあつた

部費なんて風紀委員が決めてるし

もちろん風早さんにもオレ達はそんなこと言えるわけねえし

部の奴が話してたのをたまたま聞いたらしくてさ

ボールの状態を確認したと思ったら
次の日には持つてきてくれたんだよ」

「あのボールは店の人に頭下げて
安くしてもらったらしいしー」

「おい！ オレそれ初耳!!」

「知らなかったのか？」

それで安くしてもらった代わりに

なんか頼みごとをきいたとか聞いたぜ？」

「まじ?」

「ああ

まっそんな感じでオレ達サッカー部だけじゃなく

他の奴も世話になってるんだ」

「そうそうー」

「今では普通に相談したりするしなー

はつきり言いにくいこととかは

風早さんの鞆箱に手紙を置く奴とかもいるぜ」

「風早さんが風紀委員に入ってから

心の中で不満に思ってた奴は減ったと思うんだよ

だから手を出せば困る奴が大勢いるから

そいつらから恨まれることになる」

「そしてヒバリさんにぜってえ咬み殺されるんだろ？」

この学校で風早さんに手を出す奴はバカっていうのが

オレ達の常識って感じだぜ」

「ああ」

これは本当の話である

今までの風紀委員では出来ない方法で優は風紀をよくした

ただし、生徒達は勘違いをしている

優は風紀をよくするために動いたわけではない

風紀委員に認めてもらうために動いただけである

いくら雲雀が決めたといっても納得しない人物もいる

もちろん咬み殺されるので態度には出さないが……

優は全員に認めてもらうのは無理と分かっている
だが風紀さえよくなれば認める人もいるのだ
出来るだけ味方は増やしておくべきと考えていた
なぜなら正体を隠すためには

風紀委員の協力が必要だと気付いていたからである

そしてそのためには生徒を味方につけようとした

生徒達は今まで力で抑えられていた分、鬱憤がたまっていた

そこに暴力を振るわず話を聞いてくれる人物が出来れば

生徒達には女神に見れるだろう……

優は私ってひどいね（笑）と思いつながら

アメとムチの図を完成させた

もちろん優がアメでムチが雲雀である

「……でも……」

「……なにか？」

「ラブレターを書いた奴がいたけど」

冗談で書きちゃいけないって言われて

返された奴がいるらしい」

「……ああ」

「すごい鈍感らしい」

そういうところがいいって言う奴もいるけどな」

「……ああ」

「オレからすれば

咬み殺される可能性が高いのによくやるぜ……

まっヒバリさんには伝わったっていう噂は

1度も聞いたことないけどな」

生徒達の間で優が鈍感というのは有名であった

しかし優は鈍感のレベルを超えていた

優は雲雀の彼女なのに弱そうだからなめられて

手紙でからかわれてると思ってる

だから自分の問題だと思えば雲雀には話してないだけである

そのことをもし手紙を渡した生徒達が知れば

恐らく涙を流すだろう……

「……そう

助かったわ

(これ以上聞いても無意味だわ

さっきの女子生徒も同じような流れだわ)」

スタスタスタ……

「ああ

でも……なんで雲雀さんの彼女なんだ……？」

「雲雀さんの一歩後ろをいつも歩いてる姿といい

昔の日本人って感じじゃねえ？」

「ああ

それに噂によると2人の時は隣を歩いてるとか聞くぜ？」

「まじかよー！

雲雀さんを引き立てるために

オレ達の前はわざわざしてるのか!？」

「らしいぜ」

「……お前……風早さんのこと……

よく知ってるな……」

「……オレも返されたんだ……」

「………何かおこる」

こうして優は雲雀の彼女なのに

鈴木アーデルハイトに絡まれることがなかった

同盟ファミリー

またヴェントのケイタイで呼び出しだよー
まあ昨日はずっと書類まみれになつてたから
いい気分転換だからいいけどねー
それに集場所は考えてくれたみたいで
ツナ君の家だから私も参加できるしねー
といつても2階から侵入だけどね(笑)

.....

窓を開けといてよねー

とりあえずノックだね

コンコン

「ヴェ、ヴェントー!!」

な.....なんで窓から.....」

叫んでないで開けてほしいなー

ガラッ

「悪い.....」

僕は玄関から入るとまずいからな

窓からしかなかつたんだ.....」

「あ、そっか」

「みんな集まつてるみたいだな

何があつたんだ?」

あらー同盟ファミリーがやられちゃったのねー

まあ犯人はここにいるんだけどね

「え!? どっ同盟ファミリーがやられたって!?!」

「伝説の殺し屋集団

ギーグファミリーがスカ!?!」

.....伝説

やばい無駄にツツコミしたくなった!!

なんでヴェントはツツコミキャラじゃないんだ! (笑)

いや……その前に……

リボーンの世界では深くツツコミしてはいけないことが多いんだ
考えた方が負けだ……流すんだ!! (笑)

「ああ

継承式の妨害を企む敵の親玉に返り討ちにあった

場所は並盛5丁目工場跡地だ」

「ひいつ 近いよ……!!」

「確かに……近すぎるな」

まあここに犯人がいるからねー

近いのは当たり前だよ

というか……こういう事件あったねー

すっかり忘れてたよ

まあ事件のことを覚えていてもどうしろって話だけどね

場所なんて覚えてるわけないし時間もわからないし

風を使っても誰とかわかるわかないしね

「どの死体も今まで見たことないやられ方をしている」

「何……それ……」

「敵の正体はわかったのですか?」

「いや 不明だ」

「つ……つまり……」

正体不明の敵がオレ達を狙って

そこら辺をうろついてるってこと!?!」

「それも考えられるな」

「え!?!」

「今まで沢田綱吉が襲われた数は?」

「い、1度だけ……」

「少なすぎないか?」

「え!?! どういうこと!?!」

「あーつまり……」

僕達を狙って襲うつもりの場合

僕以外は正体がばれてるはずだからな

もつと狙われてもおかしくないはずだよ”

「ひいひい!!」

ヴェント恐ろしいこと言わないでよ!!」

だってそういう風にも考えられるもん……

”それで僕が何をいいたいかと言うと……

今回やられた人達は何か別の理由で

やられた可能性もあるってことだ”

「ヴェントのいうのも一理あるな」

”リボンも思うだろ?”

といつても……沢田綱吉が襲われてから

ボンゴレとシモンファミリーが警護してるからな……

敵が狙われにくいから出来なかった

という可能性の方が高いはずだ

簡単にわかる方法は沢田綱吉の警護をやめることだな”

「な!?ヴェント!!」

10代目を危険な目にあわすつもりなのか!?”

”簡単にわかる方法を言っただけだ

僕は沢田綱吉の守護者だ

そんなことしたくないよ

それに継承式を妨害する理由のほうが高いからな”

今の状況では確率的にこうなるんだよねー

逆の方を言えばリボン君に疑問に思われるし

これ以上は言えないね

それに、絞るために作戦をたてて実行しても

シモンファミリーが聞いているから

ツナ君の警護をといったら狙われると思うしー

つまりツナ君の警護はやめれないんだよね

まあ提案はしたんだし後はツナ君の意見に任せるしかないね

「ヴェントがそう思うってことは……ヤバイよ!」

やっぱり継承式なんてとんでもないよ」

ツナ君は自分で考えないのね……（笑）

「心配いりません 10代目!!」

誰にも継承式のジヤマはさせません!!」

「その意見に賛同します」

我々シモンファミリーも継承式まで

全力であなたを守ります」

「必ずお前を10代目ボスに出世させるぞ!!」

「継承式は大丈夫ら」

「安心しろよ ツナ」

あーあ……

みんなはツナ君が10代目になりたいって思ってるんだ……

「み……みんな……いや……あの……」

はつきり言わないとみんな気付かないよー

これはツナ君が自分で言わないとねー

「よし!! とりあえず怪しい奴がいないか

周囲をパトロールするぞ!!」

「おうー!」

あーみんないつちやったねー

「え!?!」

あの……そういうことじゃ……あ……あの……」

「僕も行くね」

あー頼みの炎真君もいつちやった……（笑）

「そうしてくれ」

「ちよっリボーン!」

「優さんまたね」

やった!

声をかけてくれたよ♪

「うん♪ またねー」

「エンマに正体ばらしたのか?」

「そだよー」

でも炎真君だけだよ」

「そうか」

「あ……優……」

ものすごくすぐるようになってるね（笑）

「私は前にいったよ？」

「え!？」

「私はツナ君の意見を尊重するって

継ぎたくなかったら私はそれでもいいと思うしー

だからツナ君が決めなよー」

「優……」

また感動的な目でみられた……（笑）

「そうだよ!!」

今日あらためてマフィア世界の怖さのはつきりしたよ!!

ファミリー同士の抗争とか殺し合いとか

本当にありえないから!!

マフィアのボスとか絶っつ対ムリだし!!

継承なんてイヤだからな!!」

「私トリボーン君に言っても意味ないよ？」

「そうだぞ

優のいうとおりだぞ」

「じゃあ誰に言ったらいいのー!？」

だからすぐるような目で私を見ないでよ（笑）

「決まってるじゃねーか

今回の継承式の全権を握る

現ボンゴレボス ボンゴレIX世だ」

「9代目!？」

「そうだよー

じゃあ私は帰るからねー またねー」

って、窓から帰ったらー

9代目の守護者がいてたよ

一応頭を下げたら向こうも下げてくれた……（笑）

相談 3

「今日9代目に言われたんだ

継承式前日の明日までにボスになるかどうか決めろって……

……9代目は好きにしろって言ってくれたけど

本当はオレに継がせて初代が自警団として組織した時みたいに
平和で抗争のないファミリーにして欲しいみたいで……」

あれは……本心から言ってた……

「ボンゴレの9代目が？」

「うん

でも……エンマ君はわかっているとと思うけど

オレにマフィアのボスなんて絶対ムリだよ！

勉強も運動もダメなところばかりだし……

人の上に立って指示するような仕事は

向いてないと思うし……」

「なんで僕に相談するの？」

「え？ あっごっつ……ごめん

マフィアのことなんて相談できる人……いなくて……」

「優さんは？」

「ゆ、優は……オレの意思を尊重してくれるよ……

継ぎたくなければ継がなくていいって……

でも優には相談しちやいけない気がして……」

「どうして？」

「無理してるんだ……」

「え……？」

「今日会うまでは気付かなかったけど……

無理して元気出してみたい……」

普段の優は……最後までついてきてくれたり……

話を聞いたりしてくれるんだよな……

そりゃヒバリさんからの呼び出しがあれば

ヒバリさんを優先するけど……

それはオレ達を咬み殺しちゃうからだし……
だからこの前は少し変だった……
エンマ君に押し付けた形にすることなんてしないよ……
多分……ヒバリさんは気付いていたんだ……
だから風紀委員の書類の仕事を増やしたりして
優と一緒にいてるんだ……

「……そうなんだ」

「……うん」

相談したいって言えば優は絶対聞いてくれるけど……

これ以上……無理させたくないし……

獄寺君達はオレがボスをやるべきだと思ってるし——」

クシユン!!

なんか私の噂でもしてるのかなー……

全く有名人になりすぎだよー

「風邪？」

「多分違いますよ」

誰かが私の噂でもしてるんですよ」

「そう」

「はい」

私は滅多に風邪ひかないですよ

副作用で倒れるか体力あげすぎて

ずっと寝てるぐらいしかありませんよ？」

「それも僕は嫌だけどね」

「すみません……」

「でも僕が止めても優はするよね」

「あ、ばれちゃいました？」

「はあ……」

あらー呆れちゃった……（笑）

「副作用の方は流石につらいので

減多なことではとりませんよ？」

まさかあんなにも辛いとは思わなかったからね……

「……わかった」

「はい

体力あげるのもいいんですけどー

限界までいくと寝てる時が無防備すぎるので……

これからはなかなかできないかもです」

いつヴェントが優ってばれるかわからないしねー

のんきに寝ることすら出来なくなっちゃたよ

「そう」

「雲雀先輩が近くにいるなら

話は別なんですけどねー

雲雀先輩がいるなら安心して寝れますしー」

あ……笑った……／／／

「優

「なんですか？」

「僕がいたら安心して寝れるんだ」

「そうですね……／／／

雲雀先輩が寝るまでは緊張しますけど……

1度寝たら何かあっても

雲雀先輩がいるので……安心できます……／／／

だって絶対守ってくれるもん……／／／

「……僕は男だよ」

「へ？」

「あんまり安心しても困るってことだよ」

「えっと……」

どういう意味？

「……わからなくていいよ」

うーん……この反応は……

わからないとダメな気がする……

「お腹すいた」

「あ、すみません……」

準備は出来てるんですけどすぐ作りますね」

「楽しみにしてるよ」

「はい！」

工場跡地

んー今日だった気がするんだよねー

炎真君がヘルプの手紙を書いたのは……

さて……どうしようかなー……

言いたいけどー……言えないしー……

ツナ君の家のごみ箱から手紙を探すとか？

でも変な行動だよねー

それにやっぱリングに血を浴びせないと

後で困ることになったら嫌だしなー

そう考えるとここは私は何もしちゃいけないか……

あーでもなー………ん？ケイタイがなってるよ

あれ？知らない番号だ……

まあ風早優のほうだけどね

「もしもし？」

「あの……僕……古里炎真だけど……」

「あ、炎真君だったんだー」

そういえば風早優の電話番号とかは渡したけど

炎真君のは知らないから登録してないもんね

「どうしたの？」

「あの……今日昼の12時に工場地あとに

誰にも言わず1人で来てくれないかな……」

「うん？」

「なんかわからないけどわかったー」

「うん」

「あー困った……」

「これは1人で行かないとダメだよねー」

「うーん……誰にも言わずねえ……」

「とりあえず雲雀先輩の許可をもらおう……」

コンコン

「しつれいします」

「やあ」

良かった……

機嫌が良さそうだよ

「ちよつと今日急用が出来てしまつて

11時ごろから出掛けたいんですけどいいですか？」

あれ？なんか機嫌が悪くなつたよね？

途中で学校を抜けるから？

でも前に抜けたことがあつたけど問題なかつたような……

「……ヴェントになるの」

「あ、違いますよー

風早優の急用ですよー」

あ、機嫌が戻つたよ

心配だつたのかなー……

「そう

わかつた」

ヴェントになるんだつたら止めてたのかな（笑）

一応……風早優の急用だけど

ヴェントの急用でもあるんだけどね……

もちろん話す気はない！（笑）

ここだよねー

うーん……やっぱり人気がない場所だねー

あ、ちよつと早めに来ちやつたけどいいか……

「あ、炎真君いてたー」

「ありがとう

来てくれて」

「別にいいよー？」

何か用事？」

「少しここでいてほしいんだ」

「なんかわかんないけどー」

炎真君がいうなら一緒にいるよー」

「ありがとう」

んー12時を過ぎてちやっってるんだよねー

これは多分私とツナ君を両方試したのかな？

「炎真君どうかしたの？」

なんか元気なさそうだよ？ 体調悪い？」

どンドン暗くなってるんだよねー

これはツナ君が来ないからだと思う

「……………ううん

大丈夫だよ」

「無理しないでね？」

「うん

優さんは僕がもしマフィアに

ヴェントの正体をばらしても恨まないんだよね？」

「そうだよー？」

「しょうがないよー」

「……………僕が他のマフィアに脅されて

優さん呼び出したかも知れないよ」

「そうだねー」

誰にも言わずに1人で来てって言ったし

場所が工場地あとだから

その可能性すっごい高いよねー」

っていうか、呼び出し方がそれしか考えれないしー

あ……この時点でツナ君は原作通りアウトかも？
やっぱりツナ君を連れて来るべきだった？

うーん……でも誰にも言わずだったし……
ツナ君を呼ぶのもありだったけど

ウソつけないから私が言ったから来たとかいいそうだし……
あーでもやっぱり選択間違ったかなー

ツナ君が来ないと私って結構ピンチだよ？
だって私って憎きボンゴレだし……

殺されてもおかしくない状況かも……
……今更いろいろ考えてもしょうがないか……

「……どうして来たの？」
「私を呼び出して

炎真君が無事だったら別にいいもん」
「……ありがとう」

「なんでお礼言ったの？」
「僕のために来てくれたんだよね」

「そうだけどー」
「私のせいで炎真君が危険な目にあうんだよ？

だから私の責任だよ？」
「それでも嬉しかったよ」

「そうなの？」
「まあ私はそんな簡単に捕まる気はないよー？

炎真君守って戦う気で来たからねー」
「本当にそういう状況になっても断言できるよ

「そうなんだ」
「当たり前だよー

まあ数が多かったら炎真君だけでも逃がす気だけどね
目的は私だからねー

炎真君だけだったら逃げれる可能性高いしね
いつごろ来るのー？」

「来ないよ」

「へ？ そうなの？」

「うん」

「じゃあなんで私を呼び出したのー？」

「僕のこと本当に友達と思ってくれてるか試したんだ」

「そっか♪」

「……あれ？この流れ……」

「このまま私が炎真君に何かされるっていうのは無い？」

「……」

「私の性格が悪いからそういう想像ついたら嬉しいだろうね」

「……炎真君ごめん……」

「心の中で謝っておくよ……」

「……ごめん」

「いや……私の方こそごめんよ……」

「いっよ♪」

「それで信じてくれて」

「友達になつてくれるんだったら嬉しいしね♪」

「……ありがとう」

「……なんかごめんよ……まじで……」

「本当は私が炎真君を試してたのかもしれない……」

「……ごめんね……そしてありがとう……」

「私こそお礼いいたいよー？」

「友達出来たもん♪」

「うん」

「エンマ」

「あれ？ 鈴木さん？」

「こんにちはー」

「ごんちには」

「優さんもう帰っていいよ」

「今日はありがとう」

「……やっぱり普通に帰れた！」

「まあいいことだしいいか……」

「うん

またね♪」

「またね」

事件勃発 1

んー……どうしよう……困ったね……

私が行ったから大丈夫だったのかな？

でもツナ君が来てないからやっぱり原作通り？

自分の行動のせいでわけわからなくなった……

私も炎真君のヘルプを聞き流すべきだった？

でもそれはよくウソをつく私でも流石に嫌だしー

行かなくてそれから炎真君と私の関係は修復できるのか？

あれはツナ君だから出来ることだと思……

私には無理だよ……

とりあえず応接室行こう……

コンコン

「しつれいしまーす」

「おかえり」

「ただいまです♪」

……まじっすか

「……なんかすごく書類が増えてませんか？」

何この山……絶対おかしい……

「そうだね」

「……頑張ります」

我ながらなかなかの集中力だねー

結構書類が減ったよー

……あれ？今何時……？

あー……

やばいやばい！もう放課後だよ！

「ひ、雲雀先輩!!」

「なに」

「ちよつと息抜きです!!」

「すぐ帰ってきますね!!」

「……わかった」

「なんか怪しんでそうだけど」

「別にいいや……大変だ!!」

「でも今だと間に合う可能性が高いよね!？」

「風早さん!」

「うわっ!」

「いきなり引つ張らないでよ!!」

「す、すみません……」

「あの……相談したいことが……」

「このパターンは学校のことだよね!？」

「風紀委員に言いたいけど言えないから」

「私に聞いてほしいんだ……」

「うー今日は勘弁して!」

「ごめんなさい!」

「ちよつと今はドタバタしてて……」

「また今度でもいい……?」

「………はい」

「う……落ち込まないで……」

「今度私から会いに行くよ!」

「え……?」

「1—Bの高木さんでしょ?」

「どうして……?」

「この学校のクラスと名前は覚えてるの」

「今日は本当にごめんね?」

「来週になるかも知れないけど絶対行くから!!」

またね!!」

「はいー」

本当にごめんねー

今は緊急事態なんだよ!!

今日は厄日だ……

さつきから呼び止められてばかり……

あ!最近いろんな場所に顔を出してないからか……

うー!原因は書類が多いからだ!

息抜きとか言ってまわれれば良かったー!

「風早ー」

またか!って京子ちゃんのお兄ちゃんだ

「こんな時間になにしてるんだ?

ついにボクシング部に興味をもったか!

な・ん・で・そ・う・な・る!

私はまだ何も言っていない!

「風紀委員の仕事をしてたんです!!

私をボクシング部に入部させようと思ったら

雲雀先輩を説得させてください」

というか……強いのを隠してるんだから

勧誘するのはやめてほしい……

まあいつも誰もいないところで言うから

ちよつとは考えてくれてると思う……多分……

「あいつはオレの話を聞かん!

極限プンスカだぞ!!」

京子ちゃんのお兄ちゃんも人の話を聞かないじゃん……

でもビミョーに仲いい?よね

まああれを仲がいいと言っているのか……?

……深く考えてる場合じゃないじゃん!

「まあそれは置いていてー

私は急いでるんです！

山本君に用事があるんです!!」

「そうなのか？」

「あー！ ちょうどよかった!!」

一緒についてきてくれませんか？

部室にいたら私入れないので呼んでほしいです!」

「ああ いいぞ

ちょうどオレも校内を巡回中で

そつちに行こうとしてたところだ」

「あ……見回りすみません……」

本当は私もしないといけないのに……

「極限問題ないぞー!」

「助かります!」

って、このタイミングで

京子ちゃんのお兄ちゃん……大丈夫!?

「なんだ 開いてるではないか」

え……もしかして……

「山本!!!」

やっぱりーーー!!!

な、なんでーーー!!!

「や、山本君!」

「風早! 救急車を呼べ!!」

「え、あ、はい!!!」

やっぱり私には原作を壊す力がないのか!

ってか……まだそんなに暗くなってないよね!?

絶対原作より早い時間だよ!!

あーでもそういえばさつきグラウンドには

野球部のみんながいなかった……

何が起きてるのー!?

「救急車すぐ来るようですよ!!」

あーだめだ!!

山本君が原作通りやばいよ!!

流石に医学関係の本を読んだといつても

この怪我をここでどうにかすることは出来ない!!

「私の体力を全部山本君に渡すので後のこと頼みます!!

私はこの状況を見て

気を失ったことにしてください!!」

「ああ!!」

あー本当に最悪だよ!!!

山本君ってどうやって治療したのかな……

確か元気になってた気がするけど……

あーもう何でもいいや!!

「……私に出来ることはこれだけです……

後……頼みます……」

ダメだ……もう意識が……もたない……

事件勃発 2

「ここは……?あれ……?」

「草壁さん……?」

「お気づきになりましたか!?!」

「なんで草壁さんが……?」

「そ、そうだ!!起きない!!」

クピツ!!

「風早さん!?! 無理してはいけません!」

「……大丈夫です」

「雲雀先輩は学校ですか?」

「……はい」

「……すみません」

「草壁さんも学校に行きたいですよね……」

「私についているように指示したのは」

「雲雀先輩だと思うし……」

「大丈夫ですよ」

「それに詳しいことは私には……」

「あ……そっか……」

「雲雀先輩のことだから……」

「マフィア関係の可能性が高いつてわかるか……」

「それに話さないようにリボン君に言われてるのかも……」

「まあそれを聞いたとしても」

「今日は学校を離れたくはないと思うしね……」

「……そうですか」

「でもここにいるように頼んだのは」

「草壁さんだけですよね?」

「はい」

「大丈夫だね」

「やっぱり草壁さんは雲雀先輩のことをわかってる」

「草壁さんじゃないと私を任せることが出来なかったと思う……」

狙われてる可能性がある自分と一緒にいるのは危ないし
学校には事件が起きた場所ってことで

私を連れて行くのはさらに危険だからね……

まあもしもの時のためにロールを置いていつてるし……

「ロールもありがとうね」

クピッ♪

「私は大丈夫だから」

もう雲雀先輩のところに戻っていいよ

家に帰ってミントと一緒にいるよ」

あら……首を振ってるね

「一緒にいるように言われてるの？」

クピッ

動くなつてことかも……

「……わかった」

ちよつとだけ用事を済ませたら

ゆつくり寝て回復させるよ

それだと戻ってもいいよね？」

クピッ

つまり体力回復させるまで一緒にいるように

雲雀先輩に言われてるんだね

「用事とは……？」

あら……こつちにも心配してる人が……

雲雀先輩の命令っていうのもあると思うけど

本気で心配してるよ……

「わかっています」

この病院からは出るつもりはありません」

「……わかりました」

カバンの中にヴェントグッズを入れてて正解だった……

炎真君から呼び出されなかったら入ってなかったよ……

あの場にいたオレが話さなければ……

「最初に山本を発見したのはオレと風早だ……」

風早が山本に用事があるっていつてな

部室にいると呼べないからって一緒についていったんだ
野球部の部室の扉だけが開いているのぞいてみると……

一面が血の海で山本が……すぐに救急車を呼び

オレの我流の晴の活性の炎で治療を試みたが……

あまりに……キズがひどく……

……風早は山本を見て気を失ったんだ

念のため一緒に救急車に運ばれて病室で寝ている」

本当は特殊能力の副作用で寝てるだけだが……

「……風早さんは大丈夫ですか？」

鈴木アーデルハイトは風早と知り合いだったのか……

「……ああ

まだ目は覚めてはいないが……

今、風早には風紀委員がついているぞ

もし起きればオレに連絡するように頼んでいる」

「そうですか……」

「で……リボンさん

どんな手掛かりがあつたんスか？」

“待つてくれ 僕も聞く”

「「「ヴェント!」」」

あ、このメンバーだったら普通にしゃべっていいか……
シモンファミリーがいると思つたから
変装したけど意味がなかったね……

「お前 起きてて大丈夫なのか!？」

「少し眠いけど大丈夫だよ」

「そうか……」

「リボーン君、進めていいよ」

「ああ」

山本は意識を失う間際に血でメッセージを残してたんだ」

「そういうえば……あつた気がする……」

でもほとんど消えてたよね？」

「ああ」

恐らく犯人の正体の確信をつく部分だったのだろう……

何者かが証拠を隠滅したらしい」

うーん……そういうえばそうだったかも……

「しかしその横に小さくひらがなで

書かれた “でりとと” って文字が確認できたんだ」

「でり……とと……？」

「わけわかんねーだろ？」

消した奴もそのわけわかんねー文字は

見逃しちまったんだな

オレも最初はわかんなかったが

ローマ字にしてみると *delitto* となる」

「罪？って読めるよね？」

「そうだぞ」

イタリア語で罪という単語だ」

「そう言われてみりゃたしかに!!」

「……うん」

「しかし罪と言われても……どう手掛かりに？」

話を聞いてると原作通りっぽいね……

犯人は継承式に現れるってリボーン君が言ってるし……

「9代目に継承式を開いてもらう

犯人はきつとまたオレの友達を……仲間を襲ってくる

それだけは許さない！

山本をあんな目にあわせた奴を……

絶対に捕まえるんだ!! オレは継承式に行く!!
やっぱりそうなるよね……

「ツナ君、山本君が油断してたとしても

そんな簡単にやられるわけないってわかるよね

正直、私は反対だよ」

「風早！ 10代目の決定だぞ!!」

それに今回のことを何も思っただねえのかよ！」

「獄寺君、落ち着いて

優はオレ達の心配をしてるんだよ」

「……ですが……」

「……獄寺君の言うとおりだね

私もこの方法が一番いいのは

頭ではわかってるのに言ったんだ……」

「どういうことだよ！」

「……リボン君

継承式にヴェントは出る予定ではなかったよね？」

「……ああ

正装になるからな……」

やっぱりね……

「継承式でおびき出そうとすると私は……」

「……悪かった」

覚悟を決める時かもね……

「ヴェントの参加はなしだ

参加すると言えば継承式は開かねえぞ」

釘を刺されたか……

「優！ オレ達に任せて!!」

絶対捕まえるから!!」

「そうだぞ!!」

極限に任せろ!!」

「……………うん」

やっぱり山本君は幻覚か……

みんな帰っていったし……相談しよう……

「リボン君、私も継承式に行きたい

風早優としてでいいから……」

「……わかつたぞ

デイーノにこのことを隠して優のことだけ頼むぞ」

「ありがとう

じゃあ私は寝るよ

明日のために……」

「ああ」

あれ……？

私がさつき起きたのは神様が起こしてくれたのかな？

誰かに起こしてもらわないと起きれないし

お礼を言わないと……

継承式 1

なんとか回復出来てよかったー

草壁さんが見張ってくれてたし

ロールがふつついて寝てくれたのもあるかも……

もし抱きしめて苦しめたら怖いから

ミントにはそういうことしたことなかったしねー

今度試してみようかなー

それにしても……スーツできたけど

おしやぶりが邪魔なんだよねー

体のラインがわからないようにしたからばれないと思う……

「よお 優」

「ディーノさん！」

「……大丈夫か？」

「大丈夫ですよー

まだ私ってばれてませんしー」

「……そうか」

「ヴェントの情報ってそんなに出回ってます？」

「……ああ」

本当にめんどくさいことになってるよねー

「そうですかー

まあ今日は風早優としてよろしくお願いしますね

ディーノさんはもつときれいな人のほうが

いいと思いますけどー」

「そんなことねえって」

「いや……ディーノさん……周りをみてくださいよ……」

ものすごく私への視線が痛いですよ……（笑）」

「そうか？」

気付いてないのね……もててることに……（笑）

まあ妹に見えると思うし……なんとかなるか……

「まっエスコートは任せろ」

「お願いしまーす♪」

「あれってツナ君じゃないですか？」

「そうだな」

よっ 失礼」

きれいな女性の人達が

ものすごくディーノさんをみてるね！

そして私への視線が……（笑）

「元気か 弟分!!」

「ディーノさん!!」

「やっほー」

「ええええ!!? 優!?

な、なにしてるのー!!」

ナイスリアクション！（笑）

「ディーノさんが

みんなの晴れ舞台を見せてくれるって♪

だからエスコートしてもらってるの♪」

「そういうことだ

まさかこんなに早くこの日が来ちまうとはな

兄貴分としても鼻が高いぜ!!」

「ハ……ハハ…………」

凄く苦笑いしてるねー

本当は継ぐ気はないもんね

「いろいろ聞きたいが……」

またいつかゆっくり話そうぜ

ヴェントのこともあるしな」

ディーノさんは私のことを本当に心配してるのね

まあディーノさんだしねー

「はっっ」

「うゝおゝおい!!」

あーもう誰かわかったよ…… (笑)

「久しぶりでもねえか!!」

カス共オ!!」

それにしてもすごい殺気だよねー

とりあえず怖がつてディーノさんの

後ろに隠れるつて感じでいよう……

まあそうすると……女の人から凄い視線と……

なぜかベルさんからも視線が…… (笑)

「相変わらずだな スクアアロー」

「ディーノさんのお知り合いですか……?」

「ああ

だから怖がらなくていいぜ?」

流石ディーノさん

話を合わせてくれるね♪

「はいー」

お!視線が減ったかも?

やっぱりディーノさんは凄いなー

「XANXUSは……」

「ウチのボスは欠席だあ!!」

来るわきやねえ!!」

まあそうだよねー

もし来たら幻覚か熱があると思う (笑)

「うゝお おい!!」

稽古さぼつてねえだろーなあ」

「ハハッ もちろんだぜ!!」

あースクアアローさんとディーノさん気付いたね

流石だよねー

でも2人ともチラッと私の顔を見るのもやめてほしい

しょうがないか……未来の記憶をもらつて

私が幻覚きかないつて知ってるしねー

よく見れば私は山本君とは近づかないようにしてるしね

私が触ると幻覚なのがばれちゃうからねー
まあ連行されたのはツナ君だからいいか♪

「優、行くか?」

「あ、私はもうちよつとツナ君達と話してるのでー
先に行つてていいですよー?」

すぐ行きますよー♪」

「ああ

んじや後でな!!」

「いくぞお

てめーら!!」

んーずっとベルさんがこっち見てるけどー

話しかけてこないからいいかー

とりあえず目線でまたね♪つて送つておこうー

「しっしっ♪」

あ、わかったみたいだね

継承式 2

「おいゴラ!! なめてんのか？」

クソカギ!!」

ん?なんだろ?

「シモンファミリーなんざ聞いたことがねえ!!

ここは青っ白いガキの来る場所じゃねーぞ!!」

「我々もちゃんと招待状をもらっている!」

「だとお!」

あ、そういえばそういう原作だった!

「あっ!! エンマ君!!」

「ツナ君」

「大丈夫!」

また怪我しちゃってるし……

「……………優さん!」

「大丈夫?」

「うん」

「痛くない…………?」

すごく痛そう……

救急箱を持ってくればよかった……

「だ、大丈夫だよ」

「なんであんなひどいことするんだろう」

「ったく、けしからん奴らだ!」

ツナ君と京子ちゃんのお兄ちゃんの言うとおりだよ!!

「ほんとだよ!!」

もお! ひどいよねー!!」

後で足でも引つ掛けるべきか?

ああいう人はこういうところで恥をかくべきだと思う

絶対反省しないタイプだしー

「ゆ、優さん……」

……ひどいことを考えてたのがばれた……？

「どうしてここに……」

ん？違うね

ってか、なんでそんなにビックリしてるのかな？

レアの私は来ないと思ってたのかなー

「えっと、ツナ君のお兄ちゃん的な人と仲が良くてねー

ツナ君達の晴れ舞台に

連れてつてくれるって言ってくれてね♪

さつきツナ君にもびつくりされたよー」

「そうなんだ……」

「そうだよー

それに山本君も思ったより元気って

聞いたから安心してきたんだー

昨日は本当にびつくりしたよー……」

「わりいなー！」

「山本……おまえ」

「……山本氏の怪我はもう大丈夫なのですか？」

「あ……うん！

さつき優も言ったけど……思ったより悪くなくて……

大人しく立ってるぐらいなら大丈夫だって……

そういえばエンマ君……昨日はどこに？」

「……」

炎真君の眉間にシワが出来ちやっただよ

少しフォローしておくべきか……

「あれ？ ツナ君は炎真君を探してたの？」

お昼に私と一緒にいたのにー」

「え!? そうなの!？」

「そうだよー」

これでツナ君は手紙に気付いていないって

気付いてくれればいいけど……

「あの……オレやっぱり継承式

受けることにするよ」

うーん……やっぱり止めれなさそうだね……

「では我々は失礼する

行きましょう エンマ」

「アーデルハイト 先に行つてて

優さん少し向こうで話してもいい？」

ん？なんだろう？

「どうしたの？」

「継承式にきたんだね」

「本当は私も出ないといけないんだけどね

流石に無理だからねー

風早優として招待された方で来たんだ」

「そうなんだ」

「うん♪」

「でも……優さんの時だったら

さつきみたいなのもいるから危ないよ？」

どういふことだろう？

私のこと心配してるみたいだね

なんで？私はボンゴレなのにねー

「大丈夫だよー

私をエスコートしてくれる人は強いからね♪」

部下がいたらただけどね（笑）

「……そう」

「うん♪

炎真君大丈夫？」

「え……？」

「眉間にシワがよつてるよ？」

何か悩み事があれば相談乗るよ？」

「……ありがとう でも大丈夫だよ

僕はみんなのところに行くよ
またね」

うーん……ダメだったか……
「またねー」

「エンマ君となに話してたの？」

あら？今度はツナ君が心配？

「炎真君が風早優の時だったら

さつきみたいなのいるから

危ないから帰った方がいいよって

気をつかってくれたみたいー」

「そうなんだ」

「まあディーノさん達というつもりだから

大丈夫って答えたけどねー」

「そうだね」

「うん♪」

「そろそろ時間だぞっ……」

やはりあいつはこんのか……」

「京子ちゃんのお兄ちゃんは

雲雀先輩のことわかってないですねー

絶対自分から来ますよー」

「そうなのか？」

あ、殺気が……（笑）

「あっヒバリさん!!」

「ほらね♪」

自分から来たでしょー」

それにしても……カツコイイ……／／

スーツ姿だ……／／

「並盛中学の校内で並盛中学の生徒が

傷つけられたんだ 犯人は咬み殺す」
うん。うん。

雲雀先輩はそうだよねー

「……………優」

「なんですか？」

「どうしてここにいるの」

「ツナ君達の晴れ舞台を見にきた

ってことになってます♪」

「はあ……………」

風早優で行動してるからもしもの時は心配なのね
何かあるってわかってるからねー

「大丈夫ですよ

ディーノさんにエスコートしてもらってますので

ディーノさんから離れませんよー」

……………殺気が増えた……………

「こつちに来て」

さつきから……………呼び出しが多いような……………

「えっと、どうしたんですか？」

「……………僕がそばにいることが

出来ないのはわかってるよね？」

「はい」

「……………本当にわかってる？」

「わかってますよー」

「はあ……………」

だからなんで溜息……………

「あの……………雲雀先輩」

「……………なに」

機嫌が悪いな……………

「スーツ……………姿……………かっこいいです……………／／／

「見れなかったら後悔したと思います……／＼／＼」
写真……撮りたかったなあ……

「……………気をつけてよ」

あれ？許してもらえた？

それに機嫌よくなってる？

「はい」

「……………どうしてつけてないの？」

ん？右手を見てる？

あ、指輪のことかな？

「ディーノさんにエスコートしてもらってるんですよ」

つけているとディーノさんから貰ったことになります」

……………また機嫌が悪くなった……

「だからこつちをつけてきました」

ブレスレットを見せたら機嫌が戻った（笑）

「わかった」

そろそろ行きなよ

くれぐれも無茶しないように」

……………みんなに子ども扱いされてる気が……

「わかってますよ」

では行って来ますね？」

「わかった」

軽くみんなに声をかけてから

ディーノさんのところに行こうかな」

継承式 3

わかりやすいところで待っててくれたみたいー
やっぱりディーノさんは気遣いが出来るよね
こういうのを大人って言うんだろうね

私が子ども扱いされるのはしょうがないか……

「ディーノさんー」

「お待たせしましたー」

「問題ないぜ」

……それにしても……

すごい怖そうな人達ばかりだ……（笑）

「ヴェントは来ないらしいぞ」

「本当なのか!？」

噂のレアがこの目で見れると思ったんだが……」

あー大きな声で話してるよ……

そのせいで会場の空気がイヤーな感じになったなー……

「……優」

「どうかしたんですかー?」

大丈夫っていう意味で笑っておこう♪

「……なんでもない」

心配してるよねー

「私は大丈夫ですよ」

「……わかった」

あーそっか

よく考えるとディーノさんの強さは私より知ってるか……

雲雀先輩はこういうのが耳に入るから

一緒にいけないことを何度も確認したんだね

心配してる種類が違ってたんだ……

やっぱり私は自分のことになると考えが甘くなるね……

全然気付いてなかったな……

こんな私でも大事に思ってくれてる人がいるんだ

もつと自分のことをしつかり考えないと……

「優」

「はい？」

「最近、学校はどうだ？」

あ……私に話を振って継承式が始まるまで

出来るだけ聞かせないようにしたいんだ……

すごく嬉しいですって顔に出そう……

ポンポン

うん……

デイーノさんに頭ポンポンされるのは

すごく得した気分になるんだよね（笑）

あ、話題をふってくれたんだ

継承式始まるまで話をしよう♪

「これよりI世の時代より

受け継がれしボンゴレボスの証である小瓶を

ボンゴレIX世よりボンゴレX世へ継承する」

あーそろそろだよね？

「では……継承を」

なんか重々しい雰囲気だよねー

「受け継いでもらうよ X世」

キイイイイ

耳!! いたっ!!!

ドドオツ

うわーすごい煙だ!!

制御してる私じゃこの煙を移動させるのは無理だ

でも、出来るだけ移動しないと！
ぐいっ

「きゃっ！」

いきなり引っ張られた!?

「優!! 大丈夫か？」

あ、デイーノさんか……

耳が痛すぎて何言ってるかわからないけど

多分心配してるんだろうねー

「はい!!」

んーデイーノさんの背中のおすそでも握っておこう

離れない限り私は大丈夫っていう合図になるとしね

そしてデイーノさんの前方を先に煙を撒くべきか……

私が掴んでる分、動きにくいと思うしね！

「来賓を守るぞ!!」

ロマーリオ!!」

あれ？思ったよりはやくおさまったー

って……あれ……？

ツナ君達いないし……

あの事件が起きたのはこの部屋じゃなかったんだ……

こんなに人が多いと風で気配よめないし!!

えーどうしよー!!

「デイーノさん……ツナ君達はどこに……」

「……ツナ達は大丈夫だ」

あーそっかー!!

ツナ君達は9代目の守護者と一緒にいるのを見たからね

そっちは任せることにして先に来賓の方を

なんとかしないとイケないのか!!

デイーノさんは結構大きなマフィアのボスだもん……

立場とかあるんだった……

「あ、あの……」

「優はオレから離れるな

気持ちにはわかるが何があるかわからねえんだ」

……そうですよー

ディーノさんだつてすぐ行きたいのを我慢してるんだ

ここは大人しく一緒にいます……

「7属性の炎で守るなど

『罪』の場所を教えているようなもの」

なんで……

「エンマ……君………?」

どうして……?

ここにいるの……?

「『罪』は返してもらおうよ

この血は僕らシモンファミリーのものだから」

……返してもらおう……?

「何を……言ってるの?」

オレにわかるように言つてよ!

「聞いている通り『罪』を手に入れるために

我々はこの継承式へ来た」

「……ま……まさか………」

山本をやつたのって……」

「そうだよ 僕らだよ

ヴェントがレアって情報を流したのも僕らだよ」

「!!」

……なんで……?

オレ達は……友達じゃなかったの……?

「どうしても必要だったんだ

力を取り戻してボンゴレに復讐するために」

復讐のため……………？

「そ……………そんな……………わからない……………」

なんで……………なんでだ!! お前達が……………!

山本とヴェントを!!」

「うん

そうだよ ツナ君」

優が苦しんでるってしってたのに……………!!

「……………!! なぜだ!!

なぜあんなことを!!」

「彼がボンゴレの君の守護者であることにかわりはないんだ

当然の報いだ」

「なにつ」

「本来ならば継承式まで生かしておくつもりだった

我々にとつて『罪』を奪うまでは

敵と悟られることが優先だったのだからな

だが我々の正体を知ったからには消すのみだ

ヴェントのいった通りギーグファミリーは

知ってはいけないことを知ったからだ」

「なんだと!?

ギーグファミリーをやったのも

こいつらだったのか!!」

そ、そんな……………優が言ってた通りだったんだ……………

継承式 4

話を聞いてもわからない

だってボンゴレI世は裏切るような男じゃない
シモンリングに血が……炎の量が……!!

「来るぞ!!」

獄寺君のSYSTEMA C・A・Iが……

もう少し威力が強ければ危なかった……

「フフツ 軟弱だな ボンゴレの炎は」

「なに!？」

「なぜ初代ボンゴレが

我々シモンをこの世から抹殺したかわかるか？

それは我々の先祖が持っていた

ボンゴレに対抗しうる力を恐れたからだ

それこそが大空の風属性以外の

7属性に対をなす大地の7属性!!」

「なっ」

「大地の7属性!？」

「この力ゆえシモンはボンゴレの

兄弟ファミリーたりえた

そしてこの力ゆえボンゴレに恐れられ裏切られた

この炎はシモンの誇りを取り戻すための炎」

「おい……ヴェントの情報を流したのは……」

「そうだ

風属性はやっかいで

ボンゴレの力に対抗できないからだ」

「そんなことのためにヴェントの情報を!？」

対の属性がなかったから!？」

「そうだよ

優さんにヴェントで行動してもらおうと

計画に支障が出る可能性が高いからね」

「お前は間違ってる」

お前達のつらい過去も怒りの理由もわかった
だが人を傷つけることは誇りを取り戻すことじゃない!!
お前達のせいでこんなにも早く優は

マフィアに狙われることになったんだ!!」

「優さんは許してくれるよ」

君達とは違うからね」

「どういうことだ!!」

「アーデルハイトさがっていて僕一人で充分だ
ツナ君と守護者を潰すのは」

やっと来れたー!!

「ツナ!!」

「うゝお おい!!」

そこまでだあ!!」

「みんな!?

え……炎真君……?」

……うん

私って本当にウソが上手だよね……

「外野はひっこんでろ」

「アーデルハイト!!」

「わかってる」

あらー……私以外……みんな殺されそうだ……

でもなんで私は大丈夫なの?

「ディーノさん!?!」

「優、逃げろ!」

ディーノさん……

この状況でも私の心配してくれるんだ……

「優さん……怖い思いさせてごめん……」

「炎真君……?」

ん? 炎真君は私がヴェントって知ってるよね?
なんでそんなこと言ったの?

ヴェントはこれぐらいで怖がるってイメージじゃないよね?
そりゃ内心は怖いと思いつながら戦ったりするけど……

でもそれは炎真君は知らないし……

まあ、炎真君のファミリーがいるから

一応この状況を怖がつてるフリはしてるけど……

うーん……炎真君の様子を見ると……

ファミリーのみんなに私の正体を話してないの?

つまり……私はフリを続行するべきだよな?

でもなんでだろ……わけわからなくなってきた……

「帰ろう アーデルハイト

簡単に殺しちやいそうだよ

一瞬で殺してしまつたらシモンが背負わされた

同じ苦しみを味わわせられない」

「そうだな

息の寝を止めることなどいつでもできる

奴らに味わわせるべきは生き地獄」

「鈴木さん……?」

うん。続行があつてるっぽいよね??

「クロームちゃんも連れて行くよ

デートする約束してるからねくん♪」

……本当に続行でいいのか?

クロームちゃんが連れて行かれそうになつてるのに……

「クローム!!」

「ツナ君は自分の心配をした方がいいよ」

「がっ」

うわ! いたそう!

「ツナ君!」

あ、ツナ君のリングが……

リングが壊れたし私は動いていいよね……？

それとも私は狙われてないしこのまま続けるべき……？

「おいツナ!! しっかりしろ!!」

「きや!!」

いきなり浮いたよ!!

これは私の力じゃない……炎真君の力だ!

「優!?!」

デイーノさん助けてー!!

制御してる状態では負けるよー!!

やっぱりリング出しとけばよかったー!!

ガシッ

壁とかには叩きつけられなかったけど

炎真君に捕まっちゃったよ……

えっと……私はどうすればいいの?

わけわかんないよー!!

「え、炎真君!?!」

「ごめん……僕のせいで

ヴェントがレアってばれたんだ」

あれ? 小さな声で言ったよね……

でもシモンファミリーには絶対聞こえてるよね?

「それは……炎真君だったらいいって言ったよ?

だって私と炎真君は友達だもん

でも……これは……?」

どういう状況!?

「やっぱり優さんは許してくれた

優さんはボンゴレを忘れてシモンに入ってたね」

「へ……?」

「優さんはボンゴレにいるべき人じゃないよ」

えええええ!?

どういう原作になった!?

ずっと小さな声で話しかけられてるけど

もう我慢できない！言いたいこと言わないと!!

「と、とりあえず離して!!」

私よくわかんないし!!」

いや……まじで……

「それは出来ない」

「どうして!?!」

「ここでは話せない」

「ここでは?..ってどういうこと!?!」

「……ごめん」

ガッ

うわ……今のは入った……

ごめんってそういう意味か……

あ……視界が……でもこれだけは……

「……連れて行くつもり?..」

「友達が良くない人達と一緒にいる時

その人達から離れるように手助けする……

そう教えてくれたのはアーデルハイトだ」

「……そうね

わかったわ」

「行こう」

「今日この日がボンゴレ終焉のはじまり

そして新生シモンの門出だ

帰りましょう 聖地へ」

「優!!!」

継承式 その後 1

「恭弥！ 大丈夫か!!」

「寄らないで 平気だよ

プライド以外はね」

……こんな状態でもオレ達の手は借りないつもりか……

いや……違うな……1人だけいるんだ

それなのに……

「恭弥……すまん……」

「なに

「オレがついていたのに……」

一緒にいたほうが安全と思っただのが間違いだった……

オレのミスだ……

「……どういふこと」

「……これ……」

優のブレスレット……

恭弥にもらったから大事にしてると言っていたのに

最後の力を使って落としていったんだ……

未来の記憶を見た……カギと同じ意味だろうな……

「……連れて行かれたんだね」

「……ああ」

どこまでこいつらに話すべきか……

まず最低限の内容は話さねーとな

「ツナ」

「……うん……大丈夫……」

……エンマ……手も足も出なかった」

「シモンの連中……」

まさか……こんなことを企んでいたとは……」

「ちぎしよー」

あいつら今まで騙してやがったのか」

「……それに……クロームがさらわれた!!」

「マジスカ!?!」

「それだけじゃねえぞ」

「どういうこと!?! リボーン!!」

「ヴェントもだ」

「本当ツスカ!?!」

ヒバリはディーノから聞いてたみてえだな

「ああ

ヴェントはしばらくは大丈夫だろう」

「「え!?!」」

「シモンはヴェントに攻撃しなかったからな」

「どういうことスカ!!」

ヴェントはシモンと繋がってたんスカ!?!」

「獄寺、落ち着け

あいつはヴェントとして活動していない時に

さらわれたから大丈夫とリボーンはいいいたいんだろ?」

なるほどな

ディーノは知らねえからそう思うのも無理はねーな

友達と言った一般人の優に何かをするとは思えないからな

「ちげえぞ」

「どういうことだ?」

「エンマにはヴェントが自ら正体をばらしたんだ

ツナ、お前も聞いただろ?」

「う、うん……」

「なるほど……」

あの時はシモンがヴェントの正体を知らないから

そういう態度をとったとオレは思ったんだ

だが、知っていると話が違ってくる……」

「ああ

それなのにお前達がやられた後に

ヴェントの前でエンマは知らないフリをした」

「なんでなのだ？」

「エンマはオレ達、9代目、9代目の守護者は……」

ヴェントの正体を知っていると判断して名前を出した

だが、ヴェントがここに来た時はヴァリアーも一緒だった

恐らく正体を知っていると確信できなかったんだろう」

「でもあの時のヴェントはよくわかってなかった

抵抗すれば気絶させられたのはお前も見ただろ？」

デイーノはシモンと繋がってないと証明したいみてえだが

それでは少し弱いぞ

「あいつに……何度も騙されてるだろうが……」

優の今までの行動があるからな……

「獄寺君、ヴェントは違うよ」

やっぱりツナはそう思うか……

了平はまだ判断出来てねえな

ヒバリは……決まってるな

「オレもツナの意見に賛成だぞ

シモンとヴェントが繋がっていた場合

ヴァリアーのことも話しているはずだぞ

継承式に出席する危険な相手を話さないわけがない

オレ達が動きを封じられた時には

もう演技する必要はなくなるんだ

それにヴェントはオレ達を騙すことがあるが

1度もツナを裏切ったことはねえんだ」

もし先にシモンの計画を知った場合は

優は継承式に参加したいとは言わねえ

例え、シモンが関係していることを

隠すために参加したとしても

ここには姿を出さないようにしたはずだぞ

優にとって大事な人達が争うことになれば

手は出さないとオレ達の前で宣言してる
状況によつては姿を出すと手を出すことになるからな
優はオレ達を騙したりするが守るところはわかっている

「……そうですね」

「あいつはオレ達を裏切るわけねーよな……」

獄寺も納得したな

優はあの状況で少し混乱はしたはずだが

シモンが山本をやったとすぐ気付くはずだ

だが、優が行動する前にエンマが言った言葉で

そのまま演技をすることを選んだんだ

オレ達が人質に取られてるのもあつたと思うしな

「赤ん坊、本当に大丈夫なの？」

珍しくオレに聞いてきたな……

それもそうだな……

ヒバリは優がさらわれたところを見ていない

判断出来る材料が少なすぎるからな

それにオレが言った言葉を気にしているんだろう

「シモンはオレ達を攻撃をしかけようとしたが

ヴェントにはしないと決めていた動きだった

対の属性がないヴェントはシモンにとっては

脅威になる可能性があるのにな」

「……………」

やはり……全てを話すべきだな……

ヒバリはオレが隠していることに気付いている

全てを話して……今、止めたほうがいい

隠してもヒバリは行動する可能性が高い

ボンゴリングがぶつ壊されて勝ち目がねー状況でもだ

そうなるも優は無茶する可能性が出てくる……

「……それにアーデルハイトの様子だと

ヴェントを連れて行くのは想定外みてえだぞ」

「想定外……？」

「ああ

シモンの連中を説得させるために

エンマは友達が良い人達と一緒にいる時

その人達から離れるように手助けすると言ったんだ」

「それって……」

「ああ

良くない友達は何ンゴレのツナ達のことだろう

ヴェントも何ンゴレなのにな」

「極限さつきからわからんぞー!!」

「エンマはオレ達を裏切るつもりでいたのに

ヴェントだけは裏切ることが出来なくなったんだ」

「どうしてなのだ?」

「それはオレにはわからねえ

正直オレからすれば

ツナとヴェントの違いはそこまでなかったはずだぞ

会っていた時間はツナの方が多かったしな」

「そうなのか?」

デイーノはしらねえからな……

ツナがうなずいたから信じただろう

「だが、これだけはわかるぞ

エンマの言葉がウソじゃねえとすると

ヴェントは友達だから連れて行ったんだ

そしてクロームは人質として連れて行ったんだ」

「「……………」」

やはりここが1番動揺したか……

だが本当にわからねーといけないのはこれじゃねーぞ

「それにシモンは昨日ヴェントのことを聞いていた

もしかすると継承式にヴェントがいると知っていたら

実行しなかったかもしれないねえぞ」

その時は意識が戻っていなかったからな……

ヴェントは参加しないと思っただろう

「そういえば……継承式が始まる前に……」

エンマに……怖い人達もいるから

帰ったほうがいいって言われたって言った……」

「そうなのか？」

「う、うん……」

これで更にやべーことがわかったな

「恭弥！ 待て！」

「え!？」

（ヒバリさん……どこに……）」

「恭弥！ 落ち着け！」

ヴェントはうまくやるはずだ!!」

「そうじゃ！」

今シモンファミリーをわしの守護者が尾行している

治療に専念しなさい」

「9代目 大変です！」

尾行をしていたコヨーテ・ヌガーが

シモンに感づかれ……返り討ちに遭いました!!」

「なに……!!」

「おい！ 恭弥！」

「……どきなよ 赤ん坊」

気付いたのは9代目とヒバリとディーノか……

説得して止めねえとな

継承式 その後 2

「ヒバリもわかってるだろう？」

今のヒバリが行けば

ヴェントが死ぬ可能性が高くなるぞ」

やはり頭ではわかっていたな

最初に動いた時はまだ冷静だったはずだからな

だが9代目の守護者が返り討ちにあつたと聞けば

嫌な想像がついたんだろう……

「気絶された時に連れて行かれることを

考えてあれを落としたんだ

ヒバリがその意味を忘れてどうするんだ？」

優はリングが壊れたことに気付いてるはずだ

ヒバリが無茶して追いかけないという意味で

わざと置いていった可能性のほうが高い

「冷静に考えればヴェントは必ず気付く

そして臨機応変に対応できる奴だ」

「……赤ん坊はどれぐらい大丈夫と思う？」

……また珍しくオレに聞いたな

自分でも冷静じゃなかったと思っただろう

もう大丈夫だな

「オレよりヒバリの方がわかってるだろう？」

優は慎重な性格だからな

元々下手な行動はしない可能性が高い

そのかわり優を助けるために

今、無茶をしてヒバリに何かあつた場合は話が違う

冷静に考えることが出来なくなつて

気付かなくなる可能性が高い

つまり……優は死ぬ……

それに動いてばれた時に

優の性格だとシモンを躊躇なく倒せるか……

そしてそれが難しいことを優が1番わかっている
オレ達が動くまでは下手な行動はしないでだろう……

恭弥のことはリボーンに任せて正解だったな……
今回はオレの責任だ

オレが恭弥を説得できる可能性が低かったからな……

「あの……ディーノさん……」

どうしたんですか……?」

ここはオレが説明するべきか……

「……ヴェントの行動次第で

自分の危険度がかわるってことだ」

「え……?」

「つまりヴェントがツナ達のために行動して

それがシモンの奴らに気付かれるとやばいんだ」

「それは当たり前だろうが」

もつとはつきり言うべきか……

「あつちにはクローム髑髏もいるだろ

人質はクローム髑髏が1人いれば十分なんだ

ヴェントはいらないんだ」

「極限なんでそうなるのだ?」

クローム髑髏の可能性もあるのではないか?」

「さつきりボーンが言っただろ?」

対の属性のいないヴェントはシモンにとって脅威って……

どっちを人質にするかは決まっていると云っていい」

「「なっ!?!」」

「だからリボーンはしばらくは大丈夫と言ったんだ」

しばらくと言った意味は

最初はヴェントとばれるまでと思ったが……

詳しく話を聞いてみれば違う意味だったんだ

「で、でも……ヴェントには攻撃しなかったって……」

確かにそれだけだと

大丈夫な可能性も高かったんだが……

「ツナ、恭弥が動く前に

自分がなんて言ったか覚えてるか？」

「えーっと……エンマがヴェントに

帰ったほうがいいって言った……でした？」

「それが問題なんだ」

「え!？」

「さっさと見えよ！ 跳ね馬!」

「あいつらはヴェントが帰らず会場にいることを

知っていたんだろ？」

「は、はい」

「それなのにあいつらは行動を起こしたんだ

ヴェントに何かあるかも知れないのにな」

パニックになった奴もいたんだ

体格が小さい優が大人に囲まれているんだ

怪我する可能性が高い

そして相手はマフィアなんだ

優は行動せずに怪我をする方を選ぶぜ……

「で、でも……ディーノさんというし……」

オレと一緒にいることを

もしシモンに伝えてたとしても全く意味はない

行動したことが問題なんだ

「ボンゴレに復讐するつもり奴が

ボンゴレに招待されたオレを信じて行動するか？」

「そ、それは……」

「エンマとヴェントの繋がりには

そこまで強くないと思ったほうがいい

エンマはヴェントとシモンを選ぶとすればシモンを選ぶ

少しでもあいつらが疑う行動をするだけでやばいんだ」

「極限までではないか!!」

「ああ

だが、ヴェントはうまくやれる可能性が高い」

「でも……」

「ツナのファミリーの中で誰かが

もし潜入捜査をするならヴェントが1番向いている

ヴェントは冷静に自分の状況がわかればなんとかなるはずだ」

「……あいつは大丈夫と思えることはいいんだよ……う？」

「普通にあつちにいる姿しか想像できねえ……」

「……獄寺君」

「ヴァリアーという前例があるしな……」

「フラツと馴染んでいる姿が想像できるぜ……」

「その代わり留まるイメージがあまり出来ないんだよな

まつそういう意味で考えると

「ツナと恭弥はよく優を捕まえてるぜ……」

「オレのところにも来ると思うが絶対すぐどこか行くぜ……」

「今日、話した内容がツナと恭弥の話が大半だったしな

「ツナと恭弥がいなかった場合どこにいるのか……」

「リングが直るって!？」

「ただしじゃ……」

「元の姿に戻ってシモンに再び挑んだところで

「ボコボコにされるのが関の山じゃぞ」

「!!」

「そりゃあリングの格が違うからのう

「風のボンゴレリングは問題ないがのう」

「どうということですか!？」

「気付かなかったのか？」

風のボンゴレリングは

他のボンゴレリングとは形が違うはずじゃぞ」

「えーつと……どうだったっけ？」

優は普段からリングをつけてないから

よく覚えてないんだよな……

「違うかったぞ」

「リボン本当!？」

「ああ」

「なんで違うんですか？」

「炎の最高出力を抑えるために

リングに2つにわけた時に問題が起きてのう」

「問題？」

「封印出来なくなってしまったんじゃ」

「そういえば……封印してたって……」

「そうじゃ

わけたことによってリングの力が弱まったのう

選ばれし者の血だけじゃ封印できなくてのう

ボンゴレI世の血『罰』と選ばれし者の血を

混ぜ合わせて浴びて封印したからのう

他のリングと格が違うんじゃぞ」

「ボンゴレI世の血と選ばれし者の血……？」

ヴェントの血!?! どういうことですか!?!」

なんで優の血が!?!

「はてのお

昔のことは忘れたわい」

「……………」

「シモンリングはリング製作に携わった

初代シモンの血『罪』を浴びて

何倍にも力が強化増幅しておる——」

逃亡不可 1

「ここは……どこ……？」

「よかった……」

「炎真君……？」

「1日中……気絶するとは思わなかったから……」

心配かけちゃったみたい……

怪我してた来賓の人達にちよつとだけ体力をあげたから
ずっと寝てたのかも……

「あ……ごめんね……」

ってそうだった!!気絶させられたんだ!!

リング!!

「優さんのボンゴレリングはここだよ」

あらーミントまでとられちゃったよ……

「あの……どうなってるの……？」

いや……まじで……

とりあえず……話を聞いたけど……

うん……原作通りだと思う……

ボンゴレがシモンを裏切ったって言ったし……

「炎真君……」

「どうしたの？」

「私は憎きボンゴレだよ？」

「優さんはボンゴレにいるべき人じゃないよ

シモンファミリーに入ってもらおうよ」

つまりー

あの電話の呼び出しで私だけ信じたってこと？

ツナ君と一緒に私は怖い人じゃないしね

「エンマー！」

あ、鈴木さんだ

んーなんか話してるね

「ツナ君達が来たみたいだよ」

「え!?!」

「優さんはここにいてね」

「ちよつと待って!!」

って……行っちゃった……

ん？今……普通に逃げれるんじゃないの？

私を放置しちゃダメじゃないの……？

さっきの話を聞いただけで

私がボンゴレに嫌気がさすって思ってるのか？

……それは普通無理だよ……？

だって……出会ってからの今までのことがあるんだし……

え？もしかして私って試されたりしてる？

ここで私が逃げようとするれば殺されたりしてー（笑）

……

まじでありえそう

いや、だって私の能力を考えると

空から逃げれるのは普通にわかると思うし……

炎真君は確か重力を操れたよね？

多分……今の私より力が強いと思う……

制御といていい勝負と思うけど5分たつと終わりだし……

5分で逃げれる保障はないよね？

たとえ逃げれてもどこかの海の上で熱が出て落ちて死ぬかも……

うわー……私ってピンチ……？

よく考えるとクロームちゃんがいるし

私って人質の価値がないんじゃない……

あ、でもツナ君達が来てるなら近くに船があるんじゃない……

うん。私がそこに逃げたとばれると沈まされそうだ

……大人しくしないとダメだね

何をしても嫌な予感しかしないもん……
つてことで、方針は決まったねー

炎真君が帰ってくるまで布団から出ない！（笑）
で、布団の中に入って出来ることは……持ち物チエック！
とられたのはリングとミントだけかな？

ゴソゴソ……

お！いいものがあるじゃん！

ケイタイだ！！

ふっふっふ。このケイタイをなめちやいけないよ
とらなかつたことを後悔するんだね

まずはと……

『反応なし』

お！良かった

盗聴器は私の周りにはないねー

ケイタイに入っていれば

いつでもチエックできるから便利だよねー

未来の私は多分……ヴェントの内容を話すことも

普段から気をつかってたんだろうね

そして！！おおー！やっぱり！

風早優のケイタイは無理だけどこっちは繋がる！！

流石神様だね♪

まあ電話する前に一度布団から出よう……

監視カメラはあるかわからないから

潜っているいろいろしてたけど布団に熱がこもって……（笑）

うーん……出るかなー……

やった！出た！！

「雲雀先輩！！」

『……優？』

あ……心配している声だ……

元気な声を出して心配を減らさないと……

「はー」

『……無事みたいだね』

逃げれたの?』

う……まだ心配かけることになります……

「……すみません」

下手な行動は出来ないと判断しました……」

『僕も賛成だよ』

おお!雲雀先輩も同じ意見だったんだ!!

『ケイタイ……使えたんだね』

あ、私の現在位置とか調べてたのかもねー

「普通のケイタイでは電波が届かないみたいですよ

でもヴェントのケイタイは特別製ですからね

多分連絡しようにもこつちからしか無理ですよ

『わかった』

リングとミントは持ってないよね?』

あ、私が逃亡は無理と判断した理由がわかってるね

普通は没収されると思うし……

「はい」

マールリングを家に置いてくるのは

間違いだったと思いましたが……」

『それでいいと思うよ』

まあ何かあるかわからない状況で

普通は持っていかないよね……

それにこつそり持っても見つかって

結局奪われてたかもしれないしねー

「黙っていたんですけど……」

私のリングはヒビが入るだけでも終わりですよ

『………わかった』

「はい……」

『でも優のリングは特別って言ってたよ

リングの格が違うみたいだよ』

「みたいですよー」

なんか血を浴びてるみたいですよ」

『……知ってたんだね』

……また言っちゃった

というところで……説明……

まあ説明と言ってもたまにある人の声が

聞こえて聞いたとしか説明できないけどね

それに私も誰かわからないし知っても

多分教えることは出来ないと思うし……

普通こんなこと説明すれば誰も信用してくれないけど

雲雀先輩は「わかった」ってすごいよねー

聞いたときに教えなかったことには怒ってるけど……

そして雲雀先輩のリングも血を浴びせたことを教えてもらった

ここは普通に原作通り進んでるみたい

で、正直なんで血を浴びてるかわからないって言ったら

2つにわけたせいだったんだ……

未来の時にI世に聞いたときに思ったけど

最初から封印したものを渡せば問題ないのに……

なんで封印しろって言って渡したんだ？

あの人はこうなることをわかっていたのか？

いや、I世の性格は多分ツナ君と似てると思うし

最初から封印したものは預かってくれないと思ったのかも……

うん、それが1番ありえそうだね

次の問題は血を浴びせたのに

原作みたいになんでゴツゴツした塊にならないのだ？

そこは私の血が関係しているのかなあー？

その前になんで私の血があるんだ？

雲雀先輩と考えてもわからないから保留の方向になった

先にこの状況をなんとかするべきって感じで……

『少し待ってて』

「はい」

もう連絡しませんので気をつけてください」

そろそろ帰って来ると思うし

私はこれから一人で行動できるとは思えないもん……

『優もね』

「はい

では……また」

『またね』

………大変だ

ひと段落したからか……ふと思った……

お腹減ったよー！！

炎真君早く帰ってきてよー（泣）

逃亡不可 2

この島に優とクロームが……

「待ってたよ ツナ君」

「エンマ!!」

「君達で来たのは正解だと思うよ」

大勢で来ればボンゴレ側の夥しい数の

死体が積み上げられるところになっただろうからね」

「くっあいつら……」

優の姿が見えない……クロームも……

「優とクロームは無事なのか!!」

「優さんはシモンファミリーの一員だよ」

ボンゴレリングは僕に渡してくれたよ」

よかった……

優はまだ大丈夫だ……

「どういうことだ!?!」

「ボンゴレに嫌気がさしたんだ」

優はそんなことしない……

エンマがウソをついているんだ……

「クロームちゃんはそりやあもう天使のような

かわい〜い顔してオレのベットでオネンエ中♪」

「なっ」

お腹減るといい案が浮かばないんだよねー

炎真君まだかなー

お、誰か来た!!

「ハ〜イ 優ちゃん♪」

うわー黒幕だ…… (笑)

「えっと……加藤さんでした？」

「ジェリーって呼んでほしいんだよねー」

まあいいか……

「ジェリーさん

どうかしたんですか？」

「シモンに入った優ちゃんを見に来たんだよねー」

「そうですかー」

「オレちん 可愛い乙女は大歓迎♪」

私こういうタイプ苦手……

まじで頭は大丈夫か聞きたくなる

違う意味で大丈夫じゃないのはわかってるけどね

「また後でね〜♪」

もう結構です……

とりあえず見に来ただけなのかな？

よくわからないね……

「優さん」

「炎真君!!」

「……どうしたの？」

いや、怪しまなくていいよ

まあものすごい勢いで声かけちゃったしね

「……お腹すいたの」

「……ぷっ そうだね」

……すみません

食い意地はって……

まあ少し炎真君の眉間の皺が緩んだからいいか……

鈴木さんにご飯食べてる間も疑うような視線を
ずっと向けられるのはしょうがないって理解できる

だって私はボンゴレの人間だしね

本当にシモンについてるか怪しいと思うんだろぅね
それに食べながらさつき決まった戦いを聞いても

「そうですか」としか言わなかったしねー

だからそれはいいんだ……でも言いたいことがある

「……鈴木さん」

「……何かしら？」

「……出来ないことってあるの……？」

いや、だから怪しい目で見ないでよ

というわけでちよつと力説したらひかれた……

私の中では気になるところはそこなのに……！！

だって美人！スタイル抜群！料理ができる！

気遣い出来る！リーダーシップあり！強い！！

憧れたくなるじゃん……特にスタイル！！

何を普段しているんだろう……

「……あなたは何を考えてるの？」

「何って？」

「全てよ」

おお！凛々しいお姉さま！！って感じ！！

あ、違うことを考えてたのがばれたみたい（笑）

「簡単に説明すると……」

今より小さい時は私の中の世界は

小さな家にとらわれていたんです」

私の中では預けられた家で

顔を伺って生きるのが全てだったしね

と言っても高学年あがる時に

小さなアパートに放り出されたけどね

「解放されてからは好きな場所に行くようになりました

だから周りから見ればフラフラしてるんでしょぅね

よく言われました 何を考えているかわからないと

あ！ちなみに私はウソつきですよ♪」

向こうの世界に未練がなかったのは
親しくしていた人がいなかったからだろうね

ツナ君と雲雀先輩に表面上の付き合いが
出来ないとは私だって思わなかったしー

ツナ君なんて初めて話した日にやられたし（笑）

「……答えになってない」

「炎真君の近くは好きな場所ってことです
でもちよつと今は居心地が悪いかな？」

「……そうは見えないわ」

「多分私と鈴木さんが思っている

居心地が悪いの意味が違いますよ？」

敵陣にいて殺されそうで居心地が悪いはずなのに
平然としているようにしか見えないっていう意味と思うしね
まあずっとバクバクとご飯を食べていれば
そう思うのはしょうがないと思うけどねー

「はやく説明しなさい」

「私はフラフラしているって言ったでしょ？」

来たときに居心地が悪くなっていると困るんですよ
今の炎真君の近くは居心地が悪くて

なんとか出来ないかなーと思ってここにあります」

「それはボンゴレとの仲を持つとうとしているのか？」

ビミョーに殺気もれてるねー

わざと少し出してるのかな？

こっちの反応を見たいんだろうねー

「ちゃんと話を聞いてます？」

私は炎真君の話をしているんですよ？

いつボンゴレの話をしました？」

「……どういう意味かしら」

「炎真君の眉間の皺がよってるのを

何とかできないかなーと思ってます

その原因をなくせば居心地がよくなるかなって」

「ふっ 原因はボンゴレだ」

「あ、すみません」

そこは自分で考えます」

だから殺気をもれないでほしいな」

「人の意見を聞くの大事ですけど」

1度自分で考えて決めたいんですよ

私は客観的に見る自信があるんでね」

「……私はあなたのことを信用しない」

「それでいいと思います」

何を驚いてるんですか……

鈴木さんは客観的に見て私を信用しないと思ったんでしょ？

私を生かしているのはエンマ君の意見としますし」

「……そうね」

「信用出来ないと思いますし」

一緒にいませよー!!

鈴木さんのスタイルの秘訣がわかるかかもしれませんし！」

あ、またちよつとひいた(笑)

「変なことはしませんって……」

例えば鈴木さんがストレッチとかしていれば

覚えようっていう意味ですよ

私だって一応女の子ですから

相手の嫌がることはわかりますよ？」

「……わかったわ」

わーい♪って喜ぶけど

まあ最初からそうなるって想像ついたけどね

炎真君が女の子のずつと見えるわけないし

クロームちゃんと違って私は人質のように扱えない

つまり男の子が私を見るっていうのはないんだよねー

でも目をはなすのは危険な存在。

しとぴっちゃん私が私をしっかり見るとは思えないしね

つまり鈴木さんしかありえない

その証拠にご飯を届けて説明しに来たのが鈴木さんだった
私が提案しなくても鈴木さんが見るのは決定なんだよねー
それにしても結構危険な橋を渡った気がするけど
鈴木さんが頭がいいと思っただから話したんだよね
他のメンバーだったら言わなかっただろうなー

制服

ふうー食べた食べたって感じで
ゆっくりしてるように見せかけて……

神様ー！

『なんだ？』

よかったー

『どうしたんだ？』

いやあ確か原作では骸君の力は
ここに来れなかった気がするから

神様は大丈夫だよな？って思っつて一応確認したのー

『当たり前だろ』

俺は優についてるからな』

そうだね♪

『それにしても良くない状況だな』

まあねー

さっきの雰囲気では下手なことをしなければ
すぐ殺されそうにないのはわかったのはいいんだけどー
リングが心配で……

『ああ』

壊れないと思うが……不安だな』

うん……

これで何かあつたらつて考えると怖いよーー
『匣兵器はとられてないが……意味ないしな……

それに優の状況も良くないし

護身用として武器があればましたのにな……』

あ、心配で見てたんだねー

そうなんだよねー

リングがないと意味がない（笑）

『ああ』

コンパクトにしとけばよかったか……』

ううん

神様は悪くないよ

捕まった私が悪いんだよ

あの時にリングを出しとけばよかった……

『でもあの状況じゃ無理だろ』

他のマフィアが入ってくる可能性がある状況で

リングをつけて見られたら優はアウトだったからな

まあ優は原作知識で誰も来ないと

わかっていたから悩んだんだろ?』

そうなんだよね……

知らなかったらあれが正解かなって……

『オレは正解だと思っぞ』

それにヒバリも何も言わなかっただろ?』

それもそうだねー

あそこでリングを出したって言えば

どうしてそういう行動したのか説明させられて

感情に流されたっていいわけすれば……

………考えるのをやめよう

『それがいいと思っぞー』

………うん

「風早さん」

ん? 鈴木さん? 何だろ?

え………まさか………これって………

………私は正直死にたくはない

でも半殺しにされるなら死んだほうがましじゃ……

『………こんなことで半殺しと思っぞよ』

こんなことではない!!

私には重要なことだよ!! シモンの制服だよ!?

着ないと殺されそうなのはわかってる……

全てはこんなにもスカートが短いのが悪いんだ!!

『そういう服装を着れば』

鈴木アーデルハイトみたいに大人っぽい

女性になるんじゃないのか?』

……なるかな?

『ああ!』

頑張ってきてみるよ!

じゃあね! 神様!!

『(……単純な奴)』

うー……短いよー!!

すごいスースーするし……動けば見えそう……

なんで鈴木さんはこんな服で雲雀先輩と戦ったんだ……

気にしないのが大人の女の人なのか……?

……それは違うか……

うう……脱ぎたいよー!!

あーこれをみんなに見られるのか……

……死にたい(泣)

ん? おおー! 私にも映像が流れた!!

よかったー

なんか関係ないって感じで

流れなかつたらショックだったよ……(笑)

確か……原作通りだとー

京子ちゃんのお兄ちゃんと青葉さんが戦ったんだよね?

え……つまり……知らない間に終わったんだね……

戦つてるとか教えてよね……

それにしても……ボンゴレイ世と初代シモンって

ツナ君と炎真君にそっくりだよねー

というか……似すぎだよ……(笑)

「おい なーんだ

みんなが集まっちゃって

お♪ 優ちゃん制服似合ってるね♪」

ひいひい!!

あごに手をかけられた!! (泣)

「ジェリー!!」

鈴木さんの後ろに隠れなければ!!

ふう……逃げれた……

この人はDrシヤマルと同じで

近づいたらダメなタイプだったのね!!

「かわいいなく

隠れちゃって♪」

うわー……本当に苦手なタイプだ……

だからほめられても全く嬉しくない……

「ジェリー!!」

話を戻そう……

「とにかく……どうしたんですか……?」

いや、知ってるけどね

ボロが出るかもしれないから早く説明してほしいんだよね

「紅葉と笹川了平と引き分けて

復讐者の牢獄へ連れていかれたよ」

「その後過去の初代シモンと

ボンゴレの記憶らしきものが我々全員の脳裏をよぎった

お前もみたはずだ」

炎真君大丈夫かな……

さらに眉間にシワをよせてるし……

「あーそれなら見た見た知ってるよ

だから何? って感じだけどな

戦況とかキョーミねーし

カンケーねーや どーせ勝つんだろ?

話ってそんだけ？ かーったりーしオレちん戻るわ
優ちちゃんも一緒に行こうーぜ」

「……遠慮しときます」

スライディング土下座をする勢いで

お断りしたいぐらい遠慮します

「およう？ あーまた会いにいくわ

オレちん戻るわ」

いや……いいです……

「待ちなさい ジェリー!!」

お前にはシモンの守護者として

ボンゴレの戦いを見届ける義務がある!!」

「るっせーな」

ガッ

なんつー奴だ!!

女の人の顔を掴むなんて!!

「昔っから縛られんの

嫌いだって言ってたんだろ？」

「ジェリーさん!! ひどいです!!」

女の人にそんなことするなんて!!」

「怒った優ちちゃんもかわいいね」

離すよ♪」

まじで苦手なタイプだよ……

「くっ」

あれ……？ 鈴木さんつてもしかして……

……よくどこがいいのか聞いて聞かれて

私には優しいからって答えても

みんな理解してもらえないことが多いけど

今みんなの気持ちがわかった気がする……

たとえば、この人が私に優しくても……

普段からこういう態度とつてると好きになれない……

全く鈴木さんの気持ちを理解できない

やっぱり相性っていうものがあるんだねー

「心配ねーよ

ヤバイ時には助けにくっから

打倒ボンゴレを忘れたことはねーし」

「ジェリー……」

よし！どこかにいった!!

まあそれより……

「炎真君……大丈夫……？」

「大丈夫だよ」

全然大丈夫に見えないんだけど……

「手、貸して？」

あ、出してくれたー

「どうしたの？」

「んー手を握ってたら

相手の体温がわかって安心するかな？ってー」

「……ありがとう」

これでちよつとは楽になればいいんだけど……

溜めこみすぎだよねー……

逃走不可 3

……私だって今の自分の立場はわかるよ？
また記憶が届いちやったよ……

つまり知らない間にランボ君と大山さんが戦ってた
少しは信用して教えてほしい……悲しすぎる……

まあ私が普通に寝てたのせいかもしれないけど

それは寝ないと鈴木さんが寝れないと思っただからだし……
ってか、ぐーすかと寝れる私の凶太さが悪いのか？

うーん……全然原作に絡んでなくて

この世界に来たことを思い出したけど……

凶太さはかわったことがわかった(笑)

ちよつと泣きそうになるのは気のせいか……？

「グッモーニン♪」

「らうじやられたってー？」

全く人がビミョーに落ち込んでる時に

最悪な登場の仕方しないでよね

さらにテンションが下がる

「ジェリー!!」

何だその態度は!!」

鈴木さんに同感です

つい首を縦に振ってしまおうよ

「……らうじはよく戦ってくれた……」

うーん……炎真君をどうにかしないと……

私に出来るかはわからないけど……

「ワリーワリー 気ー悪くすんなって

しっかし復讐者の持つてくる

初代達の過去ってウソくせーよなあ」

だからこれ以上炎真君を悩ますことを言わないでほしい

今の状況では私は下手な発言が出来ないしなー……

「まっ とはいえ

こっちの残りは精鋭でボンゴレはたった3人だ
オレちんの出番はねーっしょ♪

クロームちゃんは身も心もオレちんのものになっちゃうし
又フフフツ」

……きもい……

なんだそのクネクネした動きは……私に癒しを!!
ミントに会いたいよー!!

「汚らわしい!!」

うん。うん。もつと言つてください

あ、また首を縦に振っちゃったよ(笑)

「優ちゃんもオレちんのものになっちゃう?」

「遠慮します」

きつぱり言つてやった!!

ちよつとすつきり!!

「ジェリー!!」

あーわかった

クロームちゃんの次が私なのね

私の特殊能力がほしいのか

相性が悪いからなんとかしたいのかもねー

ジェリーさんの力は幻覚の技じやなかった?

幻覚を更に操作?みたいな感じだったような……

すっごい私と相性悪すぎだよねー

「そーだ カオル

お前ももう戦わなくていいんじゃないやね?

継承式前に山本武にトドメ刺しちまつてるから

不戦勝つってな♪」

……危ない……

殺気を出すところだった……

殺気を出した瞬間殺されそうだよ……

「あれからあの男からの

新しい情報は入っていないのか? ジェリー」

あの男ねー

どういう原作か覚えてないけど

この流れではD・スピードと思うんだよねー

「あの男って誰ですか？」

とりあえず聞いてみた

「オレちゃんと身も心も

一緒になっちゃうなら教えてあげる♪」

「一瞬で興味がなくなりました

さっきの言葉は気にしないでください」

鳥肌が出てしまった……

「ジェリー!!」

「妬いてんのか？」

「アーデルちゃん」

「ふざけるな!! 話を戻せ!!」

「ないない 昨日の今日だけ

奴さん まだ寝てんじゃね？

うーっし エンマ

「モーニングコーヒーつきあえよ！」

「え」

「たまにや気分転換しねーと

頭が錆びちやうぜ」

うーん……これはまずいよね？

私も行きたいオーラを出そう

「炎真君……」

「男同士の付き合いだぜ

優ちゃんはまたね♪」

つまり私に来られるとまずいってことだよな？

だってさっきまで一緒にいようとか言ってたのに……

あーいっっちゃった……

終わったみたいだけど……

これまずいよね……？

「炎真君……？」

……なにを言ったんだろ……

そこまで詳しく覚えてないよー!!

とりあえずかなり炎真君がまずい状態だね

話しかけても返事ないし……

「炎真君!!」

「……どうしたの」

おお!

大きな声を出せば気付いてくれた!!

「何があっても私はずっと友達だよ?」

「優さん……」

「なあに?」

「……僕は……沢田綱吉を殺すよ」

本気目だね……

あーもうしようがない!

「私は炎真君とずっと友達と思ってるよ

覚えておいてね?」

あ……うなずいた……

うーん……自分で退路をたった気がする……

D・スピードに狙われてるっぽいのにね……

まあしょうがないか……

暴走

鈴木さんについていくって形になってしまった
まあ炎真君が暴走しちゃったからね……

鈴木さんが行かなくても行くことになったと思う
炎真君がしつとびっちゃん助けようとして

ツナ君達と会っちゃったなー

うーん……下手な行動できないよねー

今、私が顔出すとツナ君が動揺しそうだし……
ということ……

鈴木さんがプチパニツクになってる間に移動しよう
といっても、怪しい行動は出来ないから

鈴木さんからは見える位置で

ツナ君達から見えない位置に移動しただけだね

あらー……ツナ君と炎真君が戦っちゃったね……

さて、本格的に悩んできた

2人の戦いはどうやって終わったか覚えてない

ここの戦いで決まらなかったのは覚えてる

でも、今の2人を見てると止まると思えない

私になにかしちやってそのせいで

止まらなかったという可能性が怖すぎる……

最悪、私が2人の間に入ればなんとかなるか？

……死ぬ確率高っ!?

その代わり一瞬は止まる可能性高いよねー

あーでもお互いうらむことになるかも

どっちも私のことを仲間と思ってると思うしー

片方がやばくならない限り行動しない方がいいかな？

行動した場合、出来るだけ自分が死なないように頑張る

……ひどい作戦だ（笑）

ん？流れがおかしくなった？

あーそうか……忘れてた……

炎真君の両親と妹を殺した話をしたのね

あのウソの話をね……納得した……

炎真君の態度が変わるのはしようがないね……

「君は自分に都合の悪いことは

なにも信じようとしないんだね……」

「!! そんな……」

えええ!? こんないきなりなの!?

ツナ君のハイパーモードがきれちやつたよ!

「僕は君を絶対に許さない!!」

君を殺すまで!!」

やばい!! 急がないと!

つてか、首を絞めてる場合どうやって間に入るんだ!?

その前にこの位置から間に合うかビミョーだ……

炎真君の右手がツナ君の心臓の位置をめぐらしてる

ここはツナ君の胸の前に風のバリアーをはるために

移動するのをやめて集中力を高めた方がいいね!!

1点に集中したら1度は防げるはず!

「死ね!!」

風よ! ツナ君を守ってよ!!

「ぐあっ」

……あれ? 炎真君が苦しんでる……

「シモンリングによる覚醒だ!!」

あ……なるほど

それで止まったのね……

……本当に死ぬ前に読めばよかった

1人で空回りしてるよ……

「ぐ……綱……吉……よくも……妹を……」

あー見てられない……

もうみんなから普通に見える位置にいるし

私はツナ君の次に炎真君に近いし

なんとかかしないと……

「真美を……返せ!!」

スタツ

……2人の間に入ったけど少し遅かった

ツナ君に今の炎真君の目を見せたくなかったのに……

ぎゅ……

「つつ……」

ちよつと痛くて声が出ちやつた……

まあ炎真君の右手が落ち着いてないのに抱きしめたからね

左腕になんか刺さってるねー

……怪我した理由を話せば怒られそう

って考えてしまった自分に悲しい……

今はそれどころじゃないのに自分のことを考えると……

「大丈夫」

……気休めしか言えない自分がバカみたいだ……

「……お前……その格好……」

獄寺君に動揺を与えてしまったけど

今回は勘弁してね……あ、今回もだよ

「風早さん さがりましたよ」

あ、鈴木さんだ

「……そうですね」

炎真君大丈夫だからね」

「お前!! オレたちを裏切ったのか!!」

「彼女はボンゴレではない!!」

シモンの仲間だ!!」

あ、ここで私が炎真君の味方をしたから

少し信用してくれたのかな?

それともさらに動揺させるためかな?

まあどっちでもいいか

「風早!! 本気なのか……?」

炎真君の方につくことを選んだけど

声に出して言いたくなかったのになー
だってツナ君が動揺しちゃうもん……
だから何度も聞かないでよねー
答えないと不自然になるじゃん……

「そっだよ」

わかってくれるかなー……

リボン君……ツナ君のこと頼むよ

あ、うなずいたね

「沢田!! 次に会う時は私が相手だ!!」

その時は復讐者の掟に従い誇りを懸けて勝負する」

「いきなり仕掛けといて勝手なことを!!」

「バカ言ってるら」

「なに!？」

「わっかんねーのか?」

お前ら命拾いしたんだってのもっともこの覚醒で

エンマは更にメチャ強くなるだろうから……

マジでもう時間切れだけどな」

「風早さん私が運ぶわ」

あ、怪我したのを気にしてくれるのかな?

「お願いします」

「待て!! 風早!!」

話せば話すほど動揺を与えそっだよ

無視することにしようー

今回は無視しても変ではないと思うしね

「先に行きますね」

「ええ」

「待ちやがれ!!」

私って獄寺君のこの言葉をよく無視するよねー

リング戦の時も無視した気がする

まあ今回は勘弁してほしい……

「いくぞ ジェリー！」

「あいさー じゃーな

ボンゴレの10代目候補！

1世のそっくりさんよ」

深追いは禁物だな……

「ちつくしよー!!」

あのヒゲメガネヤロー!!

風早もどうなってるんだ!!」

獄寺が動揺するのも無理はねえ

オレ達が行動を起こしたのにも関わらず

シモンにしていることを選んでるからな

「優は裏切ってねえぞ」

「どういうことスか!？」

「オレに視線を送ったからな

ツナを頼むってことだろう」

獄寺にも送りたかったと思うが

何度もするのはリスクが高すぎるからな

1度で必ず意味がわかるのはオレと思っただらう

「リボーンさんがそういうなら……

大丈夫スか 10代目!？」

「おい 聞こえてんのか ツナ」

反応がねーな

一発蹴ってみるか

「おいコラ」

ドカツ

「リボーンさん!!」

……これでも反応がねーか……

「……………じゅ……………10代目……………」

暴走 その後

……うなされてる

少し体力をあげよう……

このタイミングであげると危険が高いから
ちよつとだけになるけど……

「炎真……なぜ急に家族のことを……」

「何かこころ当たりありますか？」

「……いえ」

めっちゃやありそうな返事された……

「炎真君……」

「炎真……どれだけあなたが苦悩して

どんな覚悟でシモンを率いているかわかっているわ

安心して休みなさい……

……風早さん……頼みます……」

あ、あれは信頼をしてくれてたからあれを言ったんだ

まあここには水野さんとジェリーさんもいるしね

「はい

炎真君のそばにいますね」

「ボンゴレは私が肅清する!!」

ひっかかることが多すぎるぞ

これに気付かないはずがねえ……

ツナを何とかしねーとやべーな

「……オレ……自分が正しいことをしてるのか

わからなくなってきた……

エンマ達のやり方が正しいとは思わないけど

でも……もし自分がエンマと同じ立場にいたら

同じことをしてしまいかもしれない……

自分の家族を殺した奴の子供が目の前にいたら
黙って見ていられないんじゃないかって!!」

「ですが10代目!!」

まだ古里炎真がいったことが真実かはわかりません!!」

「エンマはウソを言っていない気がする……」

「え?」

「はじめて同じレベルで戦えるようになって

拳からエンマの悲しみが伝わってくるのがわかったんだ……

だから優もエンマの味方についたんだ……」

やはり優の行動も響いてるな……

怪しい行動をしていたことは今まであったが

ツナの前ではつきり敵対したのは初めてだからな

「たしかにオレもあれが演技だと思えねえ

だがエンマはウソを言ってるねーとして

これが本当にエンマ達の望んだシナリオだと思うか?」

「え……?」

「あのタイミングで我を忘れたエンマが

飛び出して来たってのがどうもひっかかる

オレはシモンの背後に何かドス黒い影が

あるような気がしてならねえ

そうなる問題が出てくるんだ」

「問題ですか?」

「優はオレと同じことを思ったはずだぞ」

「そうなんすか!」

「ああ 優は頭がいい

それに向こうの状況がわかってるからな

何かつかんでる可能性があるぞ」

「そのどこが問題なんすか?」

「優はエンマ達にリングをとられてる状況だ

必ず優が気絶してる間に奪ってる

風の波動は危険とわかってるからな」

「そうスね……」

「もしつかんだのがばれた時、優には戦う力がないぞ
アルコバレーノの力が使える時間が短いしな
もし使って時間切れになった場合を

考えると使いにくいはずだぞ」

相手を倒そうにもクロームを人質にされると手が出せねえ
そして手を出した瞬間にエンマを裏切ったことになる

優のことだ……エンマが関係ないとわかっていれば

対立した時に必ずエンマには手が出せなくなる

もしもの時は逃げることも考えていると思うが

逃げたとしても熱が出て動けるかどうか……

前にオレと話した時は起き上がれなかったからな

あまり期待はできねーな

「リポーンさんそれって……」

「ああ

もしドス黒い影がある場合

優はかなり危険なところにいるとわかっけて

シモンの方にいることを選んだ」

「あのバカ……」

「優の行動からするとその可能性が高いしな」

優はツナとエンマが戦っているのを見ていたはずだ

それなのにツナが危なくなるギリギリまで動こうとしなかった

つまり動こうとした時点で優はシモンと敵対することを選んだ

だが、タイミングよく助かったからシモンについた

可能性ではねえぞ……必ず優は何かをつかんでいる

ただ……確証がねーんだ

「優の行動を考えないとしても

オレはどーもしつくりこねーんだ

ツナも言っていたがシモンファミリーの1人1人の

純粹さと集団としてのひどいやり方にズレを感じる

奴らは一枚岩じゃねーと思うぞ

説得

なんかさつきからくしやみが……

鈴木さんと雲雀先輩が私のこと話してるのかな……

そういえば私って肅清の腕章つけてるしね

渡された制服についてるんだよねー

雲雀先輩にその話でもしたのかな？

風紀じゃなく肅清を選んだとか言ってるね

ってか、私を使ってる分は利用するつもりだったのかも？

リスクを背負ってる分は利用するつもりだったのかもね

腕章対決の時に私を連れて行けば風紀を捨てたと思わせるしね

いや、知らないけどね

私が使えるものは使っているという考えだから思っただけだしー

まあもし言ってる雲雀先輩がそれぐらいで揺らぐ信念だったら

私はわざわざ風紀委員に認めてもらうために

生徒の話を知りたりして一人で動きまわったりしない

たいしたことない信念だったら動く気にもならないからね

気付かないフリして雲雀先輩が言った通りの仕事だけしたよ

だって雲雀先輩が命令すれば態度に出さずみんな聞くもん

……それ以前に付き合うこともないか……

考えがそれだ……

私を使っても何かしても意味はないんだよねー

雲雀先輩は弱い風早優を風紀委員に入れたんだ

生き残る手段としてこの行動は理解できることだもん

まあ当然、お互いの信頼関係がなければ無理な内容だけどね

雲雀先輩は私の1番の理解者だから問題ないと思う

逆に私が肅清の腕章をつけてると聞けば

まだ私が無事という証拠になるから安心して戦ってそう（笑）

のびのび戦ってるんだらうなー

ってか……もう始まっているのかな……

………こつちにおいて1つだけ後悔がある

改造長ランみたかった……まじで……

絶対かつこいいんだよねー

後で見れるよね？

うん、確か見れたはずだよ

というか見れなかったら神様を恨むよ

『ちよつと待て』

俺を恨むな』

あ、そうだった

私には神様がついてたんだ……（笑）

『……忘れるなよ』

……ごめんなさい

『ああ』

炎真は大丈夫そうか？』

私の体力で今は落ち着いてるよ

まあ少しだからまた苦しむかも知れないけど……

『そうか……』

うん……

『優 そろそろやばいだろう？』

だよねー

多分次の狙いは私だよね

『ああ』

逃げないのか？』

炎真君をこのまま置いていくことは出来ないよ

『……かなり危険だぞ』

わかってるよ

『……優、危なくなったら必ず逃げろ』

でも……

『今リングがないんだ

リングの力がなければ勝てないのは

未来で知ってるだろ？

白蘭に捕まったのを忘れたと言えば怒るぞ

あの時はオレだってやばいと思ったんだからな』
.....

『詳しく覚えてないと思うが』

炎真はツナが救うのは覚えてるだろ？

それに優がもし操られたら

正直いつてツナ達がどうなるかわからないぞ』

.....そうだね

わかった.....

自分の身を優先することにするよ.....

コンコン

ん？誰かきたのかな？

え……入ってきてよ

私が開けないといけないの……？

ガチャ

「はーい 優ちゃん♪」

言ってるそばから来たよ……

原作では雲雀先輩が戦つてるところ見てなかった？

まだ戦つてないのかなー

それとも私を優先したのかなー

まあいいか……

「エンマ君を診に来たんですか？」

絶対違うと思うけどね

「ヌフ

優ちゃんに会いに来たよ」

……その笑いかたがきもい……

「何か用事ですか？」

「向こうで話しようぜ」

「んー炎真君が心配なので遠慮しときますよ♪」

「そーいわずにさあ」

うわー……肩に手をかけられた……

「すみません……遠慮します……」

一瞬で手をおろしてやった!!

本気で勝手に触るのはやめてくれ……

親しくない人に触られると気持ち悪くなる

「オレちゃん

優ちゃんのリング持つてるんだよねー」

なにー！ー!!最悪だよ!!

なんでこの人が持つてるんだよ!!

げっ……まじで持ってるし……

「そうですかー」

でも私はシモンにいたることになってるしー

リングはジェリーさんが持つてても変じゃないしー

私が行く必要ないよねー

「これクロームちゃんに見せると

優ちゃんに会いたいわって言ってたんだよねー♪」

「ジェリーさんからクロームちゃんに

私はシモンに入ってたって言うてくれませんか？」

絶対2人つきりにはなりたくない

だって想像つくしー

「俺つちのこと信用してくれなくてさー

困ってるんだよねー」

「自力で頑張ってください♪

私は炎真を診てるんでー」

だから早く帰ってくれ……

「優ちゃんって付き合ってる人いたんだよねー」

あれ？話が変わったね

「過去形じゃないですよ？

現在進行形ですよー」

「優ちゃんがシモンに入ってたってことは

別れちゃったってことだよ？」

「別れてませんよー」

「およ？シモンを選んだよね？」

「雲雀先輩はボンゴレに入ってるつもりないんでー

問題ないですよ」

強い人と戦えるなら付き合ってあげてもいいけど？

っていうぐらいに思ってるはず（笑）

強い人の中に絶対ツナ君達も入ってるし……

それに雲雀先輩は貸しを作らないようにしてるもん

作ったらすぐ返すと思うしねー

「向こうは思っていないかもしれないよ？」

「だからオレちんのものになんない？」

「雲雀先輩は絶対わかってくれますよ」

「だから遠慮しますよ♪」

……幻覚だ

周りの景色がかわったね

でも私が幻覚がきかないって知ってるよね？

「……どういふつもりですか？」

「優ちゃんが素直にオレちんのものに

なってくれないからね」

いや、オレちんと2人つきりになりたくない

って思ってたとか？」

やっぱり少し態度に出しすぎたか……

「……そうですね

私はあなたのことは信用してないので……」

「およ？ どうして？」

「鈴木さんの反応をみると

炎真君の家族のことを知ってたみたいです

シモンのみんなで黙っているように決めてたのでは？

つまり、家族のことを話してまで

ボスである炎真君がああタイミングで戦わすことを

けしかけた人物がいたと考えるべきです

あれ？直前に2人つきりで話をした人がいましたね

一体何を話していたんでしょうねー」

お、意外と反応が薄いなー

「そして何度も私をクロームちゃんのところ

連れて行くこうとしましたよね？

私が怪しい行動を起こしても

疑問がない場所に連れて行きたかったのでは？

後、ツナ君達がこの島に来た時に私を試したんでしょう？

1番最初にジェリーさんが私を見に来たんですよねー

炎真君がすぐ来なかったら私はどうするつもりでした？
他にもジェリーさんの怪しい行動をあげましようか？」

もしすぐ炎真君が来なかったら

私を何かしてたとか適当なことを言つて

殺すことが出来たと思うしねー

「優ちゃん 頭いい♪」

このボンゴレとシモンの戦いを仕組んだのは

優ちゃんの言うとおり

ぜくくんぶオレちんでえーす」

「やっぱりそうでしたか……」

あーD・スピードになったよ

「まさか初代霧の守護者と会えるとは

思いませんでしたよ」

「あまり驚いてないように見えますよ？」

まあ知っていたからねー

「最悪の想定の中に操られているか

のつとられている可能性は考えれます

シモンファミリーに気付かれないぐらいの人物です

つまり相当の強さを持つている証明です

初代の霧の守護者とわかれば驚くより納得できた

という気持ちが大いんです」

「本当に頭のいい人だ」

何とか誤魔化せた（笑）

「もしかしてあなたが未来の記憶をもらって

私がレアということを知りました？」

「そうです」

「誰が裏切り者か気になつてたんですよね

レアの情報が流れたけど

私の正体を知らない人ですからね」

「そのためにあなたはこちら側で

大人しくいたのですか？」

「他にもいろいろ理由はありますよ

私の存在が邪魔ですか？

それとも特殊能力がほしいんですか？」

「ヌフフフ

私のものになつてもらいますよ」

お、そっちかー

「遠慮します♪」

「ならばおしおきです」

おっと……目を合わしちやだめだね

「……ほう」

さて、結構ピンチだよねー

操って特殊能力を利用できたらいいと思つてたと思う

でも無理だった場合は殺すと決めてるよねー

リングがなしだとあれをするしかないか……

D・スピード 2

全く……袋も簡単にとらせてくれないんだね
幻覚にかかっていればこれは避けられた気がしない……
だってもう1つの景色は完全に暗闇だし……

ガッ！

よっと！

あ、ドア近くにいたけどバックステップしたせいで
ベットのところまで下がってしまったなー

そこまで下がる気はなかったのに……

思ってるより体は危険と判断しているんだろうね

ってか……今ドアの隙間から攻撃してきた武器は……

あー私がいるせいで原作より早く操られたのか……

「まったくもって相性が悪い」

本当に思ってるのか？

全く焦ってないじゃん！

あ、クロームちゃんも部屋に入ってきたよ

やっぱり私がいるから原作より早く馴染ませたのかなー

「クロームちゃんの日……」

うーん……操られちゃったかなー……」

……うん！クロームちゃんから全く反応がないね！

まあ距離が離れてるうちに袋をとるか……

「おや？ その力を使ってもよろしいのですか？」

5分しか戦えないのがばれてるんだろうね

「クロームちゃんには悪いけど」

私は炎真君と逃げようと思うんでねー」

「ほう

クロームがどうなってもいいのですか？

私の情報ではあなたは出来ないはずだ」

「んー確率では大丈夫と判断しました♪」

「それは興味深いですね」

「クロームちゃんの内臓を幻覚で作ってるんでしょ？
そこまでしてるのに簡単に殺すとは思えなくてー」

あ、顔色が変わったよ

「私って骸君と相性がいいんですよー」

クロームちゃんが危なくなるか行動を起こす時は

何かメツセージを送ってきますよ

だって骸君は私のことをいい駒と思っていますから♪」

駒同士がぶつかって計画が崩れるのは絶対防ぐはずだもん

「駒……ですか……」

かわった駒と思ってると思う（笑）

「クロームちゃんの状態を考えると……」

骸君が私に何も言ってるこないのはおかしいんですよー

つまり状況を考えると骸君の幻覚が届いていない

じゃあ誰がクロームちゃんの内臓を作ってます？」

「……頭のいい人だ」

コオオオオ

うん……この感じ久しぶりだ……

やっぱり気分がいいね

「残念ながらあなたの計画は全てわかりませんでした

でもボンゴレとシモンの戦いを回避出来れば

あなたの計画は少し狂うはず！

そして私の感覚ではあなたは完全ではない！

つまり……風は私に吹いてるんです♪」

威嚇として竜巻で攻撃するべきか……

それにしても風の攻撃は室内で戦うのが向いていないね

窓が割れたのは許してほしい

「なっー」

ガッ!!

風のバリアーを張ってたから痛くはなかったけど……

いきなり壁に叩きつけられた……

あー壁がボロボロだ……

「…………殺すー」

……………そういうことかよ!!

狙いは私じゃなくて炎真君に幻覚を見せようとしてたのか!
今の攻撃は炎真君の重力か……

うわー私がツナ君のお父さんに見えてるんだね

これは困ったなー

自覚さえしてしまえば幻覚ってわかるから

私が触って気付かせることは出来るんだけど……

この場合だと炎真君には気付かせることは出来ないね
だって私の上に幻覚がかかってるんだもん……

くそー私の情報を集めすぎだよ!!

えつと……この状況を整理すると……

D・スペードを倒せば炎真君がかかっている幻覚は戻る

クロームちゃんの内臓を作っている幻覚もなくなる

この考え方はダメだね

つまり炎真君を気絶させるのがベストだけど……

簡単にさせてもらえるのか……?

戦ってる途中でD・スペードとは目を合わせてはいけない……
ということは風で動きを常に読まなくてはいけないよね

炎真君の重力の攻撃をさつきから風で抵抗しているのになー

うわ……更に状況が悪化したかも……

私が壁にぶつかった音で誰かが来る……

水野さんだろうねー

で、D・スペードがジェリーさんになる

……あれ? 詰んでね?

水野さんがこっちに来ないようにするべき?

……3対1の状況で出来るのか……?

出来たとしても5分以内で全部終わらせられるのか……?

無理だ……時間があればなんとかなるのに……

「あーもうー」

したいことが出来ないのはイライラする!!

やっぱり原作通りに進むのが1番ベストってことか!!
下手に動いてわからなくなるよりはいいよね?……ね?

『ああ』

優が捕まるのが1番最悪だしな』

よし!そうとなればさっさと逃げよう!

悪いけど天井から逃げる!

建物を壊したのは後で謝るから許してね……

だって窓から風を集めると

D・スピードに気付かれちゃうんだもん

建物の外で集めて一気にここに竜巻を打ち落とすしかない

「死んでもあなたのものにはなりません♪」

ドガガガガ

竜巻ってすげー……

普通に家に穴があいた……

作った私が言うなって感じだけど……

まあ竜巻の周りにバリアーがはってるから

炎真君たちは無傷にしてるしー

私は絶対防御の竜巻の中心にいるし安全だしね

さて、この中をのぼって空へ逃げよ……

とりあえず……この木でいいか……

「危なかったー……」

何とか逃げれたー!!」

……竜巻の中で炎真君と2人つきりになれば……

気絶できたんじゃ……

まあそれほどの竜巻を作ろうとすれば出来る前に

水野さんが来るからさらに状況が悪くなってたか……

搜索 1

「……何があつたんだ？」

もう少し早く来たなら彼女を手に入れた
全く使えない

「優ちゃんが寝てるエンマを人質にして

クロームちゃんを連れて逃げる気だったみたい
ありやずつと狙つてたぜ

でもエンマが起きて優ちゃんの計画はおじゃん♪」

「……………エンマは大丈夫なのか？」

「ああ

オレちゃんはアーデルハイトのところに行つてくるわ
優ちゃんが裏切つたこと伝えないといけねーし

カオルはエンマをよろしく」

「そいつを連れて行くのか？」

もう少し馴染ませたい

今クロームと離れるのはあまりよくない

「クロームちゃんを助けにまた優ちゃんが来るだろ？」

エンマがまた人質にとられちゃまずいっしょ

カオルも2人はちつときついだろ？

つまりオレちゃんと一緒の方がいい

クロームちゃんは寝てるし軽いしね♪」

「……………わかつた」

「そつちは頼んだぜ」

少し前から風が強くなつたと思つていたが……

まさか竜巻まで発生するとは……

近ければこのへりは墜落していた……

「……草壁」

「は、はい」

「風が数分前から変わったかい？」

「はい」

委員長の言うとおりに先ほどから少し強く……

ですが、操縦には影響は出ていません」

「今すぐ……いや、いい」

あの近くにはもういない……」

恐らく風早さんのことをおっしゃってると思うが……

委員長はどこで思ったのか私にはわからない……

「僕が降りた後に島の上空を一周して

その後は予定通り帰っていいよ」

委員長には何か考えがあるのだろう

「1人だし最後までは無茶してないと思う……

だからこのへりに気付く可能性がある」

やはり……

風早さんのためにへりを……だが……

「私が風早さんを気付かないと意味が……」

風早さんが気付いても助けを呼べないのでは……

「問題ないよ

優は空を飛べるからね」

そ、空を……

「……わかりました」

「僕は地上から探すよ

あれが何か知っている可能性があるけど……」

あれ……とは恐らく先ほど見かけた人物のことだろう

「……気にいらない

それに正しい情報を得れるとは思えない

まあいい 行ってくるよ」

「……はい

では、武運を祈ります」

「うん 頼んだよ」

「はい！」

神様ー……

『……大丈夫か？』

ギリギリ……何分ぐらい使ってた……？

『3分13秒』

……細かい数字までありがとう……

倒れないのは限界まで使ってないからかな……

『すぐ動くなよ 少しは休め』

もし竜巻が見られちゃったら……心配してると思う……

雲雀先輩に会わないと……無茶したり……

私を探しに行くと思うし……

鈴木さんとバトルが終わってたらいいけど……

始まってなかったらこつちを優先しそうで……

戻るのもありだけど……

私がいるせいでD・スペードがいるかもしれないし……

今、会うのが1番最悪だと思う……

だから雲雀先輩と合流することを優先しようかと……

『……そうだな』

問題はどこで戦ってるのかがわからない

闇雲に行けば疲れるだけだし……

あ……神様に教えてほしいって言ってるわけじゃないよ

話せないのはしようがないしね……

『……そうか』

風を操って調べるしかないか……

バラバラ

……何の音？ あ、へりだ……

あれ？へりって……確か……雲雀先輩が乗ってたよね？

……うん。絶対そうだ！これで合流できる！

搜索 2

スタツ

何とか到着ー……

フラフラで飛んでたし……

追いつくまで時間がかかったな……

「風早さん!？」

あ……ビックリさせてすみません……

違和感がないように敵だった場合のことを考えて……

死角を狙って飛んだからね……

「……草壁さんでしたか……」

「大丈夫ですか!？」

ひどい顔色なのかな……

まあいいや……

つてか……雲雀先輩がいないんだけど……

「草壁さんがここにいてるつてことは……」

「委員長は少し前に地上へ……」

あーすれちがったか……

「あ……竜巻大丈夫でした……?」

今思うと……へりだと危なかったよね……

「近ければ危険でしたが大丈夫でした

風早さんもご無事で……」

「……すみません

あれ……作ったのは私なんです……」

「え!？」

「私は風を操れるので……

それより雲雀先輩が降りた位置を……」

……自分でいったけど……

草壁さんからすれば詳しく聞きたいはずなのに

それよりつて……まあいいか……

「は、はい

委員長はあちらに……今すぐ向かいます」

「位置さえ分かれば大丈夫です……」

草壁さんはこのまま戻ってください」

「今の風早さんを一人にすることは出来ません」

「……だからです」

今の私にはこのへりを守れません

自分の身を守ることが精一杯なんです……」

「……わかりました」

結構ひどいこと言ったよね……

でも謝るのはダメな気がする……

「草壁さん……」

雲雀先輩と私が戻るまで学校をお願いします」

「……はい！」

お気をつけて」

「草壁さんも……」

よし……早く合流しよう……

「あ……」

「どうかしましたか？」

「いえ……大丈夫です……」

行ってきました」

今……記憶が……

原作通りに進んでるといいけど……

本当に急がないと……！

あそこに誰かいるな

優だといいが……恐らく違う

「そこにいる君は……誰だい？」

優の気配はもつとわかりにくいからな

ヒバリも違うと気付いたな

「おつとあぶね〜」

見つかつちまったらしよーがねーなあ」

やはり違うかつたな

クローム……ツナが声をかけても反応なしか……

「ヌフフツ

これでオレちんもきれいさっぱり

シモンに見切りをつけられる」

まずいぞ

優は大丈夫なのか？

「アーデル お前はシモンを引つ張るために必要な

精神的支柱の役割を果たしていたが

連れ去られるんなら事実上の解体だ

シモンの守護者ももう少ねーし

完全覚醒目前の炎真も風早優がいなくなつて

精神的に引き返せない所まできているから問題ない」

「何を……言っているの？」

鈴木アーデルハイトは白か……

「仲間割れか!？」

「今……優がいなくなつたつて……」

「やはり一枚岩ではなかつたな……」

恐らくあいつがシモンの黒幕と関係している

優はそれに気付いたんだろう」

だが……なんでこいつは怪我してねーんだ

優のことだ……何もしねーでやられるわけねーぞ

「お いい勘してんじやん アルコバレーノ

オレと2人つきりにならないように必死だったぜ

すつげー無駄な抵抗だったけどな」

やはり……気付いていたのか……

「優はどい」

早く答えなよ」

「ここに来てるかなーって思ったけどいねーし
どこかで倒れてるってことっしょ」

「……リボンさん」

「……ああ」

アルコバレーノの力を使って逃げたみてーだな……
問題はどこにいるか……

「ここまですればボンゴレ側にも隠すことねーよな

いいや むしろ 挨拶をした方がいいですね」

こいつは……そんなことありえるのか……？

幻覚……はねえな

もし本物とすれば……

リングがない優が逃げることを選択したのはわかるが……
こいつが怪我をしてねー理由にはならねえな

あ……あれは……近づいてる証拠だね……

ポフツ

頭に乗ったってことは……

急いで呼びにきたわけじゃないってことか……

「雲雀先輩……戦ってた……？」

「ヒバリ ツヨイ」

えーつと……つまり勝ったってことかな？

ヒバードは校歌を覚えるぐらい頭がいいのは知ってたけど
この言葉を誰が覚えさせたんだ……

ヒバリは昔から言ってたけど……強いは誰が……？

草壁さんの気がしてきた……（笑）

まあいいか……

「……ありがとう……」

まあ良かった……

原作通り勝ったみたい……

「シンパイ シンパイ」

……これは雲雀先輩が心配してるからかな？

だから誰が覚えさせたんだ……

もしかして私が雲雀先輩は心配性とか言ってたのを覚えた？

「急ぐね……」

「ムチャ ヒバリ オコル」

……はい

無茶しない程度で急いで向かいます……

……この言葉は雲雀先輩が覚えさせたんだろうね

私が無茶しそうな時のために……

あ……やっと思えた……ってピンチじゃん！

「危ないから私から離れて」

バサバサバサ……

負けず嫌い

よし！無事ヒバードが離れたね！！

「よくもオレ達をダメしやがって！

よくも紅葉をらうじを……

しとつぴちゃんを……アーデルを……」

「盗み聞きとは感心しませんねえ……」

あなたには古里炎真を診るように言ったはず……」

「……エンマがずっと風早優の名前を呼んでた

裏切った奴をエンマが側にいてくれと何度も言うわけねえ！」

「……それは誤算でした

山本武を瀕死に追いやる以外にも

お前にはまだ使い道があったというのに……」

うわーまずいまずいまずい

幻覚だって……水野さんが危ないよ

気付いてないことをいいことにお腹に突き刺す気だ！

手加減はしない……！

重力を使って思いっきり蹴ってやる！……武器をだけどね

だって幻覚が切れたらまずいし……

切っ先がずればいいもん

もちろん着地する前に風を使って自分は痛くないようにする

ガッ

「「「な!?!」」」

そりやそうだ……みんなの目から見れば

いきなり私が空から降ってきて

水野さんの背後に現れたと思ったら

D・スパードの位置が違うから混乱するよね……

「……まだ動けましたか」

「……やられっぱなしは趣味じゃないんです……」

意外と負けず嫌いだったみたい……

「その顔色でよく動けたものです

私の前に現れたことを後悔しなさい

フラフラのあなたではもう逃げられません」

「……問題ありません

守ってくれる人がいます……」

「そうだよ

優には手出しさせないよ」

雲雀先輩がD・スペードに手錠を投げてる

今のうちに離れろってことだね

水野さんを引っ張って下がろう

「これ以上は止めといたほうがいい

あなたはアーデルハイトの戦いで

炎をほとんど使ってしまった

私には勝てませんよ」

「それはわからないよ

君も完全とはいえないさそうだからね」

「ほう……

それを見抜くとは彼女と一緒にですすがですね」

これは……私のことだね……

「だが それでも私の方が強いと言っているのです

もつとも君達全員がまとめてかかってくるような

面倒な事態はまだ避けたい クローム」

「はい……霧のカーテン」

今の私には……あれは破れないな……

それより……まずいね……

私はみんなと違って霧の結界の外だ……

狙いは原作通り骸君か……

「やはり君はここで咬み殺そう

六道骸は僕の獲物だからね」

「又ハハハッ 面白いことを言う!!」

だが霧のカーテンを壊せば大変なことになりますよ」
クロームちゃんに……鎌か……

「決して強固と言えぬ結界だが

破られれば……自動的に彼女は死ぬ」

「なっ」

でも……この鎌ぐらいの霧なら壊せるはず……!!

やっぱり風は霧に強い……

風力で霧が流れて形を保てない……!!

「……本当にあなたと相性が悪い

やはり私の者になってもらいましょう」

まずい……もつと離れないと……

へ……うそ……足に力が入らない……

どうしよう……

風はクロームちゃんともう1つに使ってるし……

「そろそろ限界みたいですね」

あはは……ツナ君が叫んでるよ

かなりピンチだよね……

でも……見つけた!!

距離がわかったし風のバリアーを今からはれる!

後は間に合うかどうかだ……

「デイモン!!」

……水野さん!?

「うるさい蠅だ」

ダメだ……間にあわない……!!

幻覚だ!!水野さんが斬られる!!

「がはっ」

私を助けようとしたせいで……

「私は大空の霧の能力だけでなく

大地の属性の砂漠の能力も自由自在だ

お前とは格が違うんですよ 水野薫」

……まずい

D・スピードが水野さんを殺す気だ！

山本君はまだちよつと遠かったし……

つまり私が時間稼ぎしないと……

2人の間に……入ろう……！

「おかげで沢田綱吉の雨の守護者を

楽に消すことができた」

「く……くそお……」

オレは……なんてことを……してしまっただ……」

「さらばだ」

ガッ

ギリギリ嫌な音をたててる……

右手に風を集中させて攻撃を防いでるけど……

私の集中力が……いつまでもつか……

「まだ動けますか」

「……風のバリア……です……」

「もう無駄な抵抗です」

「この……」撃を……

おさえることができれば……充分です……」

「ヌフッフ

おかしなことをいいますね」

D・スピードの右足が目の前に……後は頼むよ……

ガキイツ

鞘で防いでくれて助かったよ……

流石山本君……本当にいいタイミングだね

「よかった……味方で……」

誰か来てるのはわかったんだけど……」

「や……山本オ!？」

「すまねえなツナ！ 出遅れちまった!!」

風早も時間稼ぎしてくれたみてえだなっ」

「……任せてもいい……?」

もう私は自分しか守れないんだ……」

「ああ

カオルのことはオレに任せろ！」

「ありがとう……」

「……なぜお前らはオレを助けようする！

オレは山本を殺そうとしたんだ!!」

……私は言わないよ……なんか恥ずかしいもん……

山本君が言ってるね……お願いします……

「………何言ってるんだよ

本当に困ってる時に助けてやれるから友達なんじゃねーか

風早はカオルとはあんま話しねえみてーだけど

カオルはエンマと友達だろ？

友達の友達は友達ってなっ」

………なんか本当に恥ずかしい！

誰かに言われると余計に恥ずかしいなんて……

最後まで聞くべきじゃなかった……！

うなずいてさっさと離れよう……

えっと、邪魔にならないようにするには

私は空に逃げるのが1番安全かな……

フラッ……

うん………さっきよりフラフラに飛んでる……

ちよつと無茶しすぎたね……

ポフッ

「ムチャ ヒバリ オコル」

………それも聞きたくなかった……

休ませよう 1

原作通り……D・スペードが逃げたね……
もう私は降りていいか……

あー降りたけどもう立てないかも……

「優」

「……雲雀先輩……」

抱きとめてくれた……凄く助かります

あ……冷たい……

おでこに雲雀先輩の手があるのか……

「熱出てるね」

「あの人の者に……なりたくなかったので……

ちよつと……無茶しました……」

「……わかった

寝なよ」

「でも……」

雲雀先輩も疲れてるのに……

「わかってるよ

僕も休むよ」

「……よかった……」

「何かあっても僕がいるからね

安心していいよ」

「……はい……」

あ……もう意識が……

山本……無茶しすぎだよ……

「どいつもへこたれてるから

一度しっかり休んだ方がよさそうだな

すでに寝てる奴らもいるけどな」

? リボーンが指を指してる方向は……

「あつヒバリさん……いつから!?

つてか優も一緒にー!?!」

……すっげー2人の距離が近いよ／／／
だ、大丈夫なの!?

「あの2人は本当に仲いいよなっ!」

オ、オレが気にしすぎなだけなのかな……

「……いろいろ問題と思うのはオレだけスカ……?」

やっぱりー!?

「優は降りてすぐ力尽きて寝たから

このうぜーのはヒバリの仕業だぞ

(あのヒバリがオレ達の前でしてるんだ

よほど優が連れて行かれたのが嫌だったんだろう)」

「まじでー!?!」

あのヒバリさんが!?

つてかコイツ……うぜーって言ったー!!

「……あいつらはほっといて休みましょう

気にすれば休めないことに気付きました……」

そ、そうかも……

「……うん」

「ん……」

空がきれい……

そういえば外で寝てたね

んーまだ少しだるいけどだいぶ良くなったかもー

……おなか減ったなあ

ツナ君達の話し声が聞けるし起きてるみたい

いい匂いがするし食べてるのかな?

何か恵んでもらおう

さて……起き上がろう……

「どこ行くの」

……雲雀先輩？

起きてたのかな……？

「少しお腹が減って何か恵んでもらってきます」

「そう」

「雲雀先輩は？」

「いない」

何か持つてるんだろうねー

私の分がないのは合流したらすぐ帰る気だったから？

あ、違う

あっちの方が温かい食べ物があると思ったんだろうね

「優!? 起きたの!?!」

「今さっきねー」

フラッ

……今のは危なかった……

今こけるとか恥ずかしすぎる！

「無理すんじゃないっ!!」

「大丈夫だよ

気分は悪くないし少し力が入りにくいだけだよ」

「本当なんだな」

獄寺君も心配性だよねー

「本当。本当。」

それで……何か食べたくて何か持っていない？」

「ああ

あるぞ」

あーあんまりしんどくなくてよかった!!

これで食べれないとか最悪だったよ……

明日が本番だしねー

あ、そうだ！

「山本君」

「なんだ？」

「さつきD・スペードを逃がして

正解だったから気にしなくていいよ？」

「「え!?!」」

「やはり理由があるんだな

優とD・スペードが戦ったはずなのに

怪我してねえのがおかしいからな」

あ、リボーン君はおかしいと思ってたんだ

「風早！ どういうことだ!?!」

「骸君の幻覚がここに届いてないんだ……」

「それって……」

「なるほどな

今D・スペードを倒すとクロームがやべえのか」

「……………うん

なんで届いてないのが理由がわからなくて……

もう少しうまく動ければよかったけど

自分が逃げるのに精一杯で……」

私をもっとうまくやれば……

みんなを助けられたのかもしれないのに……

「向こうで優は下手な動きは出来なかっただろ？」

「しょうがねーぞ」

「わかってるけど……」

「なんか凄く悔しくて……!!」

「それより優はなんで骸の幻覚が届いてねえ

って思ったんだ?..」

「えっとクロームちゃんが変だったでしょ?」

「う、うん

クロームどうかしたのか知ってる?」

「マインドコントロールとかそういう感じだと思おう
クロームちゃんとは一緒に行動してなかったから
私も詳しくはわからないんだ……」

「そっか……」

ゴメンね……

「それに私は骸君と相性いいからクロームちゃんに
何かあると骸君が私に言ってくると思ってる……」

はい……思いつきりウソです

「骸君の力が届かないのは初めから知ってたもん……
なるほど……」

「優は骸と相性いいの!?!」

「クロームちゃん程じゃないけどね

いつも骸君からの一方的だし……」

「そうだったんだ……」

「だから骸君の力が届いてないを思いついちやって

D・スピードも聞いたら正解みたいだったし……」

「D・スピードのウソってのはないのか?」

まあ山本君が言った通りその可能性もあるよねー

「その可能性は低いぞ

骸と優が繋がってるなら必ず何かあるはずぞ」

「私もそう思うんだ

骸君は使える駒は使うタイプだし……」

「こ、駒って……」

「あ、それは私の勝手なイメージだから
気にしなくていいよ」

「う、うん……」

「おめー 骸と相性いいなら言えよな」

「あんまり当てにされても困るんだ

本当に一方的だからこつちから連絡できないし
何より……骸君が私に話しかけることに

雲雀先輩が気付けば……」

「……………」

うん……みんなも分かってくれたね

「まあもう雲雀先輩は私と骸君が

相性いいのは知ってるから安心していいよ」

「そうなの!？」

「未来に行った時にちよつと問題が発生してね

……機嫌直すの大変だったよ……」

「……………」

あ……今の私……絶対遠い目してる……（笑）

休みましよう 2

あ、大事なことを聞かないと……

「山本君は誰に助けてもらったの?」

「そういえばさつき知り合いに助けてもらった
って言ったよね」

そうなんだよねー

それがずつと気になってたんだよねー

「ああ

白蘭に助けてもらったぜ」

「え!! 白蘭!?!」

あーそういえばそうだったかも……

「ああ そうだ

このキズはあいつが治してくれたんだ

多分パラレルワールドで得た知識つてやつでな」

「そうだろうねー」

その能力を使わないと治せないと思うしー

「なっ ちょっと待ってよ 山本!!」

「なに風早も普通に話してるんだ

白蘭が生きてたら大問題だろ」

「あいつがまた能力を悪用したら!!」

せっかくユニが戻してくれた世界が!!」

「まーまー落ち着けて」

「私も落ち着いた方がいいと思う」

「なんでそんなに優は冷静なんだよ!!」

「体がまだしんどいから叫ぶ気にならないのと

冷静に聞かないとわかることもわからなくなる」

今は戦闘中じゃないんだしー

冷静に聞けるときは冷静に聞くべきと思う

「優……ごめん……熱出てるんだよね」

「熱は出てるけど大丈夫だよ

「山本君続き教えて？」

普通に話せるからかなり回復できてるみたいだしー
流石に今から戦えって言われるときついけどね……

「ああ

キズを治してくれた奴は白蘭にそっくりだが

まだ絶対とは言い切れないらしいぜ

今は24時間ボンゴレが監視してるんだが

行動的にも思想的にも危険性0だつてよ」

「危険性……」

「0だと!？」

「オレも意識が戻ってから話を聞いてびっくりしてさ

気になってガラス越しにそいつを見たんだが

白蘭に違いないって思ったが

なんつーかすがすがしい顔しててさ

あれなら大丈夫だぜ!!」

すっごい自信満々な顔で言った（笑）

「あり……? どした?」

「すがすがしいだけで

まったく説得力ねーじゃねーかよ!!」

「説得力はないけど……大丈夫かもねー」

「だろ? わかるだろ?」

「わかんねーよ!!」

おめーら2人頭おかしいだろ!!」

……頭おかしいって言われた

「山本君の直感を信じてるだけだよ」

山本君が未来で白蘭さんが何したか知ってるのに

そう思ったんだから大丈夫の可能性が高いと思うんだよね

まあ……私がそう願ってるだけかも知れないけど……

「……そうだね

山本そう言うなら……オレも……信じるよ」

「そうだな

悪さしたらまたぶっ倒せばいいしな」

「簡単に言うなよ!!」

確かに（笑）

白蘭さんを倒すのはすっごい大変だからね……

私はもう戦いたくない……

「しっかしお前達も大変だったな」

「え」

「ツナなんてさっきまで

『自分のやってることがただしいのかわからない』

って情けねえつたらねーんだ」

まあツナ君だからねー

絶対、悩むよね

「うわ!! リボーン!!」

バラすなよー!! 優もいるのに!!」

あ、やっぱり男の子だね

それに人から言われた方が恥ずかしいよね

私もさっき学習したよ

「風早も大変だったみてえだな」

「んーそうだったかも……」

「本当に無事でよかったよ……」

オレ達が来る前に何かあったらどうしようかと……」

あ……ごめん……

ツナ君達が来る前ちよつと前までぐーすか寝てた……

いや、半分は特殊能力のせいだし……

……半分は違うけどね

で、でも鈴木さんのためというか……ごめんなさい

心の中でもう1度謝ってしまったよ……

「私も元気だっていうのを伝えたかったんだけど

リボーン君のケイタイが繋がらなくて……」

「この島は電波が届かねーからな」

「あ、ヴェント用のケイタイは特殊だから

私からかけて相手の電波が届けば繋がるんだ
雲雀先輩には普通に繋がったから……」

「え!？」

うーん……ツナ君と獄寺君が驚いてるって事は……

「ツナ君達がこの島に来たときかな？」

スキをみて雲雀先輩に1度だけ電話したんだけど
やっぱり聞いてなかった？」

「あのヤロー……」

「ご、獄寺君落ち着いて……」

怒ってる怒ってる(笑)

ってか、原作通りのタイミングで来たなら

伝える時間もなかったと思うんだけど……

いや、普通は時間がなくても伝えようとするか……

私とツナ君が会ってるのを知っていたら

もういいと思うのはわかるけど

雲雀先輩はそのことを知らないからね(笑)

「実はヒバリさんにヒントもらったんだ……」

「雲雀先輩がヒントあげたってことは

多分だけどツナ君が悩んでるのをみて

面白くなかったのかな？」

「ゆ、優すぎいね……」

つまらないって言われたよ……」

「そっか……」

でもしようがないかな？

雲雀先輩はツナ君も咬み殺す対象だもん」

「それも言われたよ……」

「あ、そうだったんだ」

「……うん」

んーテンション下がらなくていいと思うけどなー

それだけツナ君を認めてるっていう意味だし……

教えてあげてもいいけど教えたら

雲雀先輩の機嫌が悪くなりそうだから
ツナ君には悪いけど教えてあげない（笑）

休みましよう 3

「優と山本が無事に帰ってきてくれて

ボンゴレI世がシモンIIコザアートを

裏切つてなかったとわかつて

シモンファミリーは騙されただけで本当はいい奴らで……

もう……オレ……迷いはなくなつたよ……」

あ……ふつきれたみたい……

「京子ちゃんのお兄ちゃんもクロームも

全部あの男のせいで……倒すべきはD・スペードだ!!

クロームはもちろん古里炎真も助けるんだ 友達だから」

コアア

おーツナ君の指輪が光つた!

「!? え? あれ? 勝手に!! ナッツ!!」

あ、かわいい

バージョンアップしてるねー

ツナ君に甘えてたと思つたら私のところにも来たねー

膝に擦り寄ってきてかわいいなー

よしよし

「風早は……ナッツにも好かれんのか……」

なぜか獄寺君がシヨック受けてる……

もしかしてまだ瓜に好かれてないのね

時間がある時は獄寺君に懐くように一緒に遊んでるのになー

うーん……何をすれば懐くんだろ?

「私にもわかんないけど好かれるみたいだよ」

「……そういや10代目!」

……話そらしたよ(笑)

「どうして今まで戦闘の時も

ナッツを出さなかったんですか?」

「え……と……」

「嫌だったんだよね?」

ガオ

「やっぱり……」

「そうなんだ……出せなかったんだ

こいつが嫌がって……」

「嫌がる……？」

「ナッツは可愛がってくれる

エンマのことを好いていたからな

エンマと戦うのを拒否してたのかもしれないぞ」

「そ……そうかも!!」

「こいつ変なところ頑固だし……」

「それだけじゃないよねー」

ガルル

うわーかわいい♪

返事をしてくれたよ!

「え?」

ツナ君の心の中で戦うのが嫌と思っていたから

ナッツは出てこなかったんだよねー

「私のミントも似たようなことするんだ

これはツナ君が自分で気付いた方がいいよ」

「わ、わかった」

私が心の中でしたらって思ってることを

よく後押ししようとするんだよね

寂しいなと思ったら雲雀先輩に電話かけようと

勝手に通話ボタン押ししたりするし……

まあ私の知らない間に雲雀先輩が連絡させるように

教え込ませてた可能性もあるけどね（笑）

「ツナ エンマの言っていたエンマの家族が

家光に殺されたって話はどうする」

「……オレ……i世と初代シモンの一件で

ずっと人を信じ続けることが

こんなに難しいのかと思ったよ

自分の心の弱さがよくわかったんだ……
でももう嫌なんだ

今度は自分の心に負けたくない……

最後まで父さんを信じるよ!!」

「……そうか」

「私もツナ君のお父さんを信じるかなー

私との約束を守ってくれたしー」

「優、父さんと約束って?」

「そういえば言っけなかつたね

実はツナ君のお父さんには正体ばらしてたんだよねー」

「ええええ!!」

「家光はオレにも黙ってたのか!?!」

「約束したから黙っててくれたと思うよ」

「優はいつの間に父さんと……」

「確か……ランボ君を保護した夜?」

「ええええ!!? そんな前からー!!?」

「その日に尾行されてね

依頼主が誰か探したらツナ君のお父さんで……」

「び、尾行って……?」

「家光の部下の仕業だな」

「(なに恐ろしいことしてるのー!!?!)」

「しようがないから1度撒いて逆につけたんだよ

誰が犯人か気になったしー

何度もつけられたら面倒だったからね」

「撒いてつけたのか!?!」

「え、あ、うん?」

「そうか(ニヤツ)」

結構……すごいことだったのか……

「あ……そういえば私のリングはD・スピードが持つてる」

「D・スピードが!?!」

「うん……」

最初は炎真君が持ってたけどね……

いつの間にかジェリーさんが持ってたんだ
奪いたかったんだけどねー……」

下手に奪ったら傷がつくから出来なかったんだよね

「そっか……」

「あ、山本君」

「なんだ？」

「すごい嫌なことを聞いてもいい？」

「ん？ああ いいぜ」

「山本君が怪我をした日なんだけど……」

獄寺君、睨まないでほしい……

私だって本当は聞きたくないんだよ

「あの日、野球部のみんなは何でいなかったの？」

練習してなかったから気になって……」

「その日は早めに休む日だったからな

「風早も一緒に練習メニユーを作ったのに覚えてないのか？」

………そうきたかー！！！！

効率のいい練習メニユーが作りたいから

手伝ってほしいって頼まれて

野球部のキャプテン達と一緒に考えて作ったよ！！

私が風紀の仕事をしたせいで

山本君と水野さんが個人練習の時間が早まったのか！！

私ってすつげーバカ！！

「………そういえば作ったねー」

そうだね あの日は休みだったね」

今のが棒読みじゃないことを祈っておこう……

「ああ」

「さて、食べ終わったし私はもう1度寝るよ」

………さっさと逃げさせてください

今は山本君の顔を見る勇気がでないんだ……

「うん

ゆっくり休んで

「ありがとう」

ツナ君の優しさが心に沁みるよ!!

休みましよう 4

私の行動のせいで山本君が危ない目にあつたなんて……

原作通りといえば原作通りだけど

すつごいシヨックだよ……

……寝て忘れよう……もう起きたことだし……

あ、雲雀先輩が起き上がっちゃった……

「ごめんなさい……」

また起こしちゃいましたね

普段は私が動いても起きないのに

気を張ってくれてるんですね

さつきもそれで起きたんだと思うんだよねー

いつもは私の足音では起きないし……

「気にしないでいいよ」

クピツ♪

あ……ロールも起きちゃった……

「ごめんね 起こしちゃったね」

ピイツ♪

よしよし

ロールも怒ってなくて良かったー

あ……冷たい……

また雲雀先輩の手だね……

「まだ熱あるよ」

「今からまた寝ます」

明日もあるしさつきと寝た方がいいしね

「優」

「はい？」

「離れすぎだよ」

やっぱり距離をとって寝ようとしたのばれた？

だって……さつき起きたら……

雲雀先輩が近かったんだもん／／／

もし私が横を向いて寝てて

目が覚めてたら心臓が止まった自信がある！

「これはいつもの距離ですよね？」

「何かあると困るから離れないで」

「でも……」

「優」

……行きます……負けました……

え……まさか……

「いいよ」

いや、私がよくないんです

「……………」

お互い無言でにらみ合い……

でもこれは譲れない戦いだし!!

おお！私の勝ちみたい！溜息ついたしー

うーん、雲雀先輩に背中向けて寝るしかないね

顔をそつちに向けるのは無理だしー

だって私が死んじゃうもん

「おやすみなさい」

ん？なんか左腕を引つ張られてる？

「あああ！ ダメです!!」

右手で抑えるのが間に合ってよかったー

かなり危なかった!!

「…………それはいらぬよ」

怒ってるー!!

背中越しだけど怒ってるのがわかる!!

「いらぬよ」

「う…………」

手を離さないと怖い……

そりゃ私がこれをつけてると嫌だよね……

ビリッ

肅清の腕章が千切れちゃったな……

「……血……」

ぎゃ！包帯が見られるのが嫌なだけだったのに！
まさか血がにじんでるなんて！！

「大丈夫です！！」

もう止まっていますし痛くないですよ！！」

慌てて雲雀先輩の方を向いたけど

ちかっ!?ムリムリムリ!!死んじやうよ！

やっぱり背中越しで話をしよう

「ふうん……僕の間を見て言えないんだね」

「そ、それは違います!!」

近くて恥ずかしいだけで……す……／／／

……言葉にするのも恥ずかしい／／／

「……何して怪我したの」

「ただの私の不注意です……」

「それだと隠す必要なかったよね」

「……怪我するとわかってたのに……」

手を出して怪我したんです……だから……」

見つかると怒られると思って……」

「……許してあげてもいいよ」

うそお!?!いいの!?!

「僕のいうことを1つ聞けばね」

……ですよねー

「……なんですか?」

「ごつち向いて寝なよ」

まじか……あーもうしょうがない!!

寝れば関係ないしね!!

寝れなくても目を閉じれば何とかなるし!!

よし振り返ろう!!

うわー……ちかっ……／／／

が、頑張って寝よう……

「っ!!」

「……使えば？」

雲雀先輩の方を向いて寝ようとすれば
左腕で枕を作るしかないけど怪我が痛くて使えない
で、これを使ってもいいと……

最初のにらみ合いでせつかく勝ったのに!?

「あ、そっち行きますねー」

よく考えたら逃げ道があったね

「ダメだよ」

「そっち側に行っても」

雲雀先輩の方を見て寝ますよ」

ちゃんと意味はわかってるもん……

「……見えてもいいの？」
ん？何を？

雲雀先輩の視線は下を向いてるね

「ひゃー／＼／＼」

「向こう側で寝ると彼らに見える可能性あるよ

休めないから風で抑えないでね」

き、着替えたい……い、今すぐ着替えたい！

なんでこんなにスカートが短いんだ!!

「着替えはないからね」

そんなー!!

いや、持つてるほうがおかしいか……

「もう諦めなよ」

こ、巧妙な罠だ!!

逃げ道がないなんて!!

「し……失礼します……」

う、腕枕がこんなに恥ずかしいなんて……

それも腕を折り曲げて雲雀先輩も乗せてるから

本当に近すぎる……!!

と、とにかく目をつぶらなければ!!

「……少し待って」

「……はい？」

今のは寝るのを待ってってこと？

あ、腕を外したいのね

「やっぱり重いですし痛いんですよね」

「違う」

へ？な、なにになになに!?

ええええええ!?／／／／／

ジジジジ……

あ、あげただけなのね……

かなり焦ったよ……

だっていきなり胸元に手が来るんだもん……

でもそこまで開けてなかったけどな……それに……

「一番上まですると首が絞まって苦しんですけど……」

「……わかった

少しだけ緩めていいよ」

えー……さっきのだったらダメなの……

「何か問題でもあるのかい？」

すっごい圧力がきた!!

何か地雷でも踏んじやったの!?

「も、問題ありません！」

「そう 寝るよ」

「は、はい……」

……やっぱり腕枕は替わらないのね……

もう諦めてさっさと寝よ……

パサッ

「あ、ありがとうございます」

上着をかけたくれたけど……

雲雀先輩は寒くないのかな……

「僕もかかっているから」

良かった……

あ、ヒバードが雲雀先輩の頭の上に……

あれ？ロールは私の肩の上に来たね
今日もふつついて寝てくれるのかな？

「ふふふ」

いつもはヒバードとロールは

ミントのベット……かごの中で寝るから変な感じだ！

「……声は出しちゃダメだよ」

「ん／＼／」

きやー！！こんなところでしないでよー！！

ほっ……良かった……触れるだけの方で……

いやいやいや……安心する方向が間違ってるよね！？

うわっ!?

「あ、あの……」

「おやすみ」

えー……それはないでしょー……

すぐく腰に手をかけてるのが気になるんだけど……

さつきビックリして体が跳ねちやったしー

だから絶対ロールもビックリしたよね

「ロール ゴメンね？」

ピイツ♪

本当にいい子だ!!

ビックリさせた張本人は寝てても怒らないなんて！

……

本当に普通に寝てるし……

この手が気になるのは私だけなの？

考えるのがまたバカらしくなってきた……

私もさっさと寝よ……

「おやすみなさい……」

素直じゃない

「怖くくく怖くくく」

実は残念なお知らせがあんのよ

アーレルハイトとカオルも……やられちまった」

「アーデルハイト……カオル……」

「優ちゃんもボンゴレに行ったぜ」

「……ユウ……サン……」

「そーよ またあいつらだ

お前の大事なもんはみんな奴らが奪う」

「……シモン……ゴザアート……モ……」

「マミ……モ……ボンゴレ……ニ……」

「ツナヨシ……ニ……」

「……あの……雲雀先輩……」

「なに」

「歩けますよ?」

「問題ないよ」

いや……だから……お姫様だっこは恥ずかしい／／／

ツナ君達が行った後に雲雀先輩に声をかけたら

膝カックンされてバランスが崩れた時には

お姫様だっこで抵抗も出来なかったからね……

朝だって雲雀先輩の顔が目の前にあつて

起きた時に心臓止まるかと思つたし……

声にならない悲鳴をあげそうになつたよ

それも雲雀先輩は目を覚ましてたから余計に……

もう私の心臓がもたないんだよ……

「もう体調いいですし……」

だから降ろしてほしい……

「熱あるよね」

「そうですけど……」

「微熱程度ですし普通に歩けますよ?」

熱はほとんどないし

体もそんなに違和感がないんだよねー

今度から制御をとく時間は3分にしよう

「優はすぐ無茶するからね」

「そんな無茶してませんよ……」

「熱があるのに風の力を使って無茶したのは誰?」

「……ごめんなさい……」

「わかればいいよ」

あれ? アルコバレーノの力を

使ったのは怒ってないみたいだね

まあいいか……

無茶したことはこれで許してもらえるみたいだし……

「あ……」

……しまった!

声を出しちやっただよー

「なに」

「いや……」

「優」

「……今……骸君の気配がして……」

「ふうん」

機嫌が悪くなった!

なんでここまで仲が悪いんだろうねー

「多分……この島に来たかと……」

「そう」

咬み殺せるから機嫌が戻った (笑)

うわー……すごいお城だねー

あれはエンマ君の炎だ

「雲雀先輩」

「なに」

「ツナ君に雲雀先輩から

ヒントももらったって聞きました」

返事がないなー

「待ってあげるんですよね?」

「……そうだよ」

雲雀先輩が獲物を譲るってよっぽどだよなー

「そんなに面白くなかったんですか?」

「……そうだよ」

骸君を咬み殺したいけどツナ君の方が今は優先と思うし
来たって教えてしまったけど原作通り見てるんだろうなー

「エンマのことは大丈夫」

「ああっ それなら頼んだぜ ツナ!」

「お気をつけて 10代目!!」

「ありがとう!」

あ!おろしてくれたー

みんなの前では止めてくれて助かったー……

「なに言ってるの?」

あの小動物は僕のエモノだよ」

……小動物って……

「ヒ!! ヒバリさん!!」

「まあ だけど

君が殺されるのを待っててあげるよ

その後で僕が咬み殺す」

……素直じゃない素直じゃない

さつきと大違いだよ! (笑)

「んなー！？」

オレ……殺されるの前提ですか？」

「ヒバリてめー!!」

ナメたこと言ってるじゃねーぞ!!」

「まあまあ 獄寺落ち着けて」

「ぷっ！ あはは!!」

我慢してたけどもう無理だ!!

「風早！ てめえ何笑ってるんだよ!!」

だって雲雀先輩がかわいいだもん（笑）

「ごめんごめん

でも、ツナ君が殺されるかもしれない

ってことを笑ったわけじゃないからね

私のことは気にしないで」

あー元気でた！

炎真君を助けることが出来なかったから

ちよつとテンション下がってたけど

すっごい気が楽になったよ

「……ヒバリさん……すみません！

じゃあ行つてきます！」

ツナ君頑張れー

「優」

「何ですか？」

「後で覚えといてね」

……まじっすか……？

そんなー（泣）

ブラックホール

ツナ君がまっすぐ飛べてない……

「重力だな

恐らくエンマの大地の属性の能力とは

重力を自在に操る能力だ」

私も連れ去られた時は重力で引き寄せられたんだよね

今考えると……私って炎真君と相性悪いかも……

ブラックホール……あれは……最悪と思う……

あれ？でも味方だったらものすごく相性いいのかも？

属性の能力は加速だから加速と重力のコンビは

すっごいことになるね？

ってことは……炎真君とは相性は普通だよな？

その割には相性良いって思ったけど……

あ！そっか

私と炎真君は一度も敵対しなかったから

相性が良かったんだ……

いろいろ考えてたらブラックホールになっちゃった……

ズズ……

やっぱりブラックホールとは相性最悪だよ!!

少し引き寄せられてるよ!!

この距離なのに影響でるなんて思わなかった……

あーリースケボーがほしいよー!!

ってか、リボーン君とランボ君はなんで大丈夫なの!?

絶対私より軽いのにー!!

リボーン君なんて普通にブラックホールの話をしてるし!

「……優？」

ズズズズ……

やっぱりこのままだとピンチだよ

風のと踏ん張りでは足りない!

「バ、バ、めんー」

ブラックホールに引き寄せられてるから
誰か私を掴んで助けてほしい！」

「「?」」

ぐいっ!

「うわっ!」

あ……雲雀先輩が助けてくれた……

「大丈夫?」

「ありがと……」

流石に掴んでもらったら大丈夫みたい……

まあ後ろから腰に手をまわされるのは恥ずかしいけどね……

でもそんなこと言ってられないぐらい

ピンチだったけどねー

それにしてもすごい腕力だね

「おい! 大丈夫なのか!」

「う、うん 心配かけてごめん

雲雀先輩のおかげで大丈夫だよー」

そうしている間に次はツナ君がピンチだ……

でも形態変化で防げたねー

た、助かった……

ブラックホールがなくなったよ

うーん……離してもらってもいいけど

真剣に見てるし……後でいいか……

なんか邪魔しちや悪いしね

あ……今の炎真君の攻撃にわざと当たった

獄寺君と山本君もそう思ったみたい

多分ツナ君は炎真君のために当たったんだと思う

よかった……炎真君が正気に戻った……

さすがツナ君!! 私には絶対出来ないもん……

「ぼ……僕は……」

「もういいんだ 助けにきた」

「! ……ツナ君もボンゴレI世のように

裏切らなかつたんだね」

この後になにかあつた気がする……

あー原作覚えてない!!

えーっと思ひ出せ……思ひ出せ……

ツナ君が新技を出したような気がする

なんで出した?……炎真君を助けるためだよ

原作を覚えてなくてもこれはわかるよねー

ツナ君が力を使うのは友達のためだもん

「でも……ダメなんだ

もう僕は自分の力を制御できない」

そうだったー!!!

炎真君自身がブラックホールになつちやうんだ!!!

つまり………

「きゃー」

やっぱりこうなるのね!!

足がちよつと浮いてるよー

ぐっ

しっかり掴んでくれて助かつた!!

大変かも知れないけど頑張ってください!!

あ、雲雀先輩任せになつてるね……

「大丈夫だよ」

うう……安心します……

さつきより威力が強かつたから危なかつた……

本気で死ぬかと思つた……

私からも雲雀先輩に捕まっておこう……

危なすぎる……

「あ、ありがとう……」

うわ……ツナ君が両手撃ちするよ……

一体どれぐらいの威力になるんだろう……

「絶対助ける!! 誇りに懸けて!!」

……うん

ツナ君の誇りは本当に好きだよ

「ひゃ!!」

本当に威力が凄すぎる!!

今度はツナ君の技に影響だよ!

至近距离で室内だから影響出てるんだろうなー

雲雀先輩が必死に踏ん張ってくれてるよ……

すみません……足手まといで……

ボウ

それも今度は瓦礫から守るため

雲雀先輩が炎を出してくれたし……

「いろいろすみません……助かります」

「問題ないよ」

本当に助かってます……

あ、よかったー

炎真君が無事だったー

私もなんとか無事だった(笑)

雲雀先輩がいなかったら死んでたかも……

ん? 雲雀先輩が離してくれたよ

つまり行っていいってことだよね?

「すみません

ありがとうございます」

変わらない

ランボ君の言うとおりでござい髪のみだねー
それほど威力が強かったってことだね

「ごめん 僕達の勘違いでこんなことに……」

「……いいんだ

エンマ達のせいじゃないよ」

「ああ」

「わりーのはD・スピードだ」

「そうだよー

炎真君達が気にすることじゃないよ？」

「……僕……優さんにも……」

あ、幻覚にかかって私を攻撃した時のこと？

ん？炎真君は気付いていたの？

まあいいか……

「大丈夫だよ♪」

「……でもまだ血が……」

あ、突き刺した方ね……

「包帯を替えてないだけで血は止まってるよ

違和感も全然ないよー

だからもうほつといても問題……」

う、後ろの方から凄い威圧感が……

「優は後でボンゴレの医療チームに診てもらえ

「リボン君ありがとう!! そうするよ!!」

「「「……ぷっ」」」

……みんなに笑われた (泣)

まあ炎真君も気にしなくなつたからいいか……

「……一つ聞いてもいいかな ツナ君

『誇りに懸けて』って言ったけど」

「ん？」

「ツナ君の誇りって何なの？」

「あれ？ わからないの？」

「優さんはわかるの？」

「ツナ君はわかりやすいと思うけど……」

「優はオレと一緒にだからじゃないの？」

「そうだといいなー」

「そうだよ」

オレの誇りそれは……君だよ

本当のこと言うところに来てからも

ずっとわからなかったんだ……

誇りなんて今まで考えたことなかったし……

そんな立派なものを持つてる自信がなかったよ……

でもヒバリさんが譲れないものが誇りだって教えてくれて……

それだったら迷うことなく答えれるよ

オレの誇りは仲間だし 友達だって!!」

……ツナ君の考えはやっぱり大好きだなー

あ、炎真君になにがあったか教えてるね

私は雲雀先輩のところに行こうー

「ただいまです」

「おかえり」

やっぱり言ってくれるんだー

嬉しいなー♪

ん？どこ見てるんだろ？……腕ね……

「……後で診てもらいますねー」

「当たり前だよ」

はい……すみません……

「優」

「なんですか？」

「さっき何があったの」

さつき?……あーあれね

みんなは引き寄せられてないのに
私だけ引き寄せられたからね

「風の影響を受けてしまったんですよ

私はみんなと違って風の影響受けやすいので……

風が強い台風とかも影響を受けますよ?」

「……聞いてないよ」

「台風ぐらいだと普段操れてる風で

なんとかなる可能性が高いですしー

外に出なかつたら全く影響受けないので

そういう日は家で大人しくしてますよ?」

前の世界でも台風の日が大嫌い

1人でうずくまっていたりしたよねー

多分無意識に自分を守ってたと思う

でもこのヒントで風を操れるって思うのは無理だよ(笑)

「そう」

「まあそういう日は少し怖くて苦手ですけどね」

「……わかった」

「といっても……台風が直撃するのは

滅多にないですから大丈夫ですよー

さっきのはブラックホールだったからです

威力が違いすぎます

風がブラックホールに吸い寄せられてるので

私も吸い寄せられたんですよ

普通の重力だったら大丈夫ですよ」

風の弱点は風ってことなんだろうねー

力負けしたら自分の意思関係なく風に流される……

普段の風は気持ちいいんだけどねー

「わかった」

あ、今思ったら……

炎真君の技に吸い寄せられるって

違う見方をすると……相性いいよね（笑）

復讐者が来た……

透明のおしやぶり？見たことないな

最後まで見たけど……さっぱりわからない（笑）

んー何だろうねー

「おい復讐者!!」

なぜお前達はその透明のおしやぶりを持ってるんだ!!

あれ？なんでリボーン君が叫んでるんだろ？

うーん……さっぱりだね

みんなD・スペードと骸君のところに行くみたい

私は雲雀先輩と一緒に行こうかなー

「みんな行きましたねー

私たちも行きましたよー」

ぐいっ

あれ？引っ張られた……

「どうかしたんですか？」

「あれ なにかあるの」

おしやぶりだから聞いたのかな？

リボーン君が叫んだしねー

「私には心当たりないですね

なんでリボーン君が叫んだかもわかりません」

「そう」

「私とリボーン君達は何か違うかも知れません

まあただの私の情報不足の可能性も……」

リボーン君は私が知らなくても

特に反応しなかったしな……

それとも後で私と話をすると判断したか……

「……どうして話してないの？」

私の性格からすれば情報収集は絶対するもんね

「リボン君は多分私が話を聞きたくないと

思ったんでしょねー」

ツナ君と一緒に聞きますって言ってから

リボン君から私に話をふったことはないしね

私の聞きたいタイミングを待ってると思うんだよね

そして私はそれをわかって利用したんだよ……

本当に性格悪いよねー……

「……どういふこと」

「そろそろ行きましょー」

「優」

言うと思った……しようがない……

ぎゅっ

「……優？」

ボソボソツ……

お願いだからこれで勘弁してほしい……

さっさと離れよう……

「……」

何も言わない……怒ってるかも……

そうだよね……肝心なことは一言も言っていないしね……

ただ抱きしめて弱音を吐いただけだもん……

「……僕の隣が優の居場所だよ

これから何があってもそれは変わらない」

「え……？」

「だから見失った時はここに戻ってきなよ」

「でも……」

「約束だよ」

「……はい」

「行くよ」

「……はっ！」

ケンカを売る

あ、骸君だー

ビュッ

……見るとすぐ攻撃するのは止めようよ
トンファーがきれいに飛んでいったなー
そしてすぐ反応した骸君もすごいよね

「咬み殺そうと思ったが

それだけ体力を使い果たしては勝負にならないな」

「……ぷっー」

あ、笑ったからにらまれちゃった……

でも我慢したほうだと思おうよ！

「クフフ 雲雀恭弥

僕はいつでも相手になりますよ」

「ぷっー」

やっぱいクスクス笑ってしまう!!

なんで2人ともこんなにプライド高いの!?(笑)

わざわざ遠まわしに休むように言うの?

今は絶対相手に出来ないのに言うの?

これが男のプライドっていうものなの!?

私にはさっぱりわからない!!

「うるさいよ」

「黙りなさい」

「あははは!!」

言葉は違うけどハモった!!

やばいつぼに入った!!

「「……………」」

「…………反応速度が落ちてる……」

今やってもつまらないよ」

「…………はつきり言ってくれますね」

やばい!!(笑)

2人とも私の存在を無視して話してる!!!

あ、骸君がかえつちやうみたい

休むって言うてるしそろそろ笑うの止めないと……

「ふー……笑いすぎて疲れたー……」

腹筋をかなり使った気がするよ……

「……………」

「……10代目……風早が……」

1番ケンカ売ってる気がするのは……

……気のせいですか?」

「……気のせいじゃないと思うよ」

へ?なんで?

私は笑ってただけだよ?

ケンカ売ってたのは雲雀先輩じゃん

「……無自覚とは……」

「あ、骸君疲れてるんでしょー

無理しないで早く戻ったほうがいいよー」

「……あなたのせいで余計疲れました」

「えええ!?! なんで!?!」

とりあえず……ごめんね?」

「貸しにしておきます」

えー!そんなー……

骸君に貸しを作ると面倒な気がするー……

「君の肉体を乗っ取るその日まで

クローンを頼みますよ 沢田 綱吉」

あ、こっちも見たねー

私にも頼んでるんだらうね

でも直接言っただけから

多分貸しはなくならないのかも……

「それでは」

ふっ

おお!何度見ても凄いね

クロームちゃんに戻ったよ

それよりクロームちゃんがこのままだと危ない……

倒れて怪我でもしたら大変だ!!

浮かせてあげないとねー

ふわっ

バキッ

ん？バキッって何の音？

ズサッ

あ、リボン君が危ないと思って

ツナ君を殴ったりしたのかな？

クロームちゃんが倒れる位置に

ヘッドスライディングしてるしねー

私……クロームちゃんを助けちゃったよ……

……倒れさせて最後に優しくツナ君の上におろそう！

「ナイススライディング！」

……山本君だけ気付いてない！（笑）

みんな私が力を使ったのを気付いてるけど

言わない優しさだと思う

だってみんなチラッと私を見たもん……

バササ

あ、骸君の気配がするねー

やっぱりこれは避けられないのかー

まあD・スピードと戦わないとみんなが出れないしね

ってか、私が1番気付くの早いよ

骸君の感じが凄くするのにツナ君と

クロームちゃんはなんで気付かないんだろ？

「どうしたの？」

「……」

うわ！私の頭の上に乗らないでよー

「んー別にあげてもいいけど違うよね？

さつきほしいって言わなかったしー

何かあったの？」

「なあ風早 さつきから何いってんだ？」

あ、説明してないと

1人でしゃべってる怪しい人にしか見えないよね

「困りました」

「ムクロウ!？」

「え？ まだ2人ともわからないの？」

「あなたの勘が良すぎです」

「普通に気配がするよ？」

あ、でもクロームちゃんが

まだ気付いてないからそうなのかもねー」

原作知識と気配に敏感だから

気付くのが早かったのもあると思うけどね

「そうですよ」

「この声……まさか……」

「骸様!!」

あ、やっとわかったねー

ん？雲雀先輩がこつち来るけど……まさか……

ビュッ

トンファーが私の頭上を通過した……

ま、まあ投げてない分ましと思っただいよね？

投げるとコントロールが悪くなるから使わなかったんだよね？

そうだよね？私にもむかっているんじゃないよね？

後で怒られるのやだよ!?(泣)

私が頭の上に乗せたわけじゃないんだからね!!

ってか、その前に骸君……

私の頭を踏み台にして逃げないでよ……

地味にまだ痛いんだけど……

とりあえず自分で頭を撫でておこう……

絶対髪の毛がボサボサになつてると思うし……
うう……私の大事な髪が……（泣）

んーやっぱりそうだよねー

骸君が自分の身体に戻ろうとしたけど
ブロックされてるって言ってるしねー

「骸君、私の体力使えば

クロームちゃんに憑依できると思う？」

「……難しいでしょうね」

「わかった」

骸君が参戦できれば原作より楽できると思つたけど
やっぱりそこまで力は回復できないか……

役立たず 1

あ、そうだった……

シモンリングの覚醒がきっかけで

骸君の肉体がとられちゃったんだよね

でもあのタイミングで倒すのは無理だったしな……

「なあ エンマ

さつきからさつぱり話が見えねーんだが……」

「ジェリーはいいんだよ」

あ、そうだ！

そっちに行こう!!

「ジェリーさん!!」

「およう？　なんでオレちんの名前知ってんの？

すつげーかわいい子が覚えてくれてるなんて

オレちん感激！　付き合おーぜ♪」

うわあああ!!

ジェーリーさんって元からこんな感じだったのね……

いや、誰にも正体がばれなかったんだから

元からに決まってるか……まじで苦手なタイプだ……

あ、急がないと雲雀先輩が咬み殺しちゃうよ

だって殺気が私の背後の方から感じるもん

「お断りします！

それよりリング持ってないですか？

ジェリーさんが持つてると思うんですよ!!」

「リング？」

「そうです！

水色のリングと恐竜の顔のリングです！」

「そうだ！

優さんのリングはジェリーに預けてたんだ！」

やつぱり炎真君が渡したんだねー

多分2人つきりで会ったタイミングと思う

「ん？ オレが持つてんの？」

「そうなんだ！」

「ジェーリー探して！」

「お、おう？」

う……このタイミングで復讐者が来た……

いつも思うけど複数だよー

なんか意味でもあるのかな？

「やっぱりに戦いに敗れた

ジェリーを連れていくんだ」

「なに〜〜!？」

〈否〉

「違うって！ リング探して!!」

「お、おう……」

うん……復讐者に……

すっごいにらまれてる気がする（笑）

ごめんよ……どうでもいい存在として扱って……

でもしようがないじゃん！

今はリングがほしいんだもん！

んー……原作と一緒かな？

牢獄で暴れて脱獄してるっていつてるしね

「あー、それです!!」

おー私のリングとミントー!!

だから空気読めってオーラを出さないでよね

〈D・スピードはお前達が処理せよ〉

ほらー！やっぱりにリングがいるじゃん！

復讐者が相手をしてくれるなら

別にリングは急がなくていいんだよ！

だから存在を無視するのは復讐者の自業自得と思う！

〈D・スピードは昔も今も

ボンゴレに所属するボンゴレの人間だ

ここまでヤツを増長させたのはボンゴレの責任

「なんであれ脱獄囚を他人に委ねるとは

お前達らしくねーな」

〈黙るがいい アルコバレーノ〉

アルコバレーノって言わないでよ

私も一応アルコバレーノなんだからねー

あ、私にも言ってるのかも（笑）

「いいんだ リボーン」

最初からそのつもりだったし……ただそれなら……

ボンゴレのシモンの戦いは無くなったんだ！

お兄さんやシモンのみんなを牢獄から出してくれ!!」

〈……古里炎真 お前の意見は〉

「僕も同じだ!!」

〈その眼差し……

あの時のジェットとコザアートと同じ……

10代の時を経てようやく2人の誓いが

果たされたということか……いいだろう

Dを倒せば牢獄にいるファミリーを解放する

うん……やっぱり勝たないといけないね

〈だが、お前はこちらに来てもらう〉

ガシヤシヤシン

「え……?」

「「!?」」

いつの間に後ろに復讐者がもう1人いたの……

というか……なんで私が捕まってるの……?」

完全に油断してた

首と手首を両方拘束されちゃったし……

「優ー!」

「優さん!」

「……優は負けてない」

雲雀先輩がすごく怒ってる……

このタイミングで復讐者に挑みそうだよ
〈投獄ではない〉

はい？投獄じゃない？

「投獄じゃねえならなんで連れて行くんだ」

私もりボーン君の意見に賛成です！

〈危害は加えない〉

「彼女はD・スペードと相性がいい」

おお……骸君まで意見したよ

まあ自分の肉体が関わってるのが理由と思う
ついでに私の心配もしてくれてるよね？

疑問系になっちゃうのが不思議だよ

あれ？意外と私って冷静だね

「そうだぞ

お前らがボンゴレで倒せと言ったんだぞ

優もボンゴレだ」

〈黙れ〉

「あの……なんで？」

私には説明してほしい

みんなを追って行くなんて嫌だもん

〈………Dを倒せば必ず解放する〉

何………ここでは言えないことなの？

それとも話す気がないのか？

「信用できるかよ!!」

〈約束は守る〉

あ、さっきの記憶の人だ

「一体何者なの!？」

〈バミューダの輝きと共に復讐する者〉

バミューダねえ……

うん！誰だよ！全くわからない!!

「い、ごめん！」

私……役に立てないみたい……」

「優……」

〈………来たな〉

うわー吸い込まれて行ったよー!!!

役立たず 2

今、私は何をしてるんだろう……

いや、まじで

でもラッキーなのがもう拘束されてないんだよね

この場所に放置されて見張られてるだけ（笑）

ガルル

あ、ミントは引つ張られる時に勝手に出てきたんだよね

多分私が危ないと思っただろうねー

復讐者がミントに何かするかなーと思っ

心配したけど特に何もなかった

こつちから手を出さなかったら安全っぽい

まあわからないけどね

だからミントは絶対戻さない

でもミントと一緒に戦う気は今のところはない

復讐者がワラワラ出てきたら困るもん

強そうっていうのもあるけどなんかゾンビみたいで怖いんだよ

まあそれに私がいなくてことは

あつちは多分原作通りに進むはずっていうのもあるけどね

信じて待つていれば解放されると思うしねー

風の波動をD・スペードが使えるわけないしー

私が拘束されたし絶対雲雀先輩から戦うと思うしね

すごい本当に原作がズレない!!（笑）

でもさ、私……最後の方を見てないんだよ

出来れば見たかったんだよね

まあもうこれは諦めるしかないか……

いろいろ思いながらこの部屋？を見てたけど

どこかの洞窟なのかな？

彫って作ったような感じだ

電気とか通ってないから蝋燭だし……

場所を調べようにもここから動くことは出来ないから却下

「風で念のために逃げ道を探るぐらいだよね

逃げることは原作通りに進めば考えなくていいと思うし……

誓いの炎のところまでしか見てないから

ちよつと樂觀的過ぎるかもしれないけどそこは信じよう

それに他に考えたいことがあるんだよ……うーん……

ガルツ！

おお！流石ミントだ!!

私がちよつと集中して考えたいことを

察知して任せろつて言ってくれてるよ

ここはミントに任せよう

私と一緒にミントは気配に敏感だから

何かあれば絶対気付くもんね

で、気になるのは……

なんで復讐者がこんなことをしたかだよ

力を使うことを避けたいみたいなこと言ってたよね

私を拉致したことは力を使うことにならないの？

目的がわからない……D・スピードに味方した？

いや、D・スピードに味方をするなら私以外も拘束するよ

これはないな

次、私を守ってくれた

なぜ復讐者がそんなことをするのか……

この場合だと何か理由があるんだらうね

でも今の現状ではわからない

可能性があるとすれば

私を呼んだ人が復讐者に指示を出していた

あんまり早く死んでもらったら困るとか言っていたし

D・スピードが力を増してるから

1番最初に狙われるのは私と思うし可能性はある

マインドコントロール出来なかつたら

その時点で私は殺されると思うしね

この場合だと復讐者のボス？が私を呼んだ人の可能性が高い

となると……私を呼んだ人の名前はバミューダ？
でも声を聞いただけとか言ってたし違う？

あーわわからない!!

情報が少なすぎる……

つてか、その前に復讐する者って言ってるくせに私を助ける
あれ？また最初に戻った……

いや、さつきとはちよつと違う

私を助けたんじゃないやなくてそうなたただけだとしたら？

復讐するために私が必要だったとか？

そう考えると原作でリボーン君を止めたのは

リボーン君も必要だったから？

私とリボーン君の共通点はアルコバレーノ

さつきの白いおしやぶりが関わってくる？

あ、I世が復讐者のことをバミューダって呼んだよね？

そしてさつきの人がバミューダの輝きと共について言った

つまり白いおしやぶりの人がバミューダ？

自分のことを輝きと共について言わないもんね

あの場所に2人しかいなかった前提だけ……

見えてない位置に誰かいたとかは……ないと思う

その考えでいくと私を呼んだ人と声が違う

口調も違うよねー

あの人は優しそうな女の人って感じの声だし……

みんなを呪った人を優しい女の人の声と表現していいのか？

まあそれは後回しでー

そもそも……あの声が本物なのかも怪しい

女の人に見せかけて男の人っていう可能性もある

リボーン君達が探してるのに見つからないんだ

その可能性が高いよねー

うわー今までその可能性を考えてなかった

呼んだ人はあの声って完全に思い込んでいたよ

あ、考えがそれた

復讐するにはアルコバレーノが必要？

そう考えると未来で白蘭さんの時は

平等扱いしていたのがおかしい

アルコバレーノが死んでもいいっていう考えになる

あ、バミューダ？も白いおしやぶりを提げてたし

死んでいたか動けなかったただけかも……

いや、復讐者は未来で行動していたよ

その赤ん坊が死んでも関係ないね

あれ？そもそもバミューダっていう人は何歳なんだ？

とつくに死んでるか……

もし過去の記憶と同じ人だったらすごいよね

でもアルコバレーノっぽいし否定できない……

また考えがそれた!!ややこしい!!

未来で復讐者がアルコバレーノを助けなかったのは

復讐者の復讐には関係ないことだから？

でも私は関係がある……？

もしかして……どの未来でも私が死んでなかったり

白蘭さんに捕まってなかったのは復讐者が助けてた？

いや、それはないよ

それだと白蘭さんが知識を共有して気付いてるもん

私がいることで原作がかわってて

実は私が知らないだけで白蘭さんは復讐者と敵対してた？

……やっぱりこれはない

GHOSTは復讐者に捕らえられてたのを利用して

骸君が外に出てたからね

ダメだ……考えてもわからない

情報が少なすぎる……

未来では手を出す気がなかったけど

状況がかわって今回は私を助けたと考えられるけど

それは私が知っている情報が正しかった場合だけだ

どれか1つでもウソだとダメだ

それに状況がかわって私を助けたとか正直無理がある
もし急に状況がかわったなら私に何か言うと思う

だって復讐に私が関わってる可能性高いもん

復讐するために生きてるみたいな感じだし

私から何かヒントを得ようとするよ

え……拷問準備中とかじゃないよね……？

ぶっちゃけ私は何も知らないよ!?

ね、念のため……やっぱり逃げ道を探っておこう……

役立たず 3

あ、記憶が届いたよ

これって勝ったってことだよな？

.....

んー違うっぽい気がする

1つとなり炎を灯すって言ってるから

誓いの炎のところかな？

うわー見たかった!!!

くそー諦めるしかないんなんて.....!

まあ届いた記憶でまた整理しよう

バミューダ？っていう赤ん坊は

未来のことを知ってるみたいなのかな

うーん.....ずっと未来まで絡み合う運命ねえ.....

私のことも未来がわかっているのかな？

でも私は原作にはいない存在だし.....

.....

あれ？今思うと変だ.....

なんで気付かなかったんだろう

私の状況がおかしすぎるから納得してしまった？

あー私のバカ!!

なんで.....私をこの世界に呼んだ人は

原作のことを知っていたんだろう.....

この違和感になんで私は気付かなかった？

世界のバランスが崩れたことを知るのとはわかんと思う

そうじゃないと私を呼ぼうとしないからね

.....原作知識.....

これは前の世界で読んだ私だけが知ってる情報だよ

呼んだ人も知っていた.....？

それとも神様みたいに私の情報を読み取った？

ってか、読み取るのは簡単に出来ることなの？

もしかして私は今までに会ったことがあるんじゃない？

……ダメだ。わからない

でもこれで1つの可能性が出てきた

私を呼んだ人は……リボン君達を呪った人とは違う？

リボン君達を呪った人は原作に出てくると思う

もし私を呪った人が私の情報を読み取ってなかったとする

そう考えると……私を呪った人は私がいた元の世界の人……？

私を知っている原作で助けたいいけない人は白蘭だけか……

これは私の知らない原作を知っているともとれる……

呼ばれたのは私だけではなかった……？

いや、神様が私にウソをつくとは思えない

それにこのウソについてももしかたがない

だって私以外にいても私の力では元の世界に戻すことは出来ない

話を聞いてもこの世界と一緒に頑張っていこうって思うぐらい

わざわざウソをつく必要がないね

あー呼んだ人のことはわからないけど……

私を呼んだ人はリボン君達を呪った人じゃない気がする

リボン君達を呪った人なのに優しそうな人と思っただけ……

もしかすると心の中で気付いていた？

……でもこれは私のただの勘だ

私は呼ばれた時にトラックにひかれる直前から記憶が無い

その時に接触して私が気付いていないだけかもしれない

でも……元の世界で生きていた私を呼べるんだ

向こうの知識を知っていてもおかしくはない……

………あ

根本的に間違っている……私を呼ぶ力があるんだよ

……神様ぐらいの強い力があるのは当たり前だ

私の知っている神様はこの世界の神様じゃないって言った

じゃああの人はこの世界の神様……？

神様に聞いても……意味は無いね……

今、私が考えていることはわかっていると思う

何も言わないってことは話せないんだ
神様関係の話は私には話せないと思う

実際、私は被害者なのに原因は教えてもらったけど
あほな神様のことはなーんにも知らないしね

……えー！

私を呼んだ人は神様だったの!?

……めっちゃ普通に話してしまった

いや、私についてる神様にも敬語使ってないけどさ
でも私についてる神様には親しみがあるというか……

神様に親しみがあるっておかしくない!?

いやーどうしよう！

神様ごめんなさい……今までのこと許してー！

『……おい 思考がずれてるぞ』

あ、本当だ

『俺は今まで通りがいいぞ』

え？ほんとに!?

良かったー……あ、もう敬語使ってないね（笑）

『神様と言っても敬う者ではないしな』

え？敬うものだよ

信仰してる人がいっぱいいるのに言っちゃダメだよー

『……そうだな』

オレを敬うほどの価値はない……が正しいな』

……どうしたの？

『……優に手助けするって言っても』

出来ることは限られてるからなー』

何言ってるの？

今までいっぱい手助けしてもらってるよ？

『そうか……』

うん

ガルルル！

「んっ…ミントっっ」

あ、さつきちらつと素顔を見せた復讐者だよ
えーつと拷問じゃない事を願います！

△D・スペードを倒した

ここから元の場所に戻る△

……終わつちやつたんだ

やつぱり見たかった…… (泣)

まあいいや

早く戻ってみみんなを安心させないとねー

「ミント行こっか」

ガール♪

ミントは警戒してないし

このまま通つても大丈夫そうだねー

こういう時は動物の勘を頼りにするのが1番だよねー

見つける

ふむ？どういう状況だろう？

んー獄寺君たちも普通にいるしー

シモンファミリーもみんないるよ

つまり私が最後？

あ、ツナ君と目があった

「優!!」

「ひゃほ〜」

気の抜けた返事だけどこれで元気づってわかるよねー

うわー雲雀先輩がすごい速度でこっち来たよ（笑）

「大丈夫です

特に何もありませんでした」

あ、ミントも首を縦に振ってくれてるよ

「……わかった」

「あの……ちよつと行ってもいいです?」

どこに行くかは言っていないのにわかったんだらうね

機嫌がすごく悪くなったよ

まあ返事はしなかったけど止めなかったから

行っていいんだらうねー

早く治れば戦える日も早くなるからね

「無理はしませんから安心してください」

「当たり前だよ」

……そうですねー

ツナ君とクロームちゃんも一緒にいるねー

さして、怪我はどんな感じかな？

あちやーボロボロだねー

「骸君大丈夫?」

「ええ」

絶対大丈夫じゃないのに大丈夫って言った!!

まあここは笑うのは止めておこう

「体力あげるから勝手にさわるよー」

「おや? いいのですか?」

あ、雲雀先輩の方をチラツツと見て言ったよ

「骸君の怪我が早く治ってほしいからいいんだよ」

ツナ君とクロームちゃんは意味がわかってないな

でも骸君はわかってるみたい

だって、クフフと笑ってるしー

いつも思うけどすっごい変な笑い声だよねー

頭が変なんだろうねー

あ、そうだよねーだってパイナツポーだもん!

「……今、失礼なことを考えませんでした?」

「そんなことないよー?」

と返事をした後に

ふふふと笑ったらクフフという笑い声が聞こえてきた

少しツナ君が後ずさりしてるのは気のせいだよねー

え?別に頭を踏み台にしたことに怒ってるわけじゃないよ?

私の大事な髪の毛をグシャグシャにされたから

そのパイナツポーな頭を

グシャグシャにしたいのを我慢してるだけだよ

〈聞け〉

あ、また復讐者がやってきたよ

少し空気が怪しかったからちようどいいか

ふむふむ。8番目の鍵ねー

・・・

そっかー

再び笑いあえる日はツナ君達の代で実現するんだねー

これからいい思い出を作っていくんだろうなー

さて、骸君に体力をあげたし

私は雲雀先輩のところに戻ろうー

「そういえば帰りたくても帰れないよね？」

ツナ君達と一緒に帰るしかないよ

雲雀先輩は我慢できるのかな？

確か……ツナ君達は船で来てたよね？

多分どこかの部屋に引きこもるんだらうねー

「……どうしたの」

うわー雲雀先輩はすごいなー

私のわずかな違いに気付くなんて……

「んーもう少し待っててください」

「……わかった」

「あー！もし私が黙って姿を消した時は

もう隣を開けなくていいですからね」

「……何言ってるの」

「私は必ず声をかけるっていう宣言です

話す勇気がなければ手紙を必ず置いていきます

声もかけずにいなくなったら何かあったということですよ

今の情報だけでは復讐者が私を助けた理由がわかりません

でも何か理由があるはずですよ

優の時にあれば防げる自信がありません」

「見つけるよ」

あーもう苦笑いしか出てこないなー

あ、苦笑いをしたから機嫌が悪くなった（笑）

「必ず見つける」

真剣な目をして言われちゃった

だから笑って返事をすれば機嫌が戻ったよ

見つけてほしいですって本当は声に出したかったんだけどね

心の中で思ってるから別にいいよねー

訪問者 1

「え?! 雲雀先輩は黒曜中に行ったんですか?」

「は、はい」

急に今日の持ち物検査を中止したのは

骸君を咬み殺しに行ったのねー

……頑張って早起きした意味がなかったよ!

ってか、まだあれから1週間しかたってないのに……

「で、この書類を置いていったと……」

「はい……」

つまり、わざと私に言わなかったなー

そしてこの書類を整理して大人しくしてろってことだね

まだ私を怪我人扱いするのね……もう治ってるのに……

正直、書類ばかりで厭きてきたんだよ

帰ってすぐみんなに話を聞きに行くんじゃないかなー

コンコン

ん? 誰か来たよ

雲雀先輩がいないからトラブルでも発生したのかな?

「失礼します!」

「どうかしたのか?」

うわー……すっごい嫌がらせをするねー

「誰の許可を得てこの部屋に入ってるのかなー?」

草壁さんが私の発言にビックリしたけど

私のことを信じて警戒したねー

「おや? よろしいのですか?」

「問題ないよー

この人は雲雀先輩が1番信頼している部下だしー」

あ、幻覚をといいたよ

幻覚と言っても学ランを長く着たくないんだろうねー

「なっ!?!」

うん。うん。

これが普通の反応だよねー

「今日、雲雀先輩は骸君を咬み殺すために

黒曜中に行ったのにどうしてここにいるのかなー？」

笑ってるからやっぱり知ってたのねー……

帰ってきたら機嫌悪そう……

「少々私に付き合っていたらいいんだけどー

「お断りしまーす」

また2人で怪しい笑いあいをしちゃったよ

「ちゃんと説明してくれないとそう答えるしかないよ？」

それに電話で済む内容じゃないんだよね？

雲雀先輩がいない時を狙って私に会いに来たんだ

結構、真剣な話でしょ？

簡単に返事は出来ないよー」

ついでに嫌がらせでこのタイミングで来たと思うけどー

「あなたは昨日クロームと会いましたね」

昨日、ご飯を届けた時に

クロームちゃんのお腹が変だなーって思ったのは

やっぱり気のせいじゃなかったんだ……

「私はあなたに何もしないよう言いに来ました」

つまり骸君の意思で幻覚をやめたわけじゃないんだね

そして骸君はクロームちゃんのために

手を出さないでほしいと言ってるんだね……

「……努力はする」

絶対手を出したくなるから約束は出来ないよねー（笑）

「そうですか

あなたが死ねば私は計画が実行しやすくなりますね」

クロームちゃんを助けようとすれば私が死んじやうかも……

そしてツナ君をのっとりやすくなるか……

つまり遠まわしに死ぬなって言ってるんだよねー

まあクロームちゃんを信じろっていうのもあると思うけどね

あー邪魔しないようにいた草壁さんが動揺しちゃった……

「……じゃあ手は出さないよ

また骸君の計画の邪魔をしちゃったねー」

「ええ

ですが、あなたにはまだ利用価値がありますので」

「私は骸君に利用されるつもりはないよー?」

弁当は自分がしたいから届けてるもん

だから利用されてはいないよねー

「おや? お忘れですか?」

あなたは私に借りがあるでしょう?」

え? そんなのあった?

……まさか……

「あれって本気で言ってたの!?!」

「当然です」

うわーまじか……

ってか、私はなんで骸君を疲れさせたんだろ?

でも誰もツツコミしなかったから納得したってことだよね?

うーん……まあいいか

「しばらく沢田綱吉にクロームを頼むことにしました」

もう決定事項なのねー

「んーわかった

私はクロームちゃんとの接触をひかえるよ」

会ったら絶対手を出しちゃう気がするし……

「そうですか

では、またお会いしましょう」

うわー骸君……すっごくかっこ悪い……

霧のように消えてどこかに行っただけ

私には窓から出て行ったのも見えてるんだ……

なんか……ごめん……

「……風早さん」

さっきのことをまだ気にしてるよねー……

「……だ、大丈夫ですよ?」

手を出しても死なない方法もあったと思いますし……」

「風早さん！」

流石……草壁さんだ……

手を出せば死んでしまうとすぐ思い浮かぶということは
死なない方法があったとしても

それ相当のリスクがあるのことに気付いてる……

「わかっていますよ？」

実は1度そういうことをしちやって

それからもし次にするとすれば

雲雀先輩に話をしてからすると約束して……」

ドンドン声が小さくなっていくのは

しようがないと思う……

だって草壁さんが怒ってるんだもん!!

「ごめんなさ……」

ん？これはどういうこと？

あーもう原作知識がないから全くわからない！

「……どうかしましたか？」

「いや、さっきいた人が

ちゃんと学校から出て行ったか

気配で確認してたんですけど……」

あ、草壁さんが骸君を警戒しちやった

「違います

さっきの人じゃなくて別の手練れです」

「……手練れですか？」

「はい。素人ではありません」

一瞬ベルさんかと思っただけ……

ベルさんと比べると劣ってるし複数だよ

でも一直線にここに向かってくるような

狙いは……私か……？

とりあえず隠していたフードを着るべきか……

草壁さんに対応できる相手ではないし……

「草壁さんは……」

離れるように言おう思ったけど動く気はないみたいだね
今回も窓からだねー……来る！

訪問者 2

……ある意味当たってたよ……でもなんでだ!!
君達だったのか……

もう少して攻撃するところだったぞ?”

「二「申し訳ございません!!」」

うーん……ヴァリアーの部下の人達だよ

それも私の正体を知っている数少ない部下の人達だから普通に話してもいいけど……

ヴェントの用事だと思っしこのままでもいいか……

君に何の用?”

「スクアーロ隊長からのご命令です

収集がかかっています!」

……電話しろよ!?

君を今すぐ連れて来いって命令されたのか?”

「はい」

……なるほどねー

ベルさんが迎えに来たら途中で寄り道するからねー

でも……電話すればいいじゃん……

まあ私が拒否出来ないようにしたんだろうねー

ってか、その前に……

君の手を借りるほど困ってるのか?”

「わかりません

ですが……隊長からの伝言では

ヒバリのアホオを置いてさっさと来いと……」

……草壁さん……殺気を抑えてください

……空港はいつものところだろ?”

先に行つててくれ”

「ですが……」

君わかつてるよ

君達は任務が失敗すれば殺されかけるんだろ?

用事を済ませてすぐに行く”

「「はい!!」」

彼らはいつものどんなひどい目に合わされてるんだ……？
ちよつと感動された目で返事をされて出て行ったよ……

さて、私は行く準備しないとねー

「……風早さん」

「えーつと……すみません

書類をお願いします」

「……委員長には……」

「あ、大丈夫です

黒曜中に寄ってから行きます」

「わかりました

……お気をつけて」

「そうですよねー

私を収集するぐらいだから

厄介な相手の可能性が高いですよねー」

でも強い相手だとみんな喜びそうと思うんだけど……

あ！どこかに進入するとかかな？

私がいれば人に見つからずに任務を終えられる可能性あるよ

「まあ大丈夫ですよ

私以外のメンバーは暗殺のプロですからね」

「……そ、そうですか」

あ……暗殺のプロと聞けば普通は安心出来ないか……

まあいいや……

草壁さんに挨拶して早く雲雀先輩のところに行こう

あ、いたよ……うん……探してるよ（笑）

急いで雲雀先輩に話さないかねー

パシッ!

……何か来ると思ってたんだろうねー

条件反射でトンファーが私の目の前に来たよ

まあそのトンファーを右手で掴んだ私も凄いと思う

でもすぐ攻撃するのはやめたほうがいいと思う

まあ今回はすごいスピードで走って現れた私が悪いか……

……どうも”

「……何してるの?」

”急に任務が入ったんだ

悪いがイタリアに行つて来る”

「いやだ」

……このやり取りも慣れてきた気がする

”僕が行かないと殺されそうな人達がいるんだ”

「知らない」

……だからどうすれば?

”緊急収集なんだ

行かないともし何かあった時に後悔する”

「……………」

”すぐ帰ってくる

必ず後で連絡するよ”

「……………わかった

気をつけてよ」

”ああ

それと…………”

まだ何かあるの?

って感じで機嫌が悪くならないでほしい

”骸を見つ”どこ”……………今どこにいるかは知らないぞ”

「それでもいいよ」

”並盛中学校の応接室に来た”

……………うわーすごい殺気……………

”僕に忠告するために来たんだ

ちようどすれ違ったみたいだな”

「……………へえ」

ちようどつていう言葉に引っかかっているねー

まあ私もわざとこのタイミングにしたと思っただしね

”何もせずに学校から出たことは確認したよ

それからどこに行ったかは知らない”

「……………忠告ってなに」

”お節介をして僕だけが死ぬと後味が悪いらしい”

……………なんかまた機嫌が悪くなった？

”今のところ無茶する気はないぞ？”

「当たり前だよ」

……………当たり前なんだ

まあいいか……………

”あーそうだ

僕のがままで急に出かけることになったし

僕が出来ることであれば何でも1つは聞くぞ？”

雲雀先輩がいきなりこつちに振り向いたけど

なんか変なこと言ったかなあ……………

え……………もしかして……………

”ぼ、僕に出来ることだぞ

無理なことは言わないでくれよ!?”

なんか凄く嬉しそうな顔をしてるんだけど……………

まあ嬉しそうな顔って言っても

獲物を狩る時の顔と同じ気がする……………

ええ!?!もしかしてバトル!?

「早く行つて帰ってきなよ」

……………なんでこんなにも嬉しそうに言うんだ!?

さつきまで嫌とか言つてなかったっけ!?

ま、まあ……………雲雀先輩の気が変わらない内に行こう……………

気が変わって機嫌が悪くなると困るし……………

”い、行つてくるよ

じやあな
”

白紙

ふああ……つて感じであくびが出る……

急に呼んだんだし抱き枕の用意してよねー

あると思つて持つて来なかつたのに……！

おかげで寝不足……

それなのにいきなりご飯を食べる……

いや、用意してくれたからまだ良かったけどねー

これで作れとか言われたらしんどいもん……

つてか、ベルさんとマーモンちゃんは？

ベルさんは私が来たらすぐ来ると思つただけだなー

まあいいか……

それよりなんで和んでるの!?

困ったことがあつたんじゃないの!?

ここは頼りになるルツス姐さんに聞こう……

「んまあ！ 何も説明されてないの!?!」

だよね！おかしいよね！

スクアアロさんにもつと言つてやつてください

「るせえ！」

「優ちゃんごめんね」

困つたお兄ちゃんです」

「……ぶっ!!」

スクアアロ兄さん!! (笑)」

あ、スクアアロさんのパンチがやってきた！

痛いのは嫌だけど隣の席にいるせいで

避けれそうにないからバリアーをはろうー

ガンッ

「あ、すみませ〜ん」

全く反省する気がない謝り方をしちゃったよ

まあすぐ手を出すほうが悪いと思うしねー

ガチャ

ん？ドアが開いた？

ベルさんとマーモンちゃんだねー

「うゝお、おい!!! おせーぞお!!!」

さっきのことはなかったことにした!! (笑)

「ん 姫じゃん

どーしていんの？」

あ、やっぱり知らなかったんだ

まあ知っていたらベルさんがむかえに来たと思うしね

「スクアアロさんに呼び出されましたー」

「ふーん これ姫の料理？」

「あ、ごめんなさい

さつき着いたばかりで……」

「ラム肉の香草焼きはすでに我々の胃の中だ

遅れた貴様らが悪いのだ」

……それは普通にひどいよね

つてことでー

「大丈夫ですよ？」

「2人の分は私の皿に除けてますよー」

「なぬう!？」

嫌がらせだったのか……

「流石オレの姫♪」

「ほらほら お料理は優ちゃんが除けてくれてるし

スクアアロ隊長がお話があるってお座んなさい」

「へーい」

え？話のために呼び出されたの!？」

……だから電話でいいじゃん!!

まあ着いた時点でみんな普通だったから

そんな気はしてたけどね! (泣)

えーつと……スクアアロさんの話を聞けば

フラン君の獲得しようとしてるんだねー

ってか、なんでみんな嫌そうな反応してるの？

まあそれより未来の記憶だけじゃなくて経験も持つてるんだ
つまりみんなも強くなつたってことか……

でもリングとかがない分はツナ君達の方が強いかなー

さて、またスクアードさんが暴れるっぽい

ちよつといじられただけなのに……

だから食事中に席の上に立たないでほしい

せつかくの料理が勿体無いから風で浮かそう……

XANXUSさんとマーモンちゃんは別にこのままでいいかな？

普通に食べてるし……まあ私も食べるけどねー

「……リボーンが呪いの関するヒントを

見つけたって本当なのかい？」

「リボーン君達はそうかもしれないですね」

「……どういふことなのさ」

本当に呪いをときたいんだなー

マーモンちゃんの空気が変わってみんなの動きが止まったよ

「……ここで話してもいいんですか？」

みんなが暴れることに集中してる時に聞いたし

この前は私が1人でいる時に聞きに来たから

もしかするとみんなに話をしてないかも知れない

「ついできなよ」

やっぱりそうなんだ

でもXANXUSさんには話してると思っただのになー

まあいいか……

「美味しかったです

ご馳走様でしたー」

「ここはマーモンちゃんの部屋かな？」

……なんで窓が割れてるんだろう

マーモンちゃんは暴れたりしないと思ってたのになー

「どうということなのさ」

「あくまで私の予想なので信用しないでください」

「ムム わかったよ」

「私とマーモンちゃんを呪った人は違う人と思います」

「!？」

「この前の戦いでリボン君は

呪いをとくヒントと思つたかもしれないけど

私にはみんなと呪つた人が違うヒントと思ひました

なので、私からいろいろ聞くより

リボン君が感じたヒントを聞いて参考にしてください」

「違うと思つたのは何さ」

「それは私が話せない内容に関わつて来ます」

「ムツ」

「それにみんなと1番肝心なところが違う……」

「私は呪いを解いた方が損が多い」

「!？」

「……僕は呪いのせいで運命がかわつた」

「それは私も一緒です」

「……わかつたよ

「リボンの手紙を参考にするよ」

「あ、それが手紙なんだー

「あれ？ 白紙？」

「おしゃぶりの光線を当てれば文字が浮き出すのさ」

「へえー

「そんな力があるんだねー

「……」

「……読めませんね」

「途切れ途切れだよ……」

「なんとなく何を書いているか予想は出来るけど

もし間違ってたたら怖いし……

「うるさいっ！」

おしゃぶの光線が弱かったんだ！」

「じゃあ私の光も浴びせますか？」

少しだけだったら袋から出しても問題ないと思うしー

「……やってみる価値はあるね」

じゃあ袋から出そうかなー

ゴソゴソ……コアアア……ゴソゴソ……

……うん。何も見ていない

私がやっても何も変わらなかったなんて私は知らないよ

「……君のおしゃぶりは効果がないのさ」

「そうですねー」

少し棒読みになったのはしようがないと思う

「マーモン ひーめ♪」

あ、ベルさんだ

「だからなに勝手に部屋に入ってるのさ」

「また呼びに来てやったんだって

フランをさらいに行くぜ」

……さらうことを当たり前のように言った

まあ私も何度もさらわれたけどさ……

「あのカエルも術士で今の實力を見たいから

同じ術士のマーモンと

あのカエルにふつーにヴェントって呼ばれてた姫がいれば

さらいやすくなるから強制参加だっさ

姫が行くからオレも行くぜ♪」

……普通にヴェントと呼ばれてたのは

神様が記憶をすり替えたせいだと思う……

それがなかったら……来なくてよかったんじゃ……

あ、でも私は普通に優さんって呼ばれてたっけ？

まあ何でもいいや……

もう来たからにはどこでも付き合うよ……

「場所はフランスの秘境ジユラなっ」

どこでもって思うんじゃない!!

ちよつと遠いよ!?

そりや日本とイタリアに比べたら近いけどさ……

でもまた飛行機じゃ……

今度は絶対ウサギさんを持って行こう!!

フラン 1

「んもお！ あんな起こし方するから

せつかく優ちちゃんのために用意した

私服風隊服を着てもらえなかったじゃない！」

「しるかあ!!」

あのガキが起きねーのが悪いんだろがあ!!」

「元々は隊長が抱き枕を用意してねーからじゃん

姫はあれがねーと寝れねーし」

「そよよお！」

絶対ずつと寝てなかったのよお!？」

「るせえ!!」

あーいい天気だなー

やっぱり空を飛んでる時が一番気持ちいいよねー

さつきはちよつと大人気なかったねー

スクアールさんに毛布を投げちやったし

その後も顔を見たらまだ何か投げそうだったから

さつきと飛行機から出て空中に行っちゃったしねー

でもさ、いきなりスクアールさんの大声で

起こされたら誰でも怒ると思う

雲雀先輩とはまた違う種類で心臓が止まるかと思ったよ

まあ田舎だからヴェントの服装は目立ったと思うし

空からみんなについて行ってちようど良かったかもねー

あ、どこかの家に行ったよ

あれがフラン君の家なのかな？

ん？でもすぐに移動してるね

あの方向は川だし人目が少ないから降りようかな？

「どうしたんですか？」

やっぱりここは頼りになるルツス姐さんに聞くべきだよ

「それがねえ

フランちゃんが川の上流にいるみたいなのよお」

「上流だったら人が少ないかも知れないし

ちよつと調べてみましようか？」

「んまあ！ 助かるわあ」

……うん

ベルさんが流石オレの姫って言ってるのはもうスルーしよう

うーん………

「確かにこのまま上流に行けば誰かいますね

結構距離があります……あ……」

「なんだ!？」

「ちよつと離れたところにも誰かいます

そつちは複数で移動しています

最初に言った人に近づいていってってる気がしますね」

この中にフラン君がいればいいなー

まあみんな近づいてるし探すのが1度でいいねー

うわーすつごいラッキー♪

「ちっ 急ぐぞおー」

え……いきなりどうしたの？

まあ急いで走るけどさ……

「何かあったんですか？」

「他の組織がフランを狙ってるって言ってたじゃん

だからオレらは先にフランをさらいたいわけ

1人の方がフランで複数が組織の可能性があるじゃん」

「え!? そうなんですか!？」

「ん？ そーいや姫は寝てた」

「す、すみません……」

飛行機の中で言ってたんだ……

これはぐーすか寝てた私が悪いね……

「問題ねーって うししっ」

そういつてもらえると助かります

あ、この場所はこういう感じになってたんだー
崖から水が落ちてきれいな滝になってるよ

どうも地形をイメージするのは難しいんだよね
呼吸とかを探るほうがわかりやすい

まあもう少し探る時間があればわかったと思うけどね
「この上に最初に言ったほうの人がいます

でももうすぐ複数の方も合流しますよ……あれ？」

「今度はなんだあ!？」

「複数の方に骸君の気配がするなーつと……」

「君の話が本当だとすれば

他の勢力は六道骸の一味だったってことだね」

「やっぱり……違う可能性も……」

イタリアにたつ直前に骸君に会ってますし……」

でもすごく骸君の気配に似てるんだよねー

「行こうぜ♪」

それもそうだね

このまま登れば会うタイミングだしねー

それにしてもみんなピョンピョンと崖を登って器用だなー
私も出来るけどなんか怖いから浮いて登ろう……

スタツ

「警戒しろ！ 来るぞ！」

「んあ!？」

この声って……

見てみればやっぱり骸君達だー

「やっぱり六道骸だったかあ!？」

「ヴァリアー!？」

……なるほど そういうことですか
どうやらあなた達もフラン獲得に動いていたようですね
そして私の気配を彼が感じていた」

「この前、日本で会ったから自信はなかったけどな」

「クフフフ

「相手にとって不足なし」

んー私はヴァリアー側でついてもいいってことかな？
本当に困ってなければこの前の貸しを使うよね？

早く貸し借りをなくしたいなー

あ、あの人は未来で少し話した女の子だね

名前を覚えてくれないかなー

ってか、それより1人でいた方だよ

“あそこにいるぞ”

指をさしたけどちようど木が邪魔で見えなかった

あ、しゃがんだ

へえー小さいのにすごいなー

……あれ？みんな気付いていないの？

バカにしてるし……これは教えてあげるべきだよ

「んー人の気配がする

んー……？」

あ、その前にフラン君が私達に気付いたね

「やべー妖精見える」

……妖精は誰のことだ？

いや、私達のことだと思っけどさ……

私のことはわからなくても

みんながわからないのは変だよ

「フランー 僕です!!」

わかりますね お前の師匠です!!」

あ、先手必勝と思っただらうねー

骸君が珍しく叫んだよ

そしてフラン君の動きが止まったね

「たまげました ビックリですー

こんな山の中にパイナップルの精霊が」

「……ぶっ!!」

……我慢できなかつた!!

「よく見えるとロンゲのあなたには見覚えありますー

というより こちら側のみなさんは知ってますー

1つの集団ですよね」

ん？やっぱり知ってたんだねー

「虫菌菌だ」

「ぶっ!! あははは!!!」

虫菌菌だっつて!!!」

あ、つぼに入っちゃって地声出しちゃった!!

まあ知らないのはあの女の子だけだし別にいいか……

「虫菌菌は妖精でもねえだろうが!!」

それにヴェント!!

笑ってるてめえが1番虫菌菌に近いだろうがあ!!」

まあそうだろうねー

怪しいフードかぶってるからねー

だから虫菌菌って言われてもしようがないよ

っつか、子どもが言ってることだし

骸君達がなんでそこまで怒ってるかがわからないよ

「あー！ 骸君の武器を持てばさらに似るかも!!」

「この子も少しずれてるわあ……」

え？なんで？

ここはのつてあげるところでしょ？

子どもはこういう遊び好きだと思っしー

「オレは殺すぜ!!」

あ、ベルさんがナイフ投げちゃったよ

危ないから途中で止めよう

「わっ」

ピタッ

さて、フラン君の近くに行くべきだよね

「大丈夫？

怖い思いさせてゴメンね？」

「オリジナルのつて感じのダサダサナイフを

妖精さんが止めて助けてくれたので大丈夫でしたー」

私が止めたけど妖精さんってことにしてあげよう
子どもの夢は壊しちゃいけないしねー

「そうだね♪」

よしよしー

スカって感じで幻覚が消えて

頭に触れるのが不思議な感じがするよねー

「あの被り物は幻覚!!」

「すでにそれ程の……」

あ、そういえばまだ言ってなかったね

ガシッ

へ?抱きつかれた?

「妖精さん ヘルプミー」

前髪を切り忘れた頭悪そうな虫歯菌から

ミーを守ってくださいーい」

なんとなく私が止めたってわかったのかな?

「そいつはダメびよん!

オレらが味方だびよん」

「びよんとかいい顔で言えるのはバカだからだ!

きつとバカの精だ! 触るとバカがうつる

たすけてくださいーい!」

あ、犬君がシヨック受けてる……

「ヴェントよくやった」

おーレヴィさんにほめられたよ

「なんだろ この虫歯菌全然恐くないや

スルーしても大丈夫でーす」

うわ……完全無視だ……

「うゝおゝ おい!!!」

さっさと連れて来い!!」

「クフフフ

私に借りがあるでしょう

今すぐ彼をこちらに渡しなさい」

「……………」

えー……なんだ……この状況……

スクアードさんと骸君と千種君に囲まれるなんて……

とりあえずみんなが何かするかわらないし……

優先順位はフラン君を守ることにしよう

フラン 2

3人に囲まれたから後ろに下がりたいけど
後ろからフラン君に抱きつかれるから
下がるのは難しい気がする……

「浮世離れたロン毛ですねー」

人間にはとてもそのロン毛にする

勇気のあるものはありません」

この状況でもまだ言うんだ……

私はもう苦笑いになってきたんだけど……

「メガネの精さんも肌の質感がすごいなー

消しゴムみたいですよー

パイナップルの精さんなんていてるだけで

パインくさいですよー

ああ くさい！ 本当にくさい」

やばっ……本気で逃げないと!!

なんかついでに私も殺される気がする!!

……否定できないのがすごい!!

みんなから背を向けるのはまずい気がするけど

フラン君を抱きかかえて逃げるにはしようがない!

「うゝおゝおい」

ひいひい!スクアアーロさんがきれた!?

あれ?普通にフラン君に話しかけてる……?

頭を打ったか聞いてるよ

記憶がないなら今までの行動は納得できるかも

……チーズの角で頭を打って記憶を失った

パルミジャーノ・レジャーノとかだったらわかるけど……

フランスではカマンベールチーズが有名だし……

まあチーズの好きな家だったら普通にあるのかな?

カマンベールチーズの角だったらどうしよう…… (笑)

あ、チーズのことを考えていたら話が進んでたよ

「元々 未来ではお前の弟子だあ!!」

お前が一人前に育て上げてから必要な時に
レンタルさせてもらう!!」

「僕も忙しい!!」

ヴァリアーの充実した施設で育てるべきです

あのおチビのバカが治ってから引き取ります!!」

……これは両方いらないうって言ってる?

いや、成長すればほしいから育ててくれて言ってるんだ

あれ? 2人ともいきなりこつちを向いたよ

「てめえが面倒を見ろお!!」

「あなたが面倒をみなさい」

えー……結局私に押し付けるのー?

「んー私には術士は育てれないと思いますよ?」

かわりに術士のプライドをズタズタには出来る自信はあります

それにたまに面倒をみるのはいいですけど

私の家で住むのはダメです

私の正体がばれると骸君もヴァリアーも不都合でしょ?」

それに雲雀先輩が咬み殺しちゃうと思うしー

「……………」

お! 納得してくれたかもー

「まあ骸君の方はあんまり損はないのかな?」

骸君のところにはご飯を届けてるだけだしー」

「あなた……骸ちゃんにご飯を作ってるの!?!」

この子って本当に骸君が好きなんだなー

これは邪魔しちや悪いねー

「んー嫌そうだし持っていくのやめるねー」

「それは困るびよん!!」

おまえのメシうまいびよん!!」

だから私にどうしろと……?」

「そうですね

あなたの1番の価値は料理ですからね」

えー!? そうなの!?

なんか嬉しいような嬉しくないような……

まあいいや……フラン君をどうするか考えよう

「……じゃあフラン君はこのままここで

平和に暮らせばいいんじゃないんですか?」

……それはダメなんだね

また押し付けあいをはじめたよ

ツンツン

ん? なんか服を引っ張られてる?

「ついていくのはダメですか?」

「私に?」

あ、うなずいてるね

「うーん、私はいいんだけど周りが反対なの

だからフラン君はどっちかの集団に

ついていくことになると思うよー

どっちについて行っても私はたまに顔を出すよ?」

「ミーが決めてもいいですか?」

「ん? どっちについていくかを?」

「そうですー」

ふむ……まあフラン君の人生だしね

フラン君が決めるのが1番いいかもー

「あのーフラン君が決めたかって言ってるんですけどー」

「ミーはこっちの集団についていきますー」

あ、返事を待たずに言っちゃったよ

指を指してる方向は……骸君のほうかー

……骸君が疲れた顔をした(笑)

「……わかりました

ですが、あなたもついてきてもらいましょう」

ん? 私に言ってるの?

「フランの面倒をみなさい」

さつきと同じ言葉だけど意味は違うはずだよね……?」

「時間があるときはいいけど……今からは……」

「もう用はねえぞー」

急に呼び出したのにそれはひどい……

「はぁ……わかりました」

任務終了つてことで帰りますね

骸君、私の正体がばれないようにフォローはしてよ？

後、貸し借りはこれでなしね」

幻覚を使ってくればヴェントで帰れるはずだしー

最悪少しの間だけ相手をあやつればいいしね

「ええ」

はぁ……最後には骸君達と行動か……

これは雲雀先輩には知られないようにしよう

骸が未来でヴァリアーにいたフランを獲得するために
フランスに行ったのはわかるけど……

「でも何でクロームは仲間はずれなんだ……？」

「さあな

クロームの生活費はオレが預かってきたぞ

まずは宿をさがしてやんねーとな」

本当だよ!!

オレン家はこれ以上は無理だし……

それにクロームは女の子だし……

「しばらくは京子やハルん家に

泊めてもらえねーかと思ってるけどな」

お兄さんも賛成みたいだから

それはそれでいいと思うけど……

「優には頼まないんだ」

優とクロームも仲いいのに……

「そーいやツナ達は知らなかったな」

へ？何かあったの？

「ヴァリアアの緊急収集でイタリアに行ってるぞ」

「「なっ!?!」」

なにしてんのー!?!

「ヴァリアアも優の立場をわかってるから

すぐ帰ってくると思うけどな」

だ、大丈夫かな……

そりや優は強いかもしれないけど

オレはもう優に戦ってほしくないんだよな

女の子だし……元々の原因はオレのせいだけ……

でも優はオレのせいじゃないって……

おしやぶりを持つてるから……

バキッ

「いってえー!」

いきなり蹴るなよ!?

「じゅ、10代目!?!」

「ポーっとすんな ツナ

「クロームの歓迎会をするぞ」

「え？ あ、うん」

そうだよ!

クロームが並盛に来たんだし歓迎会をしよう!

……アルコバレーノって何だろう

やっぱり気になってきた

後でリボーンに聞こう!

フラン 3

……私を過労死させる気じゃないよね？

料理をいっぱい作ったりしながら

子どもの面倒って結構疲れるんだよ

頼むから1度でいいから家に帰って寝させてくれ……

抱き枕がなくて熟睡できないんだよ！

でもなんか骸君に言っただけで買ってきてもらうのは嫌だし

外に出て買いに行ってももし雲雀先輩に会ったら困るんだよ

「おや？ お疲れですか？」

……へえ

やっぱりわざと私にフラン君を

あのタイミングで押し付けてたんだ……

「パイナツポー」

流石フラン君だね！

もう私と息が合ってきたよ！！

そして、私が悪口を言えば

骸君が私に火柱攻撃をしかけてくる……

まあいつものことだね

「まったくもってつまらない」

当たらないからって機嫌が悪くならないでよね

ってか、当たればコゲて死ぬ

「ほんとーにどうなってるのよ

その身体」

あ、M・Mさんに話しかけられた

骸君に一切興味が無い態度をしてる効果があつたかな？

「ふつーですよ

それに骸君が本気を出せば当たりますしね」

まあ有幻覚は出すのは大変だと思うけどー

どこが普通なのよとM・Mさんが言ってるのは気にしない

だって私の中では当たり前なんだもん

「では……」

「こら！本気を出そうとするな！

まあ冗談ってわかっているからいいけど……

「そろそろ私は帰りますよ？」

「冷蔵庫と冷凍庫に料理をいれてます」

「ここまですれば貸し借りはなしでしょー

「わかりました」

「さて……と……次はこつちだ

「犬君ー？」

「なにもしてないびよん！」

「食べてもいいけど量を考えないと

後でみんなに怒られるよ？」

「……本当に犬みたい

尻尾がないのに下がったように見えたよ……

「フラン君もまたね？」

「あ！あのパイナツポーにひどいことされたら言っ

「お姉ちゃんが懲らしめてあげる！」

「誰が誰を懲らしめるといいました？」

「ヴェントがパイナツポーを懲らしめると言いました」

「うん。うん。」

「流石フラン君だね！わかってる！」

「なぜ僕が果実で呼ばれ

「ヴェントはそのまま呼ぶのですか」

「オコッテルナー

「感情がこもってないのは気のせいだよー

「師匠はパイナツプルの精で

「ヴェントはよくわかりませんー」

「ほう……」

「オコッテルナー

「でも私はよくわからないって何だろ？」

「本当に妖精みたいで不思議ですー」

「はあ？ あんた何言ってるのよ

「これのどこが妖精よ」

「私もそう思うよ」

「どういうことか教えてくれる？」

「ミーはヴェントはニセモノとと思いました

「頭を撫でられてビックリしましたー」

「えーっと、どういう意味だ？」

「子どもは感覚で話すからよくわからないんだよねー

「フラン、お前はヴェントが幻覚と思ったのですか？」

「そうですー」

「あ、なるほど」

「骸君よく意味がわかったねー

「あ！ 最近、ヴェントの時は

「ずっと気配を消すようにしてるんだ

「んー今もそんな感じがする？」

「しませんー」

「あーやっぱり……」

「マフィアにレアってばれてからは

「気配を消して移動するようにしてるからねー

「まあ活動してる時は

「ボンゴレが本格的に情報操作をしてくれるけどね

「この前の時もボンゴレの力を借りたしねー

「まあ雲雀先輩の力も借りたけどね

「私がこれだけ休んでも誰も気付かないのは

「普段から応接室にいるからだし……」

「私の場合の特徴がなかったんだねー」

「つまり裏を返せば骸君の髪はやっぱりパイナツポー

「何か今考えました？」

「いえ、考えていませんよ？」

「やばいやばい

「さっきのフラン君でイライラしてるから

本気で攻撃してきそうだよ

「あー！ ガトーシヨコヲを昨日焼いてあるよー

今日が1番美味しいと思うよ？」

1日置いた方がしっとりするから

昨日は出さなかつたんだよねー

「わかりました」

うし！話題をそらせたよ

骸君はクロームちゃんと一緒にチョコが好きだよ

でもクロームちゃんはパイナップルが嫌い（笑）

さて……本気でそろそろ帰ろう

今から帰れば午後から学校に行けるし……

「何かあつたらまた声かけてね

またねー」

「ええ また会いましょう」

……やっぱり眠いな

まあ書類がたまつてると思うし頑張ろう

ってか、まずなんで私はここまで忙しいんだ……？

無防備

久しぶりの学校だよ

応接室に直行したけど雲雀先輩はいるかなー？

あ、ラッキー♪ いたよ！

「ただいま帰りましたー」

あれ？なんか機嫌が悪い？

そういえば「おかえり」って言ってくれないなー

「……どうして連絡しなかったの」

「へ？」

「今日帰ってくるって僕は聞いてない」

あ……そういえば……

普段は飛行機乗る前に連絡するけど

今回は日本にいたからすっかり忘れてた

「サ、サプライズです！」

「……ふうん」

ウソってばれてる!!なんでだ!?

こ、ここは早く謝らないとまずい!!

「ごめんなさい……」

日本でもちよつと活動して……」

うう……こっちに来る……

絶対怒ってるー!!

ぐいっ

うわっ!?あごを掴まれた!?

こ、これって……／／

「無茶しすぎだよ」

「へ……？」

「顔色がよくない」

あ……そっちですか……

は、恥ずかしい!!

キスと思った自分が恥ずかしい／／／

時間を巻き戻したい……

なんで目をつぶつちやっただのー!!

「少しよくなった」

きやー！ー！言わないでー!!

離してくれたけど恥ずかしすぎる!!

「しよ、書類しますね!!」

今すぐ書類をして頭を冷やさなければ!!

「今日はいいよ」

「で、でも……」

今回の休みは私のわがままだし……

「はあ………！つ僕のいうことを聞くんだよね？」

「へ？ あ、はい」

「行くよ」

どこに？つて、行つちやっただよ

つまりついて行くしかないね

約束しちやっただしねー

前にも似たようなことあったな……

「寝なよ」

やっぱり……

私を寝させるために家に来たんだ……

「……あの……」

「なに」

「シャワーを浴びてもいいです……？」

本当はお風呂に入りたいけど……

流石に沸かす時間まで

起きてると寝ろつて言われそうだし……

でも料理を作ったりしたから匂いが気になるの!!

「……いいいよ」

やった！助かった!!

「すぐ出ますね!!」

きやー急いで入らないと!!

ふう……さっぱりしたー

あ、今思うと……

雲雀先輩に待っててもらわなくてもよかつたんじや……
そうだよねー

別に一緒に寝るとは言っていないのにねー

勝手に決めて待たせちゃったよ

怒ってないかな……そーつとドアから覗いてみよう
ジー

普通に私のベッドの上で本を読んでるね

やっぱりカツコイイなー

なんでここまで絵になるんだろう

「……なにしてるの?」

やっぱり怒ってはなさそう

私の行動に呆れてしまったっぽいけどね

まあドアから顔を出して見てたしね

「えへへ♪」

お待たせしましたー」

とりあえず笑って誤魔化してみた

でも効果はなかったみたい

雲雀先輩は溜息をついてるからね

まあ呆れたのはもうしょうがないし

私もさつさとベッドに入って寝よう
ぐいっ

引っ張られた!?

ベッドに入ろうとしてたからバランスが!!

雲雀先輩の上に乗っちゃったよ!

つまり……これって抱きついてるー!?
きやーはじめてた!!

ベッドの上で抱きしめられるなんて!!
ガシッ

うわっ!?今度は雲雀先輩に急に突き放された!

まあ突き放されたといっても

両肩を掴まれて離されたただけ……

「ぐ、ごめんなさい!!」

あれ?つい謝ったけど私は悪くないよ

ってか、引き剥がすぐらい重いのか……

「重たいのは私が悪いですけど……」

雲雀先輩が引つ張るせいです……」

ちよつと泣きたくなる……

雲雀先輩は何も言ってくれないし……

あれ?なんか顔が赤くない!?

「雲雀先輩!」

大丈夫ですか!?

えええ!?!私が重すぎて何かあったの!?

「……問題ないよ」

この言い方……絶対何かあるよ!!

「ぐ、ごめんなさいー」

私……体重が重くて……」

「……はあ……それは問題ないよ」

ふむ?体重じゃなかったのか……

じゃあ何に問題があったの?

匂いはないよね?さっきシャワーを浴びたし……

そういえば風呂あがりに抱きしめられたのは初めてかも

髪の毛でも濡れてたのかな?

「……無防備すぎるよ」

あ、そっちな……

「す、すみません……」

いきなり引つ張られるとは思わなくて……
踏ん張りが足りませんでした」

「……はぁ……」

あれ？また溜息だよ
んーどうしよう……

「でも雲雀先輩の前だからですよ？」

他の人だったら絶対しませんよ」

雲雀先輩の前だから油断しちゃうんだよね
つい安心しちやつて……

他の人に引つ張られてもバランスを崩して
こけることはないと思うしー

「……もう早く寝なよ」

なんか凄く疲れた顔されたんだけど……
変なこと言ってるよね……？

「はぁい……」

言っただつもりはないのに

雲雀先輩が疲れてるから大人しく寝よう

「……なんか近くないですか？」

寝る距離は元に戻ったはずなのに
今日はちよつと近いよ

「これでも我慢してるんだ」

え……雲雀先輩が我慢してかったら

この前のように寝るつもりなの……？

「おやすみなさいー！」

急いで寝なければ!!

これは絶対下手に言っではいけない気がする！

言えばこの前のようになる……と思う

手を腰に置かれると緊張して寝れないと思うしね！

あ……やっぱり疲れてたんだ

目をつぶったらすぐ睡魔が……

……すう……すう……

「……………本当に無防備すぎるよ」

うわー14時間も連続で寝てしまったよ

流石に雲雀先輩はいなかった

多分、さつきは昼寝のつもりだったと思うしね

んー熟睡してるから起こさなかったんだろうなー

そして起きたらお腹が減ってるよ

予想したのかご飯を作ってくれてるよ

いやー本当に助かります

お腹が減って起きたと言ってもいいぐらいだし……

起きたただけどカップ麺でいいやと思っただからラッキー♪

あ、食べた後はどうしよう？

やることはある……でもまだ寝たいから寝ようかな？

それに今は夜中だし……行動するにしても早すぎる

んーまた寝てちよつと早起きすれば問題ないかー

夢 (虹のアルコバレーノ編)

……ああ……これは夢だ

あれは小さい私だ

部屋のスミでいつも体育座りをしていた

怒られないようにじっとしていた

いつも思ってた

どうして私には親がないんだろう……

実は顔も知らない

母親の親戚なら写真ぐらいあってもいいと思うのに……

でも母親は結構優秀だったらしい

「だった」というのは知らない間に私を産んで

親戚に押し付けていなくなったから

それから母親の話題は親戚内ではタブーだった

つまり父親も誰か知らない

誰の子かわからないとよく言われたから多分父親似なのかな？

大人になったら探そうと思っただけ

今となっては知る方法もないよねー

あーあ……この夢は終わらないかなー……

1人しかいないみたいで嫌だ

私には居場所が出来たから

スミにいないくていいって教えてあげたいなー

ガルルルー!!

ん？ミントが呼んでる？

嫌な夢を見てると気付いて私を起こしてくれてるのかも……

今すぐ起きるから心配しなくていいよ？

……あれ？起きれないよ

なんでだろう……

あ、またミントが呼んでるよ

心配させちやつてるねー

うーん……これは困った……

「あーあー」

マイクのテスト中ーって感じで冗談でしたら
まさかの声が出せた

え？夢の中で声って出せるの？

それとも寝言って感じで声が出てるとか？

よくわからないなー

『今は夢ではないわ』

あれ？この声って……

私を呼んだ人だよ？

つまりリングの力なのか……

「えっと、こんばんは？」

時間の感覚があるのかわからないから

少し疑問系になってしまった……

まあいいか……

「えっと、私は寝てたと思うんですけど……」

うん。確か……あの後は寝たよね

洗濯とか溜まってるのに寝ちやったもん

『あなたの夢に入り込もうとした人がいたから

私がかつちの世界に呼んだのよ』

へーそんなことも出来るんだ

夢に入り込むねー

私が転生したっていう内容を見られそうだったとか？

『でもどうしてもあなたと接触したいみたい

あなたはどうしたい？

私の力でつなげればあなたの夢は見られないわ』

ふむ……

夢って精神世界みたいなものだよねー

つまり骸君かな？

「会います」

『……私から1つ助言よ』

うーん……これを鵜呑みにしていいのかな？

この人は誰かわかってないし……

でももう原作を知らないからヒントがほしいよねー

『わがままを言えればいいわ』

えーこれってヒントなの……？

もう少し原作とかそういう内容で……

『……まあ私が言っているいい言葉ではないわね』

言っているいい言葉じゃない？

もう少し説明してほしい……

『気をつけてね』

「あ、はい」

おお！なんか扉が目の前に……

この中に入れば会えるってことか……

鉄の帽子の男……

オレ達に虹の呪いを解きたいか聞いて

いったい何を企んでんだ？

「おや リボン君は？」

「オレは信用できねえ奴と話したくねえ

勝手に呪つといて呪いを解きたいかじゃねーぞ」

「相変わらずクールな男だ

だが君達が虹の呪いを嫌悪しているのはよくわかったよ

……このまま話を進めようと思ったが

私と会う気になったみたいだ」

オレ達の前に扉が現れた

開くということは誰かが来るのか？まさか……

「あれ？ リボン君たちが私に会いたかったの？」

やはり優だったか……

「私だ」

「えっと、はじめましてですよね？」

私の夢に進入しようとした人はあなたでいいんですね？」
「なるほど」

やはり風のアルコバレーノに選ばれただけはある」

「……リボン君この人は誰？」

「オレ達を呪った奴だぞ」

優の態度が急に変わった

鉄の帽子の男の言動といい

優が言った通りオレ達と優を呪った奴は別なのか……

「慌てるな

私は呪いを解かないかと提案しにきたんだ

もちろん君も含めてだ」

「……あなたは私を呪った人ではない」

「原理は一緒だ」

「……わかりました

話は聞きます」

こいつの話を信じることは出来ねーが……

他の奴らが参加するのか……

「……質問してもいいですか？」

「詳細は後日になるがいいだろう」

「途中リタイアは可能ですか？」

「もちろん

だがその場合は一生虹の呪いが解けることはない」

「そうですかー

私は呪いを解く気がないので

途中リタイアしますが参加しますねー」

これはどういうことだ？

恐らくもしもの時のことを考えて参加を決めただろう

優は頭がいいからな

オレと同じような事も考えているんだろう
だが……優らしくねえな……

後で優と話すべきだな

「リボン君は？」

ツナのテスト……ちようどいいかもな

オレじゃなく優の代理でもいいが……

本人がやる気じゃねーみてえだからな

「やる」

「ん……」

ここは私のベッドか……

夢は終わったみたいだねー

「優」

あれ？雲雀先輩だ

ガルー

そういえばミントに起こされたのに起きれなかったね

心配したミントが雲雀先輩を呼んだみたい

「すみません

心配かけたみたいで……熟睡してました」

「嫌な夢でも見た？」

「うなされてたけど……」

「そんな感じですね

「あ、雲雀先輩に聞きたいことがあります」

「なに」

「前にお城で言った私の弱音を覚えていますか？」

「覚えているよ」

「……弱音を言った理由を話す勇気は出ません

でも雲雀先輩を道しるべにしてもいいですか……？」

「……言ったよね

見失ったらここに戻っておいでって」

「……ありがとう」

ぎゅ

……朝から泣いて迷惑かけちゃったよね……
でももう少しこのままいたい……

亀裂

「ツナ君♪」

「うわっ!? ゆ、優!?!」

ビツクリしたー

急に後ろから声かけられたから

情けない声を出しちやった……

「風早!・ 10代目にいきなり何してるんだ!!」

「ご、獄寺君大丈夫だよ!!」

それより優!!」

「どうしたの?」

小さい声で言うべきだよな……

「ヴァリアーが優を呼んだって聞いたけど……

大丈夫だったの……?」

「ツナ君が心配するような内容じゃなかったよ

新人のスカウトの成功率をあげるために

呼び出されただけだよー」

「そ、そうだったんだ……」

よかったー

優は無茶してないみたいで……

「風紀委員の仕事が溜まってるんだけどねー

でもクロームちゃんが転校してきたでしょ?

休憩の許可をもらって様子を見にきたんだ」

優は風紀委員だから知ってたのかな?

「そうなんだ……」

優はクロームが来るって知ってたんだ」

「知ってはなかったけど知ってた?」

どうということだろ??

「どういうことだ?」

「日本語を話せ バカ」

獄寺君……それは言い過ぎじゃ……

「骸君がツナ君にあずけるつもりって言ってたよ？」

「だから転校してくるのも予想の範囲？」

「えええええ!!」

「優は知ってたのー!!」

「てめえなんで黙ってやがった!!」

「まあまあ落ち着けて」

「骸君に聞いた後すぐにヴァリアーに呼び出されて……」

「タイミングを失った感じなんだ……」

「そうだったんだ……」

「骸は優に頼んでたんだ……」

「やっぱり骸はクロームのことを大事にしてるんだ！」

「それに骸君に世話するなって言われたんだよねー」

「な……なんで……」

「骸はクロームを大事にしてたんじゃ……」

「それに優もそれを納得するなんて……」

「あー！ 違うからね!!」

「私はダメだけどツナ君達には世話してほしいみたい」

「え……う？」

「私はやりすぎるからダメって言われてねー」

「だからコソツと様子を見に来たんだ」

「まあ思ってたよりは元気そうでよかったよ」

「骸には何か考えがあるのかな……」

「優が納得するぐらいだし……」

「ガラッ」

「ヒ、ヒバリさん!!」

「あれ？ どうかしましたか？」

「こつちに来るし優に用事なのかな？」

「ガッ」

「きゃっ!」

「ゆ、優!」

「ヒバリさんが優を壁に突き飛ばした!」

一体何があったの!?

「どうして黙ってたの」

「何のことですか……?」

「赤ん坊から聞いた」

赤ん坊つてリボンだよな……?

ヒバリさんにあいつ何をいつたんだよ!?

「……そのことですか……」

「いつでも話せたよね?」

どうして僕に頼まなかったの?」

「それは……」

「……彼に頼む気だったの?」

今、オレの方を見たよな……?

ガンツ!

優の顔のすぐ横にトンファーが……

た、大変だ!!

あいつヒバリさんに何を言ったんだよ!!!

いつも仲がいい2人が……

みんなビックリして固まってる……オレが止めないと!!

「ヒ、ヒバリさん!!」

「……」

返事はなかったけどよかった……

トンファーをなおした……

「……ごめんなさい」

あ……ヒバリさんが教室を出て行く……

優がついていこうとしてるけど大丈夫かな……

オレも一緒に行こう

そりゃ怖いけど……オレも一緒にいたほうが……

「……来ないで」

これはオレにじゃない……優に言ってる

あ……行っちゃった……

「ゆ、優!」

優が動かない……

みんな声をかけてるのに……

「……お前何したんだよ

ヒバリがお前にあそこままでするなんてよっぽどだ」

獄寺君の言うとおりで……

優に当てなかったとしても

トンファーで攻撃しようとしたんだ……

「……雲雀先輩には頼む気がしなかったんだ……」

そういえばさつきヒバリさんもそんなことを……

「みんなゴメンね？ それとありがとう

……今日は帰ることにするよ」

「で、でも……」

今の優を1人にするわけには……

「少し考えたいんだ

もう時間がないと思うしね」

「時間がないって？」

「はやく仲直りしないと

雲雀先輩がみんなを咬み殺しちゃうでしょ？」

そ、そうかも……

「流石にあそこまで怒らちゃったら

私も少し考えないといけないからね」

「わ、わかった……

何かあつたらいつでも言つてよ!!」

「ありがとー

じゃあね」

「う、うん!

またね!!」

この時、どうしてオレは優と一緒にいなかったんだろう……

オレはこの日の夜に後悔した……

選択 1

あいつ……本当に何いったんだよ!!
ん？オレの家の前がざわついているような……

「!?」

何この物騒な人達……!?

「待ってましたぜ 沢田さん！」

「あつ ロマーリオさん!？」

ってことはここに居るのって

キャバツローネファミリーのみなさん!？」

「よっツナ」

「デイーノさん!!」

……リボーンも一緒だ!!

「リボーン！」

お前ヒバリさんに何いったんだよ!!」

「ん？ 恭弥がどうかしたのか？」

「オレも優がヒバリに話してねーとは思わなかったんだ
それに話しちまったのはしょうがねえんだ
後は優が決めることだぞ」

「そんなの無責任だよ!!」

いつも仲いいのに……

それを壊したのはリボーンだろ!？」

「ツナ落ち着けてって な？」

リボーンにも何かあるんだ

それを聞いてからにしようぜ?」

デイーノさん……

「……はこ」

……アルコバレーノが全員が見た夢……
それって……

「優もその夢を見たの……?」

「ああ

オレはヒバリが優の代理として戦うのか
確認しに行っただけだぞ」

優はヒバリさんにそのことを話さなかったんだ……

「優は呪いを解く気はないみてーだからな

ヒバリに頼む気にならなかったんだろう」

「え!? なんぞ!」

「さあな

オレ達の前で途中リタイアすると宣言したからな」

「優はお前らに譲る気なのか……」

恭弥が怒るのも無理はないな……」

あ……そうかも……

1人しか解けないっていつてたし……

「アルコバレーノの呪いつてのは何なんだ？」

内容によっては優が譲るのもわかるからな」

そ、そうだよ!!

「優の呪いの内容は話せない内容に含まれてる

だが、呪いの効果の一部に

風の波動が優しいかいいねーのが関係しているらしいぞ」

そういえば……

子どもを産んでも風の波動の子どもは産まれないって……

「じゃ、じゃあ……優の呪いがとければ……

風の波動をもつ子どもが出来るんじゃ……

優がレアじゃなくなるってこと……?」

「恐らくな」

「……恭弥が怒るのは当然だな」

「お前らはどうするんだ

オレの呪いを解くためにオレのために戦うか？」

それとも優を説得しに行くか？」

リボーンを選べば優が……

でも優を選べば……リボーンが……

そんなの選べないよ!!

「……リボーン……お前の呪いはなんだ？」

デイーノさんも悩んでるんだ……

「この話はアルコバレーノ以外

ラルと家光と9代目と山本しかしらねーが

お前達にも話すべきだな」

聞きたいような……聞きたくないような……

「まず なぜオレ達7人が呪われたのかはつきりしてねえ

オレ達も調べていくつか見当はつけているが

どれも決め手に欠ける

オレは優のことも調べたが優の場合は見当もつかねえ」

そ、そうなんだ……

「そのかわり虹の呪いをかけられて

どうなったかははつきりしてる

オレ達は姿を変えられたんだ」

「姿……？」

「これはオレの本当の姿じゃねえ

本当のオレは超カッコイイんだ」

「なっ」

それってどういうことー!?

「……リボーン……」

優の気持ちを聞いてからでもいいか……？」

「ああ いいぞ」

「ツナ、オレは今から優に会いに行くけど

お前ははどうするんだ？」

「……オレも一緒に行きます!!」

優からも話を聞かないと……決めれないよ……

ピンポーン

「ツナ……優の様子はとうだったんだ？」

「……ヒバリさんとケンカするまでは……」

優はいつも通りでした……」

「……そうか」

あれ？オレ……チャイムを鳴らしたよな？

優が出てくる気配がないんだけど……

でも電気はついてるし……

「何かあったのか？」

そ、そうかも……

ドアを叩いてみよう!!

ガチャ

「ええええ!？」

壊しちゃった!？」

ドアが開いちゃった!!

でもオレまだ叩いてないような……

「違うぜ ツナ

ドアが開いていたんだ

だが……1人暮らしなのに物騒だぜ……」

ほ、本当だ……

「優、いるのか？」

勝手に入るぜ？」

返事がないけど……大丈夫だよな……?？」

あ、リビングで動く気配がしたよ!

「優……いるなら……つてヒバリさん!？」

「恭弥……いたのかよ……」

呼び鈴を鳴らしたから出てくれてもいいじゃねーか……」

そ、そうかも……

でもヒバリさんだし……

「優は風呂でも入ってるのか？」

「……いない」

え……？

「いないってどういうことだ？」

「……しばらく帰ってこないって手紙を残してた」

「……それが優の答えか……」

オレ達に頼む気はないってことだな……」

「そ、そんなあ！」

優は本当に呪いを解く気がないってことですか!？」

「……優は最初から解く気はなかったんだ

その証拠に誰にも話をしなかったんだろ？」

それでも優がいればオレ達はリボーンの頼みを聞くか悩む

現にオレ達は話をしにきただろ？」

「……優……」

「……恭弥……お前の気持ちもわかる

いつも優は自分を優先しないからムカツクんだろ？」

だが、優も迷ってたと思うぜ

オレ達と話をすれば決心が鈍るから姿を消したんだ」

……そうかも……

「優が姿を消してまで選んだことだ

帰ってきた時は許してやれよ なっ？」

「……もう用はないよね

はやく出ていきなよ」

「……ツナ 帰るか？」

「は、はい」

優とヒバリさん大丈夫かな……

……こんなことになるなら一緒にいればよかった……

選択 2

はあー……

手紙を置いて出ていったから怒ってるだろうなー

その前に……もう私の家に来ないかも……

「さて、なぜあなたがここにいるのですか？」

「今、雲雀先輩と会いたくないから？」

もし雲雀先輩が来た時は

骸君をエサにすれば逃げれそうだしねー

まあその可能性は低いと思うけどね

だって明日にはここを出るしー

「もしもの時に僕をエサにして逃げるつもりとは……」

なぜばれた!?

やっぱりあのヘタの部分は電波を受信していたんだね

「それで君はどうするのだ

もう私と六道骸は手を組んだ

代理人を探さなくていいのか？」

あれ？ヴェルデ君が心配してくれてるのかな？

「それは心配しなくていいよー

もう代理人は探し終わってるからねー」

「ならば出て行くがいい

我々とは敵なのだ」

「心配しなくても

私は途中リタイアするし明日の朝には出て行くよー」

代理戦の作戦とかたてたいと思うしねー

「……ふむ」

「クフフフ

あなたが選んだ代理人に

興味がありますしいいでしよう」

「私と一緒に戦う気がない人だよ」

「ほお……」

悩んでるねー

まあ誰かは教えてあげない(笑)

「人ということは1人なのか?」

やっぱりヴェルデ君は頭がいいんだね

「そうだよー」

「本当に呪いを解く気がないのだな」

「私は呪い以外に目的があるから」

一応参加しただけだしー」

「……………」

なぜ黙る!?

あー私の目的が気になっただけか…………

「今回は骸君の邪魔をする気はないよ?」

「……………」

「さて、チョコのマドレーヌを焼こうかなー?」

「何を座っているのです」

早く焼きなさい」

本当に…………チョコが好きなんだね…………

「……………」

もう少し冷蔵庫で寝かせてもいいぐらいだしー」

まあレシピによって変わるんだけどね

私のは最低半日は冷蔵庫で寝かしたほうが美味しいんだよねー

それに焼き菓子は焼いた次の日の方が美味しいしね

だからダラダラ動いてるのを見て

幻覚で攻撃するのはやめようよ…………

きかないからいいけどさ…………

優とヒバリさん大丈夫かなー…………

「いいのか？ ツナ」

「う……うん……」

優が選んだことだし……

リボーンは呪いを解きたいんだろ？

だからオレはリボーンの代理になるよ」

「そうか」

「10代目!! リボーンさん!!」

「ツナ！ 小僧！」

この声は……

「おはよっ！」

獄寺君に山本!!」

「リボーンさんに聞きました

アルコバレーノの戦いのことを……

10代目はどうするおつもりですか？」

「……ああ

風早は解く気がないって聞いても……

オレ達は決めなくてな……」

そっか……

2人とも……優とリボーンのことを……

真剣に考えていたんだ……

「そ、それが……優はどこかに行っちゃったんだ……

多分オレ達が悩むと思って……」

「……そうスか

あいつらしいですね……」

「……そうだな

でもオレ達にも相談してくれてもいいのにな……」

「そうだね……」

オレ達が悩むかもしれないけど……

話してほしかったな……

「ツナはオレの代理になることを決めたぞ」

「そうなんスか!？」

「そうなのか？ ツナ」

「う、うん……」

オレはリボーンのために戦うことを選んだけどさ……代理になれば必ず優と会えると思うんだ
会えれば戻っておいでって言おうかなって……」

「……そうスね」

オレもリボーンさんの呪いを解くために頑張ります
そしてあのバカにバカつていいいます」

ガーン……

それは違うんじゃない……

でも……獄寺君も戻ってきてほしいんだ……！！

「オレも小僧のために頑張ることに決めたぜ！

風早とは……キャッチボールでもすつか！

やっぱ一緒に野球すれば何でもわかりあえるよな！

ガーン……

出た……山本の感覚理論……

でもやっぱり山本も……！！

「ふ、2人とも……！！」

「提案なんスけど こうなったら

10代目の守護者全員を

リボーンさんの味方にしたらどうスか？

あのバカも少しは顔を出しやすくなるでしょう」

そ、そうかも……

リボーンに気を使ってたみたいだし

みんながりボーンの代理になれば……あ！

「そうかもしれないけど……」

オレは10代目になるなんて言っていないから！！」

「ハハハッ

相変わらずそこは照れるんだな♪」

「いやっ 照れてるんじゃないって!!」

ガーン……

全然わかってねえー……

この後に骸がヴェルデっていう
アルコバレーノの代理になっただって聞いたけど……
優が今日の朝まで骸のところに行ったっていうし……
今はどこで何してるんだろう……

破壊

XANXUSさんって意外と和服が似合うなー

ただもう少し服をちゃんと着てほしい

恥ずかしくて直視出来ないんだよ……

「……てめえはいいのか？」

あれ？どうしたんだろう……

XANXUSさんがそんなことを聞くとは……

「私はそれには興味がないのでー

XANXUSさんはツナ君をかつ消せればいいんでしょ？

マーモンちゃんの代理になれば多分それは叶いますよー」

代理戦争っていうぐらいだからねー

多分戦うことになると思うしね

「……るせえ」

「やっぱりそれが目的で代理になる気になったんだ（笑）

ダダダダ

ん？何の音？

誰かがこの部屋に向かってくるね

ここはXANXUSさんがいる部屋ってわかってるの？

ヴァリアーのみんなはしないよねー

だってかつ消されるってわかると思うもん

つまり……フードをかぶるべきか……

「ししっ ボース♪」

あれ？ベルさんだったの？

「みやげっ」

ドテッ

……ツナ君だよ

ツナ君がベルさんに拉致されたみたい

だって放り投げられてたもん……

ついにツナ君も経験してしまっただねー

せっかく服を着たのに意味なかったねー

ツナ君だったらもうフードをかぶらなくていいからね……
あ、ツナ君がやつと顔をあげたよ

「う……………そ……………ぎ……………XANXUS!!
に……………日本に来てたの……………?」

「って優もー!?!」

「ナイスリアクション (笑)」

「やっほー」

「やっほーじゃないよ!!」

「こんなところで何してるのー!?!」

「XANXUSさんにお酌?」

「あつてるよね?」

「だつてお酒を注いでるし……………」

「お……………お酌つて……………ヒバリさんが探してるんだよ!!」

「もちろんオレだつて……………」

「雲雀先輩が?」

「ツナ君はわかるけど……………」

「雲雀先輩は私を探さないとと思う」

「だつてまだ謝つてないしねー」

「そっだよ!」

「んー本当なのかな?」

「でも会いたくないんだ」

「そ……………そんな……………」

「それよりツナ君はリボン君の代理になつたの?」

「う、うん……………」

「じゃあ頑張つてね?」

「XANXUSさんが本気みたいだしー」

「優の代理つて……………まさか……………」

「私じゃないよ」

「マーモンちゃんの代理だよ」

「そ、そうなんだ……………良かった……………」

「えー!?! マーモンの代理ー!?!」

やっぱりツナ君はナイスリアクション（笑）

あ、ディーノさんとリボン君だ

「思ったとおりだったな

大丈夫か ツナ！ 優!？」

「お久しぶりです♪」

「この代理戦争でてめえをかつ消す!!」

「ええええ!! オレエ!？」

ツナ君は本当にいい反応だよねー

ん？ 誰か天井に……

ドウツ

XANXUSさんすぐ撃つのはやめましょうよ……

すぐフードかぶったからいいけどさ……

ガルル!!

おお!! ミントが珍しくやる気満々だ

まあみんなも警戒してるしね

んー……鉄の帽子をかぶった人の遣いねー

まあ変な人っていうのはわかった

ってか……やっぱりフードはいらなかったね

よく考えたら鉄の帽子をかぶった人は私の素顔を知ってるしー

さて、代理戦争のルールは

ボスウォッチが破壊されれば終わりか……

戦闘許可時間はまあいいとして……

バトルロワイヤルだから同盟を組むことが出来る……

んーバトラウオッチが一番問題だね

「尾道さん」

「はい」

なんででしょう」

「私の箱はどれですか？」

「ヒヤハハッ

せつかちですね

こちらになります フフ」

えーつと、これとこれだけでいいか……

「ミントー」

ガルル！

ブオオオオ!!

流石ミントだね

ちゃんと部屋は壊さない威力だったよ

「!!?!」

「せ、説明をきいていました？ ハハッ」

「ボスウオッチが破壊されれば負けでしょ？」

ちゃんとアルコバレーノウオッチと一緒に持ってますよ

これだけあれば参加は出来ますでしょ？」

「そ、そうですよ ホホッ

まさか渡したその日に壊されるとは思いませんでした フフ」

あーそれはすみません

「……君は本当に呪いを解く気がないんだね」

「もしかして信じていなかったんですか？」

「……まあね」

どうやらマーモンちゃんに疑われてたみたい

そりやそうか

不意打ちとかも考えれるよねー

本当はもしもの時のために残しておきたかったんだけどねー

でも残せば頼むことが出来ないからしょうがないか……

ツナ君は大変だなー

ヴァリアーに殺気をあてられながら食事（笑）
ってか、なんで隣で食べるんだろうねー
まあいいか……

「んまあー、これ美味しいわあー！」
「どれだ？」

おお！これはめっちゃ美味しい！！

「何が入ってるかわかるか？」

隠し味がすごく気になる……

「そうねえ……」

後でシェフに聞いてみようかしら？」

「それもそうだな」

スイートルームに泊まってる人には

聞けば教えてくれそうだしねー

「なんで和んでんのー!？」

だって私は殺気を向けられてないんだもん

「あーそうだ」

明日はディーノのところに泊まってもいいか？

実は泊まる場所がないんだ」

雲雀先輩が本当に私を探しているなら

宿を取ればすぐばれるんだよねー

「……帰らないつもりなのか？」

「彼に会いたくないんだ」

「……いいぜ」

オレが断れば違うところに行くつもりなんだろう？」

流石ディーノさん

私のことをよくわかってるねー

「助かるよ」

「こつちにずっといればいいじゃん♪」

「そうしたいんだけどな」

君達も作戦を考えたいだろ？」

私に聞かれたくないと思うしー

「当然だね」

ほらねー

マーモンちゃんは私と一緒に秘密主義だもん

だから今日だけ泊まらせてくれるだけでも助かるよ〃

「ししっ りよーかい」

「どうしても帰らないの……っ？」

ツナ君が心配してるなー……

私だって帰りたいけど……会う勇気がないんだもん……

「……オレのところにはばらくいるか？」

オレのところでは作戦を立てたりしないから

気にする必要がないぜ？

どうせ部屋も余ってることだしな

ツナもオレのところにいるってわかれば

そこまで心配しないだろ？」

「は、はい……」

デイナーさんと一緒なら……」

〃……迷惑かける〃

「問題ねえって」

デイナーさんもいつも優しいよねー

崩壊

ホテルで引きこもっていれば日にちが過ぎていくー(笑)

いや、ディーノさんがいろいろ教えてくれるけどね

まさかユニちゃんとの代理に白蘭さんが来るとは……

んー大丈夫かなー？

それに炎真君が1人で代理をしてるなんて……

そういえば電話がかかってきてきたのは

私はどうするのか聞きたかったのかな？

無視しちゃったのは悪いけど……

ツナ君が多分教えてくれると思うし大丈夫かな？

それより……

「雲雀先輩はまだ代理になる気がないんですか？」

「……ああ」

これは困ったなー

もう明日から始まるのにねー

「もう私は代理を決めてボスウオッチを渡した

って言ったんですよね？」

ディーノさんがうなずいたなー

うーん……困った……

会いたくないのに会わないといけないかも……

ポンポン

うわっ!?頭をポンポンされた!

「オレが説得するから優は無理しなくていいんだぜ？」

「……ありがとうございます」

「でもなんでそこまで会いたくないんだ？」

恭弥は優を探してるしもう許してくれてるってことだろ？」

「私が最低だからですよ」

「……どういうことだ？」

「私がリタイアするのはみんなのためって思ってるでしょ？」

「違うのか？」

やっぱりねー

「私がリタイアするのは自分のためですよ？」

私はみんなのことなんて考えていませんよー
リボン君にはもう気付かれちゃいましたよ

2日ぐらい前に言われましたからね」

まさか気付かれるとは思わなかったな……

「そうなのか!？」

だったら恭弥に言えば……」

「……リボン君を困らせちゃいました」

「え……?？」

「自分が最低と突きつけられたと思ったんです

リボン君に聞かれた時にね……

よっぽどひどい反応をしたんでしようね

謝られましたよ」

もう頭が真っ白になっちゃったんだよねー

「今回の決断は本当に最低です

もう私は自分のことを許すことは出来ないでしょう

それでもこの道を選びました

このことに関しては

雲雀先輩にも許してもらわうべきではありません

会えば許してほしいと思っと思っています

だから会いたくないんです」

「……もうオレからはこのことを聞かない」

うわーそれは凄く助かるかもー

「けどな 優

許すか許さないかは恭弥が決めることだ

優が決めることじゃないんだぜ?」

「……ディーノさん」

「なんだ?」

「私のことを忘れれば一生許してもらえませんか?」

「……何……言ってるんだ……?」

「みんな忘れれば問題なかったんですね」

そういう方法もあったのか……

全然気付かなかったなー

まあ出来ればしたくないけど最悪そうするか……

「優!!」

「どうかしましたか?」

デイーのさんが大きな声を出すなんて珍しいよねー

「……オレが悪かった」

もう今日は休め な?」

「へ? あ、はい」

おやすみなさい」

んーなんで謝ったんだろう?

まあいいか

リボーンはいつたい優に何を聞いたんだ……?」

聞いてもいいが……ここまで優を追い詰める内容だ

オレが知つたと優が知れば……壊れる可能性があるぜ……

「ボス……かなりやばいんじゃないかねえのか?」

「……ああ

でももうオレの声が届いていない気がする……」

恭弥には黙っていたが……

優がここにいと話すべきなのか……?」

……ダメだ

話せばここから出て行くことになる

今の優はどこにいるかわかっていないとまずい

優が外に出た時に恭弥と会えるように誘導するしかない……

「ロマーリオ……恭弥に今日のことを話すべきか……?」

「……やめとくべきだ……ボス

「今のお嬢さんは本当に記憶を消すぜ……」

「……だよな」

優が恭弥に会いたくないと思ってるのは恐らく自己防衛だ……許せば優は自分で自分をゆっくりと追い詰めていつか壊れる……でも優を恭弥が許さなければこのまま壊れるぜ……

優を救うことが出来るのか……？

「……いい部屋だな」

「!? 誰だ!!」

「こいつ……どこから……」

「優の代理だ」

「気に食わないが優を助ける方法が1つだけあるぞ」

「優の代理人……」

「確かにボスウオッチをつけてる……」

「……本当に優を助ける方法があるのか？」

「ああ」

「リボンが気付いたことを雲雀に俺から話す」

「ちよつと待て！」

「そんなことすれば……」

「優は記憶を消すぜ……」

「優は雲雀に何度も話そうとしたが勇気がなくずつと待っててほしいと言っていた」

「それなのに無理矢理聞こうとしたあいつが悪い」

「……なんであんな奴が運命の人なんだ……」

「運命の人……？」

「あー気にするな」

「まあ今回の件は俺に任せろ」

「俺も勝手にここに泊まるからな」

「まあ優と同じ部屋でいいから気にするな」

「優と同じ部屋……？」

「それはダメだろ!?!」

「子どもに何かするわけないだろ……」

「じゃあな」

「……あいつはいつたい……」

「それにこの部屋に入ったことさえ気付かなかった……」

「……これは荒れるぜ」

代理人

ん？誰だろ？

私が部屋にいることを知ってるのに
ノックもしないで入ってくるなんて……

「俺だ」

「うわー……本当にきたんだ……」

「……嫌そうに聞こえるぞ」

「ごめんごめん」

でもビツクリして……」

だって本当に神様が来るとは思わなかったんだもん……
え？本物だよね？

「いひゃい……」

うん。本物だ……

私のほつぺたを摘むのは神様ぐらいだもん！

「何をそこまでビツクリしてるんだ……」

2度目だろ？」

「へ？ 2度目？」

最初に会った時のこと？

「リング争奪戦で熱が出ていた時に会っただろ……」

「ええええ!？」

あれって夢じゃなかったの!？」

「ああ」

確かにあの時もほつぺた摘まれた気がする……

「教えてよ！」

ずっと精神世界に行ったと思ってたのにー」

「優が聞かなかったから言わなかったただけだ

それに心配して行っただか自分でいうのは恥ずかしいだろ……」

……そりゃそうだ

それに恩着せがましい気がするもんね……

「なんで声を出さなかったの？」

「あーあの時はカーテンの外でディーノ達がいたんだ

気付かれないようにするためにしようがなかったんだ」

あ、なるほど

見つければどう考えても怪しい人物に見えるもんね

神様は簡単に逃げれると思うけどディーノさんが警戒しそうだよ

その中で私はゆっくり寝ることは出来ない気がする……

「ほら 持っておけよ」

ボスウオッチだ

「あ、うん

でもなんで1度預かったの？」

「少し興味があったただけだ

気にするな」

ふむ……まあいいか

だって……それよりしたいことが……

「おおー、すごい!!」

「……つたく」

いやーすみません

でもここで会えたんだから抱きつきたいじゃん

おお！頭を撫でてくれた！

「えへへ」

少しテンションあがってきた♪

「そういえば……明日からでも良かったんだよ？」

いつも仕事で忙しいのに……

「気にするな」

「でも私の代理をするのは大変だったんじゃないの？」

「俺は優を手助けすることは問題ないだろ？」

ボスウオッチをつけるぐらいなら大丈夫だ」

「ありがとう！」

いやー本当に神様が代理をしてくれて助かったね

神様は私以外手助け禁止だから

みんなの時計を壊すことが出来ないんだよねー

だって他のアルコバレーノを手助けすることになるんだもん
その代わりバトラウオッチを壊さないといけなかったけどね
バトラウオッチが残ってれば

私以外の手助けをする可能性があるから来れないみたいだしー
本当にいろいろ縛られてるよねー

「さてと……よっ」

「えええ!？」

お姫様抱っこだよ

雲雀先輩もだけど……なんで簡単に出来るの？

おお……ベッドに寝かせてくれたよ

「今日はもう寝ろ」

「えーせっかく会えたのにー」

もう少し一緒に話がしたいよー

「……俺もだ

でも少しは寝ないと身体に悪い」

……寝てないことがばれてるね……

「寝ようと思ってるんだよ

でもどうしても起きちゃうんだ……」

「わかってる

俺が寝れるように術をかける」

「え!? そんなことも出来るの!？」

「俺を誰だと思ってるんだ……」

そうだよねー

神様だもんねー

「もしかして……そのために今日来てくれたの？」

「……本当はすぐしたかったんだぞ

でも毎日するのは良くないと思うから……」

あー私の身体に負担がかかるんだらうね

特殊能力がそうだったしねー

「今日じゃない日でも良かったんだが……

俺がいる日の方がいいだろ？」

「んーそうかもー」

多分何しても起きなくなるから

神様に提案されても断ってたと思う

「もう少し早く来れば良かったんだが……

いろいろあつてな」

神様はいつも忙しいもんねー

「気にしなくていいよ

本当にありがとう!!」

「ああ

じゃあゆつくり寝ろよ

おやすみ」

「おやすみなさい」

おでこに神様の指が……

うわー……あつたかくなって眠気が……

「……悪い 優」

小さな変化

リボンチームの代理と遭遇しましたが
見事な連携で雲雀恭弥から逃げましたね

「あの2人なかなかやりますね」

流石、ボンゴレ10代目の守護者と

言っただころでしょうね

「そうだな」

「!?!」

いつの間に私がいる木の下に……

「君は誰だい?」

「代理人だ」

確かにボスウオッチをつけている

一体誰の……?」

「へえ……」

「お前に話がある」

「知らない

君とは楽しめそうだよ」

マズイ……私が彼の気配に気付かなかった

この男は強い

雲雀恭弥には荷が重い

今すぐあの言葉を言わなければ……

ガルルルー

「……ミント?」

あれはヴェントの……

つまり彼はヴェントの代理人なのでしょう

「形態変化」

「!?!」

なぜ彼が形態変化を……

しかしあれは風の波動を持つヴェントだけ使えるのです

つまりヴェントが影で……

「それを使うのはルール違反になります」

「オレが使えなければどうやってミントを作るんだ？」

これを発動すればお前らには勝ち目がないぞ

下手な動きはしなければ俺はそれを壊す気はない」

「……………」

確かにこのルールでは

ミントの形態変化の効果に為す術がありません

「…………君がヴェントの師匠だね」

「少しは話を聞く気になったか…………」

本当にこのまま何もしなければ

私のボスウオツチを壊す気はなさそうですね

「…………話とは何でしようか？」

我々と同盟を組みたいのですか？」

「それよりもっといいことだと思っぞ」

「どういうことでしょうか？」

「お前はこいつが代理になった本当の理由を知らないだろ？」

「……………」

私が知らないことがあるようですね

「ヴェントの呪いを解くためだろ？」

代理戦争になれば必ず会えるからな

その時にヴェントを説得させる予定だった

だからリボーンの代理ではなく

風の代理になり1人でも減らそうとしたんだろ？」

「…………私と戦うという約束は…………」

最初から守る気はなかったのですね

「こいつの彼女がヴェントだと知らなかった

お前にも問題があると思うけどな」

「…………そうでしたか…………」

彼女がイーピンの手紙に書いていた風早優さんでしたか…………

…………これは私にも非がありますね

「…………それが何か問題あるの？」

僕はヴェントの呪いを解く」

「お前とツナと出会ったことであいつは変わった

お前らが心配しないように

自分のことを大事にしようと思うようになった」

「……変わってないよ」

「……お前はヴェントの何を見ていたんだ？」

リボーンは気付いていたぞ」

「……？」

リボーンが何を気付いたのでしょう……

「ヴェントは自分が死ねば他の奴が呪われると知っていた

それなのにリボーン達に譲った」

私は彼女が自分の寿命をあげるほどの

お人よしと思っていました

今回も私達に譲ったとばかり思っていました……

「彼女は知っているのに私達に譲ったのですか？」

「ああ」

それは妙ですね

レアという辛さを彼女が1番知っています

それを他の人が経験させるのは避けたいと思うはずす

「ツナの考えは凄く共感できる

だけども自分のことが1番大事……

思っていることを言葉に出せば

もう自分のことを許せなくなる……だったか？」

「……どうして君が知ってるの

それは僕にだけに吐いた弱音だ」

「はあ……呪いの内容は話していないが

雲雀には呪いが解ければどうなるか話していただろ？」

「……知らないよ」

「おしやぶりが離れればどうなるかは言っている」

「……それは違う」

ずっと彼を警戒していたのにそれを解いた

雲雀恭弥がここまで動揺するとは……

「自覚しろ」

お前の行動は優を追い詰めている

あいつは自分のことを許せなくなつて

苦しむのがわかつているのに

お前の隣にいたいと願つたんだ

はつきり言うぞ……俺はお前が嫌いだ

だが、優を救えるのはお前だけだ」

「……………優はどこ」

「家に服を取りに帰つてるぞ」

「そう ありがとう」

困りましたね

代理戦争のことを考えると

雲雀恭弥を追いかけたほうがいいのですが……

テイリリ

この音は……今日の戦闘は終わりましたね

雲雀恭弥についていかなくてもよくなりました

「……………1日が無駄にして悪かったな」

「いえ、あなたが言ったとおり」

私にとつては価値があることでした」

彼女の呪いは解かないほうがいいみたいですし

恐らく明日からは私の代理として戦うでしょう

「1つ質問してもいいでしょうか？」

「なんだ？」

「彼女はなぜ参加したのですか？」

「お前らのためだ

参加していれば何かあつた時に対応がしやすいだろ？」

「そうですか」

やはり……お人よしのようですね

「あーそれと1ついいことを教えてやる」

「はい？」

「優がもし呪いを本気で解こうと考えた場合でも
絶対雲雀には頼まなかったと思うぞ

頼んでもボスウォッチは渡さないだろうな」

「どうしてでしょうか？」

「それは雲雀のことを良く知ってるからだ

じゃあな」

……雲雀恭弥には他にも何かあるのでしょうか……？

罰

んー毎日手洗いして風で乾かしてるけど……
ちゃんと洗濯したいなー

でも流石にそんな時間はないよね

おお……またケイタイに振動が……

今日の時間は終わりみたいだねー

つてか、神様……時計を改造しすぎだよ……

神様の時計は音が鳴ったのに

私のは鳴らないんだって思ったら犯人は神様だった（笑）

まあ助かるけどね

風早優の時に音を鳴らしたくないからねー

他にもケイタイにメッセージを受信させる機能をつけたり……

よく失格にならなかったよね（笑）

やっぱり神様は凄いつてことだね

ガチャ

ん？誰か来たねー

あ、神様かな？

一緒にいれば危ないからつて出かけたしー

「優」

え……なんで雲雀先輩がここに……

急いで逃げないといけないのに身体が動かない……

「こ、来ないでくださいー！」

「いやだ

僕は怒ってるんだ」

あ……そっか……

探していたのは別れを言うためだったのかも……

「代理戦争のことを黙って……う……う……」

ちゃんと謝らなくちゃいけないのに……

涙が邪魔をする……

「ごめ……ひっ……く……ごめんなさい……」

涙が溢れてもう手だけでは……

あれ……？抱きしめられてない……？

「抱きしめてるけど僕は怒ってるからね」

「ひっく……」

返事がしたいけど……出来ない……

「今回のことは許さない」

だから戻ってくるように」

「な……うう……」

なんで……？

「優は僕が怒ってることをわかってるよね？」

だから僕の隣に戻ってくるのが罰になる」

そんなの罰じゃないよ……

「……一生許さないからね」

わかった？」

フルフル……

首を横に振るしかない……

だってわからないもん……罰じゃないんだもん……

「いやだと言っても優に拒否権はないけどね」

「だったら……聞いた意味がないですかー!!」

ひどい……ひどすぎる……

涙が一気に吹き飛んでしまった……

「……眠い」

「へ……？うわっ!？」

またお姫様抱っこだ……

ドサツ

「あ……あの……」

ベットにおろされても困る……

私は眠くないし……

「え!?! え!?! えええ!?!」

「おやすみ」

「ちよつと雲雀先輩!! 離してください!!」

む、無視!?

私は……抱き枕じゃないんだよ!?
ぐいぐいつ……

お、押しても動かない……

どれだけ抱きしめる力が強いんだ……?

「ふぁ……なに?」

おお!起きた!!

「は、離してください!!／／／」

「うるさいなあ……」

ええええ!!私が悪いの!?

ガシヤン

「へ?」

これって……

そういえば雲雀先輩の服装……

「もしもの時もこれで問題ないね」

いやいやいや、あるよ!?

「おやすみ」

きゃー!!だから抱き枕にしないで!!!

「雲雀先輩ー!!」

ぜ、全然起きようとしない……

どうすればいいの!?

昨日いっぱい寝て眠くないし……

そもそもこの状態で寝れるとは思えないけどね

密着状態で何分いればいいの……?

ってか、何分で済むのか!?

風の力を使って何とか抜けたとしても……

これがあるよね

ジャラッ

……手錠はどうすれば?

雲雀先輩と繋がってるし……

というか……トゲを出さないように出来るんだ……

あ、雲雀先輩がクルクルまわしてるところを見た気がする……

「すう……」

「本当によく寝てる……」

もしかして……ずっと探してて寝不足だったのかも……

このままでもいいか……

私も落ち着くし……

「……ありがとう」

大好きです

ゆっくり寝てくださいいね」

うわわわっ!?

さつきより密着した気がする!!

え!?!もしかして……起きてた……?!

でも心臓の音はゆっくりで変わってない気がする……

うーん……気のせいか……

にらみ合い

「……………」

なんだ……これ……

えっと、何があつたつけ？

雲雀先輩に抱き枕されて寝転んでいたら外に出かけてた神様が帰ってきて……

こ、これは恥ずかしいと思つていたら

神様が雲雀先輩から私を引き剥がしたんだよね

どうしたのかはわからないけど全く痛くはなかった

手錠を外してくれた時も痛くなかつたしねー

で、雲雀先輩が起きてしまつてどうしようと思つたら

私を挟んでにらみ合いが始まつたんだよね……

「あ、あの雲雀先輩」

「なに？」

おお……にらみ合いはしてるけど優しい声だった

「こちらの方が何度も話したことがある

いつも助けてくれる私のお師匠さんです」

「ふうん」

声が低くなつた！なんで!?

「あ、あのお師匠さん……」

「なんだ？」

良かった……

神様も話しかければ普通だね

「こちらの方が何度も話したことがある

私とお付き合っている雲雀先輩です」

えへへ……／／／

ちよつと恥ずかしいな……／／／

「……ぶつ飛ばしていいか？」

なんで!?

2人とも戦闘態勢にならないでよ!?

『お疲れ 諸君』

あれ？ボスウオッチから聞こえるね

まあ私のは聞こえないけど……

それにしてもいいタイミングだったよ……

このままバトルになるかと思ったからねー

あ、戦績表がケイタイに表示された

うわーヴェルデ君のチームが凄いなー

5人も倒してるよ

「あれ？ 雲雀先輩がボスウオッチをつけてるんですね」

リボーン君のことだから

ツナ君がつけてると思っただけど……

「こいつはフォンの代理だぞ」

へえーそうなんだー

リボーン君の代理じゃなくて

フォンさんの代理になったんだねー

「1人で戦うんですねー」

だってフォンさんのところが残り1だもん

「当たり前だよ」

まあ群れない雲雀先輩らしいね

「雲雀先輩ごめんなさい」

そしてありがとうございます」

「どうしたの？」

「雲雀先輩に代理を頼まなくて……

でも雲雀先輩がフォンさんの代理になっていたので

今、凄く気が楽になったんです」

「……そう」

「はいー」

本当に良かったー

もし私のせいで雲雀先輩が参加しないと決めたら

雲雀先輩の楽しみを奪ったことになるし……

「優、今日から家に帰るのか？」

「うん

そのつもりだよー?」

あ、ディーノさんにお礼を言わないと……

「荷物をとってくるか……」

「え!? 私が行くよ?」

「一緒に行くか?」

「うん♪」

わーい

また神様と一緒に出かけだね♪

「……僕も行く」

「へ?」

「僕も一緒に行く」

「大丈夫ですよ?」

そこまで重くないですし……」

「そうだぞ

俺がいるからお前は学校にでも行つてろ」

「……」

だからにらみ合いしないでよ!?

「俺（僕）と一緒に行くだろ（よね）」

「……3人で行きます?」

うん……それはないんだね

だってにらみ合いがすごいもん……

「……俺は優を困らせたくはないからな

雲雀と行つて来い」

あ……そういう言い方をすれば……

「……行かない」

だよねー

雲雀先輩は絶対嫌がるよねー

だって命令されるのが嫌いだもん

まあバトルにならなかつただけでしただよねー

「そうか

「じゃあ俺と一緒に行くか？」

「あ、うん」

なんか雲雀先輩から視線を感じる……
気のせいだよね……？

「優」

「は、はい！」

雲雀先輩に声をかけられて

ちよつとビビってしまうのはしょうがないと思う

「僕は帰るよ」

もう……帰っちゃうんだ……

でも学校でバトルがあったと思うし状況を確認したいよね……

「明日は学校来てね」

「はい!! 行きますね!」

「待ってるよ」

へ……？

「じゃあね」

「な、なっ……何するんですかー! // //」

行っちゃわないでよー

うう……恥ずかしすぎる…… // //

神様の前でキスされた……

「……やっぱりぶっ飛ばしていいか？」

「ダメ!!」

神様がぶっ飛ばすと言えば本当にぶっ飛ばすと思う
だって神様だもん……

新任教師

久しぶりの学校だなー

そういえば昨日ディーノさんにお礼をいったら
ものすごく頭を撫でられたんだよねー

うーん……なんでだろ？

まあいいか

さて、書類がいつぱいあるけど

雲雀先輩に許可ももらったし授業が始まる前に

私はみんなに顔を出さないとねー

「優!!」

ツナ君、気付くのがはやいなー

「おはよー」

「学校に来たってことは……」

ヒバリさんと仲直りしたんだね！」

「うん♪」

うわーすごい

クラスのみんながほっとした（笑）

やっぱり機嫌が悪くて大変だったんだらうねー

安心してもらうために顔出したのは正解だったね

うーん……獄寺君にいつもよりバカって呼ばれてる気がする

まあいいか

そして山本君にはなぜかキャッチボールに誘ってくれた

でも私の記憶では山本君と野球は危険だった気がする

誰もいないところであることをしよう……

風早優の身体能力ですると死ぬ気がするもん

あ、そういえば……

「炎真君、電話を無視しちゃってゴメンね？」

「ツナ君から話は聞いていたよ

それで……僕達はスカルの代理になったんだ……

優さん……ごめん……」

「それはいいけど……僕達って言った？

ディーノさんから聞いた話だと

炎真君だけだった気がするけど……」

「アーデルハイトの許可が出たんだ

だからシモンフアミリーでスカルの代理になったんだ」

「へえー そうだったんだー」

これで炎真君も安心だね

「うそ!! シモンフアミリー全員がスカルの代理に!？」

「うん！」

あれ？ツナ君達もまだ知らなかったんだ

「また強敵が増えたな！」

しかも校内に」

そういえばそうかもー

3つのグループが学校にいるもんね

まあ私の家に神様がいるから

近くにと考えれば4つもいるよ

あ、チャイムが鳴ってる

「じゃあ私は書類をするからね

みんなまたねー」

さて、みんなから返事をもらったし

早く応接室に行って書類をしよう

……最近なんだこれと思うことが多い気がする

でも多分間違ってると思う

髪の色、体系とかが一緒だし

極め付けは廊下で派手に転んだみたい

まだ起き上がってないからねー

もう間違いないと思う

「……大丈夫ですか？」

「いてて……さつきから廊下がすべるんだ」

それは違うとツツコミしてもいい？

……我慢しよう

「……怪我してませんか？」

「大丈夫だ！ 優!？」

やっぱり……ディーノさんだよ

無事に起き上がったし聞いてみよう

「……なにしてるんですか？」

「昨日の代理戦争に遅れてしまったんだ

だからツナ達の近くにいたほうがいいと思ってよ

新任英語教師になったんだ」

……そうなんだ

「今からツナ達の教室に行こうとしたんだが……」

……うん

「何度も転ぶし教室がどこかわからないんだね

だって部下がいないもん！

つまり授業でもいっばい失敗するんだろうね」

スペルを間違ったりしそうだもん……

「……一緒に行きましょう」

「ん？ 助かるぜ！」

一緒にについて行って良かったかも」

みんなの驚いた反応が見れる！

「……ですよー」

「……ここだったのか……ありがとな！」

毎時間むかえに行くべき……？

まあドアをあけるか……

ガラッ

「あれ？ 優どうしたの？」

「今日から英語の先生が変わるんだ
だから案内したんだー」

誰も知らなかったんだらうねー

だってクラスのみんなもビックリしてるもん

つまりリボン君が無理矢理に入れたんだらうね

「もういいよな？」

チャオ！ じゃねーな 英語はハローか

新任英語教師のディーノだ よろしくな！」

おお！みんなが驚いてる♪

まあなぜか獄寺君はケンカ腰だけど……

いやーそれにしても女の子の人気の高いなー

みんなの目がハートマークに見えるもん

「優 ありがとな」

うわーみんなの前で頭をポンポンされた……／／／

それはちよつと恥ずかしい……／／／

「私の方がいつもお世話になっていきますし

これぐらい気にしないでください

では、私はこれで……」

「ん？ どこ行くんだ？」

優もこのクラスだろ？」

「私は風紀委員なので授業より

雲雀先輩が用意した書類をしないとイケないんです」

多分、山のように置いてあると思う

また遠い目になってる気がするよ……

「……あんまり無理するなよ

オレが恭弥に言ってやろうか？」

うわーみんながざわついた

まあ雲雀先輩の名前を呼び捨てで呼んでるし

注意をしようとしてるからねー

「大丈夫ですよ♪」

「……わかった」

恭弥にもよろしくって伝えといてくれ」

「いいですけどー」

相手をしてくれるっていう意味にとると思いますよ？

私の予想では雲雀先輩が咬み殺したい人物の

ナンバー1はディーノさんですからねー」

「まじかよ!?!」

だってディーノさんと会うたびに

雲雀先輩はケンカうつてるもん

旅行先で会った時も咬み殺そうとしたからね

それにツナ君達にはしないしー

「まあただの私の予想ですからね」

「……さっきのはなしにしてくれ

優の予想は当たる気がするぜ……」

そこまで信用しない方がいいと思う

「わかりましたー

では、頑張ってください」

「ああ またな?」

「はい!」

さて、今度こそ応接室に行こう

早く行かないと雲雀先輩が教室まで来る気がする……

写真

な、なんてことだ……!!

書類がすごい山になってるのは予想できた

草壁さんが心配していたのも予想できた

雲雀先輩は私に来るまで見回りをしないというのも予想できた
た、ただ………

「ひ、雲雀先輩……」

「なに」

「じゃ、写真をとらせてください!!」

よくわからないっていう顔をしてるけど

私にはわからないのが不思議だ……

「あああああ! ダメです!!」

フォンさんも一緒にとらせてくださいー!!」

「私も一緒にですか?」

「はい!!!」

な、なんて素晴らしいんだ……!!

カシャ……カシャ……カシャシャシャ……

「……もういいよね?」

ええええ! まだ10枚しか撮ってない!!!

でもこれ以上撮れば機嫌が悪くなりそう……

「……はあい」

……どうしよう

今すぐ現象したい

だって雲雀先輩の頭の上にフォンさんが乗ってるんだよ!!

なんて可愛いんだ!!!

あ、そうだ!

「フォ、フォンさん……少しだけ抱きしめてもいいですか?」

「はい?」

きゃー首を傾げてるのも可愛い!!

「優」

あれ？雲雀先輩が怒ってるような……

あ、書類をしてないからか……

「……書類します……」

はあ……雲雀先輩の小さいころみたいで
すごく可愛いのかな……

「あ！雲雀先輩の小さいころの写真はないんですか？」

「知らない」

うーそれは残念だ

興味をもつてほしかったね……

「……優は？」

「ありませんよー」

あれ？ちよつと待つてくださいね」

もしかして神様だったら用意できる？

だって私の入学書類の写真を用意したもんね

あーでもそういうのは無理なことか……

「んーやっぱりないですね」

「そう」

「あ、すみません

書類頑張りますね！」

やってもやっても減らない（泣）

まあまだやり始めて1時間しかたつてないけどね

「優」

あれ？神様だ

あ、勝手に入ってきたから雲雀先輩の機嫌が悪くなった

「少し出かけてくる

夕方には帰ってくるから心配しないでいいぞ」

「うん？ わかった」

行つてらっしゃい」

気をつけてねって言おうかと思つたけど

神様は問題ないよねー

それにこの世界から出かけるっていう意味かも知れないしね

「あーそうだ 雲雀」

「……なに」

……大丈夫？

頼むからケンカしないでねー

「これどう思う？」

う………凄く気になる

神様は私に教える気がないみたい

だって私に見えないように雲雀先輩に見せたもん

「……どうして持つてるの」

「さあな」

「うー……!!!」

凄く気になるー!!!

「わかつたわかつた」

あげるから唸るな」

「え？ なになに？」

ピラッ

ん？なんだろ？

写真？

「うそー……!？」

うわー凄くほしいけど……

これってダメじゃないの!？」

「一昨日、優が寝たから

ヒマでクラッキングしていたら見つけたんだ」

……神様それはダメでしょ

それは神様がしちやいけない気がする……

つてか、どこをクラッキングすれば見つかるんだ……

近くの写真屋……？

「いらないのか？」

よし！神様がこの世界にきてからしたんだ
いいと思うことにしよう！

「ほしい!!!」

おお!!小学生の時なのかなあ……

雲雀先輩が小さくて可愛い!!

まあ……目つきは小学生なのに怖いけどね……（笑）
大事に内ポケットに直そう

「じゃあな」

「うん！」

いってらっしゃい!!」

やっばい！テンションが凄くあがったね！
書類頑張ろう!!

やっぱり簡単には減らないなー

「……優」

「はい」

「僕もほしい」

「へ？」

あ、もしかして写真？

「そうですねー」

知らないって言ってたしー

「わかりました

私が頼めばまたくれると思うのでこれをどうぞ
えーつと……あったあつた

「……なにこれ」

「へ？ 雲雀先輩の小さいころの写真ですよね？」

え!?!もしかして別人!?

「……………そうだよ」

これは優が持っておきなよ」

「え? いいんですか?」

「いいよ」

ふむ? やっぱりいらなくなったのかな?

まあいいか……………

呼び出し

だからまたにらみ合いしないでよね

「えっと……私は大丈夫だよ？」

そこまで疲れてないし……

「もう放課後だしいいだろ……」

俺と一緒に過ごしたくないのか？」

……それは過ごしたい

滅多に出来ないことだし……

「それに後数日でリタイアするつもりだろ？」

俺はこれを壊した時点で帰るぞー」

……そうだよねー

こつちの世界にいる理由がないから帰ることになるよね……

「……帰っていいよ」

「でも……」

書類をしないと……

「いっよ」

うう……雲雀先輩が優しい……

「……ありがとう」

うわーどうしよう

どこに行こうかなー

でも家で一緒にいるのもいいよね!!

あれ？ケイタイが鳴ってるね

んーヴェント用だ

え？入江君だよ

『もしもし？』

ヴェント君……急にごめん

どうしても聞きたいことが……』

ん？ヴェント君って言ったね

つまりヴェントで話をしたほうがいい気がする

“どうしたんだ？”

『んー？ これはヴェント君に繋がってるのかな？
ちよーどいいや♪』

正チャンに僕がユニちゃんのチームで
ボンゴレと同盟を組んだって説明してよ♪』
なんで……白蘭さんが……

“今、どこだ”

『正チャン家だよ♪』

“すぐ行くから動くなよ！”

ギャー！急いでいかないと！！

おお……流石神様！！

荷物を整理してヴェントの服を準備してくれてる！！

「……何かあったの？」

雲雀先輩にも来てもらったほうがいいかな？

んーどうしよう……

「俺と一緒にいきたいのか？」

だからにらみ合いないでよ……

「心配しなくて大丈夫ですよ！」

後で連絡しますね！」

「……わかった」

「はい！」

行ってきます！」

「ヴェ、ヴェント君！！」

あー良かった……

入江君が無事で……

あ、まだ安心するのは早いか……

でも＼さんも一緒にいるし大丈夫かもしれないね

“大丈夫か？”

「う、うん……」

あ、γさんが頭を下げちゃったよ

んー未来の記憶を見ちゃったからと思う

私のわがままだから気にしないでほしいんだけどなー

まあいいか

「会いたかったよ ヴェント君♪

君のことだから正ちゃんには

連絡先を教えてると思ったのは正解だったね♪

わざわざここまで着た甲斐があったよ」

うわー全部読まれてる!!

ってか、私と会うために入江君と接触したのか!!

……入江君ゴメンね……

「そっちの彼はヴェント君の代理かな？」

「……………」

あれ？神様って白蘭さんも好きじゃないのかな？

「無視されちゃったね

そうだ ヴェント君にもこれを見てもらおう」

「白蘭!! 姫の許可を得ずに……………」

やっぱり大丈夫じゃない気がしてきた

ん？銃だね

でも……おかしいよね

「これ どう思う？」

“……………有幻覚……………?”

「なっ!？」

あれ？γさんがビクビクしたけど何かあるのかな？

「やっぱりヴェント君は素晴らしいね♪

正ちゃんにはもう説明をして

僕達と一緒に行くことになったんだ

ヴェント君も一緒に行くかい？」

入江君を見てみたけど本当に行くみたいだねー

心配だし一緒に行こうかな……

くそー私の行動を全て読んでるなー!

んーここは一緒に行かずに後をつけたほうがいいのか?

「俺も行ってもいいんだな?」

「もちろん♪」

あ、神様は私が行けばついてきてくれるんだ

「……姫もヴェントに会いたがっていた

出来れば一緒に来てほしい」

……ふむ

γさんも言うなら一緒に行こうかなー

車の中にスパナさんがいたのはビックリした……

だから入江君がついていくって決めたのかな?

まあいいや

それにしてもこの空気の悪さを何とかしてほしい

γさんと白蘭さんの空気が微妙なものもあるけど

神様と白蘭さんの空気も悪いんだよねー

んー神様は雲雀先輩のことがあまり好きじゃないから

空気が少し悪くなることもあるけどー

まだ冗談って言えるレベルなんだよねー

でもこれは言えないと思う

救いが入江君とスパナさんが仲良く話してることだね

あ、やっど止まった

大きな家だなー

「ここに僕達は住んでるんだ♪」

うわー今の言葉でγさんがイラっとしたね

入ってみただけど本当に大きな家だなー

「先に正チャン達は他の物を見ているかい?」

地下に置いてあるんだ」

あ、隠し階段だよ
すごいなー

「うちはデータをとる」

「ほ、僕も行くー!」

念のために私も一緒に行くかなー

「ヴェント君はこっちなね♪」

ユニちゃんが会いたがってるよ」

……どうしよう

選べない!!

「……俺が入江達と一緒にいてもいいぞ」

あれ? 神様がそういうこととしていいのかな?

まあ何かあっても助けることは出来ないけど

何かあっても対処できると

白蘭さんが勝手に勘違いするのはセーフなのかな?

〴〵助かるよ

白蘭 案内してくれ〴〵

「案内って言ってもここだけだね♪」

ガチャ

その部屋かよ!?

……落ち着くんだ 私

私までイラっとして空気を悪くしてどうする……

「おまたせ♪」

同盟のリポーンチーム♪」

……ツナ君達もいるんだね

先に言えよ!?

あ、本当にいるよ……

「白蘭と……?!!? それにヴェントも!?!」

〴〵僕もここで会うとは思わなかったよ……〴〵

まじで……

「ヴェントさん!」

うわーユニちゃんがかわいい!!

「なんとお礼を言えればいいのか……」

「僕が勝手にやったことだ
気にするな」

それに未来でやったのことだしね

「……はい わかりました」

いつも思うけど大事な時は

私の目を見て返事してくれるな」

信用

「ユニに1つ質問してもいいか？」

「はい？ どうかしましたか？」

「ユニは白蘭を信用してるんだな？」

「はい」

「んー今回も私の目をみてはつきり返事をしたね

ユニちゃんが白蘭さんを信頼してるのか……

うーん……決めた！

パサツ

「やっぱりフードかぶってない方が楽だなー

「ちよつ?! 優!?!」

「バカ!!」

「あらー思ったよりビツクリされたね

「まあリボン君は普通だけど（笑）」

「私だって白蘭さんを信用したわけじゃないよ？」

「ただユニちゃんを信用してとっただけだよ」

「ヴェントさん……」

「あ、そうか」

「ユニちゃんは名前を知らないから

「フードとつてもそう呼ぶしかないよねー

「はじめまして 風早優です」

「優さんとお呼びしてもよろしいですか？」

「いいよー」

「ツナ君は私が決めたことだから納得したっぽいけど

「獄寺君がまだブツブツ怒ってる（笑）」

「それよりなんでみんな集まってるの？」

「ヴェルデチームのことを聞きに来たんだ

「やられたのは監視していたコロネロチームの

「ターメリックとオレガノ……」

「そしてお前達のチームの3人だからな」

なるほどねー

情報を聞きたかったのか……

ってか、ターメリックとオレガノって誰？（笑）

まあいいか……

「ハッキリ言って

お前達は優勝候補の実力を持っている

そのお前達を10分間に3人も倒した

ヴェルデチームが何をしたのか知りてーんだ」

確かに10分で3人も倒したって凄いよねー

白蘭さんだって一緒にいたと思うしー

「私もそれは気になるかもー

聞いてもいい？」

「優ちゃんにはもう見せちゃったけどねー」

「へ？」

「すみません……姫の許可がないのに……」

ん？もしかしてさっきの銃が関係があるの？

「大丈夫です

みなさんにも見てもらいましょう」

「……はい

こいつを見てくれ」

あ、やっぱりさっきの銃だ

流石リボン君だね

見ただけで銃の種類がわかるんだもん

私にはさっぱりだ

「……やっぱり優ちゃんが特別だね♪」

ややこしい言い方をしないでほしい

獄寺君が白蘭さんを警戒しちやっただじゃん

「どう見ても本物でしょ？」

でもその銃は幻覚で造られてるんだよ」

あーやっぱり……

「これが幻覚……？」

この質感は本物そのものだぞ……
優はこれが幻覚と気付いたのか？」

「んーそれはちよつと違うかなー」

だって私はその銃が本物にしか感じないもん」

「日本語話せ バカ」

いや、獄寺君それは許してよ……

出来るだけデメリツトのことを話したくないから

遠まわしにしか言えないんだよ

「私にはこの銃は本物にしか感じないよ

幻覚に強い私が思うぐらいにね

だから撃たれたら怪我するよ？

でも幻覚で造つてることを隠してる感じもするんだ

だから有幻覚？と白蘭さんに聞いたんだ

まあ感覚の問題だから説明するのが難しいよ」

景色が2種類見えていて

本物の景色には銃も普通に見えていて

幻覚の景色には銃だけがぼやけて見えるんだよね

だから一瞬ではわからないけど違いがわかるって感じだもん

「あながち間違っていないな……」

ヴェルデの造つた装置っていうのは平たく言やあ

幻覚を本物にしちまう装置なのさ」

なるほどねー

それで違和感があるのか……

「厳密には今日になって少しずつ綻び始めたけど

それでも1日以上は本物そのもの♪」

うわー1日もたってるの!?

あ、そりやそうか

昨日の戦闘の時の銃だと思うし1日たってるよねー

「しかも奴らには優秀な術士が骸以外にもう1人……」

骸の弟子のフランって奴までいる」

「あ!! フランって!!」

「あ、みんなに教えるの忘れてた

ちよつと前からフラン君は骸君のところにいるんだ」

「おせえよ!!」

「ごめんごめん……」

ヴァリアーの活動でフラン君を勧誘しに行ったら

骸君達も勧誘しにきてたみたいで……

いろいろもめて私が育てるっていう話も出たけど

結局、骸君のところで育てる話になったんだ」

「へえー」

山本君は獄寺君と違って怒らないね（笑）

「幻覚を本物にする装置と術士2人の組み合わせ……

たしかにハンパねーな」

「で、でも……優がいたら……」

あー期待した目で見ないで……

「……ごめん……ツナ君……」

骸君に今回は邪魔しないって言っちゃった……」

「えー!!」

「風早!! 10代目が困ってるんだぞ!!」

「そうだけどー」

言っちゃったのはしようがないもん」

ちよつとすねた感じで言っちゃった!!

「そりやしようがねーよなー!」

山本君は本当に怒らないね（笑）

「それにヴェルデ君の装置の対応策は

考えてるでしょ?」

入江君とスパナさんと呼んだのはそのためだと思っしー

「そうだよ

天才には天才 装置には装置さ♪」

あ、いいタイミングで来たねー

「やあ 久しぶり!」

「正一君!! スパナ!!」

「一緒に来たんだー」

私がおここに来た理由の1つは入江君達の護衛だしねー」

「やだなー」

正チャンの親友の僕が正チャンに何かすると?」

「しまくると思っています!!」

それにスパナが車にいるって言うから

ついていくしかないし……

僕は風早さんが来るまで怖くて怖くて……

白蘭サンの親友にはもれなく

白蘭サンの冷酷さも卑劣さもついてくるんですから!!」

あ、声が裏返ってるよ

それにしても入江君は苦労人だね

今度何かおごつてあげよう

「と……とにかく僕らはヴェルデの装置を

向こうにする研究を始めてみますけど

1日や2日じゃできっこありませんからね」

結構かかるなー

あ、リボン君も同じ事を思ったね

まあそれだけヴェルデ君の装置は凄いつてことか……

規格外

あ、この音って……

『バトル開始1分前です』

やっぱりねー

みんな戦闘態勢に入ってるねー

入江君達は地下に隠れるみたいだし安心していいか……

「あ、入江君ちよつと待って」

「ど、どうしたの？」

「私のお師匠さんは？」

「えっと……僕達がこの部屋に入る直前に

外に行くって言ってたけど……」

「ありがとう」

外にいるのか……

んーヴェントになって私も外に出るかなー

あ、空に浮かんでるー

ミントも一緒だね

ツナ君達とは少し離れてるのはわざとかな？

私も近くに行こう

「外に出ると危ないぞ」

「守ってくれるかなーって？」

「……つたく

俺から離れるなよ」

「はあい」

やっぱり今回の場合は守ってくれるんだ

まあ私しか無理っぽいけどね

あれ？有幻覚の電信柱がいつぱいだよ

でも骸君達は感じないなー

あ、ミサイルが飛んできた

パチン

……うん

私はツツコミしないよ

神様が指を鳴らしただけでミサイルが消えた（笑）

それも私達を狙ってるミサイルだけ消したしね！

……これは規格外ですね

「師匠ー どうしますー？」

ヴェントの代理人が強すぎますー」

「……彼に手を出すのはやめましょう

彼女の代理人です

我々が何もしなければ何もしてこないでしょう」

今も視線を感じますからね

私達がどこにいるか気付いているのに

沢田綱吉達には教えていないみたいですし

彼とは敵対しないほうがいいでしょう

「わかりましたー」

んー骸君は私達と戦う気がないみたいだねー
私達をさけてツナ君達と戦ってるもん

それに……

ガルルー♪

ミントがリラックスモードに入ってるしね（笑）

みんなが必死に戦ってるのに凄いねー

雲雀先輩は大丈夫かなー？

メール送っておこう

雲雀先輩はケイタイの音で戦闘をやめると思えないしね

このタイミングにするのは後で見たときに

私はメールするほど安全だったってわかるよねー

「優、俺の後ろにいろ」

「わかったー」

何かあるのかなー？

ん？神様が見てる方向から変な音がする

今のは……偶然か……？

「……オレ達に気付いてるぜ コラ」

「ウソを言うな！」

あそこから5キロも離れているんだぞ!!」

「間違いないぜ コラ」

謎の多い子とは思っていたが

代理人にこれほどの実力者を連れてくるとは……

「……同盟を結んでいるリボンチームは当てるな

ユニチームとヴェルデチームを仕留めるんだ

ヴェントチームは仕留めれなくてもいい

ただし、相手の実力を測りたいから当ててくれ

できるか コロネロ」

「……オレを誰だと思ってるんだ コラ!!」

彼女を背中に隠した

こちらの気付いているのにも関わらず

非難させずに背中に隠したのは守りきる自信があるからか？

「いくぜ コラ！」

「ぐ」

凄まじい炎がライフルに集まっていく……

「見せてやれ

これが屈強の軍人 虹の赤ん坊・コロネロの

マキシマム ライフル!!」

少しは実力がわかればいいが……

「……何者だ……あいつは……」

今の一撃を片手で防ぐとは……

「……全弾 ターゲットの着弾を確認

ユニチーム 桔梗

ヴェルデチーム 城嶋犬・柿本千種

3名のバトラウオッチを破壊

ユニチーム γ・白蘭

ヴェデチーム 骸・フランの時計の破壊は確認できず

ただし 時計をかばい4名とも負傷

ヴェントチームの代理人は無傷

なお リボンチーム 沢田・獄寺・山本は被弾せず

評価は……」

ラルが迷っているが……

「文句なしのAだ」

これはコロネロが悪いわけではない

あの子の代理人には実力を測るためには

コロネロが全力で攻撃するべきだった

オレの判断ミスだ

……ありえない

いろいろありえない

どれだけの威力の攻撃をしてきたんだ……

今の一撃は下手すれば死ぬよ……

そりゃ全部時計を狙ってたけど……

いや、1番ありえないのは

神様が片手で防いで無傷な気もするけど……

まあ神様だし……それより急いで……

「……治療しないと……！」

「優、ダメだ」

「なんで!？」

「あの威力は今の優には防げない

それにまだ終わっていないんだ」

「で、でも……」

「あれは時計を狙っていた

失格になった奴らは軽症だ」

つまり治療しなきゃいけないメンバーは

時計が壊れていないんだ……

「この一撃を凌いだ時

あんたをぶちのめす!! 父さん!!

みんな!! 2発目が来るぞ!! 身を守れ!!」

どうしよう……

ツナ君達がこのまま危ない……

だって壊れちゃいけないボスウォッチをつけてるのは

ツナ君だから無理に時計をかばって大怪我するよ!

γさんがツナ君を守るって言ってるけど……

そんなの無謀だ!!

「……ありがとう!!」

わがままに付き合ってくれて!」

「……………」

返事を返してくれなかったな……

まあしようがないか……

今から何をするかわかっているとと思うしね

あ、音が!!

「来る!」

うわーさつきより威力が強いなー

「優!」

ツナ君の前に来たからビックリしちゃったねー

「すごい屁理屈を言うよう?」

私はコロネロ君に手を出さないって言ってないの

だからツナ君を守ろうかなって♪

γさんに何かあつたらユニちゃん泣いちゃうしねー」

まあリタイアするって言ったくせに

ツナ君に肩入れしちやっただのは本当はダメだと思うけどね

さて、ツナ君を守らないとねー

袋をとつと……

私は失格になるけどこれはしようがないよねー

治療

くりボーンsideく

……優がツナを助けると決めたのは理解できるが呪解しようとしなのはなんでだ？

「プレゼントプリーズと言わなければ

失格になりますよ!! ホホ」

尾道か……

優が笑ってる……まさか……

ツナを助けるために失格になる気なのか!?

リタイアすると宣言していたが……

……この短い時間で優は風の力を集めれるのか？

優の代理人は助ける気がねーのか？

このままだと優が死ぬかも知れねーんだぞ

やはり……今はそれを考えるのはそれじゃねーな

……優が無茶する理由はツナとγを庇ってるからだ

それにこのままだとツナが……

ここはオレが呪解するべきだな

「プレゼントプリー……!?!」

頭に手が……この羽は……

く優sideく

あーまた格好つけちゃったなー

刀に風を集めて斬ろうとしたけど

この威力はやばい気がする

分散する前提で大丈夫と考えたからねー

ツナ君に集中して攻撃するとは思わなかったんだよねー

これは後で雲雀先輩と神様に怒られそうだよ

「失格……!?!」

それはダメだ!」

「ええ!?!」

ちよつとツナ君!!何してるの!?!

私の前に出ないでよ!!

このままじゃツナ君がやばいよ……

間に合え!!

え……ウソ……白蘭さんがツナ君を守った……?

「優ちゃんは詰めが甘いね

綱吉くんは君と一緒にでお人好しだよ

それを忘れちゃダメだよ♪」

確かに……

ツナ君はそうだよねー……

「ここで君が負けちゃいけない

それがユニちゃんの願い♪」

今回は白蘭さんに助けられちゃったなー……

ここはもう甘えて私は早く袋をするべきだね

短い時間だから大丈夫だったみたい

……そっか……

白蘭さんは一人で苦しんでたんだ……

それをユニちゃんが助けたんだねー

『ユニチーム ボスウォッチを破損

敗退です』

ツナ君も心配だけど先に白蘭さんを助けないと……

このまま地面に落ちれば更に怪我が悪化する!!

風で浮かせないと!!

「あ、しまった……」

私も空を飛んでるんだった……

落ちていくー(笑)

まあなんとかかなるかなー?

「なるわけないだろ……」

あ、神様が助けてくれたよ
どうやってるか知らないけど私も浮いてるもん
まあここは笑って誤魔化そう！

「えへへ♪」

さて、白蘭さんは無事に地面に降ろしたしー
もう自分で浮いて降りよう

ツナ君はリボーンが追っかけたから大丈夫と思う……

「治療の手伝いしてくるね」

入江君とデイジーさんが晴の活性で治療してくれてるし
でもあの傷だと全部治るとは思えないし体力を渡そう
うわーすごい怪我だ……

「これは無茶しちゃったねー」

「優ちゃんは人のことを言えないと思うよ♪」

そうかもねー

でも重症なのに話しかけるのも無茶だと思う

「今は話さないでください！」

「傷が開いちゃいます!!」

「あはは♪」

本当に入江君は苦勞しそうだ……

「入江君とデイジーさんは少し休憩して

今から少し診てみるよ

それから晴の活性をしたほうがいいと思う」

やっぱり傷の状況を見てからしたほうがいいよ

全身を活性させるのもいいけど

1番ひどいところを中心に活性化の炎を浴びせる方がいいもん

「えつと……こことここだね

重点的に晴の活性を浴びせてほしいかなー」

後は体力かなー

「優さんー！」

「どうしたの？ ユニちゃん」

「……白蘭 すみません

優さん、出来るだけ体力は残してください」

何かあるって予知したのかも……

「……白蘭さんゴメンね？」

「大丈夫さ♪」

白蘭さんの大丈夫ってウソっぽいよねー

まあ私も人のことは言えない気がするけどね

「じゃあ悪いけどー

ツナ君達のところに行つて来るよー

あつちも心配なんだよねー」

「はい

私も後から行きます」

え？ユニちゃんが？

大丈夫かなー

まあ危ない時には近づかないと思うしいいか……

「わかったー

先に行つて来ます」

よし、スケボーでいこう！

衝撃

リボーン君に追いついちゃったなー

空を飛んで一緒に行こうかなー

「優、何を考えてんだ」

「ん？ 何が？」

「優はオレの目的に気付いているだろ」

「まあねー」

まあ白蘭さんと同盟を組んだって聞いた時に
もしかして？って思ったぐらいだったけどね

今、リボーン君に聞かれて確信したんだよねー

「それなのに約束をやぶってまで

手を出して無茶をしようとした

オレが呪解をすればツナを助けることは出来ただろ」

「んー少しは役に立ちたかったのかもー

後は……今まで守れない約束やもう無理と思った約束は

先に謝ってその約束をなかったことにしてもらったけど

これからはそれも出来ない気がしちやって……

後で謝って許せる範囲の事を先に破っておきたかったのかもー」

「……わかったぞ」

「ありがとうー」

リボーン君はいつも深く聞かないから本当に助かるよ

「優、もうーっ聞いてもいいか？」

あれ？珍しく深く聞いてきたね

「どうしたの？」

「優の代理人と雲雀だったらどっちを信用するんだ？」

えーそんなの決めれない……

ってか、全然違う内容を聞いてきたね

「んーほとんど差はないと思う

でもお師匠さんの方を信用するかなー？」

「そうか」

今の質問は何か意味があるのかな？

んー……さっぱりだ（笑）

「さっきディーノから連絡があつて

ヒバリはヴァリアーと戦つてゐるらしいぞ」

「え!? そうなの!？」

うーん……大丈夫かな……

まあフォンさんがついてるし……

……ダメだ……心配になってきた……

「ヒバリがやべー時は

ディーノが助けるように指示を出してるぞ」

ディーノさんがいれば大丈夫かな……

うーん……大丈夫じゃない気がしてきた

「リボーン君が雲雀先輩を助ける理由は読めたけど

それは難しいと思うんだけど……」

「どうしてだ？」

ディーノはヒバリのことをわかつてるだろ」

多分これは……

ディーノさんが雲雀先輩をうまく誘導して

助けることが出来ることを言ってるんだと思う

私もそれはディーノさんがいれば大丈夫と思ったよ

「えっと……そういう意味の心配じゃなくて……

雲雀先輩は我慢できない人って忘れちゃダメだよ？」

助けたとしてもツナ君と戦えるまで……

雲雀先輩が我慢できるのかな……

「……なるほどな」

流石リボーン君……今のでわかったんだ……

雲雀先輩はルールに縛られるのも大嫌いだし……

いつか破つちやう気がするんだよね……

だからもし勇気が出て説明する気になったとしても

絶対頼むつもりはならなかったんだよねー

私の場合は数日様子を見たかったから

出来るだけみんなの時計を壊したくなかったからね……
……うん。やっぱり雲雀先輩には絶対頼めないよね

バトルするのを我慢しろって言う内容だもん……

あ、ツナ君達が見えたー

あれ？ツナ君がハイパーモードじゃないよ

でもボスウオッチは壊されてないよね？

うーん……どうなってるんだろ？

「優、今回は手を出すなよ」

つまりリボン君が何とかするってことか……

「わかった」

うわーツナ君がピンチだ

ってか、あれだけ大きな岩を片手で……

やっぱりツナ君のお父さんは強いよねー

あの時、絶対戦いたくないって思ったもん

「プレゼント プリーズ」

おお！リボン君が大人に!!

うわー……すっげー……

岩を撃って文字を作ったよ……

「CHAOS」

え……もしかして……

今まで「ちやおツス」って言ってたのは……

これを言いたかったの……？

いや、流星にそれはないと思う

それより……リボン君の身長が高い!!

本当はここまで高いの!?

「誰ですか!？」

ガクツ……って感じで空から落ちそうになったよ!

ツナ君って本当に鈍いよね……

あ、やっぱりリボン君は名乗らなかつたねー

「何でオレのことダメツナとか知ってるの!？」

……自分でダメツナっていうのは止めようよ……

「オレ界限では有名な名だ」

「なにそれー!？」

え!？」

あ……ツナ君……ごめん……

界限の意味を知ってることにビックリしちゃった……

新勢力

おーすごい

ツナ君がツナ君のお父さんといひ勝負になつてる

リボーン君の戦いを見て勉強したんだろうね

私もリボーン君の戦いを見てちよつと思つたことがある

神様つてこういうのは絶対教えないよね

まあ私がすぐ逃げちやうタイプつていうのを

知つてるのもあると思うけどー

肉を切らせて骨を断つつていう戦い方は1度も教えられてないよ

というか、そういうことをしよう考えるなら

その戦法を使わずに勝てるように出来るまで鍛えようとするもん

リボーン君とは教育方法が正反対な気がする

そういえば……雲雀先輩はリボーン君と同じ考え方だけど

私にはその考えを強要したことないよね？

どつちかというと神様と同じような考え方だもん

まあ私限定つぽいけど……

つてか、神様は？

白蘭さん達のところにいるのかな？

よく考えたらあそこには骸君達がまだいるもんねー

置いて行つちやつたけど別に問題ないか……

だつて神様だもん

あ、ツナ君達の時計が鳴つてるね

私のケイタイも震えてるし今日は終わりだねー

ツナ君はやっぱり男の子だなー

私とツナ君は似てると思うけどー

「次はオレ負けないよ」とか絶対私は言わないもん

私だつたら「次はもう結構です」つて言うね（笑）

ドガーン

ん？何の音？

……獄寺君と山本君……無茶しすぎだと思ふ

ダイナマイトの風圧で飛ばしてくるなんて……

「2人とも大丈夫……?」

「ああ」

……大丈夫なんだ……

やっぱり根本的におかしい

あ、2人ともボスウオッチが

お互いに壊されてないことに気付いたね

「すげーじゃねーか ツナ!!」

「お父上に引き分けたんスね!!」

……獄寺君って……

ツナ君のお父さんのことをお父上って呼んでるんだ……

そしてリボン君が肩の関節を外したことを教えたら

変体系って言うってリボン君に蹴られちゃったよ……

獄寺君ドンマイ(笑)

「その男は超カッコよかったよな ツナ」

「え……うーんとくどうだったけなあ?」

ツナ君って本当に鈍感……

「んー私はカッコいいと思ったよ?」

身長も高くてスーツが似合ってたしー」

「そうだな」

リボン君が肯定の返事しちゃったよ(笑)

まあいいか

「全滅だ?!」

あれ? ツナ君のお父さんが大きな声を出してるね

何かあったのかな?

ってか、全滅?

全滅って言い方は複数だよ

つまり……ヴァリアーかシモンファミリーだよ

でもヴァリアーは雲雀先輩と戦ってたような……

ヴァリアーと全員じゃない可能性もあるけど

さつきリボン君が名前じゃなくヴァリアーとって言ったし……

ということとはシモンファミリー？

いや、その前に誰がシモンファミリーを倒せるの？

『どういうことだ バジル』

スカルチームに何があった？」

やっぱりシモンファミリーなんだ……

『詳しいことは私が説明しよう』

虹の代理戦争2日目ご苦労だった』

あ、みんなの時計から声がする

先に戦績発表か……

雲雀先輩が負けてるよ！

私の予想通りだったらいけど……

ケガとかいっぱいしてたらどうしよう……

『ディーノからの連絡によると』

ヒバリは戦闘終了後にもっと戦いたくなって

自分でボスウオッチを壊したらしいぞ

優の予想通りだったな」

……予想通りで良かったのか良くなかったのか……

すごい微妙な気持ちになったよ

「なんスか それ!？」

「えー!? 優は予想してたの!？」

そりゃヒバリさんっぽいっちゃ

ヒバリさんっぽいけど……」

「だなっ ハハッ」

みんなも納得したからそれはそれでいいんだね……

ってか、誰がシモンファミリーを全滅させたの？

『彼らだよ』

「復讐者……」

うわー……透明のおしやぶり……

つまりバミューダか……

『彼の名はバミューダ・フォン・ヴェツケンシュタイン
かつて最も優秀な虹の赤ん坊だった男だ』

「あれ？リボン君が顔をわかってなかったの？

あ、記憶が届いてなかったのかな？

鍵の透明なおしやぶりだけしか見てないのか……

つてか、その前に……

最も優秀な虹の赤ん坊だった……？

なんで過去形なの？

バミューダっていう人は

私達が知らなかっただけで虹の赤ん坊の1人じゃないの？

この言い方は変な気がする……

『そしてちよっと手違いから

今も君達とアルコバレーノと同じ呪いを受けている

スカル君の時計を奪い7人の復讐者を従えて

来たということは彼の目的は1つだろう……』

元の姿に戻るってことだよ

でも手違いで同じ呪いを受けているなら

チェツカーフェイスが元に戻せばいいんじゃないの？

いや、私が考えてる最悪なパターンの場合は……

「フフ 物分りがいいね チェツカーフェイス」

『特別に君の望みを認めることにしたよ

バミューダ君 私は寛大なのだ』

「では 遠慮はしない

我々は代理戦争に参加する」

『強豪だぞ 彼らは……

明日の戦いでは台風の目になるだろう

では諸君らの健闘を祈る』

……この会話の流れでは判断できない!!

情報が少なすぎる……!

いや、でも……復讐者が参加した目的は……

多分「復讐」に関係してると思う

……そんな気がしてきた

D・スペードをツナ君に対処させろって言った理由は

今、復讐者が力を使うことを避けたかったからだよ
つまり……

「優!!」

「うわっ!? ツナ君どうしたの?」

考え事にちよつと集中しすぎてたね

「オレ達は病院に行つて来るよ!!」

「あ、うん

私は空から行くから先に行つてて」

「わかつた! また後で!!」

えーつと……どこまで考えてたつけ?

あー思い出した

今、復讐者は力を使うべきと判断した

「復讐」のために……つてことだと思ふ

問題は内容がわからないことだね

2つ考えれるけど……でも決定打が今のところがない

この2つを否定する方の情報が揃つてる

いや、でも……

「優さん」

「ん? どうしたの?」

あれ? 返事したけど

いつの間にユニちゃんが……

あ、ちよつと良かった

「ユニちゃんは予知してたんだよね?」

私に体力を残してほしいって言ったし……

「それはさつきオレが聞いたぞ」

「あ……それはごめん……」

全然聞いてなかったよ……

「バミューダというあの透明のおしやぶりの

アルコバレーノの存在は

ずつと感覚的に感じていました

バミューダの強い怒りが虹に向けられているものを……」

怒り……ね……

ということとは……やっぱり「復讐」だね

「でも その怒りが何を示しているのかは
今もわかりません」

確かに虹っていうだけじゃ詳しくわからないね

「これから先のことは予知できないのか？」「コラ」

いや、それは出来ないんじゃないの？

だって出来ていたなら

ユニちゃんはシモンファミリーを助けようとするもん

「何度も……やってみました……」

正確にはいくつかのイメージは浮かぶのですが

踏み込めないから1つに繋がらないんです……」

「踏み込めないとはどういうことだ？」

「チエツカーフェイスです……」

チエツカーフェイスのイメージが現れると……

心がえぐられるように……痛むんです……」

うわー！！大変だ！！

ユニちゃんが泣いちゃった!!!

「もうこれ以上予知はするな ユニ」

お前はなんでも1人で抱え込みすぎだ

そんな顔は見たくねえ」

「ありがとう……おじさま……」

私もリボン君の意見に賛成だね

そりゃ知りたいけど……

ユニちゃんが踏み込んだ後のことを考える方が怖いもん……

手加減？

んーまずみんなのところに行くか……

ケガの具合が気になるし……

「……優」

「どうしたの？」

「明日はオレ達と一緒にいろ」

リボン君がそういうことを言うなんて珍しいよねー

「へ？　なんで？」

「理由は優もわかってるだろ」

あらーばれてるよ

とぼけたけど意味がなかったね

「……やっぱり何かあると思う？」

「ああ」

だよねー

復讐者が私を利用しようとしてるかもしれないって

この前の時でリボン君も気付いてるよねー

あー同じ事を考えてるっぽい

電話がかかってきたよ

「もしもしっ？」

『……今、どう？』

「心配しなくても大丈夫です」

リボン君と一緒にいますよー

今、雲雀先輩はそういう気分じゃないでしょ？」

『……………』

返事がないねー

凶星だったのかな？

「大丈夫ですよ」

『……………リタイアしてこっちに来なよ』

「今、明日はリボン君達と一緒にいると約束しました

それにお師匠さんもいますので大丈夫です」

『はあ……わかったよ』

「ありがとうございます」

「また連絡します」

『待ってるよ』

「じゃあね』

ふう……何とか説得できて良かったー

本当は雲雀先輩の言う通りリタイアするべきだけど
どうしても確かめたいことがあるんだよねー

そのためには……

「ということ……リボン君、明日はよろしくね？」

「ああ」

「じゃあ、病院に行こっか？」

明日のことを考えるとあまりあげれないけど

少しはよくなると思うからね」

「はい、ありがとうございます」

「気にしないでいいよー」

ユニちゃんがお礼を言うことじゃないと思うしねー

「1番の重症はスカル君だったか……」

「運がよかったです」

アンデッドボディを持つスカルと言えど

脳ミソを吹き飛ばされていたら死んでいました」

……フォンさんって意外とはつきり言うんだね

それを聞いて嫌な想像をしてしまったよ……

「シモンファミリーにも死人が出てねえ所を見ると

バミューダって奴は時計を奪うこの段階では

手加減したのかもな」

「やっぱり復讐者はそう考えたよねー」

「やっぱり!？」

バミューダのことを何か知ってるのか!? コラ!!」

うわーみんなからの視線がきつい……

「……ごめん

バミューダっていう人のことは何も知らないよ

変ないい方してごめんね 気にしないでー」

「何か気になることがあるんだな

優が引つかかることはオレ達は聞いておいたほうがいい」

確かに気になることはあるけど……

そこまで信用されると話しにくい……

「ちよつと引つかかるだけで

リボン君の考えがあつてるところだよ」

「ムム はやく話しなよ」

「……話すけど参考程度にしてね

えつと復讐者はこの戦いに興味があるから参加したんでしょ?

だからスカル君の時計を無理矢理奪って参加資格を得た」

「ああ

バジルの話ではそうだったぞ」

「じゃあ……私の時計を……」

失格してしまったフォンさんに渡すのもOKでしょ?」

「!!?!?!」

「だって時計を奪えば参加資格を得れるんだよ

復讐者が自分でしたんだよ?

その可能性に気付かないわけがないもん

あ、時計が壊されたからって誰かから奪うって考えないでね」

「当然だ

奪ったとしてもすぐ代理人を探せるわけがない」

まあそうだよねー

代理人はみんなが知ってる人ばかりだもん

誰から奪った物で参加するって思う人はいないと思う

だから他の勢力を探さないといけないけど
未来から匣兵器が届いてるメンバーは限られてるし
持っていない人が私達と戦えるとは思えない
つまり勝ち目がないよねー

「分かってるみたいで良かったよ

で、私が言いたいの……

自分の意思で誰かに譲った場合の可能性を考えると……」

「そうですね

あの時にスカルは殺しておくべきでしょう

そして失格になった私もです」

みんなわかったよねー

わざと生かした可能性もあるってことが……

「……バジルが無事だったのも説明が出来るな」

リボン君が気付いた通り

わざと見逃して救急車を呼ばせたのかもしれない

戦闘が終わってバジル君と連絡がつかなかったらすぐ気付くと思
う

でも生存率が凄く変わるはずだもん

「そういうことだよ

まあみんな呪いを解くために必死になると思うから

この案を浮かんだとしても実行するとは考えれないからね
だからさつきみんなが言った通り

時計を奪うこの段階では手加減して運が良かったと思う

それに見逃して私達に危険度を伝えさせた可能性もあるんだ
現にこうしてアルコバレーノがみんな集まったでしょ？

ちよつと変だなんて思っただけだから気にしないでね」

まあ危険度を伝えるだけだったら

重症じゃなくていい気がするけどね

やっぱり手加減したのが正解だと思う

「いえ、とても参考になりました」

じゃあ抱きしめてもいいよね？

……はい。空気を読んで我慢します

「頭の悪い娘と思っていたが……」

我々アルコバレーノの中で君の情報が1番価値があった
後はそれぞれが対処するしかないだろう」

「そこはみんな協力のかは……」

……ないんだね

普通に私の意見は無視されて

明日は全力で行くからとか言ってるもん……

闇討ち

結局みんなで協力しない方向になったなー

はあ……しようがないか……

強制できることじゃないし……

「どうしてついてくるのさ」

「雲雀先輩と戦ったって聞いたしー

ちよつとみんなのケガの具合が気になってるだけだよ

すぐ帰るから許してよ」

そこまで体力をあげてないから眠くないけどー

今日は早く寝ようと思ってるしねー

「しようがないね」

「ありがとー」

「……そうだ 君に渡すものがあつた」

「へ？」

「マーモンちゃんが私に？」

「すっごい珍しいよねー」

「ボスの命令だから一緒に作つたんだ

「僕が今までずっと貯めていたお金なのに……」

「なんか恨まれながら渡されたんだけど……」

「ん？指輪だね

「これつてもしかしてみんなとおそろい？」

「真ん中にヴァリアーって書いてるし……」

「そうさ 君も一応ヴァリアーの一員だからね」

「わかった

「ヴァリアーの任務の時に使うよ」

「そう」

「あれ……？あそこって……」

「……マーモンちゃん」

「なんだい？」

「ゴメン！」

抱きかかえるけど許して!!

「な、何をする！ は、離せ!!」

「黙って!! 舌噛むよ!!」

スケボアの最高速度を出さない!!

マーモンちゃんが悲鳴をあげてるけど無視するよ!!

だってみんなが泊まつてるホテルから炎が見えるんだもん!!

あれ? マーモンちゃんが私に協力的になったよ

自ら意思で私に捕まつてるからね

あ……マーモンちゃんにも見えたのか……

私の方が気付くのが早かったのは

マーモンちゃんが純粋な術士だからだと思う

「このまま最上階までかけあがるよ!!」

「わかったよ!」

よし! そうと決まればこのまま壁を伝って登るぞ!!

ついた!!!

やっぱり復讐者だったか!!

「みんな!!」

マーモンちゃんには悪いけど

このままの状態で復讐者に突っ込むよ!!

刀はスケボアと一緒に出したから準備は出来てるもん!

ガツ!!

手ごたえは……ないか……

かなりのスピードで突っ込んだのに……

もうその位置に復讐者がいなかった

この音は刀が地面に突き刺さっただけだよ……

「……ごめん……逃げられた……」

「うゝおゝおい マーモン!!」

良かった……

大丈夫だったみたいだね

「ボスウオッチは守ったぜえ……」

ぐつ……だがあ……ボスさんといえど……

「休養が必要だあ……」

「うそ……スクアーロさんが倒れた……」

「それにXANXUSさんも凄いケガだ……!!」

「私はみんなの治療をする！」

「マーモンちゃんは警戒と他のチームに連絡して!!」

「ここだけとは思えない」

「他のチームも危険な目に絶対あつてるよ！」

「……君の代理はいいのかい？」

「連絡すれば俺を誰だと思ってるって言われるよ」

「……わかったよ」

「僕は他のアルコバレーノに連絡してみるよ」

「お願いね」

「まずは……XANXUSさんからだね」

「他のみんなの方が重症な気もするけど」

「優先しないといけないのはXANXUSさんだ……」

「ボスウオッチはまだ壊れていないのもあるけど」

「XANXUSさんからじゃないとみんなが許さないよ」

「やっぱり他のチームも同じ目にあつてたか……」

「ツナ君のお父さんの時計が壊されるとは思わなかった」

「多分何か理由があつたんだろうね」

「だって簡単に壊されるとは思えないもん」

「ボス……」

「……大丈夫。傷自体はそこまで深くないよ」

「ただ血を流しすぎているから」

「最低でも1日は安静にしたほうがいい」

「1日……」

「それと他のみんなが戦うのは厳しいと思う」

……マーモンちゃん」

みんなが必死に守ったのにリタイアしろとは言えないか……

「呪解できる時間は残ってる?」

「……残ってる」

時間が短ければ何とかなるかも……

マーモンちゃんは術士だから危ない時だけ

呪解すれば今日1日は生き残る可能性があるよ

「XANXUSさん、お願いがあります」

「……言ってみろ」

「明日だけでいいです」

リボン、ヴェルデチームには手を出さないと

約束していただけませんか?」

あーやっぱり睨まれたか……

「今から私はボスウオッチをつけている人に

私の体力を渡しに行きます

その時に他のチームを説得します」

「……信用出来ないね

君の体力を使って僕達のところに来た場合はどうするのさ

僕のチームは戦えるのはボスしかいないんだ」

「条件は悪くないと思います

まず私のお願いを聞いていただければ

1番初めにXANXUSさんにあげますからね

私は公平に体力を渡します

それにXANXUSさんが断れば誰にもあげませんよ」

「ムッ」

「ツナ君達は頼めば手を出すことはないの……

あるとしても骸君かな?

まあ裏切りというより条件をのまない可能性があります

その場合はXANXUSさんは私の体力があるので

少し有利になりますよね?」

「も、もし裏切った場合はどうするのさ!!」

「んーバトラーウォッチが無くてもいいなら

私の時計を渡しますよ

あ、まだ3分残ってますよ

これで条件は悪くないでしょ？」

「……君のボスウォッチは本当に壊れていないんだね」

あー言わないでおこうと思ったのになー

マーモンちゃんは本当に用心深いよねー

「……壊れてないよ

私の代理人のところには誰も来なかったからね」

「!?」

「確認をしましたがお師匠さんの力で

復讐者から隠れたり逃げたわけではありません

正直なせ手を出さなかったのか理由がわかりません

私を優勝させる気になのかもしれないと一瞬考えましたが

その場合は私と私の代理人を拉致するべきです」

私が自ら壊す可能性もあるからね……

復讐者は何を企んでるんだろう……

「お、おかしいじゃないか!!」

君のところにはだけ来ないなんて!!」

まあそうだよねー

みんなは私と復讐者が繋がってるようにしか思えないよね

「おい」

「なんですか？」

「体力を超越せ」

「ボ、ボス!?!」

「かつ消すだけだ」

これは私のことだろうねー

裏切ればかつ消せば問題ないってことだと思う（笑）

XANXUSさんはかつ消すことで何でも済ませようとするよねー

「じゃあ失礼しますね♪」

何も言ってこないし勝手に触ろうー

最悪なパターン 1

ふう……何かあるかもしれないって思ったけど
無事に山本君の家についたね

明日はツナ君達と一緒に行動するから

どこにいるか聞いて良かったよ

こんな時間にチャイム鳴らしてもいいかなー？

あーリボン君に電話しようかな？

今はヴェントの姿だしねー

あれ？ケイタイが鳴ってるなー

誰からだろう？

え……後1分で戦闘開始!?

ガラッ

あ、ツナ君達だ

危ないから外で戦うつもりなんだろうね

「優!? ゴメン!」

もうすぐ戦闘が始まるんだ!!」

「ツナ君、走りながらでいいから手を貸して!!」

「バカ! 走りにくいだろう!!」

「わかってるよ!」

でも戦闘開始前までに体力を渡せば

ルール違反じゃないでしょ!!」

「え!?! でもそれはずるいんじゃない……」

「ツナ君の条件は今回だけ

マーモン・ヴェルデチームに手を出さないこと!!

XANXUSさんは条件を呑んだから渡したんだ!」

「XANXUSが!?! わ、わかった!」

あ、手を出してくれたけど手袋してるよ

手首を触って渡そう……

これで少しは良くなればいいけど……

「優、ありがとう!」

「気にしないで」

あー骸君に渡せなかったなー

あれ？公園の方から骸君の気配がするよ

「あっ」

「おや 奇遇ですね」

「やっぱり骸君の気配だったんだ!!」

ってか、なんでバトルする気になってるの!?

「骸君、ゴメン!」

なんで骸君も手袋してるんだよ!?

今回も手首でいいや!

「!? ……なるほど」

そういうことですか

今回は手を出さないと宣言した あなたらしい」

『バトル開始 今回の制限時間は12分です』

「ま……間に合ったー……」

これでみんな一緒だよ……

あー説得できなかつたけど……

ここからXANXUSさんがいるホテルは遠いから

骸君は手を出せないと思うし大丈夫かな?

「骸さん めっけ!!」

「あんた……何……骸ちゃんと手をつないでるのよー!!」

あ、そういえば繋いだままだった

さっさと離そう

まあ繋いでるじゃなくて手首を掴んでたのが正しいけどね

「後は頼むね……」

私の予想通りだったら多分……

って、だからなんで戦おうとしてるんだよ

「やはり来たか……」

やっぱり骸君もわかってたんだね……

だから大人しく体力をもらったと思う

「復讐者が三体!!」

「うわーこれは大変だ……」

ここに三体つてことは残りの四体は……

いや、私だったらボスウオッチをつけている人を
敵に乗り込ませようとは思わない

多分残り三体はマーモンちゃんのところ……

時間は短いし幻覚で何とか誤魔化せばいいけど……

まあこれは神様のところに来なかったらの予想だけどね
つて、こんな状況なのにまだ一緒に戦う気がないの!?

……もつと凄い人がいた

この状況でフラン君が寝てるよ……

あれ?リボーン君がこっちに来たよ

「わっ!?!」

リボーン君……赤ん坊なのにすごい力だね

まあ戦いが始まつてるのに

ど真ん中ですつといた私が悪いか……

「まだ大丈夫か?」

「後1時間は大丈夫

でも引つ張つてくれて助かったよ」

流石に体力をあげすぎて少し疲れてるからね……

うわ……後ろで凄い音が……

みんながツナ君と骸君の名前を叫んでる……

ボスウオッチを壊すために攻撃したと思う

「やれやれ あの復讐者が本気で

ボスウオッチを壊しに来ている

フランも使えないとなれば一時休戦して――

共闘しかありませんね」

「ああ」

うわー本当に2人の共闘が見れるの!?!

それは凄い!!

いやーすごい……

何がすごいってみんながだよ

普通は合わせ技なんて簡単に出来ることじゃないよ!?

それなのに即席でやった……

それも威力は1+1は10って感じになったし……

そして何より……骸君の技がすごい……

何あの鴉……怖すぎる!!!

食べてるし最後に爆発したよ!?

「出来れば1番初めは

あなたにこの威力を味わってもらいたかった」

いやいやいや、こつちを見て言わないでよ

そんなにパイナツポーと何度も言ったことを恨んでたのか……

「まだ生きてるびょん!!」

え!?!あの威力をくらっても!?

あ、山本君の言う通り帽子とコートがないっぽいね

「え……」

おしやぶり……??

どういうこと……??

「まずは褒めておくぞ

我らのローブをはがしこの姿を見たのは貴様達が初めてだ

貴様達は一時的とは言え人間の力を超えたと言ってよかろう」

「それは暗に

やはりお前達は人ではないといっているんだな」

確かにそうとれる……

「そして胸に下げているのは

どこにも手に入るようなもんじゃねえな

オレ達 虹の赤ん坊と全く同じ形のおしやぶりだ

なぜ お前達がそんなもんを提げてんのか

説明してもらおうぞ」

「それはできぬ

バミューダの許可なくしては」

また……バミューダか……

「近いうちにお前には話すだろうが」

今……こつちを見て言ったよね

あ、リボン君が銃を構えて私の前にたつたよ

「……1つ質問させてください」

あなた達はチェツカーフェイスと組んでますか？」

……顔つきが変わったってことは……

「それは無い!!」

バミューダがチェツカーフェイスと組むことなど

未来永劫ありはしない!!

バミューダこそアルコバレーの中のアルコバレー!!」

「……ありがとう」

今ので復讐者の狙いが分かった気がする……

私の考えが間違つてなければ……多分……

でもこれは私が考えていた最悪なパターンだよ……

「「?」」」

あーしまったなー

さつき言った言葉で私に注目しちゃったよ

これは何とかしないとねー

「あー、さつきのは質問に答えてくれてつてことだよ？」

深い意味はないからね!!」

ふう……何とかなったかな？

みんな戦いに集中したっぽいし……

これから私はどうしよう……

今のは優が言ったとおり質問に答えたから言ったのか？
もし違つたとすれば……

復讐者とチェツカーフェイスが

組んでいないことにたいして言ったのか？

……違う

優は頭がいい

ずっと復讐者の行動を考えていた

そして今の質問で答えが解けたかもしれねえぞ……

最悪なパターン 2

みんな頑張って戦ったなー

クロームちゃんが出来てくれて頑張ってくれたし……

骸君に忠告されなかつたら絶対手を出してた気がするね
でももう自分で内臓を作ったし安心できるよねー

まあ最後はツナ君が頑張って勝ったしねー

あーダメだ

かなり思考能力が低下してる気がする

疲れてるのと投げやりな気分になってるんだろうね

……雲雀先輩に会いたいなあ……

!?この炎は……

まだ復讐者が来るの!?

「まさかジャック君を倒すとはね

あはり僕の目に狂いはなかったよ」

バミューダが自ら現れた……

このタイミングで戦うことになるの!?

いや……でもそれは無いと思う

「やあ 沢田綱吉君

ボンゴレ一世にことジェット君に君はだいぶ似てきたね

でも今回は君と戦うために来たんじゃないんだ

風早優君……それとリボン君に用があるのさ」

「優とリボンに!?!」

「オレと優に何の用だ?」

「勧誘さ 僕の仲間になれ」

「オレと優のチームで同盟を組みたいのか?」

「このままでは私とリボン君は断るに決まっています

でもあなたが知っていることを

話す気になったから来たのかな?」

お願いだから私の予想は外れてほしい……

「……君はもう気付いているのか?」

「外れてほしい内容ですけどね」

「話すまでもなくわかるとは思わなかったよ

でも彼女は僕の仲間になるのはわかっていた
当然かもしれないね」

仲間になる……?」

それはおかしいよね?」

それにわかっていたってどういうことだろ?」

「んー少し私が思っているのとずれている気がしますねー

出来れば詳しく話を聞きたいですね」

「もちろんだよ

リボン君も一緒に行こう

事実を知れば君も断れなくなる」

うわっ!?!」

急に吸い込もうとするのは勘弁してくれ……

私はこういうのに影響を受けやすいのにー

風に引っ張られるからね……

「わわわっ……ふう……」

いやー危なかったー

風の影響を受けなくなつて急に自由になるから焦ったよ

でも風が助けてくれたっばいね

地面に叩きつける前に急に失速したもん

「リボン君大丈夫?」

多分同じところに落ちたと思うんだけど……

「問題ねえぞ」

うわっ!?!まぶしい……

あ、レオンが懐中電灯になつてるんだねー

凄い便利だね

「で!!」

この声って……

んー風で場所を探るか……

あれ?すぐ近くだったよ

「いてて……どこだ……どこ?」

え? ひいい!! ガイコツ!」

「うそー!! それはムリムリムリ!!!」

「うわああああ!!!」

ガイコツが襲ってきたー!」

……ツナ君……ひどい……

そりや真っ暗で見えなかったかもしれないけど……

「なんだ ツナ お前も来たのか」

「リボーン!!」

え……優ー!」

「……ツナ君にガイコツって言われたー!!」

ちよつと怒ってるけど

怖いから抱きつくのはやめない……

「ご、ごめん……」

えつと……大丈夫だから……」

ムリムリムリー!!!

「笑えるよな

そいつらまで丁寧におしやぶり提げてやがる」

全然笑えないー!!!

私はこういうのは本当にダメなんだよ

そりや復讐者もすごい怖かったけど……

まだ意思の疎通が出来るから問題ないのにー!!

でもこのままツナ君に抱きつけばツナ君が動けないよね……

あ! そうだ!!

ガルルル!

「ミントー!!!」

うう……私のミント……

神様返してくれてありがとう……

ものすごく抱き心地がよくて安心するよ……

「優はこういうのダメだったんだ……」

「誰にだって苦手なものはあるのー！ー！！」

幽霊とかだったら風の攻撃があたらないと思うし……

ツナ君だって怖いのは苦手だったのにー！！

リボーン君の教育がいいんだろうね……

テイリリ

「わあっ」

『戦闘終了』

まじでビツクリした……

心臓に悪すぎるよ……

「リボーン……優のためにも早くどこかに……

ん？ 何見てるんだ？」

なんだろう？

おしやぶりの絵が壁に描かれてるね……

「優、一体何を気付いたんだ

バミューダは

「事実を知ったら断れなくなる」って言ってんだ

それはアルコバレーノの謎のことだろう」

まあそうだろうね

ここに絵があるしねー

「……ごめん

先に移動してほしいかも……」

「……わかったぞ

出入り口はあれしかねーみてーだな 行くぞ」

そこしかないのがまた怖い……

「ツナ君……」

「どうしたの？」

「……すそ掴んでても一緒に歩いてもいい……？」

「う、うん いいよ」

……ツナ君がすごく頼りになる!!

ふう……この道には誰もいないね

幽霊は知らないけど……

あ、キョドってる間にツナ君達が何か発見してるよ

「なんだ これ?」

カベに落書きがしてある」

「壁画みてーだな」

「……やっぱりそうなのかも……」

「優?」

「この近くに同じものとかない?」

「もう少し広範囲に照らしてくれ レオン」

あれ?今度は少し違う絵だったよ

じゃあやっぱり違う?」

「運命の日だな」

「うんめいの……ひ?」

「アルコバレーノになった日ってことだよ?」

「ああ

あの右の絵のようにオレ達は

チエツカーフェイスによって集められたんだ」

……ふむ

最初は仕事の依頼で集められたか……

確かにそれだとリボン君達が集まるのもわかるかもー

で、最後のミッションがこの山か……

謎の光を浴びて呪いを受けたねー

んー私は光を浴びたのかなー?

「死んだ時のことを覚えてないんだよねー

「優の言ったとおり

このカベにはあちこちに運命の日が描かれている

そしてそれと同じぐらい描かれてる絵は

虹の代理戦争だな」

「あつ そう言われてみれば代理戦争の絵かも!!
ちよつとずつ違う絵があちこちに!!

どういふことだ!?!」

「それは描かれた時期が違うからだと思うよ」

「え……………」

うわっ!まぶし!?

「そう これは繰り返し返されているのさ」

やっぱりね…………

最悪なパターン 3

バミューダって言う人に言われた通りに
時計を置いて行っちゃったけど大丈夫だよな？

まあ大丈夫か……

「風早優君は一体どこまでわかっているんだい？」

「……この代理戦争で誰かの呪いを解けるのがウソ」

「え!？」

リボーン君はあんまり動揺してないね

「リボーン君達を呪った人を信用することが出来なかった

だから私は様子を見るために代理戦争に参加した

もし本当に誰かが解ければその時はそれでいいしねー

解ける可能性が低いと判断したのは

バミューダ……さんが手違いで呪いを受けているって聞いた時

手違いだったらチェッカーフェイス……さんが

元に戻せばいいのにしなかったからね

つまり出来ない可能性がある

でもその場合あなた達は呪いが解けないことを知っていたことになる

あまりにも普通に話すからすぐに確信をもてなかったけどね」

「だからチェッカーフェイスと組んでるか聞いたのか？」

リボーン君はあの質問が大事なことって気付いていたんだ……

「そうだよ」

少しでも動揺すればわかりやすいと思った感じで聞いたけどね

「ちよっと待ってよ!!」

もし本当に呪いが解けないことを知っていたなら

どうして復讐者が代理戦争に参加したり闇討ちとかしたの!？」

ツナ君はかなり動揺してるねー

「復讐が目的だよ」

「復讐……」

「復讐のためにいるって言うてるんだ

だから復讐者が自ら動いたことでそれはもう証明になる
私はずっと復讐の内容を考えていた

真っ先に浮かんだのは優勝して呪いが解くこと

でもこの場合は復讐という言葉を選ばないからないと思った」

目的のために動くのかならわかるけどね

復讐という言葉は絶対あわないもん

だからこれは一瞬で候補から外したんだよねー

「次に浮かんだのは呪いを解ければ復讐が達成しやすくなる

この場合はさつきと同じ疑問が出てくるんだ

手違いならチェツカーフェイスさんに頼んで解いてもらえばいい」

「じゃ、じゃあ目的って……」

「今まで言ったことを踏まえて考えると

代理戦争に参加することが目的の可能性が出てくる

で、参加することが目的だった場合は……

2つの可能性がすぐ浮かんだ」

「ふ、ふたつ……?」

「チェツカーフェイスさんを殺すため」

……空気が少し変わった気がする

「もしくはユニちゃんがバミューダの強い怒りが

虹に向けられているって言ったから

私達アルコバレーノを殺すこと」

「ちよ……ちよつと待ってよー!」

「でもどっちも否定する情報の方が多かった

殺そうと思ってる人と普通に話せるとは思えない

ユニちゃんが虹に向けられるとは思わないと思う

アルコバレーノを殺すためだったら

未来で白蘭さんがアルコバレーノに手を出す前に

復讐者が自ら手を下そうとするはずだからね」

復讐することを目的にしているのに

誰かにとられるのは嫌だと思っしー

「まあこの代理戦争中に殺すのが条件だった場合は

スカル君をあの時に殺していると思うしね」

「よ……良かった……」

安心するのはまだだと思おうよー

「答えがわかったのは復讐者の姿だった……」

復讐者は過去のアルコバレーノの人達……

復讐は自分達を呪ったチエツカーフェイスを殺すこと

そして呪われたからこそ……

この悲劇を繰り返さないように

おしやぶりのシステムを壊すつもりなんだ

これでユニちゃんが言った意味が理解できるんだ

虹の赤ん坊じゃなくシステムに強い怒りを向けていたってね

「フハハハ 素晴らしい」

ここまで気付いているとは思わなかった」

ほめられても全く嬉しくないよ

「そう 復讐者はアルコバレーノの果ての姿」

「そんな!!」

やっぱりね……

「大昔からいつの時代にも最強の赤ん坊

アルコバレーノ7人は存在していた

でも風のアルコバレーノだけは存在しなかったよ

君は凄く特殊な人物さ」

それは私が最初って神様が言ったから知ってたけどね

まあその前に……

リボン君の頭の良さでもはつきりわからないことを

私が堂々とここまで話せたのは……ぶっちゃけ話……

最初からこの代理戦争の話が変だと思ってたんだよ

これは私が知らないだけで原作の話だと思っもん

アルコバレーノの呪いのことだしねー

じゃあ1人だけ呪いが解けるっていう時点で絶対おかしいもん

リボン君の呪いだけ解けてハッピーエンド?

これはハッピーエンドになる?

やっぱりここはみんなの呪いが解けてハッピーエンドだよ
だからこの代理戦争では何かあるっていうのはわかってたよ
まあ復讐者が何かしてくるのは予想外だったけど……

最初はチエツカーフェイスさんが何かしてくると思ったからね
復讐者が乱入してきた時点で……

このハッピーエンドが確定したと思ったよ……

それでも違う可能性にかけたかった

だからリタイアせずにツナ君達と一緒にいることを選んだ

だって主人公はツナ君とリボン君だもん

物語が動くのはこの2人という時と思うし……

でも復讐者の姿を見て確信したよ

呪いを解かなければ復讐者と同じようになる

だからどうするかは知らないけどツナ君達がみんなの呪いを解く

その時に私も呪いを解けてことだしよ

みんながおしゃぶりから離れたのに

私が離さなかつたら多分また世界のバランスが崩れる

……私がツナ君達の世界を壊せるわけじゃないじゃん……

解かなければ私は復讐者と同じようになるし……

それに異の者の私がいなくなればこの世界は全て元に戻る

まあ転生者がいるけど……もうツナ君達を守る必要がない

強くなっちゃったからね……

みんな強くなった……私の役目は終わったんだ……

あーやっぱり1度はどこかで約束を破りたかった

隣に戻ってくる約束はもう守れない

……そんなこと雲雀先輩に言えるわけないもん……

小さな犠牲

ふむ……

バミューダさんの話を聞いても少し理解できない
やっぱり私は特殊なのかな？

おしやぶりを守るための創り出した人柱は一緒だと思う
でも自分の身と共におしやぶりを守りきる強さがある

私はぶつちやけ転生前は弱かったし……

んー風を操れるから強いっていう意味？

神様に教えられるまで私は使い方なんて知らなかったのに？

世代交代が意図的に行われるのも

風のアルコバレーノの場合は関係ない気がするし……

これは別にいいや

だって私が呪いを解けば世代交代は行われなくても……

おしやぶりを外された元アルコバレーノは死んだ

っていうのはさっきのガイコツだと思う

で、運よく生き残ったのが復讐者

つまり私の前に風のアルコバレーノはいないから

原作崩壊が起きずに私がリタイアしても

ハッピーエンドに繋がると思う……多分ね……

で、そう考えると私が復讐者の仲間になることは

真実を知っても全く理解出来ないね

今、リボン君を誘った理由を言ってるけどー

これはなんとなく理解できた

アルコバレーノのシステムの破壊だった場合は

みんなに話して協力すればいいのにしなかったんだ

つまりシステムを破壊すれば死ぬってこと

自分が死ぬとわかってて協力する方がおかしいと思うもん

まあそういう意味では私は変わってるんだろうね

「じゃあオレからはこれが最後の質問だ

チエツカーフェイスを倒したら

オレ達 現アルコバレーノはどうなるんだ？」

「死ぬね」

あーもうこれで完全に私の逃げ道はなくなったね

「では、次は私からの最後の質問です

これは私一人が犠牲になれば済む問題ではありません
それなのになぜ私が仲間になると思ってるのですか？」

「あるシャーマンの予言の話をしたよね

その時に僕の望みを叶えるのは

風のアルコバレーノが必要不可欠と予言したんだ

現に風早優君が現れるまで奴を殺そうとしたが無理だった
君が現れた時は心底嬉しかったよ

ちようどその時にはチェツカーフェイスを捕らえる

唯一の瞬間を見つけていたからね

後は次の代理戦争を待ただけだった」

あーなるほど……

これで理解できたかも……

「私に鍵を届けたのは接触する機会を得たかったからです」

「声が聞こえた時

風のアルコバレーノには必要な鍵と言われたからさ

もし届けずに僕達の計画が崩れれば終わりだったからね

まさか届けた鍵によって風早優君に関わった者が

死ぬ可能性が出来るとは思わなかったよ

それに届けたのは復讐者の中でも

1番強いイエーガー君だったから風早優君を殺して

次の風のアルコバレーノを待つべきか判断に悩んだよ」

……私ってあの時に死にかけてたのか……

「でもその次に現れる風のアルコバレーノが

何年かかかるかわからなかった

しばらく様子を見ることにしたんだ」

まあその判断で正解だったと思うよ

今思うと私のかわりはいないから死ぬなっていうのは

かわりがいないから私で全て終わらせるしかないってことでしょ
あーなんですぐ気付かなかったんだろう……
今になってわかつちやったよ……

「未来の君のボンゴレ匣を見て確信したよ

君の協力がなければチエツカーフェイスを倒せない

だから僕達はあの時に君だけを守ることにしたんだ」

あーD・スピードから守った時のことか……

ガルルル！

ミントが思いつきり首を振ってるよ……

協力するのは嫌ってことだろうねー

そういえば私のボンゴレ匣があれば

数十秒の間にチエツカーフェイスを倒せる可能性が高いよね

「……小さな犠牲は必要か……」

「わかってくれたみたいだね

革命には犠牲はつきものだ

これからもこんな不幸が繰り返されるわけにはいかない」

「……でもそんなのおかしいよ!!」

リボンや優……アルコバレーノのみんなが

死ななきやいけない復讐なんて間違ってる!!

オレが許さない!!」

「……そうだよねー

みんなが死んじゃう復讐は間違ってるよねー」

犠牲は私1人で十分だよねー

それに……私は死ぬわけじゃないしね……

「そうだよ！ 優!!」

「大きく出たな ツナ」

「えっ」

凄いことを言ったのに今気付いたんだ（笑）

ツナ君も本当に強くなったなー

優の代理人 1

あ……しまった……

このタイミングで決着がつくのかも……

今の私は戦える自信がないよ

特殊能力を使って疲れて眠いんだ……

うわー本当に私って役立たず！

……人質にならないようにするだけでいいか……

でも復讐者は私を殺せないと思うしー

まあ邪魔にならないだけで良しとするか……

「代理戦争でお前達には優勝させない!!」

他の道を探すんだ!!」

おーツナ君カツコイイ!

「凶にのるな」

え……うそ……

「ぐああ!!」

全然見えなかった……

ツナ君が攻撃されてから気付いたよ……

まあすぐリボン君とミントが気付いて攻撃し返したけど……

「ミント!!」

ガルルル!!

……本当に勝てるの……?」

念のために形態変化をした小さなミントも出したけど……

「ダメじゃないか イエーガー君

すまなかつたね 綱吉君

彼は興奮しやすくてね

悪気はないんだ 許してやってくれ」

「決めたぞ オレはツナの意思に従う

交渉決裂だ」

「……私は自分が守りたいと思った人のために力を使う

ツナ君がそう決めたなら私もそれに従う

だから復讐のために力を使う気はありません」

「プハハ 2人ともめでたいなあ

そこまで沢田綱吉君に入れ込むとは

その返答でここから帰れるとでも?」

「帰れないとでも?」

さつきこの人が1番強いつて言ったよね……

これは覚悟しないとやばいかも……

あ、リボン君が私の方に来たね

私がやばい時は守ってくれるのかも……

「最初から飛ばした方がよさそうだぞ ツナ」

「わかつてる」

これは警戒しないとやばいかも……

ツナ君が突っ込んだ!!

はやっ……消え……

ガキッン!!

ありえない……

一瞬でツナ君の後ろにまわって攻撃しようとした

私の形態変化でギリギリだった……

刀を出してなかった私も悪い気がするけど

それでも選ばれし時間を発動したんだよ!?

ここままでギリギリに助けられるとは思わなかった……

ツナ君を狙ってた復讐者の手を刀でなんとか防いだけだもん!!

「邪魔だ」

まずっ……

急に力の拮抗が崩れたせいで体が前のめりになった

つまりまた復讐者が消えたんだ

「優!!」

後ろの方からツナ君の声が聞こえるなーと思ったら

私の背後に復讐者の気配がした

反応が早かったのはツナ君の超直感で気付いたのかな?

あれ? 結構私余裕があるね

間に合わないからピンチのはずなのに……

私は殺されないとわかってるから？

まあ一撃で気絶されないように急所はずらしたいよねー

だから風を使って更に前のめりにしよう

避けられなくてもこれで少しは威力も抑えられるでしょ

それに小さいミントが攻撃態勢に入ってるのが見えたしー

……あれ？痛くないよ

だって全く衝撃が来ないもん

小さいミントの威力は低いから

完全に防ぐのは無理なはずなのに……

ってか、このままだと風の勢いで前から倒れるよ

「うぷっー！」

顔からダイブしたよ……

でもこれは地面じゃないよね

抱き止めてくれたし助けに来てくれたんだ……

「いひゃい……」

だからほっぺたを掴まないでほしい

「……無茶しすぎだ」

「……ごめんなさい」

素直に謝るしかないよね……

体調が万全じゃないのに手を出したもん

「罰として寝ろ」

「え!? この状況で!？」

って……おでこに手が……もうダメだ……

こいつは優の代理人の……

それに今こいつは何をした？

優の後ろに復讐者は現れて危なかったところを

こいつが助けたのはいい

だが、今の炎は……

「……そうか

僕の目的を達成するには必要なのは

風のアルコバレーノではなく君なのか？

今のは夜の炎でイエーガー君を移動させたよね

めでたい考え方をする風早優だとおかしいと思っていたんだ」

「……俺は優を守るためにいる

優が反対していることの味方になるわけがないだろ」

「ウソをつかなくてもいい

守るために夜の炎を使えるわけがないんだ」

「俺は全ての属性を使えるんだ

夜の炎が例外なわけないだろ？

もちろん風の炎も使えるぞ」

「!？」

全属性の炎なんてありえるのか？

D・スピードでさえあれだけ時間をかけても

全ての炎を手に入れることは出来なかったんだぞ

それに風の炎を使える……

「だが夜の炎を使える君は僕達の気持ちも理解できるはずだ

現に彼女に直接手を出さなければ

僕達に手を出すつもりはないみたいだしね」

「……そうだな」

オレの考えが正しければこいつはやべえんだ

だが、今の状況ではどうすることもできねえぞ

「では今から彼らに言うことを

彼女にもこれを伝えてほしい

今回で力の差を十分に理解したはずだよ

もう綱吉君の意志に従うなんて

バカな事を言わないはずだからね

もう1度 僕の仲間になれないか検討して欲しいんだ

答えは次の代理戦争開始の時に聞くよ

その時にはお互い嫌でも顔を合わせるだろうしね

君達は頭がいいからもう分かっていると思うけど言っておくよ

もう手遅れなのさ

僕の誘いを受けようが断わろうがどちらにせよ

君達の行く末は地獄だ」

……オレはツナを死なせるわけにはいかねえんだ

これはもう無理だな

「出口は向こうだ 炎をくぐればいい

じゃあね」

行つたか……

復讐者は明日の代理戦開始まで

オレ達に手を出すことがねえだろう

ここは敵陣だがやるしかねーな

「今すぐ優から離れろ」

「え!?!」

急に銃を優の代理人に向けたからツナが驚いたみてーだな

優の代理人 2

オレが殺気を出してるのにも関わらず
顔色ひとつかえやしねえーな

「確かこの人は……優の代理人だぞ?!」

「そんなことぐらいわかってるぞ」

「じゃあ銃を向けんなよ!」

さつきだつて助けてくれたんだぞ!」

さつきは助けてくれたかもしんねーが……

「お前は優に何をした」

「な、何をつて……?」

「こいつの行動はおかしいんだ

優が話せないことがあるのは知ってるだろ?」

「う、うん……」

「こいつが本当に優のことを思っているなら

すり替えをするはずだぞ」

「あ……」

自分には使うことが出来ないと思っていたが

本当はこいつが使っていたんだ

未来の記憶を全て入れ替えるほどの力の持ち主だ

優の記憶をすり替えることぐらい簡単なはずだぞ

「優は頭もいいから警戒心が強い

自分が呪われてすぐ1番初めに会った

お前を信用して能力をすぐもらうと思うか?」

「そ、そうかもしれないけど……」

でも優だし……」

今までツナが言ったとおり

優だからと言って納得できることもある

だが呪われた時に1番初めに会ったこいつは別だぞ

こいつが呪った奴じゃねーのかまず疑うはずだ

優は慎重な性格だ

自分を呪ったかもしれねー奴から能力を貰うわけがない
「最後に1番おかしいのが

優はこいつから特集能力を貰う時に対価を払っている
……優が身体能力をあげた時には何を払ったんだ？」

「そ、そういえば……」

初めは優がオレ達に黙ってるのかと思っただが
さつき言ったことを考えると

優は払ったことをすり替えられている可能性が高い
それにここまで怪しい奴を雲雀より信頼しているんだ
こいつは優に何かした可能性が高い

「お前は優に何をした」

「……お前は頭が良すぎる

だから会いたくなかったんだ……」

オレが気付くと思っただけでオレと会うのを避けていたのか？
確かにユニ達と一緒に戦った時もこいつは離れていた
……だが、オレが気付くと思っただけなら
どうしてオレの記憶をすり替えねーんだ？

「……話す気はない

優を休ませたいから帰るぞ」

「話は終わってねーぞ

お前が代理戦争に参加したのも理由があるんだろ
今まで1度も表舞台に出てこなかったんだ
それなのに優の代理人になった

「……優はもう死なせない

約束したんだ」

……これは優と約束したのか……？

それより「もう」とはどういう意味だ？

「じゃあな」

優を連れていかれちゃった……

だが……さつきの言葉を言った時の顔……

あいつは覚悟した顔だ

「リ、リボーン……」

「……行くぞ」

「優は大丈夫だろう」

「う、うん……」

あいつはオレ達を助ける気はねーが
優だけは死なせる気はないんだろう
代理戦争に参加したのはこのためかもしれねーな……

まったく……困った奴だぜ……

復讐者が乱入したことを説明したにも関わらず
オレを咬み殺そうとするのをやめねーとは……
そこまで優の代理人を信用したのか？

「もうやめようぜ 恭弥」

「……へえ」

話す余裕があるんだ」

あつぶねえ……！

また強くなりやがった……

「優のことが心配じゃないのか？」

「……」

少し動きが鈍くなったな

やっぱり心配だったのか……

リボーンに頼めばバトラウオツチをもらえる可能性が高いのに
ほんと……素直じゃない奴……

「!？」

この炎は……復讐者の……！

「なっ!? 優!?!」

なんでこいつがこの炎を使えるんだ!?

それに優は抱えられたまま動かねえ……

一体何があったんだ!?!

「心配するな

眠ってるだけだ」

ふう……焦って損したぜ……

「ただ無理矢理眠らせたからしばらく起きないぞ」

「……どういふことだ?」

「特殊能力を使った後に無茶した罰だ」

……また無茶したのかよ……

だが、優が無茶するほど

さっきの戦闘時間はやばかったのか……

「雲雀」

「……なに」

……信用しているわけじゃねーな

こいつが優と一緒にいるのを見なくなかったのか……

優がいなかったらぜってえ咬み殺そうとしてるぜ……

「優をここで休ませるぞ」

優を木の下におろして寝かせようとしてるが……

「ちよつと待て!!」

流石にそれはまずいだろ!?!」

前は優が泊まると知っていたから用意していたが……

今はテントとか何も用意していないんだぜ!?!

「……わかった」

「恭弥!?!」

「……今度は失敗するなよ

じゃあな」

……消えやがった……あいつはいったい……

それに今のは恭弥に言った言葉だ……

確かこいつのおかげで恭弥と優は仲直りした

また何かあるのか……？

いや、それより先に優をなんとかしねーとな

このままだと風邪をひくぜ……

「手配したぜー・ボスー」

ロマーリオもオレと同じ事を思ってたみたいだな

これで外で寝ても少しはましになるぜ

……ちよつと待て

「……もうやめればいいじゃねーか？」

「いやだ」

やっぱそうくるのかよ!?

オレはいつまで恭弥の相手をするんだ？

優が起きたら説得するように頼んでみるか……

「……逃げないでよ」

「はっ」

恭弥から中断しようとするのは珍しいな……

テントで寝ている優が気になったのか？

「……う……」

今のは優の声だな

しばらく起きねえって言っていたが……

「もう起きたのか？」

「……起きてはいない……けど……」

恭弥がはつきり言わないのは珍しい

優に何かあったのか？

寝顔を見るのは悪いと思うがさつきまで外で寝ていたんだ
体調を崩しているのかもしれない

オレも恭弥の横から覗いて様子を見るか……

「……優ー」

オレが叫んでも起きる気配がない……

あいつが言ったとおりに何をしてもしばらく起きないのか……

「……ロール そばについててあげて」

クピッ

「……それでいいのか？」

優が泣きながら寝ているんだ

恭弥がそばにいるべきじゃないのか？

「……はじめるよ」

恭弥の楽しみを奪ったことを

後で優が知れば必ず気にするからって

戦うことをやめないのかよ……

「つたく……わーったよ」

これはもう優が起きるまで付きあうしかねーな……

目覚め

……ワオ……

目を開けたらロールが目の前にいたよ……

クピイーーー!!!

あれ？何で叫んでるんだろう？

ってか、その前になんでロールがいるの？

……ちよつと待って……ここどこ？

テントっばいけど……

あ、外に出ようとする前にファスナーが下がったよ

「……おはよう」

「えつと、おはようございませす」

やっぱり雲雀先輩だったね

「……外に水があるから顔を洗えるよ」

「本当ですか!？」

それは助かります!」

やっぱり寝起きの顔のままいるのは嫌だしね

お言葉に甘えて顔を洗いに行こう

ん？テントから出たらディーノさんもいた

「……大丈夫か？」

「へ?」

何が大丈夫なの？

「……寝心地悪くなかったか?」

「はい

熟睡したみたいです」

もう体調は大丈夫だね

さつさと顔を洗ってどうしてここにいるのか聞こう

神様がここまで運んでくれたのか……

私があいたいと思っていたからかな？

でもこうして会うと……決心が揺らぎそうだよ……

「……雲雀先輩

あ、そのままでもいいですよ？」

「そう なに？」

「よくねえだろ!？」

だって雲雀先輩は戦いたいと思うしー

私は雲雀先輩の行動を止めるつもりはないから

デイーノさんは自力で頑張ってください(笑)

「私のこと……好きですか？」

うわー2人とも動きが止まったよ(笑)

でもどうしても聞きたかったんだよねー

「……オレ達がいなくてここで聞けよ……」

「1人の人間としてってどういう意味ですよ？」

デイーノさんはどうです？

正直に言ってくれていいですよー？」

そういう意味で聞いてないことがわかったら

2人で安心したような顔をしたよ(笑)

まあ雲雀先輩はわかりにくかったけどね

意外とこの2人って似てるのかな？

バトル好きだしー

「もちろん好きだぜ

まっ もう少し自分を大事にしてほしいけどな

オレ達のためにすぐ1人で無茶するだろ？

昨日は優がぐったりした姿を見て焦ったぜ……」

「……少しは役に立ちたいですからねー

私が出来るとは限られていますししようがないですよ」

私を好きになってくれた人達のために覚悟しないと……

「……それは間違ってる」

「へ？」

デイーノさんどうしたんだろ？

少し怒ってそんな気がする……

「オレ達は優が役に立つから好きじゃないんだ

もし優が特殊能力を使えなかったり

風を操れなくて弱くてもオレ達は優が好きだ

それは断言できるぜ」

あー……もうダメだ……

「お……おい……」

どうしよう……

私が泣いたからみんな困ってる……

それに雲雀先輩が怒っちゃうかもしれない……

でも涙を止めることが出来ない……

「!? ツナか！」

あ……どうしよう……

ツナ君まで来ちゃった……

「優、良かった……ここにいたんだ!!」

「……ツナ君……」

あ……私が泣いてるからツナ君も動揺しちゃった……

そういえば雲雀先輩の前でしか泣いたことないんだ……

「ぐ……ぐめん!!」

オレ……先にここに来ればよかった……

ディーノさんとヒバリさんは協力してくれると思って……

本当にゴメン!! 優が辛いつてわかってたのに……」

違う……ツナ君が悪いんじゃない……

それにツナ君はここに私がいるって知らなかったし……

言いたいけど言葉に出来ない……

首を横に振るしかない……

「……何があつたんだ」

「……昨日何があつたのか話します

その前に時計をはずしてくれませんか？」

「……わかった」

正しい炎を注入するか……

「……その方法だと優は無理だろ」

「優の代理人が風の波動を使えるみたいで……」

だから……可能性はあると……」

あー神様だったら使えるだろうね

でも……

「……君、それをすればおしゃぶりは外れるの？」

「え？ おしゃぶりですか？」

今は無理かもしれないけど……そのつもりです

おしゃぶりが外れないとまた同じことが起きてしまいます

だからそのこともタルボじいさんに

相談して考えてもらっている所です」

「そうだよねー」

正しい炎を注入しても応急処置みたいなものだもんね

いい案が浮かんで今回のタイミングで

外せるようになるのが1番いいよねー」

「そうなんだ」

つまり……外れないとハッピーエンドにならないか……

原作ではこの戦いで勝って外れたんだろうね

タルボじいさんが頑張って考えてくれたんだ

「あ……あのさ……優……」

「どうしたの？」

急に不安な声だして……

さつきまで自信满满みたいに話してたのにねー

「リボーンはオレが戦う事に反対なんだ……」

「……ツナ君がみんなのためにいっぱい考えてくれたんだよ？」

私がおの手助けをしないわけないじゃん♪」

「優!! ありがとう!!」

……ツナ君ごめんね
今までありがとう……

「……代理戦争では役に立たないかもしれないけど
私もイエーガーっていう人と少し手を合わせたし
ツナ君との意見をあわせたら
少しは参考になるかもしれないよね？」

「そうだよ!!」

あ……！ デイノさん、ヒバリさん！

リボンと優……アルコバレーノのみんなのために
一緒に戦ってくれませんか？」

「ああ もちろんだぜ」

「いやだ」

……ん？ 雲雀先輩がいやだって言わなかった？

みんなビックリしてるし私の聞き間違いじゃないっぽい……

えー！?なんで!?

いやだ

なんで嫌って言ったんだろ……

強い人と戦えるんだよ!?

「ヒ、ヒバリさん……どうしてですか!？」

「恭弥からすれば群れるのは嫌かもしれないねーが

作戦の内容によっては群れない方法もあるだろ?」

「そうですよー

私も雲雀先輩が戦いやすいように考えますし……」

嫌じゃすまないんだよ

雲雀先輩の協力はいると思う……

誰が腕時計をつけるかはわからないけど

雲雀先輩は元気で強いし絶対時計をつける方だと思う

「いやだ」

「えーつと……みんながやられたら戦い放題ですよ?」

「ゆ、優……」

……ツナ君ゴメン……

今のは自分でも不吉なことを言ったと思ったよ

でも雲雀先輩を説得させるにはいいと思ったんだ……

「優の言うとおりで

それに今回のことは優のことも関係あるんだぜ?」

私が言った内容は説得させるのにいいと思ったんだね

流石……デイーノさん……雲雀先輩のことをわかってるよ

「優は今すぐ外す必要がない

呪った人が違うからね

今すぐ無茶する必要はないよね?」

もしかして失敗するかもしれないから嫌なの?

「……話を聞いていたのか? 恭弥

いつおしやぶりの寿命が来るのかわからないんだ

外せるなら今すぐ外すべきだ

それにバミューダが代理戦争に勝って復讐を達成すれば

優だってどうなるかわからない……」

まあそうだろうねー

特殊だけど私もアルコバレーノだしねー

「ディーノさんの言う通りですよー

それにみんなが外した時に私も外さないと

バランスが崩れるような気がします」

これは言葉では説明できないんだよねー

でも多分これは風のアルコバレーノの使命が

身体で感じてるんだと思う

そうじゃないと外さないといけないって思わないもん

本当は外したくないのに……

「……それでもいやだ」

「ど、どうしてですか!？」

ヒバリさんは……優のことを大切にしてたんじゃ……」

うーん……これは困った……

普段の雲雀先輩だったら絶対いいつて言うよね

何かが気に食わないのかな？

ディーノさんも同じことを思ってるっぽいね

私の方を見たけど首を横に振るしかない……

だって私にもわかんないんだもん

「……何が嫌なんだ？」

恭弥がそこまで言うんだ

何かあるんだろ？」

あ、先にディーノさんが聞いてくれたよ

「……優」

「はい？」

「優から僕に頼めば考えてあげてもいいよ」

「んなー!!? なにそれー!!?」

私もツナ君と一緒に叫びたくなつたよ……

……本当にそれにそれ

ツナ君が言ったからダメだったんだ……

「……優が恭弥に代理人を頼まなかったことを
まだ根にもつてたのか……?」

あ……そうかも……

まあ私から頼めば聞いてもらえるみたいだし……

さつさと言おう……

「みんなのおしやぶりを外すために

雲雀先輩も手伝ってくれませんか？」

「いやだ」

「なっ!?!」

……これは私の頼み方が悪かったの……?

助けを求めるために2人を見たけど

問題なかったって顔されたよ……

えーどうすればいいのー!?!

「……そうかー!」

おお!流石ディーノさん!

何か閃いたっぽいよ!!

「リボン達のためじゃなく優のためにとってことだ!」

あーなるほど……

私のためにとって言わないとダメだったのか……

そこまで代理を頼まなかったことにムカついてたんだね

「私のおしやぶりを外すために雲雀先輩も……」

……どうしよう……言えない……

それだけは言いたくない……

雲雀先輩にそれだけは頼みたくない……

「僕にどうしてほしいの?」

「……優?」

早く言わないと……みんなに気付かれちゃう……

私のおしやぶりが外れればみんなともう会えないって……

「み、みんなのために手伝ってくれませんか……?」

「いやだ」

……どうしよう……

雲雀先輩は私が隠していることに気付いてるのかも……
どうして気付かれたの……？

さつき泣いてたのは勘違いしてくれたと思ったのに……

「わ……私のおしゃぶりを外すために……」

ここまでは言えるんだ

後はお願いすればいいんだ

いつもの調子で笑って言えばいいのに……！

「……ごめ……ごめんなさい……」

言えなくて謝るしか出来なかった……

わからない

もうどうすることも出来ないのに……

なんで謝っちゃったんだろう……

「はあ……もし僕に頼めば怒るところだったよ……」

「ごめんなさい……へ？」

つい謝っちゃったけど

なんで頼めば怒ることになったの……？

「あ、あの……ヒバリさん……？」

「君の案は赤ん坊達にはいいかもしれない

でもそれでは優がダメなんだ」

「……どういうことだ」

ちよっと待って……

雲雀先輩は私の呪いが解けたら

元の世界にかえるって知らないよね？

でも知ってる感じで話してない？

「もう正直に話しなよ

優はおしゃぶりが離れば死ぬよね？」

「なっ!？」

いや、死にはしないよ

元の世界に戻ることになるだけだと思っしね

あーでもツナ君達とは会えなくなるから

みんなからすれば死ぬのと一緒にかも……

「……知ってたんですね」

「昔、優が言ったことを思い出した」

全然覚えてない……

いつ言っただろう……

だから私の代理じゃなくて

フォンさんの代理になるって決めたのか……

「ど……どうしてそんな大事なことを黙ってたんだ!!」

ツナ君に怒られちゃった……

「……黙ってたつもりはないもん

みんなのおしやぶりを外さない死んじやうし……
なんとか方法を見つけたとしても
結局私はいなくなっちゃうし……

だから小さな犠牲は必要で……

みんなが死んじやう復讐は間違ってるって言ったもん……」
みんなの中に私が入ってなかっただけだし……

「も、もしそのことをヒバリさんが知らなかったら……

取り返しのつかないことになってたんだよ!？」

だって……それはしようがないんだもん……

「……おい……まさか……」

あれをするつもりだったのか……?？」

「デイーノさん何か知ってるんですか!？」

「……オレの前で1度言ったよな？」

全て忘れれば問題ねーって……

オレ達の記憶から優を消すつもりだったんだろ？

そうすれば優が死んでも誰も傷つかないからな」

あらーそれもばれちゃったよ

デイーノさんも怒ってるっぽいなー

「……そうすれば全て丸くおさまるでしょ?？」

「そんなの間違ってる!!」

絶対間違ってるよ!!」

「んーでもそれが風のアルコバレーノの運命なんだ」

みんなが私のことを全部忘れれば……

原作の世界が元通りになると思うしねー

これは私のさだめって思うことがあるんだよねー

「……ふざけるな!!」

そんなのが運命!? オレは認めない!!

オレは絶対認めない!!」

さらに怒られちゃったなー

「うんやん」

「ヒバリさん!? だつて優が……」

「少し黙って」

「……はい」

……さつきから何も言わなかったんだよねー
それがずつと怖かったんだよね……

「僕は風のアルコバレーノの運命はわからない

興味が無いからね 知ろうとも思わないよ

だけど……優の気持ちは知りたい

優はどうしたいの？」

「それは……」

……みんなと一緒にいたい

風のアルコバレーノだからつて納得できる自分もいる

じゃあ……風のアルコバレーノじゃなかったら？

それだとみんなに会うことはなかったし……

でも一緒にいたい……

「……わかりません

自分でもよくわからないんです……

どうすればいいか……

どれが正しくて間違ってるのかよくわからない……

……ごめんなさい……答えになつてませんね……」

頭の中がもう整理できない……

「問題ないよ」

「え……？」

わかつてないのに……？

「わからない……」

見失った時はどうすればいいか言つたよね？」

えつと……見失つたら……

「……雲雀先輩の隣に戻ってくる……」

あ……優しい顔をした……

みんながいるのに……

「それでいい

「優は難しく考え過ぎだよ

後のことは任せればいい……その彼が考えるよ」

「ええ!? オレですか!？」

「何か問題でもある?」

「あ、ありません!!」

「ぷっ……あはは!」

ツナ君が必死に首を振ってるよ!

ってか、雲雀先輩は考えないんだね（笑）

「うわっ!」

な、なんだなんだ!?

デイナーさんにいっぱい頭を撫でられてるよーー!?

作戦会議 1

髪の毛がボサボサになった気がするけど……
ディーノさんに撫でられるのは好きだからいいか……

「あー！」

急にツナ君が叫んだけどどうしたのかな？

「もしかして優の代理の人は

おしやぶりが離れると優が死ぬって知ってたの？」

「あ、うん

知ってるよ」

まあ元の世界に戻るのが正しいけどね

「じゃあ……もしかして……」

「どうかしたのか？」

「実は優は死なせないって言ってたんです

オレ……その時は違う意味と思って……」

その時はなんとか外す方法があると思っただろうね
外さないといつか死ぬけど外せば死ぬからねー

「……なるほど」

知っていたなら可能性あるかもしれないな」

うーん……どうなんだろう？

私があのお話を聞けば元の世界に戻ると思うよね？

でも死なせないか……何かあるのかな？

「ちよつと待ってね 聞いてみるよ」

神様ー？

「……………あれ？」

「どうした？ ケイタイがないのか？」

「えつと……心の中で呼びかけるだけで話せるんです

でも話しかけても返事がなくて……」

初めてだ……私が話しかけて反応ないなんて……

今まで1度もなかったのに……

どうしよう……凄く落ち着かない……

無駄にキョロキョロしてしまう……

「……大丈夫だよ」

あ、雲雀先輩が私の前まで来てくれて言ってくれた
……そうだよね

雲雀先輩の言うとおり大丈夫だよね……？

ってか、余程私が落ち着いてなかったんだね

普段はみんなの前ではそういうことしないもんね

「……話すか悩んだけど……やっぱり話すよ」

「え……？」

うーん……身体能力をあげる方は……

常に発動してる方になるって考えれるか……

でも特殊能力とは違うんじゃないの？

あーどういふことか全くわからない

でも話しかけても反応ないのはこれをツナ君達が知ったから？

「……本当に心当たりはないのか？」

「……何か払った記憶はないです」

それに気になることが……

もし神様が呪ったとすれば

神様が言った私を死なせないは……

安全に元の世界に返すってことなの？

その場合ツナ君の前で死なせないって言うのは少し変な気がする
でも方法があるなら私に教えてくれるよね……？

「問題ないよ」

それより君はこれからどうするつもりなの？」

「え！？で、でも……」

ツナ君が戸惑うのはわかるよ……

問題あると思うんだけどないと言い切っちゃったよ

「……彼は優を大事にしている」

うわーすごく嫌そうに言ったよ

「……恭弥がそこまで言うんだ」

ツナ、この話は後で本人に直接聞こう」

んーそれもそうだね

優先するのは復讐者との戦いだと思うしね

おしゃぶりをどうするかはその後の方がいいと思う

「また後で連絡してみるよ」

凄く忙しいだけかもしれないし……

「わ、わかった

今からオレン家にみんなが集まるんだ」

……みんなってみんなだよね？

雲雀先輩はどうするんだろう……群れちやうよね？

いや、その前にみんな来るのー!?

ツナ君が本当にボスって感じだよ

あの濃いメンバーを集めれるのはすごい

まあすごいことに自覚がないと思うけどね（笑）

……どこからツツコミすればいいかわからない

雲雀先輩が隣の屋根からこっちに来る気はないみたいだし

白蘭さんは堂々と空を飛んでるし……

何より1番凄いのは……

XANXUSさんがツナ君の家にいる!!（笑）

なんて貴重なシーンだ!!!

……写真とつてもいい？

え？いいよね？

よし、私が許可する（笑）

ギロツ

……なんでばれた!?

まだカメラも出していないのに睨まれた!!

ダメだ……かつ消されるしか想像出来ない（笑）

「なにへらへら笑ってやがる

もうすぐ10代目から大事な話があるんだぞ!!

それにテメーも関係あるだろうが!!」

あ、獄寺君に怒られちゃった

「凄く嬉しいんだ」

「どういうことだよ」

「この集まった中に私もいることが嬉しいんだ」

「当たり前だろうが

寝ぼけたこと言ってるんじゃないやねえ」

説明したのにまた怒られちゃったよ

……当たり前か……嬉しいな……

「……締りのねえ顔しやがって……」

まだブツブツ怒ってるよ（笑）

あ、ツナ君の話が始まったよ

白蘭さんがちゃんと部屋に入ってきた（笑）

いやー本当にツナ君は凄い

このメンバー全員にお願いを頼めるんだもん

「ここに集まってもらったのは

拳をぶつけ合って戦ったことがあるから

身をもって知っている……信頼できるメンバーです」

堂々と言ったなー

最初は敵同士の人もいたのにね

こういうところが大空なんだと思う

「でもちよっと大げさなんじゃない?」

どんな相手だろうと僕と綱吉くんが

本気を出せば2人で勝てるよ♪」

「いいや……それじゃダメなんだ 白蘭

復讐者はメチャクチャ強い上に後4人もいる

しかもその中で1番強いつて言われる

イエーガーって奴と少し戦ったんだけど

戦闘力の上限が見えない!!」

おーみんなの顔つきがかわったね

「あ、私もツナ君と一緒に意見だよー

向こうが私を殺す気だったら危なかったよ」

「2人がそこまで言うなんて……」

「でも何か勝算はあるんでしょ?」

炎真君が驚いてつい言っちゃったけど

冷静に話を戻そうとするのは鈴木さんなんだね

やっぱり鈴木さんと私は似てるかもー

「1つあるけど却下されたんだよねー」

「んー? それは綱吉クンにかい?」

僕達を集めてそんなこと言うのはどうかと思うなく

まあそうだろうねー

みんなを集めてるぐらいやばいのに

いい案があるならそっちにするべきと思うもんねー

「その作戦はオレと恭弥も反対した

理由は優が死ぬからだ」

いや、まだ死ぬと決まったわけじゃ……

元の世界に戻る確率が

ものすごく高くなるだけだし……

それにしてもみんなからの視線がきつい(笑)

「あははは」

とりあえず笑って誤魔化したけどダメだったかも……

「……死ぬと決まったわけじゃないのに……」

ブツブツ文句を言ってみただけ

私を無視して話を進めてるよ……

どうせ優勝しても呪いが解けないなら

失格になるけど私がミントの形態変化で
イエーガを不意打ちで倒せばいいっていう案だったのに……
誰かのボスウオッチが無事だったらいいしね
正直この案が1番安全だと思う
まあ私を死なせないようにするために
神様と話をすべきって判断したんだよねー
今のところいい案が浮かんでないし
私が失格になるのはまずいってことになったんだよね
未来で私以外手助け禁止の話をしたから
私が失格になったら表舞台に出れない可能性に気付かれた
そして気付かれた瞬間……みんなが怖かったよ……
また死ぬつもりだったのかってね……
あれはちよつとトラウマになった気がする……

作戦会議 2

誰がイエーガーと戦うかでここまでもめるなんて……

やっぱり濃いメンバーだね

つてか、なんでそんなにバトル好きなんだ？

私には理解できない……

「こんなんじや作戦なんてたてられないんじや!!」

ツナ君がすがるような目で見てる（笑）

んー私が作戦を立てていいの？

「やっぱり私が……」

「優 まだ言うのか？」

……ディーノさんに怒られた

滅多に怒らない人が怒るって本当に怖いよね

あ、私の代わりにディーノさんが作戦をたててくれてるよ

私がいい案を出さないと思ったんだらうね

遊撃隊ねー

確かにこの3人だと息が合うと思う

「なるほど」

彼らが飛び回って他の復讐者を倒している間に

僕はイエーガーと戦える」

「ナイスだよ それ

悪いね 綱吉くん♪」

「ドカスは復讐者掃除でもしてろ」

……本当にキャラが濃すぎる

ツナ君が可愛そうになってきた……

でもこれは……

「……コンビネーションが心配です」

……ほら

一緒に戦うはずがないだろって感じで見られたよ

これは私が悪いのか……？

「優ちゃんの言うとおり問題があるね

誰からやるかジャンケンをしよう♪」

なんでジャンケン!?

この戦い……なめすぎでしょ……

頭が痛くなってきた……

突っ込みをする間もなくしようとしてるし……

ってか、XANXUSさんがジャンケンするの!?(笑)

写真を……なんだスクアールさんか……

ドカツ

「ぐっ」

……ひどい

負けたからってスクアールさんに物を投げなくても……

まだちゃんと怪我が治ってないのに……

悪化してないか後で診よう

ってか、今投げたのはツナ君の物じゃ……

もうツツコミが追いつかないね

「僕の勝ちだね♪」

はあ……しようがないか……

もう少し真面目に考えてもらおう

「白蘭さん、少し外に出てもらってもいいですか?」

「いいよ♪」

白蘭さんも空が飛べるからいいよねー

「優? どうしたの?」

「ちよつと実験だよ

あ、骸君悪いけどー

ツナ君の家の周りに幻覚をかけてほしい」

「……わかりました」

「助かるよ」

幻覚をかけてくれたみたいだし私も外に出よう

白蘭さんの羽はどういうイメージで動かしてるのかな?

よくわからないね

「白蘭さん、少し私と戦いましょう」

「ん〜？ いいのかい？」

ツナ君が危ないって叫んでるのは悪いけど無視だね

「お願いします」

「じゃ遠慮なく♪」

本当に遠慮しないねー

いきなり白龍を出して攻撃してくるなんて……

まあでも……

「……これでおしまいですよ？」

後ろから白蘭さんの首元に刀を突きつけちゃったよ

「……それはないよ〜 優ちゃん♪」

流石白蘭さん……私が何をしたか気付いてるよ

まあ刀を突きつける前に少し反応してたしね

見えてても身体は動かなかったのかもねー

「協力ありがとうございました

部屋に戻りましょう」

今のは……形態変化を使つたな

優の形態変化はここまで凄いのか……

恐らく今の一瞬で白蘭の攻撃を避けて

すぐに白蘭の後ろに回り刀を突きつけた

ギリギリ目で追えたがあれは防げないぜ……

「いつからミントを形態変化してたんだ？」

ずっとオレと一緒にいたと思つたが……

「えっと、顔を洗つた時からですね

あの時は1人でしたから」

……もしもの時に逃げるために用意してたのかよ

恭弥がうまく説得できなかつたら危なかつたぜ……

「……さっきのは一体どういう意味があるんだ？」

「もしかして……」

ツナは何か知ってるのか？

「ツナ君は手を合わせたからわかったよね？」

あれがイエーガーっていう人のスピードですよー」

そこまで速いのか!？」

「『選ばれし時間』を発動してなんとか攻撃を防ぎました

まあ刀を出していなかった私も悪かったですけどね

あ、安心してください

スケボーは出す時間がなかったので使ってません」

……安心出来るわけないだろ

さつき優が白蘭と手を合わせた時は

スケボーを使ってたんだ……

「……イエーガーはショートワープみたいな技を使うんだ

急に目の前で消えたと思ったらすぐオレの後ろにいて

優が助けてくれなかったら危なかったんだ……」

「あー、ショートワープの範囲がわからなかったの

もしかするとさつきより速いと感じるかもしれない」

優は走って移動していただけだからな

距離が離れればその分時間がかかって反応できる可能性も高くなる

イエーガーはショートワープを使って急に現れる

さつきの優より速いと考えるべきだ……

「後は……移動する場所に炎の気配がしましたね

その時は『選ばれし時間』の効果が切れていたの

避けるのは無理と判断して威力を弱めようと思いました」

炎の気配はしたが優が避けるのは無理と判断したのか……

「その割にはあなたは元気ですね」

「お師匠さんが助けてくれたので無傷でしたよ

強いですけど私以外を助ける気はないと思います」

オレもその可能性が高いと思う

未来の記憶では優だけが白蘭から助かったが無傷じゃなかった

恐らく条件が整わなければ手を出せないんだろう……

だが、リボーンが気付いたことも気になる

あいつは本当に手が出せないのか？

……優さえ無事ならいいとも考えれる……

恭弥はそう思ったのか？

だから大事にしてるって言ったのか……？

あの時にもう少し優の代理人と話せばよかったぜ……

笑いあい

みんな帰っちゃったけどこの作戦で大丈夫かなあ……

「優」

「どうしたの？ ツナ君」

凄く真剣な顔をしてるけど……

「少しいい？」

優と一緒にいきたいところがあるんだ」

「うん わかった」

ツナ君が私と一緒にねー

うーん……どこだろ？

まさかこことは……

「覚えてる？」

「覚えてるよー」

私とツナ君が初めて話した場所だもん」

ここでツナ君がいじめられたんだよね

うわー懐かしすぎる……

つてか、私が覚えてるのはわかるけど

ツナ君が覚えてたのはビックリだ

「……初めてだったんだ」

「へ？」

「オレはダメダメだから失敗したり何かしたりすると

みんなに絶対笑われるんだ

そんなオレに優は話しかけて助けてくれた……

嬉しかった……ありがとう」

「……私はツナ君が思ってるほどいい人じゃないよ

何か目的があつてツナ君に近づいたかもしれないよ？」

私はツナ君が主人公つて知つてたしー

「優はそんなこと思わないよ」

「ここまで信用されると罪悪感が……」

「オレは優が無頓着なところがあるつて知つてるよ

でも優は誰かが困つていれば必ず助けるんだ

……いつも思うんだ

オレがダメダメじゃなかったら優と友達になれなかったつて

だから……もしオレがダメダメじゃなくなつたら……

友達じゃなくなるかもしれない……

もちろんオレは優とずっと友達と思つてるよ

でも優はそう思つてない気がするんだ……」

違つて言おうとしたけど声が出ない……

「……オレは優と出会つてから少しは強くなつたと思う

でもオレはまだまだダメツナだよ

優もテストの点数見ただろ？」

今回だつてオレ1人じゃダメでみんなの力が必要だし……

えーつと……つまりオレはダメツナなんだ」

「……自分でダメツナつていうのは止めようよ」

「本当のことだからいいんだ

オレはダメツナだから……これからも助けてほしい」

……やっぱりツナ君には一生勝てない気がする

「あれ……？」

オレ……すごく情けないこと言つてる……？」

「そうだねー」

あ、凄くガーンつて顔になつた

「ち、違うんだ……！」

えつと……オ、オレは優に……」

「大丈夫だよ

ツナ君が言いたいことはわかつたから」

「そ、そう……？」

「うん♪」

あ、良かったーって感じでへ口へ口になった（笑）

「ツナ君、教えてほしい？」

「ん？ なにを？」

「まだツナ君が私の正体を知らなかった時に

ツナ君に一生かけても返せない恩があるって言った理由だよ」

「そ、そうだ!!」

ずっと疑問に思ってたんだ

オレ……ずっと優に助けてもらってると思うんだけど……」

「……初めて会った日に笑ったほうがいいって言ったんだ」

「オ、オレが!？」

凄くびっくりしてるなー

「本当に覚えてないんだね

私は凄く嬉しかったのにー」

前にフウ太君に聞かれた時も覚えてなさそうだったしねー

「ご、ごめん……」

オレ全然覚えてなくて……」

「それは許してあげる

でも私が今から言うことは知ってほしい」

「う、うん？」

「ツナ君の優しさはいつも誰かの助けになる

そんなことないって思うかもしれないけど……」

私はツナ君がこれからも必ず誰かを救うって思うんだ」

ほらね？

ツナ君は無意識にしてるけど

私がおか伝えようとしてるのに気付いて

まっすぐな目で私を見るんだもん

普段だったら必死に否定するのにねー

本当に敵わない……」

「まあさっきツナ君が言った通り

ほとんどはダメダメだけどねー」

あ、またガーンって顔になった（笑）

「そういうところを全部含めて

私はツナ君と友達になれて良かったと思ってる
出来れば……これからも思いたいな……」

「……………だ」

ん？なんていった？

小さすぎて聞こえなかったんだけど……

「……………思っ^ていいんだ!!」

勝つて……みんなが助かる道を探すんだ!!」

うわあ……ツナ君が急に死ぬ気になった……

「絶対死なせない」

「……………ありがと」

ダメだ……涙が……

「うわあああ! ……ど、どうしよう……」

「……………あはは」

私が泣いた瞬間に死ぬ気じゃなくなった（笑）

「……………ツナ君のバカ……」

泣いたらいいのか笑えばいいのかわかんないよ……」

「ぐ、ごめん……」

あ、ツナ君と目が合った

「ぷっ……あははは!」

……………ツナ君と笑いあっちゃった!

なんで笑いあったのかよくわかんないけどね（笑）

でも楽しいからいいやって思っちゃった

ツナ君もそう思ってる嬉しいかも……

伝えたいこと

……明日の戦いで決まるよね……？

結局、神様と連絡がつかなかったな……

お願いしたいことがあったのに……

「……早く横になりなよ」

……私のベッドなんだけどなー

当たり前のように雲雀先輩が寝転んでて

そこに私も来るように言うのはおかしいと思う

今更か……

「私はすることがあるので先に寝てください」

「横になるだけでいい」

だからこつちに来なよ」

……明日が怖くて寝たくないのがばれてるよ

雲雀先輩にも敵わないような気がしてきた

まあツナ君と話して泣いたのがばれちゃったしね

うれし涙だからって説明したけど機嫌悪くなったし……

もう雲雀先輩には隠し事が出来ない気がする

あ、早く行かないと怒っちゃうよ

「……近くないですか？」

「気のせいだよ」

絶対気のせいじゃないと思う

まあいいか……

「……………」

暗闇だけど雲雀先輩と目が合ってるのがわかる

……雲雀先輩はどうして黙ってるんだろう？

「……優」

はいと返事をしたけど声がかすれてしまった

雲雀先輩が真剣な気がしたから……

「僕は優に何かいうつもりはない」

雲雀先輩もツナ君と一緒に

何かあるかなって思ってたけど違うみたいだから黙ってたのかな？

……雲雀先輩は本当に強いな……

んー私はそこまで強くないし何か言おう

ケガをしないで。無茶をしないで。……何か違う気がする今までありがとう。楽しかった。これは違う……

大好きです。私を好きになってくれてありがとう。

……絶対違う気がする

明日のために寝た方がいいですよ？……これも違うね

……困った

雲雀先輩が待ってくれてるよ

何を言えいいのかわからない

何かを伝えたい気持ちはいっぱいあるのに……

あれ？もしかしてまた考えすぎ？

素直に明日が怖いって言えばいいんじゃないの？

……でもこれも違う気がする

言わなくても雲雀先輩に気付かれてるしね

私はどうしても伝えたいことじゃない

ツナ君には希望を持っていいかを伝えたいよね

これからも一緒にいたいってね

雲雀先輩にもそれを伝えればいいんじゃないの？

また一緒に海を見に行きたい

夏祭りに行きたい

雲雀先輩は嫌かも知れないけど花見に行きたい

泣いちゃったからもう1度やり直したいんだよねー

……これは考えれば考えるほど伝えたいことが出てくるね

これを全部雲雀先輩に言うの……？

もう少しまとめるべきか……

あれ？雲雀先輩はどうして何も言わないんだろう

強いからって思ったけど……

私がまた無茶するかもしれないよね？

今までの私の行動を考えると約束するべきだよね？

……自分で思っちゃったよ

つまり私ってかなり心配かけてる自覚はあるんだ（笑）
やっぱり私はひどい（笑）

まあそんな私に何も言わないっておかしいよね

雲雀先輩は言っても無駄と思った？

でもそれだとわざわざ言わないって宣言しないと思う

雲雀先輩は言わないことを伝えたかった……？

……そうか

多分雲雀先輩は私にこれを言ってほしかったんだ

それに私はこれを言えば言いたいことが全部伝えられるよ

「……雲雀先輩」

「なに？」

ふう……いつもと同じように言わないと……

「おやすみなさい」

「おやすみ」

よし！寝よう！！

……大丈夫

今日で最後じゃない

また一緒に寝る時……雲雀先輩に言うんだ

激突 1

みんなと組んでることがばれちやいけないから
ヴェルデ君が時計つけるんだよね

本当は誰かとかわったほうがみんなが安全な気がするけど
これはしょうがないよねー

まあ切り札があるし大丈夫と思いたい……

かなり不安だけどね……

つてか、また後で怒られそうだよ

この切り札は最低限の人しか言っていないしねー

リボン君が許可したし大丈夫と思いたい

いや、まじで……

ティリリ

……時計が鳴った

『バトル開始 1分前です』

今回の制限時間は90分です』

90分か……やっぱり今回で決着がつく……

『全て作戦通りに進めるぞ』

お前達準備はいいな』

あ、リボン君がチラツと私も見たよ

切り札も含めて言ってるんだらうねー

「……みんな、お願いね」

この炎は……来たね

いつ見ても禍々しい炎だなー

「やあ リボン君 風早優君 迎えに来たよ

仲間になる準備はできたかい？」

「悪いな バミューダ

お前達の仲間にならねえ」

「私もなる気はありません」

「え？ これは驚いたな

それが何を意味するのかわかってるんだよね」

……大丈夫

私の頼みを聞いてくれた入江君達が装置を作ってくれて京子ちゃん達の居場所は特定出来ない

それにツナ君のお父さんがついてくれてるし……

弱点がばれてるのはわかってるからこの対策は完璧だよ

『バトル開始』

消えた!?

やっぱり形態変化をしてないとこれは防ぐのは難しい
今回は囷の人形を使って防いだけど……

白蘭さん達がこれを見て何か掴んだと信じるしかない
それにしてもリボン君は堂々と話すねよね

私は不安でしようがない……

だから見抜かれないように全て答えるのを

リボン君に任せたのは正解だったかも……

まあツナ君が作戦通り一つ目の時計を壊したのを聞いて
少しは安心できたけど……

ってか、情報を教えてくれたのはラッキーだね

ツナ君達を止めるために動こうとしてる

もうこれ以上の時間稼ぎはダメか……

それに私には理解出来ないけど

みんな戦いたくてうずうずしてるんだよねー

思ってるそばからみんな出てきちゃったよ

「これはこれは敗退したチームの戦士達も合流した

連合チームのベストメンバーってわけか

だがてつきり イーガー君には沢田綱吉クンを

ぶつけてくると思ったよ

弱い君達の中では最も歯が立つかもしれないからね……

と言っても瞬殺だろうけど」

よし！気付かれてないと思う

ただ……簡単に挑発に乗らないでよ……

もう私は頼むしか出来ないんだからね

「さすがリボン君だね……」

挑発に乗らないようにペースを戻そうとしてるのと
デイーノさんに説明させることよって

ツナ君が来るまでの時間稼ぎをしてるんだもん

残りの2人の戦闘力をなめすぎか……

もうこれはツナ君達を信じるしかないね

こっちの戦闘が始まりそうだし……

リボン君は私の肩に乗ったし

ヴェルデ君とマーモンちゃんもこっちに来たしね

「……まだ気付かれてねえみてーだな」

あーこのことを話すために肩に乗ったのかな？

「……問題はどのタイミングで使うかだと思う」

「ああ」

本当にタイミングが問題だと思う……

これを使えば絶対原作とずれる

いい方向に転べばいいけど悪い方向に転ぶのが怖い……

まあだからこんなにも不安なんだけどね……

激突 2

ここはもめずに白蘭さんからだね
やっぱりあのじゃんけんは必要だった気がしてきた……
なぜか遠い目になっちゃうけど……

「貴様らがどんなつもりだろうと

オレは全員を一度に相手にする

そのつもりで気を抜かぬことだ」

白蘭さんは挑発しても流すほうと思ったんだけどなー

言ったそばから白龍で攻撃を仕掛けたしね

もう少し冷静になったほうがいいと思う

まあXANXUSさんと比べると流してる方だけどね（笑）

……あれ？

ちよつと待った

さつき全員を一度に相手するって言った？

相手はショートワープを使えるってことはやばくない？

「使って!!!」

リボン君とマーモンちゃんは早いと思ってビックリしたけど
タイミングはこの3人の中で誰かが言えば使うにして良かった
ビックリしたけどすぐ切り札を使ってくれそう！

「プ、プレゼントプリーズ!!」

叫んでる間に白龍がショートワープでやられた

ダメだ!!また移動した!!間に合わない!!

XANXUSさんの右腕が……

「ボス!!」

遅かったけどマーモンちゃんが強力な幻覚で

凍り付けにしてくれた!

危なかった……

スクアードさんが飛び出そうとしてたし

あのまま飛び出したら危険すぎるもん

冷静じゃなさそうだったし……

「よくやった！ マーモン！」

……XANXUSさん先に治療しようよ
作戦通りにもものすごい威力の炎でぶっ飛ばしたけど……
ここはもう諦めて治療するべきじゃ……

いや、今回はあつてるかも……先に倒さないと危険すぎる

「……いない？」

思わずつぶやいてしまったけど違う

私の後ろにいる……

「僕達のしたことでこれを思いついたのか？」

いつの間に呪解したのかわからない……

もしかしたら私が叫んだ時かもしれない

イエーガーに注意がいつて全く気付かなかった

……大丈夫

後ろにいるけど私には手を出せないルールだ

だけど……今のチャンスを潰された

「……そうですね」

「一瞬でもイエーガー君に隙を与えた

彼らの驚きを見ると知っていたのは少人数のみ

いい作戦だった」

だって相談して知ってるリボン君と

私の時計と交換したマーモンちゃんと

交換したことによって私のボスウオッチをつけてるが

XANXUSさんになるから3人しか知らないもん

最初に話をもちかけた時にXANXUSさんに断られたし……

でもみんなに話さなかったらいいって言われたんだよね

だから話してなかっただけだから作戦じゃないよ

この切り札は私はおしやぶりを離すことが出来ないから

誰かが使ったほうが絶対いいと思ったから

でも復讐者に気付かれることなくするには

失格になってないマーモンちゃんと交換することにした

3分使い切ったのはマーモンちゃんだけだったし……

マーモンちゃんは勝つためにはありと思つたのと
切り札を使つたらXANXUSさんしか知らない場合
みんなはすぐ反応出来ないから

順番とか無視して戦えるからいいと思つたんだよね
自分が戦えるために話すなつてずるいと思う

まあ切り札を使うつてことは

マーモンちゃんと共闘するつてことになるのを
わかつてるからまだましな条件だったかも……

XANXUSさんも共闘とかしないタイプだし……

まあリボン君は2人とは全く違うと思う

神様のことを信用してないみたいだし

交換したからマーモンちゃんの代理の時計をしてることで

この戦いに手を出せなくなるかもしれないからだもん

「賞賛に値するよ」

現にこの肉体に戻つたのに余韻を浸る時間もなかった」

……ほめてもらったけどこれは最悪かも……

この2人を一度に相手できるのか……？

「沢田綱吉君の相手もしなければならぬ」

一瞬で終わらせよう」

絶対やばい

イエーガーさんも一緒に移動させたはずなのに

私は移動したことに気付かなかつた……

激突 3

どうしよう……

ツナ君が来るまでに終わっちゃおう……

「!? どういうことだ!?!」

……どうということ?

バミューダさんが元の姿に戻ったよ

本人もビックリしてるしキャンセルしたわけじゃない

それにスカル君の話では2分は残ってる

まだ30秒もたっていないと思う

もしかして時計の故障?

私達からすれば凄くラッキーだけど樂觀視は出来ない

だってマーモンちゃんも元の姿に戻った

……つまりイエーガーが復活する

「まだ3分たっていない!」

どうなってるのさ!!」

「るせえっ」

XANXUSさん……出血を止めるために自分の炎で焼いたよ

……

その怪我でまだ戦う気なのか……

あー時計はどうして故障したんだよ!?

良かったけど良くない!!

「よくわかりませんが……私達がすべきことは同じです」

……骸君の言うとおりだね

無理なものはない

イエーガーを倒すことに集中すべきか……

「イエーガーは一对一で戦うという考えがなかった

ならば こちらも全員で対処するしかないでしょう

問題は死角となる背後へのショートワープ」

本当に骸君が1番冷静だ

イエーガーが消えたと同時に背後に鋼鉄のカバーをつくった

それも全員分を一度に

ちよつと待った……それは反則でしょ……

手だけワープするなんて出来るの!?

かなりの重症なのに白蘭さんが必死にイエーガさんを掴んでも
XANXUSさんが攻撃したのにショートワープで避けられた
それと同時にXANXUSさんに攻撃しようとするし……

スクアアロさんがXANXUSさんを守るために

前に出たけど返り討ちにあつた……

つてか、あの位置つて……心臓じゃ……

「……スクアアロさん!!」

つて、叫んでる間にXANXUSさんも足を攻撃された……

多分もう立てない……

こんな短時間に3人もやられた

……ちよつと待つて

これは原作なの……?

それとも私のせいで彼らを本気にさせたから……?

「イエーガー君さえいれば

僕が呪解出来なくても問題ないね」

「ああ

天と地程の力の差は理解できただろう」

「後何人死ぬんだろうね

……風早優君 君にはもう一度猶予を与えよう」

猶予……?

「君が僕の仲間になるならもう殺しはしないよ」

「なっ!? 優!!」

デイーノさんが叫んでるね……

私が仲間になれば殺しはしないか……

これだけ休めば大丈夫だ
作戦の計画は崩していない
これなら……

「!?」

この炎は……夜の炎!?

「どういうことです 今は戦闘中です」

我々に手を出すことは反則になるはずです

まさかもう向こうが……」

オレも一瞬そう思ったけど……違う……もう1人いるんだ
夜の炎を使える奴が……

「……悪いな」

少しオレに付き合ってもらおうぞ」

やっぱり……優の代理人

リボンが心配していたのが当たったんだ……

「なぜオレ達の邪魔をするんだ!!」

お前は優を大切にしているんじゃないのか!?

「だからだ」

「……どういことだ」

優の代理人は一体何を考えている?

オレ達が合流しないと復讐者が勝ってしまう……

勝たないと優が死ぬんだぞ!?

「優を死なせたくないならまだ動くな

時間がくればオレが夜の炎で近くまで

ここにいる全員を送ってやる」

「……わかった」

……みんなゴメン

計画より遅れる……少し待っててくれ

激突 4

殺しはしない

つまり……殺さないけど重症にはなると思う
素直に時計を壊される気はないと思うからね
でも重症でもいいよね

だって圧倒的に力の差がある……

「本来なら今すぐ彼らを殺してもいい

でも君はどうしても必要という予言を信じ

もう一度猶予を与えたんだ」

次はないか……

私が行かないとみんなが殺される……

「……私はみんなに生きてほしい

デイーノさん、骸君……」

「ダメだ！ 優!!」

ふう……深呼吸……

わがまま言っついていいよね……？

よし！覚悟して言おう!!

「……私はみんなとまた一緒に過ごしたい……

だから……絶対死なないで……」

「……優！ ああー！」

「やれやれ 貸し1つですよ」

骸君……そこはさ……貸しにしないでよね……

「よく言った 娘

プレゼントプリーズだ

うむ……私の時計は問題なさそうだ」

あ、ヴェルデ君の時計は大丈夫なんだね

「ええ!？」

いやいやいや……何してるの!?

ヴェルデ君は戦闘できないんじゃない……

……まじか……この時代にモス力を作っちゃったよ

いくら夜の炎で近くまで送るといつても……
これ以上は……

「いつまで待たねばならんのだ！」

向こうが大変なことになってるかも知れんのだぞ！」

「そうだな

ちやうど今3人がやられて死にかけてるぞ」

「なっ!？」

そ、そんな!？」

今すぐ行かないと……!？」

「動くな

それにまだ生きている」

「……オレは行く

邪魔をするなら!？」

「優が死んでもいいなら行け」

「ぐっ……」

どうすればいいんだ

いつまで待てば……

「なぜ彼らが行けば風早優さんが死ぬのでしょうか

我々には知る権利があるはずです」

「……お前らは優のおしゃぶりを外したい

あーもちろん死なずに外したいんだろ?」

「あつたりまえだろうが!!」

獄寺君……

「今すぐお前らが行けば人数も多くてすぐ勝てるだろう

だが、おしやぶりを外せなくなる
優だけじゃなく虹のアルコバレーノもだ
だからオレはお前らを止めに来たんだ」
どういうことだ？

オレ達が行けば勝てるのにおしやぶりは外せない？

「あなたは一体何を知ってるのです」

「……全てだ

オレは全てを知っている」

全て……？

「……そろそろいいか

約束通り送るぞ」

「……わかった

みんな 行くぞ」

この炎をくぐれば……！！

頼む……間に合ってくれ！

……モスカが瞬殺された

すごい威力をぶつ放したのにダメージを受けた感じがなかった
防御力も高すぎる……

ずっと見てるけどイエーガさんの弱点がわからない
わかっているとすれば死角からの攻撃が多い

まあそれは骸君が似たようなことを言ってたし……

やっぱりあの時が1番のチャンスだった

でももう一度呪解が出来ても避けられると思う

あれは不意打ちだったから効果があった……

「次を殺るぞ」

「そろそろ最後のターンだね」

本当に打つ手がない……！

またイエーガーさんが消えたと思つたら骸君の背後に！
でも死角からの攻撃が多いから反応した！

……ダメだ

相手の攻撃力の方が上だ！

そりや威力は軽減されたけど追い討ちをしかけてくる

止めを刺される前にディーノさんが腕を掴んでくれた！

ありがとう！ディーノさん！

「腕だけを……」

つぶやいてしまった……

だつて腕だけを残してまた移動したつてことは……

次はディーノさんが危ないんじゃない！

もう見てるだけなんて我慢できない……

それにXANXUSさんとスクアーロさんが動ける状況じゃない

から

私は失格になつてもいいと思うしね！

だからディーノさんを助けないと……！

念のために形態変化してて良かった……

激突 5

「大丈夫だよ」

あ……この声は……それに後姿……

わざわざ声をかけてから向かってくれたんだ

多分、私が発動しようとしたことがばれちゃたんだろうね

本当に……もう隠し事が出来ない

「借りは返したよ」

……うん

もう少し素直に言ってもいいと思う

まあデイーノさんが止めをさされる前に

チエーンで防いでくれただけいいか……

デイーノさんがここまで重症じゃなかったら

多分、デイーノさんをぶっ飛ばしてたと思うしね

あ、デイーノさんが動けないから

雲雀先輩がもう一度攻撃をしかけて離そうとしてる

でもそれをすれば次は雲雀先輩が危ないんじゃない……

どうしよう……

……大丈夫って言ったし信じるよ!!

……あれ？本当に大丈夫だったよ

いや、それでいいんだけどね

でも雲雀先輩の攻撃をなんでショートワープで避けなかったの？

わざわざ腕で防ぐ必要あった？

よくわからない……

「まさか君と生き残るとは……雲雀恭弥」

「心配ないよ

君だけは助けないから」

そこはさ……助けてあげようよ

骸君だって怪我してるのに……

「それにあの獲物は僕の武器を

ショートワープを使って避けられないようだからね」

……本当に素直じゃない
わざわざ言ったのは標的を骸君から
自分に向けてるようにするためだと思うし……
でも本当に雲雀先輩の武器は避けられないの？
んー夜の炎は雲の炎に弱いとか？

「フツ 笑わせてくれる
バカな連中め」

……違う気がする

私がバミューダさんの立場だったら無駄だとわかっても
時計に向かって何度も呼びかける気がするもん
イエーガーさんも死角はないとか言ってるし……
避けれなかったのは他の理由じゃ……

ああ！まずいまずいまずい

もう戦闘が始まっちゃったよ!?

ロールを増殖させちやったし……

雲雀先輩は気が早すぎる!!

増殖しすぎで風を使っても雲雀先輩がすぐ見つからない!

「雲雀先輩ー それは多分違います!!」

でもあれがヒントになるのは間違いないです!!」

叫んだけど……聞こえてるよね……?」

私の言葉を信じてくれればいいけど……

おお……すごい

骸君が作った炎の囀を使ったり息がぴったりだよ

それに私の言葉を聞いて慎重になったかも……

って、思ってるそばから雲雀先輩が攻撃をしかけたよ

まあ私が間違ってる可能性もあるし……

やっぱり消えたよ!!!

雲雀先輩の背後に……

「ないよりはましですー」

ちゃんと私の話も聞いてくれてたんだ……

骸君が鋼鉄のカバーを雲雀先輩の背後に作ってくれてる!

ガキツ

……助かった？

でもさっきの白蘭さんみたいになるよね……？

骸君も少しでも急所から避けるように作っただけと思うし……

やっぱり雲雀先輩がピンチなのは変わらない!!!

ゴツ

………ツナ君……!!

まじでいいところに登場するね!!

イエーガーさんをぶっ飛ばしてくれてありがとう!!

「……遅くなってすまない」

あれ？ツナ君が私の方をチラツと見たよね？

何かあるのかな？

「優じゃなく俺に文句でもあるんだろ」

え!?神様!?

………いつのまに後ろにいたんだ……

ってか、なんでここに来れるの？

「俺を誰だと思ってる

試合が始まる前にXANXUSが持っていた

ボスウオッチとあらかじめ交換していた」

……私が考えることはお見通しなんだね

連絡つかないからお願いできないと思ったけど問題なかったよ

多分、交換したのは時計を置いて集まった時と思う

「でも……バトラウオッチがあるよね？」

ボスウオッチを交換しても……

私のバトラウオッチをスクアールさんがつけてたと思うし……

「スクアールが戦闘不能になったから出てきたんだ」

なるほど……

確かにそれだと問題ないか……

ってか、戦闘不能って言うてるし

やっぱり幻覚で作ってるのは気付いてるんだね

「さっきのツナ君が文句いいたって？」

「まさか!!」

あ、ツナ君が叫んでる

何か気付いたのかもしれない

神様との話は後にして戦いに集中しよう

激突 6

次は炎真君、クロームちゃん、フラン君が……

あれ？また雲雀先輩の攻撃を避けなかったね

あ、リボン君が説明しろって叫んでるよ

えー……それは嫌だ

バミューダさんが復讐者に炎を渡してるなんて……

自分の力で生きれないってことでしょ……

みんなも言ってるけどそんな人生は嫌だね

ん？頭に手があるよ

あ、神様か……

つてか、神様はリラックスしすぎだと思う

いや、その前に……

「それって反則でしょ!？」

今も肩の上に乗ってるし……

「はい！ ハハッ

離れてください!!」

いやいやいや、今更過ぎるでしょ

ちゃんと審判しろよ!!

つてか、なんで次からすれば反則負けなの？

絶対おかしいと思う

「……優、話がある」

「え？ 今!？」

このタイミングで言わないでよ……

「呪いを解く時、雲雀に居てほしいか？」

「へ？ あ、うん」

「わかった」

つて、返事をしちゃったけど……

リボン君が考えていた通り神様が私を呪ったの？

……やっぱり後回しにしよう

今はそれどころじゃない

「……………いやー」

雲雀先輩の肩から血が……

ど、どうしよう……今すぐ治療したいけど……

「今までの戦闘から推測するに

全身のシヨート・ワープは2度が限度 逃がすものか!!

我々ごと固めてしまおう」

私も骸君と同じと思う!

マーモンちゃんへの攻撃を避けられなかったのも

2回移動してたからだと思うもん!!

うわー絶対痛い……………!

怪我してる上から氷で固めたよ……

おお……すごい

ツナ君が炎真君から受け取ったリングで

重力で圧縮した炎をぶっ放したよ……

これは凄い威力だと思う……

「……………勝ったの?」

イエーガーさんが倒れたし終わったよね……?

……………ごめん

骸君の言うとおりだよ

この程度で死ぬわけではないよね

とどめを刺すように言ってるけどツナ君には無理と思う

まあボスウオッチを壊せばいいと思うしー

「……………へ?」

首の後ろに何か当たった……?

これはやばい……はいつた……

「……………悪い」

神様が謝った気がするけどもう意識がもたなかった

ツナがイエーガーを倒して
バミューダの時計も使えねえんだ
後はボスウオッチを壊せば終わりだぞ
ドサツ

「!？」

なんで優が倒れてんだ!？」

まさか……優の代理人の仕業か!？」

優には手を出さないと思っていたが……

「バミューダ、もうその時計は使えるぞ

言ってみろよ」

「……プレゼント・プリーズ」

『メッセージ受諾!!』

時計が使えなかったのはこいつが何かしてたのか!？」

……何を考えてる

ツナ達が負ければオレ達と優は死ぬ道しか残ってねーんだ

これはピンチだぞ……

バミューダに今の一瞬でツナ以外の時計を壊された

それにバミューダだけじゃなくこいつも相手しねーといけねえ

……

「やはり君は僕についた」

「……バミューダ、それはないぞ

俺は優を死なせるつもりはないからな

ツナの成長のためにお前を呪解させただけだ」

……どうということだ？

今、あいつはオレを見て言ったぞ

オレにツナを成長させろって言ってるのか？

確かに昨日オレはツナを見てまだ成長できると思ったが……

「悪いな ツナ

もう少し強くなってあいつを倒してくれ」

どういうことだ？

ツナを強くするためにバミューダを呪解させたのか？

「……わかった」

あいつの目を見て返事したな

ツナは納得したのか……

「もうお前は手をださねーんだな」

「あーこれは手を出すことになるのか？」

優のために雲雀の治療をしたいんだが……」

「……わかったぞ」

……もしかすると優を気絶させたのは

バミューダに手を貸したことを

知られたくなかったただけかもしれないねえな……

最後に…… 1

これでツナがバミューダを倒せば原作に戻るな
まあ俺は原作なんてどうでもいいんだが……

ツナを死ぬ気の到達点にしないと

虹のおしゃぶりを外す時の炎が足りなくなるんだよな
優のおしゃぶりは俺が外すから足りるが……

俺だけが出来ても優が死ぬからな……

もう優を神の都合から……俺から解放しないと……
だから今回は優を誘導させるわけにはいかなかった
俺が出てくるしか選択は残ってねえのに出て行けば
リボーンに目をつけられる未来しか出来なかった
記憶をすり返しても良かったが……

これは俺のためだから後で問題になる
他にも優の時計はすぐ改造出来たが……

スカルの時計は難しかった

優は俺から離れる気はなかったからな……
だから雲雀と仲直りさせた

……思い出しただけで腹が立ってきた
もし俺が邪魔しなかったらあいつは起きた時に……！
なんでぶつ飛ばすのが問題になるんだ

俺には雲雀をぶつ飛ばす権利はあるはずだが……

『優が可愛いのはわかったから早く治しなさい
もうずーっと前から覚悟してたんでしょ？』

……してたが……それでも腹立つんだ！

せめて運命の相手が雲雀じゃなくツナだったら……腹立つな
よし!!優は誰にもやらねえ!!

『じゃあ優が育った世界に行かせるの？』

……それはダメだ

俺はもう誘導することが出来ない

だから優が不幸な未来になる確率が高すぎる……

『わかってるなら覚悟しなさい』

死なせないって私と約束したでしょ』

そうだが……

……お前は強いな

『あなたが弱すぎるのよ』

今のあなたが神様って言っても誰も信じないわ』

はあ……わかった

お前には敵わないな……

『私を誰だと思ってるのよ』

……そうだな

神に殴りかかったのはお前ぐらいだ

『それはあなたが悪い』

まあそれはもういいわ

最後に会ってくるわね』

ああ

ゆつくり会って来い

俺は……雲雀を治すか……

まあこれでいいだろ

対価としてスタミナをかなりもらったけどな

それなのにこいつは目を覚ますが……

「起きたな

身体に違和感はないか？」

身体を確認してるが問題ないだろ

俺が治したんだ

雲雀は心を読めば俺が直したことに気付いてるな

「優ー」

わかっていたが礼を先に言えよな

やっぱり俺は雲雀が嫌いだ

まあ優のことを気にしてるという点ではいいが……

「優には聞かせたくない話があるからな……」

まあ決着がつくのを待て」

これを言えば

こいつは優が聞かせたくない話だから納得する
まあイヤイヤだけどな

「……わかったよ」

睨みやがって……誰が譲るか！

優を支えるのは俺がする！

もうこれが最後なんだ……

「俺がお前を治したんだぞ」

「……それで借りは返したよ」

「ああ」

雲雀と話してる間にそろそろ終わりそうだな

リボンがツナに死ぬ気弾を撃ったからな

……希望から生まれる死ぬ気を出せるツナだから

これからの優を任せてもいいと思ったんだ

俺はもう手が出せない

頼むからまた優を救ってくれよ……

んー神様に気絶させられたと思ったけどー

どうやら違ったみたい

精神世界に連れていったのかもー

『こんにちは』

「こんにちは？」

とりあえず返事したけど誰だろう

あ、顔が見えないしさっきの声は……

「お久しぶり？です」

つい疑問系になっちゃったよ

だってちよつと前に会ったと思うしー

『あなたに最後の選択をしてもらうわ』

んーこれは呪いを解いた後のことだよね？

それに選択？どうということだろ？

「選択ですか？」

『2つあるのよ』

でもどっちを選んでもあなたには辛いと思うわ』

……それを聞いちゃうと聞く勇気がなくなるね

「あー先に質問してもいいですか？」

『いいわ』

……自分でもわかってる

質問して先延ばしにしようとしてるってね

「えつと、あなたはこの世界の神様ですか？」

『違うわよ』

え？違うの？

じゃあやつぱり敬語をやめよう（笑）

『あなたが知ってる神様とも違うわよ』

あ、次に聞こうとしたけど先に言われた

『それと私がいろいろ知ってるのは

私が神様と少し相性が良かったからよ』

へえー……相性ねー

シャーマン？とかだったのかな？

『……あなたは詳しく知らなくていいわ

それより選択してほしい』

うう……やつぱり選択しないといけないのね

『1つは元の世界に戻る』

これは予想通りだね

ってか、これ以外にも選択があるのがまだまじだと思っ

……辛いっていわれたけどね

『もう1つは~~~~~よ』

「後者でお願いします」

即決だね

悩む必要もなかったよ

『本当にいいの？』

あなたにとってはこれは辛いはずよ』

そりゃ辛いけど……

でも私は胸を張ってあれを言えると思うんだよねー

最後に…… 2

勝ったな

ツナ、オレを充分驚かせたぞ

今、バミューダのボスウオッチを壊したな

後の問題は優の代理人とチェツカーフェイスだぞ

「……約束通り勝った

お前は何を考えてるんだ

オレはお前が優を大切にしていることがウソとは思えない」

それはオレも思ったぞ

ヒバリを治したのは優のためにしか思えねえ

今回の行動でわかったが……

こいつはずっと手を出せたのにも関わらず出さなかった

手を出すことを決めたのは全て優のためな気がするぞ

「……優には話すなよ

優は風のアルコバレーノになるだけに産まれた」

「なっ!？」

「崩れた世界のバランスを一人で支えるなんて

誰でも出来ると思ってるのか？

俺だと力が強すぎて壊れてしまう

さつき雲雀を治したのにさえ対価を貰ったんだぞ

へたに力を渡せばお前が死ぬからな

あー、対価はスタミナだけから心配するな

特殊能力ほどの力ををあの対価の量であげれるのは優だからだ

多少俺の力が強すぎて影響が出たけどな

……俺との相性が良くて耐えられる身体を作るしかなかった」

……吐き捨てるように言ったな

確かに世界の秩序を守ってる7・は

人柱のアルコバレーノだけでも7人いる

更にリングを考えると……こいつの話は筋が通ってるぞ

「っ、作った……!？」

優を物みたいに!!!」

ツナが今にもこいつに掴みかかりそうだな
作ったならオレが知ってる優の過去は全てウソなのか？

オレが知ってる過去は運動神経も普通だったからな
だが、これで優の身体能力は元々高かったとすれば
対価を払わなかったのも説明がつくぞ

「……優が袋をとると熱が出るのは

身体が耐え切れなかったからか？」

優はこいつに作ってもらったと言っていた

いつももらったか聞いてねーが……

オレの予想が正しければ風のアルコバレーノになった時だ

優は1番初めにこいつと会ったと言っていたからな

「ああ

袋をしなければそこにいるユニと同じで

寿命が削れていくからな」

5分以上使えなかったのはこのためか……

優のために制限したのか……

「記憶をすり替えなかったのはなんでだ？」

「……それは説明しにくいんだ

まあすり替えすればお前らは死んだだろうな

優を死なせずおしやぶりを外すには

この未来にする必要だったと思ってくれ」

この未来はオレ達のおしやぶりを外す未来のことか？

優はオレ達が外せば自分も外さないと

バランスが崩れる感覚がすると言っていた

オレ達が外さず優だけが外しても同じことが起きるだろう

その場合もバランスが崩れて優は死ぬ

これは間違いねえと言ってもいいぞ

「風のアルコバレーノは昔から存在していたのか？」

バミューダはウソをついていないだろう

だが、こいつがすり替えていればわからねえ

それに今まで誰かがこの世界のバランスを支えてたはずだ
タルボが選ばれし者の血を持つてるのも説明できるからな
「優を作ったがバランスが崩れるまでは

優が支える必要がないだろ？」

バランスが崩れたのは

お前らがアルコバレーノの時代だけだったからな
時が来るまでは普通に生きててほしかった
だからオレが力を封印していたんだ」

「それでは説明できねえことがあるぞ」

選ばれし者の血を持つていたことが説明できねえ
だが、これで優の過去がウソじゃねえかもしれねえぞ

「それはお前達は知る必要がないことだ

いや、知ってはいけないことだな」

……これは最後まで口をわらねえ気がするぞ

「もういいだろ」

オレはお前の疑問を解くためにいるわけじゃない
本題に入るぞ」

優の呪いを解くことだな

「俺の話を聞いて少しはわかっただろ？」

優は特別な存在だ

ここで生きていくには相当な覚悟が要るんだ」

「問題ないよ」

「ああ

その覚悟ならオレ達はいつでも出来る!!」

今まで黙ってたヒバリとツナがすぐ返事したな

まあもしこの覚悟が出来ねえと言えばオレがぶっ飛ばしたぞ

「おしやぶりの力で1番抑えられていた

風の操る力が解放されるのにか？」

獄寺も叫んでいるがまた2人の返事が1番早かったぞ

「後は俺からの加護がなくなる

俺との連絡が取れないだけで優の動揺を見ただろ？」

「はあ……それが何？」

「僕が側にいるから君はいらない」

「……やっぱりお前は嫌いだ」

「こいつは……どれだけ優が好きなんだ？」

「優について大事な話をしてるのに」

「ヒバリとやりあう気になってるぞ」

「それはそれで面白いが今はそれどころじゃねえんだ」

「……優も決断したし後にするか……」

「どういうことだ？」

「こいつはさっき優には話すなと言ったぞ」

「優のことだ」

「これを知れば傷つくからあいつは言ったんだ」

「それなのに優が決断したと言ったぞ」

「ボンッ」

「!?!」

「ツナがつけてるボスウォッチが急に壊れたぞ」

「こいつがしたのか？」

「フフ 話が終わり決まったみたいですね」

「優勝は風早優チームです!!」

「どういうことだ!?!」

「こいつがつけてるボスウォッチはマーモンのはずだぞ!?!」

「時計を先にすり替えたに決まってるだろ」

「手を出すには優のためという条件があるからな」

「オレ達が考えていたことも全て読んでいたのか……」

最後に…… 3

えーっと……どうなってるんだろ？

起きたら私が勝ったって尾道さんが宣言してたよ
え？つまり神様がツナ君の時計を壊したの？

でもツナ君は元気そうだよ

まあ神様がツナ君をボコボコにするわけないか……

「……いひゃい」

だから急にほつぺた摘まないでよね

ほつぺた摘まれながら尾道さんに

特別に呪いが解かれるって言われても微妙だね

あ、ツナ君が話を進めてくれてるよ

うお！チェッカーフェイスが来た！！

すごいな……気配がわかりにくい

風をつかってギリギリわかるレベルだよ

「優、本当にいいのか……？」

「……うん」

神様も聞いて心配してるんだろうね

まあ辛いのは辛いしね

あ、雲雀先輩と目があっちゃった……

……罪悪感からなのか……悲しいからか……

何か言おうと思っても胸が苦しくて言えない……

でも最後に何かを言わないといけない気がする

……私はもう……だから覚悟しないと……

って、少し冷静になって気付いたら話がドンドン進んでる

うわーそういうえば片平さんっていう人が未来で出てきたね

私は会ってないけど……原作で見た気がするもん

「きゃー」

なんつー炎を出すんだと思って声が出てしまったけど……

……さすが神様だよ

私には影響がないように守ってくれてるよ

・・・

……まあ話は聞いた

で、とりあえずどこでツツコミをすればいいんだ？

生粋の日本人とか飛躍しすぎてわからない

でも7・は地球上の生命力のバランスを補正して

正しい進化に向け生命を育む為の装置といわれて

微妙に納得出来る気もする

だってそのバランスが崩れたから増えたのが説明できる

まあチエツカーフェイスさんが

虹に何かあった時のために風があり表裏の存在になるため

おしやぶりを作ったらおしやぶりをつくり

ボンゴレリングを作ったならボンゴレリング

マーレリングを作ったならマーレリングを作ったっていうのは

多分原作にはないんだろうね

でも疑問は一体いつからわかってたんだろう

過去から増えてるんだし未来で起こるのがわかってたの？

それだと過去の間に対策できるんじゃないの？

『あーそれはだな……いろいろあるんだが……』

あ、神様だね

私が疑問に思ってるから心の中に話しかけてくれたんだ

『まず優が居た世界とこの世界の時間軸とかが同じと思ってるだろ

？』

え!?!違うの!?!

『ああ

例えば俺が調節せずに優を元の世界に戻すとすれば

こっちで2年以上過ぎたのにあっちでは1日、

いや、10時間あるか微妙かもしれない

調節せずだから身体は2年分成長してることになるけどな』

まじか!?!

それは凄い怖いな……

『そうだぞー

だから優の世界で死んだ者が転生しても
赤ん坊からやり直したのにも関わらず
優と同じぐらいの歳になるんだ』

……つまり私の方が時間がたつのが早いのかな
ってことはこっちの世界の方が遅いよね？
じゃあ未来に起こるってわかってるんだし
簡単に阻止できるんじゃないの？

『問題はあほの神はリボーンの世界に転生させようとして
転生者の魂に刻んでしまったんだよ

リボーン達のいる時代に転生できるようにな
わかってるけど壊そうとすれば世界のバランスが崩れるんだよ』
あーなるほど

かなり昔に未来に転生者が来るってわかってたけど
へたに手が出せない状況だったのか……
まあそれだと過去の時代に対策として
先にいろいろ増やすのは納得できるね

『そういうことだ

優は調節されて転生したから変な話だと思うけどな』
まあそうだよー

転生した人たちがどこまで原作を知ってるか知らないけど
私が知ってる範囲でも1巻から7年ぐらいたってる
ボンゴレリングは出来てそこまで時間はたってないけど
だってツナ君で10代目だからね
おしやぶりは一体いつからあるかわからないだよー
もしあっちの1年がこっちで千年ずれると考えれば……
ずっと昔からわかるのも頷けるよね

ってか、その計算で行くと
私が元の世界に戻っても17時間しかたってないよ
……一緒と思ってた先入観って怖いね
いや、そもそも原作が始まった年にこの世界が出来たと
考えるのもおかしいかもしれないよね？

元々似たような世界があつた可能性も捨てきれないし……

あ！この可能性も考えられる

別に転生者が原作を読んでは限らないよ

転生させたことによつて未来がずれた

つまり……あほの神は未来を知つていて

その未来を詰め込もうとして失敗しただけかもしれない

そういえば私が神様と最初に会つた時に原作知識つて聞いたから

神様が分かりやすいように話をあわせてくれたかもしれないよ

本当は未来の知識を渡そうとして失敗したとか？

『あーすまん

今、優が考えた通りなんだ

俺がもう少し詳しく話せばよかったな』

別にいいよ

失敗したから正確に伝える必要がないと思うしね

『……そうか』

うん

……考えすぎて話がそれすぎたね

んーちよつと聞いてみよ

「どうして私のはあなたが管理してないんですか？」

いつからあの人に譲ったんです？」

表裏なるからおしやぶりやリングを作ったのはいい
でも私を呼んだのはチエツカーフェイスじゃないよ

いつあの人に渡したんだろう？

だって初代に渡したのはこの人じゃないと思う

他のリングと一緒にタイミングで渡せばいいのに渡さなかった

夢で渡されたって言ってたし……

「風は我が一族が持っていた物ではない

我が一族は彼女と出会い風は表裏の存在と知ったのだ

当然、管理するのは彼女になる

彼女は我々が地球人の力を借りようと決めた時に必ず現れた

ボンゴレリングとマーレリングを創った後から私は会ってはいな

い

ユニとの先祖とは交流があったらしいが……」

つまり必ずいいタイミングで必ず現れたのか……

やっぱり神様と繋がってるのかな？

神様を見てみたけど何か言うつもりはないみたいだね

まあなんとなく納得したいや

ユニちゃんの先祖の人と交流があったから

マーレリングとボンゴレリングを渡したと思うしね

でも初代に頼む時に夢で会う必要があったのか謎だけどね

……もういいか

だって私には関係ないことだしー

あ、あれはタルボじいさんっていう人じゃない？

微妙に原作を覚えてみたい

名前までは覚えてなかったけど姿を見ればわかったよ

まあ私は会ってないから知らないフリをするけどね

「おしゃぶりの代わりとなる器じゃよ

こいつを使えば永遠におしゃぶりは必要なくなるはずじゃ」

……私には変な器にしか見えない（笑）

「それを使えばおしゃぶりが離れるの？」

あ、雲雀先輩が聞いてるよ

私のために聞いてくれたんだらうなー

「そうじゃ」

やっぱり原作では外したことでハッピーエンドだったんだね

ってか、私が外せば死んじゃうって聞いてから

またツナ君がタルボじいさんに説明しにいったんじゃないの？

それなのに外すように作るって変だよな？

「小僧達が言いたいことはわかっておる

小僧からまた話を聞いた時にそやつがきてのう

風のアルコバレーノの対策はしていると聞いたのじゃ

そつちは問題ないのじゃろ？」

「ああ

まあそつちと同じタイミングで外すのが条件だけだな」

いつの間に神様はしたんだ……

まじでビツクリするよ

「なるほどのう

では説明するとうしようかのう」

えーつと……タルボじいさんの話を聞けば

夜の炎でループさせて炎を増加して維持する

問題は最初に炎が大量にいるってことだけだね

まあもつと詳しく言ってたけど

もう私には関係ないからいいや……

だって真面目に考えても意味がない気がするんだもん

「……火種は足りるの？」

あ、雲雀先輩が神様に話しかけてるよ
凄い貴重なシーンな気がする（笑）

まあみんなと私はわけて火種を起こすからね

風の炎は私と神様しか出せないし心配するのもわかるかも
「俺を誰だと思ってる

火種が足りなくて優を死なせるわけないだろ」

……雲雀先輩がムスつとなっちゃったよ

最後なんだから機嫌よくしてほしい

「あー雲雀、お前は止めておけ」

「僕に命令しないで」

……だから喧嘩しないでよ

でも、雲雀先輩も参加したほうがいいんじゃないの？

「今のお前が炎を出しても効果がないから優の側にいろ」

あ、雲雀先輩が私を見たよ

「……わかった」

……不安だったのがばれたね

本当に敵わない気がするよ

「こっちは準備できた!!」

「……ツナ、もう少し待て」

あれ？神様は準備出来てるんじゃないの？

向こう待ちだった気がしたんだけど……

「いひゃい……」

だからほつぺたを摘まないでほしい

「言いたいことがあるんだろ？」

神様は……容赦がないね

私が最後に言うか悩んでるのに気付いて言ってるんだもん

「……ツナ君!!」

「どうかしたのか？」

「私と……友達だよね？」

「……オレ達はずっと友達だろ？」

「うん！」

この世界に来てから初めて友達になって……
それからずっと友達だった……

「……みんなにもいっぱい感謝してるよ
でも言葉がうまく浮かんでこなくて……
えつと……今までみんなありがとう!!」

「……優?」

あ、ツナ君と雲雀先輩の声がかぶった……

「雲雀先輩……返しますね」

押し付けるような感じで渡しちやったよ

まあ普通に渡せば絶対受け取ってもらえないからね

「……なにしてるか……わかってるの?」

低い声で言ったなー

まあ指輪を返せばそうなるよねー

「雲雀先輩は縛れるのが嫌いなことは知ってます

……知ってるのに言いますね

また雲雀先輩からもらいたい……もらいたいなあ……」

「……わかった

預かっておくよ」

目に涙を溜めて言うのはすごい卑怯だよね……

はあ……これからの雲雀先輩を縛ってしまった

……もう私とは会えないのに……

でもどうしても私がいたと覚えてほしかった

「……みんな、そっちはお願いね!

こつちが大丈夫だとそっちが失敗しちゃうと

私も死んじゃうんだからね!

ツナ君、合図をお願いしまーす」

「……わかった

今から始めるぞ!!」

うお……みんな凄い炎だ……

私も頑張っただけの炎を出してるんだけど

8割以上は神様の炎だよねー(笑)

さて、最後に話さないといけないね

……ごめんね

私がああ選択をして1番辛いのは……

絶対神様だと思う……

『……気にするな』

俺もそっちを選んだ方が正解と思うからな』

……もう会えないよね

私はこれを外せば気を失うって言ってたし……

『ああ』

優が目を覚ました時には俺はもういない』

いっぱい助けてもらったのに恩返しも出来なかったね……

『……もう貰った』

へ？

『俺はいっぱい貰ったぞ？』

楽しかったからな！』

……今までありがとう

大好きだよ！

『……俺もだ』

意識を失う前に見た神様は今までで1番優しい顔だった

呪いが解けて 1

あれから……もう数日たった

本当に今日の4時に優は目を覚ますのかな……

この前だって白蘭やXANXUSが暴れて優がいる病室の壁を壊して

ヒバリさんが優に当たったらどうするのって怒って壁を壊せば骸も居て……

みんなが暴れて凄くうるさかったのに優は目を覚まさなかった……

「風早……目……覚ますよな？」

「あつたり前だろうが!!」

獄寺君が山本に怒ってるけど……不安だからと思う

「お前らなに辛気くせー顔してるんだ」

「リボーン!!」

いつの間に居たんだ？

「お前らがそんな顔してると優が起きた時に心配すんぞ」

「……うん そうだね」

リボーン、お前も来たんだ」

昨日聞いた時は悩んでそうだったけど……

「……あいつの言いなりになるのは癪だが……」

オレも優が心配だからな」

「……そっか」

ここが優の病室だよな？

コンコン

「優、会いに来たよ」

声をかけながら入ったけどやっぱり返事はなかった

まだ時間まで30分ある……

……優はおしゃぶりが外れてすぐ倒れた

ヒバリさんが受け止めてくれたから怪我はなかったけど……
声をかけても一切反応がないし

オレ達は失敗したのかと思っただ……

優の代理人が成功したがしばらく意識が戻らないって言った
オレ達はすぐ理由を聞いたんだ

『……おしゃぶりが外れれば死ぬんだ

対価が何もないわけないだろ……』

……オレ達は声を失った

『言っておくが数日たてば意識は戻るぞ

だが……いや、止めておく

優がお前らに話さないと決めておしゃぶりを外したんだ

それに優が目を覚ませばわかるからな』

みんな……何が起こるか聞こうとしたけど……

優の代理人の目を見て無理だと思っただと思うんだ

この人は優の意思を尊重するって……

『あーこれだけはお前らに話しておく

残った特集能力の2つについてだ

今、俺が勝手に決めたからな

優は何も知らないんだ』

この言葉にリポーンが1番早く反応して

何をかえて常に発動する場合……

対価は一体何を払ったかを聞いたんだ

オレも知りたかった……一体何を……

『風の波動の子どもが産まれるようにした

今までは優が死ぬから出来なかったからな……

対価はまだ1つ残っているストックにしたぞ』

ってことは……優はレアじゃなくなるんだ！

それに対価も優が傷つくわけじゃない！

『問題なさそうだな

最後に1つだけ言っておく

今から優が目覚める時間を教える……人数は多くてもいい
だが、必ずツナ、ヒバリ、リボーンはその時に居ろ』

オレはいいけどヒバリさんが……

『もう時間がない

俺と優のつながりが切れる

頼むから優を幸せにしてくれ……』

最後に優が目覚める時間を言っただけ消えた……

4時まで後5分……

「やはり無理矢理でもオレが連れてくるべきだったか……」

「大丈夫だ

恭弥は昨日までずっとここに泊まっていたし

オレ達がいるとわかってるからギリギリに来るつもりだろう」

「そうですよね！」

デイナーさんの言うとおりだよ！

それに優のことだし……ヒバリさんは絶対来るよ！

「ツナ、他は誰も来ないのか？」

「はい

京子ちゃん達も来たがっていましたが……

今回はお願いしました

人数が多すぎると優も困るからって言って……」

「……そうか」

本当は優の代理人が言っていたことが気になって

オレと獄寺君、山本、お兄さんで優の様子をみてから

みんなに会ってもらおうと思ったんだ……

ガラッ

……トビラが開いた！

「ヒバリさ……クローム？」

「……京子ちゃんとハルちゃんが

私達の方まで行ってほしいって……」

「う、うん！ わかった！」

京子ちゃんとハルは

オレ達が隠してることに気付いていたんだ……

2人ともごめん……ありがとう……

「……群れすぎ」

この声って!!

「ヒバリさん!!」

やっぱり来てくれたんだ!!

群れすぎて怒ってそうだけど……

「もう4時スよ」

「え!? もう!？」

ほ、本当だ……

4時まで後30秒もない!

……ヒバリさんは優の近くに居るつもりはないのかな？

病室の扉にもたれてるけど……

「ん……」

この声……優だ!!

本当に4時に目が覚めるんだ!!

「……………」

「ずっと眠っていたんだ

先に水を飲ませたほうがいい」

「は、はい!!」

良かった!!

近くの棚にペットボトルがある!

「これ 飲んで!!」

でも何でここにあるんだろう？

これってヒバリさんが準備したんじや……

昨日までずっと泊まってたみたいだし……

「……ありがとう」

喉が渴いてて美味しかった……」

「う……うん！」

優、大丈夫？ 何か変なところはない？」

「……えっと……まず……」

やっぱり何かあるんだ……！

「……どちら様ですか？」

どうして私の名前を知ってるんです？

それにここはどこですか？ 病院に見えますけど……」

……オレは頭の中が真っ白になった……

呪いが解けて 2

「ん……」

なんか凄く身体がだるいなー

寝すぎたって感じのだるさだよ

……ここどこだよって言ったつもりだったけど

声がかすれて言葉になってなかった気がする

あれ？誰だろう

凄い髪の毛が逆立ってる人がいるよ

「ずっと眠っていたんだ

先に水を飲ませたほうがいい」

……外国人風のイケメンのお兄さんがいた

ってか、よく見るとイケメンばかりだよ

髪の毛が逆立ってる人も優しそうな顔してるしね

あ、その人がペットボトルの水をくれたよ

今あげたから多分新しいのにねー

お礼を言いたいけど声が出なかったんだ

飲んでからお礼を言おう

「……ありがとう

喉が渴いてて美味しかった……」

あ、私より年上かも知れないのにタメ口で話しちゃった

普通に返事をしたし気にしてないみたい

次から気をつけることにしよう

あれ？イケメンばかりと思ったら美少女もいる

……ただ、その髪の毛はなんだろう？凄く変わってるな

まあ可愛いからありだね

「う……うん！

優、大丈夫？何か変なところはない？」

ん？今、私の名前を言わなかった？

何か変なところって全部わからないんだけどね（笑）

「……えっと……まず……どちら様ですか？」

どうして私の名前を知ってるんです？

それにここはどこですか？ 病院に見えますけど……」

……失敗した？

優しそうな顔をしてる人が固まっちゃったよ

どこかで会ったことがあるのかも知れない……

「もしかして……以前どこかでお会いしました？」

「……優……オレのことがわからないの……？」

やっぱり知ってる人だったのか……

そりやそうか

よく考えたら私の名前を知ってるんだしね

ここは素直に謝るしかない

「すみません……」

「……僕のことわからない？」

うわあ……またイケメンが増えたよ

さつきは見たときには気付かなかったなー

ちよつと目つきが怖い気もするけど……

でも髪の毛が黒くて頭が丸くてかわいい気がする

それに……頭に乗ってる鳥が更に可愛く思うんだよ!!

「……あなたもどこかでお会いしました？」

いや、この人とは絶対会ってないよ

だって忘れるはずないと思う

……この中で1番タイプだから（笑）

「……そう」

あ、鳥さんが私の頭の上に……

人懐っこくて可愛いなー

「……お前……ふざけるのもいい加減にしろよ!!」

「……す、すみません!!」

私……バカで……本当にすみません!!」

どうしよう……もの凄く怒ってる……

人の迷惑にならないように出来るだけ

誰とも関わらないようにしたのが仇となった……

向こうが私のことを覚えてるなんて思わなかった……

「ちやおツス」

へ………?

頭を下げた私の顔の近くに可愛い赤ん坊が居た
ものすごく可愛いな……ぎゅつとしたい……

「……こんにちは？」

んーこの中の誰かの弟さんかな？

この子も覚えてないんだけど……また怒られるね……

「名前と年齢、今日は何日か教えてくれねーか？」

あ、この子とは初めましてだったんだね

「風早優っていうよ？ 年は12歳だよ

日にちは……明日が入学式だから4月4日だよ」

あ、でも寝てたから間違ってるかもしれない

点滴をしてるしここは病院だと思うし……

……間違ってる気がしてきた

だってイケメンさん達がビククリしてる顔をしてるもん

「僕、ちよつと待って！」

間違ってるみたいだからお兄ちゃんに聞いてね」

「わかったぞ

だが、オレは僕じゃねえリボンだぞ」

小さいのにはつきり話して偉いなー

「ごめんね

リボン君、これからよろしくね？」

「ああ よろしくな」

本当に小さいのに偉い

自己紹介を最初から最後まで一人できるなんてビククリだ

「……お前ら、優は今から診察がある

一度部屋から出よう な？」

やっぱりこの外国人のお兄さんは日本語がうまいなー

ってか、今から診察なんだね

知り合いみたいだけど流石にそれは出て行ってほしい

外国人のお兄さんの話を聞いてくれたみたい
すぐに出て行くこうとしてくれるよ

……なんだろう

何か変な気がする……

「どうしたの？」

「へ？」

私の中で1番のイケメンさんがまた声をかけてくれたよ

まあ視線は下を向いてるけどね

どこを見てるんだろ？

「……うわああ！ すみません!!」

私は何をしてるんだよ!?

イケメンさんの服を掴んでしまった!!

最悪だ……また人に迷惑をかけてしまった……

「気にしなくていい」

「ありがとうございます……あ！ ありがとうございます!!

ああ！ 違います!! え……えつと……」

大変だ!! また失敗しちゃった!!

なんでタメ口で話しちゃったの!?

それにこういう時はもうしないって言って謝るべきだよね!?

「嫌じゃない

だからいいんだ」

「はい……／＼／＼」

すごい……イケメンがイケメンだ……

いや、日本語がおかしいのはわかってるよ

でも照れてしまうぐらい優しいと思った……

「診察が終わればまた戻ってくるよ

それまで預かってほしい」

うお！ 鳥さんのことかと思ったら

ハリネズミさんがいつの間にか私の手の中に居た!

イケメンさんは手品が出来るみたいだね

それにしてもハリネズミさんが可愛い……

だって私の手にスリスリするんだもん♪

この子も人懐っこいし私でも少しの間なら大丈夫かもー

あ、2匹ともかも……

だって鳥さんが頭から離れる気配がないもん

「私でよければ……預かりますけど……」

でも私は動物を飼ったことないですよ？」

「遊んであげて」

念のためにもう一度確認したけどいいのか……

「はい わかりました

えっと、この子達の名前……」

その前にイケメンさんの名前も知らないよ

「あの……お兄さんのお名前は？」

「……雲雀恭弥

君が通う並盛中学校で風紀委員長をしてるよ」

へえ

風紀委員長さんなんだね

それは想像できなかつたなー

「では……私の先輩ですね！」

雲雀先輩とお呼びしてもいいですか？」

「……うん」

少し返事が遅かったよね

もしかして先輩って呼ばれ慣れてないのかな？

違うほうが良かったのかも……

「ヒバードとロールだよ」

鳥さんを見ながらヒバードって呼んだね

つまりロールはハリネズミさんだね

「ロールは僕が名付けたけど……」

ヒバードは……なんでもないよ」

……ものすごく気になるんですけど……

まあいいか……

言いたくないみたいだしね

あ、先生が入ってきた

「ヒバリ君！」

私が責任をもって風早優さんの診察をさせてもらいます！」

「院長……頼んだよ」

「はい！」

先生は院長なんだ……

わざわざ院長に診てもらうほど私は悪いのかな？

ってか、その前に雲雀先輩に頭を下げてたけど……

まあいいか

雲雀先輩のお父さんが経営に関わってるとかと思うしね

呪いが解けて 3

ヒバリは病室から出てくるのが遅かったな
恐らく優と何か話したんだろう

……空気が重い

優のさっきの態度にかなりのショックを受けたな……

あいつがオレにあの場にいろと言ったのは

何も知らない優にツナ達を詰め寄せたくなかったからか……

「……優はあの時にこうなるって知ってたの……？」

「恐ろくな」

おしやぶりを外す前の優の態度からして知っていた

優の代理人も知ってるのに話さなかったと言っていたからな

「……オレ達のこと忘れちゃったのか……」

いっばい遊んだりしたのにな……」

「いつか思い出す可能性もあるだろうが！」

「獄寺、多分それは無理だ……」

オレもディーノの意見と一緒にだぞ

優は死なないようにするために記憶を失ったんだ

治療しても一生思い出すことはないだろう……

「……それは京子達との思い出もなのか!？」

京子が風早の記憶がないと知れば……」

「記憶は戻らねーが……」

優は記憶を失うとわかってても

お前達と生きたいと願ったってことだぞ」

運命と割り切って死んでもしようがねーと思っていたのに

優はツナ達と生きたいと願ったんだ

それにもう戻らねーんだ

優や京子達のことを思うならこれからを考えるべきだぞ

「……それでもオレには京子に教えるのは……」

了平は妹思いだからな

このことを伝えるのは辛いだろう

……ここはツナに任せるべきか……

「……私が話す」

私は京子ちゃんとハルちゃんに頼まれた
2人には私から話したい」

クローームも成長したな

「……クローームありがとう」

オレもその時に一緒に居てもいいかな？」

「うん……ボスがいると2人とも安心すると思う……」

「や、やはりオレも一緒に居るぞ!!」

京子達が心配だ!!」

これで京子とハル達のこととは何とかなると思うが……

「学校のこととは僕が何とかする」

ヒバリは自分がやるべきことはわかってるな

学校生活が1番支障が出るからな

「オレももうしばらく英語教師を続けることにする

恭弥を信用してないわけじゃないぜ？

フオローできる大人が近くに居るほうが

優は安心出来ると思ったからだ」

「……好きにすればいいよ」

「オレらはクラスの連中だな!」

「……足引っ張るなよ」

これで環境は少しは良くなるな

後は優自身の問題だな

記憶を失ったことを知れば恐らく自分を責めるだろう

「優には誰が話すつもりなんだ?」

「……診察に問題がなければ明日オレから話すよ

優は頭がいいからすぐ気付くと思うんだ

気付く前にオレから話したほうがいいと思う」

……ヒバリは何も言っただけだったな

やはりわかっているのか……

「ツナ、マフィアのこと話すんだぞ」

「それは話さないほうが……」

優は記憶を失ったからな

もうマファイアと関わってほしくないと思ってるんだな

「優はヴァリアーにも所属してるんだぞ」

「で、でも……」

「それに優のことを思うなら話すべきだぞ

まだ優しか風の波動はいねーからな

風を操る能力も優しかいないんだ

知ってることで危険から回避できることもあるからな」

子どもを産んでも危険なことには変わらねーんだ

おしやぶりが無くなって正体がばれにくくなったとしても

もうヴェントの情報がマファイアに流れてるんだ

風を操る能力を使えるのもヴェントだけだ

普段から気をつけないと使えばすぐに正体がばれるぞ

「……わかった」

後は優に話した後を考えるべきか……

「赤ん坊、1ついいかな？」

「どうしたんだ？ ヒバリ」

ヒバリは話すべきとわかっていると思うが……

「優は覚えてないけど覚えてる」

「……恭弥、どういうことだ？」

「記憶はないけど身体が覚えてるんだ

身の守り方を教えるのは簡単だと思うよ」

ヒバリの話が本当なら優の負担が減るぞ

自然の風を操るのは感覚になると言っていた

教えてもすぐ習得出来るかわからなかったからな

だが、オレは身体が覚えてると気付かなかったが……

「どこで思っただ？」

少しヒバリが嫌そうな顔をしたな

言いたくないのかもしれないねーが

判断するためには嫌でも言ってもらおうぞ

「……君達がいなくなる時に寂しいと思ったのか

無意識に僕の袖を掴んだよ

優は用もなく人に触れることは無いからね

自分の行動に驚いていたよ」

ヒバリには用がなくても触れることがあったのか……

これはヒバリにしかわからねーな

時間があればツナ達も気付くかも知れねーが……

「お前ら良かったじゃねーか

優はお前らのことを全部忘れてねーんだ」

「……う、うん!!」

オレもう一度優に会ってくるよ!!」

ツナに続いて獄寺、山本、クローム、了平も行ったな

「ヒバリは後で行くのか？」

「当たり前だよ

それにまだ赤ん坊と話があるからね」

ヒバリもおかしいと思ってるのか……

ディーノが残ったのも同じだな

「……お前らはどう思っただ？」

「記憶を消す必要があったのかわからない

すり替える方法もあるからね

でも生きるための対価と考えれば少ないと思う」

2年ほどしか忘れてねーからな……

「オレも恭弥の意見と同じだ

優の記憶を消すことで他に払ったことを

気付かれないようにするための可能性が怖い」

確かにその可能性が1番怖い

だが、あいつは優を傷つけることをするとは思えない

「それはないよ

記憶を消したのは優のためだよ」

「恭弥、それはないだろ……

優のことだ……オレ達にずっと罪悪感を持つぜ……

はつきり言うが……優は1番恭弥に持つ」

それはオレも思うぞ

ヒバリがツナに話すことを譲ったのは

優はヒバリに罪悪感しか持たなくなるからとわかってるからだ
元の関係に戻るためにツナに任せようと思っただろう

それだけツナを認めてるといふことだけだな

「……それでも優のためな気がする」

「オレもどうもそう思っちまうんだ

そう考えると気になるのは優がオレ達に話せなかったことだ
あいつはオレ達に知ってはいけないことと言ったことがある
優はそれを知ってたんじゃないのか？

だから誰にも話せない縛りがあった

オレは呪われた日から記憶がないのはそのせいと思ったぞ

確証はねーけどな」

優はもう覚えてねーからな

だからこれ以上このことを考えても意味がねー気がするぞ

「……参考になったよ

ありがとう」

ヒバリはオレに言った後すぐに優のところに向かったな

オレの言いたいことがわかったみたいだな

「……念のために検査はするぜ？」

「ああ そのほうがいいだろう」

呪いが解けて 4

診察が終わったらすぐ誰かが入ってきたよ

さつき会った髪の毛がツンツンしてる優しそうな人だ

あ、後ろにさつき居た人たちも居るよ

でも雲雀先輩は居なさそう

「えっと……どうだった？」

これは診察のことかな？

心配してくれるみたいだねー

あ、気をつけて話さないといけないよ

「一体何があったのかは教えてくれませんでしたがお医者さんの話では健康らしいです

でも様子を見るためにしばらく入院という話でした」

入学する前にこんなことになるとは……

つてか、入院したらお金がやばい気がする

私のために誰もお金を出してくれないよ

あれ？その前に……どこに連絡すればいいの？

育った家とかは覚えてる

でも……住所や電話番号とかがわからない……

並盛中学校に通うために引越したっけ……？

……1人で……？

「本当に大丈夫!？」

「顔が真っ青だよ!!」

……この人達のことを忘れてた……

心配かけてしまったみたい

後で考えることにしよう……

「大丈夫だよ

少し気になることがあったただだよ」

あ、また普通に話してしまったよ

気をつけてようと思ってたのになー

「……すみません

「……すみません

「このような話し方に慣れていなくて……」
「無理しくないよ!!」

オレ達はさっきの方がいいんだ!!」

んー本当っぽい気がする

みんな必死に首を縦に振ってるもん

「ありがとう

実は凄く話しくくて困ってたんだ」

いきなり崩しすぎたかなと思ったけど

みんな嬉しそうな顔したし良かったかもー

「そ、そうだ!」

名前を言ってなかつたね!

オレは沢田綱吉っていうんだ!」

「獄寺隼人だ

……さっきは怒鳴って悪かった」

……怖い人かと思っただけど違ったみたい

気にしてないって感じで必死に首を振れば

安心したような顔をしたもん

「オレは山本武だぜ!」

「私はクローム」

「オレは笹川了平だ!!」

私から聞きにくいと思ってたんだよねー

名前を教えてくださいって凄く助かったよ

「覚えてなくてごめんなさい

えつと……獄寺君と山本君、クロームちゃん……

笹川さん? 笹川君?」

……どれも違和感がある感じがする

「……そうか!」

オレには風早と同じ歳の可愛い妹がいるのだ!

名前は京子と言って風早と絶対仲良くなるぞ!!

だから京子の兄と呼んでいいぞ!」

え……それは失礼じゃ……

「オレもお兄さんって呼んでるよ」

本人は全く気にせず極限にそうだって言ってるし
本当に呼んでもいいみたいだよ

「えっと……じゃあ……京子ちゃんのお兄ちゃん」

……違和感がなかったよ

そう呼ばれて嬉しそうだしこれでいいのか……

後はツンツン頭の優しそうな人だけだね

「……ごめん」

「オ、オレの名前……覚えれなかった……？」

落ち込んだのが凄くわかりやすい……!!

早く誤解を解かなければ!!

「ち、違うからね!!」

下の名前で呼びたいって思ったんだ

でも今まで男の子は呼んだことがないから……」

自分でもどうすればいいのかわからなくて……

獄寺君とや山本君は苗字で呼べたのに……

「オレは……名前で呼んでほしい」

うわ……まっすぐな目をしてる……

私をそんな目で見る人は初めてかもしれない……

本当に呼んでもいいのかなあ……

あ、ロールが私の顔を見て鳴いてるよ

私を応援してくれてるのかも……

「ツ、ツナ君！」

……言っちゃった!!

少し恥ずかしかったけど……

ツナ君が笑ってるから私も嬉しくなるね

「ふふ　なんか楽しいね」

みんな優しそうな人だからかな？

凄く気分がいいかもー

クピッ

「どうしたの？」

ロールが私を見ずに鳴いたよ
ヒバードは私の頭から離れちゃったし……
ダメじゃん!!逃げちゃうよ!!

「待って!!」

慌ててベッドから降りればみんなが声をかけてる
もしかして心配してくれてるのかも……

でもヒバードが逃げちゃったら大変なんだ!!

みんなが部屋に入ってきてきてドアが開いてるし……

「うわっ!」

病室から出ようとしたら目の前に人がいた!

もう少しでぶつかるところだった……

「す、すみません!!」

「僕は大丈夫だよ

それより……どうしたの?」

……この声は

「雲雀先輩!

そのヒバードが……」

あ、雲雀先輩の頭の上に居た……

ご主人様が戻ってきたから飛んでいったのか……

あれ?雲雀先輩に腕を捕まえられて引つ張られてるよ

ベッドの前で離されたし寝ろってことかも……

「……君達は何をしたの?」

「す、すみません!! ヒバリさん!!」

「ツナ君達は悪くないです!!」

私が目を離れたせいで……すみません……」

私がちやんと面倒見てなかったから悪いんだし……

……ん?なんか静かになった気が……

「……かわってねー」

何が?獄寺君がつぶやいたけどよくわからないね

「はぁ……君達は出て行きなよ

君達がいれば優は安静に出来ない」

「ああ!？」

「それはねーんじゃねーか？ ヒバリ」

「そうだぞ！」

オレ達は風早の見舞いに來てるのだ!!

極限に命令される筋合いはない!!」

だ、大丈夫かな……

急に空気が悪くなった気がするけど……

「君達がすっかりみてなかったせいだ

もしこれが外れたらどうするつもりだったの？」

これって何だろう？あ、点滴か……

いや、流石に点滴してるのは忘れないよ

追いかける時にすっかり持ってたし……

「……も、元々はテメーの鳥のせいだろうが!!」

ど、どうしよう……

凄い空気が悪くなった!!

「獄寺君、落ち着いて

みんなも今日は帰ろう

優、明日また絶対來るね!!」

「へ？ あ、うん」

凄い……ツナ君のおかげで空気が良くなったよ

「だけだよ ツナ」

「みんな今日は帰ろう」

「……わかりました

おい 行くぞ 10代目が言ってるんだ」

「極限になぜなのだー!!」

うわ……獄寺君が京子ちゃんのお兄ちゃんを

引っ張って出て行つたよ……

大丈夫かなあ……

「……またね」

うわー!!なんて可愛い子なんだ!!

ちよつとほつぺたが赤くて言うなんて!!

「クロームちゃん！ またね!!」

「うん！」

やばい……

今のは可愛すぎるよ……

明日また優に会いに来よう

「獄寺君、ありがとう」

「気にしないでください」

「極限なぜなのだ!! 沢田!!」

お兄さん……やっぱり怒ってる……

「記憶喪失の話聞けば……」

優とヒバリさんは元の関係に戻れないかもしれない……」

優は絶対気にすると思うんだ……

特にヒバリさんに対して……

「明日……話すってオレが決めちやったから……」

今日は2人にしてあげたほうがいいかなって……」

「……………」

みんな何も言わない……

やっぱり優はヒバリさんのことを気にすると思っただ……

「ヒバリさんは気にしてほしくないと思ってるはず……」

だから2人が普通に話せたということが必要な気がして……」

それにオレ達がヒバリさんは気にしてないって

言えば言うほど優は気にしちゃうと思うんだ……

2人のことには手を出せない……

「ヒ、ヒバリー……!!」

「バカ!! どこ行くつもりだよ!!」

よ、良かった……

急にお兄さんが叫んで走りそうだったのを

獄寺君と山本が止めてくれたよ……

「先輩、落ち着いてください!!」

「は、離せ!!」

風早は何も悪くないが……

このままではヒバリが辛くなるかもしれないのだぞ!!」

「だから今、2人にさせたんだろうが!!」

「そうだが……そうだが……納得いかーん!!」

オレにも何か出来ることがあるはずだぞ!!」

オレも……納得できない……

もし2人がこのことで別れることになるったら……

獄寺君と山本も絶対納得しないよ……

だから優とまだ話したかったけど譲ったんだ……

「……ヒバリさんを信じましょう

オレはそれしか思いつきません……」

呪いが解けて 5

急にみんなが帰っちゃって寂しかったけど
明日も来てくれるって言ってたよね？

凄いうれしいなー

でも何でここまで嬉しいんだろう？

まあいいか……悪いことじゃないしね

あ、困ったことがあったんだ……

「あ、あの……」

「どうしたの？」

「雲雀先輩は院長先生とお知り合いなんですよね？」

さつき話をしていましたし……」

「……院長に何かあるの？」

「今日、初めて会った雲雀先輩に頼むのは

ものすごく心苦しいんですが……

どうしても院長先生と交渉したいんです……

出来れば雲雀先輩の力を貸していただけませんか……」

……本当に失礼だね

でも雲雀先輩は優しそうだし

事情を話せば助けてくれそうと思って……

「交渉？」

「……はい

入院費を払えるお金がなくて……

あ!! ちゃんと働いて返しますよ!!」

まあまだ働ける年齢じゃないから……

出来るまでは病院の掃除でも何でもするって言おう!!

「……お金はあったはずだけど……」

「へ？」

「……心配しないでいいよ

入院費はもう払ってるからね」

え？ 誰が払ってくれたの？

私のためにお金を使ってくれる人なんていたっけ？

「あー、もしかして私って事故だったんですか？

相手の方が払ってくれたんですねー」

いやー助かった

お金がないのにどうすればいいかと思ったよ

えーと……次の問題は……

「優、今は難しいことを考えなくていい」

「え……でも……」

「今日は身体を休めよう わかった？」

「……はい」

あ……優しい顔だ……

初対面の私にここまで優しいんだ

雲雀先輩はかなりもてるんだろうなー

そういえば雲雀先輩って何でここにいるんだろう？

ツナ君達は知り合いみたいだったけど……

雲雀先輩は違うよね？

絶対あつてないって断言できるしー

名前を知ってるのはツナ君と院長先生が言ったからだと思う

んー風紀委員の仕事なのかな？

入学してすぐ入院した人がいるから診に来たとか？

「雲雀先輩は風紀委員のお仕事で来たんですか？

もしそうだったら……」

謝ろうとしたけど雲雀先輩が悲しそうに見えた……

いや、表情はあんまり変わってないんだけどね

ただ……謝っちゃいけない気がした……

「ひ、雲雀先輩!! 学校ってどんな感じですか？」

慌てて話題を変えたけど……大丈夫かな……

「……僕の1番好きな場所だよ

だから退院すれば僕が学校を案内するよ」

「え？ いいんですか？」

「僕が案内するって約束したからね」

「はい！ 約束ですね!!」

うわー凄いラッキーだ!!

こんなカッコイイ人に案内してもらえるなんて……!

あ、ロールとヒバードも嬉しそうだ♪

ん？ちよつと待った……

「あの……雲雀先輩って彼女はいませんか？」

「……どうして聞いたの？」

「もしいれば案内してもらうのはダメだなーつと……」

そして私が残念と思う（笑）

「それは心配しなくていいよ」

……誤魔化された気がする

彼女はいるけど私が心配する必要はない

いないから心配する必要はない

どっちにも取れるよ!!

でもカッコよくて優しいし……いるんだろうなー

……何だろう

すごく泣きたい気分だ……

「どうしたの？」

「ひゃあ！／／／」

ビ、ビックリした……

つい変な声を出しちゃったよ……

でもしようがないと思う

うつむいた私に雲雀先輩が覗き込んだもん／／／

近くてすごい心臓がドキドキしちゃったよ……／／／

「退院すれば僕がいろんな場所に連れて行ってあげるよ」

「え!? それは……2人で……?／／／」

いやいやいや、自分で言ったけどそれはないよ

雲雀先輩は社交辞令で言ってくれただけだよ

もし出かけても2人でなんて絶対ありえないよねー

「当たり前だよ」

……当たり前／／／

これって少し期待してもいいのかな……？
はっ!!雲雀先輩は誰に対してもそうなんだよ!!
危ない危ない

勘違いして1人で舞い上がりそうだった

「……気持ちだけ受け取りますね

学校の案内をしてもらえるだけで充分です」

「いやだ」

「……ん？今、いやだって言ったよね？

幻聴かも知れない……

「一緒に出かけるからね」

幻聴じゃなかったよ

強制みたいな口調で言ったしね

雲雀先輩は優しいだけじゃなく面倒見もいいみたい

あ、面倒見がいいから優しいのか……

「では……楽しみにしますね

今の季節だと桜が綺麗ですし

外に出るだけで楽しめそうですねー」

遠まわしに近場で大丈夫って言ったのがわかったかな？

流石に遠出するのは雲雀先輩に悪いと思うしね

「……桜……好きなの？」

「へ？ あ、はい」

「嫌な思い出はないの？」

「ありませんけど……」

ん？雲雀先輩が考え込んでる様子だったよ

いや、考え込んでるように感じるが正しいね

さつきと同じで表情は一緒に見えるもん

うーん……桜を思い浮かべてみよう

桜……サクラ……さくら……

「……ごめんなさい」

どうして謝ったんだろう……

でも謝らないといけない気がした

「……優のせいじゃない」

だから謝らなくていい」

雲雀先輩は私が謝ったことに心当たりあるのかな？

……私ってバカだね

雲雀先輩は桜の景色がいいところを考えてくれてて

私が謝ったから気を使わなくていいって言うてくれたんだ

それに比べ私はなんて気がきないんだろう……

「あまり……気を使わないでくださいね

私は返せるものがないですし……」

こういうと時にお金があつたらなーって思う

お金が全てじゃないけどお礼に何か渡したりも出来ないもん

「……ほしいものがある

それは君にしか出来ないことなんだ」

「へ？ あ、はい！

なんですか？」

ここまで優しくしてくれたんだしー

私に出来ることなら頑張るよ

「君をどこかへ連れて行った礼として

僕はまた君をどこかへ連れて行く機会がほしい」

「ええ!？」

それって私にしか得がないですよ!?

それに……この町のことがよくわからないですし……」

案内とか全く出来ないよ

……自分の家もわからないのに……

「僕が案内するから心配しなくていい」

……それは礼にならないよ

雲雀先輩がいるのにいろいろ考えそうになっただけど

一瞬で吹き飛んでしまった……

「もう決めたからね

約束だよ」

「……わかりました」

うわー……笑った……／／／
凄くラッキーな気分になった

それにしても雲雀先輩は本当に面倒見がいいなー
……少し眠くなってきた

いっぱい寝た気がするのになー

まあ雲雀先輩が帰るまで頑張って起きよう

「少し疲れてるみたいだね

僕がそばについているから安心して休みなよ」

うわ……雲雀先輩は強制的なところがあるね
寝転ぶように肩を押ししたりするし……

だからしぶしぶ寝転んだけど……

何か抱くものがないと熟睡できないんだよねー
ってか、よく眠たいって気付いたね

クピツ♪

……なんて可愛いんだ!!

ロールが私の布団に入ってふつついてきた!!

おお……ヒバードがまた私の頭の上に……!

「優と一緒に寝たいんだよ

危なくなったら逃げるから心配しなくていい
だから一緒に眠ってあげてほしい」

「……雲雀先輩は……?」

……何聞いてるんだ……私!?

これはヤバイ

雲雀先輩の面倒見の良さに甘えなくなる

うわー……また笑った……／／／

「起きた時に必ず近くにいるよ」

……今日1日ぐらい甘えてもいいか……

雲雀先輩は許してくれそうだし……

「……本当にありがとう

おやすみなさい」

「おやすみ」

雲雀先輩のおやすみを聞いて
すごく安心しちゃって意識がもたなかった……

記憶 1

……どこにいるかと思ったら病院の屋上かよ

まっ ぜってえ優の近くにいたとは予想はついたけどな

「よっ ちよつと待て!! 恭弥!!」

オレを見るなりトンファーを出すなよ!?

「……気が乗らない」

……気が乗れば咬み殺す気だったのかよ

ま……こいつが気が乗らない理由はわかるけどな……

今、ちよつとツナが優に話してるからな……

「これからどうするつもりなんだ?」

「……簡単だよ」

また捕まえればいい」

……少し嬉しそうに言ってるねーか?

まじかよ……この状況も楽しんでるぜ……

でも恭弥だからなー

「……そういえば気になることがあったよ」

……珍しいな

恭弥からオレにそういうことを話すのは……

普段はリポーンに話してその後オレに伝わるんだが……

それほど重要なことなのか?

「なんだ?」

「入院費を払うお金がないって言ったんだ

でも優は貯金がかなりあるよ

確か……1億近くね」

「なっ!?!」

1億なんて大金をどうやって優が……

オレは優の両親の遺産で使ってる生活してると思ってたが……

普通の家庭ではそこまでの金額はないだろ!?

「調べなかったのか!?!」

「優を引き取った人がお金を持っていた

あの家もその人が買っていたよ
特に変なところはなかった

ただ名前と顔を覚えてたはずなのに思い出せない」

「つまり……恭弥の記憶も……」

消えてるってことなのか!?

「……同じ人だったんだ

僕ももう優の師匠の顔を思い出せないからね」

「……っ!?!」

恭弥に言われて気付いた……

どんな奴だったか全く思い出せない……

「やっぱり君も思い出せないんだね」

「……ああ」

恭弥はオレの反応を見るために話したのか……

自分だけが消されたのか判断するために……

「優は師匠に出会って次に話したのが僕と言った

僕と初めて会ったのは4月4日の夕方4時すぎだよ」

優が目覚めたのは夕方の4時……

「優は知ってはいけないことを知ったから

記憶が消えたんじゃないのか……?」

あいつのことを忘れるためになのか……?」

「それはどうでもいい」

どうでも良くないだろ!?

「優は多分……自分の家すら覚えていない」

「……わかった」

ツナがすぐ話すと決めたのは正解だったぜ……

優はもう違和感を感じてるはずだからな

……風が強くなってきた

頼むぜ ツナ

今までであったことを優に話したけど……

優はいつも通りで変わらない

違う……いつも通りにしようとする無理してる……

「……そっか ツナ君ゴメンね？」

私……みんな忘れちゃったみたいで……」

オレは謝ってほしいわけじゃない……

でもそれを伝えても優は自分を責める気がする……

「私が記憶がなくなってもみんなビックリしたよねー

獄寺君が怒ったのも当然だよねー

私……全然気付かなかったよ」

「……オレ、前に優に言っただけ後悔してる……ことがあるんだ」

「へ？ 私は覚えてないし気にしなくていいよ？」

それにツナ君が言わなかったら問題がないんだしー」

そりゃ、オレが言わなかったら

優は忘れてるからいいかもしれないけど……

「ううん 知ってほしいんだ

オレ、1番初めに会った時に……

優に笑ったほうがいいって言ったんだ」

「……ごめんなさい……」

「違うよ!! そういう意味じゃないから!!

えっと……オレは優の笑った顔が好きで……

ずっと見たいと思っただんだ!!

でも……辛い時も笑ってるんだ……

「優はオレに弱音を滅多に吐かなかったんだ……

オレが言ったからかと思って……」

オレは優が泣いた姿を数回しか見ていない

……オレの知らないところで何回泣いたんだろう……

今だってオレが話した内容を「そっか」で済ましたんだ

自分のことではいいのはずなのにオレに気を使って謝った

優はいつも自分を後回しにする……

「オレはダメツナだし頼りにならないかもしれない
いつも優に助けてもらった記憶ばかりだよ
話を聞いてもたいしたアドバイスが出来ないと思う
それでも……話してほしい!!
自分を押し殺して無理に笑ってほしくないんだ!!
オレは優の笑った顔が好きだから!!」
言ってることが滅茶苦茶だと思う……
でもこれがオレの気持ちなんだ!!

「……わかった

正直……自分でもよくわかってないんだ……
話が飛躍してて……処理が追いついていない……
あまりにも現実離れしてるからね
だから話が全部ウソかなって思ったりしたんだ」

……そうだよな

いくら優が頭が良くても何も覚えてないんだ
オレの話が本当かもわからないし
信じてても全部理解できるわけないよな……

「実はツナ君が出してくれた炎も見て

私もさつきから試してるんだけどね……

全然……出ないんだ……」

「え!？」

炎を出せないの!？」

身体は覚えてるから大丈夫と思っていたのに……

「覚悟を炎だった……?」

何を覚悟すればいいかわからないから出ないのかなー

……おかしいでしょ?

出ないのにツナ君の話を信じちやつてる

自分が変なのかなって思ったりもするんだ……」

「優……」

「わからない……」

何が本当なのか……よくわからない……

私って何なの……?」

……優が泣きながら言った

オレは何も言葉が出なかった

……話すのが早かった?

それとも一度に話しすぎた……?」

「バカツナ!」

「いでっ!」

いってえー!!

今の蹴りは絶対……

「リボーン!!」

一体どこにいたんだ?

「ツナ お前が話せて言ったんだぞ

何を迷ってるんだ?」

……そうだ!

オレが話してほしって言ったのに……

「……全部わからなくていいんだ!!」

少しずつわかっていこう!!

オレが……オレ達がついている!!」

「オレ達って……?」

「みんなだよ

昨日会ったみんなだけじゃないよ

他にもいっぱいいるんだ

女子はまだクロームしか会ってないと思うけど

京子ちゃんやハルだっているし……」

「私……覚えてないんだよ……?」

「大丈夫だよ

優のことを昨日話したんだ

じゃあ……また思い出を作ったらいいって……

一緒にどこに行くか相談してたよ」

オレ達が思ってたより強かった……

黒川花には京子ちゃんから話すって

オレの目をみてはつきり言っただし……

「ちよつと話が大きくなりすぎて

旅行に行きそうなくらいだったよ

でも多分いつか行くことになると思うよ」

その話を聞いたディーノさんがやる気だったし……

「……楽しみにしてもいいのかな……？」

「もちろんだよ!!」

みんなに伝えるよ!!

それに絶対ヒバリさんも助けてくれるよ」

オレらはいらないって言われたりして……

ヒバリさんだったらありえそう……

「……うん……ありがとう

みんなとこれから頑張ればいいと思ったら少し落ち着いたよ

それに優しかった雲雀先輩もいるから安心できたかも」

「え、えーつと……」

これははつきり言っただいなのかな……

ヒバリさんは優以外にもは優しくないって……

優はまだ気付いてないと思うし……

でも優が本当のヒバリさんを知って怖がったり……

「ヒバリは優にしか優しくねーぞ」

はつきり言っただい!!

「へ？ リボン君、間違えてない？」

雲雀先輩……雲雀恭弥先輩のことだよ？」

「間違っただいぞ

ヒバリは強い奴と戦うのが好きで

群れるのが嫌いで1人を好む

そして学校の風紀を守るのに命をかけてるぞ

風紀を乱したり群れていると

ぜってえヒバリにボコボコにされるんだぞ

ツナも何度も被害にあっただい」

優がビツクリした顔をしてオレを見た……

もう話すしかないよな……

「えつと……実はそうなんだ……」

優にはいつも優しかったんだ……

だから何度か優に助けてもらったことがあるんだ……」

自分で言つてて情けねー……

「……どうして私には優しかったの？」

「そ、それは……」

……はつきり言わなきゃダメだ！

「優、落ち着いて聞いてね」

「うん？」

「優はヒバリさんと付き合ってるんだ」

優が息を呑んだのがわかった……

記憶 2

正直、変だなって思ってたから

記憶喪失って聞いてもそこまでビックリしなかった

ただマフィアとかはわけわからないけどね

だって……私って誰かを殴ったこともないのに……

暗殺部隊に入ってるとか言うし……

まあ新人のスカウトにしか任務についたぐらいらしいけど……

いろいろわからないけど

ツナ君が言ったとおり少しずつわかればいいと思う

みんなが助けてくれるって言うし安心した

ただ……ツナ君が言ってることが理解できないことがある

私と雲雀先輩が付き合ってる……？

「……ぷっ あはは!!」

「ゆ、優……?」

「それはないでしょ!!」

絶対ウソでしょ?」

「ウソじゃないよ 本当のことだよ」

「ウソでしょ……お願いだからウソって言って……」

「……優……」

お願いだから笑ってウソって言って……

なんで真っ直ぐな目で私を見るの……

「私……ひどいこといっぱい言った……」

覚えてないって言っても許されないよ……」

初対面とか……仕事で来たとか……彼女はいるのかとか……

雲雀先輩にひどいことばかり言った……

一体……私は雲雀先輩をどれぐらい傷つけたの……?

「……ごめん」

今日はもう帰ってほしい」

何も考えたくない……

もう……ヤダ……私……最低だ

「今の優を1人に出来ない」

イヤだイヤだって首を横に振っても

ツナ君とリボン君が帰ってくれる気配はない
お願いだから1人にしてよ……

「優……落ち着いて……」

「無理だよ!!」

私……凄くひどいこと言っただよ!!

どうして雲雀先輩は何も言わなかったの!!

知ってたら……そんなひどいこと言わなかった!!」

……本当はわかってる

雲雀先輩が私のために言わなかったんだって……

怒らなかつたのも……

辛いのに態度に出さず優しくしてくれたのは……

全部……私のためだ……

「……ごめんなさい……ごめんなさい……」

ごめんなさい……ごめんなさい……——」

……誰に何度も謝ってるんだろう……?」

雲雀先輩に……?わからない……

ツナ君が何か言ってるけど聞こえない……

ただ、この言葉をつぶやき続けたい……

……優が謝り続ける

さつきからオレの言葉が届いてない……

パリッ

「えっ?」

何の音だ?……窓が割れた!?

「やべえな

風が暴走してるぞ」

「ええ!? 優が風を操って窓が割れちゃったの!」

でも、優はさつきと同じで謝り続けてるけど……

「ちげえぞ 雲のリング争奪戦の時に一度見ただろ? 風が優を守ろうとしてんだ」

あの時はかなりやばかったからな」

そういえば……見たことがある……

未来に行った時も優は危なくなっただけど

あの時は風を操れなくなっただけで優が言ってたし……

「それじゃあ……やっぱり今の優はかなり危険なの!」

「ああ」

どうすればいい……どうすれば優はオレの話を……

キュアア!!

今、優のボンゴレリングから炎が……

優はさつき出ないって言ってたはずなのに……

「え?」

……どこだ? オレはどこにいるんだ?

さつきまで病院にいたはずなのに……

「優? リボン?」

本当にここはどこだ?

真っ白な場所で何も無い

ボンゴレの証を受け取った場所に似ている

でも少し違う気がするんだ

『ごんにちは』

「え? だ、誰?」

誰もいないよな……?

どこから声が聞こえてるんだ?

『あなたの後ろよ』

後ろ……?

「優!? ……すみません!!」

知らない人だよ!!

どうしてオレは優と間違ったの!?

髪も目の色も年も全然違うのにー!!
『別にいいわよ』

それより優を救いたいんでしょ?』

「は、はい!!」

……なんで優のことを知ってるんだ?

『ふふ あなたは顔に出やすいわね』

何を考えてるかすぐわかるわ』

ガーン……初対面の人に笑われた……

『ごめんなさい 悪気はなかったのよ』

「え!? き、気にしないでください!!」

オレってそんなに顔に出てるのー!!?

また笑われた……

「あ、あのー! オレ、優を救いたいんです!!」

何か方法を知っているんですか!？」

『……あそこで泣いてる小さい子がいるでしょ?』

「え?」

……いつからいたんだろう

全然……気付かなかった……

ランボと同じぐらいかな?

『あの子を慰めてくれないかしら?』

「ええ!？」

それって優を救うことに関係あるの!？」

「オレは優を……いない……」

全然わかんねー!!

「うわーん!!」

……優を救いたいけど……

泣いてるあの子を放置するのは……

それにここはどこかわからないし……

「……大丈夫? うわっ!？」

声をかければ急に抱きついてきたからビックリした……
いつもランボをだっこするように

「この子もだっこしたけど泣き止む気配がないよな……
「えつと……どうして泣いてるのかな？」

「……私……悪い子なの……」

「大好きな人を傷つけたの……」

「私はやっぱり産まれちゃいけなかったんだ……」

「……何言ってるんだよ!!」

「産まれちゃいけないなんて言うなよ!!」

「……やっちゃった」

「どうしよー!!小さな子を怒っちゃったー!!」

「それも泣いていたのにー!!」

「恐る恐る見たらきよとんとした顔でオレを見ていた」

「知らない間に泣き止んでるし……」

「……パパとママがいららなくて私をポイしたんだよ？」

「だから私はいららない子じゃないの?」

「違うよ!!」

「えーつと……パパとママは何か事情があったんだよ」

「……何も知らないのに言っちゃったー!!」

「でもこのままにするわけにはいかなかったし……」

「事情?」

「いろいろ事情があつて」

「オレもずっと父さんがいないと思っていたんだ」

「……あれは父さんが悪い気がする」

「母さんも母さんだけ……」

「だから君のところも何か事情があるんだよ」

「……いらない子じゃない?」

「うん」

「でも……大好き人を傷つけたの……」

「話せばわかってくれるよ」

「君の大好きな人なんだろう?」

「相手も君の事を大切にしてるよ」

「……ありがとう」

もう一度、話してみるよ!!

お兄さんの名前は？」

「え？ オレ？ 沢田綱吉だよ

君の名前は？」

「ツナ君ね、私は優！」

優……？

そういえばこの子……幼くなった優にも見える……

それに優は両親がいないって言ってた……

「ツナ君のおかげで思い出した!!」

パパとママがね

優しい子に育ってほしいって名前をつけたんだ!!!」

「そうなの!？」

「うん

難しくて失敗しちゃったけど……頑張るってみるね！」

……もしかして大好き人ってヒバリさんのこと？

だったら……オレは……

「また仲良くなれるようにオレも手伝うよ」

「ありがとうー」

優は元気になったよな？

幼いのはかわらないけど……

優が幼いのは優が1番不安定だったのは

この年ぐらいだったからかもしれない

「優、帰り方わかる？」

ここは……多分優の精神世界だ

そしてリングの力でオレはここに來れたんだ

リングに刻まれた時間のおかげで

さっきの人が優を救うためにオレを連れてきてくれたんだ

「……わかんない」

優が知ってると思ったんだけどなー……

「……やれやれ

こんなところで君と会うとは……沢田綱吉」

この声……

「骸!? どうして!?!」

「彼女に借りを作り来たのですよ」

「……骸……お前……」

優が心配で見に来たんだ……!!

少し相性がいいって優が言ってたし……

「あー!! パイナップルだ!」

優が骸の髪をさして言ってるよな……?」

「……帰ります」

「む、骸!! ちょっと待って!!」

結局……なんとかお願いして骸に帰り道を教えてもらった

優しくない優しさ

……あれ？寝てた？

んーものすごく変な夢を見た気がする
でも凄くすつきりしたよ

あ、寝たからか……

「優!!」

「へ？」

「良かったー……」

よくわからないけどツナ君に心配かけたみたい
ものすごく安心してるとん

「えつと……ごめんね？」

「気にしなくていいよ

オレは優が大丈夫ならいいんだ」

ツナ君ってかなり優しいね

ってか、私は何かしたの？

えーつと……ツナ君の話を聞いてたはずだよね？

その途中で寝ちやっただ!

うわー……それは最悪だ

「その……ヒバリさんのこと覚えてる？」

……思い出した

私……雲雀先輩にひどいことしたんだ……

「……うん

雲雀先輩をいっぱい傷つけた……謝らないと……」

「大丈夫だよ

ヒバリさんは優の気持ちをわかってるよ」

「……ありがとう

頑張ってみるね」

会うのが怖いけど……会いたい

「そもそもヒバリは弱くねーんだ

優が気にしてることはあいつにはたいしたことがねーぞ」

リボーン君、それはないでしょ……
かなりひどいこと言ったのに……

「……そうかも」

気にすればその場で言うと思うし……」

……ツナ君まで言っちゃったよ!?

「ヒバリは優が気にして会わないと決めた方が怒るぞ

まあヒバリが優を逃がすとは思えねーが……」

「……優、頑張っ」

え……なんかおかしくない?

ツナ君にちよつと同情された目で見られた気がする……

ブルツ

……鳥肌がたつただけ……

「だ、大丈夫!」

窓が割れて寒いよね!」

本当だ……窓が割れてるよ

いったいいつの間に……

あ、鳥肌は寒くてたつたのか……安心したよ

「ずっと眠ってた優の身体にはこのままはきついな

部屋をかえるべきだぞ」

「本当だ!!」

オレ話してくるよ!!」

ツナ君はやい……

お礼を言う間もなく行っちゃったよ

あ、リボーン君が上着を取ってくれた

寒いから着ろってことだよねー

「リボーン君ありがとう」

「優」

「どうしたの?」

あ、リボーン君って殺し屋じゃなかった?

子どもに向けて話すような口調を使っちゃったよ

「……すみません」

「オレはそのままの方がいいぞ

それより、優はヒバリが笑ったところを見たか？」

「へ？ あ、うん」

ものすごくドキドキしたよねー

記憶があるときもドキドキしたのかなー？

「じゃ、ぜってえ気にする必要がねーぞ

ヒバリは優の前でしか笑わねーからな

優と話せて楽しかったってことだぞ」

「……本当なの？」

「ああ」

そうだったんだ……

雲雀先輩……少しは楽しんでくれてたんだ……

「あ！ 桜に何か心当たりない？」

雲雀先輩が考えてた気がするし……

私もよくわかんないけど謝っちやったんだ」

「ヒバリは何か言ったのか？」

「謝ったら私のせいじゃないって……」

今思うと気をつかっているとかは違う気がするんだよね

抜けた記憶の中で何かあったんだと思う

「桜でヒバリは悔しい思いをしたことがあるんだ

守ったつもりが守られちゃったからな

だからヒバリはあまり桜が好きじゃねーんだ

だが、優が桜を見たいって言えば行くかもしれないねえぞ

あの時よりヒバリは強くなったからな」

うーん……どうということだろう

具体的に話してくれなかったのは私のためなのかな？

「わかった

あんまり気にしないようにするよ」

「ああ」

……今何時だろう？

外が暗いし夜なのはわかった

ツナ君が頼みに行ってくれてから

部屋を用意してて移動したらまた寝ちやっただよね

ツナ君とリボン君には悪いことしちやっただよねー

ってか、最近寝すぎな気がする

何でここまで眠いんだろう？

んーツナ君の話によると特殊能力だったわけ？

その影響で眠ることはよくあつたらしいけど……

今は使っていないのと思うし……

まあいいか

病院だしゆつくり休める場所だしね

「おはよう」

「へ？ 雲雀先輩!？」

いつから居たの……？

どうしよう……心の準備が出来てない……

ツナ君に付き合ってもらって一緒に会おうと思ってたのに……

とにかく謝らないと!!

「あ……あの……」

グギョルルルー

……泣いてもいい？

どうしてこのタイミングでお腹が鳴るんだよ

点滴していれば栄養があるし空腹にはならないはずなのに……

どれだけ私は食い意地をはってるんだ(泣)

「何か食べようか

優がよく眠くなる影響かもしれない」

……助かった

私の食い意地がひどいとは思ってなさそう

「少し待ってて」

「あ、はい」

……しまったー!!

雲雀先輩が行っちゃったよ

謝ろうと思っていたのに……!!

しょうがないから大人しく待とう

私はこの病院のことをよく分かってないからね

へたに動かないほうがいい

……雲雀先輩はいつ寝てるんだろう

この前も私が起きた時にそばに居てくれたよね

もしかしてソファで寝てるのか……？

本当にそうかもしれない……

……どうしてそこまで優しくするんだろう

私は記憶がなくなってるんだよ

多分、私は雲雀先輩が知ってる私じゃないよ

一緒にいればいるほど違いがわかると思う

友達では許せる範囲かもしれないけど

恋人と考えれば無理な気がする

もう雲雀先輩と会わないほうがいいんじゃない……

ダメだ……

全部悪い方向に決め付けてしまう

ツナ君が少しずつ頑張ればいって

言ってくれたばっかりなのに……

「優」

「……雲雀先輩」

思っていたより長い間考えていたみたい

雲雀先輩が何か持って帰ってきたよ

「おかゆにしたよ」

胃にやさしいものを持ってきてくれたんだ……

「……ありがとう」

「熱いから気をつけてよ」

……熱いのはわかった

でもなんで雲雀先輩が食べさせようとしてるの？

「自分で食べれる」

「へ？」

今、疑問系じゃなかったよね

私に質問した感じじゃなかった気がする

「優が思ってること……だよね？」

なんでばれた!?

ばれてるのに食べさせようとするし……

「はやく食べなよ」

「……し、失礼します／＼／」

恥ずかしすぎるけど……

「美味しい……ひっ……く……」

理由はわからないけど涙が出る

泣いてるのに雲雀先輩は食べさせようとする

時々、雲雀先輩が涙をティッシュで拭いてくれたけど

グズグズ言いながら食べるなんてすごく汚いと思う

でも雲雀先輩は何も言わなかった……

「……ありがとう」

美味しかったです……」

「僕は優しくない」

いきなりどうしたんだろう……

「優は僕が優しい人と思ってるかもしれないけど

本当に優のことを思うなら僕はいないほうがいい

でもそれは僕がいやだ

だから優が僕に悪いと思わなくていいんだ」

「違います!!」

私が記憶を失ったのが元々の原因なんです!」

だから……全部私が悪い……

「あれは回避できるとは思えない

だから僕が悪い

僕が近づかなければ優は傷つくことはないからね

……優が僕の顔を見たくないといえれば近づかないよ」

「それは嫌です！ あ……」

即答してしまった……

私のせいで雲雀先輩が傷つくとわかってるのに

会いたい気持ちの方が強いんだ……

覚えてる中ではまだ1日も会ってないのに……

「手 貸しなよ」

「あ、はい」

って、なんで当たり前のように手を出してるんだろう

ん？私の指に何かつけようとしてない？

うわーきれい……

「ええええ!?!」

綺麗だなーって見とれてる場合じゃない……

これって指輪だよ!?

それはつけちゃダメだよ!!

「優から預かっていたんだ」

あ、なるほど

これは私が持っていた指輪だったのか……

右手の薬指につけようとするから焦ったよ

それならつけてもらってもいいか……

「これは優の誕生日に僕があげた指輪だよ」

ダメじゃん!!

慌てて手を引っ込めようとしたけど

雲雀先輩が私の手を掴んでる力の方が強い

「僕のが嫌いになった時に外せばいい」

ヴェントで行動する時は無効にするから安心していいよ」

いやいやいや、そういう問題じゃない

今すぐ返さない……

「僕のが嫌いになった？」

……外せない!!

これはずるい……

もう簡単にこれを外すことが出来ない!!

「雲雀先輩は優しくないとわかりました……」

優しくないって言ったのに雲雀先輩が笑ったよ

「僕はほしいものは必ず手に入れるんだ

必ず……ね」

雲雀先輩が私を見ながら言ったよ……／／／

顔が……熱い……／／

雲雀先輩を直視できないよ……!

慌てて下を向いて思った

雲雀先輩がずるいことをしてくれたおかげで

私は罪悪感が凄く減った気がする……

やっぱり雲雀先輩は優しい……

それから……

うーん……忘れ物はないかな？

やっぱりもう一度確認しよう

「もう行くよ」

「え!? ちょっと待ってください!!」

「また取りに来てもいいし買える物なら買えばいい」

……それもそうだね

ちよつと浮かれすぎたかもしれない

そんな簡単な答えが出てこなかったからねー

あ、雲雀先輩がもう外に出ちゃった

急いで行かないと……

「お待たせしましたー♪」

「おいで」

あ、ヘルメットね

つてか、どうして自分でつけちゃダメなんだろう？

「浮かれすぎて落ちないですよ」

……そこまで浮かれないよ

ちゃんと雲雀先輩の服に捕まります

それに落ちたとしても風が守ってくれるから

そこまで心配する必要はないと思う

「わかった?」

「わかってますー」

本当に雲雀先輩は心配性だよねー

きやー!

やっぱり浮かれすぎかもしれない!!

普段なら絶対しないのに走り回ってしまったよ！

「きれい!! 本当に凄くきれいです!!」

それもこんな特等席で見れるなんて最高です!!

雲雀先輩ありがとうございます!!」

わざわざ貸切にするために手を回してくれたんだもん

「優のためじゃない

僕がいやだったからだよ」

あ、群れる人を見るのが嫌だっただけか……

「それでもありがとうございます!」

うわー笑った……／／

あ! 写真を撮らないと!!

チラッ

「撮ってあげるよ」

「ありがとうございます」

……本当は違うんだけどね

まあ自分の写真も撮りたかったからいいけど……

……落ち込むのは後にしよう!

雲雀先輩と出かけてるんだし!!

カシヤ

「はい」

「……もう撮ったんですか?」

「うん」

……撮る時は言ってほしい

まあ雲雀先輩が写真を撮ってくれただけいいか……

んービニールシートを敷いて座ろうかな?

静かに座って見たい

歩き回るのは食後にしよう

「座ろうか」

あ、雲雀先輩も同じ事を思ったみたい

「そうですね すぐ用意しますね」

パパッとビニールシートをひいた

ご飯は食べたくなったら言うと思うから出さなかったけど
あつたかいお茶入れてを雲雀先輩に渡してみた
受け取ってくれたから飲むみたい
ズズ……

あーあつたかくて美味しい

……なんでほっこりしてるだよ

いや、ほっこりするのはいいことだよ

でも良くないと言えば良くない

チラッ

また横目で見たけど今回は気付かれなかった

……雲雀先輩は私のことどう思ってるんだろう

嫌われていないのはわかるけど……

やっぱりlikeなのかな……

記憶がない分を頑張ろうと最初のころは必死にだった

雲雀先輩によくフォローしてもらったしね

……最近は何？ かなり落ち着いたと思う

1番の進歩はみんなに遊びに行こうと誘えるようになった

雲雀先輩にはいえないけど……

まあ私が誘わなくても雲雀先輩が連れてってくれるから

問題ないといえば問題ない

問題は……かわってないんだよね

記憶がなくなった時から何もかわってない

雲雀先輩が連れてってくれるのは最初のころと一緒に。

一緒にご飯を食べるのも一緒に。

たまに家に泊まるのも一緒に。

……一緒にベッドで寝るのはビツクリしたけど……

それでも雲雀先輩は私に触れることはない

……やっぱり付き合っていないよね

指輪はつけてるけど……何も無いんだもん

私は雲雀先輩のことが好きだと思っ

だつて手を繋いだり写真を2人で撮りたいもん……

私に触れようとしないう時点で

雲雀先輩はそういう感情がもうないのかも……

だから私が言えばこの関係が壊れるかもしれない
凄く怖くて言えないんだよね……

雲雀先輩と一緒にいるのは凄く嬉しくて

壊したくない気持ちが大きすぎる……

って、せっかく一緒にいるのに暗い顔をしちやダメだ

雲雀先輩と一緒に景色を楽しもう

そういえば……花言葉に『優美な女性』があつた気がする
後は『純潔』『精神美』とかだつたかな？

確か種類によつて違った気がするけど

どれも今の私には相応しくないだろうなー

あ、でも『ごまかし』もあつたような……

「どうしたの？」

考え事をしてたのがばれたみたい

あ、もう1つ思い出した

「花言葉を思い出してました

雲雀先輩は知っています？」

「知らないよ」

知らないのか……

じゃあしようと思つたけど意識すると難しい

でも雲雀先輩を見れば出来ると思う

……好きです

この言葉に出す勇気はないから精一杯笑おう

「……優」

……失敗したかも

いきなり笑つたからなのか、ぎこちなかつたのか……

まあ雲雀先輩が目を見開いたから失敗したのはわかつた

『あなたにほほえむ』はできると思つたのに……

やっぱり私には相応しくないのかもしれない

「少し散歩してきますね」

私の失敗で気まずくなるのは勘弁してほしいからね
さっさと立ち上がって行こう

「うわっ!？」

急に引っ張られてバランスが……!

あれ? 痛くなかったよ

風が私を守ってくれたのかな?

……あったかい?

「……もう我慢できない」

「ひゃー!」

耳元で声が聞こえたよ!?

って、私……抱きしめられてない!?

「ひ、雲雀先輩!？」

あ……離れた……//

ちよつと残念だったような……

でもこれ以上は心臓が止まった気がする

うわあああ!!//

指が……雲雀先輩の指が私の唇に……//

「……これ以上は無理と思えば指輪を返して」

え!?! え!?! え!?! どういうことなの!?

指輪を返さないといけないの?

……それは嫌だ

雲雀先輩を見てみると凄く真剣な顔をしてる……

ダメだ……心臓がドキドキしすぎてもう見れない……

でも視線をそらせない……

あ……目をつぶるのは大丈夫かも……

「優……」

目をつぶったのは失敗だった気がしてきた

何も見えないから聴覚が鋭くなって

物凄く雲雀先輩の声の色っぽく聞こえてしまった……

でももうあける勇気がない!!

「ゆーうー!!」

「へ？」

あ、思わず目をあけてしまったよ

ってか、この声は……ランボ君の気がする

「本当にここに優がいるのか？」

「花見に行くって言ってたもんね

ゆうー！ どこだー!!」

「えーと……」

もうこの声はツナ君とランボ君にしか思えない

そういえば花見に行くって言ったかも……

「……見てくるよ

優はその顔を戻しおいて」

……顔が真っ赤なのがばれてる!!

「……わかりました／＼／＼」

ふう……少し風で涼もう……

それにしても失敗したね

誰と行ってくて言っておけばよかった……

いや、雲雀先輩が貸切の通知してるんだ

リボン君がツナ君を誘導したと思う……

嫌がるツナ君を雲雀先輩と戦わせたいみたいだし

教えても意味がなかったかもね

あ、獄寺君たちの声も聞こえた

多分みんな花見をしようって話になりそう

雲雀先輩は……どうするんだろう

群れちやうから先に帰っちゃうのかなあ？

まあ私も早く行こう

雲雀先輩がみんなを咬み殺しちゃう気がするからね（笑）

胸を張って

問題なく優とツナが会えたな……

これで優は救われる

会えなければもう優は幸せになることはなかった

雲雀から目を背け逃げることもしか出来なかったからな……

「お疲れ様」

「……ああ

お前のおかげで助かった」

もう俺は手を出せなかったからな

「あなたは私が助けるのも想定内だったんでしょ？」

未来がわかるんだから」

「それでもお前と優はわかりにくいんだ」

それに俺の手から完全に離れたんだ

正直、この未来になるか俺でも不安だった

こいつも手が出せない未来になれば

俺にはもうどうすることも出来なかったからな

「あなたが出来る限りの手を打っていたのは知ってるわよ

救われない可能性は圧倒的に少なかったはずだわ

優があそこまで眠たいのは逃がさないようにするために

最後にあなたが優に術をかけたからでしょ？」

「……知っていたのか」

「私を誰だと思ってるのよ」

……そうだな

俺とずっと一緒にいたからな

もうすぐ術が解けるのもわかってそうだな

「最後はあれで良かったのか？」

俺のいる世界と優がいる世界の時間軸は違うのに

わざわざ俺が優を気絶させたのは

お前とゆっくり話す時間を作るためだった

優は数分と感じてもこっちではもっと長く会えたはずなのに

結局、こいつは何も話そうとしなかった

それに優は記憶がなくなるとわかっていたんだ
顔を見せても問題はなかったのに……

「あの子にあわせる顔がないわ」

「……お前でないなら俺はどうなんだ……」

「あなただつて名乗らなかつたじゃない」

それを言われると痛いな……だが……

「俺は2度も優を殺してるからな……」

本当は優に会う資格もなかつたんだ

「それについては私も同罪よ」

お前は悪くないだろ……と言おうとしたけどやめた

こいつも了承したから気にしてるんだろう

まあ優を殺して他の世界に転生しないと呪いが解けるまで

この世界で何千年も生きることになったからな……

寿命が切れれば俺が炎を注いで復活させることになる

異の者の呪いのせいで記憶は消せなかつた

優が何千年も苦しませるとわかつているなら……

こいつは了承する道しか残ってなかつた

……やっぱりお前は悪くない

全ては神の都合のせいだな……

「変なことを考えてないわよね？」

私はあなたに会えてよかつたと思ってるわよ

出会いは最低だつたけどね」

「……悪い」

「知らない場所にいたと思つたら

急にあなたが現れて

俺の子を産めつて言われた時は呆れたわよ」

……絶対呆れてなかつただろ

殴りかかったのは誰だ……

言いたくなつたがこれは全面的に俺が悪い

まあ言い訳をすればあの時は俺も焦つてたんだ

世界のバランスが崩れてお前が来て

慌てて未来を覗けば俺の子を産んだ未来以外は

全てこの世界が崩壊していたんだ

元に戻すために必要なことだと思っ

なんで俺の子を産んでるかとかを

全てすっ飛ばしてお前のところに行ってしまったんだ

「まああの時にあなたがいたのは感謝してるわよ

言葉が何も通じなかったのは困ったもの」

あのころはまだ日本語はなかったからな……

「俺からすれば助かったけどな」

俺がいないと困るとこいつが思ってくれなければ

世界が壊れる未来しか残らなかったからな

……流石に俺は神と呼ばれるんだ

無理矢理するのは気が引けたんだ……

「あなたたつて変なところでバカよね

世界の崩壊のことなのに

必死に私を口説くという道を選ぶんだから」

……俺の気持ちを読むな

「ねえ、聞きたいことがあるのよ」

「なんだ？」

「記憶が消えるって知ったのに悲しい顔をしなかったわ

あの子は一体何を思っていたの？」

「あーそれはだな……」

こいつに言ってもいいのか……？

辛いかもしれないが優の幸せを聞きたいはずだ

優が思っていたことをそのまま言うか……

「記憶を失うから意味がなくなるとわかってるけど

私は自分の意思でこの世界にいと決めたんだ！

もうこの世界に呼ばれてしまったから私はいらんじやない！

と、胸を張って思えるから優は暗い顔をしなかったんだ」

「……そう」

良かったわ」

「……ああ」

同じ思いをしたからか……

心の底から「良かった」と言っただな……

「よし！ 私はこれからどうすればいいかしら？」

優が幸せになるまでは生き返らせてほしくないと言っただけど

もうあの子は幸せになると思うわ」

「俺のサポートだ」

「独占欲が強いわね」

何とでも言え

まあお前が俺を嫌いになったら生き返らせるけどな

「じゃあ……これからよろしく」

「ああ」

くあとがきく

本編を読んでから見てくださいなねー
ネタバレが含まれてます

えーまず……なんとか完結しました!!
自分でもビックリです↑えw

そして、読んでくれた方……この駄文によくお付き合い合ってくださいま
した

正直、私はこれだけの方が読んでくれると思いませんでした
現時点で

アットノベルス様のアクセス数が……約73万
ハーメルン様のアクセス数が……もうすぐ6万

(小話を含んでいます)

まあアットノベルス様はPV表記と思います
マイページで見れるアクセス数を書いただけです

詳しいことはどこかに書いてるかもしれないですけどわからなかつ
たw

まあ数からみてUAはありえないですね
こんなにも大勢の人に見てもらって思ったのが……

駄文なので恥ずかしい恥ずかしいw
申し訳ない気持ちでいっぱいですね

あーすればよかった、こうすればよかったと反省ばかりです
もつと文才がほしいと常に思いますね

ストーリーで1番悩んだのは終わらせ方ですね

実は最初の予定ではツナ君達が記憶を失ったことを知って

最終話の神様達の話を入れて後日談をいっぱい投稿しようと思っ
ていました

でも失って救われる話をいれるべき？と考え直し
ツナ君達が自己紹介する話や

雲雀さんとディーノさんの絡みや

主人公を罪悪感でいっぱいのお話を追加しようと思いました
これで神様達の話を入れて後日談を入れればいい！と思ったら

……どこまでグダグダ書くんだろうと思ひ

結局、小話で書こうと思ひカットしました

つまり、話の流れを悩みましたが

優の記憶を消すか消さないかは悩みませんでした

「呼ばれてしまった」ということを優の記憶から消さないと

呪われてないのに呪いで苦しんじゃうことになりますので

苦しまないためには必要だったと思つたんです

綺麗にすり替えるのは無理と思つたんでね

全部消すという道を簡単に決断しましたね

次は私の文才能力では表現できなかつた設定を話します

まず優は神様と謎の声の人の子どもです

あほの神がバランスが崩れた瞬間に

優の母親はリボーンの世界に飛ばされています

バランスが崩れた神様が慌てて未来を見れば

未来が全て変わって崩壊してる!!という感じだったんです

その中で無事な未来がチラホラあったのは自分の娘のおかげとわ
かつた

どうやって出来たのか？

調べてリボーンの世界に飛ばされた人が産んだとわかり

慌てて口説きにいって振られたというバカな設定

でも慌てず世界のバランスが崩れて来てしまったと話せば

神様として接するので優は生まれてこなかつたんですけどね

もし無理に産ませた場合は傀儡として生まれるため

ツナ君に近づけばリボーンに悪い方向で目をつけられ

殺されるまたは返り討ちにしちゃいます

もしリボーンを殺さなくてもバッドエンドの道を進みます
まあこれは裏の裏設定って感じですね
ちなみに優の母親が人柱になるのは
身体が耐え切れなく無理だったんです
次は……優が未来を話せば死ぬというのは
おしやぶりを外す未来にするために神様がついたウソです
理由は話せばツナ君が弱くなっちゃうからです
ツナ君が弱くなるとみんなが死んじやうので
完全なウソではないんですけどね

最初から縛れば優は苦しまなかったのでは？と思うかもしれませ
んが

その場合、優が意識をしすぎてしまい
リボーンに怪しまれバッドエンドの可能性が高くなります
苦しめるとわかっていたため
いつでも味方と神様は主人公に言ったんです
裏で手を回してる張本人なのにね
他にも大空戦の時に神様が話すなど止めたのは
あの時に言っただけで誰もしななかったとばれて
話しても大丈夫と優が気付いてしまい
ポロっと話してしまつてバッドエンドに進みます
更に優が重要なところを忘れてるのは神様が消したため
神様も優のおしやぶりを外すために必死でした
つまり優がうそつきなのは神様の遺伝ww

まあ変なところは他にもいろいろあると思います
勢いで書いた作品なんでね
そして私の頭のレベルでは穴が出来ます
よく読んでくれましたね……
本当にありがとうございます

では、今後の予定です

明日はお休みします

明後日から小話を更新しますね

まだ書いていないので明日書くんですw w

記憶を失ってからの話を何話かする予定です

適当に題名をつけるなら……

「初？登校」

「拉致される」

「パイナップル現る」

最低でも3話ずつぐらいになると思います

まだ書いていませんのでわかりませんけどね

初？登校はいろんな人と絡めるつもりです

残り2つは説明しなくてもわかりそうw w

他にも何か希望があるなら書きます

では、本当にお付き合いありがとうございます！